本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡
本郷西谷津遺跡・本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡
本郷萱原遺跡・本郷鴫上遺跡

西毛広域幹線道路（高崎西工区）社会資本総合整備事業に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

－第１分冊・本文編１－

2023

群　馬　県　高　崎　土　木　事　務　所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第722集

本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡
本郷西谷津遺跡・本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡
本郷萱原遺跡・本郷鴫上遺跡

西毛広域幹線道路（高崎西工区）社会資本総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
本文編1　第1分冊
二〇二三
群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡
本郷西谷津遺跡・本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡
本郷萱原遺跡・本郷鴫上遺跡

西毛広域幹線道路（高崎西工区）社会資本総合整備事業に伴う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書

－第１分冊・本文編１－

2023

群　馬　県　高　崎　土　木　事　務　所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南東上空から見た榛名山(－－－－が本郷遺跡群)

北西上空から見た烏川(－－－－が本郷遺跡群)

口絵 2

粘土によって構築された本郷満行原遺跡305号竪穴建物のカマド　西から

古代寺院に関連した施設と考えられる本郷満行原遺跡 1 号建物　南から

竪穴・掘立柱併用建物の可能性がある本郷大カサ遺跡 1 号掘立柱建物と12号竪穴建物(奥)　北から

氷室の可能性がある本郷満行原遺跡556号土坑　南西から

口絵 4

本郷満行原遺跡318号竪穴建物から出土した土器と石器

本郷満行原遺跡587号土坑から出土した八稜鏡と銅鈴(上)

本郷満行原遺跡から出土した銅印(左)

序

西毛広域幹線道路は、前橋市千代田町三丁目交差点から、高崎市本郷町などを経て富岡市富岡しののめ跨線橋北交差点につながる延長27.8㎞の主要幹線道路で、交通渋滞の緩和はもとより、物流の効率化、生活圏の拡大など、西毛地域の産業、経済、観光の発展を担う道路として県民の期待を集めています。

このうちの高崎市箕郷町下芝から同下里見町に至る4.7㎞の区間が高崎西工区に該当します。この西毛広域幹線道路高崎西工区の建設に伴う本郷遺跡群の発掘調査は、平成28年度から令和２年度にかけて行われました。本書はそのうち本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡、本郷広神遺跡、本郷西谷津遺跡、本郷大カサ遺跡、本郷鶴窪遺跡、本郷萱原遺跡、本郷鴫上遺跡の発掘調査に関する報告書であります。

発掘調査では、縄文時代前期の竪穴建物、７世紀の円墳、古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物、古代の礎石建物や氷室の可能性が指摘されている円形有段遺構など、貴重な遺構が数多く調査されました。また、多量の土器片、瓦片とともに、墨書土器、刻書土器、瓦塔、銅印、巡方、八稜鏡、銅鈴、鉄鐸などの貴重な遺物が数多く出土しました。これら本郷遺跡群の調査によって得られた成果は、榛名山南麓地域の歴史解明に大きく寄与するものと考えております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに地元関係者の皆様には多大なご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり心より感謝を申し上げますとともに、本報告書がより多くの皆様に活用されることを願い序といたします。

令和５年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理　事　長　　向　田　忠　正

例　言

1．本書は、令和３年度西毛広域幹線道路(高崎西工区)社会資本総合整備(活力・重点・補正)（５か年加速化)事業に伴う本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡、本郷広神遺跡、本郷西谷津遺跡、本郷大カサ遺跡、本郷鶴窪遺跡、本郷萱原遺跡、本郷鳴上遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地はいずれも高崎市本郷町で、地番は以下の通りである。

本郷上ノ台遺跡　818-1、818-2、819

本郷満行原遺跡　638-2、640-1、640-2、640-3、641-2、642-8、645-1、645-2、645-3、646-1、646-2、647-1、647-2、648-2、648-5、648-6、651-6、652、653-1、653-2、654-1、654-2、654-3、654-4、666-1、667-1、711-1、711-2

本郷広神遺跡　703-1、703-3、706-1、707-1、707-6、708-1

本郷西谷津遺跡　1347、1348、1349

本郷大カサ遺跡　1460-1、1461-2、1461-4、1462-1、1462-2、1462-4、1462-5、1462-6、1462-7、1462-8、1462-10、1465-2、1465-3、1468-1、1468-2、1468-5、

本郷鶴窪遺跡　1655-1、1658、1659-1、1659-2、

本郷萱原遺跡　1722、1723-3、1724-1、1724-2、1725-2、1726-2

本郷鳴上遺跡　1739、1740-1、1741、1742、1743、1778

3．事業主体　群馬県高崎土木事務所

4．調査・整理主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．発掘調査の期間及び体制は以下の通りである。

平成28年度(本郷大カサ遺跡、本郷萱原遺跡、本郷鳴上遺跡)

調査期間　平成29年１月1日～平成29年３月31日

調査担当　関口博幸(主任調査研究員)、立野喜紀(調査研究員)、木津博明(専門調査役)

調査面積　6,600㎡

遺跡掘削工事請負　山下工業株式会社

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

空中写真撮影　技研コンサル株式会社

平成29年度(本郷大カサ遺跡、本郷鶴窪遺跡、本郷鳴上遺跡)

調査期間　平成30年１月1日～平成30年３月31日

調査担当　関　俊明(主任調査研究員)、黒崎博樹(主任調査研究員)

調査面積　4,269㎡

遺跡掘削工事請負　技研コンサル株式会社

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

平成29年度(本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡、本郷広神遺跡、本郷西谷津遺跡他)

調査期間　平成30年１月1日～平成30年３月31日

調査担当　山本光明(主任調査研究員)、梅村唯斗(調査研究員)、関　明愛(調査研究員)

山本直哉(調査研究員)、鈴木佑太郎(専門員)、木津博明、飯田陽一(専門調査役)

調査面積　12,107㎡

遺跡掘削工事請負　株式会社歴史の杜

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

平成30年度(本郷満行原遺跡)

調査期間　平成31年3月1日～平成31年３月31日

調査担当　新井　仁(上席調査研究員)、梅村唯斗

調査面積　4,926.2㎡

遺跡掘削工事請負　株式会社歴史の杜

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

平成31年度(本郷満行原遺跡)

調査期間　平成31年4月1日～令和元年8月31日

調査担当　新井　仁、長澤典子(主任調査研究員)

調査面積　4,926.2㎡

遺跡掘削工事請負　株式会社歴史の杜

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

空中写真撮影　技研コンサル株式会社

令和２年度(本郷満行原遺跡、本郷広神遺跡)

調査期間　令和２年4月1日～令和２年５月31日

調査担当　唐沢友之(主任調査研究員)、原　雅信(専門調査役)

調査面積　1,799.7㎡

遺跡掘削工事請負　有限会社毛野考古学研究所

委託　遺構測量　アコン測量設計株式会社

６．整理事業の期間及び体制は以下の通りである。

令和２年度

整理期間　令和２年4月１日～令和３年３月31日

整理担当者　齋藤　聡(主任調査研究員)

令和３年度

整理期間　令和３年4月１日～令和４年３月31日

整理担当者　齋藤　聡

令和４年度

整理期間　令和４年4月１日～令和５年３月31日

整理担当者　齋藤　聡(主任調査研究員・資料統括)

７．本書作成の担当者は以下の通りである。

編集：齋藤　聡

デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)

遺物観察　石器・石製品：岩﨑泰一(専門調査役)

縄文土器：橋本　淳(主任調査研究員・資料統括)

土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)

瓦：木津博明(事業局長)

中近世陶磁器：大西雅広(専門調査役)

金属製品・木製品：板垣泰之(専門員(主任))

遺物撮影　石器・石製品：岩﨑泰一
縄文土器：齋藤　聡
土師器・須恵器：齋藤　聡
瓦：齋藤　聡
中近世陶磁器：大西雅広
金属製品・木製品：板垣泰之
保存処理：板垣泰之、関　邦一(専門調査役)
本文執筆　第12章第４節：杉山秀宏(資料２課長)
第12章第５・６節：高島英之(専門員(総括))
第12章第７節：神谷佳明
第12章第８節：板垣泰之
第12章第９節：木津博明
上記以外：齋藤　聡

８．整理事業での委託は以下の通りである。
人骨の鑑定：辰巳晃司、佐伯史子、奈良貴史(新潟医療福祉大学自然人類学研究所)
繊維製品の素材同定：黒沼保子(株式会社パレオ・ラボ)
瓦の熱ルミネッセンス年代測定：下岡順直(立正大学地球環境科学部)

９．石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

10. 記録資料及び出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 発掘調査及び整理事業・本報告書の作成には、下記の機関・個人よりご指導・ご教示をいただいた。記して感謝に代えたい(敬称略)。
群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会文化財保護課、
淺間　陽、池田敏宏、井上慎也、大江正行、小根澤雪絵、金子智一、河野一也、神戸聖語、清水　豊、須田　茂、須永　忍、関口　修、千田茂雄、早田　勉、田辺芳明、外山政子、永井智教、中山　晋、原　佳子、前澤和之、松田　猛、横田大輔

凡　例

1．本郷遺跡群の遺構平面図は、すべて世界測地系国家座標(平面直角座標Ⅸ系)を用いて測量した。また、遺構平面図中で使用した北方位はすべて座標北を表す。

2．遺構平面図中の等高線や遺構断面図中に示した数値は海抜標高で、単位はメートルである。

3．本書における遺構名称・番号は、原則として調査時のものをそのまま使用した。

4．遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、遺構図、遺物図、観察表、写真図版とも一致する。

5．遺構図･遺物図の縮尺は各図に示したが、以下の通りである。なお、遺物図と遺物写真は原則として同縮率とした。

遺構図　竪穴建物・礎石建物・掘立柱建物・竪穴状遺構・粘土採掘坑　焼土　1：60
竪穴建物カマド　1：30　円形有段遺構・井戸・集石遺構・遺物集中・土坑・ピット　1：40
復旧坑　1：40　1：80　溝　1：40　1：60　1：80　1：120　1：150　1：160
古墳　1：60　1：100　道　1：40　1：60　1：160　1：180
畑　1：40　1：80　1：160　水田　1：80　1：150　1：250

遺物図　土器・土製品　1：2　1：3　1：4　瓦　1：4　1：5
石器・石製品　1：1　1：2　1：3　1：4　1：6
金属製品　1：2　1：3　木製品　1：4

6．本書で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

遺構図　灰　炭　焼土　粘土　硬化面　テフラ　撹乱
遺物図　釉　黒色　すす　うるし　燻　朱墨　粘土

7．遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から90°以内とし、東に傾いた場合は、N―○°―Eと示した。ただし、カマドをもつ竪穴建物の場合は、カマドが設置された方向を主軸とした。

8．竪穴建物の平面図は、原則として南壁を下に配置した。

9．遺構の計測値は、縮尺1/20の遺構平面図を用いて計測し、メートル単位で表した。全体を計測できないものについては、現存値を(　)で表記した。

10. 礎石建物、及び掘立柱建物の柱間寸法は、平面測量時の礎石、または柱穴底面の標高測点を中心とし、その心々距離を計測した。

11. 竪穴建物の面積は、床面をデジタルプラニメーターで３回計測し、その平均値を採用した。

12. 土層注記、及び瓦を除く土器・陶磁器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠した。

13. 土層注記における混入物の表現は、微粒：＜1.0㎜、細粒：1.0～2.0㎜、粒：2.0～5.0㎜、粗粒：5.0～10.0㎜、小塊：10.0～20.0㎜、塊：20.0～50.0㎜、粗塊：＞50.0㎜とした。

14. 遺物観察表における記載方法は以下の通りである。

・計測値の単位はセンチメートルとし、重量はグラムで表記した。

・計測値の(　)は現存値、[　]は推定値を示す。

・胎土観察における砂粒の表現のうち、細砂粒は径2.0㎜以下、粗砂粒は2.0～5.0㎜のものを表す。なお、5.0㎜以上は礫とした。

・土師器・須恵器の種類については、文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉陶器、緑釉陶器)、土製品などとした。なお、古墳時代の黒色処理を施

された土器については、その成整形から土師器とした。奈良時代中頃から出現する内面、及び内外面が黒色処理された土器については、成整形から黒色土器とした。

・土師器・須恵器の器種については、文化庁文化財部記念物課監修2010年『発掘調査のてびき』に準じて杯、椀、高杯、盤、皿、鉢、坩、器台、壺・瓶(長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、提瓶、瞳)、甕、硯などの名称を使用した。なお、杯と椀の区分は、器高／口径比が大きいものを椀としているが、明確に数値化できていない。壺と甕については、頸部／胴部最大径比によって区分しているが、例外として胴部径より頸部径が大きい形態で広口壺と呼称しているものも存在する。

・土師器・須恵器の残存率については、概ね全体の比率で「完形」、「3/4」、「1/2」などと表記した。なお、1/4以下については、「口縁部片」、「底部片」などの部位片で表記した。

・土師器・須恵器の計測か所については、口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、摘：摘径、カ：杯蓋等のカエリ径、頸：頸部径、胴：胴部最大径、孔：甑・有孔鉢などの底部に設けられた孔径のように略記した。その他の略称については、それぞれ備考に記載した。

・土師器の焼成については、比較的硬質に焼成されているものを良好、軟質や脆い状態のものを軟質・不良とした。須恵器については、還元焔、酸化焔で表記した。

・土師器・須恵器等の特徴については、成整形を中心に記載した。

・灰釉陶器については、猿投古窯跡群と東濃古窯跡群とを区分し、可能な限り各窯式期を判断して記載した。緑釉陶器については、東海産、畿内産、近江産を区分し、可能な限り年代または窯式期を判断して記載した。

15. 報告書未掲載の土師器・須恵器については、破片数と重量を記載したが、杯・高杯・椀・皿・鉢、蓋などの食膳具は「杯・椀類」、甕・甑・羽釜・壺などの煮沸・貯蔵具は「甕・壺類」とまとめて表記した。なお、それ以外の特殊な遺物については、すべて実測図を掲載している。報告書未掲載の縄文土器については、遺物収納箱(内法0.60×0.37×0.15m)の箱数を記載した。報告書未掲載の石器については、器種別の点数と重量を記載した。

16. テフラの名称については、主として町田洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス[日本列島とその周辺]』(東京大学出版会)に準拠し、必要に応じて以下のような略称で表記した。

As-A：浅間Ａテフラ(天明３(1783)年)　As-B：浅間Ｂテフラ(天仁元(1108)年)
As-Kk：浅間粕川テフラ(12世紀前半)　Hr-FP：榛名二ツ岳伊香保テフラ(６世紀中葉)
Hr-FA：榛名二ツ岳渋川テフラ(６世紀初頭)　As-C：浅間Ｃテフラ(３世紀末)
As-D：浅間Ｄテフラ　As-YP：浅間板鼻黄色テフラ　As-Ok1・2：浅間大窪沢テフラ１・２
As-Sr：浅間白糸テフラ　As-BP Group：浅間板鼻褐色テフラ群　MP：室田軽石　AT：姶良Tnテフラ
Ag-KP：赤城鹿沼テフラ　Hr-HP：榛名八崎軽石

17. 本書に掲載した地図は、下記のものを編集して使用した。

第１図　国土地理院発行　20万分の１地勢図「宇都宮」「長野」(平成23年発行)
第２図　国土地理院発行　５万分の１地形図「前橋」「高崎」「榛名」(平成10年発行)「富岡」(平成７年発行)
第３図・第４図　高崎市発行　2,500分の１高崎市都市計画基本図「90」(平成24年測図)
第７図　独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター発行　５万分の１地質図「榛名」(平成24年発行)
第８図　国土地理院発行　５万分の１地形図「榛名」(平成10年発行)

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次・表目次

第１分冊　本文編１

第１章　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・　1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・　2
　第２節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・　2
　第３節　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・　10
　第４節　整理作業の経過と方法・・・・・・・・・　11

第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・　13
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・　14
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・　15

第３章　本郷上ノ台遺跡の遺構と遺物・・・・・・　33
　第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・　36
　　第１項　１面の遺構と遺物・・・・・・・・・・　36
　　１．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36
　　第２項　２面の遺構と遺物・・・・・・・・・・　38
　　１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・　38
　　２．集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・　60
　　３．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
　　第３項　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・　61

第４章　本郷満行原遺跡の遺構と遺物・・・・・・　63
　第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・　64
　第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・　74
　　第１項　１面の遺構と遺物・・・・・・・・・・　74
　　１．復旧坑・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
　　２．道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
　　３．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77
　　第２項　２面の遺構と遺物・・・・・・・・・・　78
　　１．竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・　78
　　２．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
　　３．道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　91
　　４．畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　93
　　５．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　96
　　６．ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・　126
　　第３項　３面の遺構と遺物・・・・・・・・・・　129
　　１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・　129
　　２．寺院関連の建物・・・・・・・・・・・・・　367
　　３．竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・　394
　　４．円形有段遺構・・・・・・・・・・・・・・　402
　　５．遺物集中・・・・・・・・・・・・・・・・　410
　　６．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　413
　　７．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　424
　　８．ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・　445
　　第４項　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・　447
　　１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・　447
　　２．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　464
　　第５項　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・　474

第２分冊　本文編２

第５章　本郷広神遺跡の遺構と遺物・・・・・・・　497
　第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・　498
　第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・　499
　　１．水田・・・・・・・・・・・・・・・・・・　499
　　２．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　505
　　３．畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　507
　　４．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　508
　　５．階段状遺構・・・・・・・・・・・・・・・　509
　　６．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・　509

第６章　本郷西谷津遺跡の遺構と遺物・・・・・・　519
　第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・・　520

第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・ 520
１．水田・・・・・・・・・・・・・・・・・ 520
２．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 523
３．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 526

第７章　本郷大カサ遺跡の遺構と遺物・・・・・・ 527
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 528
第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・ 531
１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・ 531
２．掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・ 615
３．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 619
４．畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 623
５．古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・ 624
６．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・ 636
７．ピット・・・・・・・・・・・・・・・・ 647
８．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 651

第８章　本郷鶴窪遺跡の遺構と遺物・・・・・・・ 653
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 654
第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・ 657
１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・ 657
２．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・ 675
３．ピット・・・・・・・・・・・・・・・・ 678
４．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 682

第９章　本郷萱原遺跡の遺構と遺物・・・・・・・ 683
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 684
第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・ 686
１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・ 686
２．円形有段遺構・・・・・・・・・・・・・ 768
３．井戸・・・・・・・・・・・・・・・・・ 770
４．粘土採掘坑・・・・・・・・・・・・・・ 771
５．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 773
６．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・ 777
７．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 788
８．旧石器時代の確認調査・・・・・・・・・ 790

第10章　本郷鴫上遺跡の遺構と遺物・・・・・・・ 791
第１節　概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 792
第２節　検出された遺構と遺物・・・・・・・・ 795
１．竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・ 795
２．竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・ 827
３．焼土・・・・・・・・・・・・・・・・・ 828
４．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 830
５．畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 831
６．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・ 832
７．ピット・・・・・・・・・・・・・・・・ 837
８．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 838

第11章　本郷遺跡群の自然科学分析・・・・・・・ 839
第１節　本郷満行原遺跡から出土した骨の
人類学的報告・・・・・・・・・・・・・・・ 840
第２節　本郷満行原遺跡から出土した繊維製品の
素材同定・・・・・・・・・・・・・・・・・ 841
第３節　本郷満行原遺跡出土瓦片の熱ルミネッセンス
年代測定法を利用した相対的な新旧判定・・・ 843

第12章　本郷遺跡群の調査成果・・・・・・・・・ 847
第１節　集落の変遷・・・・・・・・・・・・・ 848
第１項　竪穴建物の分布・・・・・・・・・・ 848
第２項　竪穴建物の構造・・・・・・・・・・ 849
第２節　竪穴・掘立柱併用建物・・・・・・・・ 857
第３節　円形有段遺構・・・・・・・・・・・・ 858
第４節　大型臼玉について・・・・・・・・・・ 860
第５節　本郷遺跡群出土の墨書・刻書土器・・・ 864
第６節　本郷満行原遺跡出土の銅印・・・・・・ 868
第７節　本郷満行原遺跡出土の猿面硯・・・・・ 872
第８節　本郷満行原遺跡出土の金属製品・・・・ 877
第９節　本郷遺跡群出土瓦類の観察・・・・・・ 881

遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 886
遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 895
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1020

第３分冊　写真図版

写真目次
遺構写真　PL.１～PL.283
遺物写真　PL.284～PL.435

挿図目次

第１分冊　本文編１

第１図　群馬県西部の地勢と本郷遺跡群の位置
（国土地理院発行20万分の1　地勢図「宇都宮」「長野」
（平成23年発行）を使用）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２図　西毛広域幹線道路と本郷遺跡群の位置
（国土地理院発行5万分の1　地形図「前橋」「高崎」「榛名」
（平成10年発行）「富岡」（平成7年発行）を編集して使用）・・ 4
第３図　西毛広域幹線道路と各遺跡の位置
（高崎市発行2,500分の1　高崎市都市計画基本図「90」
（平成24年測図）を編集して使用）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第４図　各遺跡調査区と基本土層の位置
（高崎市発行2,500分の1　高崎市都市計画基本図「90」
（平成24年測図）を編集して使用）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第５図　本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡・
本郷西谷津遺跡の基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第６図　本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡・本郷萱原遺跡・
本郷鴫上遺跡の基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第７図　本郷遺跡群周辺の地質
（独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター発行
「榛名地域の地質」付図5万分の１地質図「榛名」を
簡略化して使用）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第８図　本郷遺跡群の周辺遺跡（国土地理院発行5万分の1　地形図
「榛名」（平成10年発行）を使用）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第９図　本郷上ノ台遺跡　１面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第10図　本郷上ノ台遺跡　２面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第11図　９号・10号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第12図　33号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第13図　33号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第14図　33号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第15図　42号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第16図　42号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第17図　42号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第18図　45号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第19図　45号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第20図　45号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第21図　45号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第22図　47号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第23図　47号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第24図　47号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第25図　47号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第26図　48号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第27図　48号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第28図　49号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第29図　49号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第30図　50号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第31図　55号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第32図　55号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第33図　２号集石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第34図　73号・75号土坑と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第35図　本郷満行原遺跡　１面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第36図　本郷満行原遺跡　２面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第37図　本郷満行原遺跡　B区西２面・３面全体図 ・・・・・・・・・・ 69
第38図　本郷満行原遺跡　３面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第39図　本郷満行原遺跡　４面（縄文時代）全体図・・・・・・・・・・・ 71
第40図　本郷満行原遺跡　旧石器トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・ 72
第41図　本郷満行原遺跡　旧石器トレンチ断面図・・・・・・・・・・・・ 73
第42図　１号復旧坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第43図　３号道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第44図　512号・515号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第45図　４号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第46図　６号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第47図　６号溝土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第48図　６号溝出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第49図　６号溝出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第50図　６号溝出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第51図　６号溝出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第52図　７号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第53図　８号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第54図　47号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第55図　47号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第56図　48号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第57図　２号道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第58図　１号・２号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第59図　３号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第60図　477号～ 486号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
第61図　487号～ 498号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
第62図　499号～ 510号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
第63図　511号・513号・514号・516号～ 521号土坑 ・・・・・・・・・・ 118
第64図　522号～ 524号・527号～ 531号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・ 119
第65図　532号・533号・557号・559号～ 562号土坑 ・・・・・・・・・・ 120
第66図　563号～ 567号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第67図　568号～ 575号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第68図　578号～ 583号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
第69図　483号・499号・531号・565号・567号・572号～ 574号・
578号・579号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
第70図　583号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
第71図　281号～ 290号・302号・303号ピット ・・・・・・・・・・・・・・ 126
第72図　307号～ 320号・322号～ 324号ピット・・・・・・・・・・・・・・ 127
第73図　325号～ 332号・335号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
第74図　20号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
第75図　20号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
第76図　20号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第77図　21号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
第78図　21号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・ 133
第79図　21号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
第80図　22号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第81図　22号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
第82図　22号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
第83図　23号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
第84図　23号竪穴建物掘方と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第85図　24号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第86図　24号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
第87図　24号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
第88図　27号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
第89図　27号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145
第90図　27号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第91図　28号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第92図　28号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148
第93図　29号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第94図　29号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第95図　30号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第96図　30号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第97図　30号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第98図　31号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
第99図　31号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
第100図　31号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156
第101図　32号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157
第102図　32号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・ 158
第103図　32号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第104図　32号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第105図　44号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第106図　46号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第107図　46号竪穴建物掘方・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
第108図　46号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164

第109図　51号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
第110図　51号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第111図　52号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第112図　54号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第113図　54号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第114図　54号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第115図　264号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第116図　264号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 173
第117図　264号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第118図　265号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
第119図　265号竪穴建物掘方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
第120図　265号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第121図　265号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179
第122図　265号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第123図　265号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
第124図　266号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第125図　266号竪穴建物掘方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第126図　266号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第127図　266号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第128図　266号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第129図　266号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第130図　266号竪穴建物出土遺物（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第131図　267号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第132図　267号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第133図　267号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第134図　268号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第135図　268号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
第136図　268号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
第137図　268号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第138図　269号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第139図　269号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第140図　269号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第141図　270号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200
第142図　270号竪穴建物掘方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第143図　270号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 202
第144図　270号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
第145図　270号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 204
第146図　271号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
第147図　271号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 206
第148図　271号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 207
第149図　272号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 208
第150図　272号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
第151図　273号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 210
第152図　273号竪穴建物カマド（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
第153図　273号竪穴建物カマド（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 212
第154図　273号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213
第155図　273号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 214
第156図　274号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216
第157図　274号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
第158図　274号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 218
第159図　275号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
第160図　275号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
第161図　276号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 222
第162図　276号竪穴建物掘方・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第163図　276号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
第164図　278号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
第165図　278号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227
第166図　278号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228
第167図　278号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 229
第168図　278号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 230
第169図　278号竪穴建物出土遺物（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 231
第170図　278号竪穴建物出土遺物（５） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 232
第171図　278号竪穴建物出土遺物（６） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 233
第172図　279号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 234
第173図　279号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
第174図　279号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第175図　279号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 237
第176図　280号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 238
第177図　280号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 239
第178図　280号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 240
第179図　281号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 241
第180図　281号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 242
第181図　281号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 243
第182図　281号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 244
第183図　282号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 245
第184図　282号竪穴建物掘方・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 246
第185図　282号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 247
第186図　282号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 248
第187図　283号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 249
第188図　283号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250
第189図　283号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251
第190図　283号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
第191図　284号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 254
第192図　284号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 255
第193図　284号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 256
第194図　284号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 257
第195図　284号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 258
第196図　285号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 259
第197図　285号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 260
第198図　285号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 261
第199図　286号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 263
第200図　286号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第201図　286号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 265
第202図　286号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第203図　286号竪穴建物出土遺物（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第204図　287号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 269
第205図　287号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 270
第206図　288号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 271
第207図　289号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 272
第208図　289号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第209図　289号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
第210図　289号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 275
第211図　289号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第212図　290号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 278
第213図　290号竪穴建物カマド１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 279
第214図　290号竪穴建物カマド２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 280
第215図　290号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281
第216図　291号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 282
第217図　291号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 283
第218図　291号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 284
第219図　291号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 285
第220図　292号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 286
第221図　292号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 287
第222図　292号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 288
第223図　293号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 290
第224図　293号竪穴建物掘方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 291
第225図　293号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 292
第226図　293号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 293
第227図　293号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 294
第228図　294号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 295
第229図　294号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 296
第230図　294号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 297
第231図　295号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 298
第232図　295号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 299
第233図　296号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 301
第234図　296号竪穴建物出土遺物（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 302
第235図　296号竪穴建物出土遺物（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303
第236図　296号竪穴建物出土遺物（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 304
第237図　296号竪穴建物出土遺物（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 305
第238図　296号竪穴建物出土遺物（５） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 306
第239図　296号竪穴建物出土遺物（６） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 307
第240図　297号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 308

第241図　297号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 309
第242図　297号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 310
第243図　298号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 311
第244図　298号竪穴建物カマドと出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・ 312
第245図　298号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 313
第246図　299号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 314
第247図　299号竪穴建物カマドと出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・ 315
第248図　299号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 316
第249図　300号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 317
第250図　300号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 318
第251図　301号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 319
第252図　301号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 320
第253図　301号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 321
第254図　302号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 322
第255図　303号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 324
第256図　303号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 325
第257図　303号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 326
第258図　304号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 327
第259図　304号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 328
第260図　304号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 329
第261図　304号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 330
第262図　304号竪穴建物出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 331
第263図　305号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 332
第264図　305号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 333
第265図　305号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 334
第266図　306号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 335
第267図　306号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 336
第268図　307号竪穴建物・カマドと出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 337
第269図　309号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 338
第270図　309号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 339
第271図　310号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 340
第272図　311号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 341
第273図　313号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 342
第274図　313号竪穴建物カマド１・２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 343
第275図　313号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 344
第276図　314号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 345
第277図　314号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 346
第278図　314号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 347
第279図　314号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 348
第280図　314号竪穴建物出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 349
第281図　315号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 350
第282図　315号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 351
第283図　315号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 352
第284図　315号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 353
第285図　316号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 355
第286図　316号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 356
第287図　319号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 357
第288図　319号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 358
第289図　319号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 359
第290図　319号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 360
第291図　319号竪穴建物出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 361
第292図　319号竪穴建物出土遺物(４) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 362
第293図　319号竪穴建物出土遺物(５) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 363
第294図　320号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 364
第295図　320号竪穴建物カマドと出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・ 365
第296図　320号竪穴建物出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 366
第297図　１号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 367
第298図　１号建物と出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 368
第299図　１号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 369
第300図　１号建物出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 370
第301図　１号建物出土遺物(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 371
第302図　１号建物出土遺物(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 372
第303図　１号建物出土遺物(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 373
第304図　２号建物と出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 374
第305図　２号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 375
第306図　３号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 376
第307図　３号建物土層断面図(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 377
第308図　３号建物土層断面図(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 378
第309図　３号建物土層断面図(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 379
第310図　３号建物土層断面図(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 380
第311図　３号建物出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 381
第312図　３号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 382
第313図　３号建物出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 383
第314図　３号建物出土遺物(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 384
第315図　３号建物出土遺物(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 385
第316図　３号建物出土遺物(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 386
第317図　３号建物出土遺物(７)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 387
第318図　３号建物出土遺物(８)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 388
第319図　３号建物出土遺物(９)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 389
第320図　３号建物出土遺物(10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 390
第321図　３号建物出土遺物(11)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 391
第322図　３号建物出土遺物(12)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 392
第323図　３号建物出土遺物(13)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 393
第324図　２号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 395
第325図　２号竪穴状遺構出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 396
第326図　２号竪穴状遺構出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 397
第327図　２号竪穴状遺構出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 398
第328図　２号竪穴状遺構出土遺物(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 399
第329図　２号竪穴状遺構出土遺物(５)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 400
第330図　２号竪穴状遺構出土遺物(６)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 401
第331図　３号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 402
第332図　１号竪穴状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 403
第333図　１号竪穴状遺構エレベーション図と出土遺物(１)・・・・・・ 404
第334図　１号竪穴状遺構出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 405
第335図　556号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 406
第336図　556号土坑出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 407
第337図　556号土坑出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 408
第338図　556号土坑出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 409
第339図　558号土坑と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 410
第340図　１号遺物集中と出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 411
第341図　１号遺物集中出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 412
第342図　11号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 413
第343図　11号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 414
第344図　12号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 415
第345図　12号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 416
第346図　40号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 417
第347図　40号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 418
第348図　41号・42号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 419
第349図　42号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 420
第350図　43号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 421
第351図　44号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 422
第352図　45号溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 423
第353図　46号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 424
第354図　51号・52号・54号～ 60号・62号～ 64号土坑 ・・・・・・・・・ 434
第355図　65号～ 72号・79号・81号・84号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 435
第356図　89号・90号・525号・526号・534号・535号土坑 ・・・・・・・ 436
第357図　536号～ 539号・541号・544号・547号土坑 ・・・・・・・・・・ 437
第358図　548号・549号・551号・576号・577号・584号～ 586号土坑　438
第359図　526号・547号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 439
第360図　549号・551号・577号・584号・586号土坑出土遺物 ・・・・・ 440
第361図　587号土坑と出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 441
第362図　587号土坑出土遺物(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 442
第363図　587号土坑出土遺物(３) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 443
第364図　587号土坑出土遺物(４) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 444
第365図　291号～ 293号・295号・296号ピット ・・・・・・・・・・・・・ 445
第366図　297号～ 301号・321号・333号・334号・336号・
　　337号ピットと333号ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 446
第367図　25号竪穴建物・炉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 447
第368図　25号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 448
第369図　26号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 450
第370図　317号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 451
第371図　317号竪穴建物出土遺物(１) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 452

第372図　317号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 453
第373図　318号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 454
第374図　318号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 455
第375図　318号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 456
第376図　318号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 457
第377図　318号竪穴建物出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 458
第378図　318号竪穴建物出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 459
第379図　318号竪穴建物出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 460
第380図　318号竪穴建物出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 461
第381図　318号竪穴建物出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 462
第382図　318号竪穴建物出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 463
第383図　74号・76号～78号・80号・82号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・ 468
第384図　83号・85号～88号・542号・543号・545号土坑・・・・・・・・・ 469
第385図　546号・550号・552号～555号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・ 470
第386図　74号・76号土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 471
第387図　78号・80号・82号・83号・85号・87号・88号・
　　543号土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 472
第388図　553号・554号土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 473
第389図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 474
第390図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 475
第391図　遺構外出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 476
第392図　遺構外出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 477
第393図　遺構外出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 478
第394図　遺構外出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 479
第395図　遺構外出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 480
第396図　遺構外出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 481
第397図　遺構外出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 482
第398図　遺構外出土遺物(10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 483
第399図　遺構外出土遺物(11)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 484
第400図　遺構外出土遺物(12)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 485
第401図　遺構外出土遺物(13)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 486
第402図　遺構外出土遺物(14)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 487
第403図　遺構外出土遺物(15)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 488
第404図　遺構外出土遺物(16)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 489
第405図　遺構外出土遺物(17)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 490
第406図　遺構外出土遺物(18)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 491
第407図　遺構外出土遺物(19)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 492
第408図　遺構外出土遺物(20)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 493
第409図　遺構外出土遺物(21)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 494
第410図　遺構外出土遺物(22)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 495

第２分冊　本文編２

第411図　本郷広神遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 500
第412図　Ａ区水田、１号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 501
第413図　Ｂ区水田、階段状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 502
第414図　Ｂ区水田、階段状遺構エレベーション図・・・・・・・・・・・・・ 503
第415図　Ｃ区水田、２号・３号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 504
第416図　２号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 506
第417図　１号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 507
第418図　１号・２号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 508
第419図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 510
第420図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 511
第421図　遺構外出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 512
第422図　遺構外出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 513
第423図　遺構外出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 514
第424図　遺構外出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 515
第425図　遺構外出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 516
第426図　遺構外出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 517
第427図　遺構外出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 518
第428図　本郷西谷津遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 521
第429図　水田エレベーション図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 522
第430図　１号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 524
第431図　２号・３号・４号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 525
第432図　本郷大カサ遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 529
第433図　本郷大カサ遺跡　旧石器トレンチ配置図・断面図・・・・・・ 530
第434図　１号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 532
第435図　１号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・ 533
第436図　１号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 534
第437図　２号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 536
第438図　２号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 537
第439図　２号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 538
第440図　２号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 539
第441図　２号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 540
第442図　３号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 541
第443図　３号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 542
第444図　３号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 543
第445図　３号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 544
第446図　４号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 545
第447図　４号竪穴建物掘方・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 546
第448図　４号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 547
第449図　４号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 548
第450図　４号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 549
第451図　４号竪穴建物出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 550
第452図　５号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 551
第453図　６号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 552
第454図　６号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 553
第455図　７号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 554
第456図　７号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 555
第457図　８号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 556
第458図　９号竪穴建物・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 557
第459図　９号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 558
第460図　９号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 559
第461図　10号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 560
第462図　10号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 561
第463図　10号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・ 563
第464図　10号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 564
第465図　10号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 565
第466図　10号竪穴建物出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 566
第467図　11号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 567
第468図　11号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 568
第469図　12号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 570
第470図　12号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 571
第471図　12号竪穴建物カマド１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 572
第472図　12号竪穴建物カマド２と出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・ 573
第473図　12号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 574
第474図　13号竪穴建物・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 576
第475図　13号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 577
第476図　14号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 578
第477図　14号竪穴建物カマドと出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 579
第478図　15号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 580
第479図　15号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 581
第480図　15号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 582
第481図　16号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 583
第482図　16号竪穴建物カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 584
第483図　16号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 585
第484図　16号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 586
第485図　17号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 587
第486図　17号竪穴建物掘方・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 588
第487図　17号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 589
第488図　17号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 590
第489図　18号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 591
第490図　18号竪穴建物掘方・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 592
第491図　18号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 593
第492図　18号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 594
第493図　19号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 595
第494図　20号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 596
第495図　20号竪穴建物カマド１・２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 597
第496図　20号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 598
第497図　21号竪穴建物Ａ・Ｂ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 599
第498図　21号竪穴建物Ａ出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 600
第499図　22号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 601
第500図　23号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 602

第501図　23号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 603
第502図　23号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 604
第503図　24号・25号竪穴建物・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 606
第504図　24号・25号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 607
第505図　26号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 608
第506図　26号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 609
第507図　26号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 610
第508図　27号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 611
第509図　27号竪穴建物カマドと出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 612
第510図　28号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 613
第511図　28号建物カマドと出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 614
第512図　29号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 615
第513図　１号掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 616
第514図　１号掘立柱建物土層断面図と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 617
第515図　１号掘立柱建物と12号竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 618
第516図　１号・３号溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 620
第517図　２号溝と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 621
第518図　４号・５号溝と４号溝出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 622
第519図　１号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 623
第520図　１号古墳（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 625・626
第521図　１号古墳（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 627・628
第522図　１号古墳土層断面図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 629
第523図　１号古墳土層断面図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 630
第524図　１号古墳石室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 631
第525図　１号古墳出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 632
第526図　１号古墳出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 633
第527図　１号古墳出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 634
第528図　１号古墳出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 635
第529図　１号～５号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 642
第530図　６号・８号～13号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 643
第531図　14号～23号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 644
第532図　24号～28号土坑と３号～５号・13号土坑出土遺物 ・・・・・ 645
第533図　６号・19号・21号・23号・26号土坑出土遺物・・・・・・・・・ 646
第534図　１号～10号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 647
第535図　11号～18号・20号・21号・25号～29号ピット ・・・・・・・・ 648
第536図　30号～45号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 649
第537図　46号～48号・50号～59号・70号・71号ピット ・・・・・・・・ 650
第538図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 651
第539図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 652
第540図　本郷鶴窪遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 655
第541図　本郷鶴窪遺跡　旧石器トレンチ配置図・断面図 ・・・・・・・ 656
第542図　１号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 658
第543図　１号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 659
第544図　１号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 660
第545図　２号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 661
第546図　２号竪穴建物掘方・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 662
第547図　２号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 663
第548図　２号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 664
第549図　３号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 666
第550図　３号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 667
第551図　３号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 668
第552図　３号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 669
第553図　３号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 670
第554図　４号竪穴建物・カマド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 671
第555図　４号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 672
第556図　５号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 673
第557図　５号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 674
第558図　１号～８号土坑と１号・３号・６号・７号土坑出土遺物・・ 677
第559図　１号～15号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 678
第560図　16号～35号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 679
第561図　36号～54号ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 680
第562図　55号～66号ピットと１号・48号・57号・
　　63号ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 681
第563図　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 682
第564図　本郷萱原遺跡　全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 685
第565図　１号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 686
第566図　１号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 687
第567図　２号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 688
第568図　２号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 689
第569図　２号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 690
第570図　３号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 692
第571図　３号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 693
第572図　３号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 694
第573図　４号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 695
第574図　４号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 696
第575図　４号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 697
第576図　５号竪穴建物・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 698
第577図　５号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 699
第578図　６号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 700
第579図　６号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 701
第580図　７号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 702
第581図　８号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 703
第582図　８号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 704
第583図　９号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 705
第584図　９号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 706
第585図　10号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 707
第586図　10号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 708
第587図　10号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 709
第588図　10号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 710
第589図　12号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 711
第590図　13号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 712
第591図　14号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 713
第592図　14号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 714
第593図　14号竪穴建物カマドと出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 715
第594図　14号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 716
第595図　14号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 717
第596図　14号竪穴建物出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 718
第597図　15号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 720
第598図　15号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 721
第599図　15号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 722
第600図　16号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 723
第601図　16号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 724
第602図　17号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 725
第603図　18号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 726
第604図　18号竪穴建物カマドと出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 727
第605図　19号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 728
第606図　19号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 729
第607図　19号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 730
第608図　19号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 731
第609図　20号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 732
第610図　20号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 733
第611図　20号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 734
第612図　21号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 735
第613図　21号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 736
第614図　21号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 737
第615図　22号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 738
第616図　23号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 739
第617図　23号竪穴建物掘方・カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 740
第618図　23号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 741
第619図　24号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 742
第620図　25号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 743
第621図　25号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 744
第622図　25号竪穴建物カマド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 745
第623図　25号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 746
第624図　25号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 747
第625図　25号竪穴建物出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 748
第626図　26号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 749
第627図　26号竪穴建物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 750
第628図　28号竪穴建物と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 751
第629図　29号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 753
第630図　29号竪穴建物掘方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 754
第631図　29号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 755

第632図　29号竪穴建物出土遺物(２)……756
第633図　31号竪穴建物……758
第634図　31号竪穴建物掘方・カマド……759
第635図　31号竪穴建物出土遺物(１)……760
第636図　31号竪穴建物出土遺物(２)……761
第637図　31号竪穴建物出土遺物(３)……762
第638図　32号竪穴建物と出土遺物……763
第639図　33号竪穴建物……764
第640図　33号竪穴建物掘方・カマド……765
第641図　33号竪穴建物出土遺物(１)……766
第642図　33号竪穴建物出土遺物(２)……767
第643図　１号竪穴状遺構……768
第644図　１号竪穴状遺構出土遺物……769
第645図　１号井戸と出土遺物……770
第646図　１号粘土採掘坑……771
第647図　１号粘土採掘坑エレベーション図……772
第648図　１号粘土採掘坑出土遺物……773
第649図　１号溝と出土遺物……774
第650図　２号・３号溝……775
第651図　２号溝出土遺物……776
第652図　１号～14号土坑……784
第653図　15号～25号土坑……785
第654図　26号～33号土坑……786
第655図　34号・35号土坑と13号・14号・21号・29号～31号・35号土坑出土遺物……787
第656図　遺構外出土遺物(１)……788
第657図　遺構外出土遺物(２)……789
第658図　本郷萱原遺跡　旧石器トレンチ配置図・断面図と出土遺物　790
第659図　本郷鳴上遺跡　全体図……793
第660図　本郷鳴上遺跡　旧石器トレンチ配置図・断面図……794
第661図　１号竪穴建物と出土遺物……795
第662図　２号竪穴建物……796
第663図　２号竪穴建物出土遺物……797
第664図　３号竪穴建物……798
第665図　３号竪穴建物掘方・カマド……799
第666図　３号竪穴建物出土遺物(１)……800
第667図　３号竪穴建物出土遺物(２)……801
第668図　４号竪穴建物……803
第669図　４号竪穴建物カマドと出土遺物……804
第670図　５号竪穴建物……805
第671図　５号竪穴建物カマドと出土遺物……806
第672図　６号竪穴建物・カマド……808
第673図　６号竪穴建物出土遺物(１)……809
第674図　６号竪穴建物出土遺物(２)……810
第675図　７号竪穴建物と出土遺物……811
第676図　８号竪穴建物……812
第677図　９号竪穴建物……813
第678図　９号竪穴建物掘方・カマド……814
第679図　９号竪穴建物出土遺物(１)……815
第680図　９号竪穴建物出土遺物(２)……816
第681図　９号竪穴建物出土遺物(３)……817
第682図　10号竪穴建物……818
第683図　10号竪穴建物カマド……819
第684図　10号竪穴建物出土遺物(１)……820
第685図　10号竪穴建物出土遺物(２)……821
第686図　11号竪穴建物・カマド……822
第687図　11号竪穴建物出土遺物(１)……823
第688図　11号竪穴建物出土遺物(２)……824
第689図　12号竪穴建物・カマド……825
第690図　12号竪穴建物出土遺物……826
第691図　１号竪穴状遺構と出土遺物……827
第692図　１号焼土……828
第693図　１号焼土出土遺物……829
第694図　１号溝……830
第695図　２号溝……831
第696図　１号畑……832
第697図　１号～８号土坑……835
第698図　９号～11号土坑と４号～７号土坑出土遺物……836
第699図　１号～５号ピット……837
第700図　遺構外出土遺物……838
第701図　本郷満行原遺跡３号建物P27……840
第702図　３号建物P27　№１……840
第703図　３号建物P27　№２……840
第704図　繊維素材同定を行った試料の写真と顕微鏡写真……842
第705図　瓦：遺構外245のTLグローカーブ……845
第706図　瓦：遺構外247のTLグローカーブ……845
第707図　瓦：遺構外250のTLグローカーブ……846
第708図　瓦：遺構外255のTLグローカーブ……846
第709図　瓦片４試料のTLグローカーブ……846
第710図　本郷満行原遺跡の６世紀の竪穴建物……852
第711図　本郷満行原遺跡の７世紀の竪穴建物……853
第712図　本郷満行原遺跡の８世紀の竪穴建物……853
第713図　本郷満行原遺跡の９世紀の竪穴建物……854
第714図　本郷満行原遺跡の10世紀の竪穴建物……854
第715図　発茶沢(１)遺跡(秋田県・９世紀)竪穴・掘立柱併用建物の構造復元……857
第716図　本郷満行原遺跡全体図……859
第717図　本郷萱原遺跡全体図……859
第718図　群馬県内出土臼玉図(大型臼玉中心)……863
第719図　県内出土の猿面硯(１)……874
第720図　県内出土の猿面硯(２)……875
第721図　門扉参考資料……879
第722図　埋納遺物参考資料……880
第723図　布目密度の分類１：２(左から密・並・粗)……884

表　目　次

第１分冊　本文編１

第１表　本郷遺跡群の周辺遺跡一覧表……18

第２分冊　本文編２

第２表　素材同定の結果一覧……841
第３表　本郷満行原遺跡出土瓦片の相対的新旧判定結果……845
第４表　本郷遺跡群竪穴建物一覧表……855
第５表　本郷遺跡群出土墨書・刻書土器一覧表……867
第６表　本郷遺跡群出土墨書・刻書土器遺跡別出土点数……867
第７表　本郷遺跡群出土墨書・刻書土器文字記入位置……867
第８表　群馬県内出土の主な古代私印……871
第９表　群馬県内からの猿面硯の出土例……874
第10表　出土瓦組成表……882
第11表　部位別一覧表……882
第12表　平瓦成形技法別厚さ平均(小数点第２位を四捨五入)……883
第13表　主要遺構における平瓦Ａ・Ｃ類出土数一覧……884
第14表　区別瓦出土数(第13表例示の遺構を除く)……884
第15表　本郷遺跡群遺構一覧表……886
第16表　本郷上ノ台遺跡遺物観察表……895
第17表　本郷満行原遺跡遺物観察表……899
第18表　本郷広神遺跡遺物観察表……972
第19表　本郷大カサ遺跡遺物観察表……976
第20表　本郷鶴窪遺跡遺物観察表……992
第21表　本郷萱原遺跡遺物観察表……996
第22表　本郷鳴上遺跡遺物観察表……1013

第１章　調査の概要

本郷台地(本郷上ノ台遺跡付近)の土層堆積状況　南から

第１節　調査に至る経緯

本県の中部(中毛)地域と西部(西毛)地域を結ぶ地域は、烏川、碓氷川、鏑川などの谷筋に阻まれ、従来から交通網の整備が遅れていた。既存の道路は１車線のものが多く道幅も狭いため安全性に問題があり、また、交通渋滞が激しく前橋・高崎方面とのアクセスも良好ではなかった。そこで周辺の渋滞緩和、物流の効率化、生活圏の拡大など、西毛地域の産業、経済、観光の発展を担う目的で西毛広域幹線道路の建設が計画された。

西毛広域幹線道路は、前橋市千代田町三丁目交差点から、高崎市、安中市を経て、富岡市富岡しののめ跨線橋北交差点につながる総延長27.8㎞の主要幹線道路である。この西毛広域幹線道路のうち高崎市箕郷町下芝から同下里見町までの4.7㎞区間が高崎西工区に相当する。

この工事に先立ち、路線内の埋蔵文化財について県土整備部監理課より群馬県教育委員会文化財保護課(以下、県保護課)に照会があり、県保護課は当該事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、予備調査として路線内の試掘・確認調査の実施が必要であることを回答した。そのため、高崎土木事務所(以下、高崎土木)は、県保護課に対し当該地における試掘・確認調査の実施を依頼した。県保護課による試掘・確認調査は、平成27年７月に大カサ、鶴窪、萱原、及び鴫上地内、平成28年10月に鶴楽、上ノ台、満行原、広神、及び西谷津地内、平成29年９月、及び10月に満行原、広神、及び大カサ地内、平成30年５月に鶴楽地内について実施され、それぞれ遺跡の存在が確認された。この結果を受けて、県保護課は、発掘調査が必要であることを高崎土木に通知し、平成29年１月から公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、群埋文)が発掘調査を受託し、本調査を実施することとなった。

本郷鶴楽、本郷上ノ台、本郷満行原、本郷広神、本郷西谷津、本郷大カサ、本郷鶴窪、本郷萱原、及び本郷鴫上の９遺跡(本書では、これらの遺跡の総称として「本郷遺跡群」を用いる)は、いずれも高崎市本郷町に所在する。本郷遺跡群の発掘調査は、平成29年１月から同年３月にかけて本郷大カサ遺跡１～３区、本郷萱原遺跡１区・２区、及び本郷鴫上遺跡１区を、平成30年１月から同年３月にかけて本郷大カサ遺跡４区・５区、本郷鶴窪遺跡、本郷鴫上遺跡２区・３区、本郷鶴楽遺跡Ｆ区(Ａ～Ｅ区は欠番)、本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡Ａ区・Ｂ区南・Ｃ区、本郷広神遺跡Ａ区・Ｂ区、及び本郷西谷津遺跡を、平成30年８月から平成31年２月にかけて本郷鶴楽遺跡Ｇ区・Ｈ区を、平成31年３月から令和元年８月にかけて本郷満行原遺跡Ｃ区の継続調査、及びＤ区を、令和２年４月から同年５月にかけて、本郷満行原遺跡Ｂ区西・Ｂ区東・Ｂ区東斜面部、及び本郷広神遺跡Ｃ区を、いずれも西毛広域幹線道路高崎西工区の建設に伴う発掘調査として実施した。本書はこれら本郷遺跡群のうち本郷鶴楽遺跡を除く、本郷上ノ台、本郷満行原、本郷広神、本郷西谷津、本郷大カサ、本郷鶴窪、本郷萱原、及び本郷鴫上の８遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

第２節　発掘調査の方法

第１項　遺跡・調査区の設定

本郷遺跡群の各遺跡名は、かつての大字である「本郷」と、それぞれの遺跡が所在する小字名を組み合わせたもので、高崎市教育委員会によって決定された。また、遺跡内を現道が横断しているような場合は、作業工程上の都合により調査担当者が、現道などを境界として１区・２区…、あるいはＡ区・Ｂ区…などのように、さらに細かな調査区に分割し調査した。

遺構は各遺跡それぞれの調査区から検出されたが、遺構番号は同一遺跡内においては通番とした。そのため作業工程上、複数の調査区を同時に調査した場合は、それぞれの調査区に遺構番号が混在している。ただし、本郷鶴楽遺跡、本郷上ノ台遺跡、及び本郷満行原遺跡では、すべての遺構番号が３遺跡で通番となっているため、それぞれの遺跡に遺構番号が混在している。

遺構平面図を作成する測量用のグリッドは、５×５ｍを基本とし設定した。その基準となる座標値は、世界測地系国家座標(平面直角座標Ⅸ系)を使用し、遺構図中に記載する座標については、座標値を「Ｘ軸－Ｙ軸」の順で記した。その際、座標値「Ｘ＝40940、Ｙ＝－80655」の場合であれば、「940－655」というように下３桁のみを略記した。

第２項　基本土層

本郷遺跡群が立地するいわゆる本郷台地や十文字台地の地形は起伏に富み、さらに黒沢川や小堀川などによって開析されているため、それぞれの遺跡間の標高差が大きい。そのため、同一の標高値を用いることができず、第５・６図の柱状図には、それぞれ図の左側に個別の標高値を記載した。

なお、本文中で使用する各台地の名称については、『榛名町誌自然編』に従った（第７図参照）。

１．本郷台地の基本土層

本郷上ノ台遺跡と本郷満行原遺跡が立地する本郷台地では、昭和40年代に実施された群馬用水土地改良事業によって、土層上部が大きく改変されている箇所が見られ

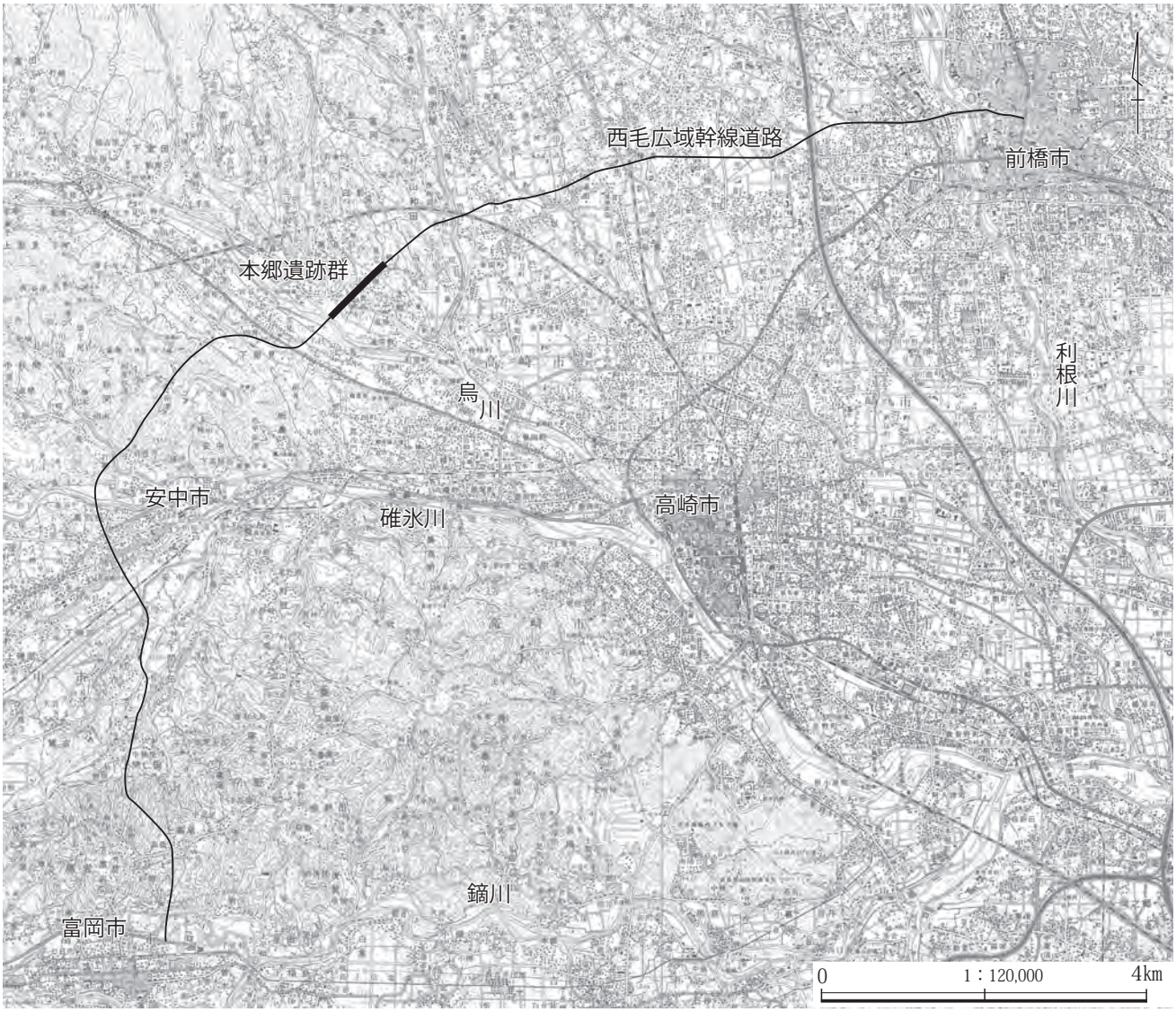
第１図　群馬県西部の地勢と本郷遺跡群の位置（国土地理院発行20万分の１　地勢図「宇都宮」「長野」（平成23年発行）を使用）

た。最も土層の残存状況が良好であった本郷満行原遺跡Ｃ区も例外ではなく、そのため本郷満行原遺跡Ｃ区の基本土層は、旧石器時代の遺構・遺物確認調査トレンチの断面と、それに近接する調査区壁のうち、なるべく改変を受けていないと思われる地点で記録し、それらを図上で合成した。本郷上ノ台遺跡と本郷満行原遺跡Ａ区では、旧石器時代の遺構・遺物確認調査を行っていないため、調査区壁の断面のみを記録した。

本郷台地では、浅間Ａテフラ(As-A)の一次堆積物は認められず、確認できたのはＣ区の復旧坑に廃棄された軽石や表土中に撹拌された軽石のみであった。また、本郷上ノ台遺跡、及び本郷満行原遺跡Ｃ区・Ｄ区では、一部の竪穴建物の埋没土中や畑の畝間溝中にのみ浅間Ｂテフラ(As-B)の一次堆積物が残存していた。本郷満行原遺跡Ｂ～Ｄ区における旧石器時代の遺構・遺物確認調査では、いずれのトレンチにおいても浅間板鼻黄色テフラ(As-YP)や浅間板鼻褐色テフラ群(As-BPGroup)が厚く堆積していることが確認できた。その中間のローム層中に認められた浅黄橙色軽石は、浅間大窪沢テフラ１・２(As-Ok １・２)、あるいは浅間白糸テフラ(As-Sr)の可能性がある。また、さらに下層まで掘り下げたトレンチでは、As-BPGroupの最下部に当たる室田軽石(MP)が厚く堆積していることが確認できた。

２．谷地の基本土層

本郷広神遺跡と本郷西谷津遺跡が立地する谷地では、As-Bが調査区全体を覆っていた。また、このAs-Bの上層に薄く暗緑灰色火山灰の堆積が認められたが、これは浅



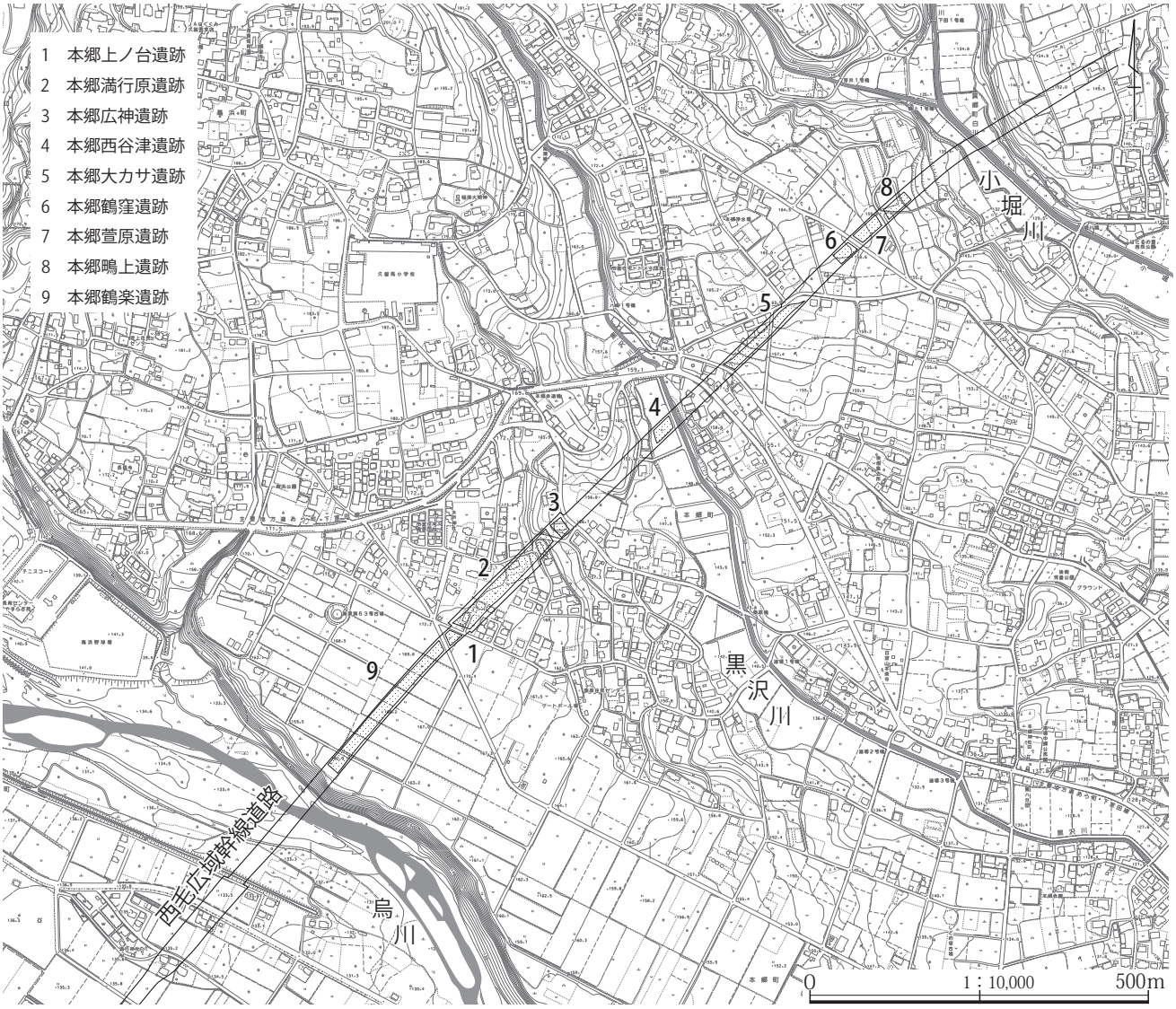
第２図　西毛広域幹線道路と本郷遺跡群の位置

（国土地理院発行５万分の１　地形図「前橋」「高崎」「榛名」（平成10年発行）「富岡」（平成７年発行）を編集して使用）

間粕川テフラ(As-Kk)であると考えられる。本郷西谷津遺跡の基本土層は、調査区北壁でトレンチ調査を行い、その断面を記録した。As-Bより下位に堆積するオリーブ黒色土(Ｘ層)中に含まれる灰白色軽石は、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、または榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の可能性がある。一方、本郷広神遺跡の基本土層は、２号溝の断面図作成に合わせてＣ区の北壁で記録した。本郷広神遺跡では、調査区全体が厚い客土に覆われており、本郷西谷津遺跡のⅠ～Ⅴ層に相当するAs-Bより上層の堆積土を細かく分層することはできなかった。

３．十文字台地の基本土層

本郷大カサ遺跡、本郷鶴窪遺跡、本郷萱原遺跡、及び本郷鴫上遺跡が立地する十文字台地の末端部付近の地形は、本来、北西から南東に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。しかし、現在では宅地や畑地の平坦面を造成するために大幅な改変を受けて、階段状の地形になっている。そのため上位の土層は、ほとんど削り取られていたり、また、逆に厚く客土されていたり、地点によって様相が大きく異なっていた。そこで、本郷大カサ遺跡５区、本郷鶴窪遺跡、及び本郷萱原遺跡の基本土層は、旧石器時代の遺構・遺物確認調査トレンチの断面と、それらに近接する調査区壁の断面のうち、なるべく改変を受けていないと思われる地点で記録し、それらを図上で合成した。本郷大カサ遺跡１区では、適当な調査区壁の断面が得られなかったことから、旧石器時代の遺構･遺物確認調査トレンチの断面のみを記録した。また、本郷鴫上遺跡１区は、小堀川に向かって落ち込む傾斜地



第３図　西毛広域幹線道路と各遺跡の位置
（高崎市発行2,500分の１　高崎市都市計画基本図「90」（平成24年測図）を編集して使用）

であることから、安全面を考慮してローム層まで掘り下げることはしなかった。

本郷鳴上遺跡１区の一部ではAs-Aの一次堆積物が認められた。また、本郷大カサ遺跡では、３区の１号古墳周堀の埋没土中や５区の一部などでAs-Bの一次堆積物が認められた。旧石器時代の遺構・遺物確認調査では、いずれのトレンチにおいても本郷台地上で確認できた一定の層厚をもって面的に広がるAs-YPの一次堆積物は認められず、また、調査区によってAs-BPGroupの堆積状況にも大きな違いがみられた。最も残存状況が良好であった本郷大カサ遺跡では、As-BPGroupの層厚は最大130cm(そのうちMPの層厚は最大20cm)であったのに対し、本郷鶴窪遺跡、本郷萱原遺跡、及び本郷鳴上遺跡では、これらのテフラについても面的に広がる一次堆積物は認められなかった。

このように近接した遺跡間で土層の堆積状況に大きな違いが生じている要因として、小堀川に向かって傾斜する台地の北東側斜面で、As-YPの降下と前後して大規模な地滑りが発生した可能性が考えられる。その地滑りによってAs-BPGroupを含む上位のローム層が消失したと考えるならば、このような土層の堆積状況の違いを説明することができる。その場合、本郷鶴窪遺跡、本郷萱原遺跡、及び本郷鳴上遺跡のXI・XI′層以下の堆積物は、As-BPGroupより下位のローム層であると考えられ、調査所見に記録された「浅黄橙色軽石(As-Ok1・2またはAs-Srか)を含む」、「As-BPを含む」などの記載については誤りである可能性が高い。なお、これら３遺跡が立地する十文字台地は、約５万年前に発生した榛名山の噴火に伴う火砕流(白川火砕流)の堆積物によって広く覆われていることから、これらXI層以下の堆積物は、白川火砕流堆積物より上位のローム層であると考えられる。

また、本郷大カサ遺跡においてはAs-BPGroupより下位(XII層以下)の土壌が、本郷萱原遺跡においてはXVI層以下の土壌が、本郷鶴窪遺跡と本郷鳴上遺跡においてはAs-YP混土層より下位(XI層以下)のすべての土壌が、それぞれ水の影響を受けて粘土化していた。

第３項　遺構確認と遺構調査

各遺跡・調査区とも調査に際しては、遺構確認面までの表土を大型掘削重機によって除去し、その後、ジョレンを用いて人力による遺構確認作業を行った。

遺構確認面は、本郷台地上や十文字台地上に立地する６遺跡においては基本的にローム層上面、谷地に立地する２遺跡においてはAs-B層下面とした。ただし、鍵層が複数存在した本郷上ノ台遺跡と本郷満行原遺跡Ｄ区では、As-B混土層下面、ローム層上面を、本郷満行原遺跡Ｃ区では、表土層下面、As-B混土層下面、ローム層上面を、それぞれ遺構確認面として複数面調査を実施した。

確認された遺構は、それぞれ土層観察用のベルトを設定するか、あるいは半截することによって、土層の堆積状況を記録しながら掘削を進めた。そして、遺構を完全に掘り上げたあと、全景写真の撮影や遺構平面図作成のための測量を行った。また、出土遺物については、必要に応じて個別写真を撮影し、遺構平面図中に出土位置を記録した。

なお、遺構確認、遺構掘削の指示、土層観察、写真撮影は、調査担当者が行った。また、各遺構の土層断面図、遺構平面図の作成、遺物出土位置の記録は、調査担当者の指示と立ち合いのもと測量業者に委託して行った。

第４項　発掘調査の記録

発掘調査にあたっては、図面、写真、及び調査所見メモを記録した。

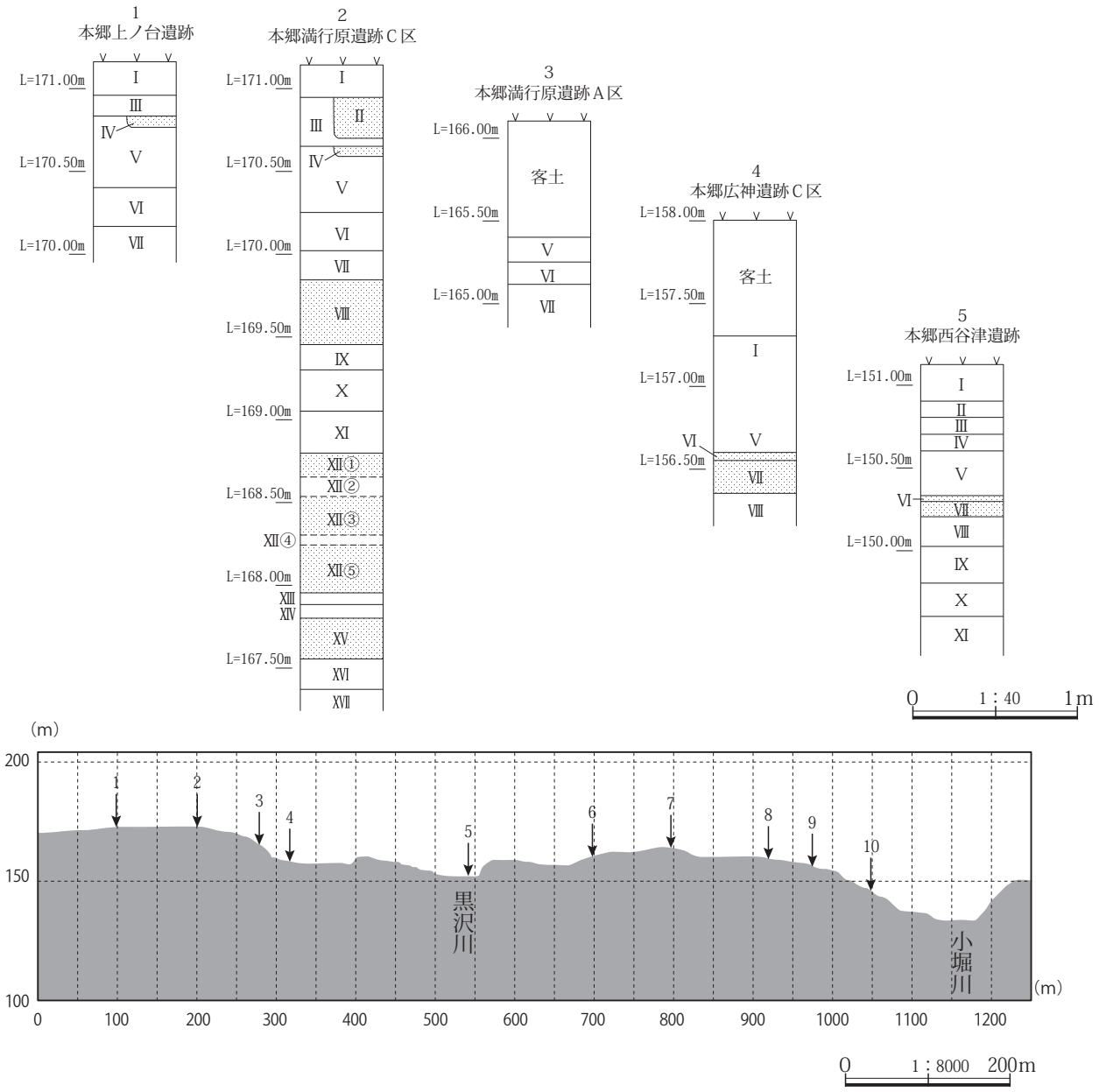
図面の縮尺は、土層断面図、遺構平面図とも１/20を基本とし、必要に応じて１/40と使い分けた。作成された図面類は、発掘調査終了時にＤＶＤに保存されたデジタルデータとＡ２サイズの用紙に印刷された原図で納品され、これらは調査記録として保存してある。

遺構写真は、ブローニーモノクロフィルムを用いた６×７カメラ、及び35㎜フルサイズデジタルカメラで、撮影対象、撮影日、撮影方向の記録を添付しながら撮影した。遺跡や調査区の全景写真は、ラジコンヘリコプターや高所作業車を使用して撮影した。撮影した銀塩写真は、ベタ焼きを遺構ごとに整理し、撮影対象、撮影日、撮影方向を記入したネガ検索台紙を作成した。デジタル写真は、保存用のRAW形式と、撮影内容によってリネームしたJPEG形式のデータを、ハードディスク、及びブルーレイディスクに保存してある。

調査所見メモは、フィールドノートや遺構図面のコピーなどに記入し、図面類とともに保存してある。

第４図　各遺跡調査区と基本土層の位置

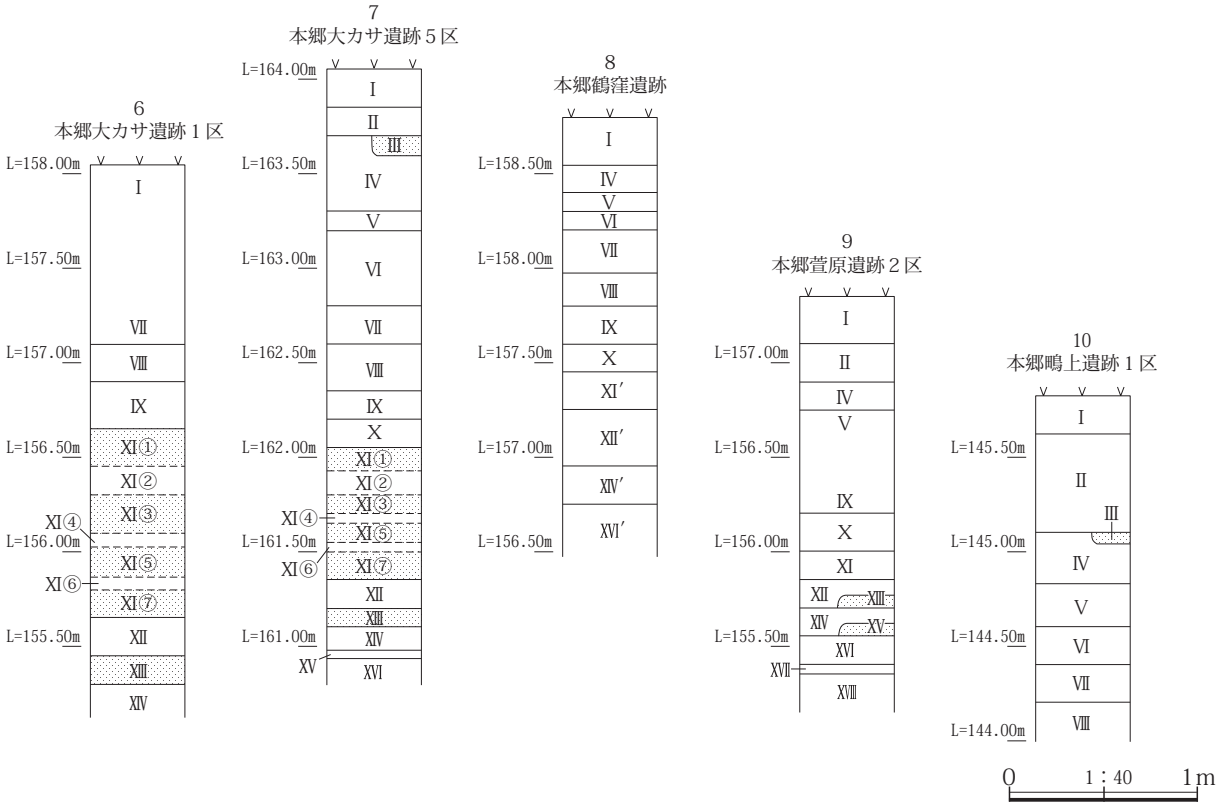
（高崎市発行2,500分の１　高崎市都市計画基本図「90」（平成24年測図）を編集して使用）



基本土層１～３(本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡)
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅱ．二次堆積のAs-A
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
Ⅳ．As-B
Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
Ⅵ．暗褐色土10YR3/3　漸移層。
Ⅶ．明黄褐色土10YR6/6　As-YPを含む。
Ⅷ．明黄褐色軽石層2.5Y7/6　As-YP。
Ⅸ．黄褐色土10YR5/6
Ⅹ．明黄褐色土10YR6/6 浅黄橙色軽石(As-Ok1･2またはAs-Srか)を含む。
Ⅺ．明黄褐色土10YR6/8
Ⅻ①．黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP(As-Srの可能性あり)。
Ⅻ②．黄褐色土10YR5/6　As-BPを含む。
Ⅻ③．黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP。
Ⅻ④．灰黄褐色土10YR5/2　土壌化したローム。
Ⅻ⑤．黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP。青灰色軽石をやや多量含む。中間に灰褐色土層を薄く挟む。
ⅩⅢ．褐色土10YR4/4
ⅩⅣ．にぶい黄褐色土10YR4/3　MPを含む。
ⅩⅤ．明黄褐色軽石層10YR6/8　MP。
ⅩⅥ．褐色土10YR4/6
ⅩⅦ．暗褐色土7.5YR3/3　暗色帯。

基本土層４・５(本郷広神遺跡・本郷西谷津遺跡)
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅱ．暗灰黄色土2.5Y4/2　As-Aを少量含む。粘性やや強い。シルト質。
Ⅲ．オリーブ褐色土2.5Y4/3　As-A、礫(直径10cm程度)を少量含む。砂質。
Ⅳ．暗灰黄色土2.5Y4/2　As-Aを少量含む。砂質。
Ⅴ．黒褐色土10YR3/2　上層にAs-Aを少量含む。砂質。
Ⅵ．暗緑灰色火山灰層10GY4/1(As-Kkか)
Ⅶ．As-B
Ⅷ．黒色土2.5Y2/1　炭化物粒を微量含む。締まりやや強い。粘性強い。
Ⅸ．オリーブ黒色土5Y3/1　細礫(直径２㎜程度)を微量含む。粘性強い。
Ⅹ．オリーブ黒色土5Y3/1　灰白色軽石(Hr-FPまたはHr-FAか)を微量含む。締まりやや強い。粘性強い。
Ⅺ．黒色土5Y2/1　締まり非常に強い。粘性強い。

第５図　本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡・本郷西谷津遺跡の基本土層



基本土層６・７(本郷大カサ遺跡)
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅱ．黒褐色土10YR3/2　As-Bを含む。
Ⅲ．As-B
Ⅳ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
Ⅴ．暗褐色土10YR3/4
Ⅵ．黒色土10YR2/1　灰白色軽石を含む。
Ⅶ．黒褐色土7.5YR3/1　漸移層。
Ⅷ．明褐色土7.5YR5/8　As-YPを含む。
Ⅸ．橙色土7.5YR6/8　浅黄橙色軽石(As-Ok1･2またはAs-Srか)を含む。
Ⅹ．橙色土7.5YR6/8
XI①．明赤褐色軽石層5YR5/8　As-BP(As-Srの可能性あり)。
XI②．明褐色土7.5YR5/8　As-BPを含む。
XI③．明赤褐色軽石層5YR5/8　As-BP。青灰色軽石を多量含む。
XI④．灰褐色土7.5YR4/2　土壌化したローム。
XI⑤．明赤褐色軽石層5YR5/8　As-BP。下半部に青灰色軽石をやや多量含む。
XI⑥．灰褐色土7.5YR4/2　土壌化したローム。
XI⑦．明赤褐色軽石層5YR5/6　As-BP。上層は青灰色軽石を主体とする。
　　中層に青灰色軽石を多量含む。
XII．灰褐色粘質土7.5YR4/2　下部にMPを含む。
XIII．浅黄橙色軽石層7.5YR8/6　MP。軽石はやや潰れ粘性をもつ。
XIV．灰褐色粘質土7.5YR4/2　暗色帯相当層。上部にATを含む。
XV．黒褐色粘質土7.5YR3/1　暗色帯相当層。鉄分の沈着により硬く締まる。
XVI．褐色粘質土7.5YR4/3

基本土層８～10(本郷鶴窪遺跡・本郷萱原遺跡・本郷鳴上遺跡)
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅱ．黒褐色土10YR3/2　As-Aを含む。
Ⅲ．灰白色軽石層10YR7/1　As-A。
Ⅳ．黒褐色土10YR3/2　As-Bを含む。
Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
Ⅵ．黒色土10YR1.7/1　灰白色軽石を少量含む。
Ⅶ．黒褐色土10YR3/2　灰白色軽石を微量含む。
Ⅷ．黒色土10YR1.7/1　灰白色軽石を含む。
Ⅸ．黒褐色土7.5YR3/2　漸移層。
Ⅹ．明褐色土7.5YR5/8　As-YPを含む。
XI．明褐色土7.5YR5/8　浅黄橙色軽石(As-Ok1･2またはAs-Srか)を含む。
XI′.灰褐色粘質土7.5YR5/2　XI層が粘土化したもの。
　　下位が黒褐色(7.5YR3/1)に変色。
XII．明褐色土7.5YR5/6　As-BPを含む。
XII′.にぶい褐色粘質土7.5YR5/3　XII層が粘土化したもの。
XIII．明褐色軽石7.5YR5/8　As-BP塊。
XIV．褐色土7.5YR4/6　MPを含む。
XIV′.灰褐色粘質土7.5YR4/2　XIV層が粘土化したもの。
XV．明褐色軽石7.5YR5/8　MP塊。
XVI．灰褐色粘質土7.5YR4/2　暗色帯相当層。ATは確認できない。
XVI′.黒褐色粘質土7.5YR3/2　XVI層がより粘土化したもの。
　　上位が黒色(7.5YR2/1)に変色。
XVII．黒褐色粘質土7.5YR3/1　暗色帯相当層。鉄分の沈着により硬く締まる。
XVIII．褐色粘質土7.5YR4/3

第６図　本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡・本郷萱原遺跡・本郷鳴上遺跡の基本土層

第３節　発掘調査の経過

１．平成28年度の調査

平成28年度の本郷大カサ遺跡１～３区、本郷萱原遺跡１区・２区、及び本郷鳴上遺跡１区における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

平成29年

１月６日　事務所設置。
１月10日　機材搬入。
１月11日　本郷萱原遺跡、本郷鳴上遺跡調査開始。
１月18日　本郷大カサ遺跡調査開始。
２月１日　本郷鳴上遺跡全景写真撮影。
２月９日　本郷鳴上遺跡埋め戻し完了。
３月１日　本郷萱原遺跡調査区全景写真撮影。
　　本郷大カサ遺跡調査区全景写真撮影。
３月６日　本郷萱原遺跡旧石器調査開始。
３月７日　本郷大カサ遺跡旧石器調査開始。
３月８日　本郷大カサ遺跡１号古墳全景写真撮影。
３月29日　本郷大カサ遺跡埋め戻し完了。
３月30日　本郷萱原遺跡埋め戻し完了。
３月31日　撤収完了。

２．平成29年度の調査①

平成29年度の本郷大カサ遺跡４区・５区、本郷鶴窪遺跡、及び本郷鳴上遺跡２区・３区における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

平成30年

１月10日　事務所設置。
１月11日　機材搬入。
１月12日　本郷鶴窪遺跡調査開始。
１月18日　本郷鳴上遺跡調査開始。
１月19日　本郷大カサ遺跡調査開始。
２月６日　本郷鳴上遺跡旧石器調査開始。
２月14日　本郷鶴窪遺跡旧石器調査開始。
２月23日　本郷大カサ遺跡旧石器調査開始。
３月２日　本郷大カサ遺跡調査区全景写真撮影。
　　本郷鳴上遺跡調査区全景写真撮影。
３月８日　本郷鶴窪遺跡埋め戻し完了。
３月19日　本郷鳴上遺跡埋め戻し完了。
３月27日　本郷大カサ遺跡埋め戻し完了。
３月29日　撤収完了。

３．平成29年度の調査②

平成29年度の本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡Ａ・Ｂ区南・Ｃ区、本郷広神遺跡Ａ区・Ｂ区、及び本郷西谷津遺跡における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

平成30年

１月５日　事務所設置。
１月９日　安全対策工事。
１月19日　本郷満行原遺跡Ｃ区調査開始。
２月５日　本郷西谷津遺跡調査開始。
２月７日　本郷上ノ台遺跡調査開始。
２月19日　本郷広神遺跡調査開始。
２月22日　本郷満行原遺跡Ａ・Ｂ区調査開始。
２月28日　本郷西谷津遺跡調査区全景写真撮影。
３月６日　本郷広神遺跡調査区全景写真撮影。
３月７日　本郷満行原遺跡Ｂ区旧石器調査開始。
３月９日　本郷西谷津遺跡埋め戻し完了。
　　本郷満行原遺跡Ａ区全景写真撮影。
３月12日　本郷広神遺跡埋め戻し完了。
３月13日　本郷満行原遺跡Ｂ区全景写真撮影。
３月14日　本郷満行原遺跡Ａ区埋め戻し完了。
３月15日　本郷満行原遺跡Ｂ区埋め戻し完了。
３月16日　本郷満行原遺跡Ｃ区全景写真撮影。
　　本郷満行原遺跡Ｃ区旧石器調査開始。
　　本郷上ノ台遺跡調査区全景写真撮影。
３月26日　本郷上ノ台遺跡、本郷満行原遺跡Ｃ区
　　調査一旦終了。
３月28日　撤収完了。

４．平成30年度の調査

平成30年度の本郷満行原遺跡Ｃ区・Ｄ区における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

平成31年

３月１日　事前準備開始。
３月５日　本郷満行原遺跡Ｃ区継続調査開始。
　　本郷上ノ台遺跡埋め戻し開始。
３月14日　本郷上ノ台遺跡埋め戻し終了。
３月15日　本郷満行原遺跡Ｄ区表土除去開始。

３月26日　本郷満行原遺跡Ｄ区表土除去終了。

５．平成31年度の調査

平成31年度の本郷満行原遺跡Ｃ区・Ｄ区における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

平成31年

４月１日　事前準備開始。
４月15日　満行原遺跡Ｃ区調査再開。
４月16日　満行原遺跡Ｄ区調査開始。

令和元年

６月13日　満行原遺跡Ｄ区１面全景写真撮影。
７月25日　満行原遺跡Ｄ区２面全景写真撮影。
８月31日　埋め戻し・撤収完了。

６．令和２年度の調査

令和２年度の本郷満行原遺跡Ｂ区西・Ｂ区東・Ｂ区東斜面部、及び本郷広神遺跡Ｃ区における発掘調査経過の概略は以下の通りである。

令和２年

４月２日　事務所設置。
４月３日　安全対策工事。
４月８日　本郷満行原遺跡調査開始。
４月16日　本郷満行原遺跡旧石器調査開始。
４月20日　本郷広神遺跡調査開始。
５月12日　本郷満行原遺跡調査区全景写真撮影。
５月22日　本郷広神遺跡調査区全景写真撮影。
　　本郷満行原遺跡埋め戻し完了。
５月28日　本郷広神遺跡埋め戻し完了。
５月29日　撤収完了。

第４節　整理作業の経過と方法

第１項　整理作業の経過

本郷遺跡群の発掘調査成果と出土遺物の整理作業、及び報告書編集作業は、高崎土木の委託を受けて、群埋文が令和２年４月から令和５年３月にかけて実施した。

整理作業では、遺構図の修正・計測、遺物の分類、掲載遺物の選択・写真撮影・実測・トレース図の作成、遺物観察表の作成、遺構・遺物写真の補正、写真図版の作成、原稿執筆、報告書全体のデジタル組版などを行った。

遺構図の修正作業は、令和２年４月から開始し、主に現地で地上測量した土層断面図、遺構平面図の修正や土層観察記録の入力などを行った。そして、修正した図面類を基にデジタルトレース図を作成した。

遺物の整理作業は、令和２年９月から開始した。まず、一括して袋詰めにされている土器類を、陶磁器、瓦、土師器、須恵器、縄文土器に分類し、それぞれについて接合作業を行った。その中から報告書掲載遺物を選択し、キューテックスを使用して復元した後、写真撮影を行い、実測・トレース図を作成した。また、石器、木器、金属器についても報告書掲載遺物を選択し、写真撮影を行った後、実測・トレース図を作成した。

遺構写真の整理作業は、令和２年６月から開始した。発掘調査時に撮影したデジタル写真から報告書掲載写真を選択し、サイズ調整や補正を行い写真図版を作成した。

令和４年８月からは、整理作業で作成した遺構図、遺物図、写真、及び各種原稿を組版し、フルデジタル印刷原稿を作成した。

第２項　遺物の整理

遺物整理の対象としたのは、土器、石器、木器、金属器、人骨など遺物収納箱で計308箱分である。

１．土器の整理

土器については、遺構ごとに接合作業を行った。接合作業は、遺物の出土状況を遺構平面図や遺物出土状況写真などで確認しながら実施した。また、遺構内から出土した土器は、遺構外から出土した同時期同型式の土器との接合関係も確認した。

次に、遺物の出土状況、個体数、形態差、構成比などを勘案し、報告書に掲載する土器2,942点（陶磁器90点、土師器701点、須恵器1,440点、灰釉陶器117点、緑釉陶器９点、瓦塔18点を含む紡輪・土錘・土馬などの土製品39点、瓦216点、縄文土器330点）を選択した。なお、選択できなかった土器については、遺構ごとに器種分類をした後、計量・計数して収納した。

報告書掲載土器は、キューテックスを使用して復元したのち写真撮影を行った。遺物写真は、35㎜フルサイズデジタルカメラを用いて１点ずつ撮影した。

土器の実測図は、等倍で作成した。完形に近い土器

は、スリースペースシステムで測点し、その出力図を補測・製図した。破片の土器は、原体や文様、制作技法などが読み取れるように留意しながら採拓し、あわせて断面実測を行った。トレースはロットリングで行い、拓本とトレース図は台紙に貼付し、スキャニングしてデジタルデータとした。

土器の観察は、一括して表形式にまとめた。瓦を除く土器・陶磁器類の色調は『標準土色調』の色名を用いて記載し、器形実測できた土器の口径・底径・高さは、実測図から計測した。胎土は特徴的な夾雑物を中心に記載し、特徴は文様や成整形を中心に記載した。

２．石器の整理

石器類については、すべてを石材同定するとともに器種ごとに分類した。石器は1,328点を分類したが、器種を網羅するように留意し、そのうち570点を報告書掲載対象として選択した。選択できなかった石器は、遺構ごとに計量・計数して収納した。

石器の撮影も土器と同様、35㎜フルサイズデジタルカメラを用いて１点ずつ撮影した。

石器の実測図は、最も大型のものは１/４で、小さくなるに従い１/３、１/２、等倍で作成した。石器の実測は、石器を長焦点カメラで撮影し、その出力図を補測・製図する方法で行った。トレースはロットリングで行い、スキャニングしてデジタルデータとした。

長さ・幅・厚さ・重さ・石材などの属性は、一括して表形式にまとめた。

また、石材同定は、すべて群馬県地質研究会の飯島静男氏に依頼した。

３．木器の整理

木器については、現場から搬入されたあと水洗で泥を落とし、35㎜フルサイズデジタルカメラを用いて垂直方向から撮影した。また、樹種同定を必要とする場合は、すべて実測の前に行った。

その後、水漬けにして保管しながら、掲載遺物の選び出しを行い、横槌１点を等倍で実測した。木器の実測は、長焦点カメラで撮影し、その出力図を補測・製図する方法で行った。トレースは、実測図をスキャニングした後、デジタルトレースを行った。

実測が終わった木製品は、ポリエチレングリコール(PEG)含浸法により、木材内部の水分を約40％まで薬剤に置き換えたうえで、真空凍結乾燥法により保存処理を行った。

４．金属器の整理

金属器については、現場から搬入された状態で保存処理前の写真を撮影した。また、腐食が進んだものについては、必要に応じてＸ線写真の撮影も併用した。

その後、一次クリーニングとしてサビ落としを行った。掲載遺物については、二次クリーニングとしてサビを削り、金属器の輪郭を明瞭にする作業を行った。

金属器は器種を網羅するように留意し、223点を報告書掲載対象として選択した。古銭については文字が読み取りやすいように留意して採拓し、それ以外の実測については基本的に長焦点カメラで撮影し、その出力図を補測・製図する方法で等倍の実測図を作成した。トレースは実測図をスキャニングした後、デジタルトレースを行った。

金属器の撮影も、35㎜フルサイズデジタルカメラを用いて１点ずつ垂直方向から撮影した。

５．骨の整理

骨の鑑定は、新潟医療福祉大学の辰巳晃司氏、佐伯史子氏、奈良貴史氏に依頼した。なお、鑑定後の人骨は、乾燥させた状態で薬品処理は行わずに収納した。

第３項　報告書の編集

遺跡の全体図や位置図、遺跡分布図などは、アドビ社のイラストレーターで作成した。デジタルデータ化した地図、遺構図、遺物図、本文原稿、表原稿、及び写真は、アドビ社のインデザインにより組版し、報告書全体のフルデジタル印刷原稿を作成した。

作成された原稿は、指名競争入札によって決定した業者に委託し、印刷・製本を行った。納品された報告書は完了検査を実施し、活用に資するため関係各機関へ発送する。

なお、発掘調査、及び整理作業の過程で作成された各種図面や写真などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

第２章　遺跡の立地と環境

北西上空から見た本郷遺跡群周辺の地形

第１節　地理的環境

第１項　地理

本郷遺跡群が所在する高崎市は、関東平野の北西部、群馬県の中央やや南西に位置する人口約37.0万人（令和４年４月現在）を有する県内最大の地方都市である。西側は長野県北佐久郡軽井沢町、群馬県吾妻郡長野原町、安中市、富岡市、及び甘楽郡甘楽町に、南側は藤岡市に、東側は佐波郡玉村町、前橋市に、北側は北群馬郡榛東村、渋川市、及び吾妻郡東吾妻町に隣接し、市域面積は459.16㎢である。

市域の北西部は、標高1,449ｍの榛名山掃部ヶ岳山頂を含む榛名山南麓の傾斜地で占められ、榛名山南半の大部分が市域に含まれる。また、南東部には利根川が北から南へ流れ、その支流である烏川や碓氷川、鏑川などの河川が西から東へと流れている。高崎市の中心市街地の標高は、海岸より100㎞以上内陸に位置するにも関わらず100ｍ前後である。一方、市域の北西端付近では標高が1,700ｍ前後にもなり、市域内における標高差は1,600ｍ以上と大きい。

高崎市の中心市街地は、江戸時代には高崎藩の城下町として栄え、中山道と三国街道が分岐するなど古くから交通の要衝であった。現在も国道17号と18号、関越自動車道と北関東自動車道が、それぞれ分岐している。また、鉄道も発達しており、JR高崎線、上越線、信越本線、及び上信電鉄線、さらには上越新幹線、北陸新幹線が分岐するなど、全国有数の交通拠点都市として発展している。

平成17（2005）年から平成18（2006）年にかけて、高崎市は群馬郡群馬町、同箕郷町、同榛名町、同倉渕村、多野郡新町、及び同吉井町との合併によって広大な市域を擁するようになり、群馬県内最多の人口を抱える自治体となった。その後、平成23（2011）年には、群馬県内で２番目の中核市に指定された。

平野部に展開する中心市街地とその周縁部では、商業地や住宅地が北東に位置する前橋市街地まで続く、典型的な地方中核都市の様相を呈している。一方、市域の北西部に位置する旧箕郷町、旧榛名町、及び旧倉渕村では、農山村地域が広がっている。

旧榛名町域は、榛名山の火口湖である榛名湖を北境として榛名山南麓の大部分を占め、烏川右岸に沿った秋間丘陵の尾根を南境とする地域である。旧榛名町は、明治22（1889）年の市町村制施行によって建制された群馬郡室田町、同久留馬村、及び碓氷郡里見村の１町２村が合併し、昭和30（1955）年に発足した。その後、平成18（2006）年10月１日、高崎市に合併され、現在に至っている。なお、本郷遺跡群が所在する高崎市本郷町は、旧久留馬村域に含まれる。

第２項　地形

群馬県のほぼ中央部に位置する榛名山は、赤城山と並び県域の地形形成の要といえる山である。約５万年前に起こったプリニー式噴火は、榛名八崎軽石（Hr-HP）を噴出し、白川（室田）火砕流が発生した。この時、大量のマグマが噴出したため、山頂は「榛名カルデラ」と呼ばれる凹地になった。白川火砕流は、榛名山南麓を流れ下り、烏川を越えて旧里見村域まで押し寄せた。この白川火砕流などによって形成された室田台地、十文字台地、本郷台地、及び里見台地の上には、その後に起こった榛名山や浅間山などの活発な火山活動によって、さらに厚く火山噴出物が堆積していった。榛名山は６世紀初頭と中葉の２回、大規模な噴火を起こしているが、６世紀中葉を最後に現在までのところ噴火は確認されていない。

なお、本文中で使用する各台地の名称については、『榛名町誌自然編』に従った（第７図参照）。

旧榛名町域の南寄りには、この地域の地形形成に大きな影響を及ぼした烏川が北西から南東へ流れ、その左岸には榛名山南麓の火山麓扇状地、及び火砕流台地が広がっている。また、右岸には河岸段丘が形成され、さらにその南側は秋間丘陵に接している。この烏川は、長野県との県境に位置する鼻曲山の山麓に源を発し、下流で碓氷川、鏑川などと合流し利根川へと注ぐ。旧榛名町域は、この烏川の上～中流域に当たり、本地域の西部では狭く深い谷を、東部ではやや幅広い氾濫原を形成している。古くから烏川の谷筋は、この地域の重要な交通路となっており、地域の生業や人々の交流、さらには地域社会の形成などに重要な役割を果たしてきた。

烏川左岸の旧室田町域、及び旧久留馬村域は、榛名山の南麓地形に属し、白川火砕流などによって形成された

室田台地、十文字台地、及び本郷台地を多くの中小河川が開析している。烏川に接する台地の南端では、急激に落ち込む崖線となっており、本郷町付近では高さ約20mの段丘崖を形成している。崖線下の一部には下位段丘面が認められる。

烏川右岸の旧里見村域では、河岸段丘が形成されている。秋間丘陵の北側には、烏川との比高が約80mの上位段丘面が認められるが、その形成年代は不明である。中位段丘面は、白川火砕流堆積物によって覆われている。下位段丘面は、白川火砕流の発生からやや時間を経て形成されたと考えられ、烏川との比高は約10mである。

榛名山南麓では、白川火砕流などによって形成された台地を、大小の河川が長い年月にわたって浸食を繰り返し、深い谷を造り出していった。その結果として形成されたのが、台地の間を縫うように谷戸が入り組んだ複雑な旧榛名町域の地形ということができる。

本郷遺跡群は、本郷台地から十文字台地の末端部付近に位置し、標高は本郷台地で170m前後、十文字台地の末端部で160m前後である。両台地の間には黒沢川が流れ、本郷西谷津遺跡は黒沢川によって開析された谷地内に、本郷広神遺跡は黒沢川に続く狭小な谷地内に立地している。本郷西谷津遺跡の標高は150m前後で、この付近における本郷台地と谷地の比高は最大で約20mである。また、本郷鴨上遺跡付近における十文字台地と小堀川の谷地の比高は、最大で約30mである。

烏川の対岸から見た本郷台地　南から
（台地の上は本郷鶴楽遺跡付近）

第２節　歴史的環境

第１項　旧石器時代

榛名山麓の丘陵地帯で人類が生活するようになったのは３万年以上前の氷河時代の頃からと考えられている。厳しい自然環境の中で、榛名山麓の広大な原野が、人々の活動の格好の舞台となったことは想像に難くない。

旧榛名町域の当該期を代表する遺跡としては、三ツ子沢中遺跡(23)、白岩民部遺跡(26)、白川傘松遺跡(29)、和田山天神前遺跡(30)などが挙げられる。いずれも本郷遺跡群の北側をほぼ東西方向に横断する北陸新幹線の建設に伴い公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、群埋文)が発掘調査した遺跡である。

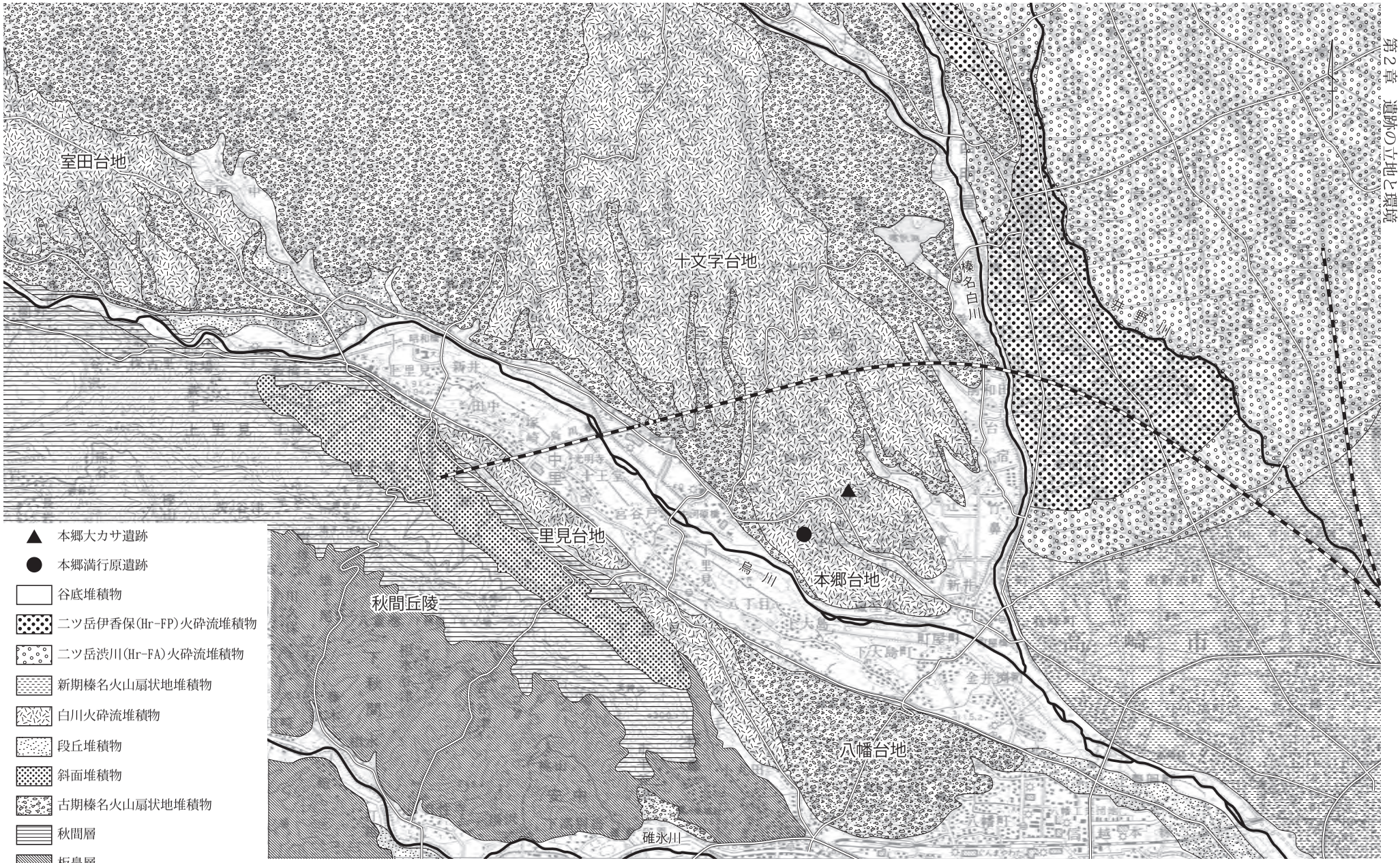
なお、遺跡名の後に付く(　)内の数字は、すべて第８図、及び第１表の遺跡番号と一致する。

これら旧石器時代の遺物が出土した遺跡は、いずれも十文字台地に立地している。この十文字台地は、榛名山麓を南北に流れる中小河川によって開析され、いくつかの細長い舌状台地に分かれている。

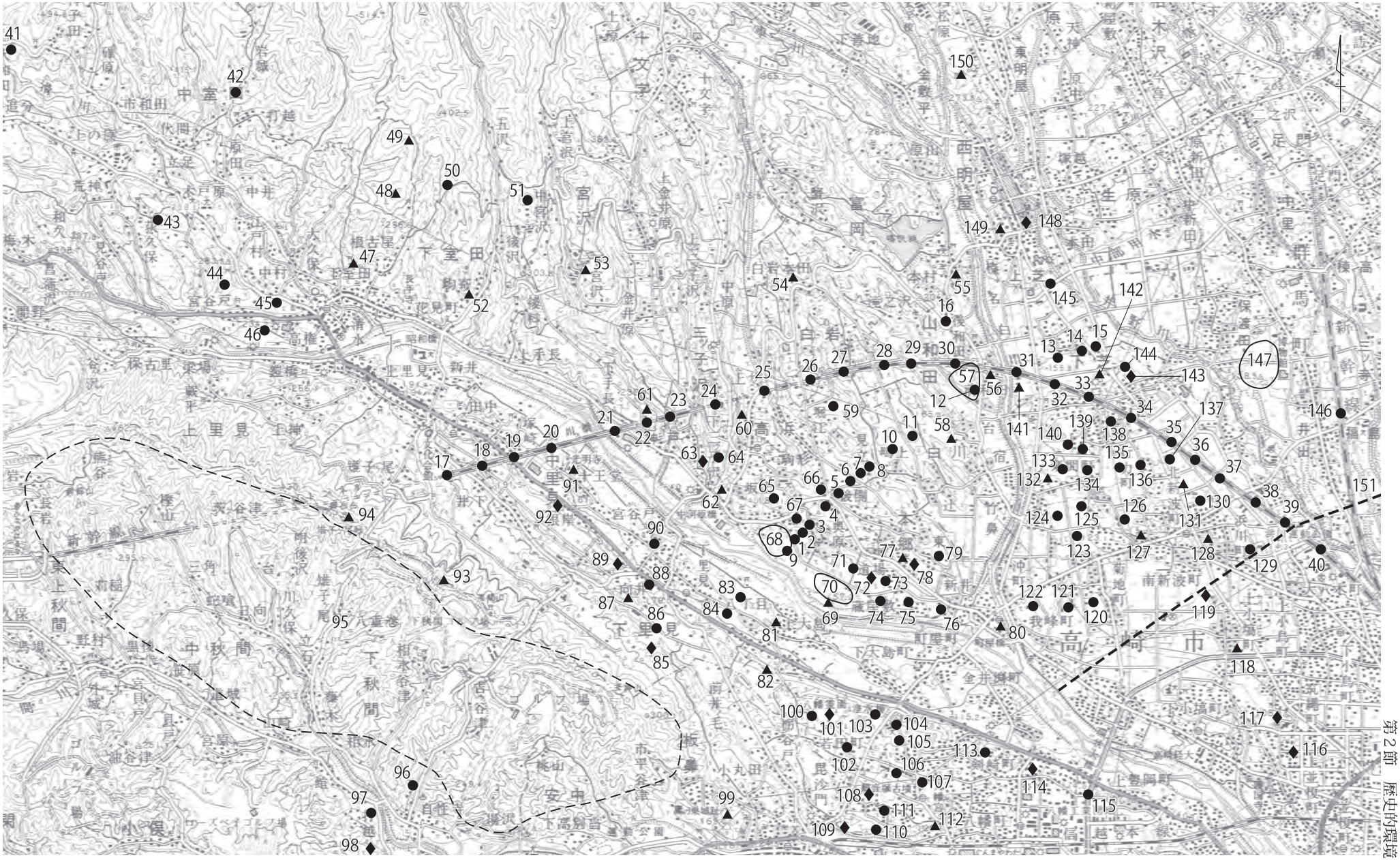
三ツ子沢中遺跡では、姶良Tnテフラ(AT)直下の暗色帯中から剥片を中心に、ナイフ形石器、ドリル、スクレイパー、局部磨製石斧、敲石、磨石、凹石など500点以上が出土し、石器が集中するブロックが10単位確認されている。

白岩民部遺跡では、石器は以下の２つの層位から出土した。まず、浅間板鼻褐色テフラ群(As-BPGroup)と室田軽石(MP)層に挟まれた厚さ約20cmのローム層下半から黒曜石製のエンドスクレイパーが１点、さらに、このローム層の下位に堆積する暗色帯中から剥片を中心に、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、スクレイパー、敲石など700点以上の石器が出土した。この暗色帯中から出土した石器群は、９単位のブロックが直径約30mの環状に分布する状況が認められた。

白川傘松遺跡では、AT直下の暗色帯中から剥片を中心に、ナイフ形石器、スクレイパー、クサビ形石器、敲石、磨石など600点以上の石器が出土した。これらの石器群は白岩民部遺跡の石器群と同様に、９単位のブロックを形成しており、それらが環状に分布する、いわゆる「環



第７図　本郷遺跡群周辺の地質（独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター発行「榛名地域の地質」付図５万分の１　地質図「榛名」を簡略化して使用）



第８図　本郷遺跡群の周辺遺跡（国土地理院発行５万分の１　地形図「榛名」（平成10年発行）を使用）

第１表　本郷遺跡群の周辺一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	主な内容	主な文献
1	本郷上ノ台遺跡				○		○		○	古墳時代・平安時代の竪穴建物、近世の道	本報告書
2	本郷満行原遺跡		○		○	○	○	○	○	縄文時代前期・古墳時代の竪穴建物、古代の寺院建物・竪穴建物・円形有段遺構、古代から中世の道・墓壙、As-A復旧坑	本報告書
3	本郷広神遺跡						○	○		As-B下水田・畑、板碑	本報告書
4	本郷西谷津遺跡						○			As-B下水田	本報告書
5	本郷大カサ遺跡				○	○	○			７世紀の円墳、古墳時代から平安時代の竪穴建物・竪穴掘立柱併用建物か	本報告書
6	本郷鶴窪遺跡						○			平安時代の竪穴建物	本報告書
7	本郷萱原遺跡	○			○	○	○			暗色帯から剝片、古墳時代から平安時代の竪穴建物、古代の円形有段遺構・粘土採掘坑	本報告書
8	本郷鴫上遺跡						○			平安時代の竪穴建物・畑	本報告書
9	本郷鶴楽遺跡	○	○		○	○	○	○	○	As-YP下層の石器、縄文時代中期の竪穴建物、７世紀の円墳、古墳時代から平安時代の竪穴建物・掘立柱建物、中世の墓壙、As-A復旧坑	1
10	鴫上Ⅰ遺跡			○	○	○	○	○	○	弥生時代から平安時代の竪穴建物、中近世の掘立柱建物	2
11	茅畑遺跡				○		○	○	○	７世紀前半の円墳、平安時代の竪穴建物、中近世の溝	2
12	和田山天神前２遺跡				○					埴輪片	3
13	薬師遺跡						○	○	○	平安時代の竪穴建物、As-B下水田、中近世の掘立柱建物・墓壙	4
14	下芝内出畑遺跡					○	○	○	○	奈良時代・平安時代の竪穴建物・製鉄遺構・鍛冶遺構、中近世の溝	3
15	萬行遺跡							○	○	中世の溝、近世の畑	4
16	富岡竹ノ内・和田山寺久保遺跡				○			○	○	古墳時代の竪穴建物、終末期の古墳群、中近世の道	5
17	上里見井ノ下遺跡		○				○		○	縄文時代前・中期の土坑、平安時代の竪穴建物・炭窯、近世の屋敷	6
18	中里見原遺跡		○	○	○	○	○			縄文時代前・中期の包含層、弥生時代の再葬墓、３世紀の周溝墓、奈良時代・平安時代の竪穴建物、平安時代の基壇建物	6
19	中里見根岸遺跡		○				○			縄文時代晩期の包含層、平安時代の竪穴建物・鍛冶遺構、As-B下水田	6
20	中里見中川遺跡		○	○			○	○	○	縄文時代晩期の包含層、弥生時代前期の土器・石器、As-C下水田、平安時代の竪穴建物・鍛冶遺構、As-B下水田	6
21	神戸岩下遺跡				○		○			As-C下水田、As-B下水田	7
22	神戸宮山遺跡						○			平安時代の竪穴建物、灰釉陶器	7
23	三ッ子沢中遺跡	○	○	○	○		○		○	AT下層の石器群、縄文時代早期の土器、縄文時代前期から後期の竪穴建物、玉斧、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の竪穴建物、近世の墓壙	8
24	高浜向原遺跡		○		○		○			縄文時代前期の竪穴建物、As-C下水田、As-B下水田	7
25	高浜広神遺跡		○		○	○	○	○	○	縄文時代中・後期・古墳時代終末期から平安時代の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物群、As-B下水田、金銅製丸鞆、「第」焼印	9
26	白岩民部遺跡	○					○			As-BP下層のエンドスクレイパー、MP下層の石器群、As-B下水田	10
27	白岩浦久保遺跡		○		○		○			縄文時代早期の土器、縄文時代前期の土坑、古墳時代後期・平安時代の竪穴建物	10
28	白川笹塚遺跡		○		○	○	○		○	縄文時代前・中期の竪穴建物、古墳時代から平安時代の土坑群、７世紀の円墳、近世の墓壙	10
29	白川傘松遺跡	○	○	○						AT下層の石器群、縄文時代前・中期の竪穴建物、翡翠大珠、弥生時代の土坑	11
30	和田山天神前遺跡	○	○		○		○	○	○	AT下層の石器群、縄文時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物・古墳群、平安時代の竪穴建物、As-B下畑、中世の寺院、近世の屋敷	12
31	下芝上田屋遺跡					○	○			古代の畑・水田	13
32	下芝天神遺跡				○		○			古墳時代中期の竪穴建物・祭祀関連遺構、Hr-FA下畑、平安時代の竪穴建物、As-B下水田	13
33	下芝五反田遺跡				○	○	○	○		古墳時代中期の竪穴建物・畑、奈良時代・平安時代の竪穴建物、As-B下水田、「犬甘」銅印、八稜鏡、和同開珎	14、15
34	行力春名社遺跡				○	○	○	○	○	古墳時代中期の竪穴建物・滑石製品工房、奈良時代・平安時代の掘立柱建物、As-B下水田、中世の屋敷溝	16
35	浜川長町遺跡				○		○	○	○	古墳時代終末期の竪穴建物、Hr-FA下水田、Hr-FP下水田、As-B下水田、中近世の溝	17
36	浜川高田遺跡				○		○	○	○	Hr-FA下水田、Hr-FP下水田、As-B下水田、中世の館	17
37	浜川館遺跡				○		○		○	Hr-FA下水田、Hr-FP下水田、As-B下水田	17
38	餅井貝戸遺跡				○		○			As-C下水田、Hr-FA下水田、As-B下水田	18
39	御布呂遺跡				○		○	○		As-C下水田、Hr-FA下水田、Hr-FP下水田、As-B下水田、中世の建物	18
40	芦田貝戸遺跡				○		○			As-C下水田、Hr-FA下水田、Hr-FP下水田、As-B下水田、平安時代の竪穴建物	18
41	大和田遺跡		○	○						縄文時代中期・晩期・弥生時代前期の竪穴建物	81
42	中室田岩城遺跡		○	○						縄文時代早期の土器、縄文時代中期の竪穴建物、弥生時代前期の小型壺	19
43	又倉遺跡		○				○			縄文時代中期の竪穴建物、平安時代の竪穴建物・鍛冶遺構	81
44	弁天原遺跡		○							縄文時代前期の竪穴建物	81
45	中村遺跡		○		○		○			縄文時代前期・古墳時代後期・平安時代の竪穴建物	81
46	下室田宮谷戸遺跡			○						弥生時代中期の再葬墓	81
47	松山城(金毘羅山城)							△		16世紀	28
48	鷹留城							△		長野業尚、長野憲業、16世紀	28
49	武右衛門屋敷							△		長野氏、16世紀	28
50	根古谷遺跡		○							縄文時代前・中期の竪穴建物	81
51	岡谷戸遺跡		○							縄文時代前期から後期の竪穴建物	81
52	駒寄の砦							△		長野氏、16世紀	28
53	宮沢の内出							△		長野氏、清水貞義、16世紀	28
54	白岩の砦							△		長野氏、16世紀	28
55	富岡の砦							△		長野直業	28
56	和田山館							△		白川満勝	28
57	和田山古墳群				◇					終末期の古墳群	30
58	白川の砦							△			28
59	子安遺跡		○							縄文時代前期の竪穴建物	81
60	遠北陣城							△		武田勢、永禄年間	28
61	神戸の砦							△			28
62	高浜の砦(坂上城)							△		長野氏、鷺坂長信、永禄年間	28
63	伊勢殿山古墳				◇					７世紀の円墳、金銅製耳飾り	81
64	中尾根遺跡		○		○		○	○		縄文時代早期から前期・古墳時代後期・平安時代・中世の土器	81
65	日輪遺跡		○		○	○				縄文時代前・中期の竪穴建物、古墳時代後期から奈良時代の竪穴建物	31、81
66	高浜天狗原遺跡		○		○	○	○			縄文時代前・中期の竪穴建物、古墳時代後期から平安時代の竪穴建物	20
67	本郷奥原遺跡				○	○				素弁四弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、瓦塔	21、81
68	本郷奥原古墳群				◇					終末期を中心とする古墳群	21、81
69	七曲りの砦(日輪城)							△		16世紀	28

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	主な内容	主な文献
70	本郷的場古墳群				◇					後期から終末期の古墳群	22、81
	本郷稲荷塚古墳(的場Ｅ古墳)				◇					６世紀前半の帆立貝形古墳	22、81
	本郷大塚古墳				◇					４世紀前半の前方後円墳、内行花文鏡	81
71	道場遺跡						○			平安時代の竪穴建物、墨書土器	80、81
	道場Ⅱ遺跡			○	○		○			弥生時代後期の大型竪穴建物、古墳時代の居館跡、平安時代の竪穴建物	81
	道場Ⅲ遺跡				○		○			古墳時代・平安時代の竪穴建物	81
72	しどめ塚古墳				◇					７世紀前半の円墳、金銅製透彫飾金具、鉄地金銅装透彫花弁形杏葉	81
73	蔵屋敷遺跡			○	○		○			弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物、古墳時代の居館跡、韓式系土器、平安時代の区画溝・銅印	81
	蔵屋敷Ⅱ遺跡			○	○		○			弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物、５世紀後半から６世紀初頭の古墳、平安時代の竪穴建物	81
	小臼塚古墳				◇					７世紀後半の方墳か	81
74	供養塚遺跡				○		○			古墳時代中期・平安時代の竪穴建物	81
75	寺内遺跡			○	○		○			弥生時代後期・古墳時代の竪穴建物、石槨墓、韓式系土器、平安時代の竪穴建物	81
76	稲荷森遺跡			○	○		○			弥生時代後期・古墳時代の竪穴建物、中期末から後期初頭の石槨墓群、６世紀前半の方墳、平安時代の竪穴建物	81
77	御門城							△		長尾景忠	28
78	権現穢古墳				◇					５世紀頃の円墳か	81
79	麻干原遺跡				○		○			古墳時代の竪穴建物、韓式系土器、平安時代の竪穴建物	81
80	住吉城							△		清水文書、16世紀	28
81	上大島館							△		里見氏	28
82	小五郎の砦							△		里見小五郎	28
83	上大島御伊勢遺跡								○	近世の墓壙、As-A復旧坑	4
84	下里見天神前遺跡		○		○	○	○			縄文時代中期の竪穴建物、古墳時代前・後期から平安時代の竪穴建物、６世紀初頭の円墳、周堀内に置かれた埴輪群、As-B下水田	23
85	堂尾根２号墳				◇					７世紀末の円墳、金銅製耳飾り	81
86	下里見上ノ原・中原遺跡		○	○	○	○	○			縄文時代前期・弥生時代中・後期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代の竪穴建物	81
87	里見城							△		里見氏	28
88	中通遺跡		○				○			縄文時代晩期の包含層、As-B下畑	81
89	下里見諏訪山古墳				◇					６世紀前半の帆立貝形古墳	81
90	下里見宮谷戸遺跡			○	○		○			弥生時代中・後期の竪穴建物・礫床墓、古墳時代前・中期の竪穴建物、韓式系土器、鍛冶遺構・鉄製金床、平安時代の竪穴建物、As-B下畑	32、33、34、35
91	里見館							△		里見氏	28
92	赤城山古墳				◇					６世紀の円墳	81
93	雉郷城							△		里見氏	28
94	御嶽山の砦							△			28
95	秋間古窯跡群					○	○			７世紀から９世紀の窯跡群	88
96	吉ヶ谷津遺跡(安中市0201遺跡)				○		○	○	○	古墳時代後期の竪穴建物、７世紀の円墳、平安時代の土坑、中世の耕作痕、As-A下畑	24
97	沼田遺跡								○	As-A復旧坑群	25
98	めおと塚古墳				◇					７世紀の円墳、截石切組積両袖型石室	88
99	板鼻城(鷹巣城)							△		武田信玄か、16世紀	28
100	若田原遺跡		○							縄文時代前期から後期の竪穴建物	77
101	峯林古墳				◇					7世紀後半の円墳	77
	楢ノ木塚古墳				◇					６世紀前半の円墳	77
	若田大塚古墳				◇					６世紀初頭の円墳、鉄矛、横矧板鋲留短甲	77
102	若田屋敷裏遺跡		○		○	○	○			縄文時代・古墳時代から平安時代の竪穴建物・掘立柱建物	36、78
103	若田坂上遺跡		○	○	○	○	○	○	○	縄文時代中期の竪穴建物、弥生時代後期の竪穴建物・礫床墓・鉄釧・人形土器、古墳時代前期から平安時代の竪穴建物、６世紀から７世紀の円墳、中世の畑、近世の石積遺構・As-A復旧坑	37、38
	若田金堀塚遺跡				◇				○	７世紀後半の円墳、近世の道	39
104	剣崎長瀞西遺跡		○	○	○	○				縄文時代草創期の土器・石器、弥生時代後期から奈良時代の竪穴建物、中期・終末期の古墳群、金製垂飾付耳飾、韓式系土器	40、41、77、89
	剣崎長瀞西古墳				◇					５世紀後半の円墳、三角板革綴短甲、捩文鏡	40、77
105	大島原遺跡		○		○					縄文時代草創期の槍先形尖頭器、縄文時代中期・古墳時代中期の竪穴建物、終末期の古墳群	77
106	八幡中原遺跡	○	○		○	○	○			旧石器時代から縄文時代草創期の石器、古墳時代の竪穴建物・末焼成の高坏・韓式系土器、奈良時代・平安時代の竪穴建物・掘立柱建物・礎石建物・基壇状遺構・円形有段遺構、円面硯	42、43、44、45、78
107	七五三引遺跡				○	○	○			古墳時代中・後期の竪穴建物、古代の土壇状遺構	46、78
108	観音塚古墳				◇					6世紀末の前方後円墳、銅承台付蓋鋺、金銅製心葉形透彫杏葉、銀装鶏冠頭大刀など	47、77
109	平塚古墳				◇					5世紀後半の前方後円墳	77
110	八幡遺跡		○	○	○	○	○			縄文時代草創期の有舌尖頭器、弥生時代後期から平安時代の竪穴建物、４世紀の周溝墓、韓式系土器、後期から終末期の古墳群	48、77、78
	八幡二子塚古墳				◇					6世紀前半の前方後円墳	49、77
111	四ノ市遺跡			○	○	○				弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物、奈良時代の鍛冶遺構	77
	八幡六枚遺跡			○	○	○	○			弥生時代後期から平安時代の竪穴建物、「片罡郡」刻書土器	50、79
112	八幡館							△			28
113	剣崎稲荷塚遺跡		○	○	○	○	○	○	○	縄文時代前期から後期・弥生時代後期・古墳時代中期・奈良時代・平安時代の竪穴建物、小金銅像、中近世の掘立柱建物	51、52、53、54、55、78
114	剣崎天神山古墳				◇					５世紀前半の円墳か、琴柱形石製品、石製模造品など	77
115	引間遺跡			○	○	○	○			弥生時代後期から古墳時代の竪穴建物、方形周溝墓、終末期の古墳群、奈良時代・平安時代の竪穴建物、和同開珎	56、78
116	上並榎稲荷山古墳				◇					５世紀後半の前方後円墳	77
117	筑縄小星山古墳				◇					６世紀後半の円墳、金銅製耳環	77
118	八木屋敷							△		八木氏	28
119	上小塙稲荷山古墳				◇					６世紀中葉の円墳か	77
120	菊地遺跡群(Ⅰ)						○			As-B下水田	57
121	菊地遺跡群(Ⅱ)						○			As-B下水田	58
122	当貝戸・棗原遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田・畑	59、78
123	上野前(Ⅰ)・大明神(Ⅰ)遺跡						○	○		As-B下水田、平安時代または中世の掘立柱建物	60

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	主な内容	主な文献
124	上野前(Ⅱ)・大明神(Ⅱ)・五反田(Ⅰ)遺跡						○			As-B下水田	61
125	石神・五反田(Ⅱ)遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田	62
126	北新波遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田	63
127	北新波の砦							△		新波新左衛門、16世紀	28
128	北爪の砦(北城)							△		北爪土佐(周防)、16世紀	28
129	寺ノ内遺跡						○	○		平安時代の掘立柱建物、As-B下水田、中世の館	64
130	矢島遺跡							○		中世の館	65
131	長町屋敷							△			28
132	井野屋敷							△		井野氏、16世紀	28
133	水口替戸・石田遺跡						○			As-B下水田	66
134	中屋敷(Ⅰ)・舞台(Ⅲ)遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田	67、78
135	中屋敷西(Ⅰ)・殿田・清水(Ⅰ)・舞台(Ⅰ)遺跡						○		○	平安時代の竪穴建物、As-B下水田、近世の墓壙	68、78
136	江原(Ⅰ)・中屋敷西(Ⅱ)・上屋敷(Ⅰ)遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田	69
137	六反田・中屋敷(Ⅱ)遺跡						○			As-B下水田	70
138	一丁田・榛名社西遺跡						○			As-B下水田	71
139	舞台(Ⅱ)・清水(Ⅱ)遺跡						○			平安時代の竪穴建物、As-B下水田	72、78
140	下芝・原遺跡						○		○	As-B下水田、近世の土坑	87
141	青柳屋敷							△		青柳治部	28
142	下芝の砦							△			28
143	下芝谷ツ古墳				◇					５世紀後半の方墳、金銅製飾履、三環鈴	82
144	下芝萬行遺跡				○		○			古墳時代の畠、平安時代の竪穴建物	73
145	上芝・西金沢遺跡						○			As-B下水田	74
146	三ツ寺Ⅰ遺跡			○	○					弥生時代後期の溝、As-C下畠、古墳時代中期の竪穴建物・環濠居館	26、82、86
147	保渡田古墳群				◇					５世紀後半から６世紀初頭の大規模前方後円墳群	75、82、83、84、86
148	上芝古墳				◇					６世紀中葉の帆立貝形古墳	29、82
149	下田屋敷(上芝の砦)							△		下田政勝	28
150	箕輪城							△		長野氏、内藤昌豊、内藤昌明、北条氏邦、滝川一益、井伊直政、16・17世紀	27、28、76
151	推定東山道駅路(国府ルート)						○				79、85

文献

1 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2023『本郷鶴楽遺跡』
2 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『茅畑遺跡・鴫上Ⅰ遺跡』
3 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2019『下芝内出畑遺跡・和田山天神前２遺跡』
4 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022『上大島御伊勢遺跡・薬師遺跡・萬行遺跡』
5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『富岡竹ノ内・和 田山寺久保遺跡』
6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『中里見遺跡群』
7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『高浜向原遺跡・神戸宮山・神戸岩下』
8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『三ッ子沢中遺跡』
9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『高浜広神遺跡』
10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『白川笹塚遺跡・白岩浦久保遺跡・白岩民部遺跡』
11 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『白川傘松遺跡』
12 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『和田山天神前遺跡』
13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下芝天神遺跡・下芝上田屋遺跡』
14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下芝五反田遺跡ー古墳時代編ー』
15 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『下芝五反田遺跡ー奈良平安時代以降編ー』
16 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『行力春名社遺跡』
17 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『浜川遺跡群』
18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・餅井貝戸遺跡・西下井出遺跡』
19 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2019『中室田岩城遺跡』
20 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2021『高浜天狗原遺跡』
21 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983『奥原古墳群』
22 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『本郷的場古墳群』
23 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022『下里見天神前遺跡』
24 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2021『吉ヶ谷津遺跡(安中市0201遺跡)』
25 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2019『大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡』
26 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『三ツ寺Ⅰ遺跡』
27 群馬県教育委員会1982『箕輪城跡』
28 群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
29 群馬県史編さん委員会1990『群馬県史　通史編1』
30 高崎市教育委員会2008『和田山古墳群』
31 高崎市教育委員会2016『高浜日輪遺跡』
32 高崎市教育委員会2013『下里見宮谷戸遺跡第一次』
33 高崎市教育委員会2014『下里見宮谷戸遺跡２』
34 高崎市教育委員会2014『下里見宮谷戸遺跡３』
35 高崎市教育委員会2019『下里見宮谷戸遺跡４』
36 高崎市教育委員会1998『若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡』
37 高崎市教育委員会2021『若田坂上遺跡』
38 高崎市教育委員会2018『若田坂上遺跡２』
39 高崎市教育委員会2017『若田金堀塚遺跡』
40 高崎市教育委員会2001『剣崎長瀞西遺跡Ⅰ』
41 高崎市教育委員会2004『剣崎長瀞西遺跡Ⅱ』
42 高崎市教育委員会1982『八幡中原遺跡』
43 高崎市教育委員会2011『八幡中原遺跡３』
44 高崎市教育委員会2013『八幡中原遺跡４』
45 高崎市教育委員会2014『八幡中原遺跡５』
46 高崎市教育委員会1984『七五三引遺跡』
47 高崎市教育委員会1992『観音塚古墳調査報告書』
48 高崎市教育委員会1989『八幡遺跡』
49 高崎市教育委員会1998『八幡二子塚古墳』
50 高崎市教育委員会2010『八幡・六枚遺跡２』
51 高崎市教育委員会1998『剣崎稲荷塚遺跡』
52 高崎市教育委員会2009『剣崎稲荷塚遺跡２』
53 高崎市教育委員会2012『剣崎稲荷塚遺跡３』
54 高崎市教育委員会2016『剣崎稲荷塚遺跡４』
55 高崎市教育委員会2016『剣崎稲荷塚遺跡５』
56 高崎市教育委員会1979『引間遺跡』
57 高崎市教育委員会1981『菊地遺跡群(Ⅰ)』
58 高崎市教育委員会1982『菊地遺跡群(Ⅱ)』
59 高崎市教育委員会1983『菊地遺跡群(Ⅲ)当貝戸・棗原遺跡』
60 高崎市教育委員会1984『菊地遺跡群(Ⅳ)　上野前(Ⅰ)・大明神(Ⅰ)遺跡』
61 高崎市教育委員会1985『菊地遺跡群(Ⅴ)　上野前(Ⅱ)・大明神(Ⅱ)・五反田(Ⅰ)遺跡』
62 高崎市教育委員会1986『菊地遺跡群(Ⅵ)　石神・五反田(Ⅱ)遺跡』
63 高崎市教育委員会1982『北新波遺跡』
64 高崎市教育委員会1979『寺ノ内遺跡』
65 高崎市教育委員会1979『矢島・御布呂遺跡』
66 高崎市教育委員会1987『長野北部遺跡群　水口替戸・石田遺跡』
67 高崎市教育委員会1985『長野北部遺跡群　中屋敷(Ⅰ)・舞台(Ⅲ)遺跡』
68 高崎市教育委員会1983『長野北部遺跡群　中屋敷西(Ⅰ)・殿田・清水(Ⅰ)・舞台(Ⅰ)遺跡』
69 高崎市教育委員会1984『長野北部遺跡群　江原(Ⅰ)・中屋敷西(Ⅱ)・上屋敷(Ⅰ)遺跡』
70 高崎市教育委員会1986『長野北部遺跡群　六反田・中屋敷(Ⅱ)遺跡』
71 高崎市教育委員会1988『長野北部遺跡群　一丁田・榛名社西遺跡』
72 高崎市教育委員会1984『舞台(Ⅱ)・清水(Ⅱ)遺跡』
73 高崎市教育委員会2008『下芝五反田遺跡・下芝萬行遺跡』
74 高崎市教育委員会2009『上芝・西金沢遺跡』
75 高崎市教育委員会2009『井出二子山古墳』
76 高崎市教育委員会2008「史跡箕輪城跡Ⅷ」
77 高崎市市史編さん委員会1999『高崎市史　資料編１』
78 高崎市市史編さん委員会2000『高崎市史　資料編２』
79 高崎市市史編さん委員会2003『高崎市史　通史編１』
80 榛名町教育委員会1986『道場遺跡』
81 榛名町誌編さん委員会2010『榛名町誌　資料編１原始・古代』
82 榛名町誌編さん委員会2011『榛名町誌　通史編上巻原始古代・中世』
83 群馬町教育委員会1990『保渡田Ⅶ遺跡』
84 群馬町教育委員会2000『保渡田八幡塚古墳』
85 群馬町教育委員会1987『推定東山道』
86 群馬町誌編纂委員会1998『群馬町誌　資料編１』
87 箕郷町教育委員会1983『下芝・原遺跡』
88 安中市市史刊行委員会2001『安中市史　第四巻　原始古代中世資料編』
89 専修大学文学部考古学研究室2003『剣崎長瀞西５・27・35号墳』

状ブロック群」に相当するものと考えられる。

和田山天神前遺跡では、AT下の暗色帯中から、ナイフ形石器、エンドスクレイパーなどを含む21点の石器が、大きく２つの地点から集中して出土した。また、21点のうち20点が黒曜石製であったが、これらの黒曜石は、夾雑物が少なく良質であることから長野県産の可能性が高いと考えられる。

これらの遺跡から出土した旧石器のうち、白岩民部遺跡のエンドスクレイパーは群馬県編年第Ⅱ期、その他の石器はいずれも群馬県編年第Ⅰ期に属するものである(小菅2004)。

また、本郷遺跡群の発掘調査においても、十文字台地の末端部付近に立地する本郷萱原遺跡(７)で、暗色帯相当層中から黒色安山岩の剝片１点が、本郷台地に立地する本郷鶴楽遺跡(９)で、浅間板鼻黄色テフラ(As-YP)下層から敲石など４点が出土している。

第２項　縄文時代

旧榛名町域における縄文時代の遺跡は、おおむね榛名山体に源を発し南流する榛名川、滑川、駒寄川、谷津川、頭無川、高浜川、見立川、小堀川などの中小河川に沿った台地上に立地している。本地域内全域に本確的な発掘調査が及んでいるわけではないものの、縄文時代の遺跡は前期から中期に偏る傾向が認められる。

１．草創期

旧榛名町域における縄文時代草創期の遺物出土例としては、本郷遺跡群から北約１㎞の十文字台地に立地する白岩大門下遺跡(高崎市白岩町)から爪形文土器片が１点出土しているのみである。

ただし、本地域の南側に隣接する八幡台地には、剣崎長瀞西遺跡(104)、大島原遺跡(105)、八幡中原遺跡(106)、八幡遺跡(110)など草創期の遺跡が点在する。このうち剣崎長瀞西遺跡からは爪形文土器や押圧縄文土器などの土器片と有舌尖頭器などの石器がまとまって出土している。大島原遺跡からは槍先形尖頭器が１点、八幡中原遺跡からは有舌尖頭器をはじめとする石器が数点、八幡遺跡からは有舌尖頭器が１点出土している。なお、これら八幡台地上の遺跡からも、当該期の遺構は検出されていない。

２．早期

これまでに確認された旧榛名町域における縄文時代早期の遺跡は約30と少なく、中室田岩城遺跡(42)の出土例を除いて、遺物はすべて遺構外からの出土である。いずれも集落の存在を示唆する事例とはいえない。

発掘調査により早期の土器が出土した遺跡としては、火山麓扇状地に立地する中室田岩城遺跡のほか、十文字台地に立地する中尾根遺跡(64)、三ツ子沢中遺跡(23)、白岩浦久保遺跡(27)などが挙げられる。

中室田岩城遺跡では、10号土坑内から早期中葉から後半の沈線文系土器、条痕文系土器などが出土している。また、三ツ子沢中遺跡からは早期前半の撚糸文系土器が、中尾根遺跡からは早期前半の撚糸文系土器や押型文系土器、早期中葉の沈線文系土器が、白岩浦久保遺跡からは早期後半の条痕文系土器が、それぞれ出土している。

３．前期

縄文時代早期から前期前半は、気候の温暖化がみられた時期に当たる。この気候変動によって、それまでの移動性の高い居住形態から、より定住性を指向した居住形態へと変化したと考えられている。前期中葉以降、群馬県内でも遺跡数が急増し、榛名山南麓にも小規模な集落が点在するようになる。旧榛名町域では100を超える当該期の遺跡が調査されている。

室田台地の末端部に立地する中村遺跡(45)では、竪穴建物３棟が検出された。これらの建物からは、前期中葉の羽状縄文系土器が多数出土し、当該期の良好な資料が得られた。また、三ツ子沢中遺跡(23)のほか、同じ十文字台地に立地する高浜向原遺跡(24)、子安遺跡(59)、日輪遺跡(65)などでも前期中葉の集落が調査されている。

前期後半の集落は、火山麓扇状地に立地する根古屋遺跡(50)や室田台地の末端部に立地する弁天原遺跡(44)などから検出されている。とくに弁天原遺跡で検出された８Ｔ－１号竪穴建物は、軸長約４ｍ程度と小型ながら残存状態が良く、諸磯ｂ式土器11個体が出土した。また、白岩浦久保遺跡(27)で調査された土坑からは、諸磯ｂ式土器の良好な一括資料が出土している。さらに、遺構外ながら同時期の所産と考えられる玦状耳飾りも１点出土している。

本郷遺跡群の発掘調査においては、本郷満行原遺跡

（２）から前期中葉の黒浜・有尾式期の竪穴建物４棟、土坑19基、前期後半の諸磯ａ式期の土坑１基が検出された。このうち317号・318号竪穴建物の２棟については残存状況が良好で、かつ多量の遺物が出土したことから、本地域における前期中葉の様相を知るうえで貴重な資料となった。

旧榛名町域では、現在までのところ中野谷松原遺跡（安中市中野谷）や糸井宮前遺跡（利根郡昭和村）のような当該期の拠点的な大集落は発見されてはいない。しかし、尾根上の小規模集落が群在する状況のなかで、近隣の広い台地上には、ある程度の規模を保った集落が存在していた可能性が考えられる。

４．中期

縄文時代中期は、東日本各地に大型環状集落が営まれ、群馬県内でも三原田遺跡（渋川市赤城町）など縄文時代を代表する遺跡が数多く知られている。旧榛名町域でも前期同様100を超える当該期の遺跡が調査されている。

本地域における中期前半から中葉の代表的な集落遺跡としては、十文字台地に立地する岡谷戸遺跡（51）と火山麓扇状地に立地する大和田遺跡（41）が挙げられる。両遺跡とも中期初頭から中葉末の土器が豊富に出土しており、大型の環状集落遺跡ではないものの、山麓斜面上に弧状を呈するように竪穴建物が営まれており、中期環状集落に先駆けた段階の集落と考えられる。

岡谷戸遺跡は、馬の背状の狭い台地上に立地し、斜面に展開する縄文時代中期集落の例として稀有な存在である。４棟の竪穴建物は斜面の南寄りから、貯蔵穴や墓壙など33基の土坑は斜面の北寄りからそれぞれ検出され、竪穴建物群と土坑群の占地が明確に分別されていた。出土した土器の多くは中期前半の阿玉台式土器であった。

一方、大和田遺跡は中期中葉の集落で、検出された竪穴建物１棟と土坑31基は、岡谷戸遺跡と同様、斜面に立地しているが、岡谷戸遺跡のように竪穴建物と土坑群との明瞭な占地区分は見出し難い。また、南関東の土器と北関東西部の土器が、同一の土坑内から出土するという異系統土器の共伴例がみられた。

中期後半の遺跡としては、十文字台地に立地する三ツ子沢中遺跡（23）、高浜広神遺跡（25）、白川笹塚遺跡（28）、白川傘松遺跡（29）、室田台地に立地する又倉遺跡（43）などが挙げられる。

白川傘松遺跡では、東に向かって緩やかに傾斜する舌状台地の先端部で、加曽利Ｅ式期を中心とする竪穴建物67棟が検出されている。これらの建物群は、中央に広場状の空間を挟み、東西に偏って集まることから、環状集落であった可能性が高い。また、55号土坑内からは、長さ7.0㎝、重さ110ｇの翡翠製の大珠が出土しており、この集落は本地域の拠点的集落であったと考えられる。

三ツ子沢中遺跡でも、中期後葉以降の遺構配置から、環状を意識した集落の構造が見て取れる。また、75号土坑からは蛇紋岩製の玉斧が出土しているが、これは墓に供えられた副葬品、または遺体を飾った装飾品の可能性が高いと考えられる。

中期後葉の群馬県内には他地域に先駆けて柄鏡形敷石建物が作られたが、白川傘松遺跡、三ツ子沢中遺跡、高浜広神遺跡などにおいても、加曽利Ｅ４式期の柄鏡形敷石建物が検出されている。また、本郷遺跡群の発掘調査においては、本郷鶴楽遺跡（９）から加曽利Ｅ３～４式期の竪穴建物11棟が検出されたが、このうちの２棟が加曽利Ｅ４式期の柄鏡形敷石建物であった。このことから、本地域における柄鏡形敷石建物は、白川傘松遺跡、三ツ子沢中遺跡、高浜広神遺跡など十文字台地に立地する集落だけでなく、同時期に存在した本郷台地の集落にも導入されたことが明らかになった。

５．後・晩期

縄文時代後・晩期は、気候の冷涼化に伴い縄文人が生活した落葉広葉樹の森が徐々に衰退していったと考えられている。そのため旧榛名町域で調査された遺跡数も、前・中期に比べ減少する傾向にあり、後期で約50、晩期ではさらに６と減少する。集落の規模は小さくなり、それまでの集中型から集落間の距離を置いた分散型の集落形態に変化していった。

本地域における後期の遺跡としては、三ツ子沢中遺跡（23）や高浜広神遺跡（25）が挙げられる。両遺跡からは、後期初頭の称名寺式期の柄鏡形敷石建物が検出されている。本地域では、後続する堀之内式土器や加曽利Ｂ式土器の出土例は少なく、安行１・２式期など後期後葉段階になると土器の出土例はさらに少なくなる。

晩期の遺跡としては、大和田遺跡（41）のほか、烏川右

岸の下位段丘面に立地する中通遺跡(88)、下位段丘面から低地にかけて立地する中里見根岸遺跡(19)、中里見中川遺跡(20)が挙げられる。ただし、中通遺跡においては安行３式など晩期前半の土器片が、大和田遺跡、中里見根岸遺跡、中里見中川遺跡においては、千網式や氷式など晩期終末の土器片が散見される程度である。しかし、中里見根岸遺跡や中里見中川遺跡の事例は、縄文時代晩期終末から地域集団が低地に進出していったことを如実に示している。

第３項　弥生時代

旧榛名町域における弥生時代前･中期の様相は、遺構･遺物の検出例とも乏しいことから､あまり明瞭ではない。一方、弥生時代後期になると遺跡数が増加する傾向がみられ、とくに旧久留馬村域を中心とする本地域の南東部においてその傾向が顕著である。

１．前期

烏川右岸の下位段丘面から低地にかけて立地する中里見中川遺跡(20)からは、沖式土器片や石鏃とともに、湿地に残った人の足跡が検出されている。このことは、弥生時代前期に水田耕作が行われていた可能性を示唆している。また、３世紀末の浅間山の噴火によって降下した浅間Ｃテフラ(As-C)下からは、明瞭な畦畔を有する水田の遺構が検出されている。

烏川左岸の火山麓扇状地に立地する大和田遺跡(41)からは炉を中心として、ピットが円形に廻る状態で検出され、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての土器片が僅かに出土している。縄文時代晩期末から弥生時代前期の掘り込みが浅い竪穴建物か、平地建物である可能性が指摘されている。

２．中期

烏川右岸の里見台地に立地する中里見原遺跡(18)や、烏川左岸の室田台地下の下位段丘面に立地する下室田宮谷戸遺跡(46)では､中期中葉の再葬墓が検出されている。

里見台地に立地する下里見上ノ原・中原遺跡(86)では、町道建設で掘削された崖面から中期中葉の土器を含む竪穴状の掘り込みが検出された。一部に床面らしき硬化面が見られたことから、この掘り込みは竪穴建物であった可能性が指摘されている。

このような中期前半から中葉の再葬墓や竪穴建物らしき痕跡は、いずれも烏川を臨む台地の縁辺部付近に位置している。このことから、当該期の人々は台地上に生活拠点を置きながら、台地下の低地を開発し、崖面からの湧水を利用して水田耕作を営んでいたものと考えられる。

中期後半の様相についても、これまでは資料が下室田宮谷戸遺跡から出土した栗林式の壺や、中里見中川遺跡(20)の低地の溝から出土した遺物などに限られていたことから、不明な点が多かった。しかし、近年、下里見宮谷戸遺跡(90)の発掘調査により､栗林式期の竪穴建物と、それらと同時期の可能性が考えられる再葬墓や礫床墓が検出されるなど、当該期の集落の存在が明らかになってきている。

３．後期

これまでに旧榛名町域において発掘調査された弥生時代後期の遺跡は、烏川左岸の旧久留馬村域に集中する傾向がみられる。烏川左岸の本郷台地下にわずかに形成された下位段丘面に立地する稲荷森遺跡(76)や、本郷台地の北東斜面に展開する蔵屋敷遺跡・蔵屋敷Ⅱ遺跡(73)などでは、大型の長方形竪穴建物を中心とする集落が検出されている。また、蔵屋敷遺跡に隣接する道場Ⅱ遺跡(71)で検出された９号竪穴建物は、平面規模が13.8m×8.2mと旧榛名町域における弥生時代最大の竪穴建物である。

一方、烏川右岸では近年、下里見宮谷戸遺跡(90)において、樽式土器を伴う竪穴建物と、それらと同時期のものと考えられる礫床墓群が検出されるなど、集落の存在が明らかになっている。

また、本地域の南側に隣接する八幡台地においても、剣崎長瀞西遺跡(104)､八幡遺跡(110)､四ノ市遺跡(111)、剣崎稲荷塚遺跡(113)、引間遺跡(115)などの集落遺跡が調査されている。これら八幡台地上に拡がる集落は、当該期の樽式土器文化圏における拠点的集落の一つと考えられ､古墳時代へと継続していくことが確認されている。

第４項　古墳時代

旧榛名町域における古墳の分布は、本郷遺跡群が所在する烏川左岸の旧久留馬村域と、烏川右岸の旧里見村域

に集中している。昭和10(1935)年に行われた群馬県下一斉古墳所在調査の結果をまとめた『上毛古墳綜覧』では、旧久留馬村域で39基、旧里見村域では60基の古墳が登録されている。平成22(2010)年に刊行された『榛名町誌資料編１原始古代』では、現存する古墳を新たに約40基確認することができたとしている。

１．前期

古墳時代前期になると、群馬県の平野部では外来系開拓者集団によってもたらされた土木技術によって、沖積平野の開発が進められていった。高崎市域においても、弥生時代後期の遺跡がほとんど認められない井野川下流域で集落が営まれるようになり、元島名将軍塚古墳(高崎市元島名町)のような大規模な前方後方墳が築かれていく。

一方、旧榛名町域では、弥生時代後期の樽式土器の伝統を受け継ぐ在地系の土器が４世紀まで使用されており、旧来の弥生系文化が濃厚に残存していたことが知られている。

しかし、本郷台地下の下位段丘面に立地する稲荷森遺跡(76)で検出された５Ａ号竪穴建物の貯蔵穴からは、在地系の台付甕とともに、東海東部地域からの搬入品と考えられる赤色塗彩された複合口縁壺が出土している。さらに、同建物内からは、北陸地方の特徴を示す複合口縁壺も出土しており、このことから本竪穴建物の住人は、在地社会に迎え入れられた外来系の人々、あるいは彼らと接点があって新来の文化を受け入れた人々であったと考えられる。

また、烏川右岸に立地する中里見原遺跡(18)では、里見台地の縁辺部から一辺約24mの方形周溝墓である中里見原１号古墳が検出されている。後世の削平により埋葬施設は存在しなかったが、周溝内からは稲荷森遺跡５Ａ号竪穴建物出土の壺と同形の赤色塗彩された複合口縁壺など、北陸系をはじめ多様な系譜の葬送用の土器が出土している。３世紀末に降下した浅間Ｃテフラ(As-C)が、周溝埋没土の下半に10～15cmの層厚で堆積していたことから、古墳時代初頭の所産と考えられる。これは弥生時代の周溝墓が未検出の旧榛名町域において最も古い周溝墓であり、本地域を支配し新しい墓制を受容した小首長の墓であると考えられる。

前方後方墳や前方後方形周溝墓の存在が認められない旧榛名町域だが、やがて榛名白川流域に広がる広大な平野を眺望する本郷台地上に本郷大塚古墳(70)が築かれる。久留馬村第13号墳として『上毛古墳綜覧』に登録された本郷大塚古墳は、直下にAs-C層が残存しており、４世紀前半に築造された古墳であると考えられる。本地域における最初の高塚古墳である。平成16(2004)年度の墳丘確認調査により、全長約73.0m、前方部幅約32.7m、括れ部幅約21.4mの墳丘プランを有する前方後円墳であることが明らかになった。埋葬施設は長さ約4.9m、最大幅約3.3m、深さ約0.5～0.8mの規模を呈する川原石積みの竪穴式石室である。墳丘の特徴や埋葬施設の構造、副葬品の特徴から、前方後円墳としては古いタイプに属すると考えられる。このような古式前方後円墳は、北陸地方において地域の中核墳として出現したものの中に認められることから、本古墳の築造技術は北陸ルートで伝播したと推定できる。昭和45(1970)年度に実施された発掘調査では、石室内から「位至三公」銘内行花文鏡１面と管玉２点、ガラス製小玉多数が出土している。本地域の村落社会が発展的に変容するなかで共立された大首長の墳墓であると考えられる。貴重な中国鏡が被葬者の手に渡ったのも、本古墳被葬者の政治的な位置を示すものといえる。

当該期の水田遺構としては、烏川右岸の下位段丘面から低地にかけて立地する中里見中川遺跡(20)や烏川左岸の低地に立地する神戸岩下遺跡(21) などで、As-Cによって埋没した水田が検出されている。また、十文字台地を開析する高浜川によって形成された高浜向原遺跡(24)の谷地部からも、同様のAs-C下水田が検出されている。これらの場所では、遅くとも古墳時代前期までには水田耕作が営まれていたことが明らかになった。

また、本郷遺跡群から東へ４～５㎞ほど離れるが、北陸新幹線の建設に伴い群埋文が発掘調査した餅井貝戸遺跡(38)、御布呂遺跡(39)、芦田貝戸遺跡(40)など、井野川流域の低地に立地する遺跡からもAs-C下水田が広く検出されている。

２．中期

旧榛名町域では、本郷大塚古墳(70)の成立後の４世紀後半から５世紀前半にかけて、集落遺跡が不明瞭となる。

この時期、高崎市南部の倉賀野・佐野地域一帯には、当時としては東日本最大の浅間山古墳(高崎市倉賀野町)をはじめとする多くの古墳が集中し、西毛の地域力がこの一帯の開発に集中された形跡が認められる。こうした新たな地域形成に伴って在来集団が再編成され、新開地の経営に振り向けられた可能性は否定できない。

本地域で再び集落が増加するのは、５世紀後半である。本郷台地に立地する道場Ⅱ遺跡・道場Ⅲ遺跡(71)、蔵屋敷遺跡・蔵屋敷Ⅱ遺跡(73)、供養塚遺跡(74)、麻干原遺跡(79)や、下位段丘面に立地する寺内遺跡(75)などでは、検出された竪穴建物の多くが５世紀後半代に属しており、爆発的増加という言葉がふさわしい。こうした現象は榛名山南東麓で広くみられ、幅30mを超す環濠をもつ豪族居館である三ツ寺Ⅰ遺跡(146)や北谷遺跡(高崎市冷水町・引間町)が山麓部に出現するのと軌を一にして、周辺に保渡田古墳群(147)や大集落が出現するのである。これは、山麓水源地を掌握して、広域農業水利体系を構築しようとした豪族の経営戦略であると考えられる。旧榛名町域における集落の動向も、こうした社会動態と連動している可能性が高いと考えられるのである。

稲荷森遺跡(76)からは、小石槨墓群が検出されている。これらの墓の上部は失われているが、周囲に散在した川原石の多さからみて、小規模な積石塚であった可能性が高いと考えられる。埋葬施設の竪穴式小石槨は、いずれも浅い穴状の掘り込みに扁平な川原石を立て並べて構築されている。これらの小石槨墓群は、旧久留馬村域に居住した渡来系の人々の墓と考えられる。また、蔵屋敷遺跡、麻干原遺跡、寺内遺跡などからは韓式系土器が出土している。烏川右岸においても、鉄製の金床や韓式系土器が出土した下里見宮谷戸遺跡(90)、多くの渡来系遺物とともに積石塚群が検出された剣崎長瀞西遺跡(104)などが所在しており、烏川を挟んだ両岸に渡来系氏族が集住していた様子が窺える。

本郷台地に立地する本郷奥原古墳群(68)のうち、奥原21号墳は５世紀後半から６世紀初頭頃の円筒埴輪が樹立された墳丘径12.8mの円墳である。７世紀代に造営された横穴式石室墳を主体とする本古墳群の中にあって、本古墳は竪穴式石室墳である。墳丘の周囲にはＵ字形断面の周溝が巡り、墳丘には葺石が張られている。円筒埴輪列は、下段墳丘の上縁に巡らされていた。これらの埴輪は、新たに朝鮮半島からもたらされた技術である窯で焼成されたものである。このことは、本地域が保渡田古墳群(147)の豪族を頂点とする支配機構の末端を担っていた可能性を示している。

本郷遺跡群から北東約３㎞には、６世紀初頭の榛名山噴火に伴う泥流(Hr-FA泥流)によって埋没した方墳である下芝谷ツ古墳(143)が所在する。二段に築かれた積石塚で、石室内からは金銅製飾履など朝鮮半島からの影響が強く認められる副葬品が出土している。この被葬者は、保渡田古墳群の豪族の配下にあって主要な地位を得て活躍した渡来系氏族のリーダーであったと推測できる。

本郷台地の末端部に位置する蔵屋敷遺跡からは、北辺長約88m・南辺長約110m・西辺長約111mの規模をもつ５世紀後半から６世紀初頭の居館が検出されている。しかし、ここでは三ツ寺Ⅰ遺跡や北谷遺跡の豪族居館にみられるような防御的機能や権威的機能は見て取れない。このことから保渡田古墳群を造営した豪族の配下にあって、榛名山南麓の丘陵地域を支配した在地首長の居館とみられる。この居館の南西隅部には後にしどめ塚古墳(72)が構築されており、７世紀前半には居館としての意義は失われていたと考えられる。

３．後期・終末期

保渡田古墳群(147)が造営された後、榛名山南東麓からは大規模前方後円墳は姿を消している。その原因としては、６世紀初頭と中葉の２度にわたる榛名山の噴火や、それに伴う大規模な災害の発生による山麓一帯の荒廃が考えられる。

旧榛名町域においても、古墳時代後期の拠点的な集落は発見されていない。蔵屋敷遺跡(73)など旧久留馬村域の遺跡群でも、６世紀代になると竪穴建物数は減少傾向にある。一方、古墳造営の風習は村落社会の家族層にも広まり、旧久留馬村域や旧里見村域には帆立貝形古墳を中核とする古墳群が形成されていった。

本郷台地に立地する本郷稲荷塚古墳(70)は、『上毛古墳綜覧』に久留馬村第18号墳として登録された６世紀前半の帆立貝形古墳である。昭和44(1969)年度に行われた群馬用水土地改良事業に伴う発掘調査時には、的場Ｅ号墳として調査されている。全長は上段墳丘で33.0m、下段墳丘で38.0m、二段築成の墳丘をもち、径約29.0mの

下段墳丘を幅6.2mの周溝を掘って劃出し、西側を掘り残して撥状に張り出した造り出し部としている。造り出し部の基部からは、人物埴輪片や馬形埴輪片などが出土している。埋葬施設は全長5.5m、奥壁幅1.15m、川原石積みの袖無型横穴式石室で、副葬品はほとんど失われていたが、鉄製小刀片、管玉、須恵器片などがごく少量出土した。

本郷稲荷塚古墳とほぼ同時期に築造されたとみられる里見台地に立地する下里見諏訪山古墳(89)は、『上毛古墳綜覧』に里見村第41号墳として登録され、存在は早くから知られていた。『榛名町誌』編さんに伴って実施された調査により、全長14m、墳丘径11m、西側に幅10m、奥行き３mの短冊形の張り出し部が取り付く帆立貝形古墳であることがわかった。埋葬施設は全長5.88m、奥壁幅1.07m、羨道入口幅0.68m、乱石積みの傾向を示す袖無型横穴式石室である。撥状の張り出し部からは円筒埴輪、馬形埴輪、人物埴輪で構成される埴輪群像が出土した。本古墳と同様に、帆立貝形古墳の造り出し部に埴輪群像を配置した事例としては、旧箕郷町域に所在する上芝古墳(148)が知られている。本郷稲荷塚古墳と下里見諏訪山古墳は、いずれも村落社会の首長によって造営された古墳と考えられる。

７世紀代の群集墳を構成する古墳は、大部分が径10m前後であり、大きなものでも径20m程度の、川原石を壁材とした横穴式石室を有するものである。分布も前代の古墳とほぼ同様に、旧久留馬村域を中心とする烏川左岸と、烏川右岸の旧里見村域に大別できる。

前述したように蔵屋敷遺跡からは、５世紀後半から６世紀初頭頃の居館と考えられる遺構が検出されているが、７世紀中葉になると、その一角にしどめ塚古墳(72)が築造される。しどめ塚古墳は、『上毛古墳綜覧』に久留馬村第14号墳として登録された径約20mの円墳で、二段に築かれた墳丘には葺石が葺かれているが埴輪はない。埋葬施設は全長8.6m、玄室長4.1m、奥壁幅2.19mの、南に向かって開口する両袖型横穴式石室である。副葬品としては、勾玉、切子玉、小玉、金銅製耳環、大刀、刀子、鉄鏃、轡、鉄製鞍金具、鉄製壺鐙、金銅製杏葉、鉄地金銅張雲珠、金銅製帯金具などが出土している。羨道部に改修がなされていることや、前庭部から出土した土器類の中に８世紀まで下るものがあることから、家族の墳墓として長期にわたって祭祀が行われていたことが窺える。

同じ本郷台地に立地する小臼塚古墳(73)は、現在は完全に削平されてしまっているが、『上毛古墳綜覧』には久留馬村第15号墳として登録され、埋葬施設は横穴式石室であったと伝えられている。昭和61(1986)年から翌62(1987)年にかけて、榛名町教育委員会が行った蔵屋敷遺跡の発掘調査では、集石列と溝が約25mの間隔を置いて南北方向に延びる様子が確認されている。このことから本古墳は、７世紀に築造された約25～30m四方の方墳であったと推定され、この時期の方墳として重要である。しどめ塚古墳と小臼塚古墳は、いずれも７世紀の村落社会内における有力家族層により造営された古墳であると考えられる。

本郷奥原古墳群(68)では、昭和40年代に実施された群馬用水土地改良事業に伴って36基の古墳が発掘調査されたが、この時の調査で存在が確認された古墳は、東西約290m、南北約320m、面積約73,600㎡の範囲から計65基を数えた。これらの中に方墳はなく、いずれも円墳の範疇で捉えられる墳丘形態であった。本古墳群では７世紀前半頃から49号墳と53号墳を中心に墳墓の造営が始まり、７世紀末まで古墳が造られ続けたと考えられる。本古墳群からは、メノウ製勾玉、水晶製切子玉、碧玉製管玉、ガラス製丸玉・小玉、琥珀製棗玉、金銅製耳環など、専業工人の手による装身具類が出土している。また、古墳群形成の最終段階になると、前庭に供えられた土器類には、秋間古窯跡群(95)で生産されたと同定できる須恵器類が目につくようになる。これらの事例は、村落社会の有力家族層も、物資の需給に必要な他地域との交流を行っていたことを示している。

本郷遺跡群の本郷大カサ遺跡(５)において発掘調査された１号古墳は、『上毛古墳綜覧』に久留馬村第31号墳として登録された稲荷塚古墳である。『上毛古墳綜覧』には、「高さ九尺(約2.73m)」「直径七十五尺(約22.73m)」「円型」とあり、現状について「山林中ニアリ土ヲ取リ去リ僅カニ周圍ノ一部ヲ残ス」と記載されている。しかし、平成28年度の発掘調査時には、すでに墳丘は平夷され、石室の壁もすべて消失していた。石室下部から双脚足金具が１点出土している。

烏川右岸の旧里見村域における当該期の古墳は、秋間

丘陵の北東側に沿って形成された上位段丘面に造営された古墳群、里見台地に造営された古墳群、下位段丘面に造営された古墳群に大別できる。秋間丘陵の南西側に当たる安中市秋間では、７世紀後半から窯業生産が始まり、８世紀から９世紀にかけて群馬県内有数の須恵器・瓦生産地として発展していく。背景には、良質な粘土と豊かな森林資源があったと考えられる。旧里見村域にも須恵器生産に関わる工人集団の進出があり、上位段丘面に分布する古墳群はこれら工人集団によって造営された可能性も考えられる。

その一つである堂尾根２号墳(85)は、７世紀末に築造された山寄せ円墳で、墳丘は削平されていたが、埋葬施設は全長約５ｍ、奥壁幅約１ｍの横穴式石室であることが確認できた。副葬品としては、金銅製耳環、碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス製小玉、大刀、刀子、鉄鏃などが出土している。

旧榛名町域の南側に隣接する八幡台地に所在する観音塚古墳(108)は、全長105ｍを有し、県内最後の前方後円墳として知られる。その石室は全長15.8ｍと県内最大級で、天井石や壁石は大きな一枚岩を集めて構築されている。その巨石の主なものは旧里見村域で産出される溶結凝灰岩(里見石)である可能性が指摘されている。

当該期の水田遺構としては、北陸新幹線の建設に伴い群埋文が発掘調査した浜川長町遺跡(35)、浜川高田遺跡(36)、浜川館遺跡(37)、御布呂遺跡(39)、芦田貝戸遺跡(40)など井野川流域の低地から、６世紀初頭の榛名山の噴火によって降下した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)や、噴火に伴って発生した泥流(Hr-FA泥流)によって埋没した水田、６世紀中葉の噴火によって降下した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)や、噴火に伴って発生した泥流(Hr-FP泥流)によって埋没した水田が広く検出されている。また、下芝天神遺跡(32)からは、Hr-FAとHr-FA泥流によって埋没した重複する２面の畑が検出されている。

これまで旧榛名町域からは、このような集落や田畑を埋め尽くすほどの大災害の痕跡は検出されていない。しかし、これら２度の火山災害は、本地域の東側を流れる榛名白川や井野川の流れを変えるほどの規模であったことから、本地域においても大きな影響があったであろうと想像できるのである。

第５項　古代

旧榛名町域では７・８世紀の集落は希薄であり、烏川左岸では十文字台地に立地する高浜広神遺跡(25)や日輪遺跡(65)、烏川右岸では里見台地に立地する中里見原遺跡(18)など遺跡数は少ない。蔵屋敷遺跡(73)や稲荷森遺跡(76)など、古墳時代に大きく発展した旧久留馬村域の集落の多くが７・８世紀までは継続していない。一方、烏川右岸で継続が確認できたのは、里見台地に立地する中里見原遺跡と下里見上ノ原･中原遺跡(86)のみである。

９・10世紀になると本地域の集落は再び増加するが、これは県内の他地域でもみられる傾向であり、本地域特有の現象とはいえない。一旦は台地上へ集約された集落が、９世紀以降になると再び低位段丘面に回帰するが、その背景には土地制度の改革と、それに伴う田畑の整備、集落の再編があったと考えられる。

１．古代寺院の建立

７世紀になると、古墳に代わる権威の象徴として各地に寺院が建立されるようになる。群馬県においても、７世紀中葉以降、山王廃寺(前橋市総社町)や上植木廃寺(伊勢崎市本関町)、寺井廃寺(太田市天良町)などの寺院が造られていく。

この山王廃寺の伽藍の屋根に葺かれた瓦は、秋間古窯跡群(95)で焼かれたものである。７世紀後半以降、安中市秋間には截石切組積石室をもつ古墳が造られていくが、これらの古墳群は秋間古窯跡群の分布と重なり、窯業の単位集団に呼応した群集墳が存在していたとみられる。そのうちの一つであるめおと塚古墳(98)も截石切組積石室をもつ円墳だが、その石室は複室構成をしており、山王廃寺に近い宝塔山古墳(前橋市総社町)をそのまま小型化したような構造である。山王廃寺の造営が始まった頃に築造された宝塔山古墳と、秋間一帯の要の地に築造されためおと塚古墳の類似は、山王廃寺周辺の勢力と秋間との密接な関係を示している。

本郷遺跡群に隣接する本郷奥原遺跡(67)からは、素弁四葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦などが出土している。建物については未調査であるため断定はできないが、県内でも最古級の寺院跡である可能性が考えられる。出土した素弁四葉蓮華文軒丸瓦は、山王廃寺創建期のもの

と胎土、焼成、色調などの特徴が類似しており、７世紀後半でも比較的早い時期に秋間古窯跡群で生産されたものである可能性が高い。本遺跡の西側には前掲の本郷奥原古墳群(68)が隣接しているが、瓦の散布範囲と墓域とは一線を画しており、両者が計画的に造営された様子が窺える。これまで本遺跡の寺院建立の背景としては、北西約250mに所在する日輪遺跡(65)の集落の存在が考えられてきた。しかし、本郷遺跡群の発掘調査によって本郷満行原遺跡(２)からも多くの竪穴建物が検出されたことにより、当該期の集落はさらに周辺地域に広がる可能性が考えられるようになってきた。なお、本郷満行原遺跡からは礎石建物とともに瓦、瓦塔、墨書土器、銅印、八稜鏡、銅鈴などが、本郷鶴楽遺跡(９)からは大型の掘立柱建物とともに経筒、小神像などが出土している。

２．律令国家の成立

やがて律令国家の体制が整えられると、全国は畿内と東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の七道地域に分けられた。古代群馬は上野国と呼ばれ東山道に属し、国司には中央の官人が派遣された。国内には碓氷、片岡、甘楽、多胡、緑野、那波、群馬、吾妻、利根、勢多、佐位、新田、山田、及び邑楽の14郡が置かれ(当初は13郡であったが、和銅４(711)年に多胡郡が設置されて14郡となった)、郡司には地方豪族が任命された。

本郷遺跡群が所在する旧久留馬村域は、律令制下には上野国府が所在した群馬郡の郡域内に入る。群馬郡は、北は現在の渋川市域、東は現在の前橋市の利根川以西、南は現在の高崎市の烏川以北の地域であり、上野国内で中核を担った郡である。

『和名類聚抄』によれば、群馬郡には長野郷、井出郷、小野郷、八木郷、上郊郷、畦切郷、島名郷、群馬郷、桃井郷、有馬郷、利刈郷、駅家郷、及び白衣郷の13郷が置かれていた。所在郷数は、甘楽郡と同数で、上野国内では最大である。

群馬郡諸郷のうち、長野郷は現在の烏川左岸一帯の高崎市北新波町から旧久留馬村域に至る範囲と考えられており、本遺跡群が所在する旧久留馬村域は、この長野郷に含まれる。

３．烏川左岸の集落

蔵屋敷遺跡(73)では、前述した古墳時代の居館の一部とみられる遺構のほかに、９世紀頃の方形の区画溝が検出されている。また、９世紀の竪穴建物から、印面が3.2㎝四方で高さが3.3㎝の銅印が出土していることが特筆される。このことから官衙などの施設の一部であった可能性が考えられるが、区画内からはそれらの施設を構成すると考えられる建物の痕跡は検出されていない。

また、高浜広神遺跡(25)では、７世紀中葉から10世紀にかけての掘立柱建物15棟、竪穴建物32棟などが検出されている。掘立柱建物群の中には、東西３間×南北２間で南側に廂が付く掘立柱建物や、東西２間×南北３間の総柱の掘立柱建物２棟が含まれ、それらの建物群を区画するように柵列が検出されている。また、竪穴建物からは、金銅製丸鞆、鉄製のクルル鈎、「第」の印面の焼印、鋤先、鎌などが出土しており、鉄製品の加工や補修を行った工房の存在が示唆される。それぞれの掘立柱建物の規模が小さいことから、官衙などの施設とは考えにくいものの、この地域においては珍しく掘立柱建物群が検出されていることや、特異な出土遺物などから、首長居宅あるいは在地首長による農業経営の拠点、牧の管理施設などの可能性が考えられる。

それぞれの集落の規模や施設の内容、あるいは出土遺物の特徴などから、各集落の有機的なつながりが明らかになる場合もある。例えば、室田台地の末端部に立地する中村遺跡(45)では、古墳時代後期の集落が一端途切れたのち、９世紀になって再び集落が営まれるようになり、10世紀まで継続する。集落は台地全体に展開しており、調査範囲内だけでも63棟の竪穴建物が検出されている。一方、同じ室田台地に立地する又倉遺跡(43)は、中村遺跡の北西約1.4㎞に位置する同時期の集落遺跡であるが、平安時代の竪穴建物は密集することなく散在しており、うち１棟は鍛冶工房で、鞴の羽口や椀形鍛冶滓が出土している。これは本地域において初めて確認された本格的な古代の鍛冶工房である。このような状況から、中村遺跡は地域の中核的な集落であり、又倉遺跡は鉄器の供給や補修を担う小規模集落と捉えることができるのである。

本郷遺跡群の発掘調査では、本郷鶴楽遺跡(９)において10世紀中葉から11世紀前半を主体とする平安時代の竪

穴建物188棟、大型の掘立柱建物１棟が検出されている。これは当該期の集落としては、旧榛名町域において最大規模である。なお、大型の掘立柱建物は、桁行５間・梁行４間(12.79×9.38m)の規模をもち、寺院に関連する施設など、何らかの公的な性格を有した建物であると考えられる。

４．烏川右岸の集落

烏川右岸の旧里見村域における当該期の大規模集落としては、中里見原遺跡(18)が挙げられる。本遺跡では、古代の集落は７世紀から始まり、８世紀末から９世紀前半にかけて規模を拡大させながら、その後10世紀まで継続している。検出された遺構は、基壇状建物１棟、掘立柱建物７棟、竪穴建物72棟などである。調査範囲内からは瓦の出土は認められなかったが、基壇状建物は台地中央の高所に立地しており、村落内寺院のような遺構である可能性が考えられる。また、台地の尾根部分には９世紀中葉と考えられる大型竪穴建物１棟と、その両側に大型掘立柱建物２棟が並立している。東側の５号掘立柱建物は、一辺約6.3m四方の３間×３間、床面積約40㎡の総柱建物で、倉庫と考えられる。西側の７号掘立柱建物は、基壇状建物を掘り込んで造られており、南北３間(約6.3m)×東西２間(約4.2m)、床面積約26.5㎡の規模の総柱建物で、やはり倉庫と考えられる。二つの大型掘立柱建物に挟まれた位置にある大型竪穴建物は、南北約7.0m、東西約6.1m、床面積約42.7㎡の規模であり、同時期の平均的な竪穴建物と比べ４倍ほどの床面積である。当該期の竪穴建物としては破格の規模であり特異な用途が考えられるが、出土遺物に特徴的なものはなく、そのため用途は不明である。この集落は、旧里見村域の有力者が管理する中核的集落であったと考えられる。

中里見原遺跡の南に隣接する上里見井ノ下遺跡(17)は、里見台地から上位段丘面にかけて立地し、古代の大型炭窯５基が検出されている。このうち２号炭窯は、横口付炭窯と呼ばれる朝鮮半島に技術的系譜が求められる大型の炭窯であった。また、本遺跡の東には、鉄生産が行われていたことが判明した中里見井ノ下遺跡(高崎市中里見町)がある。本格的な発掘調査は行われていないものの、『榛名町誌』編さん事業に伴う資料調査により、箱形炉の底部にできた大型の滓(炉底塊)の存在が明らかになっている。これらの事例は、律令国家形成期の本地域において、榛名山南麓の自然を生かした本格的な鉄生産が行われていた可能性が高いことを示唆している。

５．古代の耕地

天仁元(1108)年、浅間山が大噴火を起こし、大量の降灰により上野国内の田畑は大きな被害を受けた。その21年後に当たる大治４(1129)年には、亡弊を理由に租税が免除されるなど、浅間山の噴火に伴う災害の影響はなおも続いていたようである。

旧榛名町域における古代の水田遺構は、中里見根岸遺跡(19)、中里見中川遺跡(20)、神戸岩下遺跡(21) など烏川の下位段丘面、及び低地、高浜向原遺跡(24)、高浜広神遺跡(25)、白岩民部遺跡(26)など十文字台地を開析する中小河川により形成された谷地で、天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う浅間Ｂテフラ(As-B)によって埋没した水田が検出されている。

また、北陸新幹線の建設に伴い群埋文が発掘調査した下芝天神遺跡以南の各遺跡(32～40)、高崎市教育委員会が発掘調査した菊地遺跡群(120～125)や長野北部遺跡群(133～139)など、旧榛名町域の東側に広がる榛名白川や井野川流域の低地においても、同様のAs-B下水田が広く検出されている。

本郷遺跡群の発掘調査においては、本郷広神遺跡(３)と本郷西谷津遺跡(４)から、As-B下水田が検出されている。ただし、これら２遺跡から検出された水田は、いずれもAs-B降下の時点ではすでに耕作放棄されていた可能性が高いと判断された。

一方、十文字台地の和田山天神前遺跡(30)や里見台地下の下位段丘面に立地する中通遺跡(88)からは、As-Bによって埋没した畑が検出されている。また、本郷遺跡群の発掘調査においても、本郷満行原遺跡(２)や本郷広神遺跡から、同様の畑が検出されている。ただし、これらの畑も水田と同様に、As-B降下の時点ではすでに耕作放棄されていた可能性が高いと考えられる。これら旧榛名町域で検出された畑の事例は決して多くはないが、本地域が水田耕作に適した低地に乏しく、現在まで続く畑作地帯であることを考えれば、広く畑が展開していたであろうことは想像に難くない。

また、榛名山南麓の地形は、台地が中小河川によって細

かく区切られ、複雑な形状をしており、このような地形は、馬の飼育や管理に適しているといわれる。河川によって狭められた台地の一部を柵や溝で閉め切れば、集落と牧とを容易に区分けすることができるためである。十文字台地の南東部でも、台地が中小河川によって開析され、いくつかの細長い舌状台地に分かれているが、集落のある台地と空白の台地がほぼ交互に存在している。この空白の台地上が牧であった可能性が考えられるのである。

第６項　中世

延久元(1069)年、摂関家を外戚としない後三条天皇によって発せられた延久の荘園整理令によって、立券不分明な荘園は公領に戻された。この荘園整理の対象は摂関家領にまで及んだが、その反面、立荘を示す証拠が確実な荘園については、不入権などの特権が保障され、国衙の干渉を受けずに地域を支配する領域支配型荘園として再編されていった。一方､荘園化されなかった公領では、国衙の在庁官人が直接、郡司・郷司・保司となって徴税を請け負い、さらに荘園化によって減少した公領を拡大するために積極的な開発を行ったことから、国衙の支配が強く及ぶ地域も現れた。

こうして荘園では荘官が、国衙領では在庁官人である郡司･郷司･保司が、徴税を請け負って農民を支配した。やがて彼らは有力な棟梁と結びついて武士化し､請け負った荘園や公領を自らの所領とするようになっていった。

国府に近い地域には公領が濃密に設定され、国衙の支配が強く及んでいた。一方、国府から遠い地域には荘園が設定され、その中間の諸郡には荘園と公領が混在する状況となった。国衙が所在した群馬郡には荘園はなく、上野諸郡の中で最も有力な国衙の基盤地域であったと考えられる。

１．中世長野郷と八幡荘

中世長野郷は、旧高崎市北部から旧箕郷町域、旧榛名町域の烏川以北、旧倉渕村域にまで及ぶ広大な郷であったと考えられる。府中の西側に接し、奥大道(古代の東山道を引き継ぐ道)から分かれて国府に向かう東道が通り、広大な面積を有する長野郷は、国衙を支える最も重要な郷であったであろう。そのため中世長野郷には在庁官人の中でも有力者が入部したと思われるが、それが郷名を苗字とする長野氏であったと考えられる。この長野氏は、室町時代の資料によると、石上氏、物部氏、在原氏などを称していたようである。また、地元に残る数種類の系図では、在原氏の子孫を称している。

一方、烏川右岸には摂関時代頃、河内源氏系の一族によって八幡荘が立荘された。以後、八幡荘は新田一族に継承され、一族の勢力基盤の一つとして維持されていった。里見は八幡荘内であるが、郷としては扱われず、院政以降に開発された村とみられる。そこに新田義重の子の義俊、孫の義成が入って里見氏を名乗った。里見義成は源頼朝の寵臣として重用され、その子孫はやがて各地に進出していった。

院政後期には知行国制が始まった。この制度は、有力な貴族に特定の国を国主として知行させるもので、国主はその国の国司を推薦でき、国務を掌握することができた。後白河院政末期の上野国主は藤原光能で、その後、国主となった日野流の藤原兼光は、国衙の武力を頼朝支持に向かわせ、鎌倉政権樹立に寄与させた可能性が考えられる。嘉禄元(1225)年頃になると、上野国主は中院流の源通方に代わり、以後、中院流が５代にわたり国主の職を受け継ぎ鎌倉幕府滅亡に至る。なお、鎌倉時代後期以降、国司の地位は献金によって官位を付与する成功(じょうごう)の対象となり、単なる名誉職になっていった。

元弘３(1333)年、鎌倉幕府滅亡後に始まった建武の親政は長続きせず、南北朝の内乱は明徳３(1392)年まで断続的に続いた。里見一族の多くは南朝方の新田義貞に従い、その討ち死にまで仕えている。一方、北朝の足利方に従った里見氏としては、のちに安房に進出し戦国大名として活躍する安房里見氏などがいる。

南北朝の内乱の中で、上野国の守護職となった上杉憲顕は、関東管領職にも就き、以後、上野国守護職は一時期を除いて憲顕の子孫である山内上杉氏が世襲していく。中世長野郷や八幡荘は上杉氏の所領となり、上杉氏は交通の要衝であった八幡荘板鼻に守護所を置き、上野国支配の拠点とした。関東管領職に就く上杉氏の当主は鎌倉府に在ったため､根本被官である長尾氏が在国した。

２．長野氏の台頭と鷹留城

南北朝の内乱が広がる中、上野国でも国人一揆が結成された。この上州白旗一揆には、中世長野郷を拠点とす

る長野氏も加わっている。

永享12(1440)年、幕府・上杉氏と鎌倉府との対立から起こった結城合戦では、上州白旗一揆は幕府・上杉方に付いたが、一揆衆の中に長野因幡守、長野宮内小輔、長野左馬介の名がみえる。享徳３(1454)年、鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を殺害したことによって始まった享徳の乱は、文明14(1482)年まで続くが、文明８(1476)年には上杉氏の根本被官である長尾景春が上杉顕定に反逆している。翌年、長野左衛門尉為業は長尾景春に従い武蔵国針谷原で討ち死にしたが、上州一揆旗頭とあり、長野氏は一揆内の有力者に成長していたことが窺える。

旧室田町域に所在する長年寺は、明応元(1492)年または文亀元(1501)年に長野業尚が創建したとされる長野氏の菩提寺である。永正９(1512)年６月付の上杉憲房制札(長年寺文書、『群馬県史資料編７中世』所収)に「於上州群馬郡室田之内長年寺」と、大永２(1522)年３月付の平某禁制写(榛名神社文書、『群馬県史資料編７中世』所収)にも「上州群馬郡室田村長年寺之事」とあり、長年寺への濫妨狼藉を禁止している。同年10月付の長野憲業壁書(長年寺文書、『群馬県史資料編７中世』所収)には３か条にわたって長年寺内での禁止条項を定めており、菩提寺である長年寺に対して保護する姿勢を示したものといえる。現在、墓地には長野業尚、憲業、業氏、業政、業固、業茂、業続らの五輪塔が遺っている。

この長年寺の北約１㎞には、長野業尚によって15世紀末から16世紀初頭頃に築城されたと伝えられる鷹留城(48)が所在する。榛名山南麓の火山麓扇状地南端の地形を利用した並郭式山城で、範囲は南北約430m、東西約300mに及んでいる。長野氏は吾妻郡域の在地武士団とは敵対関係にあったことから、吾妻郡側への備えを堅固にする必要があったのであろう。この鷹留城は、同じ頃に築城されたと考えられる長野氏宗家の居城である箕輪城(150)と並んで、長野氏の主要な城館である。この鷹留城に関する記録としては、長年寺墓地内に所在する文亀３(1503)年２月20日の年紀を有する長野氏墓碑銘(『室田村誌』所収)に「鷹留城主長野伊予守業尚」と、また、天文７(1538)年４月14日の年紀を有する長野氏墓碑銘(『室田村誌』所収)に「鷹留城主長野三河守業氏」と記載されている。

鷹留城の南約0.6㎞の高台には松山城(47)が、その南側に接して「堀之内」と称される方形居館が存在しており、松山城と方形居館の一体の構成であったと考えられる。松山城については、北条氏の被官であった上田氏が、天正10(1582)年頃に築城したとする伝承もあるが、鷹留城とほぼ同時期、あるいは若干後の時代のものと考えられ、平時における室田長野氏の居所であったと考えられる。なお、本地域の烏川を臨む丘陵や台地には、鷹留城の出城とみられる中世山城跡が多数存在している。

３．戦国の動乱と長野氏

戦国期のものと推測される年未詳の浦野中務少輔宛武田信玄書状(浦野文書、『群馬県史資料編７中世』所収)には、鷹留城に拠る「長野三河入道随令之者八十余人」が武田方に討ち捕られた旨が記されている。長野氏宗家の本拠である箕輪城(150)が落城した永禄９(1566)年９月に近い時期のことと推測される。箕輪城の落城により長野氏業は自害に追い込まれ、この地は武田氏の支配下に入った。天正８(1580)年８月５日付武田家定書写(浦野文書、『群馬県史資料編７中世』所収)にも、当地が武田氏被官浦野氏の知行であることが記されており、天正10(1582)年３月の武田氏滅亡まで、その支配下にあったことがわかる。

武田氏滅亡後、信濃、甲斐、西上野などの武田旧領は織田信長の支配下に入った。信長は重臣の滝川一益を関東管領に任じて厩橋城(前橋市)に配置、関東の武田旧領の支配を任せると共に北条氏への備えとしたが、天正10(1582)年６月、信長が本能寺の変で横死すると、滝川一益は侵攻してきた北条氏との合戦に敗れ、関東一円は北条氏の領するところとなった。

北条氏の西上野支配の拠点は箕輪城であったが、信濃進出のために松井田城(安中市)が重要視され、北条氏家臣である大道寺政繁が入城した。松井田城はこの時期に大規模な改修を受け大城郭に変貌している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めに際して、松井田城は豊臣方の前田利家・上杉景勝軍によって攻められ落城した。

第７項　近世

豊臣秀吉による北条氏攻略後、徳川家康の関東入封に伴い、関東一円は家康の支配するところとなった。江戸に本拠地を構えた家康は、徳川四天王の一人である井伊

直政を関東防衛の要として箕輪城(150)に配置した。西上州の武将たちは北条氏滅亡によって扶持を失ったが、長野民部業実や里見内蔵允などのように井伊家に仕官した者や、長野氏の一族には幕臣になった者もみられる。一方、長野家や武田家に仕えた者の中には、武士の身分を捨て帰農した者もいた。江戸時代に名主を務めた高浜村の木暮氏、本郷村の嶋方氏、里見村の里見氏、富沢氏、広神氏などは、戦国期の長野衆に属した在地土豪といわれる。

慶長３(1598)年、井伊直政は、家康の命によって箕輪から和田に移り、和田の地を「高崎」と改めて高崎城を築城、群馬・碓氷両郡のほぼ全域を所領とした。慶長５(1600)年、井伊直政は関ヶ原の戦いにおける戦功によって加増され、かつて石田三成の居城であった佐和山城を与えられ近江国に拠点を遷したが、上野国内の領地も引き続き領有した。

慶長７(1602)年、井伊直政が没すると、嫡子直継が跡を継いで、慶長11(1606)年、新たに彦根城を築城し、井伊家の本城とした。しかし、徳川家康は、直継は病弱かつ将器に欠けるとして、弟の直孝に彦根藩井伊家の家督を継承させるとともに、兄の直継には別家を建てさせ、上野国領３万石を分知し碓氷郡安中に封じた。直継は名を直勝と改め、元和元(1615)年、中世安中城の縄張りの一部を利用して近世安中城を築城し入封した。

江戸時代の村は、幕藩体制下における行政の末端機構に位置付けられ、領主に対して年貢の上納や諸役の負担などが義務付けられた。旧榛名町域には、烏川左岸の群馬郡に上室田、中室田、下室田、神戸、三ツ子沢、宮沢、十文字、白岩、高浜、及び本郷の10か村、烏川右岸の碓氷郡に上里見、中里見、下里見、及び上大島の４か村が分布し、本郷遺跡群が所在する高崎市本郷町は、本郷村と呼ばれた。延宝６(1678)年の「安中領本郷村五人組帳」(嶋方英一氏所蔵)によれば、人数626人、男346人、女280人、84軒とある。

これらの村々は、幕府直轄地、旗本知行地、大名領などに分割され、江戸時代を通じて領主の交代が繰り返されたため、複雑な支配構造が形成されることとなった。本郷村は、天正18(1590)年の箕輪藩領に始まり、高崎藩領、近江佐和山藩領、安中藩領、幕府領、三河中島藩領、幕府領、安中藩領、幕府領、安房勝山藩領と変遷し、明治維新を迎えている。

榛名山南麓の耕地の状況を寛文８(1668)年の「寛文郷帳」から概観すると、烏川左岸では畑地が約７割を占め、右岸では同率か、やや田地が畑地を上回るといった状況であった。農作物は稲のほか、大麦、小麦、大豆、小豆、粟、稗などの雑穀や芋、木綿、煙草が栽培され、屋敷内の畑では大根、茄子、瓜、インゲンなどの野菜が作られた。

天明３(1783)年、当地一帯を含む関東平野の広い範囲は、浅間山の大噴火による甚大な被害に見舞われた。この大噴火により交通は途絶し、作物は不作となり、江戸時代の三大飢饉といわれる天明の飢饉が発生した。翌年の「天明四年二月上室田村渇人家族調査書上帳」(齋藤直躬氏所蔵)によれば、人口が1,000人に満たない上室田村で、飢え人が243人に上ると報告されている。

県内各地の発掘調査では、この時に降下した浅間Ａテフラ(As-A)や、噴火に伴って発生した泥流(天明泥流)によって埋没した屋敷や水田、畑、あるいは軽石や泥流堆積物を処分した復旧坑などが検出されている。本郷遺跡群の発掘調査においても、本郷満行原遺跡(２)から軽石を処分した復旧坑が検出されている。

本郷村を含む周辺一帯は、明治元(1868)年の廃藩置県により岩鼻県に属し、明治４(1871)年には第一次群馬県、明治６(1873)年には熊谷県、さらに明治９(1876)年以降は第２次群馬県に属し現在に至っている。

なお、上記は主に『榛名町誌自然編』、『榛名町誌資料編』１～３、『榛名町誌通史編』上巻・下巻に依った。

引用・参考文献
新井房夫1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学』10pp.１-79
安中市市史刊行委員会編2001『安中市史』第四巻原始古代中世資料編
群馬県編1938『上毛古墳綜覧』
群馬県編2017『群馬県古墳総覧』
群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城館跡』
群馬県史編さん委員会編1977-1988『群馬県史資料編』１-10
群馬県史編さん委員会編1990『群馬県史通史編』1
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社
群馬町誌編纂委員会編1998『群馬町誌資料編』1
群馬町誌編纂委員会編2001『群馬町誌通史編』1
小菅将夫2004「石器群の移り変わり」『群馬の旧石器』みやま文庫pp.79-99
高崎市市史編さん委員会編1999･2000『高崎市史資料編』１・２
高崎市市史編さん委員会編2003『高崎市史通史編』1
榛名町誌編さん委員会編2007『榛名町誌自然編』
榛名町誌編さん委員会編2005-2010『榛名町誌資料編』１-３
榛名町誌編さん委員会編2011･2012『榛名町誌通史編』上・下
森山昭雄1971「榛名火山東・南麓の地形」『愛知教育大地理学報告』36・37pp.107-116
山崎一1971~1978『群馬県古城累址の研究』上・下

第３章　本郷上ノ台遺跡の遺構と遺物

本郷上ノ台遺跡付近から本郷奥原古墳群を望む　東から
（↓が高崎市指定史跡である奥原53号墳）

第１節　概要

本郷上ノ台遺跡は、終末期を中心とする群集墳である本郷奥原古墳群の東側に隣接する。本郷奥原古墳群では、主に昭和40年代の圃場整備に伴い行われた発掘調査により、これまでに65基を超える円墳が確認されている。墳墓の造営は７世紀前半頃に始まり、７世紀末まで続いたと考えられる。また、前庭部から出土した須恵器の年代などから、墓前祭祀は８世紀前半代まで継続したようである。ただし、本遺跡におけるこれまでの発掘調査では、本郷奥原古墳群の造営と同時期と考えられる竪穴建物は検出されていない。

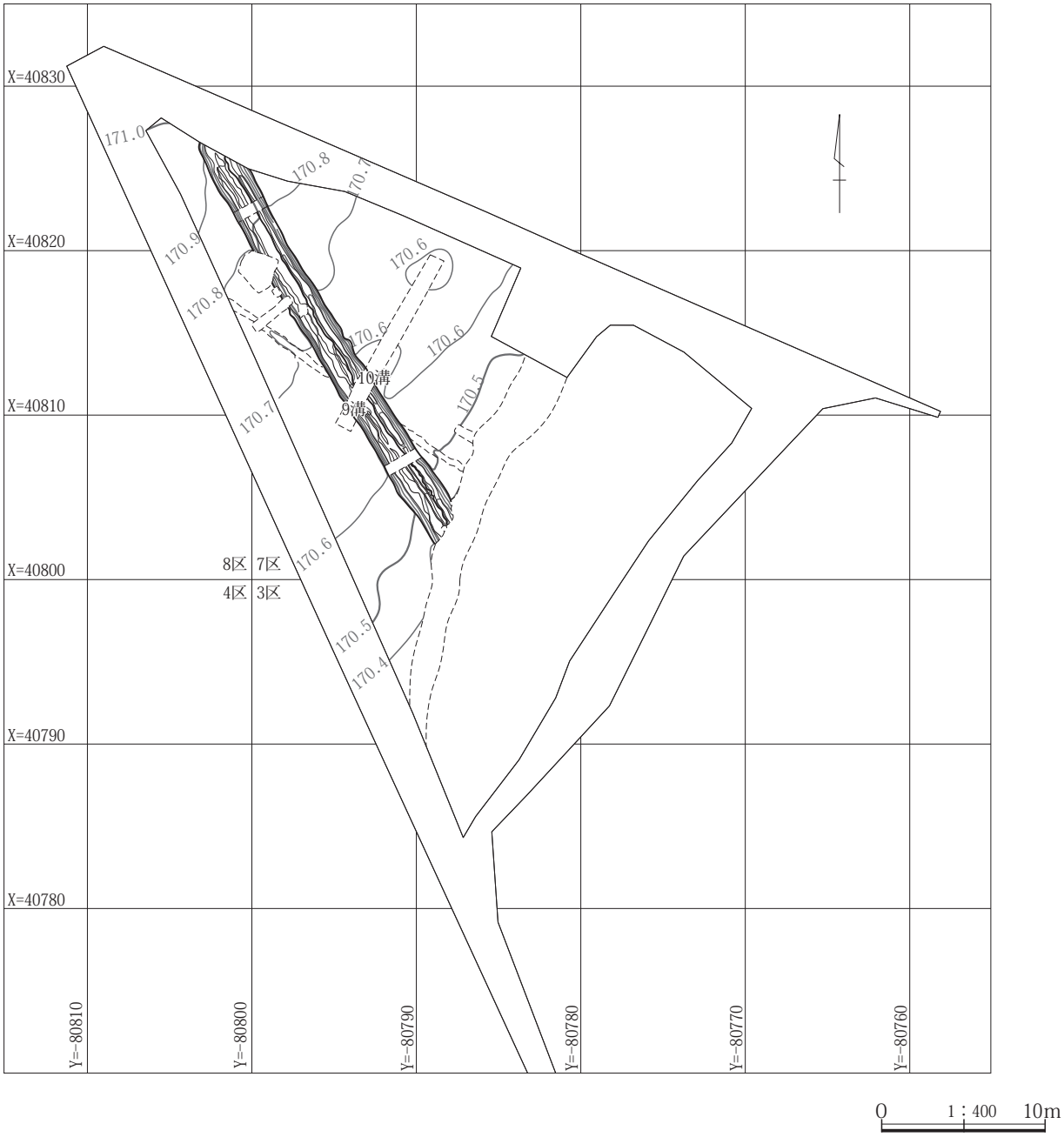
本郷上ノ台遺跡では、全体を１つの調査区として、平成29年度に調査を行った。本遺跡は本郷鶴楽遺跡と本郷満行原遺跡に挟まれ、現道によってこれらの２遺跡と分けられている。この現道は本遺跡の北側で斜めに交差するため、本遺跡の形状は三角形を呈し、面積はおよそ1,000㎡と狭小である。本遺跡の地形は、北西から南東へ向かって緩やかに傾斜している。本遺跡ではローム層より上位に堆積した黒色・黒褐色土層が比較的よく残存していたことから、浅間Ｂテフラ(As-B)混土層下面（１面）とローム層上面（２面）を遺構確認面として調査を行い、１面では溝２条、２面では竪穴建物８棟、集石遺構１基、及び土坑２基を検出した。

なお、本遺跡の発掘調査時の名称は、「本郷満行原遺跡Ｅ区」であり、遺構番号は本郷鶴楽遺跡、本郷満行原遺跡との間で共通になっている。遺構番号が必ずしも１号から始まらず、間に欠番が多く存在するのはそのためである。

１面で検出された２条の溝は、走向が完全に一致することから作り替えの可能性が高いと考えられる。これらの溝は、緩やかに傾斜する地形の等高線に直行するように北西から南東に向かって掘削されていた。このうち９号溝は、底面が平坦で幅が広く、なおかつ非常に硬化していた。このことから９号溝には、道としての機能があったと考えられる。ただし、埋没土中に多量の砂が含まれることから、道として利用されながら降雨時には排水溝としても機能し、砂を堆積させながら徐々に埋没していったと推測できる。一方、10号溝の底面は狭く、やはり多量の砂で埋没していた。この10号溝は重複する９号溝に大部分を壊されており、底面の一部のみが残存していたことから詳細は不明である。しかし、10号溝も９号溝と似た埋没状況であったことから、同様の機能を有していた可能性が高いと考えられる。なお、この２条の溝は、本遺跡の西側を通る現道とも平行しており、道としての機能がやや位置を変えて現代まで踏襲されている可能性も考えられる。

２面で検出された８棟の竪穴建物の多くは９世紀代のもので、構造的には掘方が浅く、かつ部分的であるという特徴をもつものが多数を占める。また、42号、47号、48号、及び55号竪穴建物は、床下に土坑が掘られ、それらは多量のローム塊を含む土で埋められていた。これはローム層中に存在する粘土を、カマドの構築材などとして使用する目的で採取した痕跡であると推測できる。これらの床下土坑は、その特徴により以下の４タイプに分類することができる。①床面中央付近を皿状に掘り窪めたもので、48号竪穴建物が該当する。②床面中央付近を円筒状に深く掘り窪めたもので、55号竪穴建物が該当する。③床下を不規則に複数か所、深く掘り窪めたもので、42号竪穴建物と47号竪穴建物が該当する。また、これらの床下土坑とは別に、④掘り込みが浅く底部が粘土層まで達していないものが存在する。33号竪穴建物と49号竪穴建物がこれに該当するが、これらは粘土採取が目的であるとは考えられないことから、①～③とは分けて考える必要がある。これらの床下土坑は、すべて竪穴建物の掘方調査において検出されたことから、竪穴建物の床面構築以前に掘られたものであると判断された。しかし、47号竪穴建物の土層断面を観察すると、竪穴建物の埋没過程で人為的に土が動かされていることがわかる。このことから、粘土採取は竪穴建物の構築時ばかりでなく、その廃絶直後や埋没過程においても行われていた可能性が考えられる。また、いずれも９世紀第３四半期の45号・48号竪穴建物では、カマド横の壁上に粘土が貼られていた。この壁上の空間は、棚状施設として機能していたと考えられる。

本遺跡から出土した墨書土器は４点であるが、33号竪穴建物からは「真」、「部」と書かれた墨書土器が、42号竪穴建物からは「法師」と書かれた墨書土器が、それぞれ出土している。これらの墨書土器は、本郷満行原遺跡付近



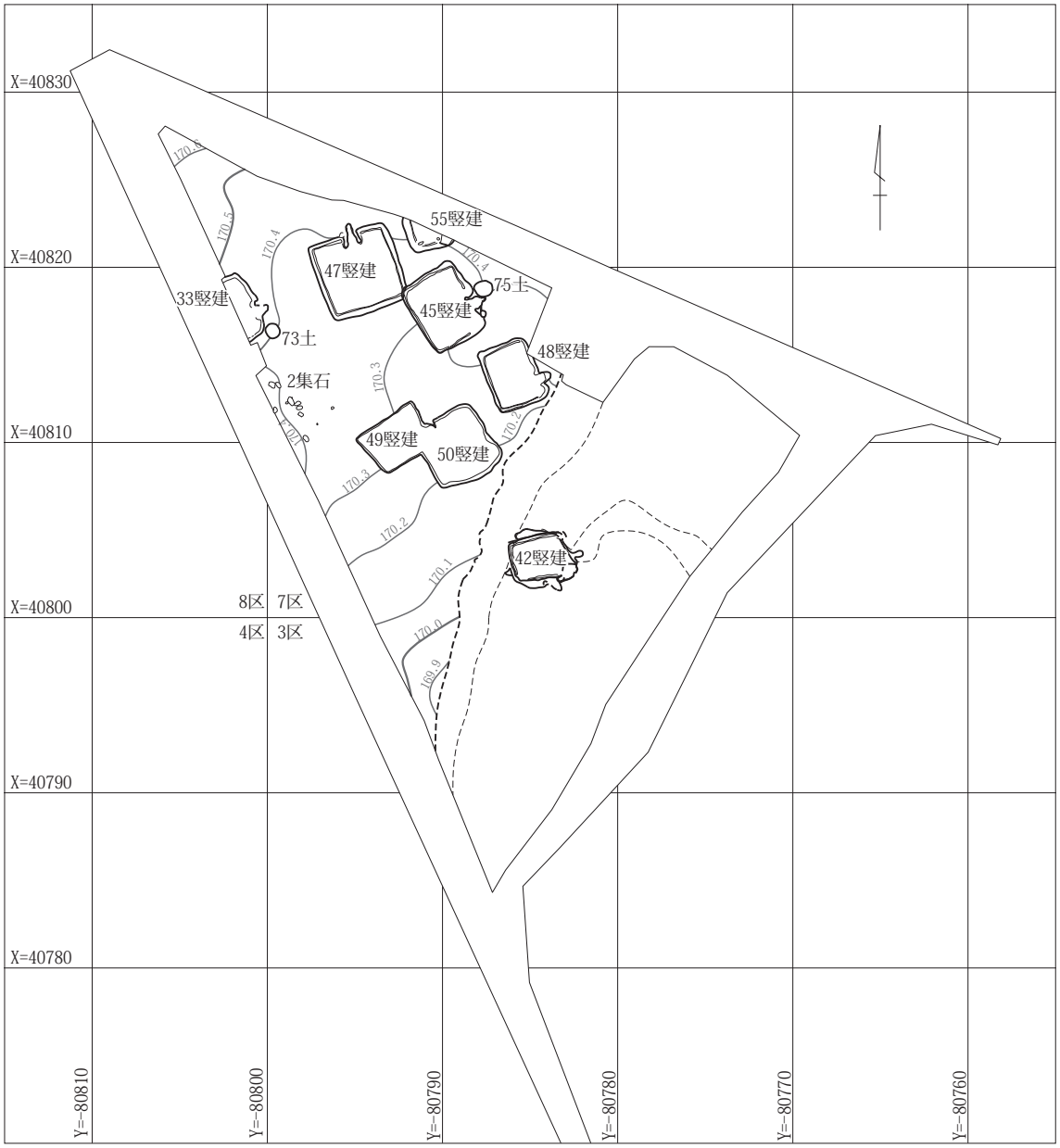
第９図　本郷上ノ台遺跡　１面全体図

に想定される古代寺院に関連した遺物である可能性が高いと考えられる。

２号集石は、最大径50㎝程度の礫がほぼ同じ高さに分布する様子が確認できたが、時期・性格ともに不明である。ただし、現道を挟んで南西に隣接する本郷鶴楽遺跡では、縄文時代中期後半の遺構が数多く調査されており、加曽利Ｅ４式期の柄鏡形敷石建物も２棟検出されている。このことから、２号集石は縄文時代中期後半の配石遺構の痕跡である可能性が考えられる。

２基の土坑は、いずれも平面形状が円形で浅い皿状を呈する土坑だが、75号土坑はピットと重複している。どちらも埋没土中に天仁元(1108)年に降下したAs-Bを確認できなかったことや、出土遺物から９世紀後半の土坑である可能性が高いと考えられる。

なお、本遺跡では、作業工程上の都合により、旧石器時代の遺構・遺物確認調査は行っていない。



第10図　本郷上ノ台遺跡　２面全体図

第２節　検出された遺構と遺物

第１項　１面の遺構と遺物

１．溝

９号溝(第11図、PL．２)

位置　X＝40,802～40,826、Y＝－80,788～－80,803

規模　調査長28.30m、幅1.06～2.28m

残存深度　0.27～0.35m

走向　N－30°－W。等高線に直行する方向に掘削されている。

重複　10号溝と重複し、９号溝が新しい。

埋没土　上層は中粒～細粒砂のラミナが認められ、下層は多量の中粒砂、少量の白色軽石を含む黒色～黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、瓦片１点が出土している。

所見　底面が平坦で幅が広く、なおかつ非常に硬化していた。このことから９号溝には、道としての機能があっ

た可能性が考えられる。ただし、埋没土中に多量の砂を含むことから、道として利用されながら降雨時には排水溝としても機能し、砂を堆積させながら徐々に埋没していったと推測できる。下層に見られる白色軽石が浅間Ａテフラ(As-A)であるならば、本溝は天明３(1783)年以降に埋没した可能性が考えられる。

10号溝(第11図、PL．２)

位置　Ｘ＝40,803～40,825、Ｙ＝－80,787～－80,801

規模　調査長25.30m、幅0.64～1.00m

残存深度　0.30～0.40m

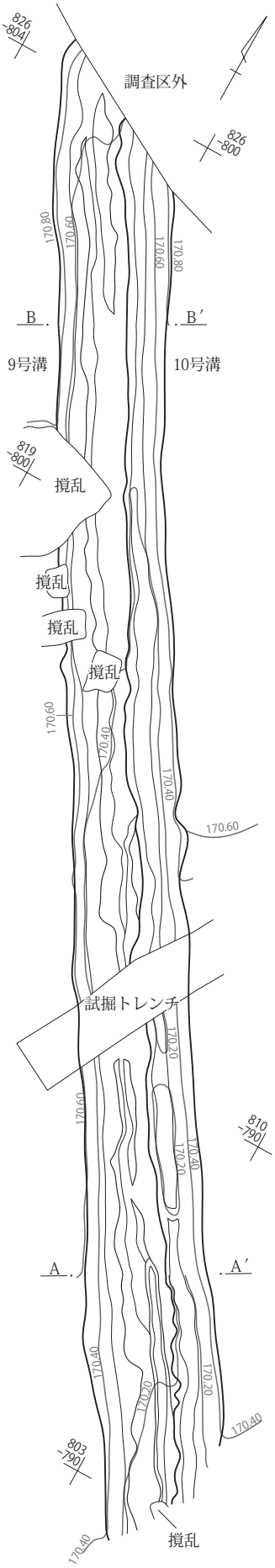
走向　Ｎ－31°－Ｗ。等高線に直行する方向に掘削されている。

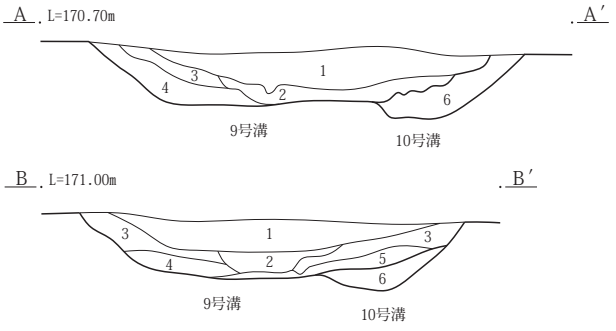
重複　９号溝と重複し、10号溝が古い。

埋没土　多量の細粒砂を含む黒褐色土で埋没していた。

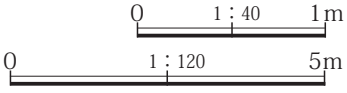
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、瓦片２点が出土している。

所見　底面が狭く、多量の砂で埋没していた。重複する９号溝に大部分を壊されており、底面の一部のみが残存していたことから詳細は不明であるが、９号溝と同様に道としての機能を有していた可能性が考えられる。９号溝の下層に見られる白色軽石がAs-Aであるならば、その混入のない本溝は天明３(1783)年以前に埋没した可能性が考えられる。





９号・10号溝Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1．中粒砂。ラミナ状堆積。
2．細粒砂。ラミナ状堆積。
3．黒色土2.5YR2/1　砂粒を非常に多量含む。
4．黒色土7.5YR2/1　中粒砂をやや多量、白色軽石を少量含む。
5．黒褐色土7.5YR3/1　中粒砂をやや多量、白色軽石を少量含む。
6．黒褐色土5YR3/1　細粒砂を多量含む。



第11図　９号・10号溝

第２項　２面の遺構と遺物

１．竪穴建物

33号竪穴建物（第12～14図、PL．３・284）

位置　Ｘ＝40,815～40,819、Ｙ＝－80,799～－80,802

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸3.94m、短軸（1.28m）

面積　（3.401㎡）

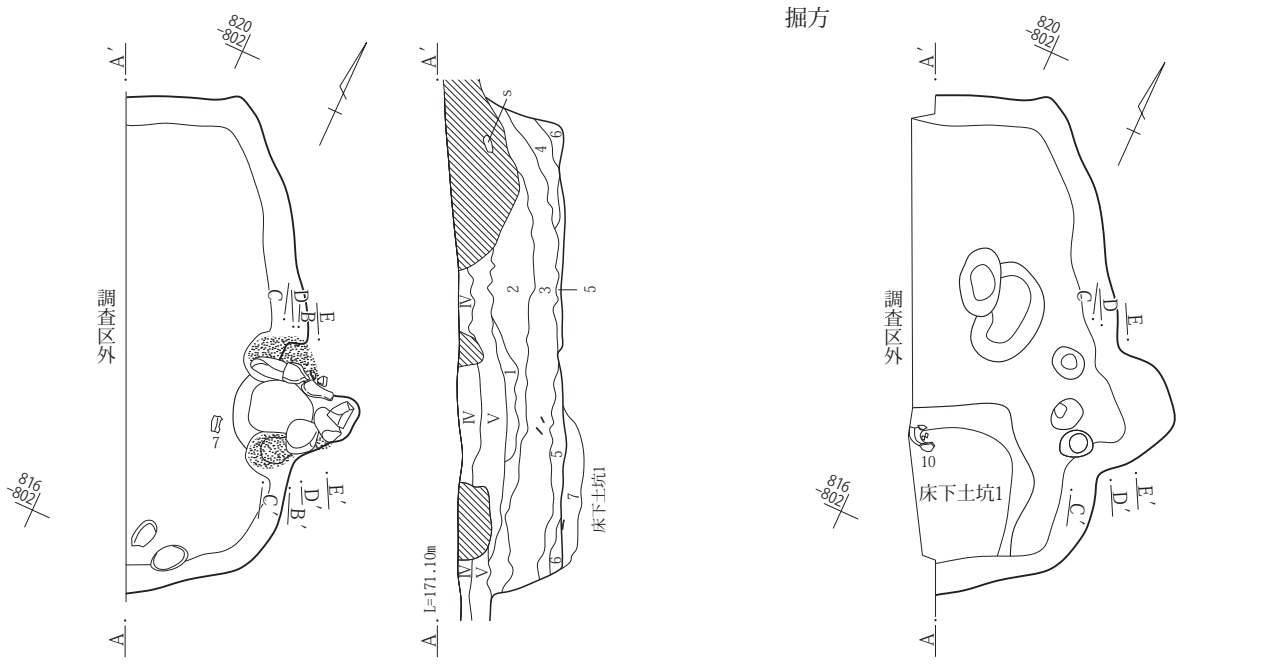
残存壁高　0.37m

方位　Ｎ－73°－Ｅ

重複　なし

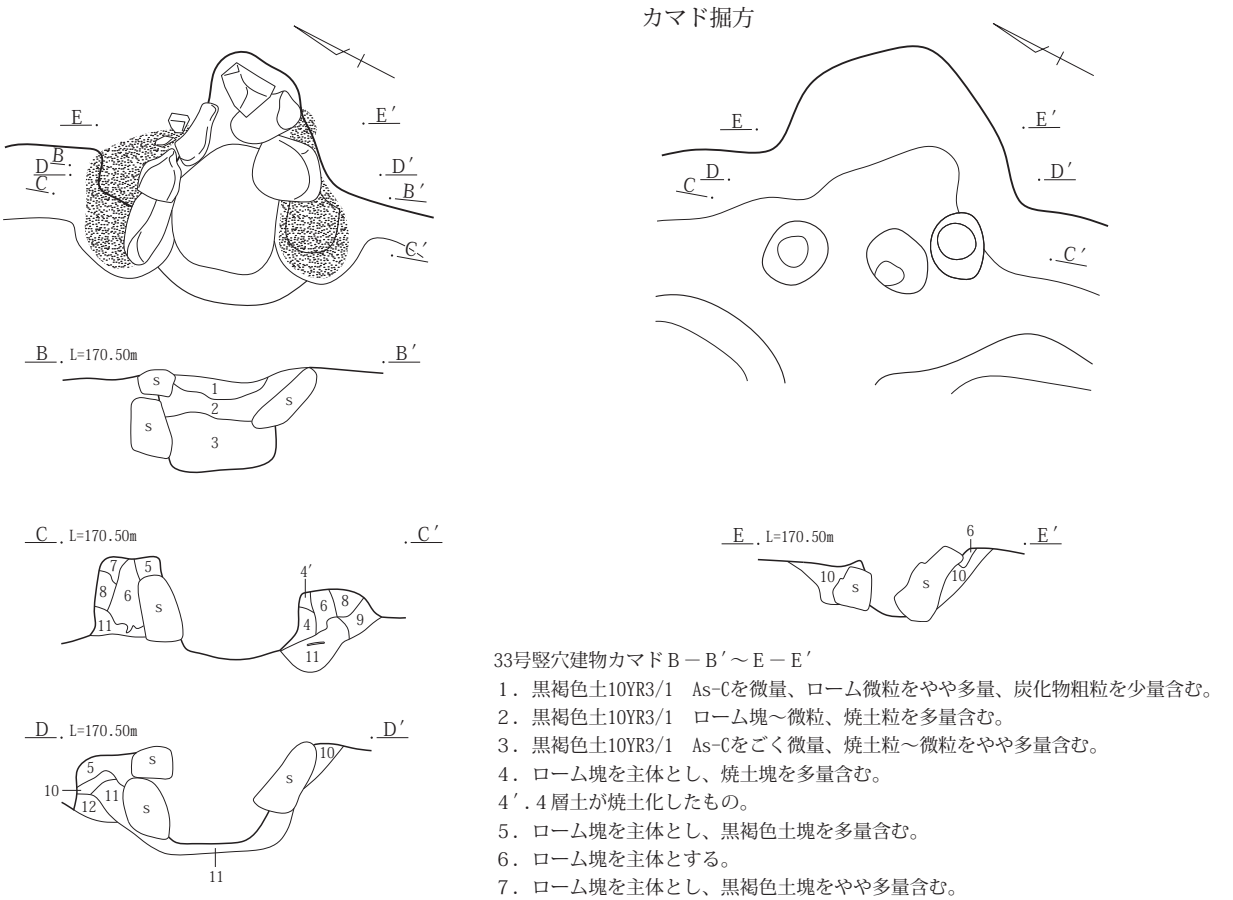
埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム塊、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にローム塊を含む下層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.97m、燃焼部幅は0.40mで、壁外に0.67m燃焼部・煙道が伸びる。袖や側壁の一部は、粘土によって構築されていた。また、側壁と奥壁には礫が並べられていたが、これは側壁や煙道を補強する目的で置かれたものであると考えられる。これらの礫のうち最大のものは、向かって右側の側壁に置かれた２点で、それぞれの大きさ（長さ×幅×厚さ）は、手前が0.33×0.24×0.15m、奥が0.33×0.16×0.15mである。左側の最も手前の礫は袖石と考えられ、長さ（0.29m）、幅0.27、厚さ0.15mである。一方、右側の袖石は検出されなかったが、掘方調査では袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掘き出すなどの作業をしたことが想定でき



33号竪穴建物Ａ－Ａ′
Ⅳ．As-B
Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊、焼土粒を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-C、炭化物粒を微量、暗褐色土塊をやや多量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊～粒を少量含む。
６．暗褐色土10YR3/3　黒褐色土塊を少量含む。
７．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を多量含む。

第12図　33号竪穴建物



33号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′～Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム微粒をやや多量、炭化物粗粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～微粒、焼土粒を多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、焼土粒～微粒をやや多量含む。
4．ローム塊を主体とし、焼土塊を多量含む。
4′．4層土が焼土化したもの。
5．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を多量含む。
6．ローム塊を主体とする。
7．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊をやや多量含む。
8．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒、焼土小塊をやや多量含む。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム塊を少量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、ローム小塊をやや多量含む。
12．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を微量含む。

0　1：30　1m

第13図　33号竪穴建物カマド

る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

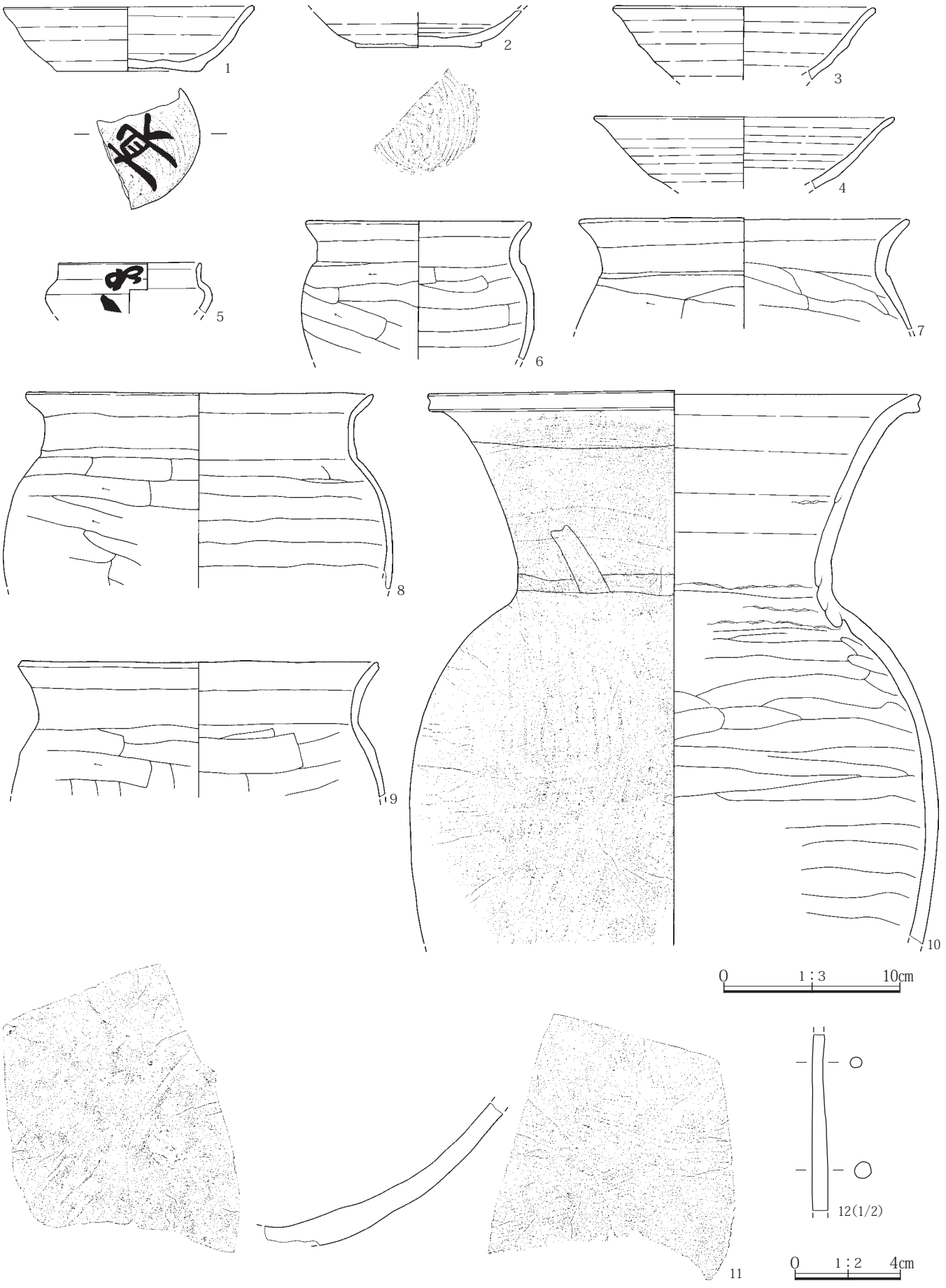
床面　調査範囲の床面はほぼ平坦である。

掘方　カマドの下部、床下土坑１と、数か所の浅いピット状の窪みを除いて、掘方は存在しなかった。

床下土坑　床下土坑１は南壁際に位置し、規模は長軸(1.21m)、短軸(0.95m)、深さ0.19mである。形状は不整形で、浅い皿状に掘り込まれていた。ローム塊を主体とし、多量の黒褐色土塊を含む土で埋没していた。土坑の底部が下位に堆積する粘土層まで届いていないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお､本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　「真」と書かれた須恵器杯(１)、「部」と書かれた須恵器小型壺(５)が出土したことが特筆される。いずれも埋没土中から出土したものである。土師器甕は少なくとも４個体(６～９)が確認されているが、これらはいずれもカマド内やカマド周辺から出土したものである。床下土坑１からは須恵器甕(10)が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片11点(50ｇ)、甕・壺類破片135点(1,991ｇ)、須恵器の杯・椀類破片66点(667ｇ)、甕・壺類破片18点(449ｇ)、瓦片５点、磨石３点(1,288.8ｇ)、礫片１点(15.9ｇ)、剝片４点(34.8ｇ)が出土している。このうち磨石１点(13)と礫片１点(14)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



第14図　33号竪穴建物出土遺物

42号竪穴建物（第15～17図、PL．３・４・284）

位置　Ｘ＝40,801～40,804、Ｙ＝－80,781～－80,786

形状　長方形

規模　長軸3.72m、短軸2.93m

面積　7.602㎡

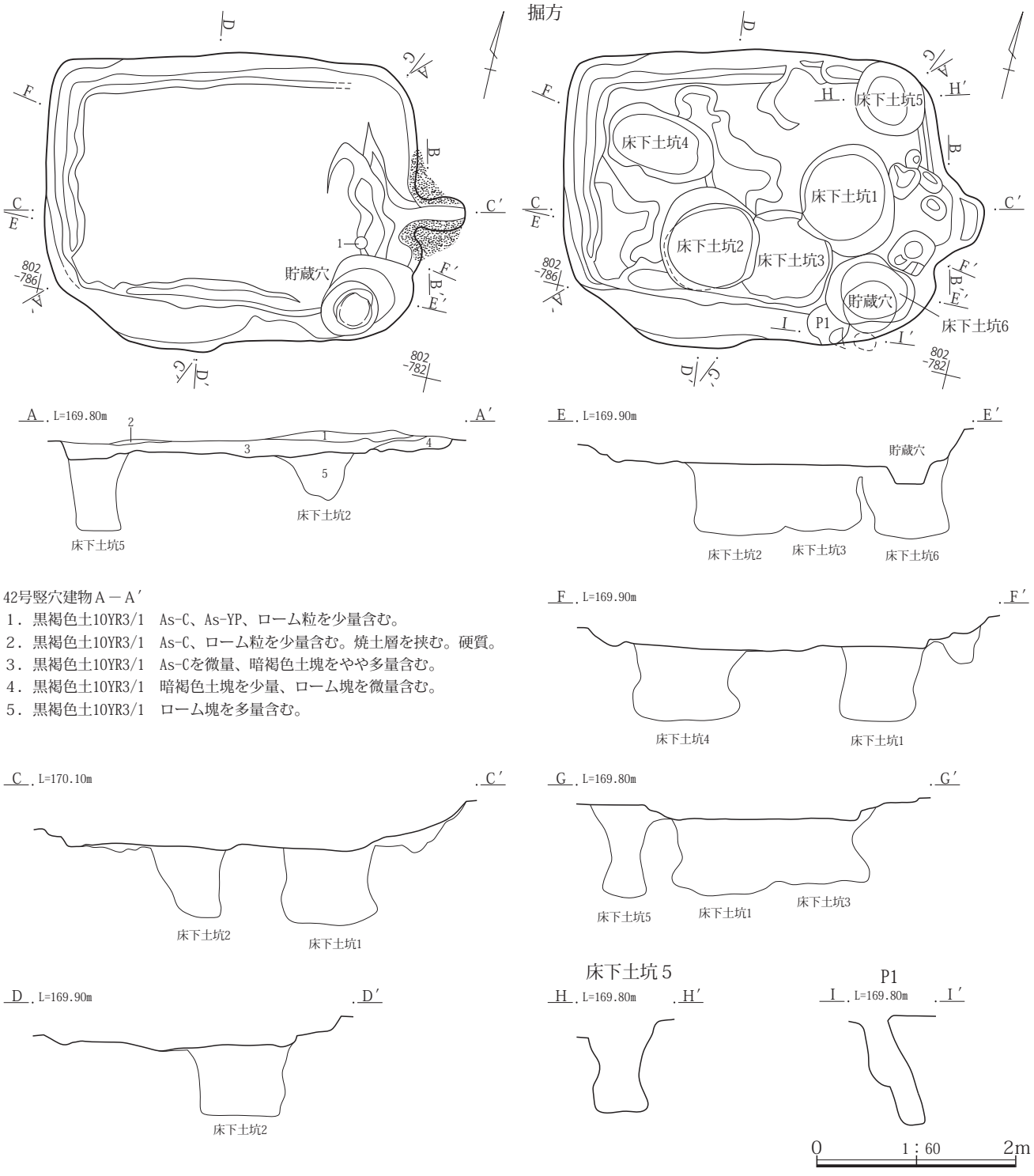
残存壁高　0.22m

方位　Ｎ－77°－Ｅ

重複　なし

埋没土　微量のAs-C、やや多量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋没していた。

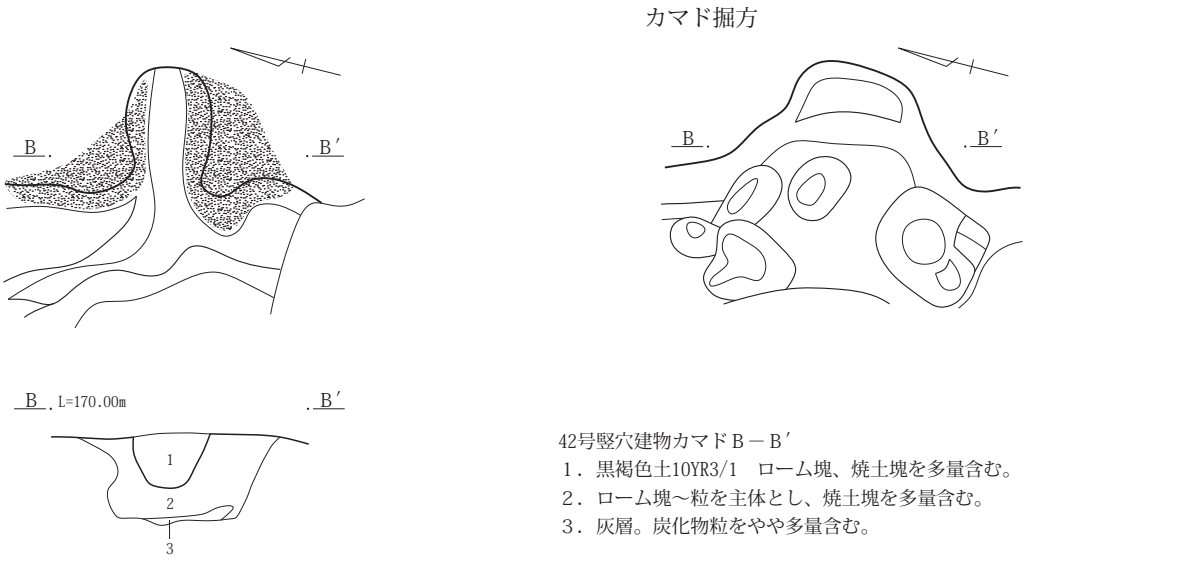
カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は0.74m、燃焼部幅は0.14mで、壁外に0.55m燃焼部・煙道が伸びる。ただし、向かって右側の側壁については、崩落したカマド天井を誤認している可能性があり、その



42号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。焼土層を挟む。硬質。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、暗褐色土塊をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　暗褐色土塊を少量、ローム塊を微量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。

第15図　42号竪穴建物



第16図　42号竪穴建物カマド

場合、燃焼部の幅は0.14mより広くなると考えられる。袖や側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

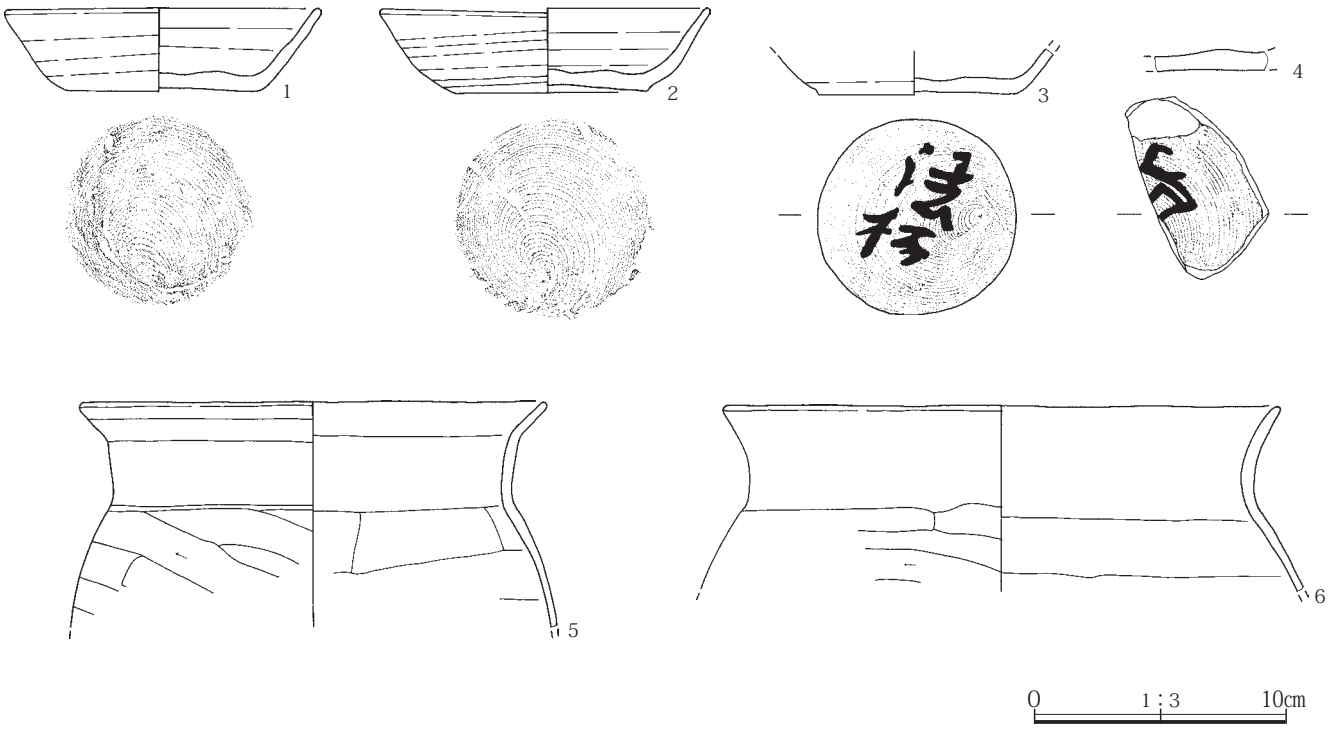
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.57m、短軸0.54m、深さ0.30m、形状は円形に近い不整形である。埋没土は不明だが、埋没土の上層に直径0.35mの礫が置かれていたことから、竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められた可能性が高いと考えられる。

壁際溝　東壁と南西隅付近を除く範囲から、幅0.13～0.34m、深さ0.01～0.03mの壁際溝を検出した。埋没土については不明である。

床面　本竪穴建物の床面の0.10m程度上層において硬化面を検出したが、これは重複する浅い竪穴建物の床面である可能性が考えられる。ただし、この硬化面は部分的で、全体像を明らかにすることはできなかった。本竪穴建物の床面は、中央付近から南半にかけて周囲よりやや低くなっており、高低差は最大で0.10mであった。これは下部に存在する床下土坑の影響による経年変化であると考えられる。

掘方　南壁付近を中心に６基の床下土坑と、カマド付近で浅いピット状の窪みを数か所検出したが、それ以外の場所では掘方は浅く、床面からの深さはおおむね0.05m以下であった。南壁際で検出したＰ１の規模は、長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.98m、形状は不整形である。ただし、Ｐ１は本竪穴建物の壁を壊すように斜めに掘られていることから、本竪穴建物に付随しないピットか、あるいは何らかの生物による痕跡である可能性も考えられる。

床下土坑　６基の床下土坑は南半に偏る傾向が認められ、規模（長軸×短軸×深さ）は、床下土坑１が1.02×0.93×0.75m、床下土坑２が0.90×0.85×0.75m、床下土坑３が0.94×(0.77)×0.65m、床下土坑４が1.12×0.66×0.80m、床下土坑５が0.74×0.69×0.77m、床下土坑６が0.87×0.66×0.69mである。形状は楕円形か円形に近い不整形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。また、多くの床下土坑について底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑２は、多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。それ以外の床下土坑については土層堆積に関する情報がないため、それぞれの土坑の新旧関係や埋没の状況などについては不明であるが、いずれも粘土



第17図　42号竪穴建物出土遺物

を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　「法師」と書かれた須恵器杯（３）と、文字の判読はできないものの墨書が認められる須恵器杯（４）が出土したことが特筆される。このうち３は、カマド内から出土したものである。須恵器杯（１）は、カマド前に正位で置かれていた。土師器甕は少なくとも２個体（５・６）が確認されているが、このうち５は掘方調査で出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の甕・壺類破片144点（1,134ｇ）、須恵器の杯・椀類破片24点（225ｇ）が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第２四半期の竪穴建物であると考えられる。なお、本竪穴建物よりも床面が10㎝程度高い竪穴建物が重複していた可能性が考えられる。

45号竪穴建物（第18～21図、PL．４・285・286）

位置　Ｘ＝40,815～40,820、Ｙ＝－80,787～－80,792

形状　長方形

規模　長軸4.50m、短軸3.74m

面積　13.104㎡

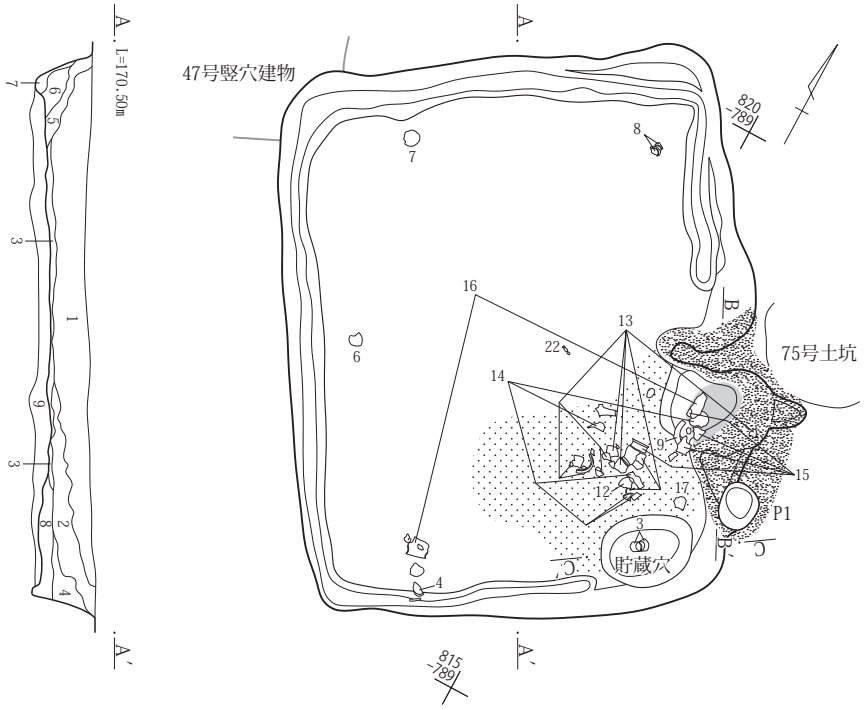
残存壁高　0.38m

方位　Ｎ－71°－Ｅ

重複　47号竪穴建物と重複し、45号竪穴建物が新しい。75号土坑と重複し、45号竪穴建物が古い。

埋没土　上層は多量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-C、焼土塊～粒を含む黒褐色土、または少量のAs-C、微量の焼土粒を含む黒褐色土などで埋没していた。

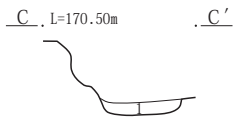
カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.15m、燃焼部幅は0.35ｍで、壁外に1.03m燃焼部・煙道が伸びる。袖や側壁・奥壁、そこから続くカマド横の壁上の部分は、多量の粘土によって構築されていた。このカマド横の壁上の部分には、棚状施設が存在したと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.48ｍである。なお、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡が認められなかったことから、このカマドに使用された粘土は、別の竪穴建物の床下土坑などから採取されたものと考えられる。向かって左側の袖には袖石が残存しており、長さ0.31m、幅0.23m、厚さ0.21ｍである。一方、右側の袖石は検出されなかったが、掘方調査では袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で



45号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、焼土塊、焼土粒をやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、焼土粒を微量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、焼土粒を微量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、焼土粒を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量、暗褐色土塊をやや多量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-C、暗褐色土塊を少量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
9．ローム塊～粒を主体とし、焼土粒を微量含む。

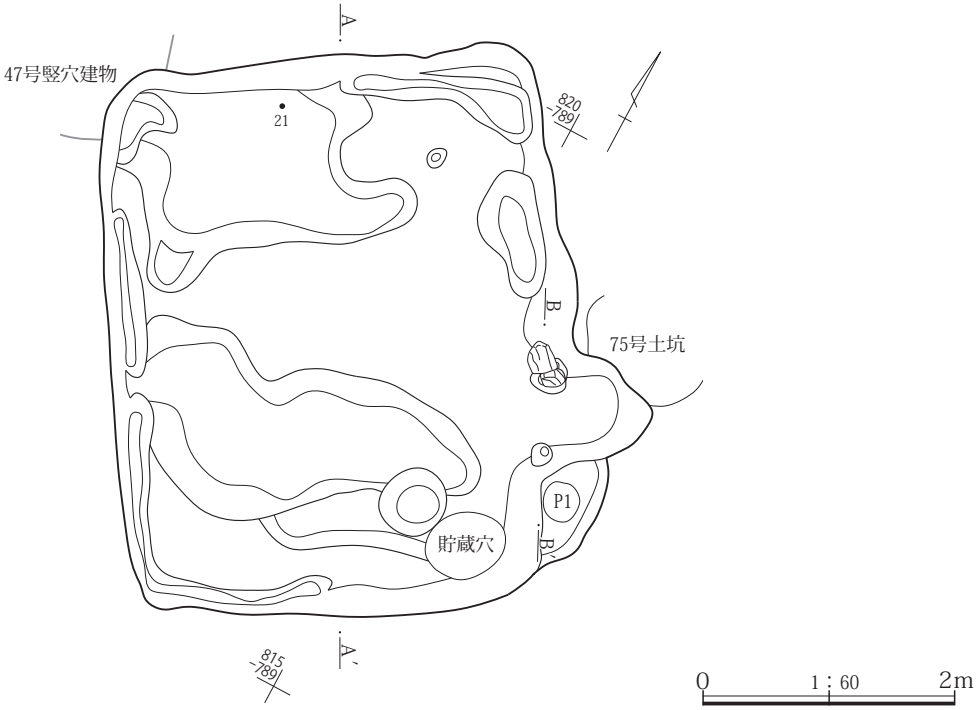
貯蔵穴



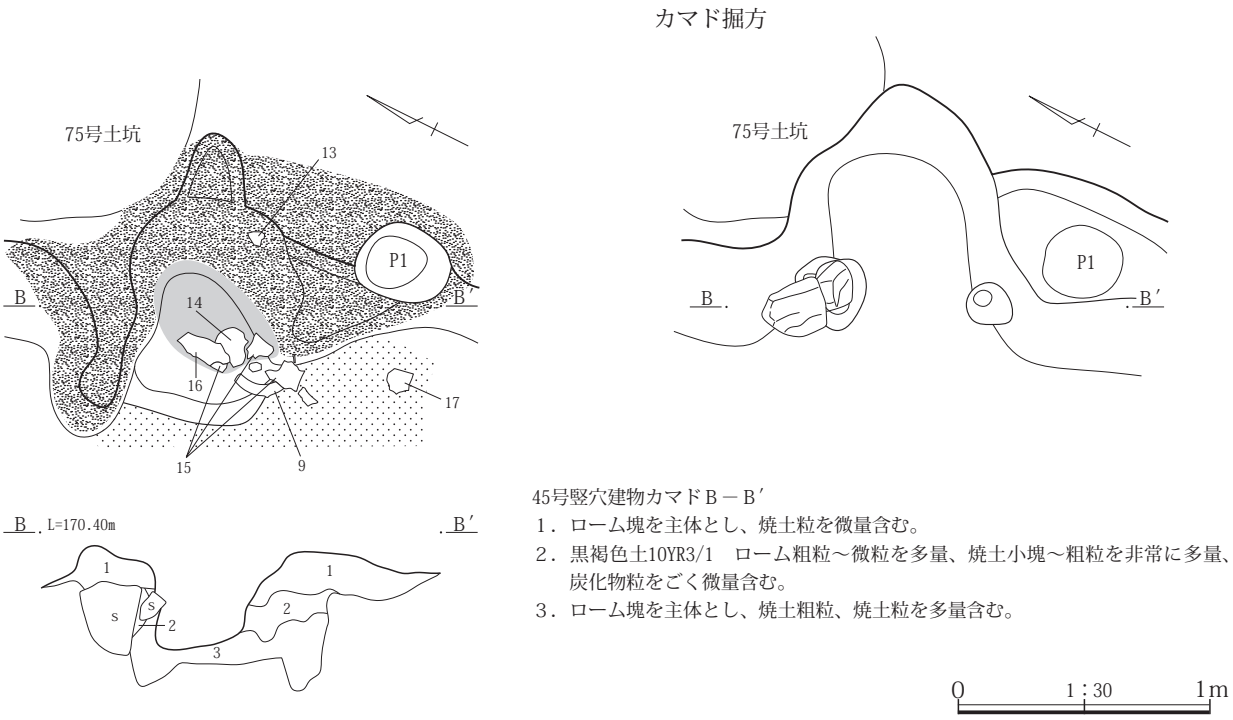
45号竪穴建物貯蔵穴Ｃ－Ｃ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。

掘方



第18図　45号竪穴建物



45号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′
１．ローム塊を主体とし、焼土粒を微量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　ローム粗粒～微粒を多量、焼土小塊～粗粒を非常に多量、炭化物粒をごく微量含む。
３．ローム塊を主体とし、焼土粗粒、焼土粒を多量含む。

0　1：30　1m

第19図　45号竪穴建物カマド

0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　カマド横で検出したＰ１の規模は、長軸0.35m、短軸0.30m、深さ0.17m、形状は楕円形である。土層断面の記録がないことから詳細は不明であるが、掘方調査によって周囲が棚状施設である可能性が高まったことから、Ｐ１も本竪穴建物に付随する何らかのピットである可能性が考えられる。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.72m、短軸0.57m、深さ0.13m、形状は楕円形である。少量のAs-C、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。

壁際溝　カマドや貯蔵穴が存在する南東隅付近を除く範囲から、幅0.16～0.39m、深さ0.01～0.18mの壁際溝を検出した。少量のAs-C、暗褐色土塊を含む黒褐色土や、少量のAs-C、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

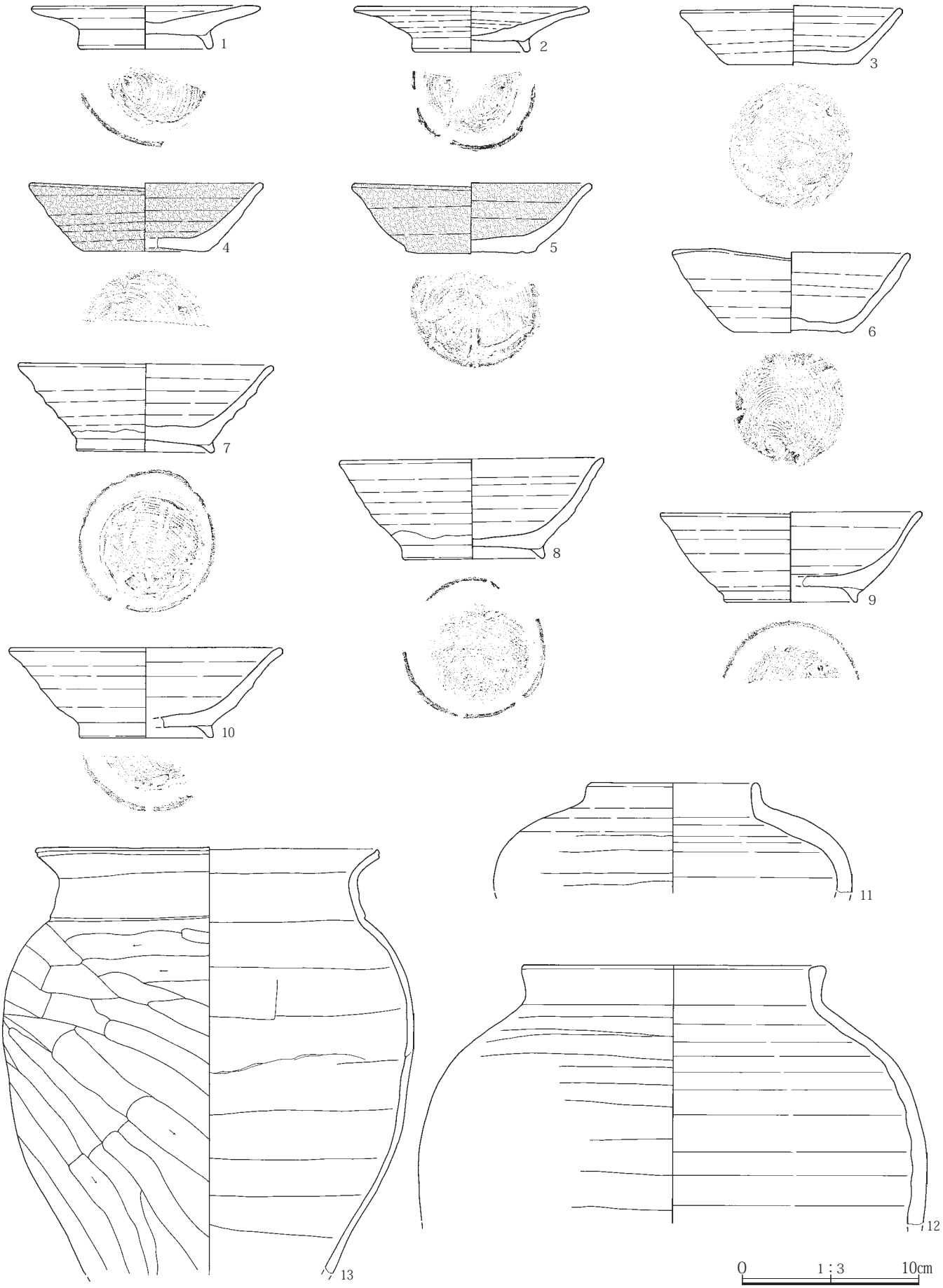
床面　床面はほぼ平坦である。カマド前や貯蔵穴の周辺において硬化面が認められた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さはおおむね0.05～0.15mであった。床面は微量の焼土粒を含むローム塊を主体とする土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

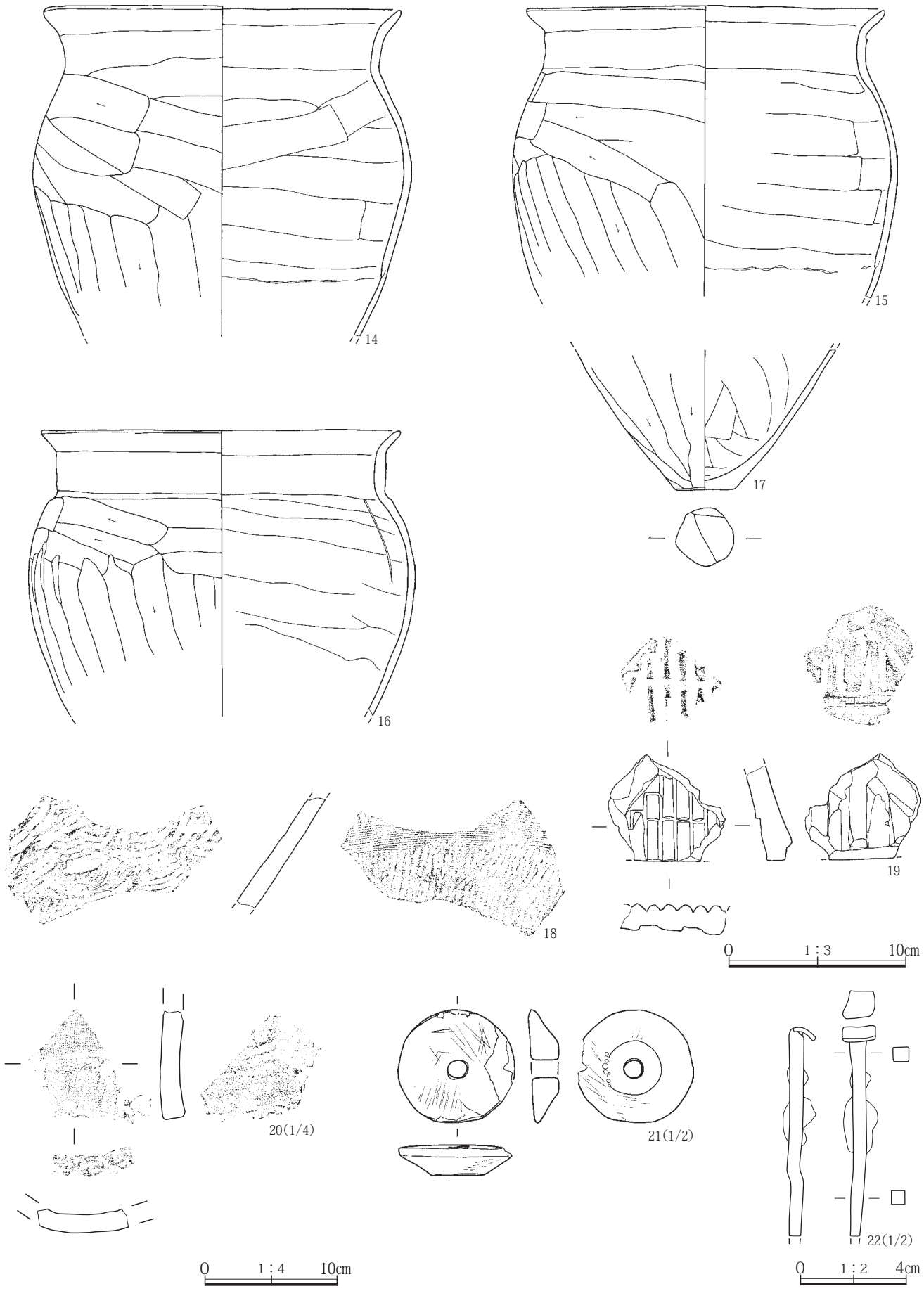
床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　小破片ではあるが、瓦塔が１点(19)出土したことが特筆される。この瓦塔は、本竪穴建物よりも若干古い９世紀前葉のものであると考えられる。須恵器杯（３）は、貯蔵穴の底面に逆位で置かれていた。土師器甕は少なくとも４個体(13～16)が確認されているが、これらはいずれもカマド内やカマド周辺から出土したものである。竪穴部中央の床面直上からは、釘(22)が出土している。掘方調査では、北壁付近から紡輪(21)が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片54点(335ｇ)、甕・壺類破片800点(4,456ｇ)、須恵器の杯・椀類破片322点(3,783ｇ)、甕・壺類破片35点(833ｇ)、瓦片75点、敲石１点(753.1ｇ)、礫１点(47.9ｇ)、剝片３点(304.7ｇ)が出土している。このうち敲石(23)と礫(24)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(黒浜式ないし有尾式)の口縁部破片は、本郷満行原遺跡の遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。



第20図　45号竪穴建物出土遺物（１）



第21図　45号竪穴建物出土遺物（２）

47号竪穴建物（第22～25図、PL．４・５・286）

位置　X＝40,817～40,822、Y＝－80,792～－80,797

形状　正方形

規模　長軸4.77m、短軸4.72m

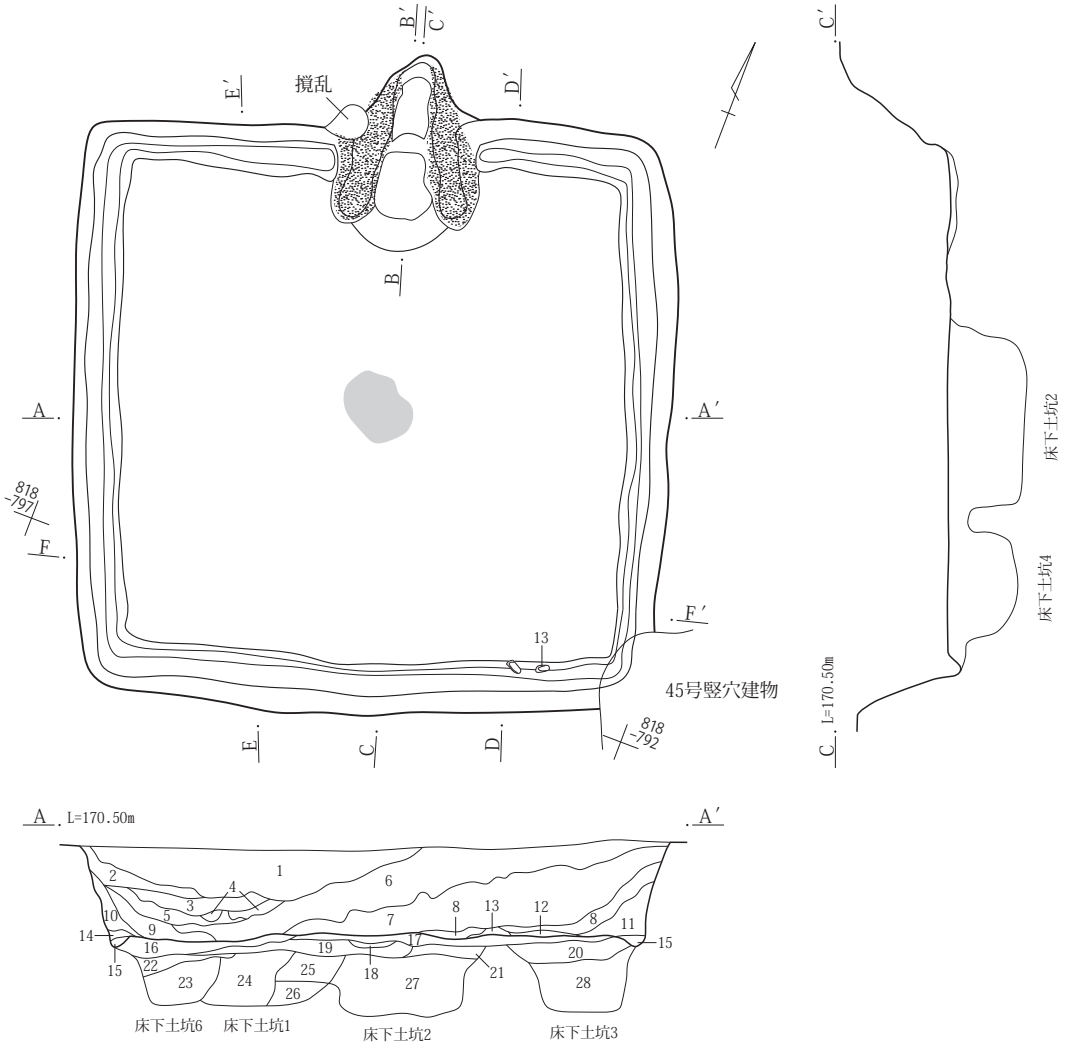
面積　19.120㎡

残存壁高　0.81m

方位　N－15°－W

重複　45号竪穴建物と重複し、47号竪穴建物が古い。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。中層は非常に多量のロー

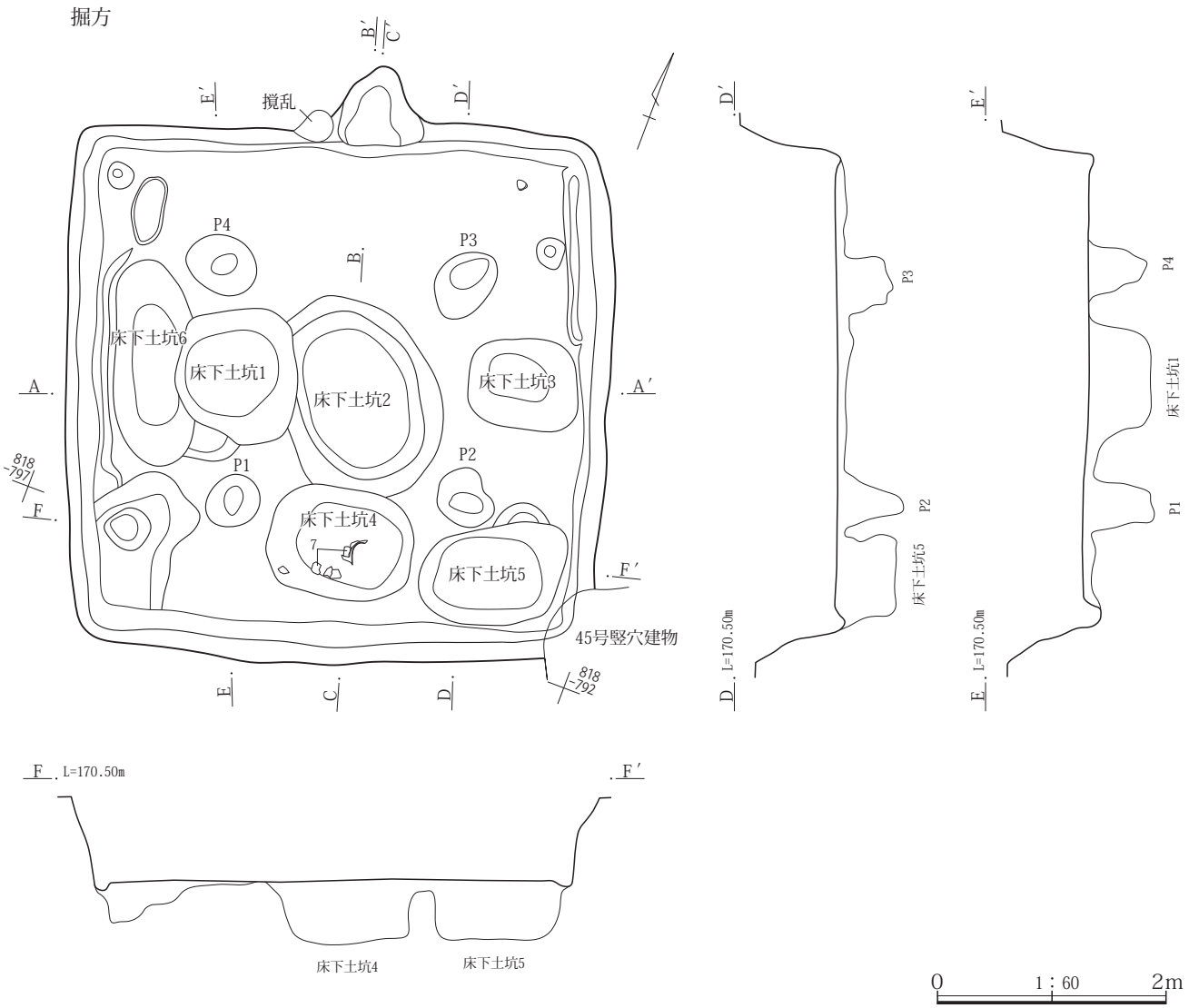


47号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム小塊～粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粗粒～粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粗塊を多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　ローム粗塊～粗粒を非常に多量含む。
7．暗褐色土10YR3/3　黒色土小塊、ローム粗粒～粒を少量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒～粒を少量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　暗褐色土小塊をやや多量含む。
11．暗色土10YR3/3　黒褐色土小塊、ローム粒を少量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒を非常に多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒を多量含む。
14．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒を少量含む。
15．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒をやや多量含む。
16．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
17．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム小塊～粗粒を多量含む。硬質。
18．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒を少量、焼土小塊～粒を多量含む。
19．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。
20．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量、焼土粒を微量含む。
21．ローム塊を主体とし、As-YPを多量、黒褐色土塊を少量含む。
22．黒褐色土10YR3/1　ローム粗粒～粒をやや多量含む。
23．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を非常に多量含む。
24．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～微粒を多量含む。
25．黒褐色土10YR3/1　ローム小塊～粗粒を多量含む。
26．ローム小塊、ローム粗粒～粒を主体とし、焼土塊を少量含む。
27．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粗粒を多量含む。
28．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。

0　1：60　2m

第22図　47号竪穴建物



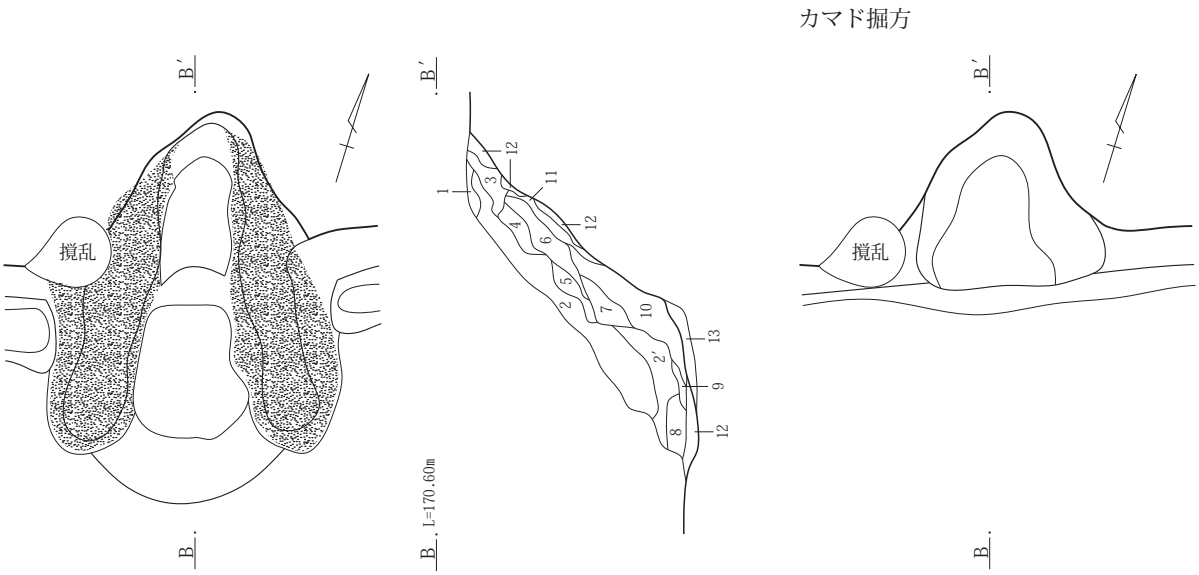
第23図　47号竪穴建物掘方

ム粗塊～粗粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量の黒褐色土小塊、ローム粗粒～粒を含む暗褐色土や、少量のAs-C、ローム粗粒～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。このうち非常に多量のローム粗塊～粗粒を含む中層は、本竪穴建物がやや埋没した段階で、再び床下が掘り込まれ粘土採取が行われた痕跡である可能性が考えられる。その場合、床下土坑６は、本竪穴建物の廃絶後に掘られた土坑であると考えられる。

カマド　北壁のほぼ中央に位置する。残存長は1.50m、燃焼部幅は0.29mで、壁外に0.63m煙道が伸びる。袖は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。煙道は壁外に長く延びずに、およそ50～60°の角度で立ち上がる。両袖ともよく残存していたにもかかわらず袖石は検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　床面調査時には確認できなかったが、掘方調査で検出したＰ１～Ｐ４が主柱穴である可能性が高いと考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。しかし、全景写真を見ると、北東隅付近や南東隅付近の床面が黒く見える。このことから、この北東隅や南東隅に貯蔵穴が存在した可能性が考えられる。



47号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

１．にぶい橙色土7.5YR6/4　焼土粒を少量含む。
２．黄褐色土2.5YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。
２′.赤褐色土5YR4/6　２層土が被熱変色したもの。
３．黒褐色土10YR3/1　焼土塊～粗粒を多量含む。
４．焼土小塊を主体とする。
５．にぶい橙色土7.5YR6/4　焼土粒をやや多量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊、焼土粒をやや多量含む。
７．ローム塊を主体とする。
８．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粗粒を多量含む。
９．焼土粗粒を主体とする。
10．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粗粒をやや多量含む。
11．焼土粒を主体とする。
12．黒褐色土10YR3/1　灰を非常に多量、焼土粒をやや多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム粗粒を多量含む。

0　1：30　1m

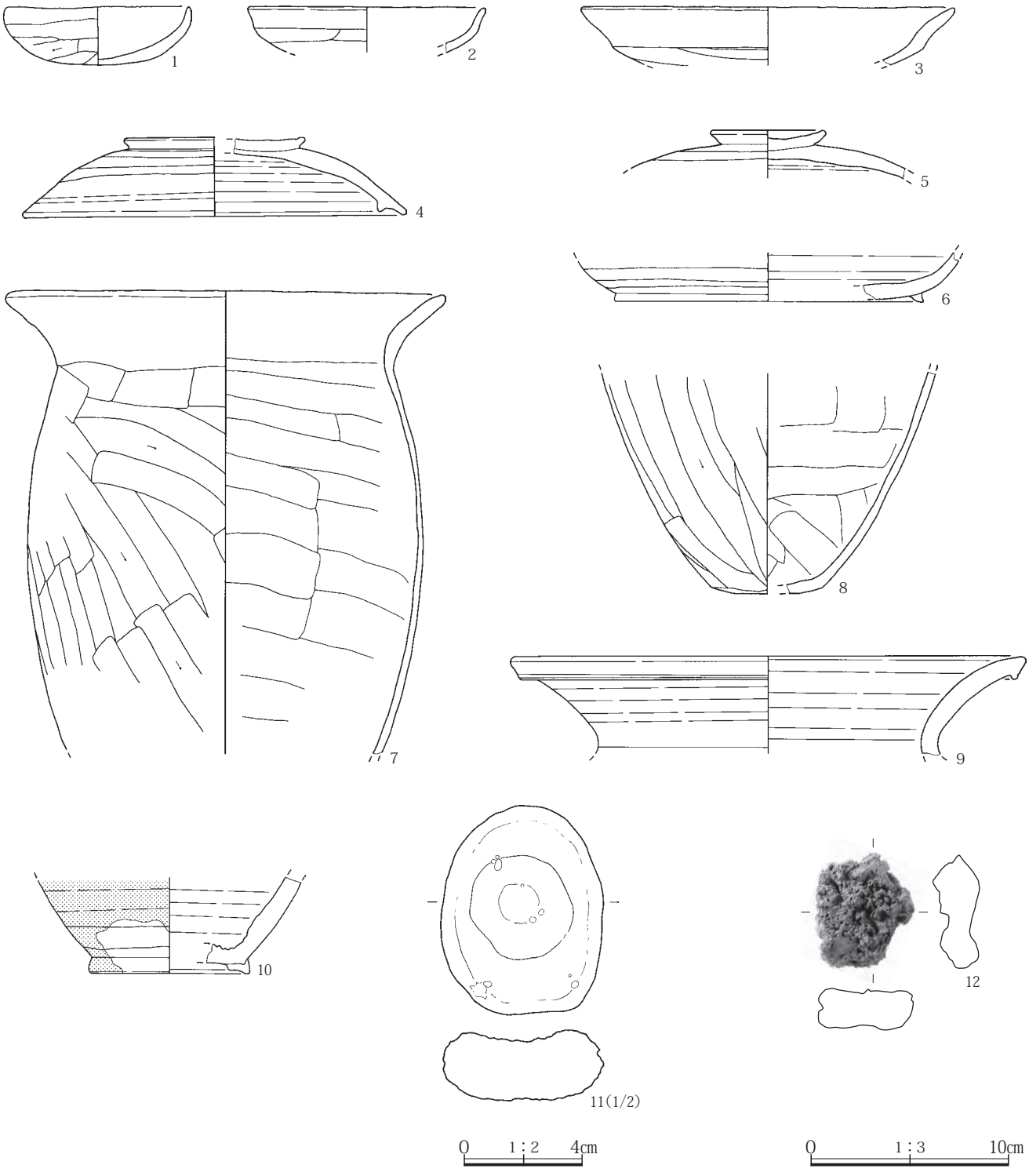
第24図　47号竪穴建物カマド

壁際溝　幅0.15～0.29m、深さ0.13mの全周する壁際溝を検出した。やや多量のAs-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　ほぼ平坦である。中央付近には焼土塊が集中していたが、これは何らかの理由により床面が焼土化した可能性も考えられる。

掘方　掘方は全体的に浅く、床面からの深さはおおむね0.03～0.15mであった。主に南半から６基の床下土坑と、主柱穴と考えられる４基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.49×0.44×0.54m、Ｐ２が0.53×0.42×0.55m、Ｐ３が0.65×0.48×0.50m、Ｐ４が0.60×0.50×0.47mで、形状はＰ２が不整形、それ以外はいずれも楕円形である。床面はローム塊～粒を含む黒褐色土とローム塊を主体とする土で、何層にも貼床されていた。

床下土坑　６基の床下土坑は南半に偏る傾向が認められ、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.18×1.06×0.54m、床下土坑２が1.83×1.36×0.59m、床下土坑３が0.95×0.81×0.50m、床下土坑４が1.26×0.97×0.51m、床下土坑５が1.21×0.88×0.49m、床下土坑６が1.81×(0.67)×0.54mである。形状は楕円形か円形に近い不整形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。床下土坑１～３は、いずれも多量のローム塊を含む黒褐色土や、ローム塊を主体とする土で埋没していた。これらの床下土坑は、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑４・５の埋没土は不明であるが、床下土坑１～３と同様に、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。床下土坑１・２・６については新旧関係が認められるが、それ以外の床下土坑については新旧関係は不明である。床下土坑６については、硬化した床面(17層)が本土坑の上面付近では見られないことや、中層(６層)に非常に多量のローム粗塊～粗粒が含まれていたことなどから、本竪穴建物の廃絶後、７層付近まで埋没した段階で、再び床面が掘り込まれ粘土採取が行われた痕跡であると考えられる。採取された粘土の用途としては、床下からの粘土採



第25図　47号竪穴建物出土遺物

取が行われていない33号・45号・49号竪穴建物のカマド構築材として使用された可能性が考えられる。ただし、45号竪穴建物については本竪穴建物と重複関係にあり、45号竪穴建物が構築された９世紀第３四半期の時点では既に本竪穴建物は完全に埋没していた可能性が高いと考えられる。その場合、本遺跡内には該当する竪穴建物が存在しないため、隣接する本郷満行原遺跡で竪穴建物のカマド構築材として使用された可能性も考えられるであろう。なお､本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器杯３点（１～３）、須恵器蓋２点（４・５）、須恵器椀１点（６）、須恵器壺２点（９・10）は、いずれも埋没土中から出土したものである。土師器甕は少

なくとも２個体（７・８）が確認されているが、これらはいずれも掘方調査（７については床下土坑４の上層）で出土したものである。また、埋没土中からは、石製品(11)と鉄滓(12)が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片33点(218ｇ)、甕・壺類破片147点(1,600ｇ)、須恵器の杯・椀類破片26点(183ｇ)、甕・壺類破片26点(84ｇ)、敲石３点(1,358.2ｇ)が出土している。このうち敲石１点(13)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。

48号竪穴建物（第26・27図、PL．５・６・287）

位置　Ｘ＝40,811～40,815、Ｙ＝－80,783～－80,787

形状　長方形

規模　長軸3.85m、短軸3.08m

面積　9.018㎡

残存壁高　0.54m

方位　Ｎ－71°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のローム塊～粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-C、少量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊を含む上層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.81m、燃焼部幅は0.45mで、壁外に0.67m燃焼部・煙道が伸びる。側壁とそこから続くカマド横の壁上の部分は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。このカマド横の壁上の部分には、棚状施設が存在したと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.49mである。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　東壁を除く範囲から、幅0.11～0.34m、深さ0.01～0.05mの壁際溝を検出した。夾雑物を含まない黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と同様の土で埋没している箇所もあった。

床面　ほぼ平坦である。

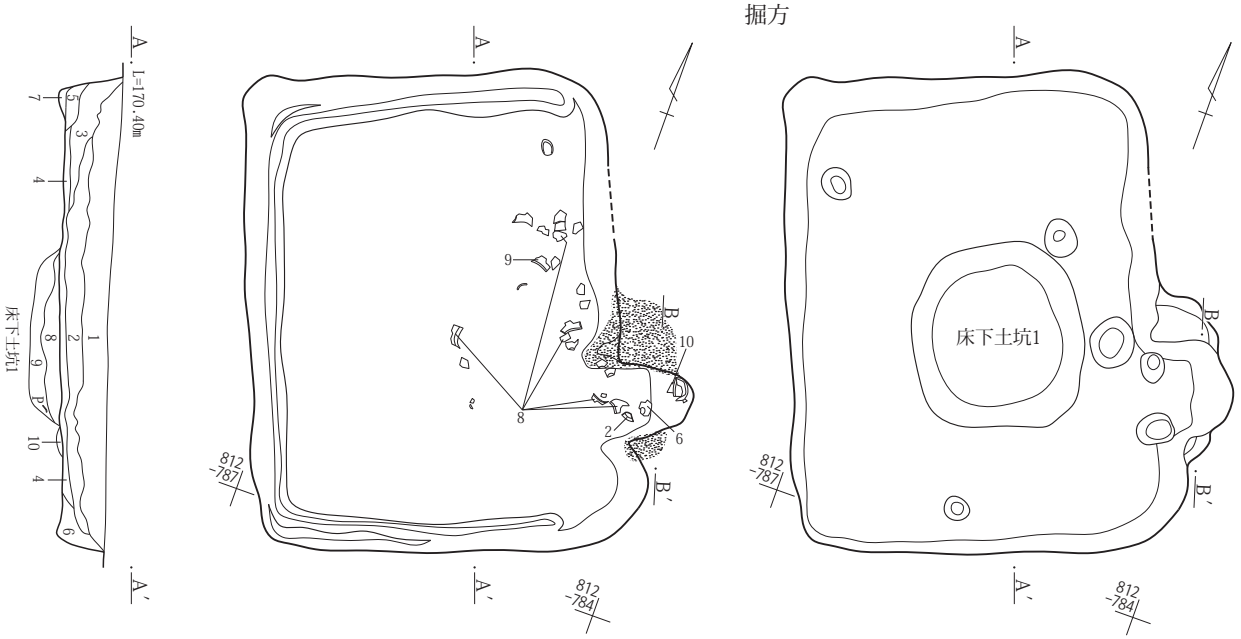
掘方　中央の床下土坑１と、数か所の浅いピット状の窪みを除いて、掘方はほとんど存在しなかった。

床下土坑　床下土坑１はほぼ中央に位置し、規模は長軸1.45m、短軸1.36m、深さ0.29mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。ローム塊を主体とする土で埋没しており、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは①である。

出土遺物　須恵器杯のうち２・６はカマド内の使用面近くから、それ以外は埋没土中から出土したものである。土師器甕は少なくとも６個体（８～13）が確認されているが、このうち８はカマド内から出土した破片とカマド周辺の床面近くから出土した破片が接合したものである。９はカマド周辺の床面近くから、10～13はカマド内から、それぞれ出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片31点(155ｇ)、甕・壺類破片499点(3,675ｇ)、須恵器の杯・椀類破片150点(1,200ｇ)、甕・壺類破片８点(210ｇ)、剝片が２点(3.0ｇ)出土している。

所見　土師器甕１点(11)は９世紀第４四半期であるが、残る出土遺物から９世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

掘方

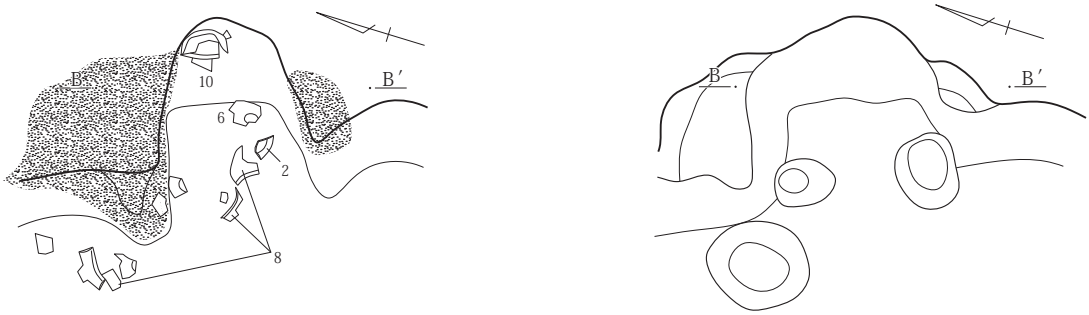


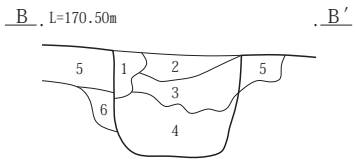
48号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粒、焼土粒をやや多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、ローム塊～粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊～粗粒を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム小塊、焼土粒を少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粗粒を少量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊を少量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
８．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊を少量含む。硬質。
９．ローム塊を主体とし、焼土塊を多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。層厚約３㎜の焼土層を含む。硬質。

0　1：60　2m

カマド掘方



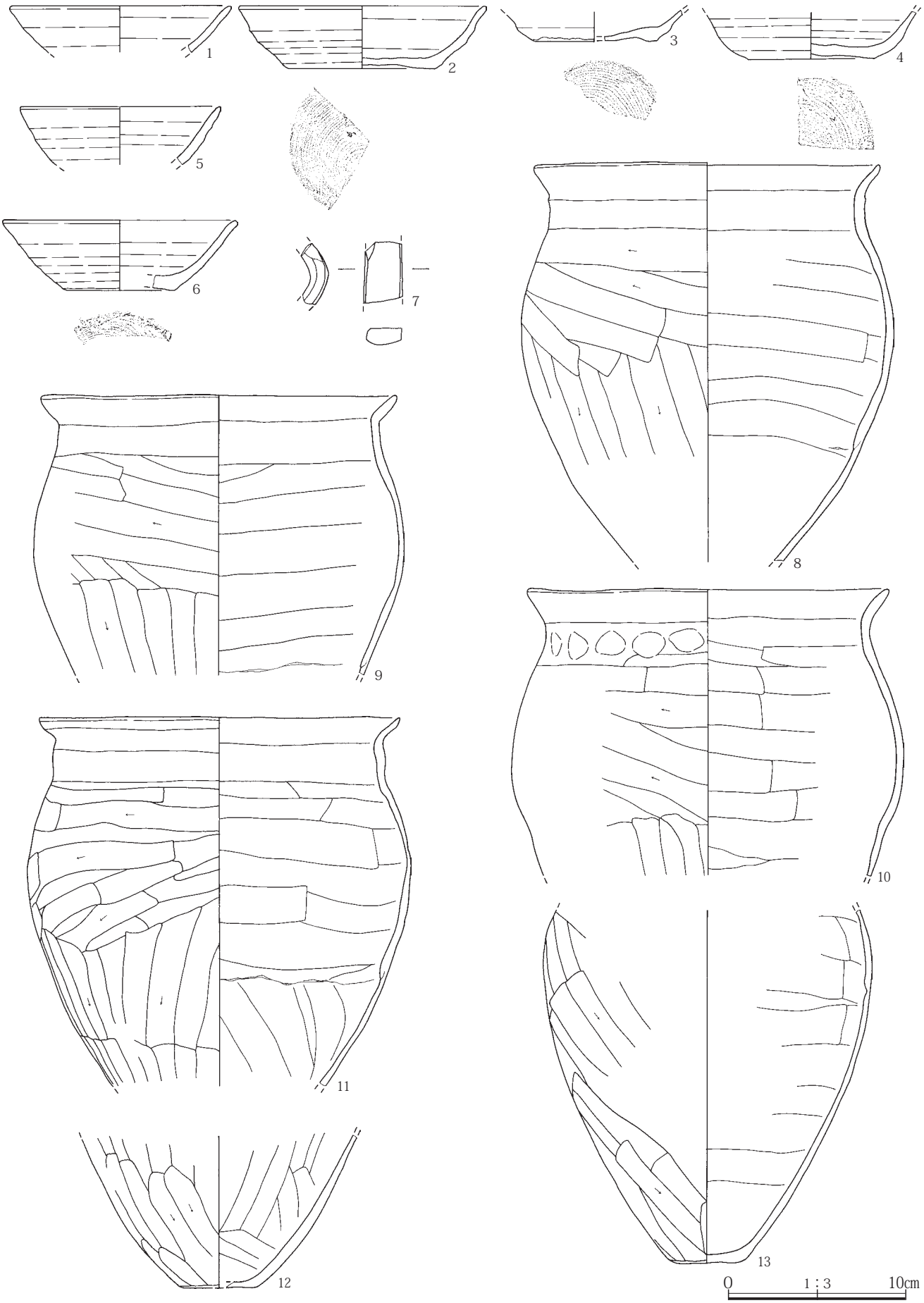


48号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

１．ローム塊を主体とし、焼土塊を非常に多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粗粒、焼土塊を多量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、焼土粒を多量、焼土粗粒をやや多量含む。
５．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。
６．ローム塊を主体とし、焼土塊～粗粒をやや多量含む。

0　1：30　1m

第26図　48号竪穴建物・カマド



第27図　48号竪穴建物出土遺物

49号竪穴建物(第28・29図、PL．６・288)

位置　Ｘ＝40,808～40,812、Ｙ＝－80,790～－80,794

形状　不整形

規模　長軸3.83m、短軸2.75m

面積　(8.898㎡)

残存壁高　0.24m

方位　Ｎ－17°－Ｅ

重複　50号竪穴建物と重複し、49号竪穴建物が新しい。

埋没土　少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。床面付近に認められるローム塊は、カマドを壊した際に堆積した可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.62m、燃焼部幅は推定0.40mで、壁外に0.62m燃焼部が伸びる。側壁や奥壁の一部は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。ただし、本竪穴建物の床下土坑は、その底面が粘土層まで達していないことから、このカマドに使用された粘土は、別の竪穴建物の床下土坑などから採取されたものと考えられる。向かって右側の側壁については、何らかの事情により検出できなかった。袖石は検出されず、両袖とも残存していなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。さらに掘方調査では、カマドの下部が長軸1.11m、短軸0.71m、深さ0.08mの規模で掘り窪められていたことが確認できた。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　東隅に位置し、規模は長軸0.66m、短軸0.64m、深さ0.14m、形状は楕円形である。主に微量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒、焼土小塊～粒を含む黒褐色土で埋没しており、廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。また、底面には0.02～0.06mの厚さで粘土が貼られていた。

壁際溝　検出されなかった。

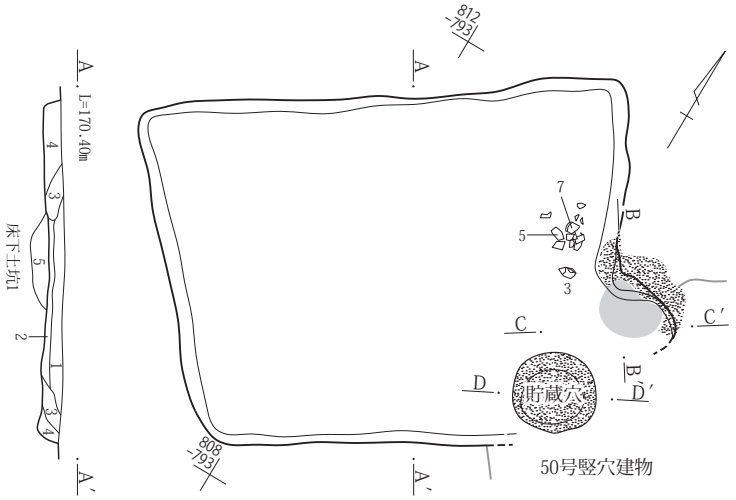
床面　床面はほぼ平坦である。

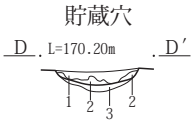
掘方　カマドの下部、床下土坑１・２を除いて、掘方は存在しなかった。

床下土坑　２基の床下土坑は中央と北隅付近に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.28×0.76×0.17m、床下土坑２が0.82×0.55×0.08mである。形状は不整形と楕円形で、どちらも浅い皿状に掘り込まれていた。床下土坑１は多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没しており、人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。床下土坑２の埋没土については不明である。いずれの床下土坑も底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　カマド周辺の床面直上から出土した緑釉陶器皿(７)の存在が特筆される。須恵器杯(１)は埋没土中から、須恵器椀２点(２・４)はカマド内から、残る須恵器椀２点(３・５)はカマド周辺の床面直上から出土したものである。土師器甕は少なくとも１個体(８)が確認されているが、これは埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片４点(22ｇ)、甕・壺類破片134点(720ｇ)、須恵器の杯・椀類破片46点(378ｇ)、甕・壺類破片18点(891ｇ)、削器２点(72.0ｇ)が出土している。

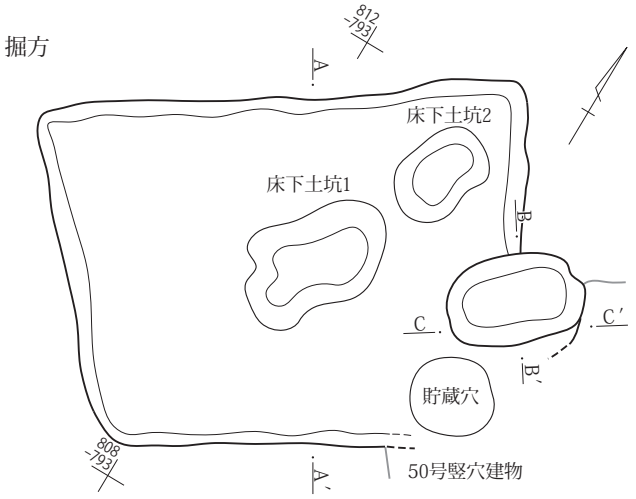
所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

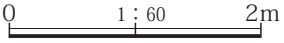


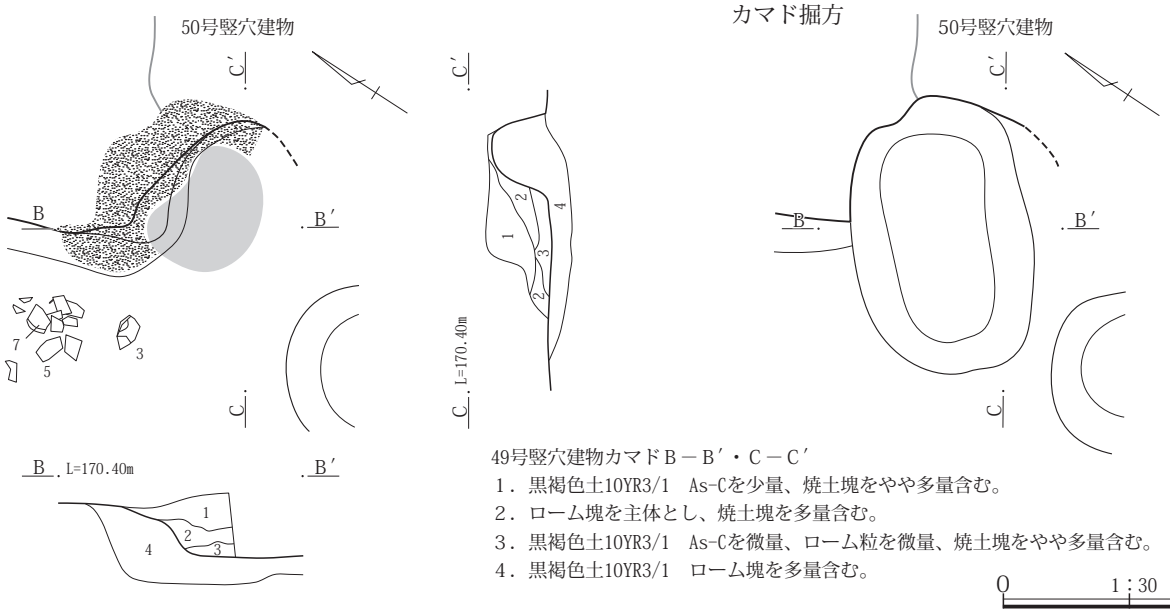


49号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、焼土粒をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。

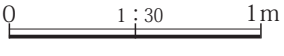
49号竪穴建物貯蔵穴Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム小塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　ローム粒、焼土粒を少量含む。
3．底面に貼られたローム土。



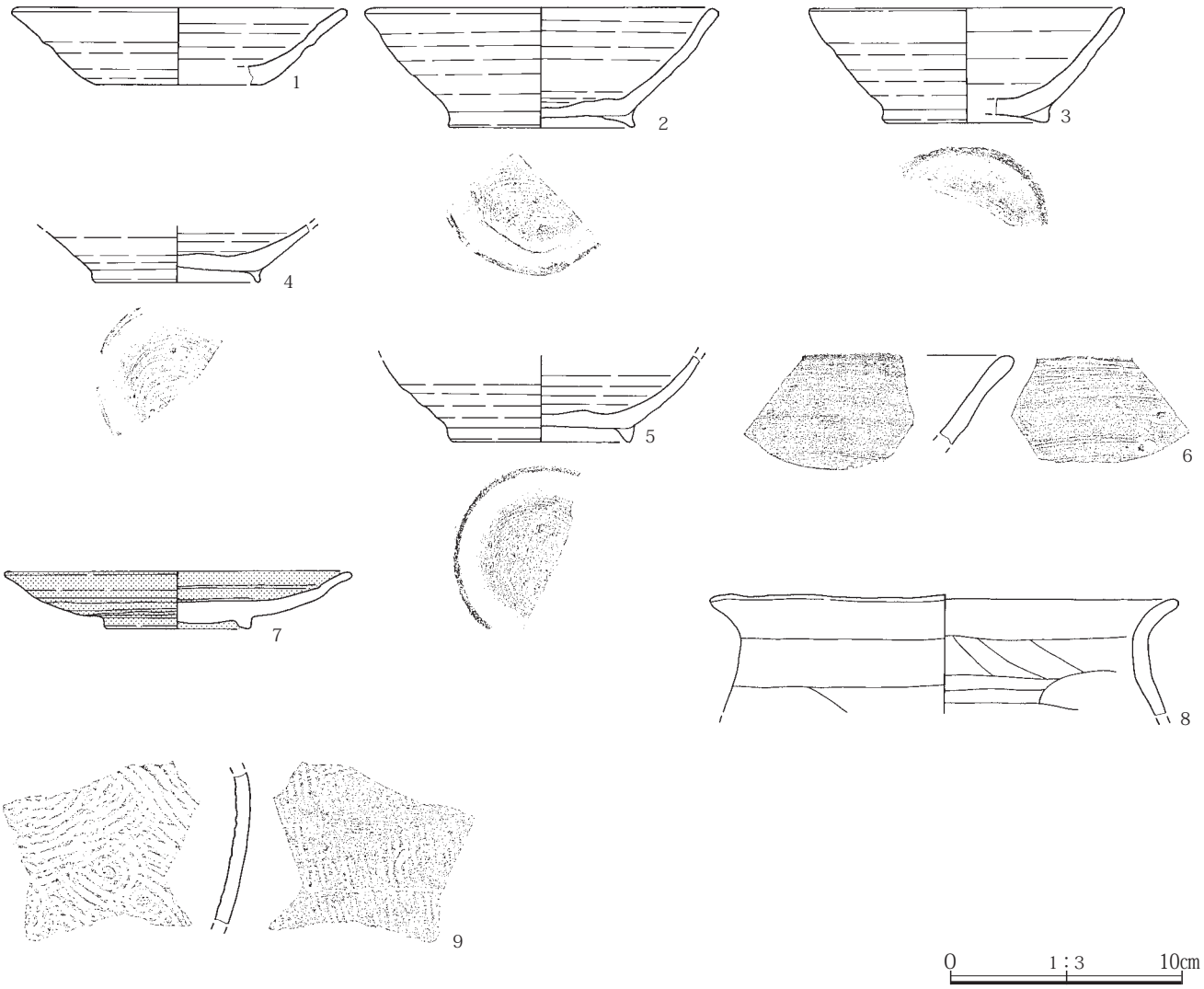




49号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、焼土塊をやや多量含む。
2．ローム塊を主体とし、焼土塊を多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒を微量、焼土塊をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。



第28図　49号竪穴建物・カマド



第29図　49号竪穴建物出土遺物

50号竪穴建物（第30図、PL．６・288）

位置　Ｘ＝40,807～40,812、Ｙ＝－80,786～－80,791

形状　正方形

規模　長軸4.23m、短軸3.96m

面積　（13.114㎡）

残存壁高　0.26m

方位　Ｎ－32°－Ｗ

重複　49号竪穴建物と重複し、50号竪穴建物が古い。

埋没土　As-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　検出されなかった。北西隅は重複する49号竪穴建物によって壊されているが、この位置にカマドが存在していたとは考えにくい。このような状況から、本遺構はカマドをもたない竪穴状遺構である可能性が考えられる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

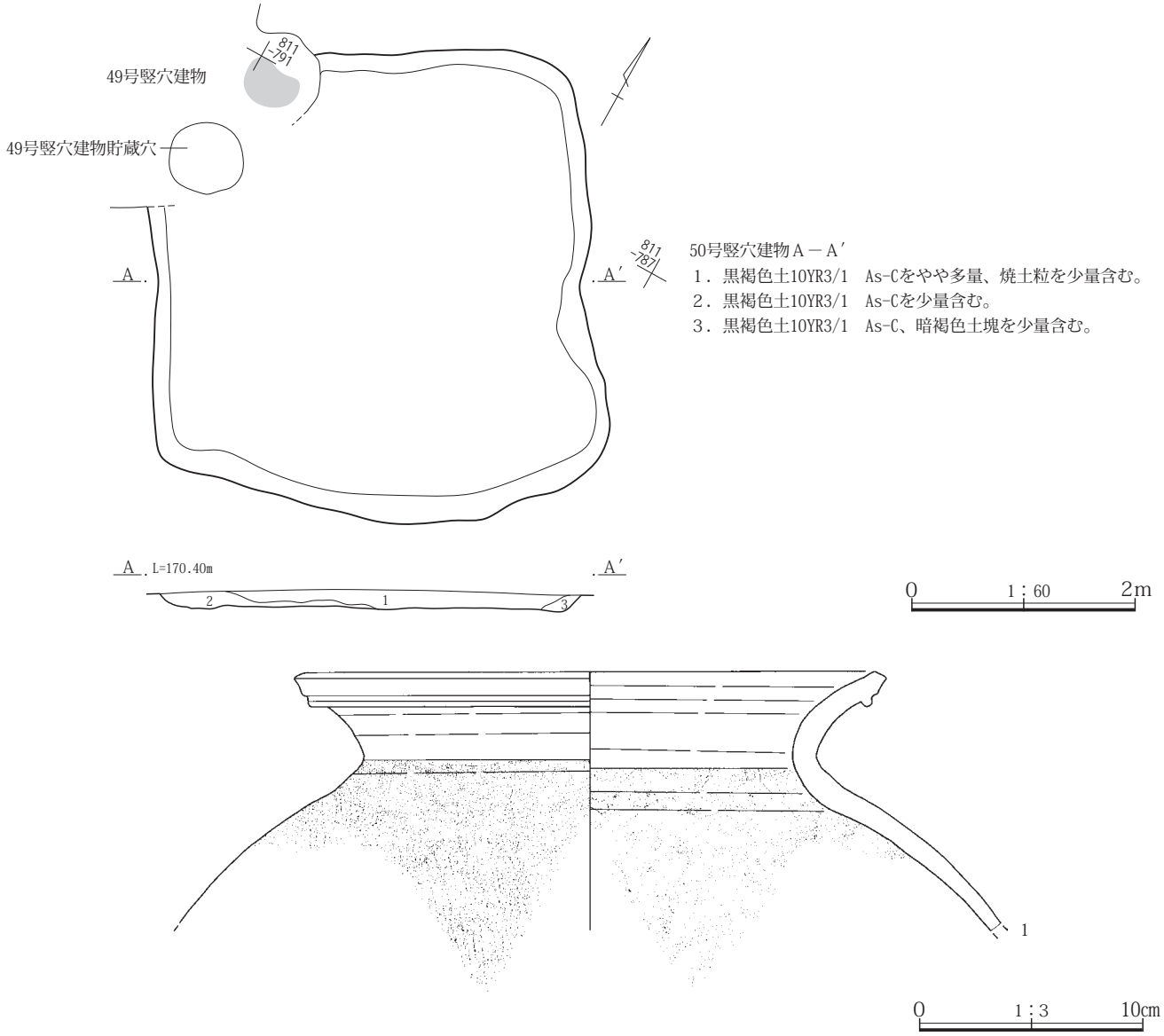
床面　ほぼ平坦である。

掘方　地山を床面としており掘方は存在しなかった。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　埋没土中から須恵器甕（１）が出土しているが、これは45号竪穴建物の埋没土中から出土した破片と接合した。なお、ここに掲載した以外に出土遺物はない。

所見　出土遺物が少ないことから時期を断定することは難しいが、出土遺物から９世紀代の竪穴状遺構である可能性が考えられる。



第30図　50号竪穴建物と出土遺物

55号竪穴建物（第31・32図、PL．６・７・288）

位置　Ｘ＝40,820～40,822、Ｙ＝－80,789～－80,792

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(2.64m)、短軸(2.18m)

面積　(2.301㎡)

残存壁高　0.61m

方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、やや多量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム塊～細粒、炭化物粒を含む黒褐色土などで埋没していた。南東隅に認められる多量のローム塊や焼土塊は、カマドを壊した際に堆積したものである可能性が考えられる。

カマド　調査範囲からは検出されなかった。北東半が調査区外であり、また、南東隅には多量のローム塊や焼土塊が堆積していたことから、この南東隅付近にカマドが存在していた可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取したと考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　南東隅と南西隅において検出したピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.58×0.46×0.28m、Ｐ２が0.47×0.38×0.47mである。これらのピットがどのような機能を有するかは不明である。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　調査範囲のほぼすべてで、幅0.18～0.30m、深さ0.01～0.03mの壁際溝を検出した。少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた

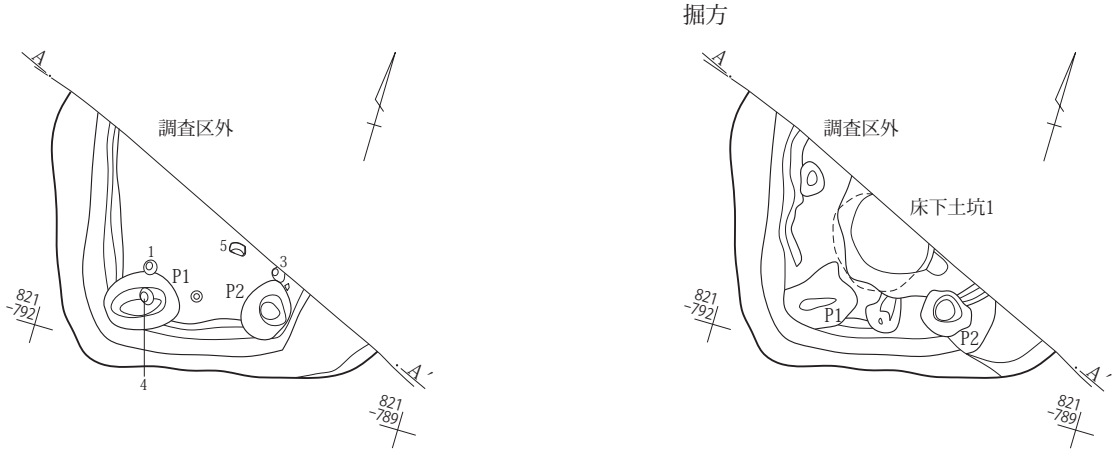
床面　調査範囲の床面はほぼ平坦である。

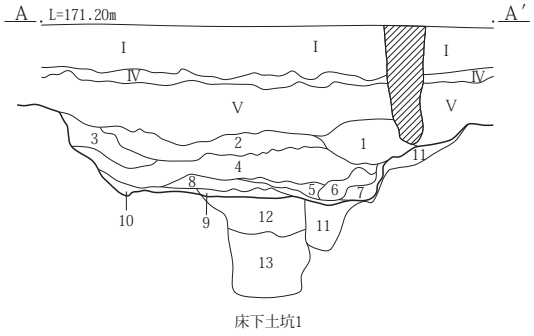
掘方　中央の床下土坑１と、いくつかの浅いピット状の窪みを除いて掘方は浅く、床面からの深さはおおむね0.05m以下であった。

床下土坑　床下土坑１は中央付近に位置すると推測され、規模は、長軸1.27m、短軸(0.61m)、深さ0.82mである。形状は不整形で､円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。上層は少量のローム塊を含む黒褐色土、下層は非常に多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯のうち１は床面近くから、３・４は埋没土中から、４はＰ１の埋没土上層から、それぞれ出土したものである。また、須恵器長頸壺(５)が床面近くから、須恵器横瓶(６)が埋没土中から出土している。土師器甕は少なくとも１個体(７)が確認されているが、これは埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片13点(126ｇ)、甕・壺類破片45点(333ｇ)、須恵器の杯・椀類破片12点(120ｇ)、甕・壺類破片４点(209ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



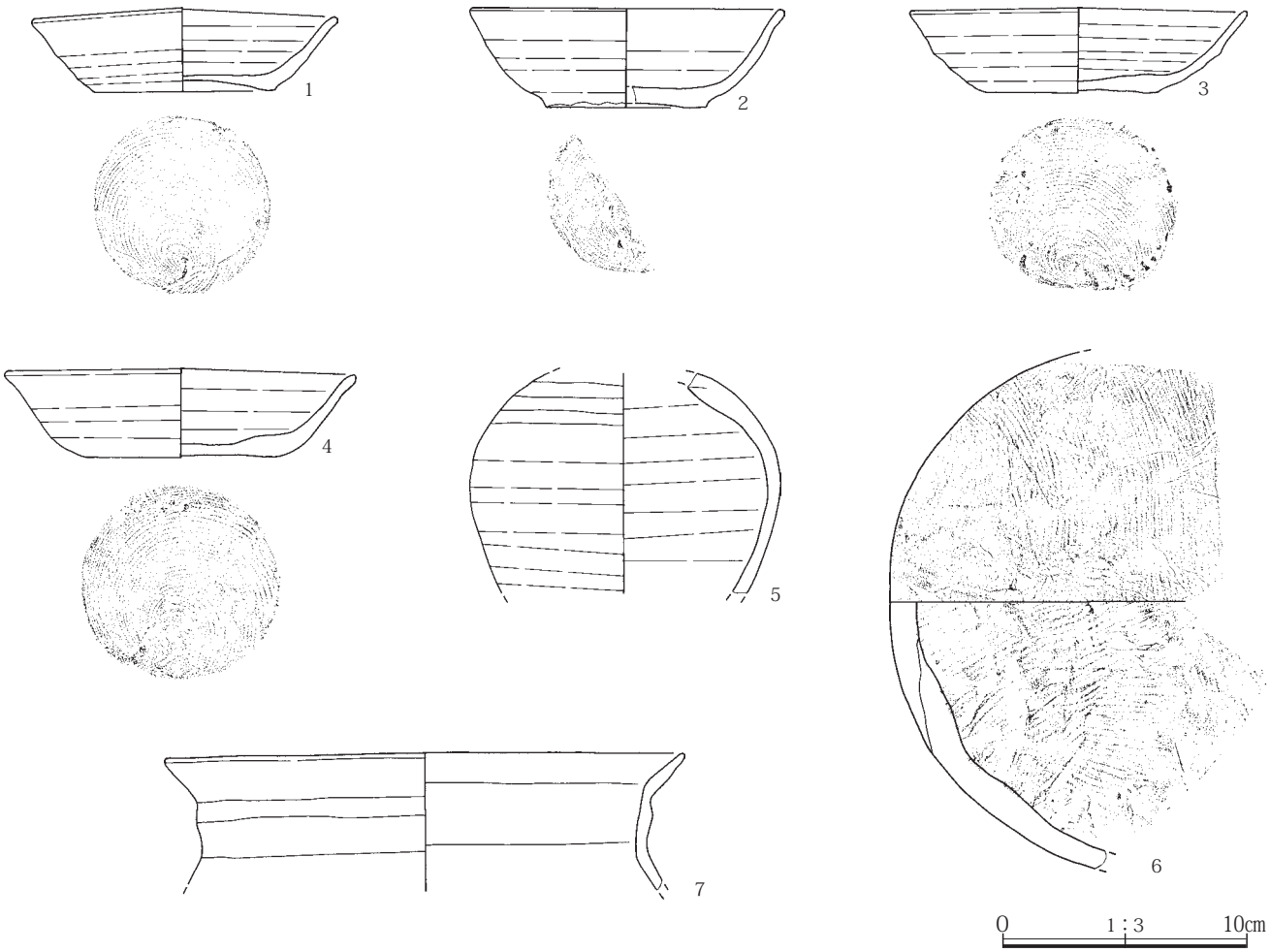


55号竪穴建物Ａ－Ａ′

Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅳ．As-B
Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
１．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒、焼土粒をやや多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム粒をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム細粒を微量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊～細粒、炭化物粒を少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒を少量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を非常に多量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　ローム小塊～粒、焼土塊を多量、炭化物粒を少量含む。
８．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒、炭化物粒を少量含む。
９．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊～粒を少量、炭化物粒をやや多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　ローム粒を少量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～粗粒を多量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を少量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量、ローム塊を非常に多量含む。

0　1：60　2m

第31図　55号竪穴建物



第32図　55号竪穴建物出土遺物

２．集石遺構

２号集石(第33図、PL．７)

位置　Ｘ＝40,809～40,813、Ｙ＝－80,797～－80,799

形状　不整形

規模　長軸4.03m、短軸1.65m

重複　なし

埋没土　不明

出土遺物　本遺構の周辺から出土した遺物は確認されていない。しかし、本遺跡の遺構外出土遺物は隣接する本郷満行原遺跡の遺構外出土遺物とともに「本郷満行原遺跡・表土」などの名称を付され一括して取り上げられていることから、本遺構周辺において土器や石器など縄文時代の遺物が出土していた可能性も考えられる。

所見　最大径40㎝前後の礫がほぼ同じ高さに散在する様子が確認された。このうち最大の礫は、長さ0.55m、幅0.30m、厚さ0.16mであった。本遺構の時期・性格はともに不明であるが、現道を挟んで南西に隣接する本郷鶴楽遺跡では、縄文時代中期後半の遺構が数多く調査され、加曽利Ｅ４式期の柄鏡形敷石建物も２棟検出されている。このことから、２号集石は縄文時代中期後半の配石遺構の痕跡である可能性が考えられる。

３．土坑

73号土坑(第34図、PL．７・288)

位置　Ｘ＝40,815～40,816、Ｙ＝－80,799～－80,800

形状　楕円形

規模　長軸0.84m、短軸0.76m

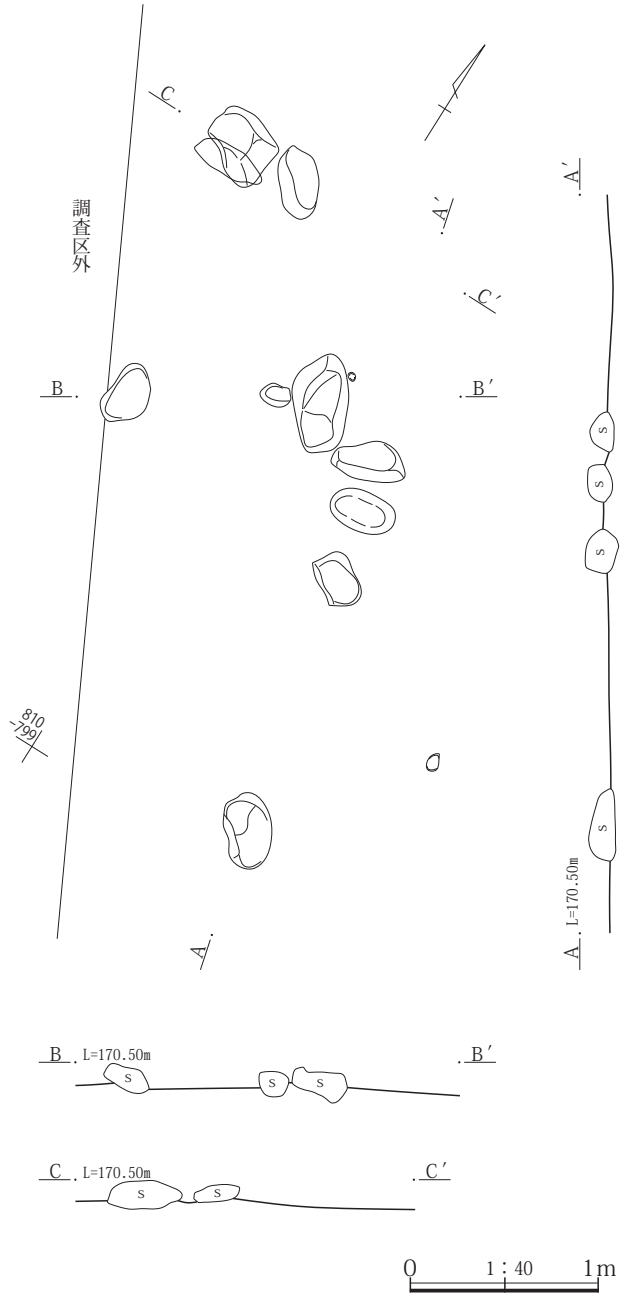
残存深度　0.17m

主軸方位　Ｎ－34°－Ｗ

重複　なし

埋没土　少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　須恵器大型椀(１)が底面直上から出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(５ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(６ｇ)が



第33図　２号集石

出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことや、出土遺物から９世紀第４四半期の土坑であると考えられる。

75号土坑（第34図、PL．７・289）

位置　X＝40,818～40,819、Y＝－80,787～－80,788

形状　不整形

規模　長軸1.04m、短軸1.02m

残存深度　0.83m

主軸方位　N－82°－E

重複　45号竪穴建物と重複し、75号土坑が新しい。

埋没土　ピット部分は、少量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。浅い皿状の部分は、少量のAs-C、やや多量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ピット部分の上層からは、土師器小型甕（１）と須恵器甕（４）が重なって出土している。このうち須恵器甕は45号竪穴建物の埋没土中から出土した破片と接合した。土師器甕のうち１点（２）は須恵器甕の横から、もう１点（３）は須恵器甕の下から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の甕・壺類破片73点（290ｇ）、須恵器の杯・椀類破片12点（81ｇ）が出土している。

所見　平面形状や土層断面の記録から、浅い皿状の土坑と深いピットが重複している可能性が考えられ、出土遺物の多くはピット部分から出土した。埋没土中にAs-Bを含まないことや、出土遺物から９世紀第３四半期の土坑であると考えられる。調査時の所見では45号竪穴建物より新しいとされたが、遺物には時期差が認められなかった。なお、土器を埋納した目的については不明である。

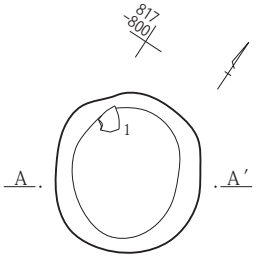
第３項　遺構外出土遺物

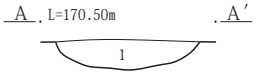
本郷上ノ台遺跡では、遺構確認作業時に遺構外から出土した遺物は、一括して遺構外出土遺物として扱った。また、古代の竪穴建物から出土した縄文土器や石器のように、遺構に伴わないと判断した遺物についても遺構外出土遺物とした。

なお、報告書に掲載できなかった遺構外出土遺物の内訳は、土師器の杯・椀類破片が21点（220ｇ）、甕・壺類破片が43点（538ｇ）、須恵器の杯・椀類破片が251点（1,895ｇ）、甕・壺類破片が258点（3,260ｇ）、瓦片13点、近世の国産施釉陶器破片１点（６ｇ）である。

このように本遺跡の遺構外出土遺物は、隣接する遺跡の出土量と比べて圧倒的に少ないが、これは本遺跡の発掘調査時の名称が「本郷満行原遺跡Ｅ区」であったことが一因であると考えられる。すなわち、本遺跡の遺構外出土遺物は、本郷満行原遺跡の遺構外出土遺物とともに「本郷満行原遺跡・表土」などの名称を付され一括して取り上げられてしまった可能性が高いと考えられるのである。

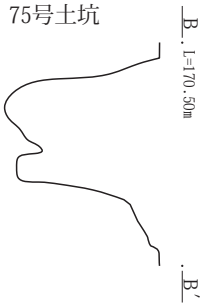
73号土坑

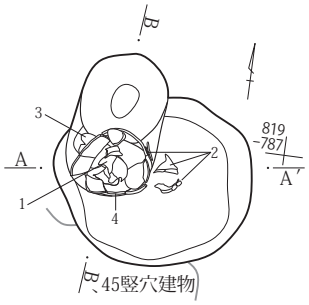


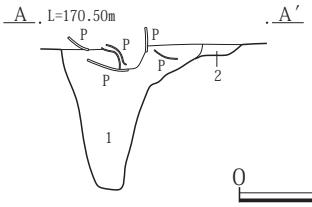


73号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。

75号土坑

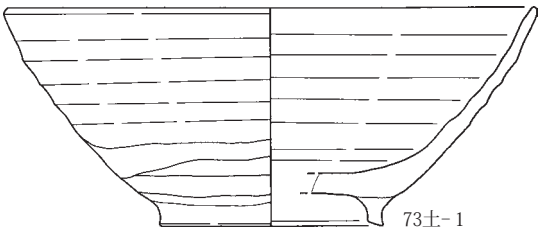


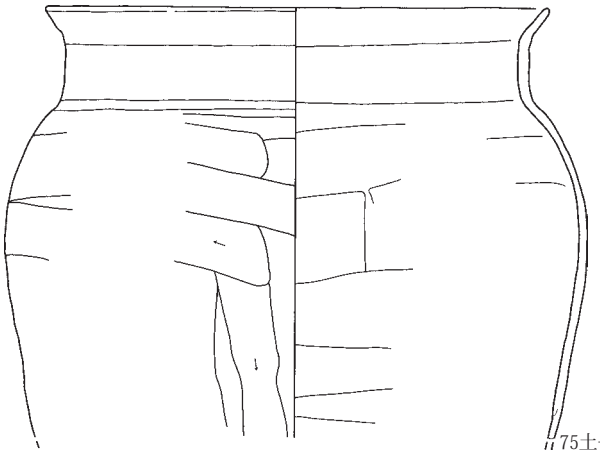


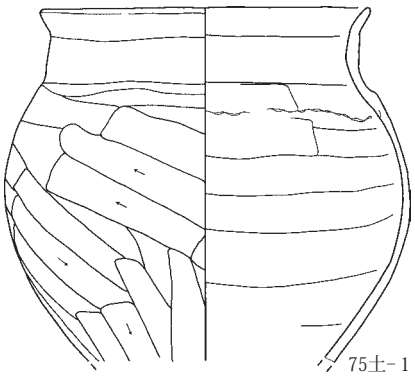


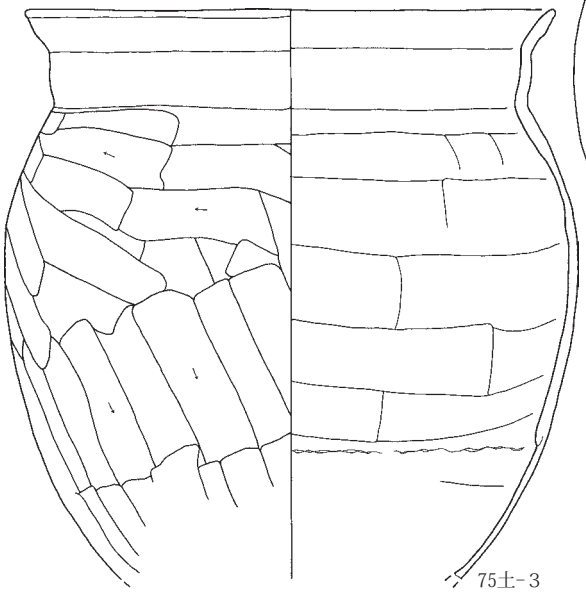
75号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム粒をやや多量含む。

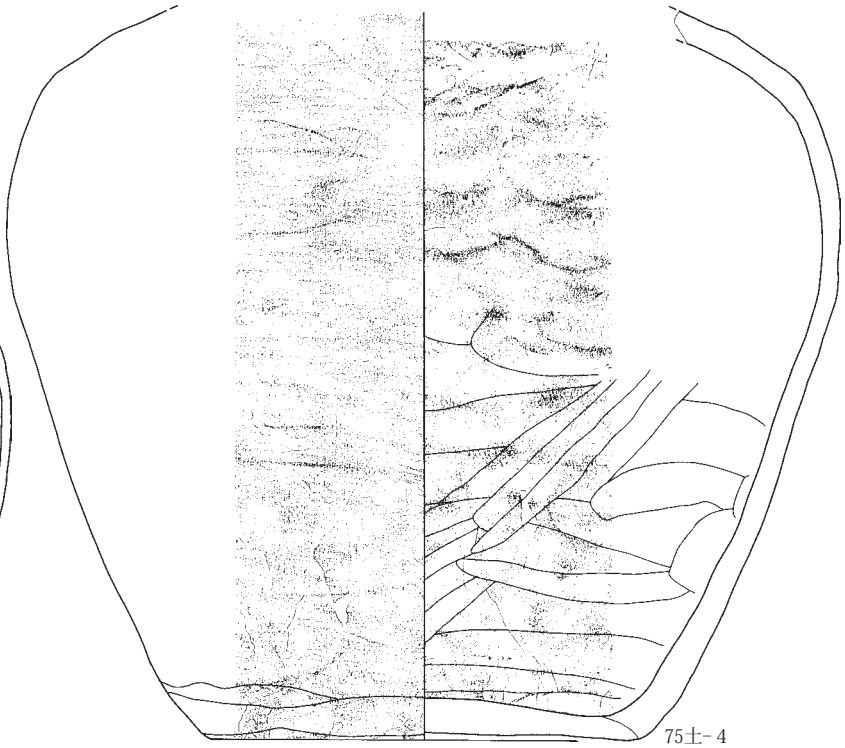
0　1：40　1m











0　1：3　10cm

第34図　73号・75号土坑と出土遺物

第４章　本郷満行原遺跡の遺構と遺物

本郷満行原遺跡付近から秋間丘陵を望む　北東から

第１節　概要

本郷満行原遺跡では、現道によって調査区を分割し、平成29年度にＡ区、Ｂ区南、及びＣ区の調査を、平成30年度から31年度にかけてＣ区の継続調査、及びＤ区の調査を、令和２年度にＢ区西、Ｂ区東、及びＢ区東斜面部の調査を行った。ただし、このうちＣ区とＤ区は連続した調査区であり、それぞれの間に明瞭な境界が存在するわけではない。そこで本章では、Ｃ区とＤ区を分割せずに１つの調査区「Ｃ・Ｄ区」として報告する。

本遺跡の地形は、東半においては北東を流れる黒沢川の谷地に向かって緩やかに傾斜しており、Ａ区やＢ区東から東側では急斜面となっている。最も標高の高いＣ・Ｄ区と、最も低いＢ区東斜面部との比高は約10m、Ｃ・Ｄ区と黒沢川の谷地に立地する本郷西谷津遺跡との比高は約20mである。一方、西半では北西から南東へ向かって緩やかに傾斜している。

なお、本遺跡の遺構番号は本郷鶴楽遺跡、本郷上ノ台遺跡との間で共通になっている。遺構番号が必ずしも１号から始まらず、間に欠番が多く存在するのはそのためである。また、本遺跡における土坑、ピットの名称については、特に定義して使い分けているわけではなく、調査時の名称をそのまま使用したものである。

第１項　Ａ区の概要

最も東に位置し台地の縁辺部に当たるＡ区では、傾斜地であることや宅地造成に伴う客土が厚く堆積していたことなどから、安全面を考慮し範囲を狭めて調査を行った。ここではローム層上面を遺構確認面として調査を行い、溝１条と土坑２基を検出した。

これらの遺構は、埋没土中に天仁元(1108)年に降下した浅間Ｂテフラ(As-B)を含まないことから、平安時代以前の遺構である可能性が高い。このうち11号溝は、台地が谷地に向かって急激に落ち込む地形の変換点に沿うように延びていることから、集落の境界を示す区画溝としての機能をもっていたのではないかと推測できる。

なお、本調査区では安全面を考慮し、旧石器時代の遺構・遺物確認調査は行っていない。

第２項　Ｂ区の概要

Ａ区と同じく台地の縁辺部に当たるＢ区では、平成29年度にＢ区南、令和２年度にＢ区西、Ｂ区東、及びＢ区東斜面部の調査を行った。このうち、Ｂ区東付近では、平坦な宅地や畑地を造成するため土地が階段状に改変され、擁壁が設けられるなどしていた。この土地の改変によって既に遺構が破壊されていると判断された地点については、予め調査対象外とした。そのため、Ｂ区東の両側には広く未調査部分が存在する。

このＢ区ではローム層上面を遺構確認面として調査を行い、竪穴建物３棟、竪穴状遺構２基、溝２条、土坑33基(うち２基は円形有段遺構)、及びピット31基を検出した。なお、これらの遺構のうち埋没土中にAs-Bを含むものは２面、含まないものは３面の遺構として掲載した。

本遺跡において検出された竪穴建物は、構造的には本郷上ノ台遺跡の竪穴建物と同様に、掘方が浅く、かつ部分的であるという特徴をもち、多くの竪穴建物で床下に土坑が掘られていた。これらの床下土坑も本郷上ノ台遺跡の事例と同様に、①床面中央付近を皿状に掘り窪めたもの、②床面中央付近を円筒状に深く掘り窪めたもの、③床下を不規則に複数か所、深く掘り窪めたもの、④掘り込みが浅く底部が粘土層まで達していないものというタイプに分類することができる。ただし、本遺跡においては、上記の分類に当てはまらないものも存在した。そこで、上記の①～④に当てはまらないものや、明瞭な床下土坑は検出されなかったものの、全体的に掘方が深く粘土採取が行われた可能性が考えられるものを⑤とした。

２号竪穴状遺構は、平面形状が不整形で底部の凹凸が激しく、埋没土中からは多量の瓦片が出土した。このことから、２号竪穴状遺構は定型化された施設ではなく、粘土採取を行ったあと、耕作などの邪魔になる瓦などを集めて捨てた痕跡であると考えられる。この２号竪穴状遺構からは「得」と書かれた墨書土器が出土している。

東側に広がる谷地を臨む台地の縁辺部では、古代の氷室の可能性が指摘されている逆円錐形状の円形有段遺構２基(556号・558号土坑)を検出した。

587号土坑からは、八稜鏡５面、銅鈴５点、鉄鐸２点などがまとまって出土したが、これらは一括して埋納されたものであると考えられる。

31基のピットは、多くが埋没土中にAs-Bを含み、調査区の南寄りから集中して検出された。しかし、いずれも建物を構成するようなものとは認識できなかった。

平成29年度の調査では、これらの遺構調査終了後に４ｍ×２ｍのトレンチを１か所設定し、旧石器時代の遺構・遺物確認調査を行った。また、令和２年度の調査では、４ｍ×４ｍのトレンチを１か所、３ｍ×３ｍのトレンチを３か所設定し、旧石器時代の遺構・遺物確認調査を行った。それぞれのトレンチでは、浅間板鼻褐色テフラ群(As-BPGroup)の下層まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

第３項　Ｃ・Ｄ区の概要

平成29年度を中心に調査を行ったＣ区では、ローム層より上位の黒色・黒褐色土層が厚く堆積している箇所があり、そのような場所では土層の残存状況が良好であった。そこで表土層下面(１面)、As-B混土層下面(２面)、ローム層上面(３面)を遺構確認面として調査を行った。平成31年度を中心に調査したＤ区では、As-B混土層下面(２面)、ローム層上面(３面)を遺構確認面として調査を行い、整理の段階で１面に該当する遺構を２面から分離した。それぞれの調査面で検出した遺構は、１面では復旧坑１か所、道１条、及び土坑２基、２面では溝３条、道１条、畑３か所、土坑53基、及びピット12基、３面では竪穴建物69棟、寺院関連の可能性が考えられる建物３棟、竪穴状遺構１基、円形有段遺構１基、遺物集中１か所、溝８条、土坑56基、及びピット10基である。

ただし、３面の遺構のうち、竪穴建物４棟と土坑20基は、出土遺物や埋没土の特徴などから縄文時代の遺構であると判断した。これら縄文時代の遺構については、別項を設けて掲載した。

１．１面の概要

１面で検出された復旧坑は、天明３(1783)年に起こった浅間山の噴火により降下した浅間Ａテフラの軽石(As-A)を天地返しによって処分した痕跡である。この復旧坑は最も深いところでも0.32mで、県内各地で調査されている同様の遺構と比べ非常に浅かった。その理由として、昭和40年代に群馬用水の整備に伴って実施された圃場整備により、遺構が削平された可能性が考えられる。

３号道は、幅0.3～0.8mほどの固く締まった黒褐色・暗褐色土層が帯状に続いていたことから認識できた。この３号道は、地表面を人が歩くことで自然に踏み固められ形成されたものであると推測できる。また、512号土坑や515号土坑との関係から、天明３(1783)年以降まで使用されていた可能性が高いと考えられる。

２．２面の概要

２面で検出された溝３条は、いずれも埋没土中にAs-Bを含み、最も新しい６号溝が前述の復旧坑の下位から検出された。このことから、これら３条の溝は、いずれも天明３(1783)年までには完全に埋没していたと考えられる。６号溝は、砂が堆積するなど流水の痕跡は認められず、底部付近が硬化していたことから、道として機能していた可能性が考えられる。７号溝と８号溝は、底部の幅が狭く硬化面が見られなかったことから、区画溝である可能性が考えられる。

２号道は、幅0.8mほどの直線的に続く硬化面として認識された。本道は天仁元(1108)年以前に作られ、As-B降下後もそのまま踏襲されたと考えられる。

１号～３号畑は、いずれも畝間溝の底部に一次堆積のAs-Bが堆積していたことから、天仁元(1108)年の時点で同時に存在していた畑の痕跡であると考えられる。ただし、畝間溝の走向の違いなどから、整理の段階で１号～３号畑の名称を付けた。

２面で検出された土坑は53基、ピットは12基である。土坑の形状は円形や方形のものが多く、溝状のものもわずかに含まれていた。12基のピットは、いずれも建物を構成するようなものとは認識できなかった。

３．３面の概要

３面で検出された竪穴建物のうち、９世紀後半以降の278号・284号・286号・296号・303号竪穴建物では、カマドの構築材の一部として瓦が使用されていた。また、273号・305号竪穴建物では、カマドの天井部が残存していた。このうち305号竪穴建物のカマド両脇には、壁面から壁上にかけて薄く粘土が貼られ、壁上には皿が置かれていた。この壁上の空間は、棚状施設として機能していたと考えられる。同じ棚状施設と考えられる空間は、９世紀代を中心とする54号・264号～266号・268号・278

号・286号・291号・292号・294号・298号竪穴建物でも認められた。

特筆すべき出土遺物としては、266号竪穴建物から出土した猿面硯、270号竪穴建物に近接した包含層中から出土した石製の丸鞆、290号竪穴建物に近接した包含層中から出土した印面が「吉」の銅印、291号竪穴建物の床面から出土した銅製の巡方、309号竪穴建物から出土した畿内産の螺旋状暗文土師器などが挙げられる。また、墨書土器も29点出土しており、主なものとして267号竪穴建物の「真」、278号竪穴建物の「土」、279号竪穴建物の「田」、282号竪穴建物と283号竪穴建物の「寺」、284号竪穴建物の「入田」、286号竪穴建物の「丁」、314号竪穴建物の「閃」、319号竪穴建物の「閃」、「服」などが挙げられる。

なお、３面で検出された古代の竪穴建物のうち、296号竪穴建物以降の17棟については、調査工程上の都合により掘方調査の一部、または全部を行っていない。

本調査区の中央付近では、古代寺院の関連施設である可能性が考えられる建物３棟を検出した。１号建物は東側を６号溝に壊されていたが、２間×２間または３間×２間の総柱の礎石建物である。総地業により構築されており、掘込地業の覆土中には多量の礫や瓦が敷き詰められていた。２号建物では建物の存在を示す明瞭な痕跡は確認できなかったが、竪穴状の掘り込みの中から礫や瓦が出土していることや、隣接する６号溝の埋没土中から礎石と思われる礫が出土していることなどから、１号建物と同様の総地業の痕跡である可能性が考えられる。３号建物では、ピット群の南辺と西辺を区画するように、Ｌ字に曲がる溝を検出した。この３号建物１号溝の埋没土中からは多数の礫が出土したが、これらは建物を構成していた材の一部である可能性が考えられる。また、本溝の上層からは建物の扉に使用されていたと思われる金具や多量の瓦片が出土している。

１号竪穴状遺構は逆円錐形状の円形有段遺構で、Ｂ区の556号・558号土坑と同様に古代の氷室である可能性が考えられる。

なお、本調査区においては、古代の遺物包含層を掘り下げる際に多くの遺物が出土したが、このうち特に遺物が集中して出土した範囲を１号遺物集中とした。この１号遺物集中からは９世紀代の土器とともに多くの瓦片、鉄製品、大小の礫などが出土している。

３面で検出された８条の溝のうち、40号溝、43号溝は、45号溝との交点で名称を分けたが、一連の区画溝であると考えられる。同様に、42号溝と45号溝、41号溝と46号溝も、規模、形状、走向などの特徴から、同一の溝(道)である可能性が高い。また、42号溝と44号溝は、およそ20mの間隔をおいて平行し、規模がほぼ同じであることから、同時に作られた区画溝である可能性が考えられる。

３面で検出された古代の土坑は36基、ピットは10基である。これらの土坑の多くは平面形状が不整円形で、遺物も少なかったことから、正確な時期・性格ともに不明である。また、10基のピットは、いずれも建物を構成するようなものとは認識できなかった。

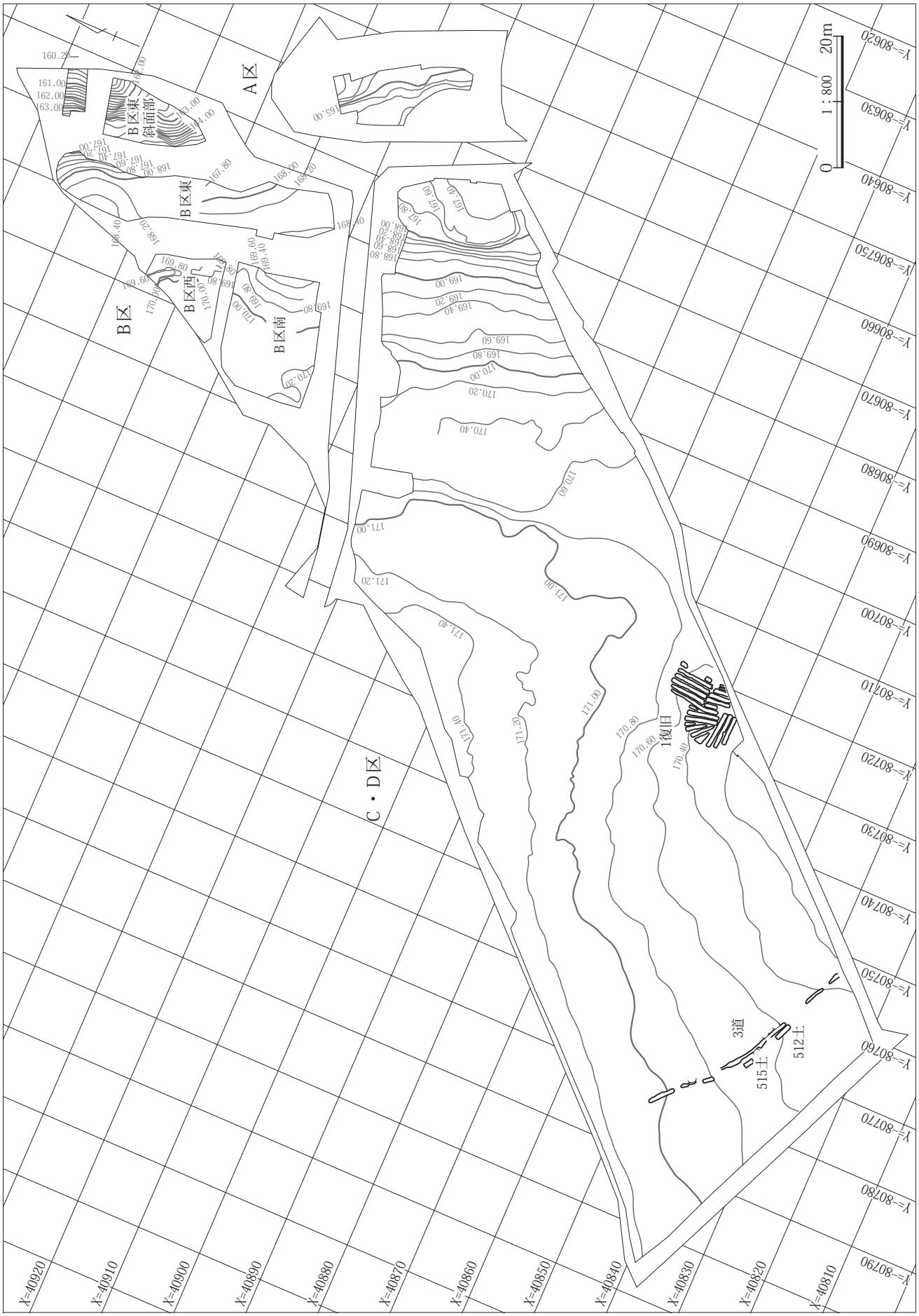
４．縄文時代と旧石器時代の概要

Ｃ・Ｄ区において検出された縄文時代の竪穴建物は４棟で、いずれも前期中葉の黒浜・有尾式期に属するものである。このうち317号竪穴建物は、同じ縄文時代前期中葉と考えられる土坑２基に床面や壁を壊されていた。このことから、これら縄文時代の遺構には若干の時間差が想定される。

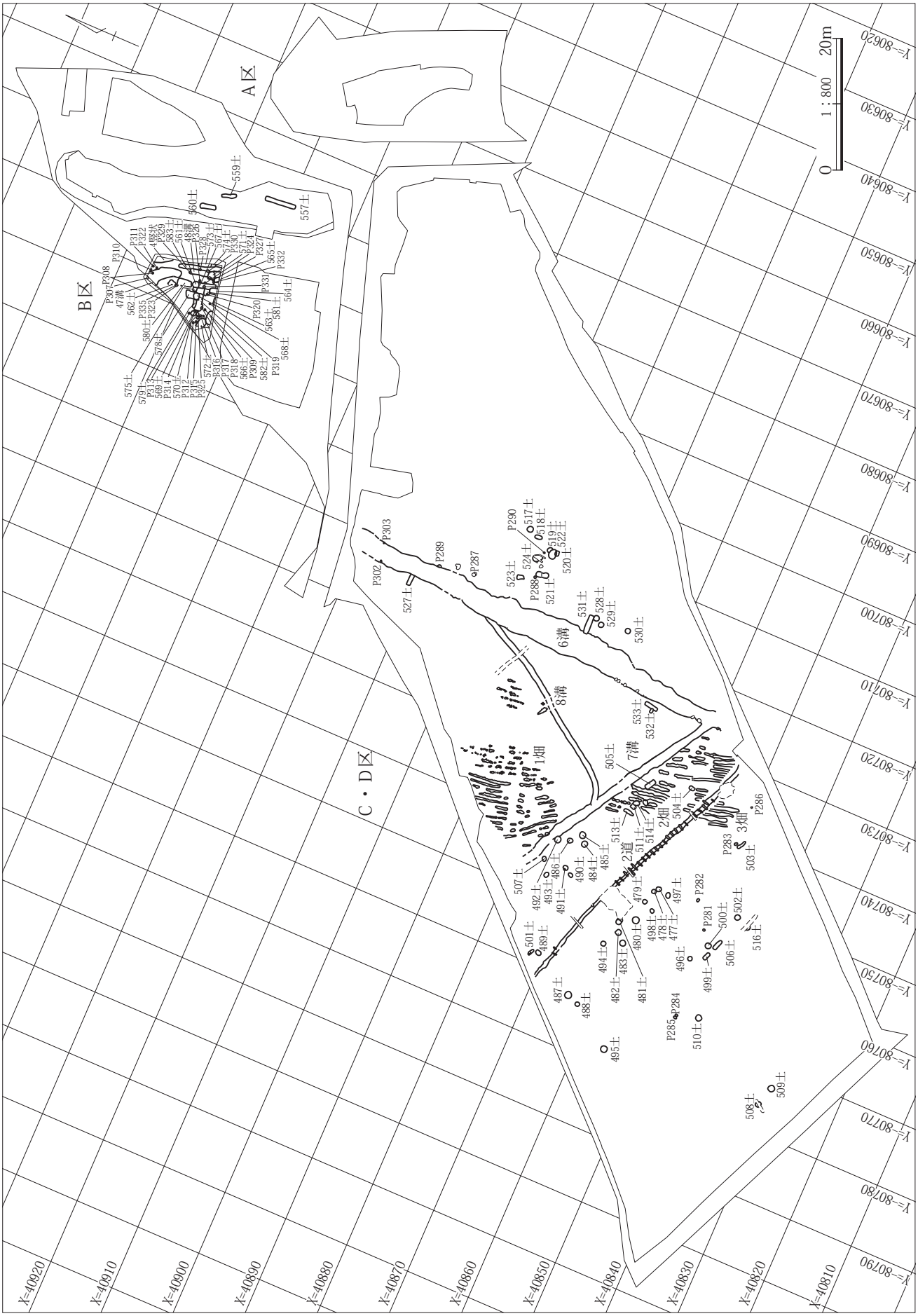
出土遺物や埋没土の特徴などから縄文時代のものと判断した土坑は、20基であった。これらの土坑は、古代の竪穴建物などと重複していたため全体像を明らかにすることはできなかった。しかし、その多くは底部付近が袋状に拡がる形状をもつことから、貯蔵穴であった可能性が考えられる。

これら縄文時代前期中葉の遺構・遺物のほかにも、調査区内からは前期後半～後期前半の土器が出土している。このうち中期後半の遺構は、本遺跡の南西に位置する本郷鶴楽遺跡において多数検出されているが、本調査区に近接する範囲にも当該期の集落が広がっていた可能性が考えられる。

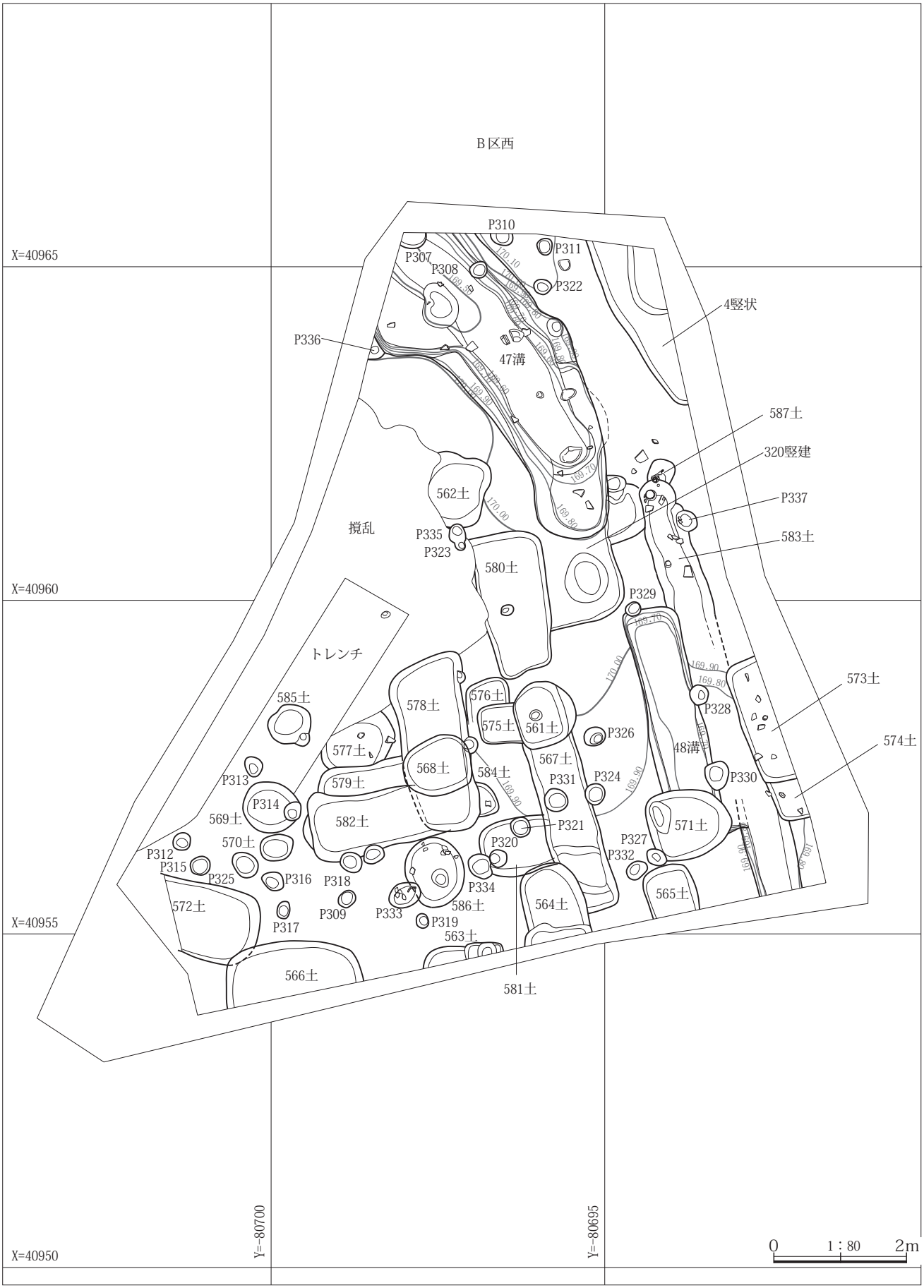
なお、平成29年度の調査では、これらの遺構調査終了後に４ｍ×２ｍのトレンチを５か所設定し、旧石器時代の遺構・遺物確認調査を行った。また、平成31年度の調査では、２ｍ×２ｍのトレンチを７か所設定し、旧石器時代の遺構・遺物確認調査を行った。それぞれのトレンチでは、基本的に浅間板鼻褐色テフラ群(As-BPGroup)の下面までの掘り下げを行ったが、遺構・遺物ともに検出されなかった。



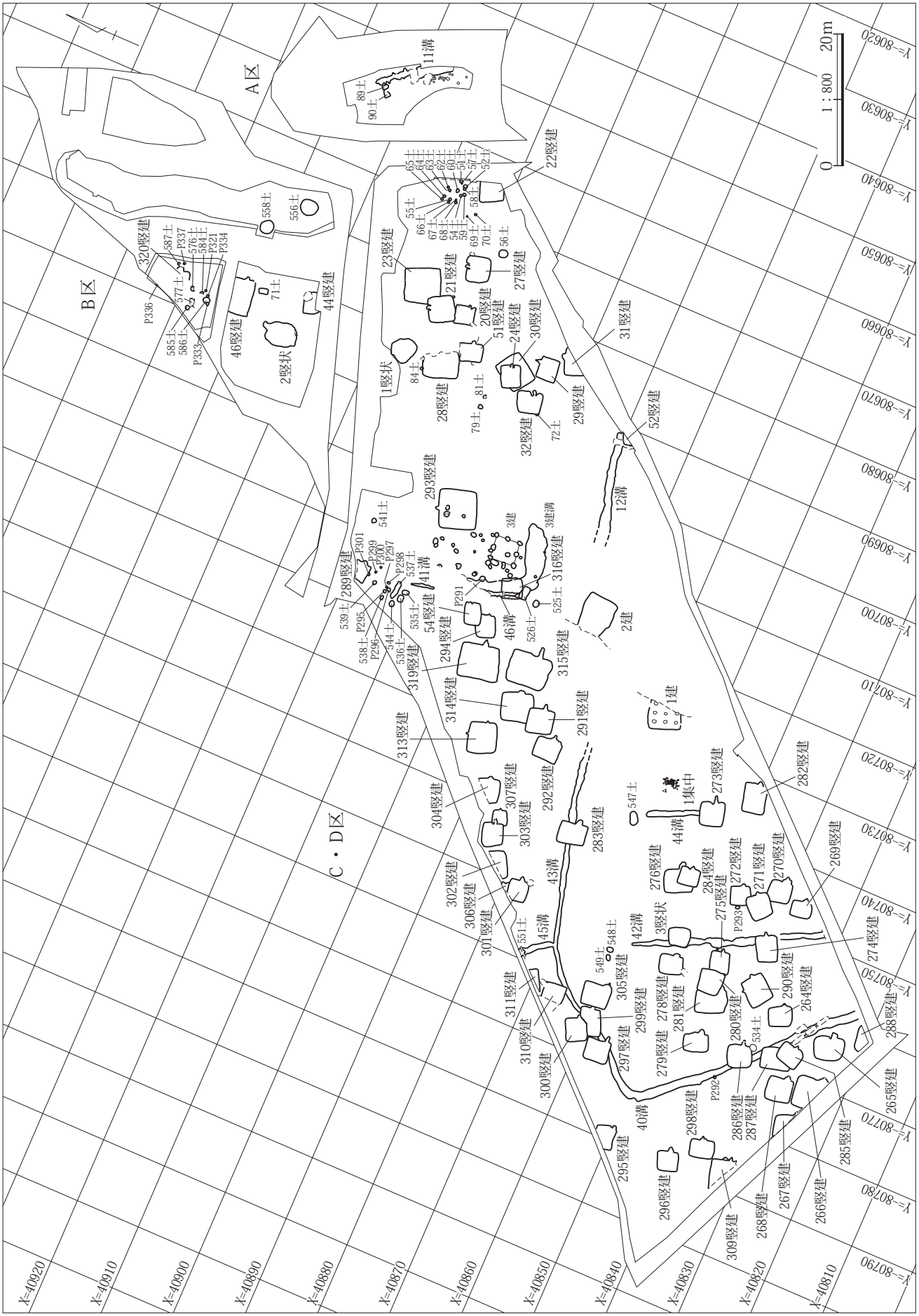
第35図　本郷満行原遺跡　1面全体図



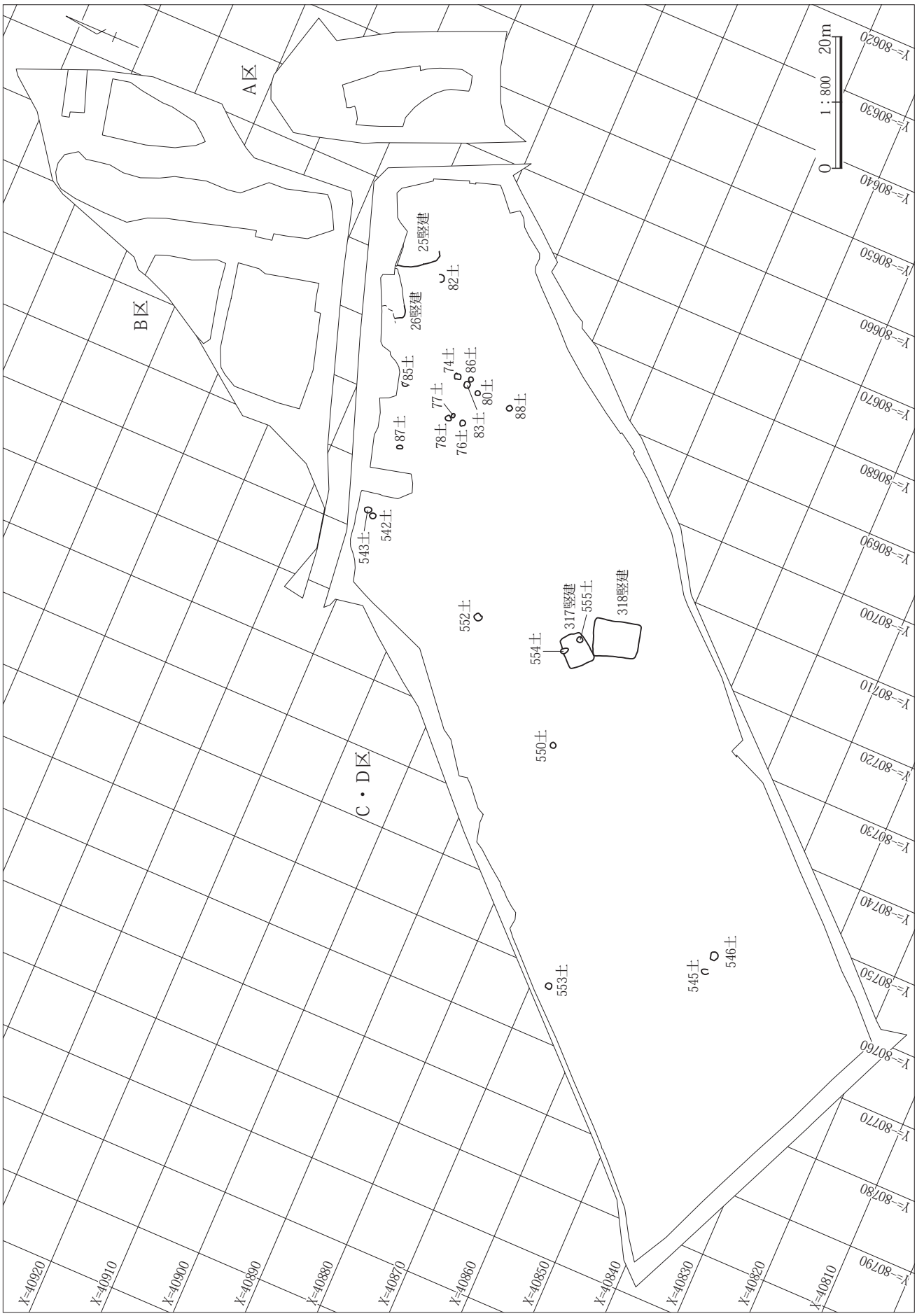
第36図　本郷満行原遺跡　２面全体図



第37図　本郷満行原遺跡　B区西２面・３面全体図

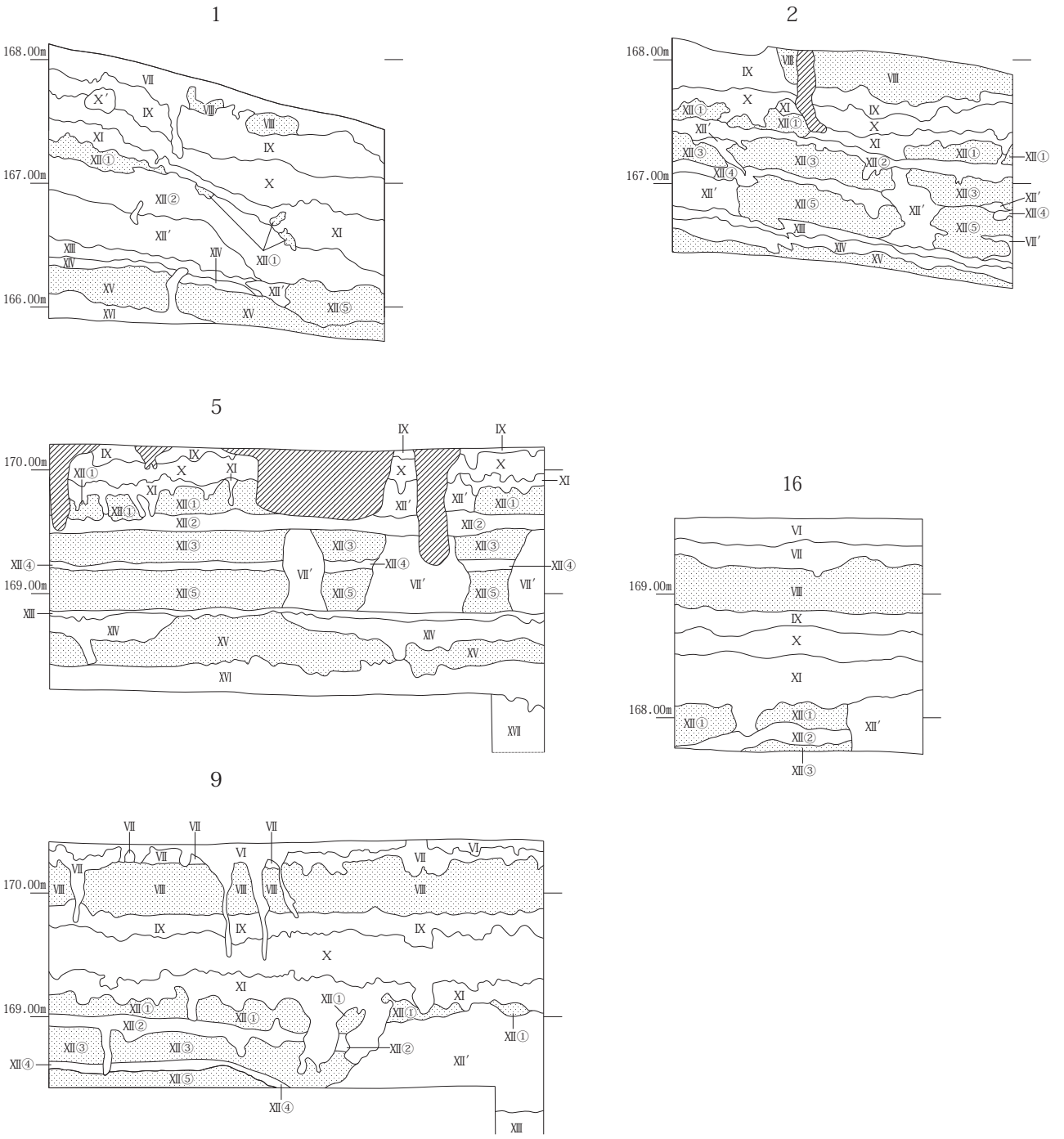


第38図　本郷満行原遺跡　３面全体図



第39図　本郷満行原遺跡　4面（縄文時代）全体図

第40図　本郷満行原遺跡　旧石器トレンチ配置図



本郷満行原遺跡　旧石器トレンチ
Ⅵ. 暗褐色土10YR3/3　漸移層。
Ⅶ. 明黄褐色土10YR6/6　As-YPを含む。
Ⅷ. 明黄褐色軽石層2.5Y7/6　As-YP。
Ⅸ. 黄褐色土10YR5/6
Ⅹ. 明黄褐色土10YR6/6　浅黄橙色軽石(As-Ok1・2またはAs-Srか)を含む。
Ⅹ′.明黄褐色土10YR6/6　Ⅹ層より浅黄橙色軽石粒を多量含む。
Ⅺ. 明黄褐色土10YR6/8
Ⅻ①.黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP(As-Srの可能性あり)。
Ⅻ②.黄褐色土10YR5/6　As-BPを含む。
Ⅻ③.黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP。
Ⅻ④.灰黄褐色土10YR5/2　土壌化したローム。
Ⅻ⑤.黄褐色軽石層10YR5/8　As-BP。青灰色軽石をやや多量含む。
　　中間に灰褐色土層を薄く挟む。
Ⅻ′.Ⅻ層が灰白色に粘土化したもの。
ⅩⅢ. 褐色土10YR4/4
ⅩⅣ. にぶい黄褐色土10YR4/3　MPを含む。
ⅩⅤ. 明黄褐色軽石層10YR6/8　MP。
ⅩⅥ. 褐色土10YR4/6
ⅩⅦ. 暗褐色土7.5YR3/3　暗色帯。

0　1：50　2m

第41図　本郷満行原遺跡　旧石器トレンチ断面図

第２節　検出された遺構と遺物

第１項　１面の遺構と遺物

１．復旧抗

１号復旧坑(第42図、PL.14)

位置　Ｘ＝40,857～40,868、Ｙ＝－80,718～－80,729（Ｃ・Ｄ区）

形状　溝状

規模　調査長1.00～7.86m、幅0.22～1.02m

残存深度　0.03～0.32m

条間隔　0.08～0.50m

条方位　Ｎ－５°－Ｅ～Ｎ－85°－Ｗ。北東部は南北軸、南西部は東西軸、その中間の北西部は扇形に掘削されている。

重複　なし

埋没土　粗粒の軽石からなる浅間Aテフラ(As-A)二次堆積物で埋没していた。耕作地に降り積もった軽石を廃棄したと考えられる。暗褐色土塊をわずかに含むが夾雑物が少ない。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片10点(16ｇ)、甕・壺類破片42点(113ｇ)、須恵器の杯・椀類破片10点(38ｇ)、甕・壺類破片23点(252ｇ)、瓦片１点が出土している。

所見　As-Aの軽石を天地返しによって処分した痕跡である。まず、耕作地内に幅0.60mほどの細長い溝状の穴を掘り、その中に地表に堆積している軽石を捨て、その上に掘り出しておいた耕作土を被せる。続いて、そのすぐ横にも同様に溝状の穴を掘り、軽石を捨て耕作土を被せる。この一連の作業を繰り返しながら、耕作地に積もった軽石を地下に埋めることで耕作地を復旧していったと考えられる。埋没土中の夾雑物が少ないことから、噴火から時間を置かずに復旧作業が行われたと推測できる。本復旧坑は、最も深いところでも0.32mと、県内各地で調査されている同様の復旧坑と比べ非常に浅い印象を受ける。また、県内各地の調査事例では、復旧坑は耕作地全体に及ぶことが多いが、本遺跡ではごく限られた範囲でしか確認できなかった。これらの理由として、昭和40年代に群馬用水の整備に伴って実施された圃場整備により、遺構の上半が削平された可能性が考えられる。最も東に位置する復旧坑は、２つの土坑のように見えるが、これらも本来は６m近い長さと0.60m以上の深さをもつ溝状の形態であったものが削平されたのであろうと推測できる。その東側では遺構を検出することはできなかったが、一群の復旧坑はさらに東側へと続いていた可能性が考えられる。ただし、西側については、北西部を敢えて扇形にしていることから、この場所が北西端部であった可能性が高いと考えられる。

２．道

３号道(第43図、PL.15)

位置　Ｘ＝40,827～40,846、Ｙ＝－80,753～－80,781（Ｃ・Ｄ区）

規模　調査長34.47m、幅0.24～0.72m

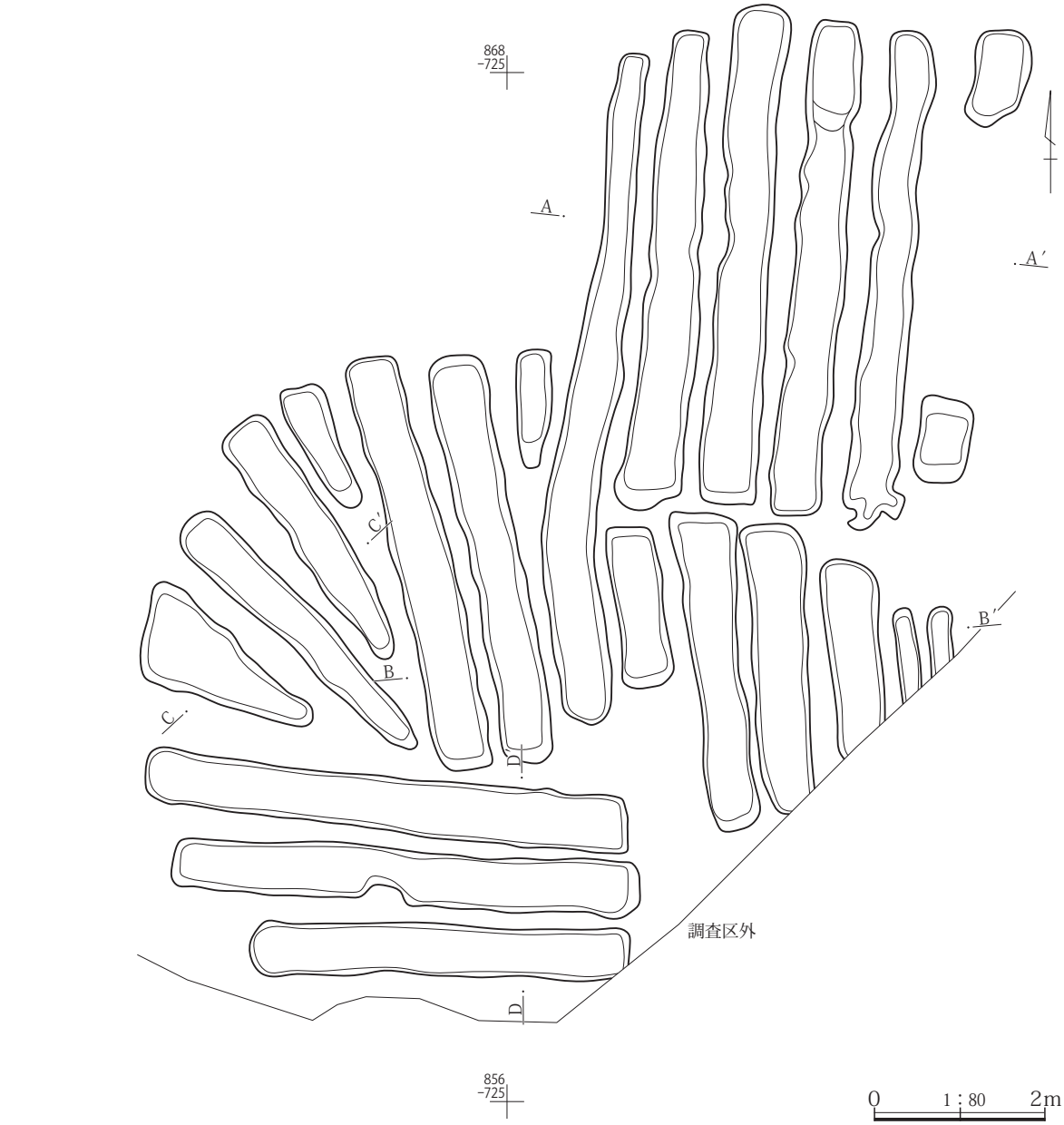
走向　Ｎ－55°－Ｗ

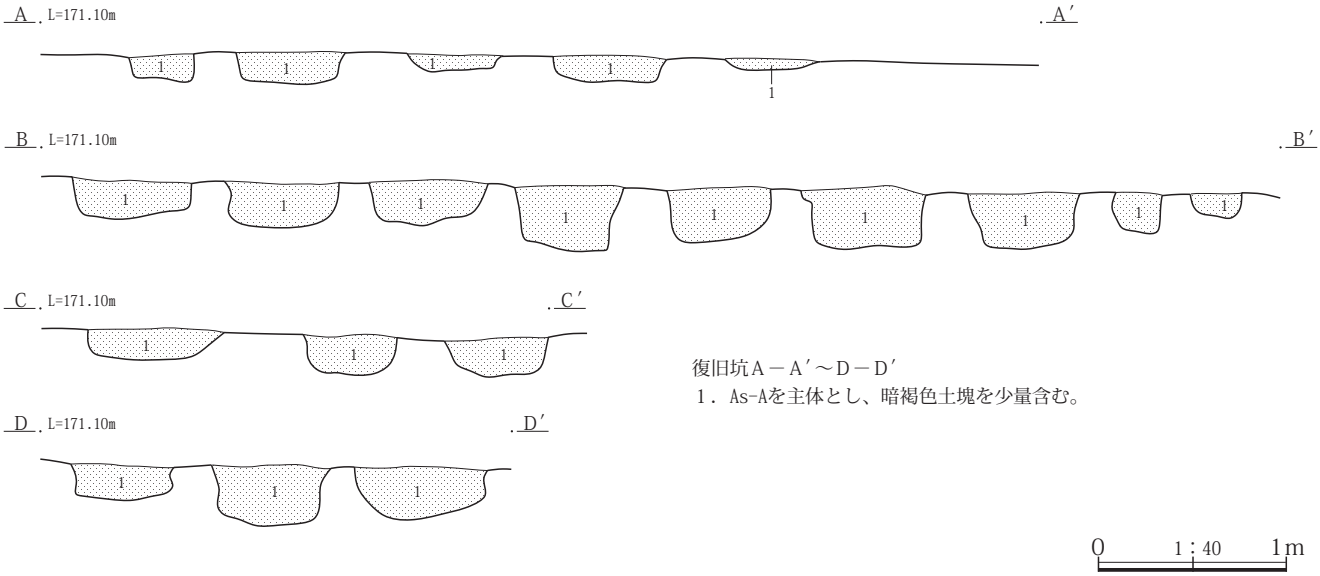
重複　なし

埋没土　多量の粗砂～細砂を含む暗褐色土や黒褐色土で埋没していた。路面に撒かれた砂が踏み固められ、徐々に黒褐色土、続いて暗褐色土が堆積していったと考えられる。

出土遺物　なし

所見　固く締まった幅0.3～0.8mの黒褐色・暗褐色土層が、断続的に34m以上続いていた。この黒褐色・暗褐色土層に含くまれる多量の砂は、人為的に撒かれたものであると考えられる。さらに下位でも、As-B混土層(Ⅲ層)の上面が同様に踏み固められていたが、いずれの硬化面にも明瞭な下部構造は認められなかった。このことから、３号道は人が繰り返し歩くことで地表面が踏み固められ、自然に形成されたものであると考えられる。また、本道に沿うように２基の土坑(512号・515号土坑)が作られていたが、これらは本道を意識して耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。これらの土坑の埋没土中にはAs-Aが含まれていたことから、本道も天明３(1783)年以降まで継続して使用されていた可能性が高いと考えられる。

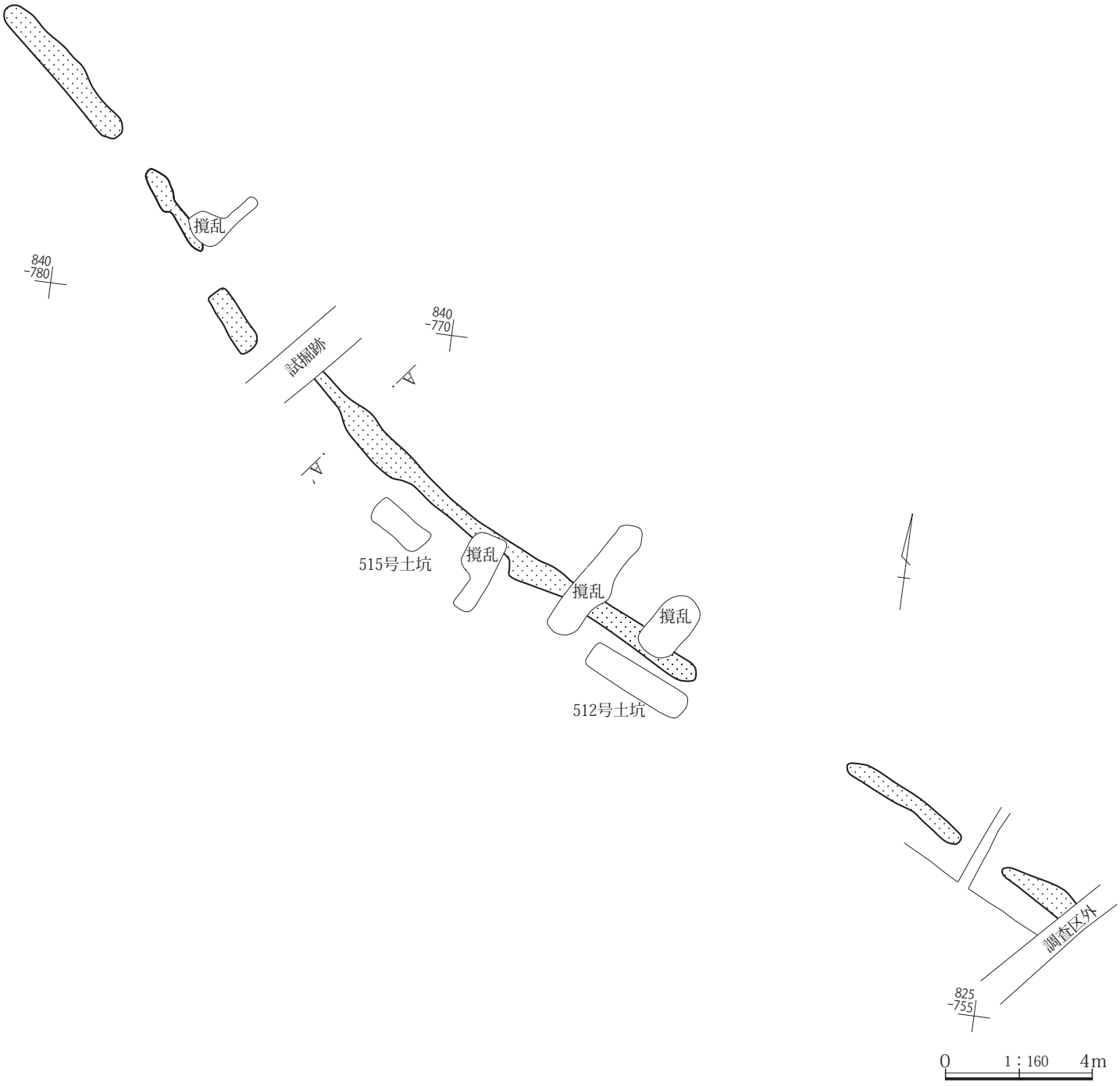




復旧坑Ａ－Ａ′～Ｄ－Ｄ′
１．As-Aを主体とし、暗褐色土塊を少量含む。

0　1：40　1m

第42図　１号復旧坑



３号道Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　粗砂～細砂を多量含む。粘性弱い。締まり非常に強い。
２．黒褐色土10YR2/2　粗砂～細砂を多量含む。粘性弱い。締まり非常に強い。

第43図　３号道

３．土坑

512号土坑(第44図、PL.15)

位置　X＝40,831～40,832、Y＝－80,763～－80,765（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸2.72m、短軸0.72m

残存深度　0.41m

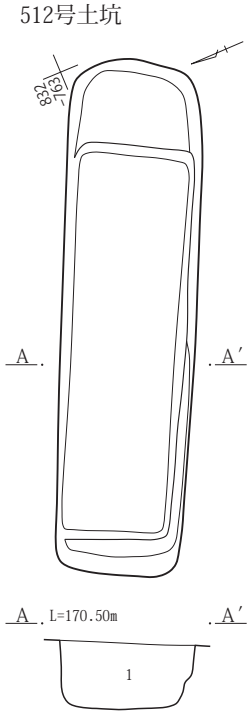
主軸方位　N－66°－W

重複　なし

埋没土　多量のAs-A、As-B、黒褐色土塊を含む暗褐色土で埋没していた。全体が均質な土で埋没していたことから、機能を失った後、一気に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、須恵器の杯・椀類破片１点(44ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、３号道に沿うように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。また、埋没土中にAs-Aを含むことから、天明３(1783)年以降の遺構であると考えられる。



512号土坑Ａ－Ａ′

１．暗褐色土10YR3/3　As-A、As-B、黒褐色土塊を多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

515号土坑(第44図、PL.15)

位置　X＝40,834～40,835、Y＝－80,769～－80,771（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸1.50m、短軸0.64m

残存深度　0.31m

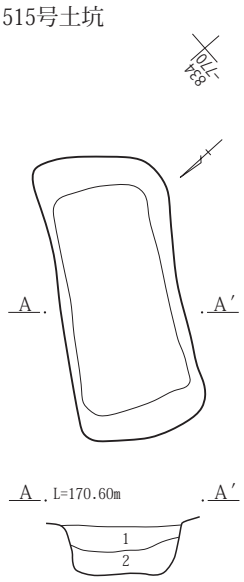
主軸方位　N－53°－W

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-A、As-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-A、As-Bを含む黒褐色土で埋没していた。上下２層に分層されたが、非常によく似た土で埋没していたことから、機能を失った後、一気に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片７点(20ｇ)、須恵器の杯・椀類破片７点(38ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、３号道に沿うように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。また、埋没土中にAs-Aを含むことから、天明３(1783)年以降の遺構であると考えられる。



515号土坑Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-A、As-Bを多量、黒褐色土塊を少量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

２．黒褐色土10YR2/3　As-A、As-Bをやや多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

0　1：40　1m

第44図　512号・515号土坑

第２項　２面の遺構と遺物

１．竪穴状遺構

４号竪穴状遺構(第45図、PL.15・290)

位置　X＝40,962～40,965、Y＝－80,693～－80,695（B区西）

形状　不整形

規模　長軸(2.39m)、短軸(1.02m)

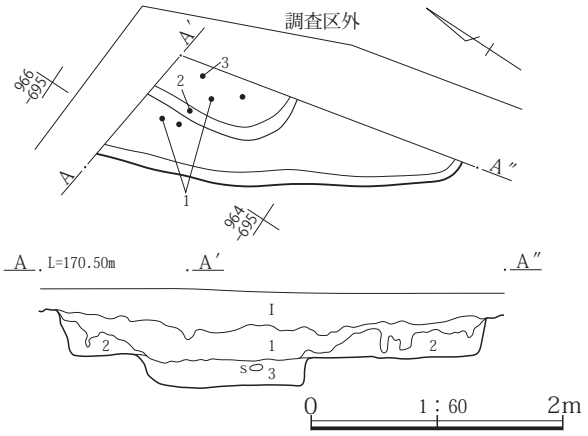
面積　(1.384㎡)

残存壁高　0.53m

方位　N－13°－W

重複　なし

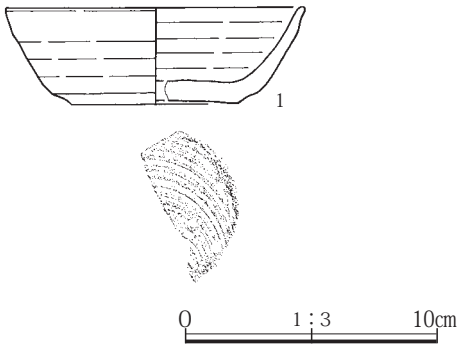
埋没土　上層はやや多量のAs-B、少量のローム粗粒～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム粗粒～粒を含む暗褐色土で埋没していた。埋没土のうち３層は、重複する別遺構の埋没土である可能性が考えられる。

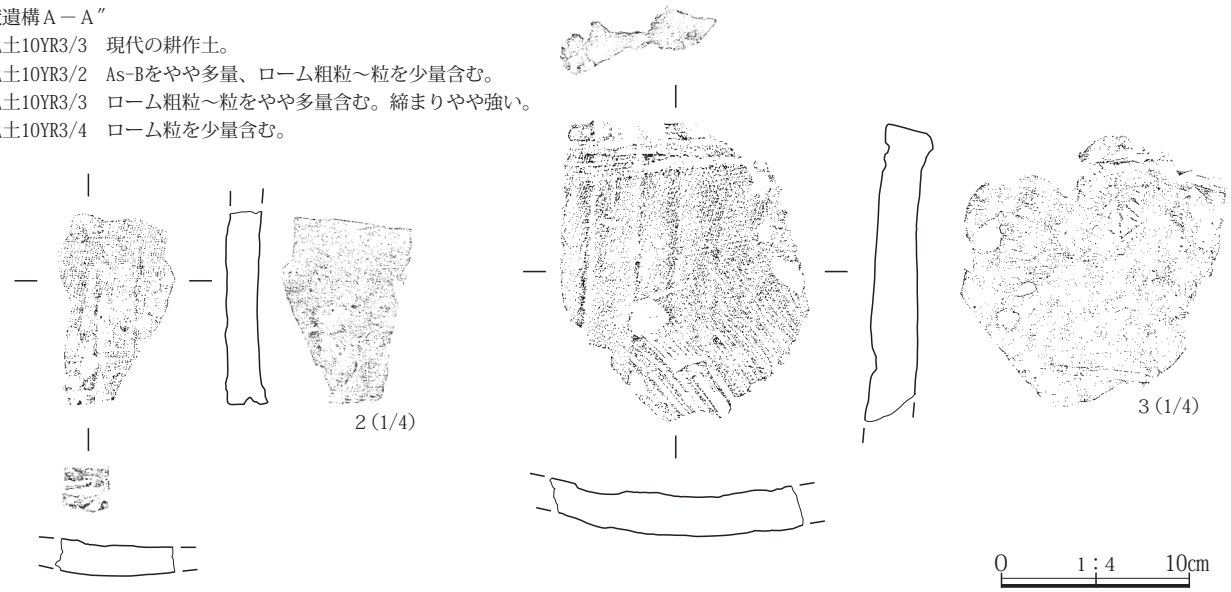


４号竪穴状遺構Ａ－Ａ″
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
１．黒褐色土10YR3/2　As-Bをやや多量、ローム粗粒～粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粗粒～粒をやや多量含む。締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量含む。

出土遺物　須恵器杯(１)、軒平瓦(２)、平瓦(３)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含み、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられることから、これらの遺物はいずれも混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片４点(44ｇ)、甕・壺類破片５点(31ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(22ｇ)、甕・壺類破片３点(15ｇ)、瓦片６点、磨石２点(1,088.3ｇ)、剝片２点(115.8ｇ)が出土している。このうち磨石1点については、縄文時代の遺物であると考えられることから、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　埋没途中にAs-Bを含むことから、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられる。ただし、調査範囲が限られていたことから、全体の形状など詳細は不明である。なお、中央部にある段差は、本遺構の南壁と軸方向が合わず、また、埋没土中にAs-Bを含まないことから、本遺構に重複する古い竪穴建物や土坑である可能性が考えられる。





第45図　４号竪穴建物と出土遺物

２．溝

６号溝（第46～51図、PL.16・290～292）

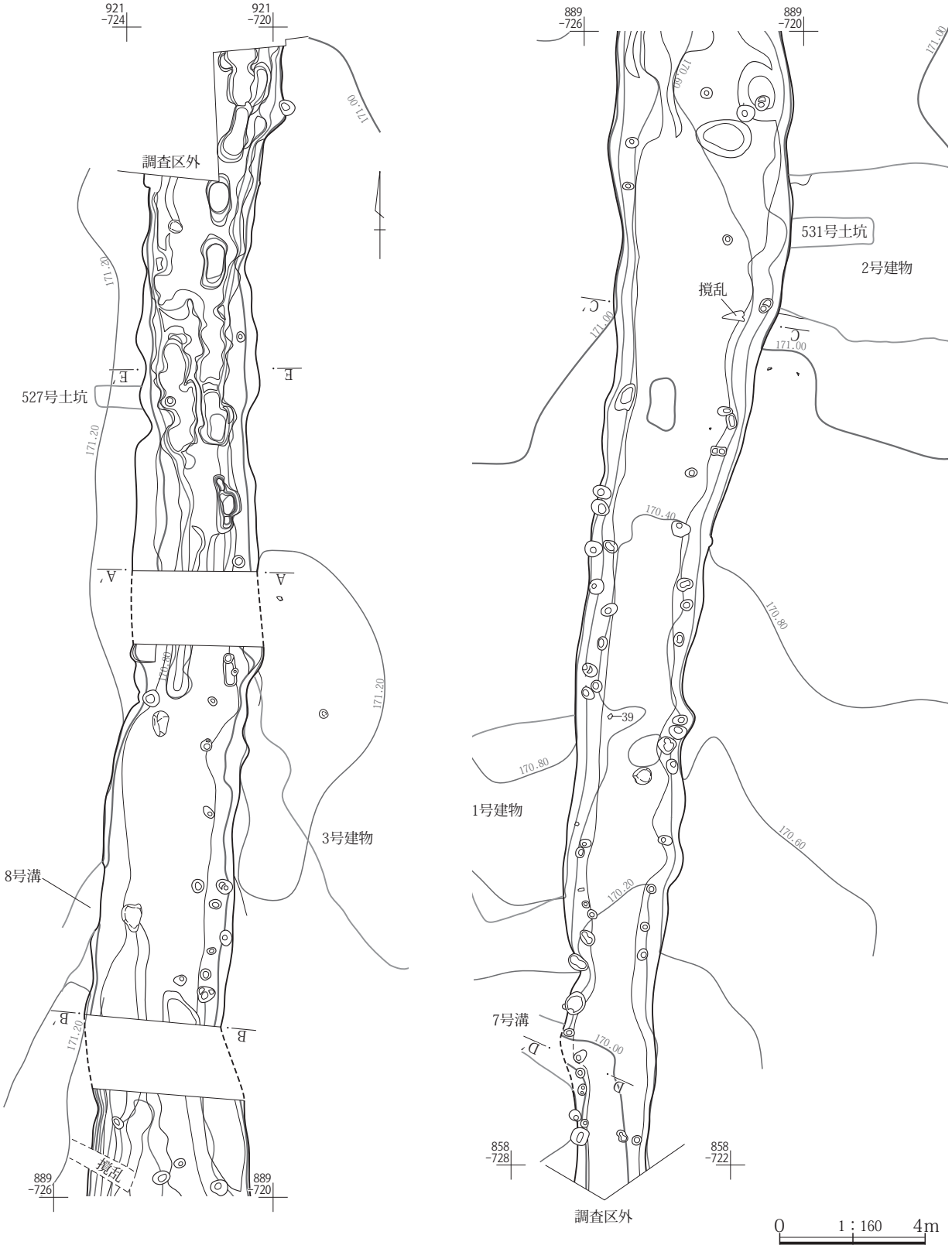
位置　X＝40,857～40,920、Y＝－80,719～－80,727（C・D区）

規模　調査長63.51m、上幅1.82～4.81m

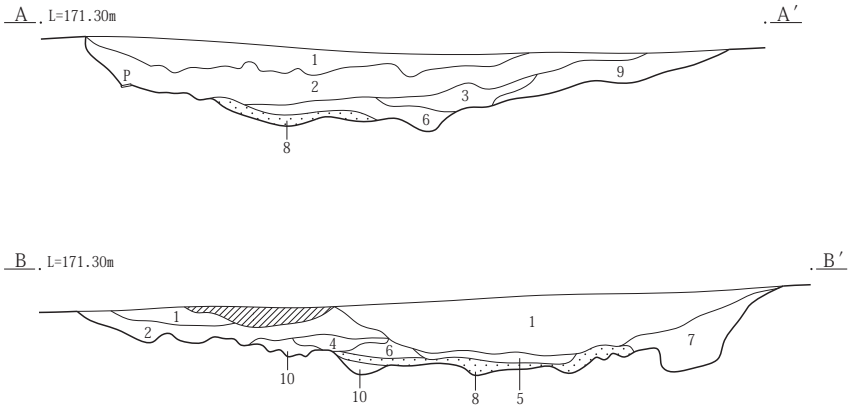
残存深度　0.26～0.66m

走向　N－5°－E

重複　１号～３号建物、７号溝、527号・531号土坑と重

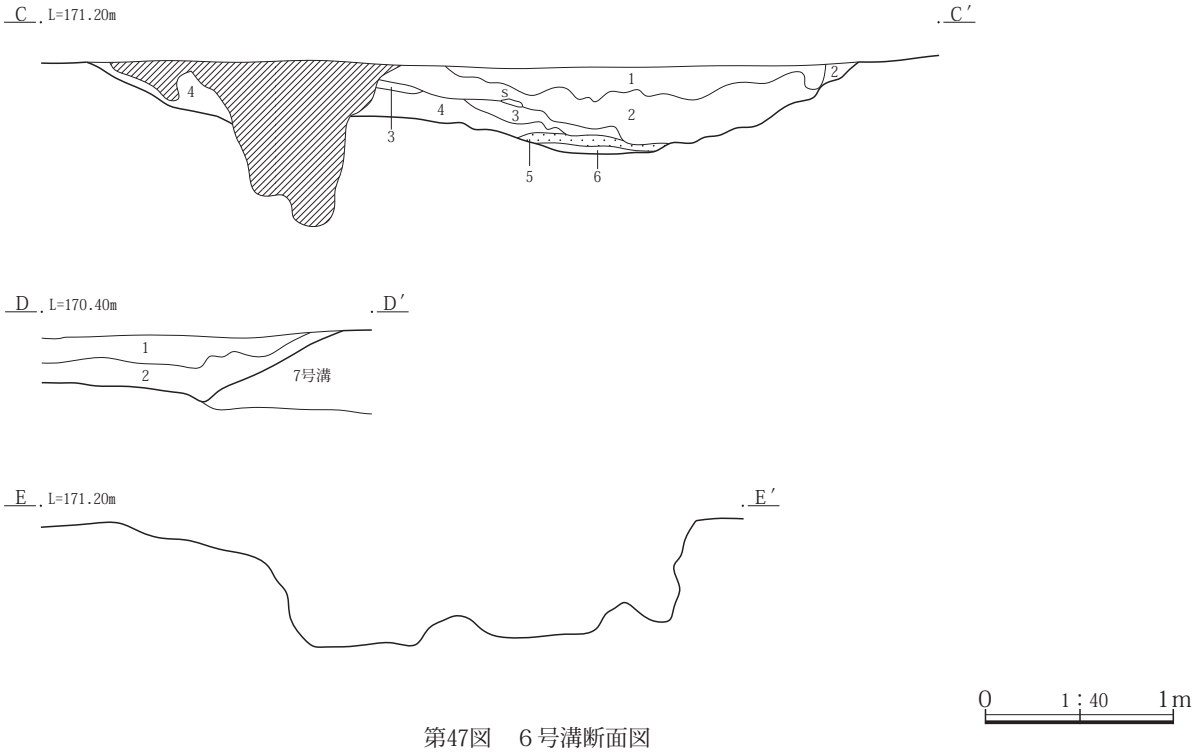


第46図　６号溝



６号溝Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1．黒褐色土2.5YR3/1　As-Bをやや多量含む。
2．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量、ローム粒を微量含む。
3．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量含む。
4．黒色土10YR2/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
5．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを微量、ローム塊をやや多量含む。
6．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを少量、ローム塊をやや多量含む。
7．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量含む。
8．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bやや多量含む。硬質。
9．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを微量、黒色土塊を多量含む。
10．黒色土10YR2/1　暗褐色土塊を多量含む。

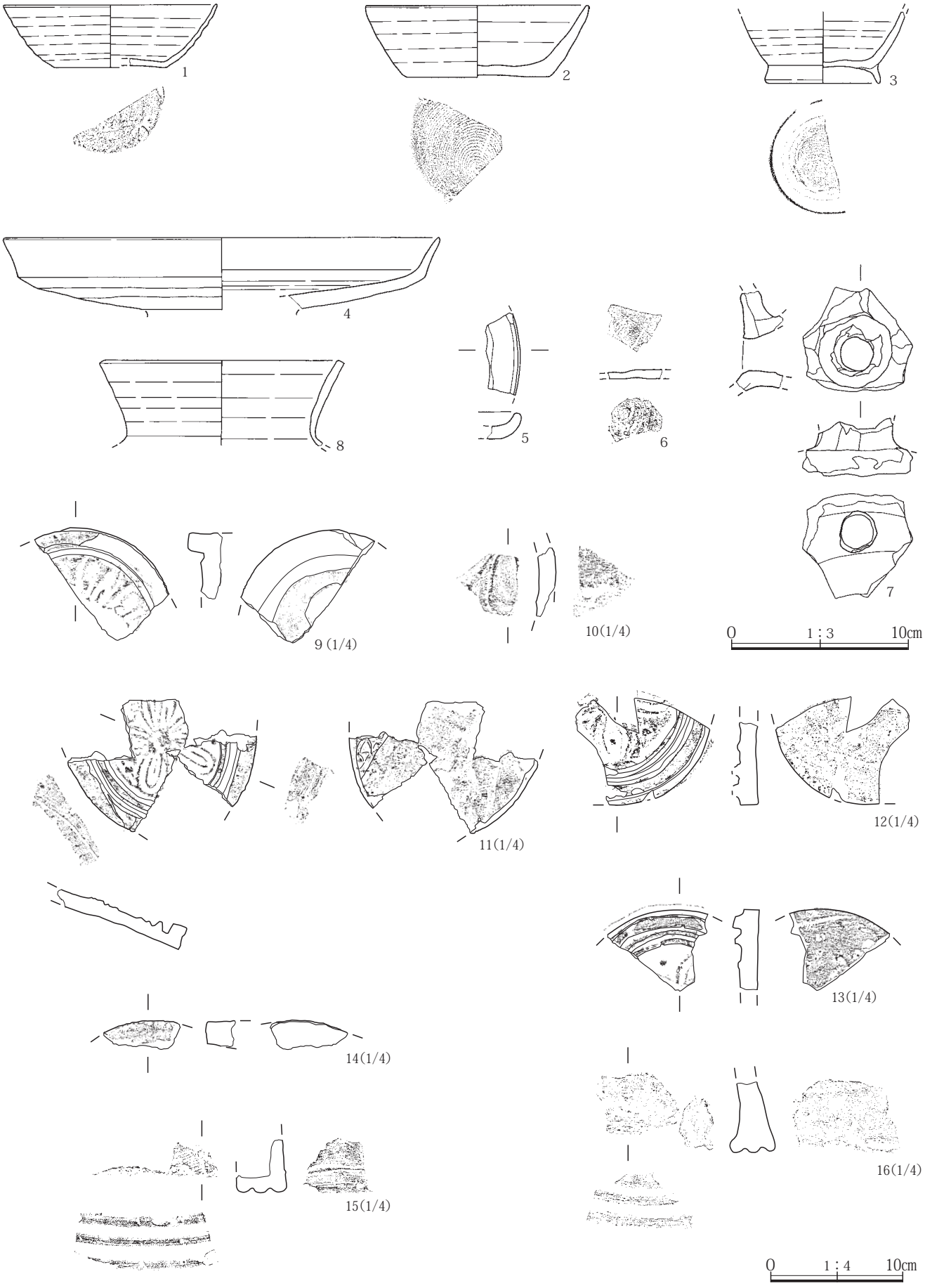
６号溝Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土2.5YR3/1　As-Bをやや多量含む。
2．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量、ローム粒を微量含む。
3．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを少量含む。
4．黒褐色土7.5YR3/1　As-B、ローム粒を少量含む。
5．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bやや多量含む。硬質。
6．黒褐色土7.5YR3/1　As-B、ローム塊を少量含む。



第47図　６号溝断面図

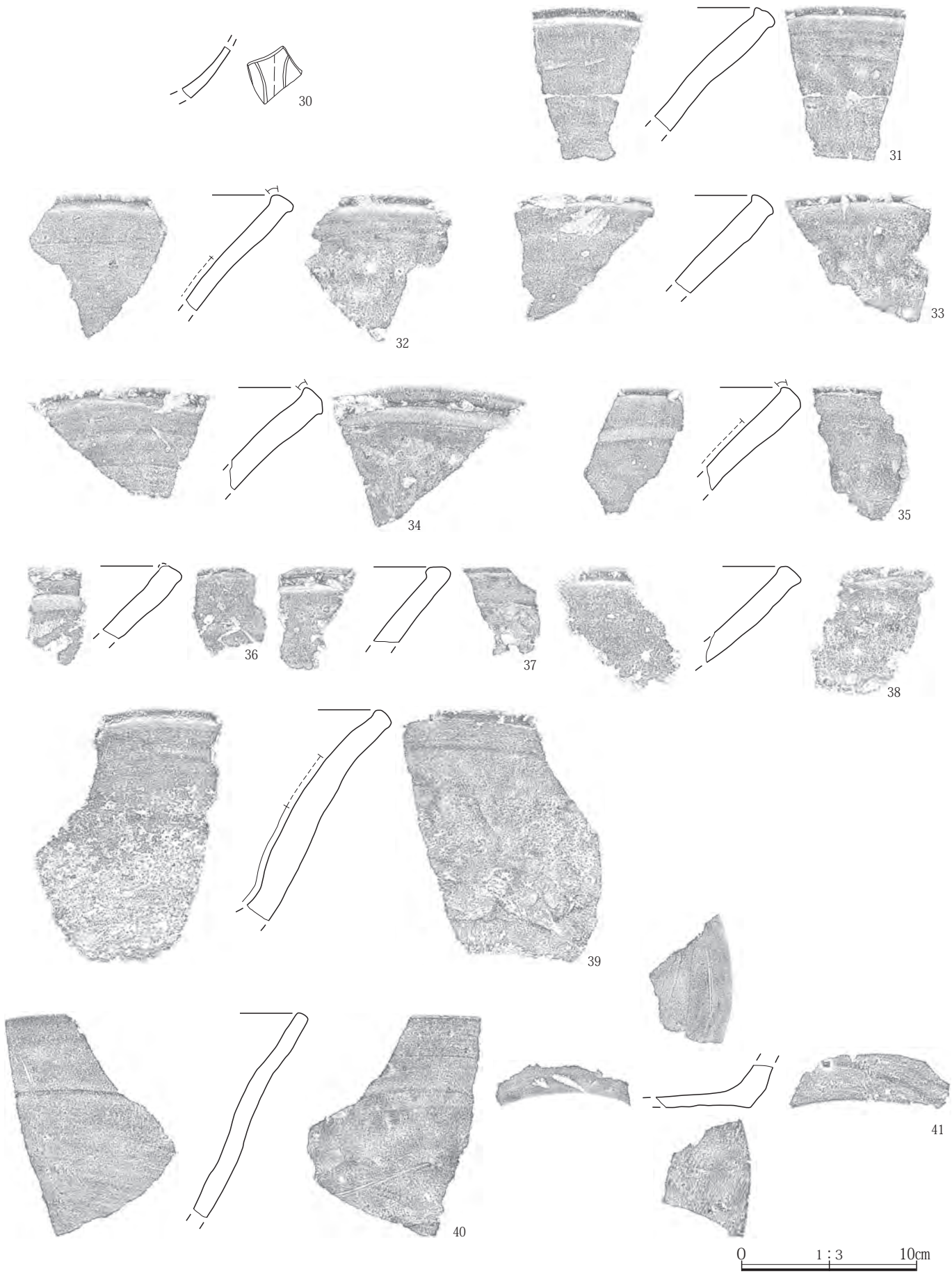
複し、いずれも６号溝が新しい。また、８号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

埋没土　上層はやや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-B、微量のローム粒を含む黒褐色土などで埋没していた。部分的にローム塊を含むなど複雑な堆積状況であったことから、埋没と掘削が繰り返された可能性が考えられる。また、流水の痕跡は認められず、底面付近に堆積した黒褐色土層は硬化していた。

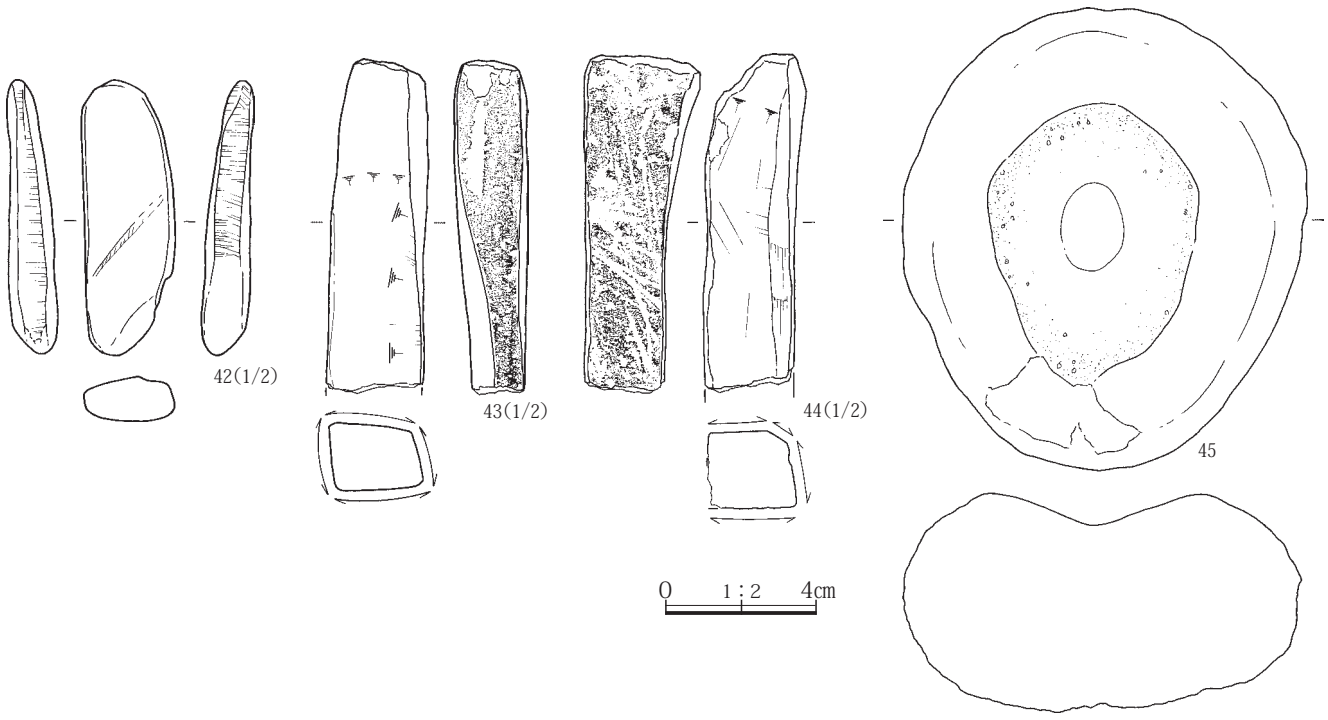


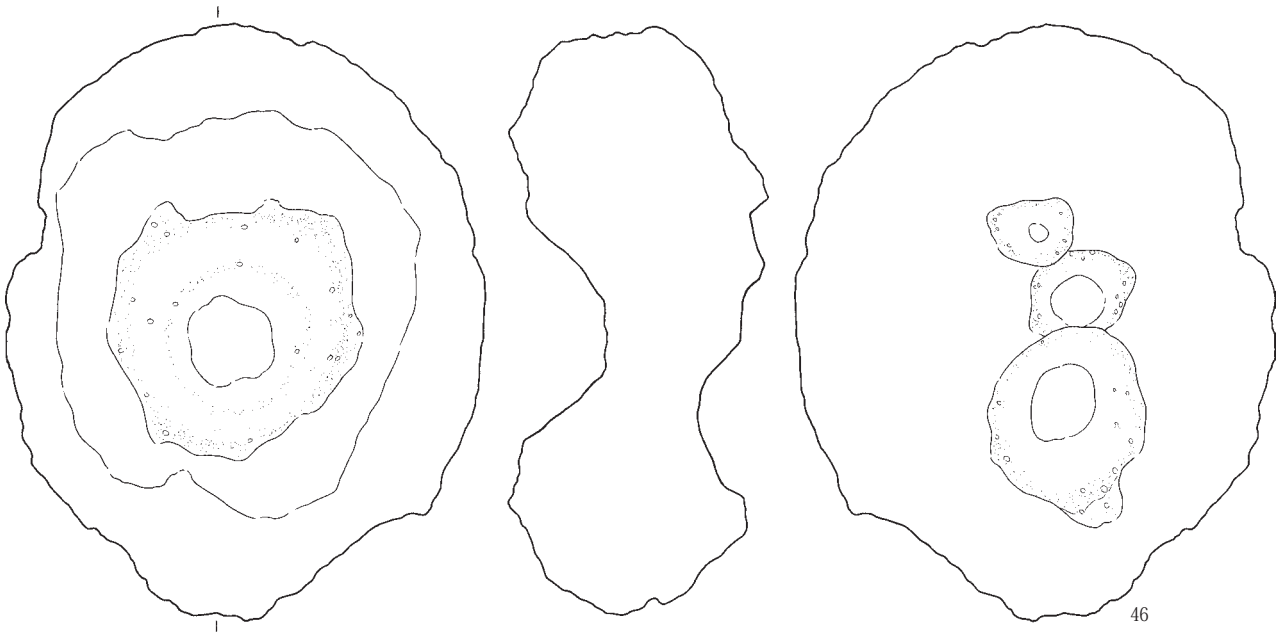
第48図　６号溝出土遺物（１）

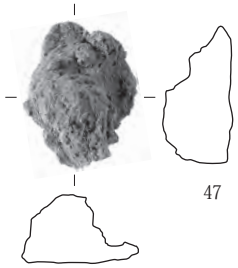
第49図　６号溝出土遺物（２）



第50図　６号溝出土遺物（３）







第51図　６号溝出土遺物（４）

出土遺物　小片ながら底部に線刻のある須恵器杯（６）、複弁七葉蓮華文軒丸瓦（９）、素弁四葉蓮華文軒丸瓦(10)、単弁五葉蓮華文軒丸瓦(11)、単弁四葉蓮華文軒丸瓦(12・13)、三重弧文軒平瓦(15～17)が出土したことが特筆される。ただし、本遺構が埋没土中にAs-Bを含み、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられることから、これらの遺物はいずれも混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器18点、土師器の杯・椀類破片214点(1,130ｇ)、甕・壺類破片1,440点(6,380ｇ)、須恵器の杯・椀類破片757点(6,444ｇ)、甕・壺類破片446点(9,060ｇ)、瓦片682点、陶磁器類６点(87ｇ)、石鏃１点(0.9ｇ)、石匙１点(1.1ｇ)、削器１点(45.1ｇ)、二次加工ある剝片８点(383.4ｇ)、打製石斧６点(413.6ｇ)、磨製石斧４点(1,177.0ｇ)、石核１点(78.7ｇ)、凹石２点(1,133.0ｇ)、磨石３点(1,775.3ｇ)、敲石６点(3,458.7ｇ)、台石１点(714.3ｇ)、剝片41点(746.7ｇ)、礫・礫片６点(103.0ｇ)が出土している。このうち敲石(48)と台石(49)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器18点(黒浜式ないし有尾式７点、諸磯ａ式７点、諸磯ｂ式４点)は、遺構外出土遺物として掲載した。石鏃１点、石匙1点、打製石斧１点、磨製石斧２点、凹石１点、磨石１点、敲石２点についても、縄文時代の遺物であると考えられることから、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。陶磁器類の内訳は、中世の在地系鉢・鍋破片３点(70ｇ)、近世の国産磁器破片３点(17ｇ)である。

所見　流水の痕跡は認められず、底部付近が硬化していたことから、道として機能していた可能性が考えられる。６号溝は埋没土中にAs-Bを含み、１号復旧坑の下位から検出された。このことから、天仁元(1108)年以降に埋没し、天明３(1783)年の時点では完全に平坦化していたと考えられる。調査区北端付近に見られる底面の凹凸については、これが道としての機能を失った後に掘られたものか、あるいは構築時に掘られた下部構造であるのかを明らかにすることはできなかった。また、溝の法面に穿たれた多数の小ピットは、何らかの目的で杭が打たれた痕跡とも考えられるが、木杭等が出土しなかったため、実際にどのような機能をもっていたのかは不明である。

７号溝(第52図、PL.16・292)

位置　Ｘ＝40,860～40,877、Ｙ＝－80,726～－80,754（Ｃ・Ｄ区）

規模　調査長33.35m、上幅0.98～1.70m

残存深度　0.45～0.66m

走向　Ｎ－58°－Ｗ

重複　６号溝と重複し、７号溝が古い。また、８号溝、２号畑と重複し、７号溝が新しい。

埋没土　上層は多量のAs-B、微量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-B、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　土師器杯（１）を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含み、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片81点(351ｇ)、甕・壺類破片606点(2,840ｇ)、須恵器の杯・椀類破片188点(1,670ｇ)、甕・壺類破片144点(1,950ｇ)、瓦片５点、敲石１点(213.2ｇ)、剝片５点(70.0ｇ)が出土している。このうち縄文土器(有尾式)の口縁部破片は、遺構外遺物として掲載した。

所見　底部の幅が狭く硬化面が認められなかったことや、流水の痕跡が認められなかったことから、区画溝である可能性が考えられる。７号溝は２号畑の畝間溝を切り、１号復旧坑の下位から検出された。このことから、天仁元(1108)年以降に閉削され、天明３(1783)年の時点では完全に埋没し平坦化していたと考えられる。８号溝とほぼ直角に交わることから、両遺構は一連の区画溝である可能性も考えられる。ただし、６号溝と重複する位置から南東には続いておらず、そのため全体的な構造は不明である。

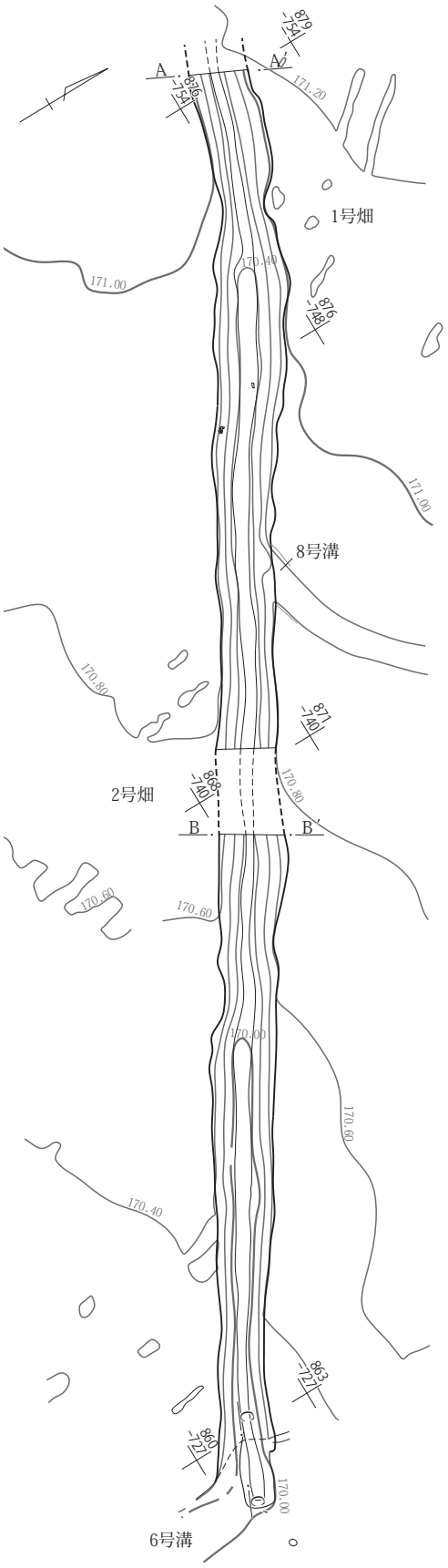
８号溝(第53図、PL.16・292)

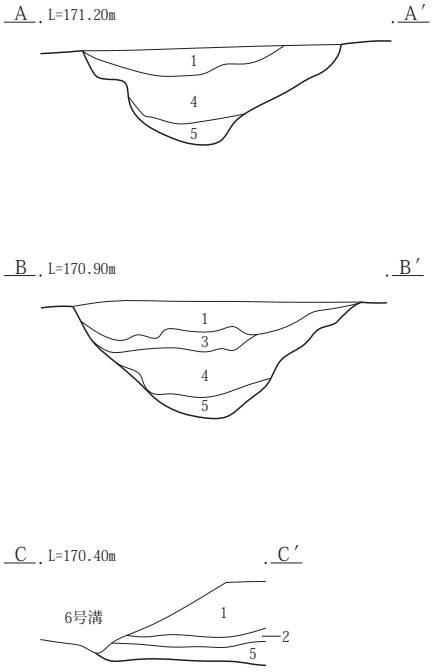
位置　Ｘ＝40,871～40,898、Ｙ＝－80,724～－80,744（Ｃ・Ｄ区）

規模　調査長32.90m、上幅0.66～0.92m

残存深度　0.18～0.27m

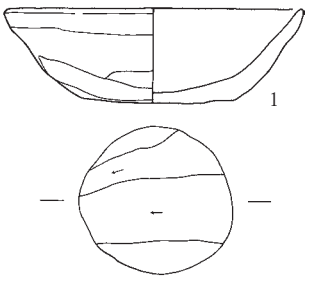
走向　Ｎ－33°－Ｅ





７号溝Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′
1．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを多量、As-YPを微量含む。
2．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを多量、As-YPを少量含む。
3．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量含む。
4．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bを少量含む。
5．黒褐色土7.5YR3/1　As-Bをやや多量、ローム粒を微量含む。

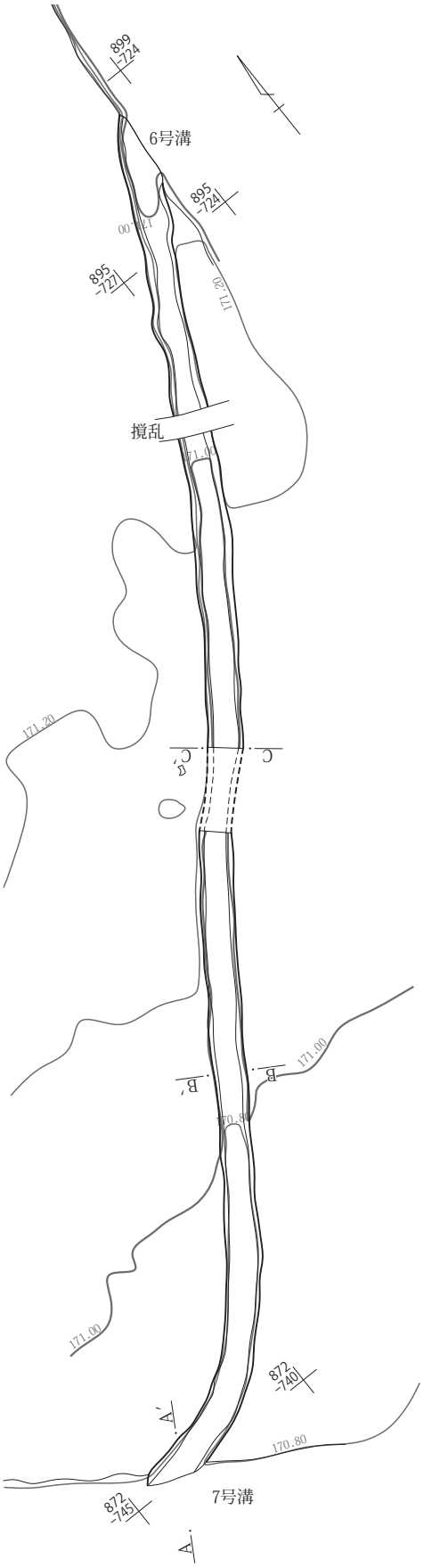
0　1：40　1m

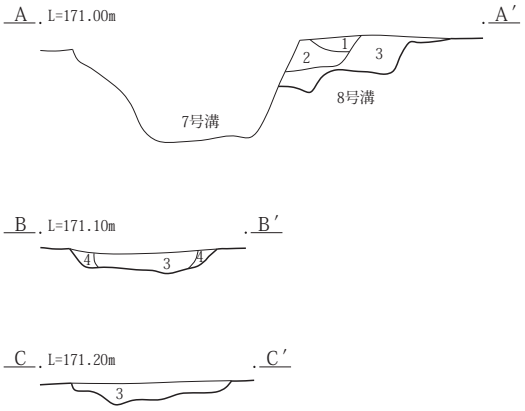


0　1：160　4m

0　1：3　10cm

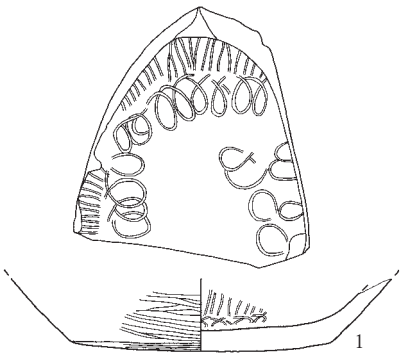
第52図　７号溝と出土遺物

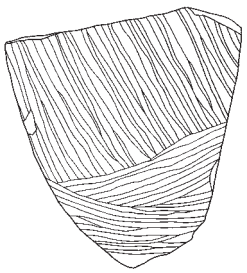


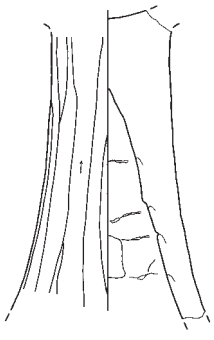


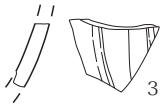
８号溝Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′
１．にぶい黄橙色土10Y6/4　As-Aを少量含む。
２．黒色土10YR2/1　As-Bをやや多量含む。
３．にぶい黄橙色土10Y6/4　As-Bを微量含む。
４．にぶい黄橙色土10Y6/4　As-Bを多量含む。

0　1：40　1m









0　1：160　4m

0　1：3　10cm

第53図　８号溝と出土遺物

重複　７号溝と重複し、８号溝が古い。また、６号溝と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

埋没土　上層はやや多量のAs-Bを含む黒色土で埋没していた。下層は微量のAs-Bを含むにぶい黄橙色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　土師器鉢（１）、土師器高杯（２）、龍泉窯系青磁碗（３）を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含み、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられることから、これらの遺物のうち１・２については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片34点(118ｇ)、甕・壺類破片259点(970ｇ)、須恵器の杯・椀類破片158点(1,000ｇ)、甕・壺類破片91点(730ｇ)、瓦片５点、剝片１点(1.1ｇ)が出土している。

所見　底部の幅が狭く硬化面が認められなかったことや、流水の痕跡が認められなかったことから、区画溝である可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから、天仁元(1108)年以降に埋没したと考えられる。７号溝とほぼ直角に交わることから、両遺構は一連の区画溝である可能性も考えられる。ただし、６号溝と重複する位置から北東には続いておらず、そのため全体的な構造は不明である。

47号溝(第54・55図、PL.16・292・293)

位置　Ｘ＝40,960～40,965、Ｙ＝－80,694～－80,698（Ｂ区西）

規模　調査長(5.33m)、幅1.20～2.18m

残存深度　0.23～0.64m

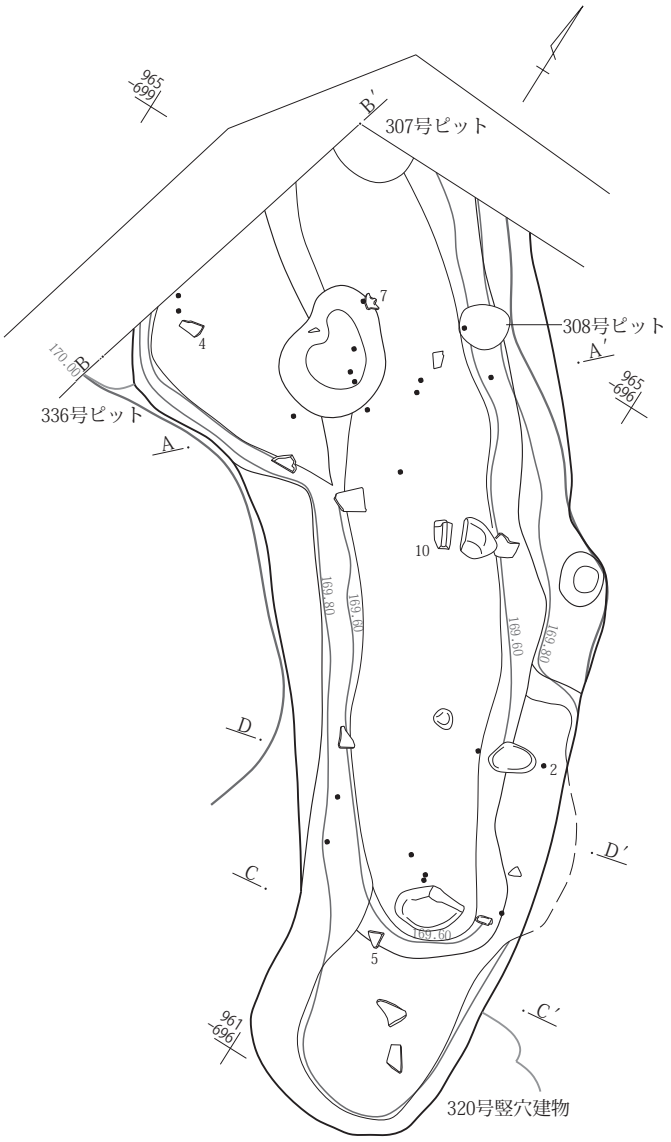
走向　Ｎ－32°－Ｗ

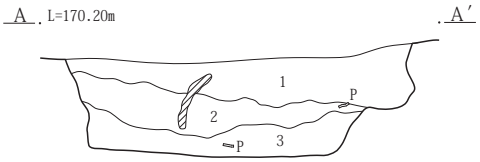
重複　320号竪穴建物、336号ピットと重複し、47号溝が新しい。また、307号・308号ピットと重複し、47号溝が古い。

埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム粗粒～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。中層は少量のローム粒、微量の炭化物粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層は多量のローム粗粒～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。最下層には部分的に多量のローム小塊～粒を含む褐色土が堆積していたが、この最下層は人為的な埋没と考えられる。流水の痕跡は認められなかった。埋没土のうち５層は、重複する別遺構の埋没土である可能性が考えられる。

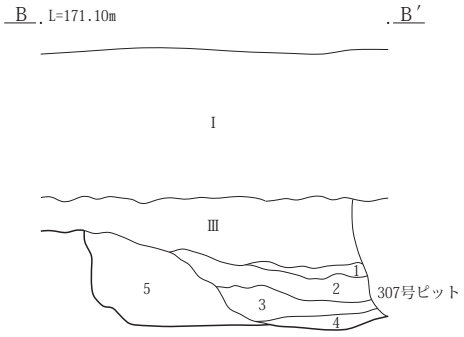
出土遺物　須恵器杯蓋（１）、灰釉陶器椀（３）、平瓦（４～６）、在地系内耳鍋（７・８）、茶臼(10)などを掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含み、天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられることから、これらの遺物のうち１～６については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片６点(27ｇ)、甕・壺類破片106点(300ｇ)、須恵器の杯・椀類破片57点(360ｇ)、甕・壺類破片11点(85ｇ)、瓦片31点、削器１点(146.0ｇ)、二次加工ある剝片８点(29.5ｇ)、礫片１点(72.9ｇ)が出土している。このうち削器については、縄文時代の遺物であると考えられることから、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　北西に向かって緩やかな弧を描くように延びており、底面はほぼ平坦で、流水の痕跡が認められなかった。このことから、47号溝は台地上の集落から谷地の水田へと下るための道である可能性などが考えられるが、調査範囲が限定的であったことから詳細は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられる。

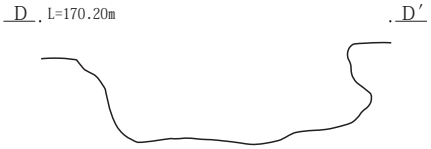


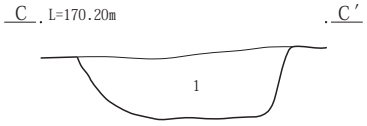


47号溝Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　ローム粗粒～粒を多量含む。



47号溝Ｂ－Ｂ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．暗褐色土10YR3/4　As-B、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/2　As-Bを少量、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
４．褐色土10YR4/4　ローム小塊～粒を多量含む。
５．暗褐色土10YR3/4　As-Bを少量、ローム小塊～粒を多量含む。

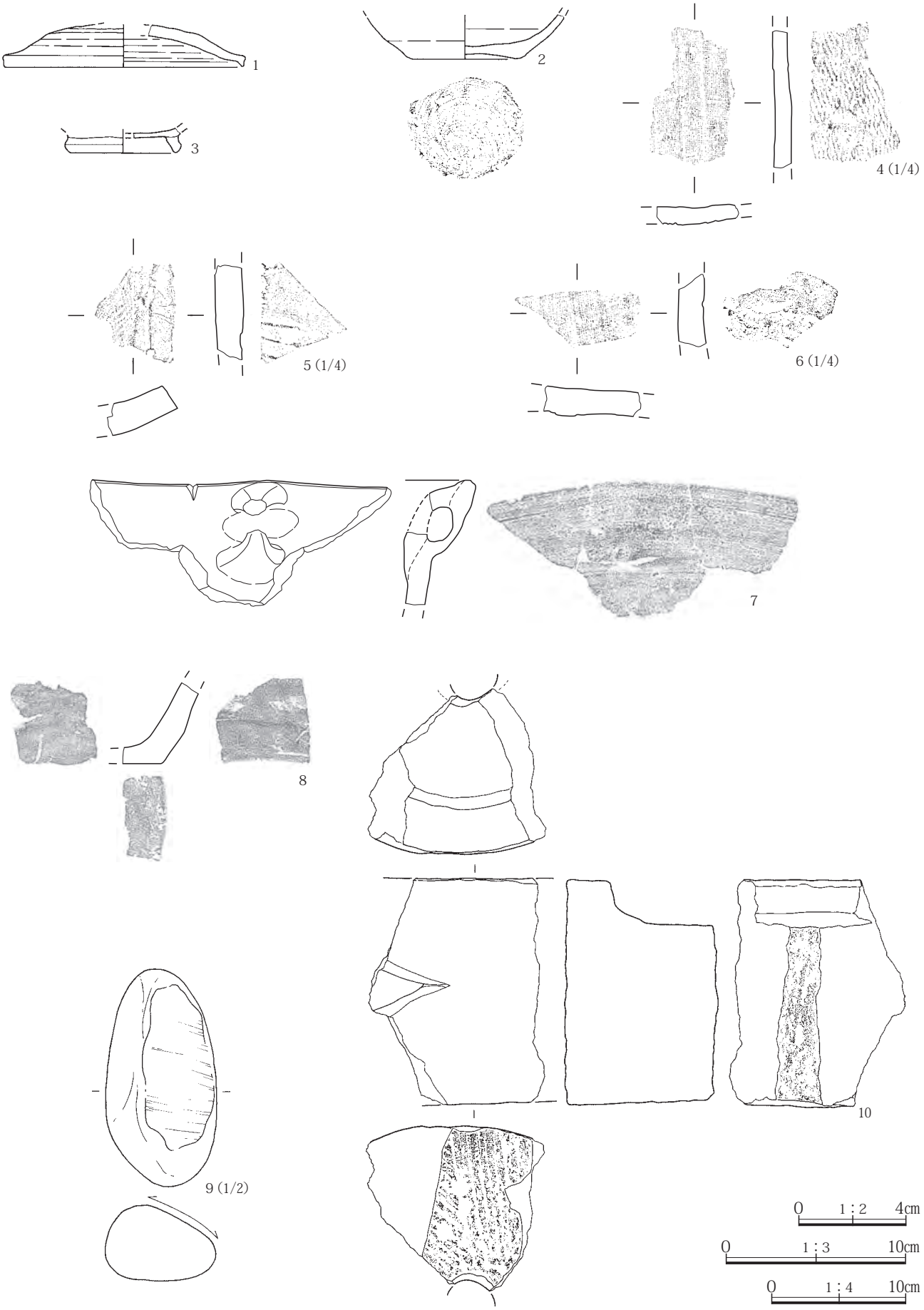




47号溝Ｃ－Ｃ′
１．黒褐色土10YR3/2　As-Bをやや多量、ローム粒を少量含む。

0　1：40　1m

第54図　47号溝



第55図　47号溝出土遺物

48号溝(第56図、PL.17)

位置　X＝40,956～40,957、Y＝－80,693～－80,694（B区西）

規模　調査長(3.00m)、上幅0.75～0.85m

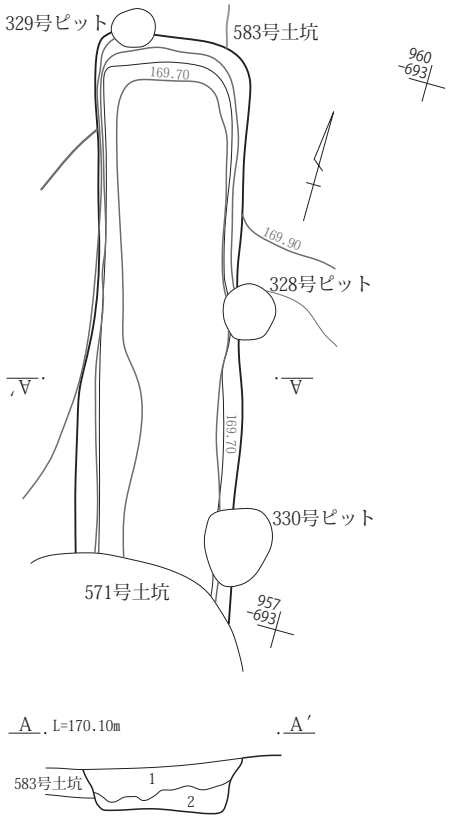
残存深度　0.22～0.30m

走向　N－10°－W

重複　571号土坑、328号～330号ピットと重複し、48号溝が古い。また、583号土坑と重複し、48号溝が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-Bと少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-B、ローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(14ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(63ｇ)、瓦片２点が出土している。



48号溝Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/2　As-Bをやや多量、ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム塊～粒をやや多量含む。

0　1：40　1m

第56図　48号溝

所見　当初、溝として調査されたが、その後、平面形状が長方形であることが明らかになった。このことから、本溝は作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降に埋没した遺構であると考えられる。

３．道

２号道(第57図、PL.17・18)

位置　X＝40,854～40,871、Y＝－80,729～－80,771（C・D区）

規模　調査長44.65m、幅0.80～2.52m

残存深度　0.09～0.26m

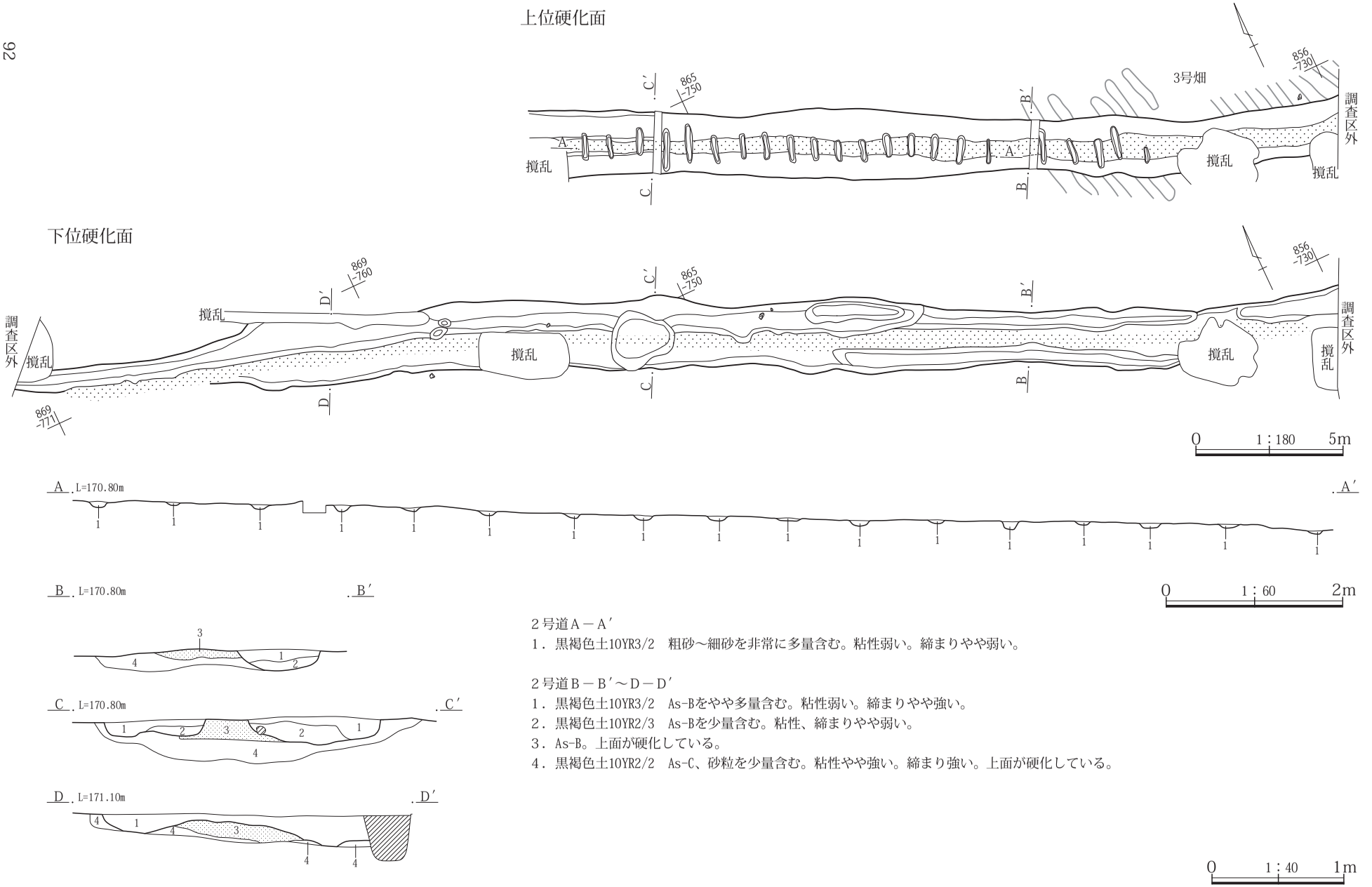
走向　N－65°－W

重複　３号畑と重複し、２号道が新しい。

埋没土　溝状の掘り込みの上層は、やや多量のAs-Bを含む黒褐色土や、少量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、砂粒を含む黒褐色土で埋没していた。上位の硬化面を切って数10㎝間隔で並ぶ小ピット群は、非常に多量の粗砂～細砂を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片145点(425ｇ)、甕・壺類破片854点(2,869ｇ)、須恵器の杯・椀類破片165点(1,086ｇ)、甕・壺類破片203点(2,251ｇ)、近現代の陶磁器破片１点(３ｇ)、二次加工ある剥片１点(8.8ｇ)が出土している。

所見　２号道は調査時、幅0.8mほどの直線的に続く硬化面として認識されたが、当初は上幅1.7～2.5mの浅い溝状に掘り込まれた底面を路面としていたと考えられる。その溝状の道は、砂を含む黒褐色土で徐々に埋没しながら使用され続け、天仁元(1108)年にAs-Bが降下すると完全に埋没した。しかし、その後も道はAs-Bの一次堆積層上面を路面として踏襲された。このAs-B層上面の道は、側溝状の溝や、数10㎝間隔で並ぶ土坑群によって切断されるなどしたが、これらは排水を目的とした路面改修の痕跡であると考えられる。このように２号道は、天仁元(1108)年以前に作られ、As-B降下後もそのまま踏襲され、さらに改修を加えながら使用され続けた道であると考えられる。



２号道Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR3/2　粗砂～細砂を非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

２号道Ｂ－Ｂ′～Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR3/2　As-Bをやや多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量含む。粘性、締まりやや弱い。

３．As-B。上面が硬化している。

４．黒褐色土10YR2/2　As-C、砂粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。上面が硬化している。

第57図　２号道

４．畑

１号畑(第58図、PL.18)

位置　Ｘ＝40,876～40,893、Ｙ＝－80,731～－80,874（Ｃ・Ｄ区）

規模　畝間溝の調査長は0.26～6.40m、幅は0.12～0.56m、深さは0.04～0.07ｍである。

走向　Ｎ－20°－Ｗ。中央部付近で走向が変わり、「くの字」状に折れているようにも見える。

重複　なし

耕作面の状況　後世の削平により不明である。

耕作土　As-Cを含む黒色土。

埋没土　畝間溝はAs-Bの一次堆積物で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片100点(251ｇ)、甕・壺類破片398点(1,160ｇ)、須恵器の杯・椀類破片79点(550ｇ)、甕・壺類破片135点(1,500ｇ)、陶磁器類４点(44ｇ)、石製品１点(25.4ｇ)が出土している。陶磁器類の内訳は、近世の国産磁器破片１点(５ｇ)、国産施釉陶器破片３点(39ｇ)である。

所見　畝間溝の底部に堆積していたAs-Bが一次堆積であったことから、天仁元(1108)年の時点で存在していた畑の痕跡であると考えられる。後世の削平により耕作面が消失していたため断定はできないが、天仁元(1108)年の時点では既に耕作放棄されていた可能性も考えられる。等高線に直行する方向に畝立てされており、畝間溝は少なくとも24条が確認できた。走向が変化する中央部付近を境界に、南北２つの区画に分かれていた可能性が考えられる。

２号畑(第58図)

位置　Ｘ＝40,857～40,870、Ｙ＝－80,728～－80,744（Ｃ・Ｄ区）

規模　畝間溝の調査長は0.40～5.82m、幅は0.04～0.96m、深さは0.01～0.04ｍである。

走向　Ｎ－10°－Ｗ

重複　７号溝と重複し、２号畑が古い。

耕作面の状況　後世の削平により不明である。

耕作土　As-Cを含む黒色土。

埋没土　畝間溝はAs-Bの一次堆積物で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　畝間溝の底部に堆積していたAs-Bが一次堆積であったことから、天仁元(1108)年の時点で存在していた畑の痕跡であると考えられる。後世の削平により耕作面が消失していたため断定はできないが、天仁元(1108)年の時点では既に耕作放棄されていた可能性も考えられる。等高線に直行する方向に畝立てされており、畝間溝は15条確認できた。畝間溝が途切れる中央部付近を境界に、東西２つの区画に分かれていた可能性が考えられる。３号畑と一連の畑であったと考えられるが、調査年度が異なることから断定はせず分けて報告することとした。

なお、本畑の南側を切断している直線は、平成29年度の調査区の境界線である。

３号畑(第59図、PL.19)

位置　Ｘ＝40,851～40,859、Ｙ＝－80,729～－80,740（Ｃ・Ｄ区）

規模　畝間溝の調査長は1.70～6.80m、幅は0.28～0.83m、深さは0.01～0.07ｍである。

走向　Ｎ－15°－Ｗ

重複　２号道と重複し、３号畑が古い。

耕作面の状況　後世の削平により不明である。

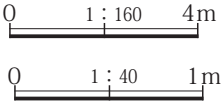
耕作土　As-Cを含む黒色土。

埋没土　畝間溝はAs-Bの一次堆積物で埋没していた。

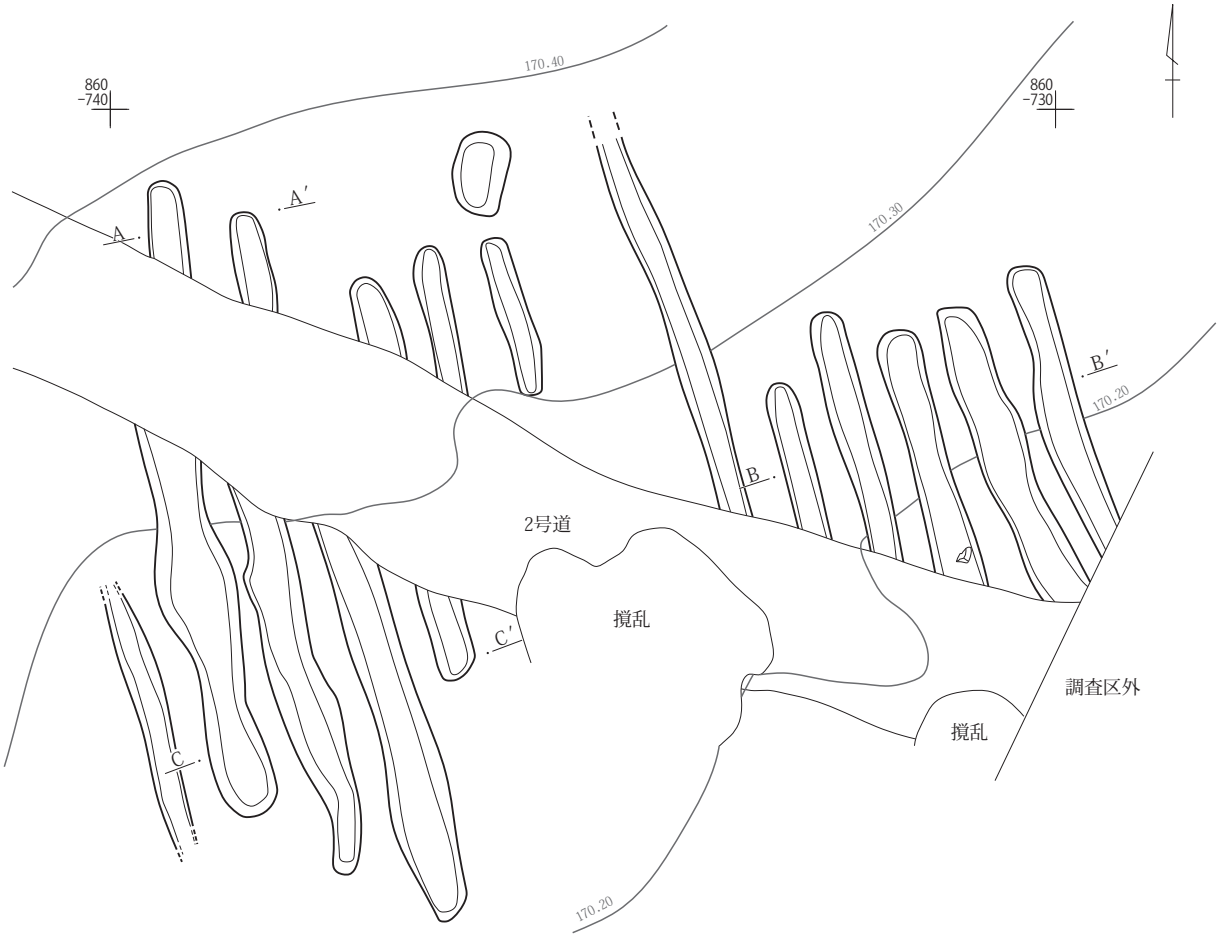
出土遺物　なし

所見　畝間溝の底部に堆積していたAs-Bが一次堆積であったことから、天仁元(1108)年の時点で存在していた畑の痕跡であると考えられる。後世の削平により耕作面が消失していたため断定はできないが、天仁元(1108)年の時点では既に耕作放棄されていた可能性も考えられる。等高線に直行する方向に畝立てされており、畝間溝は13条確認できた。畝間溝が途切れる中央部付近を境界に、東西２つの区画に分かれていた可能性が考えられる。２号畑と一連の畑であったと考えられるが、調査年度が異なることから断定はせず分けて報告することとした。

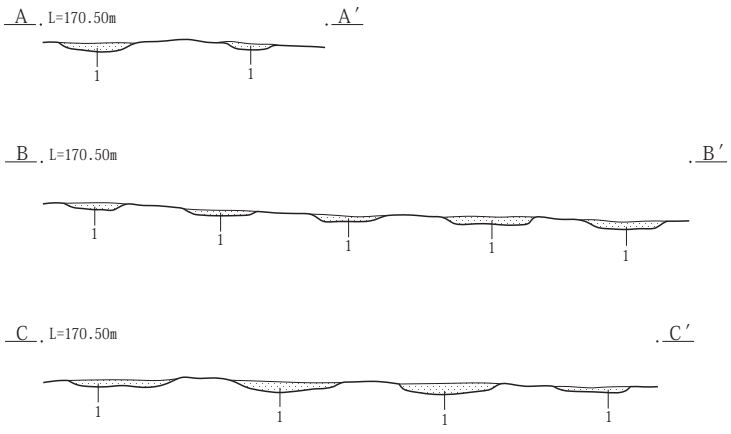
1号畑Ａ－Ａ′
1．一次堆積のAs-B。



第58図　１号・２号畑



0　1：80　2m



３号畑Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′
１．一次堆積のAs-B。

0　1：40　1m

第59図　３号畑

５．土坑

477号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,857～40,858、Ｙ＝－80,751～－80,752（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.80m、短軸0.70m

残存深度　0.11m

主軸方位　Ｎ－５°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、須恵器の杯・椀類破片２点(25ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

478号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,858、Ｙ＝－80,752(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.68m、短軸0.62m

残存深度　0.23m

主軸方位　Ｎ－18°－Ｅ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片１点(１ｇ)、須恵器の甕・壺類破片２点(41ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

479号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,858～40,859、Ｙ＝－80,754(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.67m、短軸0.65m

残存深度　0.30m

主軸方位　Ｎ－32°－Ｅ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(８ｇ)、甕・壺類破片３点(８ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(18ｇ)、甕・壺類破片２点(25ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

480号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,858～40,859、Ｙ＝－80,757～－80,758（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸1.04m、短軸1.03m

残存深度　0.30m

主軸方位　Ｎ－28°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(５ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(２ｇ)、甕・壺類破片１点(12ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

481号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,861、Ｙ＝－80,758～－80,759(Ｃ・Ｄ区)

形状　不整形

規模　長軸1.04m、短軸0.80m

残存深度　0.26m

主軸方位　Ｎ－75°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片６点(23ｇ)、須恵器の甕・壺類破片１点(７ｇ)が出土している。

所見　東半が西半に比べ最大で0.09m高くテラス状になっていることから、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。しかし、土層断面の観察から、それを確認することはできなかった。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

482号土坑(第60図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,860～40,861、Ｙ＝－80,760(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.84m、短軸0.83m

残存深度　0.19m

主軸方位　Ｎ－63°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(２ｇ)、甕・壺類破片12点(22ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片３点(５ｇ)が出土している。

所見　底部の中央付近には、長さ0.18m、幅0.16m、厚さ0.08mの礫が置かれていた。また、北端部には、長軸0.20m、短軸0.18m、深さ0.57mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

483号土坑(第60・69図、PL.20)

位置　Ｘ＝40,859～40,860、Ｙ＝－80,761～－80,762(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.90m、短軸0.89m

残存深度　0.37m

主軸方位　Ｎ－70°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　須恵器甕(483土-１)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(12ｇ)、甕・壺類破片10点(46ｇ)、須恵器の杯・椀類破片12点(74ｇ)、甕・壺類破片４点(141ｇ)が出土している。

所見　平面形状は円形であるが、底部は北半に比べ南半は約0.15m浅く、複雑な形状であった。底部の西壁付近には、長さ0.24m、幅0.16m、厚さ0.15mの礫が置かれていた。また、南西端部には、長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.56mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

484号土坑(第60図、PL.20・21)

位置　Ｘ＝40,870～40,871、Ｙ＝－80,749～－80,750(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.94m、短軸0.86m

残存深度　0.37m

主軸方位　Ｎ－87°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片５点(12ｇ)、甕・壺類破片22点(82ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(11ｇ)、甕・壺類破片１点(19ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

485号土坑(第60図、PL.21)

位置　Ｘ＝40,871～40,872、Ｙ＝－80,748～－80,749(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.97m、短軸0.92m

残存深度　0.19m

主軸方位　Ｎ－86°－Ｅ

重複　なし

埋没土　非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(２ｇ)、甕・壺類破片６点(19ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(５ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

486号土坑(第60図、PL.21)

位置　Ｘ＝40,872～40,873、Ｙ＝－80,750(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形
規模　長軸0.80m、短軸0.72m
残存深度　0.13m
主軸方位　Ｎ－42°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層は非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片３点（８ｇ）、甕・壺類破片３点（７ｇ）、須恵器の杯・椀類破片２点（９ｇ）が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

487号土坑(第61図、PL.21)
位置　Ｘ＝40,863～40,864、Ｙ＝－80,771～－80,772（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸1.06m、短軸1.02m
残存深度　0.27m
主軸方位　Ｎ－85°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層は非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器甕・壺類破片１点（１ｇ）が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

488号土坑(第61図、PL.21)
位置　Ｘ＝40,862、Ｙ＝－80,772～－80,773（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.72m、短軸0.65m
残存深度　0.15m
主軸方位　Ｎ－19°－Ｅ
重複　なし
埋没土　非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片13点(32ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点（９ｇ）が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

489号土坑(第61図、PL.21)
位置　Ｘ＝40,870～40,871、Ｙ＝－80,767～－80,768（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.90m、短軸0.68m
残存深度　0.23m
主軸方位　Ｎ－21°－Ｅ
重複　なし
埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片５点(27ｇ)、須恵器の杯･椀類破片２点(42ｇ)、瓦片１点が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

490号土坑(第61図、PL.21)
位置　Ｘ＝40,870～40,871、Ｙ＝－80,755（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.75m、短軸0.53m
残存深度　0.34m
主軸方位　Ｎ－30°－Ｅ
重複　なし
埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に塊状のAs-Bを含む下層は、人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片３点（９ｇ）、甕・壺類破片11点(20ｇ)、須恵器の杯・椀類破片11点(67ｇ)、甕・壺類破片３点(17ｇ)が出土している。
所見　南西半が北東半に比べ最大で0.10m高くテラス状になっていることから、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。しかし、土層断面の観察から、それを確認することはできなかった。埋没土中にAs-Bを含むこ

とから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

491号土坑(第61図、PL.21)

位置　Ｘ＝40,871～40,872、Ｙ＝－80,754～－80,755(Ｃ・Ｄ区)

形状　不整形

規模　長軸0.75m、短軸0.64m

残存深度　0.16m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片６点(15ｇ)、甕・壺類破片15点(27ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(14ｇ)、甕・壺類破片２点(７ｇ)が出土している。

所見　西端部には、長軸0.28m、短軸0.23m、深さ0.18mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

492号土坑(第61図、PL.22)

位置　Ｘ＝40,874～40,875、Ｙ＝－80,750～－80,751(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸1.00m、短軸0.93m

残存深度　0.25m

主軸方位　Ｎ－55°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片９点(21ｇ)、甕・壺類破片26点(135ｇ)、須恵器の杯・椀類破片19点(110ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

493号土坑(第61図、PL.22)

位置　Ｘ＝40,874、Ｙ＝－80,756～－80,757(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.82m、短軸0.62m

残存深度　0.21m

主軸方位　Ｎ－75°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(７ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

494号土坑(第61図、PL.22)

位置　Ｘ＝40,862、Ｙ＝－80,762～－80,763(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.75m、短軸0.74m

残存深度　0.28m

主軸方位　Ｎ－13°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片10点(18ｇ)、甕・壺類破片４点(２ｇ)、須恵器の杯・椀類破片５点(39ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

495号土坑(第61図、PL.22)

位置　Ｘ＝40,855～40,856、Ｙ＝－80,777(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.98m、短軸0.96m

残存深度　0.38m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に塊状のAs-Bを含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(５ｇ)、甕・壺類破片２点(７ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

496号土坑(第61図、PL.22)

位置　X＝40,849、Y＝－80,759～－80,760(C・D区)

形状　円形

規模　長軸0.68m、短軸0.65m

残存深度　0.20m

主軸方位　N－90°

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(５ｇ)、甕・壺類破片２点(７ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

497号土坑(第61図、PL.22)

位置　X＝40,855～40,856、Y＝－80,751～－80,752(C・D区)

形状　楕円形

規模　長軸0.85m、短軸0.65m

残存深度　0.08m

主軸方位　N－80°－E

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

498号土坑(第61図、PL.22)

位置　X＝40,857、Y＝－80,755(C・D区)

形状　楕円形

規模　長軸0.66m、短軸0.55m

残存深度　0.06m

主軸方位　N－42°－E

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(８ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

499号土坑(第62・69図、PL.22・23)

位置　X＝40,846～40,847、Y＝－80,757～－80,759(C・D区)

形状　長方形

規模　長軸1.23m、短軸0.54m

残存深度　0.22m

主軸方位　N－67°－W

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　須恵器椀(499土-１)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の甕・壺類破片10点(33ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(16ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、506号土坑と並ぶように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

500号土坑(第62図、PL.23)

位置　X＝40,847～40,848、Y＝－80,756～－80,757(C・D区)

形状　円形

規模　長軸0.90m、短軸0.85m

残存深度　0.40m

主軸方位　N－78°－E

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片３点(７ｇ)、甕・壺類破片９点(31ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(29ｇ)、甕・壺類破片２点(54ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

501号土坑(第62図、PL.23)

位置　X＝40,871～40,872、Y＝－80,767～－80,768

（Ｃ・Ｄ区）
形状　長方形
規模　長軸1.07m、短軸0.40m
残存深度　0.27m
主軸方位　Ｎ－66°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片５点（９ｇ）、須恵器の杯・椀類破片２点（９ｇ）、甕・壺類破片２点(74ｇ)が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形で、２号道と平行するように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。北西端部には、長軸0.31m、短軸0.30m、深さ0.66mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

502号土坑(第62図、PL.23)
位置　Ｘ＝40,844～40,845、Ｙ＝－80,750～－80,751
（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.88m、短軸0.80m
残存深度　0.22m
主軸方位　Ｎ－21°－Ｗ
重複　なし
埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片３点（３ｇ）、須恵器の杯・椀類破片４点(20ｇ)、甕・壺類破片２点（３ｇ）が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

503号土坑(第62図、PL.23)
位置　Ｘ＝40,848～40,849、Ｙ＝－80,740～－80,741
（Ｃ・Ｄ区）
形状　不整形
規模　長軸1.52m、短軸0.45m
残存深度　0.26m
主軸方位　Ｎ－54°－Ｗ
重複　なし
埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片８点(24ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(54ｇ)、甕・壺類破片２点(13ｇ)が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形に近い形状であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

504号土坑(第62図、PL.23)
位置　Ｘ＝40,858～40,859、Ｙ＝－80,735～－80,736
（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.87m、短軸0.57m
残存深度　0.09m
主軸方位　Ｎ－７°－Ｅ
重複　なし
埋没土　塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片９点(20ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点（１ｇ）が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

505号土坑(第62図、PL.23)
位置　Ｘ＝40,864～40,866、Ｙ＝－80,737～－80,738
（Ｃ・Ｄ区）
形状　長方形
規模　長軸1.75m、短軸0.75m
残存深度　0.52m
主軸方位　Ｎ－60°－Ｗ
重複　なし
埋没土　やや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片５点(14ｇ)、甕・壺類破片15点(42ｇ)、須恵器

の杯・椀類破片８点(78ｇ)、甕・壺類破片１点(11ｇ)、瓦片１点が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。また、本土坑は７号溝と平行しており関連が窺える。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

506号土坑(第62図、PL.23)

位置　Ｘ＝40,846、Ｙ＝－80,755～－80,757(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸1.69m、短軸0.58m

残存深度　0.31m

主軸方位　Ｎ－70°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(１ｇ)、甕・壺類破片15点(45ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(５ｇ)、甕・壺類破片２点(６ｇ)、瓦片１点が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、499号土坑と並ぶように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

507号土坑(第62図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,875、Ｙ＝－80,754～－80,755(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.74m、短軸0.70m

残存深度　0.27m

主軸方位　Ｎ－60°－Ｅ

重複　なし

埋没土　やや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片３点(６ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片１点(２ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

508号土坑(第62図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,830～40,831、Ｙ＝－80,755～－80,756(Ｃ・Ｄ区)

形状　中央を撹乱によって壊されているが、楕円形であると考えられる。

規模　長軸0.88m、短軸0.80m

残存深度　0.18m

主軸方位　Ｎ－52°－Ｗ

重複　なし

埋没土　塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

509号土坑(第62図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,829～40,830、Ｙ＝－80,772～－80,773(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.97m、短軸0.93m

残存深度　0.25m

主軸方位　Ｎ－45°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

510号土坑(第62図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,844～40,845、Ｙ＝－80,767(Ｃ・Ｄ区)

形状　円形

規模　長軸0.91m、短軸0.88m

残存深度　0.42m

主軸方位　Ｎ－33°－Ｅ

重複　なし

埋没土　塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・

椀類破片２点(12ｇ)、甕・壺類破片２点(５ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(34ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

511号土坑(第63図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,864～40,865、Ｙ＝－80,740～－80,741(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.90m、短軸0.69m

残存深度　0.88m

主軸方位　Ｎ－40°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は塊状のAs-B、少量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋没していた。中層は塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に塊状のAs-Bを含む上・中層は、人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(９ｇ)が出土している。

所見　２基のピットと重複しており、中央付近のものは長軸0.34m、短軸0.26m、深さ0.88m、北端部のものは長軸0.18m、短軸0.16m、深さ0.46mである。このうち中央付近のピットは、土層断面の観察から、本土坑より古いピットである可能性が考えられる。北端部のピットについては、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

513号土坑(第63図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,865～40,866、Ｙ＝－80,741～－80,742(Ｃ・Ｄ区)

形状　不整形

規模　長軸0.78m、短軸0.63m

残存深度　0.12m

主軸方位　Ｎ－15°－Ｅ

重複　514号土坑と重複し、513号土坑が新しい。

埋没土　塊状のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(１ｇ)、甕・壺類破片１点(30ｇ)が出土している。

所見　２基のピットと重複しており、北東端部のものは長軸0.23m、短軸0.18m、深さ0.37m、北西端部のものは長軸0.28m、短軸0.22m、深さ0.33mである。どちらのピットについても、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

514号土坑(第63図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,865～40,866、Ｙ＝－80,741(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.98m、短軸0.73m

残存深度　0.20m

主軸方位　Ｎ－11°－Ｗ

重複　513号土坑と重複し、514号土坑が古い。

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片１点(１ｇ)、須恵器の甕・壺類破片２点(33ｇ)が出土している。

所見　２基のピットと重複しており、北端部のものは長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.47m、南端部のものは長軸0.48m、短軸0.39m、深さ0.32mである。どちらのピットについても、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

516号土坑(第63図、PL.24)

位置　Ｘ＝40,842～40,843、Ｙ＝－80,751～－80,752(Ｃ・Ｄ区)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸0.80m、短軸(0.30m)

残存深度　0.10m

主軸方位　Ｎ－70°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以

降の遺構であると考えられる。

517号土坑(第63図、PL.24・25)

位置　Ｘ＝40,896～40,897、Ｙ＝－80,709～－80,710（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸0.90m、短軸0.88m

残存深度　0.15m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　非常に多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、瓦片１点が出土している。

所見　底部付近には、礫が並べられていた。このうち最大のものは、長さ0.30m、幅0.22mである。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

518号土坑(第63図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,895～40,896、Ｙ＝－80,710(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸1.12m、短軸0.59m

残存深度　0.20m

主軸方位　Ｎ－７°－Ｗ

重複　なし

埋没土　非常に多量のAs-Bを含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片６点（８ｇ）、須恵器の杯・椀類破片３点（５ｇ）が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

519号土坑(第63図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,892～40,893、Ｙ＝－80,711(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.83m、短軸(0.78m)

残存深度　0.21m

主軸方位　Ｎ－65°－Ｗ

重複　522号土坑と重複し、519号土坑が新しい。

埋没土　多量のAs-B、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没の可能性が考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(13ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(13ｇ)、甕・壺類破片１点(４ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

520号土坑(第63図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,891～40,892、Ｙ＝－80,711(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.78m、短軸0.60m

残存深度　0.79m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　522号土坑と重複し、520号土坑が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-B、少量のローム小塊を含む暗褐色土で埋没していた。中層は微量のAs-B、ローム粒を含む黒褐色土、または少量のAs-B、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　北西端部には、長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.76mのピットが重複していた。土層断面の観察から、本土坑より古いピットである可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

521号土坑(第63図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,891～40,893、Ｙ＝－80,714～－80,715（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸0.93m、短軸0.80m

残存深度　0.46m

主軸方位　Ｎ－13°－Ｗ

重複　３号建物１号溝と重複し、521号土坑が新しい。

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む暗褐色土、中層は多量

のローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片５点(３ｇ)、甕・壺類破片10点(22ｇ)、須恵器の杯・椀類破片９点(31ｇ)、甕・壺類破片２点(10ｇ)、瓦片５点が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。また、本土坑は６号溝と平行しており関連が窺える。北西端部には、長軸0.36m、短軸0.31m、深さ0.53mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。また、南西部付近は底部が最大で0.30m深くなっており、この部分には別の土坑が重複している可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

522号土坑(第64図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,893～40,894、Ｙ＝－80,711～－80,712(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸1.50m、短軸1.08m

残存深度　0.78m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　519号・520号土坑と重複し、いずれも522号土坑が古い。

埋没土　少量のAs-B、多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(23ｇ)、瓦片１点が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

523号土坑(第64図、PL.25)

位置　Ｘ＝40,895～40,896、Ｙ＝－80,716～－80,717(Ｃ・Ｄ区)

形状　不整形

規模　長軸1.03m、短軸0.71m

残存深度　0.93m

主軸方位　Ｎ－25°－Ｗ

重複　３号建物１号溝と重複し、523号土坑が新しい。

埋没土　上層から下層までAs-Bやローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していたが、上層には微量の焼土粒が含まれ、下層はやや黒味が強い土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片８点(40ｇ)、須恵器の杯・椀類破片６点(39ｇ)、瓦片３点が出土している。

所見　土層断面の観察などから、時期差のある２基のピットが重複していると考えられる。南側のピットが新しく、長軸0.66m、短軸0.52m、深さ1.27mである。一方、北側のピットは、長軸0.71m、短軸0.54m、深さ1.05mである。いずれも埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

524号土坑(第64図、PL.25・26)

位置　Ｘ＝40,893～40,895、Ｙ＝－80,712～－80,713(Ｃ・Ｄ区)

形状　一部を撹乱によって壊されているが、楕円形であると考えられる。

規模　長軸1.47m、短軸0.98m

残存深度　0.21m

主軸方位　Ｎ－30°－Ｗ

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(５ｇ)、甕・壺類破片８点(22ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(34ｇ)、甕・壺類破片４点(25ｇ)が出土している。

所見　北西端部には、長軸0.28m、短軸0.20m、深さ0.37mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

527号土坑(第64図、PL.26)

位置　Ｘ＝40,910～40,911、Ｙ＝－80,723～－80,724(Ｃ・Ｄ区)

形状　東側を６号溝によって壊されているが、長方形であると考えられる。

規模　長軸(1.70m)、短軸0.60m

残存深度　0.21m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　６号溝と重複し、527号土坑が古い。また、41号溝と重複し、527号土坑が新しい。

埋没土　多量のAs-B、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没の可能性が考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点（１ｇ）、甕・壺類破片５点（８ｇ）、須恵器の杯・椀類破片２点（８ｇ）、瓦片１点、剝片１点(1.9ｇ）が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

528号土坑(第64図、PL.26)

位置　Ｘ＝40,882～40,883、Ｙ＝－80,717～－80,718（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸0.83m、短軸0.82m

残存深度　0.09m

主軸方位　Ｎ－93°－Ｗ

重複　531号土坑と重複し、528号土坑が古い。２号建物と重複し、528号土坑が新しい。

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点（３ｇ）、甕・壺類破片２点（４ｇ）、須恵器の杯・椀類破片１点（３ｇ）､瓦片１点が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

529号土坑(第64図、PL.26)

位置　Ｘ＝40,881～40,882、Ｙ＝－80,718～－80,719（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸0.80m、短軸0.77m

残存深度　0.25m

主軸方位　Ｎ－80°－Ｗ

重複　２号建物と重複し、529号土坑が新しい。

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片９点(14ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点（６ｇ）、甕・壺類破片２点(12ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

530号土坑(第64図、PL.26)

位置　Ｘ＝40,877～40,878、Ｙ＝－80,717～－80,718（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸0.78m、短軸0.78m

残存深度　0.31m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点（１ｇ）、甕・壺類破片３点(11ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(14ｇ)､瓦片１点が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

531号土坑(第64・69図、PL.26)

位置　Ｘ＝40,883、Ｙ＝－80,718～－80,720（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸2.90m、短軸0.80m

残存深度　0.68m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　６号溝と重複し、531号土坑が古い。また、２号建物、528号土坑と重複し、531号土坑が新しい。

埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-B、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。少量のローム小塊を含む下層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

出土遺物　須恵器杯(531土-１)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片26点(66ｇ)､甕・壺類破片118点(299ｇ)、須恵器の杯・椀類破片47点(208ｇ)、甕・壺類破片19点(437ｇ)､瓦片５点､削器１点(64.6ｇ)､剝片１点(1.6ｇ)、礫片類１点(6.4ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

532号土坑(第65図、PL.26)
位置　Ｘ＝40,869、Ｙ＝－80,727～－80,728(Ｃ・Ｄ区)
形状　長方形
規模　長軸0.70m、短軸0.42m
残存深度　0.30m
主軸方位　Ｎ－80°－Ｗ
重複　533号土坑と重複し、532号土坑が新しい。
埋没土　上層は多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片２点(３ｇ)、甕・壺類破片５点(４ｇ)、須恵器の杯・椀類破片５点(15ｇ)、甕・壺類破片２点(16ｇ)が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

533号土坑(第65図、PL.26)
位置　Ｘ＝40,868～40,870、Ｙ＝－80,726～－80,727(Ｃ・Ｄ区)
形状　長方形
規模　長軸2.08m、短軸0.60m
残存深度　0.15m
主軸方位　Ｎ－10°－Ｅ
重複　１号建物と重複し、533号土坑が新しい。また、532号土坑と重複し、533号土坑が古い。
埋没土　多量のAs-Bを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片25点(38ｇ)、須恵器の杯・椀類破片10点(31ｇ)、甕・壺類破片３点(35ｇ)が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。また、本土坑は６号溝と平行しており関連が窺える。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

557号土坑(第65図、PL.26・27)
位置　Ｘ＝40,949～40,953、Ｙ＝－80,679～－80,680(Ｂ区東)
形状　長方形
規模　長軸4.73m、短軸0.64m
残存深度　0.40m
主軸方位　Ｎ－５°－Ｗ
重複　なし
埋没土　少量のAs-B、やや多量のローム粗塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片５点(22ｇ)、甕・壺類破片９点(45ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、甕・壺類破片２点(17ｇ)、剝片１点(12.1ｇ)が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形で、台地の縁辺部に作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

559号土坑(第65図、PL.27)
位置　Ｘ＝40,957～40,960、Ｙ＝－80,681～－80,682(Ｂ区東)
形状　長方形
規模　長軸2.25m、短軸0.63m
残存深度　0.53m
主軸方位　Ｎ－23°－Ｗ
重複　なし
埋没土　やや多量のAs-B、ローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片１点(２ｇ)が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形で、台地の縁辺部に作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

560号土坑(第65図、PL.27)

位置　X＝40,960～40,962、Y＝－80,683～－80,684（B区東）

形状　長方形

規模　長軸2.42m、短軸0.66m

残存深度　0.18m

主軸方位　N－13°－W

重複　なし

埋没土　やや多量のAs-B、白色軽石、少量のローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、甕・壺類破片３点(３ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、甕・壺類破片１点(４ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、台地の縁辺部に作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中の白色軽石は、As-AやAs-Cの可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

561号土坑(第65図、PL.27)

位置　X＝40,957～40,958、Y＝－80,695～－80,696（B区西）

形状　不整形

規模　長軸0.96m、短軸0.89m

残存深度　0.74m

主軸方位　N－13°－W

重複　567号・575号土坑と重複し、いずれも561号土坑が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム塊～細粒を含む黒褐色土、下層は少量のローム粗粒～粒を含む黒褐色土で埋没していた。底面の一部には、やや多量のローム粗粒～粒を含むにぶい黄褐色土が堆積していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片４点(12ｇ)、須恵器の杯･椀類破片２点(２ｇ)、甕･壺類破片５点(37ｇ)、二次加工ある剝片２点(92.9ｇ)が出土している。

所見　中央付近に、長軸0.19m、短軸0.16m、深さ0.09mのピット状の掘り込みが認められた。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

562号土坑(第65図、PL.27)

位置　X＝40,961～40,962、Y＝－80,696～－80,697（B区西）

形状　不整形

規模　長軸1.02m、短軸(0.90m)

残存深度　0.46m

主軸方位　N－０°

重複　335号ピットと重複し、562号土坑が古い。

埋没土　上層は少量のAs-B、やや多量のローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-B、やや多量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-B、多量のローム粗粒～粒を含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片４点(14ｇ)、甕・壺類破片３点(６ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(25ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

563号土坑(第66図、PL.27)

位置　X＝40,954、Y＝－80,696～－80,697(B区西)

形状　不整形

規模　長軸1.22m、短軸(0.25m)

残存深度　0.07m

主軸方位　N－80°－E

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム塊～細粒、少量の炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。この上層は、後世の撹乱である可能性が考えられる。ピット状の部分は少量のAs-B、多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は多量のローム粗粒～細粒を含む暗褐色土や、微量のAs-B、やや多量のローム粒～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　東端部には、長軸0.28m、短軸(0.18m)、深さ0.52

mのピットが重複していた。土層断面の観察から、本土坑より新しいピットである可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

564号土坑(第66図、PL.27)

位置　X＝40,954～40,956、Y＝－80,695～－80,696（B区西）

形状　不整形

規模　長軸(1.14m)、短軸0.93m

残存深度　0.49m

主軸方位　N－12°－W

重複　567号・581号土坑と重複し、いずれも564号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、黒褐色土粗粒、多量のローム粗粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。この上層は、後世の撹乱である可能性が考えられる。下層は少量のAs-B、黒褐色土塊～小塊、多量のローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(21ｇ)、須恵器の杯･椀類破片３点(８ｇ)、剝片１点(13.5ｇ)が出土している。

所見　調査区南壁際では残存深度が最大0.49mであったのに対し、その北側では0.20m未満と浅かった。このことから、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

565号土坑(第66・69図、PL.27)

位置　X＝40,955～40,956、Y＝－80,693～－80,694（B区西）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(0.75m)、短軸0.75m

残存深度　0.28m

主軸方位　N－15°－W

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-B、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。この上層は、後世の撹乱である可能性が考えられる。下層は少量のAs-B、多量のローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　土師器甕(565土-１)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、甕・壺類破片７点(18ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(31ｇ)、甕・壺類破片１点(１ｇ)、中世の国産焼締陶器破片１点(31ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、48号溝や567号土坑と主軸方位が同じであることから、これらの遺構と同様に作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

566号土坑(第66図、PL.27・28)

位置　X＝40,953～40,954、Y＝－80,698～－80,700（B区西）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸2.08m、短軸0.83m

残存深度　0.20m

主軸方位　N－78°－E

重複　572号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

埋没土　上層は少量のAs-B、ローム粗粒～粒を含む暗褐色土で埋没していた。中層は多量のローム小塊～粒を含むにぶい黄褐色土で埋没していた。この上層・中層は、後世の撹乱である可能性が考えられる。下層は多量のローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片４点(17ｇ)、須恵器の杯･椀類破片３点(12ｇ)、剝片１点(17.1ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

567号土坑(第66・69図、PL.28・293)
位置　X＝40,955～40,958、Y＝－80,694～－80,696（B区西）
形状　長方形
規模　長軸(2.69m)、短軸0.80m
残存深度　0.45m
主軸方位　N－12°－W
重複　561号・564号・575号・581号土坑、324号・331号ピットと重複し、いずれも567号土坑が古い。
埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はローム塊を主体とし、少量の暗褐色土粒を含む褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　在地系内耳鍋(567土-１)と鉄釘(567土-２)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片２点(５ｇ)、甕・壺類破片４点(10ｇ)、須恵器の甕・壺類破片１点(３ｇ)、瓦片１点が出土している。
所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。南端部付近では、周囲と比べ底面が0.10～0.20mほど低くなる箇所が認められた。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

568号土坑(第67図、PL.28)
位置　X＝40,957、Y＝－80,697～－80,698(B区西)
形状　楕円形
規模　長軸1.02m、短軸0.85m
残存深度　0.52m
主軸方位　N－72°－E
重複　578号土坑と重複し、568号土坑が新しい。
埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム粗粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-B、多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片３点(11ｇ)、甕・壺類破片１点(１ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(33ｇ)、甕・壺類破片１点(12ｇ)が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

569号土坑(第67図、PL.28)
位置　X＝40,956～40,957、Y＝－80,699～－80,700（B区西）
形状　楕円形
規模　長軸0.85m、短軸0.77m
残存深度　0.16m
主軸方位　N－77°－E
重複　314号ピットと重複し、569号土坑が古い。
埋没土　やや多量のAs-B、ローム小塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　なし
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

570号土坑(第67図、PL.28)
位置　X＝40,956、Y＝－80,699～－80,700(B区西)
形状　楕円形
規模　長軸0.50m、短軸0.38m
残存深度　0.23m
主軸方位　N－77°－E
重複　なし
埋没土　やや多量のAs-B、ローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片５点(３ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(22ｇ)、甕・壺類破片２点(４ｇ)が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

571号土坑(第67図、PL.28)
位置　X＝40,956～40,957、Y＝－80,693～－80,694（B区西）
形状　不整形
規模　長軸1.21m、短軸1.05m
残存深度　0.32m
主軸方位　N－75°－W
重複　48号溝と重複し、571号土坑が新しい。また、327号ピットと重複し、571号土坑が古い。

埋没土　やや多量のAs-B、ローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。ピット状の部分は、ローム塊を主体とし、少量の暗褐色土粒を含む褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　北西端部には、長軸0.51m、短軸0.30m、深さ0.43mのピットが重複していた。土層断面の観察から、本土坑より古いピットである可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

572号土坑(第67・69図、PL.28)

位置　Ｘ＝40,954～40,955、Ｙ＝－80,700～－80,701（Ｂ区西）

形状　長方形

規模　長軸(1.35m)、短軸1.16m

残存深度　0.38m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　566号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-B、ローム小塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　常滑陶器(572土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片６点(22ｇ)、甕・壺類破片12点(40ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(53ｇ)、甕・壺類破片１点(１ｇ)、凹石１点(350.6ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的ではあるが、平面形状が溝状の長方形であると考えられることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

573号土坑(第67・69図、PL.28)

位置　Ｘ＝40,957～40,959、Ｙ＝－80,692～－80,693（Ｂ区西）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸1.94m、短軸(0.54m)

残存深度　0.77m

主軸方位　Ｎ－20°－Ｗ

重複　574号・583号土坑と重複し、いずれも573号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、多量のローム粗粒～細粒を含む暗褐色土などで埋没していた。中層はやや多量のローム粗粒～細粒、少量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　須恵器杯(573土-１)、須恵器椀(573土-２)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、これらの遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片８点(15ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、剥片１点(10.9ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、48号溝や567号土坑と主軸方位が同じであることから、これらの遺構と同様に作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

574号土坑(第67・69図、PL.28・29・293)

位置　Ｘ＝40,956～40,957、Ｙ＝－80,691～－80,692（Ｂ区西）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(0.61m)、短軸(0.45m)

残存深度　0.25m

主軸方位　Ｎ－18°－Ｗ

重複　573号土坑と重複し、574号土坑が古い。また、583号土坑と重複し、574号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、ローム粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-B、やや多量のローム粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　須恵器長頸壺(574土-１)、中近世の在地系土器(574土-２)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられること

から、574土-１については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した以外に出土遺物はない。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、48号溝や567号土坑と主軸方位が同じであることから、これらの遺構と同様に作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

575号土坑(第67図、PL.29)

位置　Ｘ＝40,957～40,958、Ｙ＝－80,696(Ｂ区西)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(0.58m)、短軸0.59m

残存深度　0.35m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　561号土坑と重複し、575号土坑が古い。また、576号土坑と重複し、575号土坑が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-B、ローム粗粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-B、多量のローム粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(１ｇ)、甕・壺類破片７点(31ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(19ｇ)、甕・壺類破片２点(３ｇ)、剝片１点(1.0ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、579号・582号土坑と主軸方位が同じであることから、これらの遺構と同様に作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

578号土坑(第68・69図、PL.29)

位置　Ｘ＝40,956～40,959、Ｙ＝－80,696～－80,698(Ｂ区西)

形状　長方形

規模　長軸2.67m、短軸1.06m

残存深度　0.51m

主軸方位　Ｎ－９°－Ｗ

重複　568号土坑と重複し、578号土坑が古い。また、579号・582号・584号土坑と重複し、578号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、やや多量のローム粗粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-B、多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　須恵器杯(578土-１)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、この遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、甕・壺類破片４点(13ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(15ｇ)、甕・壺類破片１点(２ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、48号溝や567号土坑と主軸方位が同じであることから、これらの遺構と同様に作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。東壁付近に２基のピットが重複しており、北側のものは長軸0.20m、短軸(0.12m)、深さ0.38m、南側のものは長軸0.26m、短軸(0.21m)、深さ0.38mである。どちらのピットについても、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

579号土坑(第68・69図、PL.29・293)

位置　Ｘ＝40,957、Ｙ＝－80,697～－80,699(Ｂ区西)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(1.30m)、短軸(0.41m)

残存深度　0.24m

主軸方位　Ｎ－76°－Ｅ

重複　568号・582号土坑と重複し、579号土坑が古い。また、577号土坑と重複し、579号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、白色軽石、多量のローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-B、やや多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　土師器杯(579土-１)、平瓦(579土-２)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、これらの遺物については混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片２点(７ｇ)、甕・

壺類破片８点(15ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(10ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、582号土坑と主軸方位が同じであることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中の白色軽石は、As-AやAs-Cの可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

580号土坑(第68図、PL.29)

位置　Ｘ＝40,958～40,961、Ｙ＝－80,695～－80,697(Ｂ区西)

形状　長方形

規模　長軸2.18m、短軸1.05m

残存深度　0.31m

主軸方位　Ｎ－６°－Ｗ

重複　320号竪穴建物と重複し、580号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、白色軽石、やや多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土、下層は少量のAs-B、やや多量のローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片８点(14ｇ)、須恵器の杯・椀類破片７点(74ｇ)、甕・壺類破片１点(３ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形で、567号土坑と並ぶように作られていたことから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。中央付近に、長軸0.20m、短軸0.16m、深さ0.12mのピット状の掘り込みが認められた。埋没土中の白色軽石は、As-AやAs-Cの可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

581号土坑(第68図、PL.29)

位置　Ｘ＝40,955～40,956、Ｙ＝－80,695～－80,696(Ｂ区西)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(1.00m)、短軸0.86m

残存深度　0.27m

主軸方位　Ｎ－75°－Ｅ

重複　564号・567号土坑、320号ピットと重複し、581号土坑が古い。また、321号・334号ピットと重複し、581号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、白色軽石、やや多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-B、ローム粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。ただし、縄文時代前期前半の土器がまとまって出土していることから、埋没土中に含まれるAs-Bとされた粒子は、別の砂粒である可能性も考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、黒色頁岩の剝片１点(5.6ｇ)が出土している。

所見　調査範囲が限定的であることから正確な形状は不明であるが、579号・582号土坑と主軸方位が同じであることや部分的に残された形状などから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

582号土坑(第68図、PL.29)

位置　Ｘ＝40,956～40,957、Ｙ＝－80,696～－80,698(Ｂ区西)

形状　長方形

規模　長軸(1.75m)、短軸1.06m

残存深度　0.29m

主軸方位　Ｎ－79°－Ｅ

重複　568号・578号土坑、318号ピットと重複し、582号土坑が古い。また、579号土坑と重複し、582号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-B、多量のローム小塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム小塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、甕・壺類破片２点(４ｇ)、須恵器の杯・椀類破片７点(41ｇ)、甕・壺類破片１点(３ｇ)が出土している。

所見　平面形状が溝状の長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られたイモ穴であると推

測できる。南壁付近には、長軸0.34m、短軸0.26m、深さ0.30mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

583号土坑(第68・70図、PL.29・293)

位置　X＝40,955～40,961、Y＝－80,692～－80,694(B区西)

形状　溝状

規模　長軸6.48m、短軸0.73m

残存深度　0.28m

主軸方位　N－17°－W

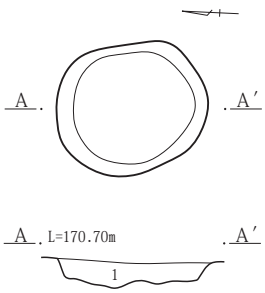
重複　48号溝、571号・573号・574号土坑、328号・330号ピットと重複し、583号土坑が古い。また、320号竪穴建物、587号土坑、337号ピットと重複し、583号土坑が新しい。

埋没土　少量のAs-B、多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　須恵器杯３点(583土-１～３)、土師器台付甕(583土-４)、丸瓦(583土-５)、平瓦３点(583土-６～８)を掲載したが、本遺構が埋没土中にAs-Bを含む天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられることから、これらの遺物についてはいずれも混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片10点(46ｇ)、甕・壺類破片32点(97ｇ)、須恵器の杯・椀類破片13点(123ｇ)、瓦片2点、剝片２点(3.5ｇ)が出土している。

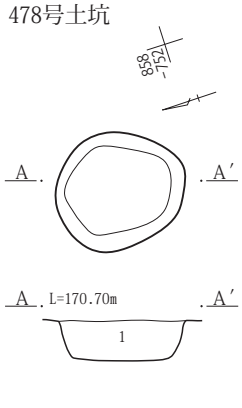
所見　当初、楕円形の土坑を想定したが、調査を進めると南側の調査区外にまで延びていることが確認できた。このことから溝であると考えられるが、底部に水流の痕跡が認められなかったことから、区画溝である可能性が高い。近接する47号溝の南端部とは、主軸方位がほぼ一致し関連が窺えるが、両遺構の間には約0.45mの間隔があり連続する溝ではない。埋没土中にAs-Bを含むことから天仁元(1108)年以降の遺構であると考えられる。

477号土坑



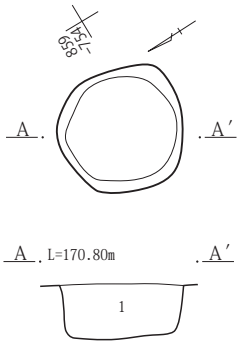
477号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

478号土坑



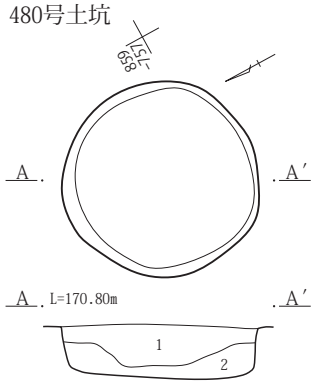
478号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

479号土坑



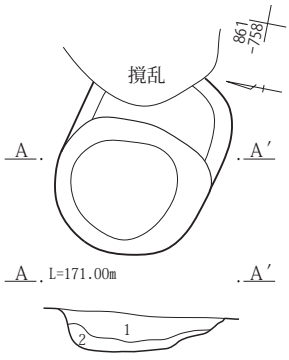
479号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

480号土坑



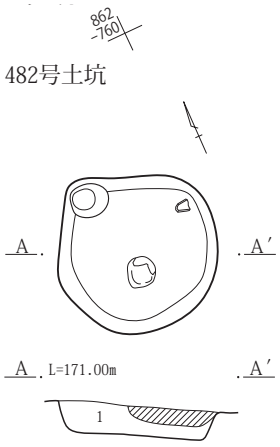
480号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bをやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。砂質。

481号土坑



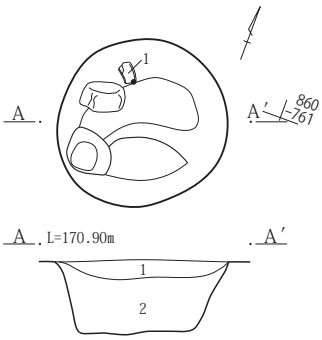
481号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。砂質。

482号土坑



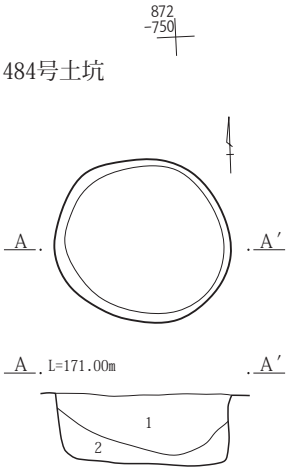
482号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

483号土坑



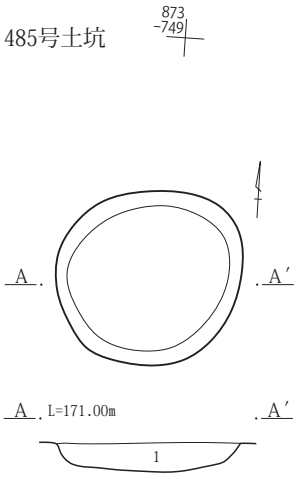
483号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

484号土坑



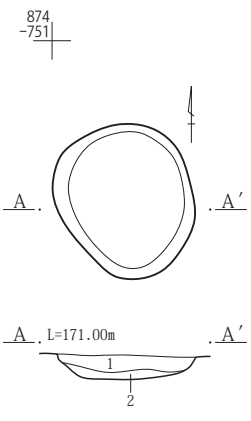
484号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Bを多量含む。粘性、締まりやや弱い。砂質。

485号土坑

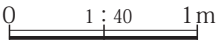


485号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

486号土坑

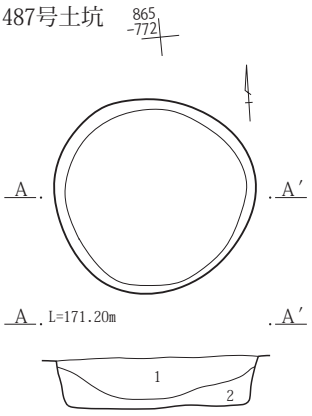


486号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Bをやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。砂質。

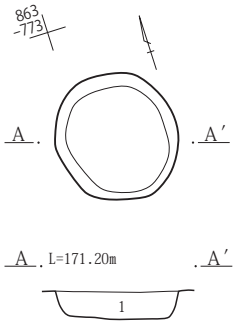


第60図　477号～486号土坑

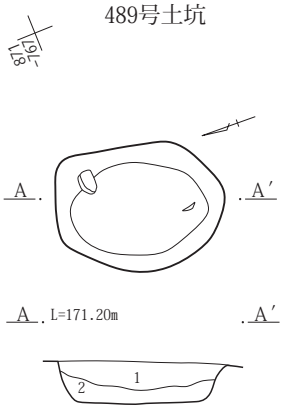
487号土坑



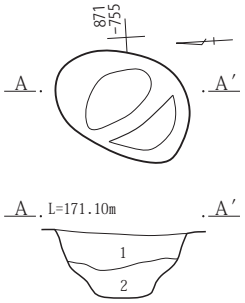
488号土坑



489号土坑



490号土坑



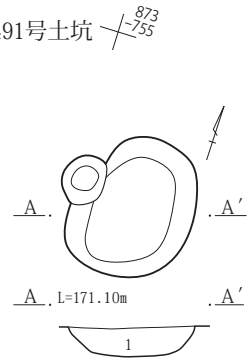
487号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。

488号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。

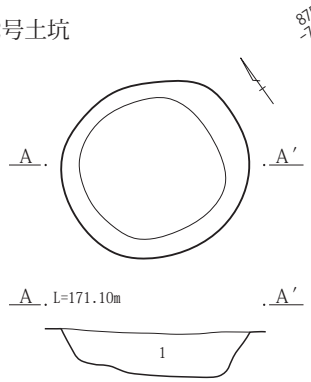
489号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まりやや弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Bを少量、As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。

490号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bをやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。砂質。

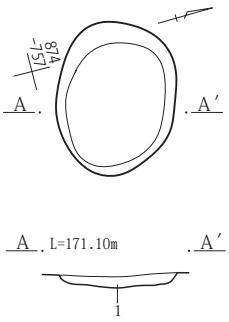
491号土坑



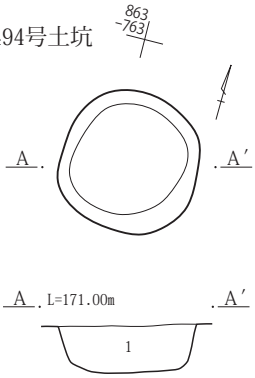
492号土坑



493号土坑



494号土坑



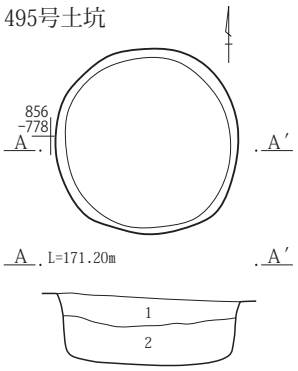
491号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

492号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

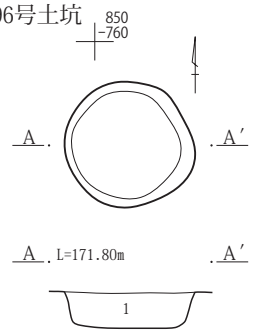
493号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

494号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

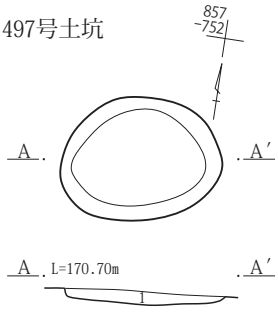
495号土坑



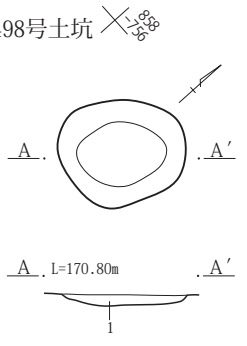
496号土坑



497号土坑



498号土坑



495号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bをやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。砂質。

496号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

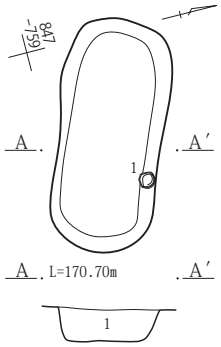
497号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

498号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

0　1：40　1m

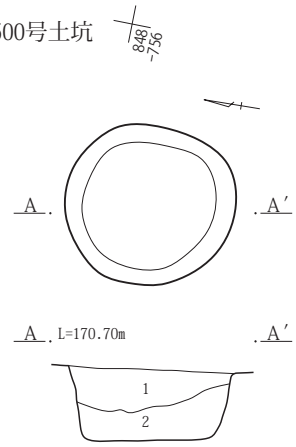
第61図　487号～498号土坑

499号土坑



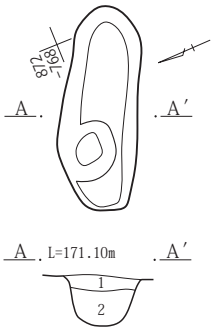
499号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

500号土坑



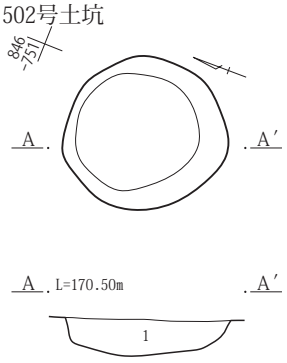
500号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。砂質。

501号土坑



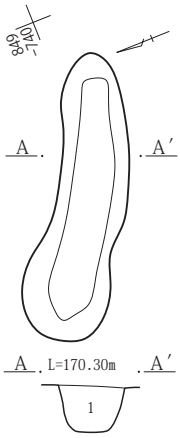
501号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まりやや弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Bをやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。砂質。

502号土坑



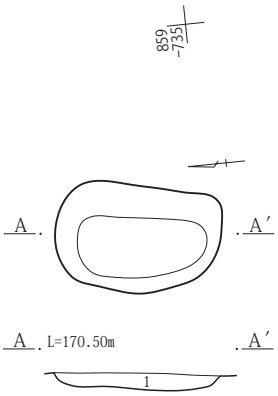
502号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

503号土坑



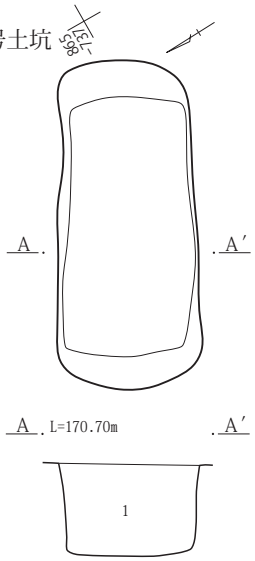
503号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

504号土坑



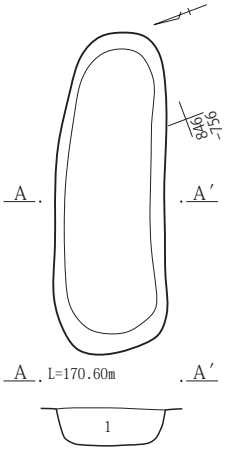
504号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

505号土坑



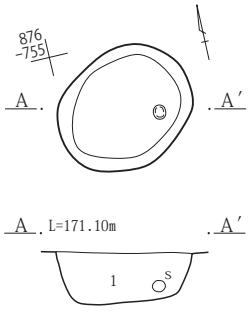
505号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bをやや多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

506号土坑



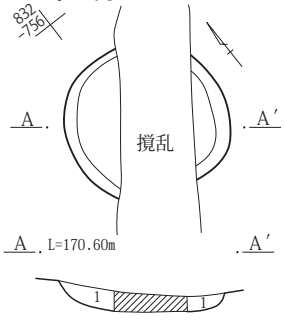
506号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

507号土坑



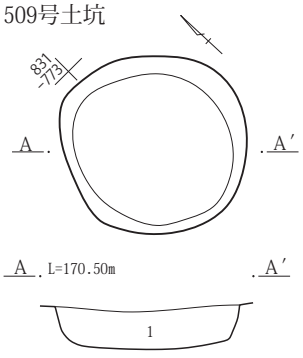
507号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bをやや多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

508号土坑



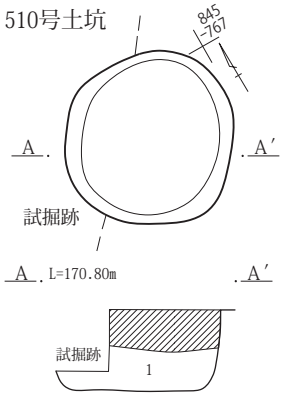
508号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

509号土坑



509号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

510号土坑

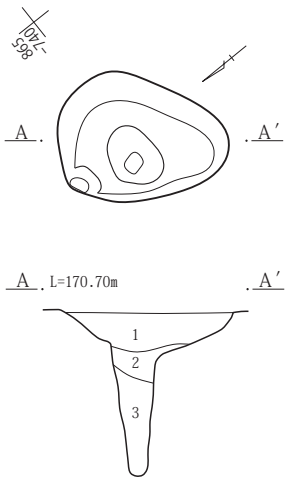


510号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

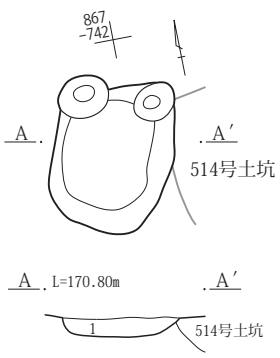
0　1：40　1m

第62図　499号～510号土坑

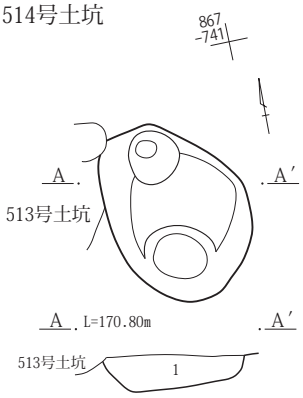
511号土坑



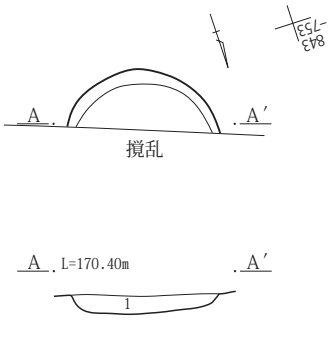
513号土坑



514号土坑



516号土坑



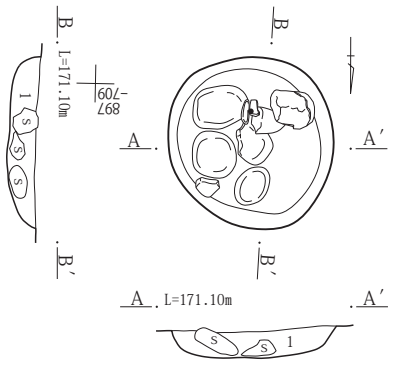
511号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量、暗褐色土塊を少量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/2　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

513号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　塊状のAs-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

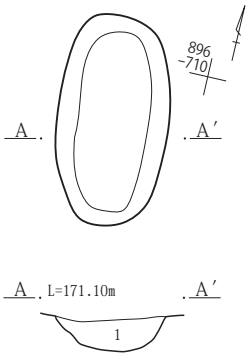
514号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

516号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

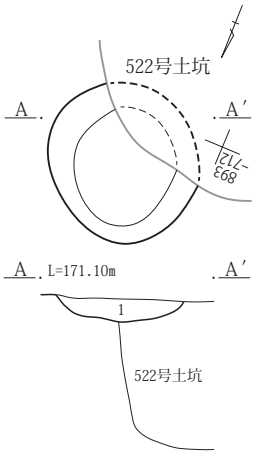
517号土坑



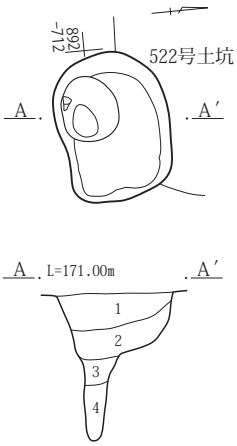
518号土坑



519号土坑



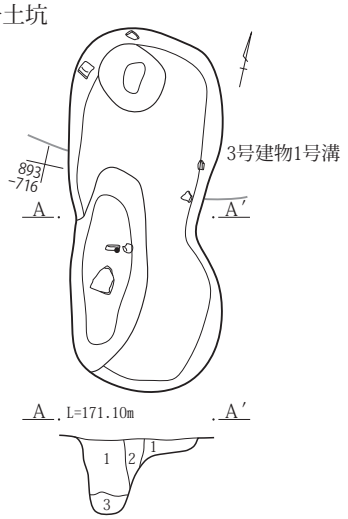
520号土坑



517号土坑Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

518号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

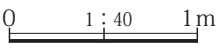
521号土坑



519号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量、ローム小塊を少量含む。粘性弱い。締まり強い。やや砂質。

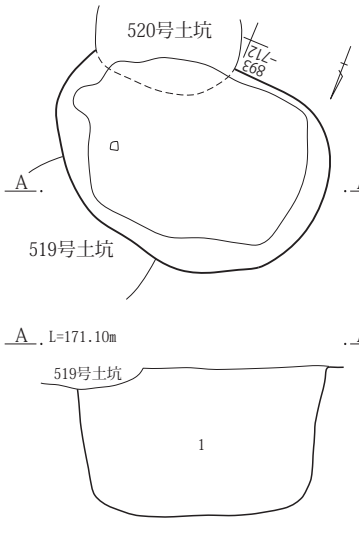
520号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bをやや多量、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。やや砂質。
2．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

521号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
2．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

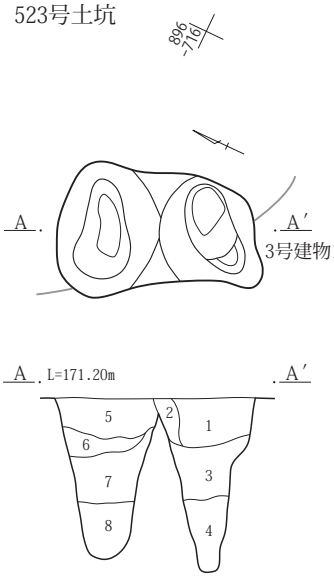


第63図　511号・513号・514号・516号～521号土坑

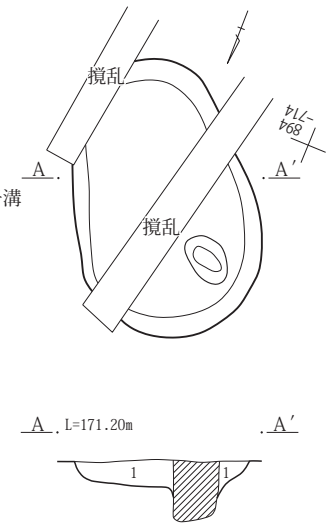
522号土坑



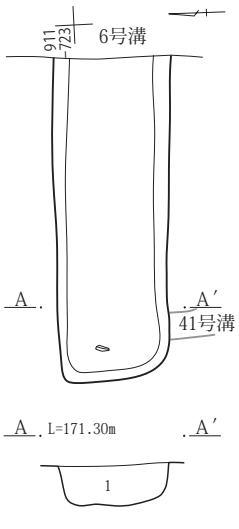
523号土坑



524号土坑



527号土坑



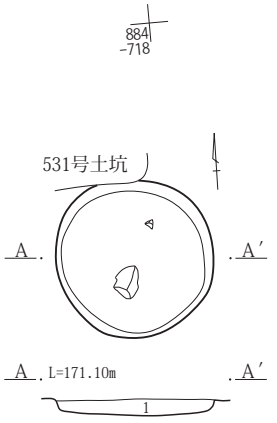
523号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム小塊～粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Bを微量、ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-B､ローム粒を少量含む。粘性､締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-Bを微量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　As-Bを微量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/2　As-Bを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　As-Bを微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

522号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

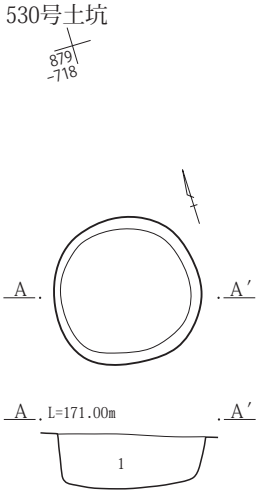
524号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。

527号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量、ローム小塊を少量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

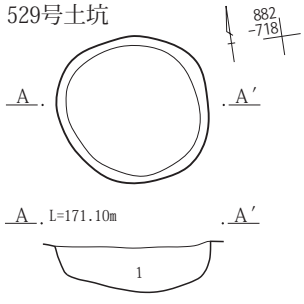
528号土坑



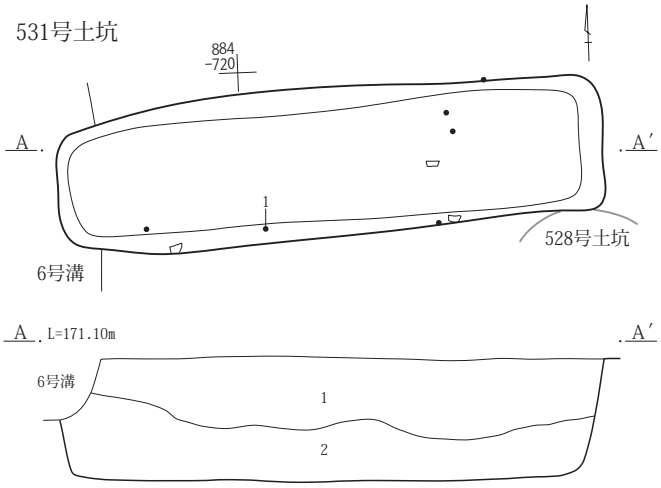
530号土坑



529号土坑



531号土坑



531号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Bをやや多量､ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。砂質。

528号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

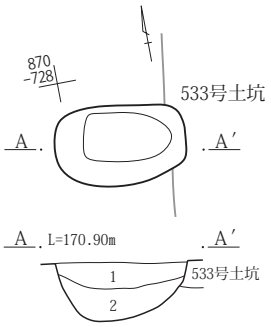
529号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

530号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

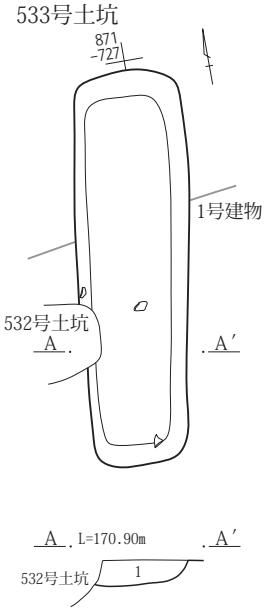
0　1：40　1m

第64図　522号～524号・527号～531号土坑

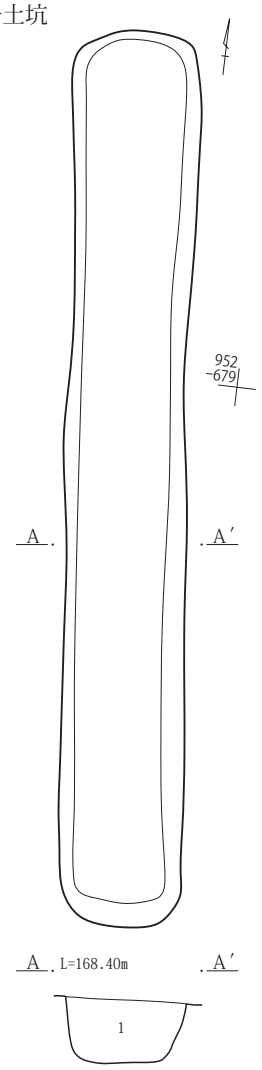
532号土坑



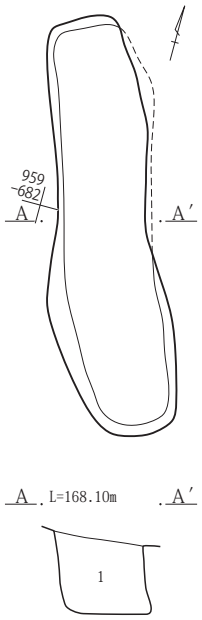
533号土坑



557号土坑



559号土坑



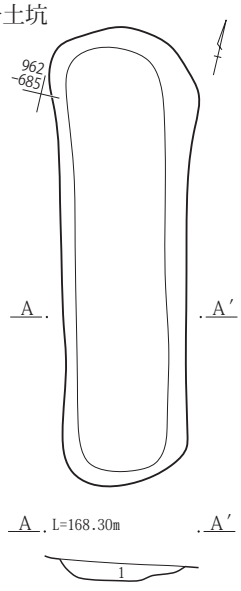
532号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Bをやや多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

533号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

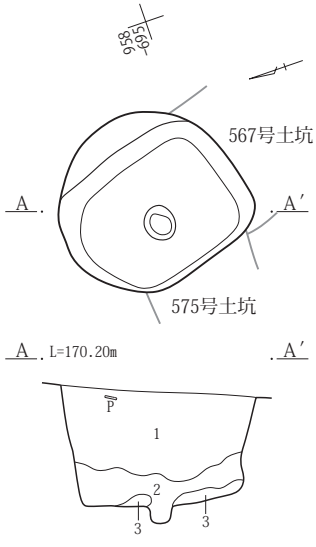
557号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量、ローム粗塊～細粒をやや多量含む。砂質。

559号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム塊～粒をやや多量含む。締まり弱い。

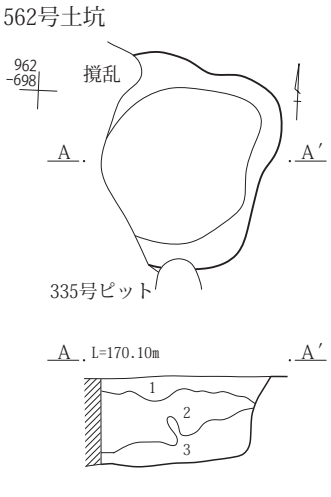
560号土坑



561号土坑



562号土坑



560号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/4　As-B、白色軽石粒をやや多量、ローム粒を少量含む。締まりやや強い。

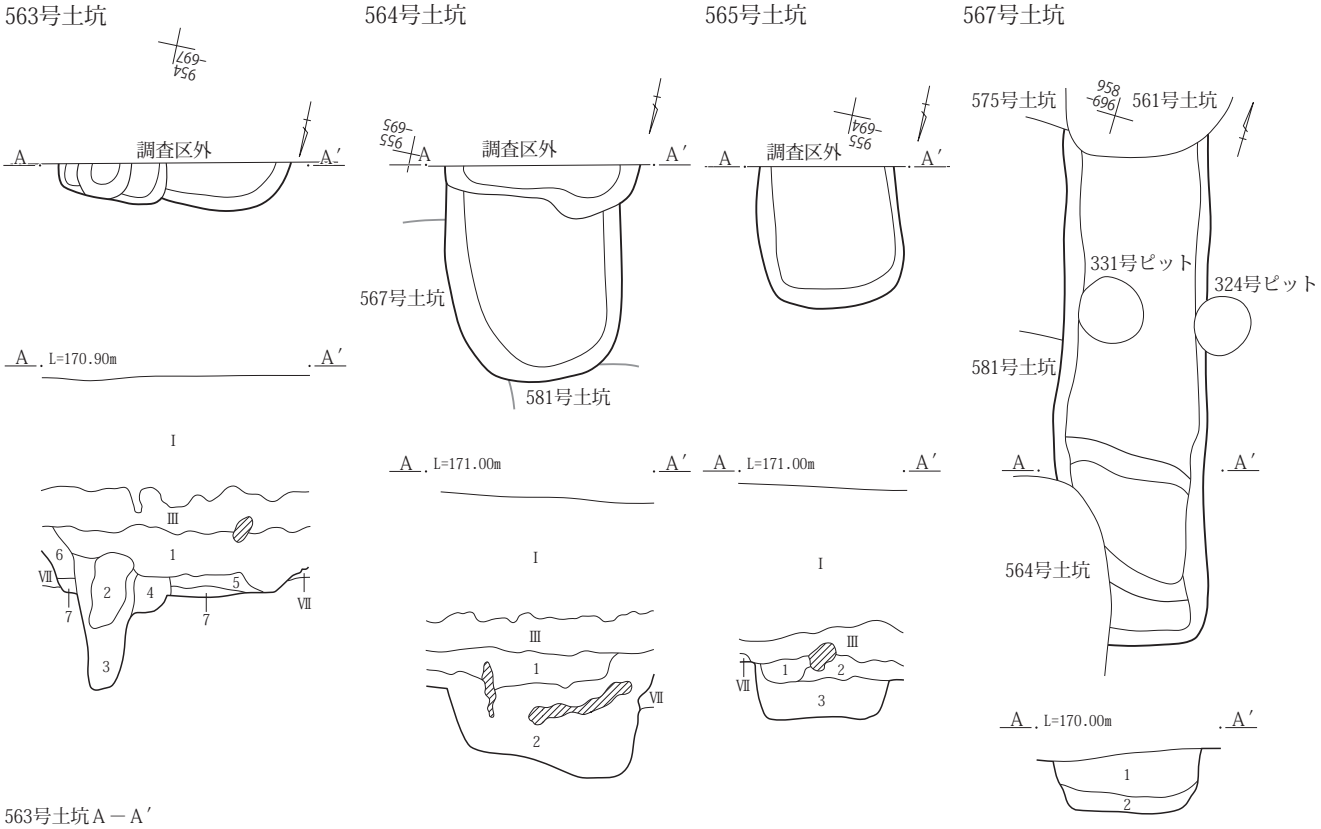
561号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム塊～細粒をやや多量含む。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粗粒～粒を少量含む。
3．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム粗粒～粒をやや多量含む。

562号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/2　As-Bを少量、ローム粒をやや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/4　As-Bを微量、ローム粗粒～細粒を多量含む。

0　1：40　1m

第65図　532号・533号・557号・559号～562号土坑

563号土坑　564号土坑　565号土坑　567号土坑



563号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
Ⅶ．明黄褐色土10YR6/6　As-YPを含む。
１．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム塊～細粒をやや多量、炭化物粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム粒をやや多量含む。締まり弱い。
３．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～細粒を多量含む。締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～細粒をやや多量含む。
５．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム粗粒～細粒を多量含む。
７．黒褐色土10YR3/2　As-Bを微量、ローム粒～細粒をやや多量含む。

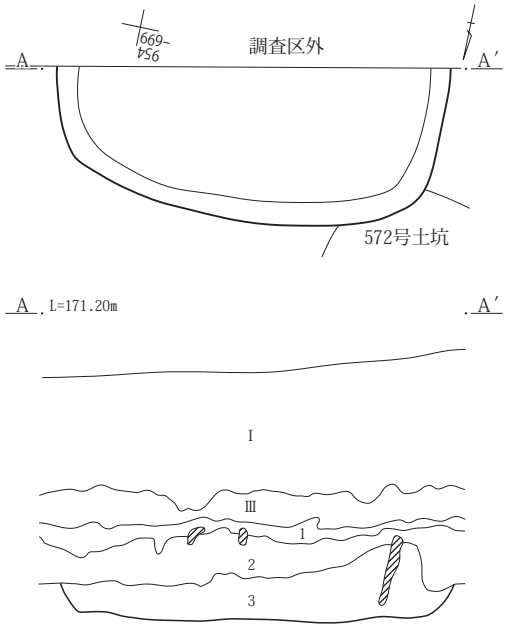
564号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
Ⅶ．明黄褐色土10YR6/6　As-YPを含む。
１．暗褐色土10YR3/4　As-B、黒褐色土粗粒を少量、ローム粗粒～細粒を多量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-B､黒褐色土塊～小塊を少量､ローム塊～細粒を多量含む。

565号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
Ⅶ．明黄褐色土10YR6/6　As-YPを含む。
１．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム細粒を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム細粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量、ローム塊～細粒を多量含む。

566号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．暗褐色土10YR3/4　As-B、ローム粗粒～粒を少量含む。
２．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊～粒を多量含む。締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量含む。締まりやや強い。

567号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム小塊～細粒をやや多量含む。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土粒を少量含む。

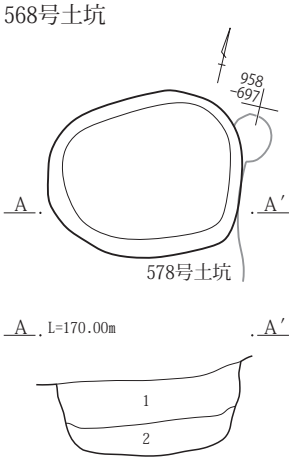
566号土坑



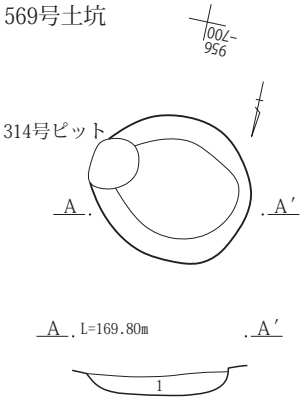
0　1：40　1m

第66図　563号～567号土坑

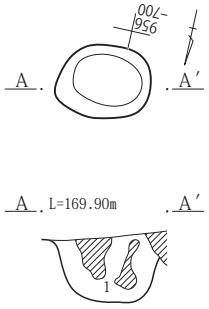
568号土坑



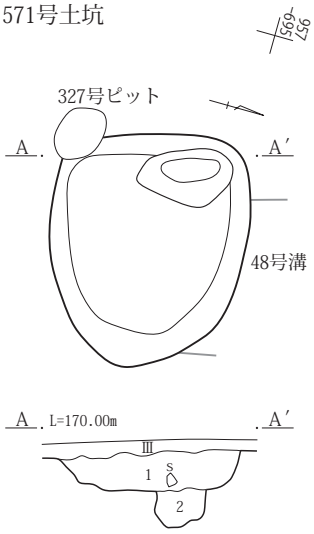
569号土坑



570号土坑



571号土坑



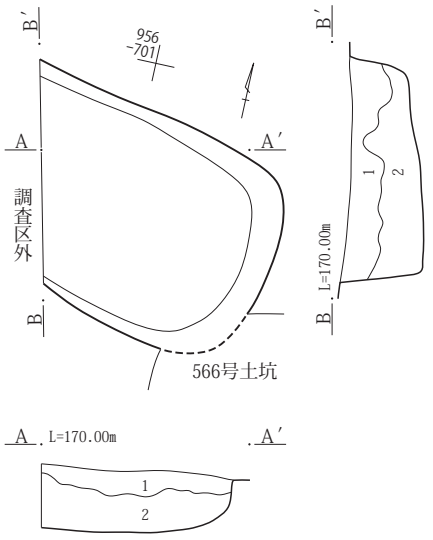
568号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-Bを少量、ローム小塊～細粒を多量含む。

569号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム小塊～細粒をやや多量含む。

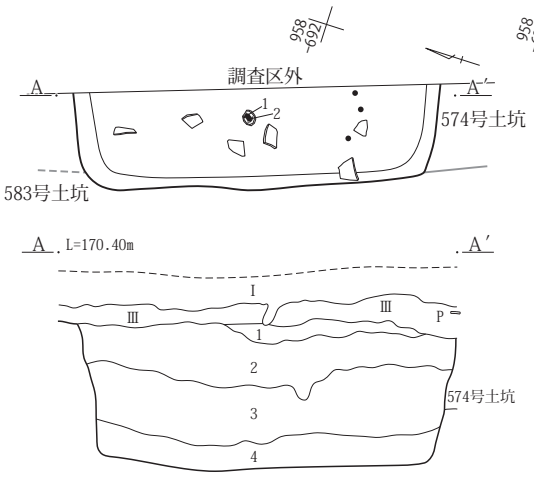
570号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム塊～細粒をやや多量含む。

571号土坑Ａ－Ａ′
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．暗褐色土10YR3/4　As-B、ローム塊～細粒をやや多量含む。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土粒を少量含む。締まり弱い。

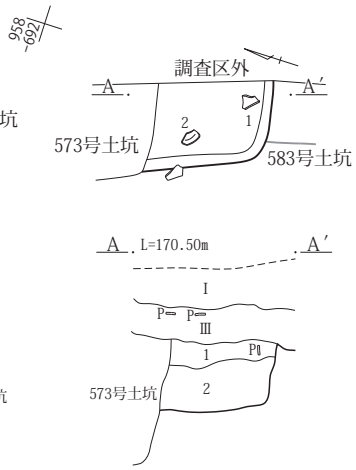
572号土坑



573号土坑



574号土坑

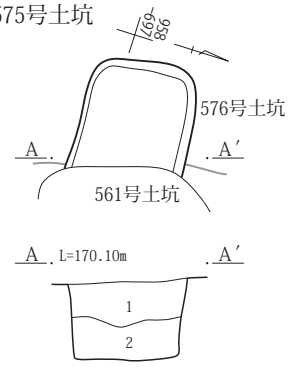


572号土坑Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粒～細粒をやや多量含む。
２．黒褐色土10YR3/2　As-B、ローム小塊～細粒をやや多量含む。

573号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム粗粒～細粒を多量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-B、ローム粗粒～細粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/2　ローム粗粒～細粒をやや多量、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～細粒を多量含む。

574号土坑Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粒～細粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-Bを少量、ローム粒～細粒をやや多量含む。

575号土坑

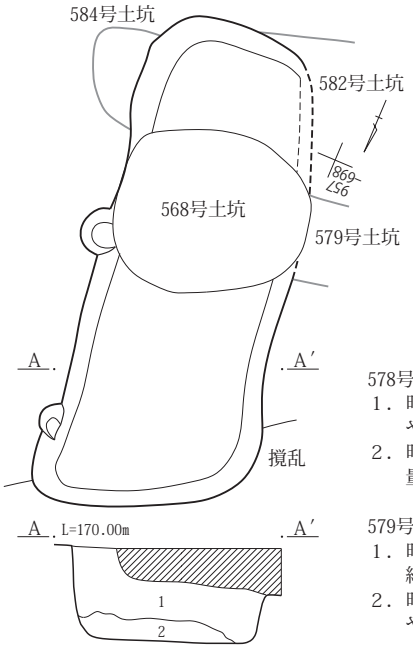


575号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-Bを少量、ローム粒～細粒を多量含む。

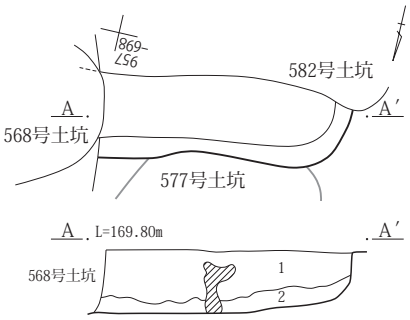
0　1：40　1m

第67図　568号～575号土坑

578号土坑



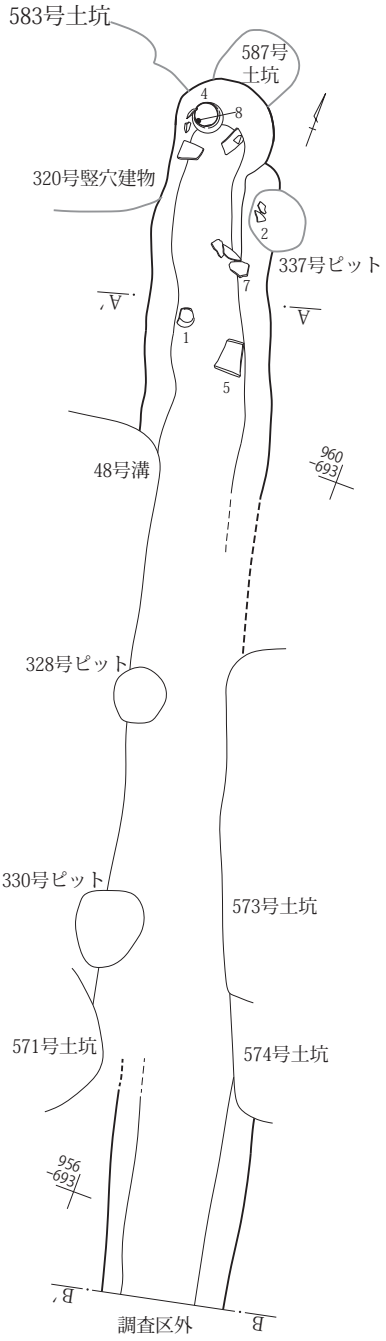
579号土坑



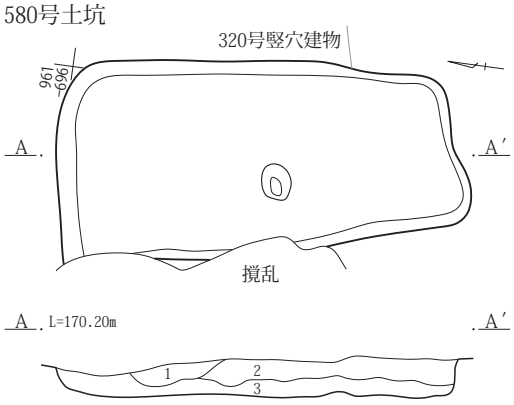
578号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/4　As-Bを少量、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　As-Bを微量、ローム小塊～細粒を多量含む。

579号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/4　As-B、白色軽石を少量、ローム塊～細粒を多量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム小塊～細粒をやや多量含む。

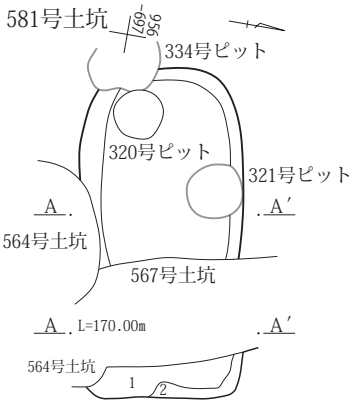
583号土坑



580号土坑



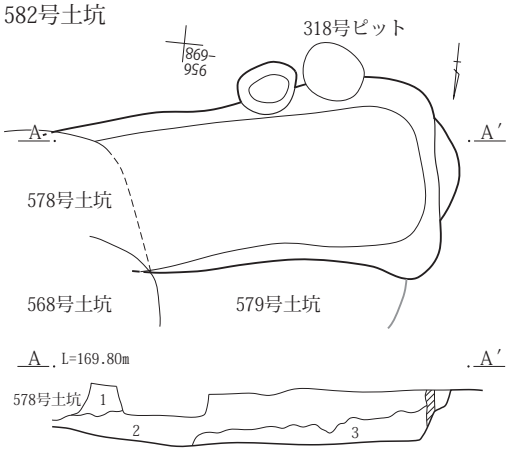
581号土坑



580号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/4　As-B、白色軽石、ローム粗粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　As-B、白色軽石を少量、ローム小塊～細粒をやや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　As-Bを少量、ローム塊～細粒をやや多量含む。

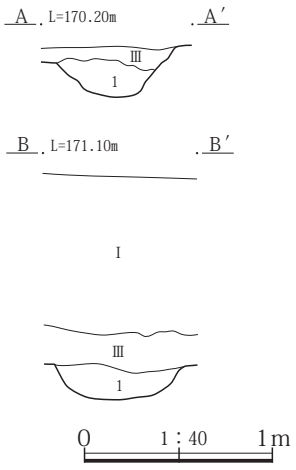
581号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/4　As-B、白色軽石を少量、ローム小塊～細粒をやや多量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒を少量含む。

582号土坑

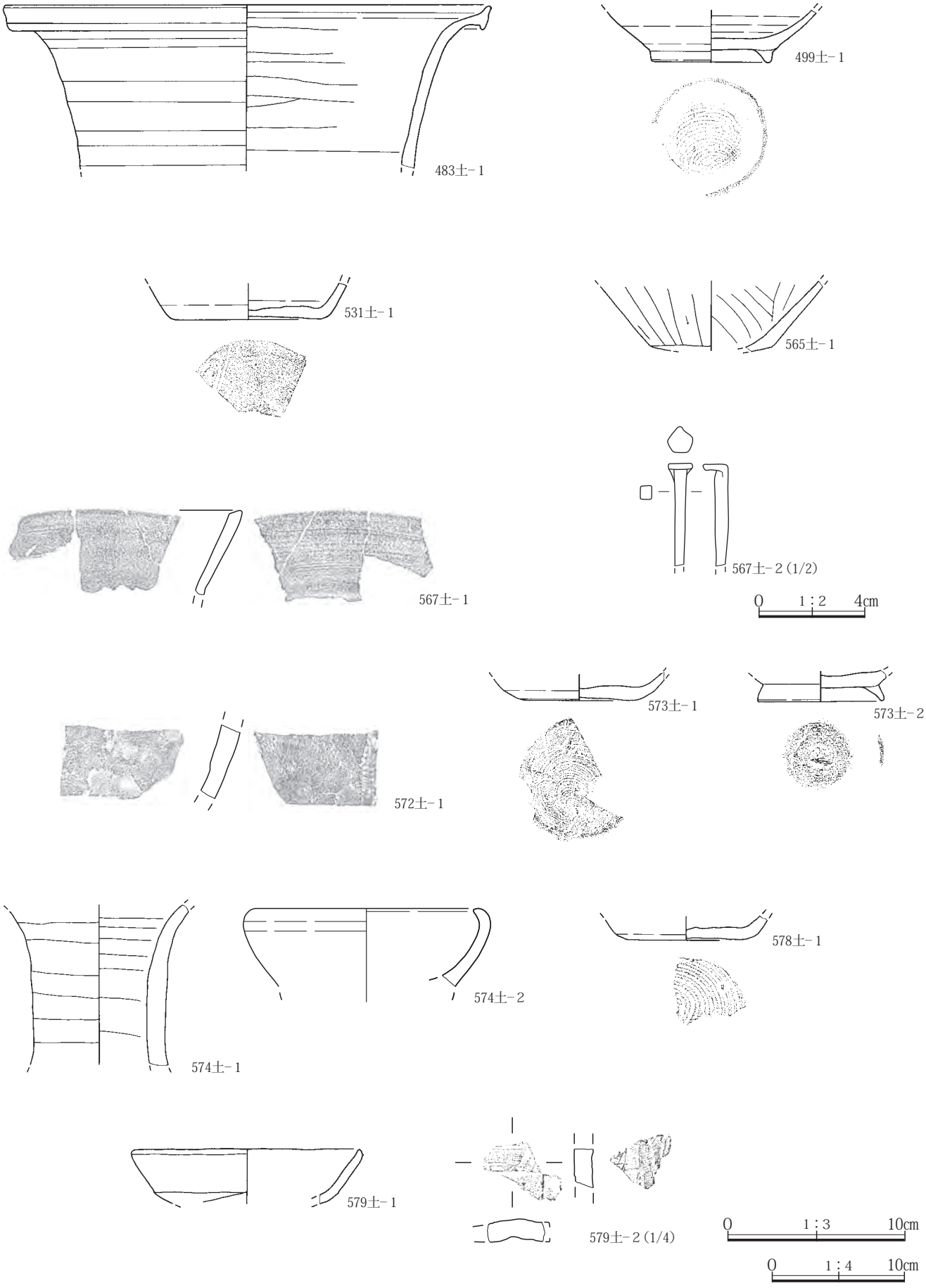


582号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム小塊～細粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/2　As-Bを少量、ローム小塊～細粒を多量含む。
3．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～細粒をやや多量含む。

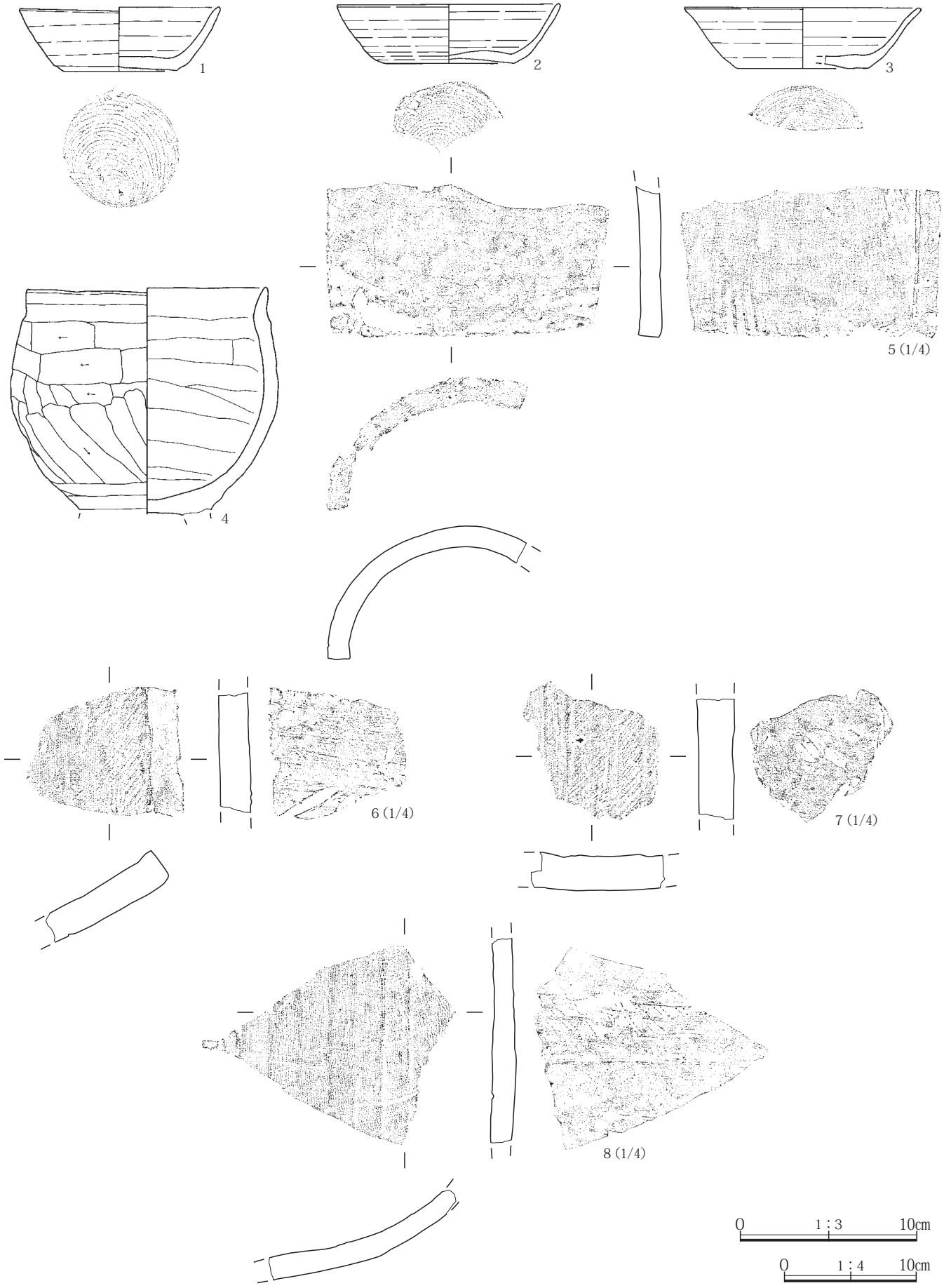
583号土坑Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
1．黒褐色土10YR3/2　As-Bを少量、ローム粗塊～粒を多量含む。



第68図　578号～583号土坑



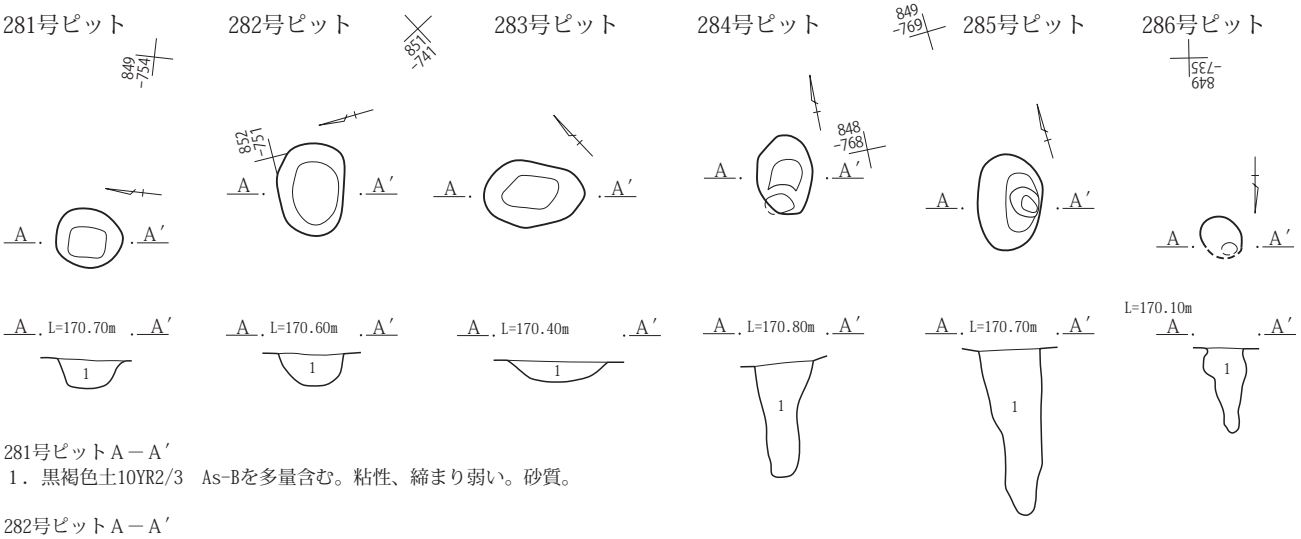
第69図　483号・499号・531号・565号・567号・572号～574号・578号・579号土坑出土遺物



第70図　583号土坑出土遺物

６．ピット(第71～73図、PL.29～33)

２面の調査では38基のピットを検出したが、そのうちの26基がＢ区西に集中する状況が認められた。これは各調査区の土層堆積状況の違いにより、As-B混土(基本土層Ⅲ層)が厚く堆積していた地点ではピットの検出が困難であったためと考えられる。



281号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

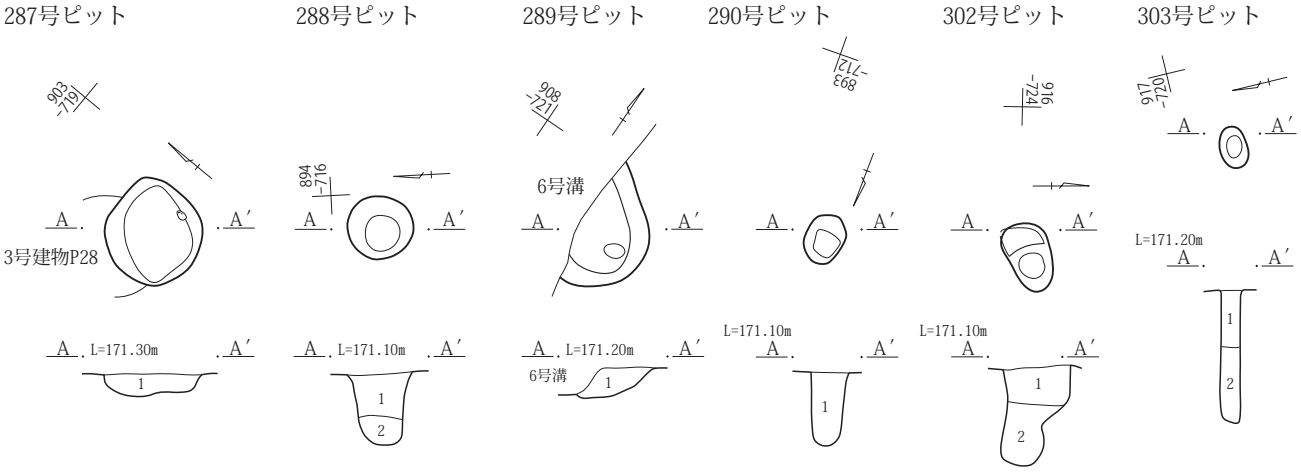
282号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

283号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

284号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

285号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

286号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。



287号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-Bを多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。砂質。

288号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Bをやや多量含む。粘性、締まり弱い。砂質。

289号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

290号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。砂質。

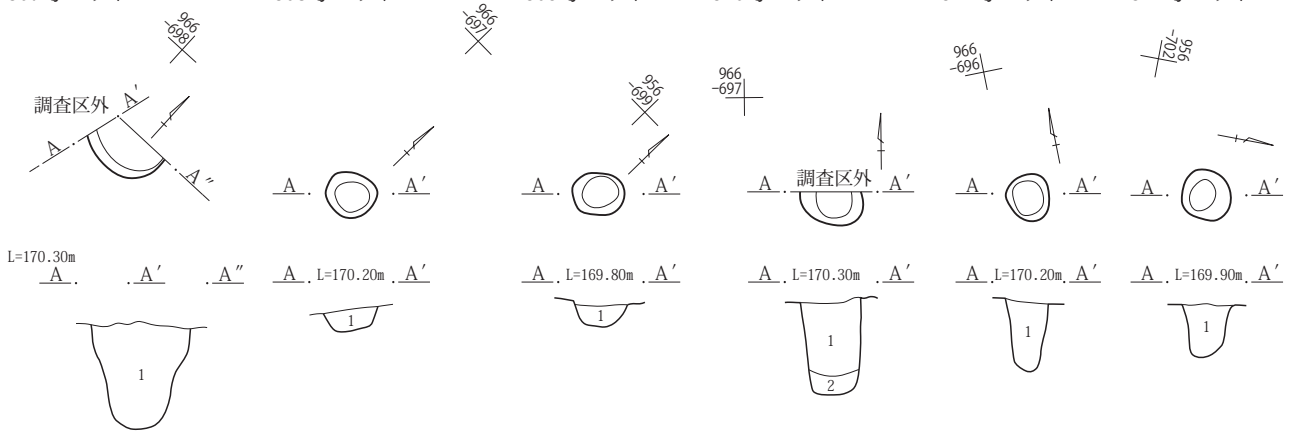
302号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量、ローム塊を微量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

303号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量、ローム塊を微量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Bを非常に多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

0　1：40　1m

第71図　281号～290号・302号・303号ピット

307号ピット　308号ピット　309号ピット　310号ピット　311号ピット　312号ピット



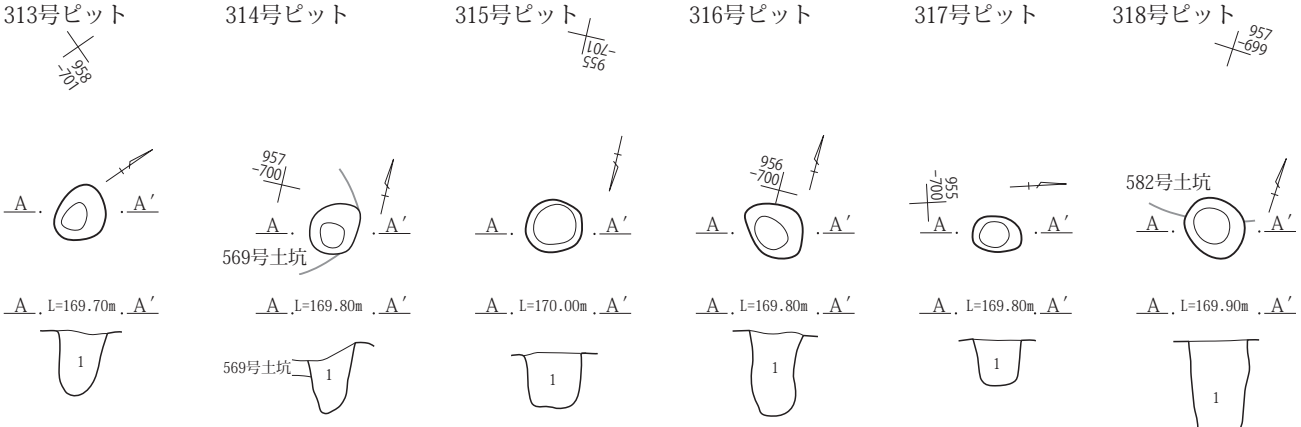
307号ピットＡ－Ａ″
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

308号・309号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量、炭化物粒を少量含む。

310号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

311号～315号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

313号ピット　314号ピット　315号ピット　316号ピット　317号ピット　318号ピット

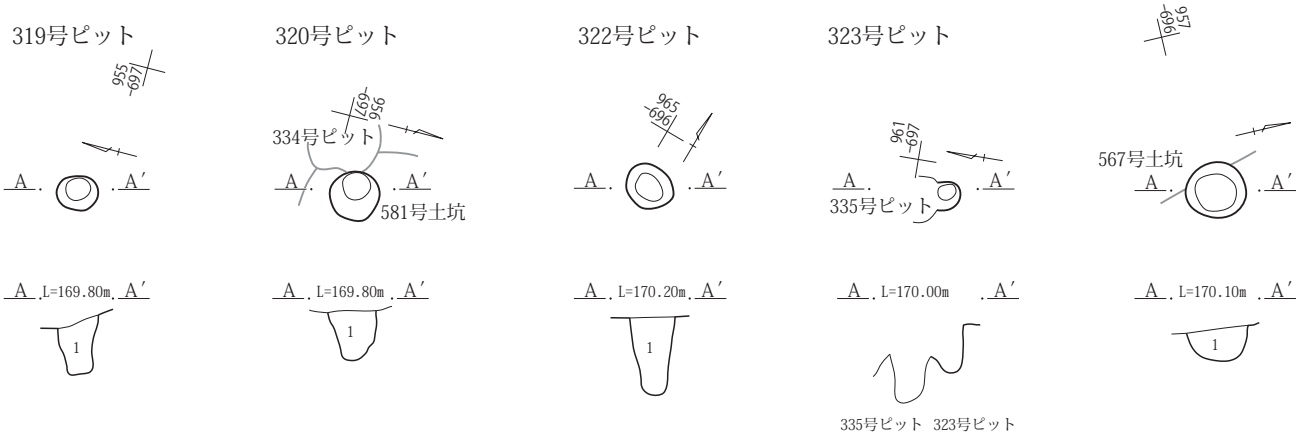


316号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

317号～320号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

324号ピット

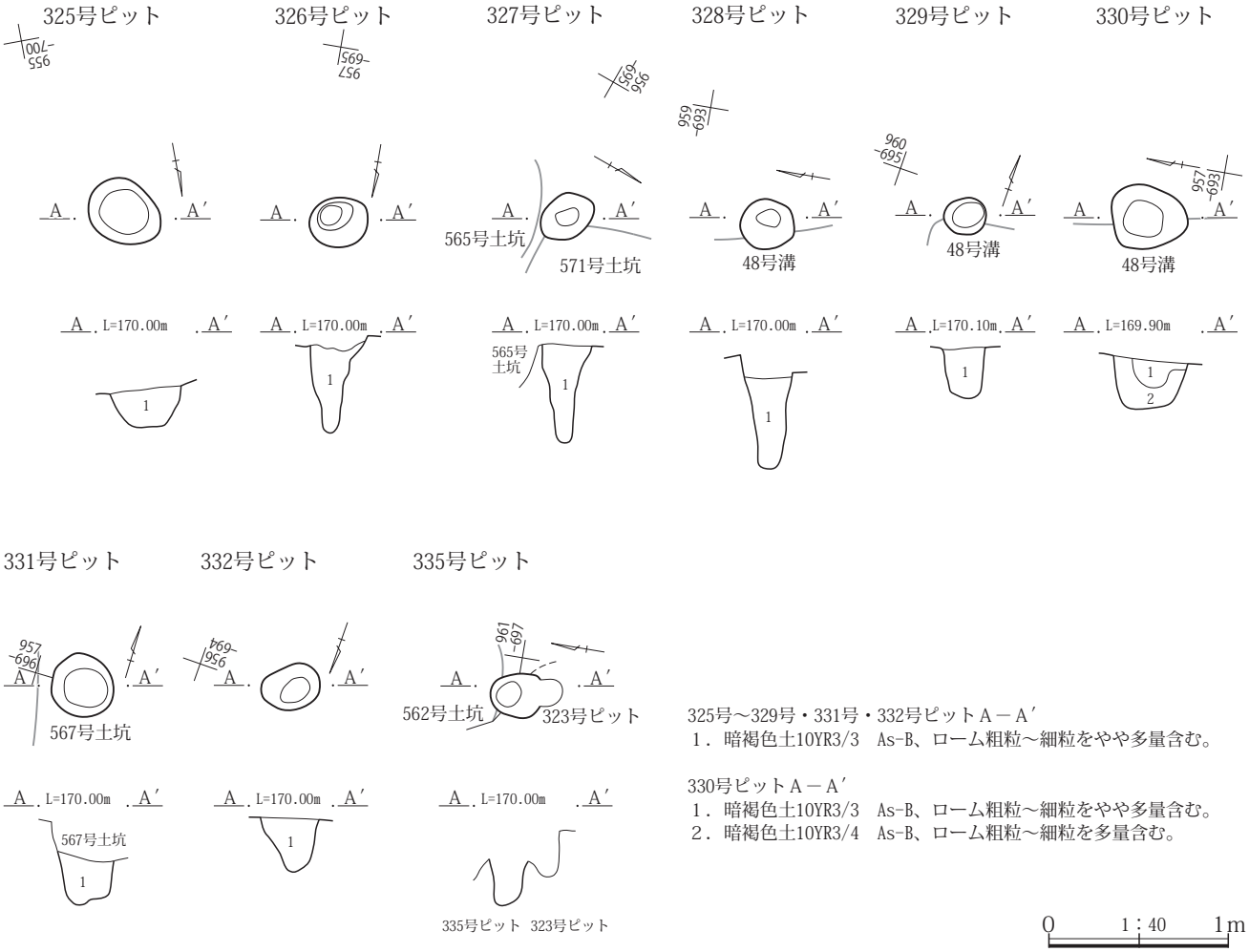
319号ピット　320号ピット　322号ピット　323号ピット



322号・324号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-B、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

0　1：40　1m

第72図　307号～320号・322号～324号ピット



第73図　325号～332号・335号ピット

これらのピットの多くは、As-Bを含む暗褐色土で埋没しており、As-Bを含む黒褐色土で埋没していたのは、C・D区を中心とする12基のみであった。形状は楕円形が多く、円形や不整形のものはわずかであった。これらのピットは、いずれも建物を構成するようなものとは認識できなかった。

出土遺物は、282号ピットから土師器の杯・椀類破片３点(６ｇ)、甕・壺類破片８点(16ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(16ｇ)、283号ピットから土師器の杯・椀類破片１点(５ｇ)、甕･壺類破片４点(６ｇ)、須恵器の杯･椀類破片１点(３ｇ)、287号ピットから土師器の甕・壺類破片６点(16ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(45ｇ)、瓦片１点、288号ピットから瓦片１点、290号ピットから土師器の甕・壺類破片１点(23ｇ)、302号ピットから土師器の甕・壺類破片１点(６ｇ)、303号ピットから近世の国産施釉陶器破片１点(４ｇ)、307号ピットから瓦片１点､312号ピットから須恵器の杯･椀類破片２点(31ｇ)、甕・壺類破片１点(２ｇ)、313号ピットから土師器の甕・壺類破片１点(２ｇ)、314号ピットから土師器の杯・椀類破片２点(11ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(13ｇ)、瓦片１点､316号ピットから須恵器の杯･椀類破片１点(２ｇ)、甕・壺類破片１点(８ｇ)、318号ピットから須恵器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、甕・壺類破片１点(14ｇ)、320号ピットから土師器の杯・椀類破片１点(４ｇ)、323号ピットから土師器の甕・壺類破片２点(７ｇ)、瓦片１点、325号ピットから土師器の甕・壺類破片４点(７ｇ)が出土している。

第３項　３面の遺構と遺物

１．竪穴建物

20号竪穴建物（第74～76図、PL.34・294）

位置　Ｘ＝40,917～40,920、Ｙ＝－80,682～－80,685（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸2.94m、短軸2.76m

面積　（7.077㎡）

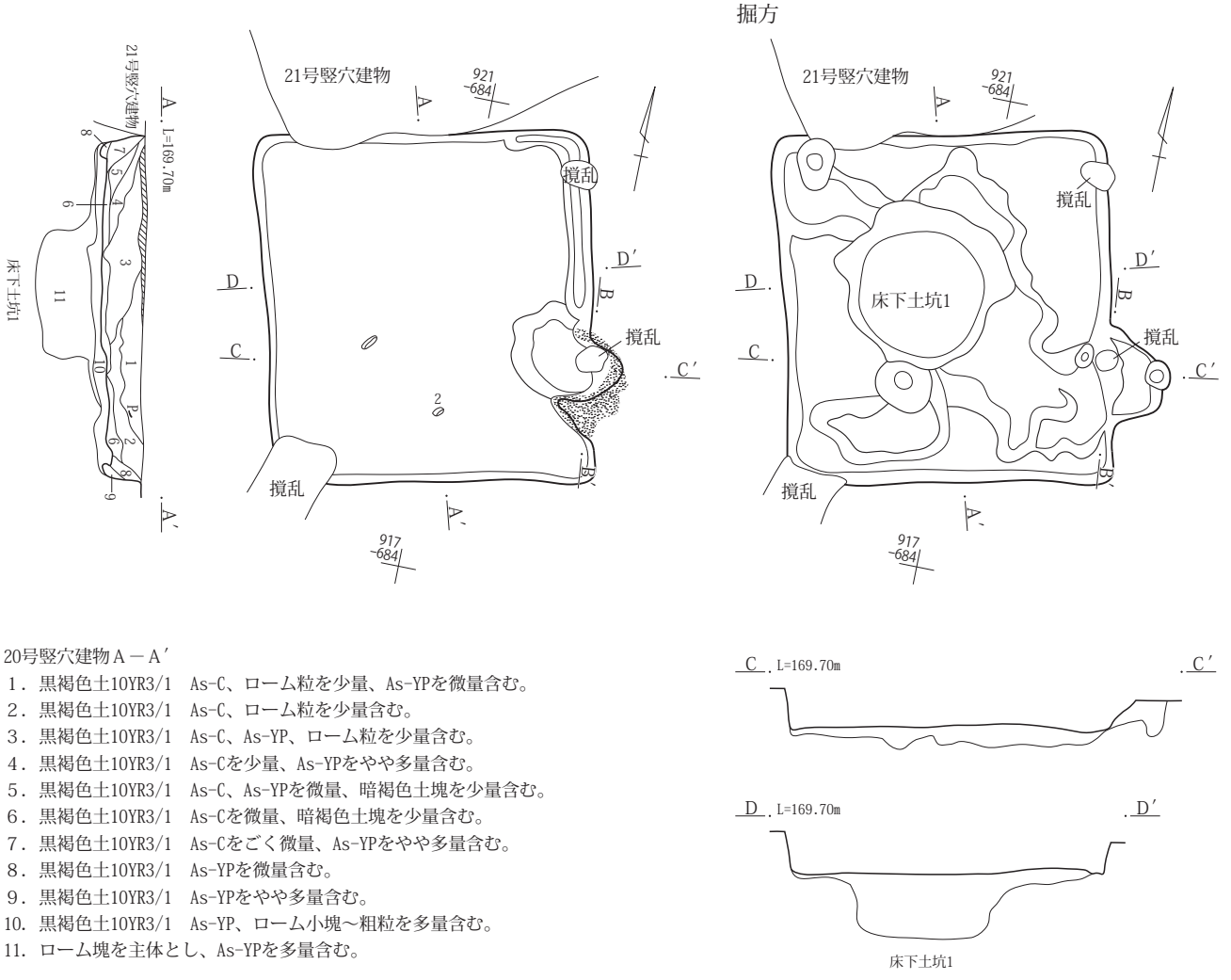
残存壁高　0.38m

方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　21号竪穴建物と重複し、20号竪穴建物が古い。ただし、出土遺物から想定される新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のAs-YP、少量の暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋没していた。

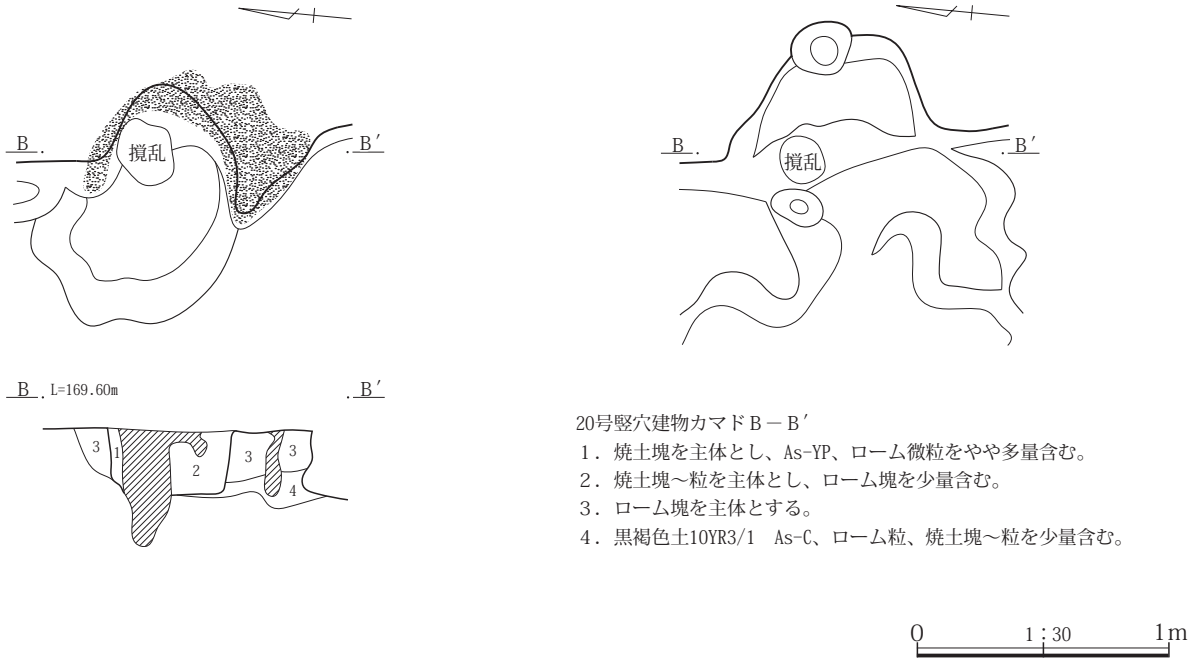
カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.92m、燃焼部幅は0.38mで、壁外に0.25m燃焼部が伸びる。袖や側壁・奥壁の一部は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。向かって左側の袖は完全に消失していたが、右側の袖は一部が残存していた。袖石や支脚は検出されなかった。支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.07mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業



20号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量、As-YPを微量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPをやや多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを微量、暗褐色土塊を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、暗褐色土塊を少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YPをやや多量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-YPを微量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム小塊～粗粒を多量含む。
11．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。

0　1：60　2m

第74図　20号竪穴建物



第75図　20号竪穴建物カマド

をしたことが想定できる。掘方調査では、奥壁部分にピット状の掘り込みが確認された。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　カマドの北側から北東隅にかけての東壁を中心に、幅は0.13～0.23m、深さは0.02～0.06mの壁際溝を検出した。また、土層断面の記録時には、北壁と南壁で壁際溝と思われる土層を確認しているが、面的に検出することはできなかった。微量、またはやや多量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。

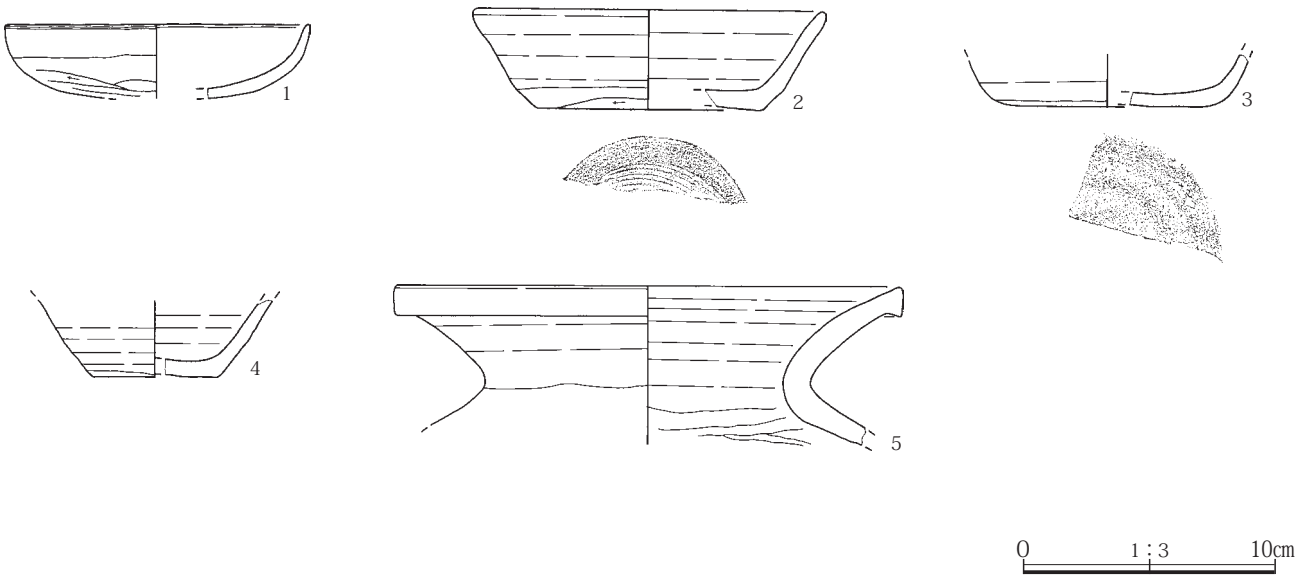
床面　床面はほぼ平坦であるが、カマド前の浅い凹みを取り巻くように、帯状にやや盛り上がっており、床面との高低差は最大で0.06mであった。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.05～0.15mであった。中央部やや北西寄りから床下土坑１基を検出した。床面は多量のローム小塊を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央やや北西寄りに位置し、規模は長軸1.52m、短軸1.37m、深さ0.52mである。形状は円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯（２）は床上19cmから、それ以外の掲載遺物はいずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片43点（350ｇ）、甕・壺類破片71点（945ｇ）、須恵器の杯・椀類破片15点（97ｇ）、打製石斧１点（104.9ｇ）、二次加工ある剝片１点（12.4ｇ）、剝片２点（104.5ｇ）が出土している。このうち打製石斧については、遺構外遺物として写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



第76図　20号竪穴建物出土遺物

21号竪穴建物(第77～79図、PL.34・294・295)

位置　X＝40,920～40,925、Y＝－80,682～－80,687（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸4.06m、短軸3.97m

面積　12.997㎡

残存壁高　0.57m

方位　N－26°－W

重複　20号・23号竪穴建物と重複し、21号竪穴建物が新しい。ただし、出土遺物から想定される20号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊～粒を含む上層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　北壁の中央やや東寄りに位置する。残存長は1.16m、燃焼部幅は0.37mで、壁外に0.35m燃焼部が伸びる。袖や側壁・奥壁は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖とも比較的よく残存していたにもかかわらず袖石は検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　５基のピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.41×0.30×0.27m、Ｐ２が0.28×0.23×0.27m、Ｐ３が0.26×0.24×0.26m、Ｐ４が0.28×0.24×0.17m、Ｐ５が0.27×0.24×0.28m、形状はいずれも楕円形である。このうちＰ１～Ｐ４が､主柱穴であると考えられる。

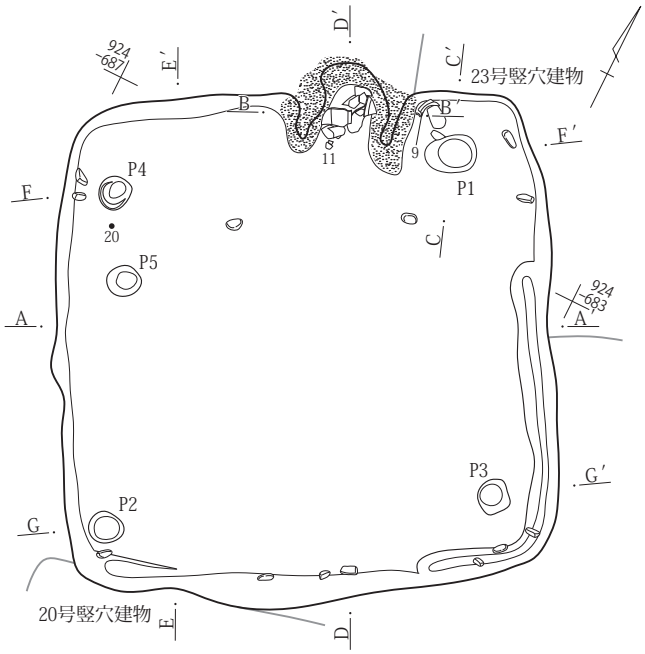
貯蔵穴　検出されなかった。ただし、Ｐ１～Ｐ４が主柱穴ではない場合、Ｐ１が貯蔵穴である可能性が高いと考えられる。

壁際溝　南壁を中心に、幅は0.19～0.32m、深さは0.04～0.08mの壁際溝を検出した。少量のAs-C、As-YPを含む黒褐色土で埋没していた。

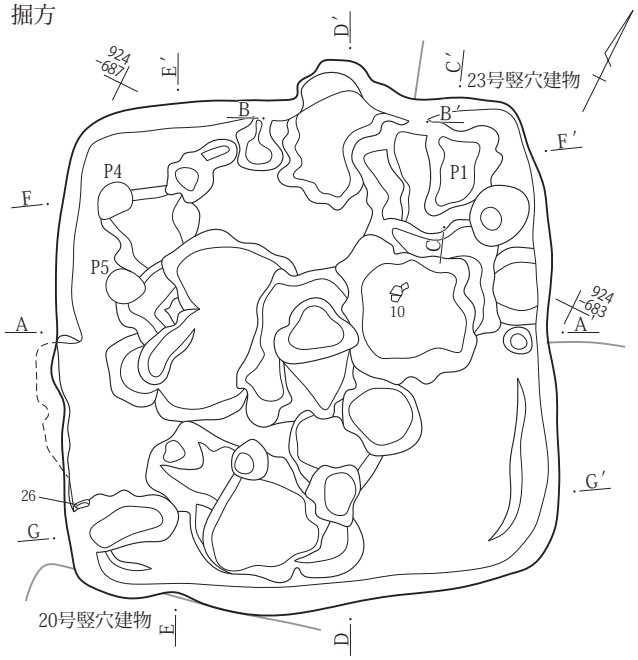
床面　床面はほぼ平坦であるが、カマド前はやや盛り上がるように高まっており、周囲との高低差は最大で0.08mであった。

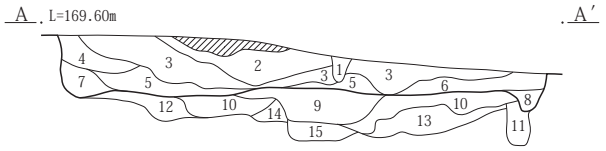
掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.10～0.15mであったが、中央部やや南寄りでは、0.30～0.35mの深さまで掘り込まれた部分があった。形状が不整形で範囲が曖昧であったことから床下土坑とはしなかったが、これも粘土を採取した痕跡である可能性が高いと考えられる。床面は多量のAs-C、As-YP、ローム粗塊～塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。中央付近が不整形に掘り窪められ粘土を採取した痕跡と考えられるが、明瞭な範囲を示すものではなかったことから床下土坑とはしな

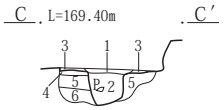


掘方





P１

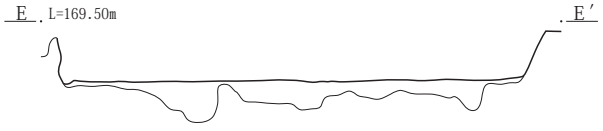


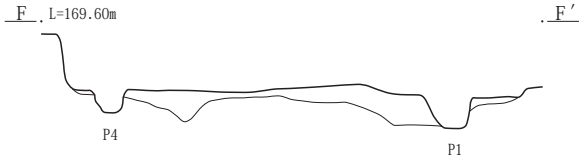
21号竪穴建物Ａ－Ａ′

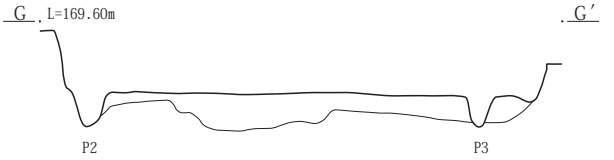
1．黒褐色土7.5YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム粗塊・粒を多量、焼土細粒を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム粗塊～粒を多量、焼土細粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム細粒を少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム塊～細粒をやや多量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊～細粒を少量含む。
8．黒褐色土7.5YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粗塊～塊を非常に多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
11．黒褐色土7.5YR3/1　As-C、As-YPを微量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粗塊を多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を少量含む。
14．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム塊を非常に多量含む。
15．黒褐色土10YR3/1　As-YPを少量、ローム塊を非常に多量含む。

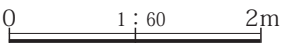
21号竪穴建物Ｐ１Ｃ－Ｃ′

1．灰を主体とし、焼土粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粒を少量、焼土粒をやや多量含む。
4．ローム粒を主体とする。
5．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
6．焼土塊を主体とする。



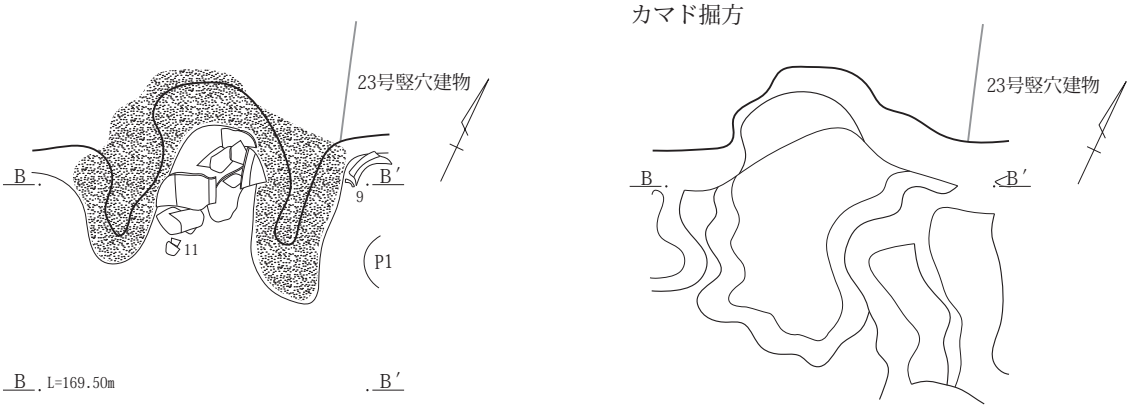


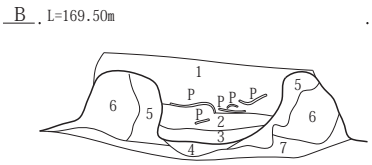




第77図　21号竪穴建物

カマド掘方

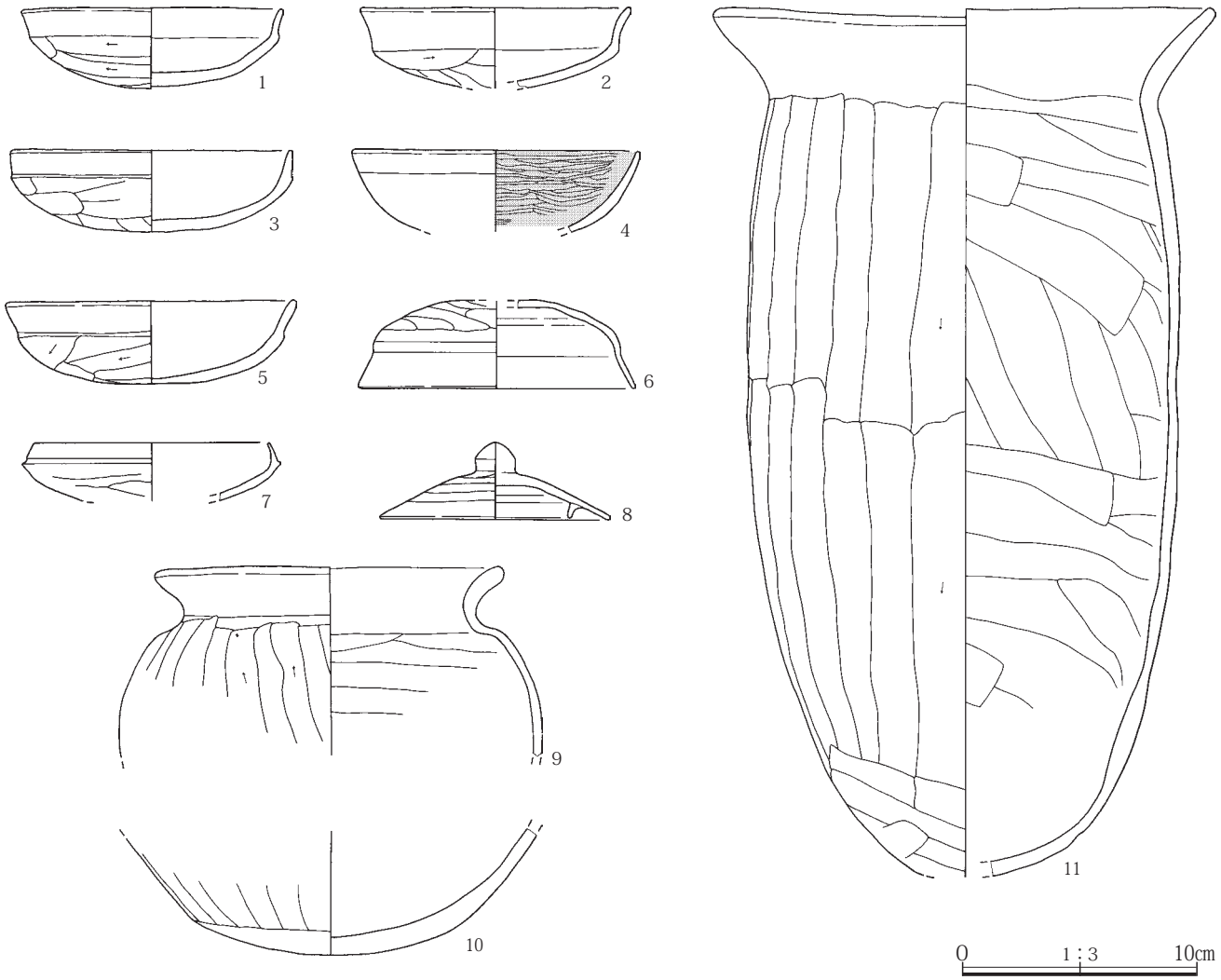




21号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

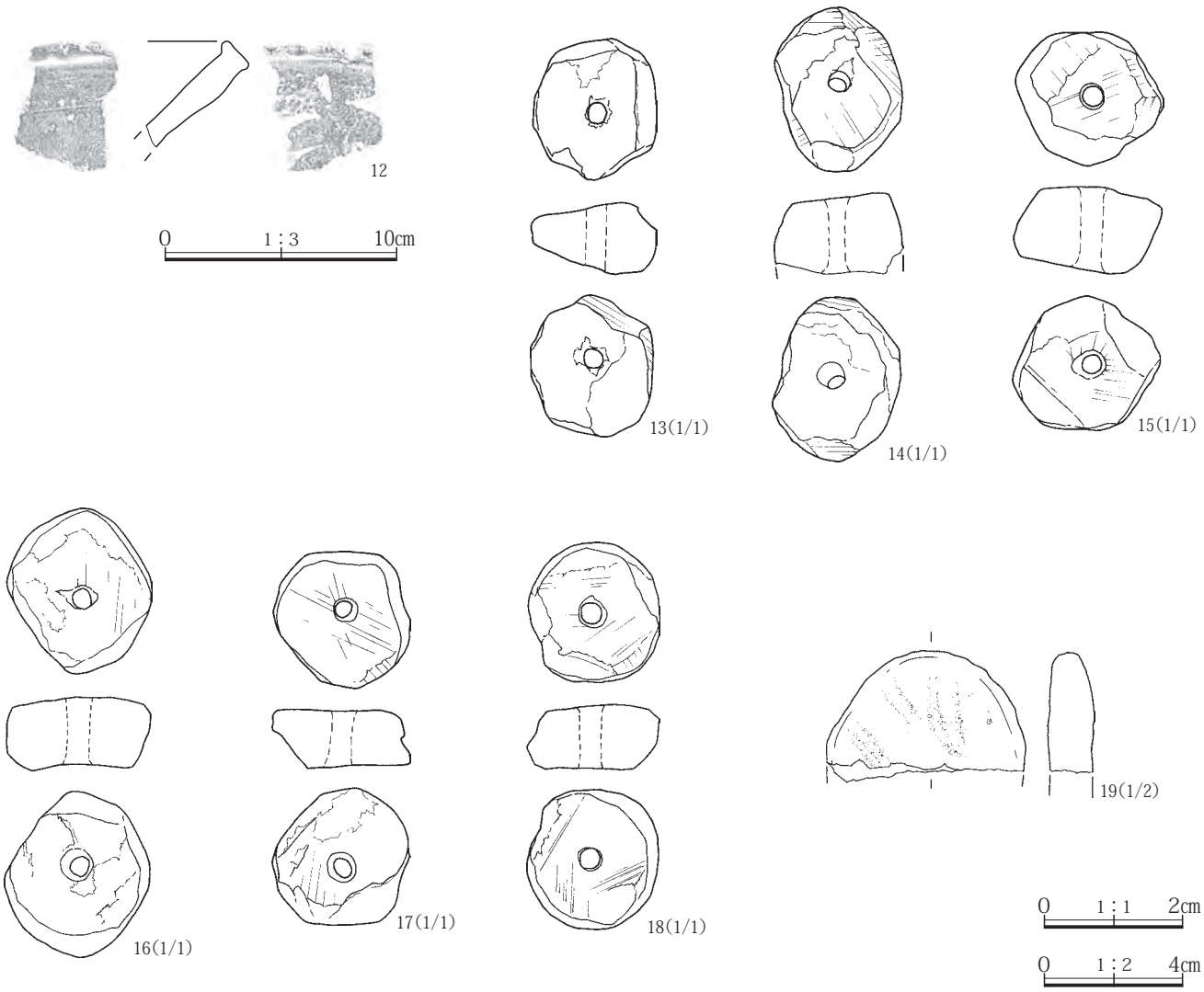
１．黒褐色土10YR3/1　ローム粗粒、焼土粗粒～細粒を多量含む。
２．焼土塊を主体とする。
３．灰を主体とする。
４．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。
５．焼土塊を主体とし、As-YP、ローム粒を少量含む。
６．ローム塊を主体とする。
７．ローム微粒を主体とし、As-YPを非常に多量含む。

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

第78図　21号竪穴建物カマドと出土遺物（１）



第79図　21号竪穴建物出土遺物（２）

かった。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　12点の臼玉（13～18、20～25は写真のみを掲載）が出土したことが特筆される。出土位置が記録された20は北西隅の床面直上から出土しており、13・14についても床面直上から出土したことが確認されている。このことから、これらの臼玉は20の周囲からまとまって出土したものである可能性が高い。土師器甕(11)はカマド内から潰れた状態で出土したが、ほぼ完形に復元することができたことから、カマドで使用されていたものであると考えられる。土師器杯（１）と土師器壺(10)は掘方調査において出土したものであるが、それ以外はいずれも埋没土中から出土したものである。在地系の片口鉢(12)については、14・15世紀の遺物であり混入である。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片５点(17ｇ)、甕・壺類破片11点(38ｇ)、須恵器の杯・椀類破片10点(75ｇ)、甕・壺類破片７点(370ｇ)、瓦片１点、臼玉６点(29.8ｇ)、凹石３点(1,886.0ｇ)、敲石１点(659.6ｇ)、剝片２点(246.7ｇ)が出土している。このうち臼玉(20～25)と敲石(26)については、写真のみを掲載した。また、凹石３点については、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から７世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

22号竪穴建物（第80～82図、PL.34・295）

位置　Ｘ＝40,920～40,924、Ｙ＝－80,663～－80,667（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸3.71m、短軸(3.18m)

面積　(9.760㎡)

残存壁高　0.30m

方位　Ｎ－27°－Ｗ

重複　なし

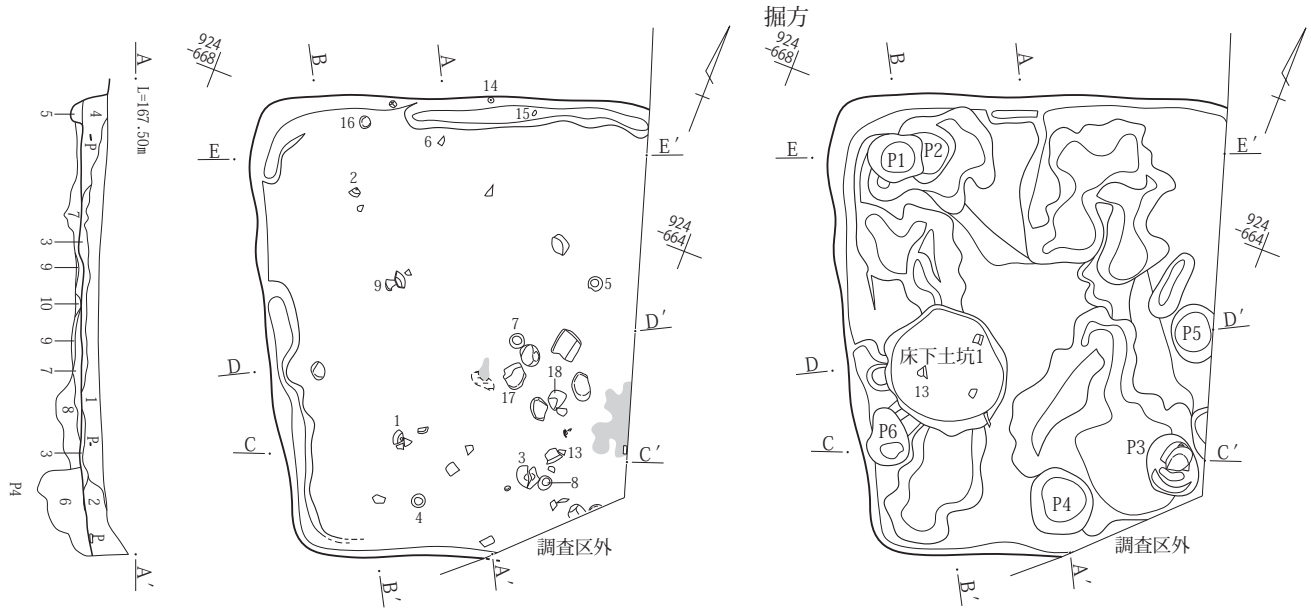
埋没土　上層は少量のAs-C、多量のAs-YPとやや多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、やや多量のローム細粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～粒を含む上層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　検出されなかった。ただし、東壁と南壁の一部が調査区外であったことから、カマドはこの未調査部分に存在した可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　検出されなかった。

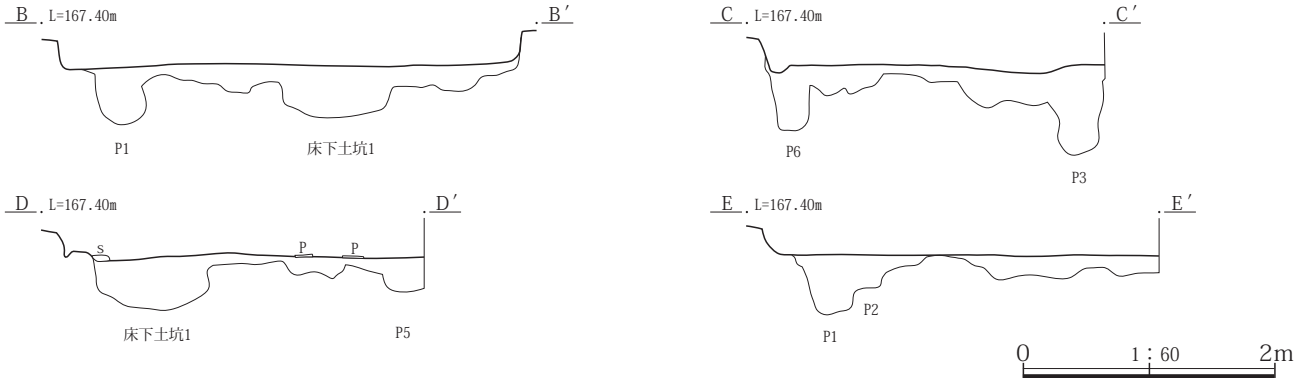
貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　北西隅付近と南壁を除く範囲から、幅0.14～0.29m、深さ0.05～0.08mの壁際溝を検出した。少量の

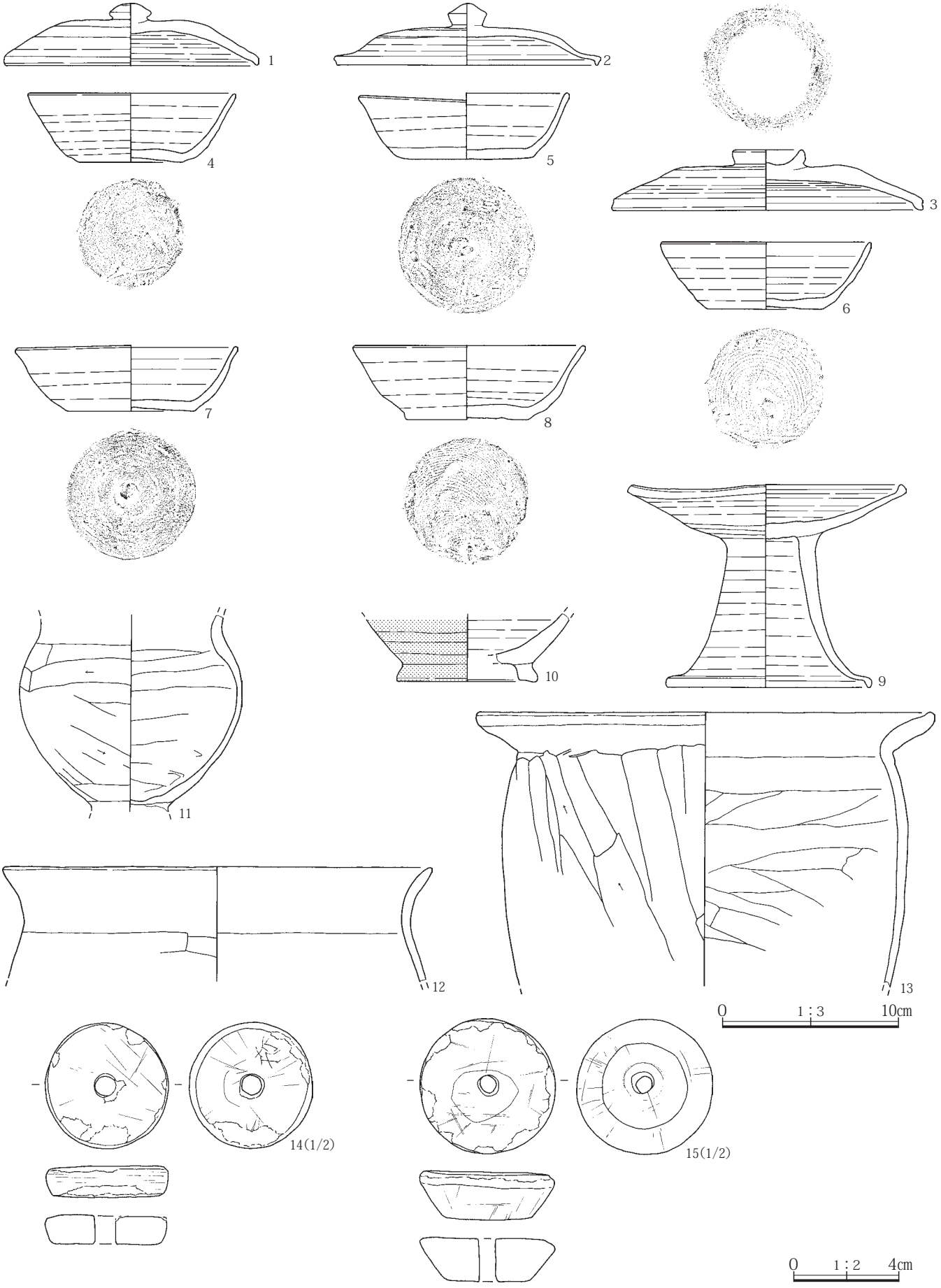


22号竪穴建物Ａ－Ａ′

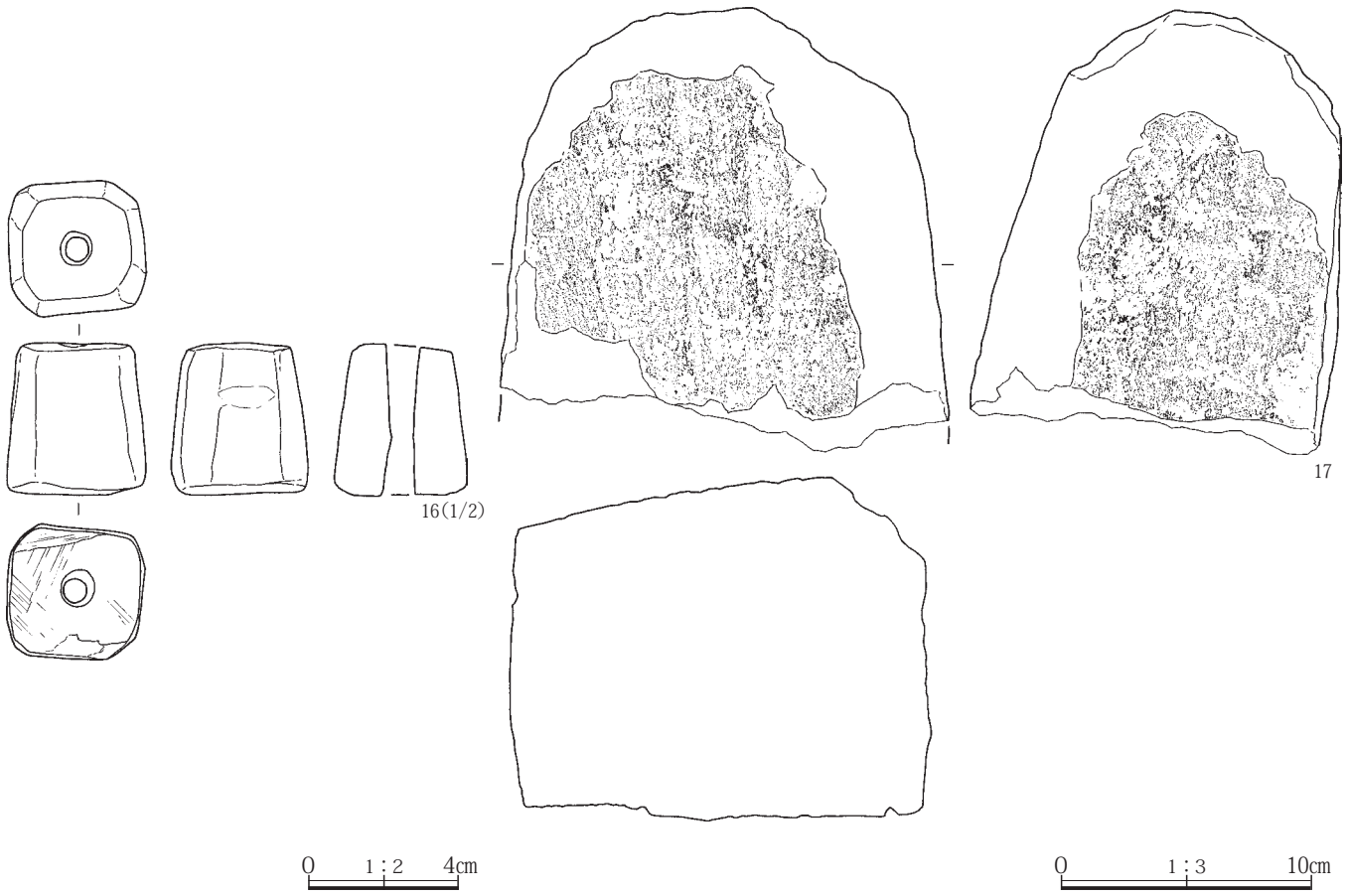
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPを多量、ローム粗塊～粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPを多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPを多量、ローム細粒をやや多量含む。硬質。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPをやや多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を非常に多量含む。
9．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。硬質。
10．ローム塊を主体とする。



第80図　22号竪穴建物



第81図　22号竪穴建物出土遺物（１）



第82図　22号竪穴建物出土遺物（２）

As-C、As-YPを含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.10～0.20mであった。西壁付近から床下土坑１基と、６基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.43×0.39×0.39m、Ｐ２が0.53×0.46×0.20m、Ｐ３が0.47×0.40×0.52m、Ｐ４が0.53×0.49×0.27m、Ｐ５が0.46×(0.34)×0.18m、Ｐ６が0.45×0.34×0.45m、形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形である。床面は多量のローム塊を含む黒褐色土やローム塊を主体とする土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は西壁付近に位置し、規模は長軸1.01m、短軸0.95m、深さ0.43mである。形状は円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。埋没土については不明であるが、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　２点の紡輪(14・15)と権錘(16)が出土したことが特筆される。これらはいずれも北壁際の床面直上から出土したものである。土師器甕は２個体(12・13)が確認されているが、このうち13は埋没土中から出土した破片と床下土坑１から出土した破片が接合したものである。須恵器蓋（３）、須恵器杯（４～７）、須恵器高杯（９）は、いずれも床面直上から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片６点(36ｇ)、甕・壺類破片135点(880ｇ)、須恵器の杯・椀類破片29点(190ｇ)、甕・壺類破片１点(56ｇ)、瓦片１点、カマドの袖石と思われる礫１点(584.7ｇ)が出土している。このうち礫(18)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第４四半期から９世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。

23号竪穴建物（第83・84図、PL.35）

位置　X＝40,923～40,930、Y＝－80,679～－80,685（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸5.55m、短軸5.37m

面積　（26.293㎡）

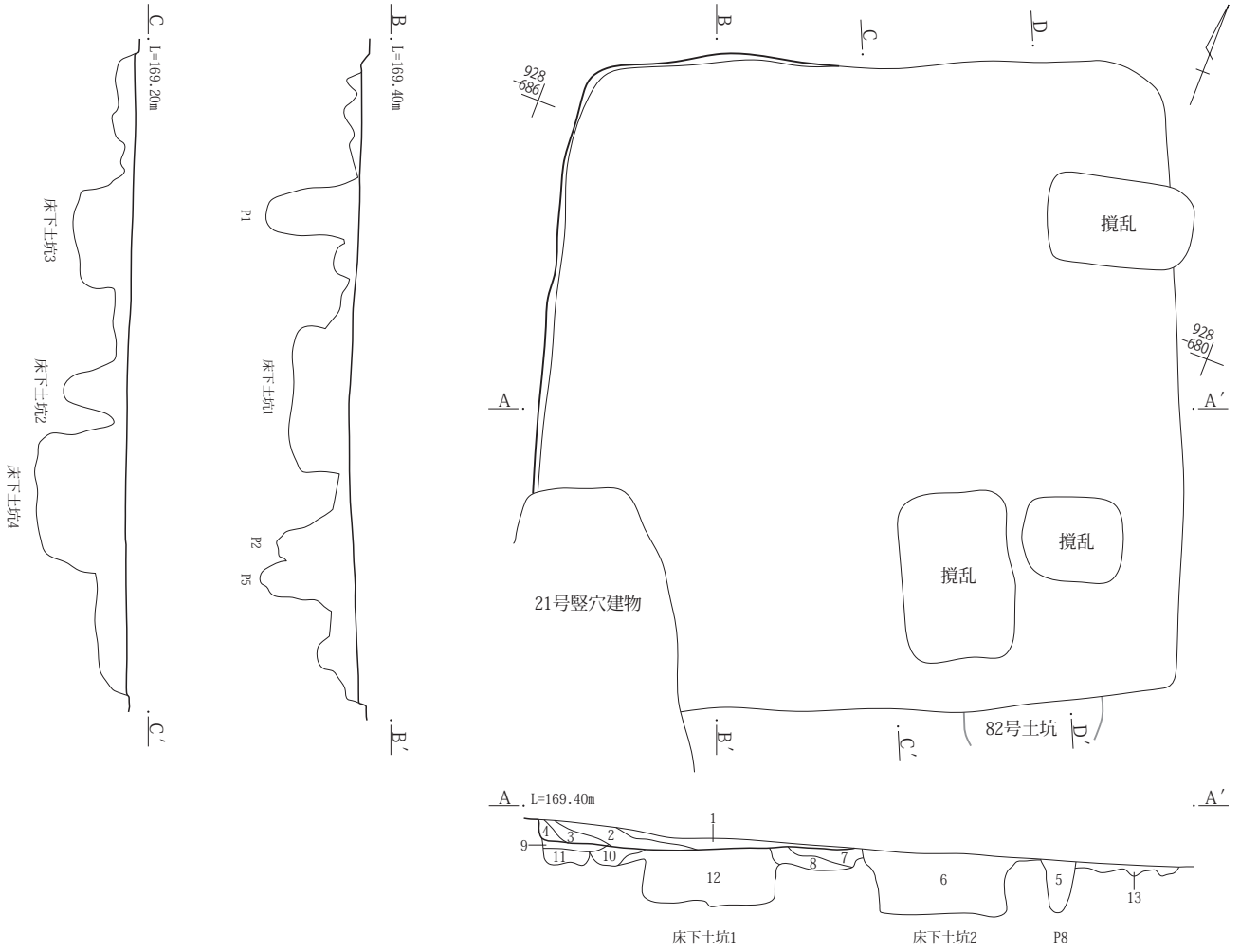
残存壁高　0.19m

方位　N－26°－W

重複　21号竪穴建物と重複し、23号竪穴建物が古い。また、82号土坑と重複し、23号竪穴建物が新しい。

埋没土　少量のAs-C、As-YP、ローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。西壁の中央付近は、少量のAs-C、As-YP、多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していたが、これはカマドが崩れたものである可能性が考えられる。

カマド　遺構確認面がほぼ床面と同レベルであったこと

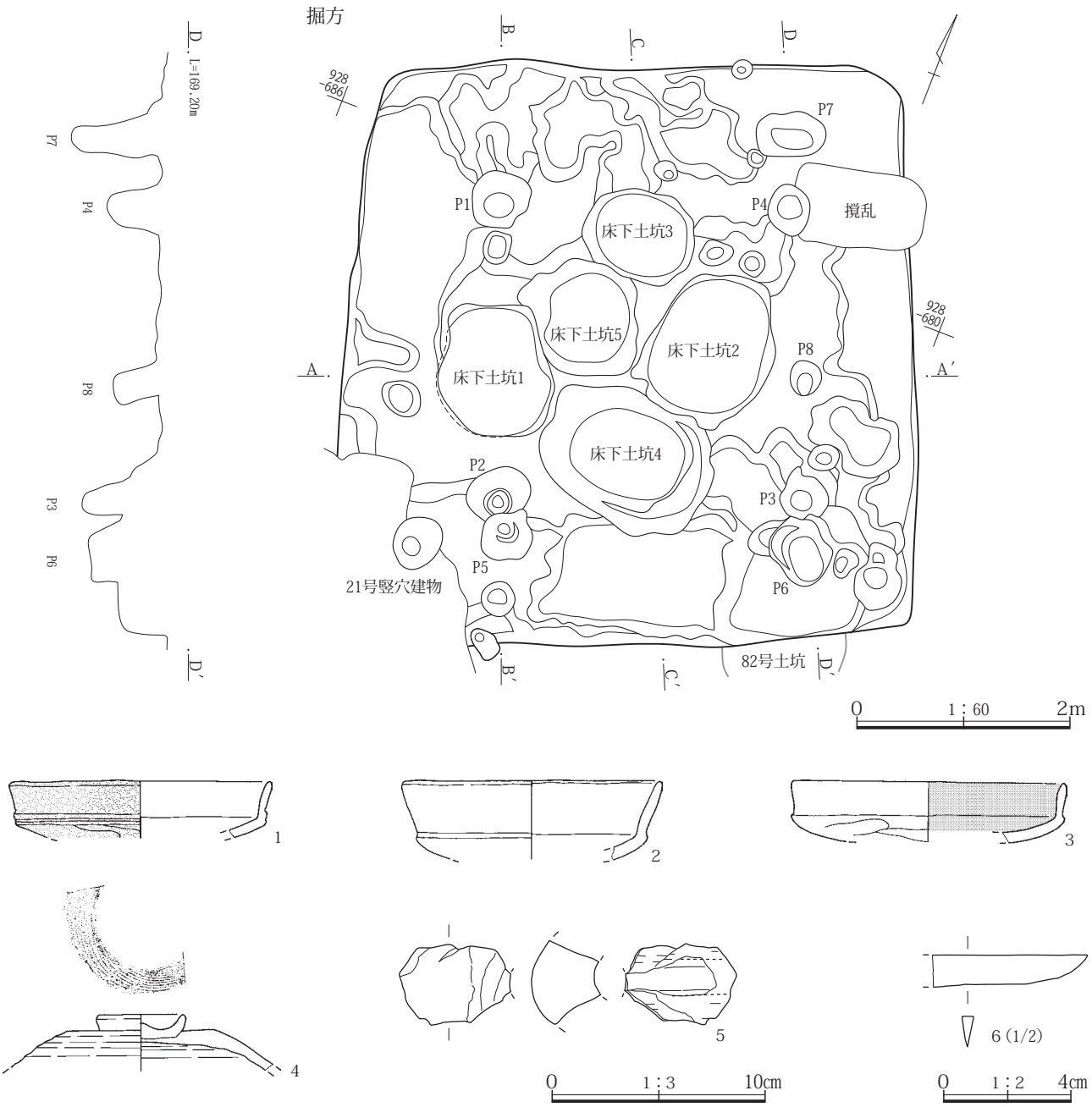


23号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム塊～細粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量、ローム粗塊～粒をやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YP、ローム粗塊～粒をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を非常に多量含む。
5．黒色土10YR2/1　As-YPをやや多量、ローム塊を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　ローム塊～微粒を多量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム微粒を多量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム微粒をやや多量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　焼土塊を多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム塊を多量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム塊、暗褐色土塊をやや多量含む。

0　1：60　2m

第83図　23号竪穴建物



第84図　23号竪穴建物掘方と出土遺物

から、カマドは検出されなかった。ただし、西壁の中央付近の床下からは多量の焼土塊が出土しており、この位置にカマドが存在していた可能性が考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　床面調査時には確認できなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１～Ｐ４が主柱穴である可能性が高いと考えられる。また、Ｐ２とＰ５、Ｐ３とＰ６は、それぞれ差し替えの痕跡である可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。ただし、南西隅にあったものが21号竪穴建物によって壊された可能性が考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

床面　西半ではほぼ平坦な床面を検出したが、東半では後世の撹乱や削平により床面を検出することができなかった。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.10～0.25mであった。ただし、中央付近は５基の床下土坑によって深く掘り込まれていた。また、

主柱穴の可能性が考えられる６基を含む８基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.53×0.53×0.76m、Ｐ２が0.60×(0.45)×0.49m、Ｐ３が0.48×0.46×0.54m、Ｐ４が0.48×0.39×0.57m、Ｐ５が0.54×0.48×0.61m、Ｐ６が0.60×0.50×0.33m、Ｐ７が0.65×0.42×0.81m、Ｐ８が0.33×0.28×0.45m、形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形である。床面は多量のAs-C、As-YP、ローム塊・微粒を含む黒褐色土で、複層的に貼床されていた。

床下土坑　５基の床下土坑は、いずれも中央付近に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.22×1.06×0.42m、床下土坑２が1.46×1.15×0.54m、床下土坑３が1.05×0.85×0.51m、床下土坑４が1.63×(1.20)×0.64m、床下土坑５が1.26×1.09×0.41mである。形状はいずれも楕円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。床下土坑１は多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土、床下土坑２は多量のローム塊～微粒を含む黒褐色土でそれぞれ埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。それ以外の床下土坑の埋没土については不明であるが、床下土坑１・２と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。土層断面の観察では、床下土坑１が埋没したあと貼床されている様子が確認できる一方、床下土坑２はその貼床を掘り込んでいることがわかる。このことから、これら５基の床下土坑は、すべてが同時に掘られたものではなく、竪穴建物の構築を挟んで時間差をもって掘られた可能性が高いと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器杯(１)、須恵器蓋(４)、羽口(５)は埋没土中から、土師器杯(２・３)、刀子(６)掘方調査において出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、甕・壺類破片43点(730ｇ)、須恵器の杯・椀類破片５点(43ｇ)、甕・壺類破片８点(152ｇ)、瓦片13点、凹石２点(1,840.4ｇ)、二次加工ある剝片(21.6ｇ)、剝片２点(61.2ｇ)が出土している。このうち凹石２点については、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から７世紀第前半の竪穴建物であると考えられる。

24号竪穴建物(第85～87図、PL.35・296)

位置　Ｘ＝40,907～40,911、Ｙ＝－80,687～－80,691(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸3.49m、短軸3.02m

面積　8.620㎡

残存壁高　0.74m

方位　Ｎ－63°－Ｅ

重複　30号竪穴建物と重複し、24号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のAs-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、多量のAs-YP、ローム塊～微粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊～微粒を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は0.75m、燃焼部幅は0.25mで、壁外に0.33m燃焼部・煙道が伸びる。両袖は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖とも比較的よく残存していたにもかかわらず袖石は検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられ、掘方調査では支脚を据えた痕跡であると考えられる浅い皿状の窪みを検出した。

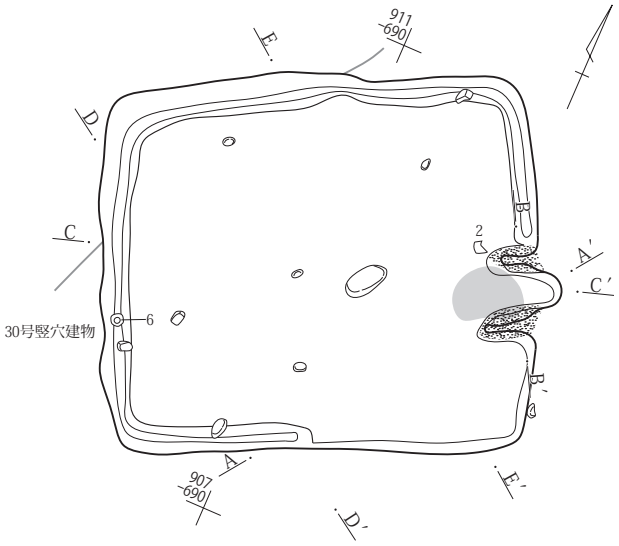
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

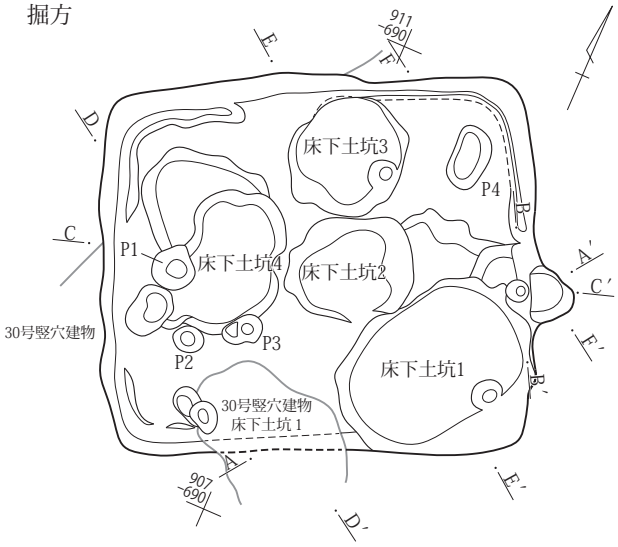
壁際溝　南壁の東半と東壁のカマドから南を除く範囲から、幅0.15～0.29m、深さ0.03～0.11mの壁際溝を検出した。やや多量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。

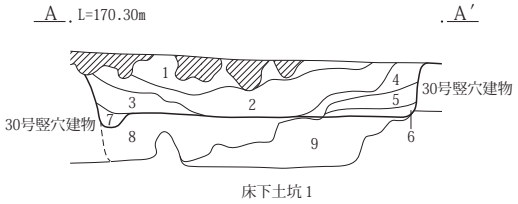
床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　掘方は非常に浅く、床面からの深さは0.05m前後であった。しかし、床下の大部分は４基の床下土坑に占められており、深く掘り込まれていた。また、南西隅と北東隅で４基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.37×0.35×0.61m、Ｐ２が0.25×0.21×0.16m、Ｐ３が0.31×0.22×0.31m、Ｐ４が0.50×0.28×0.26m、形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形である。このうちＰ２～４については、重複する30号竪穴建物の主柱穴である可能性が高いと考えられる。床面は微量のAs-C、やや多量のAs-YP、ローム粒を含む黒褐色土、またはローム塊を主体とする



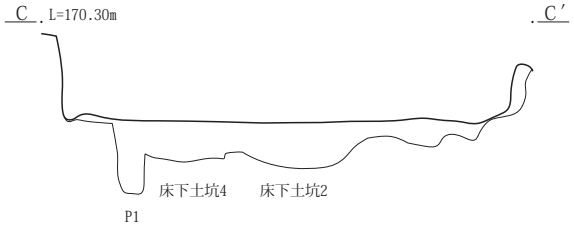
掘方

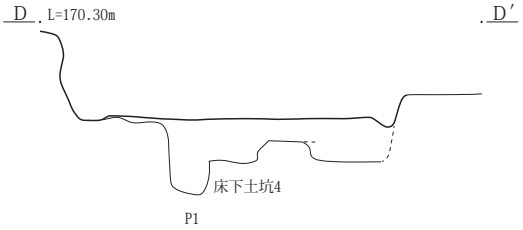


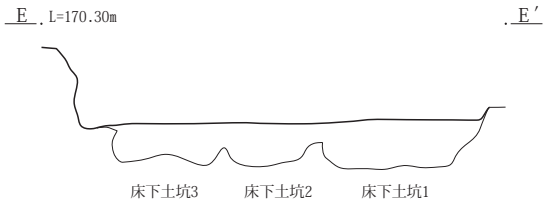


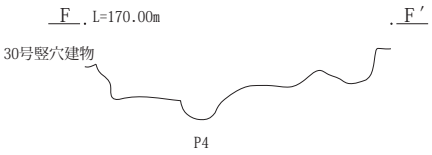
24号竪穴建物Ａ－Ａ′

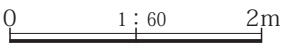
１．黒褐色土7.5YR3/1　As-Cをやや多量、As-YP、ローム粒少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊～微粒を多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-C、黒色土塊、ローム粗粒～微粒、焼土塊～粒をやや多量、As-YPを少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊を多量、焼土塊～粒をやや多量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒を少量、焼土細粒をやや多量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YPをやや多量含む。
８．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粒をやや多量含む。
９．ローム塊を主体とする。



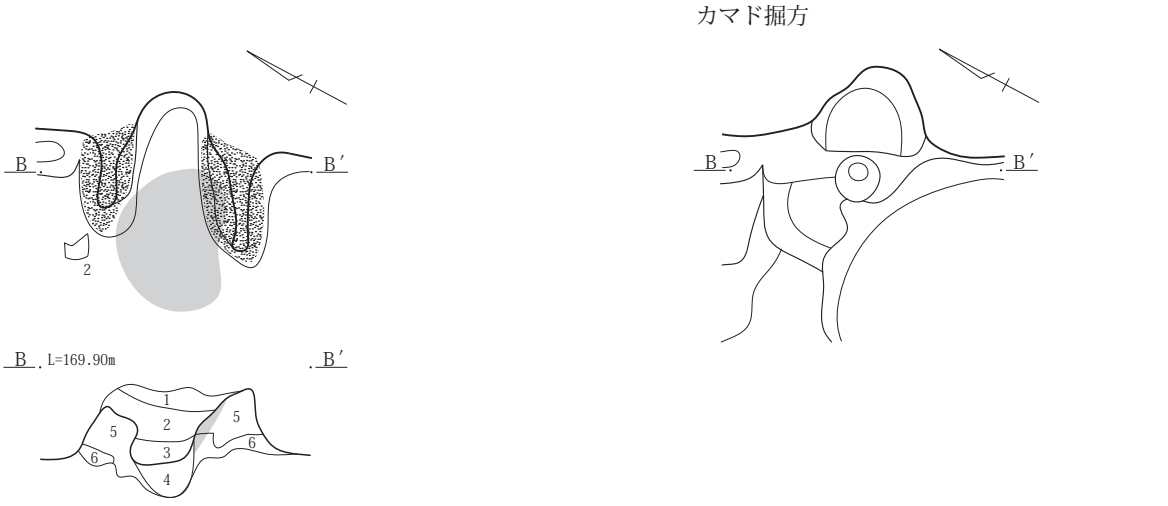








第85図　24号竪穴建物



24号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-C、黒色土塊、ローム粗粒～微粒、焼土塊～粒をやや多量、
　As-YPを少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊を多量、焼土塊～粒をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒を少量、焼土細粒をやや多量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粒をやや多量含む。
５．ローム塊を主体とする。
６．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粗粒を少量含む。

0　1：30　1m

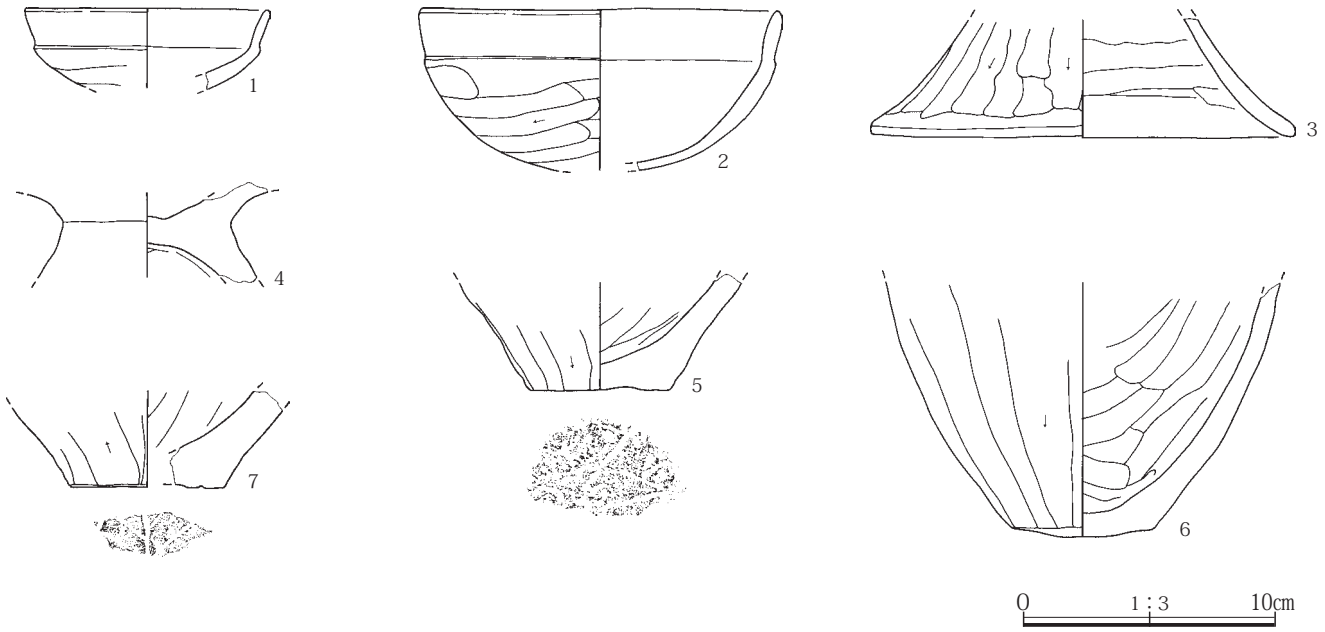
第86図　24号竪穴建物カマド

土で、厚く貼床されていた。

床下土坑　４基の床下土坑は、それぞれ南東隅、中央付近、北壁際、西壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.66×(1.40)×0.24m、床下土坑２が1.03×0.82×0.36m、床下土坑３が1.03×0.90×0.29m、床下土坑４が1.30×0.81×0.34mである。形状は床下土坑１が楕円形に近い不整形、床下土坑２・３が円形に近い不整形、床下土坑４が不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、床下土坑３について底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑１は、ローム塊を主体とする土で埋没しており、その上面がそのまま床面となっていた。貼床と一連の作業で埋められたと考えられる。それ以外の床下土坑の埋没土については不明であるが、床下土坑１と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器椀(２)はカマド近くの床面直上から、それ以外の遺物はいずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片４点(40ｇ)、甕・壺類破片48点(300ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(15ｇ)、甕・壺類破片２点(33ｇ)、瓦片１点、凹石１点(428.7ｇ)、台石１点(816.9ｇ)が出土している。このうち台石(８)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(前期末葉)の胴部破片、凹石については、遺構外出土遺物として(凹石は写真のみ)掲載した。

所見　出土遺物から６世紀後半の竪穴建物であると考えられる。



第87図　24号竪穴建物出土遺物

27号竪穴建物（第88～90図、PL.35・36・296）

位置　Ｘ＝40,918～40,922、Ｙ＝－80,674～－80,679（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.91m、短軸3.56m

面積　11.920㎡

残存壁高　0.53m

方位　Ｎ－17°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YPを含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、やや多量のAs-YP、多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　北壁の中央やや東寄りに位置する。残存長は0.75m、燃焼部幅は0.34mで、壁外に0.34m燃焼部が伸びる。両袖は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖とも比較的よく残存しており、向かって右側の袖には袖石が認められた。この袖石は長さ0.20m、幅0.16m、厚さ0.15mである。一方、向かって左側の袖石は、長さ0.10m、幅0.14m、厚さ0.11mと小さく、内側に傾いていたことから、本カマドの破壊に伴い上半が割れた可能性が考えられる。なお、両袖の基部は硬い地山を掘り残しており、カマドはそれを芯として構築されていた。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.03mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

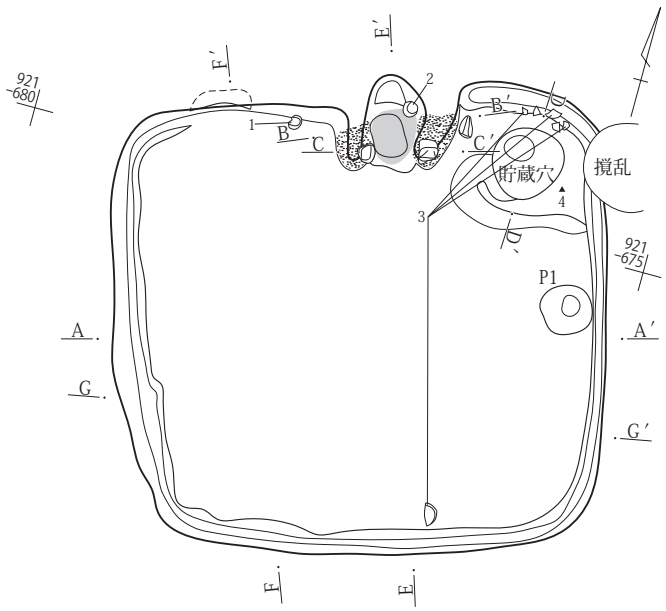
柱穴　Ｐ１は東壁際の中央付近に位置し、規模は長軸0.39m、短軸0.38m、深さ0.25m、形状は楕円形である。埋没土の特徴については不明である。東壁際ではあるが、入口の梯子穴である可能性が考えられる。

貯蔵穴　北東隅に位置し、規模は長軸0.56m、短軸0.55m、深さ0.43m、形状は隅丸方形に近い不整形である。周囲には周堤状の高まりが認められた。As-C、As-YP、ローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

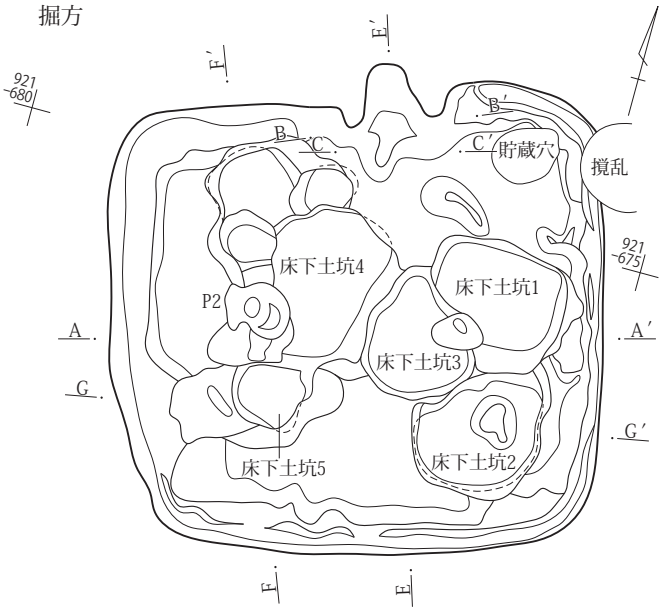
壁際溝　北壁の一部を除く範囲から、幅0.11～0.35m、深さ0.01～0.07mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のAs-C、やや多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

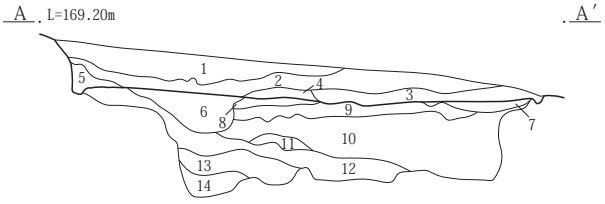
床面　床面はほぼ平坦で、部分的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.10～0.15mであった。ただし、中央付近は



掘方



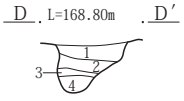


床下土坑4　床下土坑3　床下土坑1

27号竪穴建物Ａ－Ａ′

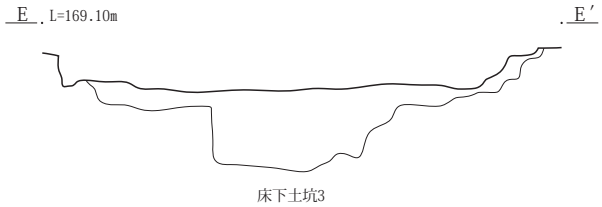
1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YP、ローム塊をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム塊を多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量、暗褐色土塊をやや多量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粒を少量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。硬質。
9．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量、ローム塊を少量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　ローム粒をやや多量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を非常に多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量、ローム塊を少量含む。
14．黒褐色土10YR3/1　ローム粗塊を非常に多量含む。

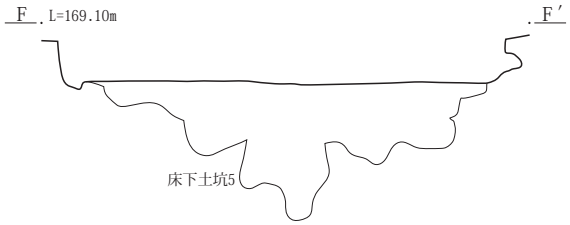
貯蔵穴

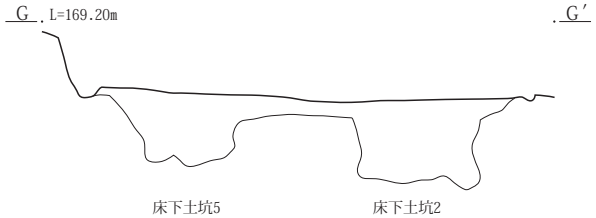


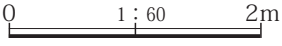
27号竪穴建物貯蔵穴Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム小塊を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPをやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム塊を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YP、ローム粒をやや多量含む。

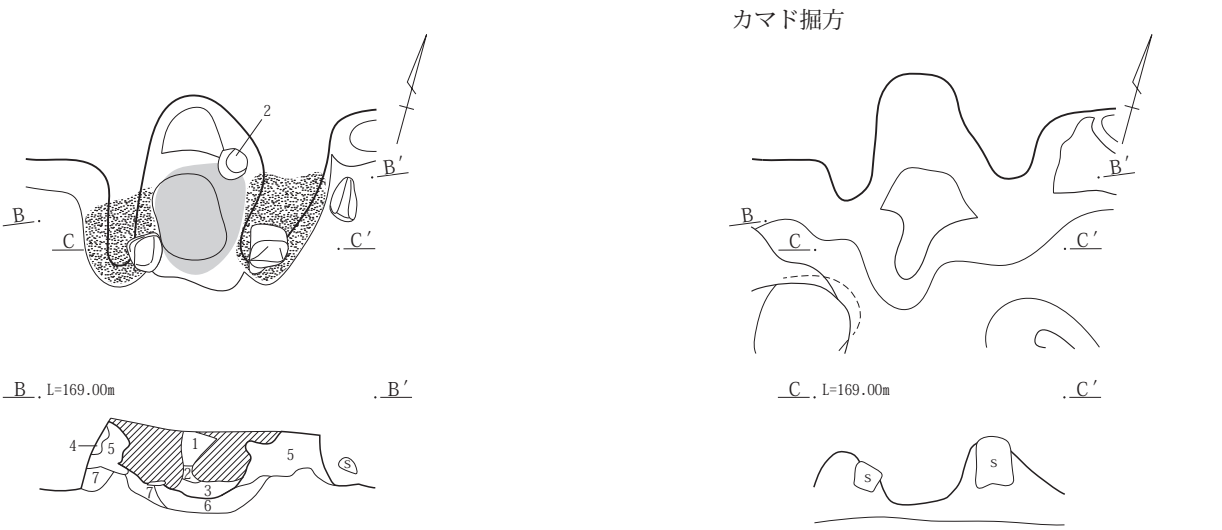








第88図　27号竪穴建物



27号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR3/1　ローム小塊～粒を非常に多量、焼土塊～粒を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　ローム粒を多量含む。
３．にぶい赤褐色土5YR4/4　被熱酸化層。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量含む。
５．ローム塊を主体とし、As-YPをやや多量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を非常に多量、焼土塊を少量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊～粒を少量含む。

0　1：30　1m

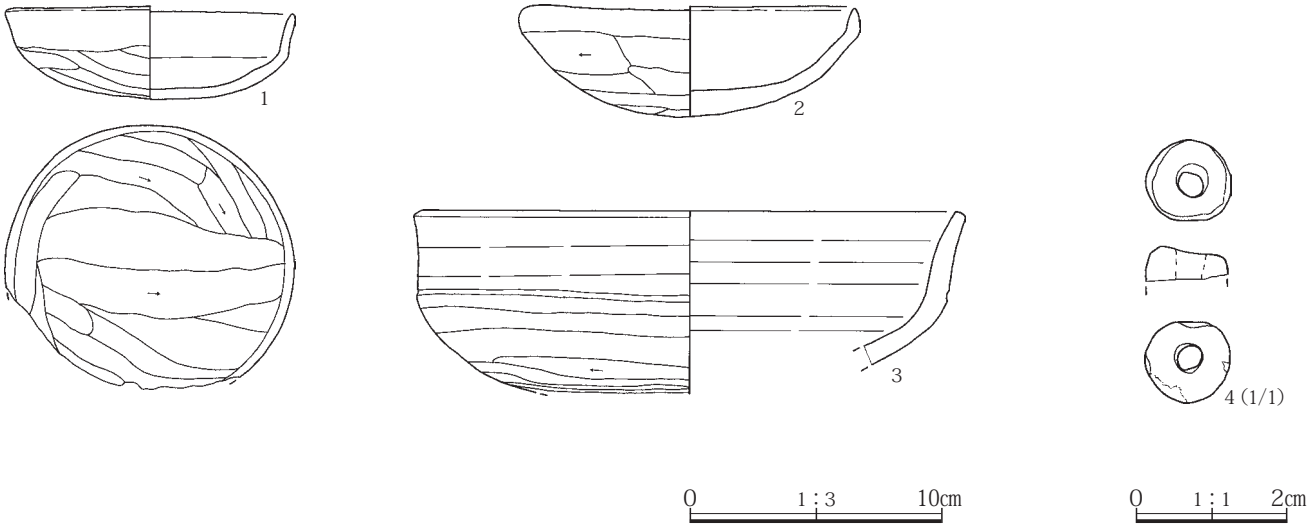
第89図　27号竪穴建物カマド

５基の床下土坑によって深く掘り込まれていた。床面は多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　５基の床下土坑は中央付近から東壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.24×1.03×0.43m、床下土坑２が1.01×0.98×0.56m、床下土坑３が1.07×0.90×0.54m、床下土坑４が(1.28)×(1.03)×0.54m、床下土坑５が(0.88)×(0.49)×0.40mである。形状はいずれも円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、多くの床下土坑について底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。土層堆積状況から、床下土坑１・３・４には新旧関係がなく、多量のAs-YPとローム粗塊～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。これらの床下土坑は、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑２の埋没土については不明であるが、床下土坑１・３・４と同様に、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。これに対して、床下土坑５は貼床を掘り抜いているように見えることから、本竪穴建物の廃絶直後や埋没過程において粘土採取が行われた可能性が考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器杯(２)は、カマド内に伏せた状態で置かれていた。須恵器大型杯(３)は、貯蔵穴周辺と南壁付近の床面近くから出土した破片が接合したものである。貯蔵穴周囲の床面直上からは、臼玉(４)も１点出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片29点(150ｇ)、甕・壺類破片45点(380ｇ)、須恵器の杯・椀類破片９点(23ｇ)、甕・壺類破片１点(10ｇ)、瓦片１点、石匙１点(21.5ｇ)、磨石２点(608.3ｇ)、剝片５点(56.9ｇ)が出土している。このうち磨石(５)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(堀之内２式)の胴部破片と石匙については、遺構外出土遺物として(石匙は写真のみ)掲載した。

所見　主な出土遺物から７世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



第90図　27号竪穴建物出土遺物

28号竪穴建物（第91・92図、PL.36・296）

位置　X＝40,916～40,922、Y＝－80,689～－80,694（C・D区）

形状　調査範囲が限定的であることから不明であるが、主柱穴の配置から正方形である可能性が高いと推測できる。

規模　長軸5.52m、短軸(4.70m)

面積　(28.709㎡)

残存壁高　0.30m

方位　N－17°－W

重複　51号竪穴建物、84号土坑と重複し、28号竪穴建物が古い。また、74号土坑と重複し、28号竪穴建物が新しい。

埋没土　西半にわずかに残っていた埋没土は、少量のAs-C、As-YP、微量のローム粒を含む黒褐色土であった。

カマド　遺構確認面がほぼ床面であったことから、カマドは検出されなかった。本竪穴建物の東壁付近は現代の耕作によって破壊されており、この東壁のどこかにカマドが存在していた可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１～Ｐ４が主柱穴である可能性が高いと考えられる。

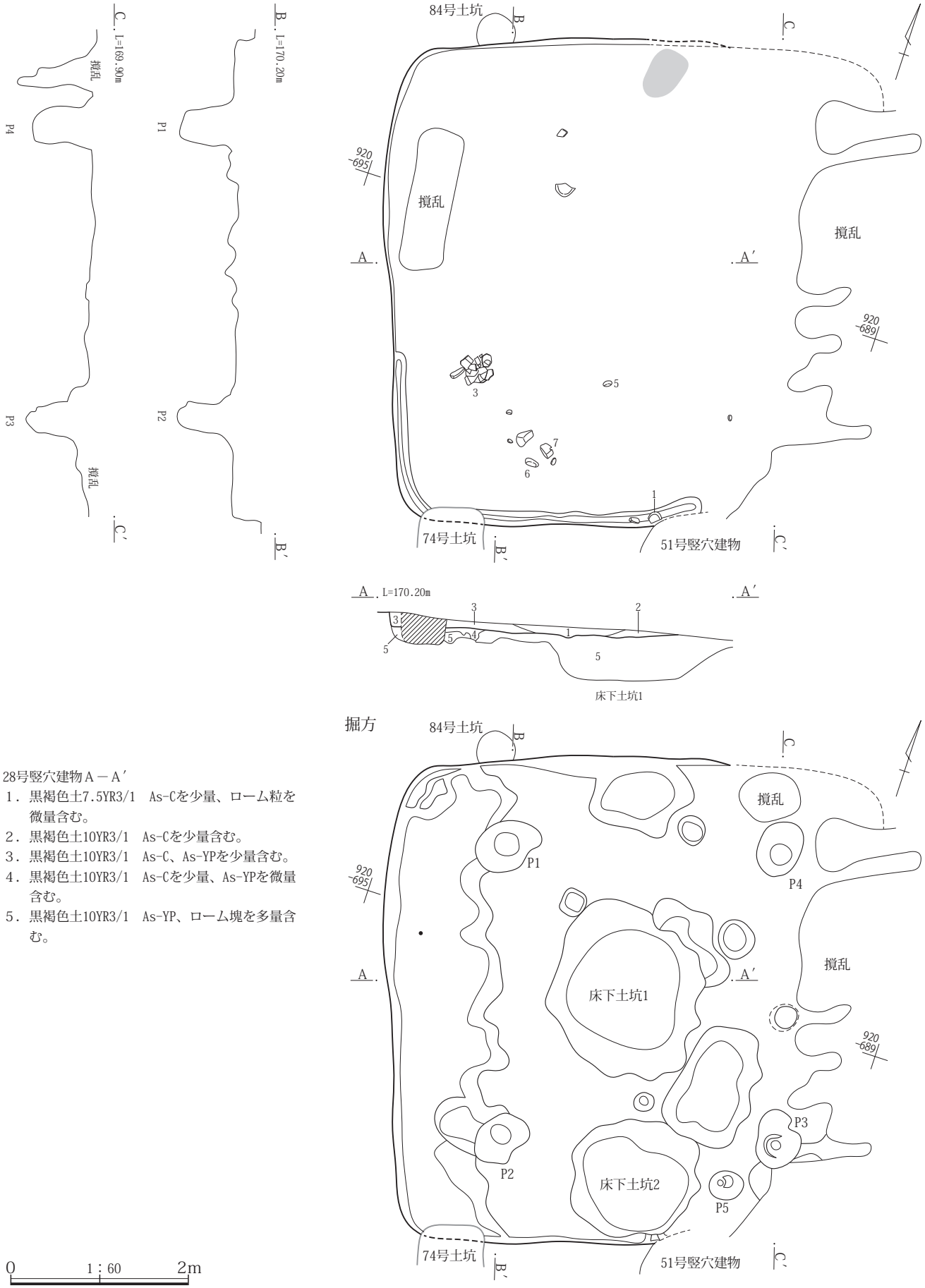
貯蔵穴　検出されなかった。ただし、南東隅にあったものが、現代の耕作によって壊された可能性が考えられる。

壁際溝　南壁と西壁の一部から、幅は0.12～0.24m、深さは0.04～0.23mの壁際溝を検出した。埋没土については不明である。

床面　東壁付近の一部を除いて検出した床面はほぼ平坦である。

掘方　掘方は全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.05～0.10mであったが、西壁際から約0.50mの範囲ではやや深く掘り込まれており、ここでは床面からの深さが0.15m前後であった。ただし、中央付近とその南側には床下土坑１・２があり、深く掘り込まれていた。また、主柱穴の可能性が考えられる４基を含む５基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.76×0.55×0.72m、Ｐ２が0.66×0.48×0.71m、Ｐ３が0.66×0.50×0.79m、Ｐ４が0.65×0.48×0.72m、Ｐ５が0.38×0.31×0.55m、形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形である。床面は多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　２基の床下土坑は中央付近と南壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.92×1.64×0.46m、床下土坑２が1.48×1.40×0.33mである。形状はいずれも円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。床下土坑１の埋没土は、貼床と同様の土質であったことから、粘土を採取したあと貼床と一連の作業で埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。床下土坑２の埋没土については不明であるが、床下土坑１と同様に、粘土を採取したあと人為的に埋め

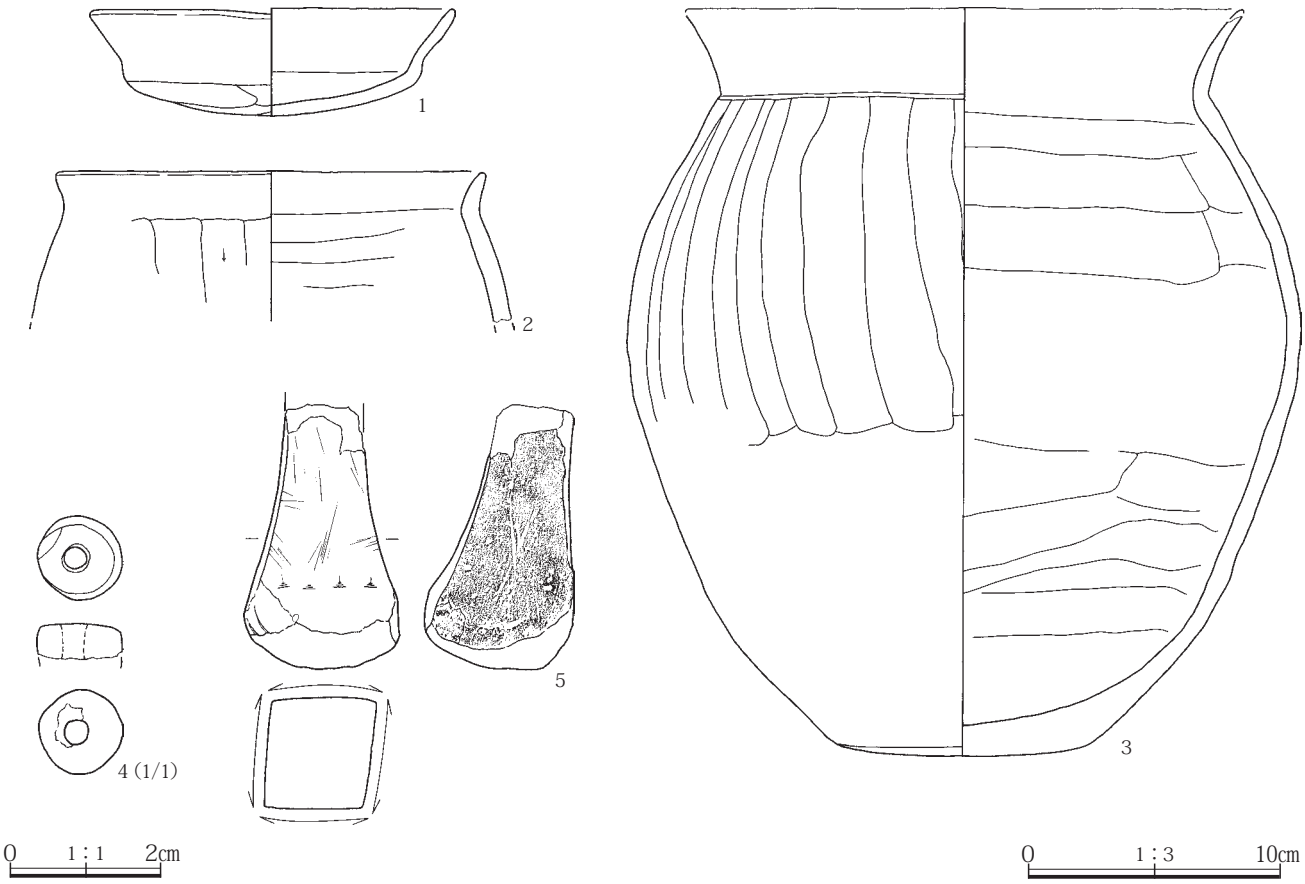


28号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土7.5YR3/1　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YPを微量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。

0　1：60　2m

第91図　28号竪穴建物



第92図　28号竪穴建物出土遺物

られたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器甕(３)は、西壁に近い床面直上からまとまって出土したものである。床面直上からは、砥沢石製の砥石(５)も出土している。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片12点(30ｇ)、甕・壺類破片77点(420ｇ)、須恵器の杯・椀類破片２点(４ｇ)、甕・壺類破片７点(70ｇ)、瓦片１点、打製石斧１点(242.7ｇ)、敲石１点(87.8ｇ)、砥石１点(779.5ｇ)、石製品１点(1,171.9ｇ)、剝片２点(57.3ｇ)が出土している。このうち砥石(６)と石製品(７)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(黒浜式)の口辺部破片、敲石、打製石斧については、遺構外出土遺物として(打製石斧は写真のみ)掲載した。

所見　出土遺物から７世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

29号竪穴建物(第93・94図、PL.36・37・297)

位置　Ｘ＝40,902～40,906、Ｙ＝－80,684～－80,688(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸3.40m、短軸2.95m

面積　8.720㎡

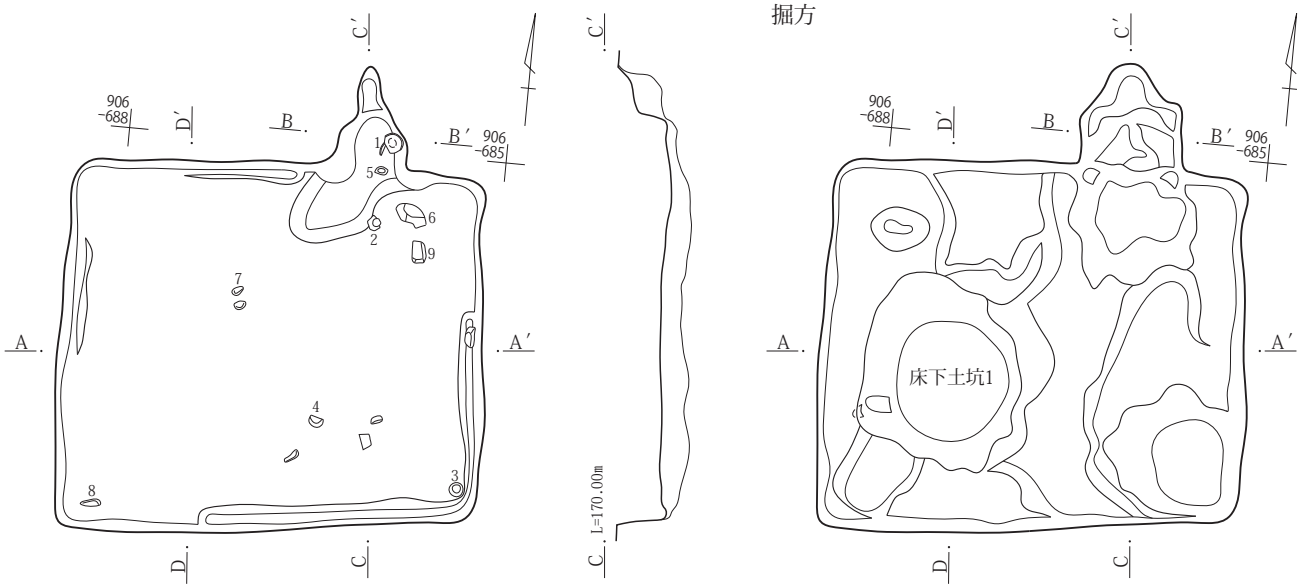
残存壁高　0.48m

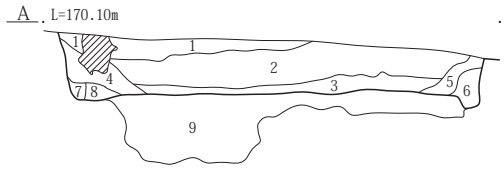
方位　Ｎ－５°－Ｗ

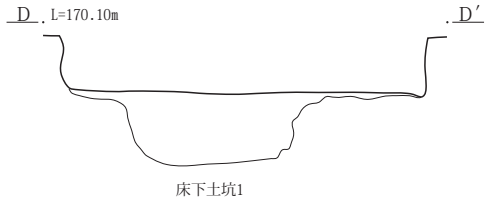
重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、やや多量のローム塊～微粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊を含む上層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　北壁の北東隅寄りに位置する。残存長は1.26m、燃焼部幅は0.30mで、壁外に0.75m燃焼部・煙道が伸びる。わずかに残存していた両袖は、部分的に床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部か



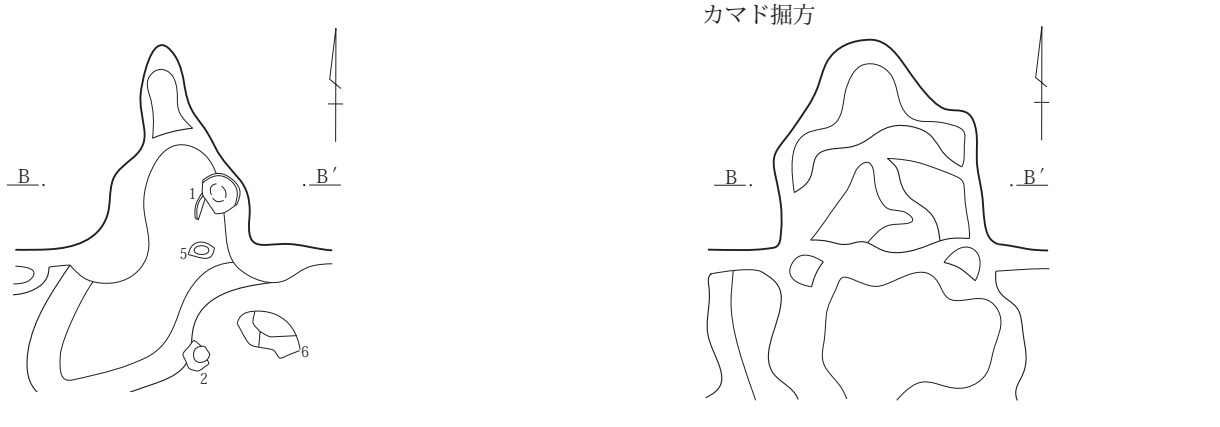




29号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土7.5YR3/1　As-Cを少量、ローム粒～細粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、焼土粒を少量、ローム塊～微粒をやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒～粒を少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
6．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊～粒を少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊～粒を非常に多量含む。

0　1：60　2m

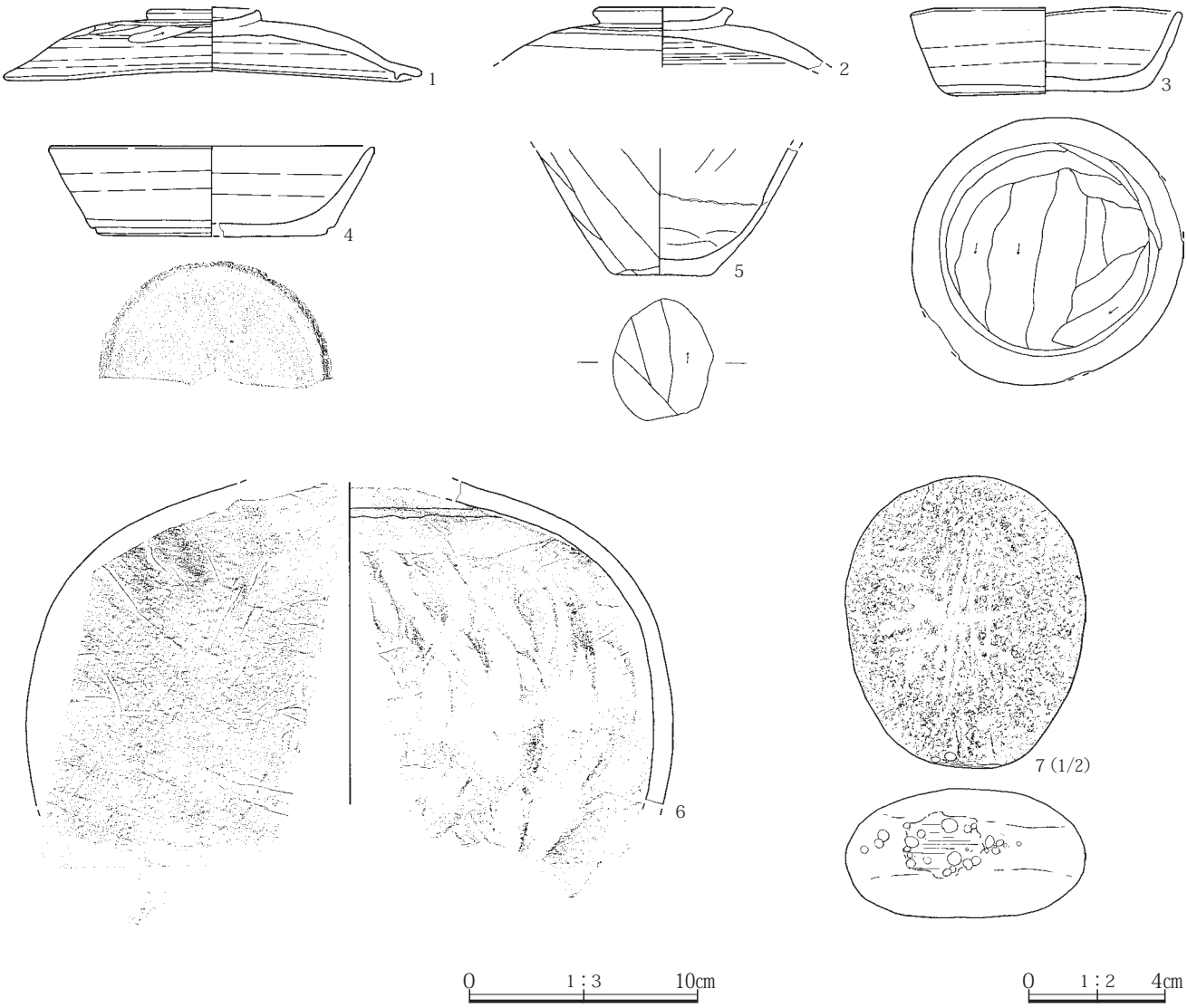


29号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

1．ローム塊を主体とし、焼土塊を多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　灰、焼土塊～粗粒を多量含む。
3．黒色土10YR2/1　夾雑物を含まない。
4．焼土塊を主体とし、As-YPを少量、ローム塊をやや多量含む。
5．黒色土10YR2/1　焼土粒を微量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-YPを少量、焼土塊～粗粒をやや多量含む。

0　1：30　1m

第93図　29号竪穴建物・カマド



第94図　29号竪穴建物出土遺物

ら袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられ、掘方全景写真では抜き取りの痕跡と思われる浅い窪みが確認できる。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.08mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　北壁と西壁の一部、南東隅から、幅0.10～0.22m、深さ0.01～0.08mの壁際溝を検出した。少量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面はカマド前を除いてほぼ平坦である。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.05～0.25mであった。中央やや南西寄りから床下土坑１基を検出した。床面は非常に多量のAs-YP、ローム塊～粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央やや南西に位置し、規模は長軸1.55m、短軸1.25m、深さ0.53mである。形状は円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。埋没土は貼床と同様の土質であったことから、粘土を採取したあと貼床と一連の作業で埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器蓋（１）はカマド内に逆位で、須恵器杯（３）は南東隅に正位で置かれていた。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここ

に掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片17点(95ｇ)、甕･壺類破片50点(289ｇ)、甕･壺類破片４点(212ｇ)、瓦片１点、敲石２点(2,461.6ｇ)、石製品１点(1,308.2ｇ)、礫・礫片２点(89.5ｇ)、剝片２点(61.3ｇ)が出土している。このうち敲石(８)、石製品(９)、礫(10)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。

30号竪穴建物(第95～97図、PL.35・297)

位置　Ｘ＝40,905～40,911、Ｙ＝－80,686～－80,691(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸5.02m、短軸4.26m

面積　18.496㎡

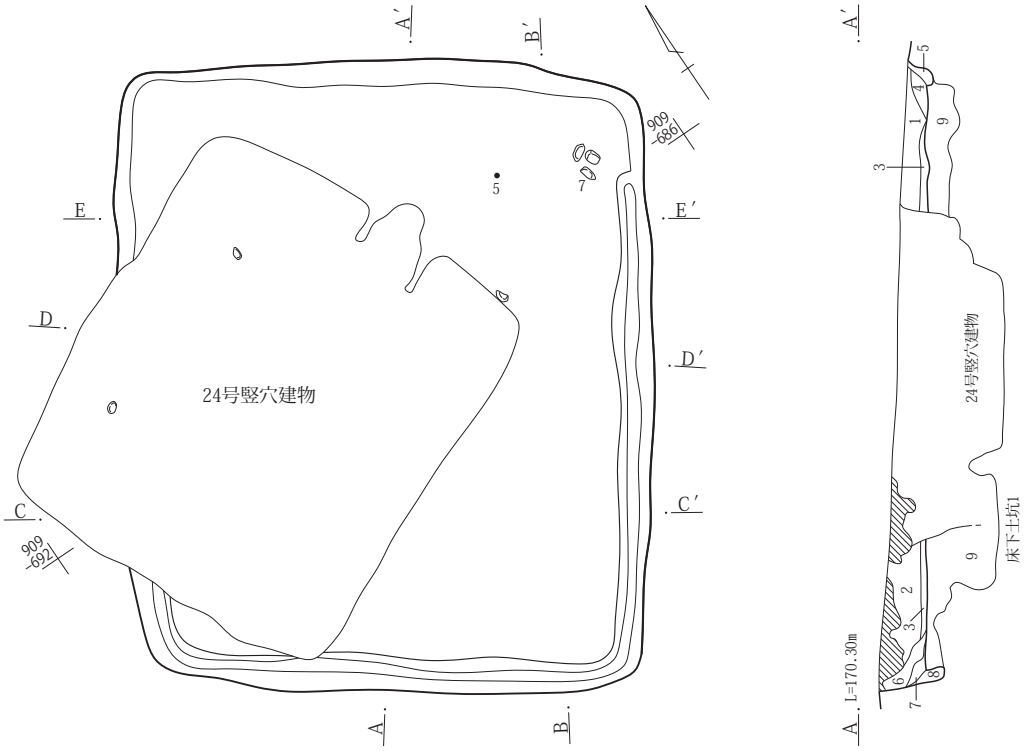
残存壁高　0.44m

方位　Ｎ－36°－Ｅ

重複　24号竪穴建物と重複し、30号竪穴建物が古い。

埋没土　全体的に微量のAs-C、少量のAs-YP、ローム粗粒～粒を含む黒褐色土で埋没していた。また、壁際では多量のローム塊を含む黒色土の堆積が認められたが、これは壁面の崩落によるものと考えられる。

カマド　検出されなかった。ただし、24号竪穴建物によって壊された西壁に存在していた可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

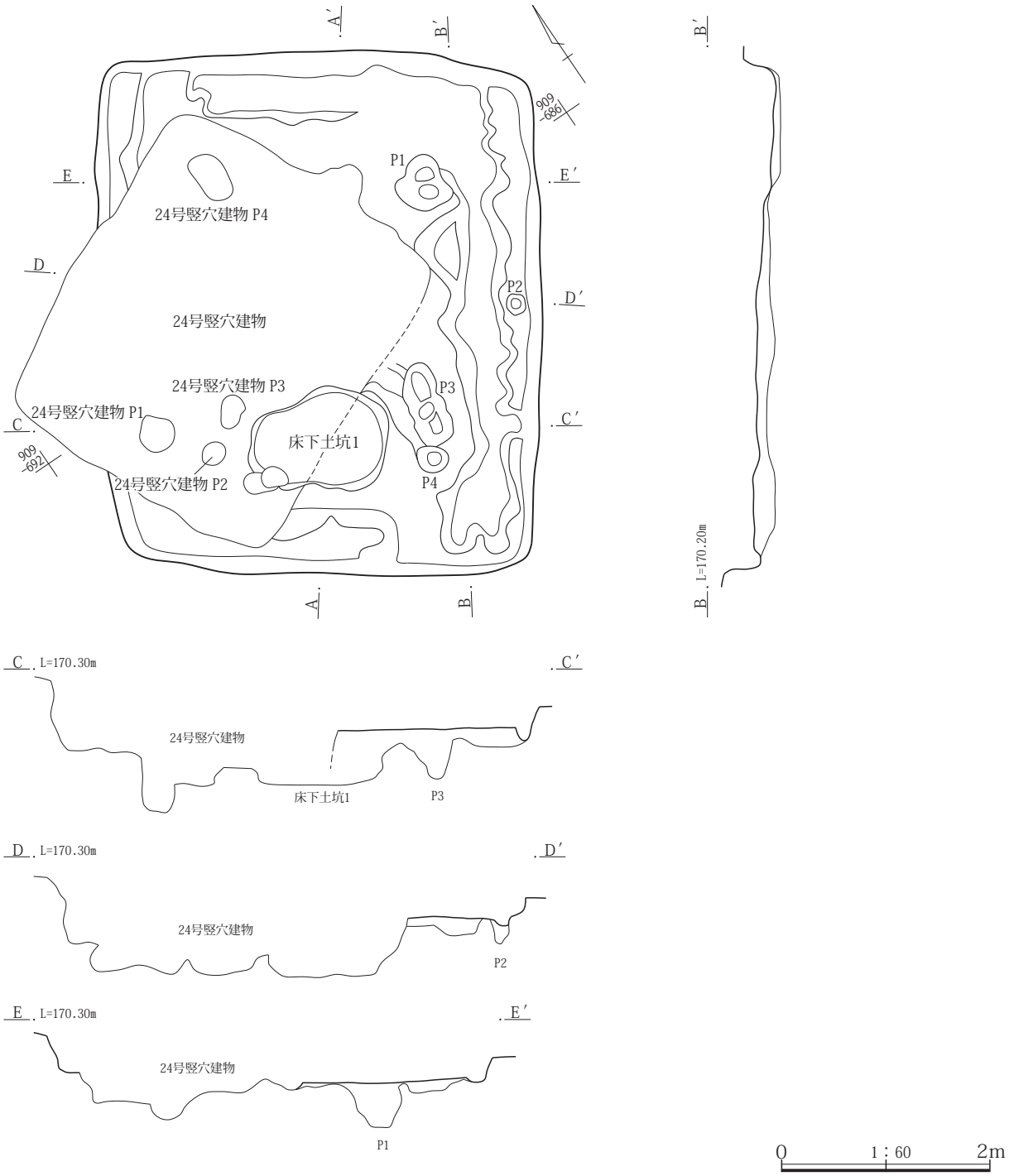


30号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土7.5YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム粒、焼土粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量、ローム粗粒を微量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YPをやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YP、ローム塊を少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YPを微量含む。
6．黒色土10YR2/1　ローム塊を多量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム塊を少量含む。
9．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量、ローム塊を非常に多量含む。

0　1：60　2m

第95図　30号竪穴建物

掘方



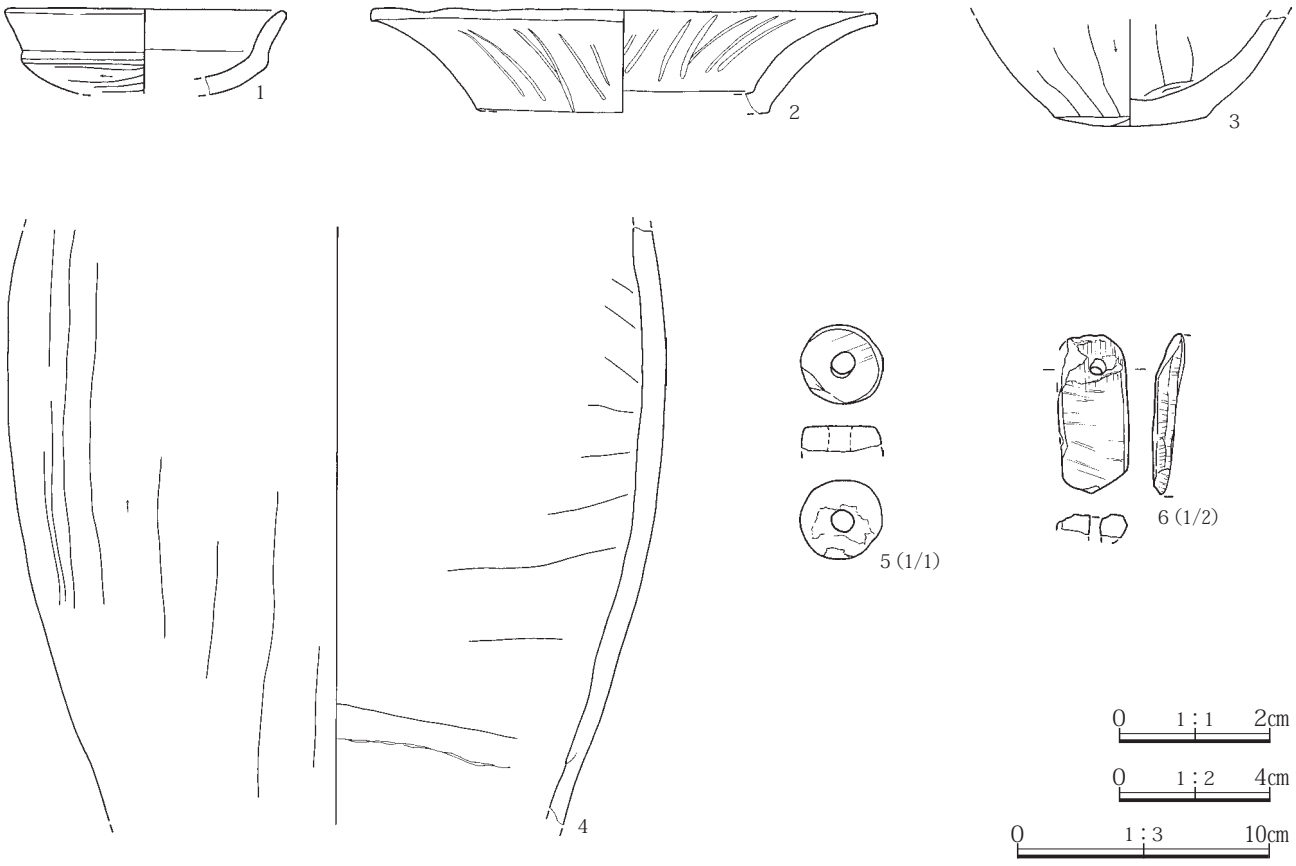
第96図　30号竪穴建物掘方

柱穴　床面調査時には確認できなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１・Ｐ４（またはＰ３）、及び24号竪穴建物の掘方調査で検出したＰ２（またはＰ３）・Ｐ４が主柱穴である可能性が高いと考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。ただし、南西隅にあったものが24号竪穴建物によって壊された可能性が考えられる。

壁際溝　東壁から南壁にかけて、幅0.20～0.32m、深さ0.01～0.11mの壁際溝を検出した。少量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦であるが、北東隅はやや低くなっており、周囲との高低差は最大で0.10mであった。



第97図　30号竪穴建物出土遺物

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.08～0.15mであった。南西壁付近から床下土坑１基を検出した。また、南東壁付近から４基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.56×0.53×0.37m、Ｐ２が0.19×0.18×0.23m、Ｐ３が0.81×0.35×0.49m、Ｐ４が0.31×0.25×0.25m、形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形である。床面はやや多量のAs-YP、非常に多量のローム塊を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は南西壁付近に位置し、規模は長軸1.30m、短軸0.98m、深さ0.42mである。形状は円筒形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。埋没土は貼床と同様の土質であったことから、粘土を採取したあと貼床と一連の作業で埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　臼玉(５)は、北東隅の床面直上から出土したものである。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片27点(136ｇ)、甕・壺類破片135点(1,370ｇ)、須恵器の杯・椀類破片17点(72ｇ)、甕・壺類破片17点(207ｇ)、瓦片１点、打製石斧１点(199.7ｇ)、凹石１点(577.3ｇ)、敲石１点(896.2ｇ)、剝片１点(132.2ｇ)が出土している。このうち敲石(７)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(黒浜ないし有尾式)の口縁部破片２点、打製石斧、凹石については、遺構外出土遺物として(打製石斧と凹石は写真のみ)掲載した。

所見　出土遺物から６世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

31号竪穴建物（第98～100図、PL.37・297）

位置　X＝40,899～40,903、Y＝－80,682～－80,686（C・D区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸（4.27m）、短軸（2.96m）

面積　（6.287㎡）

残存壁高　0.85m

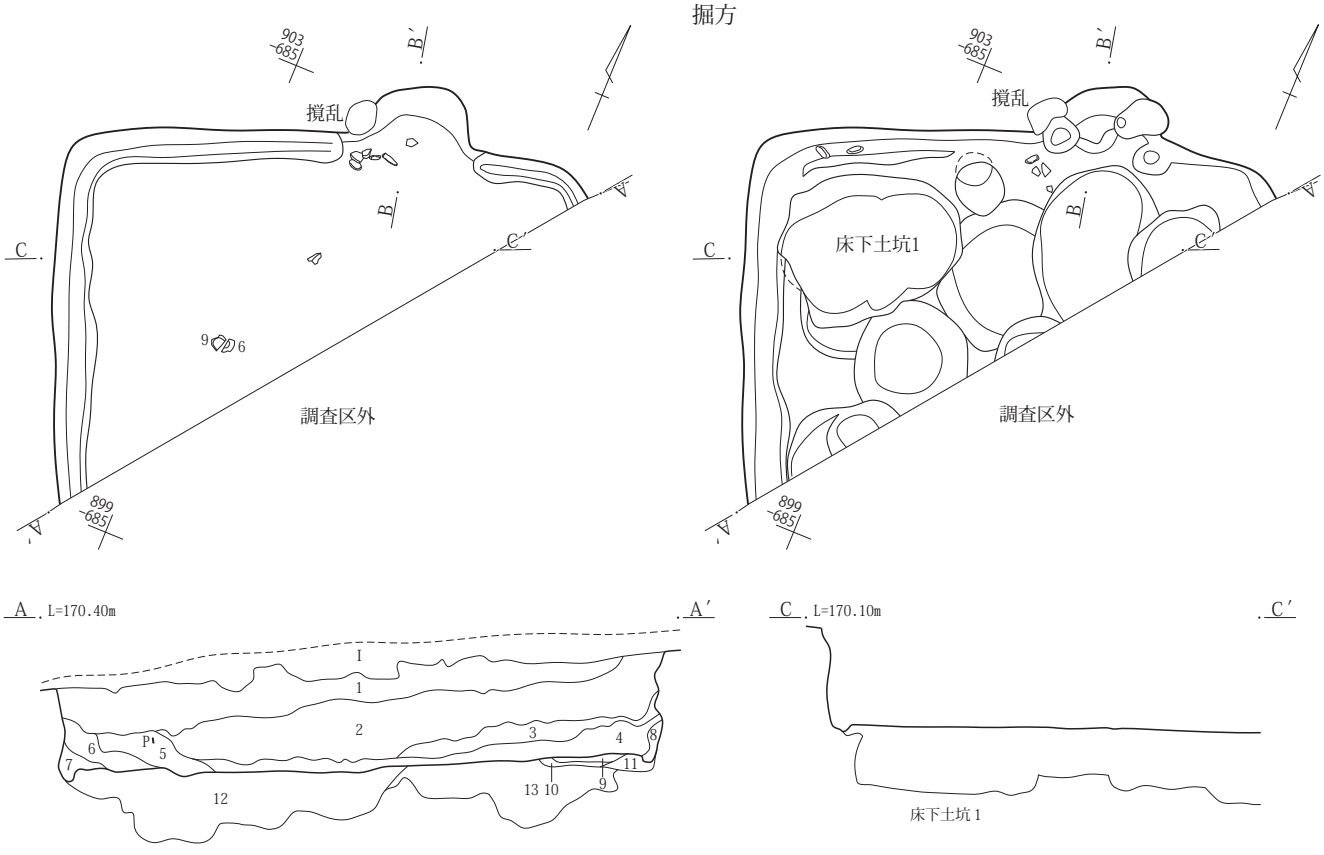
方位　N－11°－W

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のAs-YP、ローム粗粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、As-YP、ローム塊・粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　北壁の中央やや東寄りに位置する。残存長は0.66m、燃焼部幅は0.53mで、壁外に0.50m燃焼部が伸びる。両袖は完全に壊されており、袖石も検出されなかったが、掘方調査では左右の袖の下部から袖石を据えた痕跡の可能性が考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられる

掘方

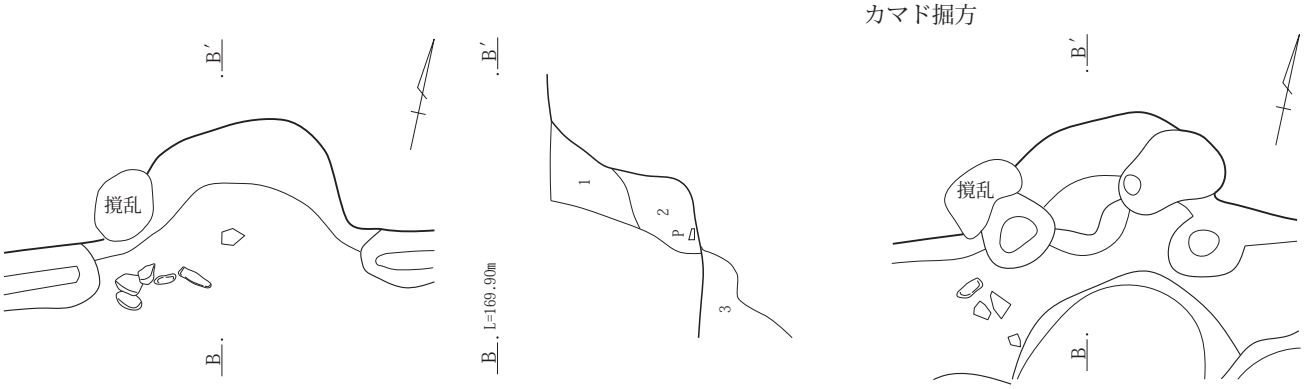


31号竪穴建物Ａ－Ａ′

Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、As-YP、ローム粗粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、As-YP、焼土粗粒を少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量、暗褐色土塊をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、焼土粒を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊を少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　As-Cを、As-YPを少量、ローム粒をやや多量含む。
8．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粒を多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
11．黒褐色土10YR3/1　焼土塊を少量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　ローム塊をやや多量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。

0　1：60　2m

第98図　31号竪穴建物



31号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′
１．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒、焼土塊～粗粒を少量、炭化物粒を微量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　ローム塊をやや多量含む。

0　1：30　1m

第99図　31号竪穴建物カマド

が、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　カマドを除く北壁から西壁で、幅0.15～0.35m、深さ0.03～0.09mの壁際溝を検出した。やや多量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

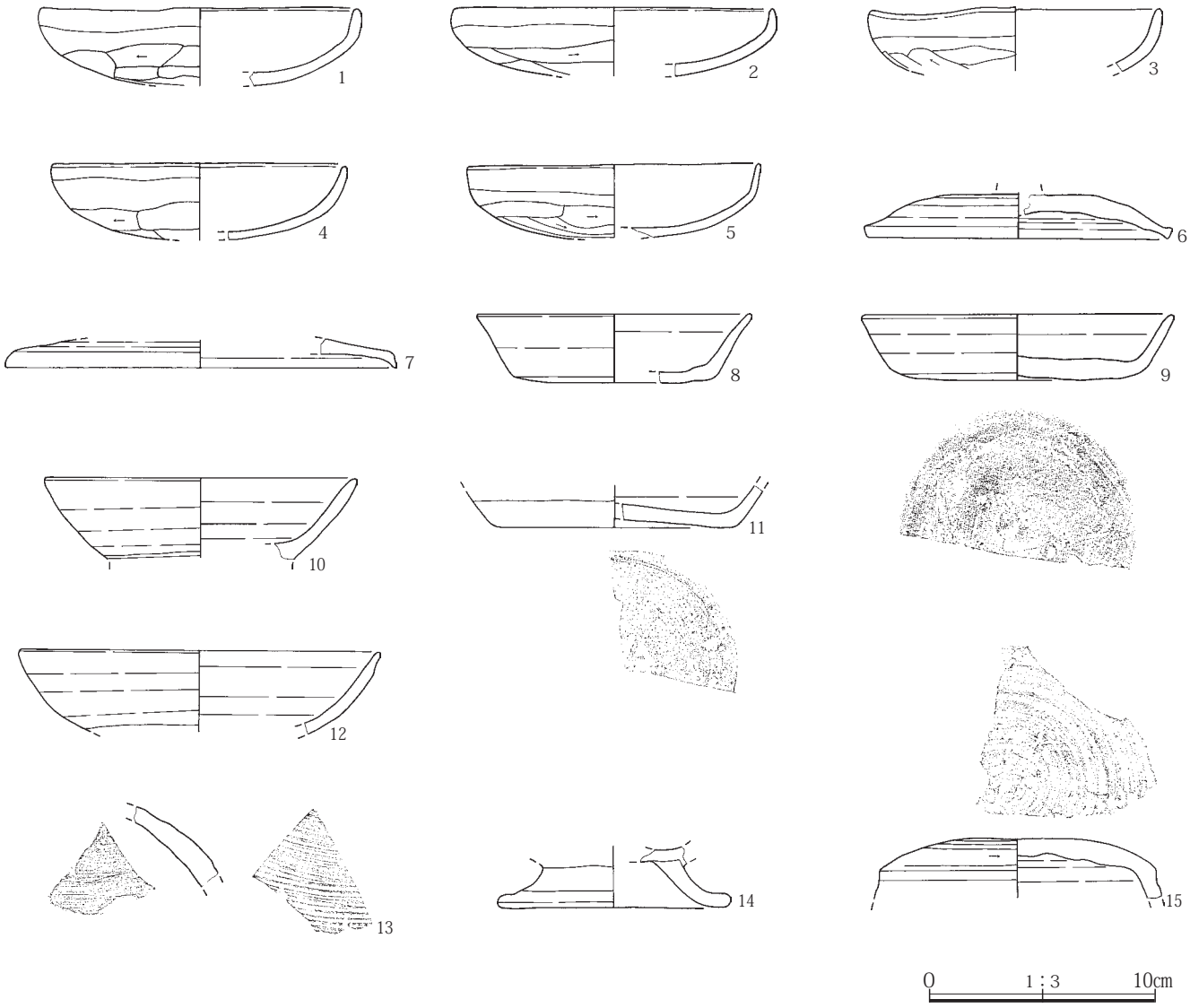
床面　床面はほぼ平坦であるが、南から北に向かって低くなっており、高低差は最大で0.10mであった。これは掘方の深さを反映した経年変化である可能性が考えられる。

掘方　掘方は南西から北東に向かって階段状に掘り窪められており、床面からの深さは、西壁付近で0.10m前後、東壁付近で0.60m前後であった。これは複数の床下土坑が重複している可能性が考えられるが、調査範囲が限定的であったことから断定はできなかった。また、北西隅から床下土坑１基を検出した。床面は多量のローム塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていたが、北東隅ではローム粒や焼土粒を含む黒褐色土で薄く貼り直されている状況が確認できた。

床下土坑　床下土坑１は北西隅付近に位置し、規模は長軸1.45m、短軸1.20m、深さ0.53mである。形状は楕円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと、横に掘り進めた結果であると考えられる。埋没土については不明であるが、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　須恵器蓋（６）と杯（９）は、床面直上から近接して出土した。須恵器杯（８）と壺(13)は掘方調査において出土したものであるが、それ以外の遺物はいずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片76点(520ｇ)、甕・壺類破片331点(2,570ｇ)、須恵器の杯･椀類破片29点(233ｇ)、甕･壺類破片14点(330ｇ)、瓦片１点、敲石１点(863.6ｇ)、剝片２点(50.7ｇ)が出土している。このうち敲石(16)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



第100図　31号竪穴建物出土遺物

32号竪穴建物（第101～104図、PL.37・297・298）

位置　X＝40,903～40,907、Y＝－80,690～－80,694（C・D区）

形状　不整形

規模　長軸3.87m、短軸3.27m

面積　10.173㎡

残存壁高　0.72m

方位　N－71°－E

重複　72号土坑と重複し、32号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。中層はやや多量のAs-C、As-YP、少量のローム塊、焼土小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、As-YP、ローム小塊～粗粒、焼土小塊を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.90m、燃焼部幅は0.25mで、壁外に0.45m燃焼部が伸びる。両袖は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖とも比較的よく残存していたにもかかわらず袖石は検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

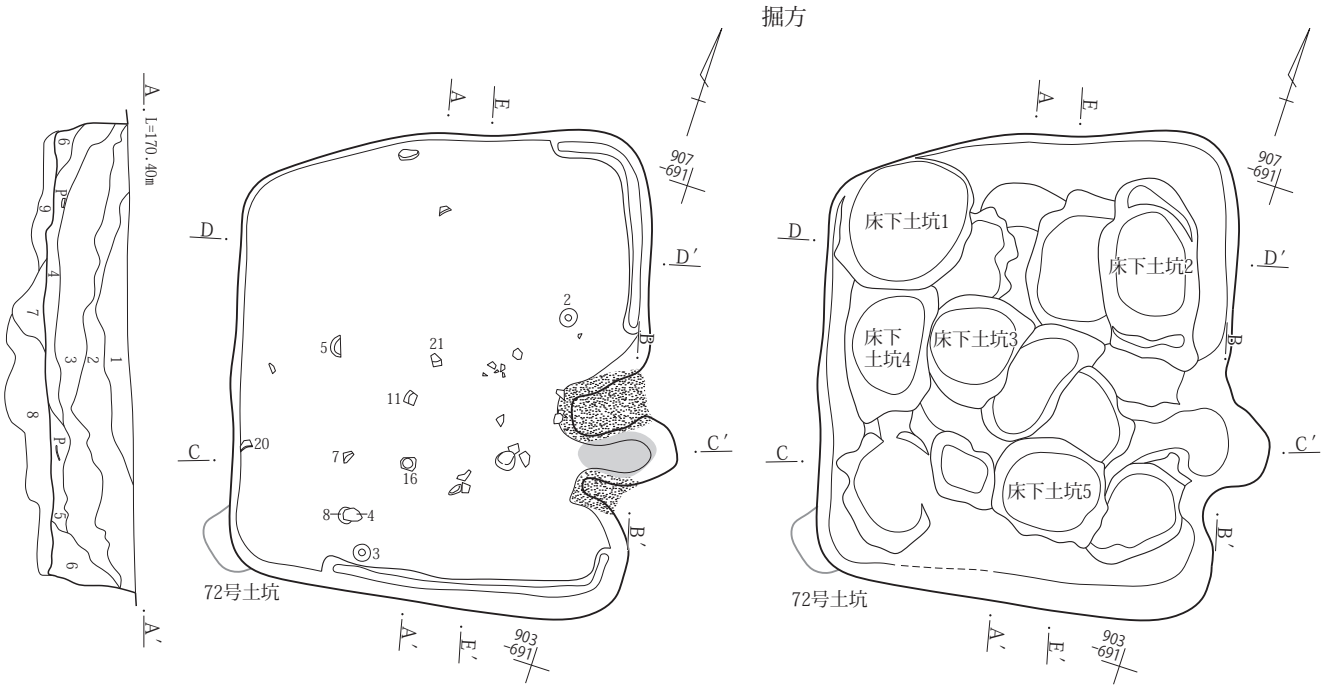
壁際溝　カマドを除く北東隅から南壁にかけて、幅0.16～0.30m、深さ0.01～0.05mの壁際溝を検出した。少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋

められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦である。

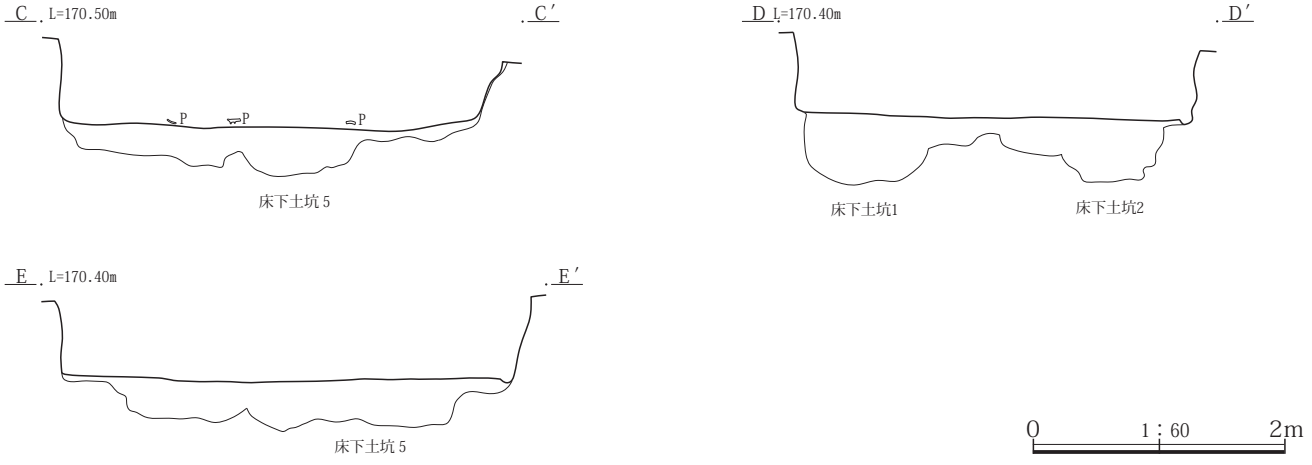
掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.05～0.30mであった。掘方調査で検出した粘土採取の痕跡のうち、形状がはっきりしている５基を床下土坑とした。床面は多量のAs-YP、ローム粗塊～微粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　５基の床下土坑は、それぞれ北西隅、北東隅、西壁際、南壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.15×1.01×0.53m、床下土坑２が1.43×0.80×0.49m、床下土坑３が0.90×(0.80)×0.40m、床下土坑４が(1.06)×0.70×0.51m、床下土坑５が0.94×



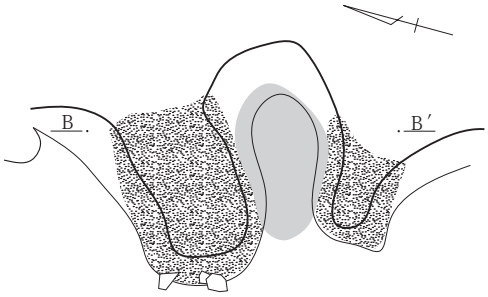
32号竪穴建物Ａ－Ａ′

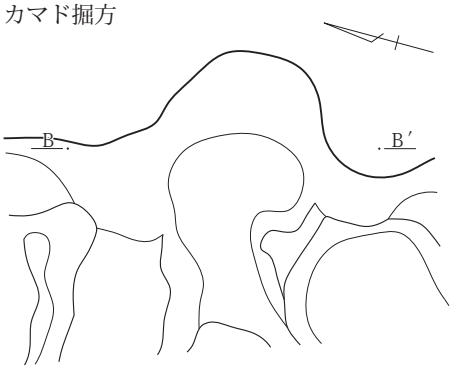
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、As-YPを少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPをやや多量、ローム塊、焼土小塊～粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPをやや多量、暗褐色土塊をやや多量、ローム塊、焼土小塊～粒を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム小塊、焼土小塊を少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム小塊～粗粒を少量、As-YPをやや多量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム小塊を少量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粗塊をやや多量含む。
８．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊～微粒を多量含む。
９．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。

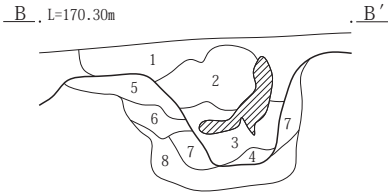


第101図　32号竪穴建物

カマド掘方

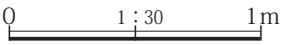


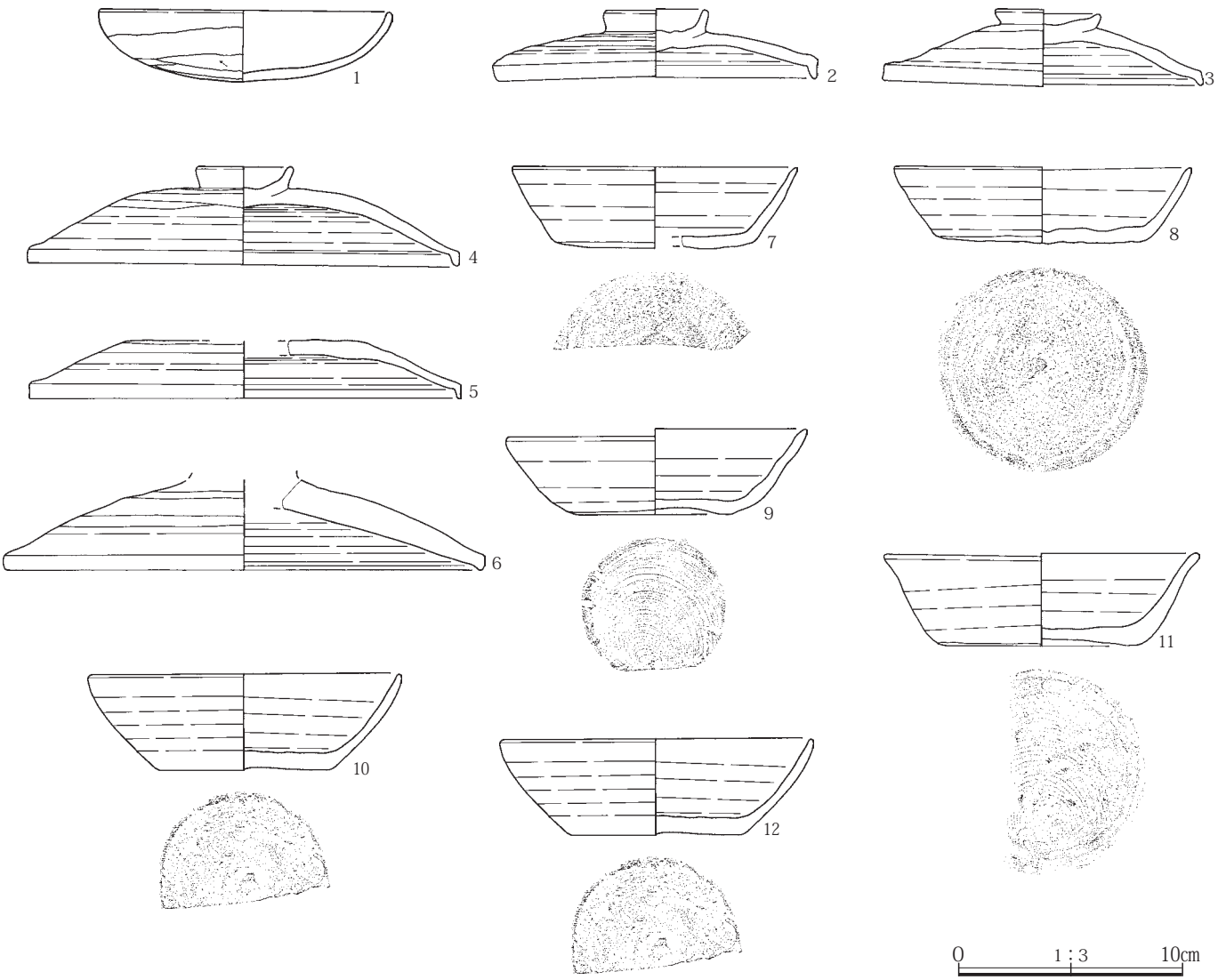




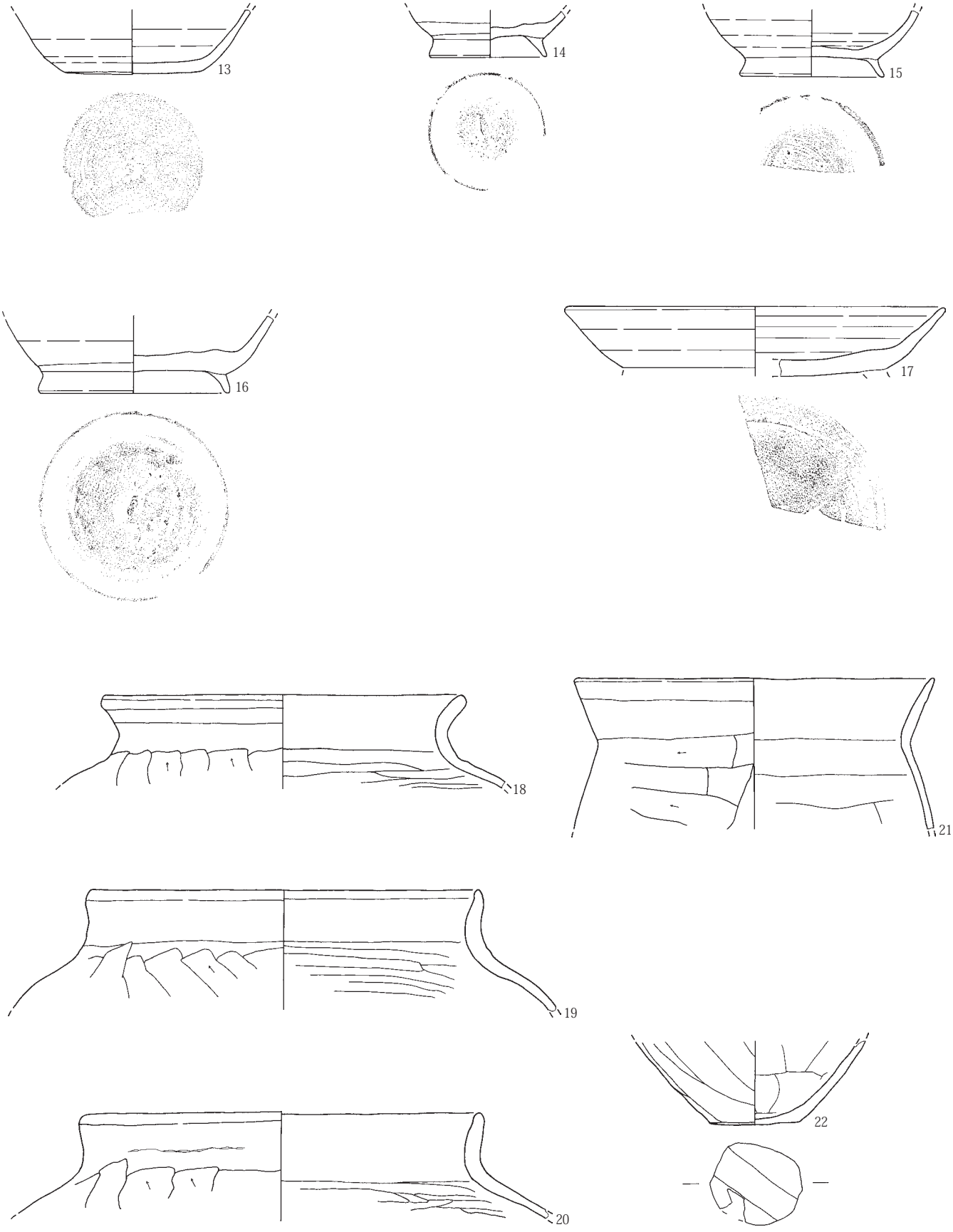
32号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム塊を多量、焼土塊～粗粒をやや多量含む。
３．焼土塊を主体とし、ローム塊を多量含む。。
４．灰層。ローム塊、焼土塊～粗粒を少量含む。
５．ローム塊を主体とし、As-YPをやや多量含む。
６．ローム塊を主体とし、焼土塊をやや多量含む。
７．ローム塊を主体とし、As-YPを少量、焼土塊をやや多量含む。
８．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊、焼土塊を多量含む。

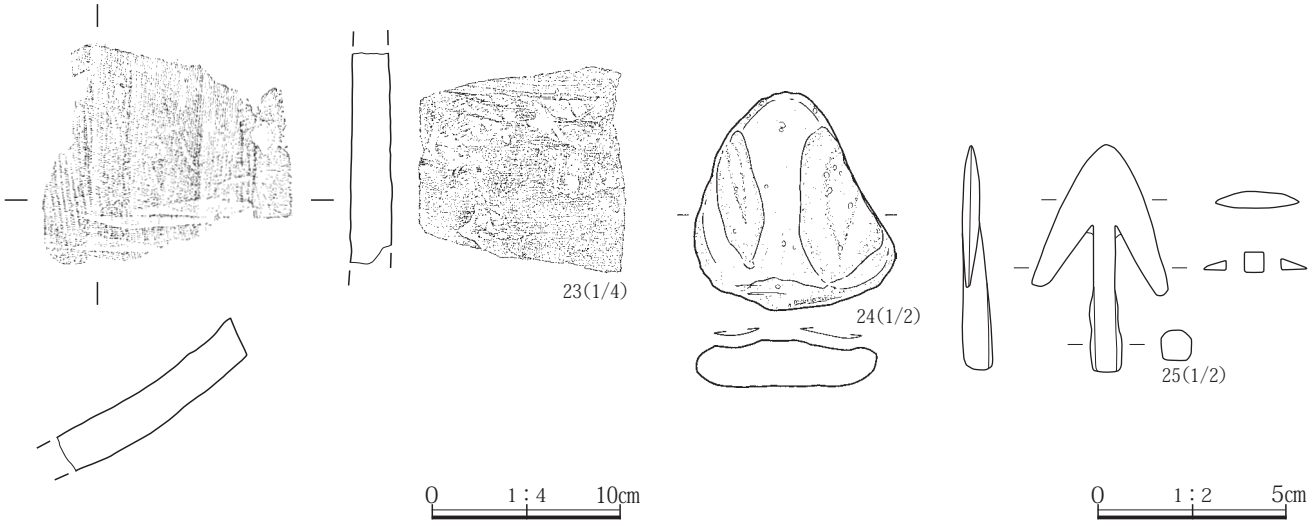




第102図　32号竪穴建物カマドと出土遺物（１）



第103図　32号竪穴建物出土遺物（２）



第104図　32号竪穴建物出土遺物（３）

0.82×0.30mである。形状はいずれも楕円形に近い不整形で、床下土坑１～４は円筒状に深く掘り込まれていた。土層堆積に関する情報がないため、それぞれの土坑の新旧関係や埋没の状況などについては不明であるが、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　須恵器蓋（２）は、カマド横に正位で置かれていた。須恵器蓋（５）と杯（７）は床面直上から、須恵器蓋（６）と椀(15)は掘方調査において、それぞれ出土したものであるが、それ以外の遺物はいずれも埋没土中から出土したものである。須恵器杯のうち２点（９・11)については、９世紀第１四半期の土器であり、混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片73点(455ｇ)、甕･壺類破片603点(4,800ｇ)、須恵器の杯･椀類破片66点(552ｇ)、甕･壺類破片６点(175ｇ)、瓦片６点、磨石１点(108.4ｇ)、敲石１点(231.5ｇ)、剝片３点(73.8ｇ)が出土している。このうち敲石(26)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

44号竪穴建物（第105図、PL.38）

位置　Ｘ＝40,939～40,942、Ｙ＝－80,689～－80,693（Ｂ区南）

形状　不整形

規模　長軸3.25m、短軸(2.55m)

面積　(5.429㎡)

残存壁高　0.17m

方位　Ｎ－72°－Ｅ

重複　なし

埋没土　後世の削平により、調査時には床面が露出した状態であった。そのため埋没土については不明である。

カマド　検出されなかった。ただし、東壁の一部と南壁が調査区外であったことから、カマドはこの未調査部分に存在した可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　Ｐ１は北壁際に位置し、規模は長軸が0.34m、短軸が0.32m、深さが0.48m、形状は楕円形である。どのような機能を有するか断定はできないが、調査区外の南壁際に対になるピットが存在し、本竪穴建物の主柱穴になる可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　後世の削平により詳細は不明である。西壁付近と東壁付近では最大で0.22mの高低差があるが、東壁付近では床面が削平され残存していなかった可能性が考えられる。

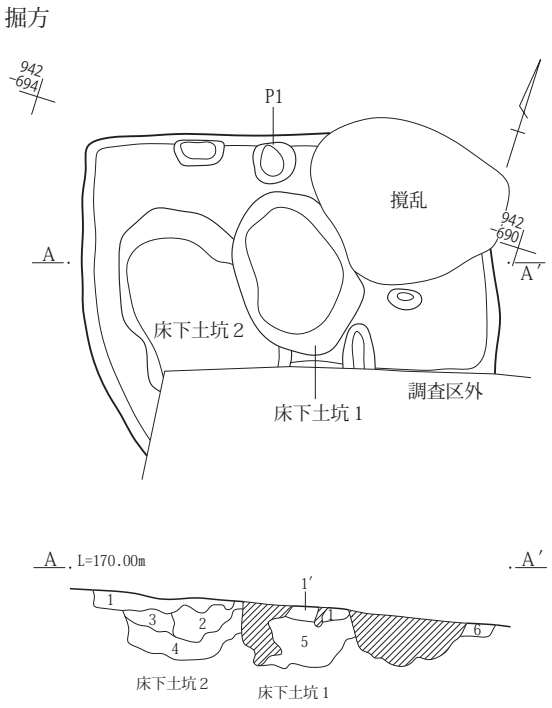
掘方　大部分を撹乱と２基の床下土坑に占められているため詳細は不明であるが、調査できた範囲では床面からの深さは0.10m前後と浅かった。北壁際で検出したＰ１

の規模は、長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.48m、形状は円型に近い不整形である。床面は微量のAs-C、ローム塊、やや多量のAs-YPを含む黒褐色土で、ほぼ均質に貼床されていた。また、部分的に少量の焼土塊を含んでいた。

床下土坑　２基の床下土坑は中央付近とその西側に位置し、土坑の規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.35×(0.89)×0.33m、床下土坑２が(1.42)×(0.98)×0.46mである。形状はいずれも楕円形に近い不整形で、皿状にやや深く掘り込まれていた。どちらの土坑も多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上から貼床されたと考えられる。また､北東隅の壁を壊す土坑状の掘り込みは、調査時には撹乱と判断されたが、本竪穴建物の廃絶後に行われた粘土採取の痕跡である可能性も考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片５点(110ｇ)が出土している。

所見　出土遺物が少ないため時期不明。



44号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量、ローム塊を微量含む。
１′.黒褐色土10YR3/1　１層土に焼土塊を少量含む。
２．ローム塊を主体とする。
３．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量、ローム粗塊を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YP、ローム塊～微粒をやや多量、焼土粒を微量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YP、ローム塊～粒をやや多量含む。
６．ローム塊を主体とし、As-YP、黒褐色土塊をやや多量含む。

0　1：60　2m

第105図　44号竪穴建物掘方

46号竪穴建物（第106～108図、PL.38・298）

位置　Ｘ＝40,949～40,953、Ｙ＝－80,691～－80,697（Ｂ区南）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸5.38m、短軸(3.17m)

面積　(15.542㎡)

残存壁高　0.33m

方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のAs-YP、多量のローム塊～微粒を含む黒褐色土で埋没しており、部分的に被熱したローム粒を含んでいた。埋没土中に多量のローム塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.75m、燃焼部幅は0.50mで、壁外に0.55m燃焼部が伸びる。遺構確認面から床面までが浅く、両袖はほとんど壊されており、袖石も検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

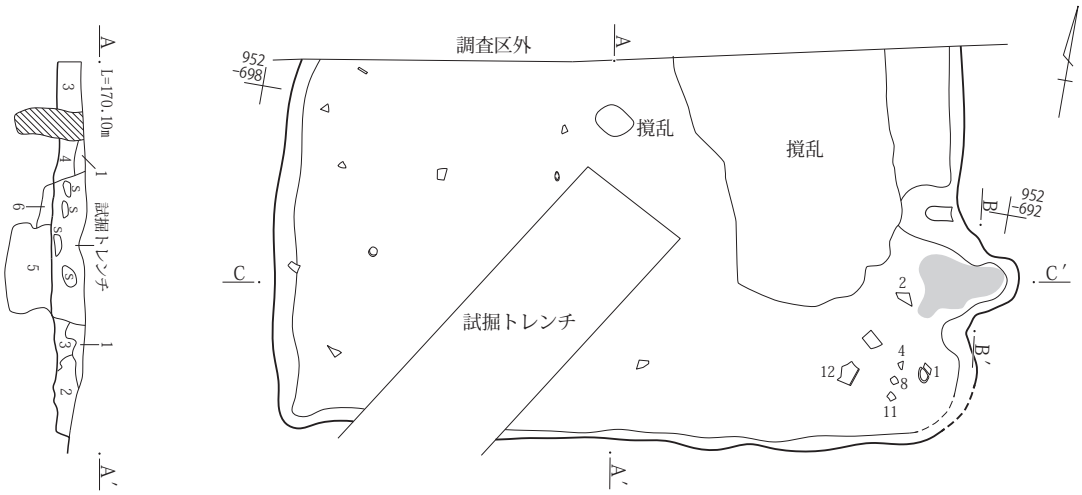
貯蔵穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１が貯蔵穴である可能性が考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

床面　県保護課による試掘トレンチや撹乱により広範囲にわたって壊されていたが、調査できた範囲の床面はほぼ平坦である。

掘方　西半では浅いピット状の窪みを多数検出したが、それ以外の場所では掘方はきわめて浅かった。一方、東半では床下土坑を除く床面からの深さは0.05m前後であった。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.58×0.42×0.18m、Ｐ２が0.30×0.28×0.32mで、形状はいずれも楕円形である。床面は、多量の焼土塊を含むローム塊を主体とする土で、ほぼ均質に貼床されていた。

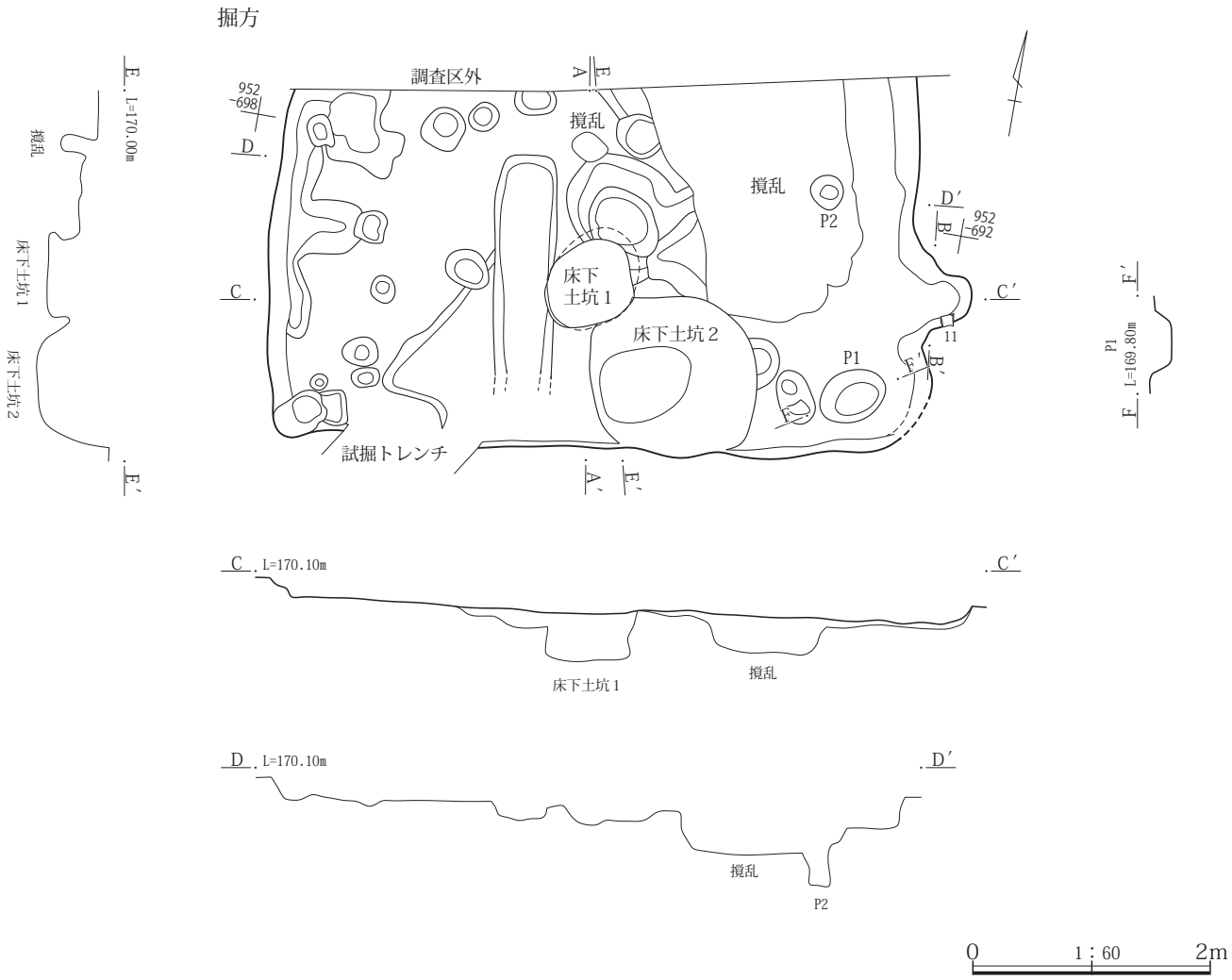
床下土坑　２基の床下土坑は南壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が0.74×0.70×0.56m、床下土坑２が1.38×1.35×0.53mである。形状は床下土

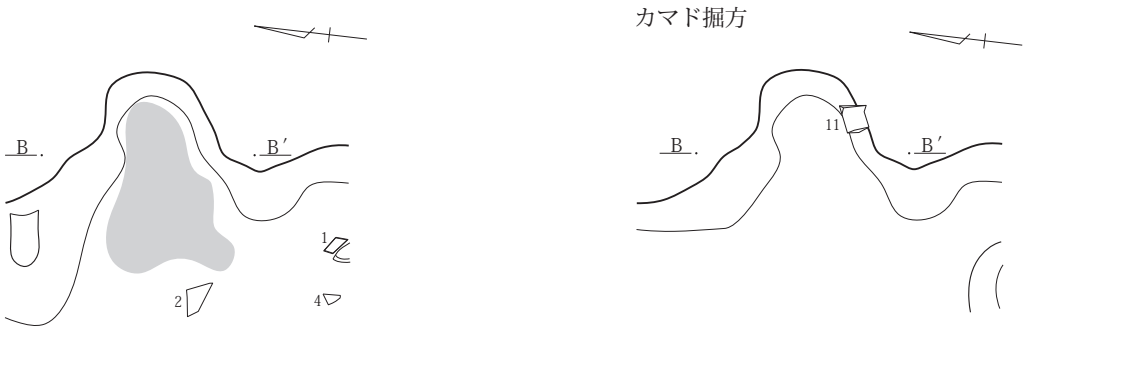


46号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム塊～粗粒をやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量、ローム粒～微粒を多量含む。
4．ローム塊を主体とし、被熱したローム粒を多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-C、焼土粒を微量、ローム塊～細粒を多量含む。
6．ローム塊を主体とし、焼土塊を多量含む。

0　1：60　2m

第106図　46号竪穴建物

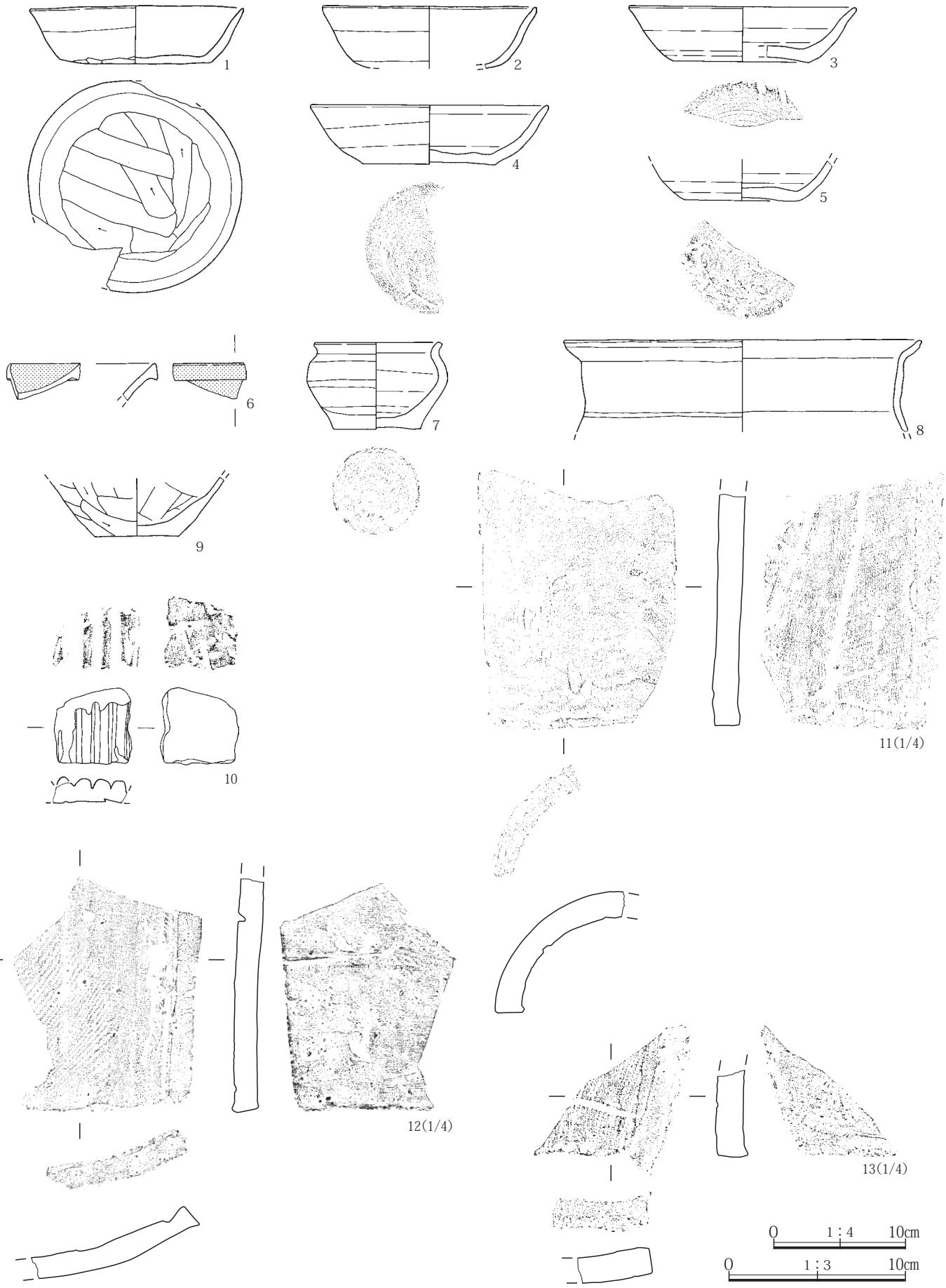




46号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR3/1　被熱したローム塊、焼土塊を少量含む。
２．ローム塊を主体とし、被熱したローム粒を多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム粒～微粒をやや多量、焼土粒を少量含む。
４．ローム塊を主体とし、As-YPを多量、焼土塊を少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　ローム塊、焼土塊を多量含む。

第107図　46号竪穴建物掘方・カマド



第108図 46号竪穴建物出土遺物

坑１が円筒形に近い楕円形、床下土坑２が不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。床下土坑１は、微量のAs-C、焼土粒、多量のローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していたが、貼床を掘り込んでいることがわかる。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。床下土坑２の埋没土については不明であるが、床下土坑１と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　小破片ではあるが、瓦塔が１点(10)出土したことが特筆される。この瓦塔は、本竪穴建物よりも若干古い８世紀末～９世紀中葉のものであると考えられる。南東隅の床面直上を中心に、土師器杯(１)など多くの遺物が出土した。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片15点(140ｇ)、甕・壺類破片94点(458ｇ)、須恵器の杯・椀類破片61点(458ｇ)、甕・壺類破片38点(620ｇ)、瓦片39点、磨製石斧２点(455.7ｇ)、礫１点(18.4ｇ)、二次加工ある剝片１点(28.5ｇ)、剝片１点(41.2ｇ)が出土している。このうち礫(14)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(関山Ⅱ式)の口縁部破片と磨製石斧２点については、遺構外出土遺物として(磨製石斧は写真のみ)掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

51号竪穴建物(第109・110図、PL.38・299)

位置　Ｘ＝40,914～40,918、Ｙ＝－80,687～－80,690(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸(3.50m)、短軸2.71m

面積　(8.820㎡)

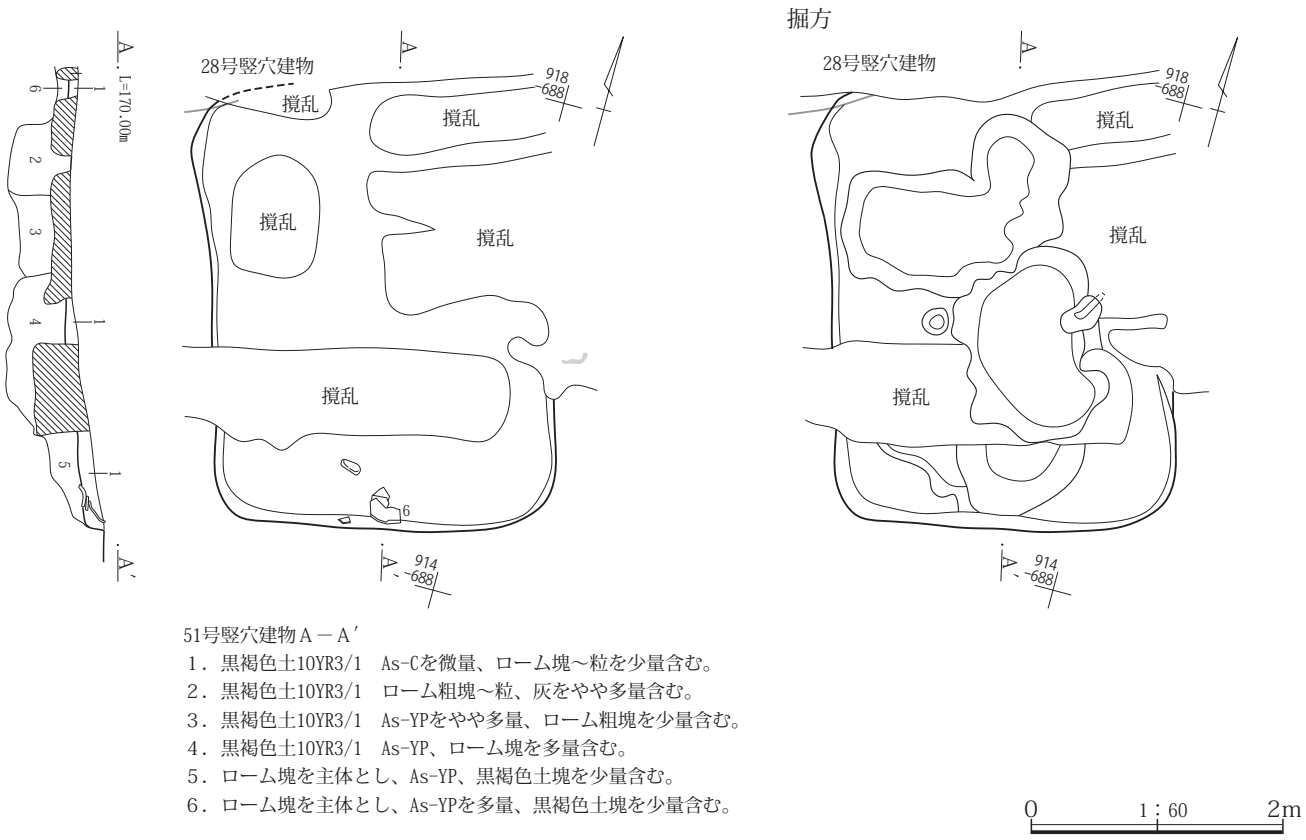
残存壁高　0.31m

方位　Ｎ－70°－Ｅ

重複　28号竪穴建物と重複し、51号竪穴建物が新しい。

埋没土　微量のAs-C、少量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

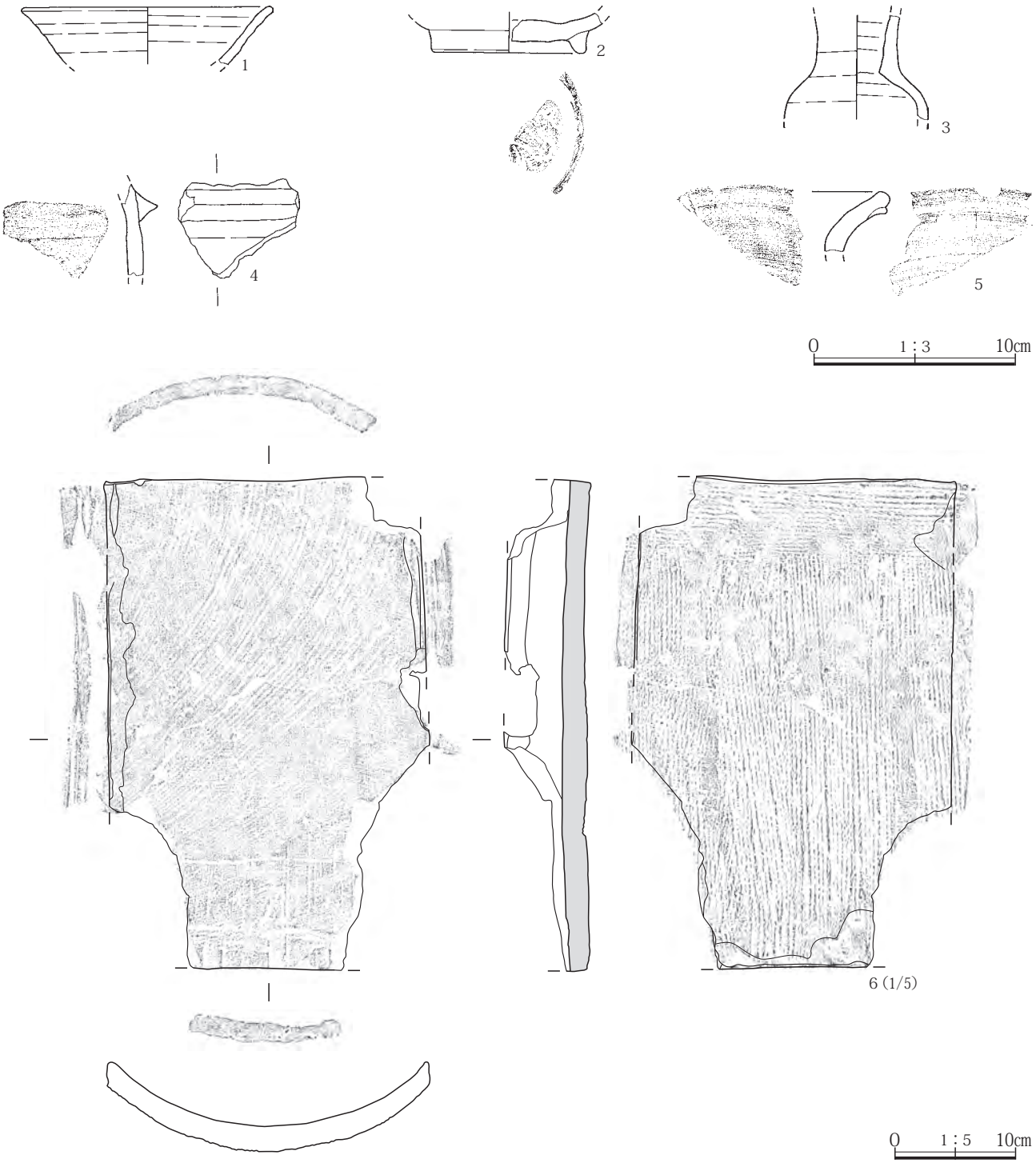
カマド　床面と遺構確認面がほぼ同レベルであったことや、北壁や東壁の大部分が現代の耕作によると思われる撹乱によって壊されていたことから断定はできないが、東壁の中央やや南寄りに焼土塊が認められることから、



51号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊～粒を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　ローム粗塊～粒、灰をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-YPをやや多量、ローム粗塊を少量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム塊を多量含む。
５．ローム塊を主体とし、As-YP、黒褐色土塊を少量含む。
６．ローム塊を主体とし、As-YPを多量、黒褐色土塊を少量含む。

0　1：60　2m

第109図　51号竪穴建物



第110図　51号竪穴建物出土遺物

ここがカマドであった可能性が考えられる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面の大部分が撹乱により壊されていたが、調査できた範囲では床面はほぼ平坦である。

掘方　掘方は中央部付近を中心に不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.10～0.50mであった。床面は多くを撹乱によって壊されていたが、多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土や、ローム塊を主体とする土で貼床されていたと考えられる。

床下土坑　検出されなかった。中央付近が不整形に掘り窪められ粘土を採取した痕跡と考えられるが、明瞭な範囲を示すものではなかったことから床下土坑とはしな

かった。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　平瓦（６）は床面直上から、羽釜（４）は掘方調査において出土したものである。それ以外の遺物はいずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片７点(38ｇ)、甕･壺類破片50点(310ｇ)、須恵器の杯･椀類破片28点(157ｇ)、甕･壺類破片19点(334ｇ)、瓦片９点、削器１点(111.2ｇ)、剥片１点(20.8ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

52号竪穴建物(第111図、PL.38・299)

位置　Ｘ＝40,888～40,890、Ｙ＝－80,690～－80,692（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(1.92m)、短軸(1.35m)

面積　(0.995㎡)

残存壁高　0.29m

方位　Ｎ－66°－Ｅ

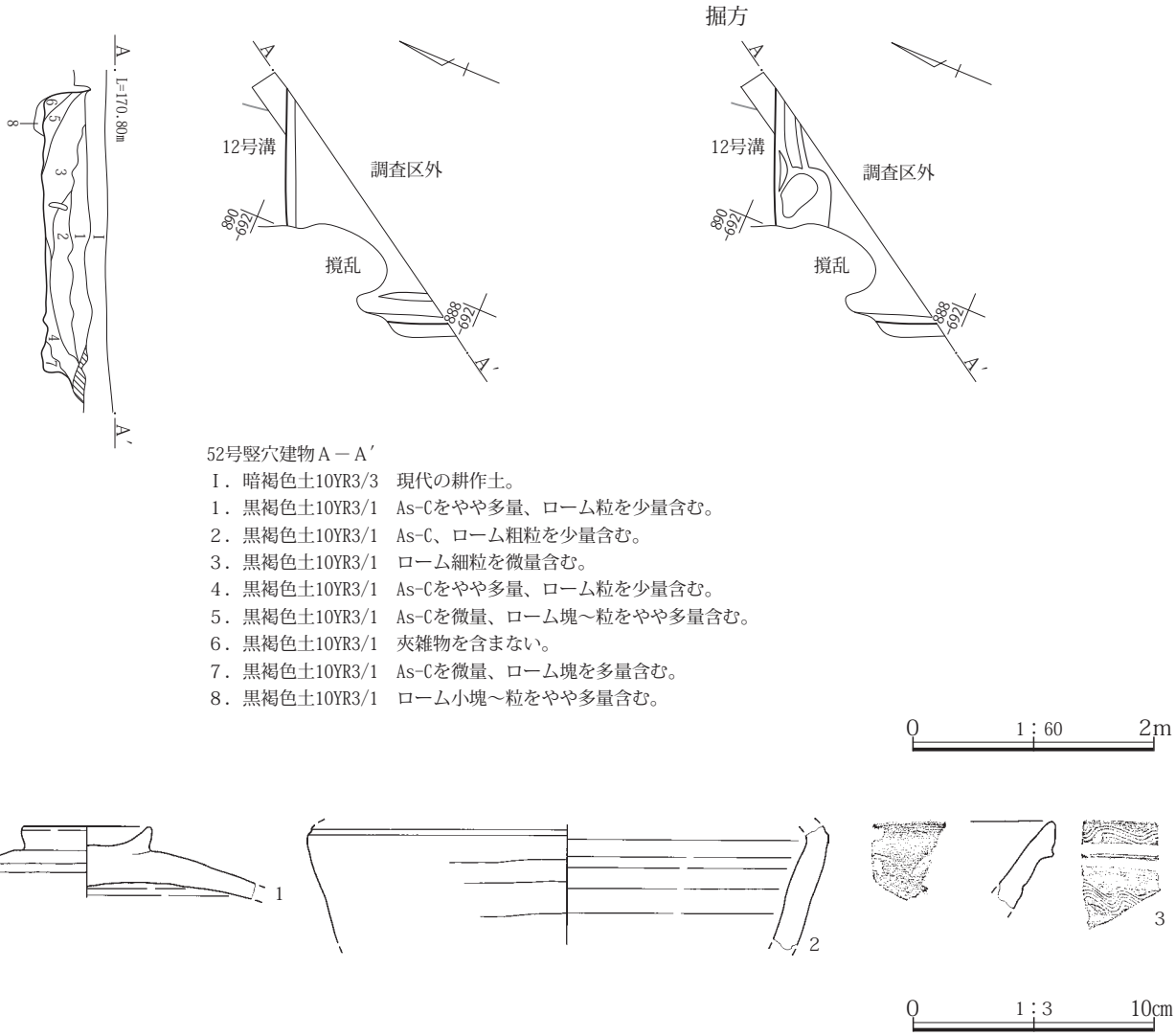
重複　12号溝と重複し、52号竪穴建物が新しい。

埋没土　全体的に少量のAs-C、ローム粗粒～粒を含む黒褐色土で埋没していた。また、壁際ではやや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土の堆積が認められたが、これは壁面の崩落によるものと考えられる。

カマド　検出されなかった。ただし、南東側に続く調査区外に存在していた可能性が高いと考えられる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。



52号竪穴建物Ａ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、ローム粒を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粗粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　ローム細粒を微量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、ローム粒を少量含む。
５．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊～粒をやや多量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
７．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、ローム塊を多量含む。
８．黒褐色土10YR3/1　ローム小塊～粒をやや多量含む。

第111図　52号竪穴建物と出土遺物

壁際溝　西壁から、幅0.25m、深さ0.03～0.06mの壁際溝を検出した。多量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　調査できた範囲では床面はほぼ平坦である。

掘方　基本的に掘方は存在しなかったが、北壁際で壁際溝のような掘り込みを検出した。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　ここに掲載した遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片４点(19ｇ)、甕・壺類破片16点(71ｇ)、須恵器の杯・椀類破片４点(27ｇ)、甕・壺類破片６点(82ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

54号竪穴建物(第112～114図、PL.38～40・299)

位置　Ｘ＝40,898～40,901、Ｙ＝－80,723～－80,726(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸3.42m、短軸2.57m

面積　(5.120㎡)

残存壁高　0.66m

方位　Ｎ－72°－Ｅ

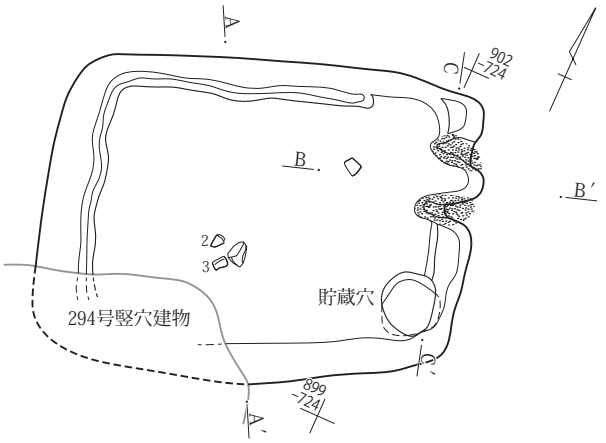
重複　294号竪穴建物、552号土坑と重複し、いずれも54号竪穴建物が新しい。

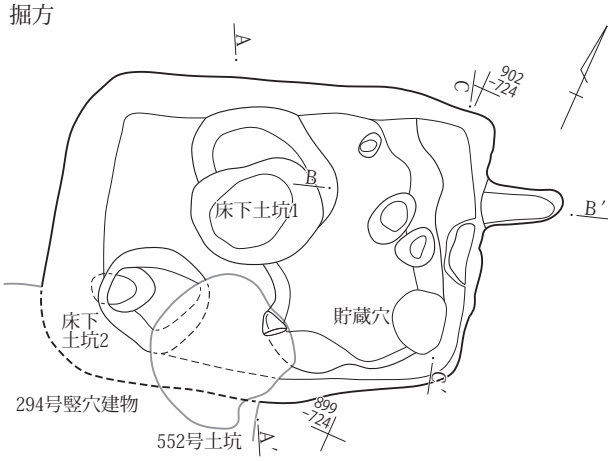
埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

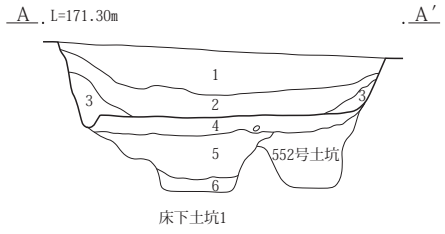
カマド　東壁の北東隅寄りに位置する。残存長は0.50m、燃焼部幅は0.35mで、壁外に0.16m燃焼部が伸びる。両袖は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖とも比較的よく残存していたにもかかわらず袖石は検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.50m、短軸0.43







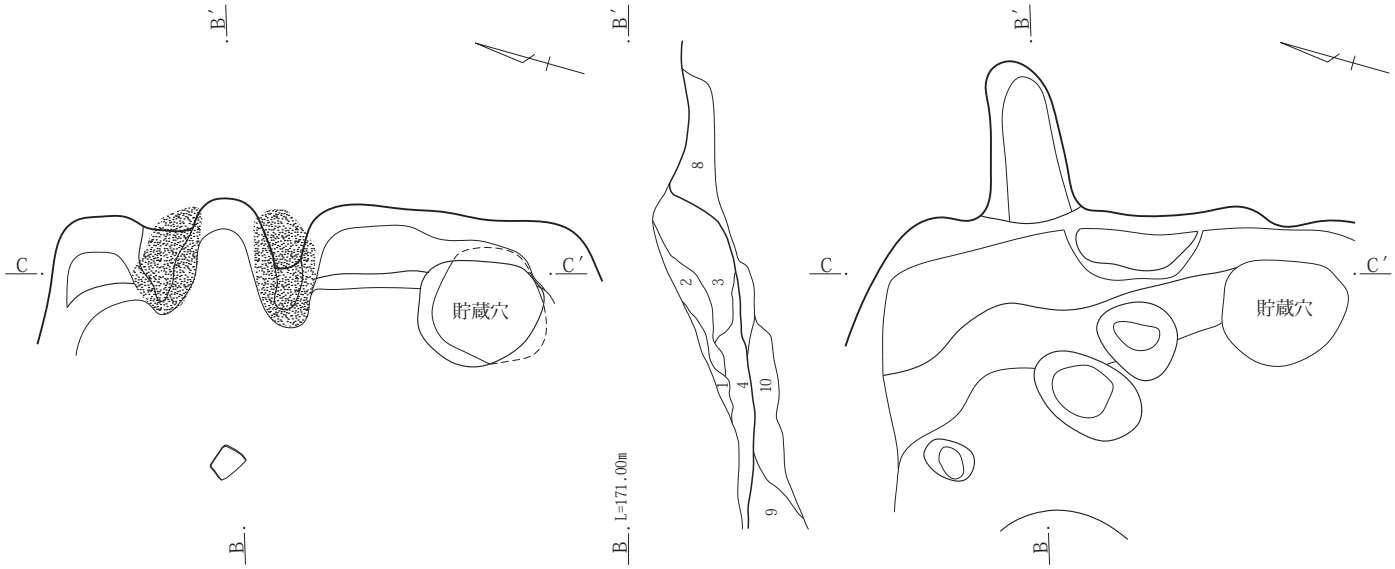
54号竪穴建物Ａ－Ａ′

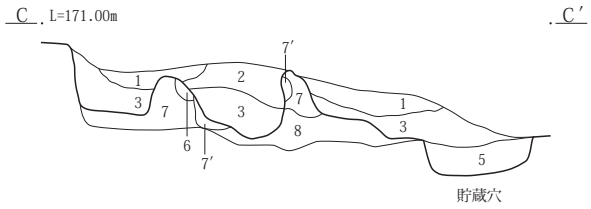
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
4．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粗粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第112図　54号竪穴建物

カマド掘方





54号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．褐色土7.5YR4/4　ローム塊～粒をやや多量、焼土塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．褐色土7.5YR4/4　ローム粒を少量、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．褐色土7.5YR4/3　ローム小塊、焼土粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
7．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊～小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
7′.明褐色土7.5YR5/6　７層土が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まりやや強い。
8．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
9．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
10. 黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：30　1m

第113図　54号竪穴建物カマド

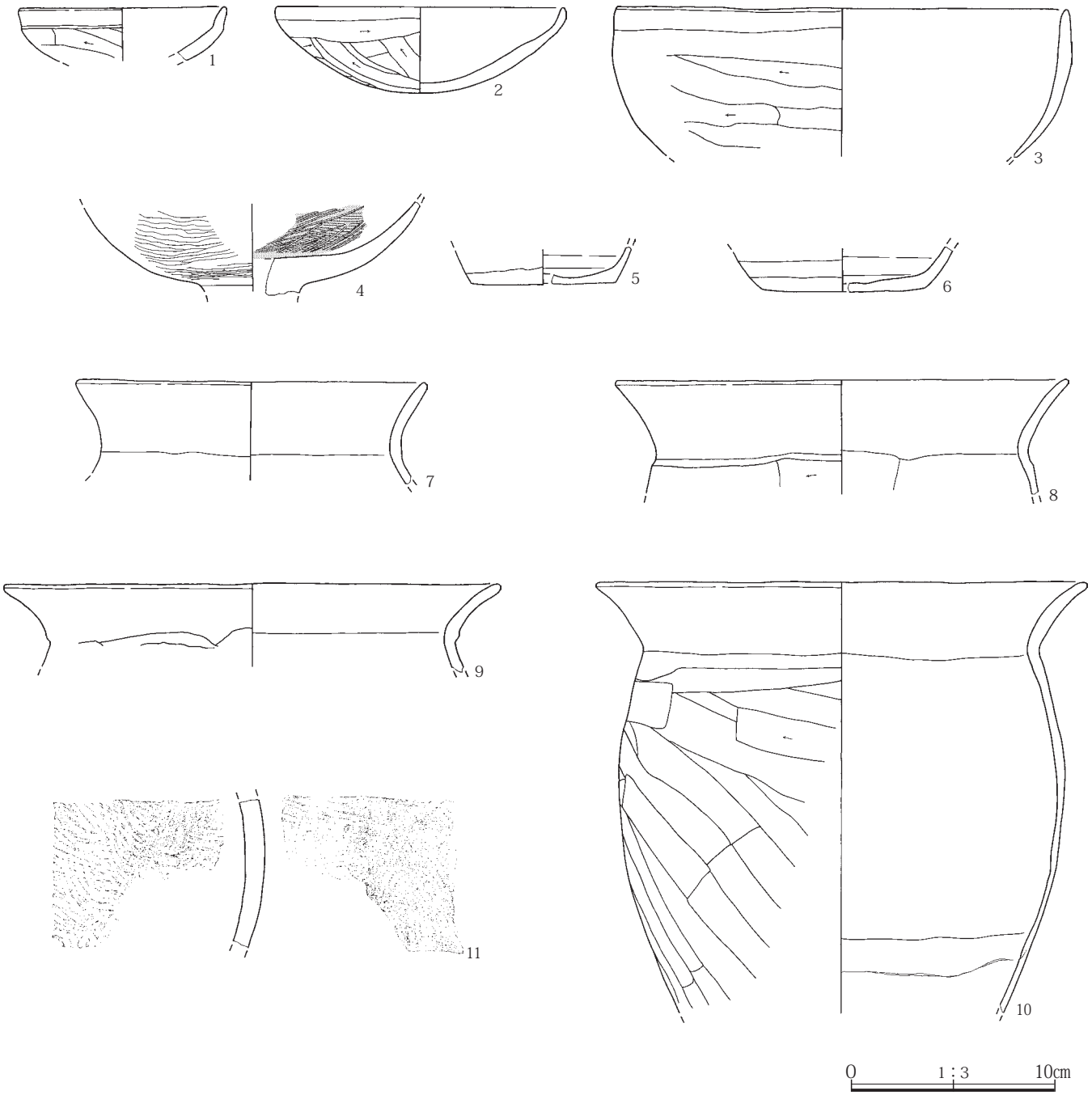
m、深さ0.39m、形状は円形に近い不整形である。少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。

壁際溝　北壁から西壁にかけて、幅0.25～0.40m、深さ0.05～0.16mの壁際溝を検出した。微量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。また、東壁際にはテラス状の段差が認められるが、ここは棚状施設としてと使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.11mである。

掘方　掘方は東半がやや深く、床面からの深さは概ね0.25～0.30mであったのに対し、西半ではやや浅く、床面からの深さは概ね0.15～0.20mであった。床面はやや多量のAs-YPとローム小塊～粒を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　２基の床下土坑は中央付近と南西隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.25×1.18×0.52m、床下土坑２が(0.85)×0.77×0.68mである。形状はいずれも円形に近い不整形で、床下土坑１は円筒状にやや深く掘り込まれていた。床下土坑２は浅い皿状の底部が、さらに深いピット状に掘り込まれていた。床



第114図　54号竪穴建物出土遺物

下土坑１は、多量のAs-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑２の埋没土については不明であるが、床下土坑１と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器甕は少なくとも４個体（７～10）が確認されており、このうち８・９はカマド内から出土したものである。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片60点（335ｇ）、甕・壺類破片73点（730ｇ）、須恵器の杯・椀類破片５点（31ｇ）、甕・壺類破片７点（206ｇ）、石匙１点（22.2ｇ）、削器１点（70.3ｇ）、剝片２点（18.5ｇ）が出土している。このうち縄文土器（諸磯ａ式）の胴部破片、石匙については、遺構外出土遺物として（石匙は写真のみ）掲載した。

所見　出土遺物から８世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

264号竪穴建物（第115～117図、PL.40～43・299）

位置　Ｘ＝40,831～40,835、Ｙ＝－80,760～－80,764（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.61m、短軸3.03m

面積　6.876㎡

残存壁高　0.59m

方位　Ｎ－71°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-C、ローム粗塊～小塊、微量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.26m、燃焼部幅は0.31mで、壁外に0.68m燃焼部が伸びる。両袖と崩落した天井部分は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上にはテラス状の段差が認められた。ここには多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.22mである。袖石は検出されなかったが、向かって右側の側壁には３点の礫が残存していた。これは側壁の補強を目的としたものであると考えられる。これらの礫のうち最大のものは、長さ0.26m、幅0.17m、厚さ0.11mである。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられ、掘方調査では支脚を据えた痕跡であると考えられる浅い皿状の窪みを２か所検出した。さらに掘方調査では、焚口の下部が長軸0.86m、短軸0.52m、深さ0.23mの規模で掘り窪められていることが確認できた。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

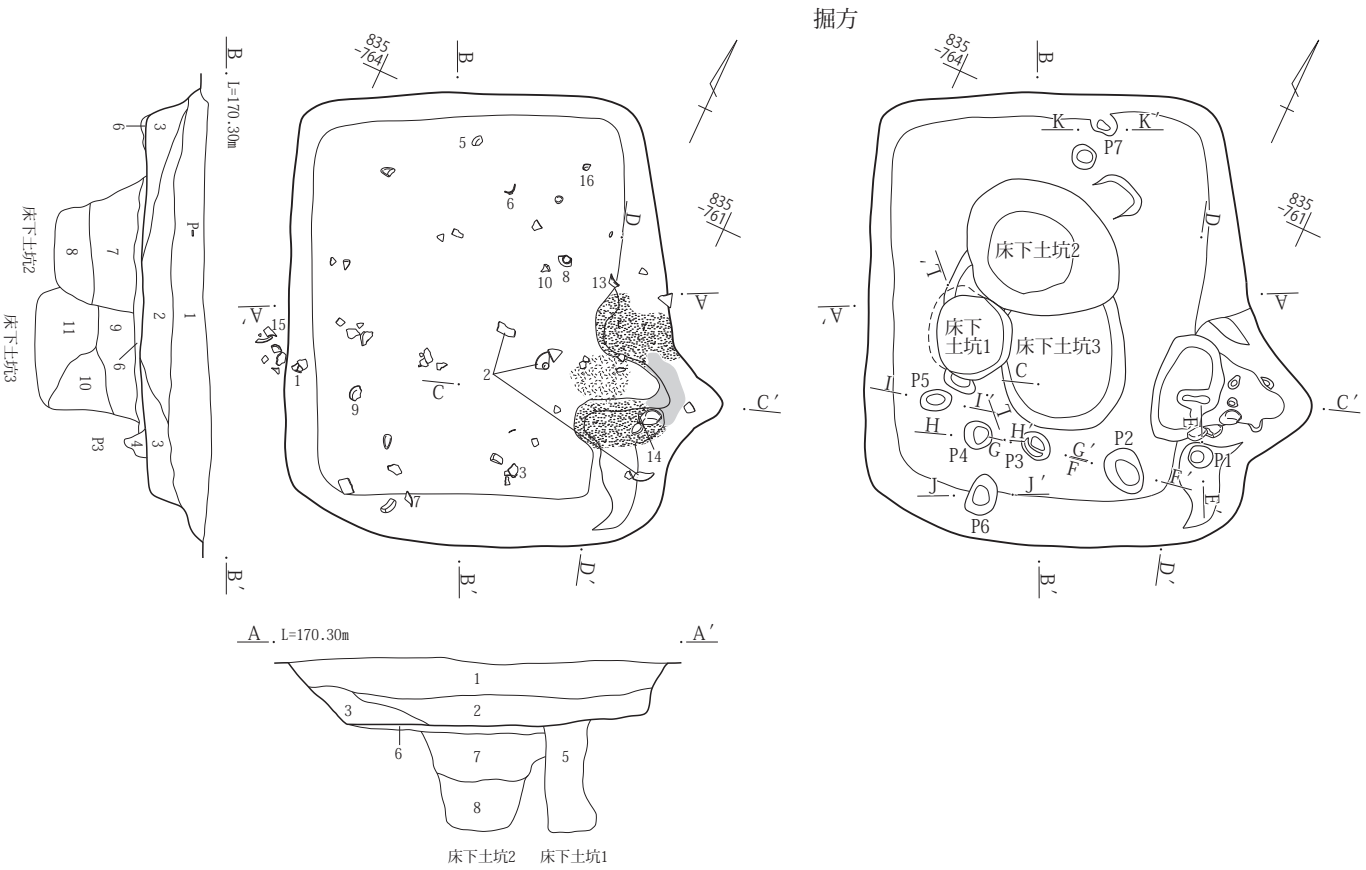
壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、壁際を除く中央付近の全体が硬化していた。

掘方　掘方は焚口の下部と床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであったが、壁際では掘方が存在しない箇所も見られた。ただし、中央付近には床下土坑１～３があり、深く掘り込まれていた。また、南壁際を中心に７基のピットを検出した。それぞれのピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.19×0.17×0.30m、Ｐ２が0.38×0.28×0.35m、Ｐ３が0.23×0.20×0.15m、Ｐ４が0.22×0.21×0.14m、Ｐ５が0.25×0.17×0.22m、Ｐ６が0.32×0.23×0.21m、Ｐ７が0.20×0.17×0.11m、形状はＰ７が不整形である以外、すべて楕円形である。このうちＰ３については、土層断面の観察から貼床を掘り抜いていることがわかるので、床面調査で見落とした入口の梯子穴である可能性が考えられる。床面は少量のローム小塊・粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

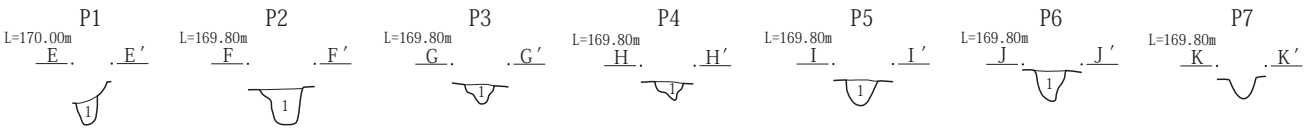
床下土坑　３基の床下土坑は、いずれも中央付近に位置し、規模（長軸×短軸×深さ）は、床下土坑１が0.66×0.61×0.90m、床下土坑２が1.30×1.05×0.72mで、床下土坑３が（1.18）×0.98×0.83mである。形状はいずれも楕円形または楕円形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、床下土坑１については底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑１は、やや多量のAs-C、多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑２の上層は、少量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土、下層はやや多量のAs-YP、ローム粗塊、黒褐色土塊を含む灰褐色土で埋没していた。床下土坑３の上層は、やや多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土、下層は非常に多量のAs-YPを含むにぶい黄褐色土、または多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。これら３基の床下土坑のうち、床下土坑１は貼床を掘り抜いていることから、本竪穴建物が廃絶された直後に粘土採取を目的に掘られた可能性が考えられる。一方、床下土坑２・３は人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられるが、床下土坑２は床下土坑３の埋没後に掘られていることから、これら２基についても時間差が想定される。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器甕は少なくとも３個体（13～15）が確認されており、このうち14はカマド内から出土したものである。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片33点（160ｇ）、甕・壺類破片710点（2,763ｇ）、須恵器の杯・椀類破片407点



264号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを多量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粗塊～小塊をやや多量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊をやや多量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊、ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
７．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム粗塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．灰褐色土10YR4/2　As-YP、ローム粗塊、黒褐色土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
９．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
10．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YPを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。
11．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム粗塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



264号竪穴建物Ｐ１Ｅ－Ｅ′

１．暗褐色土10YR3/3　ローム粒､砂粒を少量含む。粘性､締まりやや弱い。

264号竪穴建物Ｐ２Ｆ－Ｆ′

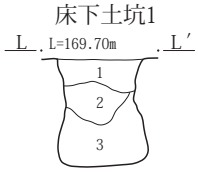
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

264号竪穴建物Ｐ３Ｇ－Ｇ′・Ｐ４Ｈ－Ｈ′・Ｐ５Ｉ－Ｉ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

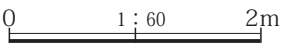
264号竪穴建物Ｐ６Ｊ－Ｊ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

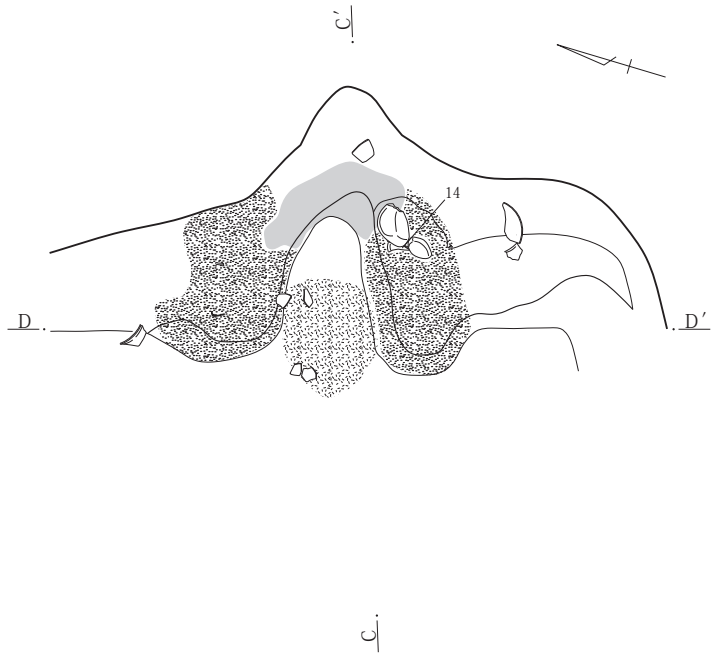


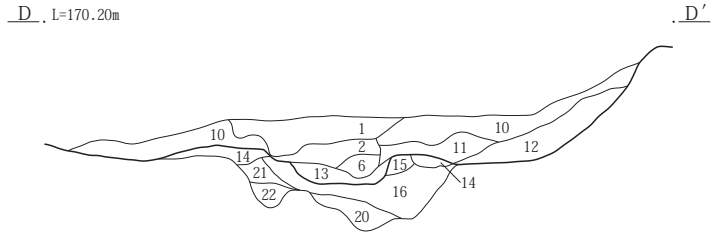
264号竪穴建物床下土坑１Ｌ－Ｌ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まり弱い。
３．暗褐色土10YR3/3　褐色土小塊を少量含む。粘性、締まり弱い。

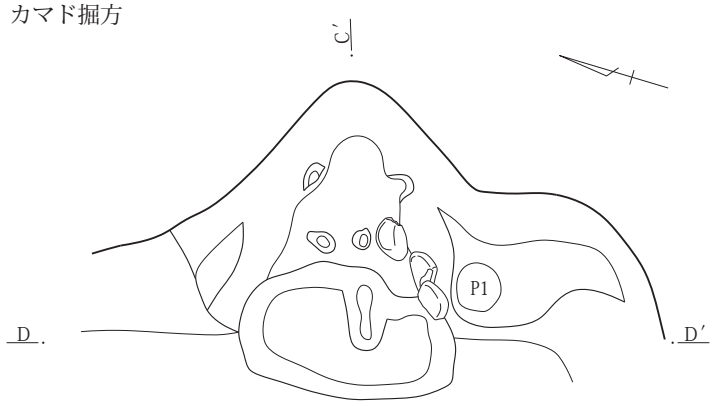


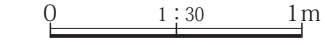
第115図　264号竪穴建物





カマド掘方

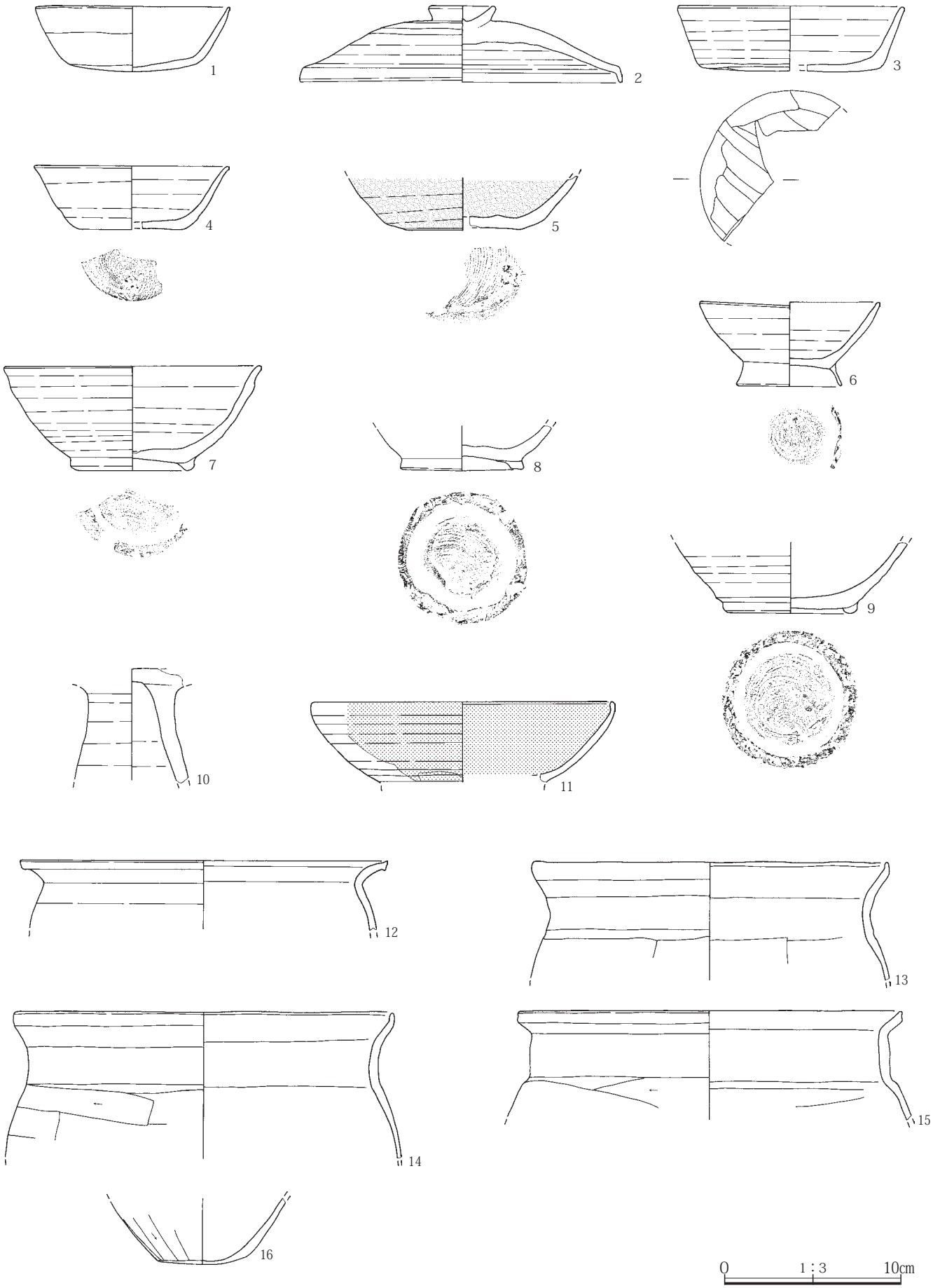




264号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を微量、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、褐色土小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
8．暗褐色土10YR3/4　ローム塊～小塊を多量、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
9．赤褐色土5YR4/6　焼土塊～粒を主体とする。粘性強い。締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/4　ローム粗塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
11．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
12．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
13．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土粒を少量、灰を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
14．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
15．褐色土7.5YR4/4　焼土塊～小塊、炭化物粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
16．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊～粒、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
17．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒、焼土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
18．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
19．黒褐色土10YR3/2　ローム塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
20．明褐色土7.5YR5/6　焼土化したローム塊～粒を主体とする。粘性弱い。締まり強い。
21．褐色土10YR4/6　焼土塊、焼土粒、炭化物粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
22．褐色土7.5YR4/4　焼土粗塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

第116図　264号竪穴建物カマド



第117図　264号竪穴建物出土遺物

(2,900ｇ)、甕・壺類破片142点(2,400ｇ)、瓦片６点、磨製石斧１点(4.7ｇ)、磨石１点(145.8ｇ)、敲石１点(413.4ｇ)、剥片１点(0.1ｇ)が出土している。このうち縄文土器(加曽利Ｅ３式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

265号竪穴建物(第118～123図、PL.44～46・300・301)

位置　Ｘ＝40,822～40,827、Ｙ＝－80,761～－80,765(Ｃ・Ｄ区)

形状　不整形

規模　長軸4.68m、短軸3.66m

面積　11.445㎡

残存壁高　0.52m

方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層はやや多量のAs-C、微量のローム小塊、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。中位に多量のローム塊を含む層(３層)が見られるが、この部分は人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は1.11m、燃焼部幅は0.25mで、壁外に0.86m燃焼部・煙道が伸びる。両袖と側壁は、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。全景写真では煙道の先端に甕が逆位で置かれているように見えるが、これは煙突の補強が目的である可能性が考えられる。向かって左側の袖石はやや内側に傾いて検出されたが、長さ0.28m、幅0.23m、厚さ0.19mである。向かって右側の袖からは礫が２点出土しており、手前が長さ0.17m、幅0.10m、厚さ0.07m、奥が長さ0.20m、幅0.18m、厚さ0.08mである。さらにカマド周辺には多数の礫が散乱している状況が確認できたが、これらは天井架構材の一部であると考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。なお、全景写真を見ると、本カマド横の壁上には、多量の粘土塊が認められる。この部分に関しては調査が行われていないので断言はできないが、本竪穴建物の棚状施設であると考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.38mである。

柱穴　検出されなかった。

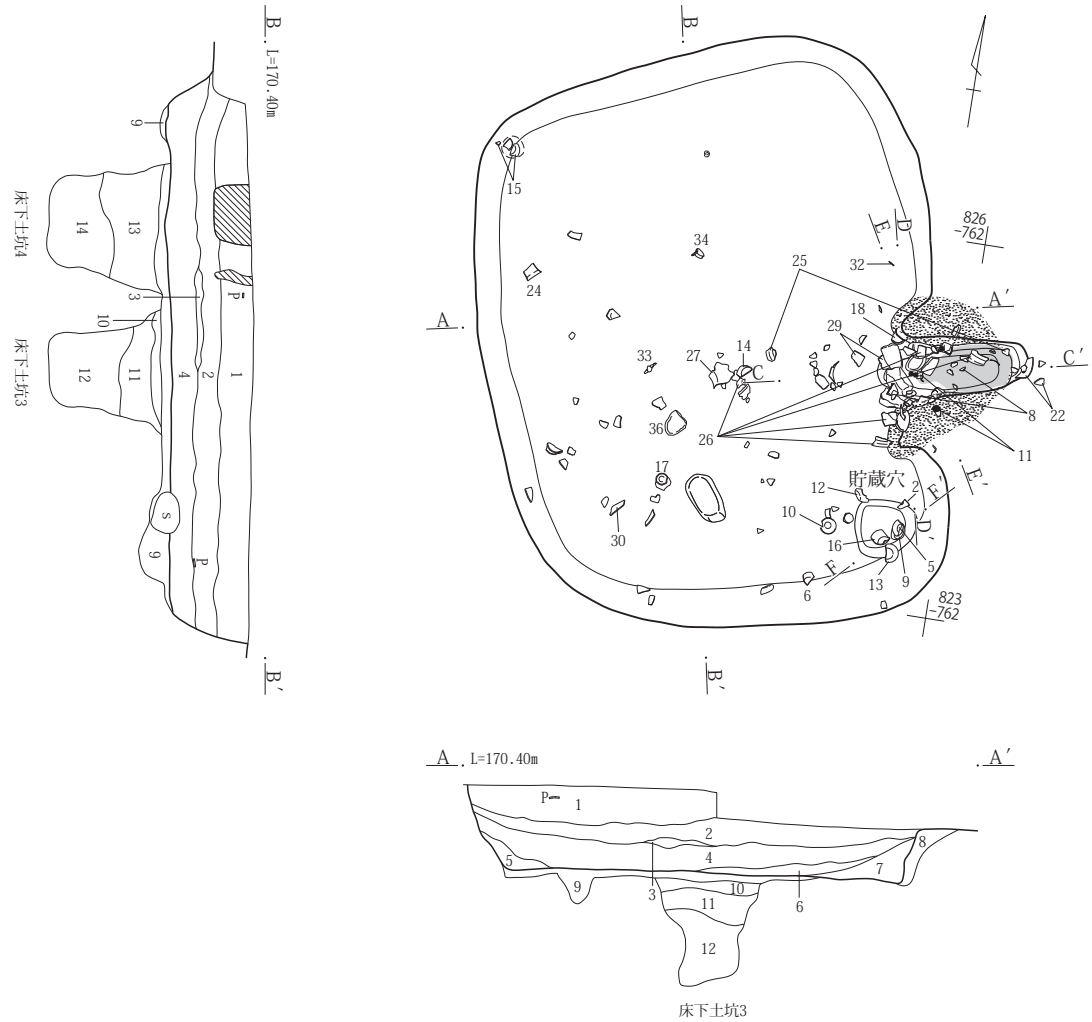
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.24m、形状は隅丸正方形に近い不整形である。やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　床面調査では確認できなかったが、掘方調査において幅0.35～0.60m、深さ0.01～0.08mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していたが、掘方の埋没土と区別がつかなかったことから、貼床構築時に同時に埋められた可能性が高いと考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであったが、一部で掘方が存在しない箇所も見られた。ただし、南壁際は帯状にやや深く掘り込まれており、床面からの深さは最大で0.24mであった。また、東壁際と西壁際で３基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.31×0.31×0.13m、Ｐ２が0.33×0.30×0.17m、Ｐ３が0.32×0.30×0.23m、形状はいずれも円形である。床面は少量のローム小塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

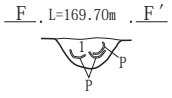
床下土坑　５基の床下土坑は、それぞれ中央付近と四隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.26×0.87×0.76m、床下土坑２が0.72×0.70×0.17m、床下土坑３が1.05×1.04×0.97m、床下土坑４が1.08×1.05×0.92m、床下土坑５が1.12×0.85×0.80mである。形状はいずれも楕円形または円形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。また、床下土坑５については底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑１の上層は、多量のローム粗塊～塊を含む黒褐色土、下層は多量のAs-YP、少量のローム粗塊～小塊を含



265号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム小塊、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
９．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
11．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊を多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
12．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粒を多量含む。粘性、締まり弱い。
13．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
14．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

貯蔵穴

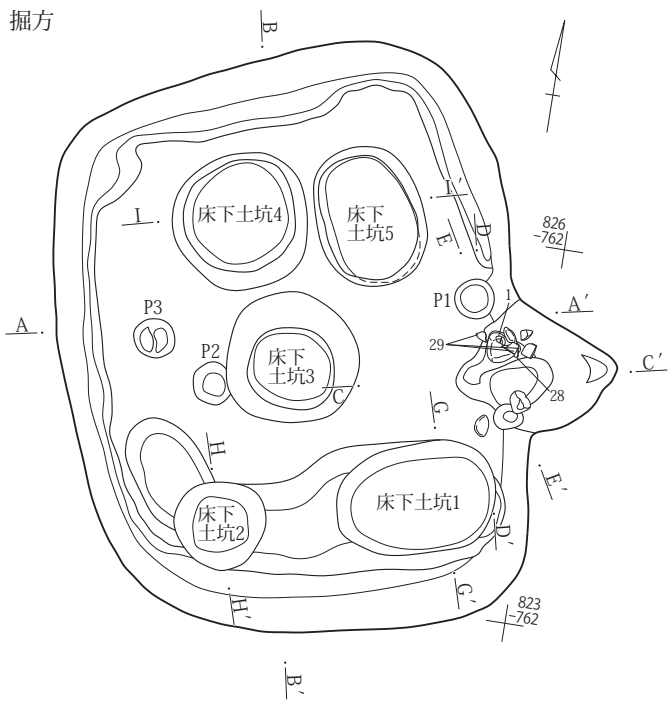


265号竪穴建物貯蔵穴Ｆ－Ｆ′

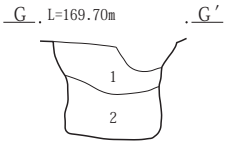
１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第118図　265号竪穴建物



床下土坑1

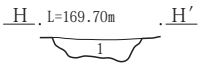


265号竪穴建物床下土坑１Ｇ－Ｇ′

1．黒褐色土10YR3/2　ローム粗塊～塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

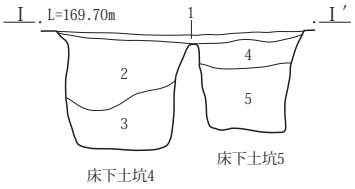
2．黒褐色土10YR2/3　As-YPを多量、ローム粗塊～小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

床下土坑2



265号竪穴建物床下土坑２Ｈ－Ｈ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊をやや少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。



265号竪穴建物床下土坑４・５Ｉ－Ｉ′

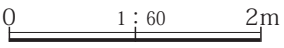
1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。

2．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊を多量含む。
粘性、締まりやや強い。

3．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

4．黒褐色土10YR2/3　As-YPを多量、ローム粗塊～小塊をやや多量含む。
粘性、締まりやや強い。

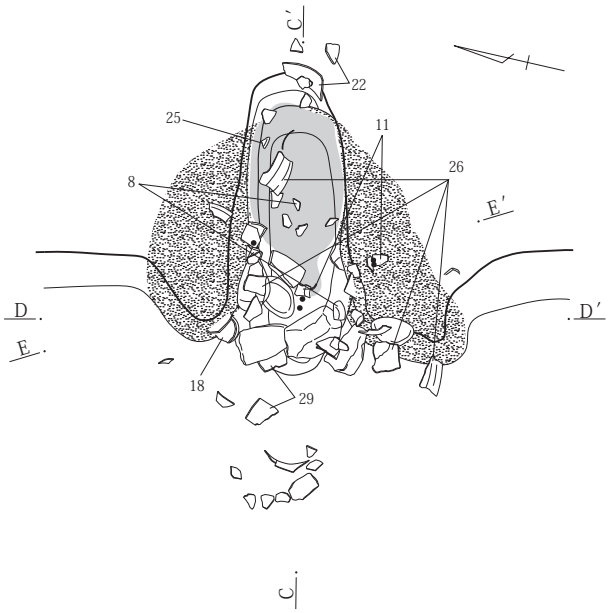
5．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性弱い。
締まりやや弱い。



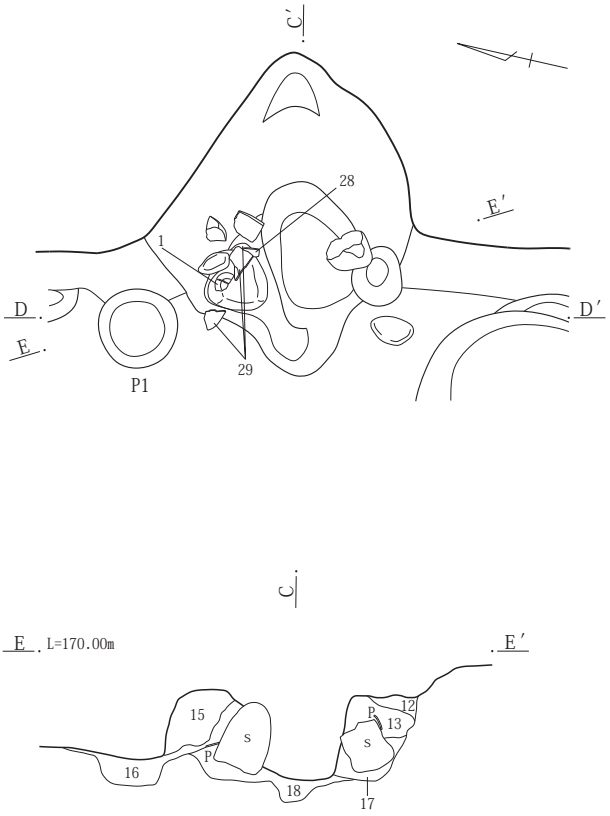
第119図　265号竪穴建物掘方

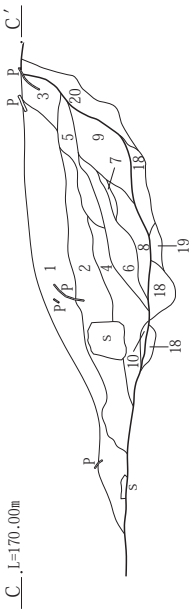
む黒褐色土で埋没していた。床下土坑２は、やや少量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑３の上層は、多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土、下層は多量のAs-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑４の上層は、多量のAs-YP、ローム塊を含む黒褐色土、下層は非常に多量のAs-YP、ローム粗塊を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑５の上層は、多量のAs-YP、やや多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土、下層は多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。これらの床下土坑はいずれも重複していないことから、新旧関係が存在するのかについては不明である。床下土坑３～５は、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑１・２については、貼床の存在が明瞭ではなかったものの、同様の土で人為的に埋められたと考えられる。ただし、床下土坑２は浅く、底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　「有」と書かれた須恵器杯(14)が出土したことが特筆される。カマド内からは、土師器甑・甕(22・26・28・29)や須恵器杯(１・８・11)・椀(18)など多くの土器が出土した。また、貯蔵穴内からは、須恵器蓋(２)・杯(５・９・13)・椀(16)などが出土しているが、このうち５と９は重なった状態で置かれていた。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片95点(334ｇ)、甕・壺類破片1,494点(7,057ｇ)、須恵器の杯・



カマド掘方



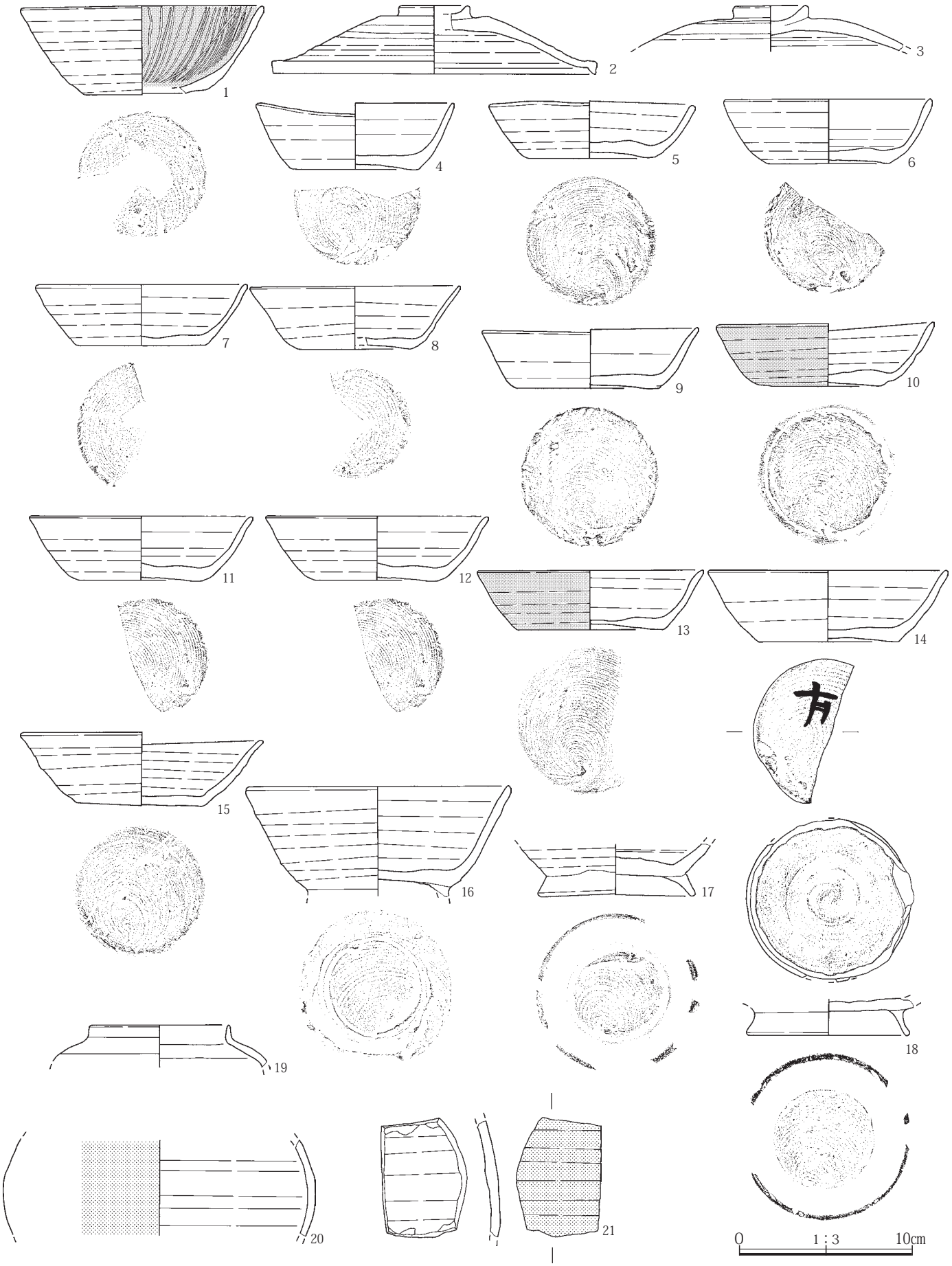


265号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′

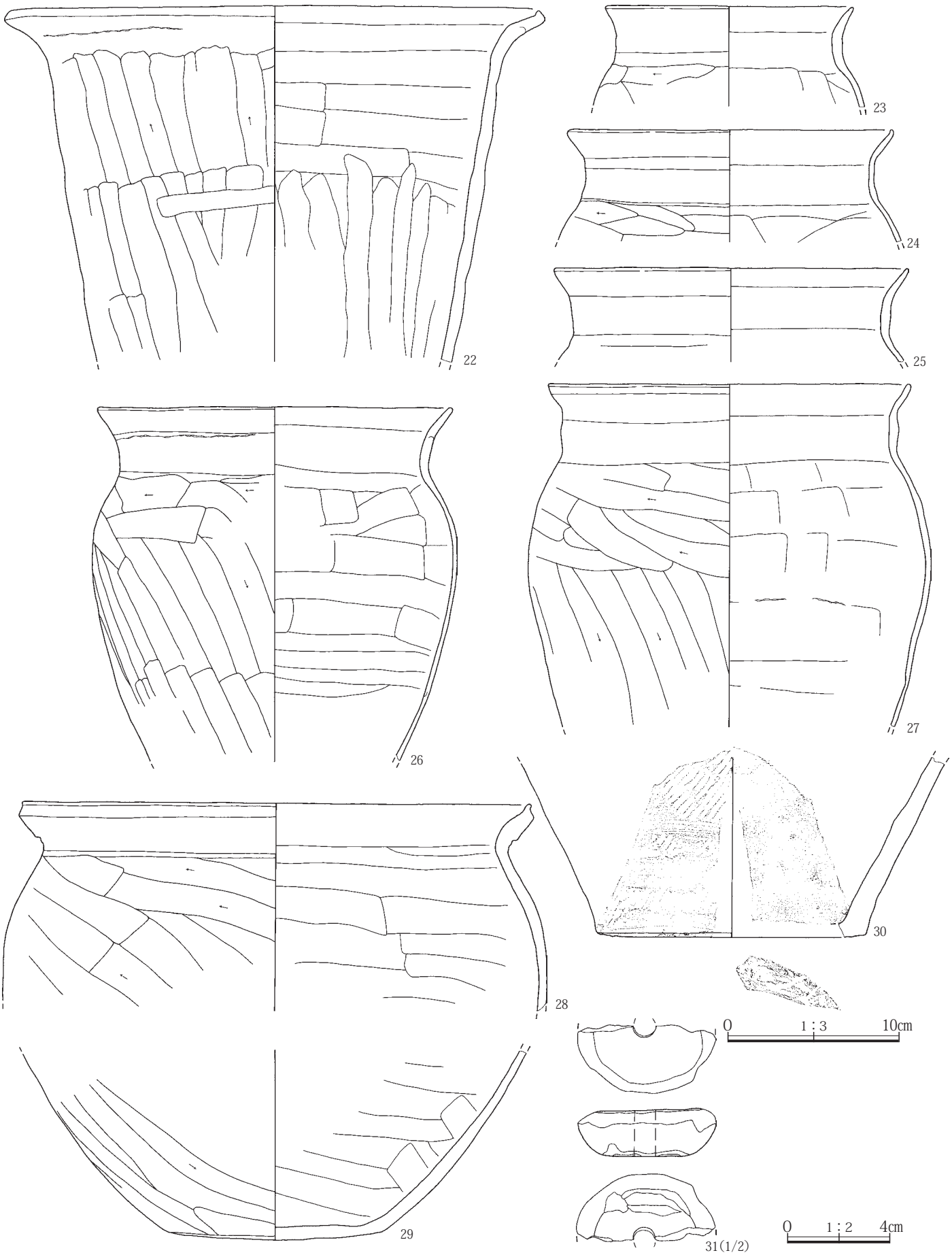
１．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊～小塊をやや多量､焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/4　As-C､ローム粒､焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
４．褐色土7.5YR4/4　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．褐色土7.5YR4/3　ローム粒を少量、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．褐色土7.5YR4/4　ローム塊、焼土塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
７．暗褐色土10YR3/3　灰を多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
８．褐色土7.5YR4/3　ローム塊、焼土小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
９．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊、焼土小塊、灰を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/3　ローム粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
13．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
14．褐色土7.5YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
15．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
16．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
17．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム粒を非常に多量、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
18．褐色土7.5YR4/4　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
19．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
20．暗褐色土10YR3/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

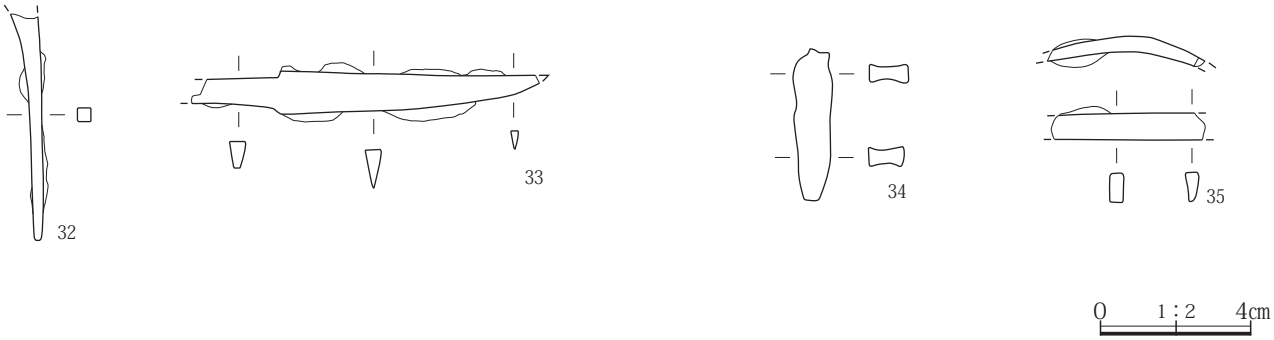
第120図　265号竪穴建物カマド



第121図　265号竪穴建物出土遺物（１）



第122図　265号竪穴建物出土遺物（２）



第123図　265号竪穴建物出土遺物（３）

椀類破片516点(3,898ｇ)、甕･壺類破片109点(2,000ｇ)、敲石１点(712.4ｇ)、剥片２点(27.9ｇ)が出土している。このうち敲石(36)については、写真のみを掲載した。

所見　前述のように、本竪穴建物のカマドの南側にはやや浅い位置に多量の粘土塊が認められ、これは棚状施設であると考えられる。ただし、全景写真を見るとカマドの構築材のようにも見えることから、本竪穴建物と重複して浅い竪穴建物が存在していた可能性も考えられる。出土遺物から９世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

266号竪穴建物(第124～130図、PL.46～48・301・302)

位置　Ｘ＝40,822～40,827、Ｙ＝－80,768～－80,773（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸4.85m、短軸(4.64m)

面積　11.936㎡

残存壁高　0.69m

方位　Ｎ－90°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、微量のローム小塊～粒、焼土塊を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。また、本竪穴建物は南半が調査区外であったことから断定はできないものの、非常に多量のローム粗塊～小塊を含む４層の堆積状況から、本竪穴建物の埋没過程において、南壁付近の床面を掘り抜き粘土採掘が行われた可能性が考えられる。

カマド　本竪穴建物の南半は調査区外であったため推測ではあるが、東壁の中央やや南寄りに位置すると考えられる。残存長は1.54m、燃焼部幅は0.46mで、壁外に0.30m燃焼部・煙道が伸びる。両袖と側壁は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、向かって左側の壁上にも粘土塊を主体とする土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。右側は調査区外であったことから断定はできないが、粘土の分布状況から左側と同様であったと推測できる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.54mである。袖石は検出されなかったが、カマド周辺に多数の礫が散乱している状況が確認できた。これらは袖石や天井架構材の一部であると考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

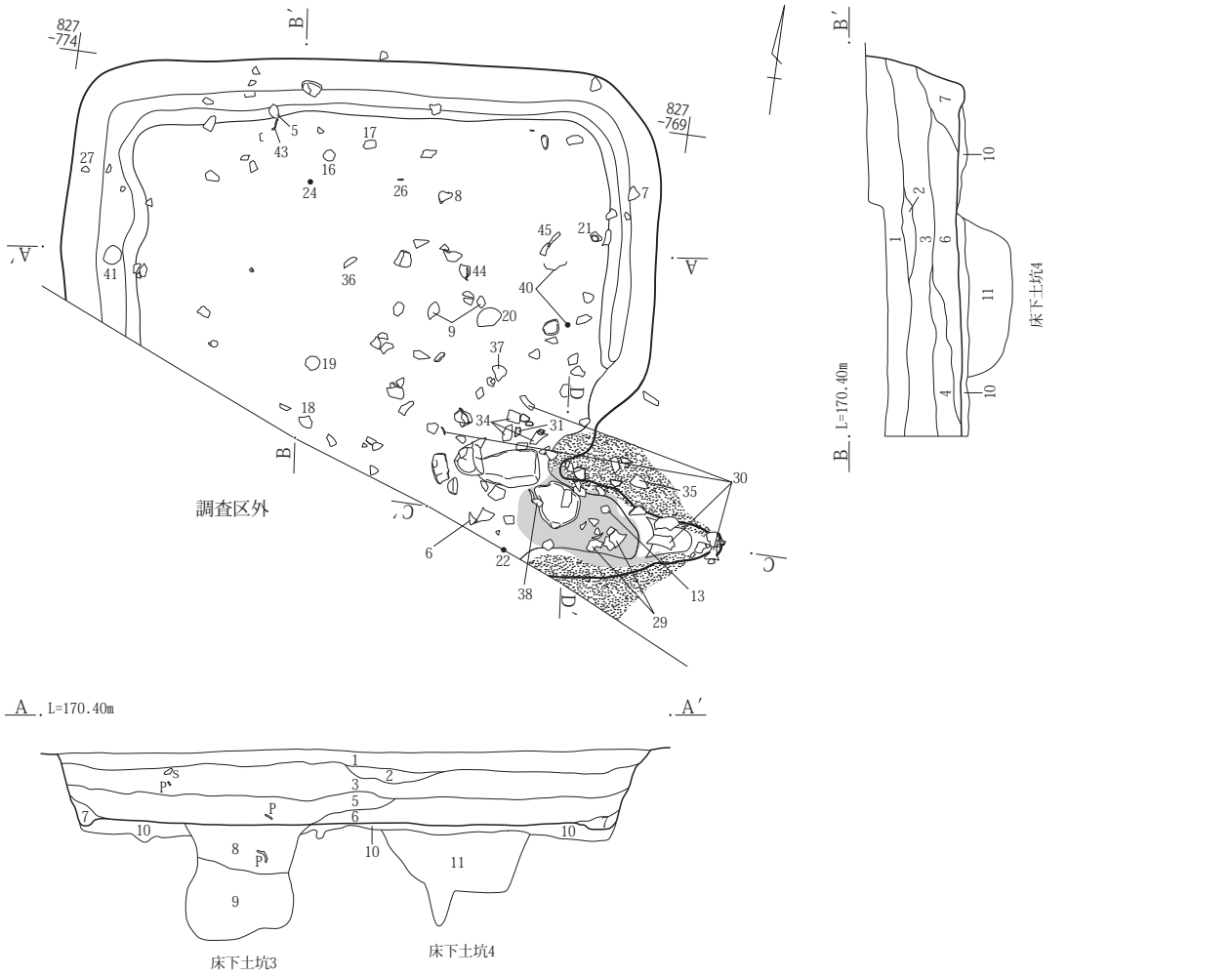
壁際溝　調査範囲において幅0.40～0.68m、深さ0.01～0.10mの全周する壁際溝を検出した。少量のAs-C、ローム小塊～粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は８基の床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであった。床面はやや

多量のAs-YP、ローム小塊を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　８基の床下土坑は、中央付近から北東隅にかけて位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.03×0.84×0.35m、床下土坑２が0.72×0.62×0.31mで、床下土坑３が1.11×1.04×0.88m、床下土坑４が1.40×1.35×0.64m、床下土坑５が1.00×(0.34)×0.63mで、床下土坑６が(1.87)×0.90×0.68m、床下土坑７が(0.96)×0.85×0.33m、床下土坑８が(0.72)×0.55×0.95mである。形状は床下土坑１・２が楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。床下土坑３～８は円形や楕円形に近い不整形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。また、床下土坑３・８については底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横

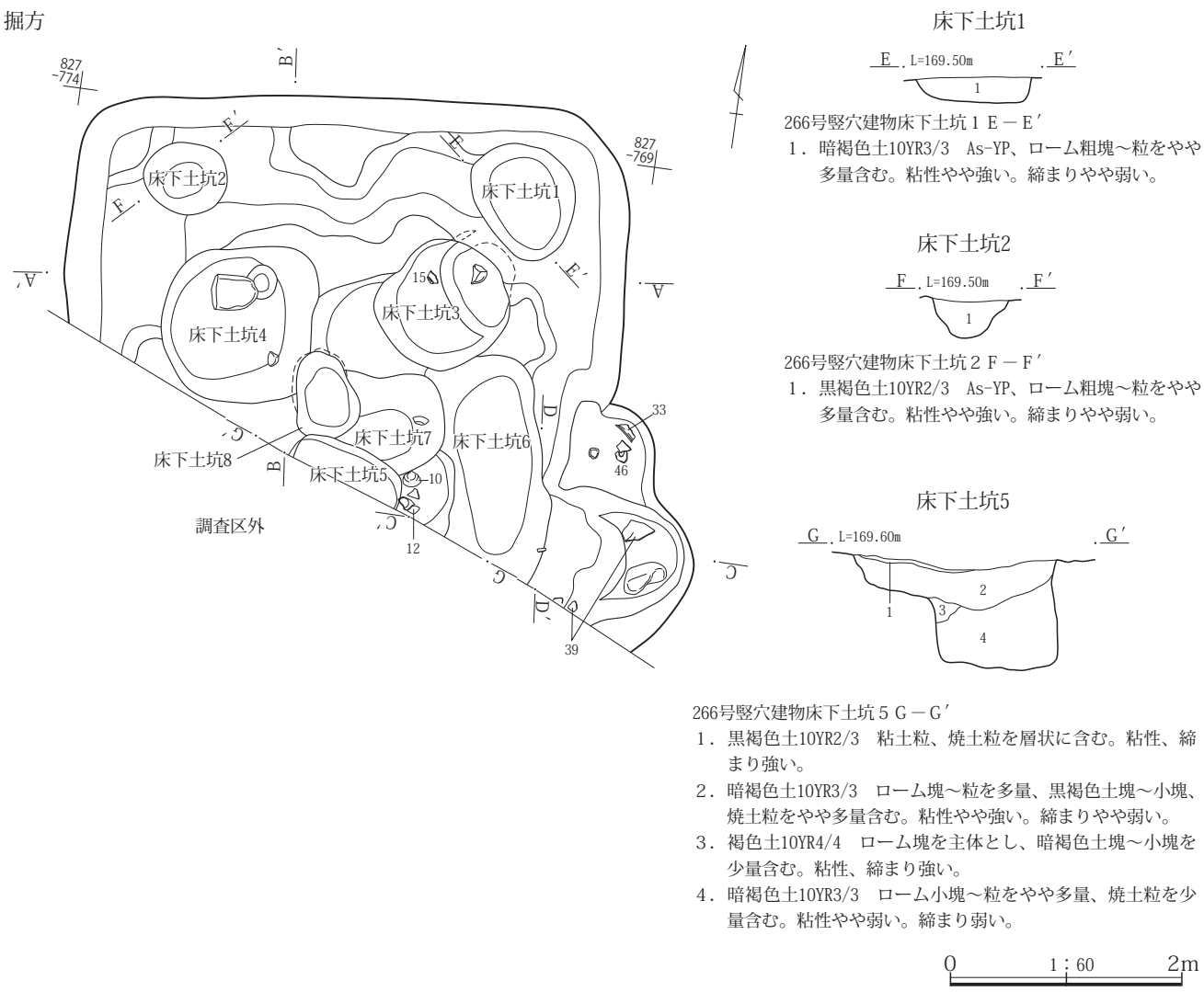


266号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒、焼土塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒、焼土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
6．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
11．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

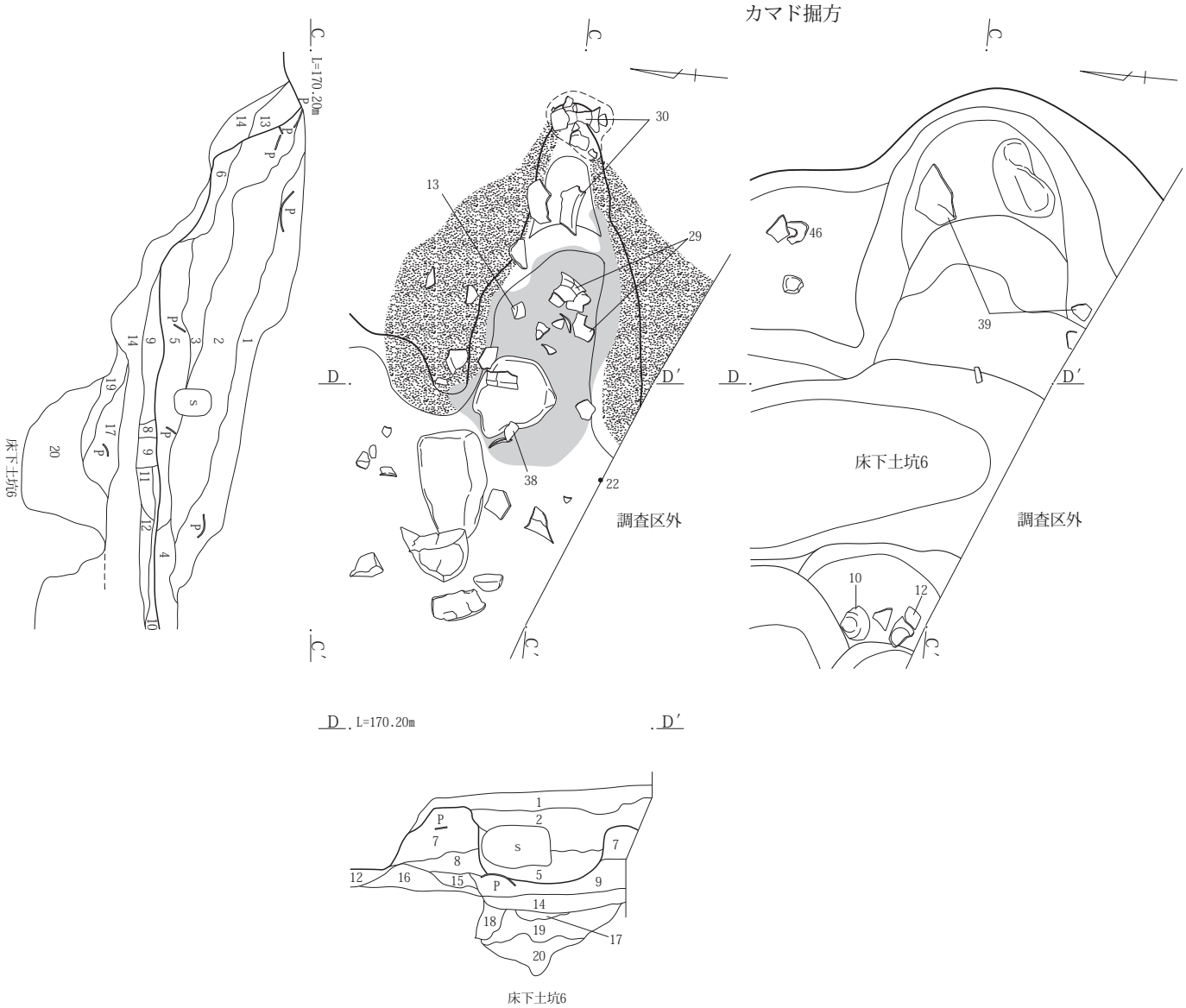
第124図　266号竪穴建物



第125図　266号竪穴建物掘方

に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑１は、やや多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。床下土坑２は、やや多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑３の上層は、少量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土、下層は微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑４は、多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。床下土坑５の上層は、やや多量のローム塊～粒、黒褐色土塊～小塊、焼土粒を含む暗褐色土、下層はやや多量のローム小塊～粒、少量の焼土粒を含む暗褐色土で埋没していた。床下土坑６の上層は、やや多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土、下層は非常に多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含むにぶい黄褐色土で埋没していた。床下土坑７・８の埋没土については不明である。これら８基の床下土坑のうち、床下土坑１・２は浅く、底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。床下土坑３は、貼床を掘り抜いていることから、本竪穴建物が廃絶された直後に粘土採取を目的に掘られた可能性が考えられる。床下土坑４～５は、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑６は、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられ、その上にカマドが構築されていた。床下土坑７・８の埋没土は不明であるが、床下土坑４・５と同様に、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　内面に墨が付着した須恵器椀(18)、緑釉陶器椀(24)、須恵器甕の胴部を転用した猿面硯(41)、朱墨痕が残る須恵器杯(42)が出土したことが特筆される。また、

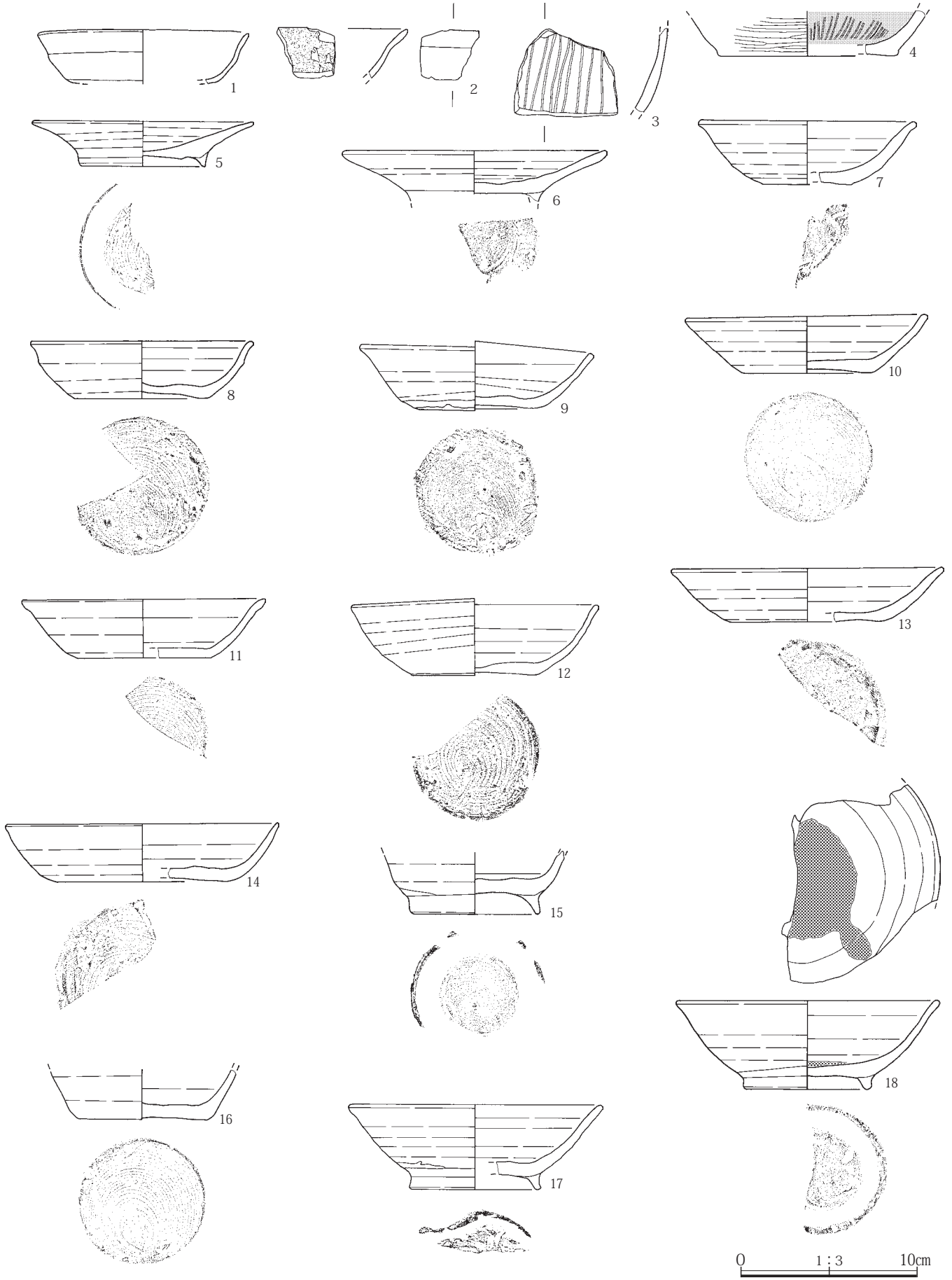


266号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

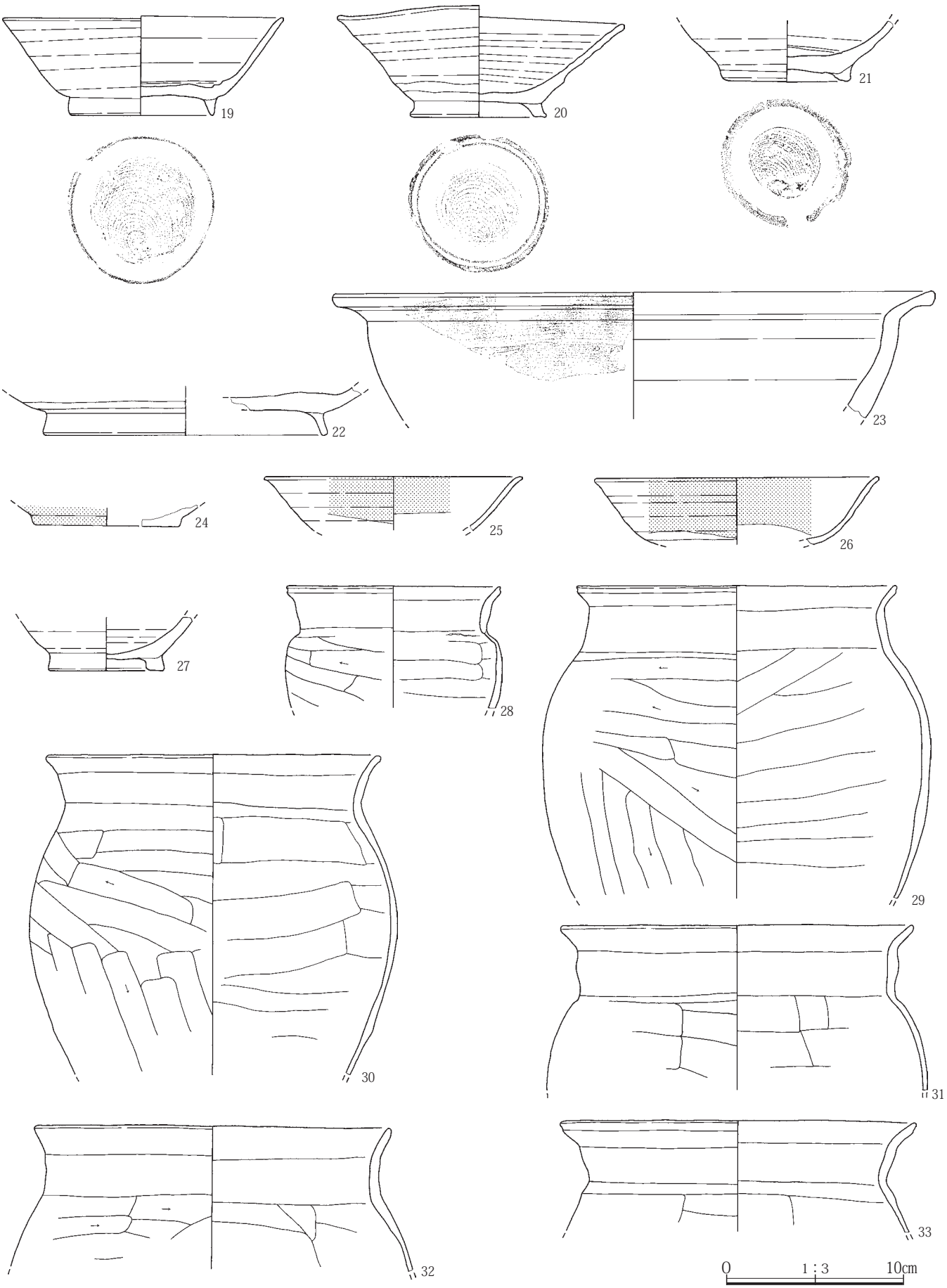
1．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まり強い。
2．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土粒を微量含む。粘性、締まり強い。
3．褐色土10YR4/4　ローム粒を少量、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊を多量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/4　ローム塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．暗褐色土10YR3/4　As-C、As-YPを微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
7．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
8．褐色土10YR4/4　焼土小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
9．黒褐色土10YR3/2　灰を多量、ローム土粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、焼土粒、灰を層状に含む。粘性、締まり強い。
11．褐色土10YR4/4　ローム小塊を主体とし、黒褐色土粒、焼土粒、灰を層状に含む。粘性、締まり強い。
12．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
13．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
14．黒褐色土10YR3/2　As-Cをごく微量含む。粘性、締まりやや強い。
15．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
16．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YP、ローム塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
17．褐色土7.5YR4/4　ローム粒を少量、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
18．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒をやや多量、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
19．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
20．にぶい黄褐色土10YR5/4　As-YP、ローム塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：30　1m

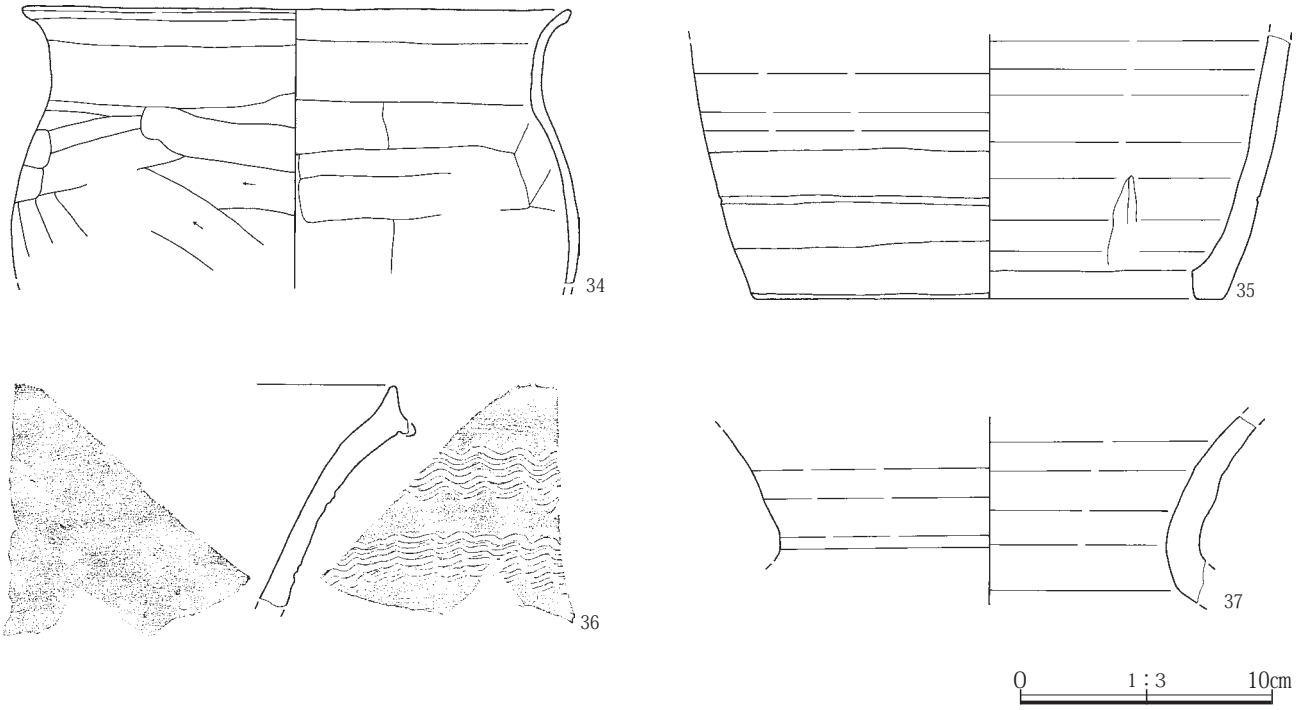
第126図　266号竪穴建物カマド



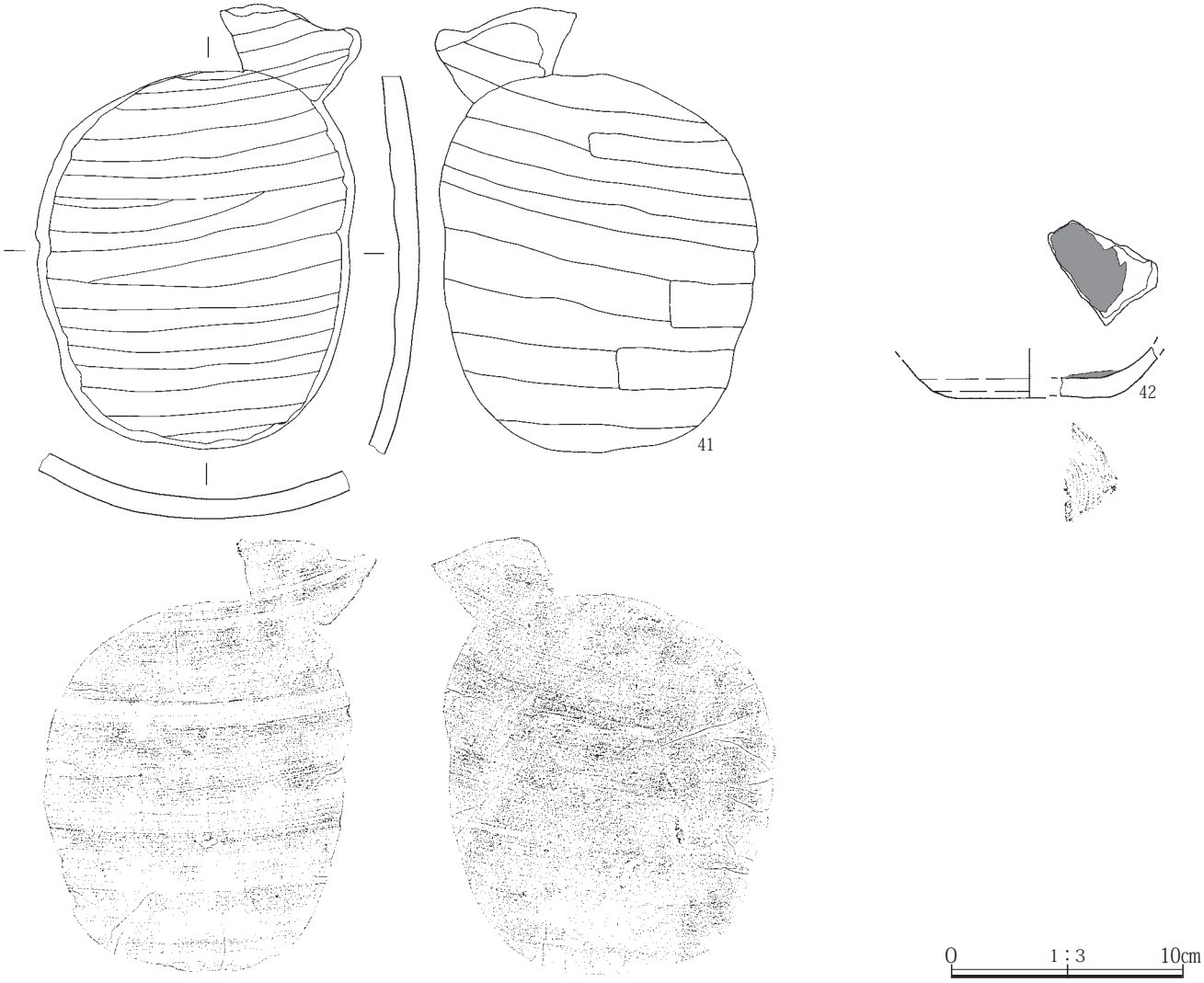
第127図　266号竪穴建物出土遺物（１）

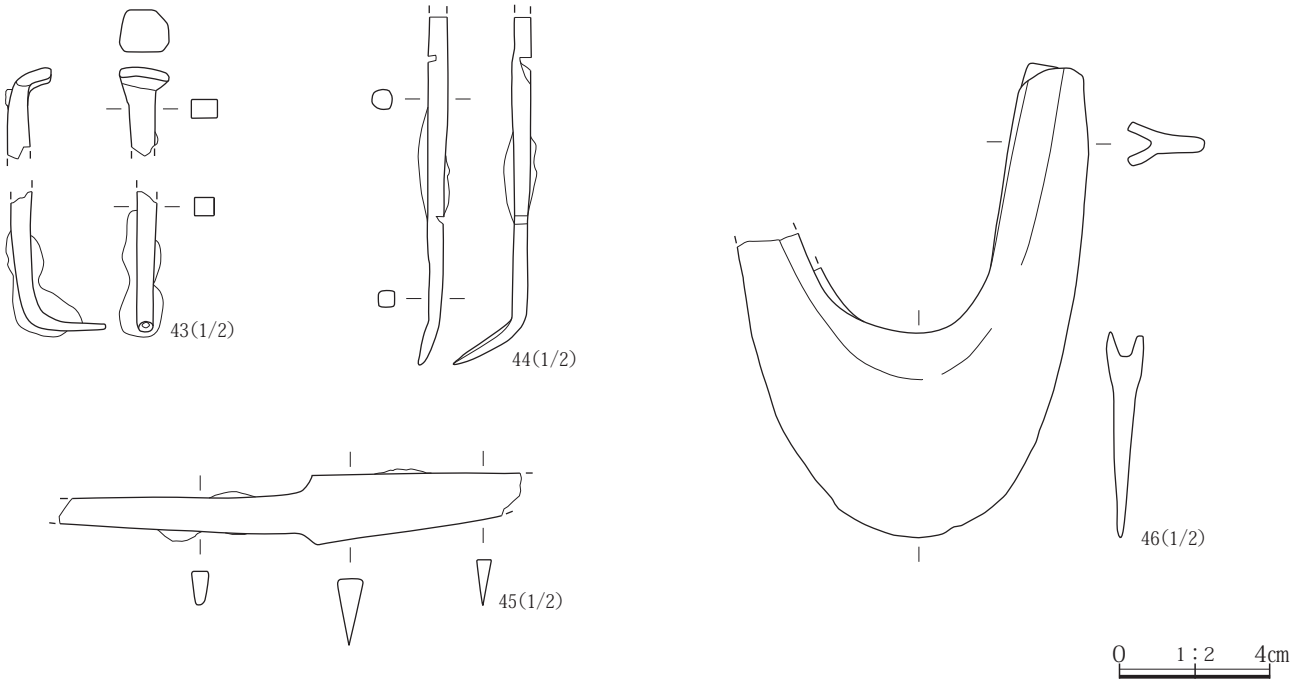


第128図　266号竪穴建物出土遺物（２）



第129図　266号竪穴建物出土遺物（３）





第130図　266号竪穴建物出土遺物（４）

釘(43・44)、刀子(45)、鋤先(46)など、鉄製品が多く出土していることも本竪穴建物の特徴である。土師器甕は少なくとも７個体(28～34)が確認されており、32が床下土坑３から出土した以外は、いずれもカマド内やカマド前から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片40点(220ｇ)、甕・壺類破片２,626点(11,860ｇ)、須恵器の杯・椀類破片1,155点(7,360ｇ)、甕・壺類破片129点(6,400ｇ)、緑釉陶器椀１点、瓦片４点、打製石斧１点(55.0ｇ)が出土している。このうち緑釉陶器椀(47)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

267号竪穴建物(第131～133図、PL.48・49・302・303)

位置　Ｘ＝40,825～40,828、Ｙ＝－80,774～－80,779（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから不明である。

規模　長軸(3.35m)、短軸(3.18m)

面積　(4.752㎡)

残存壁高　0.32m

方位　Ｎ－90°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Cと微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-Cと少量のローム塊、微量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　本竪穴建物の南半は調査区外であったため推測ではあるが、東壁の中央やや南寄りに位置すると考えられる。残存長は0.80m、燃焼部幅は(0.10m)で、壁外に0.73m燃焼部・煙道が伸びる。向かって左側の側壁は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されており、おそらく右側の側壁についても同様であると考えられる。煙道に重ねて置かれた甕については、煙道の補強が目的であると考えられる。また、これらの土器の位置から、燃焼部の幅は0.30～0.35m程度であると推測できる。向かって左側の側壁には、直径0.30m程度の扁平な礫が立てられていたが、これは側壁の補強が目的であると考えられる。袖石は検出されなかったが、掘方調査では向かって左側の袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　調査範囲において幅0.20～0.34m、深さ0.03～0.06mのほぼ全周する壁際溝を検出した。やや多量のAs-Cと少量のローム塊、微量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

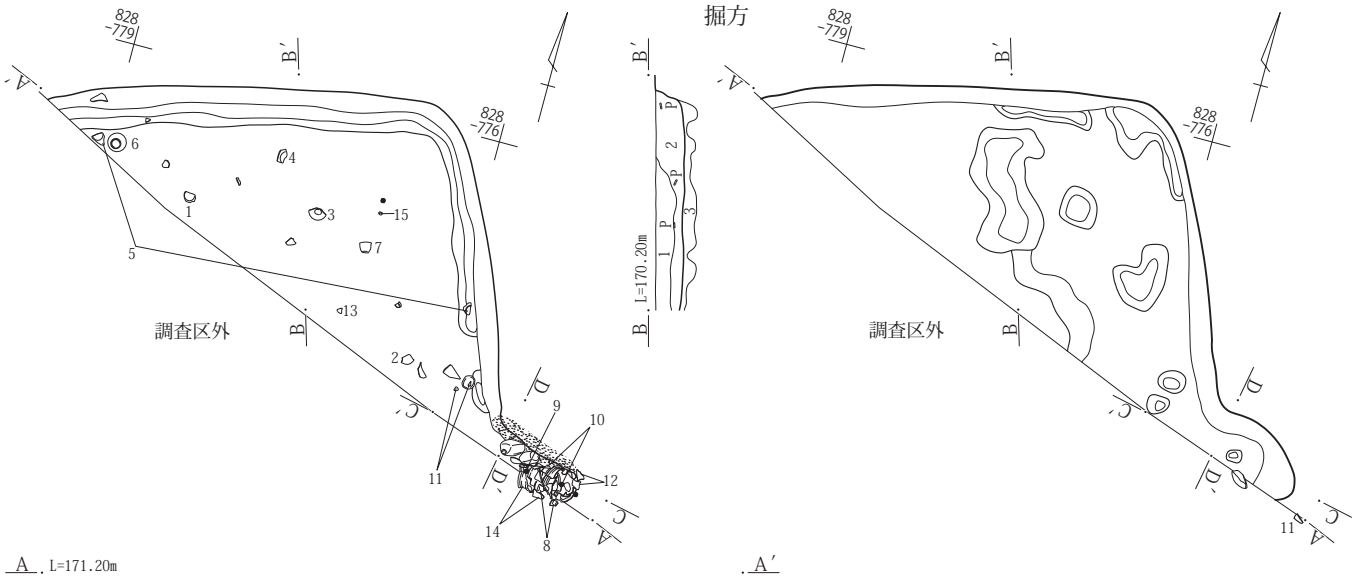
床面　調査範囲の床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は東半がやや深く床面からの深さは0.10m前後、西半がやや浅く床面からの深さは0.05m前後であった。床面は少量のAs-C、焼土粒、炭化物粒と、多量のローム塊を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。ただし、カマドが床下土坑から採取されたと考えられる粘土によって構築されていることから、調査区外に存在した可能性が考えられる。

出土遺物　「真」と書かれた須恵器杯(３)が出土したことが特筆される。須恵器椀(６)は、北西隅付近の床面に逆位で置かれていた。土師器甕は少なくとも４個体(９～12)が確認されているが、これらはいずれもカマド内から重なった状態で出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片17点(45ｇ)、甕・壺類破片209点(970ｇ)、須恵器の杯・椀類破片122点(673ｇ)、甕・壺類破片18点(247ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



267号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを多量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム塊を少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　As-C、焼土粒、炭化物粒を少量、ローム塊を多量含む。粘性、締まり強い。

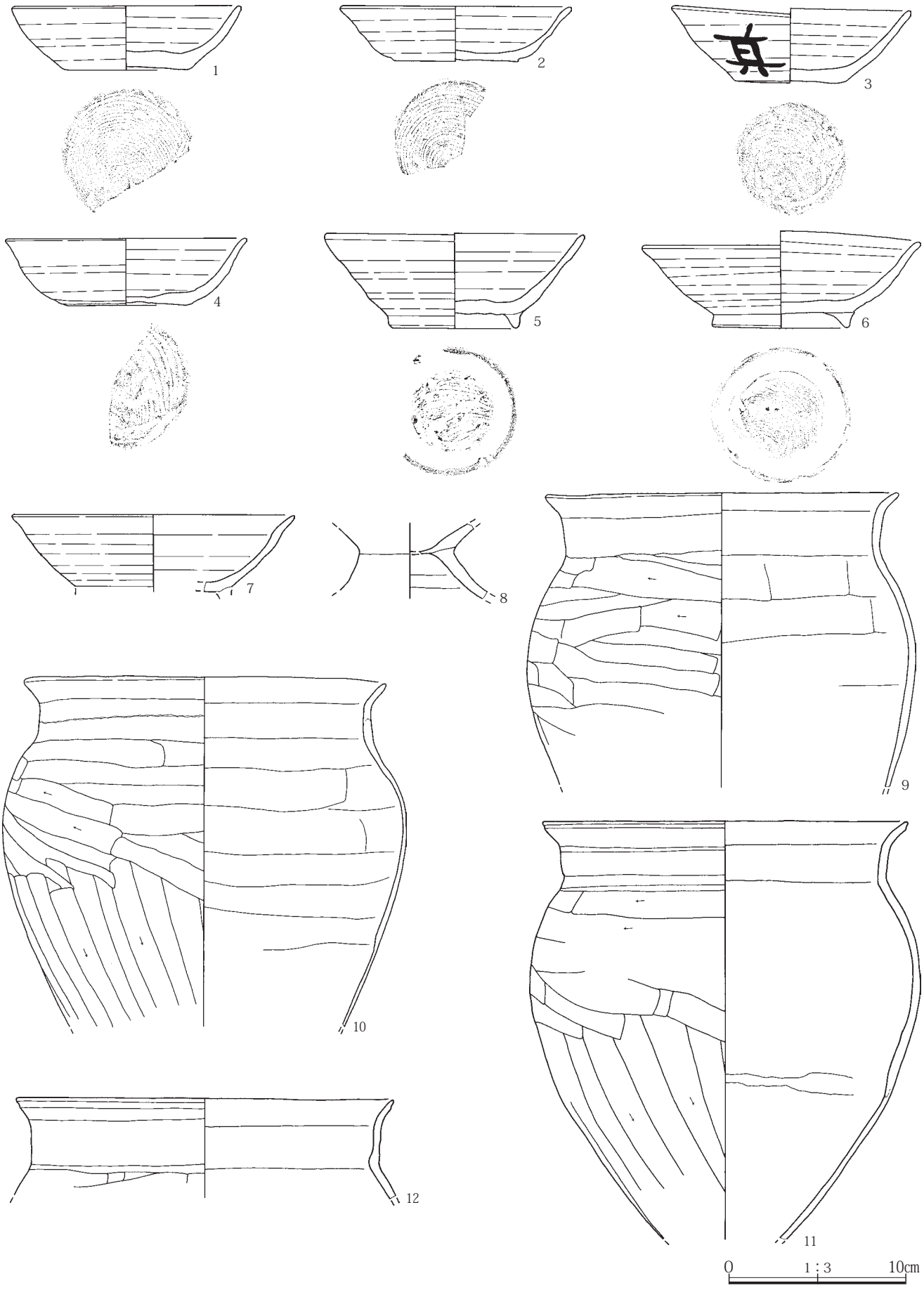
0　1：60　2m

267号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

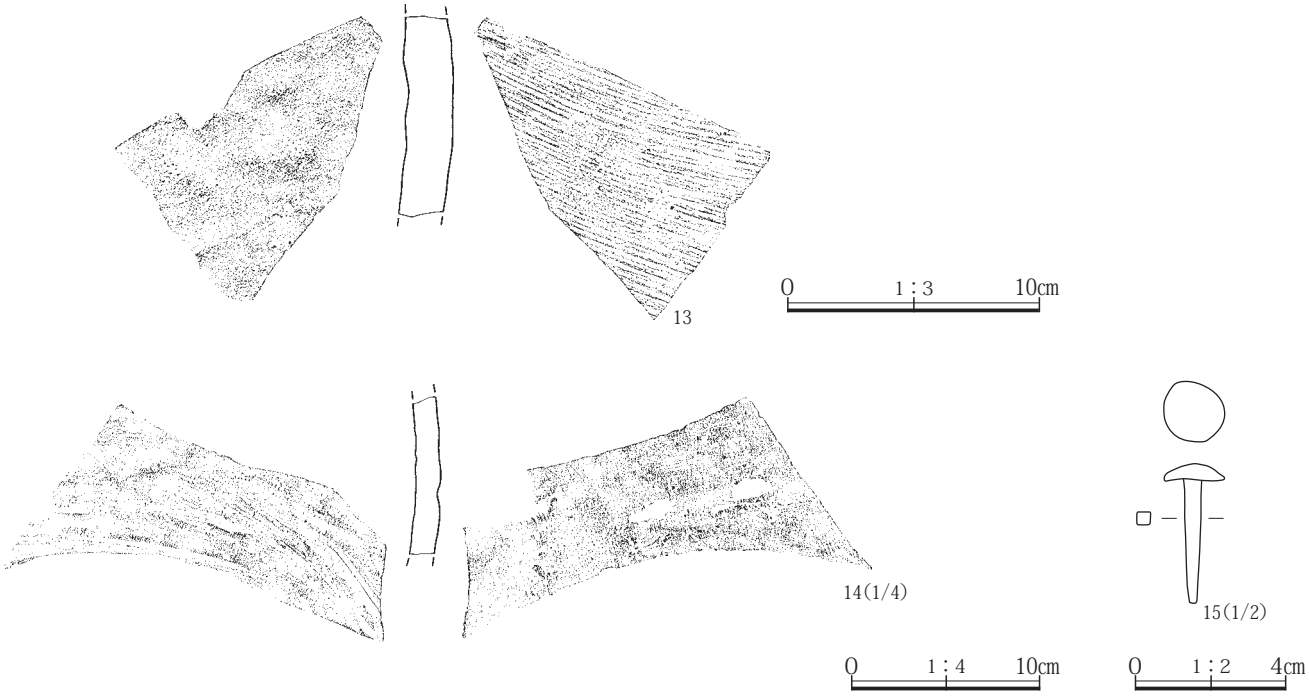
１．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。
３．暗褐色土10YR3/4　焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．暗褐色土10YR3/4　粘土粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まり弱い。
５．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊を多量含む。粘性、締まり強い。
６．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、粘土粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
８．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第131図　267号竪穴建物・カマド



第132図　267号竪穴建物出土遺物（１）



第133図　267号竪穴建物出土遺物（２）

268号竪穴建物（第134～137図、PL.50～52・303・304）

位置　Ｘ＝40,827～40,831、Ｙ＝－80,770～－80,774（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.92m、短軸3.66m

面積　11.088㎡

残存壁高　0.61m

方位　Ｎ－３°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。中～下層は多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中に多量のローム塊～粒を含む中～下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.13m、燃焼部幅は0.39mで、壁外に0.67m燃焼部・煙道が伸びる。カマド横の壁上には多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.42mである。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.04mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

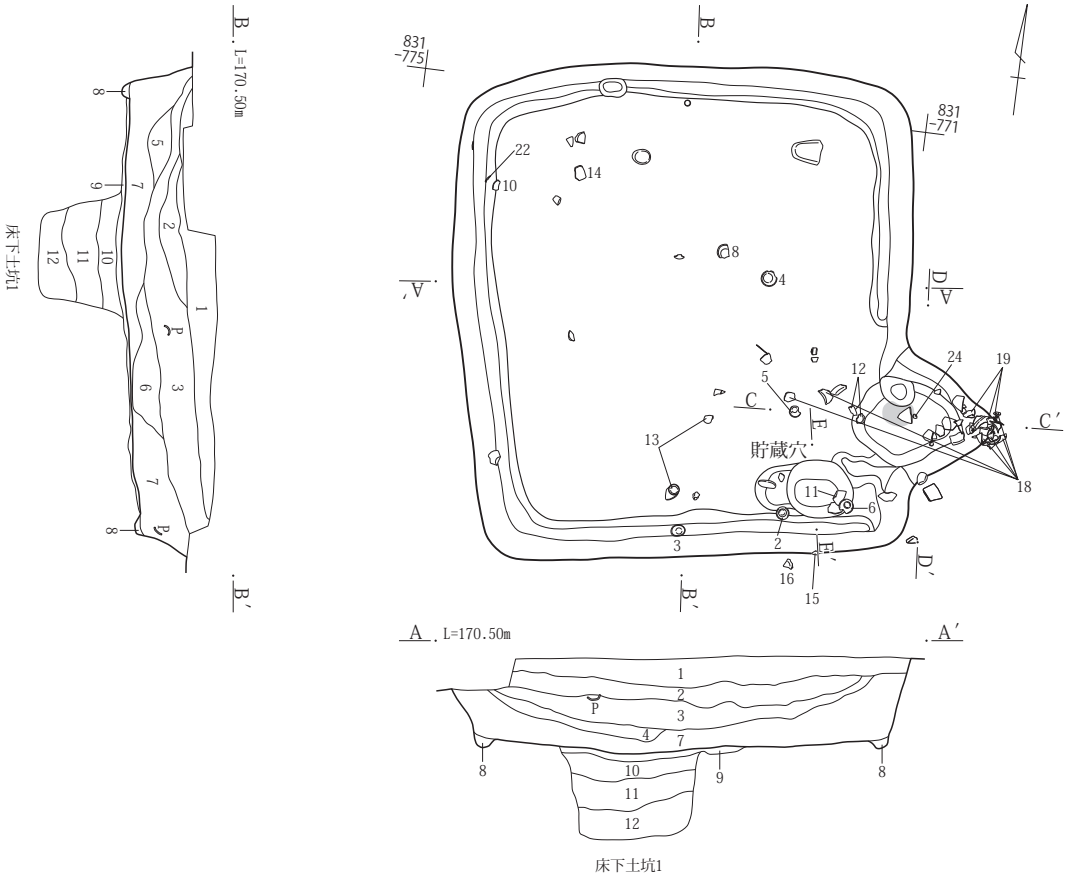
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.53m、短軸0.46m、深さ0.29m、形状は楕円形である。やや多量のローム小塊～粒、少量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　幅0.23～0.35m、深さ0.03～0.06mのほぼ全周する壁際溝を検出した。多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面はカマド前を除いてほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.04mであったが、一部で掘方が存在しない箇所も見られた。床面は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

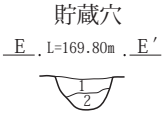
床下土坑　床下土坑１は中央やや北東寄りに位置し、規模は長軸1.24m、短軸1.17m、深さ0.76mである。形状は円形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。



床下土坑1

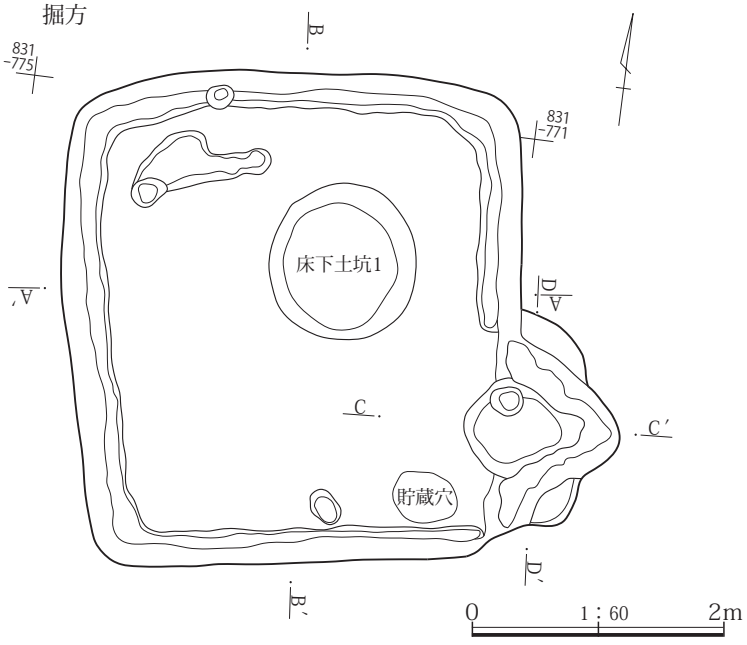
268号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR3/2　ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
9．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．褐色土10YR4/4　ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まり弱い。
12．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まり弱い。



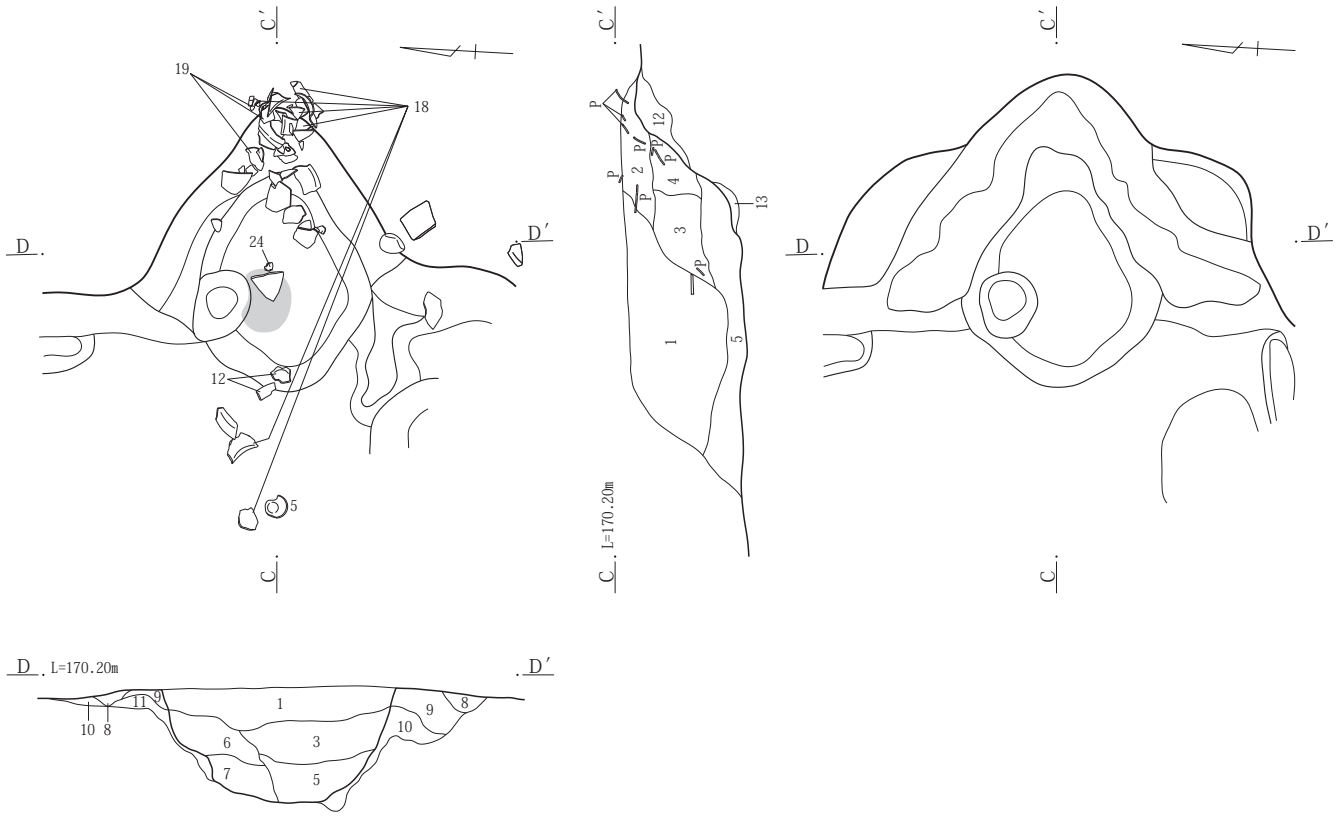
268号竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。



第134図　268号竪穴建物

カマド掘方



268号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊、焼土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
13．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

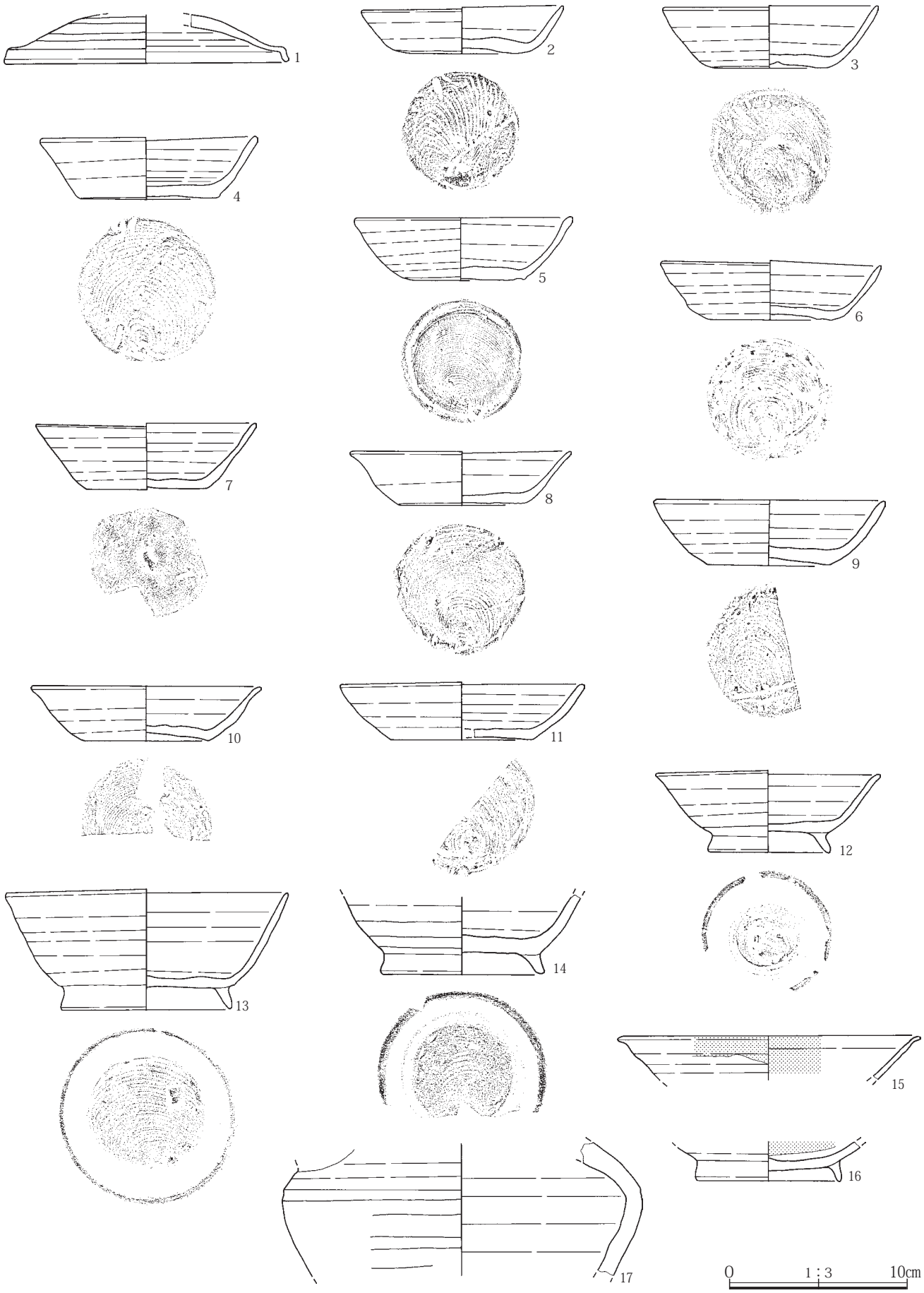
0　1：30　1m

第135図　268号竪穴建物カマド

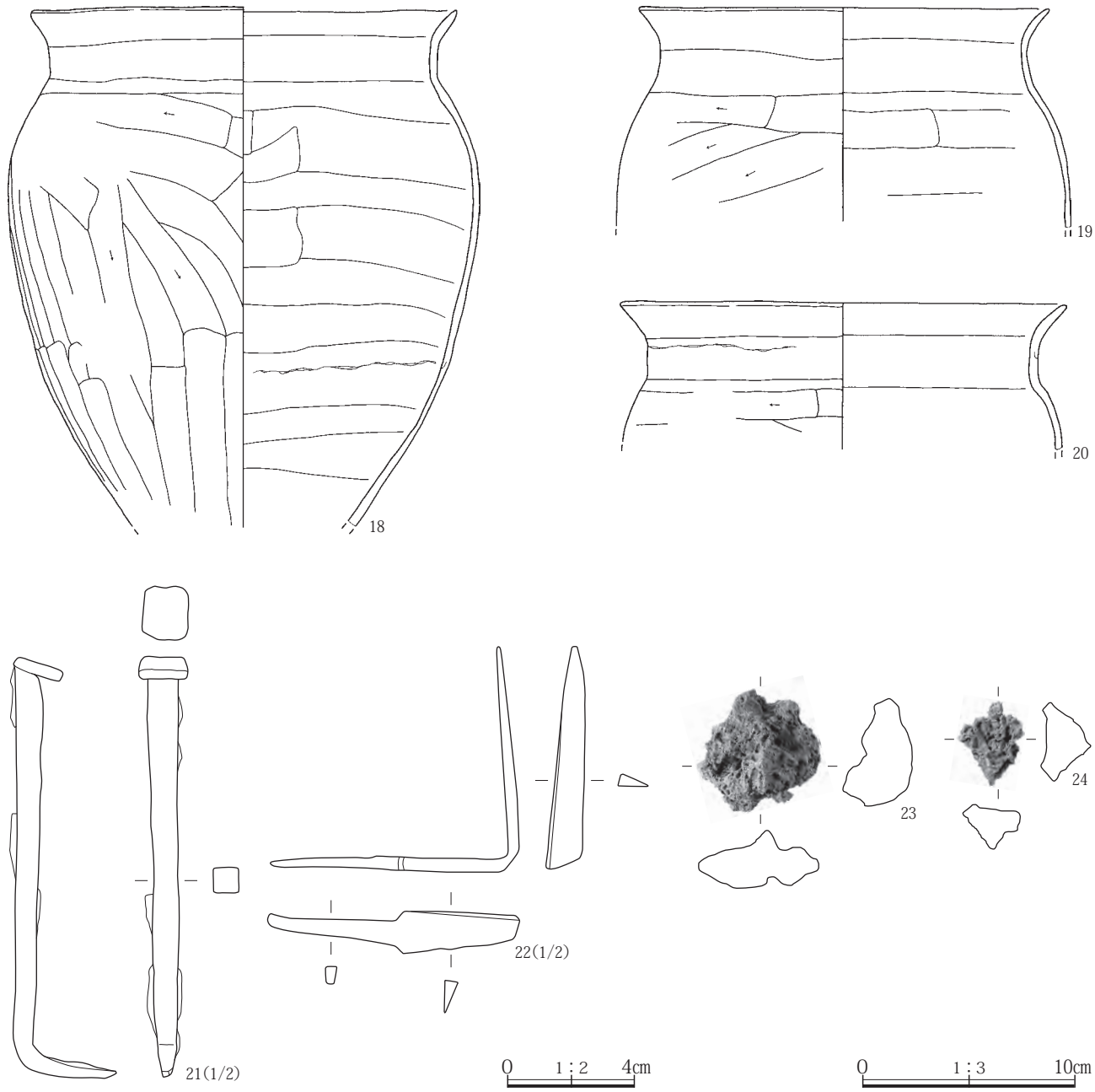
上層は非常に多量のローム粗塊～小塊を含む褐色土、中層は多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土、下層は多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　釘(21)、刀子(22)などの鉄製品とともに鉄滓(23･24)が出土したことが特筆される。須恵器杯(６)は、貯蔵穴脇の床面直上に逆位で置かれていた。土師器甕は少なくとも３個体(18～20)が確認されているが、このうち18・19は、カマド内から破砕された状態で出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片41点(164ｇ)、甕･壺類破片264点(1,490ｇ)、須恵器の杯･椀類破片98点(780ｇ)、甕･壺類破片14点(648ｇ)、瓦片５点、磨石１点(412.8ｇ)、剝片２点(17.1ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第２四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。



第136図　268号竪穴建物出土遺物（１）



第137図　268号竪穴建物出土遺物（２）

269号竪穴建物（第138～140図、PL.52・53・304）

位置　Ｘ＝40,835～40,838、Ｙ＝－80,744～－80,747（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.15m、短軸2.45m

面積　5.808㎡

残存壁高　0.44m

方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム小塊、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.98m、燃焼部幅は0.24mで、壁外に0.58m燃焼部・煙道が伸びる。側壁の一部が、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.45m、短軸0.38

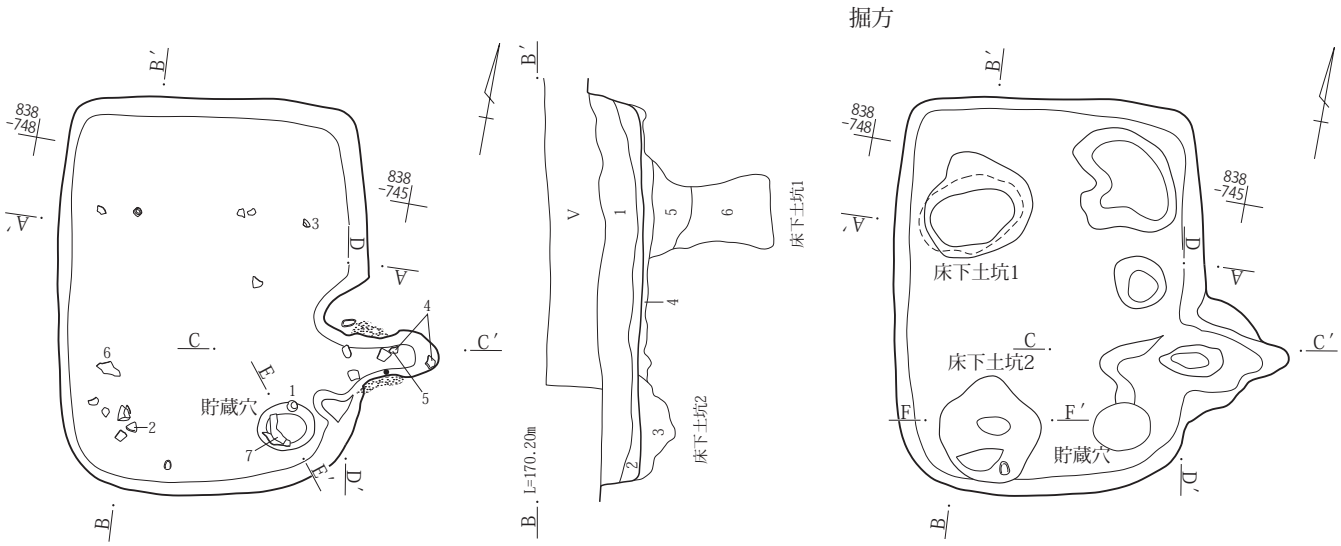
m、深さ0.27m、形状は楕円形である。微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

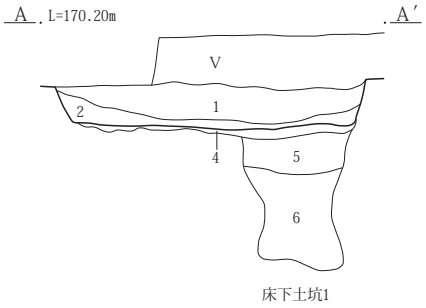
壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.05mであった。ただし、北東隅付近はやや深く、床面からの深さは概ね0.05～0.10mであった。床面は少量のローム粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は北西隅付近に位置し、規模は長軸0.87m、短軸0.83m、深さ1.12mである。形状は円形に近い不整形で､円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。上層がやや多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土、下層が少量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。一方、床下土坑２は南西隅付近

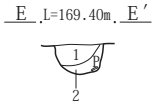




269号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

Ⅴ．黒色土10YR2/1　As-Cを含む。
１．黒色土10YR2/1　As-C、ローム小塊、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒色土10YR2/1　As-Cを微量、ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まり強い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
６．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒を少量含む。粘性、締まり弱い。

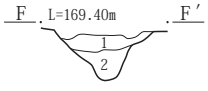
貯蔵穴



269号竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

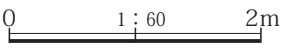
１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

床下土坑2

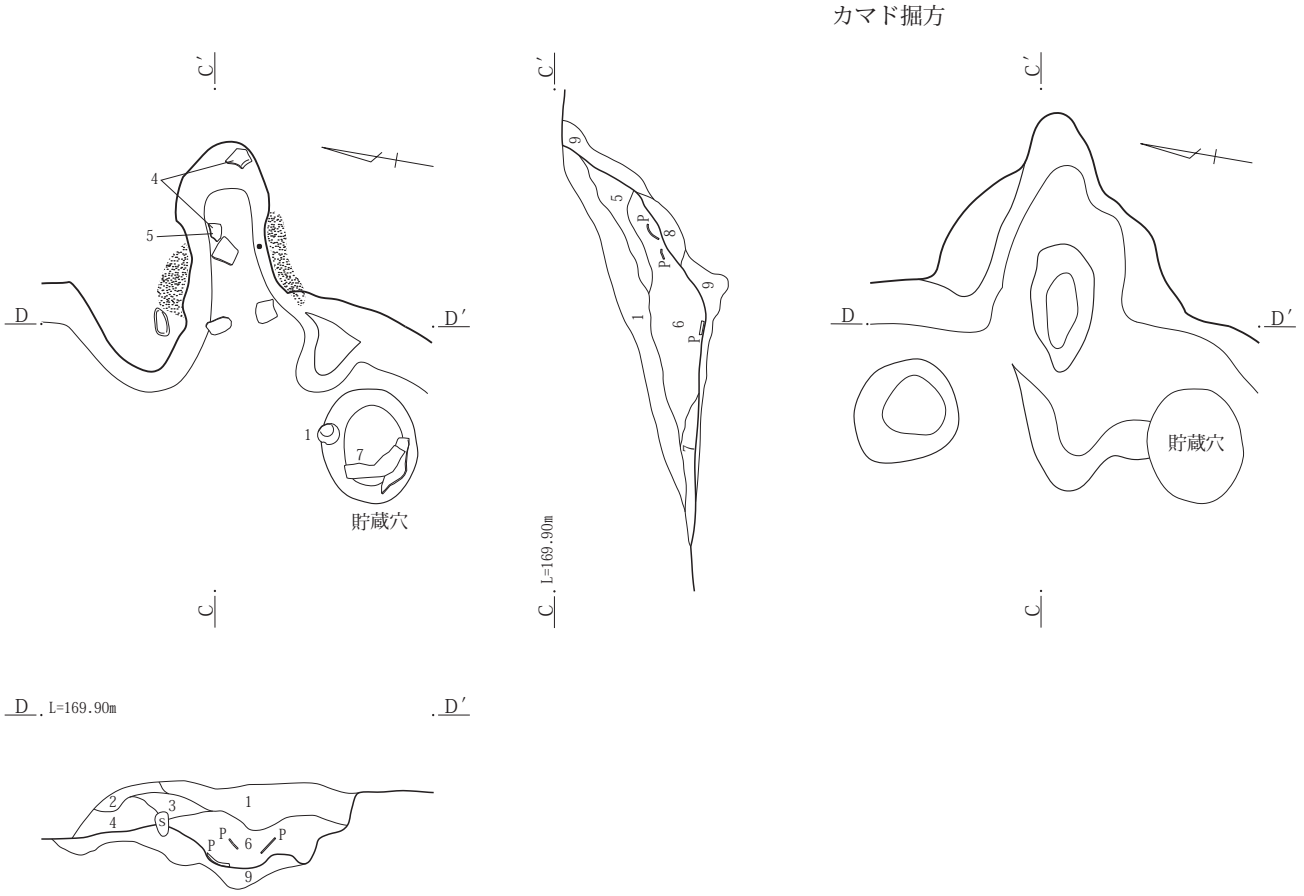


269号竪穴建物床下土坑２Ｆ－Ｆ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。



第138図　269号竪穴建物



269号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、粘土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
７．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
８．黒褐色土10YR2/3　灰をやや多量、焼土粒～細粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
９．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

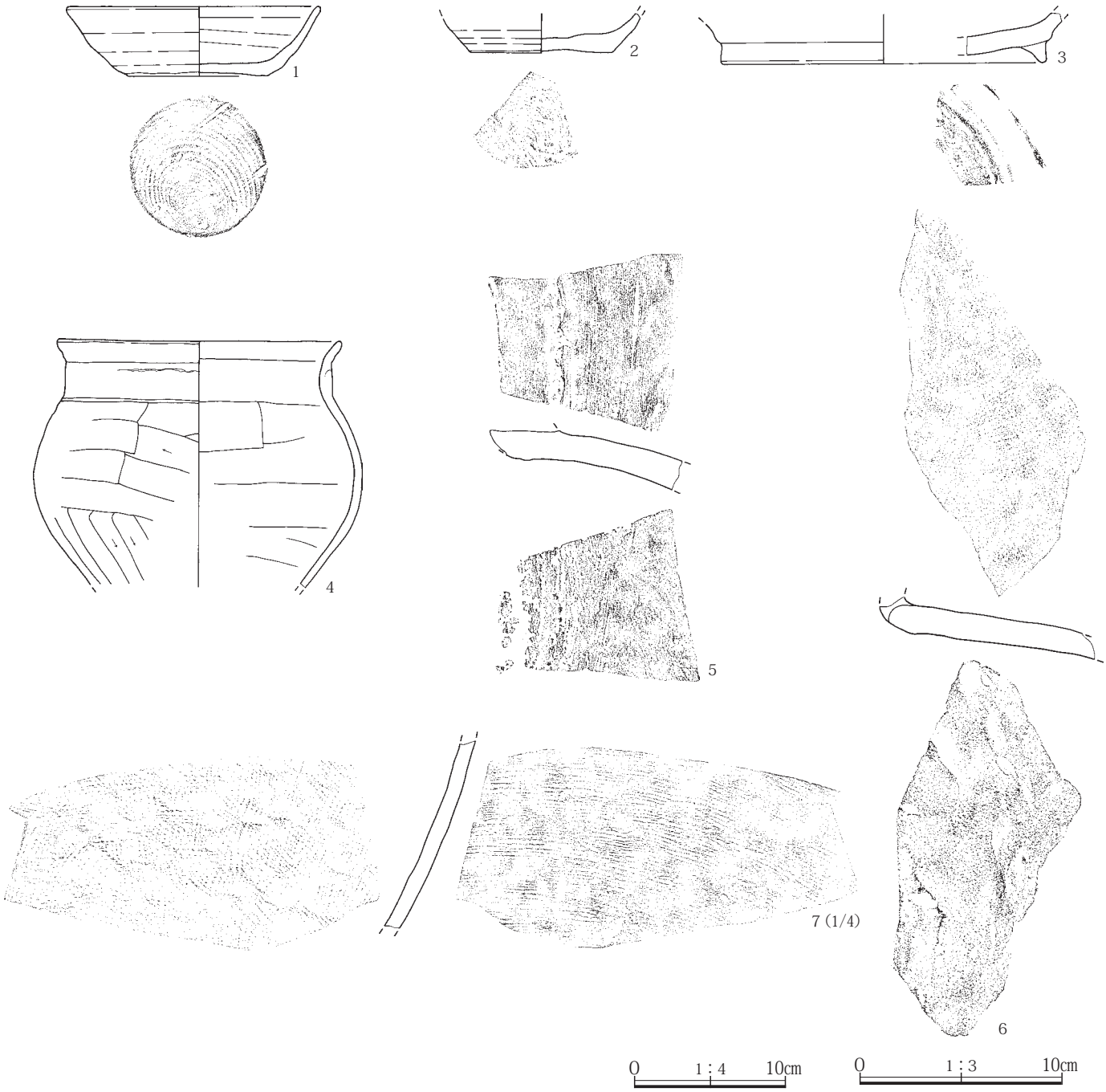
0　1：30　1m

第139図　269号竪穴建物カマド

に位置し、規模は長軸0.85m、短軸0.80m、深さ0.42m、形状は楕円形に近い不整形である。埋没土は上層が微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、下層が微量のローム粒を含む黒褐色土で、貼床を掘り抜いていた。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯（１）は貯蔵穴の上層から出土したが、これは貯蔵穴脇に置かれていたものが埋没の過程で崩落したものであると推測できる。貯蔵穴の底面には須恵器甕の破片（６）が置かれていた。土師器甕（４）は、カマド内から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片17点（121ｇ）、甕・壺類破片200点（900ｇ）、須恵器の杯・椀類破片78点（750ｇ）、甕・壺類破片14点（353ｇ）、敲石１点（424.3ｇ）が出土している。このうち縄文土器（加曽利Ｅ３式）の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀前半の竪穴建物であると考えられる。



第140図　269号竪穴建物出土遺物

270号竪穴建物（第141～145図、PL.54・55・304）

位置　X＝40,839～40,842、Y＝－80,742～－80,747（C・D区）

形状　不整形

規模　長軸3.54m、短軸3.33m

面積　8.800㎡

残存壁高　0.46m

方位　N－78°－E

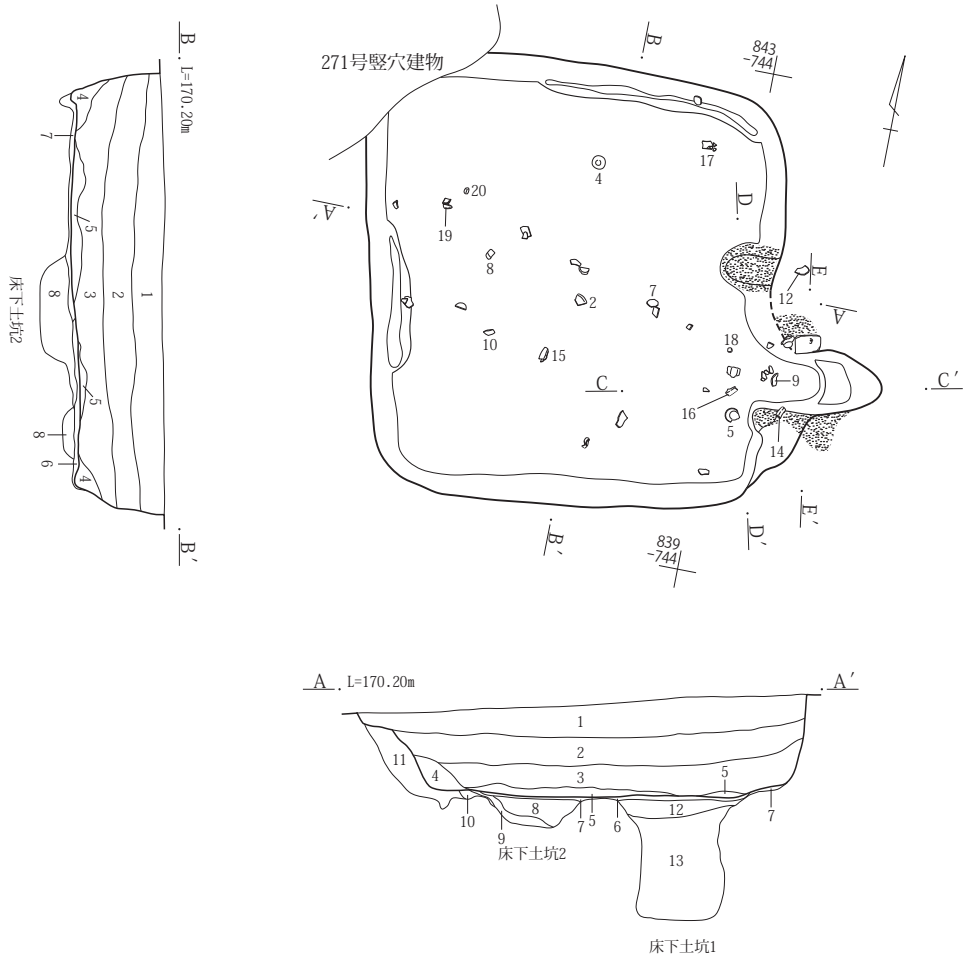
重複　271号竪穴建物と重複し、270号竪穴建物が古い。ただし、出土遺物から想定される271号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。また、床面付近では埋没土中に少量のローム小塊が認められたが、これはカマドの構築材の一部である可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.12

m、燃焼部幅は0.34mで、壁外に0.92m燃焼部・煙道が伸びる。側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。向かって左側の側壁には、長さ0.36m、幅0.20m、厚さ0.14mの礫が立てられていたが、これは側壁の補強が目的であったと考えられる。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマドの左側の壁際にはローム塊が認められたが、これは人為的に構築されたものではなく、崩落したカマドの構築材の一部など、本竪穴建物の廃絶後に堆積したものであると考えられる。

柱穴　検出されなかった。

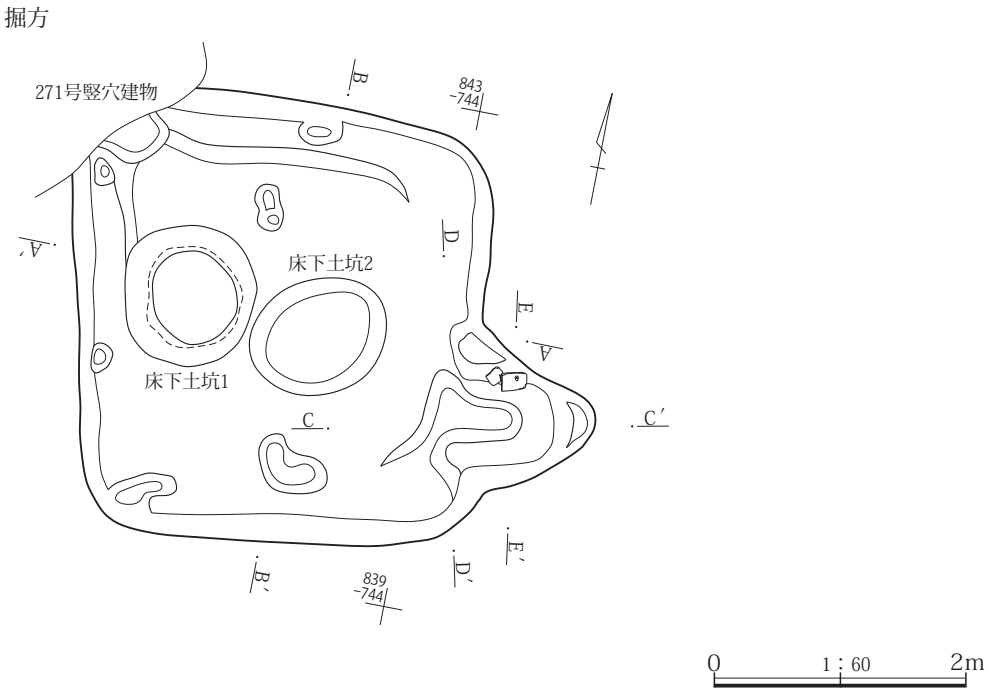


270号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、粘土粒をやや多量含む。粘性、締まり強い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
11．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
13．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：60　2m

第141図　270号竪穴建物



第142図　270号竪穴建物掘方

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　北壁と西壁の一部で、幅0.21～0.30m、深さ0.03～0.08mの壁際溝を検出した。微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

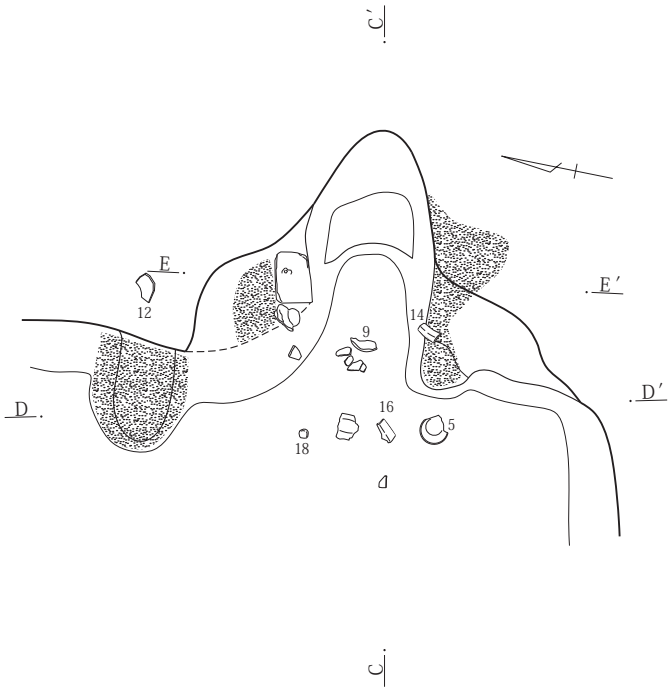
床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。全景写真で確認すると、床下土坑１の上層の床面は、とくに多量のローム塊を含む土で貼床されているように見える。

掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.05mであった。ただし、部分的に浅い皿状の窪みがあり、そのような場所では、床面からの深さは概ね0.05～0.10mであった。床面はやや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

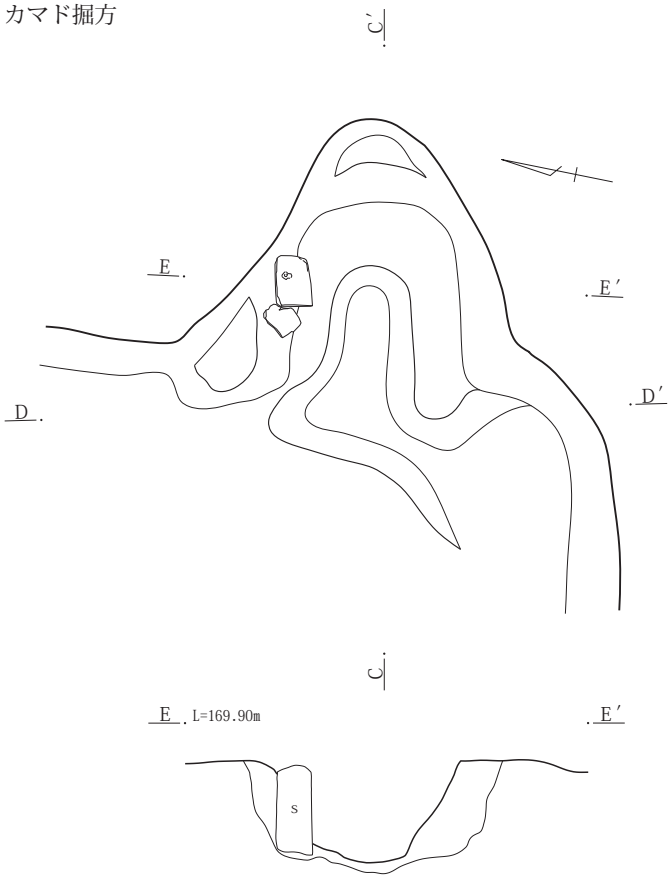
床下土坑　床下土坑１は西壁際に位置し、規模は長軸1.12m、短軸1.04m、深さ0.99mである。形状は円形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。上層が多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む暗褐色土、下層がやや多量のAs-YP、ローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。一方、床下土坑２は中央付近に位置し、規模は長軸1.10m、短軸0.91m、深さ0.27mである。形状は楕円形で、やや深い皿状に掘り込まれていた。上層が少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、下層が多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑は①と②が併存する特殊なタイプである。

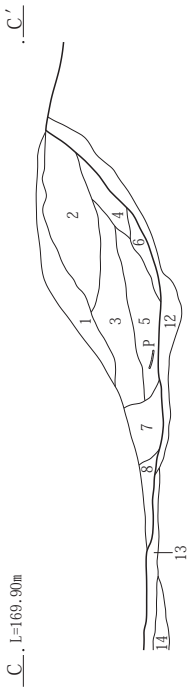
出土遺物　「盃」と書かれた須恵器杯(５)が、カマド前から出土したことが特筆される。また、鉄製紡錘車(18)や鉄滓(19・20)などが出土していることも本竪穴建物の特徴である。須恵器蓋(２)など一部を除いて、ほぼすべての土器が埋没土中から出土したものである。土師器甕は少なくとも４個体(14～17)が確認されているが、このうち14と16はカマド内やカマド前から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片79点(341ｇ)、甕・壺類破片516点(3,128ｇ)、須恵器の杯・椀類破片179点(1,630ｇ)、甕・壺類破片53点(1,836ｇ)、剝片２点(28.3ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



カマド掘方



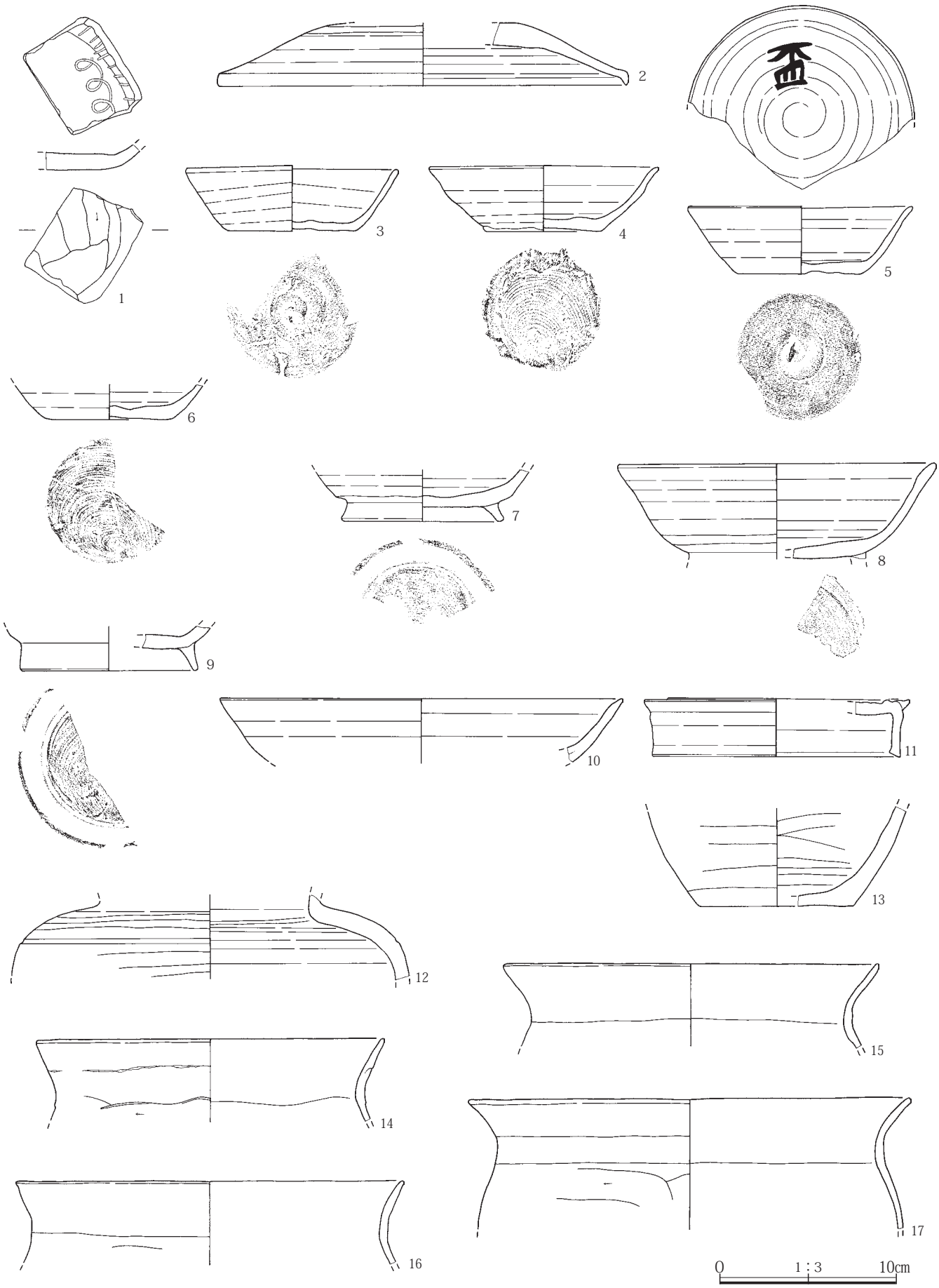


270号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

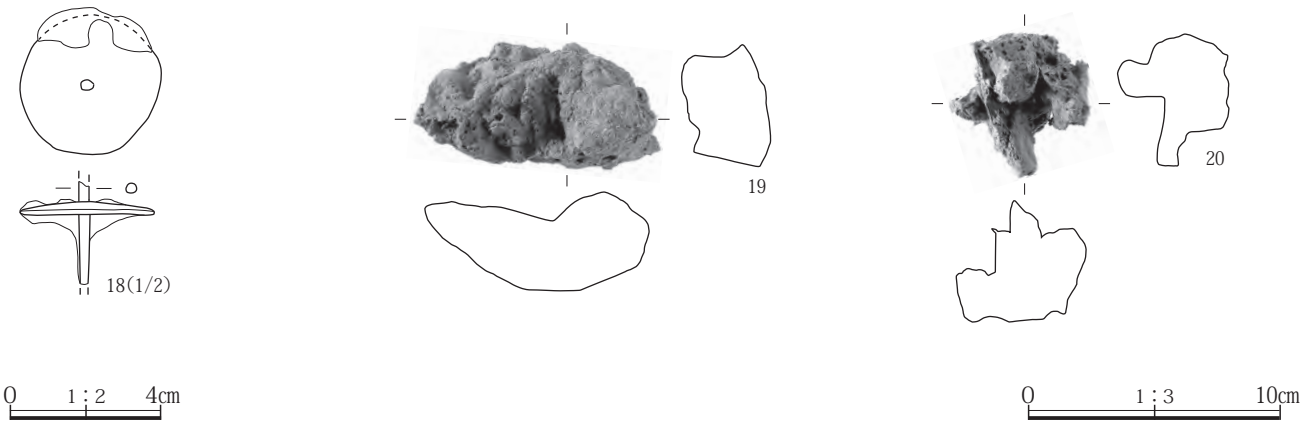
1．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊を非常に多量、焼土小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．暗褐色土7.5YR3/4　粘土粒を少量、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/2　焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まり弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を層状に含む。粘性、締まりやや強い。
9．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を層状に含む。粘性、締まりやや強い。
12．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。
13．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。
14．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を層状に含む。粘性、締まりやや強い。
15．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を多量含む。粘性強い。締まりやや強い。
16．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
17．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

第143図　270号竪穴建物カマド



第144図　270号竪穴建物出土遺物（１）



第145図　270号竪穴建物出土遺物（２）

271号竪穴建物（第146～148図、PL.55～57・304）

位置　Ｘ＝40,840～40,845、Ｙ＝－80,746～－80,750（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.70m、短軸3.59m

面積　9.301㎡

残存壁高　0.67m

方位　Ｎ－53°－Ｅ

重複　270号・272号竪穴建物と重複し、いずれも271号竪穴建物が新しい。ただし、出土遺物から想定される270号・272号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は0.70m、燃焼部幅は0.32mで、壁外に0.42m燃焼部・煙道が伸びる。側壁は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖は残存しておらず、袖石も検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１とＰ２が本竪穴建物の主柱穴である可能性が考えられる。

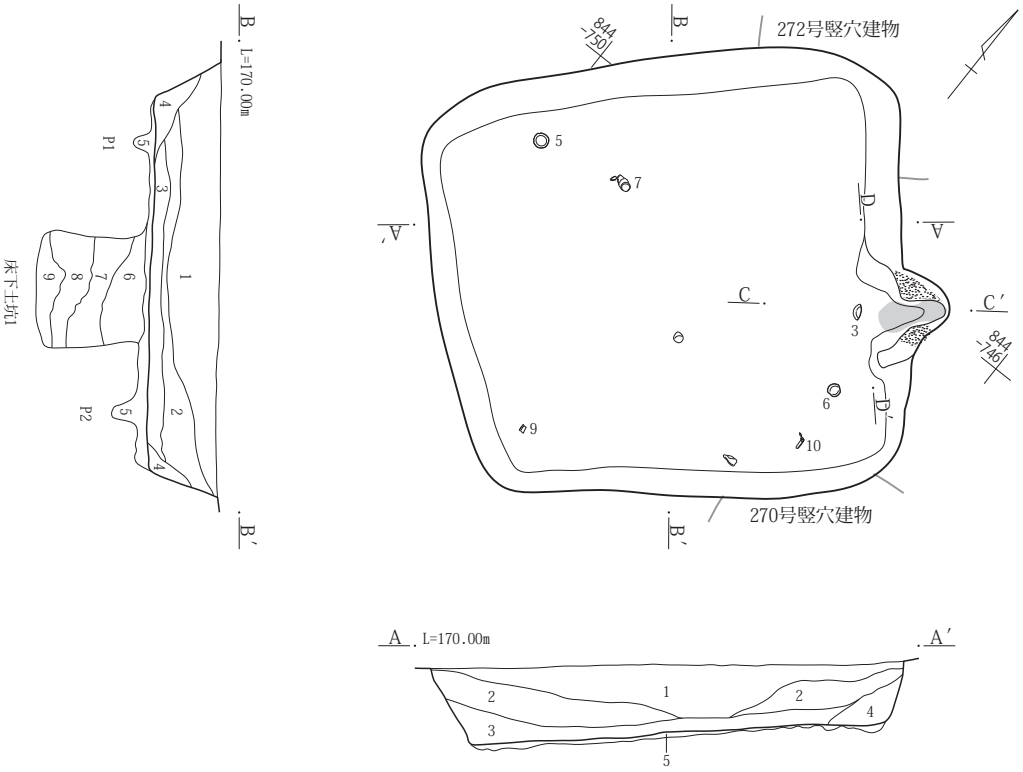
貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は焚口の下部と床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.05mであった。ただし、壁際がやや深くなる傾向が見られ、部分的には0.08m前後を測る箇所も認められた。北壁際と南壁際のほぼ中央で２基のピットを検出した。それぞれのピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.15×0.13×0.15m、Ｐ２が0.20×0.15×0.20m、形状はいずれも楕円形である。床面は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

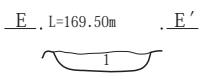
床下土坑　床下土坑１は中央付近に位置し、規模は長軸1.04m、短軸0.88m、深さ0.89mである。形状は円形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。上層から多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土、やや多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む暗褐色土、As-YPを主体とする黄褐色土、少量のAs-YP、多量の暗褐色土粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。一方、床下土坑２は北壁際に位置し、規模は長軸0.76m、短軸（0.58m）、深さ0.15mである。形状は円形に近い不整形で、浅い皿状に掘り込まれ、少量のローム塊～粒、焼土粒を含む締まりの強い黒褐色土で埋没していた。また、掘方前景写真を見ると、床下土坑２は竪穴建物のさらに北側へ続いていることがわかる。こ

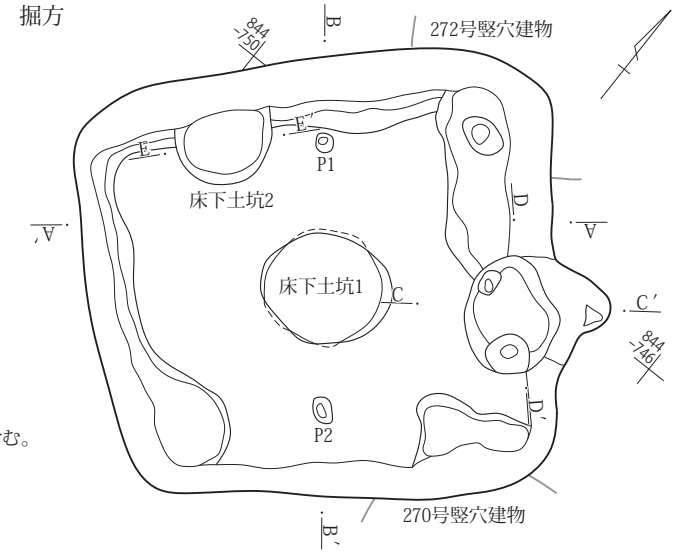


271号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粗塊～小塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒色土10YR2/1　ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まり弱い。
８．黄褐色土10YR5/8　As-YPを主体とする。粘性、締まり弱い。
９．黒褐色土10YR2/3　As-YPを少量、暗褐色土粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まり弱い。

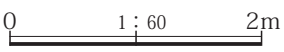
掘方



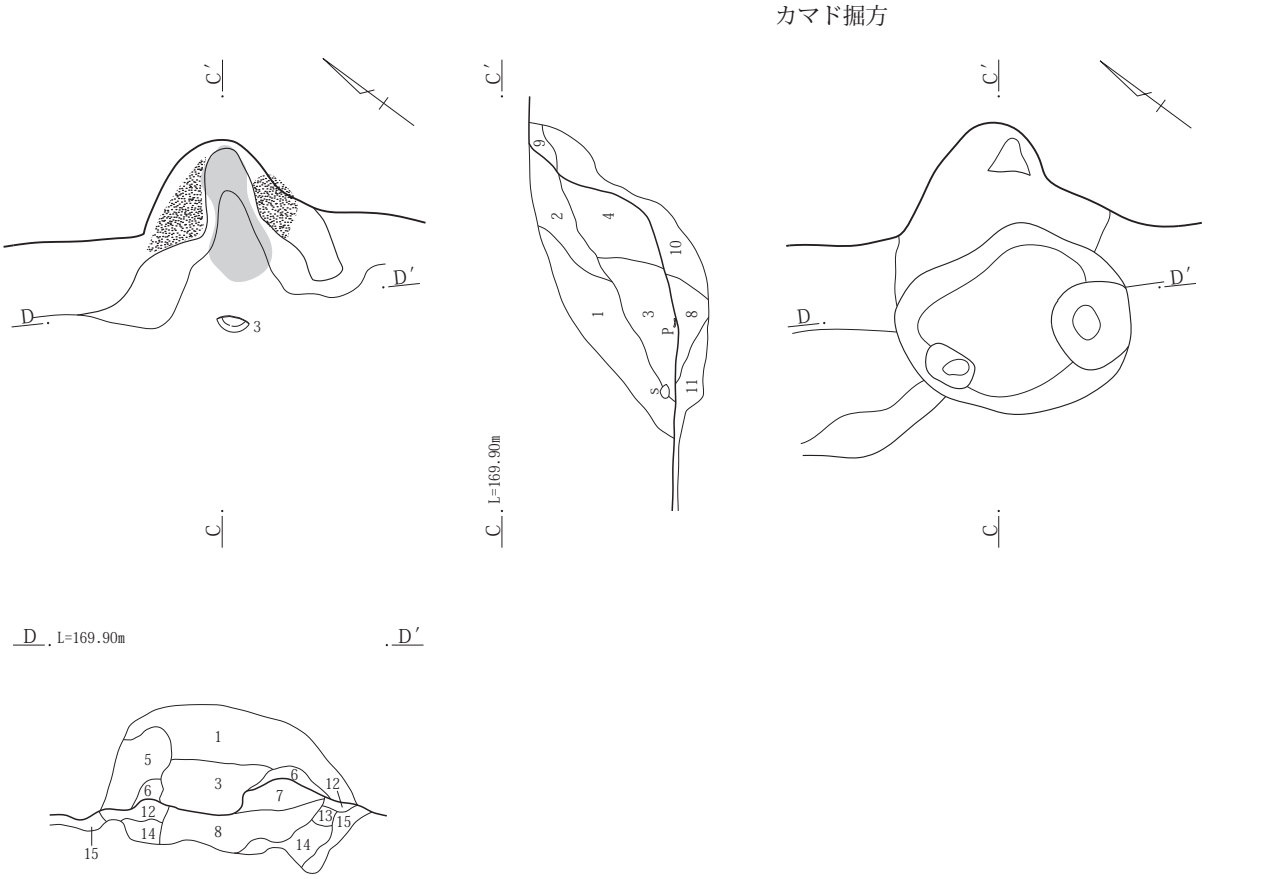


271号竪穴建物床下土坑２　Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒、焼土粒を少量含む。
　　粘性やや弱い。締まり強い。



第146図　271号竪穴建物



271号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊、焼土小塊を多量、下位に灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR3/2　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
７．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、粘土粒を多量、焼土粒、灰をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
８．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を多量、焼土塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
９．黒褐色土10YR2/3　焼土塊～小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
12．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性強い。締まりやや強い。
13．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
14．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
15．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

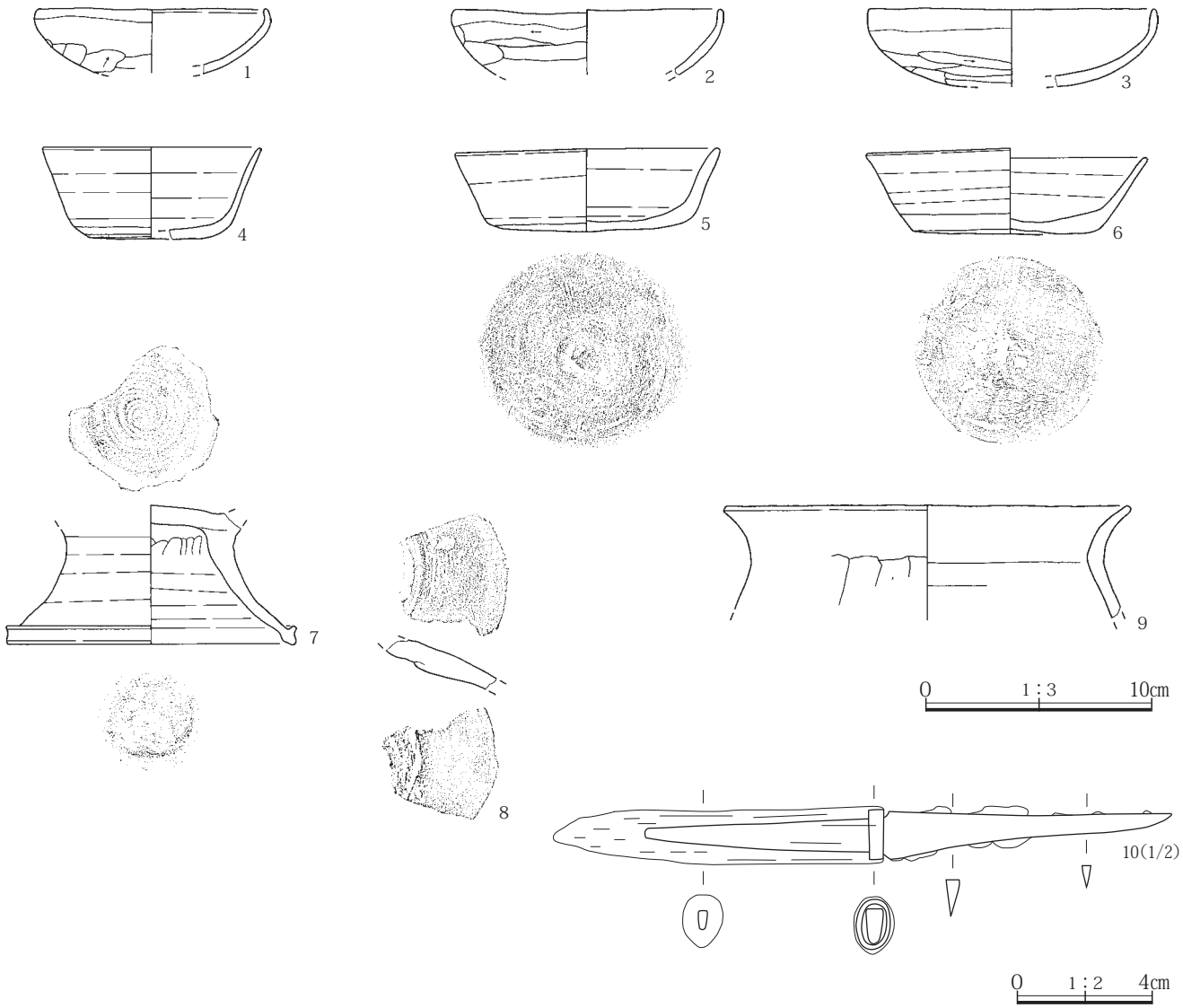
0　1：30　1m

第147図　271号竪穴建物カマド

のような状況から、床下土坑２は竪穴建物よりも古い土坑である可能性が高いと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯のうち５は北西壁際の床面に、６はカマド脇の床面に、それぞれ正位で置かれていたものである。土師器甕の口縁部破片（９）は、南隅の床面から出土しており、土師器杯（３）を除いて本竪穴建物のカマド付近から出土した遺物はない。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片47点（182ｇ）、甕・壺類破片56点（390ｇ）、須恵器の杯・椀類破片27点（170ｇ）、甕・壺類破片２点（46ｇ）が出土している。

所見　出土遺物から７世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



第148図　271号竪穴建物出土遺物

272号竪穴建物（第149・150図、PL.57～59・304・305）

位置　X＝40,844～40,848、Y＝－80,746～－80,749（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸3.12m、短軸2.90m

面積　7.029㎡

残存壁高　0.30m

方位　N－66°－E

重複　271号竪穴建物と重複し、272号竪穴建物が古い。ただし、出土遺物から想定される271号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.50m、燃焼部幅は0.40mで、壁外に0.35m燃焼部が伸びる。側壁や崩落した天井は、床下土坑から採取されたと思われる粘土を塊状に含む土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

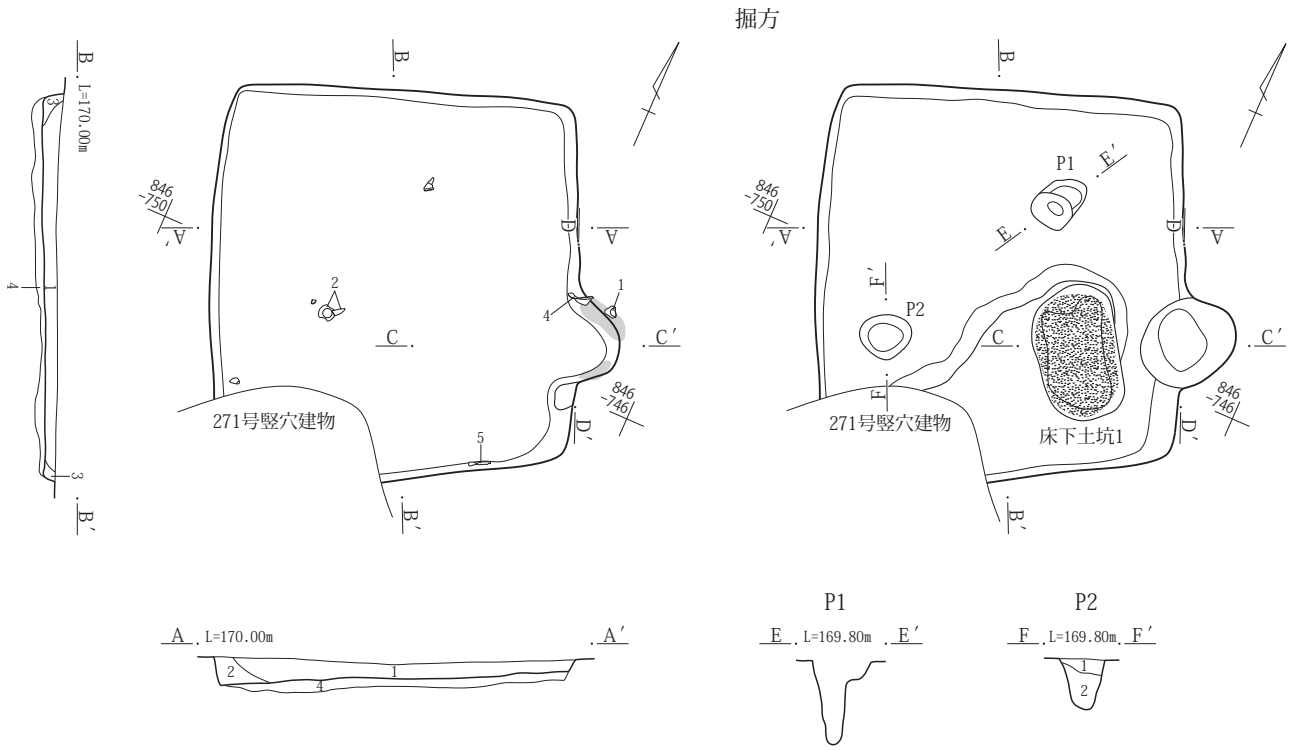
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであった。中央やや北寄りと中央やや西寄りの２か所で２基のピットを検出した。それぞれのピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が



272号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。

272号竪穴建物Ｐ２Ｆ－Ｆ′
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。

0　1：60　2m

第149図　272号竪穴建物

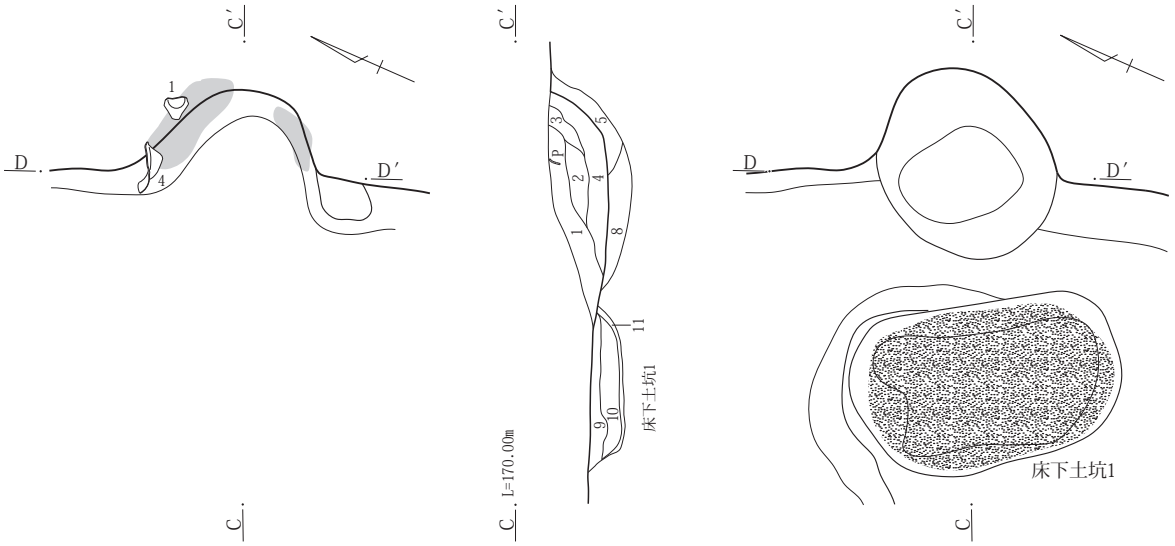
0.46×0.31×0.65m、Ｐ２が0.42×0.36×0.40m、形状はいずれも楕円形である。床面は微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

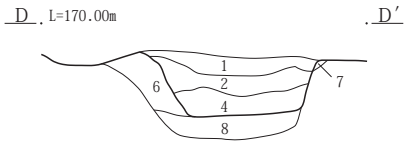
床下土坑　床下土坑１はカマド前に位置し、規模は長軸1.09m、短軸0.66m、深さ0.28mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。上層は層状にローム粒を含む黒褐色土で貼床されており、中層は少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。また、下層には土坑の底面を覆うようにローム塊を主体とするにぶい黄褐色土が貼られていた。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　埋没土中からは、底面に線刻のある須恵器杯（３）が出土している。また、ほぼ完形の須恵器杯（２）は、中央付近の床面に逆位で置かれていたものである。本竪穴建物から出土した土師器甕は１点（４）のみであったが、これはカマド内から出土したものである。また、南壁際の床面からは、鎌（５）が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片15点（86ｇ）、甕・壺類破片84点（444ｇ）、須恵器の杯・椀類破片29点（174ｇ）、甕・壺類破片10点（82ｇ）が出土している。このうち縄文土器（諸磯ｂ式）の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

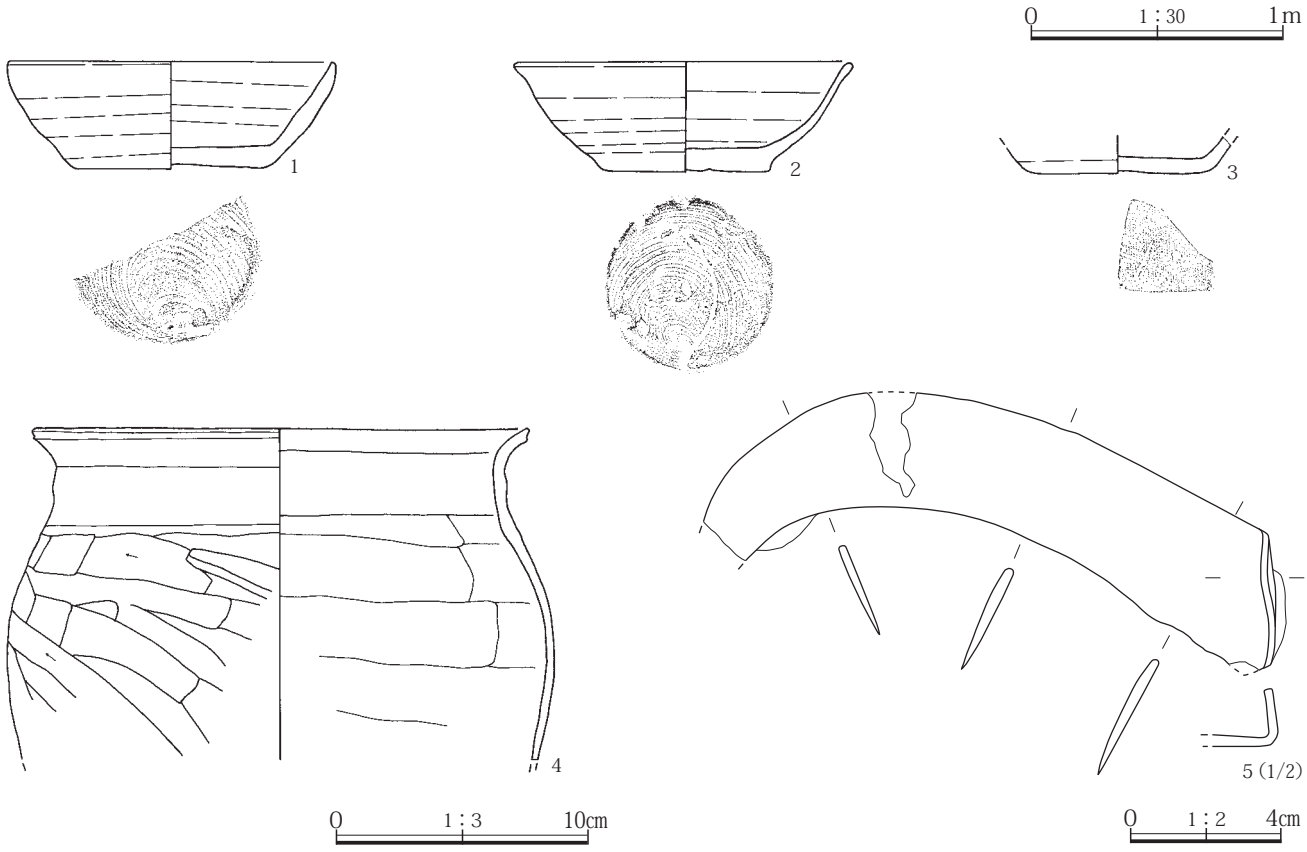
カマド掘方





272号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊、焼土小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　焼土小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒～細粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土細粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を層状に含む。粘性やや強い。締まり強い。
10．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
11．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まり強い。



第150図　272号竪穴建物カマドと出土遺物

273号竪穴建物（第151～155図、PL.60～62・305）

位置　X＝40,853～40,857、Y＝－80,735～－80,740（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸3.76m、短軸3.68m

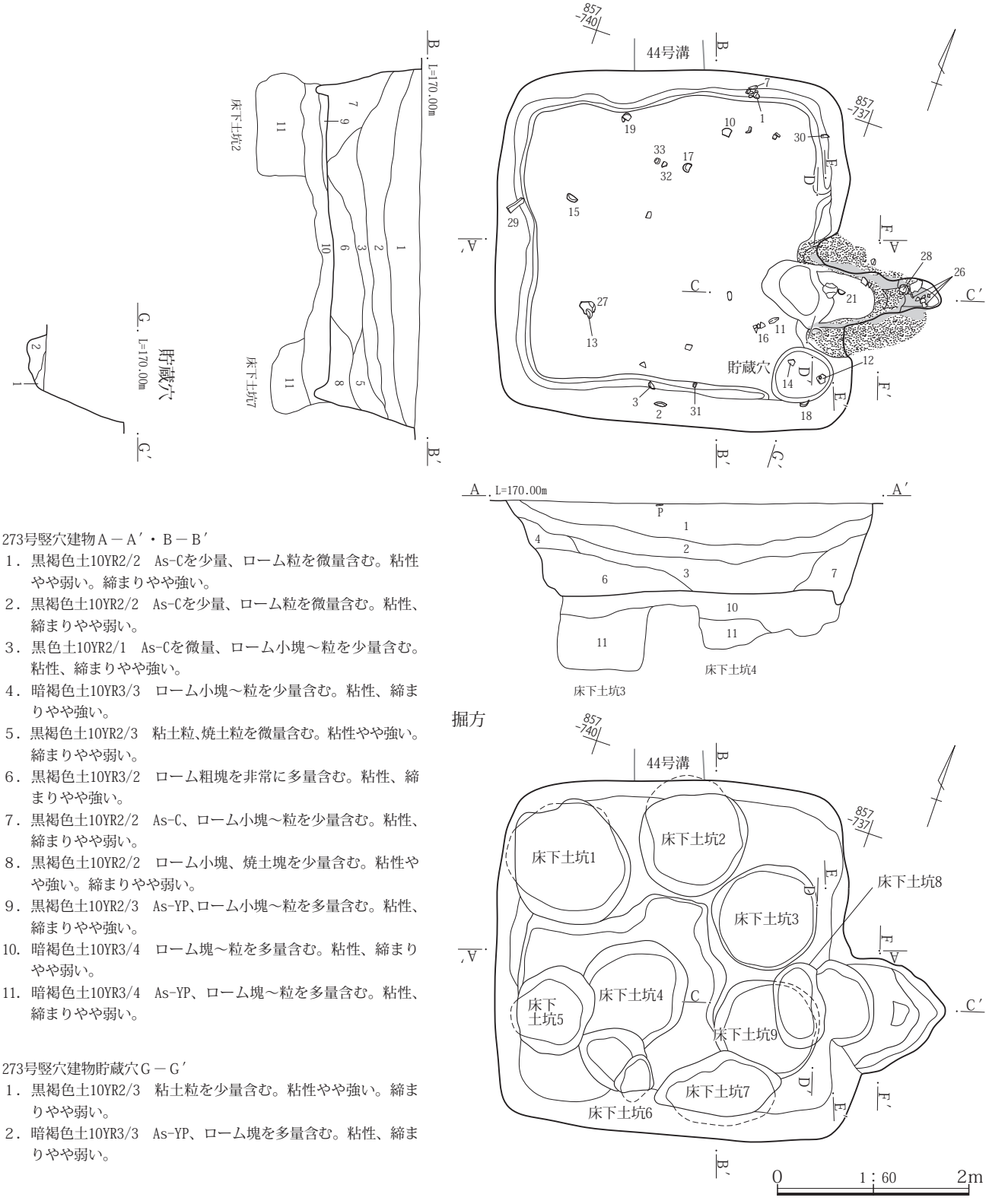
面積　9.626㎡

残存壁高　0.99m

方位　N－73°－E

重複　44号溝と重複し、273号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐



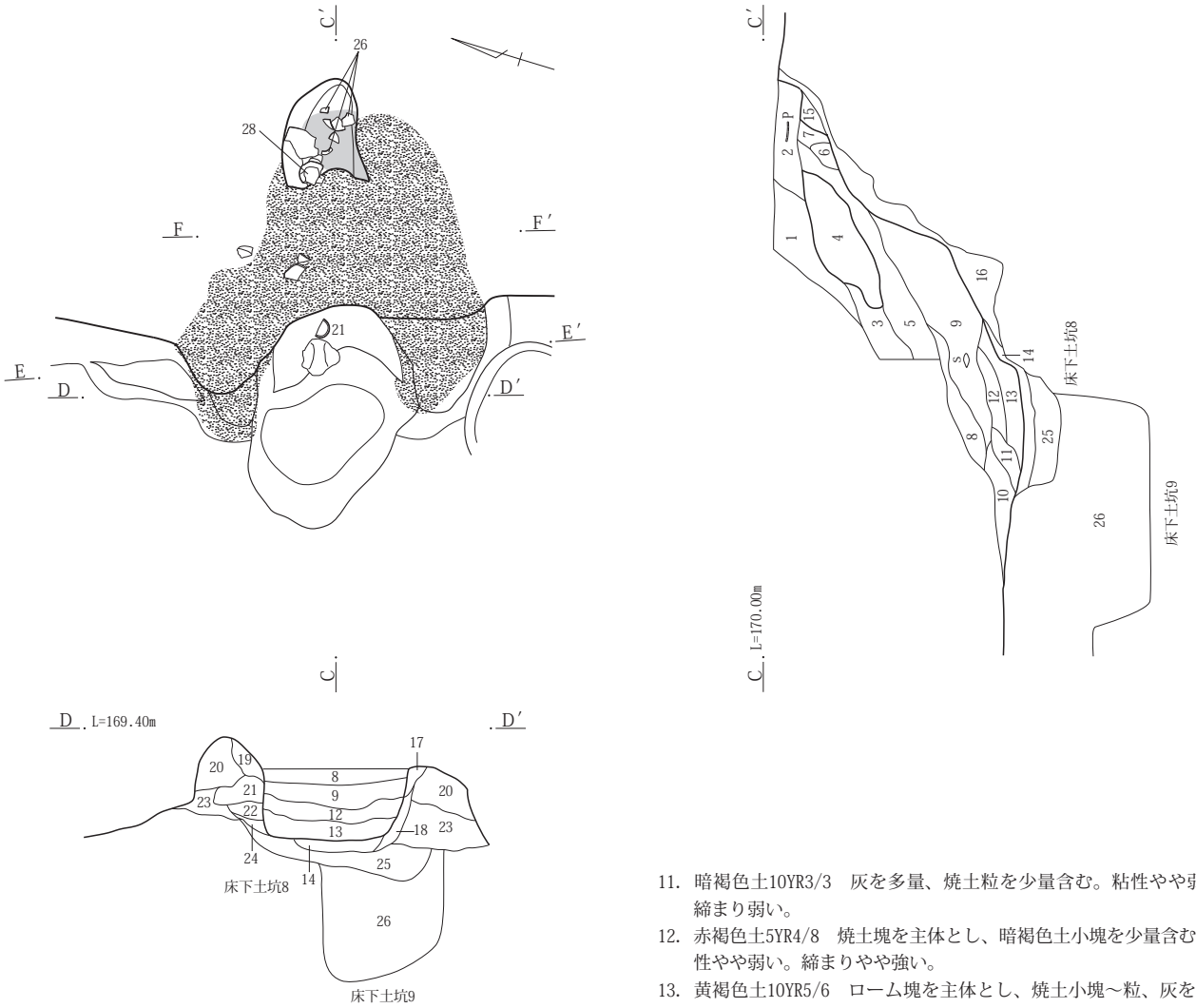
273号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒色土10YR2/1　As-Cを微量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　粘土粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR3/2　ローム粗塊を非常に多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊、焼土塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/4　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

273号竪穴建物貯蔵穴Ｇ－Ｇ′

1．黒褐色土10YR2/3　粘土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

第151図　273号竪穴建物

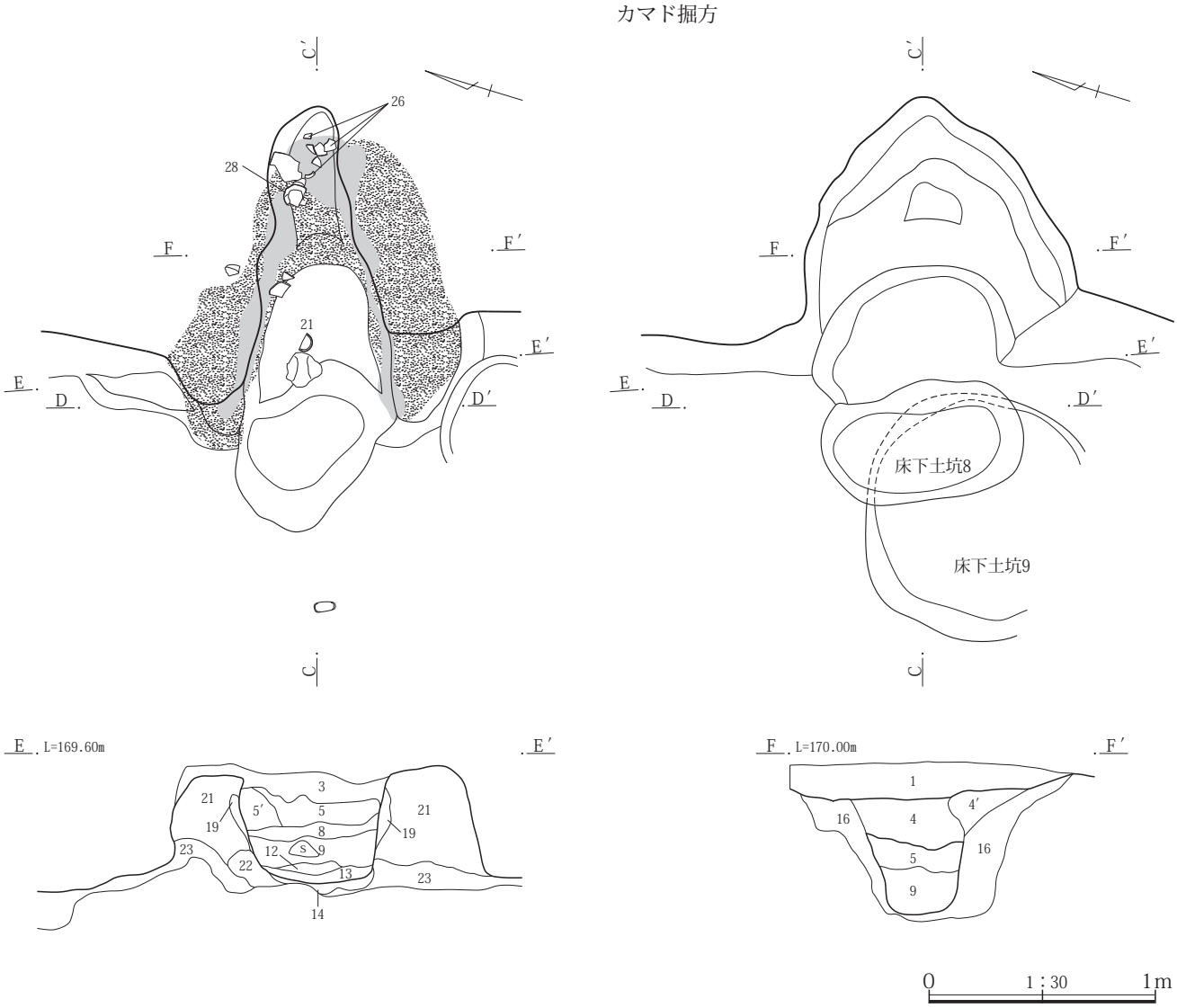


273号竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′・Ｆ－Ｆ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粗塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
4′.黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5′.黒褐色土10YR2/3　ローム塊を非常に多量、暗褐色土塊を多量、焼土小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
7．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR3/2　焼土塊～粒、灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．暗褐色土7.5YR3/3　ローム粒、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
10. 暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11. 暗褐色土10YR3/3　灰を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
12. 赤褐色土5YR4/8　焼土塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
13. 黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、焼土小塊～粒、灰をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
14. 暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
15. 黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
16. 暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
17. 暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
18. 暗褐色土10YR3/3　ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
19. 赤褐色土5YR4/8　20・21層土が焼土化したもの。粘性弱い。締まりやや強い。
20. にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
21. 黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
22. 褐色土7.5YR4/4　ローム小塊～粒、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
23. 暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粘土粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
24. 暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
25. 褐色土7.5YR4/4　焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
26. 暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第152図　273号竪穴建物カマド（１）



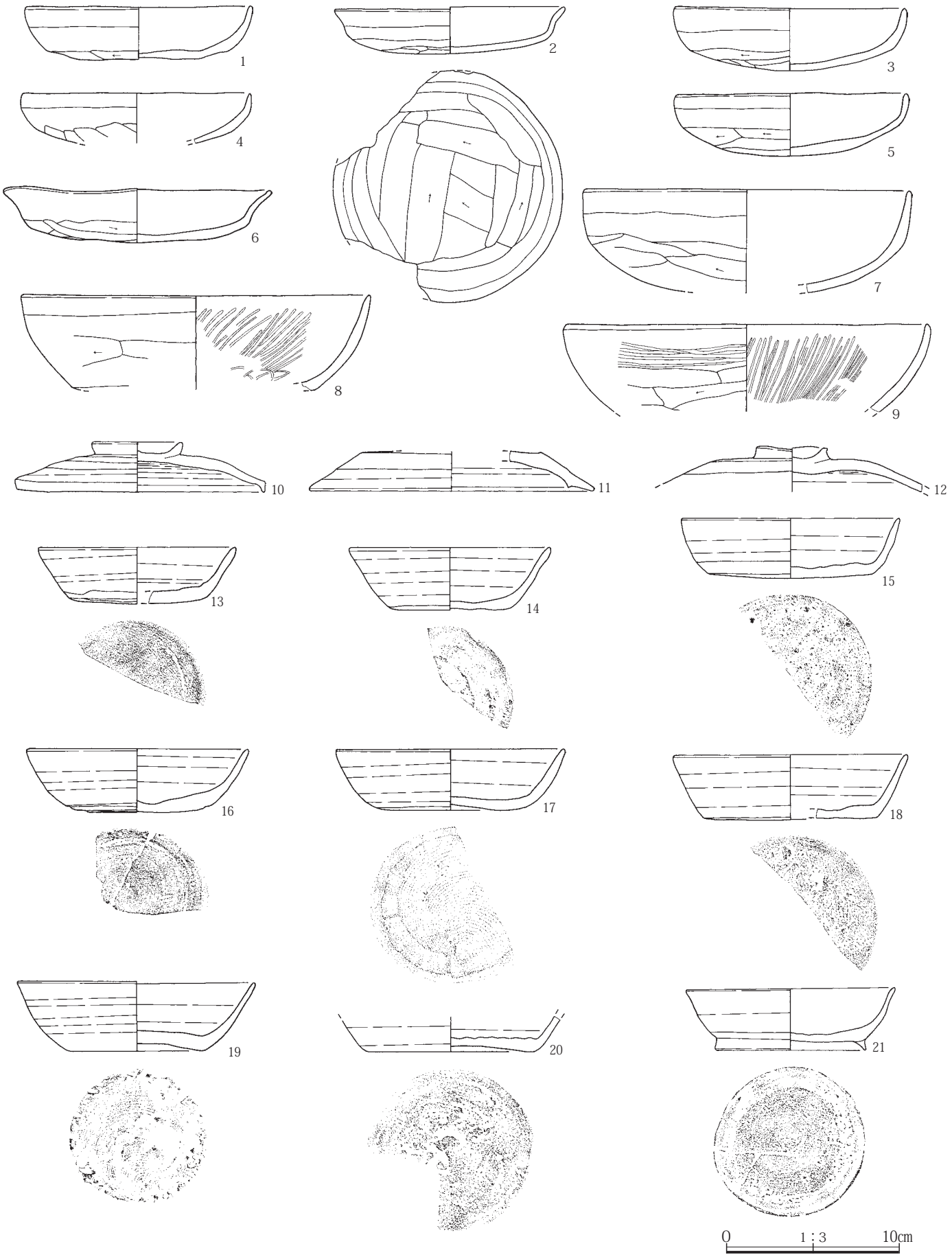
第153図　273号竪穴建物カマド（２）

色土で埋没していた。中層は微量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、または暗褐色土で埋没していた。下層は非常に多量のローム粗塊を含む黒褐色土で埋没していたが、これはカマドの一部が人為的に破壊された痕跡であると考えられる。また、壁際に堆積した少量のローム塊を含む黒褐色土は、壁の崩落土と考えられる。

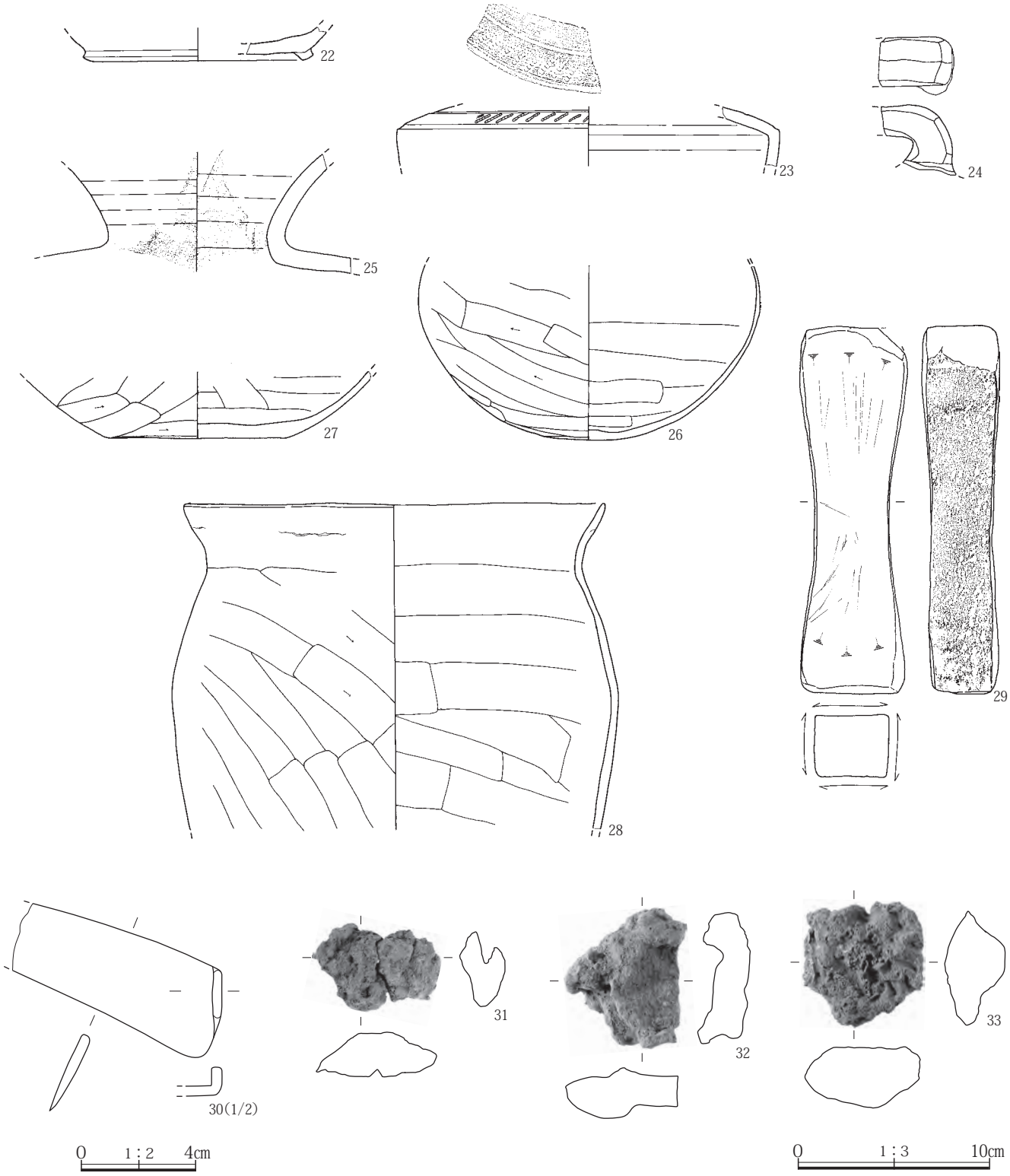
カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.52m、燃焼部幅は0.46mで、壁外に1.06m燃焼部・煙道が伸びる。天井、側壁、奥壁は、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。天井の大部分が残存していたことから、平面図は天井を残した状態と天井を取り外した状態の２段階に分けて提示した。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.08mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。なお、全景写真を見ると、本カマド横の壁上には、棚状の段差が認められる。この部分に関しては調査時に「掘り間違い」と判断されたようであるが、棚状施設である可能性も考えられる。その場合、棚状施設上面と床面の比高は、0.60m前後であると推測できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.63m、短軸0.58m、深さ0.19m、形状は楕円形に近い不整形である。上層は少量の粘土粒を含む黒褐色土、下層は多量のAs-YP、ローム塊を含む暗褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。



第154図　273号竪穴建物出土遺物（１）



第155図　273号竪穴建物出土遺物（２）

壁際溝　幅0.25～0.51m、深さ0.10～0.15mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はカマド前を除いてほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は、その大部分を床下土坑によって掘り込まれていたが、床下土坑のない部分でも床面からの深さは概ね0.10～0.50mと深かった。床面は多量のローム塊～

粒を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　９基の床下土坑の規模（長軸×短軸×深さ）は、床下土坑１が1.32×1.20×0.50m、床下土坑２が1.13×1.05×0.75mで、床下土坑３が1.11×1.08×0.78m、床下土坑４が(1.26)×1.08×0.45m、床下土坑５が0.92×0.80×0.48mで、床下土坑６が(0.90)×0.63×0.52m、床下土坑７が1.33×0.69×0.52m、床下土坑８が0.90×0.53×0.15m、床下土坑９が1.09×(1.01)×0.54mである。形状は床下土坑１～３・９が円形に近い楕円形、または円形に近い不整形、床下土坑４～７が楕円形に近い不整形、床下土坑８が楕円形で、床下土坑８を除いていずれも円筒状に深く掘り込まれていた。また、多くの床下土坑について底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。これら９基の床下土坑のうち床下土坑２～４・７は、いずれも多量のAs-YP、ローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑１・５・６・９については土層断面の記録はないものの、いずれも粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。一方、床下土坑８は浅く、底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　埋没土中からは多くの遺物が出土したが、床面から出土したものは須恵器杯(16)、鎌(30)などわずかである。また、埋没土中からは砥石(29)、鉄滓(31～33)が出土している。土師器甕は少なくとも３個体(26～28)が確認されているが、このうち26と28はカマド内から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片275点(1,600ｇ)、甕・壺類破片711点(4,400ｇ)、須恵器の杯・椀類破片292点(3,080ｇ)、甕・壺類破片34点(622ｇ)、瓦片１点、二次加工ある剝片(2.9ｇ)、礫１点(363.4ｇ)、剝片２点(20.3ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀中葉の竪穴建物であると考えられる。

274号竪穴建物（第156～158図、PL.62～64・306）

位置　Ｘ＝40,839～40,841、Ｙ＝－80,751～－80,756（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.98m、短軸3.22m

面積　9.552㎡

残存壁高　0.71m

方位　Ｎ－66°－Ｅ

重複　42号溝と重複し、274号竪穴建物が新しい。

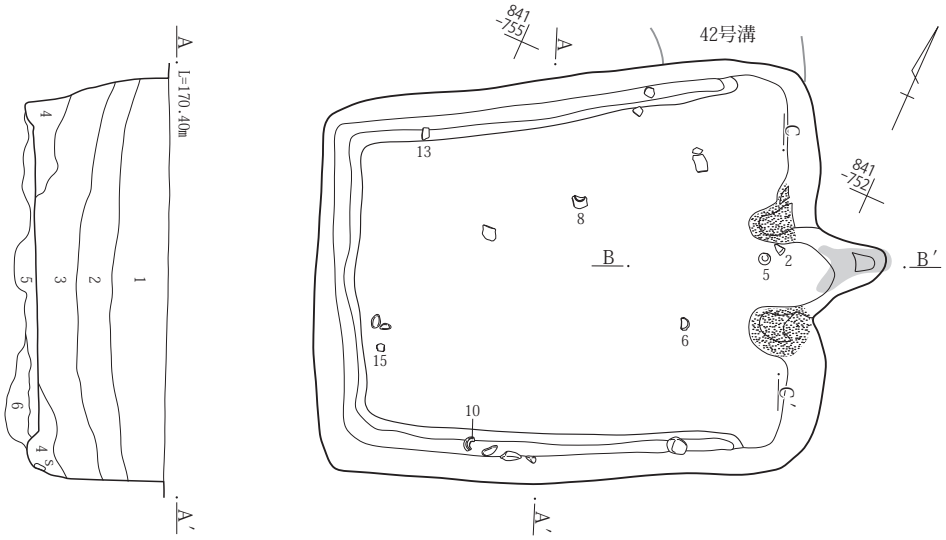
埋没土　上層は少量のAs-Cと微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-Cと、やや多量のローム塊～小塊、暗褐色土粗塊～小塊を含む黒色土、またはやや多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁のほぼ中央に位置する。残存長は1.09m、燃焼部幅は0.50mで、壁外に0.56m燃焼部・煙道が伸びる。両袖とも基部が残存していたが、これらは床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、奥壁にも多量の粘土塊を含む土が貼られていた。両袖の基部が残存していたにもかかわらず袖石が検出されなかった。このことから、もともと袖石は存在しなかった可能性が高いと考えられる。ただし、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出したことから、カマドの作り替えに伴って袖石が外された可能性が考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。平面図には示されていないが、カマド前の床面は広く窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.12mであった。その要因として、床下土坑１の影響で床面が沈んだ可能性が考えられる。

柱穴　検出されなかった。

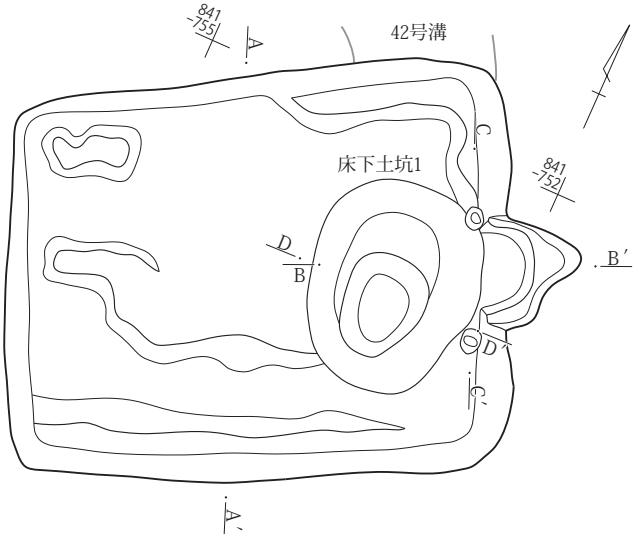
貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　東壁を除く範囲から、幅0.28～0.40m、深さ0.01～0.11mの壁際溝を検出した。やや多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

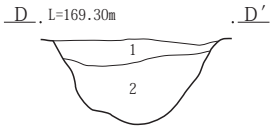


274号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒色土10YR2/1　As-Cを微量、ローム塊～小塊、暗褐色土粗塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　As-YPを少量、ローム塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まりやや弱い。

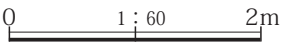
掘方



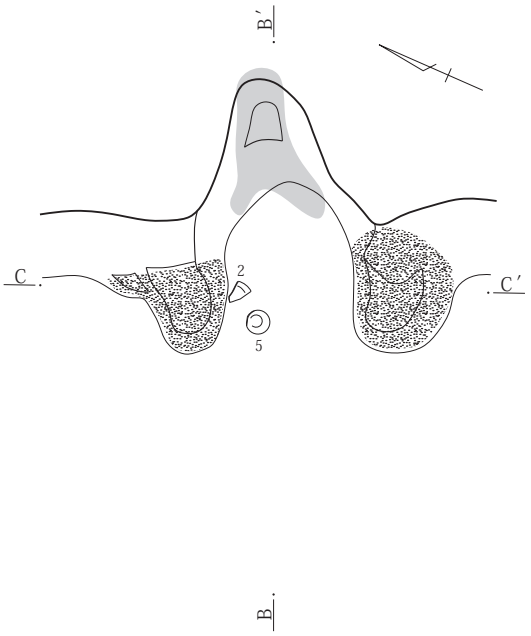
床下土坑１

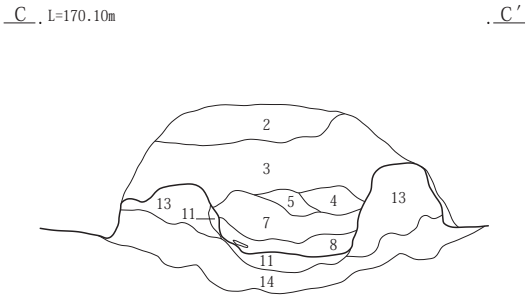


274号竪穴建物床下土坑１Ｄ－Ｄ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

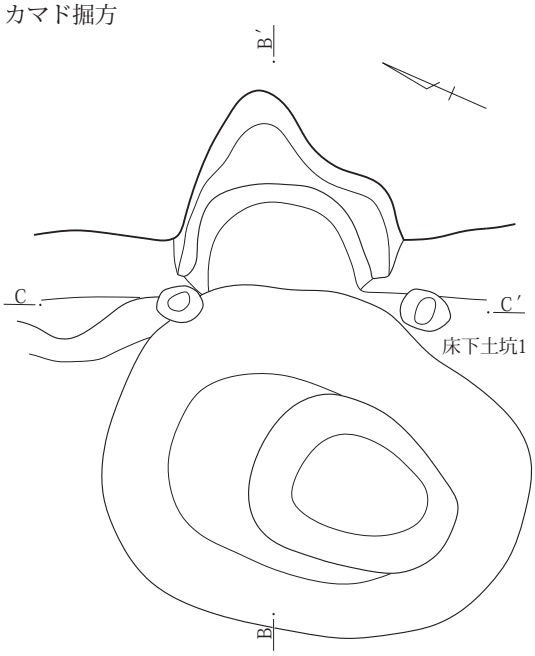


第156図　274号竪穴建物



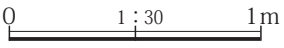


カマド掘方

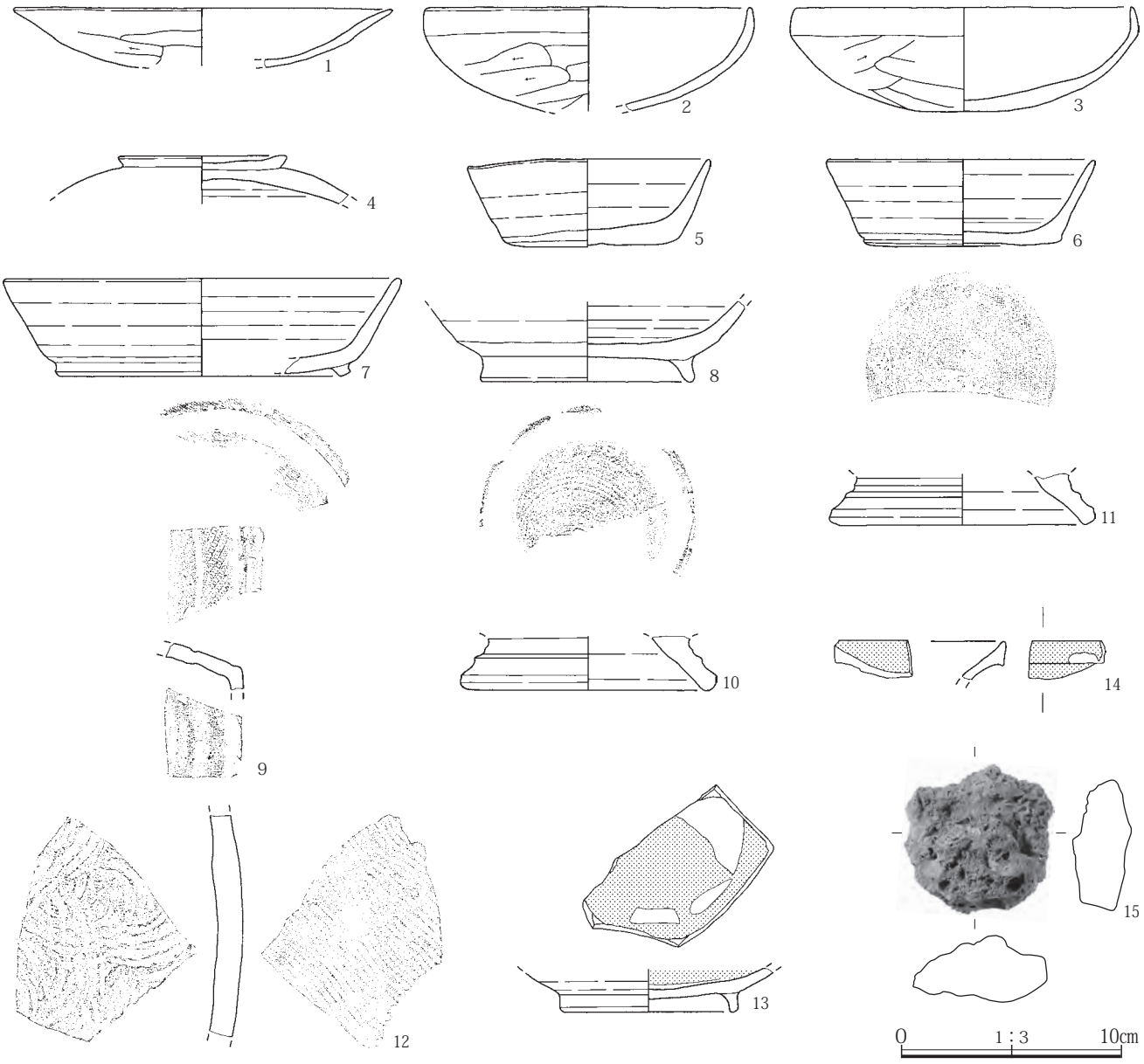


274号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒色土10YR2/1　ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒色土10YR2/1　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～粒を非常に多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊を非常に多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム粒､焼土塊～粒､灰を少量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
9．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
10. 赤褐色土5YR4/6　ローム塊を主体とし、上半が焼土化している。粘性、締まりやや強い。
11. 黒褐色土10YR2/3　ローム小塊､焼土塊をやや多量､灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
12. 黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊、焼土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
13. にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊～小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
14. 黒色土10YR2/1　ローム粗塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。



第157図　274号竪穴建物カマド



第158図　274号竪穴建物出土遺物

床面　床面はカマド前を除いてほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.05～0.15mであった。ただし、南壁付近ではやや深く、床面からの深さは最大で0.27mであった。床面は多量のAs-YP、ローム粗塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は東壁際の中央付近に位置し、規模は長軸1.68m、短軸1.36m、深さ0.68mである。形状は楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。上層は多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む黒褐色土、下層はやや多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられ、その上にカマドが構築されていた。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　埋没土中からは多くの遺物が出土したが、床面から出土したものは須恵器杯（６）などわずかである。また、ほぼ完形の須恵器杯（５）は、カマドの焚口付近に正位で置かれていたものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片27点（139ｇ）、甕・壺類破片138点（742ｇ）、須恵器の杯・椀類破片67点（560ｇ）、甕・壺類破片32点（850ｇ）、瓦片１点が出土している。

所見　出土遺物から７世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

275号竪穴建物（第159・160図、PL.64～66・306）

位置　Ｘ＝40,843～40,846、Ｙ＝－80,756～－80,760（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.44m、短軸2.93m

面積　8.368㎡

残存壁高　0.79m

方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　280号竪穴建物と重複し、275号竪穴建物が古い。

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒色土、または少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、または多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.97m、燃焼部幅は0.43mで、壁外に0.50m燃焼部・煙道が伸びる。向かって右側の袖はほぼ消失していたが、左側の袖は基部が残存していた。これらの袖は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、奥壁にも多量の粘土塊を含む土が貼られていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.10mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　幅0.11～0.33m、深さ0.05～0.10mの全周する壁際溝を検出した。やや多量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

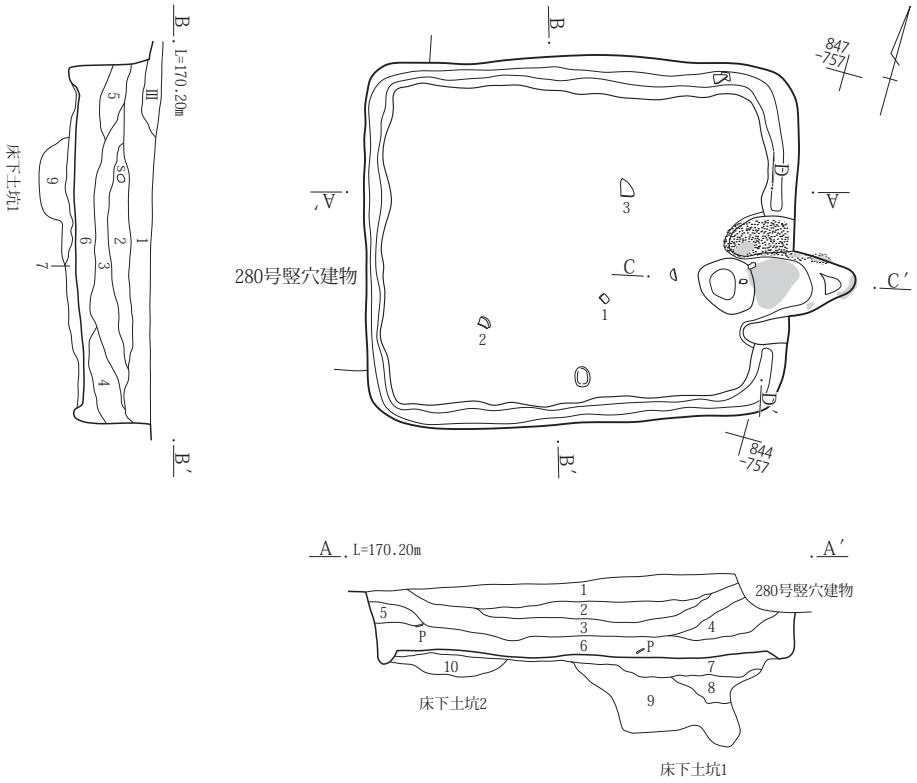
床面　床面はカマド前を除いてほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床下土坑を除いた範囲における床面からの深さは概ね0.03～0.30mであった。カマド前の床下から検出したＰ１の規模は、長軸0.30m、短軸0.23m、深さ0.40m、形状は楕円型である。床面はやや多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む黒色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は北西隅に位置し、規模は長軸1.15m、短軸0.94m、深さ0.54mである。形状は円形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が一部袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。やや多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。一方、床下土坑２は北東隅に位置し、規模は長軸1.09m、短軸0.79m、深さ0.18mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。しかし、掘方全景写真を見る限り、完全に掘り上がっているようには見えないことから、実際の大きさや深さはこの数値より大きくなる可能性が高い。埋没土は、多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む締まりのやや強い黒褐色土で、縄文時代の貯蔵穴など、本竪穴建物よりも古い土坑である可能性が考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　本竪穴建物は出土遺物が少なく、床面に近い位置から出土した土器は土師器杯（１）のみである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片15点（60ｇ）、甕・壺類破片88点（479ｇ）、須恵器の杯・椀類破片20点（217ｇ）、甕・壺類破片５点（270ｇ）、削器１点（2.8ｇ）、剥片３点（46.9ｇ）が出土している。このうち縄文土器（有尾式）の口辺部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

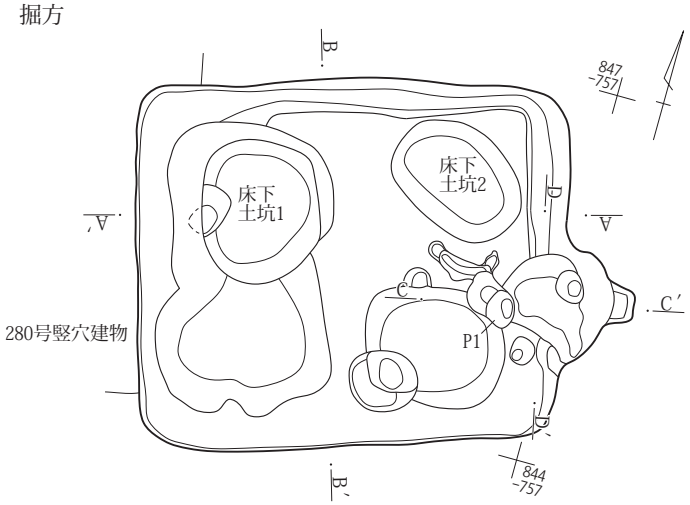
所見　出土遺物から８世紀第２四半期の竪穴建物であると考えられる。

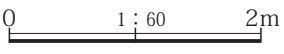


275号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

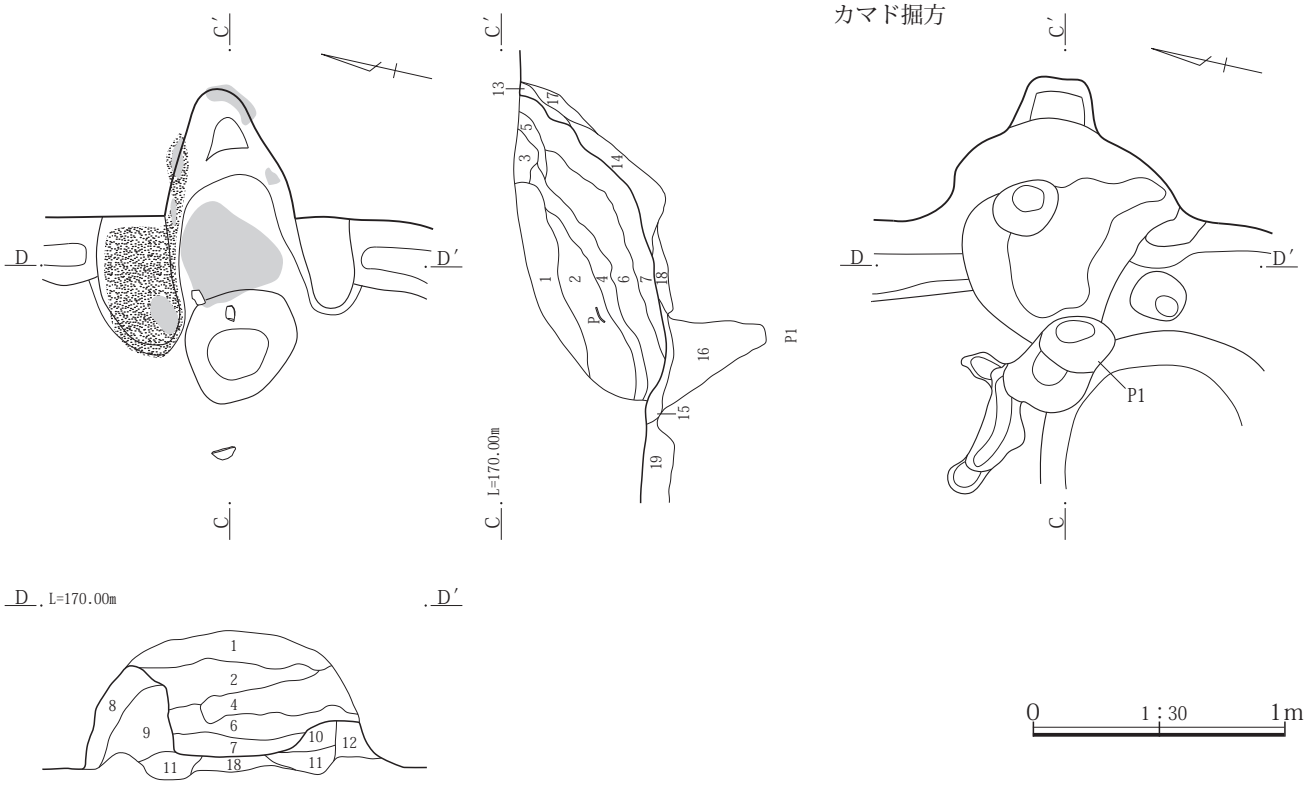
Ⅲ．黒褐色土10YR3/1　As-Bを含む。
１．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒色土10YR2/1　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．黒色土10YR2/1　As-YP、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
８．暗褐色土10YR3/4　As-YPを非常に多量、黒褐色土粗塊を少量含む。粘性、締まり非常に弱い。
９．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

掘方



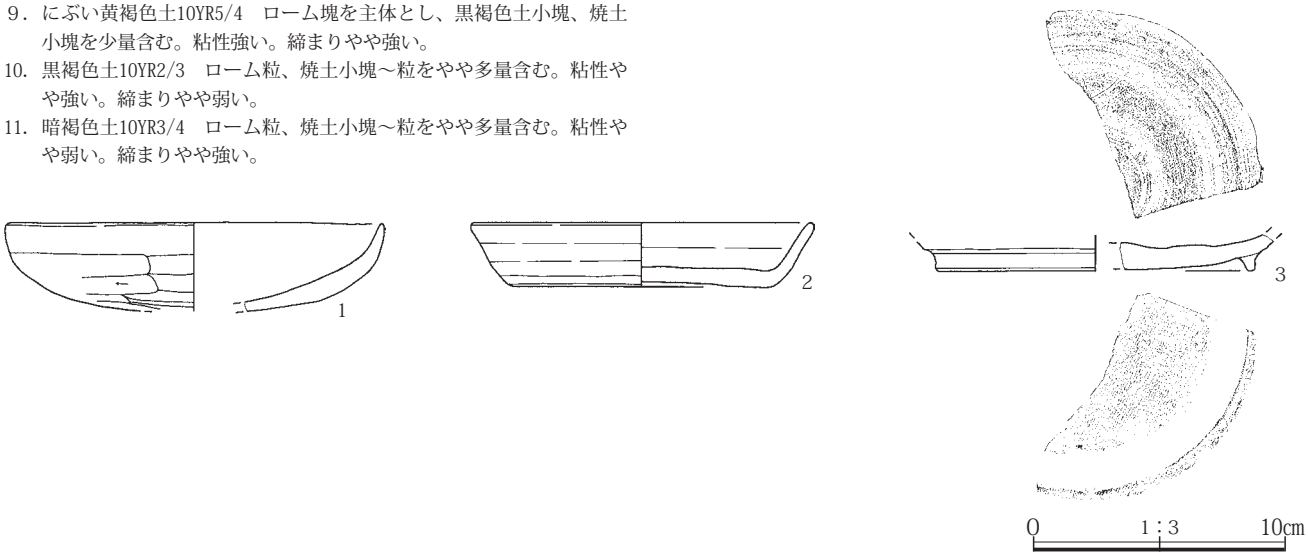


第159図　275号竪穴建物



275竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．黒色土10YR2/1　ローム塊～粒、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、焼土粗塊を多量、黒褐色土塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒色土10YR2/1　ローム塊をやや多量、粘土粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。粘性強い。締まりやや強い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
13．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
14．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
15．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
16．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まり弱い。
17．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
18．赤褐色土5YR4/8　ローム塊を主体とする土が焼土化したもの。粘性弱い。締まりやや強い。
19．黒色土10YR2/1　As-YP、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。



第160図　275号竪穴建物カマドと出土遺物

276号竪穴建物（第161～163図、PL.66・67・306）

位置　Ｘ＝40,853～40,858、Ｙ＝－80,747～－80,752（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸4.41m、短軸3.60m

面積　8.648㎡

残存壁高　0.36m

方位　Ｎ－72°－Ｅ

重複　284号竪穴建物と重複し、276号竪穴建物が古い。

埋没土　少量のAs-C、ローム粗塊～塊、微量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.93m、燃焼部幅は0.61mで、壁外に0.80m燃焼部が伸びる。大部分が重複する284号竪穴建物によって壊されているため詳細は不明であるが、袖石や支脚は検出されなかった。掘方調査で検出したＰ１は、多量のローム小塊～粒、焼土粒を含んでいたことから、本竪穴建物に帰属する遺構であると判断した。

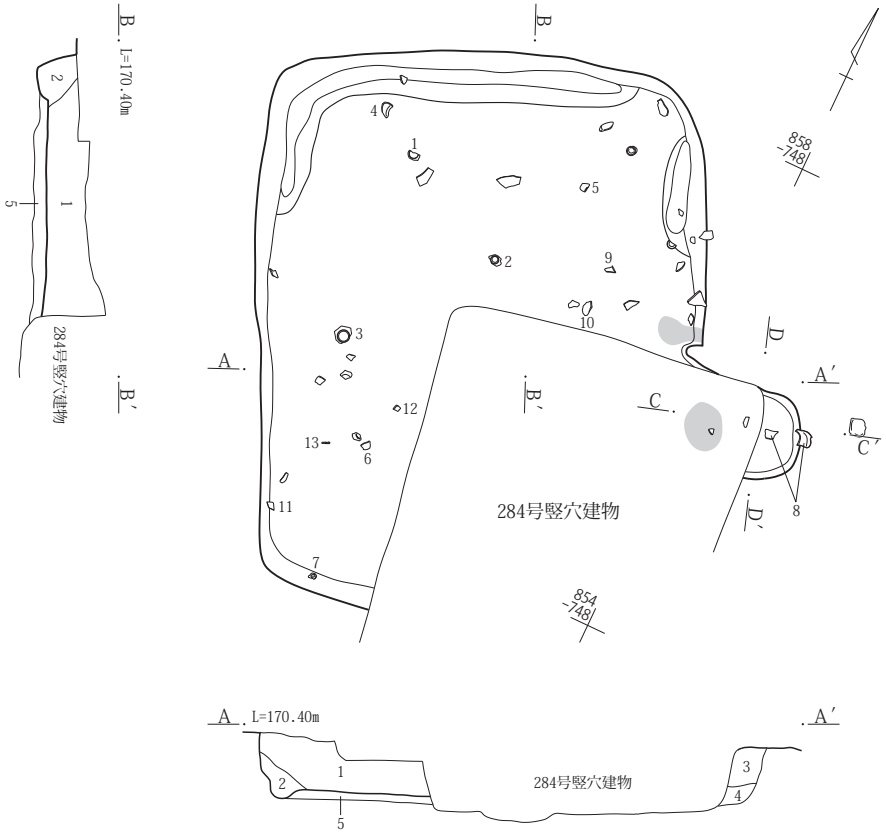
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　北壁を中心に幅0.32～0.42m、深さ0.02～0.07mの壁際溝を検出した。微量のAs-Cを含む黒色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.04～0.07mであった。カマド燃焼部の下から検出し

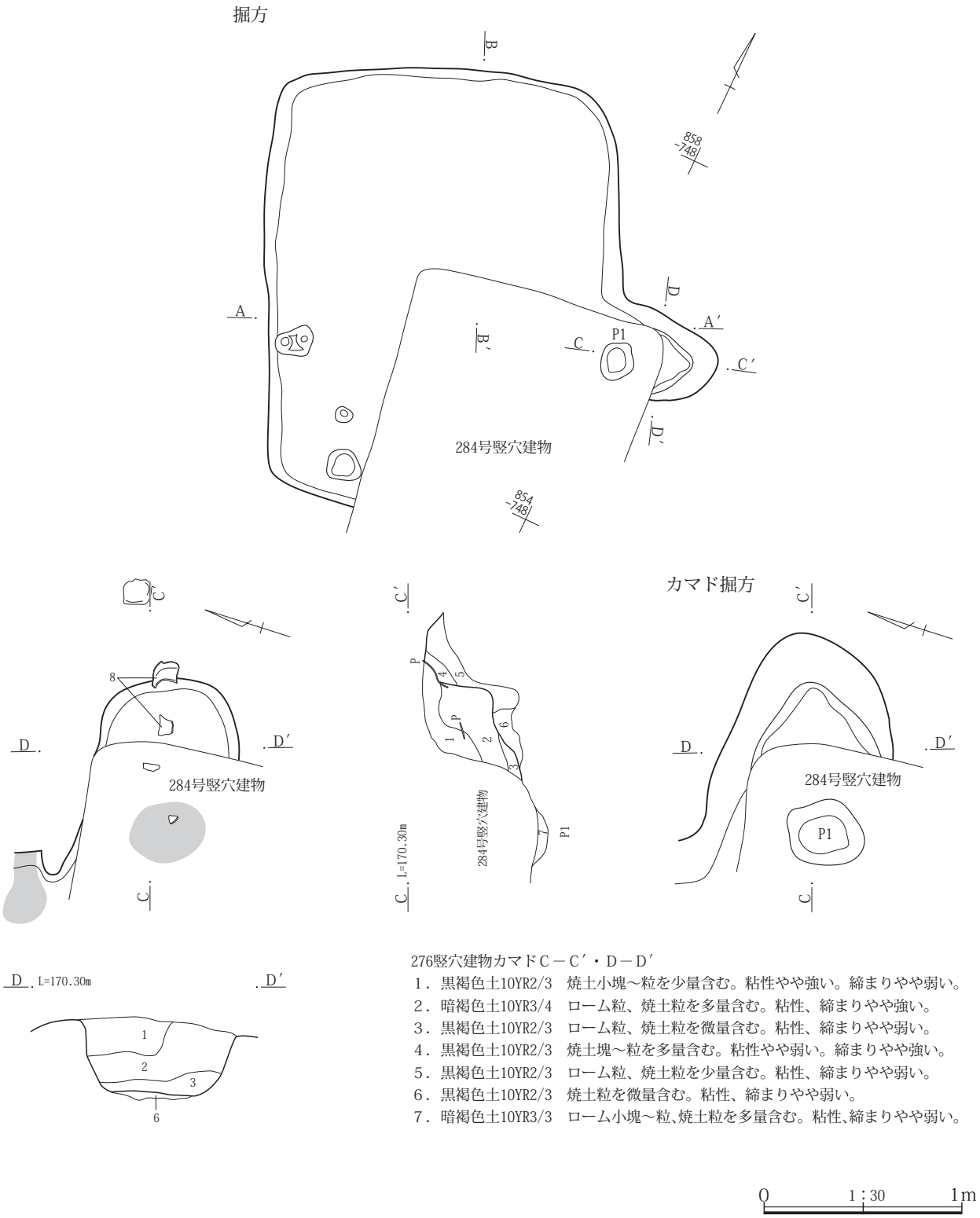


276号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粗塊～塊を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒色土10YR2/1　As-Cを微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を微量、細砂を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
5．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

0　1：60　2m

第161図　276号竪穴建物



276竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　焼土小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　焼土塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

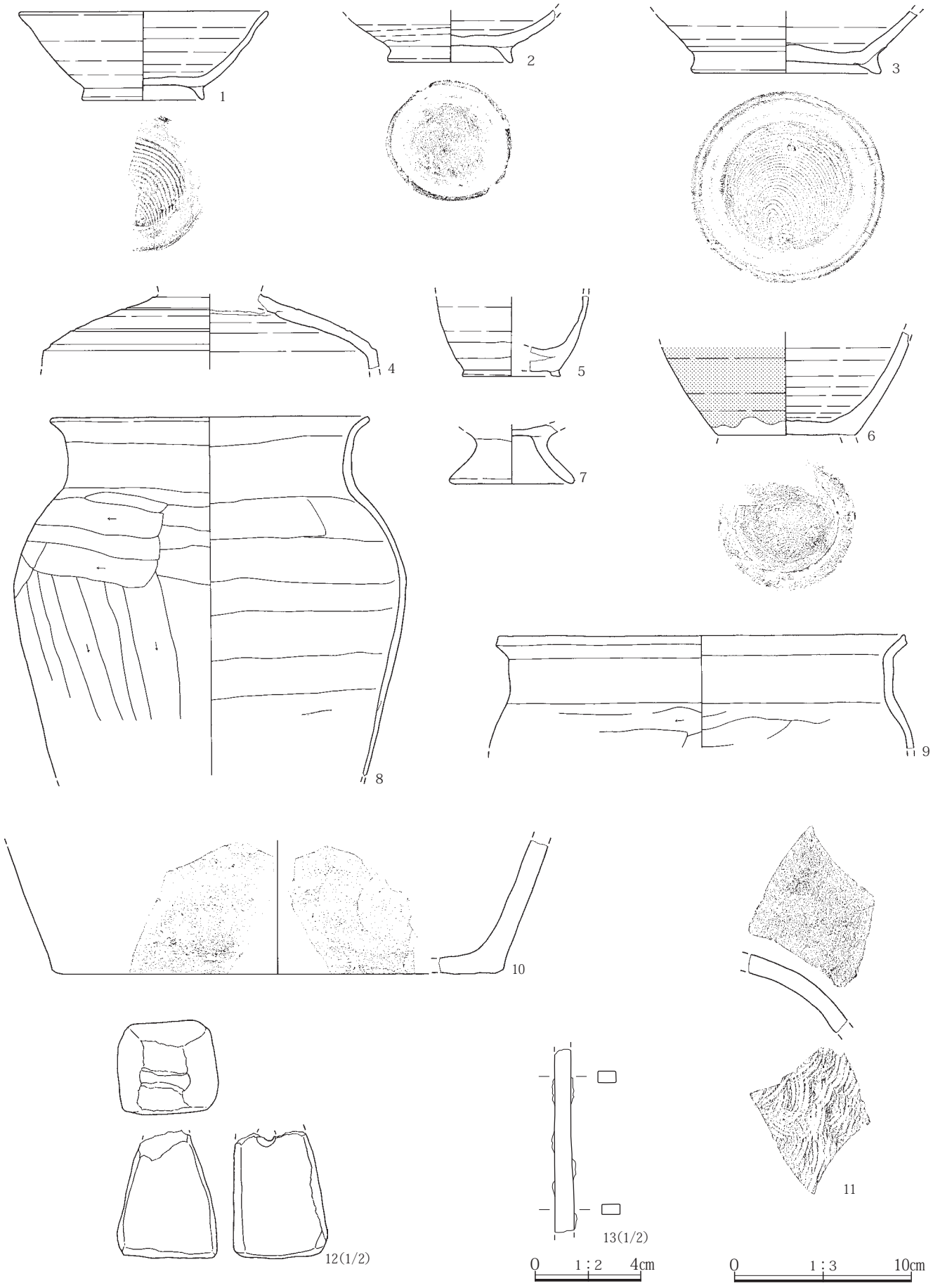
0　1：30　1m

第162図　276号竪穴建物掘方・カマド

たＰ１の規模は、長軸0.41m、短軸0.35m、深さ0.20m、形状は楕円型に近い不整形である。床面は微量のAs-C、ローム粒を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　中央付近の床面から権錘(12)が出土したことが特筆される。この権錘は砥沢石製で、重量は82.8ｇである。また、須恵器杯(１)、須恵器短頸壺(３)、灰釉陶器長頸壺(６)が床面から出土している。土師器甕は少なくとも２個体(８・９)が確認されているが、このうち８



第163図　276号竪穴建物出土遺物

はカマド内から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片45点(131ｇ)、甕･壺類破片232点(1,209ｇ)、須恵器の杯・椀類破片110点(1,150ｇ)、甕・壺類破片56点(2,540ｇ)、瓦片１点、礫１点(145.2ｇ)、剝片２点(14.4ｇ)が出土している。このうち礫(14)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

278号竪穴建物(第164～171図、PL.67～70･306～309)

位置　Ｘ＝40,849～40,853、Ｙ＝－80,759～－80,763(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸3.61m、短軸3.03m

面積　8.187㎡

残存壁高　0.27m

方位　Ｎ－85°－Ｅ

重複　なし

埋没土　多量のAs-YP、少量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。中央付近の床面直上に堆積した多量のローム塊と少量の焼土粒を含む土は、カマドの崩落土であると考えられる。また、東壁付近に堆積したローム塊を主体とする黄褐色土は、竪穴建物を縮小した際に行われた貼壁の痕跡である可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.87m、燃焼部幅は0.35mで、壁外に0.43m燃焼部が伸びる。両袖や側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上にも多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.35mである。袖石は検出されなかったが、両袖部の内壁には丸瓦が立てられていた。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.10mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.68m、短軸0.56m、深さ0.28m、形状は楕円形である。上層は微量のローム粒、焼土粒、少量の炭化物粒を含む黒褐色土、下層はやや多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没しており、土器片や礫が廃棄されていた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

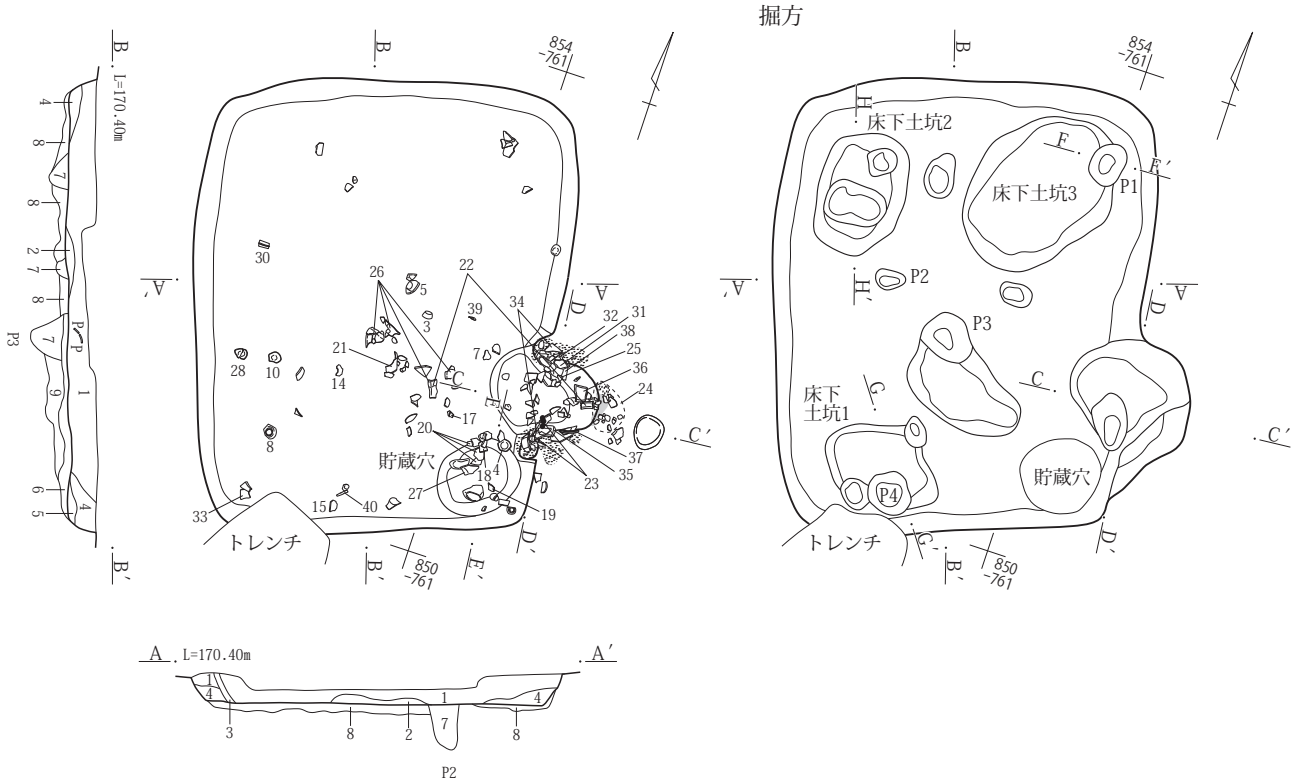
壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床下土坑を除いた範囲における床面からの深さは概ね0.04～0.15mであった。掘方調査で検出した掘り込みのうち、形状がはっきりしている３基を床下土坑とした。また、掘方調査では４基のピットを検出したが、それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.35×0.25×0.34m、Ｐ２が0.24×0.16×0.35m、Ｐ３が0.42×0.34×0.31m、Ｐ４が0.36×0.33×0.31m、形状はＰ１・２が楕円形、Ｐ３・４が不整形である。床面は微量のローム粒、または少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていたが、南半ではさらにその上層にやや多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土が貼られていた。

床下土坑　３基の床下土坑は、それぞれ南西隅、北西隅と北東隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が0.77×0.70×0.31m、床下土坑２が0.98×0.80×0.33m、床下土坑３が1.39×1.02×0.18mである。形状は床下土坑１が不整形、床下土坑２・３が楕円形で、いずれも浅い皿状に掘り込まれていた。床下土坑１は少量のローム粒を含む黒褐色土、床下土坑２･３は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。これらの床下土坑はいずれも浅く、底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　「土」と書かれた須恵器椀(11)が出土したことが特筆される。須恵器杯(４)はカマド脇から、土師器小型甕(19)と土師器甕(27)は貯蔵穴から出土したものである。土師器甕は少なくとも８個体(20～27)が確認されているが、このうち21・26・27を除くすべてがカマド内から出土したものである。羽釜２点(29・30)は、西壁寄りの床面近くから出土した。また、カマド内からは多くの瓦も出土したが、これらはいずれもカマドの構築材として使用されたものであると考えられる。このうち35と38



278号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを多量、焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム塊を多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。粘性、締まり強い。
４．黒褐色土10YR2/3　As-C、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
５．黒褐色土10YR2/2　ローム塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
６．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～小塊をやや多量、焼土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
７．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
８．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。
９．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。

278竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量、炭化物粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

278竪穴建物Ｐ１Ｆ－Ｆ′

１．黒色土10YR2/1　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

278竪穴建物床下土坑１Ｇ－Ｇ′

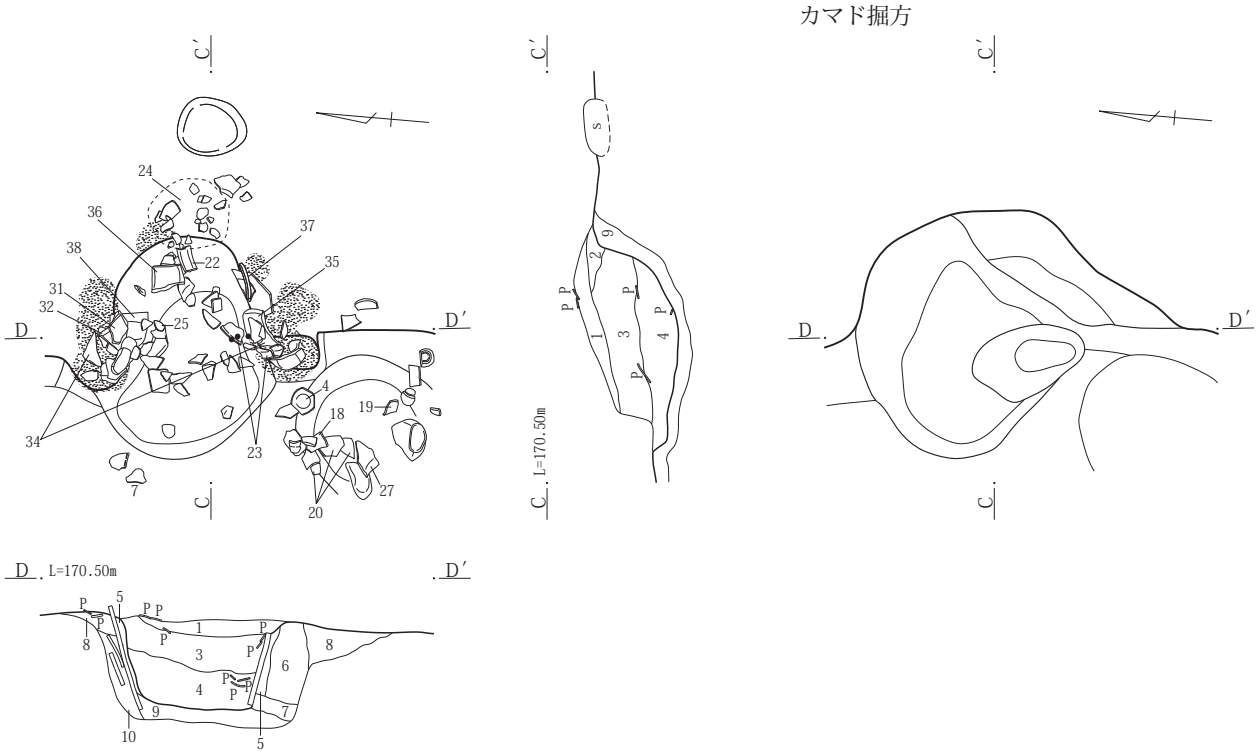
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

278竪穴建物床下土坑２Ｈ－Ｈ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第164図　278号竪穴建物



278竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

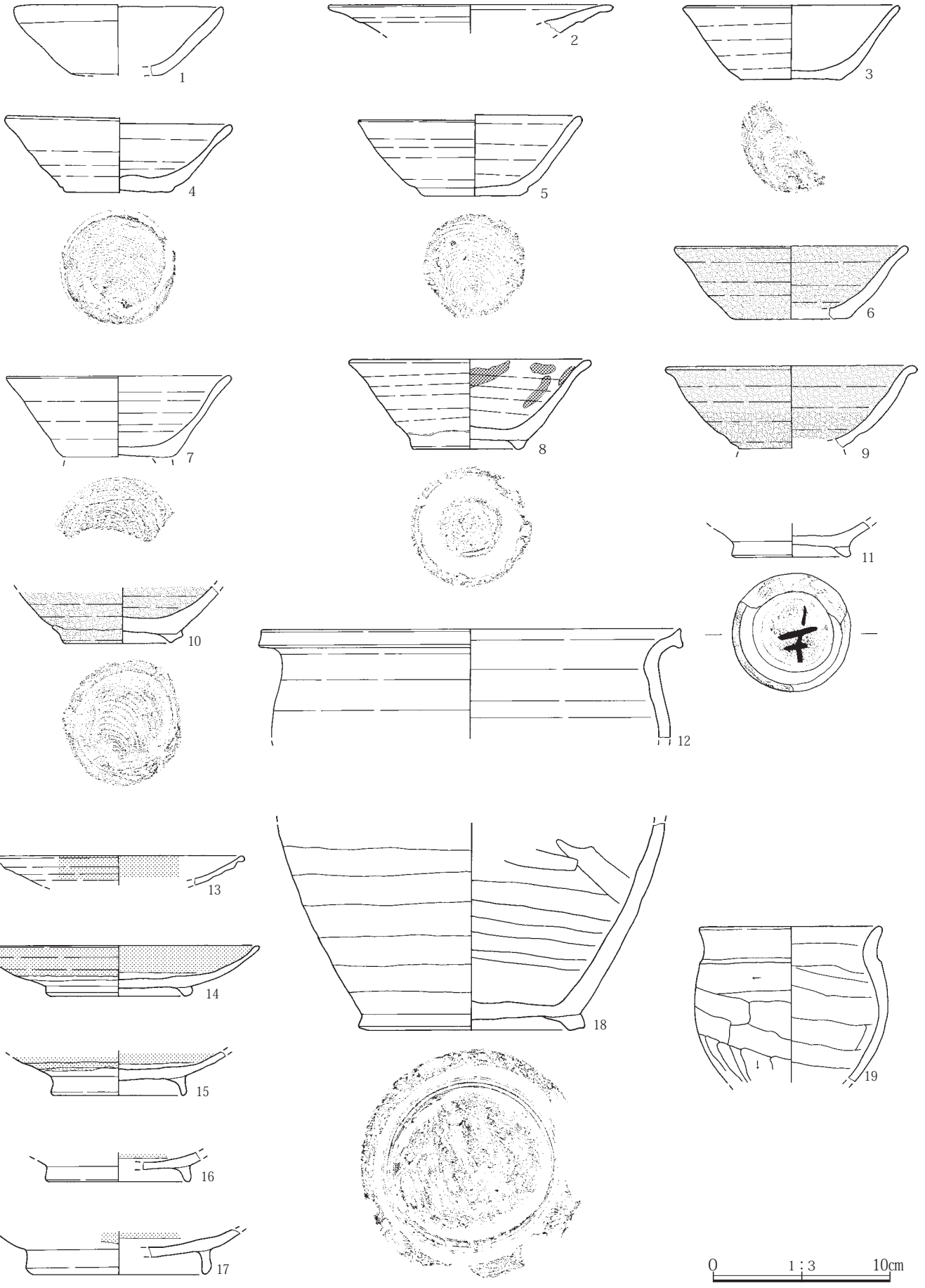
1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム塊、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粗塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．暗褐色土7.5YR3/3　ローム細粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊をやや多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒を多量、焼土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊、黒褐色土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

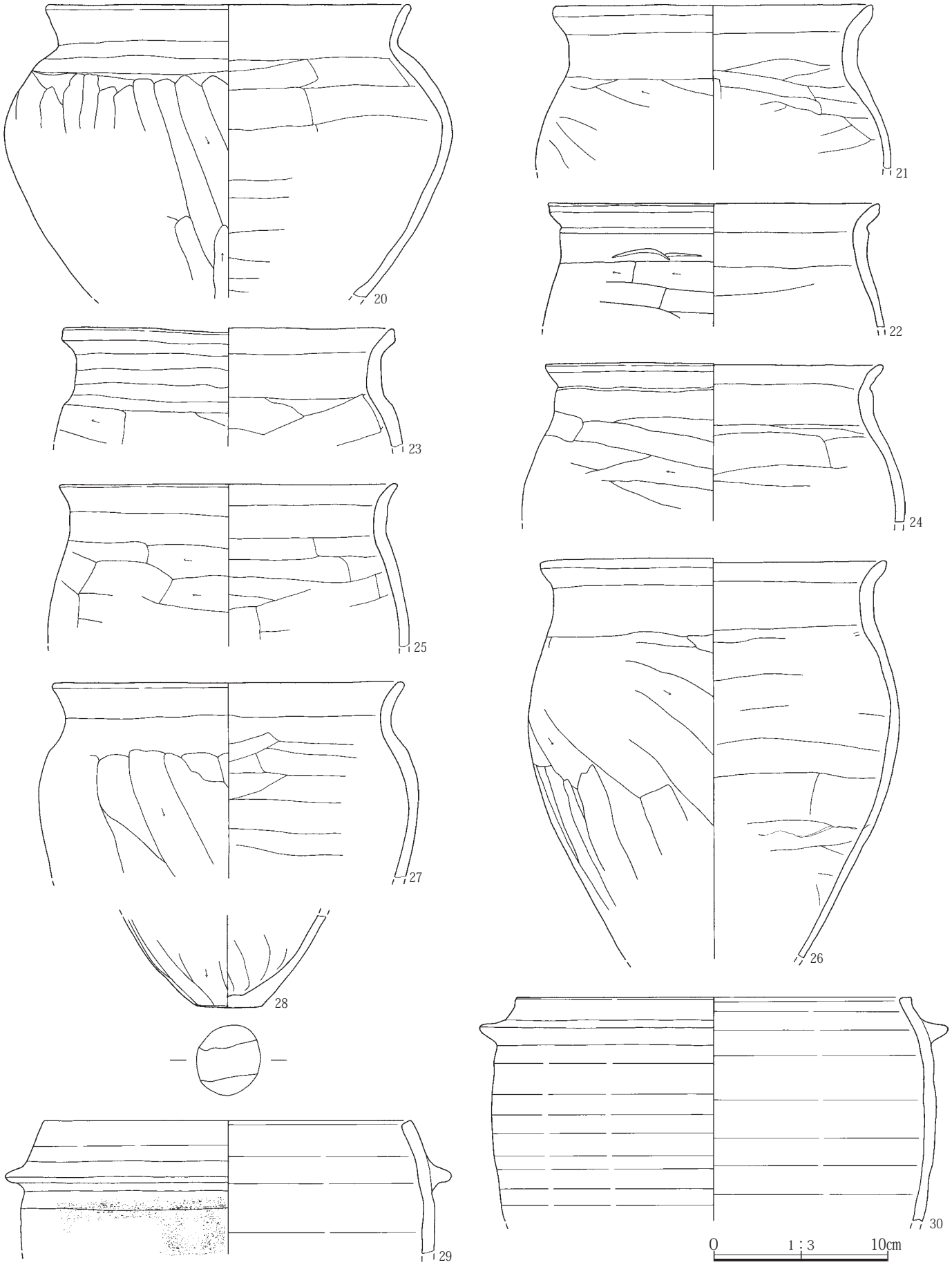
第165図　278号竪穴建物カマド

については、袖石の代わりに置かれていたものであると推測できる。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片29点(200ｇ)、甕・壺類破片412点(3,967ｇ)、須恵器の杯・椀類破片25点(1,075ｇ)、甕・壺類破片66点(1,140ｇ)、瓦片11点、剝片１点(0.2ｇ)が出土している。このうち縄文土器(堀之内１式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

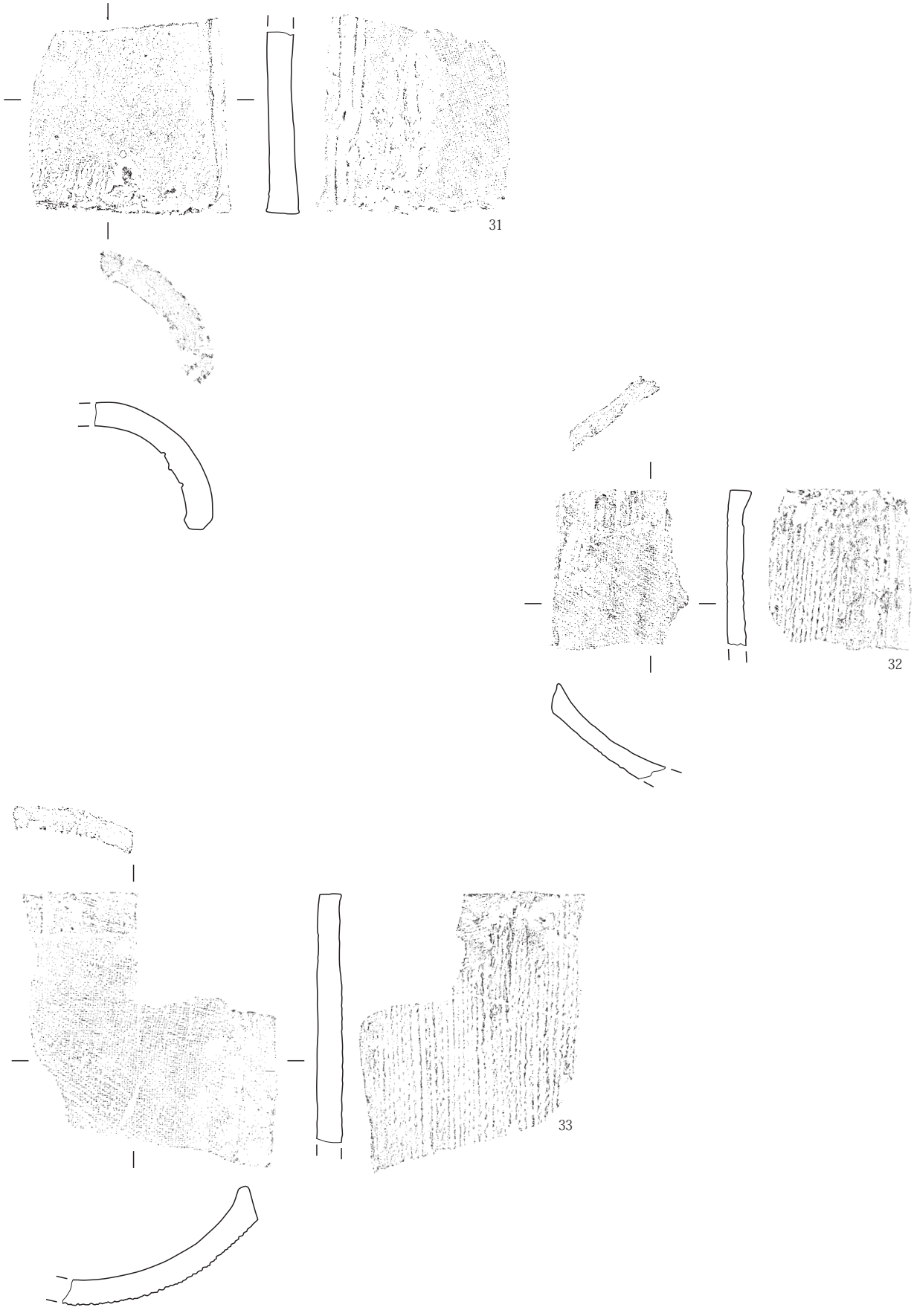
所見　出土遺物から10世紀前半の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。



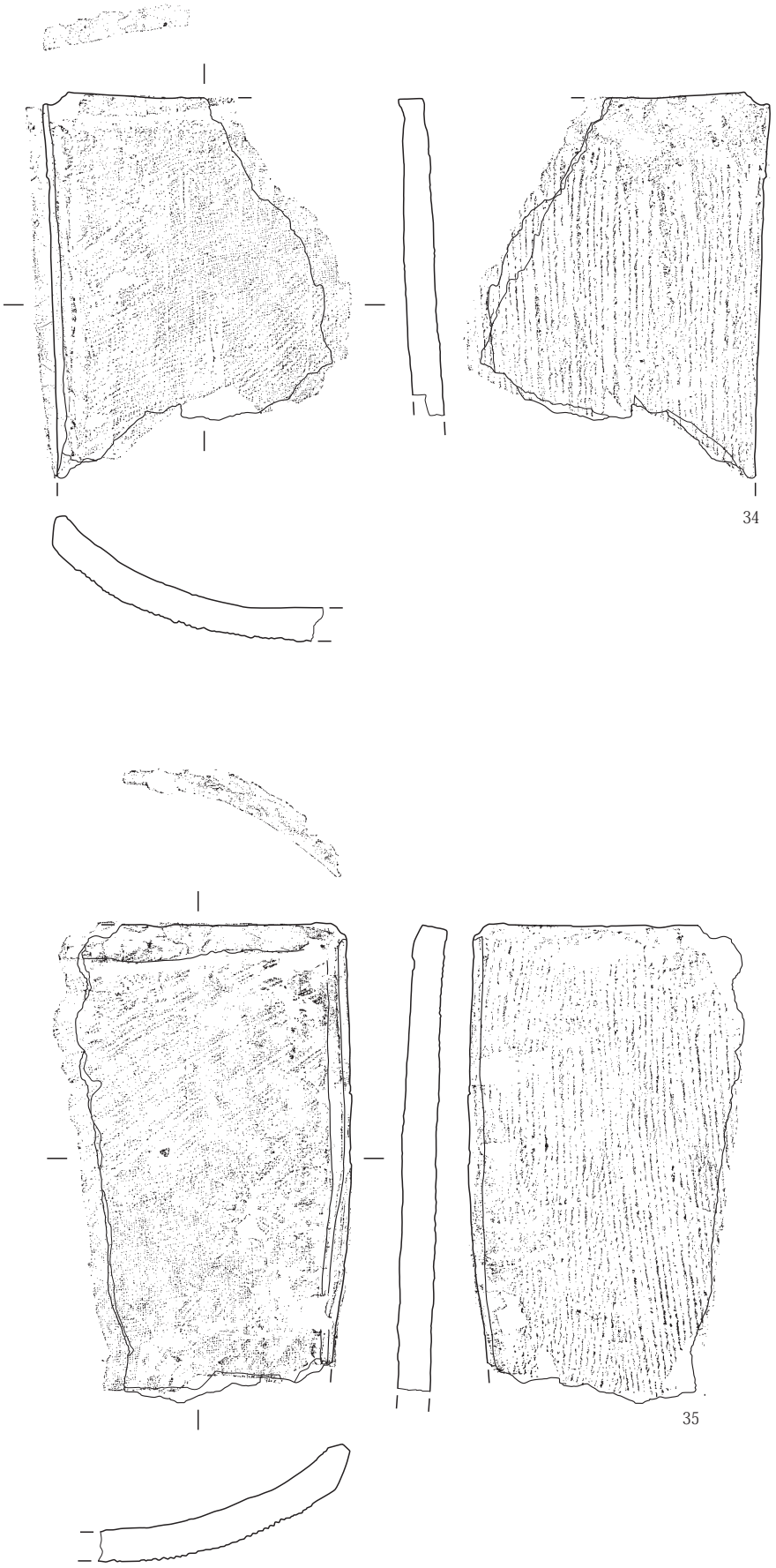
第166図　278号竪穴建物出土遺物（１）



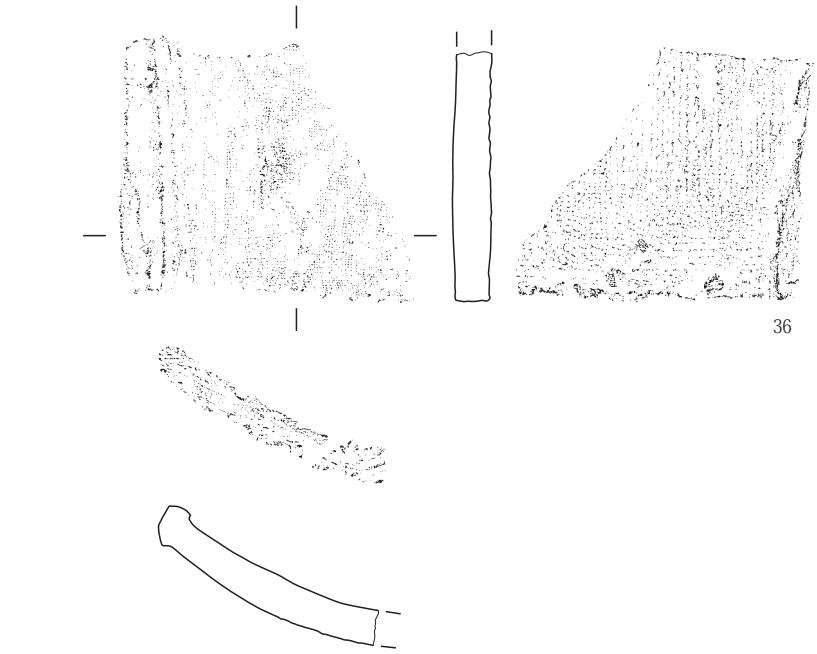
第167図　278号竪穴建物出土遺物（２）

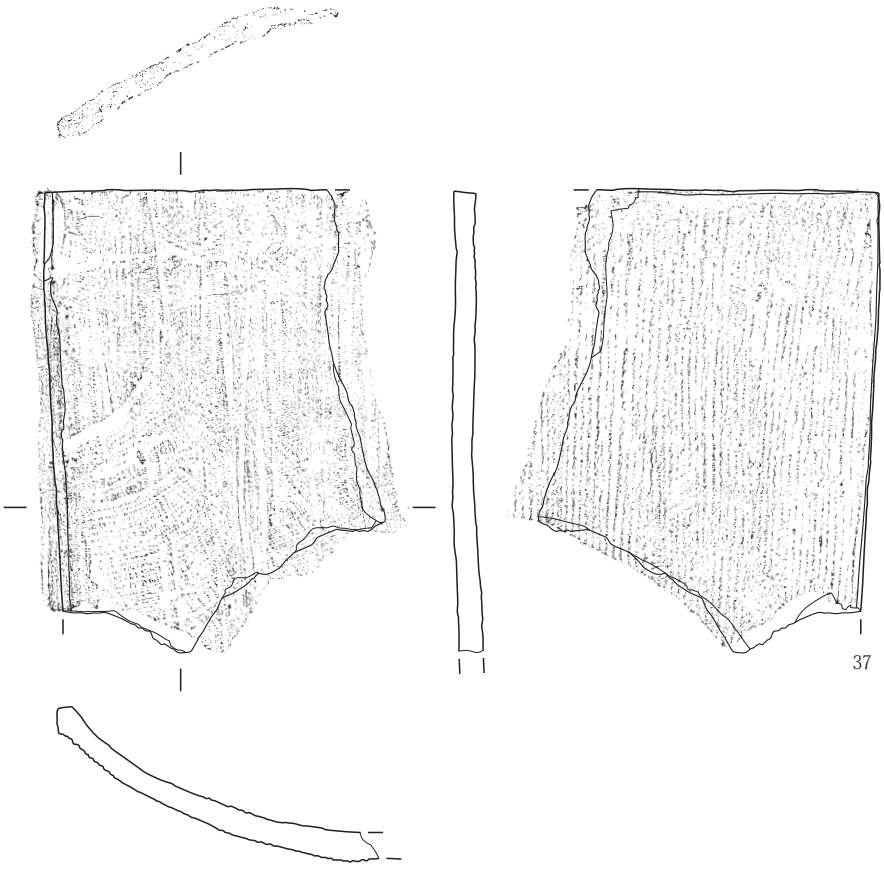


第168図　278号竪穴建物出土遺物（３）



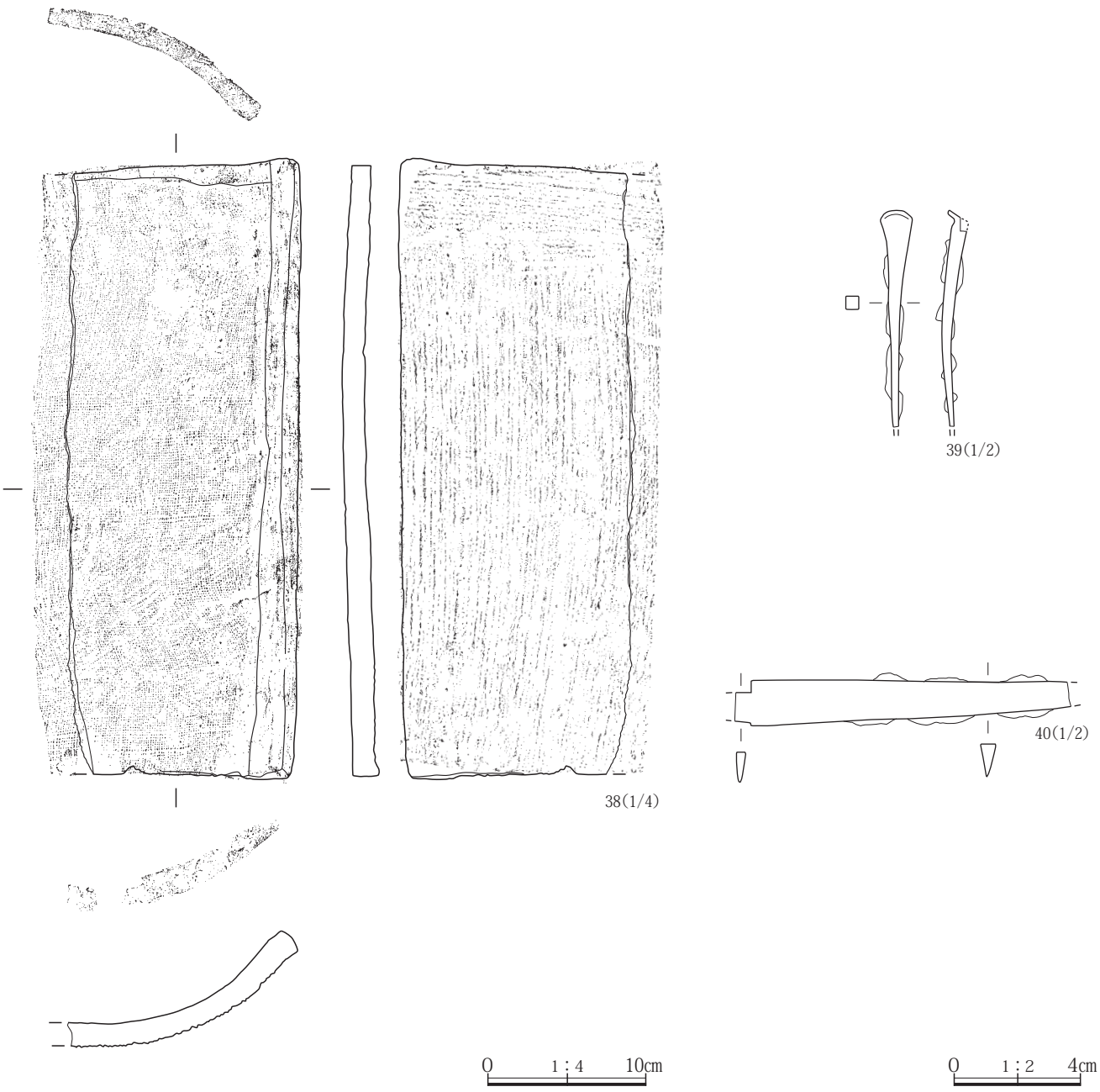
第169図　278号竪穴建物出土遺物（４）





0　1：4　10cm

第170図　278号竪穴建物出土遺物（５）



第171図　278号竪穴建物出土遺物（６）

279号竪穴建物（第172～175図、PL.70～72・309・310）

位置　Ｘ＝40,841～40,845、Ｙ＝－80,768～－80,772（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.85m、短軸2.97m

面積　8.400㎡

残存壁高　0.36m

方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-C、少量のローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。また、壁際に堆積した少量のAs-C、ローム塊～小塊、炭化物粒を含む黒褐色土は、壁の崩落土と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.75m、燃焼部幅は0.50mで、壁外に0.65m燃焼部が伸びる。向かって右側の側壁には、長さ0.19m、幅0.15m、厚さ0.07mの礫が残存していたが、これは側壁の補強を目的に置かれたものの一部であると考えられる。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた

痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。さらに掘方調査では、焚口の下部が長軸0.64m、短軸0.56m、深さ0.14mの規模で掘り窪められていたことが確認できた。

柱穴　検出されなかった。

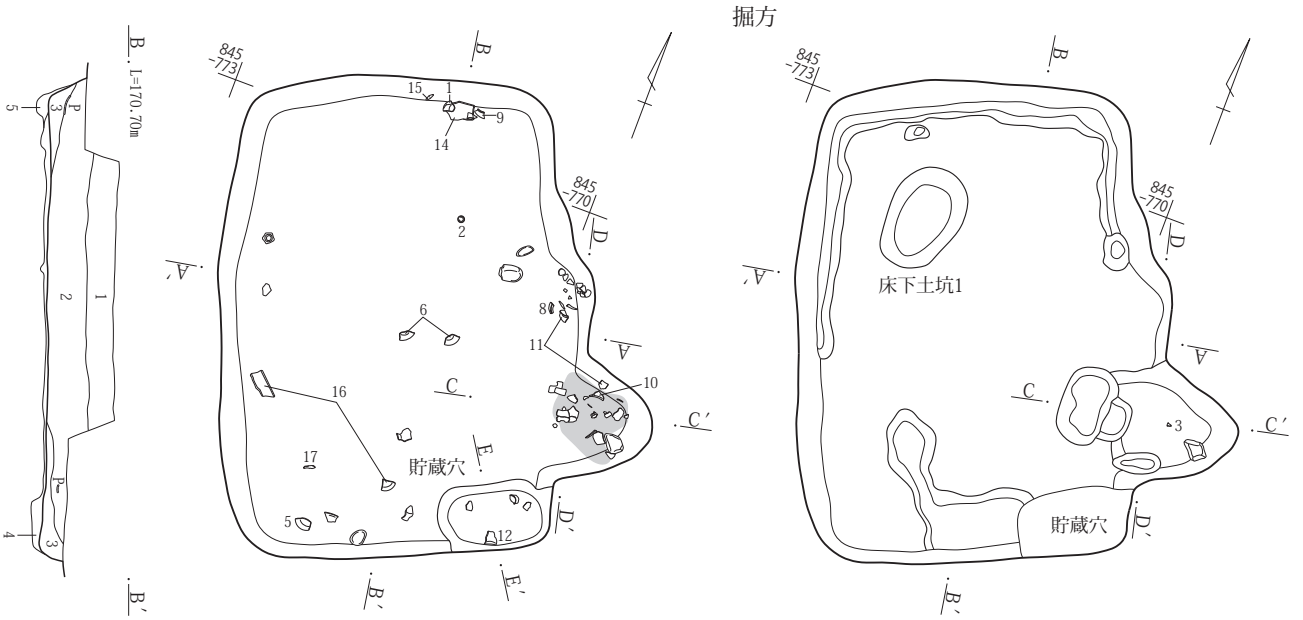
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.90m、短軸0.53m、深さ0.21m、形状は楕円形である。上層は少量のローム粒を含む黒褐色土、下層はやや多量のローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　床面調査では検出されなかったが、掘方調査において北半から幅0.25～0.44m、深さ0.03～0.09mの溝状の掘り込みを検出した。これが壁際溝である可能性が高いと考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は焚口の下部と床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.03mであった。ただし、焚口の下部は周囲と比べてやや深く掘り込まれていた。また、南壁付近ではやや深い箇所も見られたが、それでも床面からの深さは最大で0.07mであった。床面は少量のローム粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は北西隅付近に位置し、規模は長



279号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

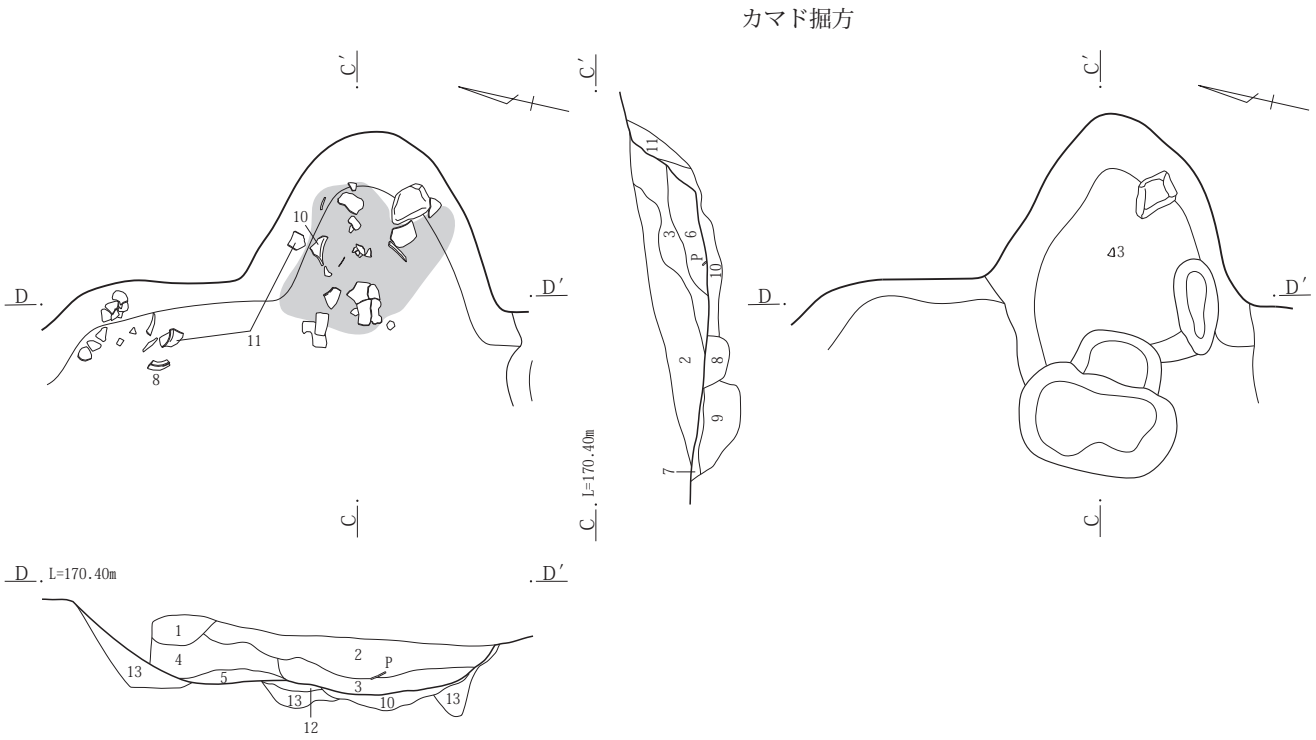
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを多量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cを多量、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム塊～小塊、炭化物粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
5．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。

279竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：60　2m

第172図　279号竪穴建物



279竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
１．黒褐色土10YR3/2　ローム粗塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～粒、焼土小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を層状に含む。粘性やや強い。締まり強い。
８．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
９．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．黒褐色土10YR3/2　焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
12．暗褐色土10YR3/4　黒色土小塊、ローム塊、焼土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
13．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

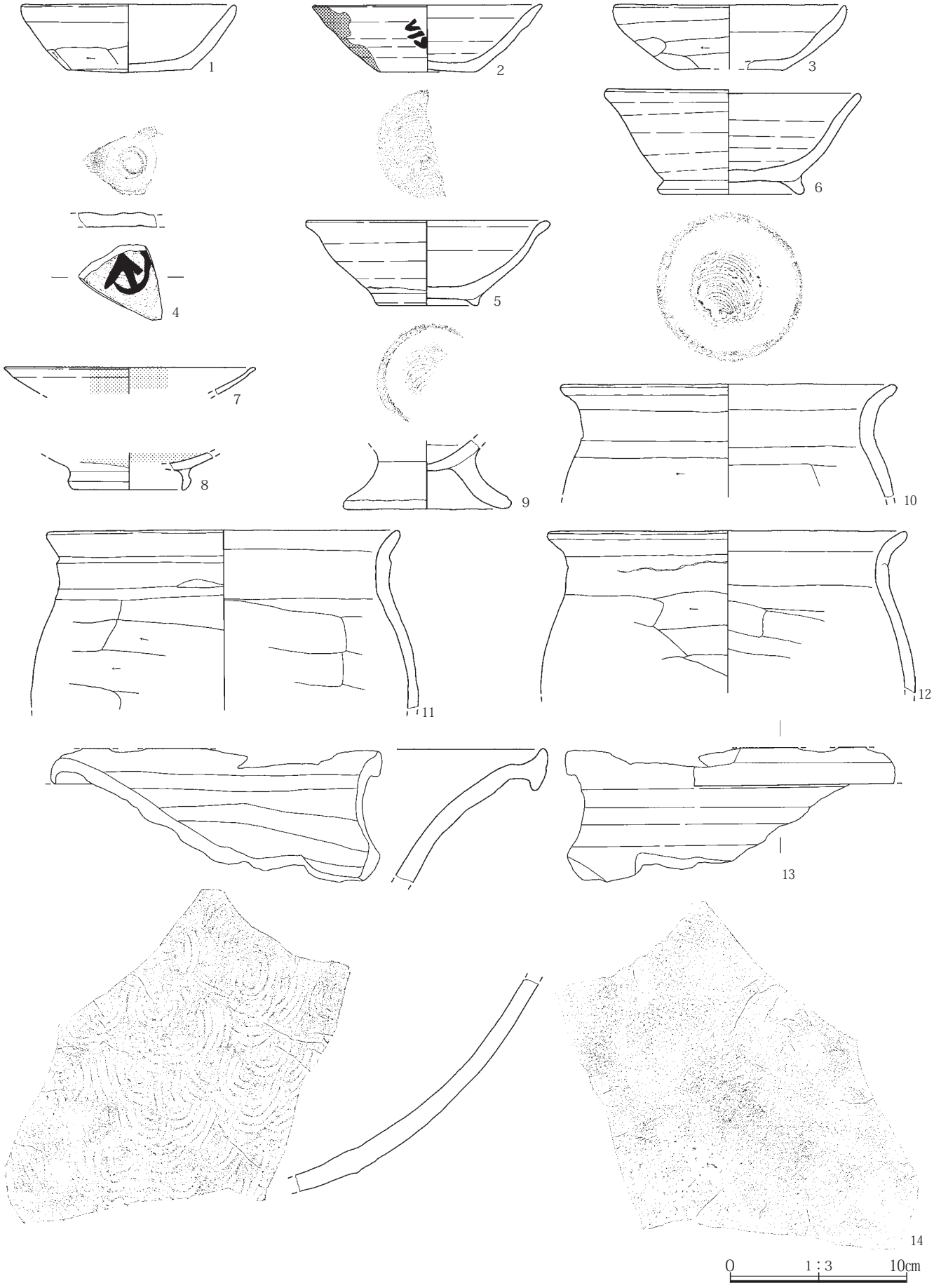
0　1：30　1m

第173図　279号竪穴建物カマド

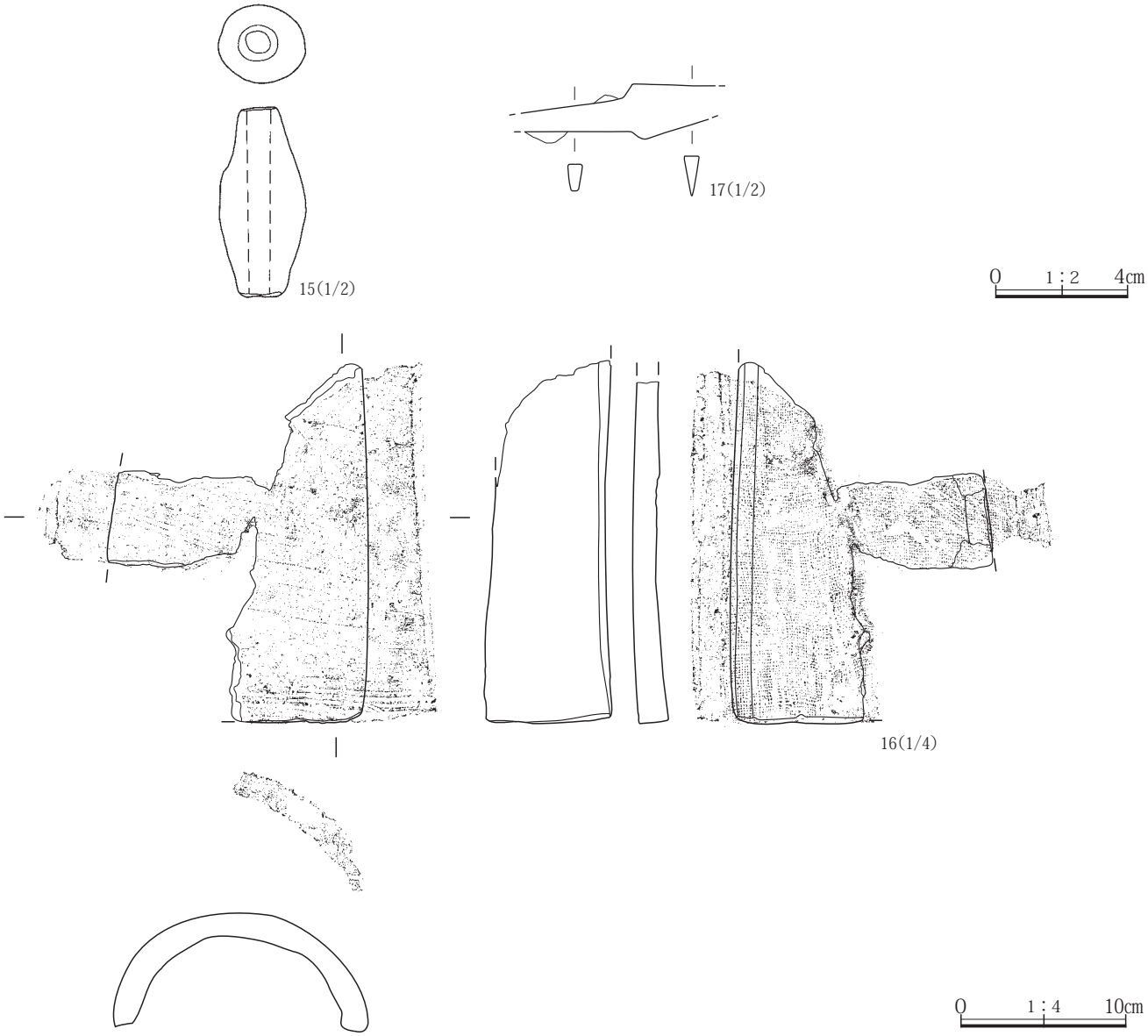
軸0.85m、短軸0.59m、深さ0.20mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。埋没土は不明であるが、底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　判読はできないものの外面に文字が書かれた須恵器椀（２）、底部外面に「田」と書かれた須恵器椀（４）が出土したことが特筆される。また、北壁際の床面近くからは、土錘(15)が出土している。土師器甕は少なくとも３個体(10～12)が確認されているが、このうち10・11はカマド内から、12は貯蔵穴内から出土したものである。丸瓦(16)は南東隅付近の床面近くから出土したが、カマドの構築材として使用されていたものが投棄された可能性が考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片51点(215ｇ)、甕・壺類破片307点(2,571ｇ)、須恵器の杯・椀類破片250点(1,587ｇ)、甕・壺類破片24点(500ｇ)、瓦片１点、剝片２点(6.8ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から10世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。



第174図　279号竪穴建物出土遺物（１）



第175図　279号竪穴建物出土遺物（２）

280号竪穴建物（第176～178図、PL.72～74・310）

位置　Ｘ＝40,843～40,847、Ｙ＝－80,759～－80,763（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.68m、短軸3.65m

面積　10.363㎡

残存壁高　0.70m

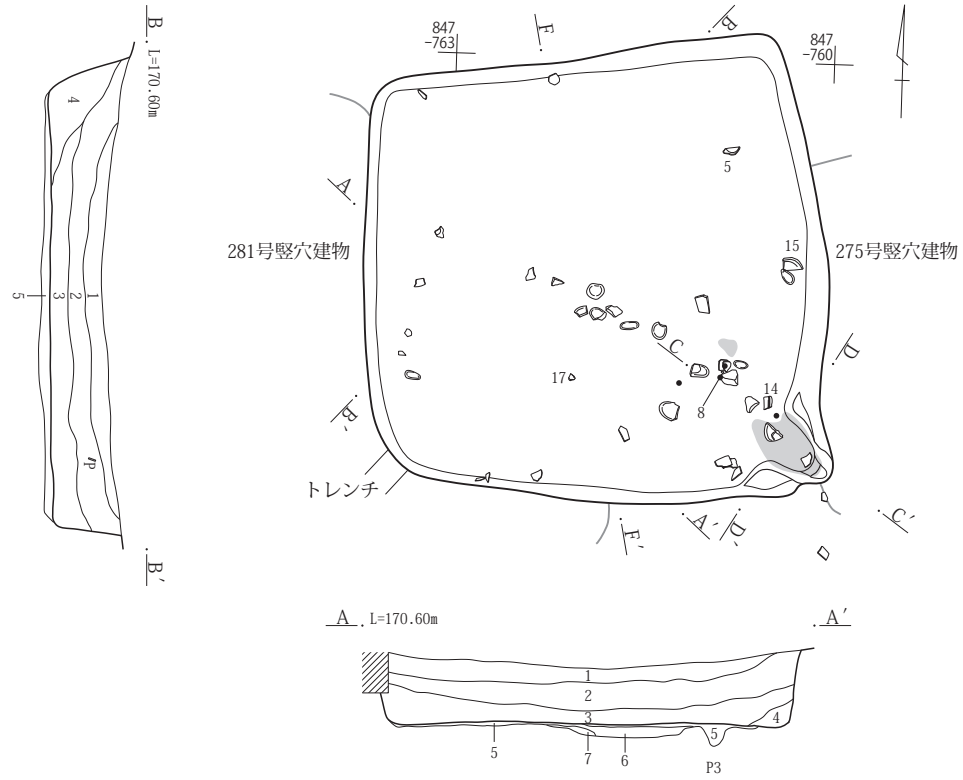
方位　Ｎ－125°－Ｅ

重複　275号・281号竪穴建物と重複し、いずれも280号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層はやや多量のAs-C、As-YP、少量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のローム粒を含む黒色土で埋没していた。

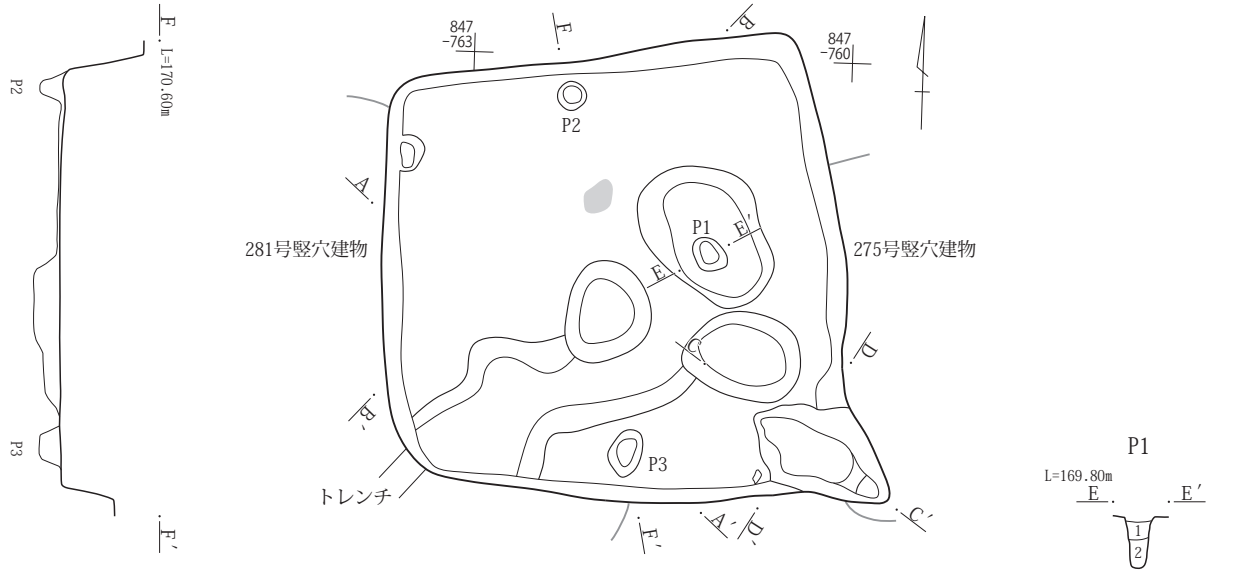
カマド　南東隅に位置する。残存長は0.58m、燃焼部幅は0.32mで、壁外に0.20m燃焼部・煙道が伸びる。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド周辺には多数の礫が散乱していたが、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。

柱穴　床面調査では検出されなかったが、掘方調査で検出したＰ２とＰ３が本竪穴建物の主柱穴である可能性が考えられる。



280号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、As-YPをやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒色土10YR2/1　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

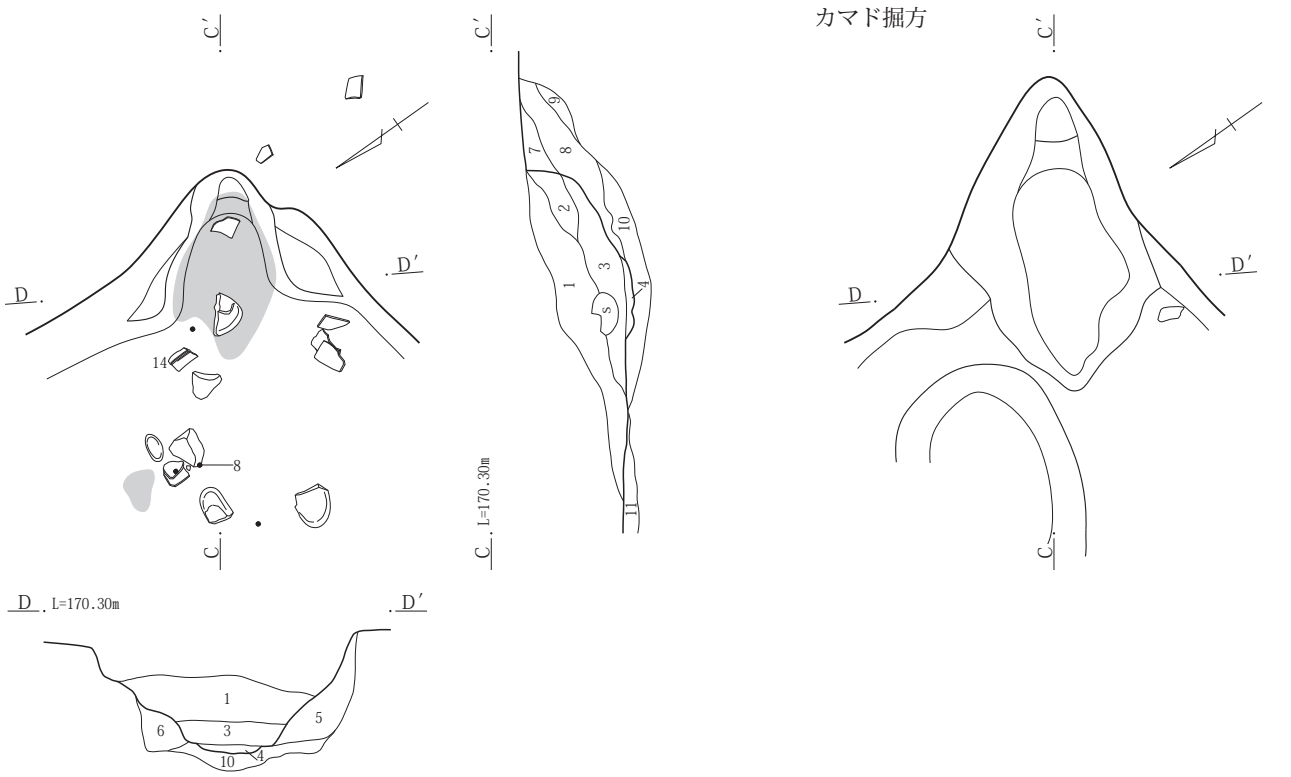
掘方



280竪穴建物Ｐ１Ｅ－Ｅ′
１．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～塊をやや多量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：60　2m

第176図　280号竪穴建物



280竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊を多量、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．暗赤褐色土5YR3/6　焼土塊～粒を主体とし、灰をやや多量含む。粘性、締まり弱い。
5．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．暗褐色土10YR3/3　ローム塊、焼土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～塊を非常に多量含む。粘性、締まりやや強い。
8．黒褐色土10YR2/3　焼土小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まり強い。
11．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。

0　1：30　1m

第177図　280号竪穴建物カマド

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

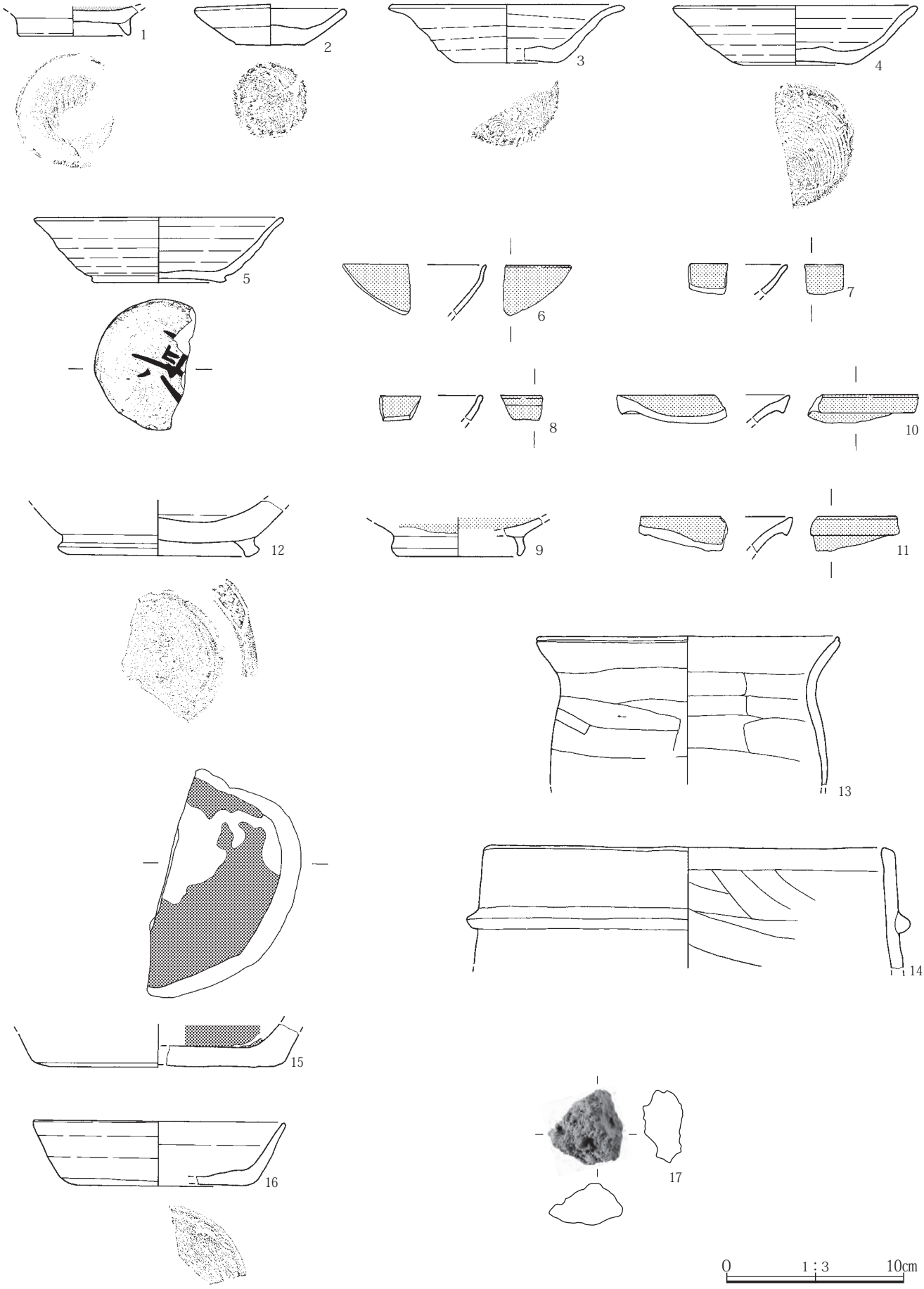
床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.04～0.10mであった。ただし、南半やや深く掘り込まれており、床面からの深さは最大で0.21mであった。また､掘方調査では３基のピットを検出したが、それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.29×0.23×0.41m、Ｐ２が0.23×0.22×0.17m、Ｐ３が0.35×0.25×0.17m、形状はＰ１・３が楕円形、Ｐ２が円形である。床面は少量のローム小塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていたが、南半ではさらにその下層に多量のローム塊を含む黒褐色土が認められた。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　「真」と書かれた須恵器杯(５)が出土したことが特筆される。また、埋没土中からは灰釉陶器６点(６～11)も出土している。羽釜(14)は、カマド前から割れた状態で出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片32点(150ｇ)、甕・壺類破片782点(4,280ｇ)、須恵器の杯・椀類破片341点(2,460ｇ)、甕・壺類破片107点(2,630ｇ)、瓦片10点が出土している。

所見　出土遺物から10世紀後半の竪穴建物であると考えられる。



第178図　280号竪穴建物出土遺物

281号竪穴建物（第179～182図、PL.74・310・311）

位置　Ｘ＝40,841～40,846、Ｙ＝－80,761～－80,766（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸4.88m、短軸(3.50m)

面積　(12.768㎡)

残存壁高　0.48m

方位　Ｎ－92°－Ｅ

重複　280号竪穴建物と重複し、281号竪穴建物が古い。

埋没土　少量のAs-C、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　検出されなかった。280号竪穴建物によって壊された東壁に存在していた可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　検出されなかった。

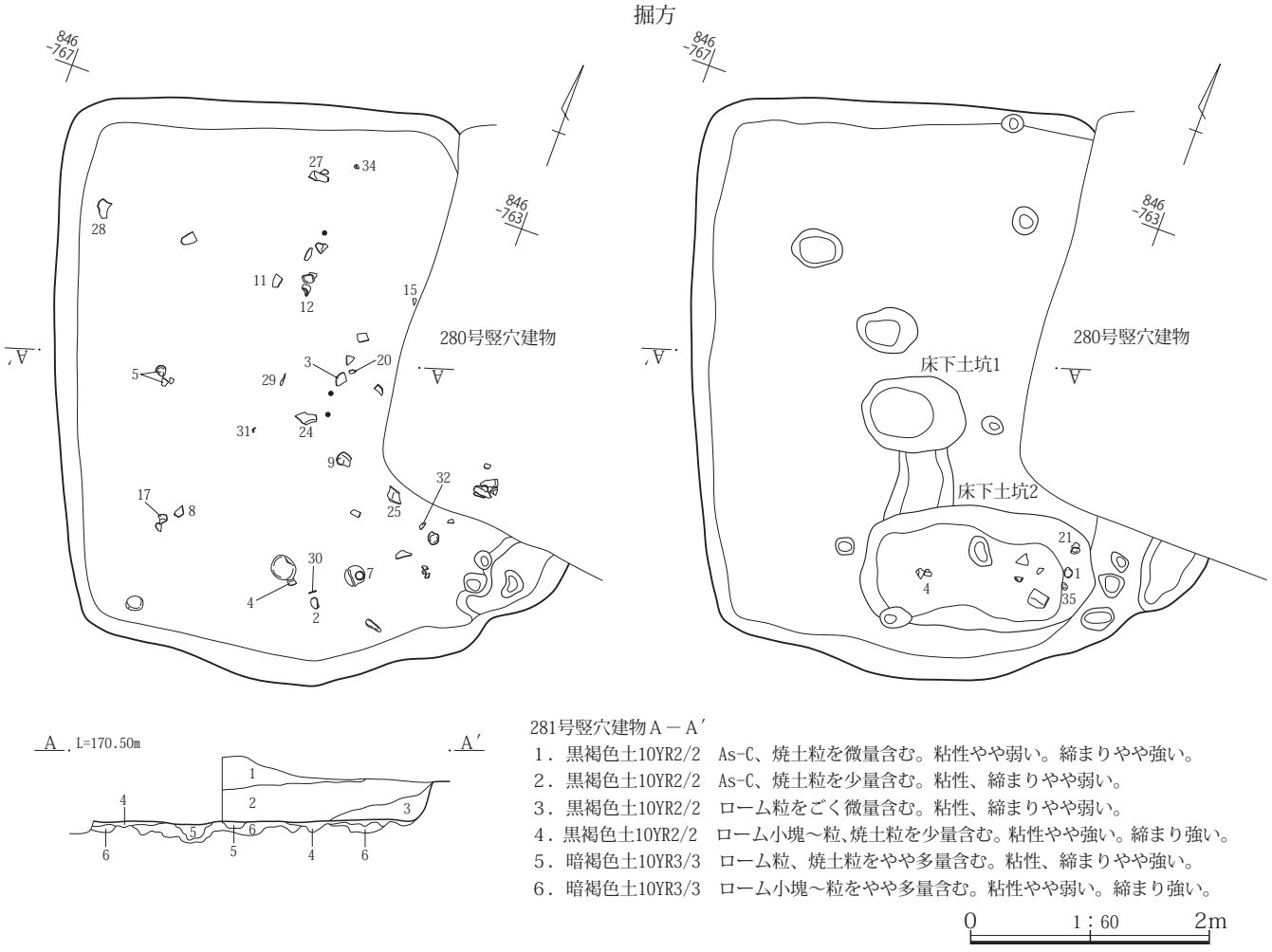
貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.03～0.20mであった。床面上層は少量のローム小塊～粒、焼土粒を含む黒褐色土で、下層はやや多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　２基の床下土坑は、それぞれ中央と南壁際に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が0.89×0.65×0.52m、床下土坑２が1.94×1.04×0.15mである。形状はいずれも楕円形で、床下土坑１はやや深い円筒状に、床下土坑２は浅い皿状に掘り込まれていた。どちらも埋没土は不明であるが、床下土坑１は粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。床下土坑２は浅く、底面が下位に存在する粘土層まで達していない

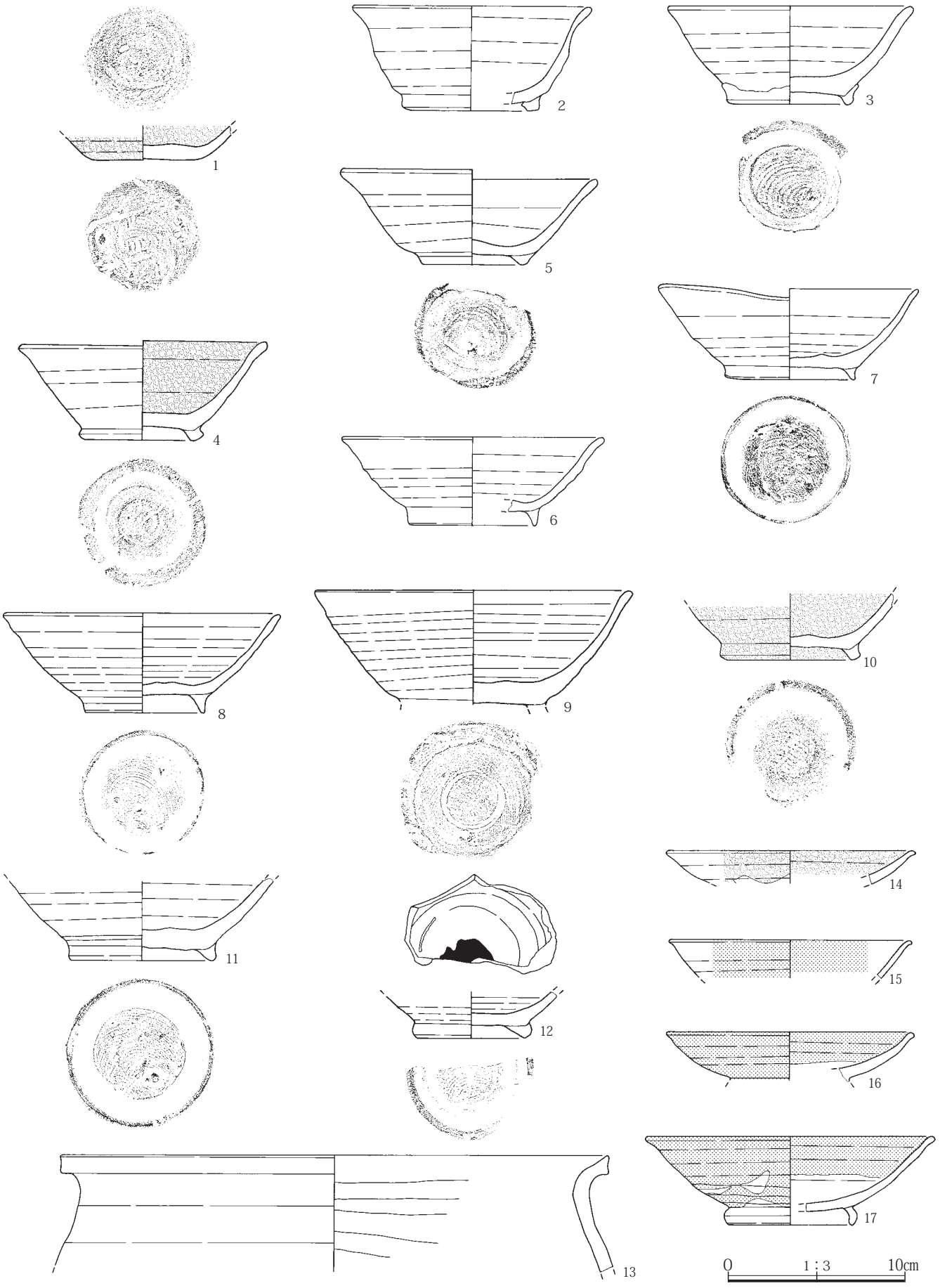


281号竪穴建物Ａ－Ａ′

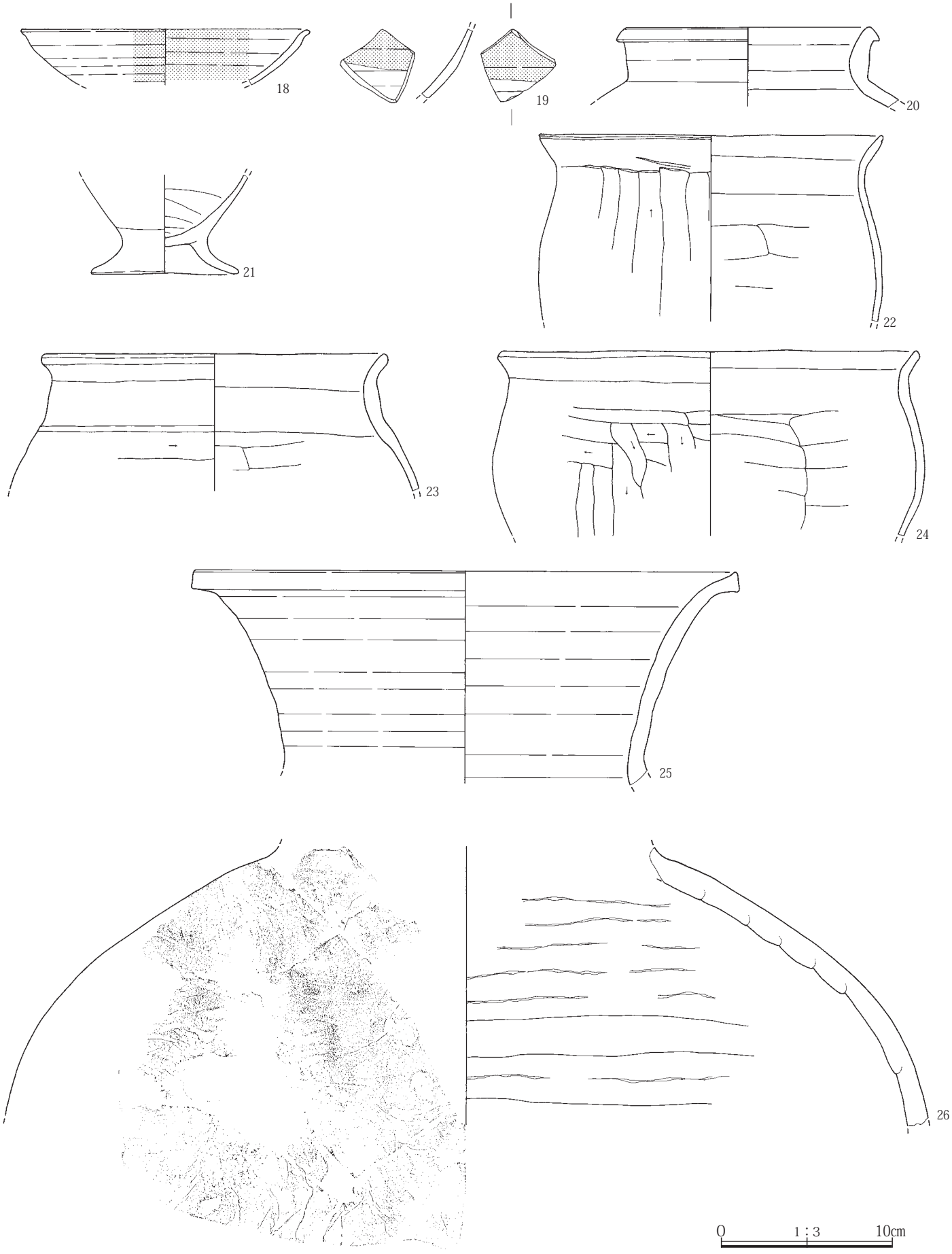
１．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
５．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

0　1：60　2m

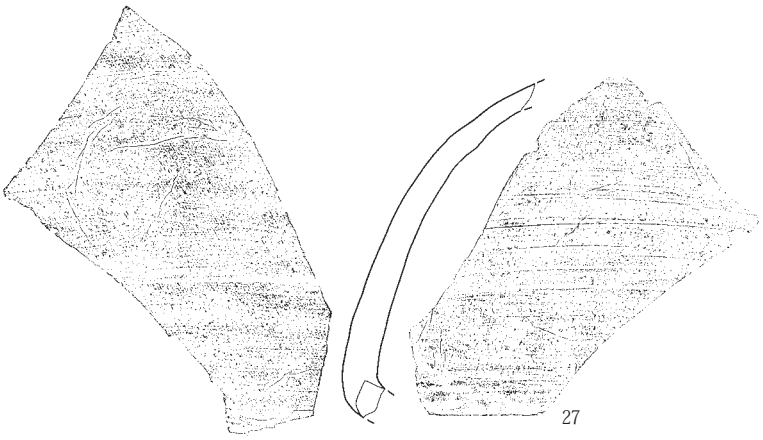
第179図　281号竪穴建物

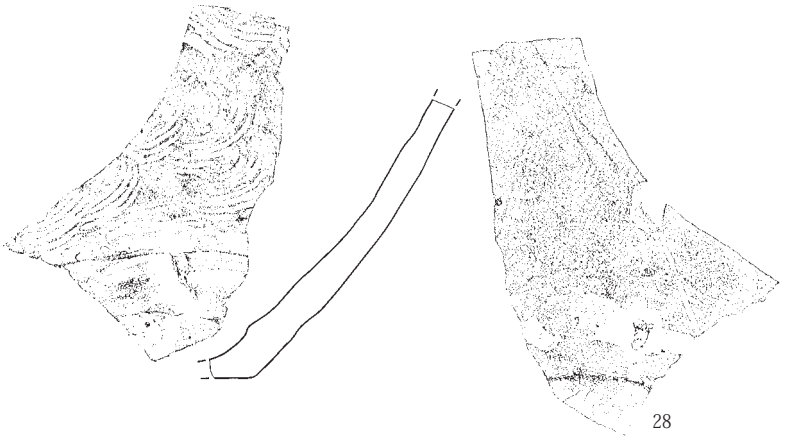


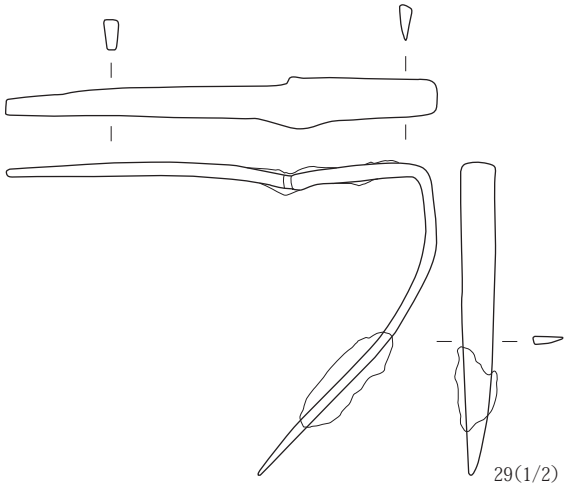
第180図　281号竪穴建物出土遺物（１）

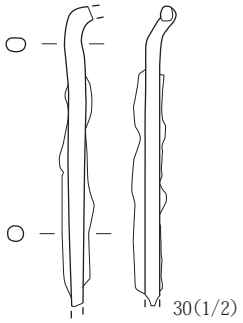


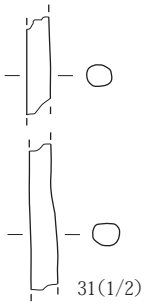
第181図　281号竪穴建物出土遺物（２）

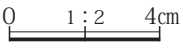


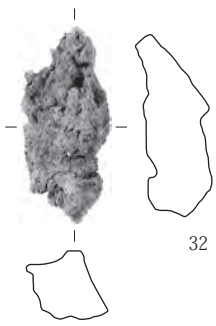


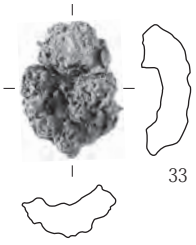


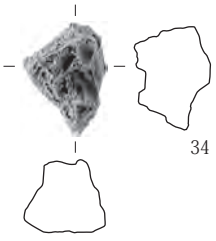


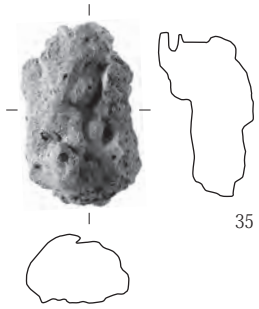


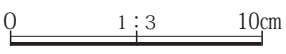












第182図　281号竪穴建物出土遺物（３）

ことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは⑤である。

出土遺物　灰釉陶器の皿が２点(14・16)、椀が４点(15・17～19)出土したことが特筆される。また、刀子(29)、紡軸(30)などの鉄製品とともに、鉄滓(32～35)が出土していることも本竪穴建物の特徴である。このうち刀子については、意図的に折り曲げられた状態で出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片12点(67ｇ)、甕・壺類破片332点(3,310ｇ)、須恵器の杯・椀類破片191点(2,060ｇ)、甕・壺類破片63点(2,720ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

282号竪穴建物(第183～186図、PL.74～76・311・312)

位置　Ｘ＝40,848～40,852、Ｙ＝－80,731～－80,736(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸4.45m、短軸3.42m

面積　(12.992㎡)

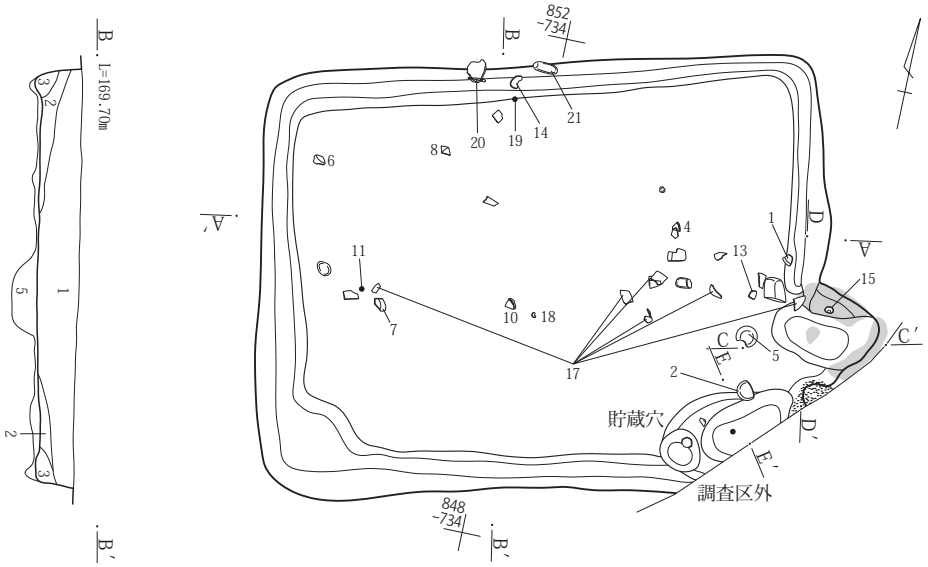
残存壁高　0.46m

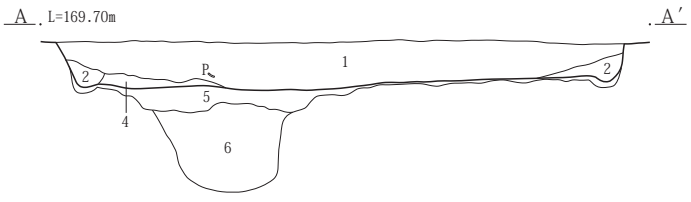
方位　Ｎ－77°－Ｅ

重複　なし

埋没土　少量のAs-C、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。ただし、やや多量のローム塊～粒、焼土粒を含む４層は、カマドが人為的に破壊された痕跡であると考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.85m、





床下土坑1

282竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。

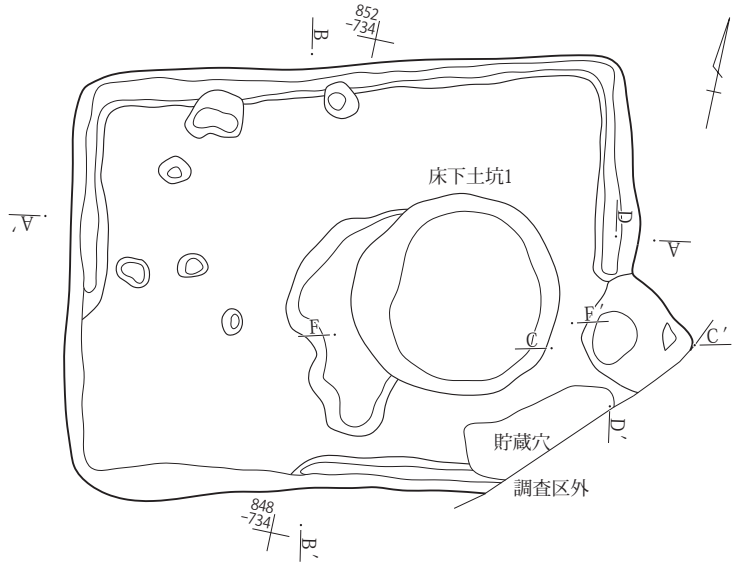
282号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粗塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
6．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YP、ローム塊を非常に多量、ローム小塊をやや多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

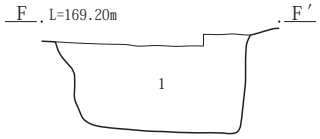
0　1：60　2m

第183図　282号竪穴建物

掘方



床下土坑1

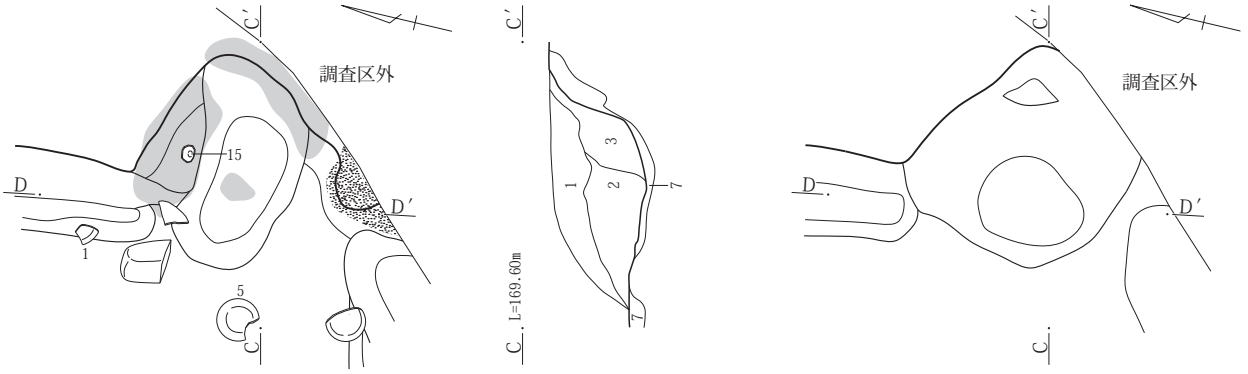


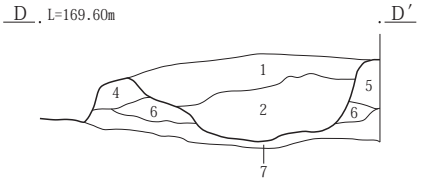
282竪穴建物床下土坑１ Ｆ－Ｆ′

１．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YP、ローム塊を非常に多量、ローム小塊をやや多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

カマド掘方





282竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

２．褐色土7.5YR4/3　ローム粗塊～粒、焼土粗塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

３．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

４．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

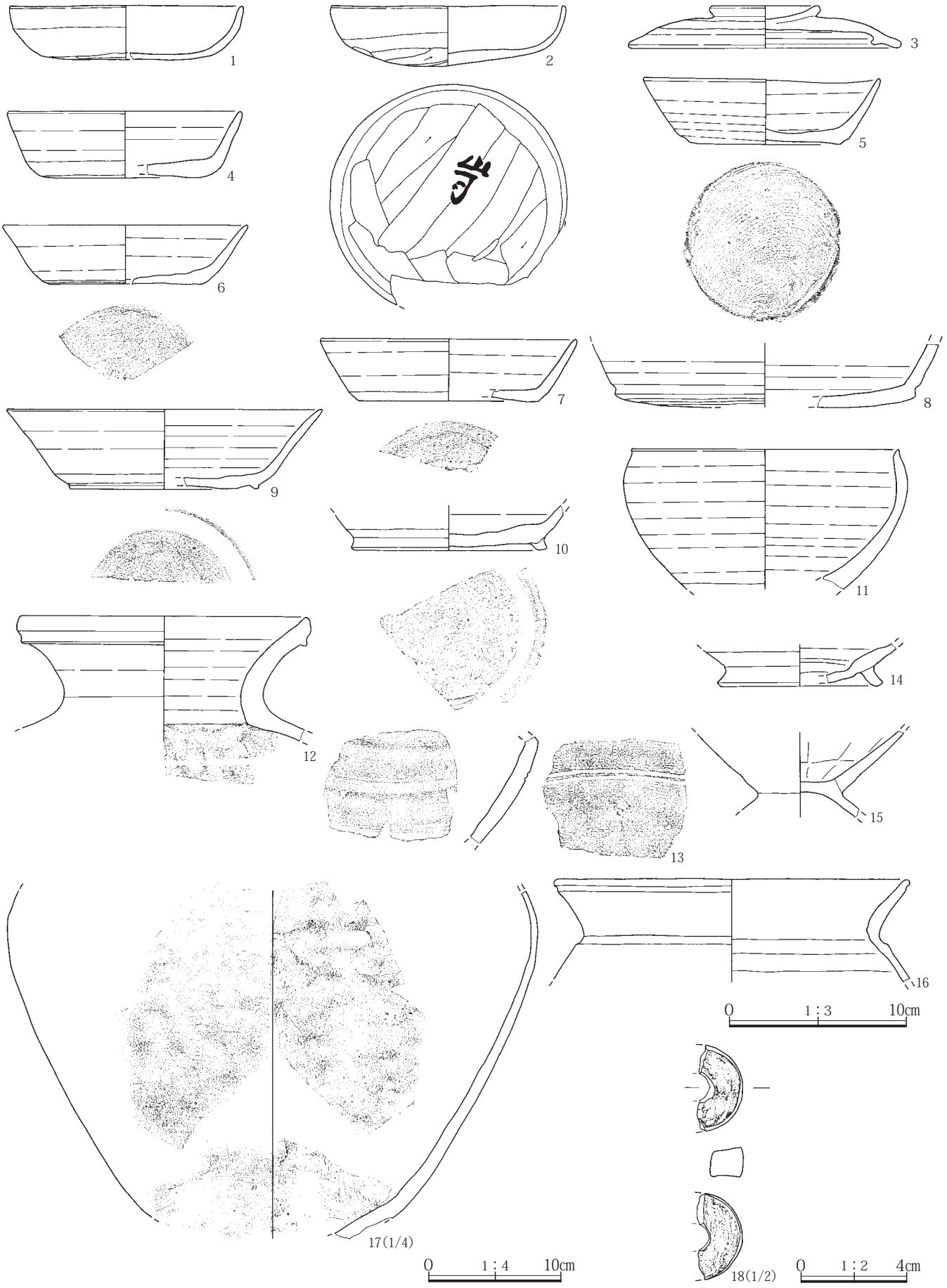
５．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

６．褐色土10YR4/4　ローム塊～小塊、焼土塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

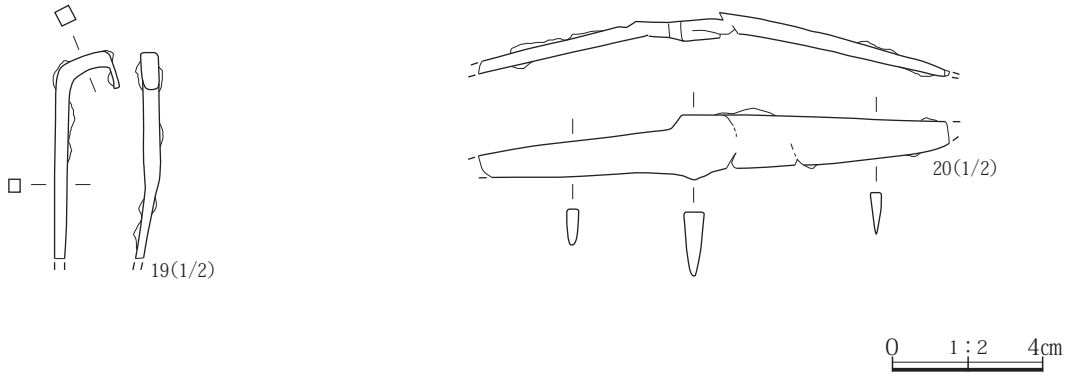
７．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第184図　282号竪穴建物掘方・カマド



第185図　282号竪穴建物出土遺物（１）



第186図　282号竪穴建物出土遺物（２）

燃焼部幅は0.25ｍで、壁外に0.53m燃焼部が伸びる。向かって右側の側壁は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていたが、左側の側壁では確認できなかった。袖石は検出されなかったが、カマド周辺には礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.03ｍであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸1.14m、短軸（0.56ｍ）、深さ0.18m、形状は楕円形である。ただし、貯蔵穴の西側は中心と比べて0.10m程度浅く、階段状を呈する。多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没しており、竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　幅0.16～0.75m、深さ0.01～0.07ｍの全周する壁際溝を検出した。ただし、南西隅は貼床を掘ってしまった可能性があり、このことから壁際溝の幅は概ね0.16～0.30ｍと考えられる。少～微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は床下土坑と数か所の浅いピット状の窪みを除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.05ｍであった。また、床下土坑１の西側はやや低く、床面からの深さは最大で0.21ｍであった。床面は多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央東寄りに位置し、規模は長軸1.65m、短軸1.59m、深さ0.89ｍである。形状は円形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。非常に多量のAs-YP、ローム塊、やや多量のローム小塊を含むにぶい黄褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　「寺」と書かれた土師器杯（２）が出土したことが特筆される。また、埋没土中からは土製の紡輪（18）が出土している。須恵器杯（５）は、カマド前の床面よりやや高い位置から正位の状態で出土したが、これはカマドが壊されたあとに意図的に置かれた可能性が考えられる。須恵器蓋（３）と須恵器有台杯（９）については、８世紀第１四半期の土器であり、混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片118点（610ｇ）、甕・壺類破片274点（1,450ｇ）、須恵器の杯・椀類破片99点（920ｇ）、甕・壺類破片17点（910ｇ）、敲石１点（1,425.3ｇ）が出土している。このうち敲石（21）については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から８世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

283号竪穴建物（第187～190図、PL.76～78・312・313）

位置　Ｘ＝40,871～40,875、Ｙ＝－80,747～－80,751（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸4.19m、短軸3.32m

面積　11.243㎡

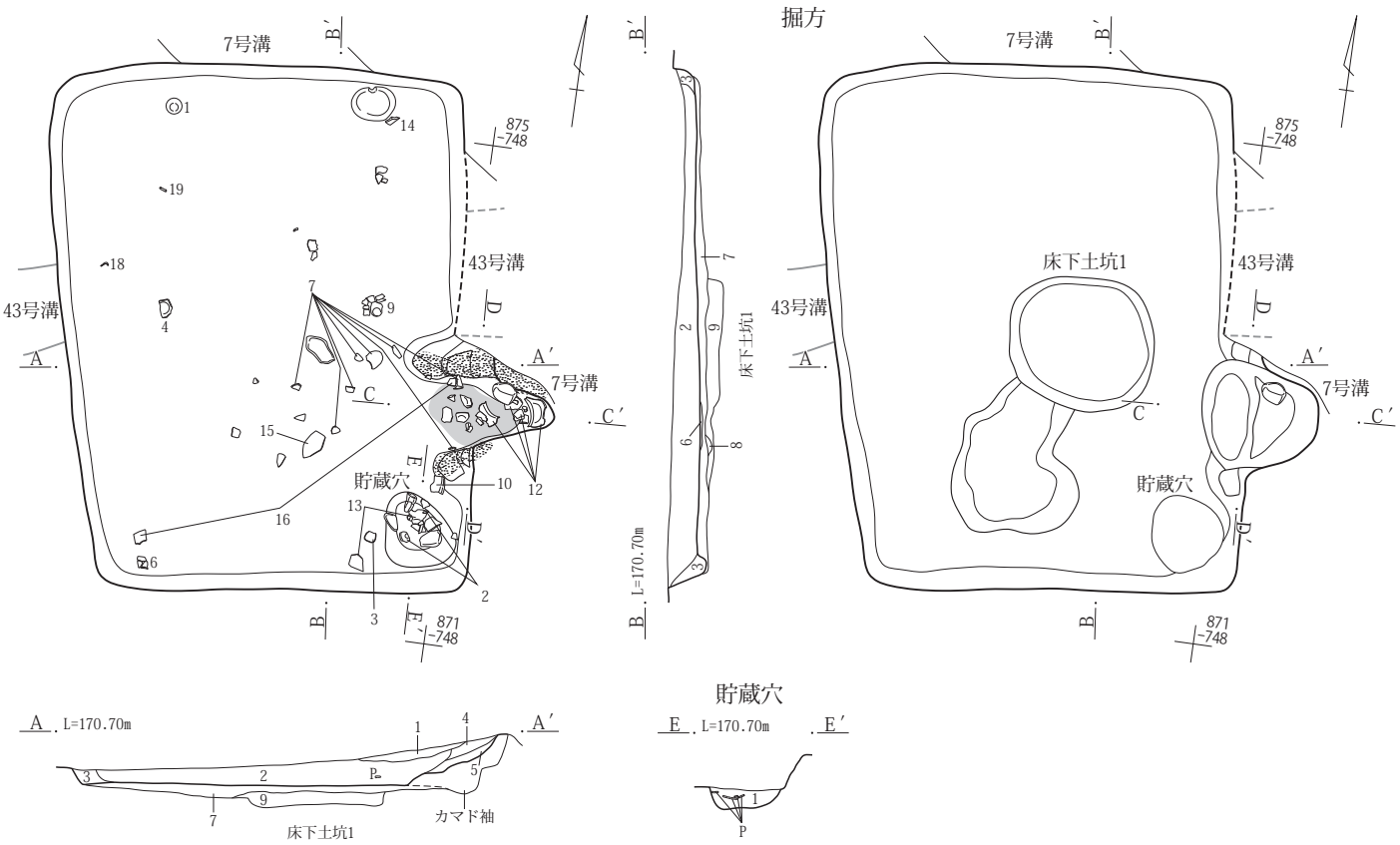
残存壁高　0.28m

方位　Ｎ－87°－Ｅ

重複　７号溝と重複し、283号竪穴建物が古い。また、43号溝と重複し、283号竪穴建物が新しい。

埋没土　少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.10m、燃焼部幅は0.49mで、壁外に0.62m燃焼部・煙道が伸びる。両袖は基部が一部残存しており、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また､向かって左側の側壁も粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。向かって左側の側壁には長さ0.22m、幅0.20m、厚さ0.09mの扁平な礫が立てられていた。これは側壁、または煙道の入り口を補強する目的で置かれたものであると考えられる。同様の礫が右側にも存在した可能性が考えられるが、痕跡を確認すること



283号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

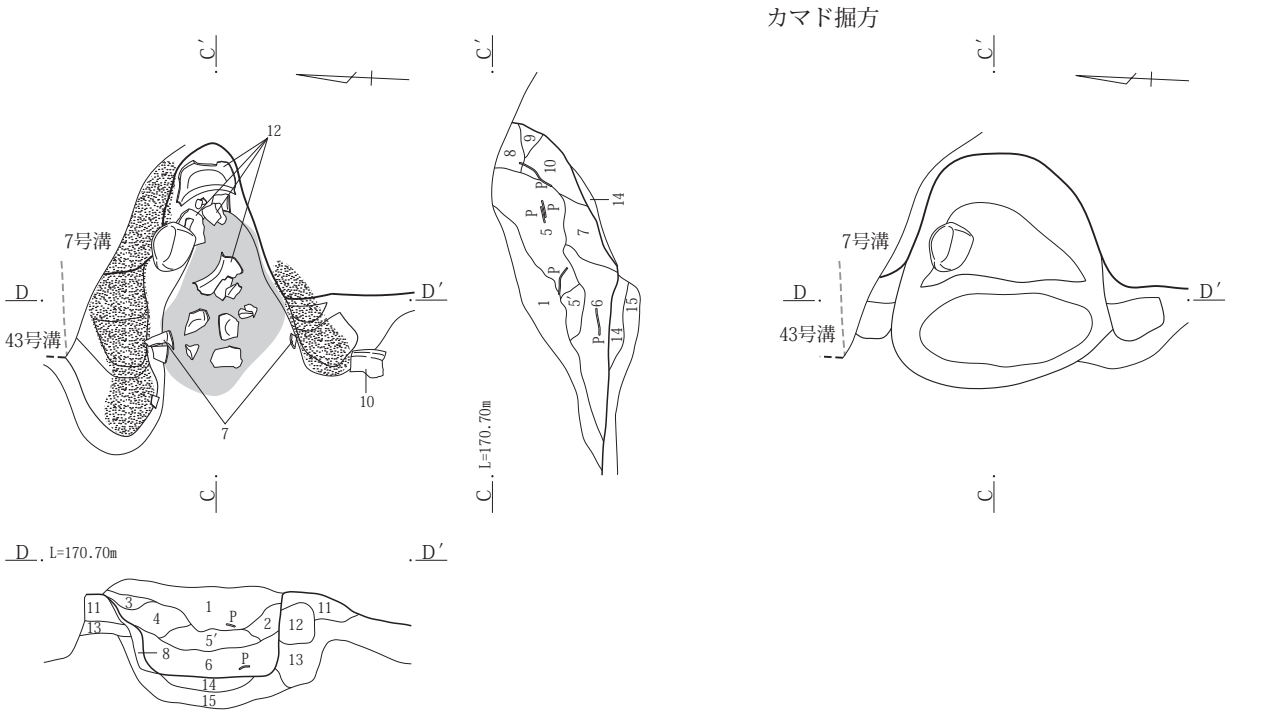
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
6．黒色土10YR2/1　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。
7．黒色土10YR2/1　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
8．黒色土10YR2/1　ローム小塊を層状に含む。粘性やや強い。締まり強い。
9．黒色土10YR2/1　ローム小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

283竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第187図　283号竪穴建物



283竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5′.にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
9．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム細粒、焼土細粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
12．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
13．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
14．黒褐色土10YR2/3　焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
15．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

第188図　283号竪穴建物カマド

はできなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

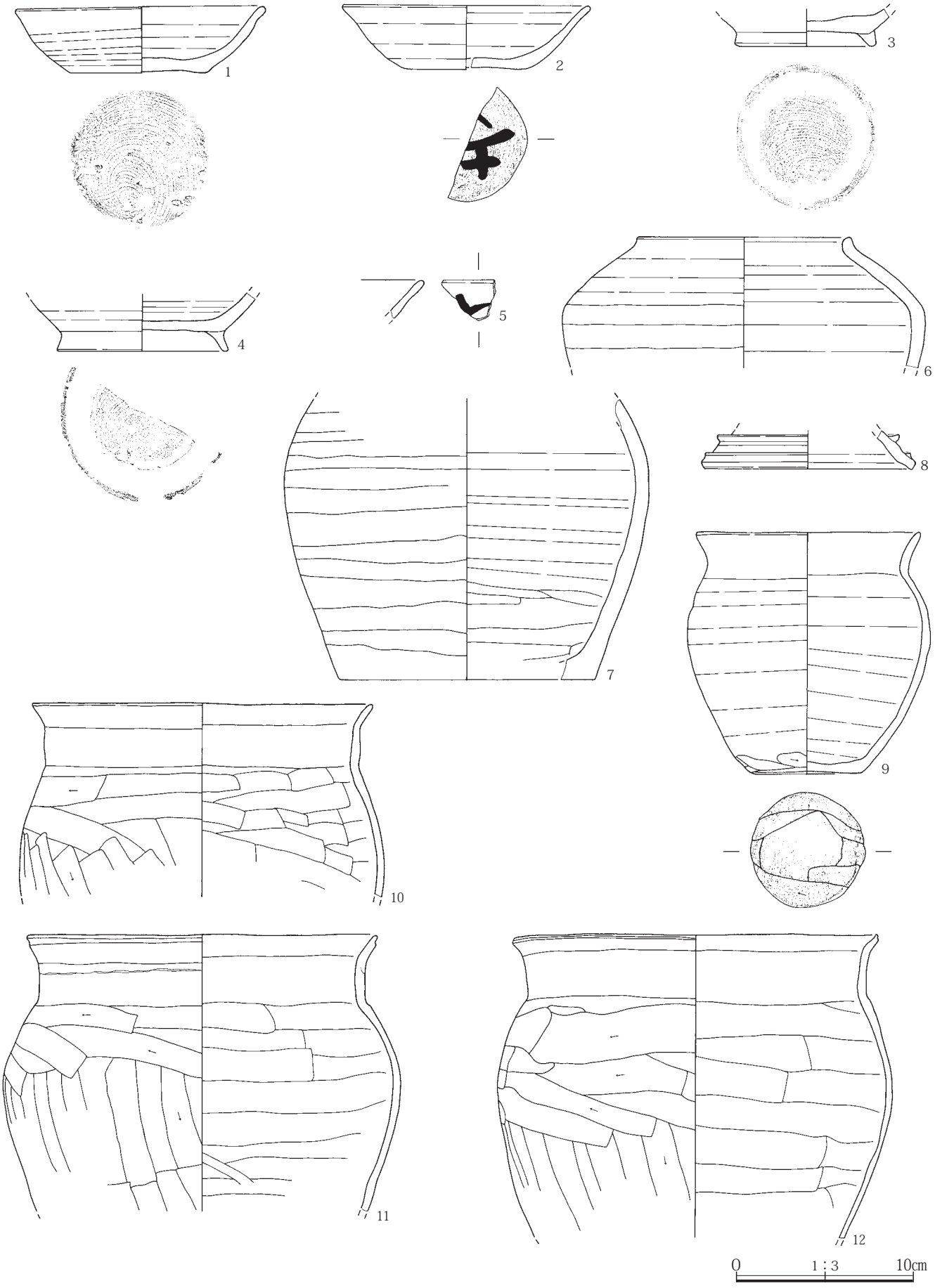
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.59m、短軸0.55m、深さ0.18m、形状は不整形である。微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没し、多量の土器片や礫が廃棄されていた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

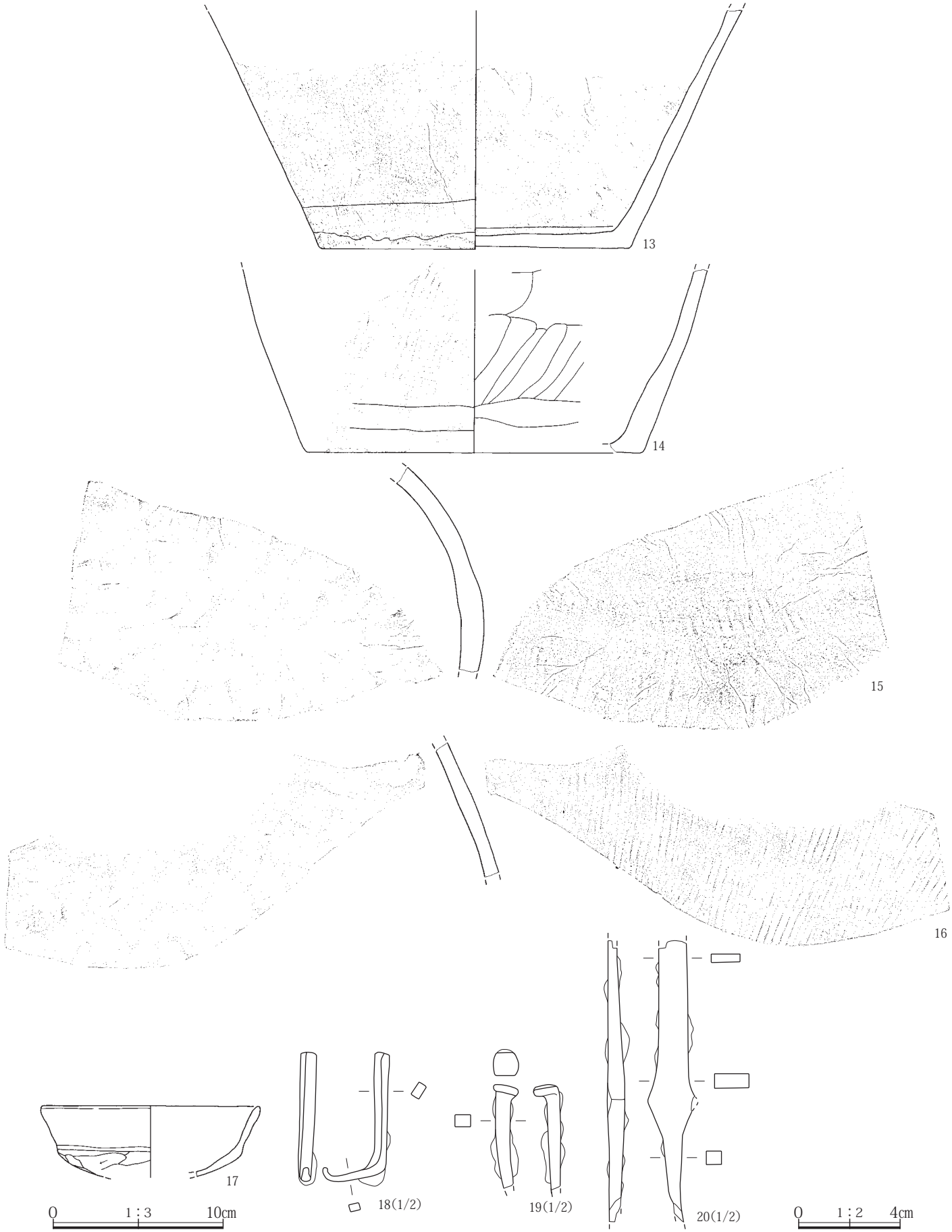
床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方はカマドの下部と床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.03～0.10mであった。また、床下土坑１の南西側はやや低く、床面からの深さは最大で0.15mであった。床面は微量のAs-C、ローム粒を含む黒色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１はほぼ中央に位置し、規模は、長軸1.15m、短軸1.06m、深さ0.18mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。やや多量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴



第189図　283号竪穴建物出土遺物（１）



第190図　283号竪穴建物出土遺物（２）

建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　貯蔵穴内から、「寺」と書かれた須恵器杯（２）が出土したことが特筆される。完形の須恵器杯（１）は、北壁付近の床面に正位で置かれていたものである。土師器甕は少なくとも３個体(10～12)が確認されているが、このうち10はカマド脇から、12はカマド内から出土したものである。土師器杯(17)はカマド内から出土したが、混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片49点(238ｇ)、甕・壺類破片378点(2,011ｇ)、須恵器の杯・椀類破片97点(600ｇ)、甕・壺類破片32点(807ｇ)、礫片１点(11.0ｇ)、剝片２点(11.1ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

284号竪穴建物(第191～195図、PL.78～81・313・314)

位置　Ｘ＝40,852～40,856、Ｙ＝－80,746～－80,750（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.03m、短軸2.73m

面積　6.296㎡

残存壁高　0.57m

方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　276号竪穴建物と重複し、284号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム小塊、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は0.75m、燃焼部幅は0.36mで、壁外に0.37m燃焼部・煙道が伸びる。残存状況は悪かったものの、粘土塊の出土状況から側壁や天井は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていたと思われる。向かって右側の側壁には丸瓦が立てられていたが、これは側壁を補強する目的で置かれたものであると考えられる。また、カマド周辺には多数の礫や瓦片が散乱している状況が確認できたが、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.12mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。さらに掘方調査では、焚口の下部が長軸0.51m、短軸0.48m、深さ0.17mの規模で掘り窪められていることが確認できた。

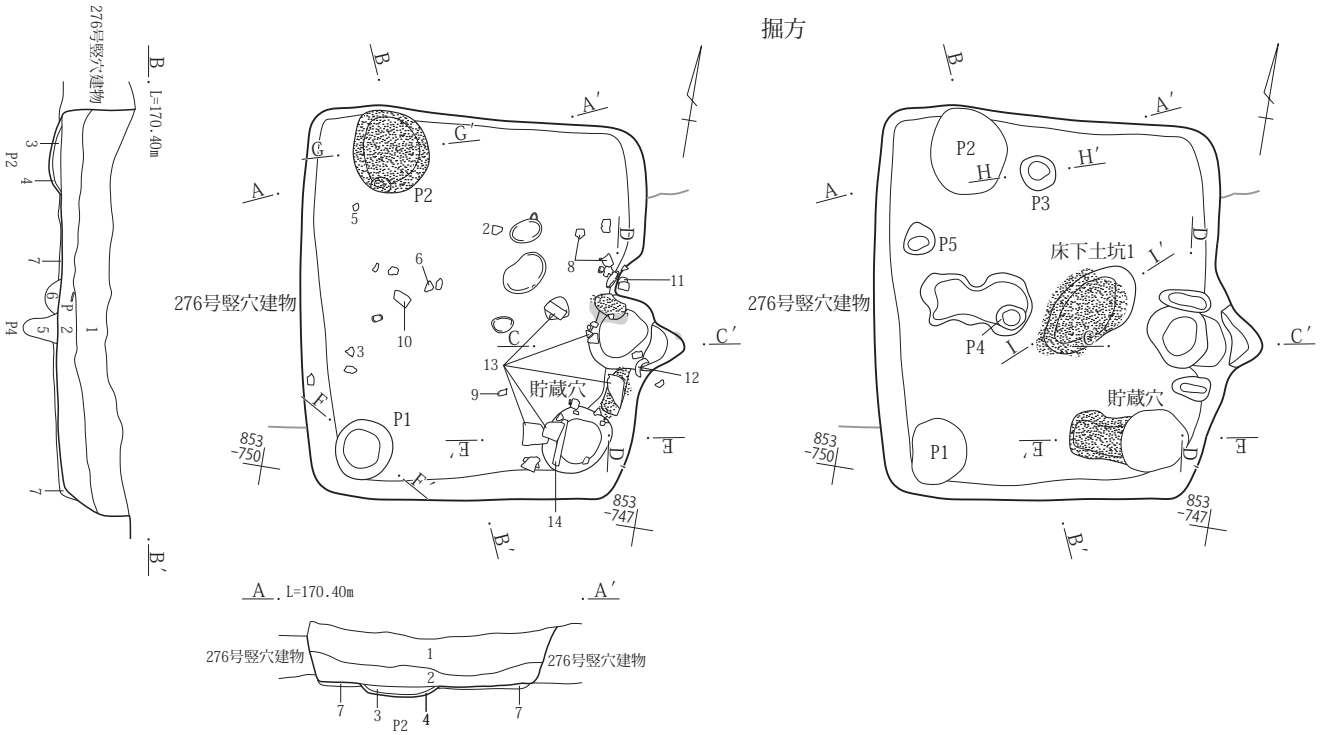
柱穴　Ｐ１は南西隅、Ｐ２は北西隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)はＰ１が0.48×0.44×0.38m、Ｐ２が0.65×0.59×0.18m、形状はＰ１が円筒形に近い楕円形、Ｐ２が皿状の楕円形である。いずれも柱穴とは考えられない。Ｐ１の上層は、少量の粗砂と微量のローム粒を含む締まりのやや弱い黒褐色土、下層は微量の粗砂とローム粒を含む締まりの弱い黒色土で埋没していた。これは古い貯蔵穴の可能性も考えられるが、詳細は不明である。Ｐ２は少量のローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む締まりのやや弱い黒褐色土で埋没していた。底面には薄くローム土が貼られていたが、このローム土の上面が使用面であったと考えられる。このローム土の機能については不明であるが、例えば、採取した粘土を貯蔵する際に黒色土が混入しないようにする工夫であった可能性などが考えられる。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.53m、短軸0.52m、深さ0.19m、形状は不整形である。西壁を保護するように瓦片が置かれていた。微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。その西側には、底部に薄くローム土を貼った浅い土坑状の窪みが重複しているが、これを貯蔵穴の一部と考えるならば、貯蔵穴の長軸は0.94mである。

壁際溝　検出されなかった。

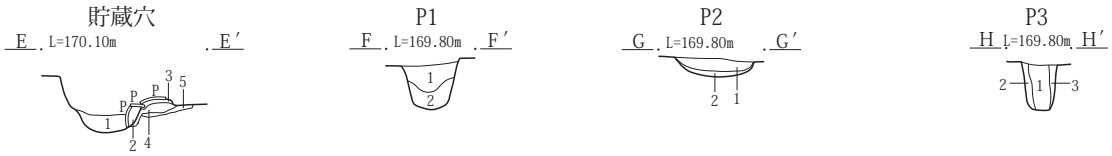
床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方はカマドの下部や床下土坑などを除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.05mであった。また、床下土坑１の西側はやや低く、床面からの深さは最大で0.11mであった。掘方調査では３基のピットを検出したが、それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ３が0.28×0.27×0.37m、Ｐ４が0.24×0.20×0.26m、Ｐ５が0.26×0.26×0.27m、形状はＰ３・４が楕円形、Ｐ５が不整形である。床面はごく微量のローム粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。



284号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-C、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。



284竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を多量含む。粘性、締まり弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
５．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。

284竪穴建物Ｐ１Ｆ－Ｆ′

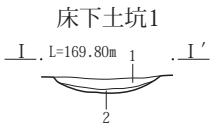
１．黒褐色土10YR2/2　粗砂を少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒色土10YR2/1　粗砂、ローム粒を微量含む。粘性、締まり弱い。

284竪穴建物Ｐ２Ｇ－Ｇ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。

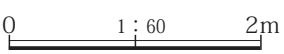
284竪穴建物Ｐ３Ｈ－Ｈ′

１．黒褐色土10YR2/2　砂を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　砂を微量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

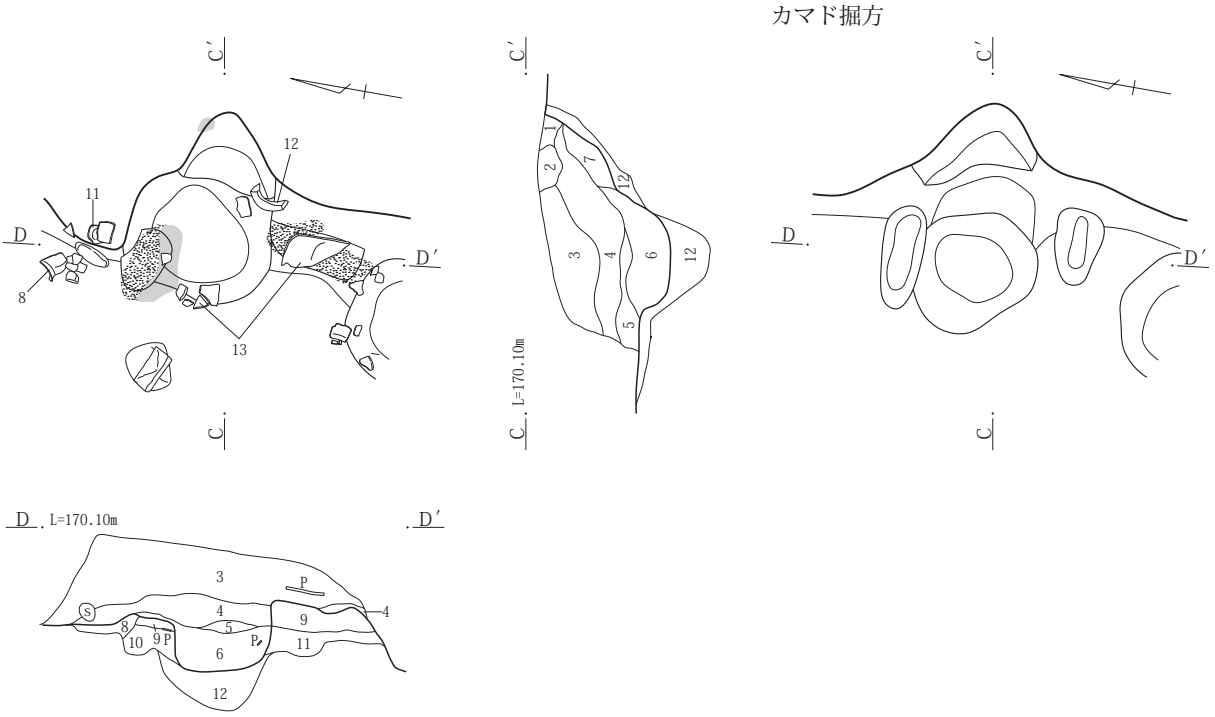


284竪穴建物床下土坑１Ｉ－Ｉ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。
２．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。



第191図　284号竪穴建物



284竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
1．暗褐色土10YR3/3　ローム塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊を少量含む。下面に焼土層を含む。粘性やや強い。締まり強い。
3．黒褐色土10YR3/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
6．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
10．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
12．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。

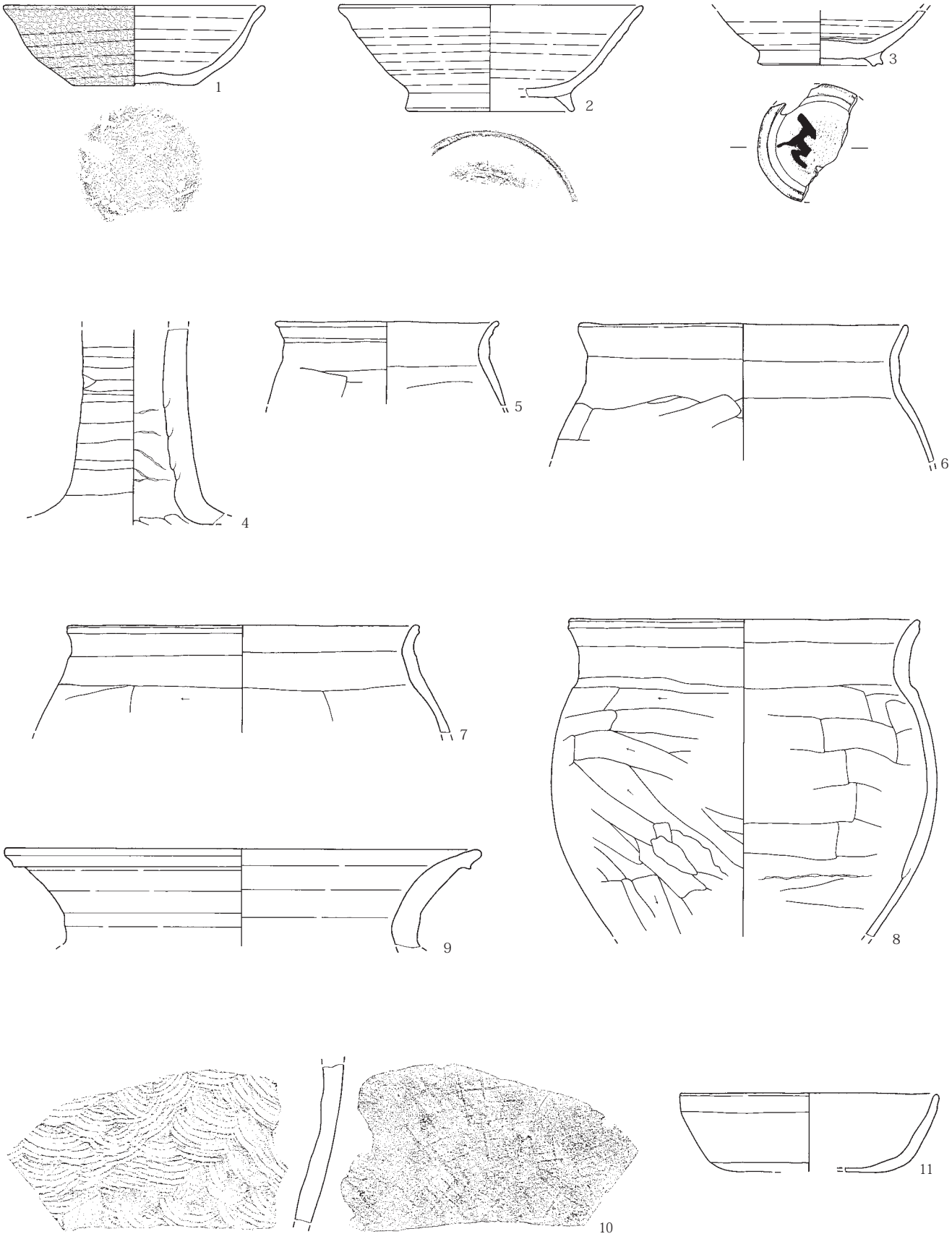
0　1：30　1m

第192図　284号竪穴建物カマド

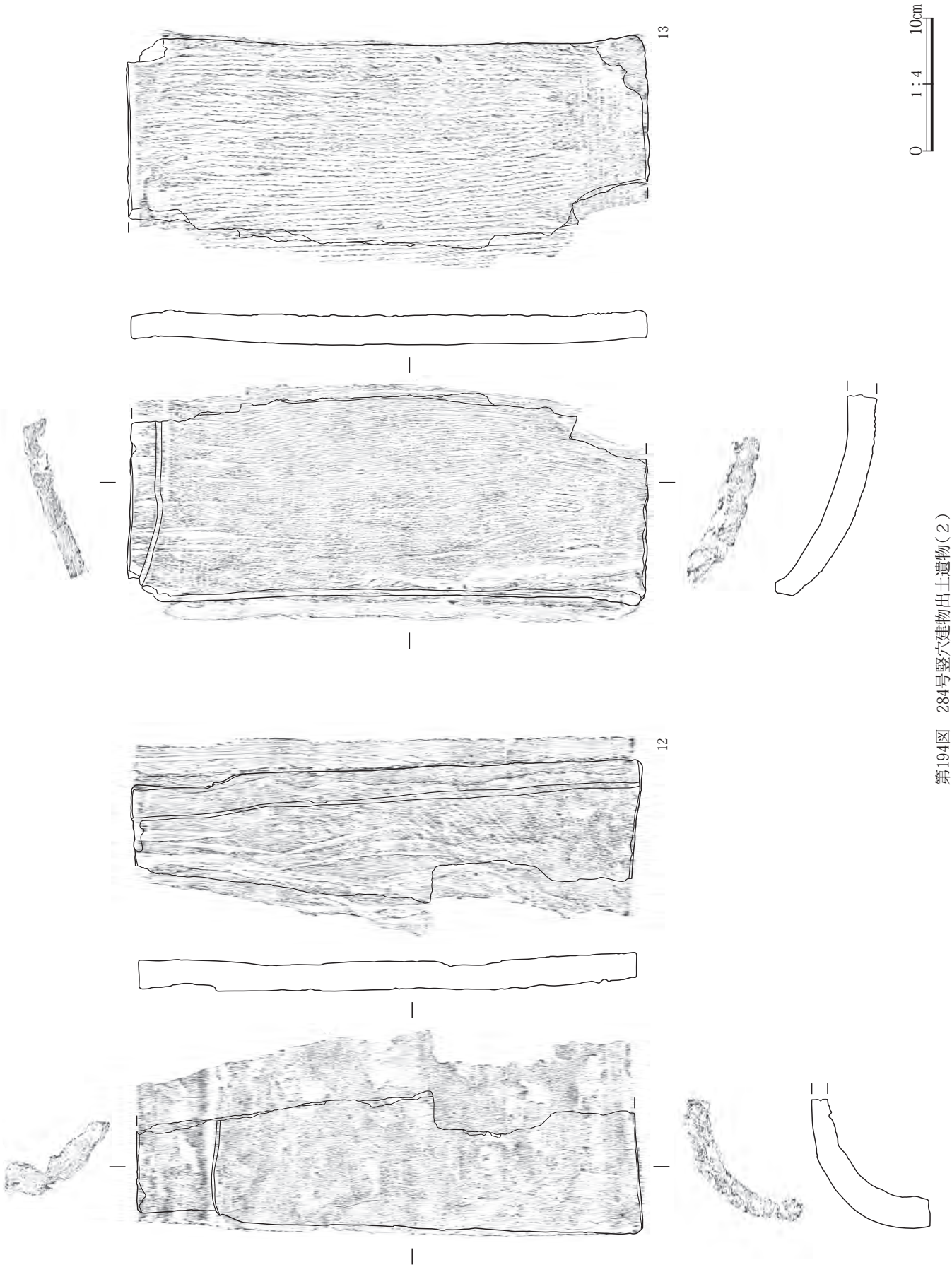
床下土坑　床下土坑１は中央やや東寄りに位置し、規模は長軸0.85m、短軸0.49m、深さ0.09mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。少量のローム小塊～粒、微量の焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していたが、Ｐ２と同様に底面には薄くローム土が貼られていた。当初、Ｐ２と同様の機能を有していたものが、その後、Ｐ２が作られたことにより機能を失い埋められた可能性が考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　「入田」と書かれた須恵器椀（３）が出土したことが特筆される。土師器甕は少なくとも４個体（５～８）が確認されているが、このうち８はカマド内やカマド脇から出土した破片が接合したものである。また、本竪穴建物からは多数の瓦が出土したが、このうち12・13についてはカマドの構築材として使用されたものであると考えられる。14は貯蔵穴の西壁に立てかけられた状態で出土したことから、意図的に置かれたものであると推測できる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片53点（220ｇ）、甕・壺類破片723点（3,360ｇ）、須恵器の杯・椀類破片228点（1,800ｇ）、甕・壺類破片72点（2,225ｇ）、瓦片１点、剝片１点（5.0ｇ）が出土している。

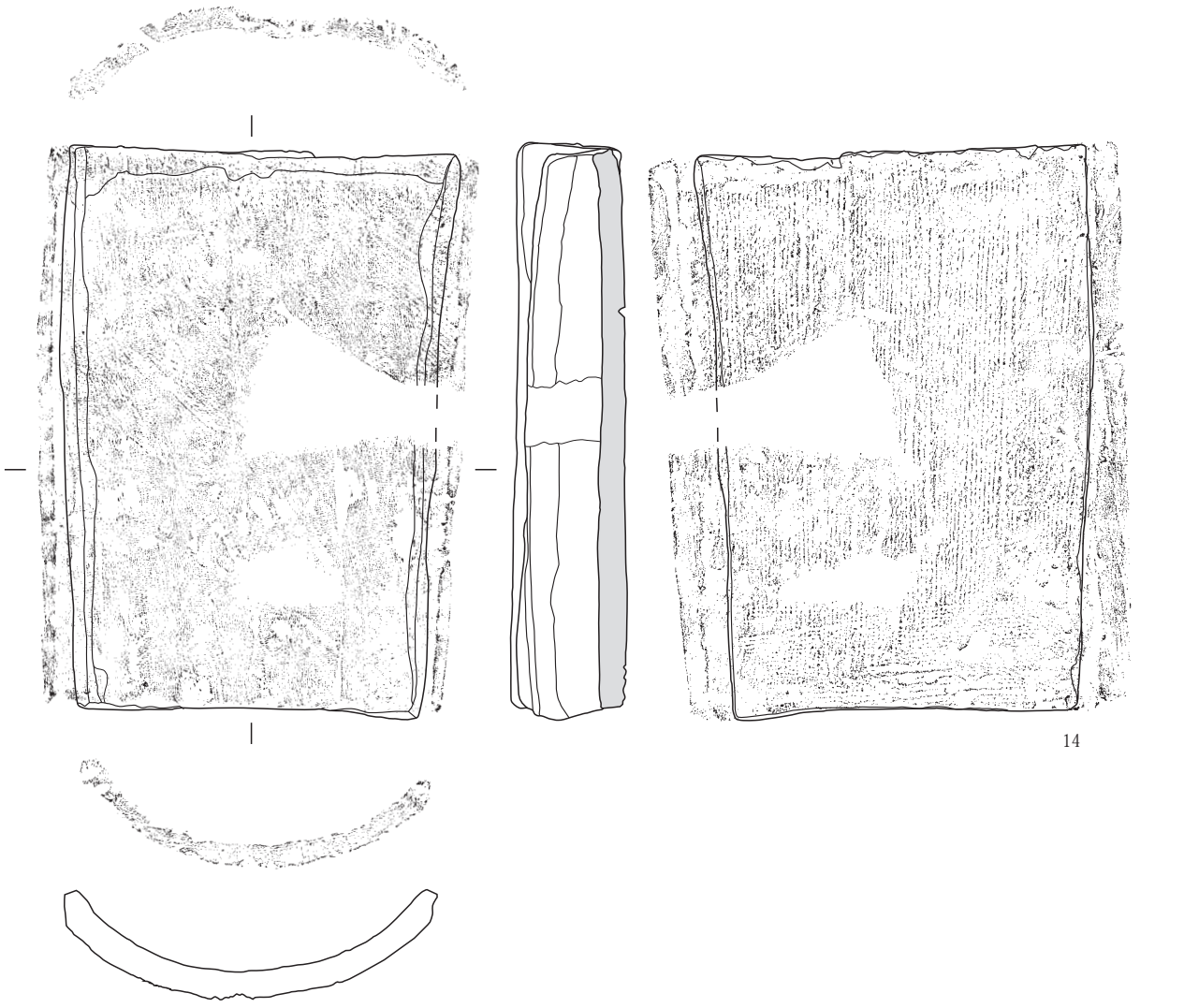
所見　出土遺物から９世紀第４四半期から10世紀第１四半期にかけての竪穴建物であると考えられる。



第193図　284号竪穴建物出土遺物（１）



第194図　284号竪穴建物出土遺物（２）



第195図　284号竪穴建物出土遺物（３）

285号竪穴建物（第196～198図、PL.81～83・314・315）

位置　Ｘ＝40,827～40,831、Ｙ＝－80,765～－80,769（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.70m、短軸2.90m

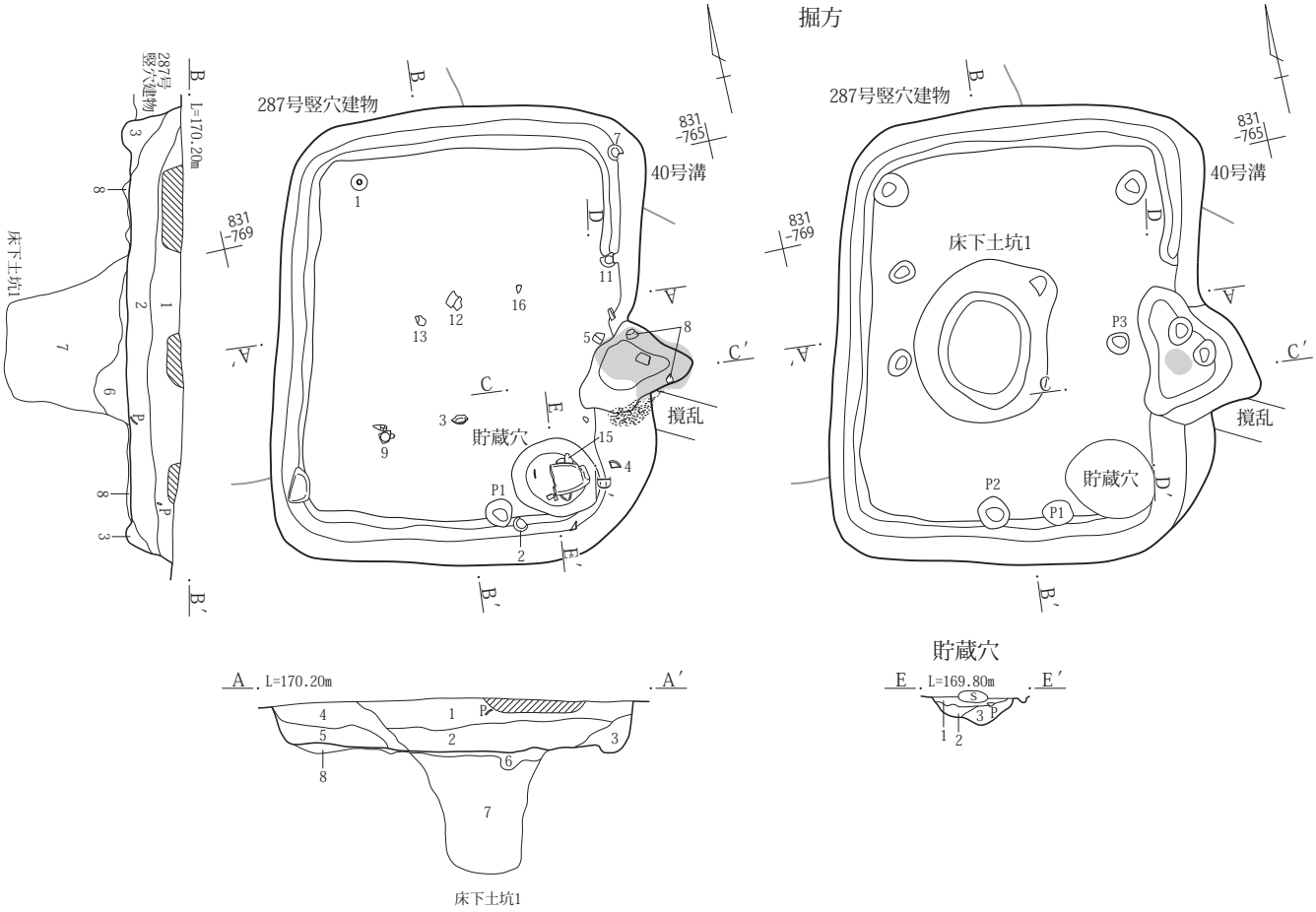
面積　8.315㎡

残存壁高　0.48m

方位　Ｎ－95°－Ｅ

重複　287号竪穴建物、40号溝と重複し、いずれも285号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム小塊～粒、微量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。ただし、４・５層はやや多量のローム塊を含んでおり、これはカマドが人為的に破壊された痕跡であると考えられる。



285号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

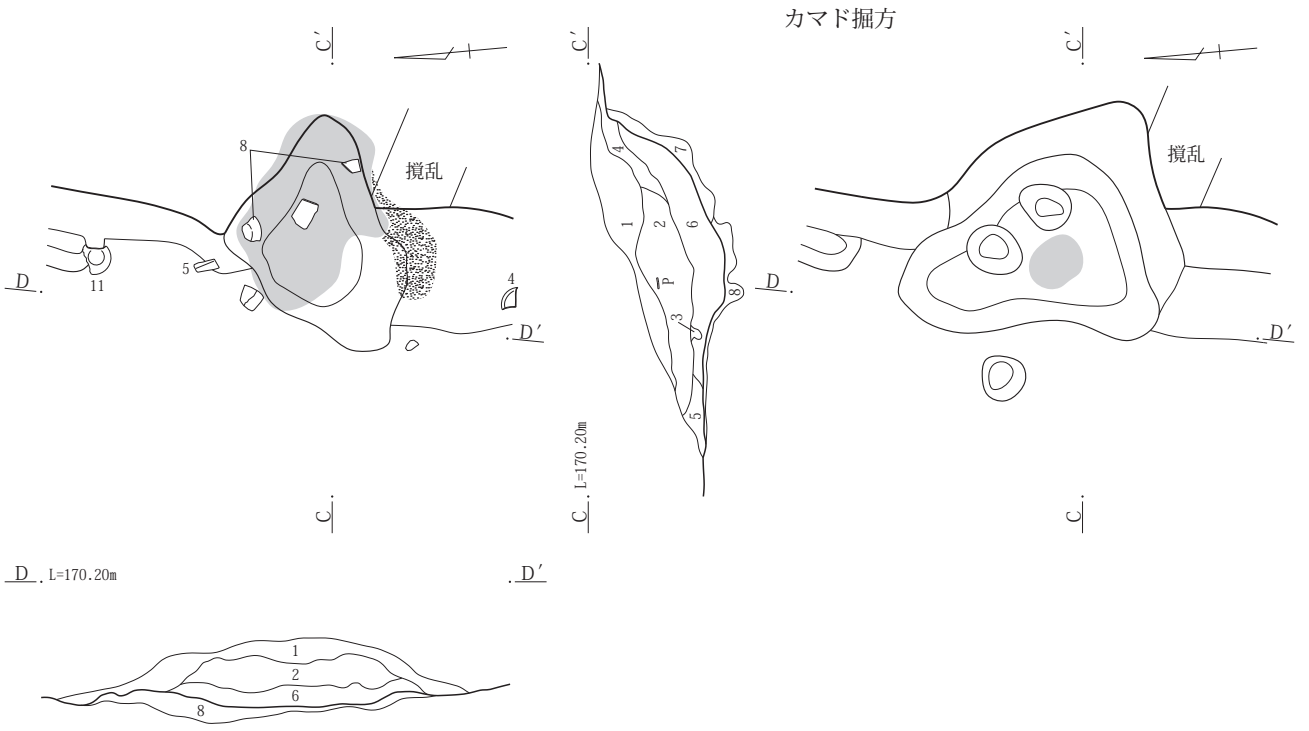
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粗塊～小塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．暗褐色土10YR3/3　ローム塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
6．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊をやや多量含む。粘性、締まり弱い。
8．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

285竪穴建物貯蔵穴Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第196図　285号竪穴建物



285竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′
１．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。粘性、締まり強い。
３．赤褐色土5YR4/6　焼土塊。粘性やや弱い。締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム塊、焼土塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．黒褐色土10YR2/2　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

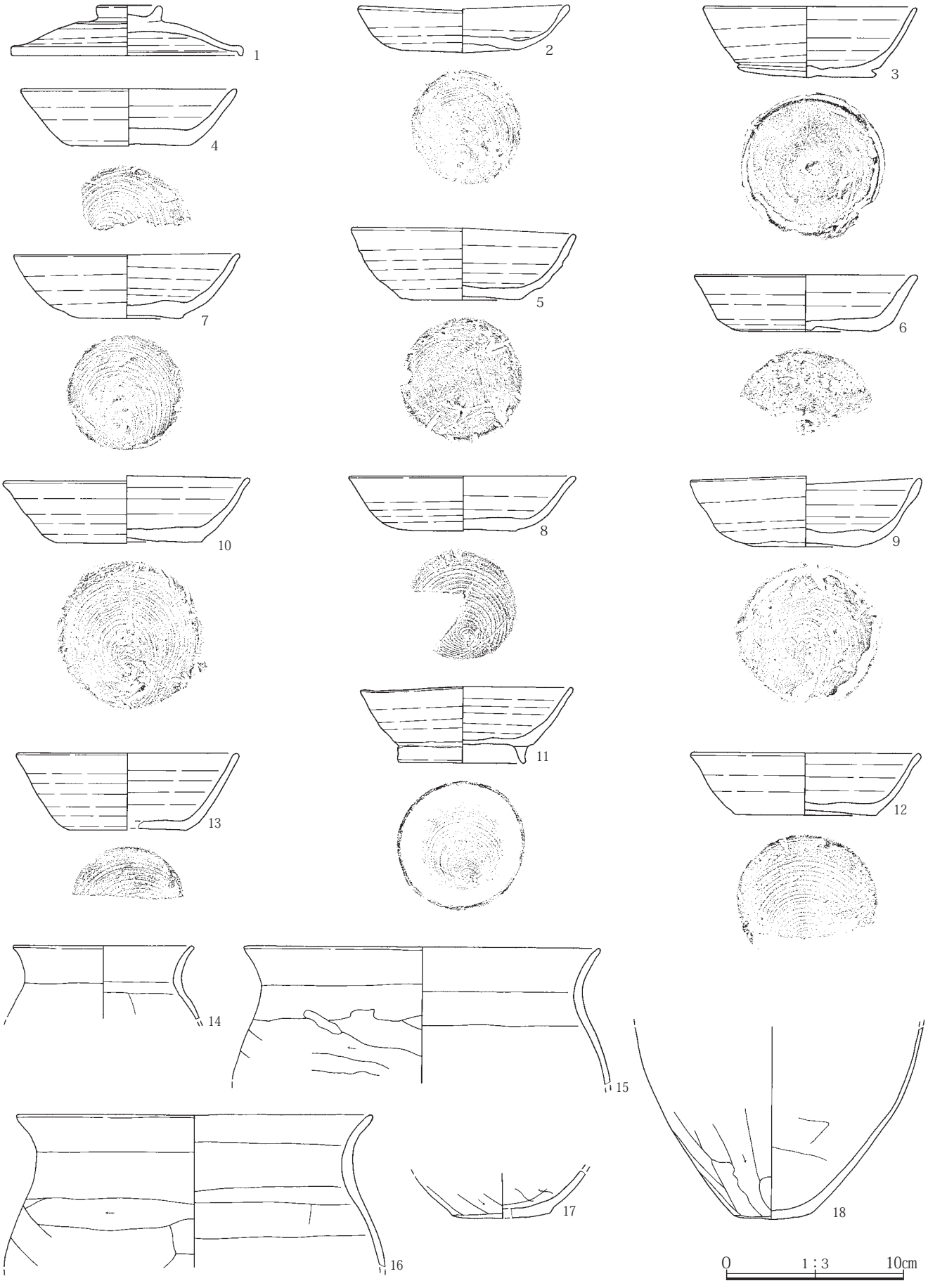
第197図　285号竪穴建物カマド

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は0.86m、燃焼部幅は0.37mで、壁外に0.40m燃焼部・煙道が伸びる。残存状況はあまり良好ではないが、向かって右側の側壁の一部は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、掘方調査では向かって左側の袖の下部から、袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.07mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　Ｐ１は南壁際の中央やや東に位置し、規模は長軸0.23m、短軸0.22m、深さ0.14m、形状は円形に近い不整形である。埋没土の特徴については不明である。やや貯蔵穴に近いが、入口の梯子穴である可能性が考えられる。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.69m、短軸0.63m、深さ0.26m、形状は不整形である。上層からやや多量のローム小塊～粒、焼土粒を含む黒褐色土、多量のローム小塊を含むにぶい黄褐色土、少量のローム粒、焼土粒を含む褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。また、上層には長さ0.28m、幅0.26m、厚さ0.10mの礫が廃棄されていたが、これはカマドの構築材の一部であると考えられる。

壁際溝　幅0.23～0.39m、深さ0.03～0.09mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。



第198図　285号竪穴建物出土遺物

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方はカマドの下部や床下土坑などを除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.03mであった。また、掘方調査ではピット状の浅い窪みを数か所検出したが、そのうち形状が安定していてやや深いものをＰ２・Ｐ３とした。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ２が0.26×0.25×0.23m、Ｐ３が0.18×0.18×0.12m、形状はいずれも円形に近い不整形である。床面はやや多量のローム小塊、少量の焼土粒を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央やや西寄りに位置し、規模は長軸1.31m、短軸1.06m、深さ1.01mである。形状は円筒形に近い楕円形で､円筒状に深く掘り込まれていた。ローム塊を主体とし、やや多量の黒褐色土小塊を含む褐色土で埋没していた。重複する部分がわずかであるため断定はできないが、土層断面の観察から床下土坑１は貼床を掘り抜いていると判断された。このことから、床下土坑１は床面を壊して粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に再度貼床された可能性が考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器蓋(１)は、北西隅付近の床面に伏せた状態で置かれていたものである。また､須恵器杯(３・５・９)や須恵器椀(11)も床面近くから出土しており、意図的に置かれたものである可能性が考えられる。土師器甕は少なくとも２個体(15・16)が確認されているが、このうち15は貯蔵穴内から出土したものであり、16はカマド内やカマド前から出土した破片が接合したものである。また、カマド内からは須恵器杯(８)が、割れた状態で出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片66点(407ｇ)、甕・壺類破片314点(1,700ｇ)、須恵器の杯・椀類破片139点(780ｇ)、甕・壺類破片14点(335ｇ)、剝片１点(25.3ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ａ式)の口辺部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。

286号竪穴建物(第199～203図、PL.83～86・315・316)

位置　Ｘ＝40,834～40,838、Ｙ＝－80,768～－80,772(Ｃ・Ｄ区)

形状　正方形

規模　長軸3.77m、短軸3.59m

面積　9.493㎡

残存壁高　0.46m

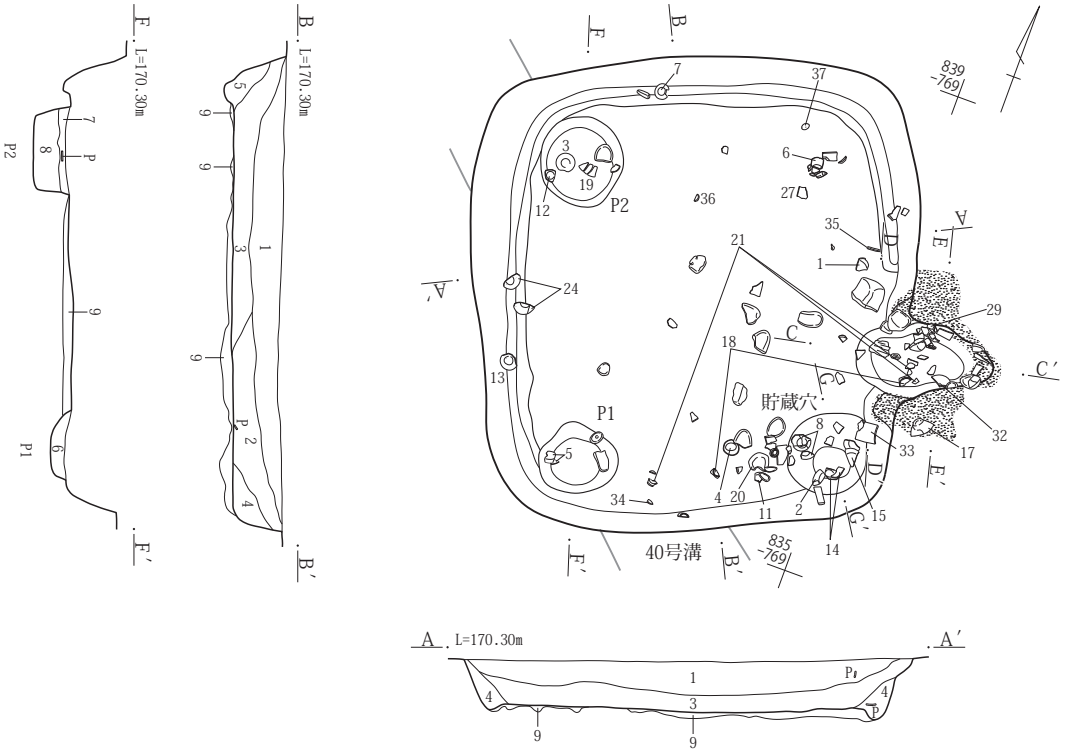
方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　40号溝と重複し、286号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、ごく微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土、または少量のローム小塊～粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にローム塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.08m、燃焼部幅は0.42mで、壁外に0.90m燃焼部・煙道が伸びる。側壁には床下土坑から採取されたと思われる粘土が厚く貼られ、奥壁の一部も同様の粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上にも粘土塊を主体とする土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は､最大で0.44mである。側壁には瓦片や礫が並べられていたが、これは側壁を補強する目的で置かれたものであると考えられる。これらの礫のうち最大のものは、長さ0.28m、幅0.21m、厚さ0.13mである。さらに貯蔵穴の周辺には多数の礫や瓦片が散乱していたが、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。向かって左側の袖石は残存していた。この袖石は、長さ0.25m、幅0.16m、厚さ0.11mである。一方、右側の袖石は消失しており、袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みのみを検出した。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.20m、幅0.15m、厚さ0.10mである。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

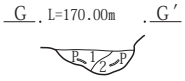
柱穴　Ｐ１は南西隅、Ｐ２は北西隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.62×0.56×0.15m、Ｐ２が0.71×0.65×0.32m、形状はＰ１が楕円形、Ｐ２が円筒形に近い楕円形である。いずれも柱穴とは考えられない。Ｐ１は少量のローム塊を含む黒褐色土で埋没していた。Ｐ２は多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。これらの遺構配置は284号竪穴建物に似てい



286号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′・Ｆ－Ｆ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR3/2　ローム塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
8．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まり強い。

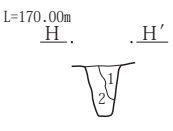
貯蔵穴



286竪穴建物貯蔵穴Ｇ－Ｇ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。

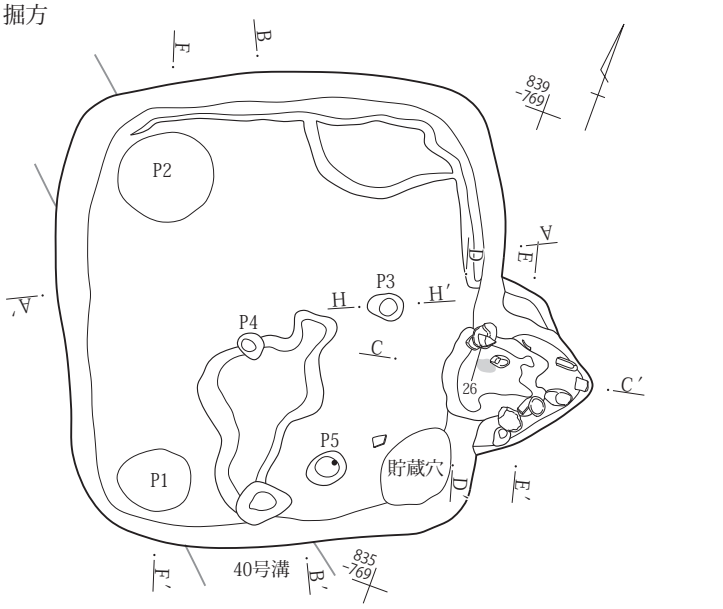
P3

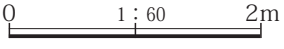


286竪穴建物Ｐ３Ｈ－Ｈ′

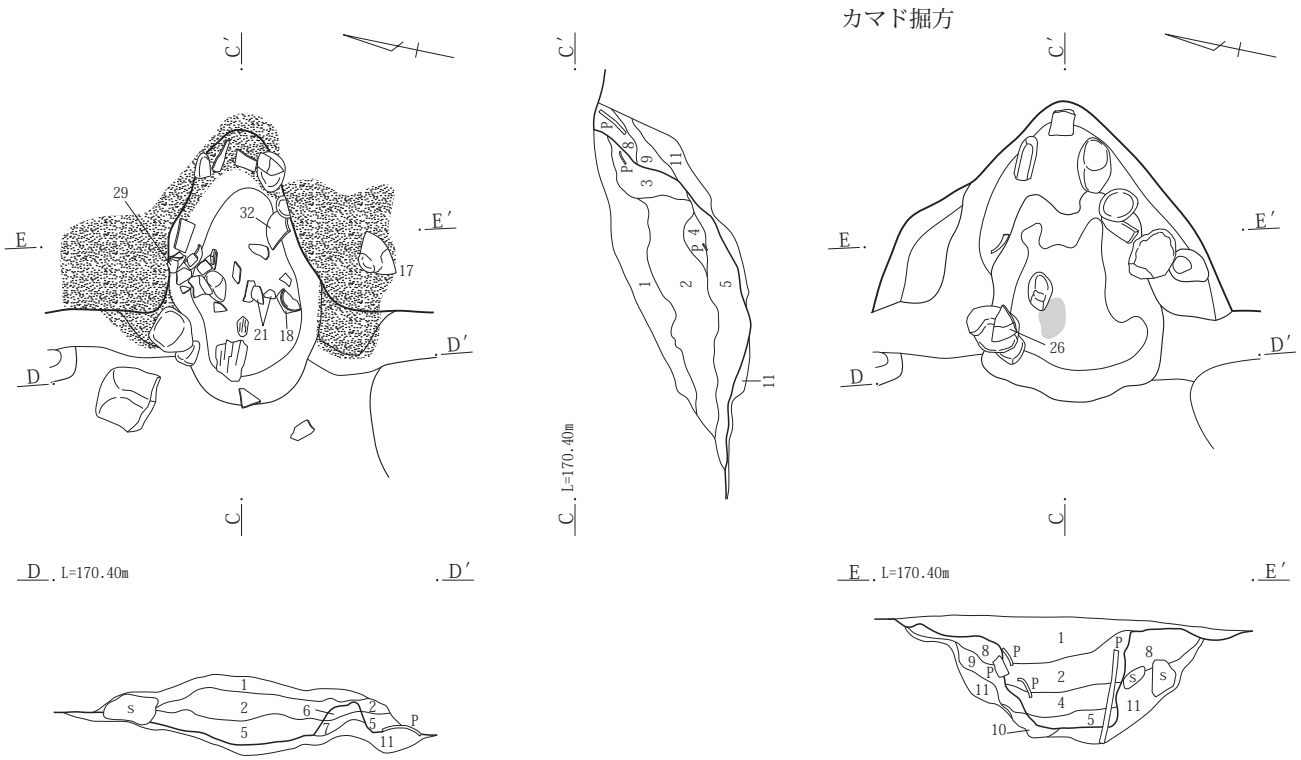
1．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

掘方



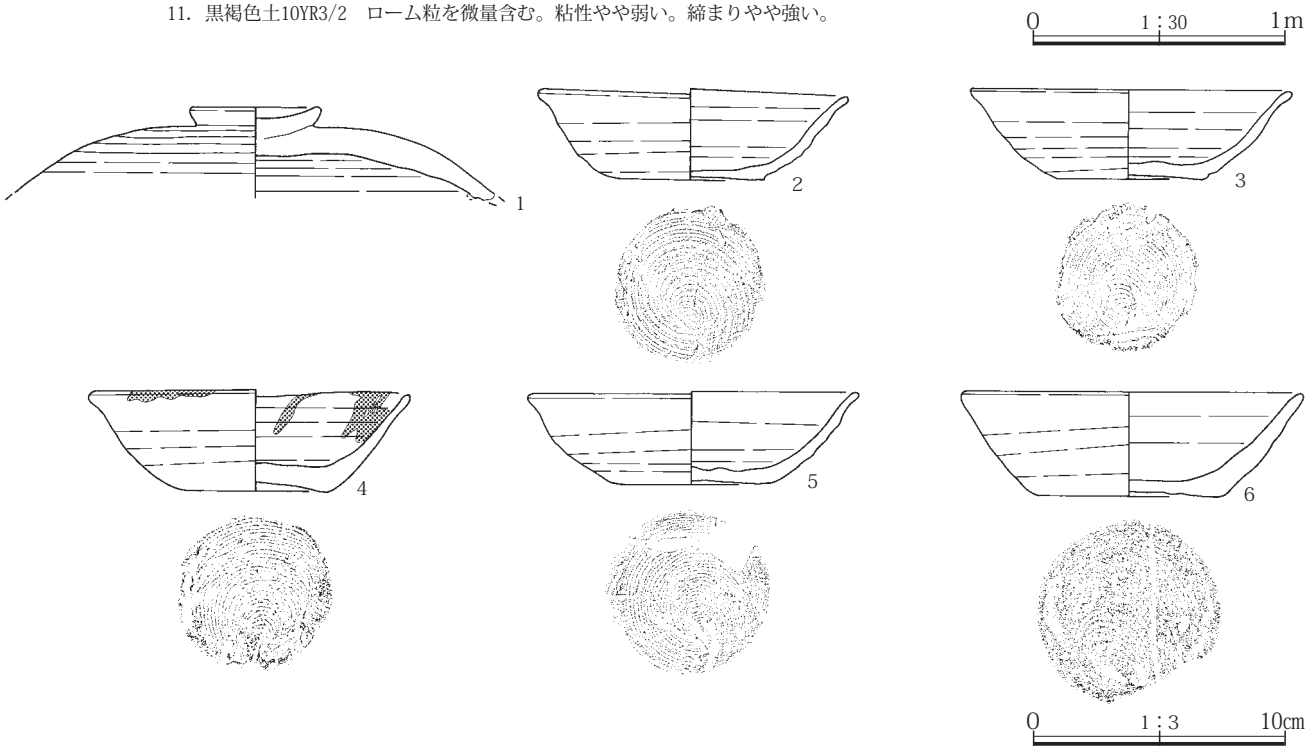


第199図　286号竪穴建物

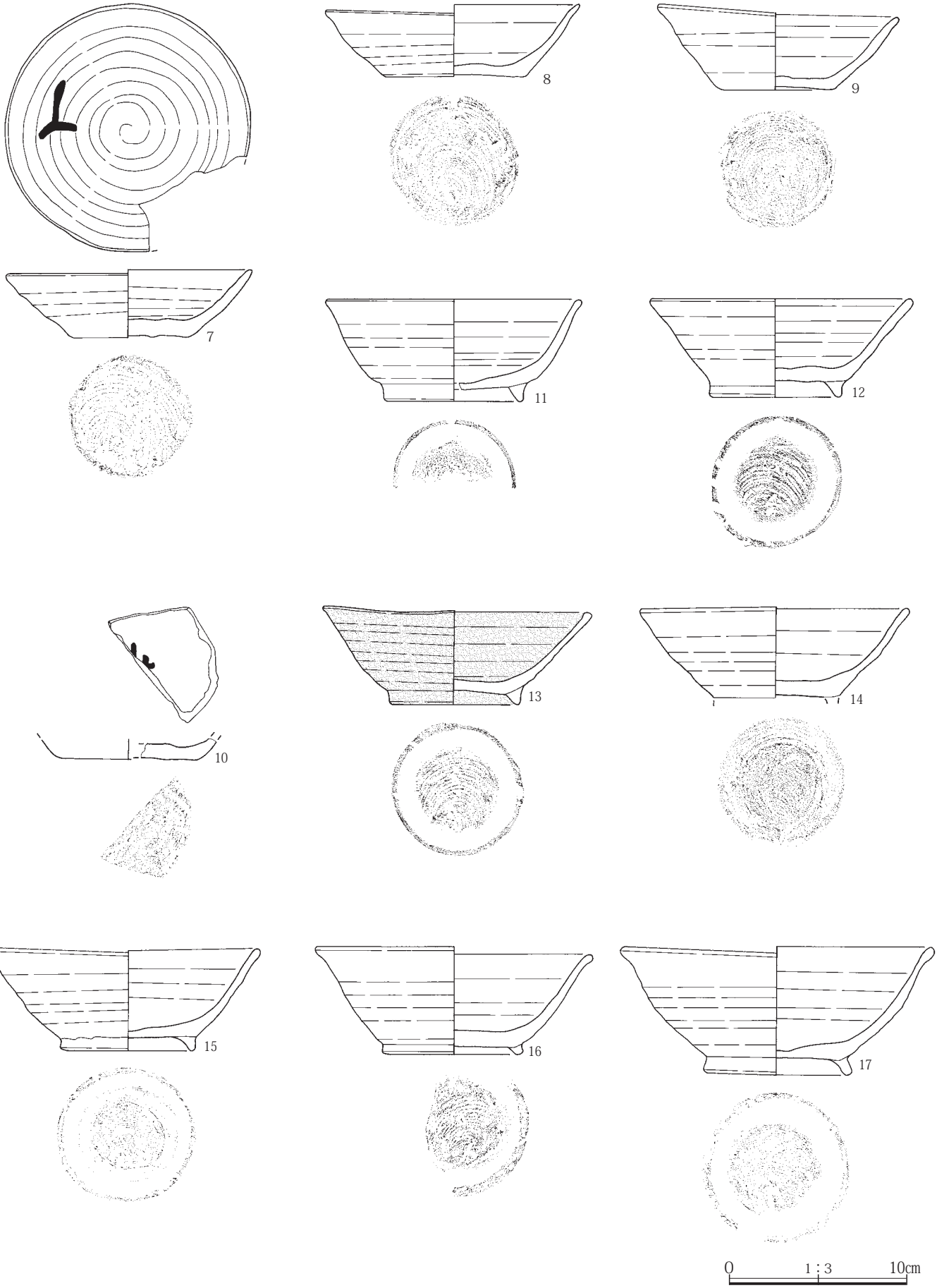


286竪穴建物カマドＣ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′・Ｅ－Ｅ′

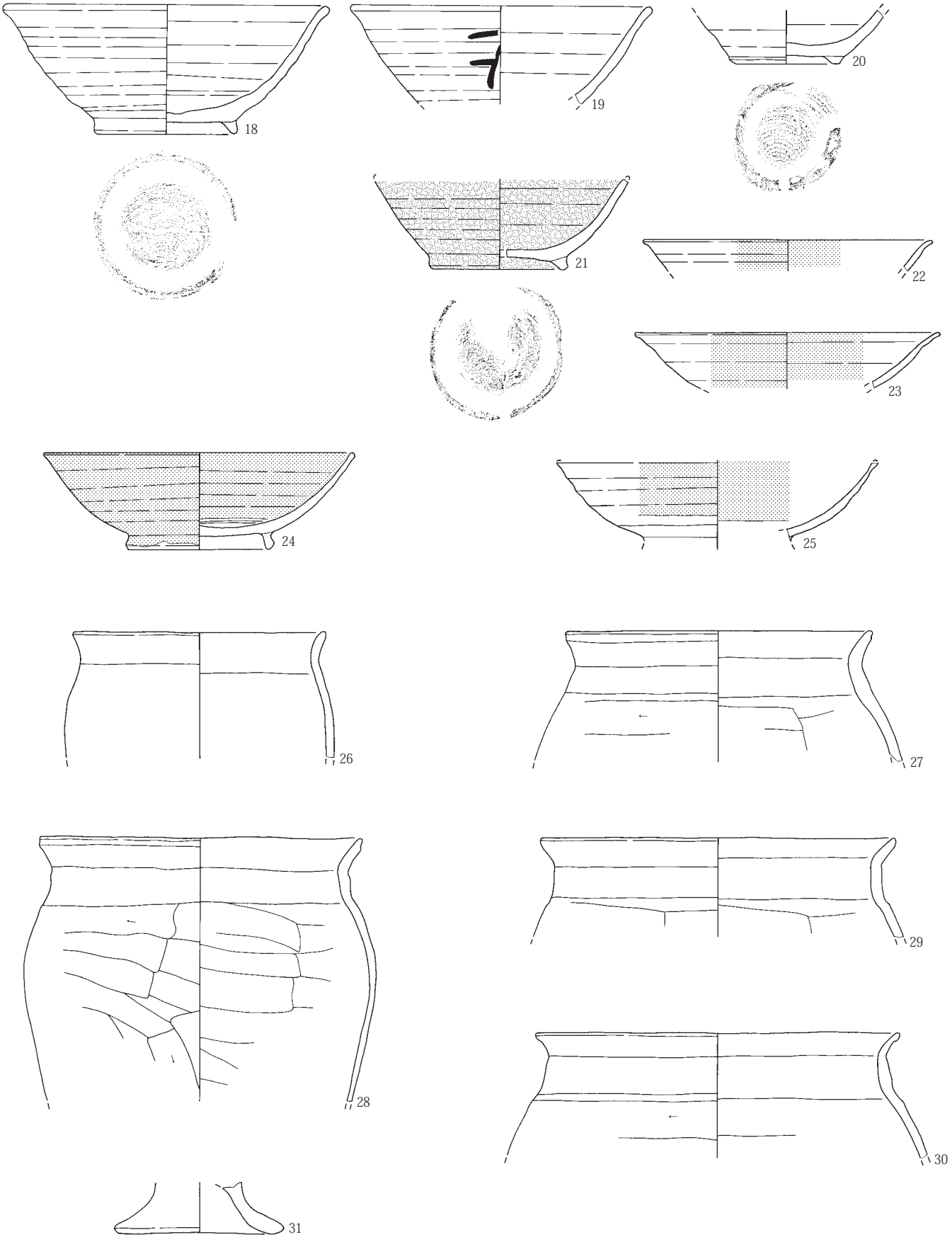
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊～小塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、焼土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒、炭化物粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
９．暗褐色土10YR3/4　焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
10．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



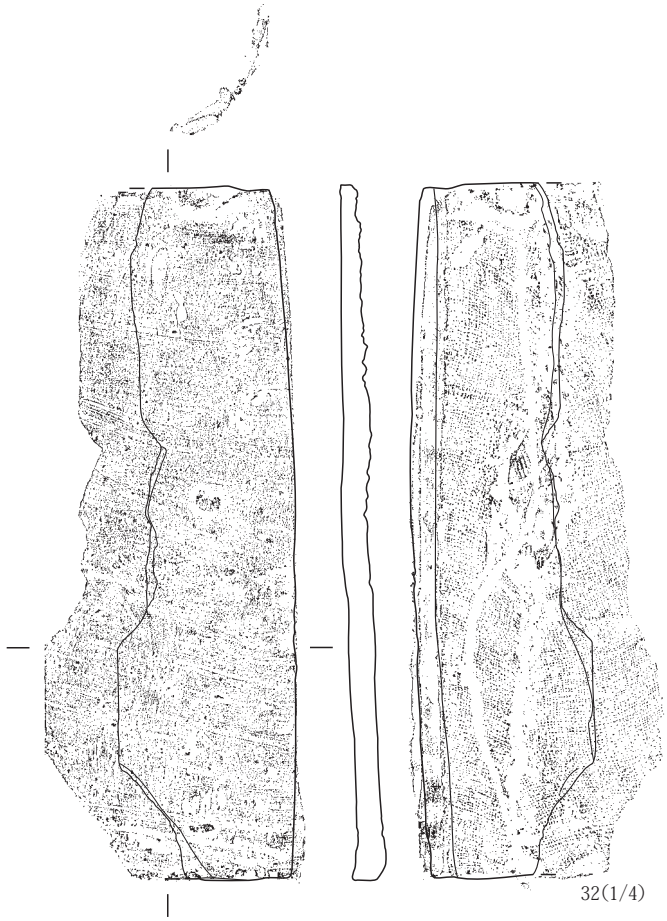
第200図　286号竪穴建物カマドと出土遺物（１）

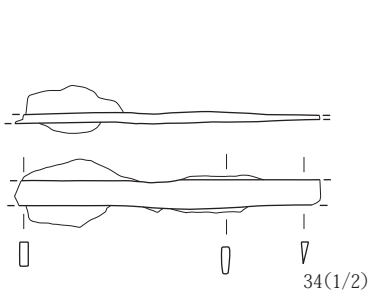


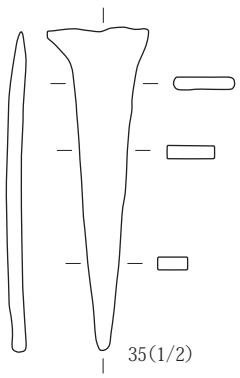
第201図　286号竪穴建物出土遺物（２）

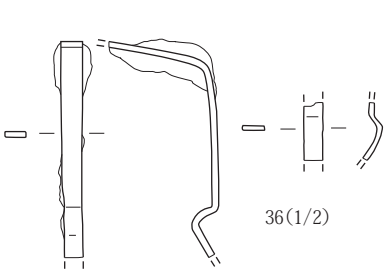


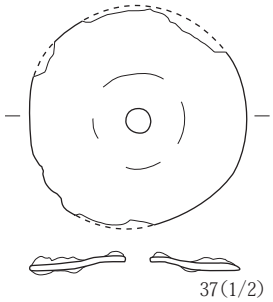
第202図　286号竪穴建物出土遺物（３）

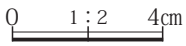


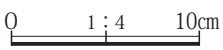












第203図　286号竪穴建物出土遺物（４）

るが、どのような機能を有していたかは不明である。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.64m、短軸0.61m、深さ0.24m、形状は不整形である。やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没しており、多量の土器片や瓦片が廃棄されていた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　南壁を除く範囲で、幅0.30～0.45m、深さ0.01～0.07mの壁際溝を検出した。微量のローム粒を含む黒褐色土、またはやや多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.05mであった。ただし、南壁際の中央付近や北東隅はやや低く、床面からの深さは最大で0.10mであった。掘方調査では３基のピットを検出したが、それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ３が0.28×0.22×0.44m、Ｐ４が0.21×0.19×0.33m、Ｐ５が0.32×0.25×0.49m、形状はいずれも楕円形である。床面は多量のローム塊～粒を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　「丁」と書かれた須恵器杯(７)が、壁際溝内から逆位に置かれた状態で出土したことが特筆される。また、刀子(34・35)、紡輪(37)など、鉄製品が多く出土していることも本竪穴建物の特徴である。この他にも須恵器杯(４・６)や灰釉陶器椀(24)などが、床面に正位で置かれた状態で出土している。須恵器椀(17)は、棚状施設に置かれていたものであると考えられる。貯蔵穴内からは、須恵器杯(２・８)、須恵器椀(14･15)などがまとまって出土した。Ｐ１内からは須恵器杯(５)、Ｐ２内からは須恵器杯(３)や須恵器椀(12・19)が出土した。土師器甕は少なくとも４個体(27～30)が確認されているが、このうち29はカマド内から出土したものである。カマド内からは、須恵器椀(18・21)も出土している。カマド内から出土した丸瓦(32)は、カマドの構築材として使用されたものである。また、カマド脇から出土した平瓦(33)も、カマドの構築材であった可能性が考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片55点(172ｇ)、甕・壺類破片464点(2,890ｇ)、須恵器の杯・椀類破片313点(2,510ｇ)、甕・壺類破片20点(642ｇ)、瓦片15点、磨石(764.5ｇ)、礫片１点(8.9ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期から10世紀第１四半期にかけての棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

287号竪穴建物(第204・205図、PL.86・87・316)

位置　Ｘ＝40,829～40,834、Ｙ＝－80,766～－80,770(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸4.54m、短軸3.31m

面積　(9.077㎡)

残存壁高　0.41m

方位　Ｎ－15°－Ｗ

重複　285号竪穴建物と重複し、287号竪穴建物が古い。

埋没土　多量のAs-C、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。また、壁際ではやや多量のローム塊を含む暗褐色土の堆積が認められたが、これは壁面の崩落によるものと考えられる。

カマド　検出されなかった。285号竪穴建物によって壊された東壁の南半に存在していた可能性が高いと考えられる。また、本竪穴建物の床下には粘土を採取した痕跡であると考えられる床下土坑が存在することから、カマドはここから採取した粘土によって構築されていたと推測できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　調査範囲において幅0.23～0.33m、深さ0.01～0.08mの全周する壁際溝を検出した。少量のAs-C、やや多量のローム塊を含む暗褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

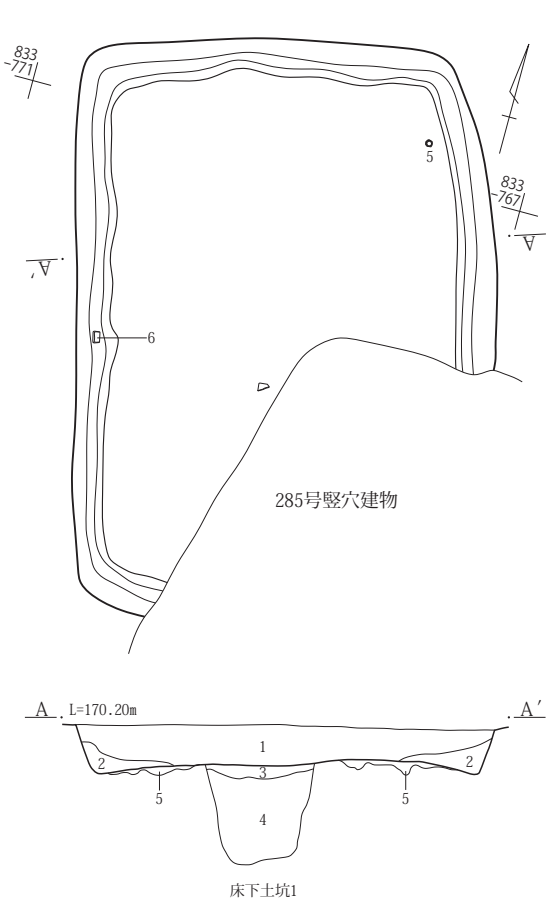
掘方　掘方は床下土坑を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.05mであった。また、東壁際の中央付近はわずかに低く、床面からの深さは最大で0.09mであった。床面はやや多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央やや北寄りに位置し、規模

は長軸1.17m、短軸0.88m、深さ0.79mである。形状は楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が一部袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。非常に多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。また、その上位に堆積していた黒褐色土は、貼床の５層とは大きく異なることから、貼床ではなく竪穴建物の埋没土が沈んだ可能性が考えられる。貼床との新旧関係は不明だが、粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお､本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　壁際溝内から出土した砥石(６)以外は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片23点(101ｇ)、甕･壺類破片41点(222ｇ)、須恵器の杯･椀類破片12点(132ｇ)、甕・壺類破片５点(160ｇ)が出土している。

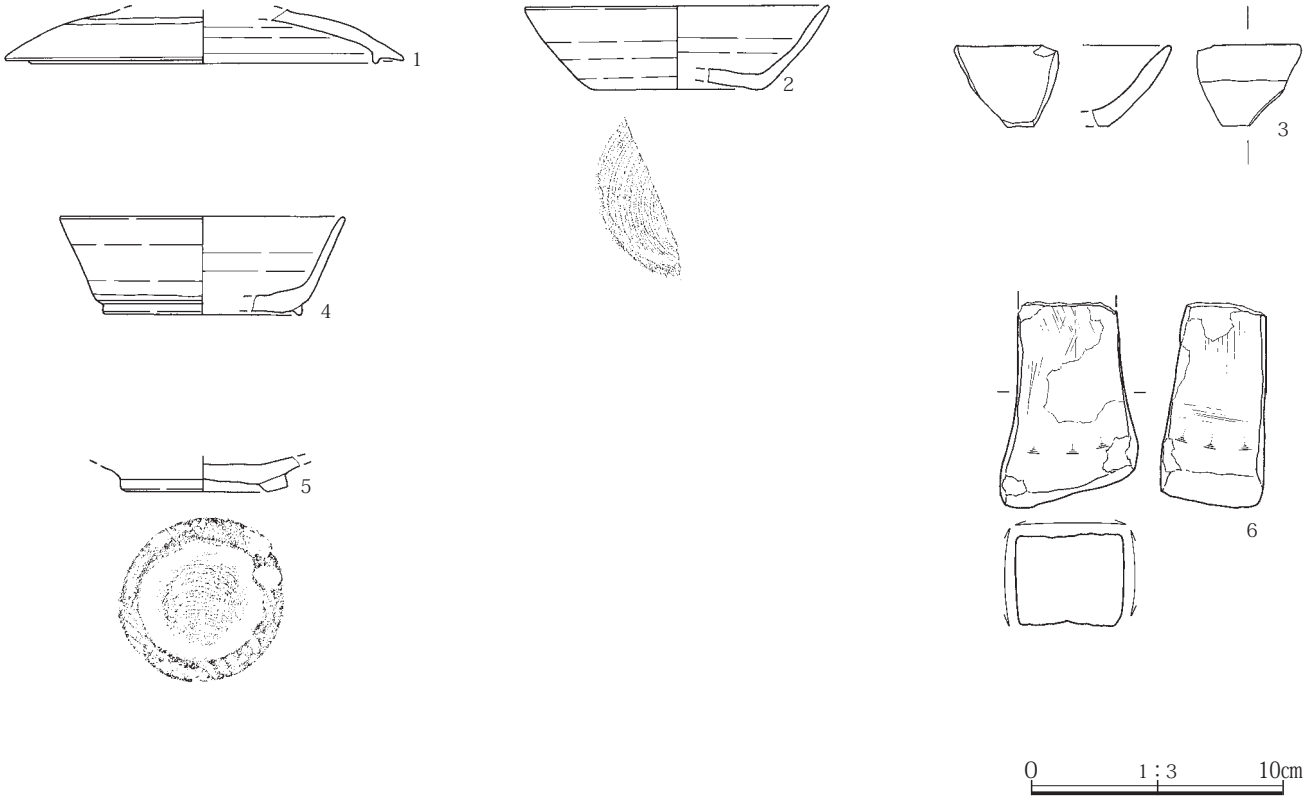
所見　出土遺物は数が少なく、８世紀前半から10世紀前半にかけての土器が混在しているため判断が難しいが、285号竪穴建物との重複関係から、８世紀代の竪穴建物であると考えられる。



287号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを多量、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．暗褐色土10YR3/3　As-Cを少量、ローム塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/1　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
５．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。

0　1：60　2m

第204図　287号竪穴建物



第205図　287号竪穴建物出土遺物

288号竪穴建物（第206図、PL.87・88・316）

位置　Ｘ＝40,819～40,821、Ｙ＝－80,758～－80,762（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(3.90m)、短軸(1.94m)

面積　(3.803㎡)

残存壁高　0.45m

方位　Ｎ－82°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　調査範囲からは検出されなかったが、竪穴建物の大部分が調査区外であったことから、カマドはこの未調査部分に存在した可能性が高いと考えられる。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１が、主柱穴の１つである可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

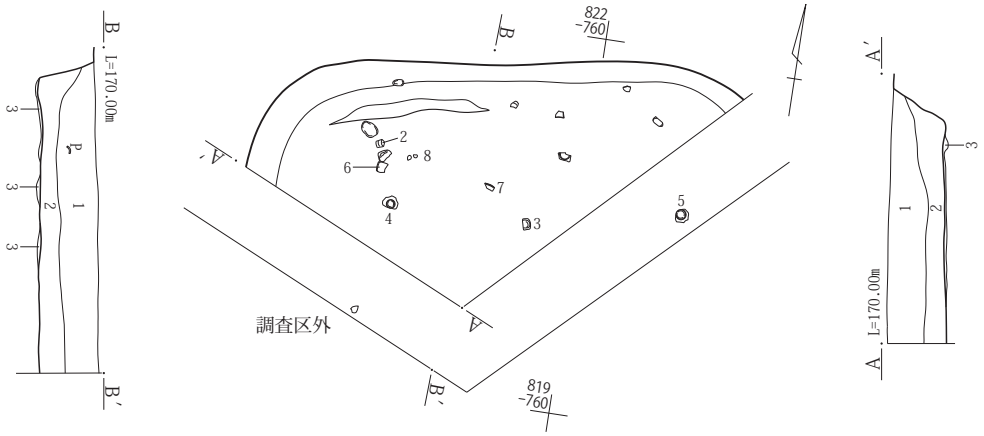
床面　調査範囲の床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.05mであった。また、北壁際には壁際溝のような窪みが認められ、そこでは床面からの深さが最大で0.06mであった。掘方調査で検出したＰ１は、長軸0.26m、短軸0.21m、深さ0.14m、形状は楕円形である。床面は微量のローム粒を含む黒褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　出土遺物はいずれも床面から0.10～0.43mの高さで出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片12点(53ｇ)、甕・壺類破片532点(1,444ｇ)、須恵器の杯・椀類破片223点(1,320ｇ)、甕・壺類破片25点(696ｇ)、剝片２点(5.0ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

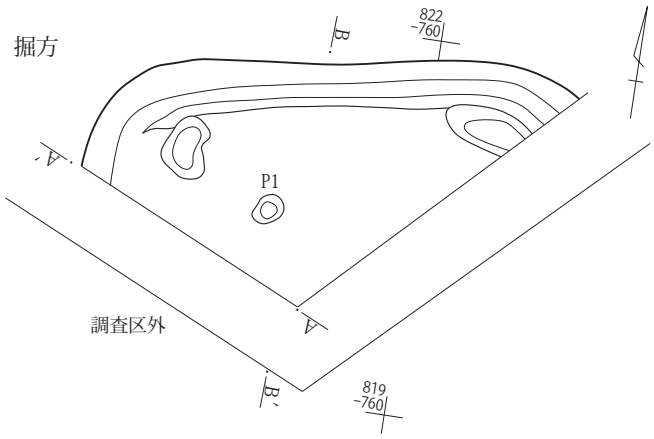


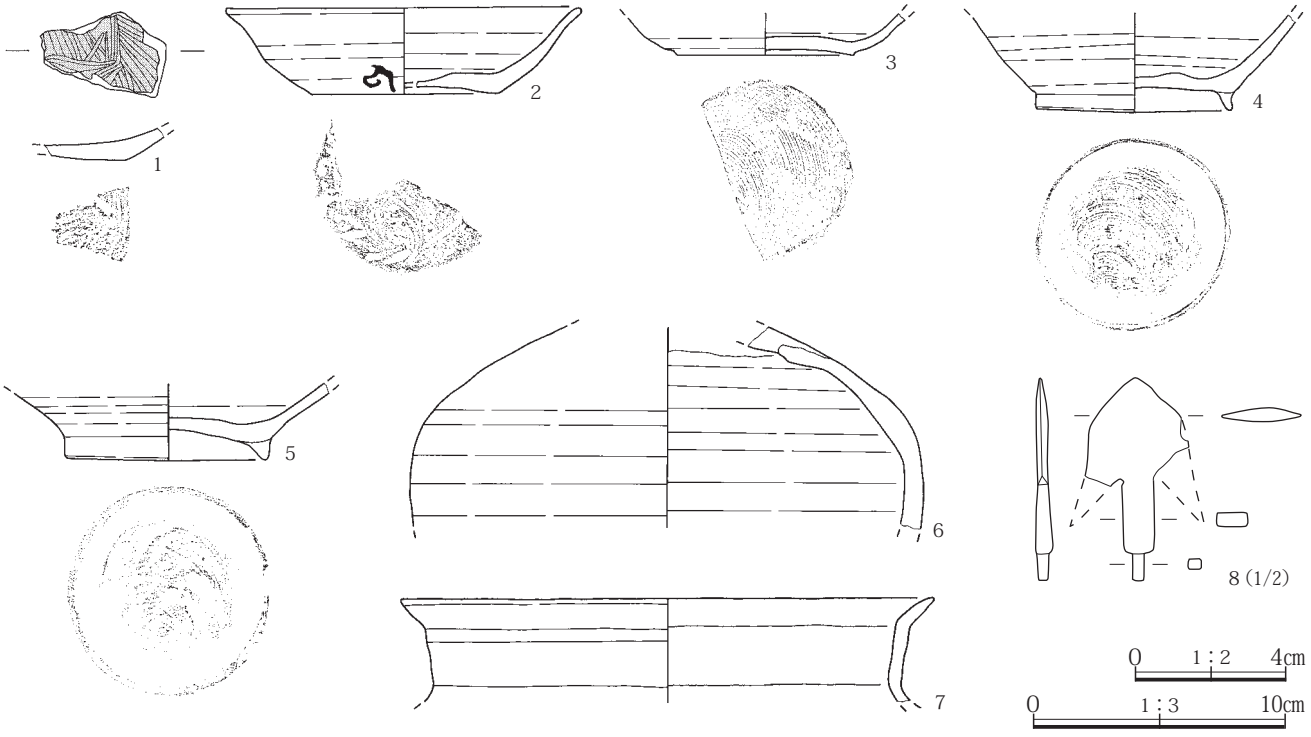
288号竪穴建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

３．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。





第206図　288号竪穴建物と出土遺物

289号竪穴建物（第207～211図、PL.88～90・317・318）

位置　Ｘ＝40,917～40,919、Ｙ＝－80,724～－80,727（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから不明である。

規模　長軸(2.75m)、短軸(2.50m)

面積　(4.155㎡)

残存壁高　0.43m

方位　Ｎ－93°－Ｅ

重複　301号ピットと重複し、289号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム小塊～粒を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.98m、燃焼部幅は0.32mで、壁外に0.46m燃焼部が伸びる。両袖は基部が残存しており、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.10mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１が、主柱穴の１つである可能性が考えられる。

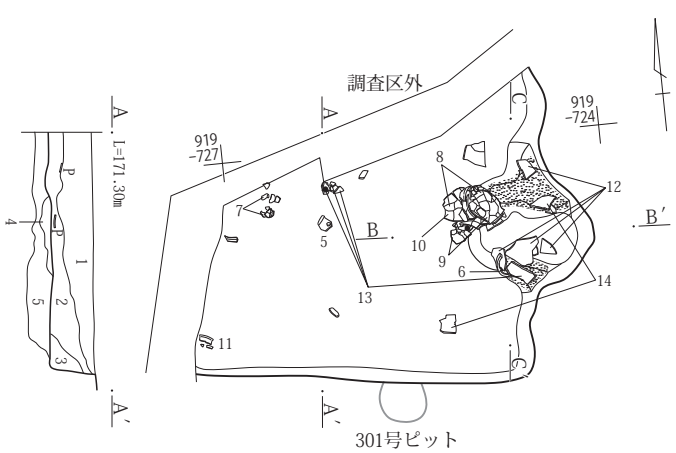
貯蔵穴　検出されなかった。

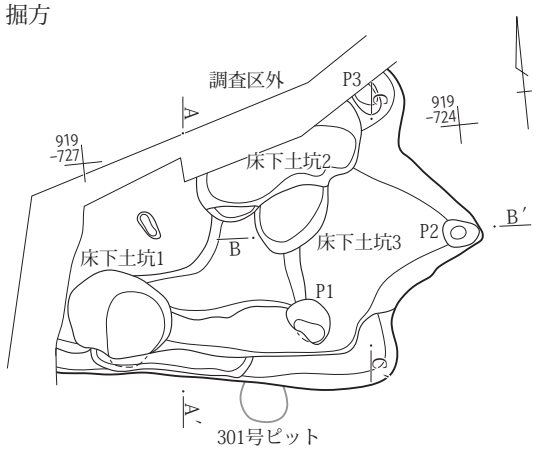
壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床下土坑を除く床面からの深さは概ね0.07～0.20mであった。掘方調査では３基のピットを検出したが、それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.38×0.27×0.60m、Ｐ２が0.29×0.22×0.16m、Ｐ３が(0.22)×0.19×0.29m、形状はＰ１が楕円形、Ｐ２・３が不整形である。床面はやや多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　３基の床下土坑は、それぞれ南壁際、北東隅、カマド前に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が0.83×0.67×0.42m、床下土坑２が1.41×(0.35)×0.34m、床下土坑３が0.72×(0.44)×0.30mである。





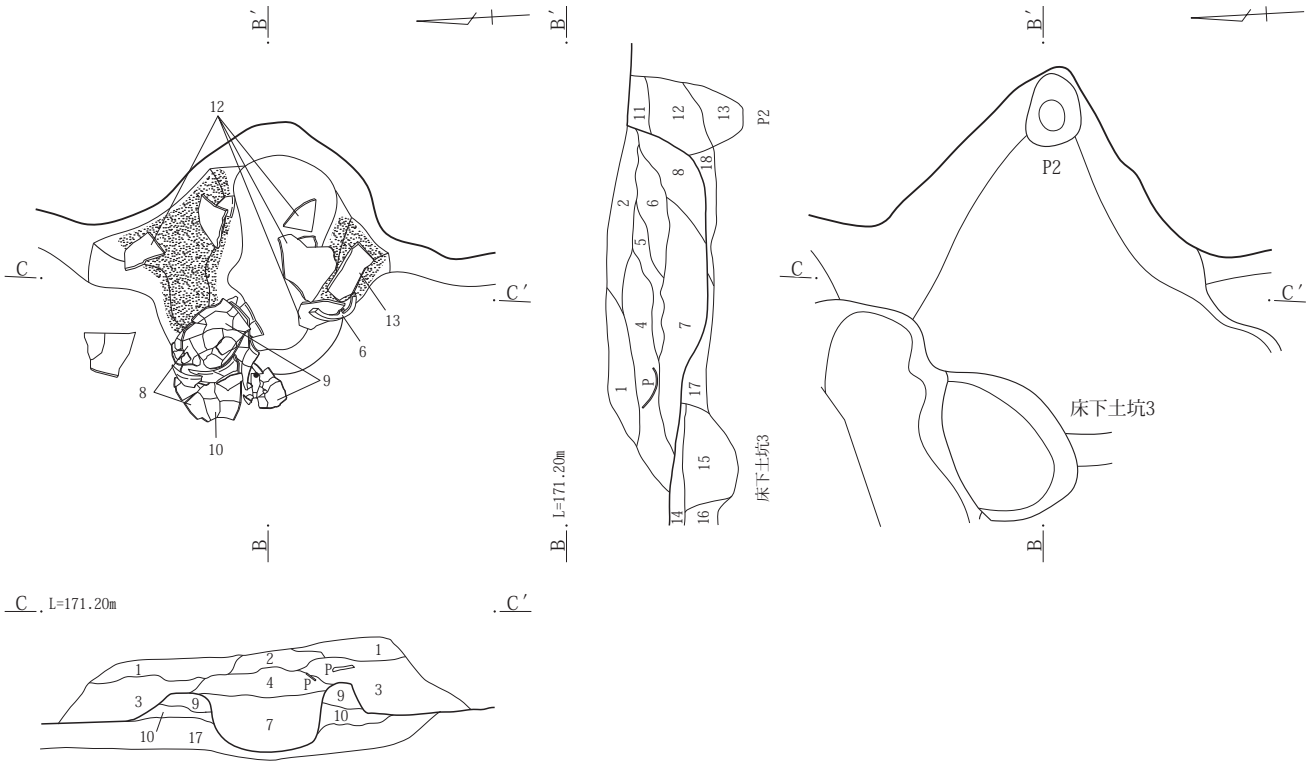
289号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～塊を多量、焼土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

第207図　289号竪穴建物

カマド掘方



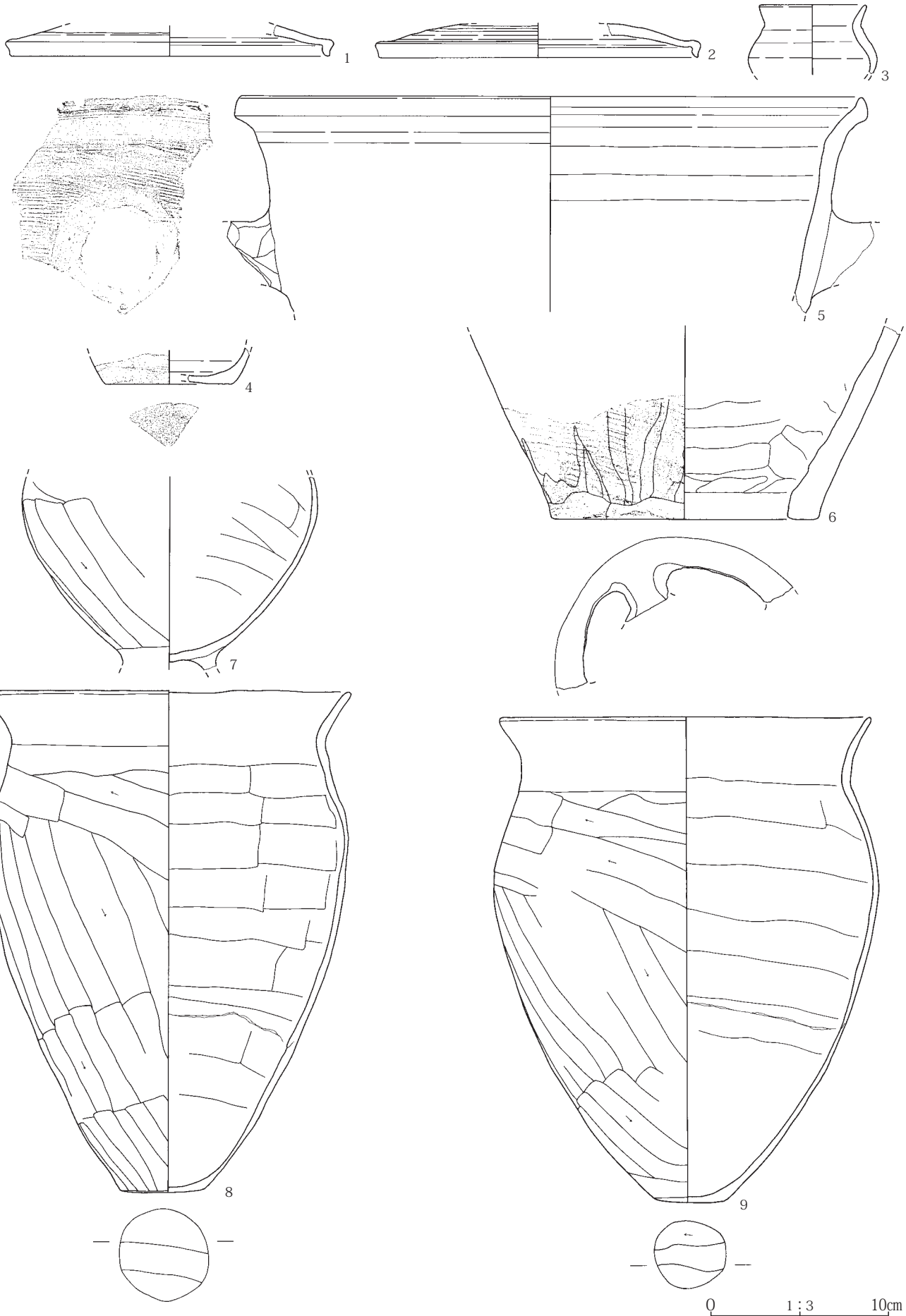
289号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．褐色土10YR4/4　ローム粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、焼土小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．にぶい赤褐色土5YR4/4　焼土塊～粒を主体とする。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量、灰を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
８．褐色土10YR4/6　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
９．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
13．暗褐色土10YR3/4　As-YPを多量含む。粘性、締まり弱い。
14．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
15．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊を多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
16．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
17．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
18．褐色土10YR4/6　焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

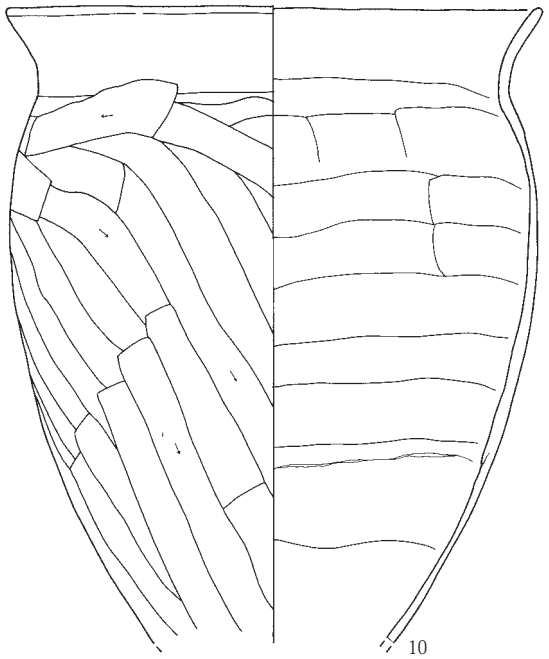
0　1：30　1m

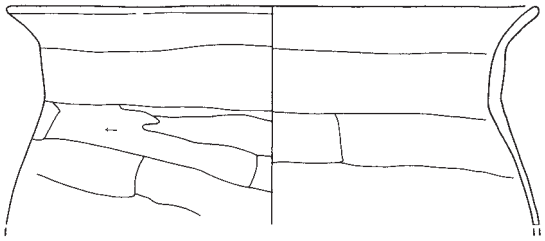
第208図　289号竪穴建物カマド

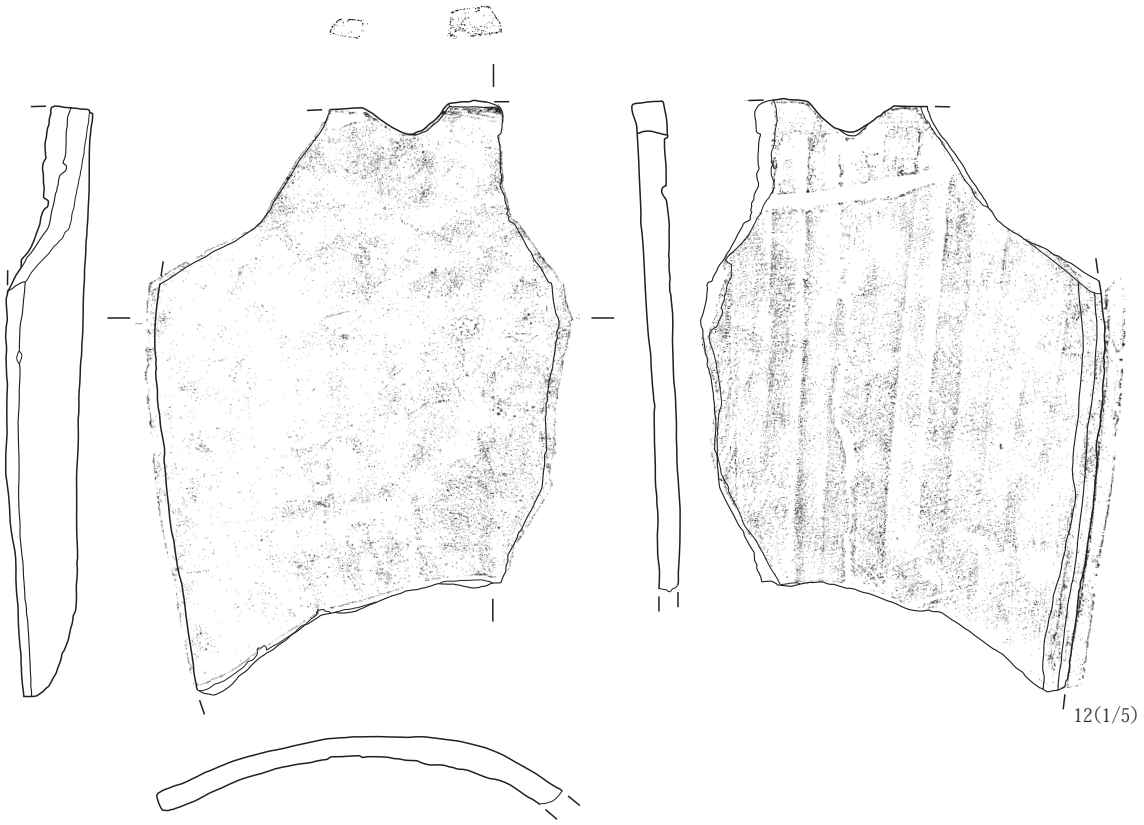
形状は床下土坑１が円筒形に近い不整形で、円筒状にやや深く掘り込まれていた。また、底部が一部袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。床下土坑２・３は不整形で、やや深く掘り込まれていた。床下土坑３は、多量のローム小塊、少量の焼土小塊を含む暗褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑１・２の埋没土については不明であるが、同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の

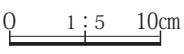


第209図　289号竪穴建物出土遺物（１）

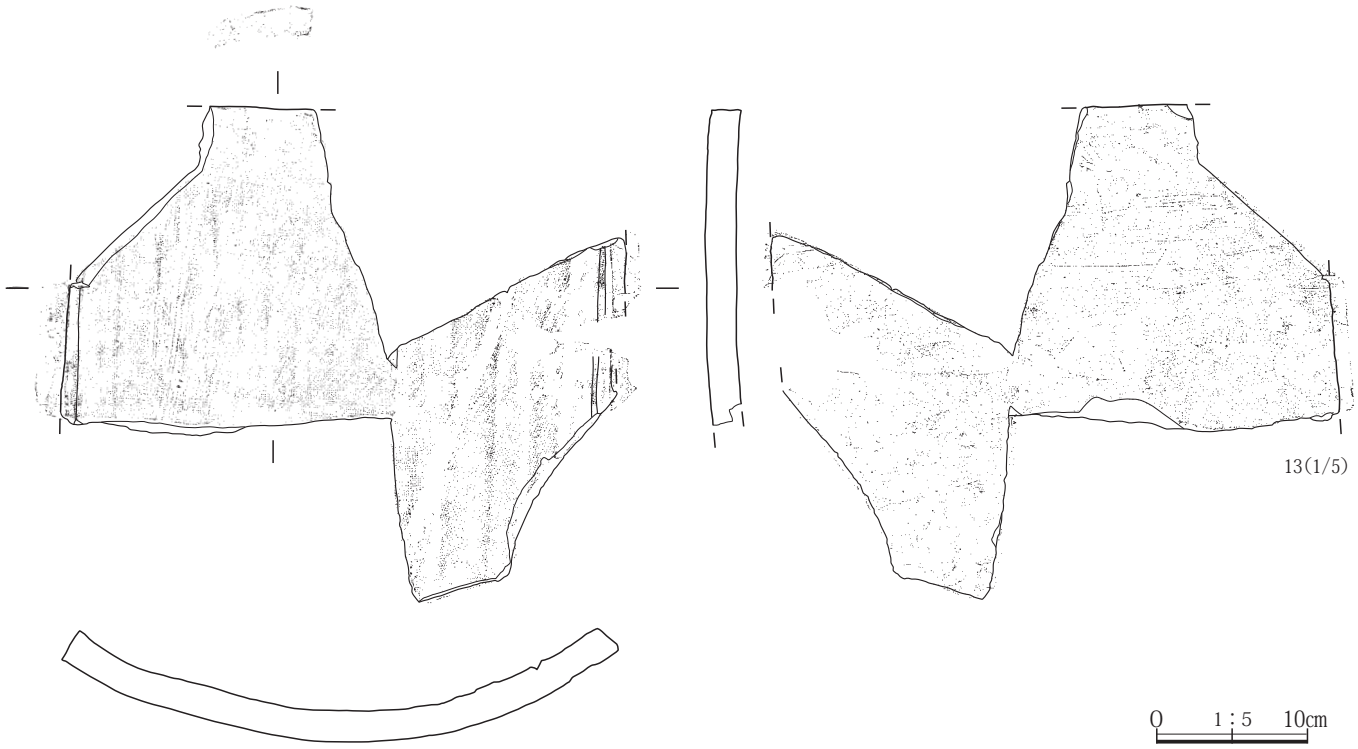


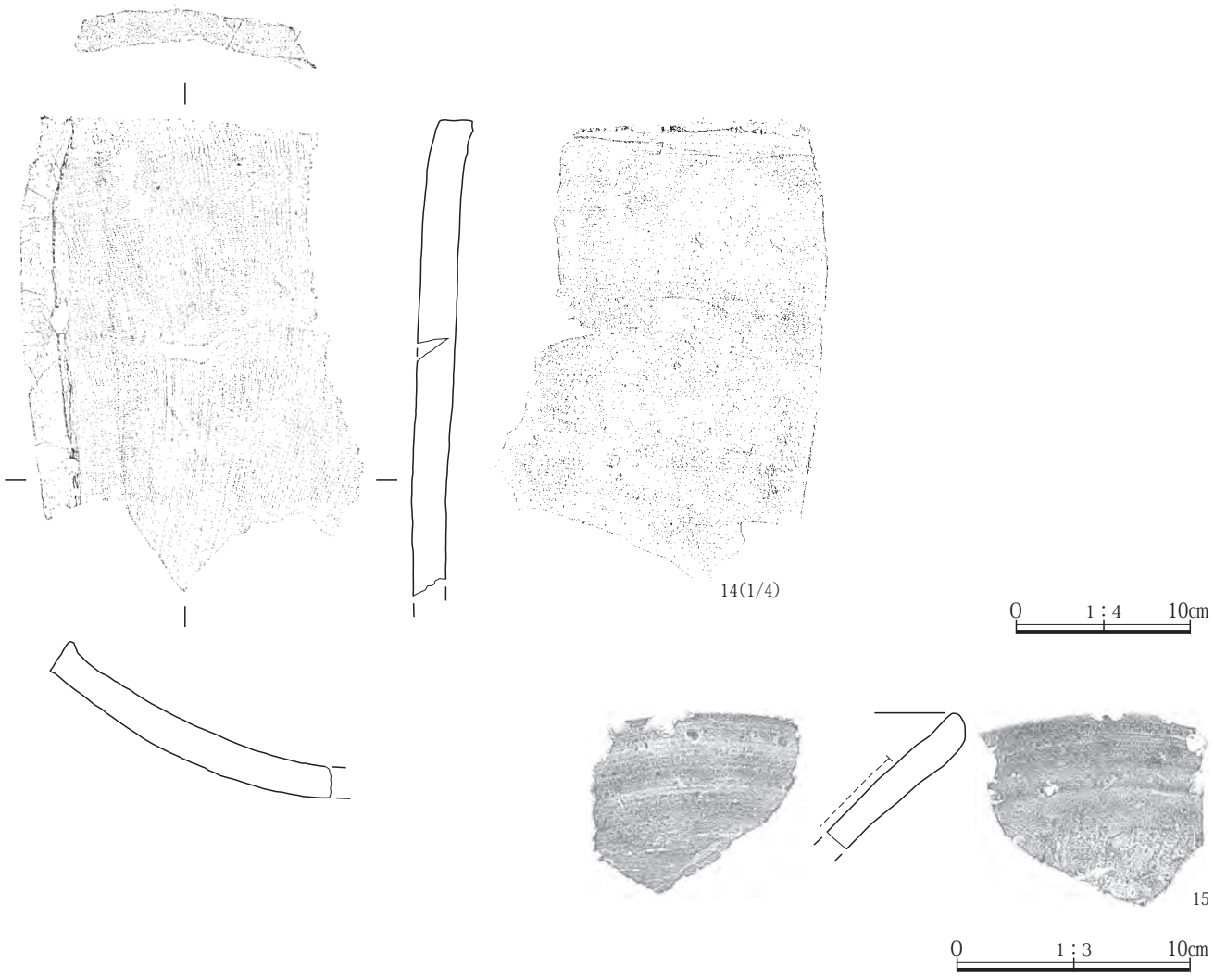






第210図　289号竪穴建物出土遺物（２）





第211図　289号竪穴建物出土遺物（３）

床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　瓦(12～14)については、いずれも埋没土中から出土したものであり、カマドの構築材として使用された痕跡は認められなかった。土師器甕は少なくとも４個体(８～11)が確認されているが、このうち８～10はカマド前の床面付近から重なるように出土したものである。11については南壁付近の埋没土中から出土したが、９世紀第２四半期の遺物であり混入の可能性が高い。また、在地系の片口鉢(15)についても、13世紀後半から14世紀前半の遺物であり混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片23点(97ｇ)、甕・壺類破片353点(1,840ｇ)、須恵器の杯・椀類破片28点(151ｇ)、甕・壺類破片22点(453ｇ)、瓦片４点が出土している。

所見　出土遺物から８世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

290号竪穴建物(第212～215図、PL.90～92・319)

位置　Ｘ＝40,835～40,840、Ｙ＝－80,757～－80,762(Ｃ・Ｄ区)

形状　長方形

規模　長軸4.31m、短軸3.68m

面積　13.163㎡

残存壁高　0.86m

方位　Ｎ－36°－W(カマド１)、Ｎ－33°－Ｅ(カマド２)

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、やや多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、やや多量のローム粗塊～粒、微量の焼土塊を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～粒を含む中・下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド１　北西壁の北隅寄りに位置する。残存長は0.80m、燃焼部幅は0.20mで、壁外に0.35m燃焼部が伸びる。両袖から奥壁にかけて、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。両袖は基部のみがわずかに残存している状態であったが、向かって右側の袖石はほぼ原位置を保っていた。この袖石は、長さ0.41m、幅0.18m、厚さ0.13mである。一方、左側の袖石は外側に向かって倒れ２つに割れていたが、長さ0.44m、幅0.20m、厚さ0.17mであったと推測できる。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.28m、幅0.19m、厚さ0.11mである。

カマド２　北東壁の中央やや南東寄りに位置する。残存長は0.50m、燃焼部幅は0.40mで、壁外に0.40m燃焼部・煙道が伸びる。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。土層断面の観察から、カマド２は古い段階のカマドで、カマド１が作られたあと破壊され埋められた可能性が考えられる。また、本カマド周辺の床面は、多量のローム塊を含む土でやや高まっており、周囲との高低差は最大で0.06mであった。これは破壊されたカマドの土が一部除去されずに残り、やがて硬化して貼床のようになったと考えられる。

柱穴　検出されなかった。

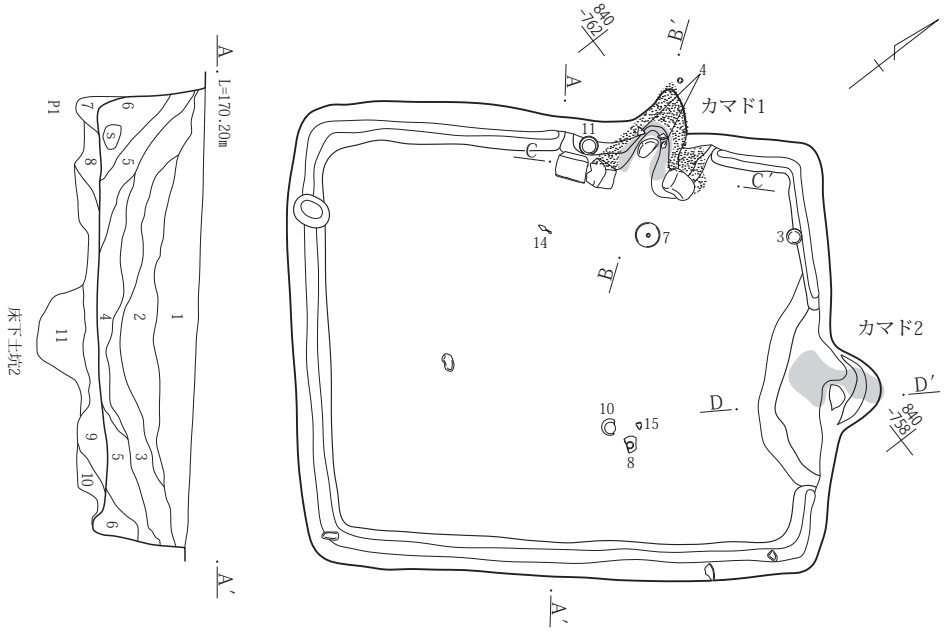
貯蔵穴　検出されなかった。しかし、全景写真では北隅付近が周囲と比べ黒く見えることから、ここに貯蔵穴が存在した可能性が考えられる。また、東隅付近も周囲の貼床と比べローム塊の粒子が細かく見えることから、ここに古い段階の貯蔵穴が存在しており、カマドの作り替えに伴って人為的に埋められた可能性が考えられる。

壁際溝　幅0.25～0.32m、深さ0.03～0.11mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のローム塊、焼土塊を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別が難しかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

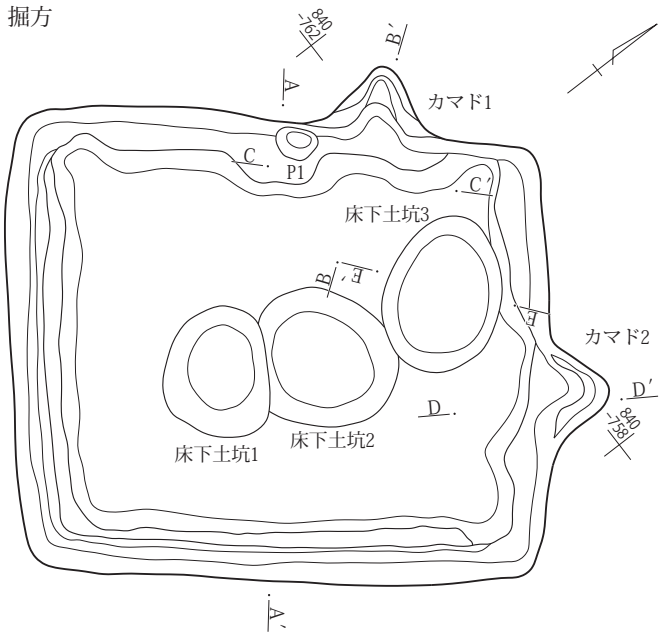
掘方　掘方は壁際を除いて全体が不整形に掘り下げられており、床面からの深さは概ね0.10～0.35mであった。一方、壁際はやや浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであった。掘方調査で検出したＰ１は、長軸0.33m、短軸0.24m、深さ0.26m、形状は楕円形に近い不整形である。床面の中心付近は、多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む暗褐色土でほぼ均質に貼床され硬化していたが、壁際付近ではやや締まりが弱かった。

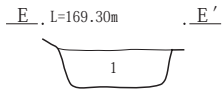
床下土坑　３基の床下土坑は中央付近から北隅に位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.05×0.84×0.33m、床下土坑２が1.16×(1.11)×0.45m、床下土坑３が1.25×0.91×0.38mである。形状は床下土坑１・



290号竪穴建物Ａ－Ａ′

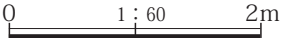
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粗塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粗塊～粒をやや多量、焼土塊を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量、焼土塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量、下位にローム塊、焼土塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
７．黒色土10YR2/1　ローム粒を微量含む。粘性弱い。締まり非常に弱い。
８．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まり弱い。
９．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
10．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
11．暗褐色土10YR3/3　As-YPを多量、ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。





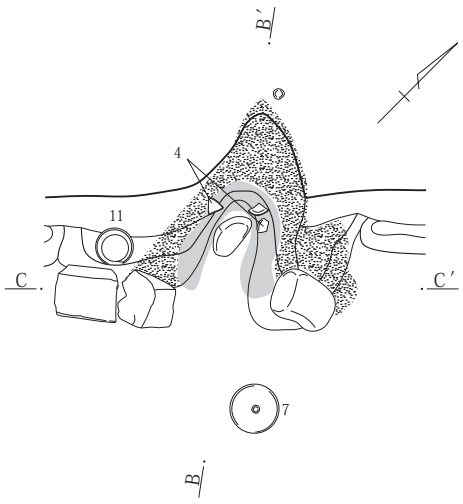
290号竪穴建物床下土坑３Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

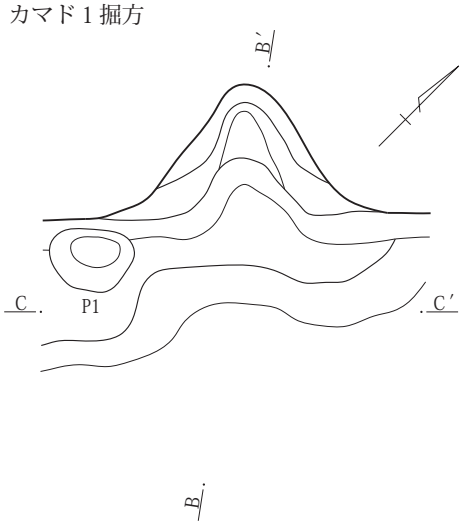


第212図　290号竪穴建物

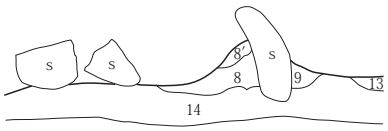
カマド１



カマド１掘方



C　L=170.20m　　C′

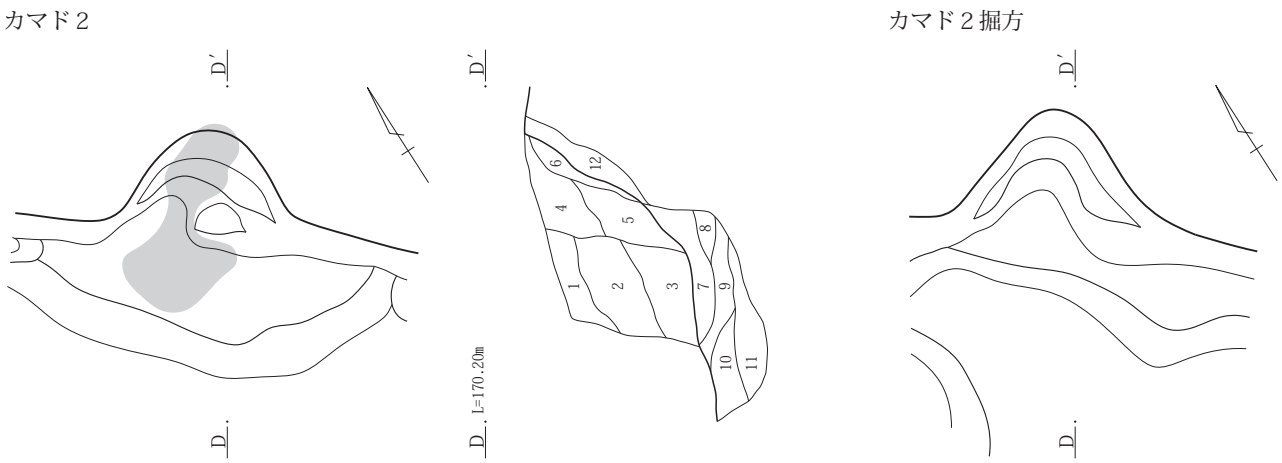


290号竪穴建物カマド１ Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR3/2　As-C、ローム粗塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．暗褐色土10YR3/4　ローム塊、焼土小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量、焼土小塊を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
７．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
８．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒をやや多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
８′.赤褐色土5YR4/6　８層が焼土化したもの。粘性、締まりやや弱い。
９．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
10. 黒褐色土10YR2/3　ローム塊、焼土小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11. 黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒をやや多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
12. 黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
13. 黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
14. 黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第213図　290号竪穴建物カマド１



290号竪穴建物カマド２Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
6．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊、焼土塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
8．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊を非常に多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
11．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
12．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

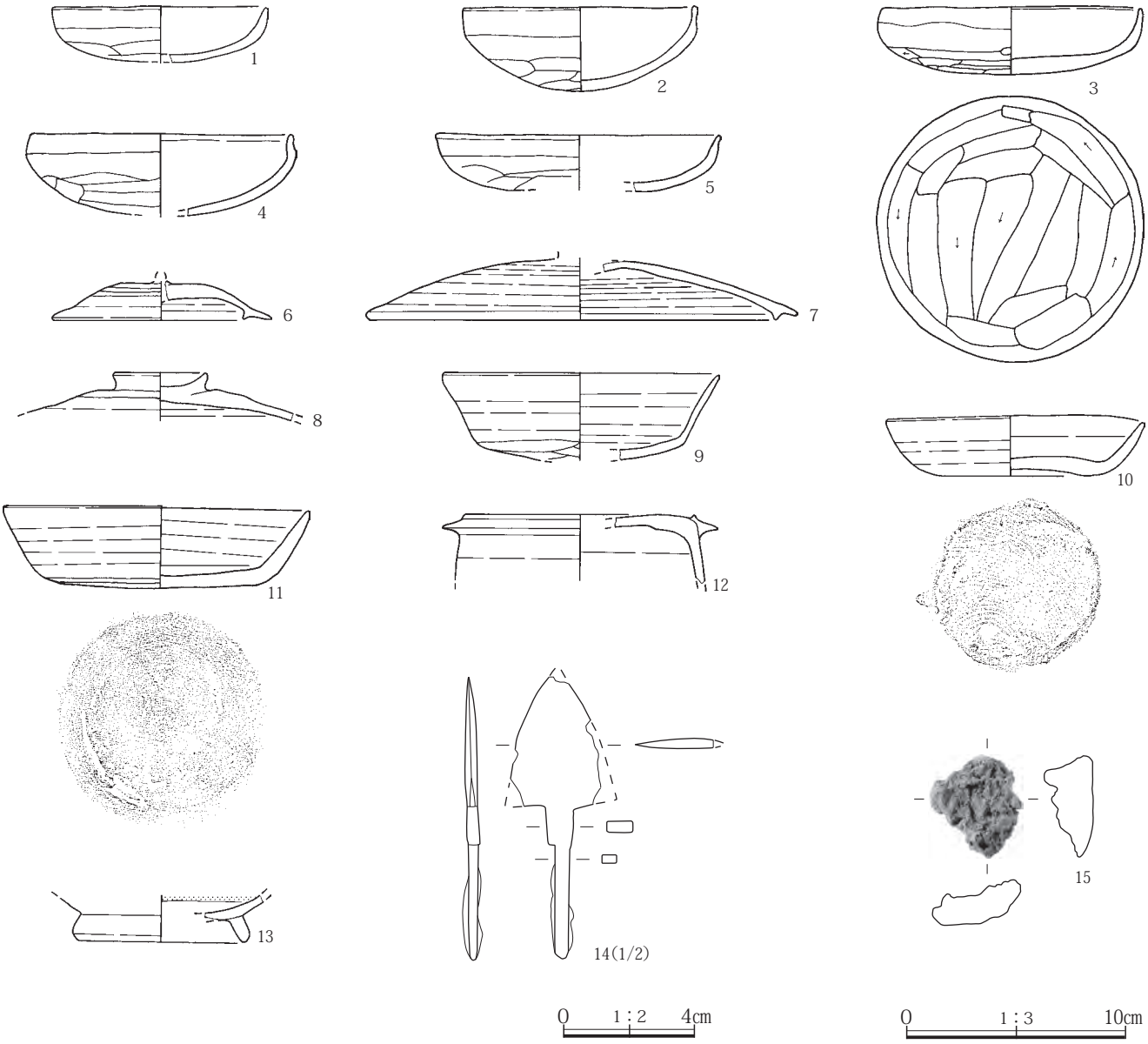
0　1：30　1m

第214図　290号竪穴建物カマド２

３が楕円形、床下土坑２が楕円形に近い不整形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。床下土坑２は、多量のAs-YP、やや多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑３は、多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。床下土坑２と同様に、粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。床下土坑１の埋没土については不明であるが、同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　土師器杯（３）は北隅付近の床面に正位で置かれていたものである。須恵器蓋（７）はカマド１前の床面に伏せた状態で置かれていたものである。カマド１内からは、土師器杯（４）が割れた状態で出土した。須恵器杯(11)については、遺物出土状況写真に写っていないことや、出土位置が床面から－0.25mと記録されていることなどから、カマド構築時に埋納されたものである可能性が考えられる。カマド２脇の壁外から出土した印文「吉」の銅印については、遺構外遺物として掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片３点(55ｇ)、甕・壺類破片17点(176ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(22ｇ)、甕・壺類破片８点(347ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。



第215図　290号竪穴建物出土遺物

291号竪穴建物（第216～219図、PL.92～94・319）

位置　X＝40,882～40,886、Y＝－80,733～－80,738（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸3.95m、短軸3.76m

面積　12.536㎡

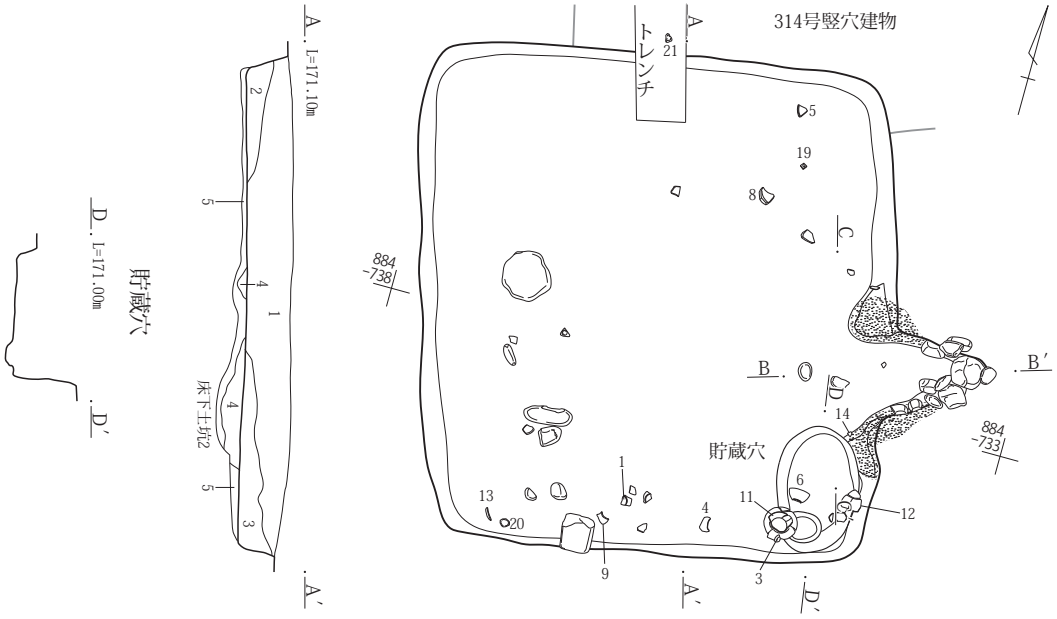
残存壁高　0.39m

方位　N－73°－E

重複　314号竪穴建物と重複し、291号竪穴建物が新しい。

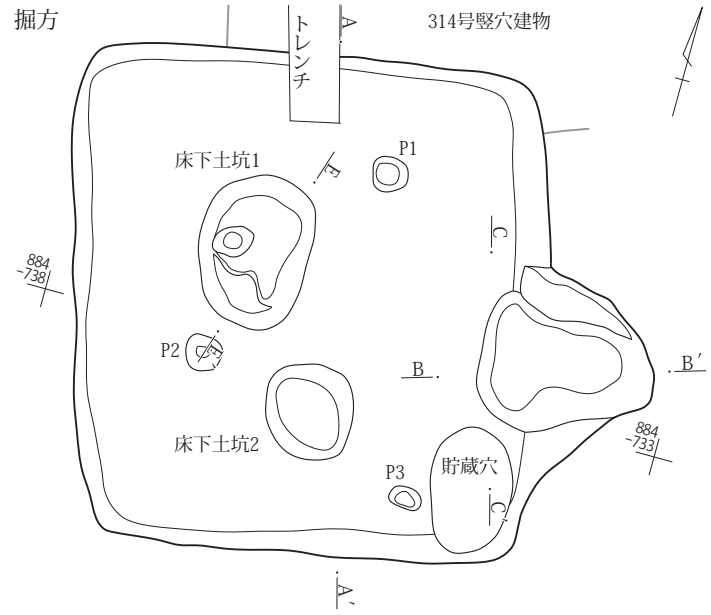
埋没土　微量のAs-C、ローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.13m、燃焼部幅は0.45mで、壁外に0.77m燃焼部が伸びる。ただし、完掘時には左右側壁の礫が露出している状態であったことから、本来の燃焼部幅はこれよりやや狭いと考えられる。側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上には多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.30mである。側壁と奥壁には礫が並べられていたが、これは側壁や煙道を補強する目的で置かれたものであると考えられる。これらの礫のうち最大のものは奥壁に置かれたもので、長さ0.29m、幅0.25m、厚さ0.09mである。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪

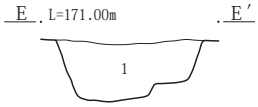


291号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
５．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。



床下土坑１

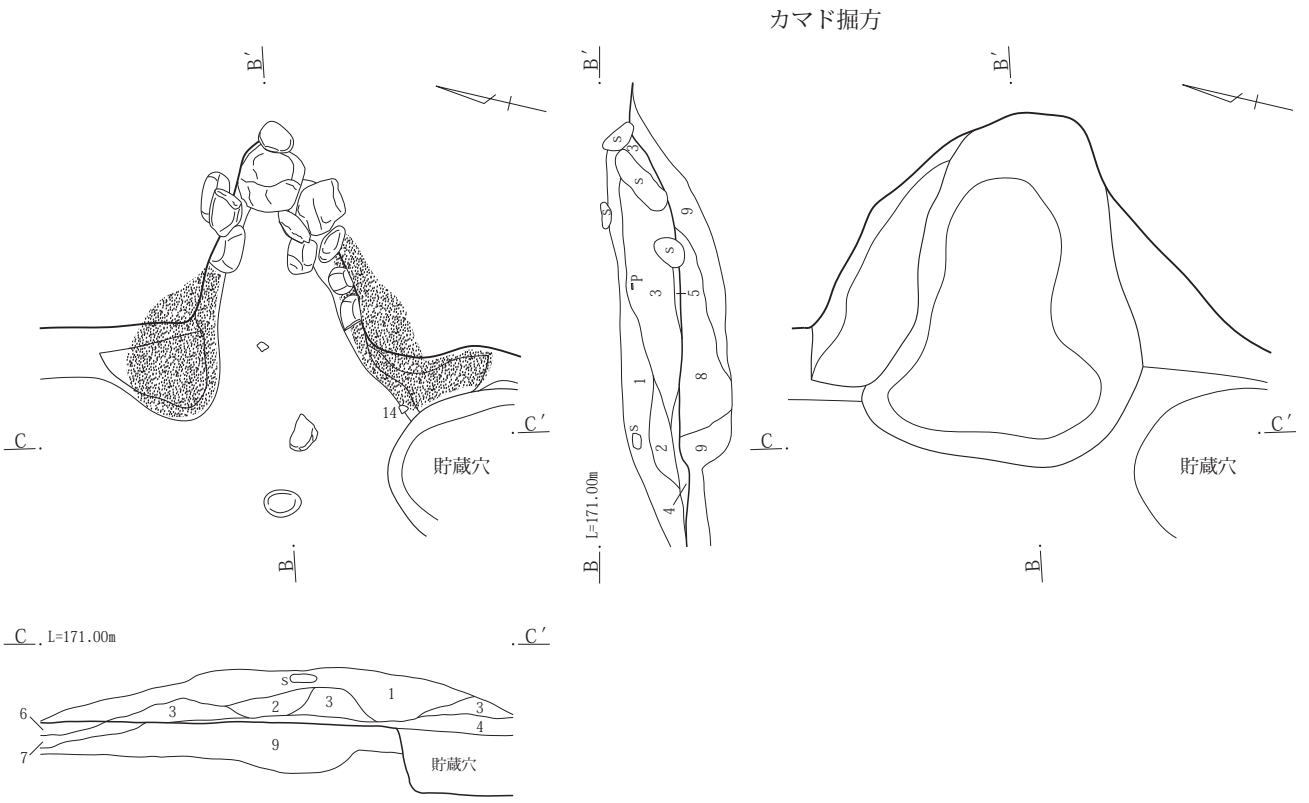


291号竪穴建物床下土坑１Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

第216図　291号竪穴建物



291号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．黒色土10YR2/1　ローム粒、焼土粒を微量、灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．暗褐色土7.5YR3/4　焼土塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
7．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
8．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第217図　291号竪穴建物カマド

穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

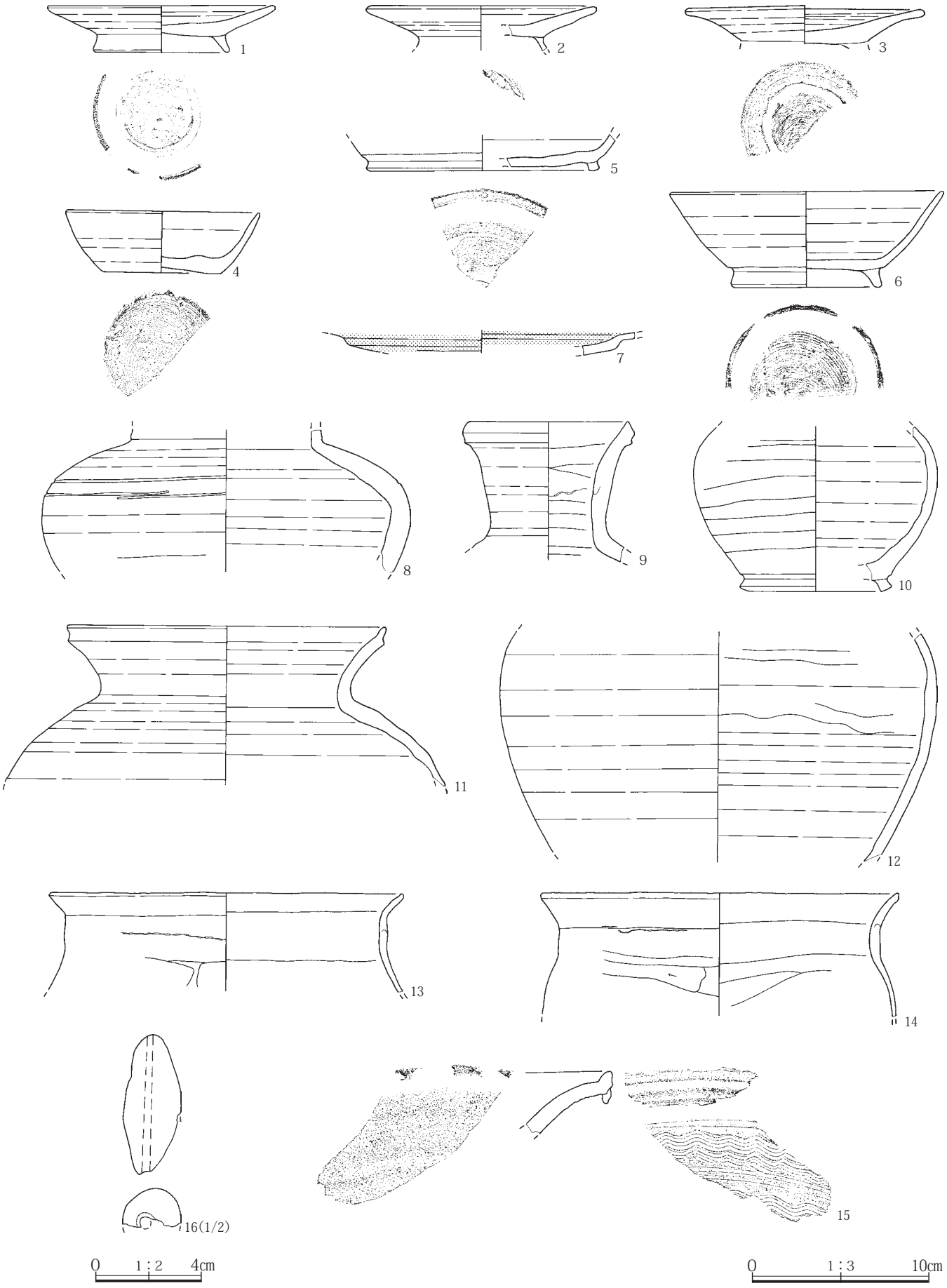
貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸1.00m、短軸0.65m、深さ0.24m、形状は楕円形である。埋没土に関する情報がないことから、詳細は不明である。また、貯蔵穴の脇に置かれた須恵器甕(11)は、器台として使用されていた可能性が考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

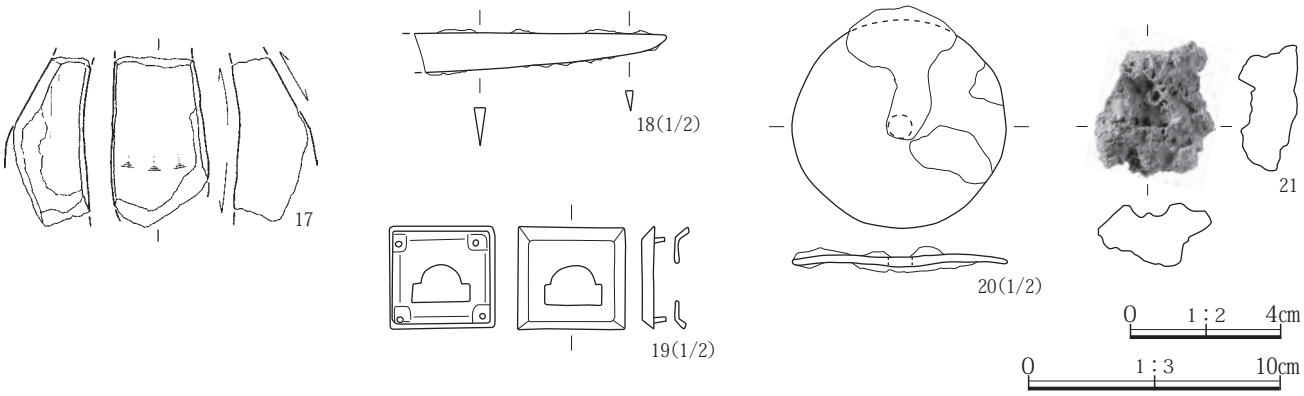
床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方はカマドの下部と床下土坑を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.03～0.10mであった。北東隅近くと南西隅近くと南東隅近くで３基のピットを検出した。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.28×0.27×0.33m、Ｐ２が0.29×0.27×0.70m、Ｐ３が0.26×0.18×0.14m、形状はいずれも不整形である。床面は微量のAs-C、ローム粒を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１は中央やや北西寄りに位置し、規模は長軸1.18m、短軸0.88m、深さ0.55mである。形状は楕円形で、円筒状にやや深く掘り込まれていた。やや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。一方、床下土坑２は中央やや南寄りに位置し、規模は長軸



第218図　291号竪穴建物出土遺物（１）



第219図　291号竪穴建物出土遺物（２）

0.81m、短軸0.74m、深さ0.21mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　銅製の巡方(19)が出土したことが特筆される。また、刀子(18)、紡輪(20)などの鉄製品とともに、砥石(17)や鉄滓(21)が出土していることも本竪穴建物の特徴である。貯蔵穴脇からは、須恵器甕(11)が倒れた状態で出土している。土師器甕はいずれも破片ではあるが、少なくとも２個体(13・14)が確認されている。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片461点(1,790ｇ)、甕・壺類破片646点(2,810ｇ)、須恵器の杯・椀類破片634点(4,010ｇ)、甕・壺類破片102点(1,950ｇ)、瓦片８点、敲石１点(80.8ｇ)、剝片７点(56.8ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

292号竪穴建物（第220～222図、PL.94・95・320）

位置　Ｘ＝40,879～40,883、Ｙ＝－80,737～－80,741（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.90m、短軸3.15m

面積　9.792㎡

残存壁高　0.80m

方位　Ｎ－94°－Ｅ

重複　550号土坑と重複し、292号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層はやや多量のAs-C、少量のローム小塊～粒、微量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のローム粒を含む暗褐色土、少量のAs-C、微量のローム小塊～粒を含む黒色土、少量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.07m、燃焼部幅は0.43mで、壁外に0.70m燃焼部が伸びる。両袖から奥壁・煙道にかけて、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上には粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.54mである。袖石は検出されなかったが、左右それぞれから袖石を据えた痕跡の可能性が考えられる浅い窪みのみを検出した。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.24m、幅0.16m、厚さ0.13mである。

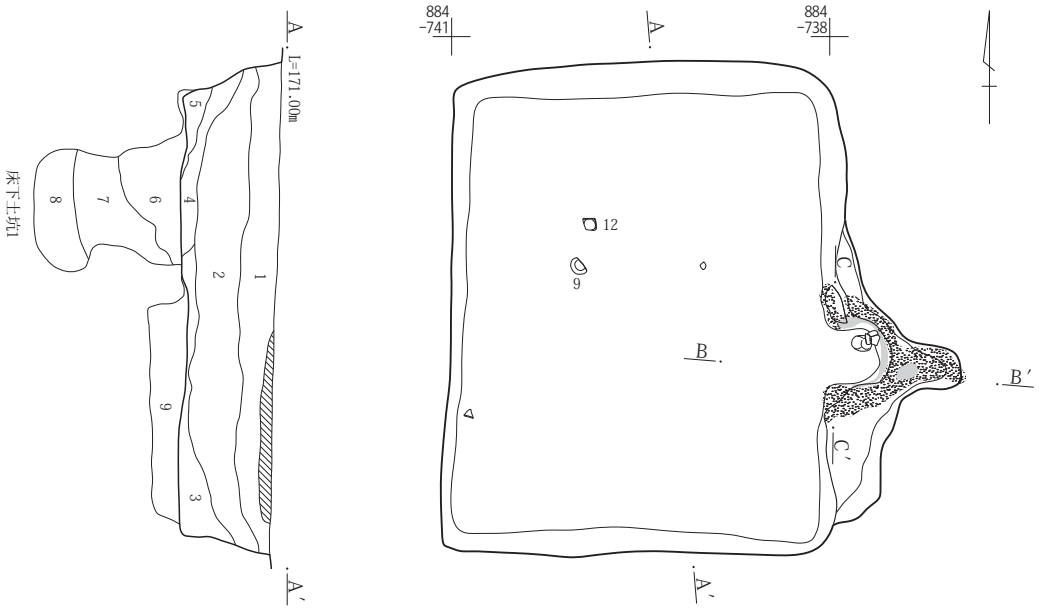
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

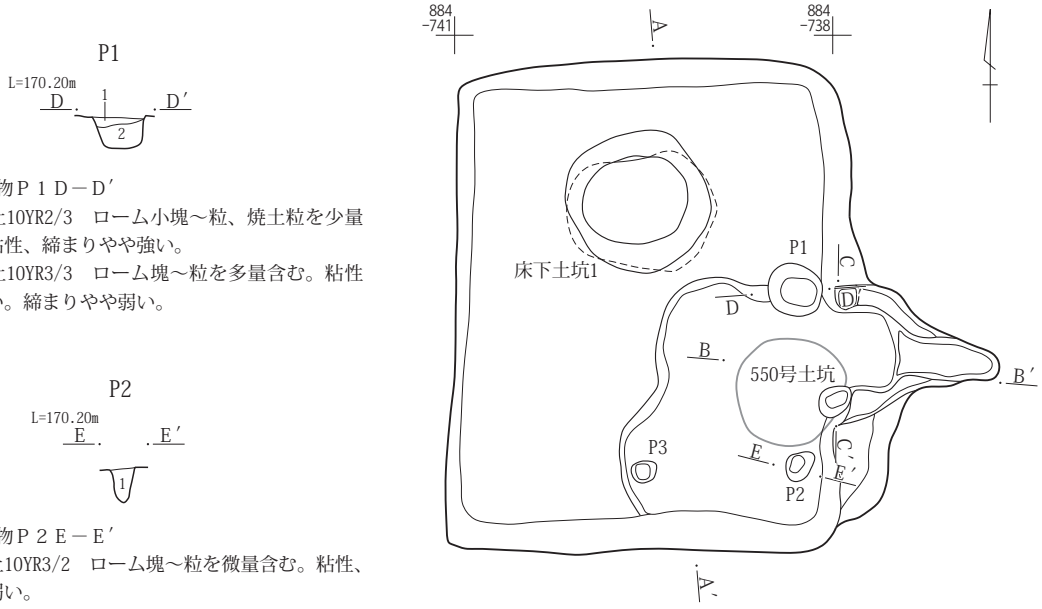
掘方　掘方は床下土坑１を除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.02～0.10mであった。ただし、南東隅付近はやや深く、床面からの深さは概ね0.15～0.30mであった。また、この南東隅付近からは３基のピットを検出した。それぞれのピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.43×0.41×0.26m、Ｐ２が0.25×0.20×0.28m、Ｐ３が0.21×0.17×0.13m、形状はいずれも楕円形である。床面は微量のローム粒を含む黒褐色土で、全体が均



292号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、ローム小塊～粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
3．暗褐色土10YR3/3　ロームを微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒色土10YR2/1　As-Cを少量、ローム小塊～粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まり弱い。
8．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。

掘方



P1

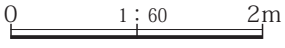
292号竪穴建物Ｐ１Ｄ－Ｄ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

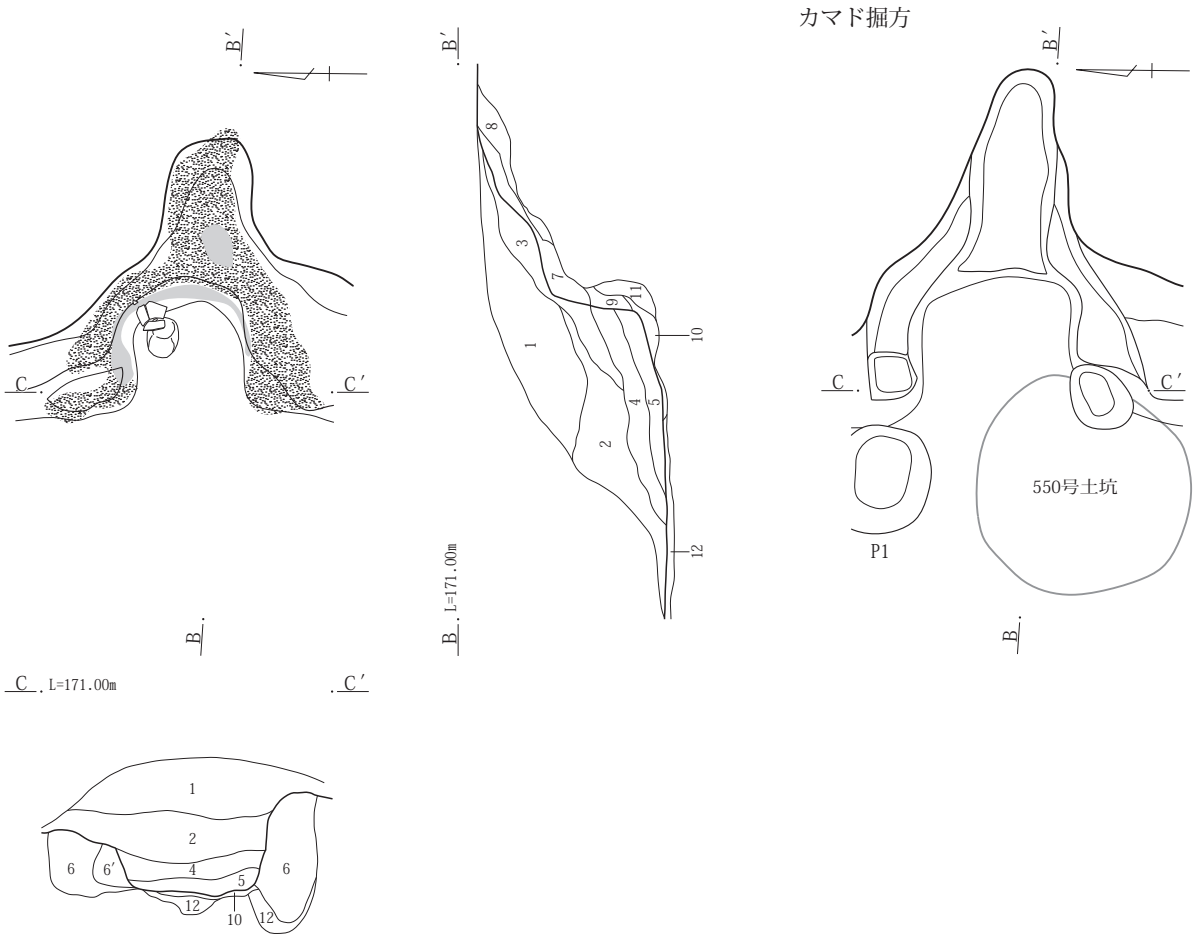
P2

292号竪穴建物Ｐ２Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR3/2　ローム塊～粒を微量含む。粘性、締まり弱い。



第220図　292号竪穴建物



292号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

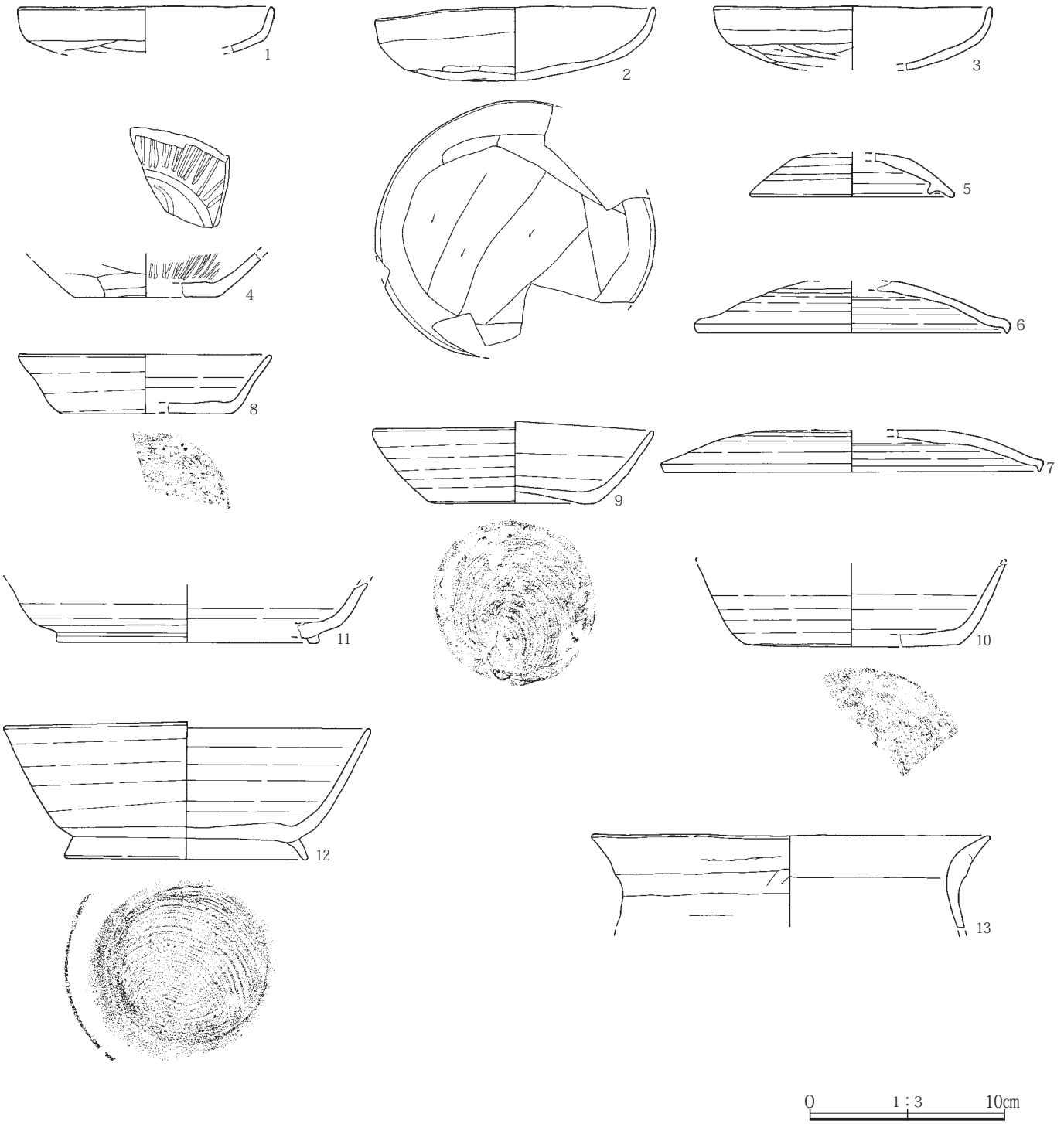
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒色土10YR2/1　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊、焼土粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
4．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
5．暗褐色土10YR3/4　ローム塊、焼土小塊をやや多量、灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
6′.褐色土10YR4/6　６層土に焼土粒を微量含む。
7．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、焼土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
8．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊、焼土粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊、焼土小塊を層状に含む。灰を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
11．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
12．褐色土10YR4/6　ローム塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

第221図　292号竪穴建物カマド

質に貼床されていた。なお、本竪穴建物の掘方調査において検出された550号土坑は、縄文時代前期前半の貯蔵穴であると考えられる。

床下土坑　床下土坑１は中央やや北寄りに位置し、規模は長軸1.15m、短軸1.13m、深さ1.25mである。形状は円筒形に近い楕円形で、円筒状に深く掘り込まれていた。また、底部が袋状に広がる状況が認められたが、これは粘土層に達したあと横に掘り進めた結果であると考えられる。上層は多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で、中層は非常に多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で、下層は少量のAs-YP、ローム小塊を含む黒褐色土で、それぞれ埋没していた。粘土を採取



第222図　292号竪穴建物出土遺物

したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　土師器杯（３）と須恵器椀(12)は、床面近くから出土したものである。土師器甕は破片で１個体(13)が確認されているが、これは掘方調査において出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片77点(468ｇ)、甕･壺類破片263点(1,960ｇ)、須恵器の杯・椀類破片65点(650ｇ)、甕・壺類破片31点(700ｇ)、瓦片１点、削器１点(13.5ｇ)、剥片１点(30.0ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

293号竪穴建物(第223～227図、PL.95～98・320)

位置　Ｘ＝40,905～40,912、Ｙ＝－80,708～－80,714(Ｃ・Ｄ区)

形状　正方形

規模　長軸5.97m、短軸5.70m

面積　30.469㎡

残存壁高　0.64m

方位　Ｎ－23°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒色土で埋没していた。また、壁際ではやや多量のローム小塊～粒を含む黒色土の堆積が認められたが、これは壁面の崩落によるものと考えられる。

カマド　北壁のほぼ中央に位置する。残存長は1.00m、燃焼部幅は0.31mで、壁外に0.48m燃焼部が伸びる。基部が残存していた両袖は、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。ただし、向かって左側の袖付近から出土した礫が､袖石であった可能性が考えられる｡この礫は長さ0.30m、幅0.16m、厚さ0.11mである。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１～Ｐ４が主柱穴である可能性が高いと考えられる。

貯蔵穴　北東隅に位置し、規模は長軸0.58m、短軸0.57m、深さ0.45m、形状は不整形である。上層は少量のAs-YP、ローム小塊を含む黒褐色土で、中層はやや多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む暗褐色土で、下層は多量のAs-YP、ローム小塊を含む褐色土で、それぞれ埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

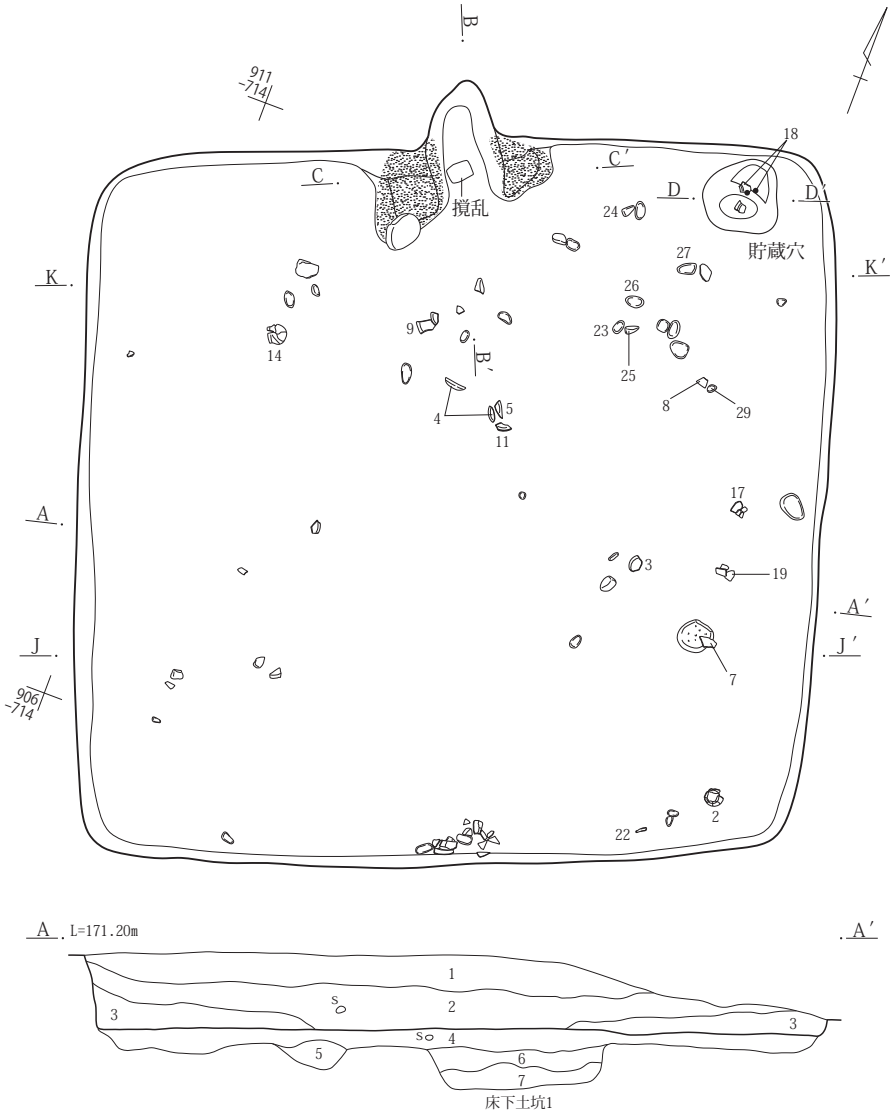
壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.07～0.20mであった。ただし、西から南にかけての壁際が、やや深く掘り込まれていた。掘方調査で検出した４基のピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.78×0.52×0.81m、Ｐ２が0.74×0.53×0.99m、Ｐ３が0.61×0.58×0.80m、Ｐ４が0.52×0.45×1.09m、形状はＰ１・２が不整形、Ｐ３・４が楕円形である。また、Ｐ１～３には、差し替えの痕跡が認められた。床面は多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で、全体が均質に貼床されていた。

床下土坑　３基の床下土坑は、いずれも中央付近に位置し、それぞれの規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.45×1.03×0.44m、床下土坑２が1.40×1.22×0.38m、床下土坑３が1.53×1.05×0.32mである。形状はいずれも楕円形で、円筒状にやや深く掘り込まれていた。床下土坑１は、多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含むにぶい黄褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑２は、多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。床下土坑１と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。床下土坑３の埋没土については不明であるが、他の床下土坑と同様に粘土を採取したあと人為的に埋められたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　床面直上から出土した土器はないが、土師器杯(２・３・８)、土師器鉢(９)、土師器小型甕(14)などが、床面から0.10m前後の高さから出土している。土師器甕(18)は貯蔵穴から出土したものである。瓦は20・21など30点が出土しているが、これらは竪穴建物廃絶後に投棄されたものであると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器６点、土師器の杯・椀類破片167点(1,207ｇ)、甕・壺類破片136点(2,650ｇ)、須恵器の杯・椀類破片23点(162ｇ)、甕・壺類破片27点(355ｇ)、瓦片28点、打製石斧２点(565.5ｇ)、石核１点(182.2ｇ)、二次加工ある剝片１点(26.2ｇ)、凹石１点(608.1ｇ)、こもあみ石５点(3,452.4ｇ)、磨石１点(661.1ｇ)、敲石３点(2,199.0ｇ)、多孔石１点(6,500.0ｇ)、石製品１点(48.2ｇ)、礫･礫片１点(1,274.9ｇ)、剝片８点(143.2ｇ)が出土している。このうち、こもあみ石(23～27)、磨石(28)、石製品(29)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器については、黒浜式の口辺部破片１点、諸磯ａ式の口縁部破片３点、諸磯ａ式の胴部破片１点、加曽利Ｅ４式の口縁部破片１点を遺構外出土遺物として掲載した。打製石斧２点、凹石、多孔石については、遺構



293号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒色土10YR2/1　As-Cをやや多量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒色土10YR2/1　As-Cを少量、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
５．暗褐色土10YR3/4　As-YPを多量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
７．にぶい黄褐色土10YR4/3　As-YPを少量、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

貯蔵穴

293号竪穴建物貯蔵穴Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．褐色土10YR4/4　As-YP、ローム小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第223図　293号竪穴建物

293号竪穴建物Ｐ１Ｅ－Ｅ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、As-YPを少量含む。粘性、締まりやや強い。

293号竪穴建物Ｐ２Ｆ－Ｆ′

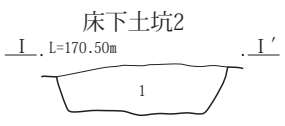
1．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を多量含む。粘性、締まり弱い。
3．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

293号竪穴建物Ｐ３Ｇ－Ｇ′

1．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まり弱い。
3．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

293号竪穴建物Ｐ４Ｈ－Ｈ′

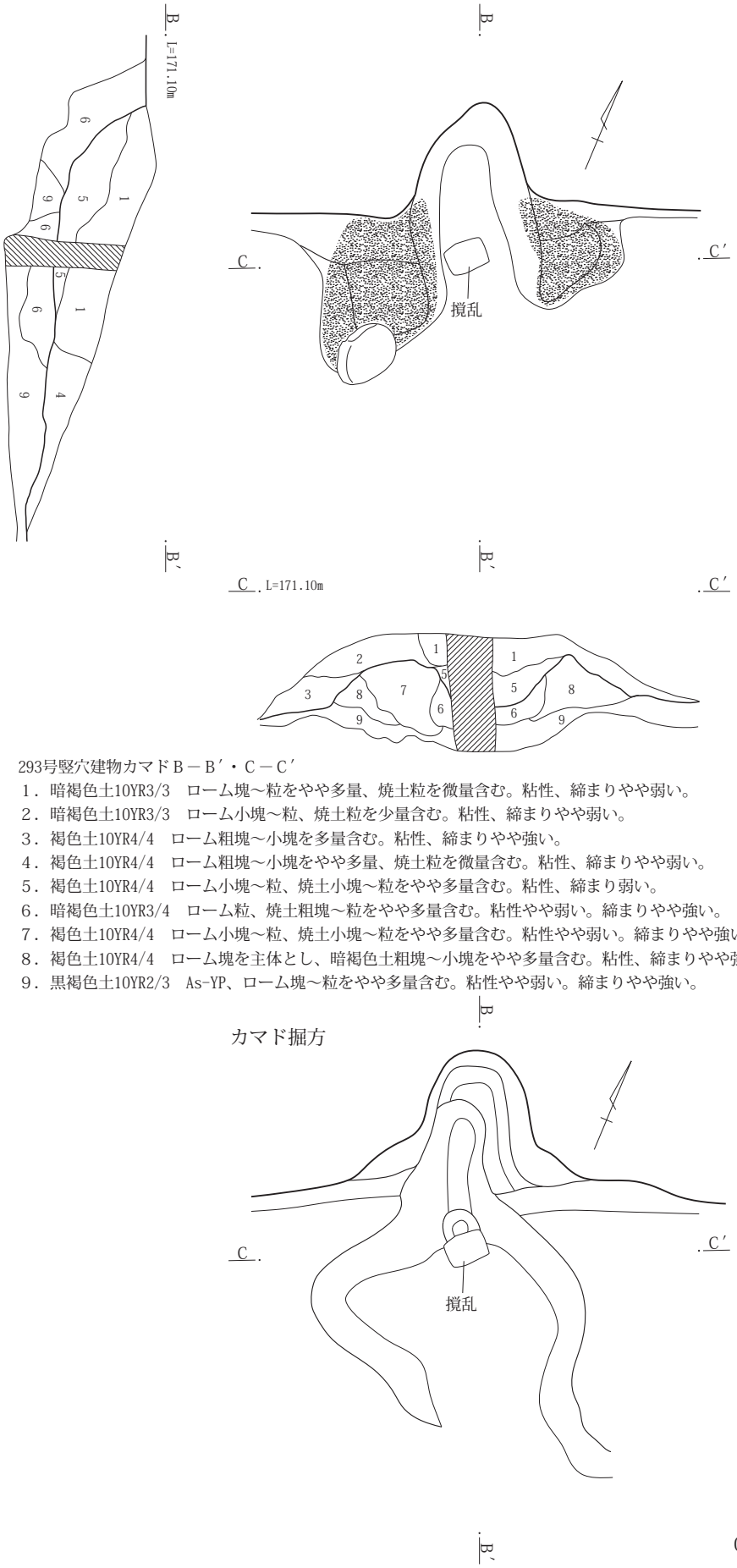
1．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粗塊～小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-YPを少量、ローム塊を多量含む。粘性、締まり弱い。



293号竪穴建物床下土坑２Ｉ－Ｉ′

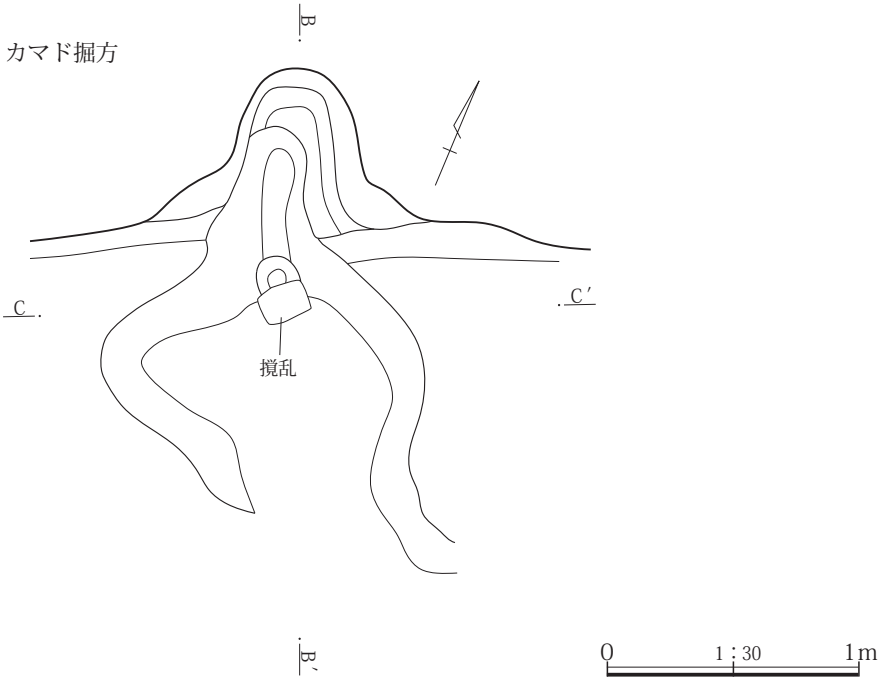
1．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

第224図　293号竪穴建物掘方

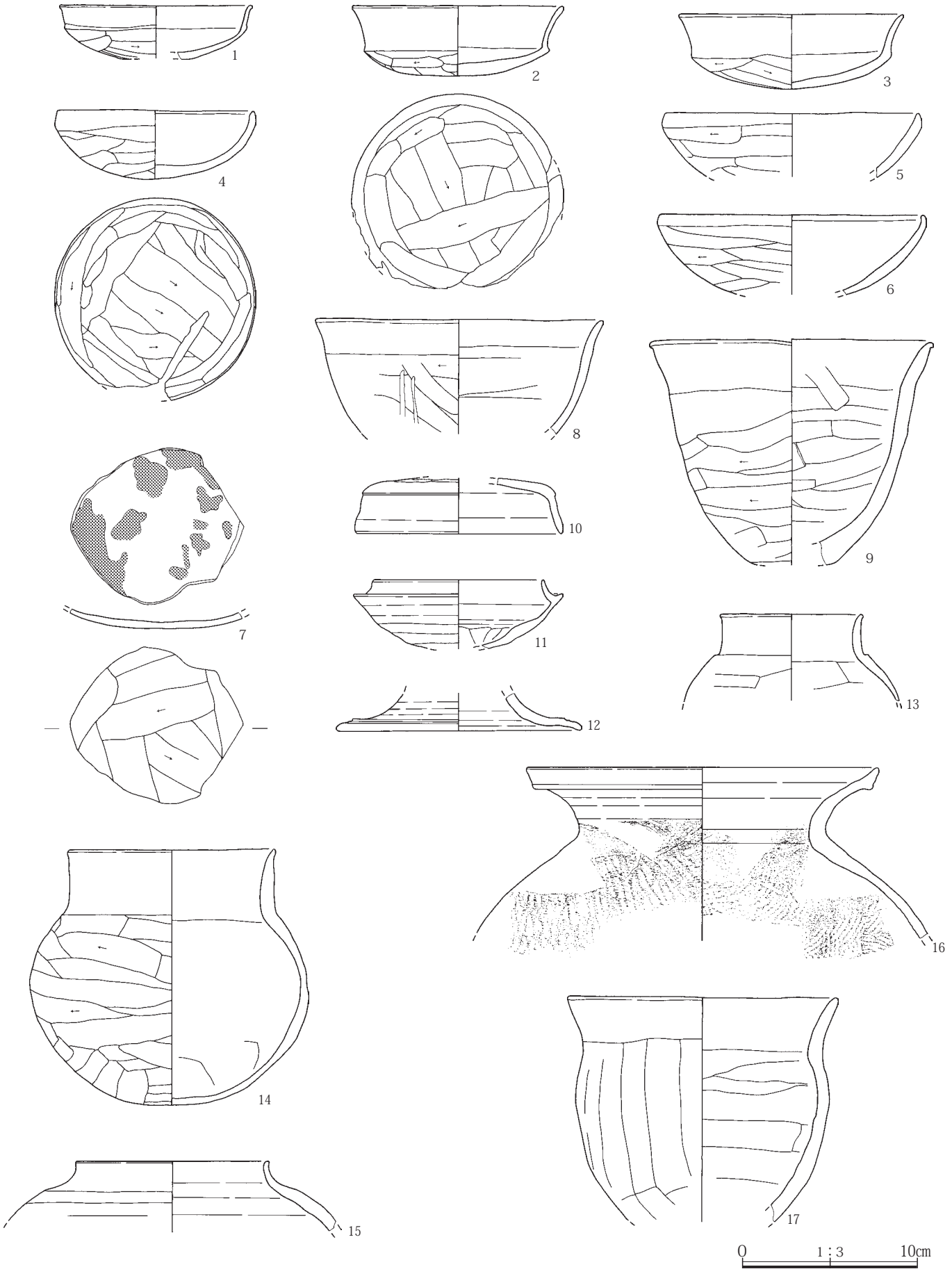


293号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

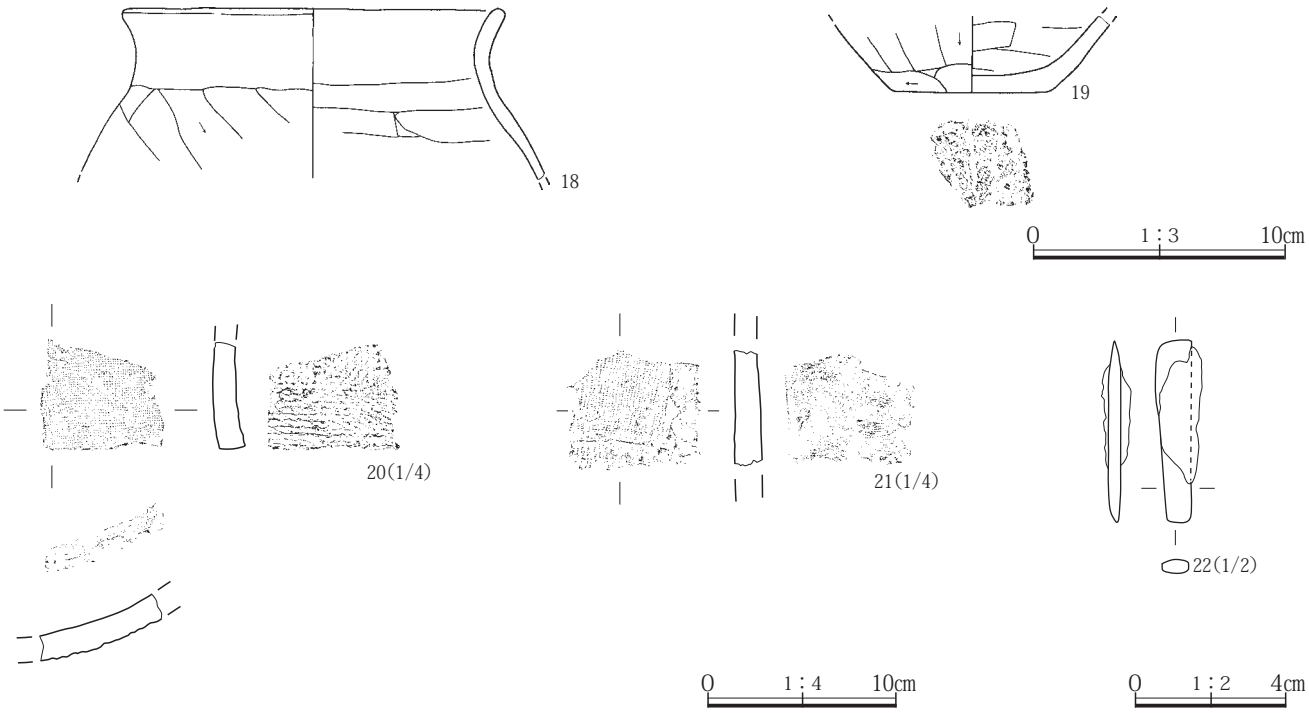
１．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．褐色土10YR4/4　ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．褐色土10YR4/4　ローム粗塊～小塊をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．褐色土10YR4/4　ローム小塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まり弱い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
７．褐色土10YR4/4　ローム小塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土粗塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
９．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



第225図　293号竪穴建物カマド



第226図　293号竪穴建物出土遺物（１）



第227図　293号竪穴建物出土遺物（２）

外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から７世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

294号竪穴建物（第228～230図、PL.98・99・321）

位置　Ｘ＝40,895～40,899、Ｙ＝－80,723～－80,727（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.51m、短軸3.03m

面積　12.960㎡

残存壁高　0.81m

方位　Ｎ－74°－Ｅ

重複　54号竪穴建物、８号溝と重複し、294号竪穴建物が古い。また、552号土坑と重複し、294号竪穴建物が新しい。なお、全景写真に写っている礫は、近接する６号溝から出土したもので、古代寺院に関連する建物の礎石であると思われる。

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は微量のAs-C、やや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム塊～粒を含む中層は、人為的な埋没と考えられる。また、壁際ではやや多量のローム小塊～粒を含む暗褐色土の堆積が認められたが、これは壁面の崩落によるものと考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.67m、燃焼部幅は0.20mで、壁外に0.25m燃焼部・煙道が伸びる。両袖から側壁・奥壁にかけて、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁上には多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.48mである。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　幅0.15～0.55m、深さ0.02～0.12mのほぼ全周する壁際溝を検出した。ただし、最大幅に関しては、壁面の崩落により拡がったものである。少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、またはやや多量のAs-YP、ローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別が難しかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

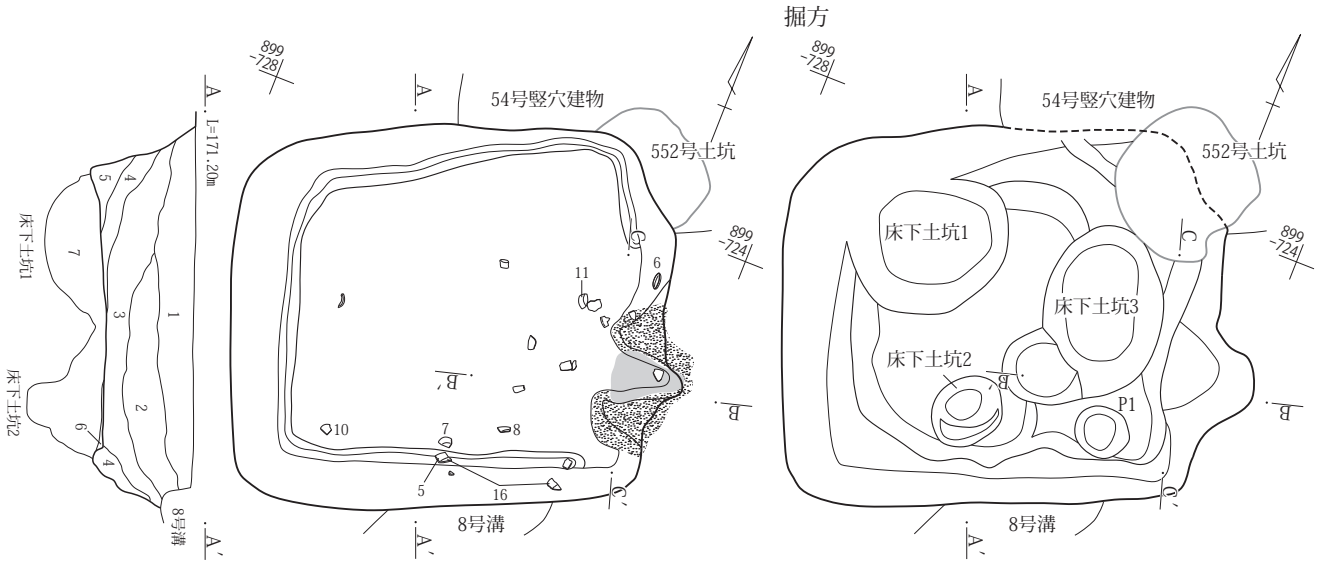
床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　掘方は、その大部分を床下土坑によって掘り込まれていたが、床下土坑のない部分では床面からの深さは概ね0.05～0.25mであった。南東隅において検出したＰ１は、長軸0.45m、短軸0.40m、深さ0.35m、形状は楕円形である。床面は多量のローム塊～粒を含む暗褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　３基の床下土坑は、それぞれ北西隅、南壁際、中央やや東寄りに位置し、規模(長軸×短軸×深さ)は、床下土坑１が1.28×(1.00)×0.30m、床下土坑２が0.63×0.51×0.33m、床下土坑３が1.37×0.95×0.45mである。形状は床下土坑１・３が不整形、床下土坑２が楕円形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。このうち床下土坑３は、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。床下土坑１・２は、多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと貼床と一連の作業で埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。一方、床下土坑３は、やや多量のAs-YP、ローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは③である。

出土遺物　完形の須恵器杯(６)は、カマド脇の壁面付近から出土したが、これは棚状施設に置かれていたものが埋没過程で崩落した可能性が考えられる。土師器甕(14)は掘方調査において出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片76点(412ｇ)、甕・壺類破片301点(2,480ｇ)、須恵器の杯･椀類破片73点(930ｇ)、甕･壺類破片29点(780ｇ)、瓦片２点、礫片１点(17.7ｇ)、剝片３点(50.3ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ａ式)の口縁部破片と胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

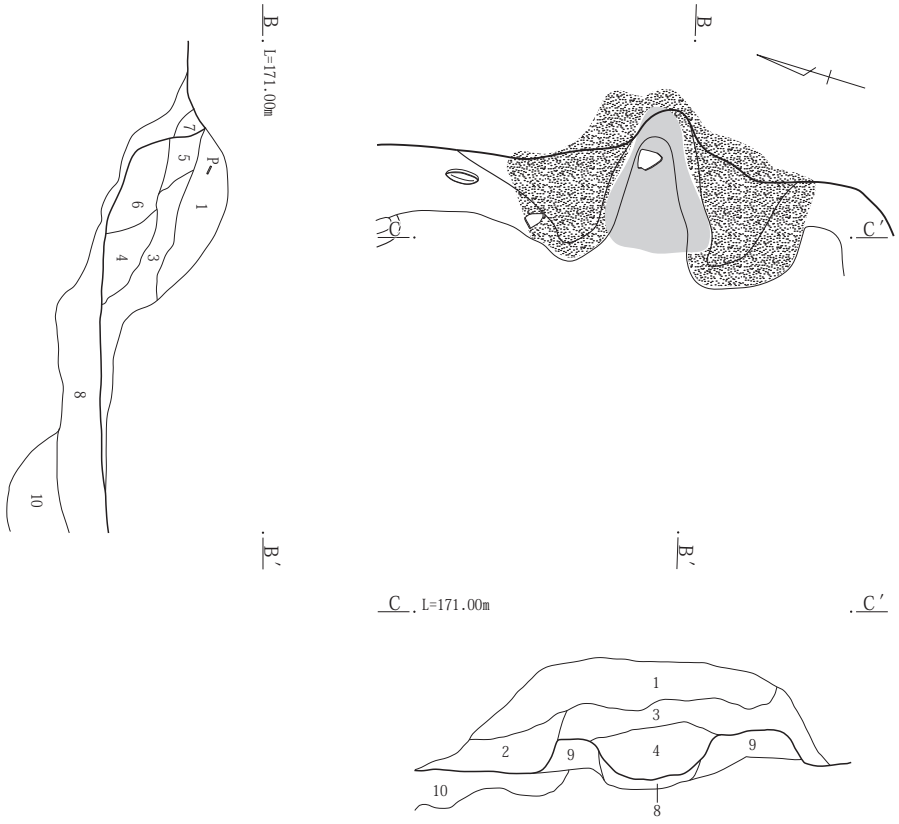
所見　出土遺物から８世紀第３四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。



294号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒色土10YR2/1　As-Cを微量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
７．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。

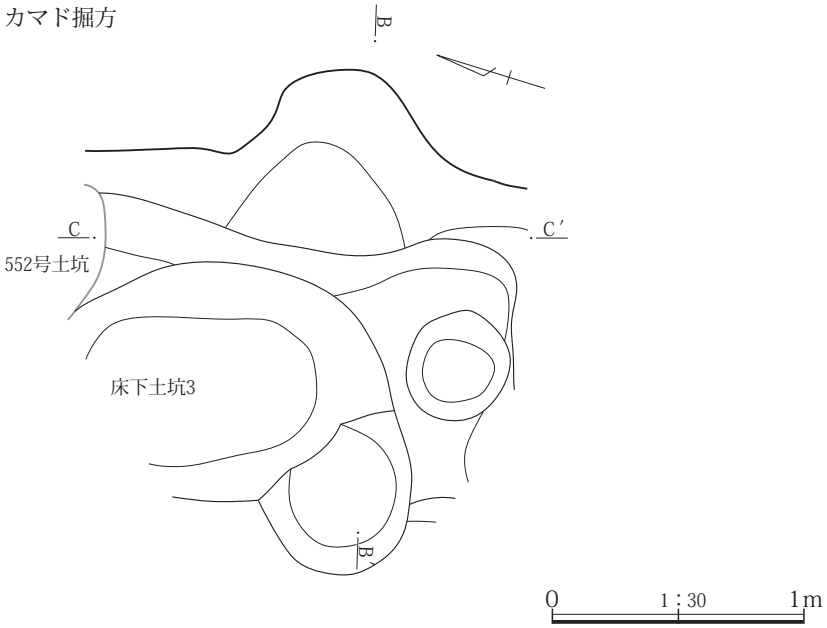
0　1：60　2m

第228図　294号竪穴建物

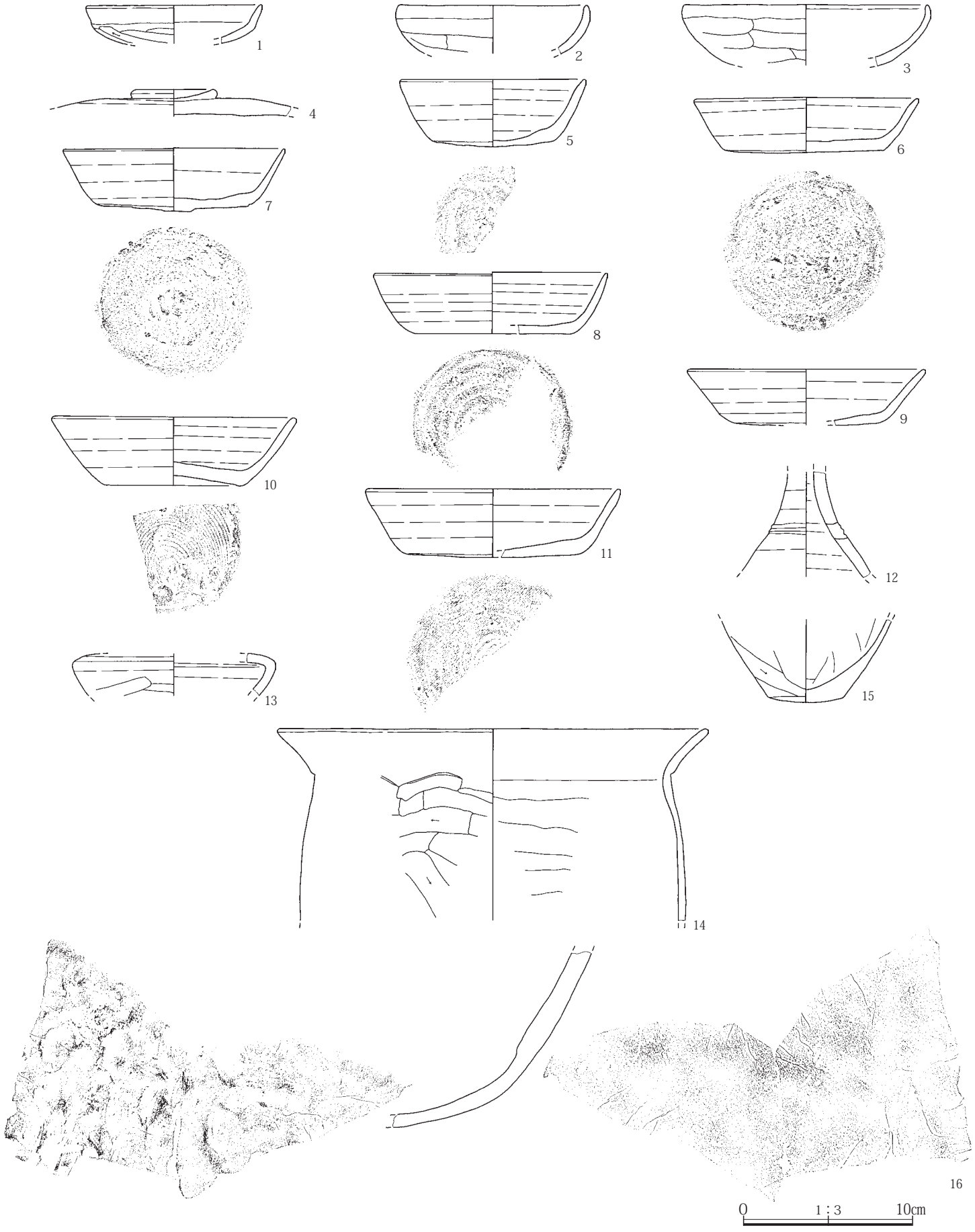


294号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-YPを少量、ローム粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．褐色土10YR4/4　ローム小塊～粒、焼土塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
７．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム粗塊～粒を多量、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。



第229図　294号竪穴建物カマド



第230図　294号竪穴建物出土遺物

295号竪穴建物（第231・232図、PL.100・101・321）

位置　Ｘ＝40,849～40,852、Ｙ＝－80,787～－80,791（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.64m、短軸2.99m

面積　（6.464㎡）

残存壁高　0.26m

方位　Ｎ－103°－Ｅ

重複　なし

埋没土　微量のローム小塊～粒を含む黒色土で埋没していた。

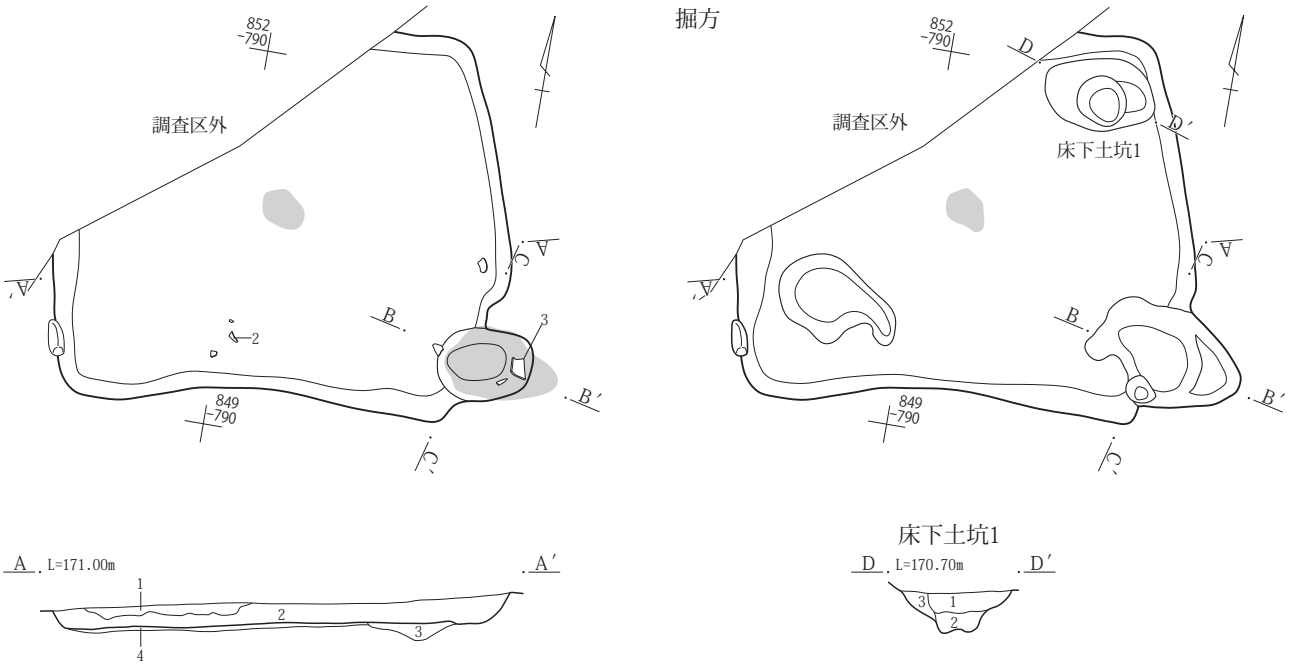
カマド　東壁の南東隅に位置する。残存長は0.73m、燃焼部幅は0.28mで、壁外に0.50m燃焼部が伸びる。側壁から奥壁にかけて、床下土坑から採取されたと思われる粘土塊を含む土によって構築されていた。奥壁付近から出土した円筒埴輪片は、奥壁や煙道を補強する目的で置かれたものであると考えられる。袖石は検出されなかったが、掘方調査では向かって右側の袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.10mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。ただし、床面は西から東に向かって緩やかに下っており、西壁付近と東壁付近の高低差は最大で0.06mであった。



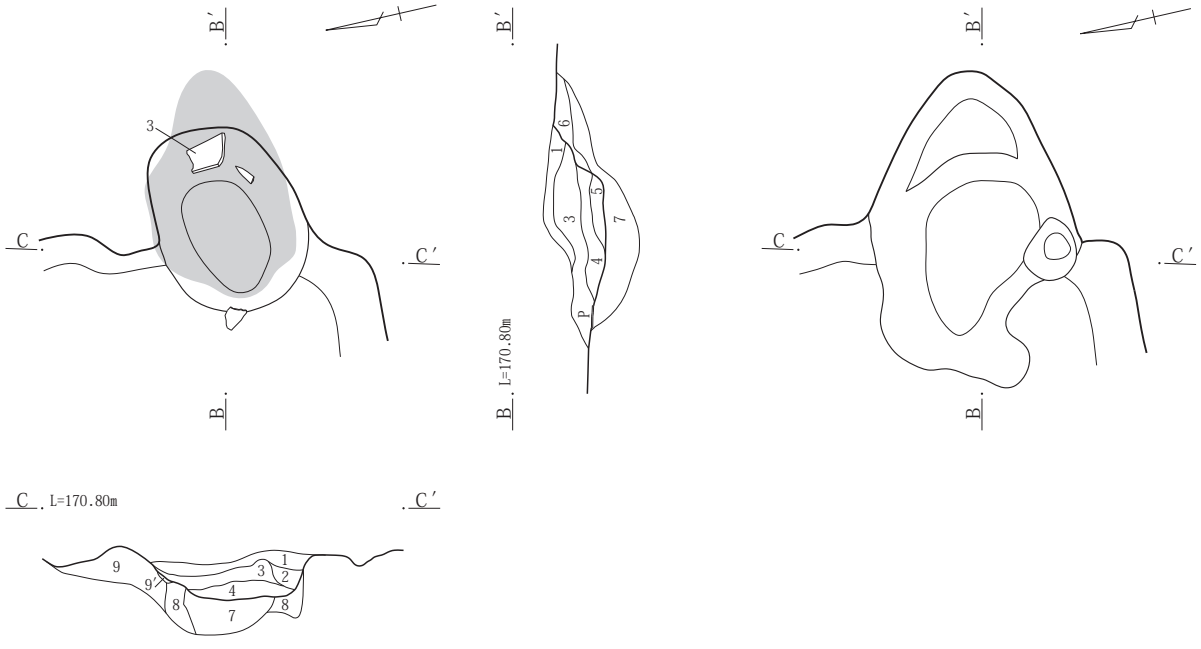
295号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒色土10YR2/1　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

295号竪穴建物床下土坑１Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第231図　295号竪穴建物

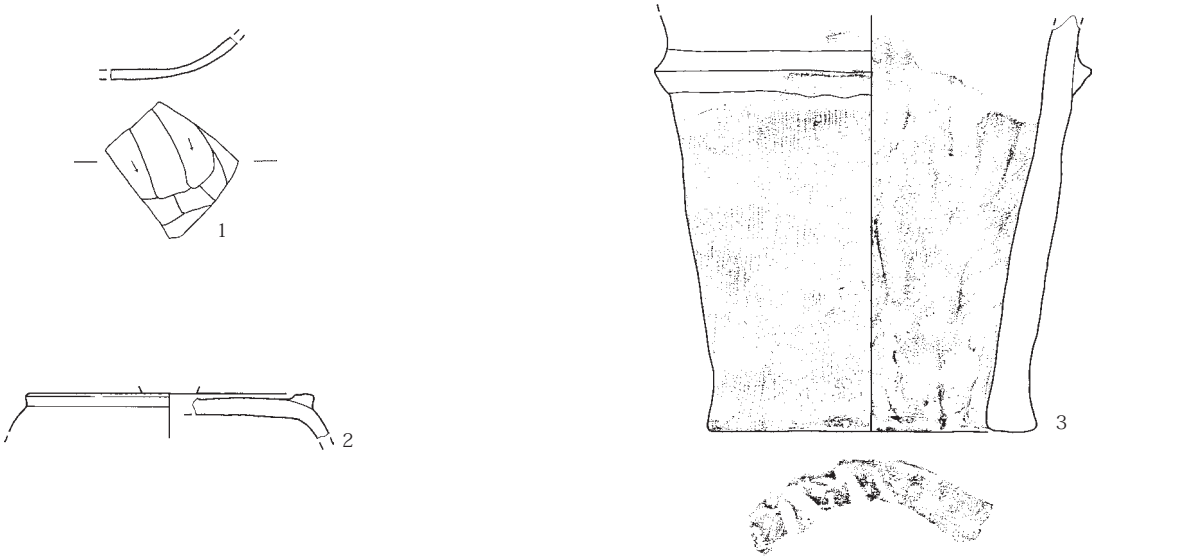
カマド掘方



295号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
５．褐色土7.5YR4/4　ローム粒を少量、焼土小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．褐色土10YR4/4　ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
８．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
９．暗褐色土10YR3/4　ローム粗塊～小塊を多量、暗褐色土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
９′.赤褐色土5YR4/6　９層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まり強い。

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

第232図　295号竪穴建物カマドと出土遺物

掘方　掘方はカマドの下部や床下土坑などを除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.03mであった。ただし、南西隅付近にはやや深く掘り込まれている箇所があり、床面からの深さは最大で0.13mであった。また、床面の中央付近で確認された焼土は、掘方の底部でも見えていることから、重複する竪穴建物のカマドなどの可能性が考えられる。

床下土坑　床下土坑１は北東隅に位置し、規模は長軸0.88m、短軸0.59m、深さ0.36mである。形状は楕円形で、浅い皿状に掘り込まれていた。多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは④である。

出土遺物　カマドの奥壁付近から円筒埴輪（３）が出土したが、これはカマドを補強する目的で持ち込まれたものであると考えられる。なお､ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯･椀類破片６点(18ｇ)、甕･壺類破片41点(380ｇ)、須恵器の杯・椀類破片８点(35ｇ)、甕・壺類破片14点(180ｇ)、石核１点(182.2ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

296号竪穴建物（第233～239図、PL.100～103・321～324）

位置　Ｘ＝40,838～40,842、Ｙ＝－80,787～－80,790（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.13m、短軸3.03m

面積　7.323㎡

残存壁高　0.36m

方位　Ｎ－79°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.10m、燃焼部幅は0.28mで、壁外に0.70m燃焼部・煙道が伸びる。両袖の袖石と天井架構材が原位置を保ち、支脚の上には甕がかかったままの状態であった。向かって左側の袖石は、長さ0.22m、幅0.20m、厚さ0.09m、向かって右側の袖石は、長さ0.20m、幅0.20m、厚さ0.09mと、ほぼ同じ大きさ・形状の礫が使用されていた。一方、天井架構材は、長さ0.38m、幅0.19m、厚さ0.15mである。また、支脚は長さ0.28m、幅0.11m、厚さ0.09mで、カマド奥に向かってやや傾いていたものの、ほぼ原位置であると考えられる。さらに、側壁からは多数の瓦片が出土したが、これらは側壁を補強する目的で置かれたものであると考えられる。また、奥壁付近から出土した丸瓦も、同様に煙道を補強する目的で置かれたもので、ほぼ原位置を保っていると考えられる。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.08mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。また、カマド前の床面には杯が置かれていた。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.57m、短軸0.56m、深さ0.26m、形状は隅丸方形に近い不整形である。少量のローム粒､焼土粒を含む暗褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められ、その上に須恵器の大甕の胴部片が置かれたと考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

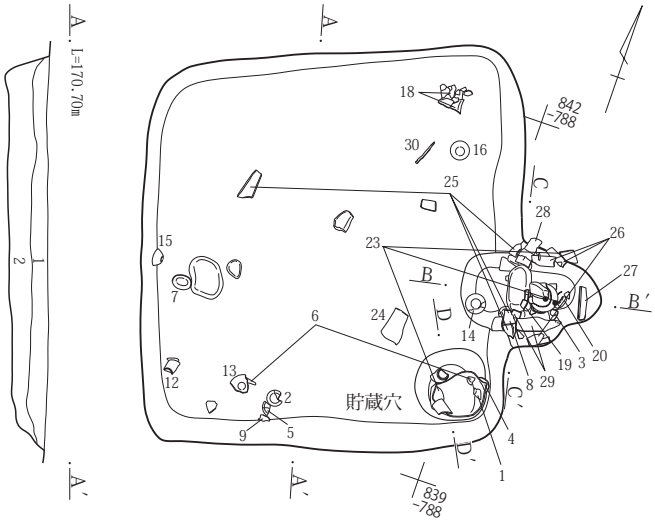
床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　須恵器椀(14)は、カマド前の床面に正位で置かれていたものである。同様に、須恵器杯（２・７）や須恵器椀(16)も､床面に正位で置かれていた｡土師器甕(19)は、カマドにかけられたままの状態で出土したものである。また、カマド内からは多くの瓦(25～29)も出土したが、これらはいずれもカマドの構築材として使用されていたものである。貯蔵穴内からは、須恵器大型甕(23)が倒れた状態で出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片８点(33ｇ)、甕・壺類破片110点(1,000ｇ)、須恵器の杯・椀類破片72点(800ｇ)、甕・壺類破片21点(440ｇ)、瓦片６点が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。

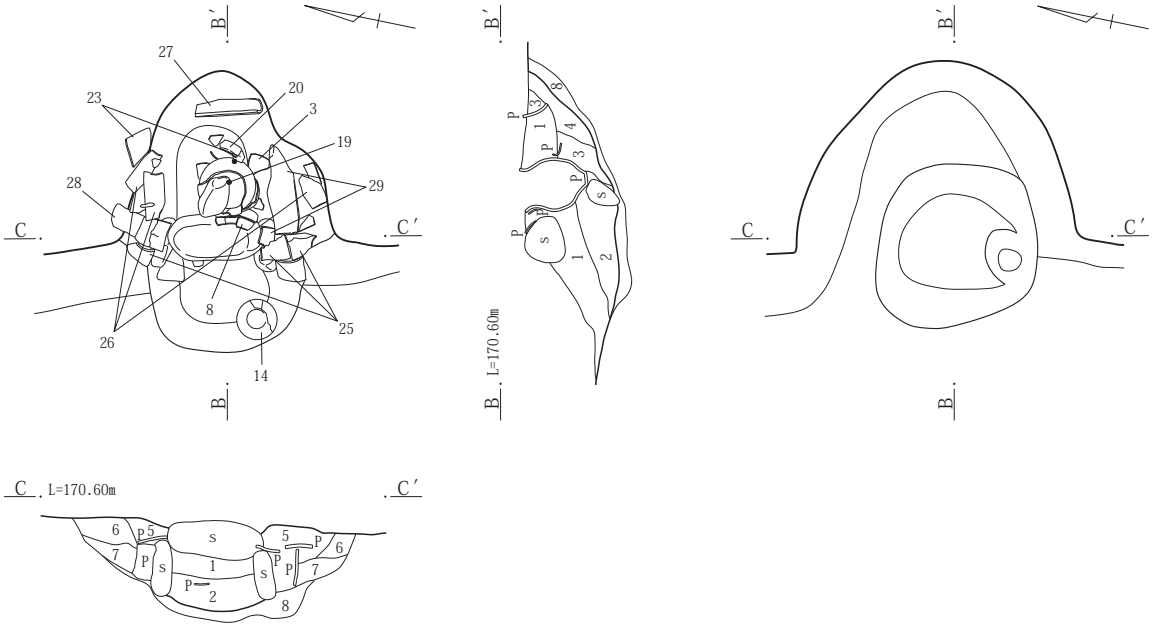


296号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

296号竪穴建物貯蔵穴Ｄ－Ｄ′
１．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：60　2m

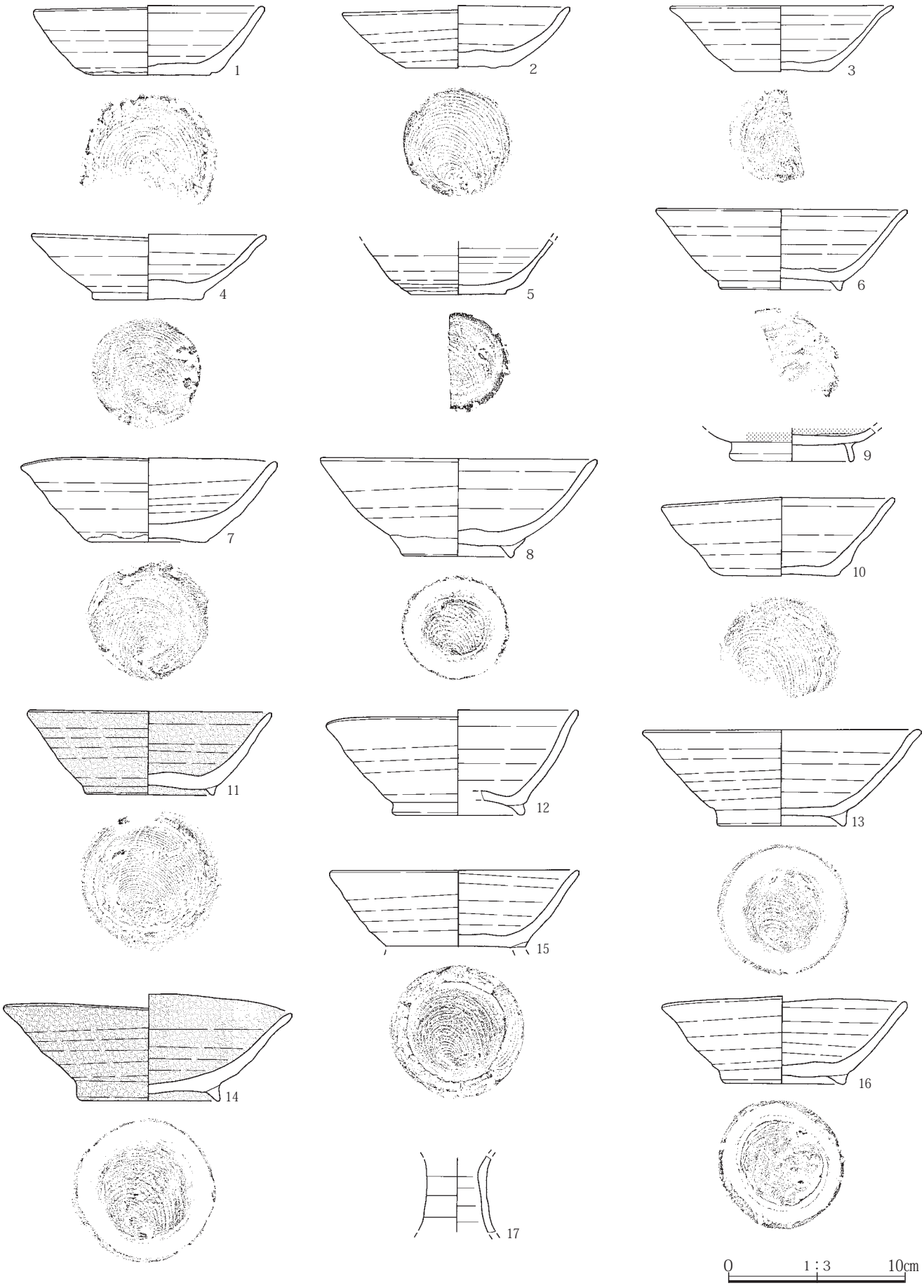
カマド掘方



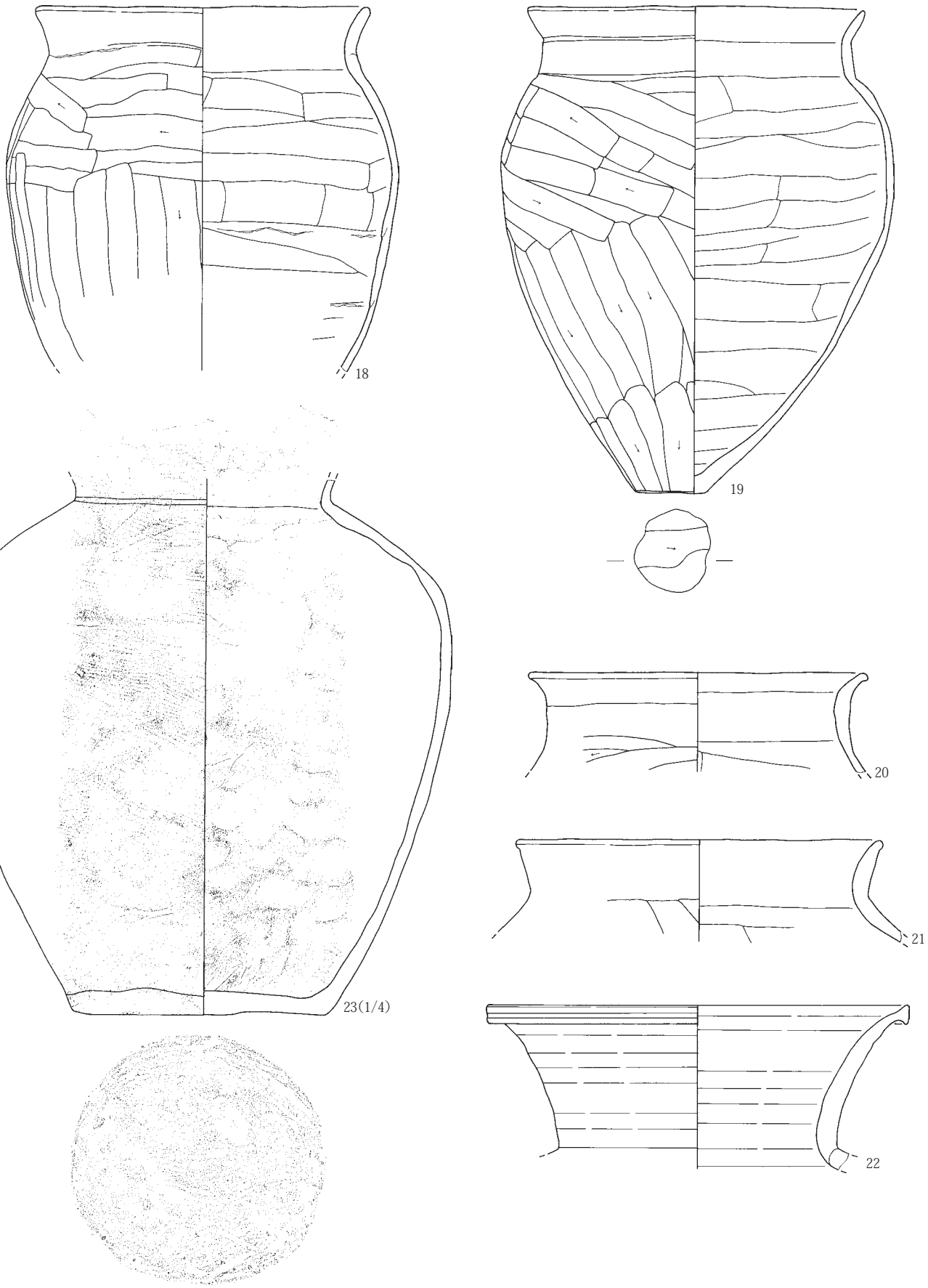
296号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量、焼土粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
３．暗褐色土10YR3/4　焼土粒を多量、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

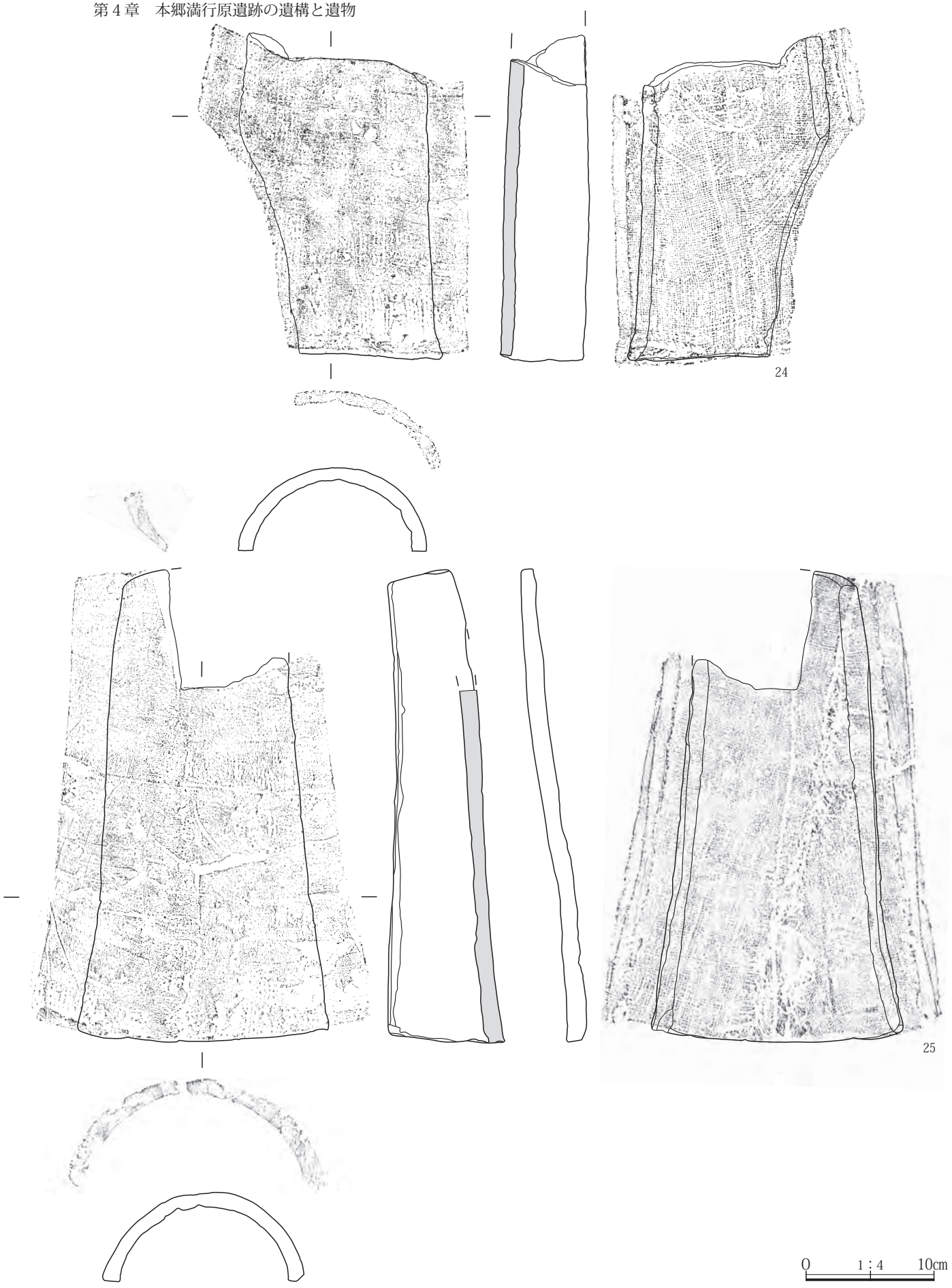
第233図　296号竪穴建物・カマド



第234図　296号竪穴建物出土遺物（１）

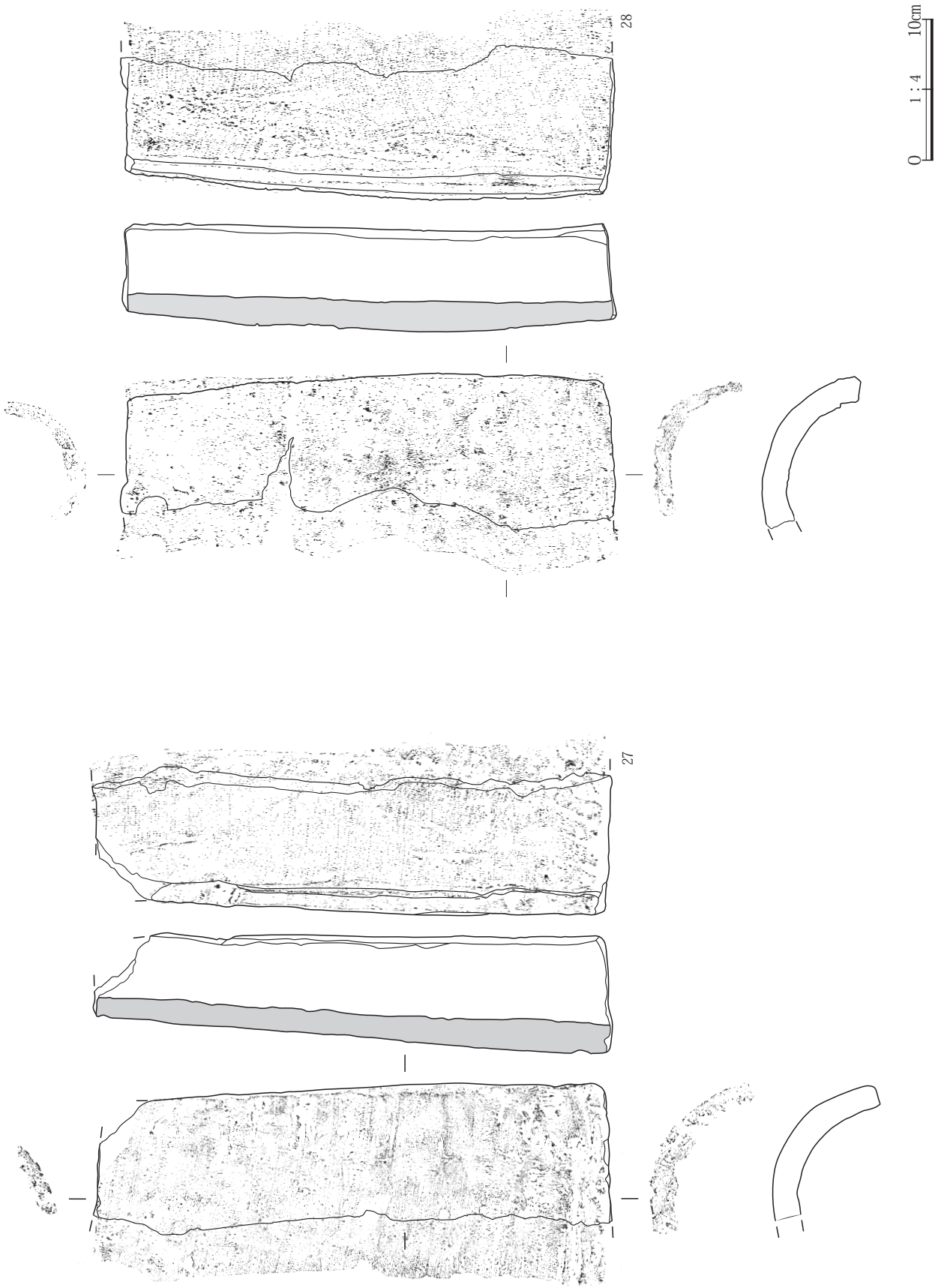


第235図　296号竪穴建物出土遺物（２）

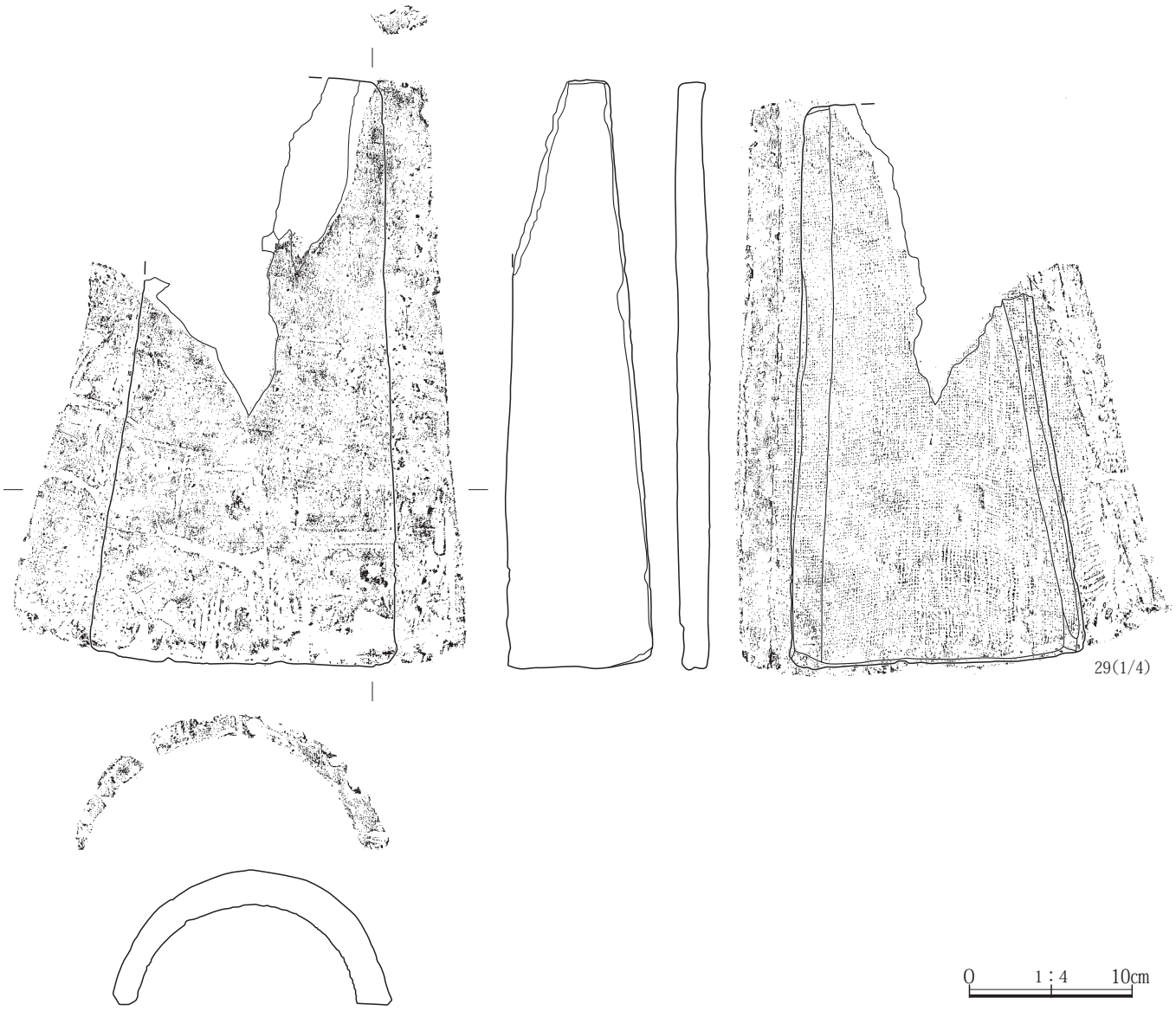


第236図　296号竪穴建物出土遺物（３）

第237図　296号竪穴建物出土遺物（４）



第238図　296号竪穴建物出土遺物（５）



第239図　296号竪穴建物出土遺物（６）

297号竪穴建物（第240～242図、PL.103・104・324）

位置　Ｘ＝40,854～40,858、Ｙ＝－80,775～－80,779（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸3.64m、短軸3.21m

面積　10.645㎡

残存壁高　0.37m

方位　Ｎ－85°－Ｅ

重複　40号溝と重複し、297号竪穴建物が新しい。

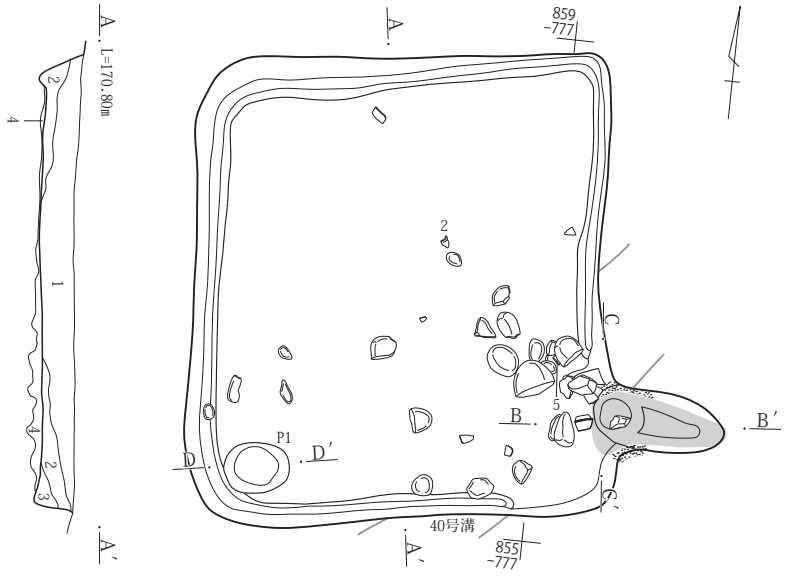
埋没土　少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にローム小塊～粒を含むことから、人為的な埋没の可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅に位置する。残存長は1.04m、燃焼部幅は0.24mで、壁外に0.85m燃焼部・煙道が伸びる。側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土塊を含む土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、カマド周辺には多数の礫が散乱しており、これらは袖石を含めたカマドの構築材の一部であると考えられる。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.25m、幅0.14m、厚さ0.12mである。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.04mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

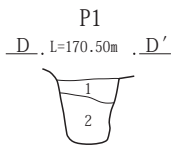
柱穴　Ｐ１は南西隅に位置し、規模は長軸0.52m、短軸0.40m、深さ0.60m、形状は楕円形である。上層は微量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土、下層は微量のローム小塊～粒で埋没していた。このＰ１は貯蔵穴である可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。ただし、カマド横の南東隅は壁際溝が途切れていることから、ここにきわめて浅い貯蔵穴が存在したか、あるいは食料や水を貯えるための土器が置かれていた可能性が考えられる。また、Ｐ１が貯蔵穴である可能性が考えられる。

壁際溝　幅0.13～0.35m、深さ0.02～0.05mの南東隅を



297号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒色土10YR2/1　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-Cを多量、ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。



297号竪穴建物Ｐ１Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第240図　297号竪穴建物

除いてほぼ全周する壁際溝を検出した。微量のAs-C、ローム粒を含む黒色土、または、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別が難しかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

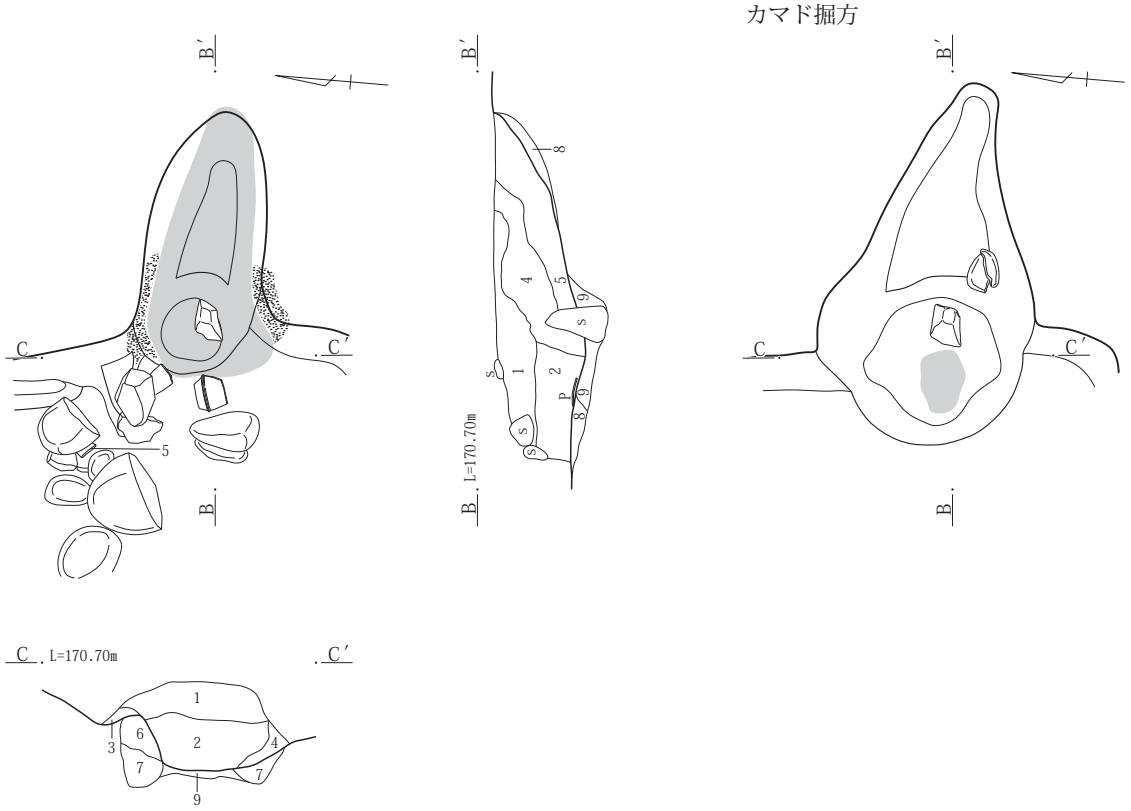
床面　床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化していた。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　羽釜（５）は、カマド周辺に散乱していた礫とともに出土した。それ以外の遺物は、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片37点（189ｇ）、甕・壺類破片132点（475ｇ）、須恵器の杯・椀類破片57点（357ｇ）、甕・壺類破片25点（680ｇ）、磨石（328.2ｇ）、礫片（21.3ｇ）が出土している。このうち磨石（６）、礫片（７）については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から10世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

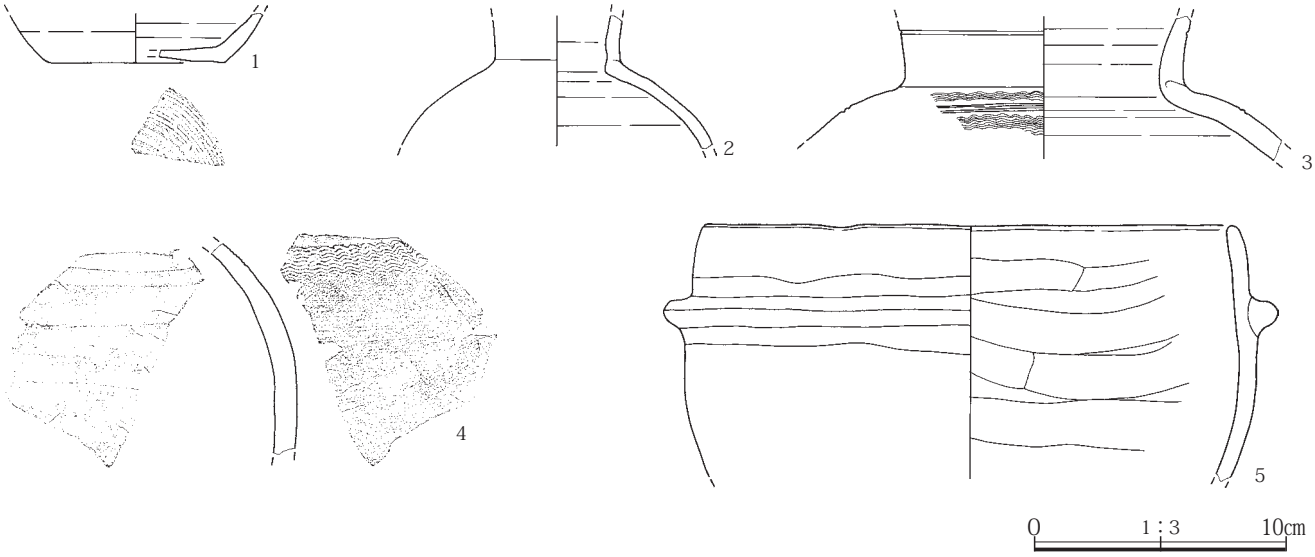


297号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．褐色土10YR4/4　ローム小塊を非常に多量、黒褐色土塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊を多量、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
５．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
６．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。一部、明赤褐色(2.5YR5/6)に焼土化している。粘性、締まりやや強い。
７．暗褐色土7.5YR3/3　ローム小塊、焼土塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
８．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：30　1m

第241図　297号竪穴建物カマド



第242図　297号竪穴建物出土遺物

298号竪穴建物（第243～245図、PL.104～106・324）

位置　X＝40,834～40,838、Y＝－80,783～－80,787（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸3.73m、短軸2.71m

面積　7.835㎡

残存壁高　0.38m

方位　N－79°－E

重複　なし

埋没土　少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁のほぼ中央に位置する。残存長は1.11m、燃焼部幅は0.21mで、壁外に0.55m燃焼部・煙道が伸びる。両袖から側壁・奥壁にかけて、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、カマドの壁上には多量の粘土塊を含む土が貼られ、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.38mである。袖石は検出されなかったが、掘方調査では向かって左側の袖の下部から袖石を据えた痕跡の可能性が考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。ただし、全景写真を見ると、南東隅付近の床面に多量の土器片が埋没しているように見える。また、掘方調査において、この付近から土坑状の掘り込みを検出されている。このような状況から、この南東隅に貯蔵穴が存在した可能性が考えられる。なお、その際の規模は、長軸0.52m、短軸0.46m、深さ0.19m程度と想定される。

壁際溝　東壁の大部分を除く範囲から、幅0.21～0.32m、深さ0.01～0.16mの壁際溝を検出した。少量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。ただし、中央付近がやや沈んでおり、これは下部に存在する床下土坑１の影響による経年変化であると考えられる。

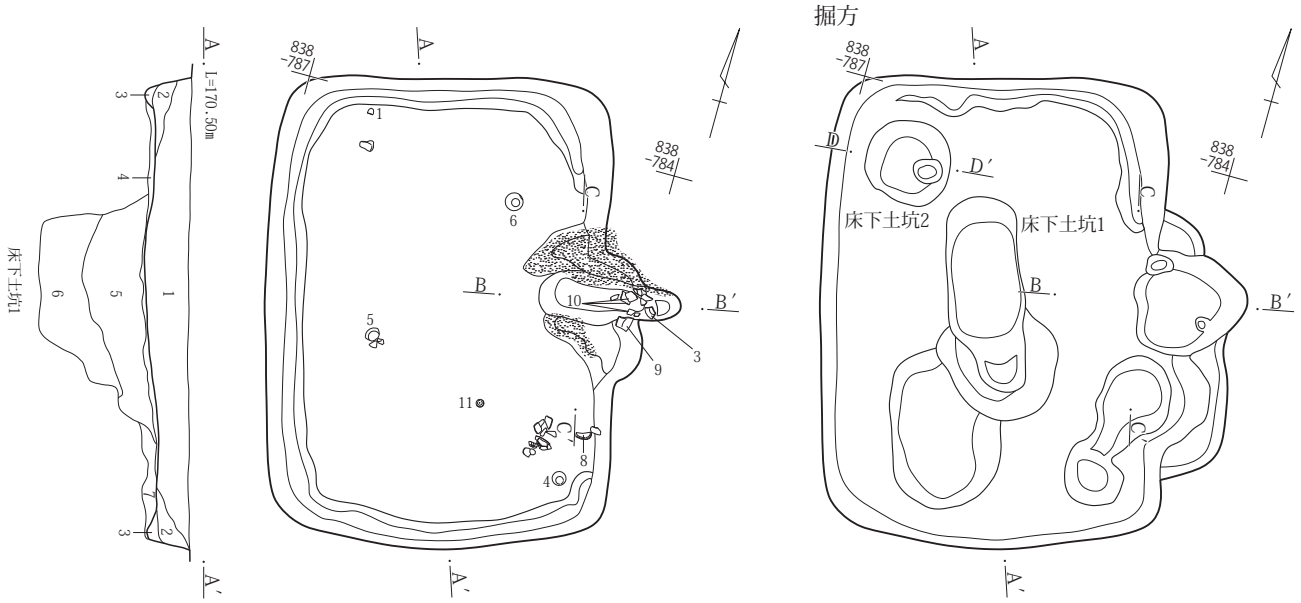
掘方　掘方はカマドの下部や床下土坑などを除けば全体的に浅く、床面からの深さは概ね0.04～0.10mであった。ただし、南半はやや深く掘り込まれている箇所があり、床面からの深さは最大で0.24mであった。

床下土坑　２基の床下土坑は、中央付近と北西隅に位置し、規模（長軸×短軸×深さ）は、床下土坑１が1.77×0.95×0.87m、床下土坑２が0.67×0.65×0.45mである。形状は床下土坑１が隅丸長方形に近い不整形で、円筒状に深く掘り込まれていた。一方、床下土坑２は円形の浅い皿状で、内部にピット状の掘り込みをもつ。床下土坑１は、上層が多量のAs-YP、ローム塊～小塊を含む暗褐色土、下層が非常に多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む褐

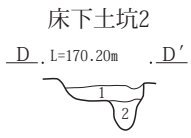
色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上に貼床されたと考えられる。一方、床下土坑２は､少量のローム小塊を含む黒褐色土､重複するピット状の部分は少量のAs-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。底面が下位に存在する粘土層まで達していないことから、粘土採取を目的に掘られたものであるとは考えられない。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯３点（４～６）と紡輪(11)は、いずれも床面に置かれていたものである。土師器甕は少なくとも２個体（９・10)が確認されているが、いずれもカマド内から出土したものである。また、カマドの奥壁付近からは須恵器杯（３）も出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片66点(303ｇ)、甕・壺類破片262点(1,239ｇ)、須恵器の杯･椀類破片27点(210ｇ)、甕・壺類破片９点(149ｇ)、二次加工ある剝片１点(4.5ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第１四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。



298号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒色土10YR2/1　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR3/2　ローム塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
５．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まり弱い。
６．褐色土10YR4/4　As-YP、ローム粗塊～小塊を非常に多量含む。粘性、締まり弱い。
７．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

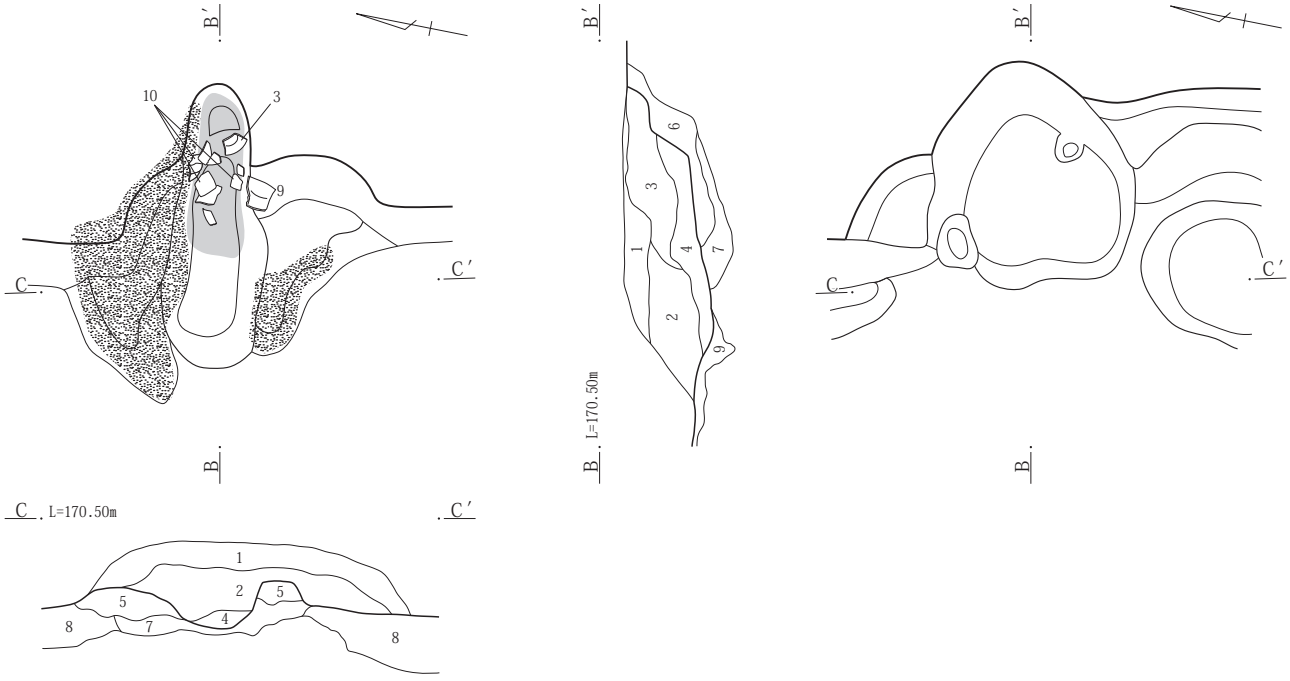


298号竪穴建物床下土坑２Ｄ－Ｄ′
１．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR3/2　As-YP、ローム粒を少量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：60　2m

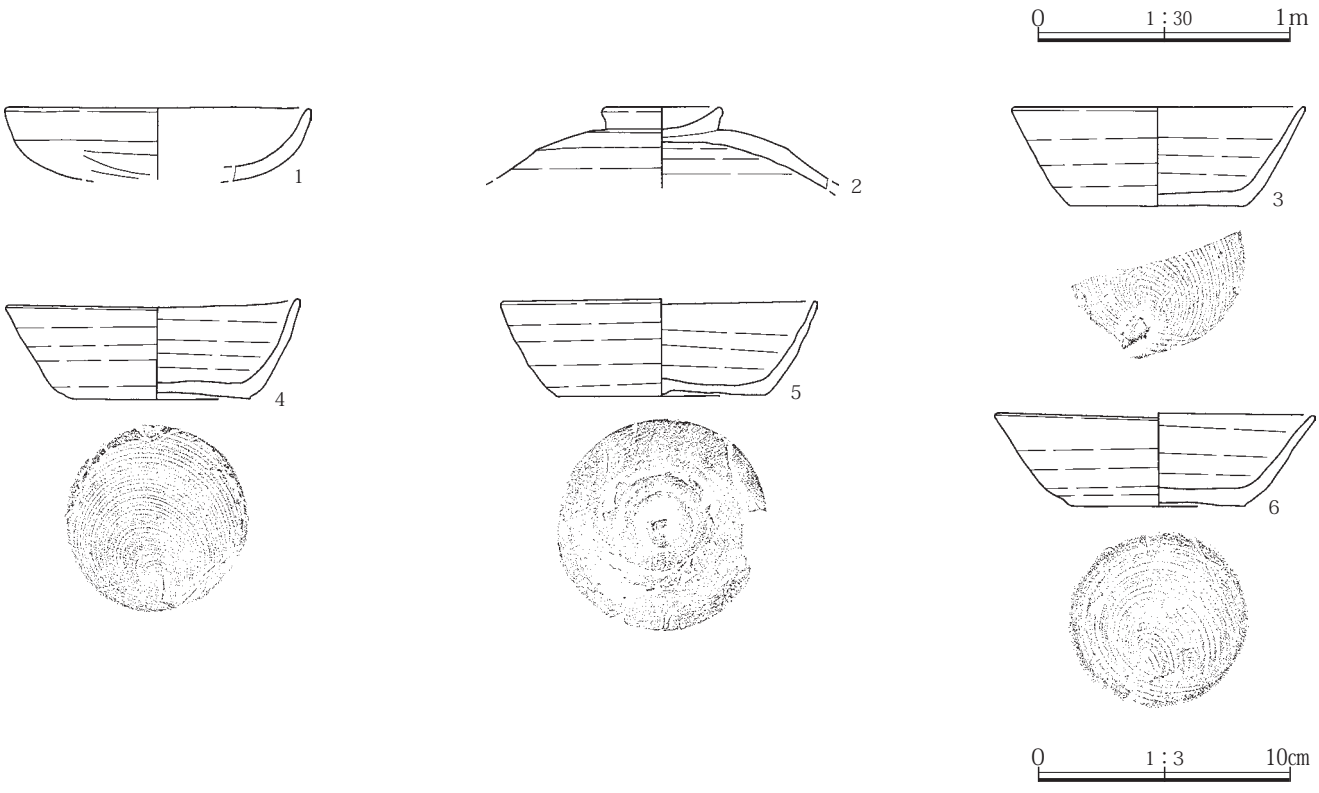
第243図　298号竪穴建物

カマド掘方

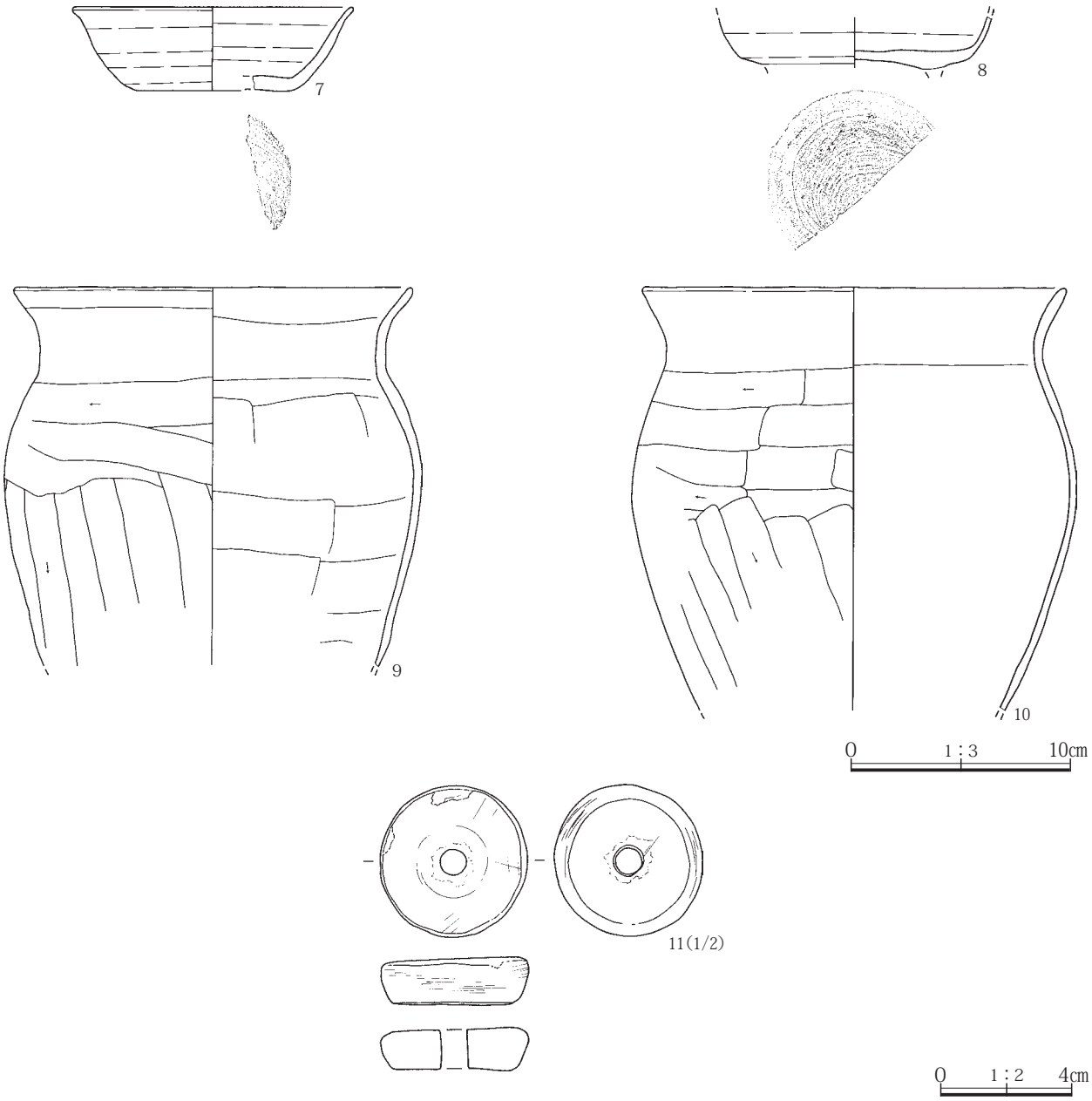


298号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム小塊を主体とし、黒褐色土塊～小塊を多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
６．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
９．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



第244図　298号竪穴建物カマドと出土遺物（１）



第245図　298号竪穴建物出土遺物（２）

299号竪穴建物（第246～248図、PL.106・325）

位置　X＝40,857～40,861、Y＝－80,772～－80,778（C・D区）

形状　不整形

規模　長軸4.38m、短軸3.05m

面積　9.269㎡

残存壁高　0.34m

方位　N－82°－E

重複　300号・305号竪穴建物と重複し、299号竪穴建物が古い。ただし、出土遺物から想定される300号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。また、40号溝と重複し、299号竪穴建物が新しい。

埋没土　少量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム小塊～粒を含むことから、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は（0.60m）、燃焼部幅は0.25mで、壁外に（0.35m）燃焼部が伸びるが、煙道は重複する305号竪穴建物によって壊されている。カマド周辺には多数の礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。このうち向かって左側の袖石と、右側の側壁に立てられた礫は、原位置を保っていると考えられる。左の袖石は、

長さ0.29m、幅0.27m、厚さ0.10mである。一方、右の側壁の礫は、長さ0.25m、幅0.27m、厚さ0.13mである。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

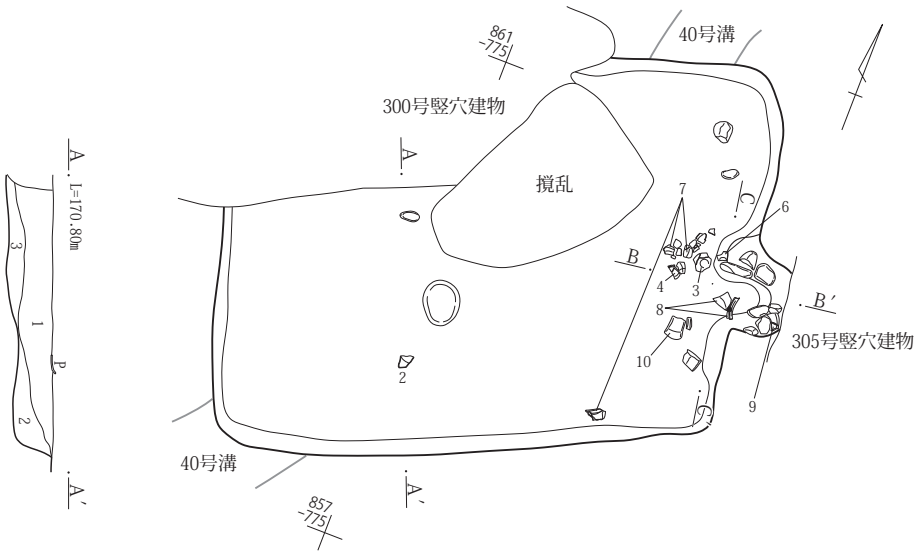
床面　床面はほぼ平坦であるが、中央やや南西寄りがわずかに沈んでいる。全景写真では、この部分に床下土坑が存在するように見えることから、この床下土坑の影響による経年変化で床面が沈んだ可能性が考えられる。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。ただし、全景写真を見ると、前述の中央やや南西寄りの１基のほかに、少なくとも南西隅で１基、床下土坑の存在が確認できる。

出土遺物　須恵器椀（３～５）と砥石(10)は、いずれもカマドの焚口付近から出土したものである。土師器甕は少なくとも３個体（７～９）が確認されているが、いずれもカマド内やその周辺から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片64点(225ｇ)、甕・壺類破片259点(2,240ｇ)、須恵器の杯・椀類破片44点(430ｇ)、甕・壺類破片28点(840ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



299号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

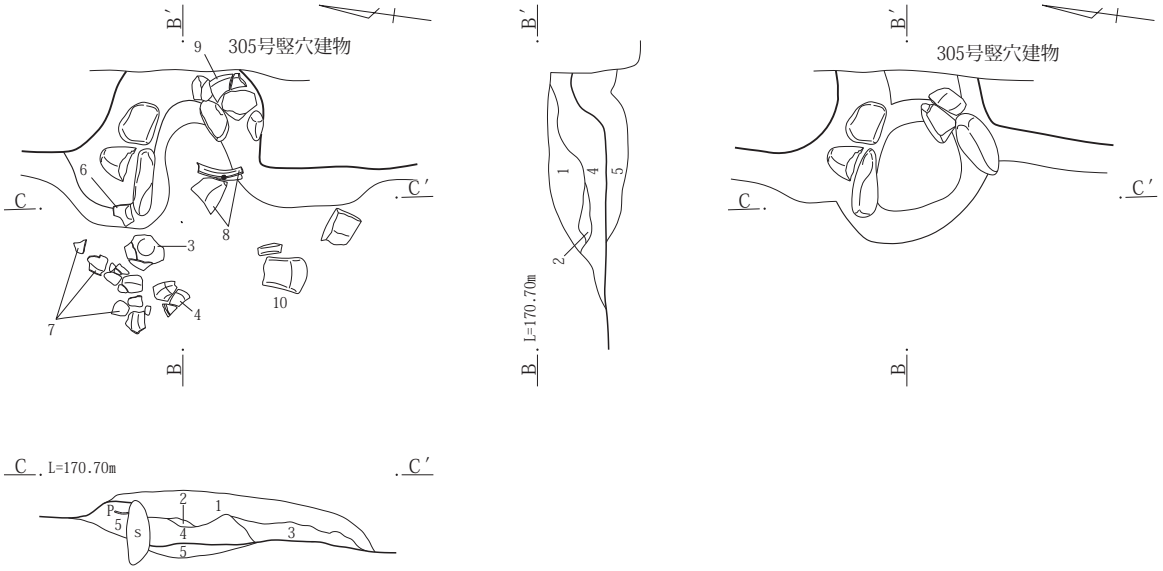
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

３．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

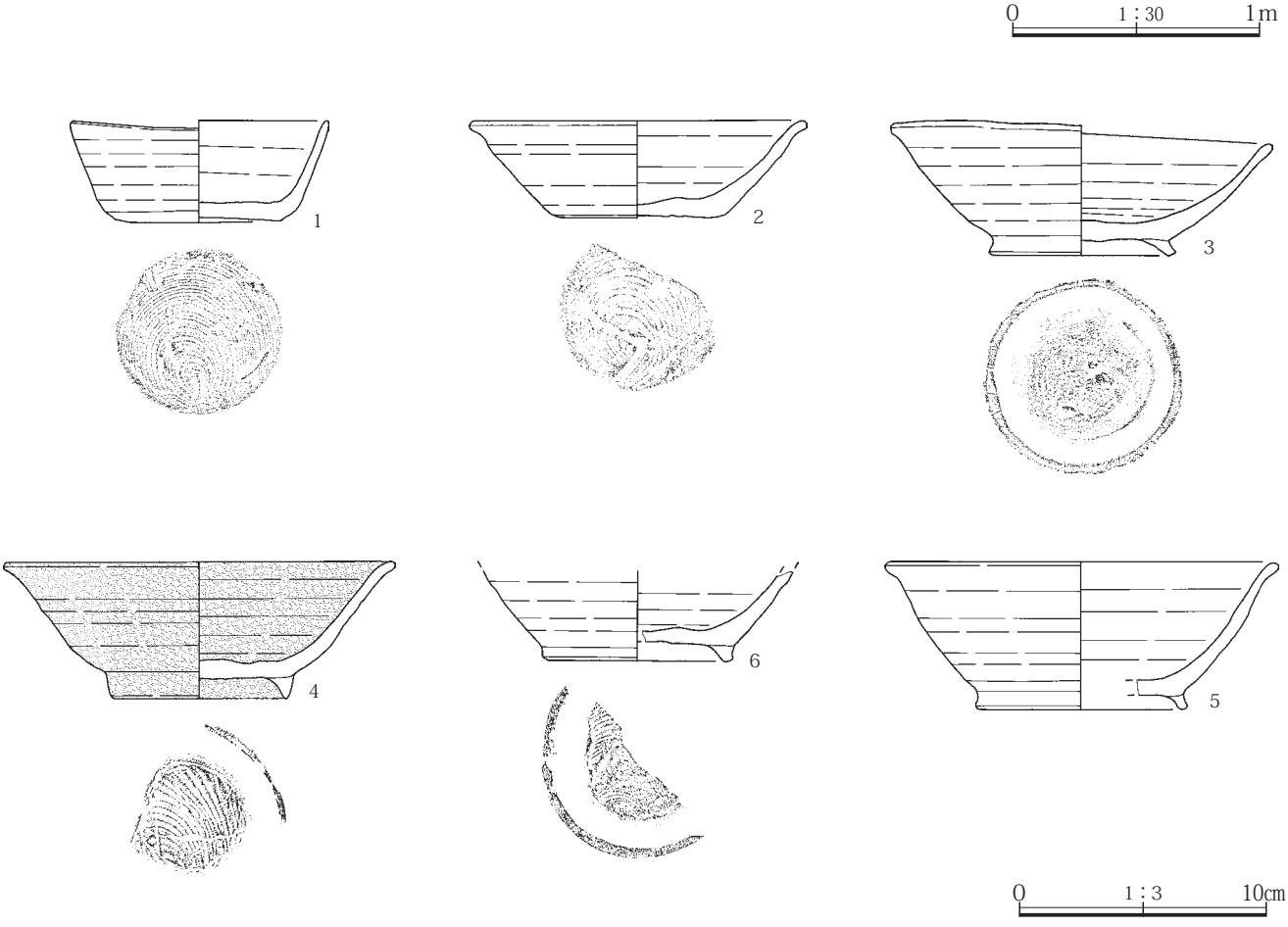
第246図　299号竪穴建物

カマド掘方

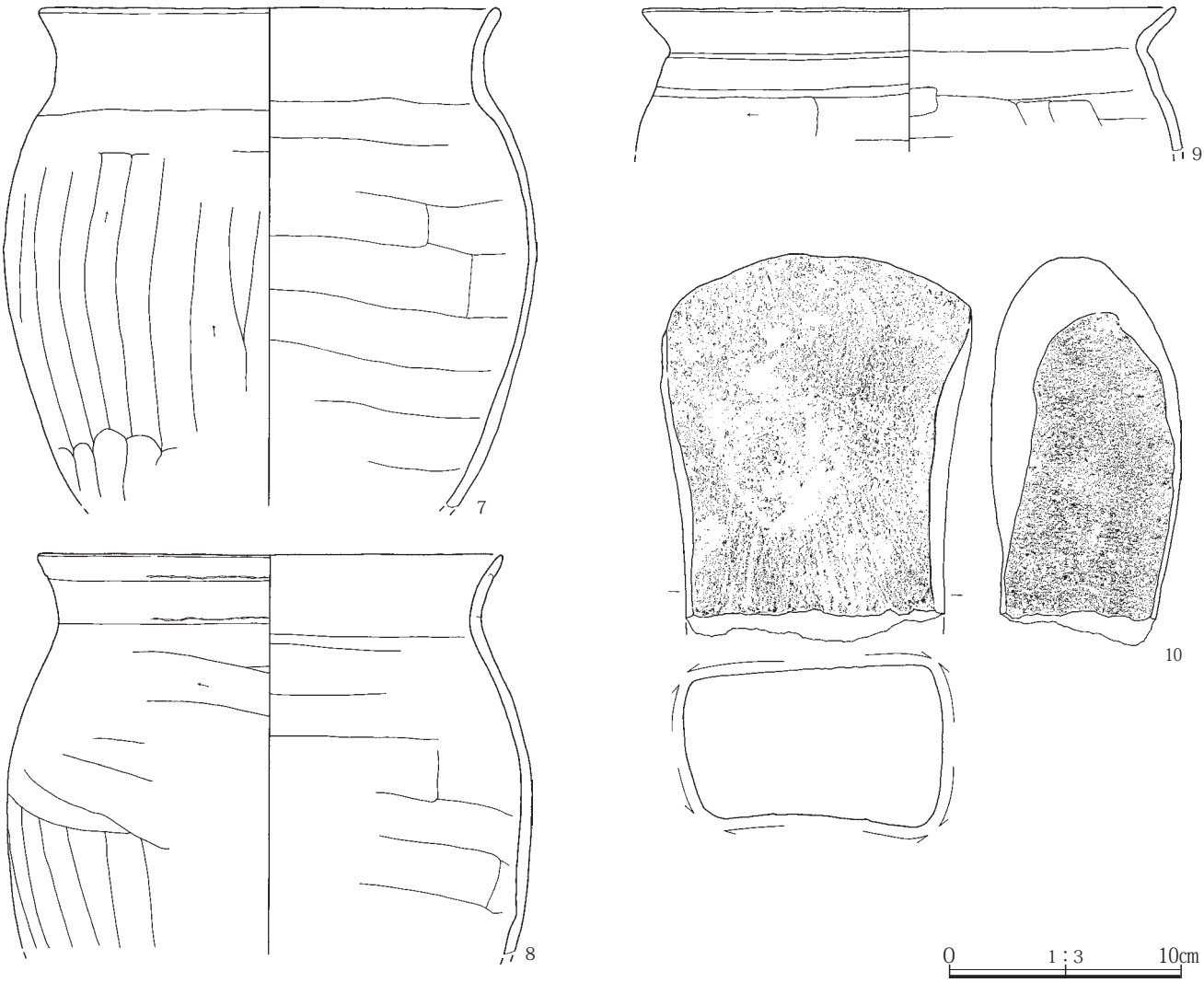


299号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．褐色土10YR4/6　一部、焼土化したローム塊を主体とする。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．暗褐色土10YR3/4　焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。



第247図　299号竪穴建物カマドと出土遺物（１）



第248図　299号竪穴建物出土遺物（２）

300号竪穴建物（第249・250、PL.106・107・325）

位置　X＝40,859～40,863、Y＝－80,774～－80,778（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸3.59m、短軸3.15m

面積　（9.168㎡）

残存壁高　0.49m

方位　N－72°－E

重複　229号竪穴建物と重複し、300号竪穴建物が新しい。ただし、出土遺物から想定される299号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

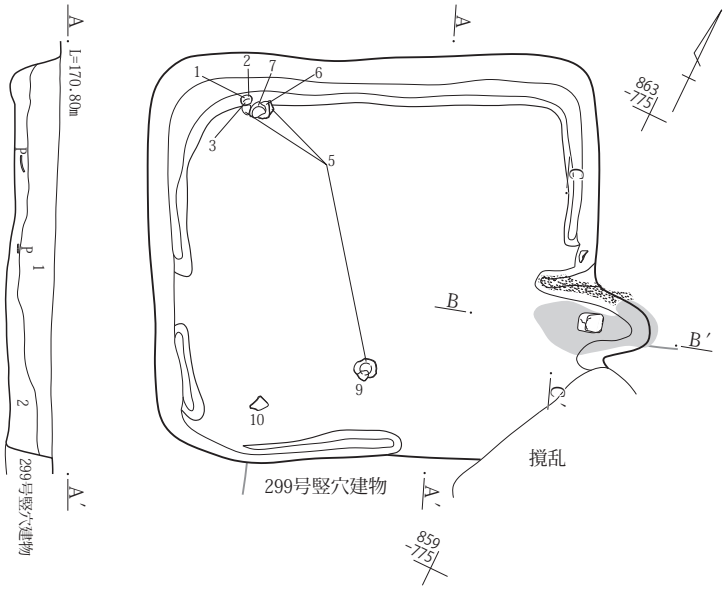
埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のAs-C、少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.80m、燃焼部幅は0.28mで、壁外に0.39m燃焼部が伸びる。向かって左側の袖はわずかに残存していたが、右側については撹乱により破壊されていた。この左袖から側壁にかけては、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.29m、幅0.15m、厚さ0.14mである。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　南西隅など一部を除く範囲から、幅0.15～0.53m、深さ0.01～0.06mのほぼ全周する壁際溝を検出した。やや多量のAs-C、少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別が難しかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。



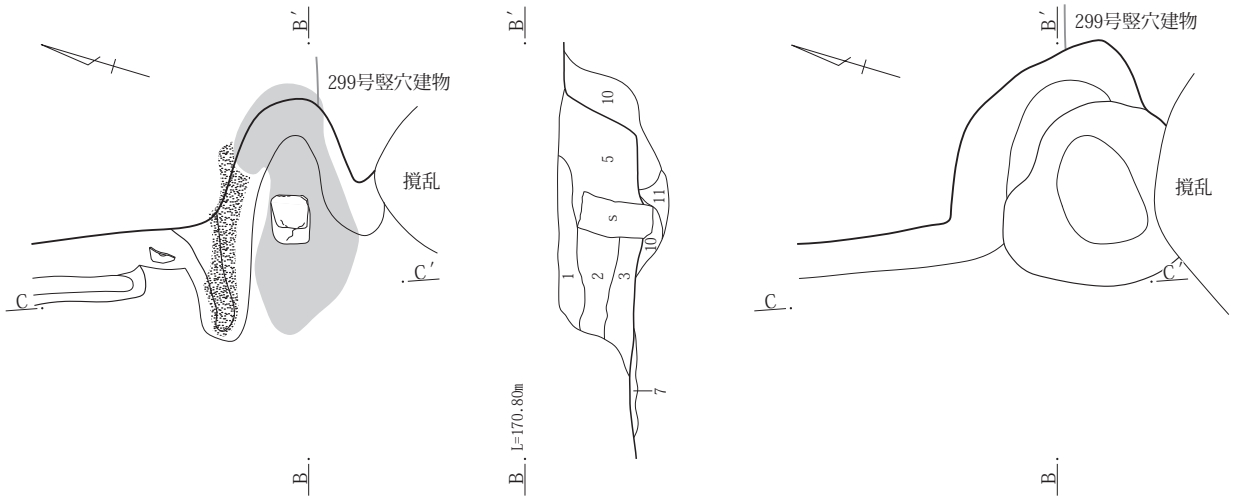
300号竪穴建物Ａ－Ａ′

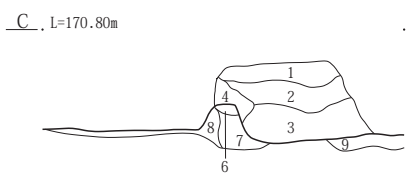
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

カマド掘方





300号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

４．暗褐色土10YR3/4　ローム粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。

５．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。

６．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。

７．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒、灰を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

８．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

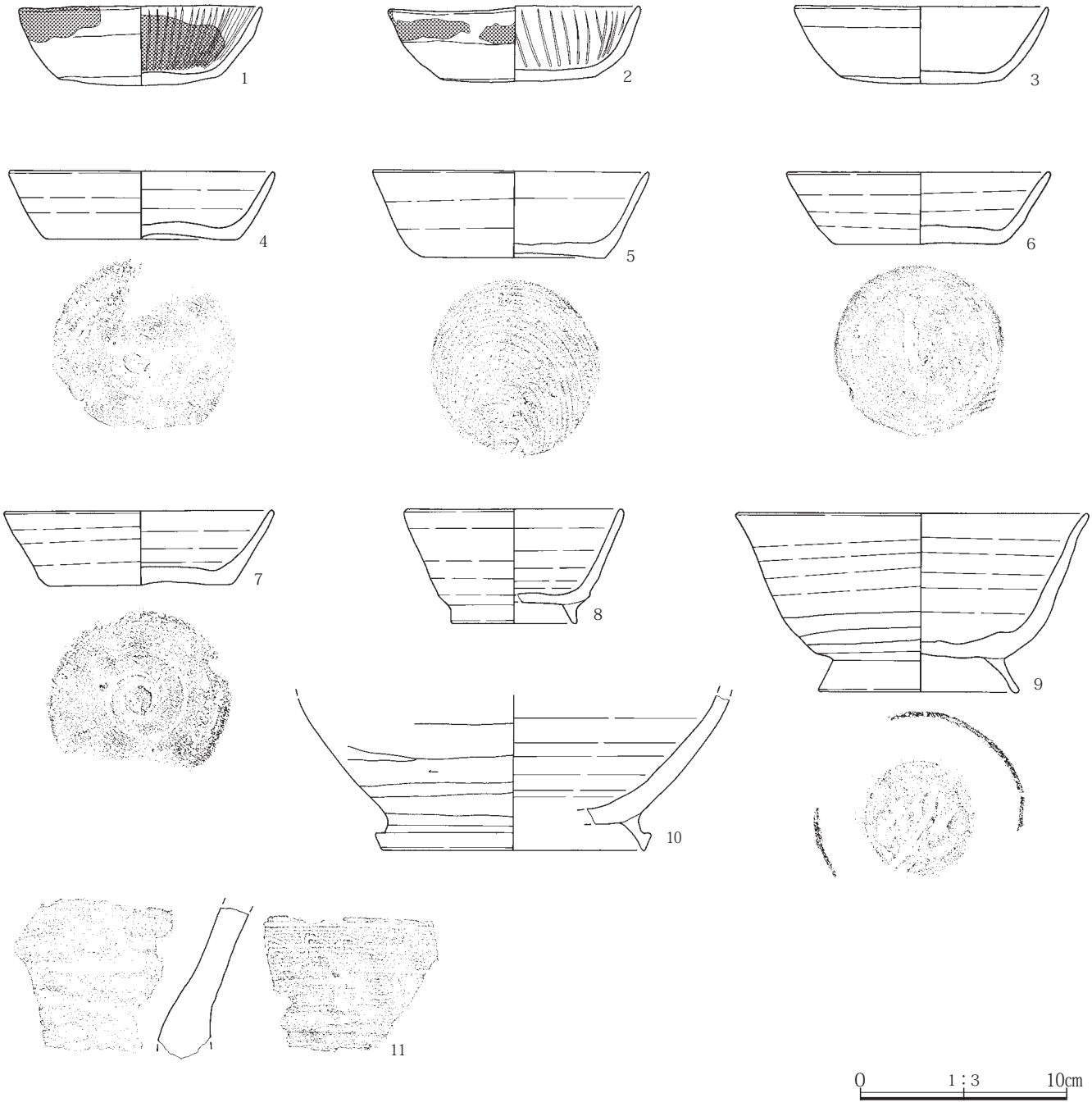
９．黒褐色土10YR2/3　焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。

10．暗褐色土10YR3/4　ローム粒を少量、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

11．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m

第249図　300号竪穴建物・カマド



第250図　300号竪穴建物出土遺物

床面　床面はほぼ平坦であるが、中央やや南寄りがわずかに沈んでいる。これは床下土坑などの影響による経年変化で床面が沈んだ可能性が考えられる。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　須恵器椀（９）は、南壁付近の床面に正位で置かれていたものである。また、北西隅付近からは、土師器杯（１～３）や須恵器杯（５～７）がまとまって出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片22点（93ｇ）、甕・壺類破片110点（630ｇ）、須恵器の杯・椀類破片45点（540ｇ）、甕・壺類破片12点（270ｇ）、剝片１点（11.0ｇ）が出土している。

所見　出土遺物から８世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

301号竪穴建物（第251～253、PL.107～109・326）

位置　Ｘ＝40,875～40,879、Ｙ＝－80,758～－80,762（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.15m、短軸3.04m

面積　（7.947㎡）

残存壁高　0.23m

方位　Ｎ－82°－Ｅ

重複　306号竪穴建物と重複し、301号竪穴建物が新しい。ただし、出土遺物から想定される306号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　北側は微量のAs-C、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。南側は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。このうち北側の黒褐色土に関しては、306号竪穴建物の埋没土である可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.72m、燃焼部幅は0.37mで、壁外に0.67m燃焼部が伸びる。袖石は検出されなかったが、掘方調査では両袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

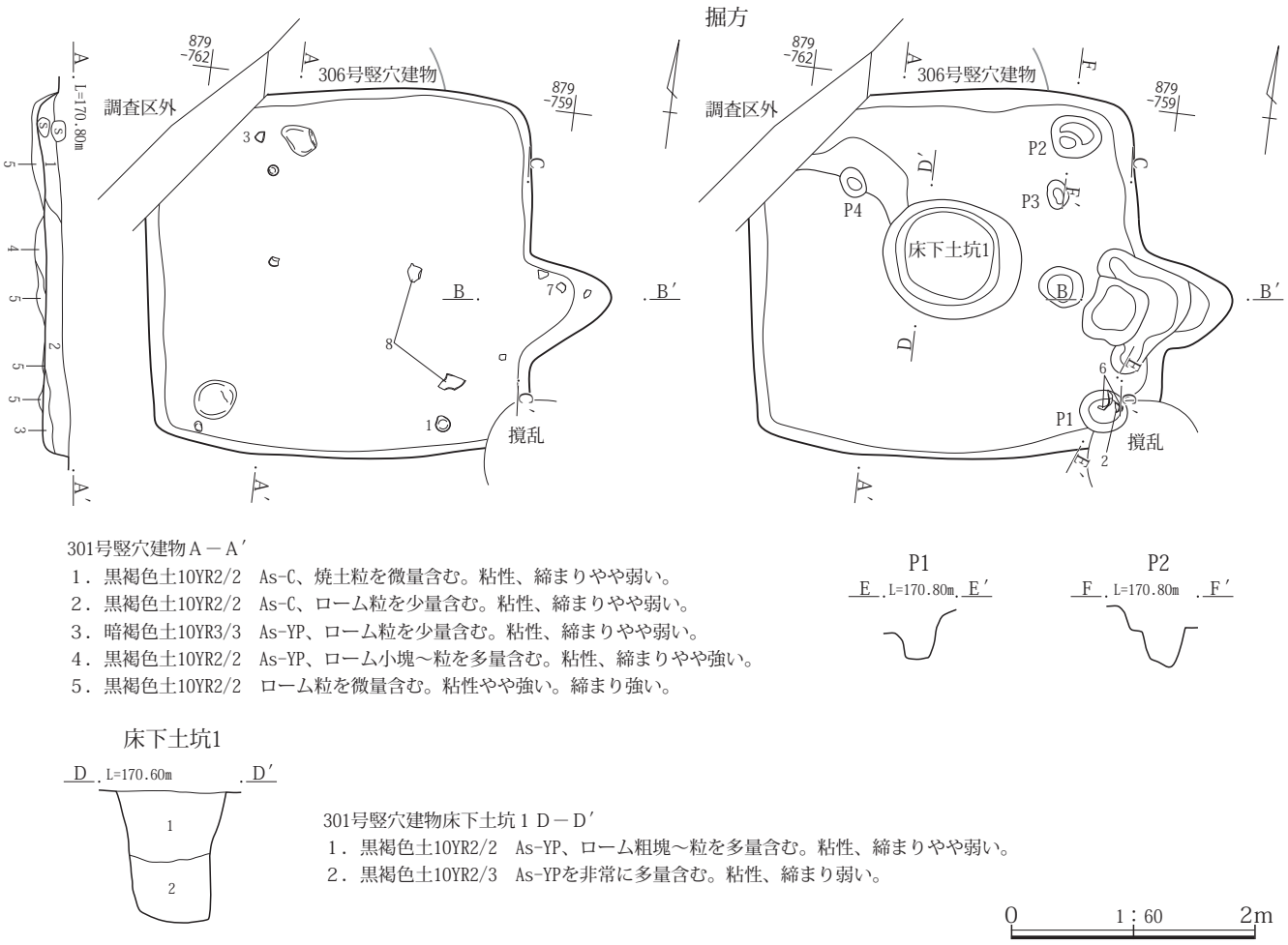
柱穴　検出されなかった。掘方調査で検出したＰ１・２、またはＰ３・４は主柱穴の可能性も考えられたが、西側や南側にそれぞれ想定された残るピットを検出することはできなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１、またはＰ２が貯蔵穴である可能性が考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方はカマドの下部と床下土坑１を除けば全体的に非常に浅く、床面からの深さは概ね0.01～0.06mであった。ただし、北壁付近はやや深く、床面からの深さは最大で0.10mであった。また、４基のピットを検出した。それぞれのピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ



301号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり強い。

P1　E. L=170.80m .E′

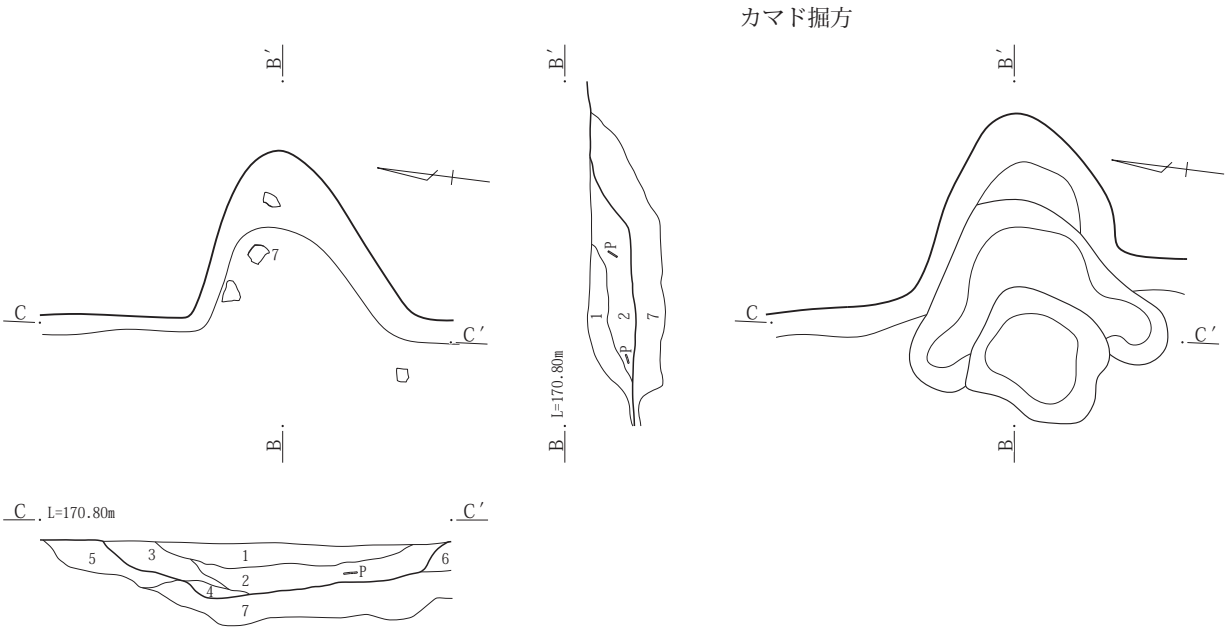
P2　F. L=170.80m .F′

床下土坑1
D. L=170.60m .D′

301号竪穴建物床下土坑１Ｄ－Ｄ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-YP、ローム粗塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-YPを非常に多量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：60　2m

第251図　301号竪穴建物



301号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
1．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒、焼土粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR3/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
6．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/2　ローム塊を多量、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

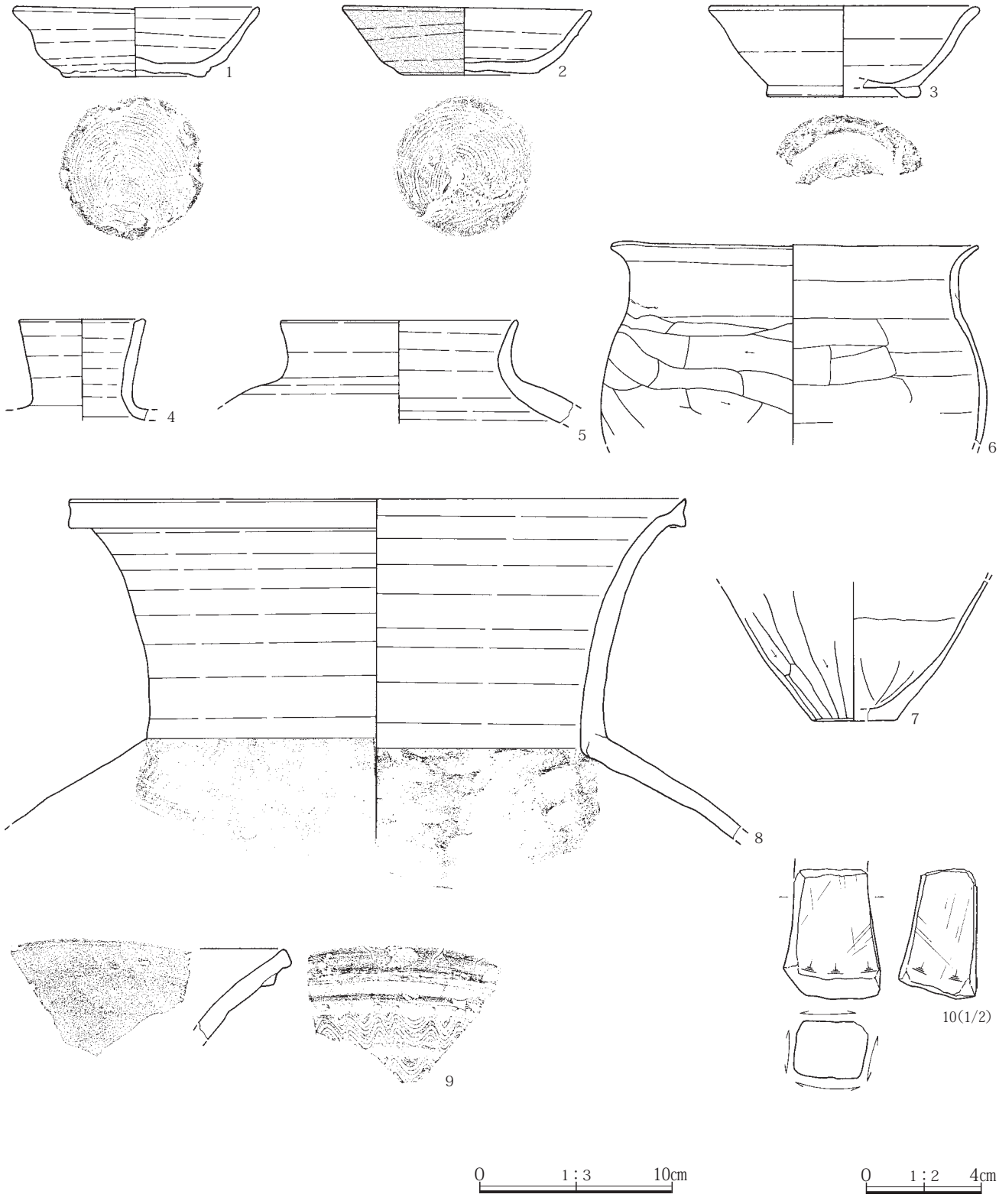
第252図　301号竪穴建物カマド

１が0.38×0.35×0.20m、Ｐ２が0.41×0.34×0.33m、Ｐ３が0.23×0.17×0.31m、Ｐ４が0.26×0.19×0.22mで、形状はいずれも楕円形である。床面は微量のローム粒を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　床下土坑１はほぼ中央に位置し、規模は長軸1.14m、短軸0.97m、深さ1.06mである。形状は円筒形に近い楕円形で、いずれも円筒状に深く掘り込まれていた。上層は多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む黒褐色土、下層は非常に多量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。粘土を採取したあと人為的に埋められ、その上面がそのまま床面とされたと考えられる。なお、本竪穴建物の床下土坑のタイプは②である。

出土遺物　須恵器杯（１）は、南東隅付近の床面に正位で置かれていたものである。須恵器杯（２）と土師器甕（６）は、いずれも貯蔵穴の可能性があるＰ１内から出土したものである。南西隅に置かれた礫は、長さ0.18m、幅0.15m（厚さは不明）である。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片45点（203ｇ）、甕・壺類破片249点（1,326ｇ）、須恵器の杯・椀類破片96点（787ｇ）、甕・壺類破片15点（378ｇ）、瓦片２点、凹石１点（395.9ｇ）、磨石（187.2ｇ）、剝片１点（33.7ｇ）が出土している。このうち縄文土器（加曽利Ｅ３式）の胴部、凹石については、遺構外出土遺物として（凹石は写真のみ）掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



第253図　301号竪穴建物出土遺物

302号竪穴建物（第254図、PL.109・326）

位置　X＝40,879～40,883、Y＝－80,756～－80,760（C・D区）

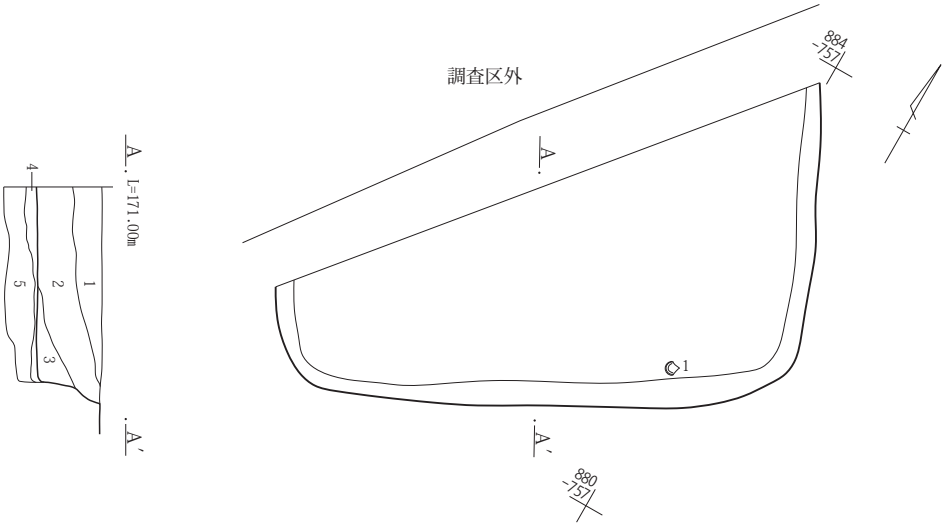
形状　調査範囲が限定的であることから不明である。

規模　長軸4.25m、短軸(2.47m)

面積　(6.021㎡)

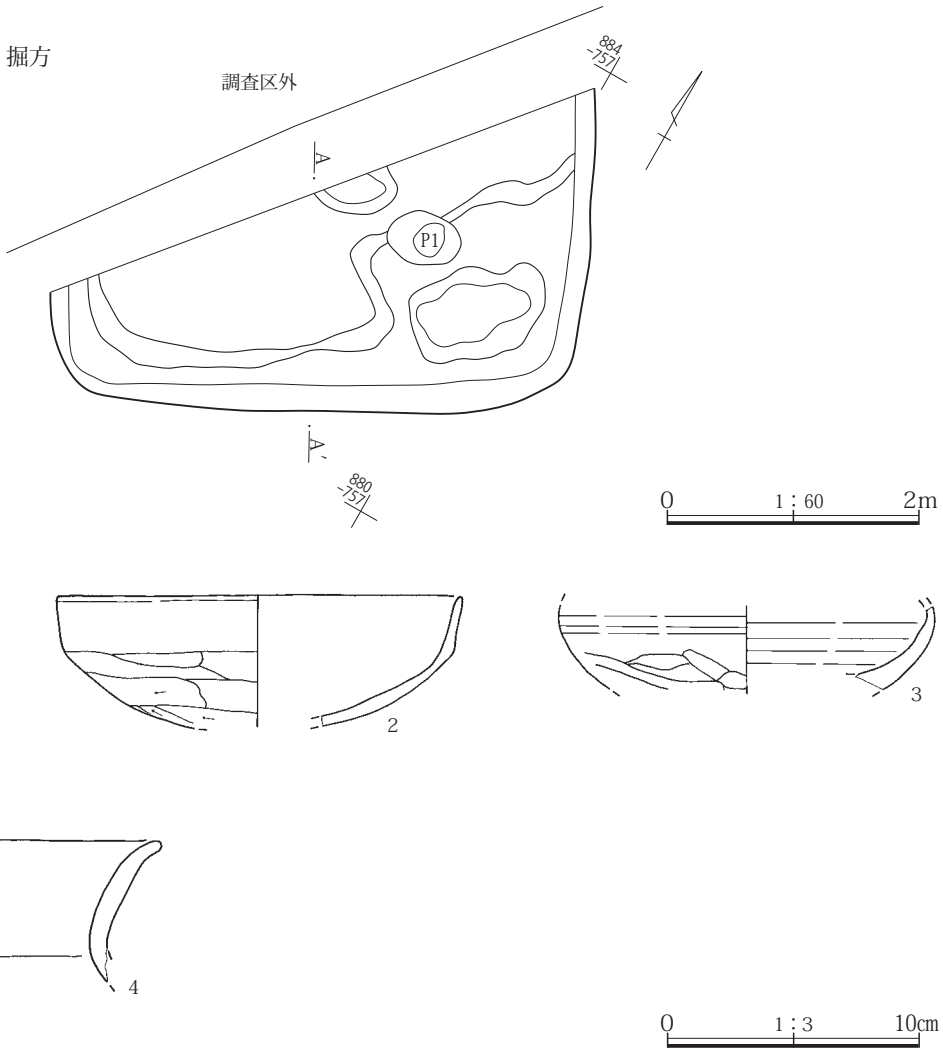
残存壁高　0.65m

方位　N－61°－E



302号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム粗塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR3/3　ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
５．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粗塊～粒を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



第254図　302号竪穴建物と出土遺物

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム塊～粒を含む黒色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム塊～粒を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　検出されなかった。ただし、大部分が調査区外であったことから、カマドはこの未調査部分に存在した可能性が高いと考えられる。

柱穴　検出されなかった。ただし、掘方調査で検出したＰ１が、主柱穴の１つである可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦で、全体的に硬化していた。

掘方　掘方は不整形に掘り窪められており、床面からの深さは概ね0.20～0.30mであった。ただし、壁際はやや浅く、床面からの深さは0.15m前後であった。Ｐ１は長軸0.58m、短軸0.41m、深さ0.50mで、形状は楕円形である。床面は、下位が非常に多量のAs-YP、ローム粗塊～粒を含む暗褐色土、上位がやや多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で、全体がほぼ均質に貼床されていた。

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　土師器杯(１)は、南壁際の床面から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片23点(95ｇ)、甕・壺類破片19点(240ｇ)、須恵器の甕・壺類破片２点(22ｇ)、石匙１点(36.7ｇ)、剝片２点(84.7ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から６世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

303号竪穴建物(第255～257図、PL.109・110・326・327)

位置　Ｘ＝40,882～40,886、Ｙ＝－80,751～－80,756（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸3.68m、短軸3.20m

面積　9.140㎡

残存壁高　0.35m

方位　Ｎ－70°－Ｅ

重複　307号竪穴建物と重複し、303号竪穴建物が新しい。

埋没土　微量のAs-C、ローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の中央やや南寄りに位置する。残存長は1.14m、燃焼部幅は0.21mで、壁外に0.92m燃焼部・煙道が伸びる。袖から側壁にかけては、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、カマド周辺には多数の礫や瓦片が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。このうち左右の側壁に立てられた礫は、原位置を保っていると考えられる。向かって左側の側壁の礫は、長さ0.30m、幅0.19m、厚さ0.14mである。一方、右側の側の礫は、長さ0.30m、幅0.22m、厚さ0.11mである。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.07mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。また、カマド前の床面には杯が置かれていた。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

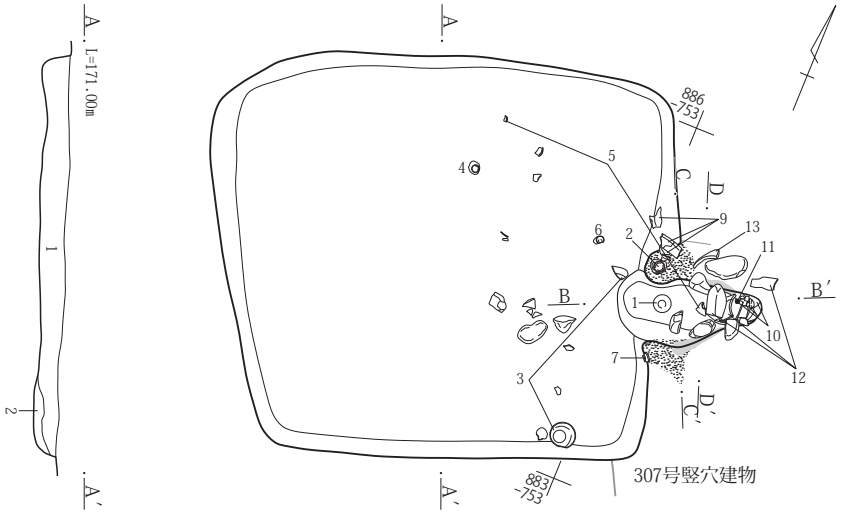
床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。ただし、全景写真を見ると、中央やや南西よりに少なくとも１基の床下土坑の存在が確認できる。

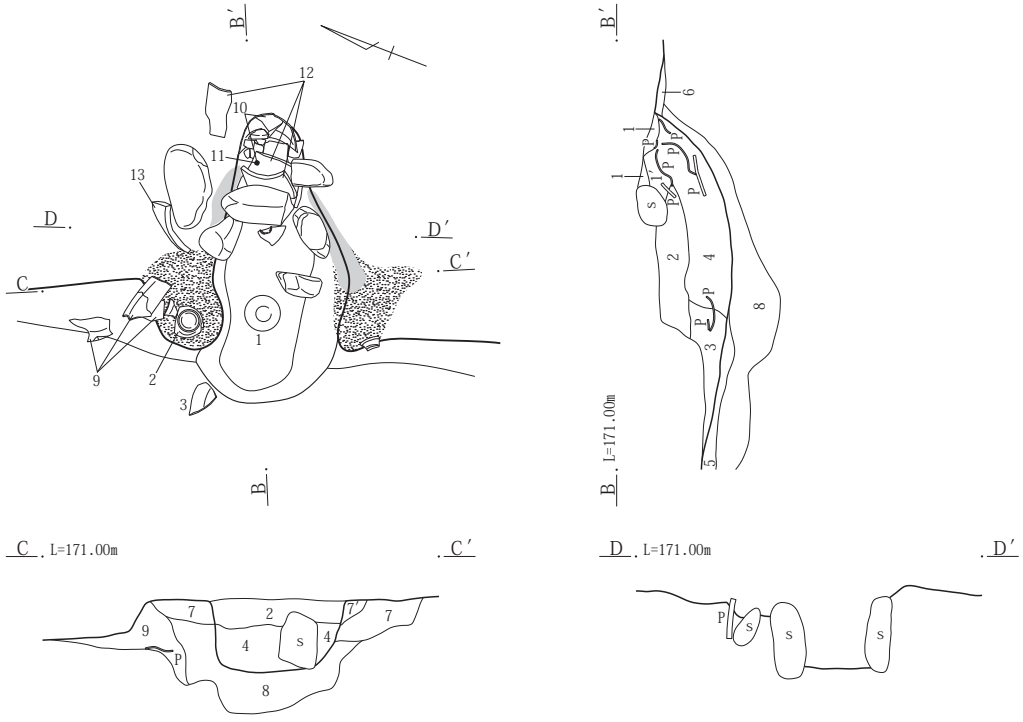
出土遺物　須恵器杯(１)はカマド内に正位で、須恵器椀(２)はカマド袖上に逆位で置かれていたものである。また、南壁際の床面からは須恵器大型椀(３)が出土している。土師器甕は少なくとも３個体(９～11)が確認されており、９がカマド脇から出土した以外は、いずれもカマド内から出土したものである。また、カマド内からは瓦(12・13)も出土しているが、これらはいずれもカマドの構築材として使用されたものであると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片44点(183ｇ)、甕・壺類破片217点(1,120ｇ)、須恵器の杯・椀類破片71点(630ｇ)、甕・壺類破片81点(1,731ｇ)、瓦片２点、礫片(3.9ｇ)、剝片１点(6.2ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



303号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

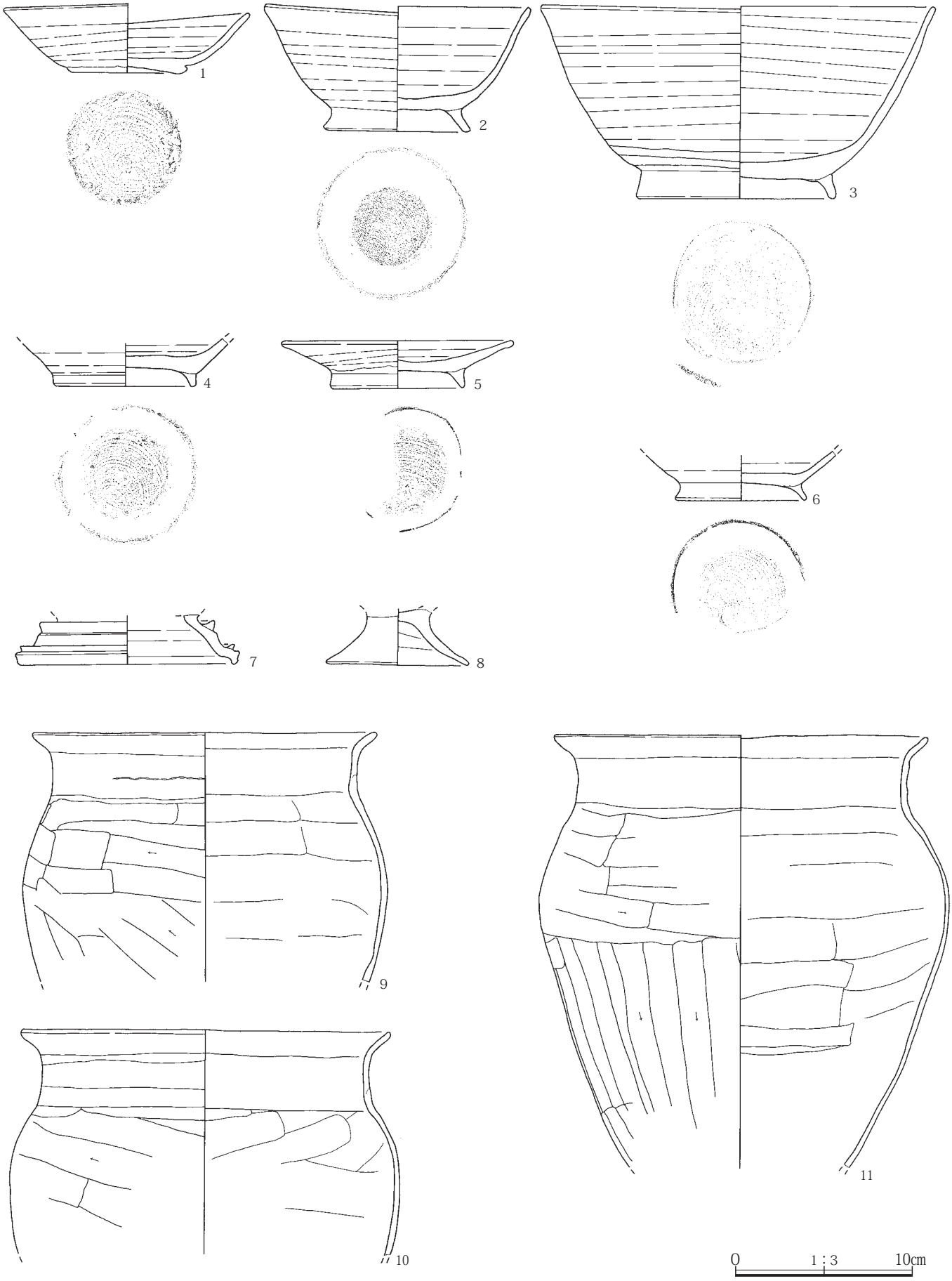
0　1：60　2m



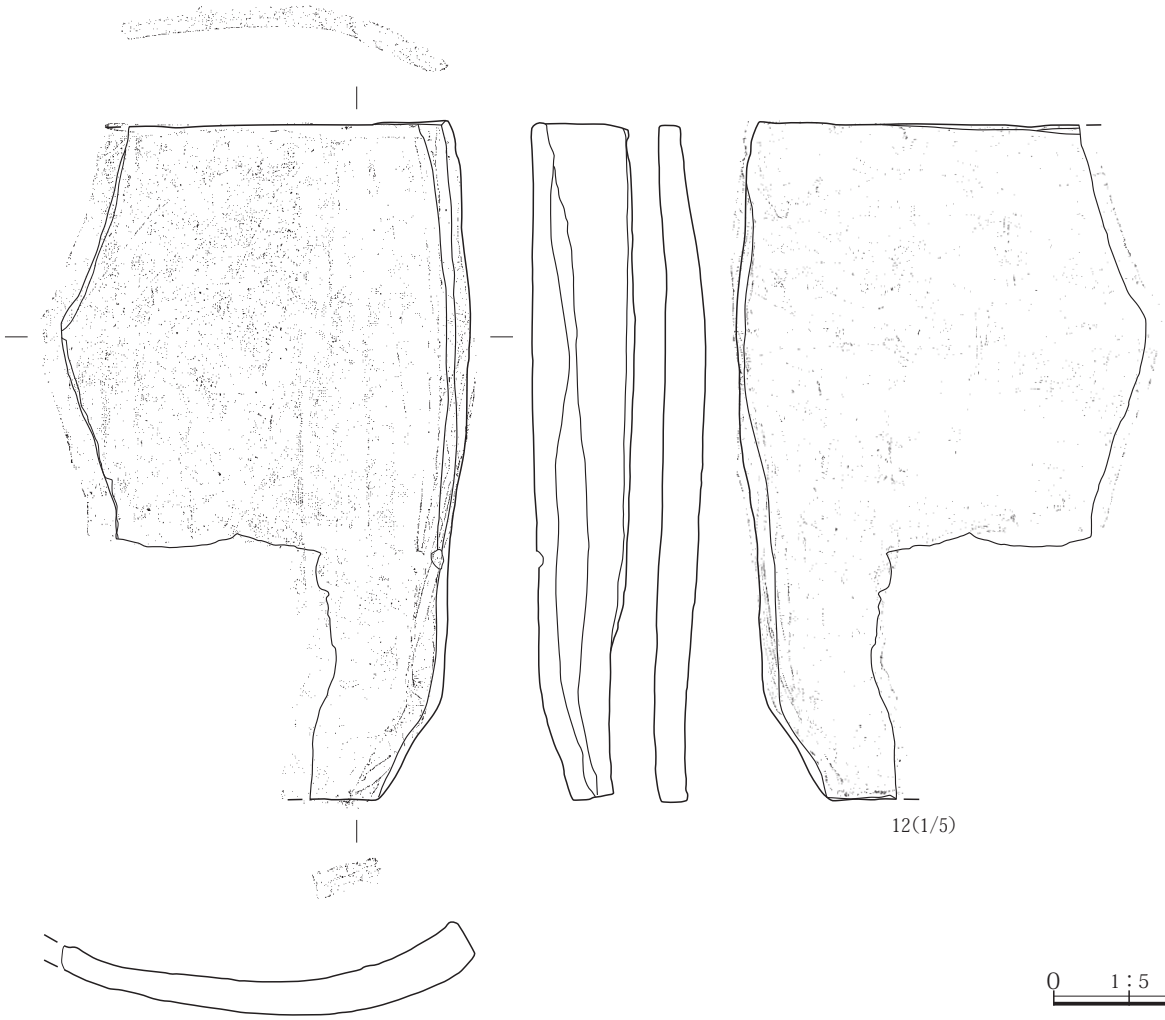
303号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
１．褐色土10YR4/6　焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
１′.赤褐色土５YR4/6　１層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　灰を多量含む。粘性、締まり弱い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
７′.赤褐色土５YR4/6　７層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９．褐色土10YR4/6　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

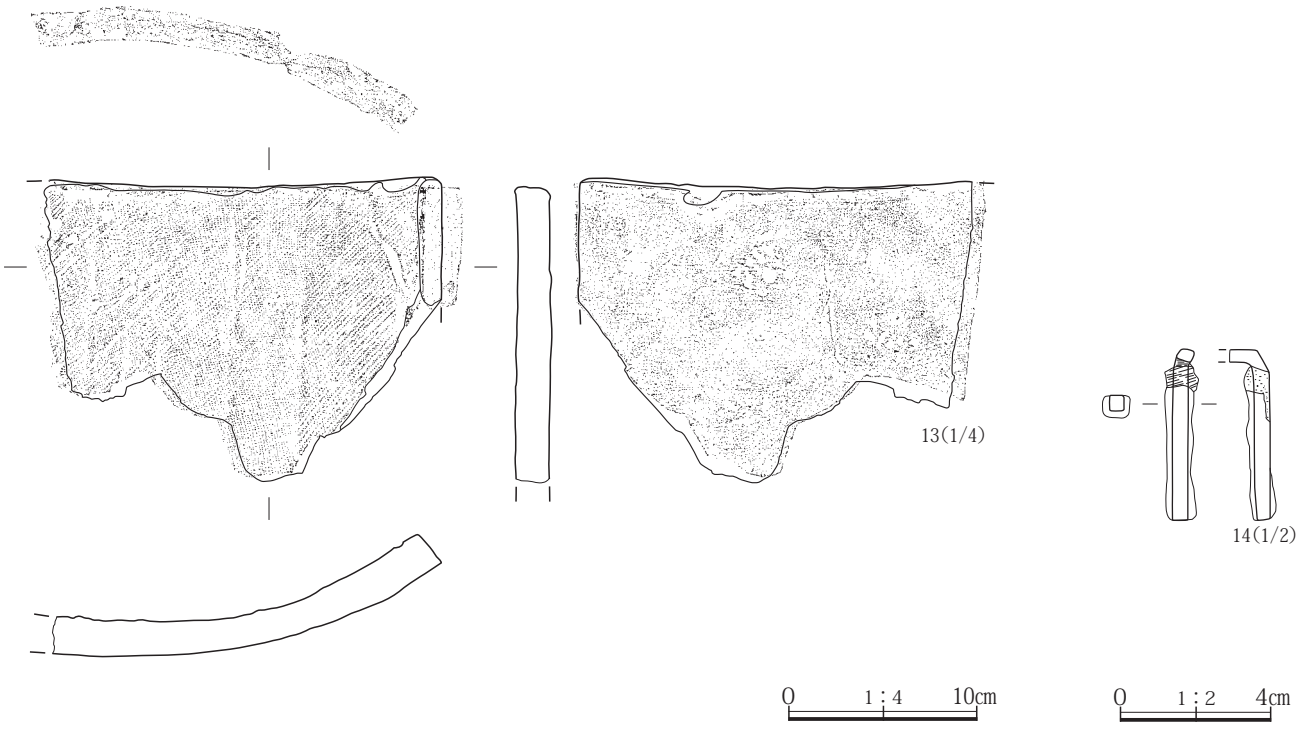
0　1：30　1m

第255図　303号竪穴建物・カマド



第256図　303号竪穴建物出土遺物（１）





第257図　303号竪穴建物出土遺物（２）

304号竪穴建物（第258～262図、PL.110・111・328・329）

位置　Ｘ＝40,885～40,889、Ｙ＝－80,746～－80,750（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸3.54m、短軸(3.28m)

面積　(5.952㎡)

残存壁高　0.76m

方位　Ｎ－78°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のAs-C、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム粒、焼土粒を含む黒褐色土、または微量のAs-C、少量のローム粒を含む黒色土で埋没していた。埋没土中にローム小塊～粒を含む下層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.07m、燃焼部幅は0.34mで、壁外に0.50m燃焼部が伸びる。袖から側壁・奥壁にかけては、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。また、崩落した天井も同様の粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかったが、カマド周辺には多数の礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。掘方調査では、向かって左側の袖の下部から袖石を据えた痕跡と考えられる浅い窪みを検出した。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。カマド内から逆位で出土した甕は、底部が破損していたが、カマドで使用されていたものであると考えられる。

柱穴　検出されなかった。

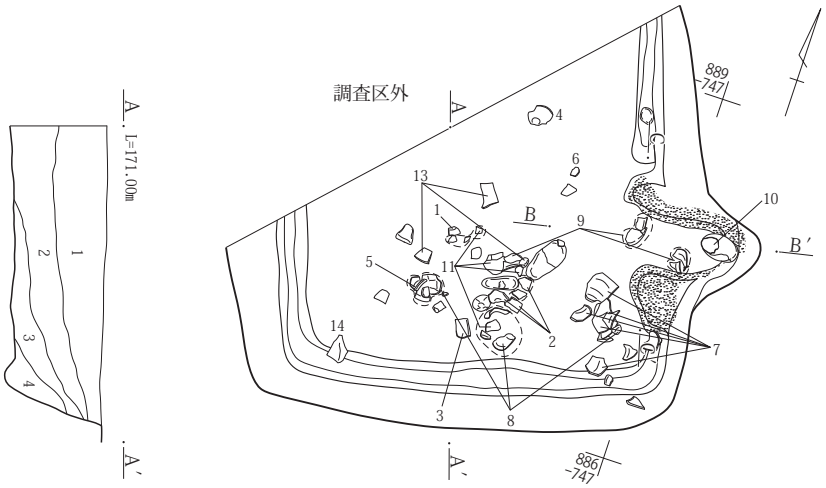
貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　調査範囲において幅0.20～0.29m、深さ0.03～0.09mの全周する壁際溝を検出した。微量のAs-C、少量のローム粒を含む黒色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

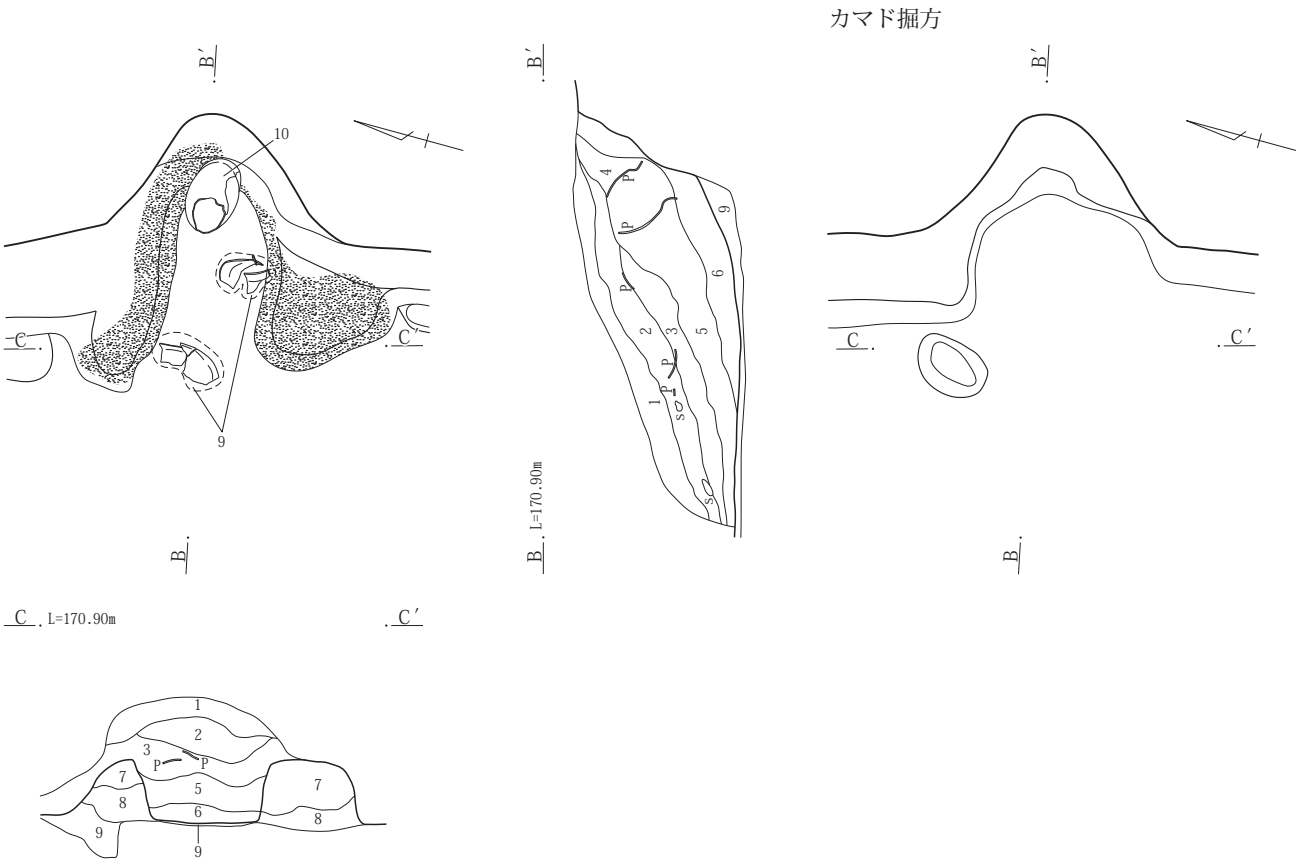


304号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒色土10YR2/1　As-Cを微量、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第258図　304号竪穴建物



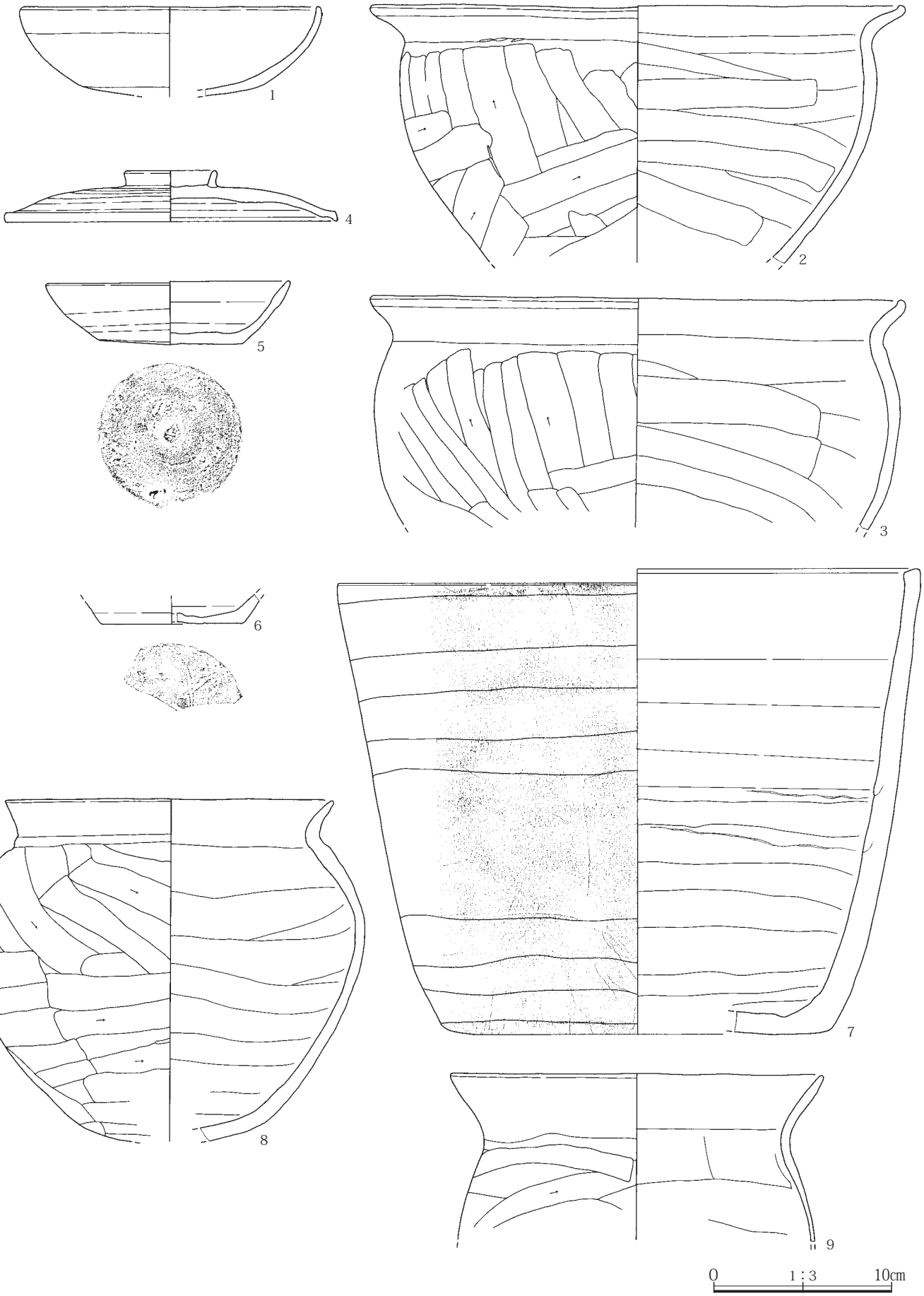
304号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊～小塊を非常に多量、暗褐色土小塊、焼土塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
４．褐色土10YR4/6　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊～小塊、焼土塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、焼土粒、灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
７．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊、焼土小塊を少量含む。粘性、締まり強い。
８．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒をやや多量、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

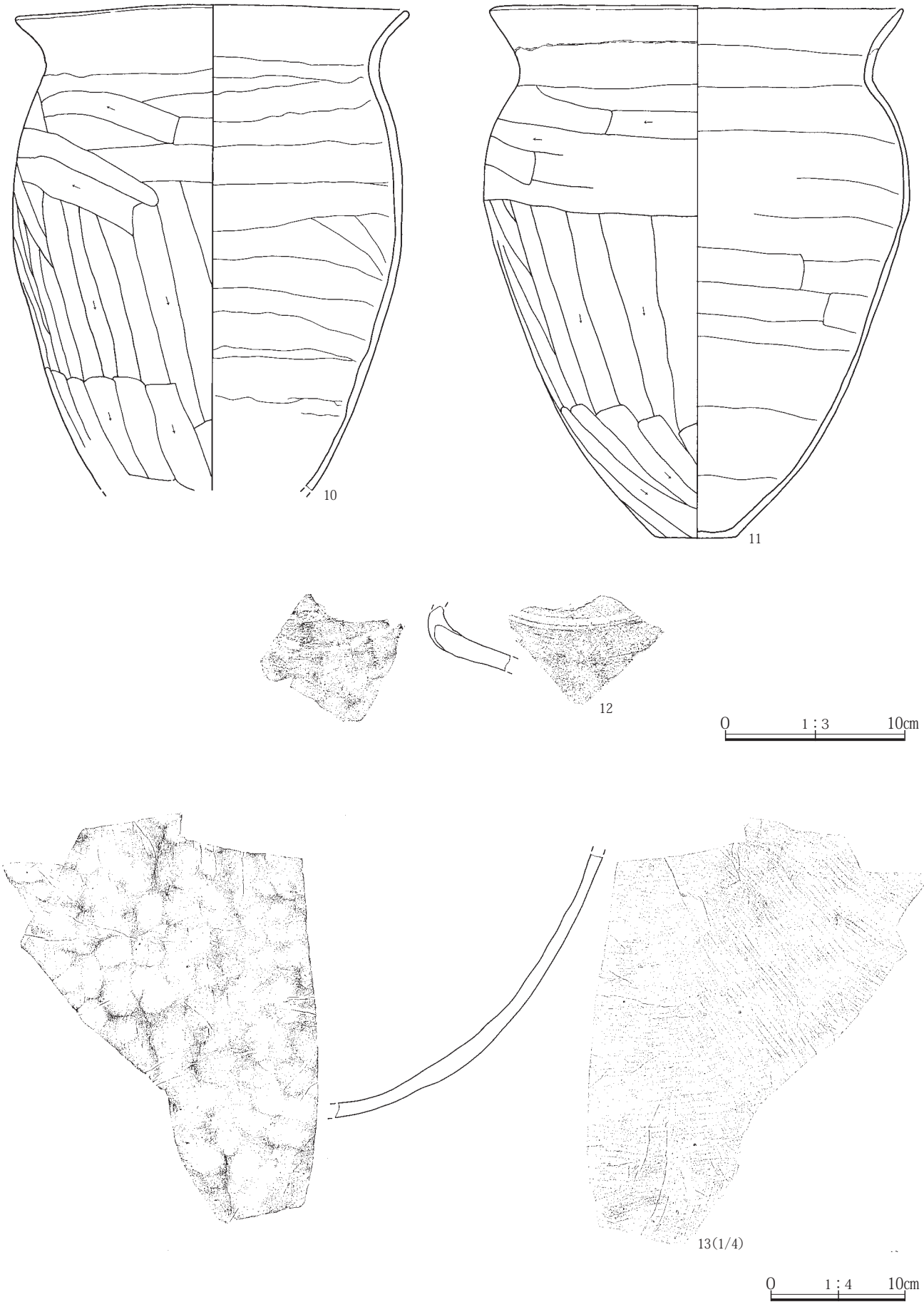
第259図　304号竪穴建物カマド

出土遺物　線刻のある須恵器杯(６)が出土したことが特筆される。南東隅からは須恵器鉢(７)が割れた状態で出土している。土師器甕のうち９・10はカマド内から、11は中央付近の床面から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片16点(104ｇ)、甕・壺類破片216点(2,230ｇ)、須恵器の杯・椀類破片17点(180ｇ)、甕・壺類破片24点(789ｇ)、瓦片１点、磨製石斧１点(31.3ｇ)、石製品１点(49.4ｇ)が出土している。このうち石製品(16)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(加曽利Ｅ３式)の口辺部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

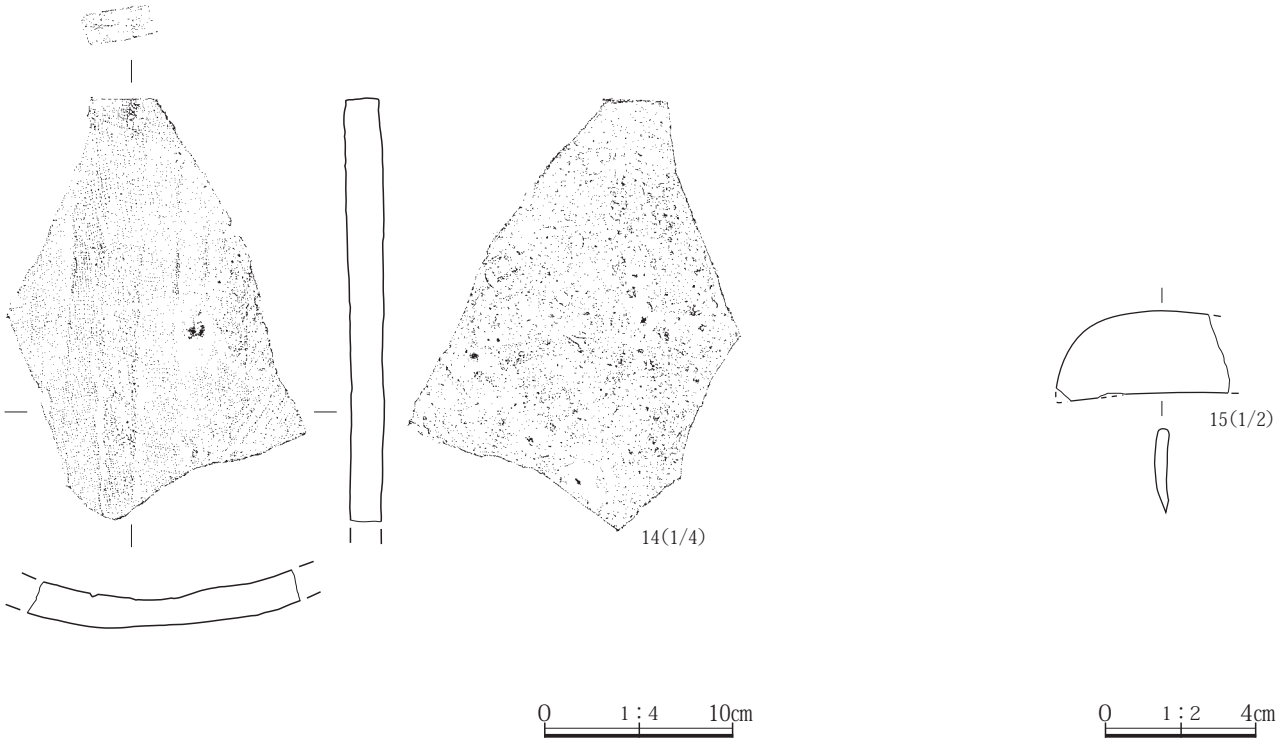
所見　出土遺物から８世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。



第260図　304号竪穴建物出土遺物（１）



第261図　304号竪穴建物出土遺物（２）



第262図　304号竪穴建物出土遺物（３）

305号竪穴建物（第263～265図、PL.112・329）

位置　Ｘ＝40,858～40,862、Ｙ＝－80,768～－80,772（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸4.14m、短軸3.45m

面積　12.364㎡

残存壁高　0.47m

方位　Ｎ－97°－Ｅ

重複　299号竪穴建物と重複し、305号竪穴建物が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、やや多量のローム小塊を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、またはごく微量のAs-C、ローム粒を含む黒色土で埋没していた。埋没土中にローム小塊～粒を含む下層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

カマド　東壁の南東隅に位置する。残存長は0.90m、燃焼部幅は0.32mで、壁外に0.87m燃焼部・煙道が伸びる。天井と側壁は、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。また、カマド横の壁面や壁上にも、この粘土が薄く貼られていた。この壁上には皿が置かれており、棚状施設として使用されていたと考えられる。棚状施設上面と床面の比高は、最大で0.48mである。本カマドは天井の大部分が残存していたことから、平面図は天井を残した状態と天井を取り外した状態の２つに分けて提示した。袖石は検出されなかったが、カマド周辺には多数の礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。また、煙突部分からは円筒埴輪片が出土したが、これは煙突の壁を補強する目的で置かれたものであると考えられる。掘方調査では、奥壁から左右に並べられた礫が出土したが、これは奥壁を補強する目的で置かれたものであると考えられる。向かって左側の礫は、長さ0.24m、幅0.23m、厚さ0.14mである。一方、右側の礫は、長さ0.29m、幅0.28m、厚さ0.10mである。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。しかし、全景写真を見ると南西隅付近の床面が黒く見えることから、この南西隅に存在した可能性が考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦であるが、北から南に向かって緩

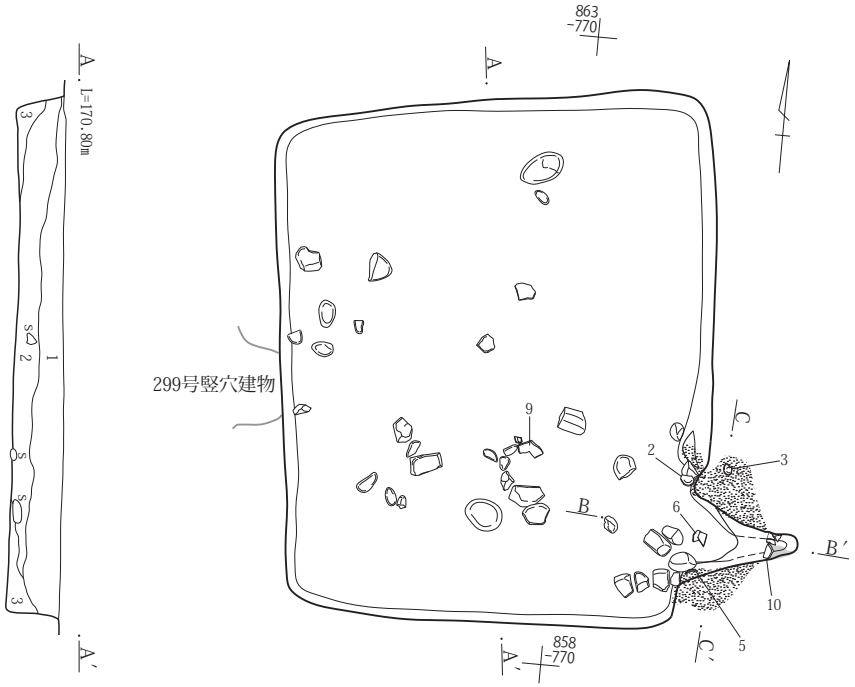
やかに下っており、北壁際と南壁際の高低差は最大で0.09mであった。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　須恵器杯(３)は、棚状施設に正位で置かれていたものである。羽釜は少なくとも３個体(６～８)が確認されており、そのうち６・８はカマド内から出土したものである。円筒埴輪(10)はカマドの煙突部分から出土したが、これは煙突の壁を補強する目的で置かれたものであると推測できる。なお､ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片７点(33ｇ)、甕・壺類破片51点(480ｇ)、須恵器の杯・椀類破片24点(218ｇ)、甕・壺類破片12点(480ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ａ式)の口縁部破片は、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から10世紀第４四半期の棚状施設をもつ竪穴建物であると考えられる。

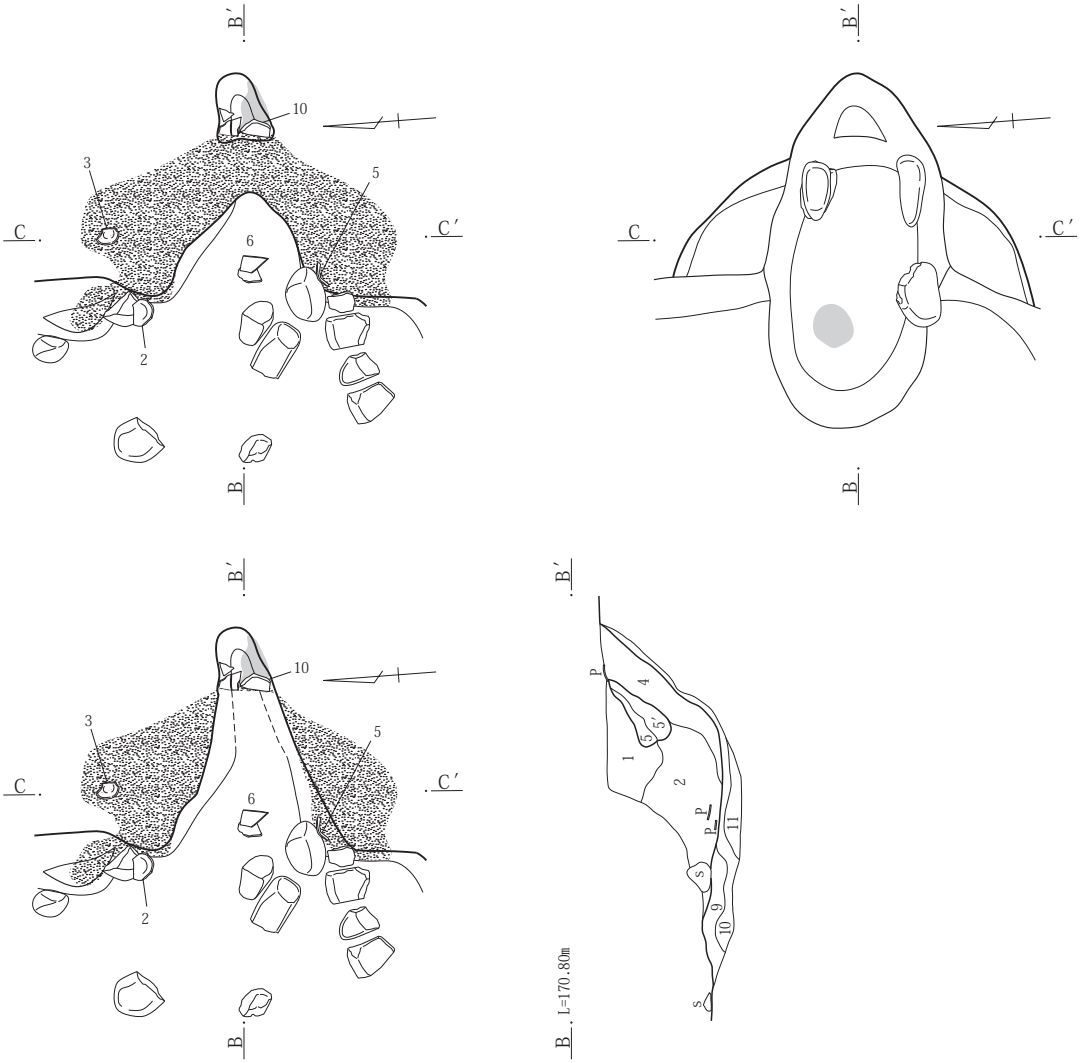


305号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第263図　305号竪穴建物

カマド掘方

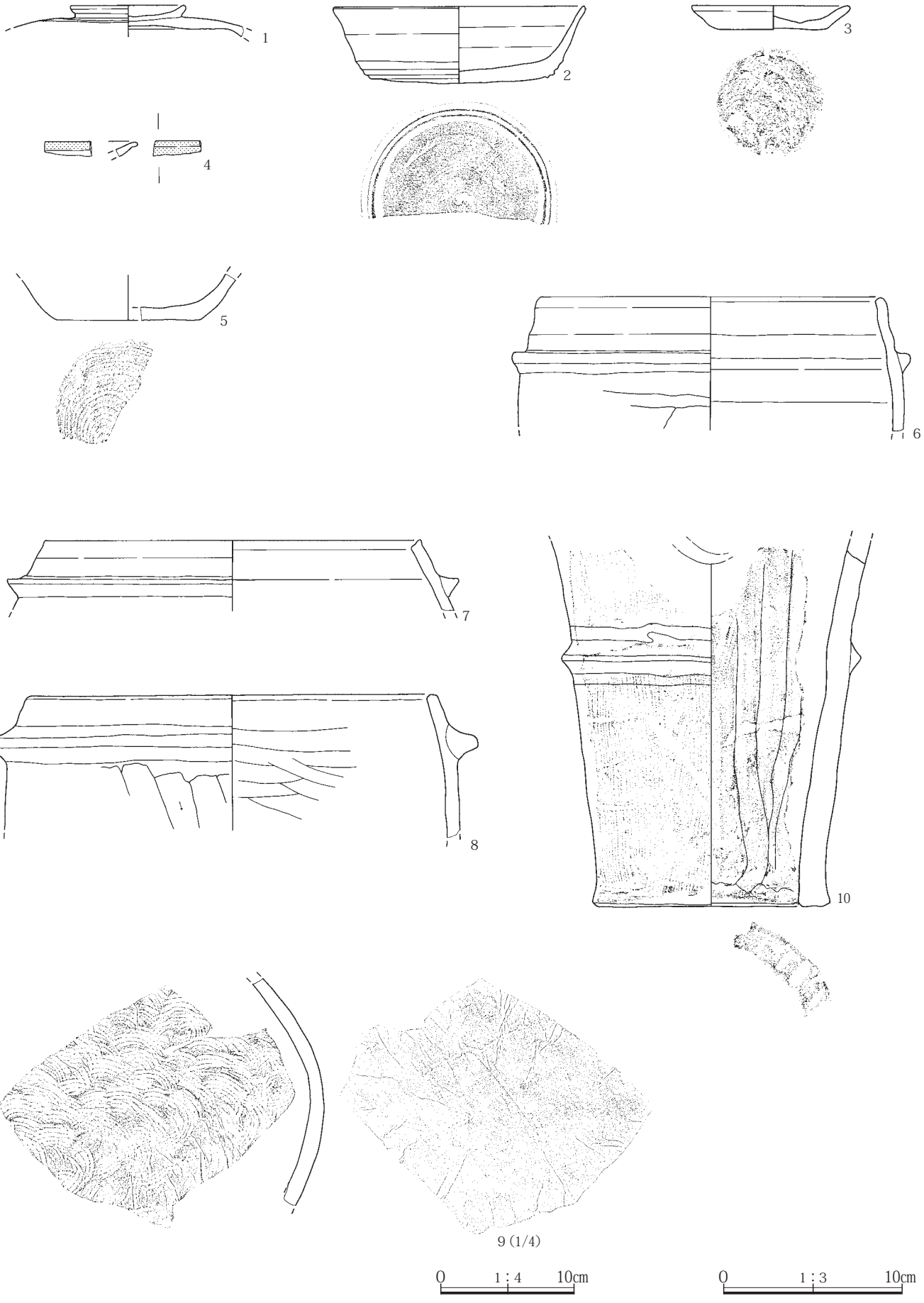


305号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量、焼土粒、灰を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
5．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
5′.暗赤褐色土5YR3/6　５層が焼土化したもの。粘性やや強い。締まり強い。
6．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
6′.暗赤褐色土5YR3/6　６層が焼土化したもの。粘性やや強い。締まり強い。
7．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
8．黒褐色土10YR2/3　焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
9．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒、焼土粗塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まり強い。
10．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
11．暗赤褐色土5YR3/6　焼土塊を主体とし、ローム小塊～粒、黒褐色土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

0　1：30　1m

第264図　305号竪穴建物カマド



第265図　305号竪穴建物出土遺物

306号竪穴建物（第266・267図、PL.113・329・330）

位置　Ｘ＝40,878～40,880、Ｙ＝－80,760～－80,761（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸・短軸測定不能

面積　（0.477㎡）

残存壁高　0.11m

方位　Ｎ－42°－Ｅ

重複　301号竪穴建物と重複し、306号竪穴建物が古い。ただし、出土遺物から想定される301号竪穴建物との新旧関係は、これとは逆である。

埋没土　微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　調査範囲が限定的であることから、位置は不明である。残存長は1.13m、燃焼部幅は0.44mで、壁外に0.50m燃焼部が伸びる。カマド周辺にはいくつかの礫や瓦片が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。このうち向かって左側の側壁に立てられた礫は、原位置を保っている可能性が高い。また、向かって右側の礫は袖石と思われ、倒されていたものの、ほぼ原位置を保っていると考えられる。左の側壁の礫は、長さ0.30m、幅0.15m（厚さは不明）である。一方、右側の袖石と思われる礫は、長さ0.35m、幅0.19m（厚さは不明）である。また、支脚は抜き取られずに残存しており、幅0.09m、厚さ0.08m（長さは不明だが、断面写真から0.20m程度と推定できる）である。燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.06mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

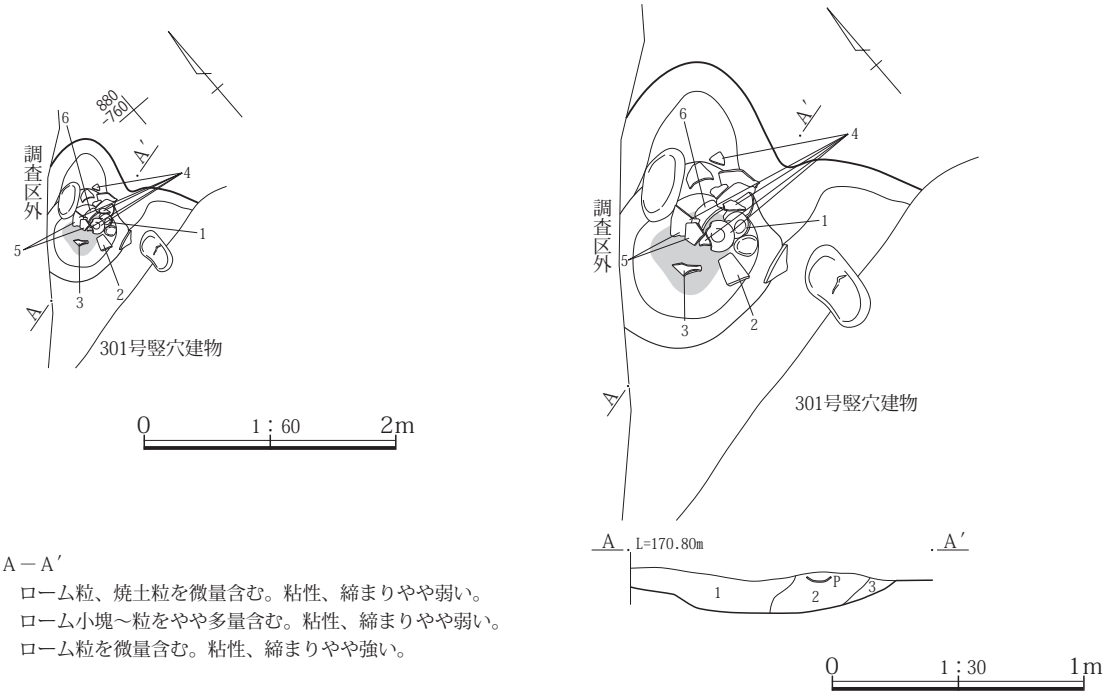
床面　調査範囲がカマド部分に限られていたことから詳細は不明である。

掘方　調査範囲がカマド部分に限られていたことから、詳細は不明である。

床下土坑　検出されなかった。

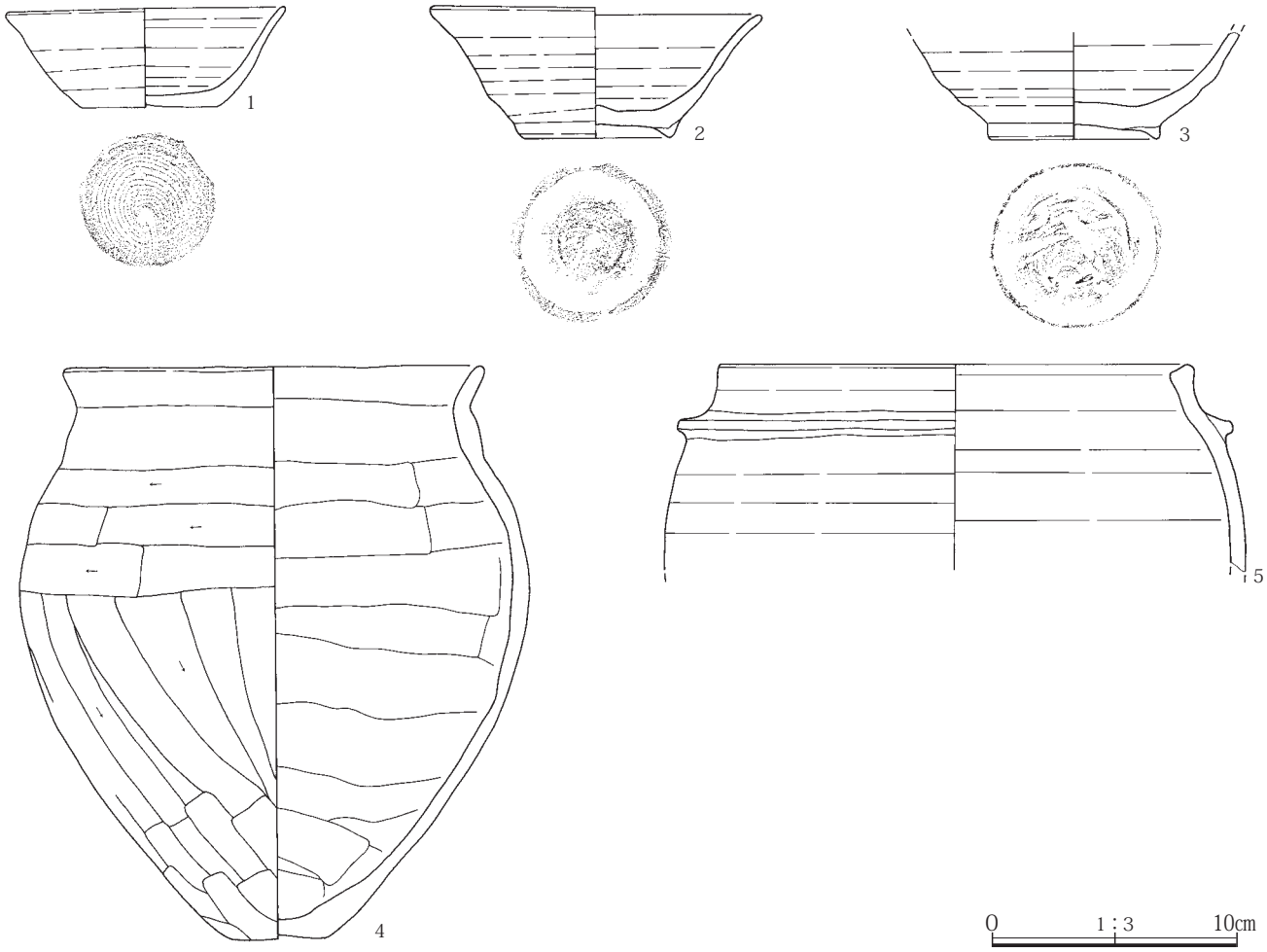
出土遺物　須恵器杯（１）は、カマド内の支脚横に正位で置かれていたものである。それ以外の遺物も、すべてカマド内から出土したものである。また、カマド内からは６をはじめとする瓦も出土したが、これらはいずれもカマドの構築材として使用されていたものであると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片２点（11ｇ）、甕・壺類破片２点（46ｇ）、瓦片４点が出土している。

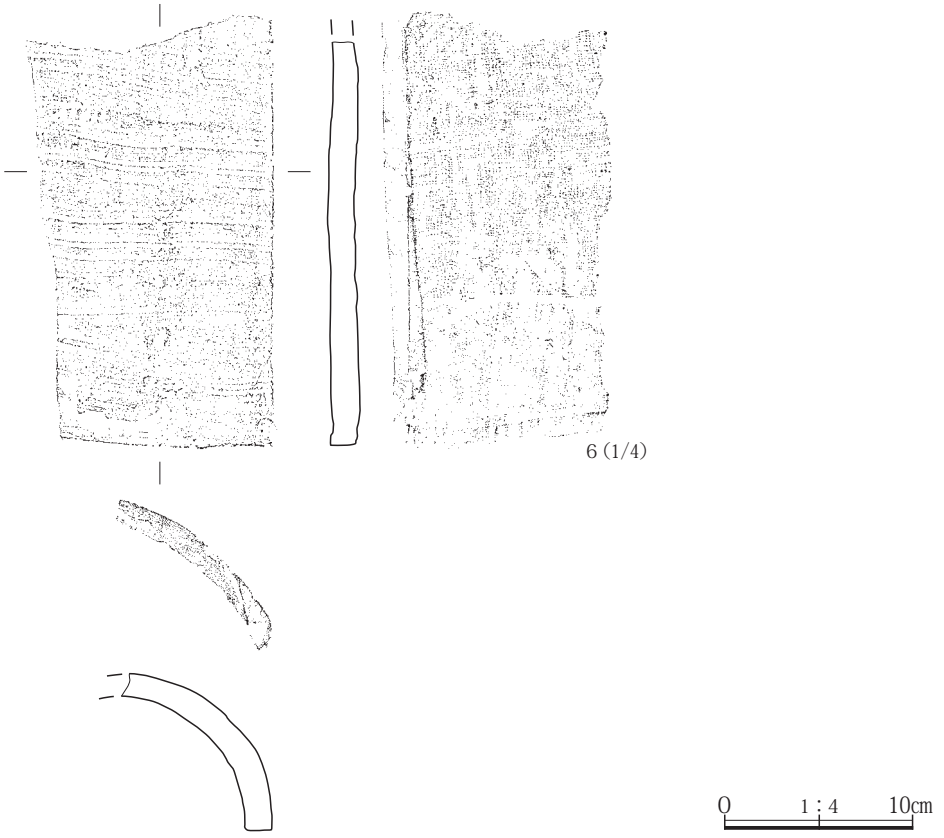
所見　出土遺物から10世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。



306号竪穴建物カマドＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。

第266図　306号竪穴建物・カマド





第267図　306号竪穴建物出土遺物

307号竪穴建物（第268図、PL.113）

位置　Ｘ＝40,882～40,885、Ｙ＝－80,750～－80,752（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸2.27m、短軸2.21m

面積　（3.870㎡）

残存壁高　0.08m

方位　Ｎ－70°－Ｅ

重複　303号竪穴建物と重複し、307号竪穴建物が古い。

埋没土　少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁のほぼ中央に位置する。残存長は0.30m、燃焼部幅は0.20mで、壁外に0.16m燃焼部が伸びる。残存状況はあまり良好ではなく、カマドの形状はローム塊や焼土塊の散布状況によって捉えた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。平面図には示されていないが、燃焼部からカマド前の床面はやや窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.07mであった。その要因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

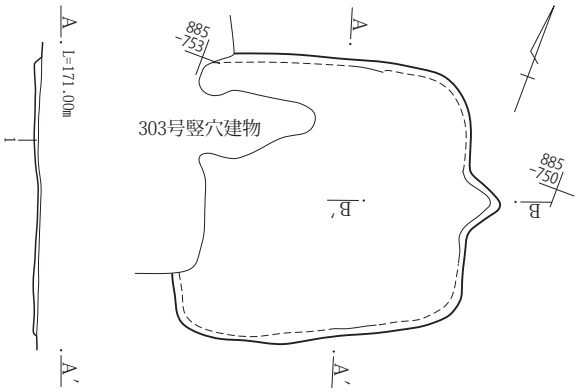
床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　床面を掘り下げたが、掘方は確認できなかった。

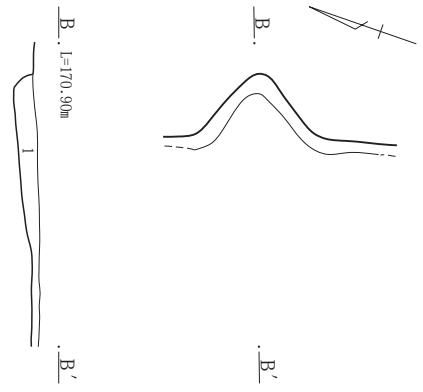
床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　螺旋状暗文のある土師器杯（１）が出土したことが特筆される。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点（５ｇ）、甕・壺類破片２点（12ｇ）が出土している。

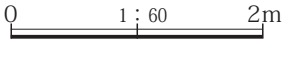
所見　出土遺物から８世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

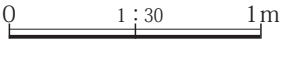


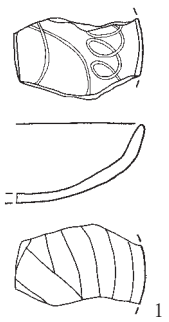
307号竪穴建物Ａ－Ａ′
１.黒褐色土10YR3/2　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。

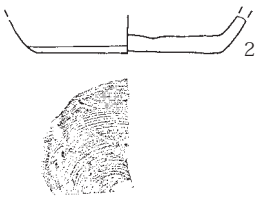


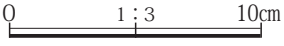
307号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒、焼土塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。











第268図　307号竪穴建物・カマドと出土遺物

309号竪穴建物（第269・270図、PL.113・114・330）

位置　Ｘ＝40,830～40,834、Ｙ＝－80,784～－80,790（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(4.58m)、短軸(3.77m)

面積　(9.060㎡)

残存壁高　0.76m

方位　Ｎ－73°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は多量のAs-C、少量のローム塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のローム粗塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～小塊を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　本竪穴建物の南半は調査区外であったため推測ではあるが、東壁の南東隅寄りに位置すると考えられる。残存長は0.94m、燃焼部幅は0.32mで、壁外に0.58m燃焼部・煙道が伸びる。袖から側壁にかけては、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.23m、幅0.19m、厚さ0.11mである。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

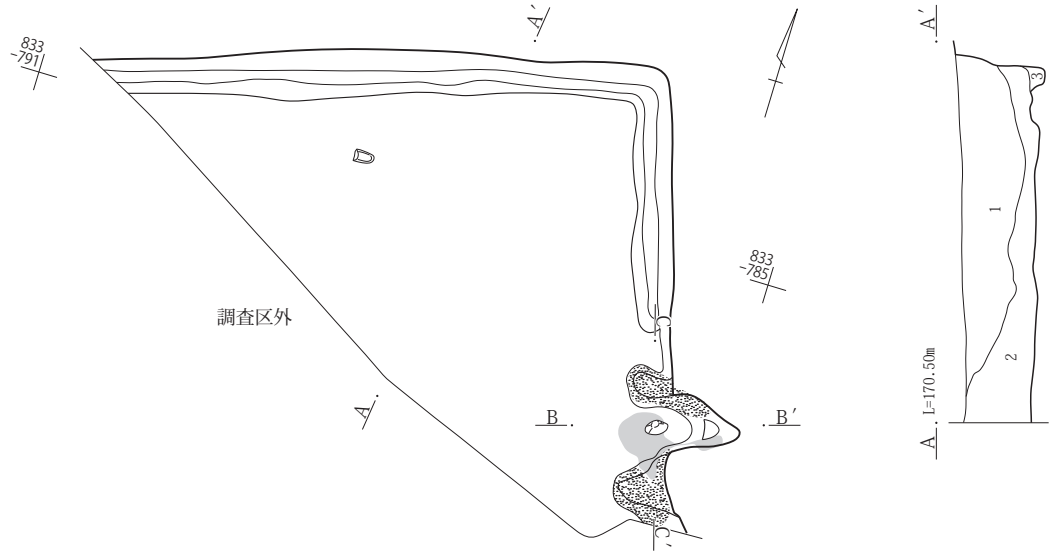
壁際溝　調査範囲において幅0.25～0.40m、深さ0.06～0.17mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面にはわずかな凹凸があり、最大で0.05mの高低差があった。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　畿内からの搬入品である螺旋状暗文のある土師器杯(１)が出土したことが特筆される。この土師器杯を含め、本竪穴建物の遺物はすべて埋没土中から出土し

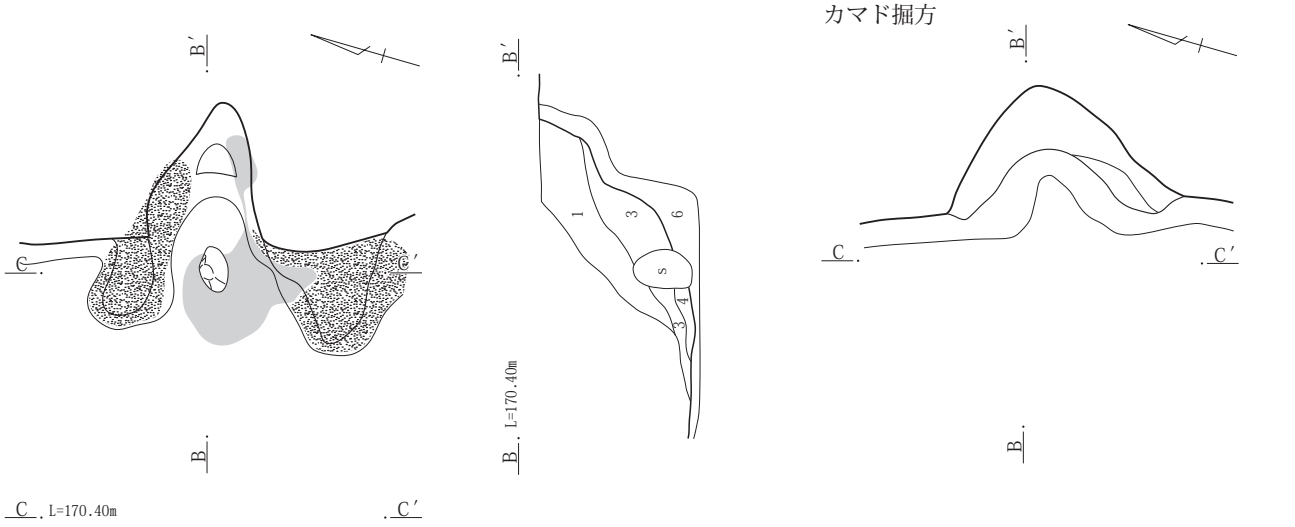


309号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを多量、ローム塊～小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量、ローム粗塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第269図　309号竪穴建物

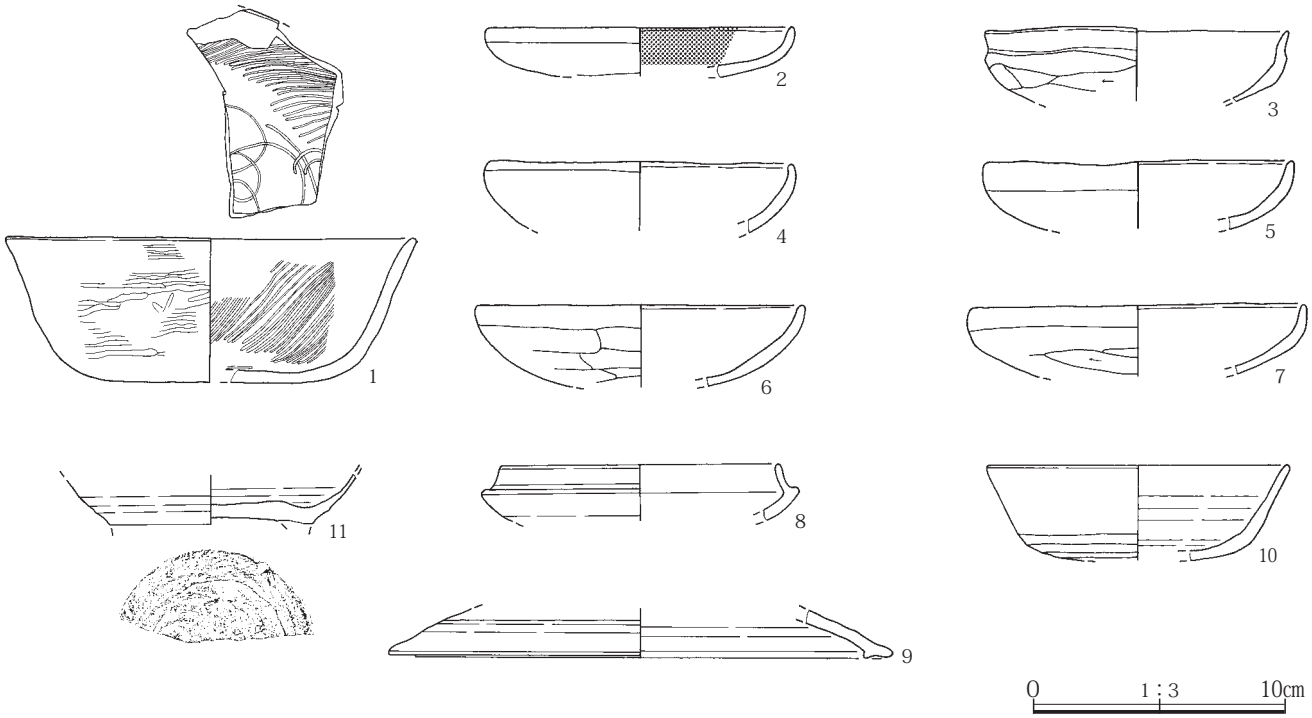
カマド掘方



309号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．暗褐色土10YR3/4　ローム粗塊～小塊を非常に多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、焼土小塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。
３．褐色土7.5YR4/4　ローム粒、焼土塊～小塊、灰を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR3/1　ローム粒を微量、焼土粒を少量、灰を非常に多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
５．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
５′.明赤褐色土5YR5/8　６層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まりやや強い。
６．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
７．黒褐色土10YR3/2　As-YP、ローム塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

第270図　309号竪穴建物カマドと出土遺物

たものである。須恵器椀(11)は混入である可能性が高い。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片50点(320ｇ)、甕･壺類破片66点(410ｇ)、須恵器の杯･椀類破片16点(154ｇ)、甕・壺類破片６点(139ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から８世紀第１四半期の竪穴建物であると考えられる。

310号竪穴建物(第271図、PL.114)

位置　Ｘ＝40,864～40,868、Ｙ＝－80,771～－80,773（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸3.30m、短軸(2.65m)

面積　(7.531㎡)

残存壁高　0.41m

方位　Ｎ－６°－Ｗ

重複　40号溝、553号土坑と重複し、310号竪穴建物が新しい。

埋没土　少量のAs-C、微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　検出されなかった。しかし､全景写真を見ると、東壁の南半が何らかの事情により破壊されており、ここにカマドが存在した可能性が考えられる。また、周辺には礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部である可能性が考えられる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

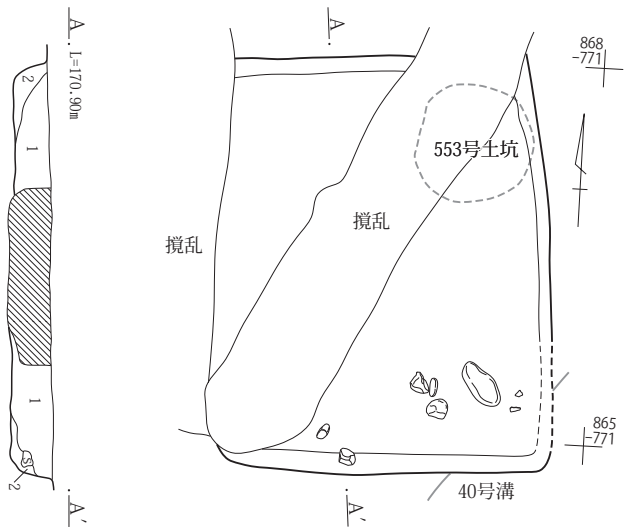
壁際溝　検出されなかった。

床面　撹乱により破壊された部分を除き、床面はほぼ平坦である。

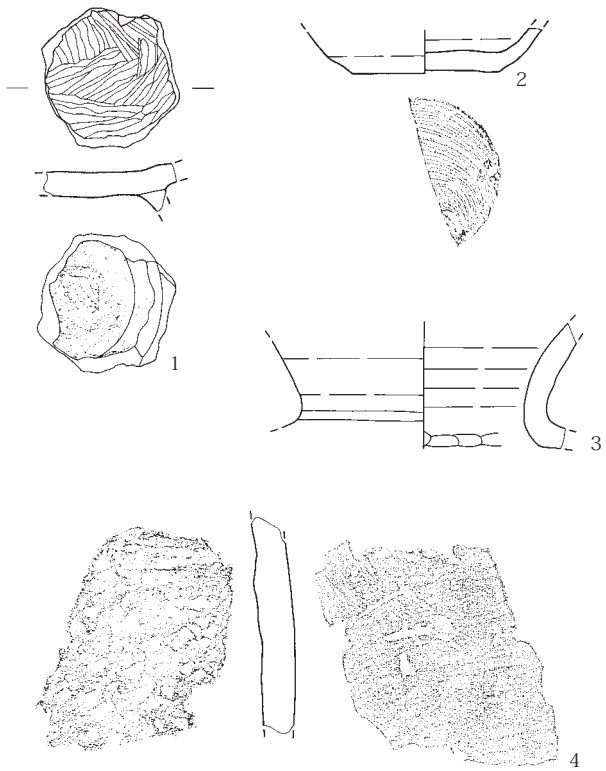
掘方　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　本竪穴建物の遺物は、すべて埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片18点(95ｇ)、甕・壺類破片105点(390ｇ)、須恵器の杯・椀類破片39点(244ｇ)、甕･壺類破片８点(181ｇ)、瓦片１点、剝片１点(2.8



310号竪穴建物Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。



0　1：60　2m

0　1：3　10cm

第271図　310号竪穴建物と出土遺物

ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ｂ式)の胴部破片は、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から10世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

311号竪穴建物(第272図、PL.114・330)

位置　Ｘ＝40,868～40,871、Ｙ＝－80,770～－80,773(Ｃ・Ｄ区)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(3.51m)、短軸(1.33m)

面積　(2.309㎡)

残存壁高　0.17m

方位　Ｎ－59°－Ｅ

重複　なし

埋没土　微量のAs-C、焼土粒、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　調査範囲からは検出されなかったが、大部分が調査区外であったことから、カマドはこの未調査部分に存在した可能性が高いと考えられる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

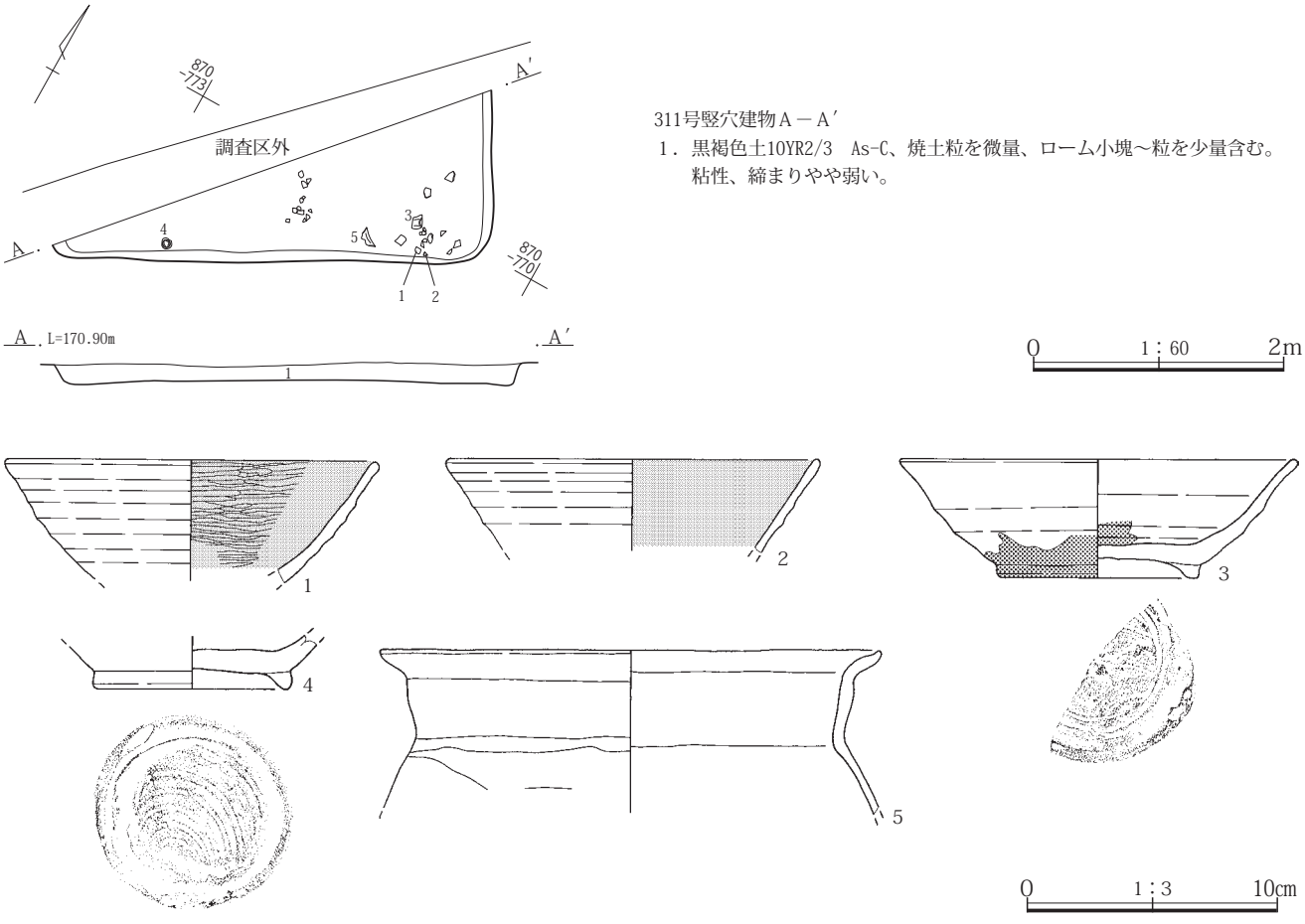
床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　本竪穴建物の遺物は、すべて南東壁付近の床面から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片４点(21ｇ)、甕・壺類破片112点(370ｇ)、須恵器の杯･椀類破片12点(55ｇ)、甕･壺類破片８点(96ｇ)、瓦片１点、剝片２点(17.0ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



第272図　311号竪穴建物と出土遺物

313号竪穴建物（第273～275図、PL.114～116・330・331）

位置　X＝40,888～40,893、Y＝－80,738～－80,744（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸4.75m、短軸4.39m

面積　17.109㎡

残存壁高　0.59m

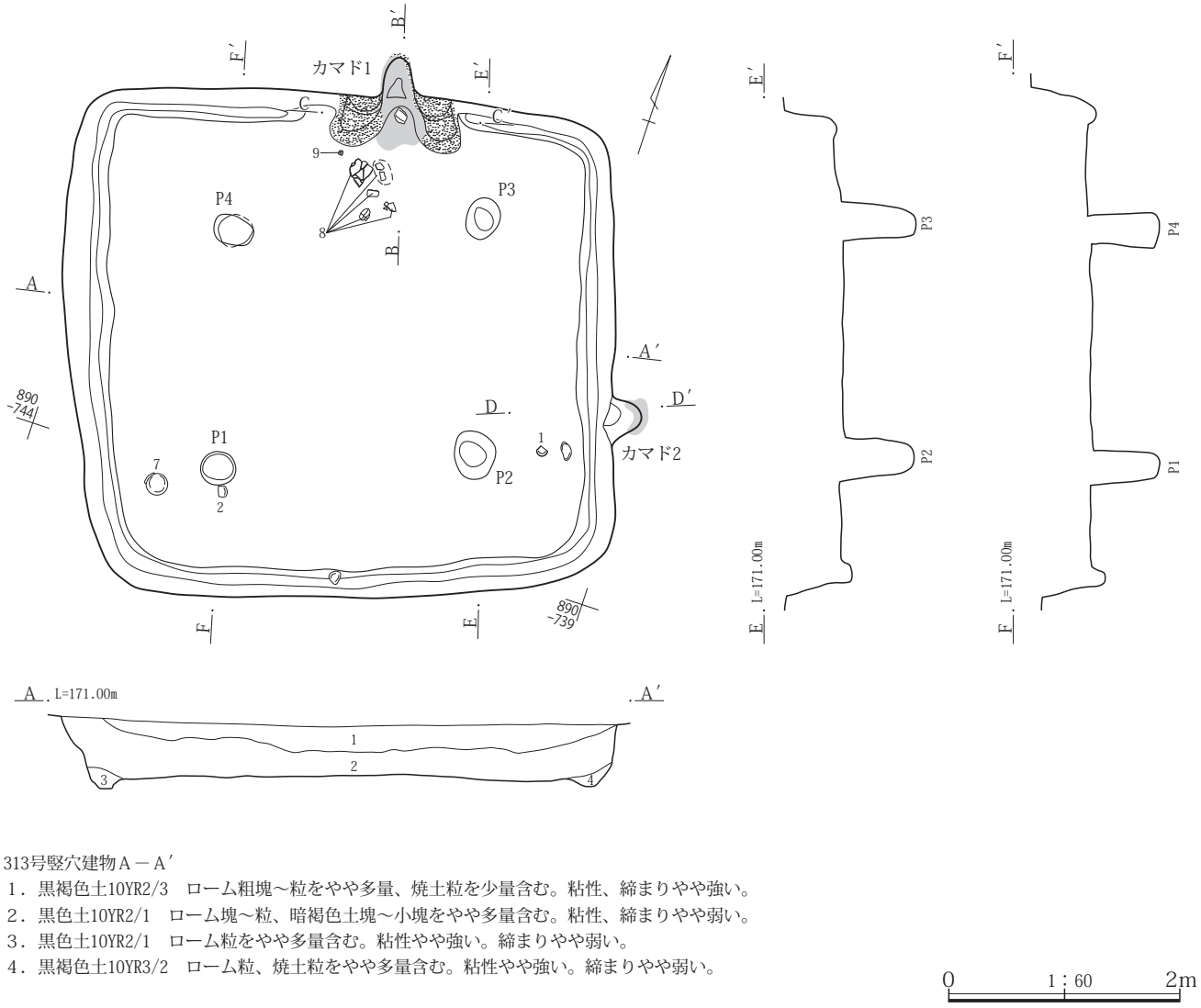
方位　N－17°－W（カマド１）、N－72°－E（カマド２）

重複　なし

埋没土　上層はやや多量のローム粗塊～粒、少量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム塊～粒、暗褐色土塊～小塊を含む黒色土で埋没していた。埋没土中にやや多量のローム粗塊～粒を含むことから、人為的な埋没と考えられる。

カマド１　北壁の中央やや東寄りに位置する。残存長は0.80m、燃焼部幅は0.25mで、壁外に0.34m燃焼部が伸びる。両袖と側壁・奥壁の一部は、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。両袖は比較的よく残存していたが、袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

カマド２　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は0.30m、壁外に0.25m燃焼部・煙道が伸びる（燃焼部幅は不明）。カマドの主体部は残存しておらず、主体部の下に壁際溝が掘られていたことや、また、土層断面の観察などから、カマド２は古い段階のカマドで、カマド１が作られたあと破壊され埋められた可能性が考えられる。その場合、D－D′の１層と３層の間が、最終的な竪穴建



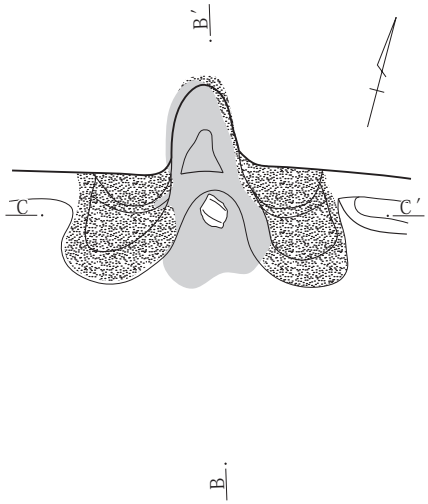
313号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒色土10YR2/1　ローム塊～粒、暗褐色土塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒色土10YR2/1　ローム粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR3/2　ローム粒、焼土粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

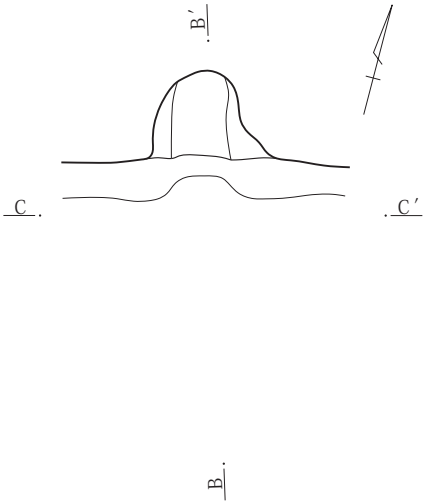
0　1：60　2m

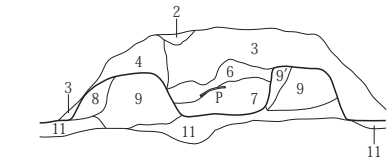
第273図　313号竪穴建物

カマド１



カマド１掘方

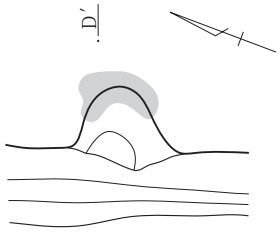




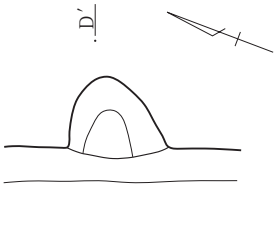
313号竪穴建物カマド１ Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

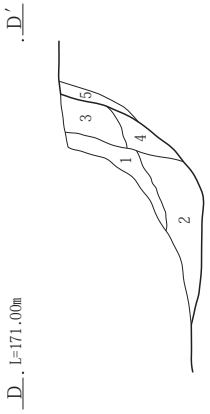
１．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒を多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒、焼土塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．褐色土7.5YR4/3　ローム塊～粒、焼土塊～粒を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
６．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とする。下面が赤褐色(5YR4/8)に焼土化している。粘性、締まりやや強い。
７．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒、灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まり弱い。
８．黒褐色土10YR2/2　ローム塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９．黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
９′.赤褐色土5YR4/8　９層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まり強い。
10. 黒褐色土10YR3/2　ローム塊～小塊を多量､焼土小塊～粗粒を少量含む。粘性､締まりやや強い。
11. 黒褐色土10YR3/2　ローム小塊をやや多量、焼土小塊、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。

カマド２



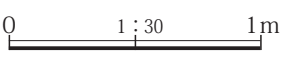
カマド２掘方



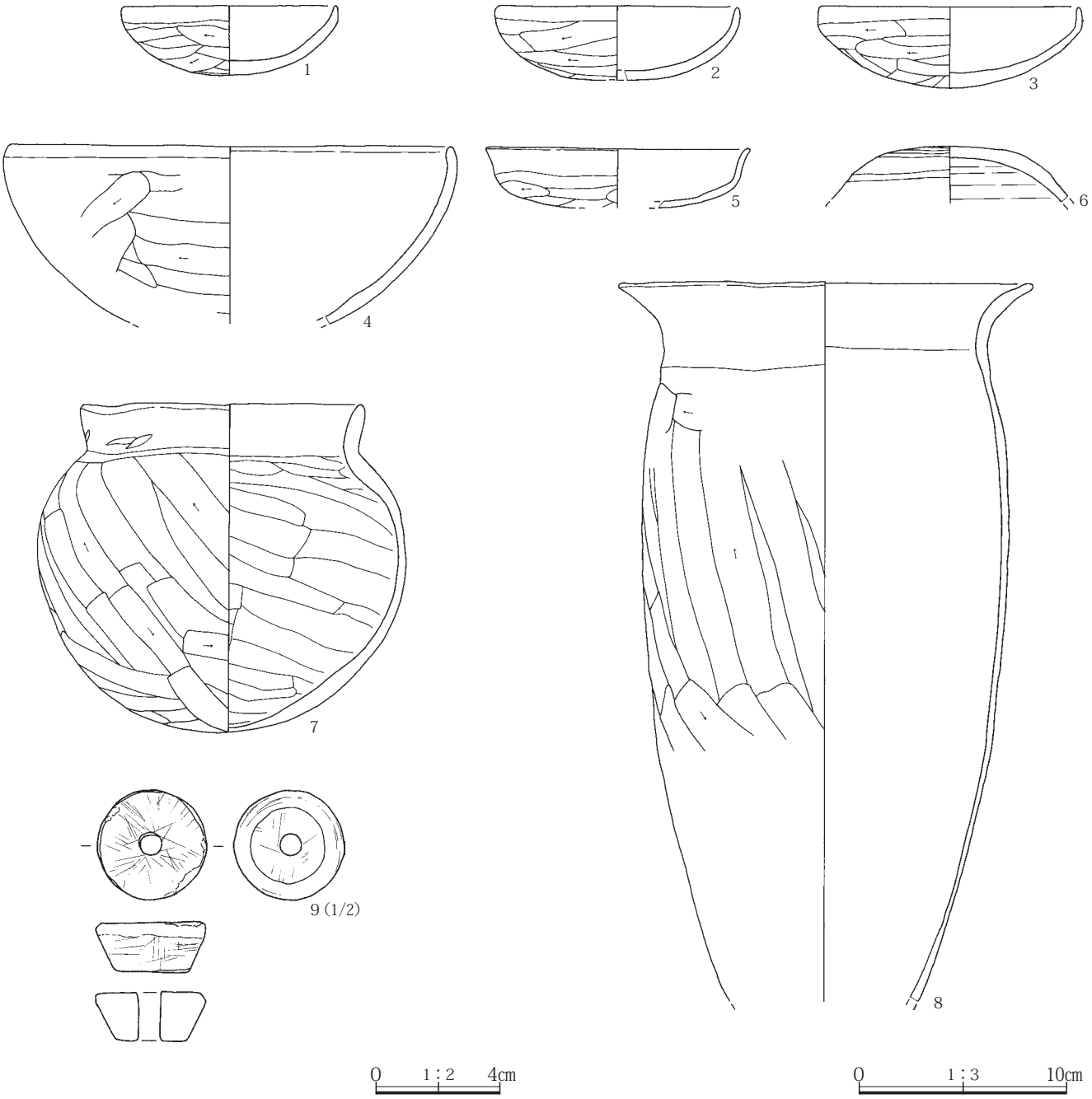


313号竪穴建物カマド２ Ｄ－Ｄ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量、焼土塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
５．明赤褐色土5YR5/8　焼土塊を主体とし、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。



第274図　313号竪穴建物カマド１・２



第275図　313号竪穴建物出土遺物

物の壁面であると判断できる。

柱穴　床面調査で検出した４基のピットが、主柱穴であると考えられる。それぞれの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.28×0.21×0.62m、Ｐ２が0.41×0.35×0.66m、Ｐ３が0.35×0.29×0.68m、Ｐ４が0.35×0.24×0.64m、形状はいずれも円形に近い楕円形である。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　幅0.21～0.43m、深さ0.01～0.19mの全周する壁際溝を検出した。やや多量のローム粒を含む黒色土、またはやや多量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた

床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

出土遺物　土師器杯(１・２)、土師器甕(７・８)、紡輪

（９）については、いずれも床面の直上から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片44点（311ｇ）、甕・壺類破片46点（646ｇ）、須恵器の杯・椀類破片５点（42ｇ）、甕・壺類破片６点（139ｇ）、削器１点（26.0ｇ）、磨石１点（221.4ｇ）、剥片１点（41.3ｇ）が出土している。

所見　出土遺物から７世紀前半の竪穴建物であると考えられる。

314号竪穴建物（第276～280図、PL.116・117・331・332）

位置　Ｘ＝40,885～40,891、Ｙ＝－80,732～－80,737（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸4.42m、短軸4.40m

面積　16.949㎡

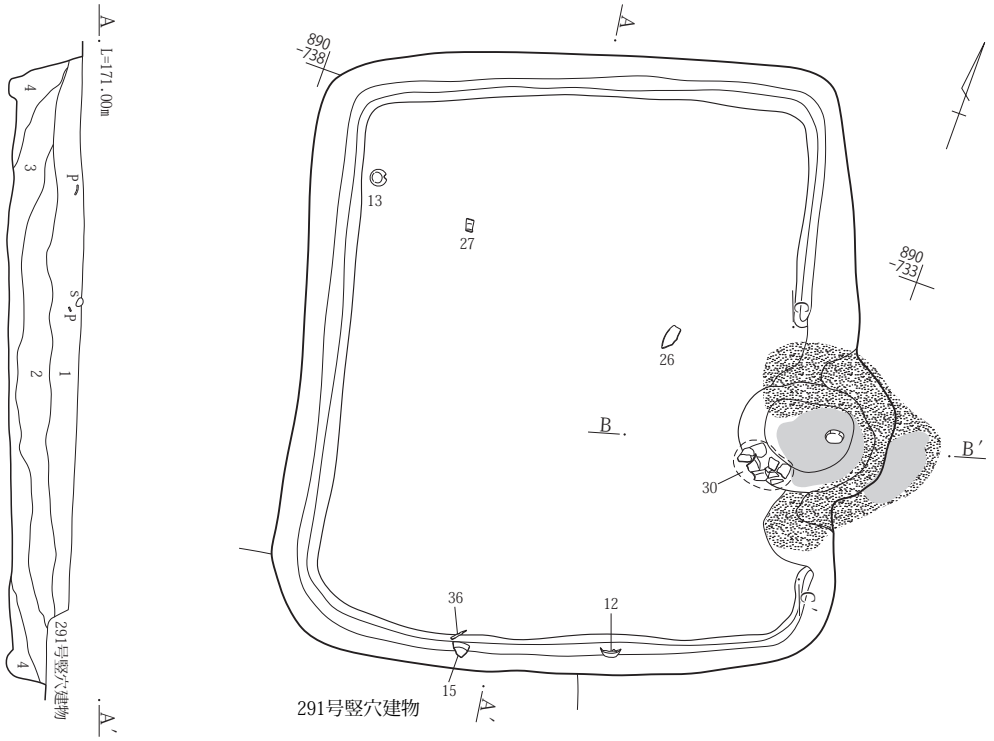
残存壁高　0.61m

方位　Ｎ－74°－Ｅ

重複　291号竪穴建物と重複し、314号竪穴建物が古い。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒を含む黒色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、ローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

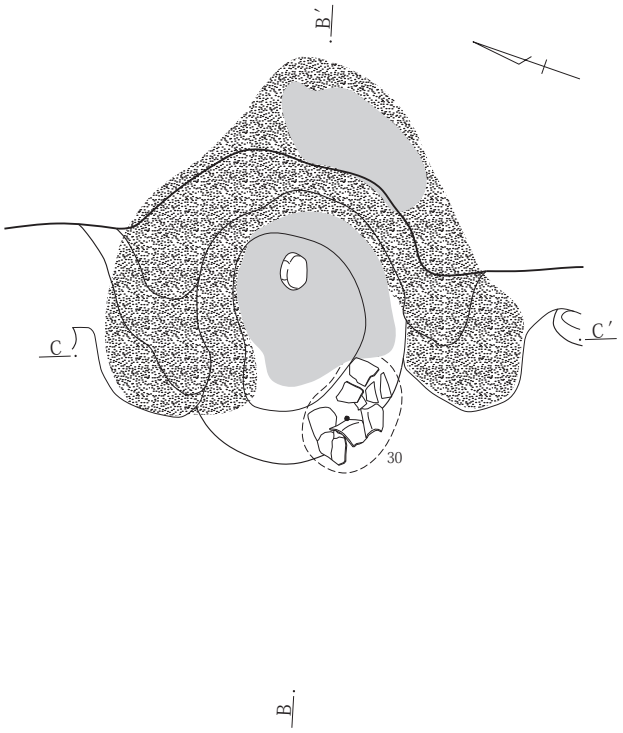
カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.18m、燃焼部幅は0.49mで、壁外に0.37m燃焼部・煙道が伸びる。ただし、奥壁については崩落したカマド天井を誤認している可能性があり、その場合、残存長は1.18mより長くなると考えられる。袖から側壁・奥壁（天井の可能性あり）にかけては、床下土坑から採取されたと思われる多量の粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は抜き取られずに残存しており、長さ0.20m、幅0.15m、厚さ0.10mである。燃焼部からカマド前の床面はわずかに窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.03mであった。その要因として、カマド内か

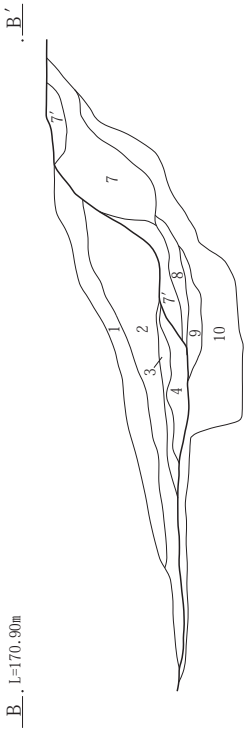


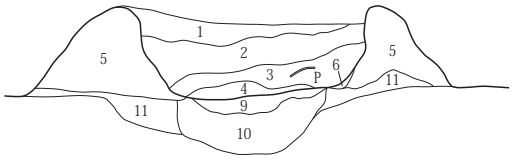
314号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒色土10YR2/1　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒色土10YR2/1　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m

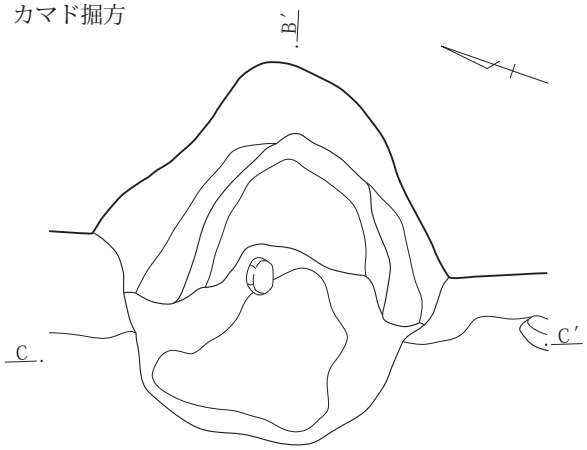
第276図　314号竪穴建物







カマド掘方



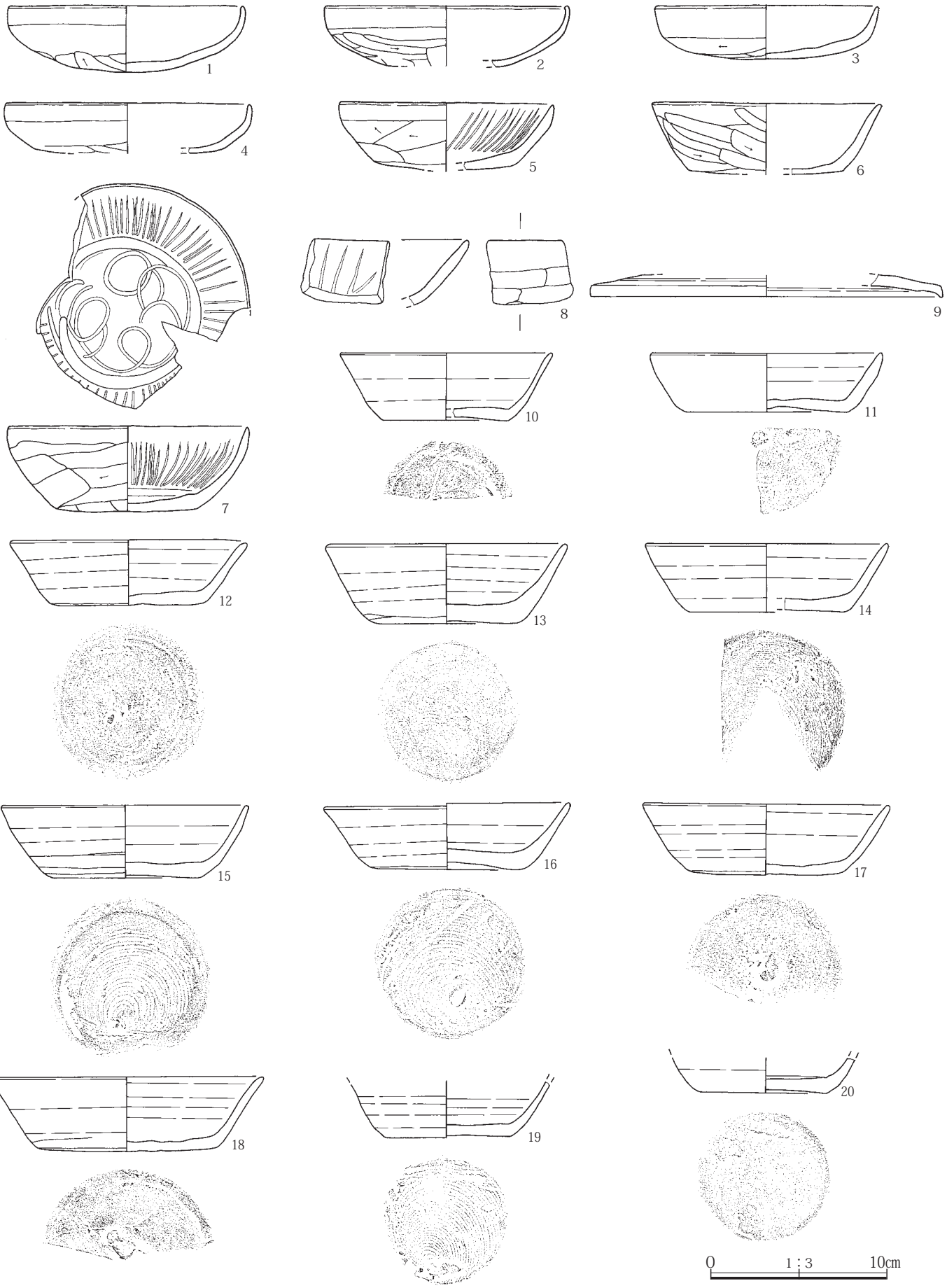
314号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒、焼土塊～粒、灰を多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．にぶい黄褐色土10YR5/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
６．暗褐色土10YR3/4　焼土粒、灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
７．褐色土7.5YR4/4　ローム塊を主体とし、暗褐色土塊、焼土塊～小塊を多量をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
７′.暗赤褐色土5YR3/6　７層が焼土化したもの。粘性やや弱い。締まりやや強い。
８．暗褐色土10YR3/4　焼土粒、灰をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
９．赤褐色土5YR4/6　焼土塊を主体とし、灰を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
10．褐色土10YR4/6　ローム小塊を多量、暗褐色土小塊、焼土小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
11．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、粘土粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

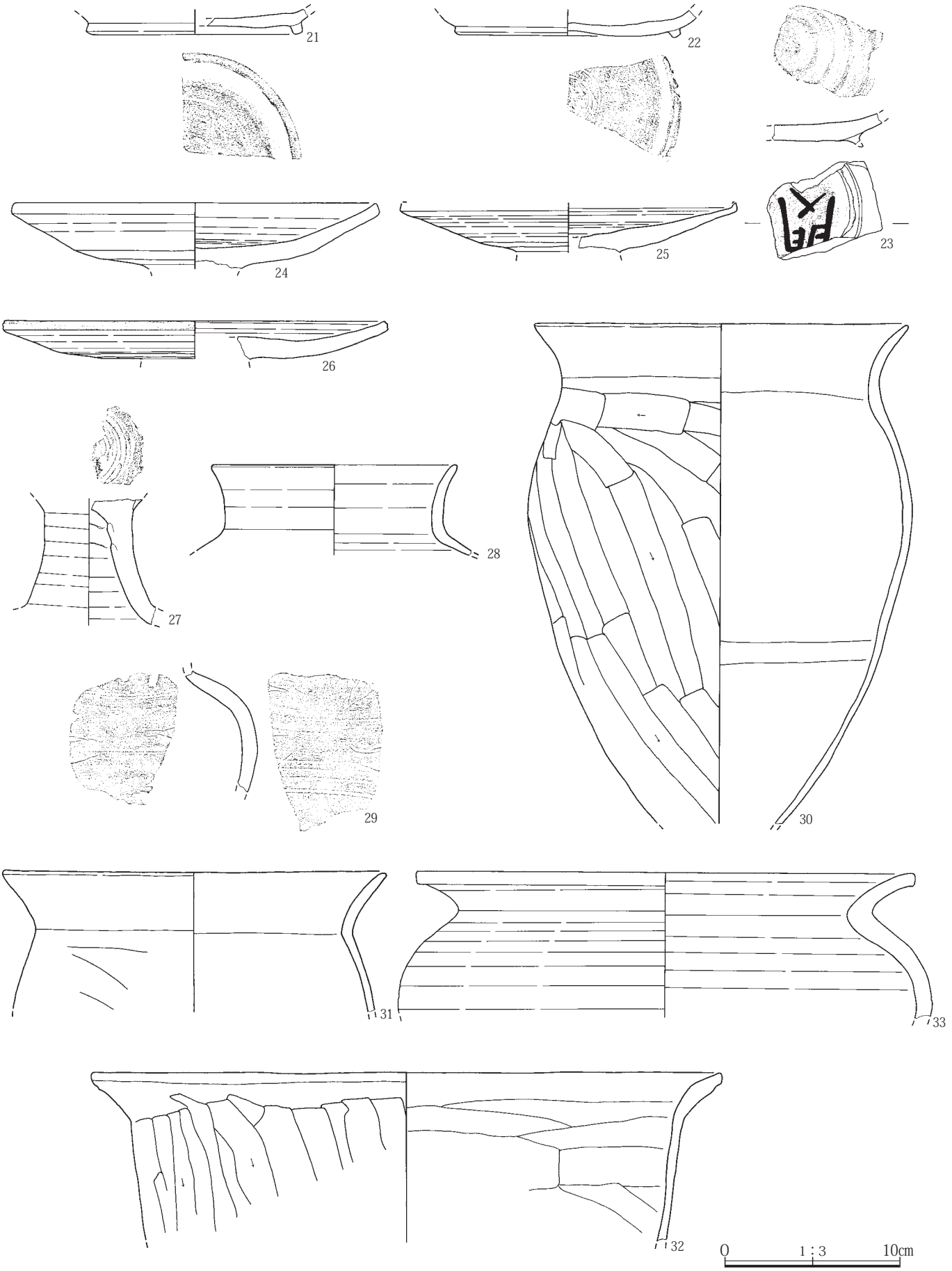
B

0　1：30　1m

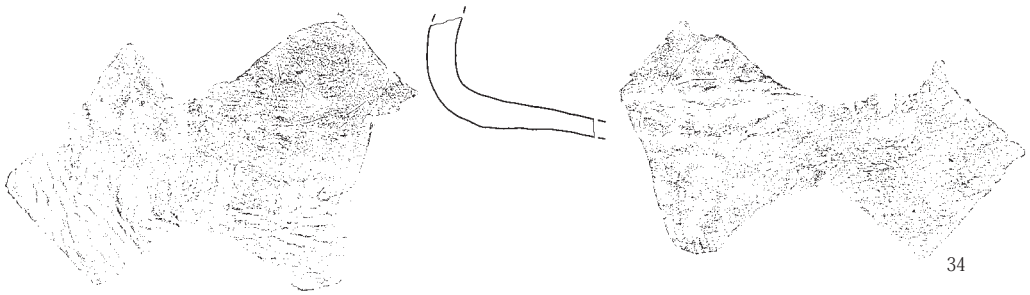
第277図　314号竪穴建物カマド

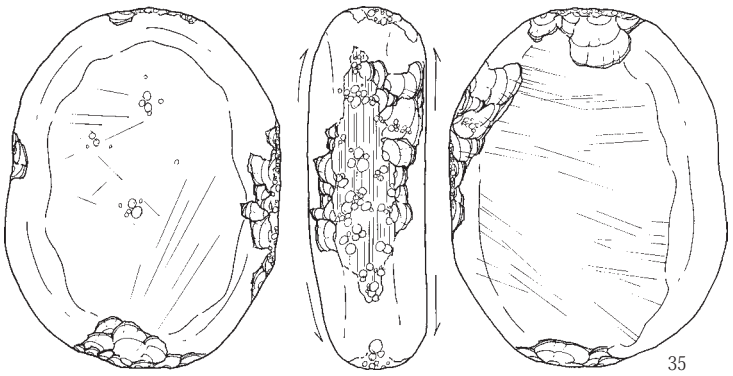


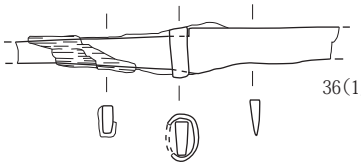
第278図　314号竪穴建物出土遺物（１）

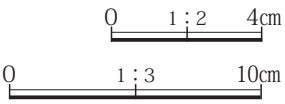


第279図　314号竪穴建物出土遺物（２）









第280図　314号竪穴建物出土遺物（３）

ら灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。しかし、全景写真を見ると南東隅付近の床面が黒く見えることから、この南東隅に存在した可能性が考えられる。

壁際溝　幅0.25～0.45m、深さ0.01～0.10mの全周する壁際溝を検出した。少量のAs-Cを含む黒色土で埋没していたが、竪穴部の埋没土と区別がつかなかったことから、使用時には埋められずに溝状になっていた可能性が考えられる。

床面　床面はほぼ平坦である。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。しかし、全景写真を見ると、中央付近に１基、その北側に隣接して１基、北東隅で１基と、少なくとも３基の床下土坑の存在が確認できる。

出土遺物　螺旋状暗文のある土師器杯（７）、「閃」と書かれた須恵器椀(23)が出土したことが特筆される。床面の直上から出土した遺物は、須恵器杯(12)、須恵器高杯(26・27)、土師器甕(30)で、それ以外の遺物については、いずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片144点(1,085ｇ)、甕・壺類破片306点(2,935ｇ)、須恵器の杯・椀類破片88点(1,455ｇ)、甕・壺類破片35点(1,775ｇ)、削器２点(44.4ｇ)、磨製石斧１点(31.3ｇ)、凹石１点(252.5ｇ)、棒状礫５点(507.5ｇ)、砥石１点(1230.3ｇ)、剥片２点(68.3ｇ)が出土している。このうち棒状礫５点(37～41)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(諸磯ａ式)の胴部破片、同(加曽利Ｅ３式)の胴部破片、凹石については、遺構外出土遺物として(凹石は写真のみ)掲載した。

所見　出土遺物から８世紀後半の竪穴建物であると考えられる。

315号竪穴建物（第281～284図、PL.117・118・332・333）

位置　Ｘ＝40,885～40,892、Ｙ＝－80,725～－80,732（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸6.18m、短軸5.01m

面積　26.459㎡

残存壁高　0.59m

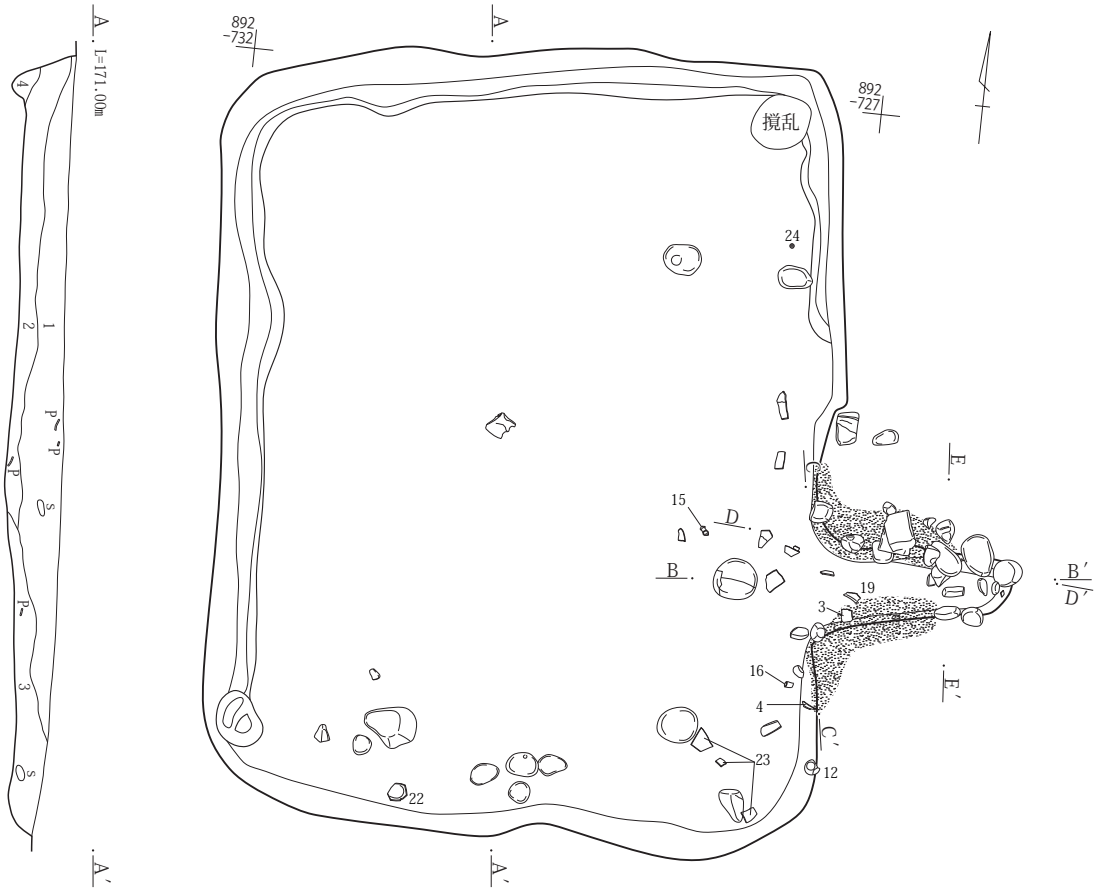
方位　Ｎ－84°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒、微量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム塊～粒、炭化物粒を含む黒褐色土、または微量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.63m、燃焼部幅は0.43mで、壁外に1.56m燃焼部・煙道が伸びる。側壁は床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。また、側壁には礫が並べられていたが、これは側壁や煙道を補強する目的で置かれたものであると考えられる。これらの礫のうち最大のものは、向かって左側の一番奥に置かれた円礫で、長さ0.41m、幅0.23m、厚さ0.21mである。明らかに袖石と判断できる礫は検出されなかったが、カマド周辺には多数の礫が散乱しており、これらはカマドの構築材の一部であると考えられる。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。しかし、全景写真を見ると、床面が黒く見える箇所が複数確認できる。このことから、

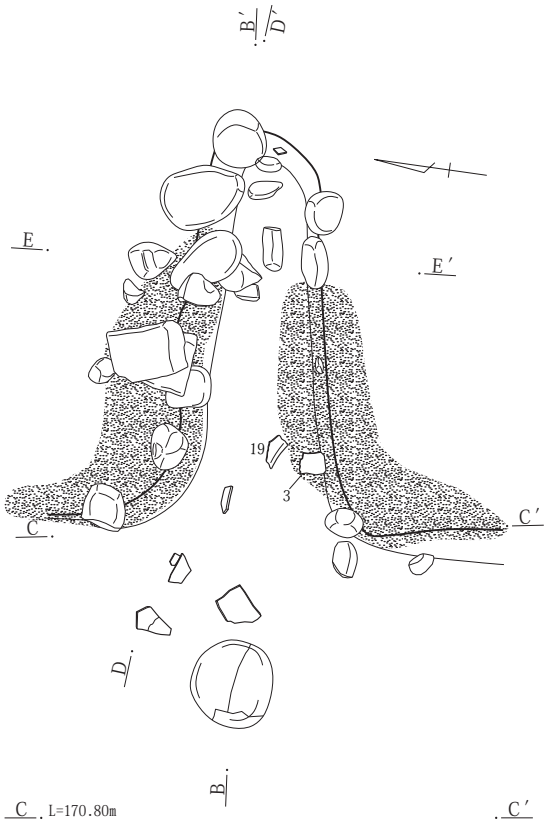


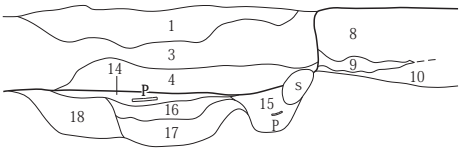
315号竪穴建物Ａ－Ａ′

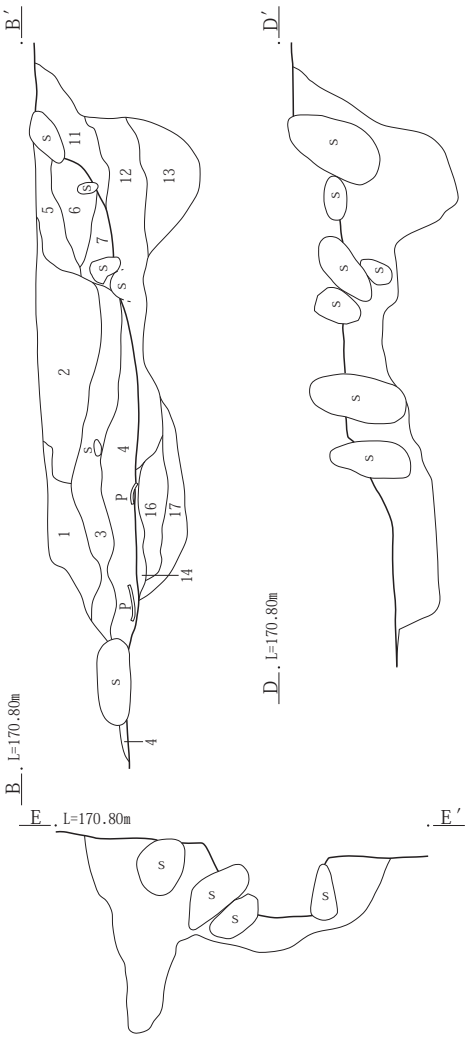
1．黒褐色土10YR3/2　As-C、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR3/2　As-Cを微量、ローム小塊～粒、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

0　1：60　2m

第281図　315号竪穴建物



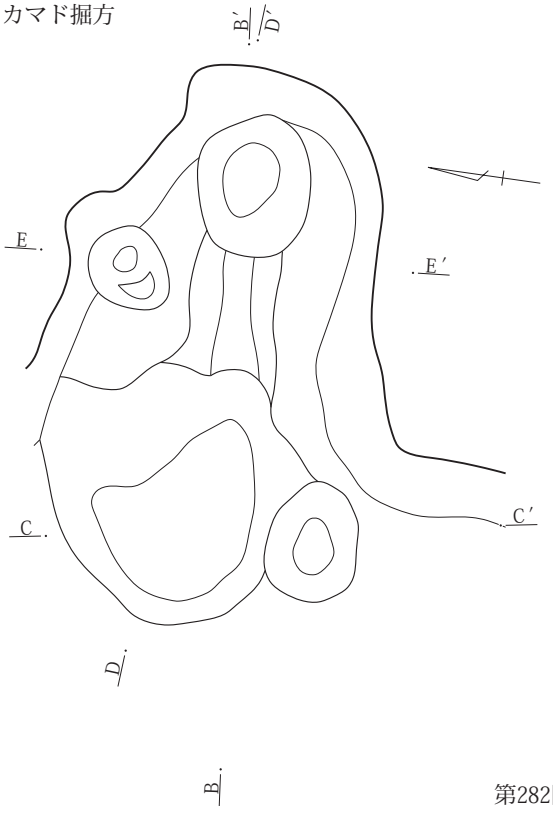




315号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

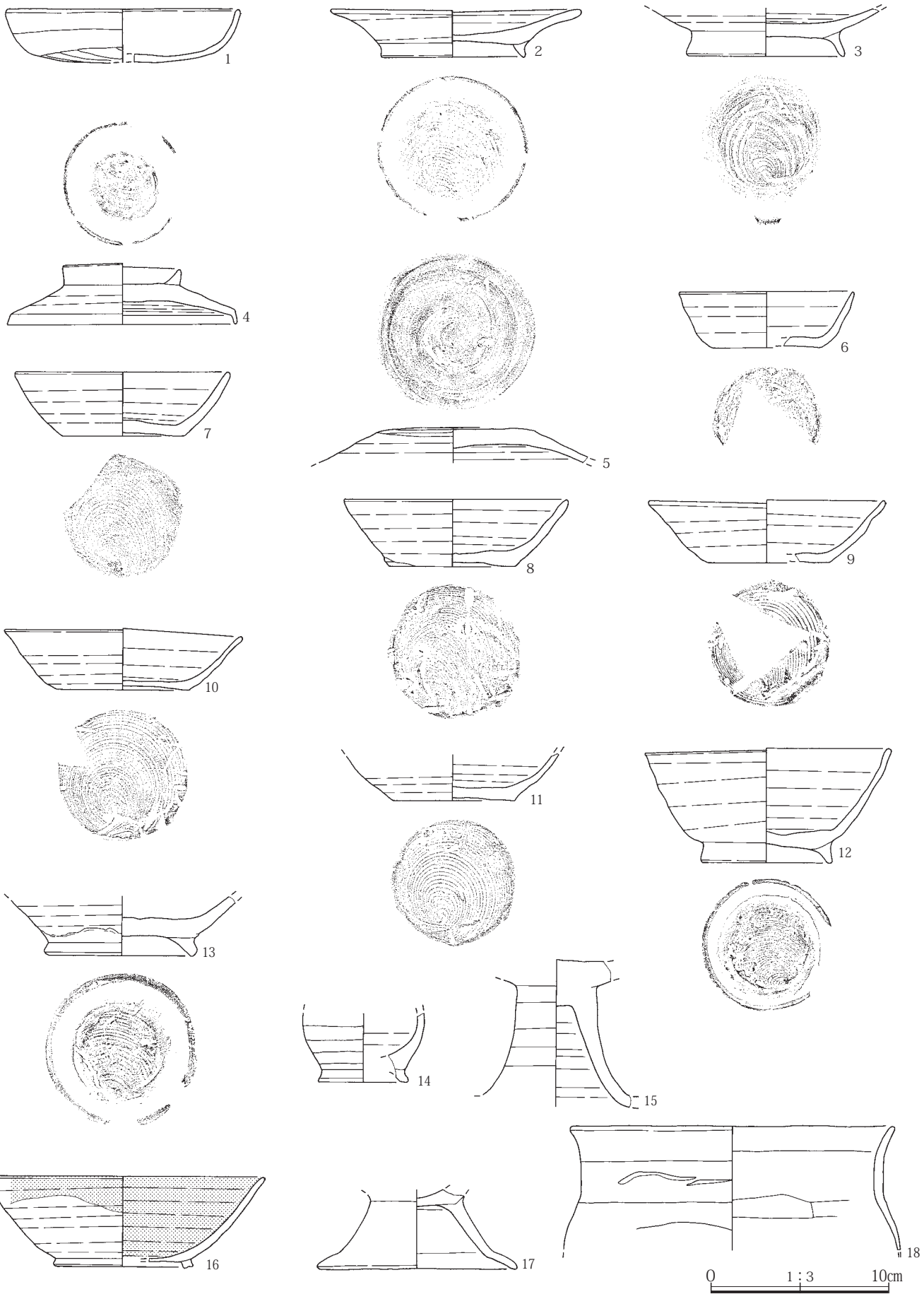
１．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
３．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、褐色土小塊をやや多量、焼土小塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊～粒、焼土小塊～粒、灰を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
６．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊を多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
７．褐色土10YR4/4　ローム小塊を多量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
８．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊を少量含む。粘性、締まり強い。
９．黒褐色土10YR2/2　ローム粒、灰をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
10．暗褐色土10YR3/3　ローム粗塊をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
11．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
12．暗褐色土10YR3/3　ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
13．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まり強い。
14．暗褐色土10YR3/4　ローム粒をやや多量、灰を少微量含む。粘性、締まりやや強い。
15．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、焼土粒、灰を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
16．赤褐色土5YR4/8　焼土小塊を主体とし、灰を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
17．黒褐色土10YR3/1　灰を多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
18．暗褐色土10YR3/4　ローム粒、灰を少量、焼土小塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

カマド掘方

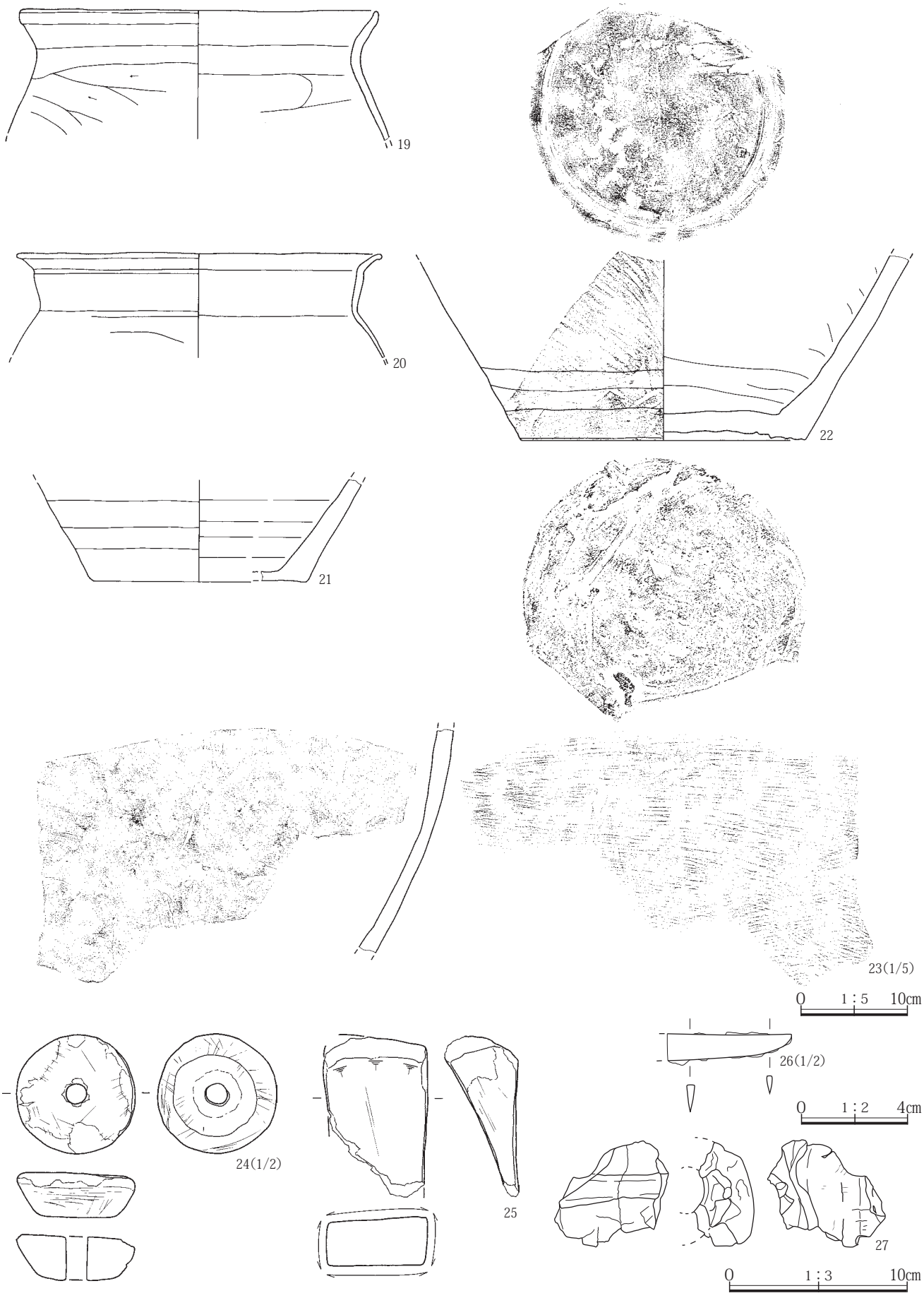


0　1：30　1m

第282図　315号竪穴建物カマド



第283図　315号竪穴建物出土遺物（１）



第284図　315号竪穴建物出土遺物（２）

本竪穴建物には主柱穴が存在した可能性が考えられる。

貯蔵穴　検出されなかった。しかし、全景写真を見ると南東隅付近の床面が黒く見えることから、この南東隅に存在した可能性が考えられる。

壁際溝　南西隅から東壁中央付近を除く範囲から、幅0.23～0.54m、深さ0.01～0.09mの壁際溝を検出した。少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面は凹凸があり、また、北から南に向かって緩やかに下っている。北壁際と南壁際の高低差は最大で0.12mであった。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。ただし、全景写真を見ると、中央付近に少なくとも１基の床下土坑の存在が確認できる。

出土遺物　床面の直上から出土した遺物は、須恵器椀(12)と紡輪(24)で、それ以外の遺物については、いずれも埋没土中から出土したものである。土師器甕は少なくとも３個体(18～20)が確認されており、このうち19はカマド内から出土したものである。南東隅付近からは、須恵器甕の胴部破片(23)が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片108点(583ｇ)、甕・壺類破片409点(3,000ｇ)、須恵器の杯･椀類破片252点(2,745ｇ)、甕･壺類破片31点(3,085ｇ)、瓦片２点、棒状礫１点(58.5ｇ)、剝片３点(119.8ｇ)が出土している。このうち棒状礫(28)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(称名寺Ⅰ式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第２四半期の竪穴建物であると考えられる。

316号竪穴建物(第285・286図、PL.118・119・333)

位置　Ｘ＝40,894～40,898、Ｙ＝－80,717～－80,721（Ｃ・Ｄ区）

形状　正方形

規模　長軸3.20m、短軸3.03m

面積　7.904㎡

残存壁高　0.55m

方位　Ｎ－69°－Ｅ

重複　３号建物１号溝、46号溝と重複し、いずれも316号竪穴建物が古い。

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

カマド　東壁の南東隅に位置する。残存長は0.59m、燃焼部幅は0.30mで、壁外に0.25m燃焼部が伸びる。わずかに残った袖は、床下土坑から採取されたと思われる粘土塊を含む土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

壁際溝　検出されなかった。

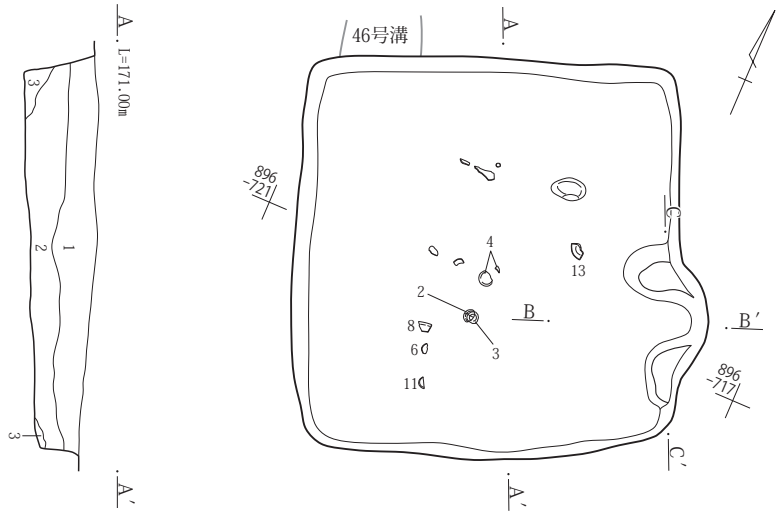
床面　床面は凹凸があり、また、南から北に向かって緩やかに下っている。南壁際と北壁際の高低差は最大で0.11mであった。

掘方　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。

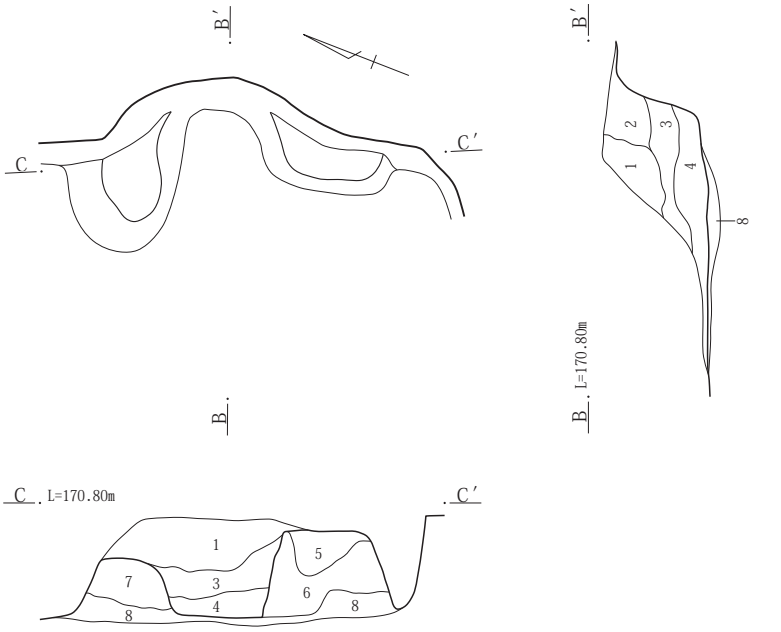
出土遺物　畿内からの搬入品である可能性が考えられる放射状暗文のある土師器杯(１)や、内面に線刻のある土師器杯(４)が出土したことが特筆される。これらの土師器杯を含め、本竪穴建物の遺物はすべて埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片33点(167ｇ)、甕・壺類破片39点(520ｇ)、須恵器の杯･椀類破片４点(15ｇ)、甕･壺類破片７点(137ｇ)、瓦片10点、磨石１点(128.9ｇ)、礫・礫片３点(285.2ｇ)、剝片１点(7.2ｇ)が出土している。このうち磨石(15)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(諸磯ａ式)の口縁部破片、同(加曽利Ｅ３式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から７世紀第４四半期の竪穴建物であると考えられる。



316号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりや弱い。

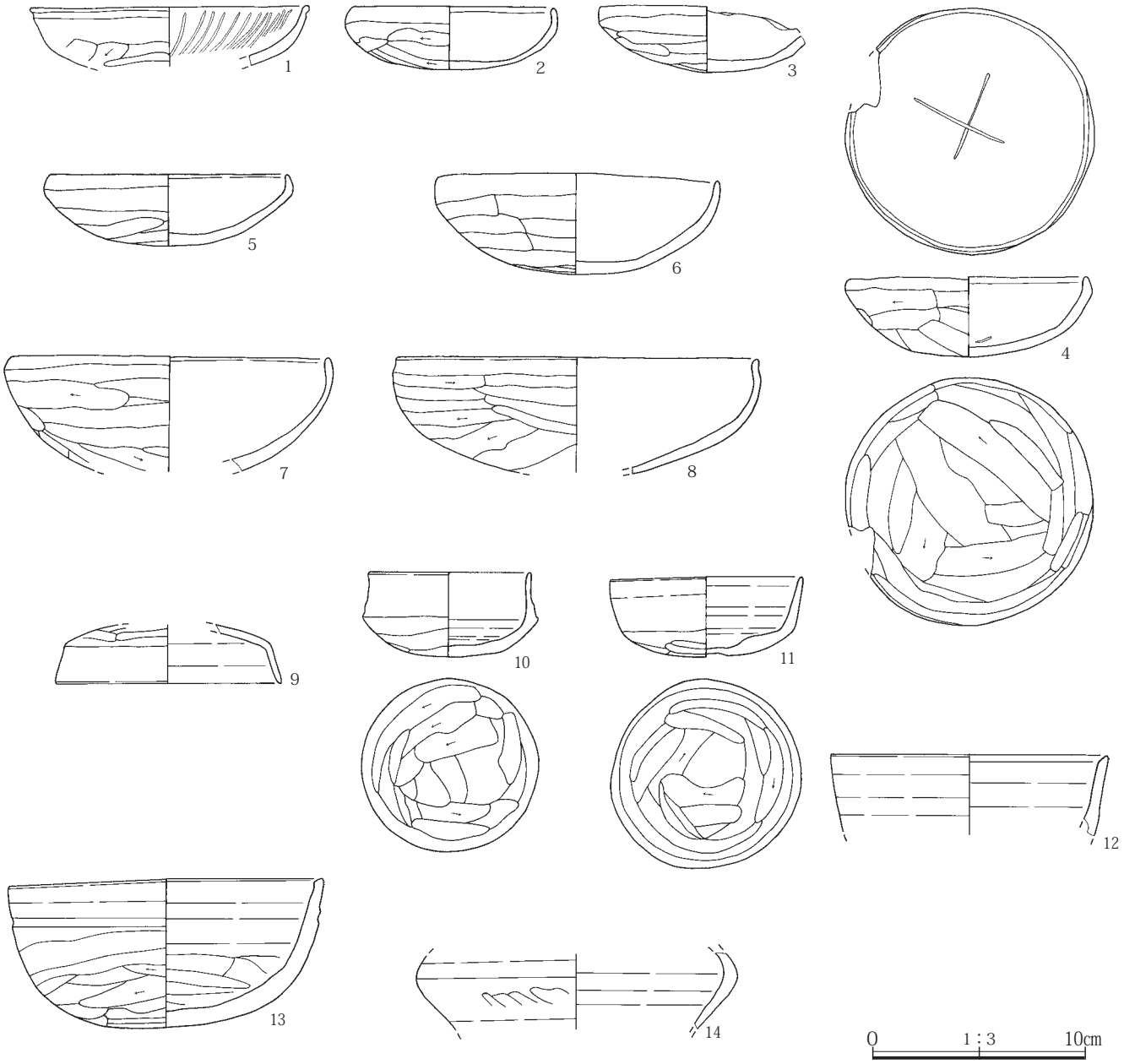
0　1：60　2m



316号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′
１．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．褐色土10YR4/4　ローム塊～粒を多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒、焼土小塊～粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、灰を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
５．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
６．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、黒褐色土小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
７．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒をやや多量、焼土小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
８．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：30　1m

第285図　316号竪穴建物・カマド



第286図　316号竪穴建物出土遺物

319号竪穴建物（第287～293図、PL.119・120・333～335）

位置　X＝40,892～40,899、Y＝－80,727～－80,734（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸6.12m、短軸5.22m

面積　23.133㎡

残存壁高　0.86m

方位　N－77°－E

重複　なし

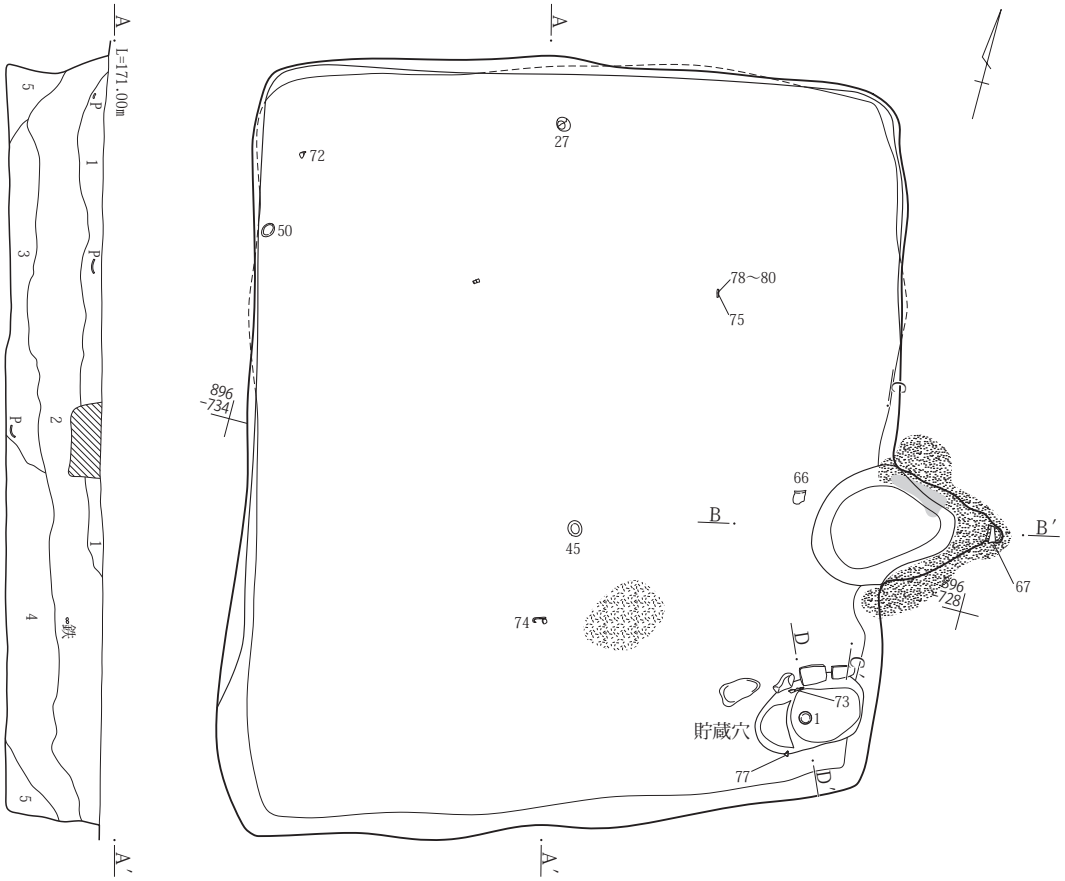
埋没土　上層は少量のAs-C、ローム小塊～粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。やや多量のローム小塊～粒を含む下層は、人為的な埋没と考えられる。

カマド　東壁の南東隅寄りに位置する。残存長は1.50m、燃焼部幅は0.38mで、壁外に0.92m燃焼部・煙道が伸びる。側壁から奥壁にかけては、床下土坑から採取されたと思われる粘土によって構築されていた。袖石は検出されなかった。また、支脚は本竪穴建物の廃絶時に抜き取られたと考えられるが、抜き取りを示す痕跡は確認できなかった。燃焼部からカマド前の床面はわずかに窪んでおり、周囲との高低差は最大で0.08mであった。その要

因として、カマド内から灰を掻き出すなどの作業をしたことが想定できる。

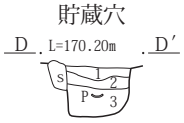
柱穴　検出されなかった。しかし、貯蔵穴全景写真を見ると、貯蔵穴の北西隅付近の床面が黒く見える。このことから、この位置に主柱穴のうちの１基が存在した可能性が考えられる。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.90m、短軸0.55m、深さ0.48m、形状は隅丸方形に近い不整形である。北側の縁には礫が並べられていた。また、西側の縁にはテラス状の段差があり、ここにも礫が並べられていた可能性が考えられる。上層は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土、中層はやや多量のローム粒、微量の焼土粒を含む暗褐色土、下層はやや多量のローム小塊～粒、少量の焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃



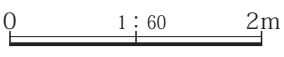
319号竪穴建物Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊～粒、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム小塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～粒、焼土粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
５．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

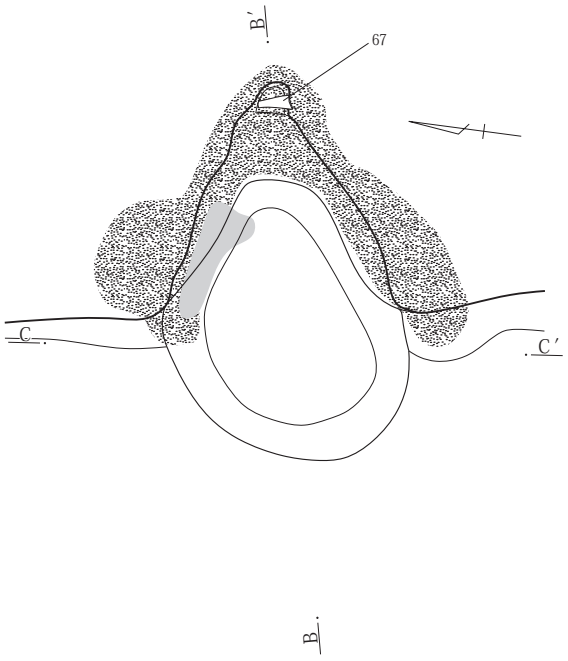


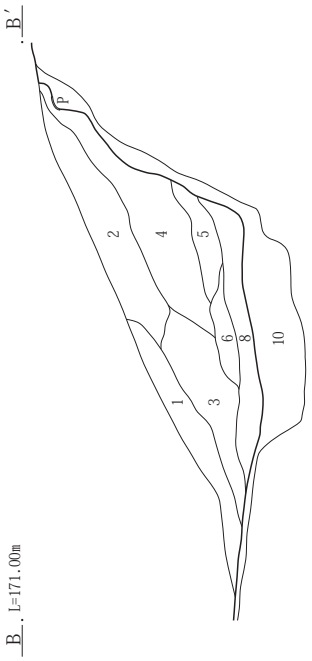
319号竪穴建物貯蔵穴Ｄ－Ｄ′

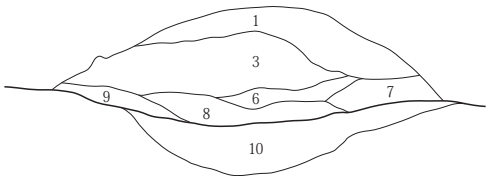
１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム粒をやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。



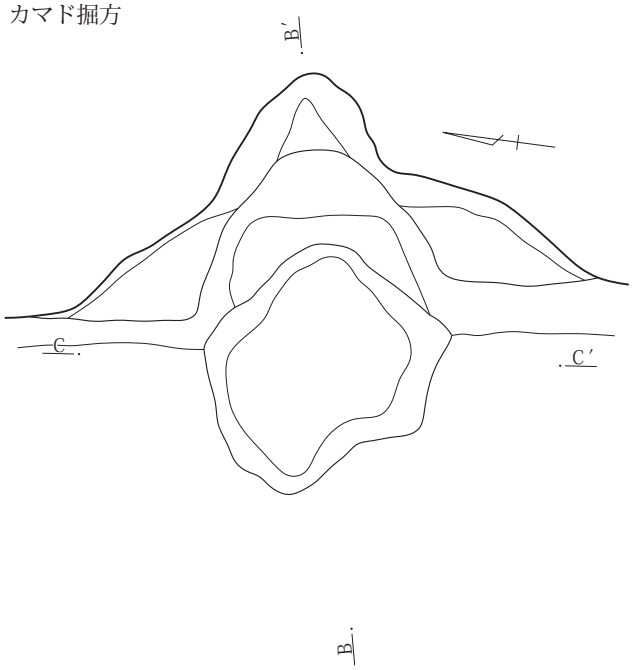
第287図　319号竪穴建物







カマド掘方

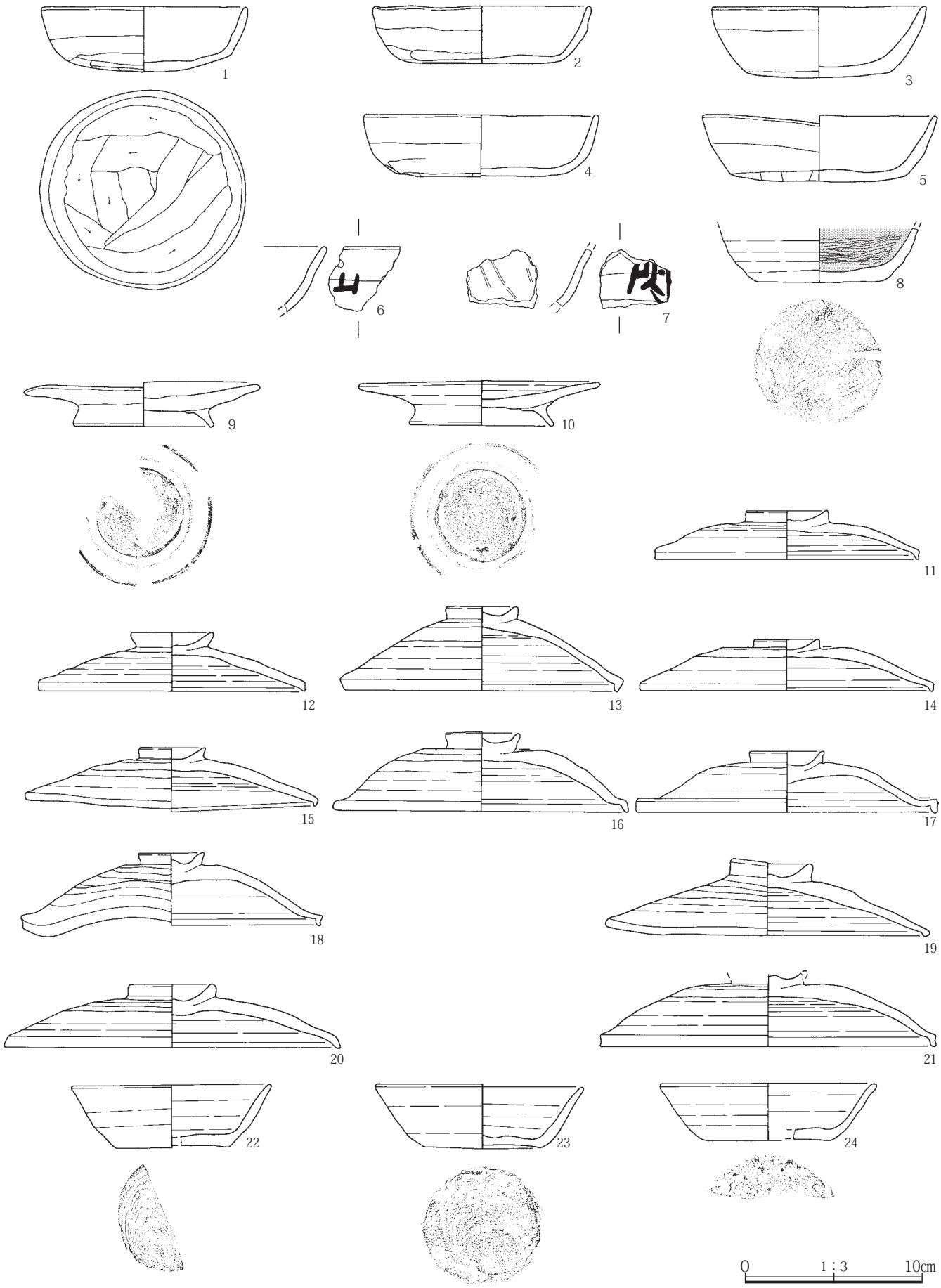


319号竪穴建物カマドＢ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

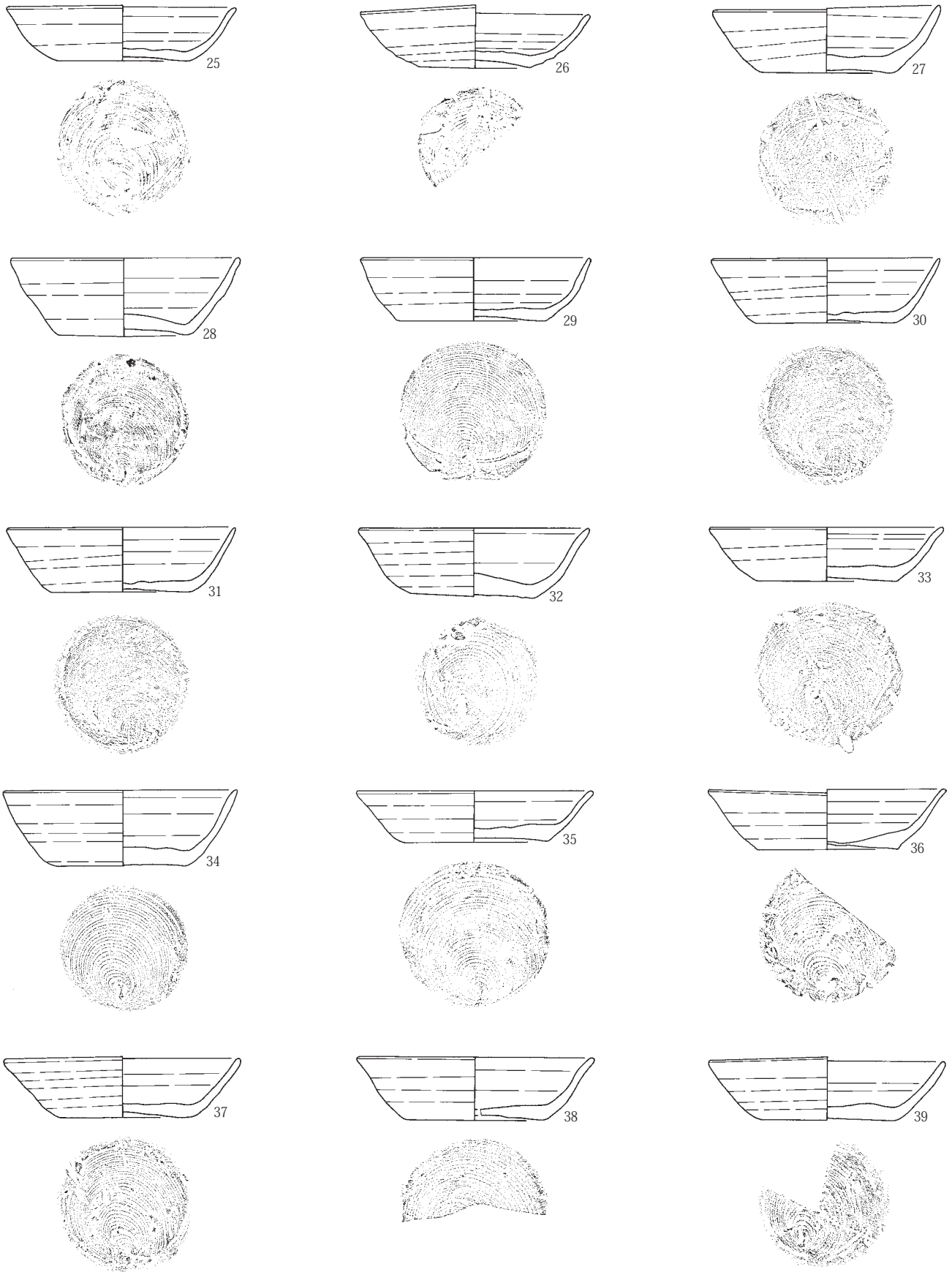
1．暗褐色土10YR3/4　ローム粗塊～粒、黒褐色土小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
3．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊、焼土小塊を少量含む。灰を層状に含む。粘性、締まり強い。
4．褐色土10YR4/4　ローム小塊を多量、焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。
5．褐色土10YR4/4　ローム粒、焼土粒をやや多量、灰を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
6．黄褐色土10YR5/8　ローム塊を主体とし、焼土小塊を微量含む。粘性、締まり強い。
7．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊をやや多量、黒褐色土小塊、焼土粒、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。
8．黒色土10YR2/1　ローム粒、焼土粒をやや多量、灰を非常に多量含む。粘性、締まりやや強い。
9．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊、黒褐色土小塊をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
10．黄褐色土10YR5/6　ローム塊を主体とし、暗褐色土小塊、焼土小塊、灰を少量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：30　1m

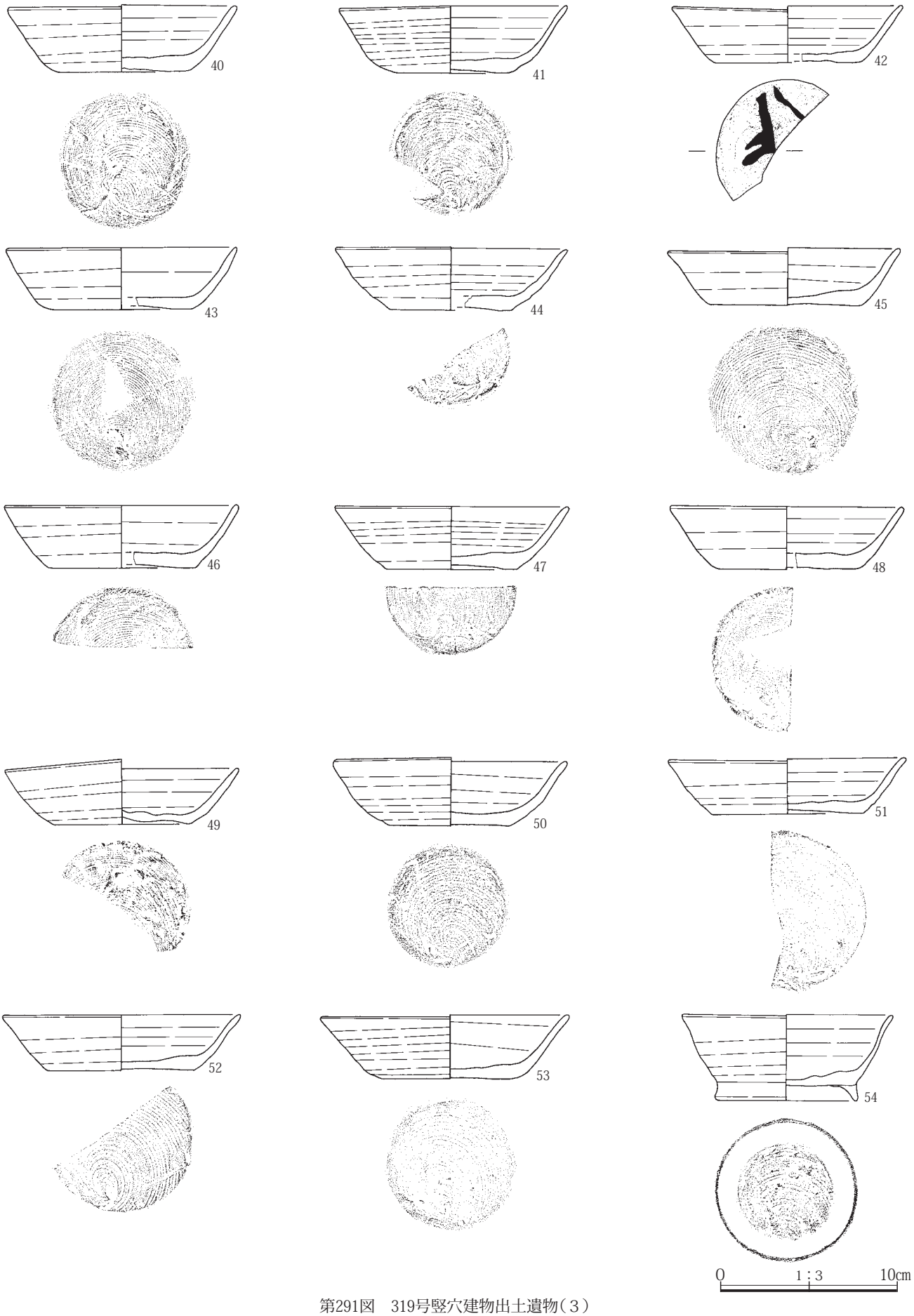
第288図　319号竪穴建物カマド



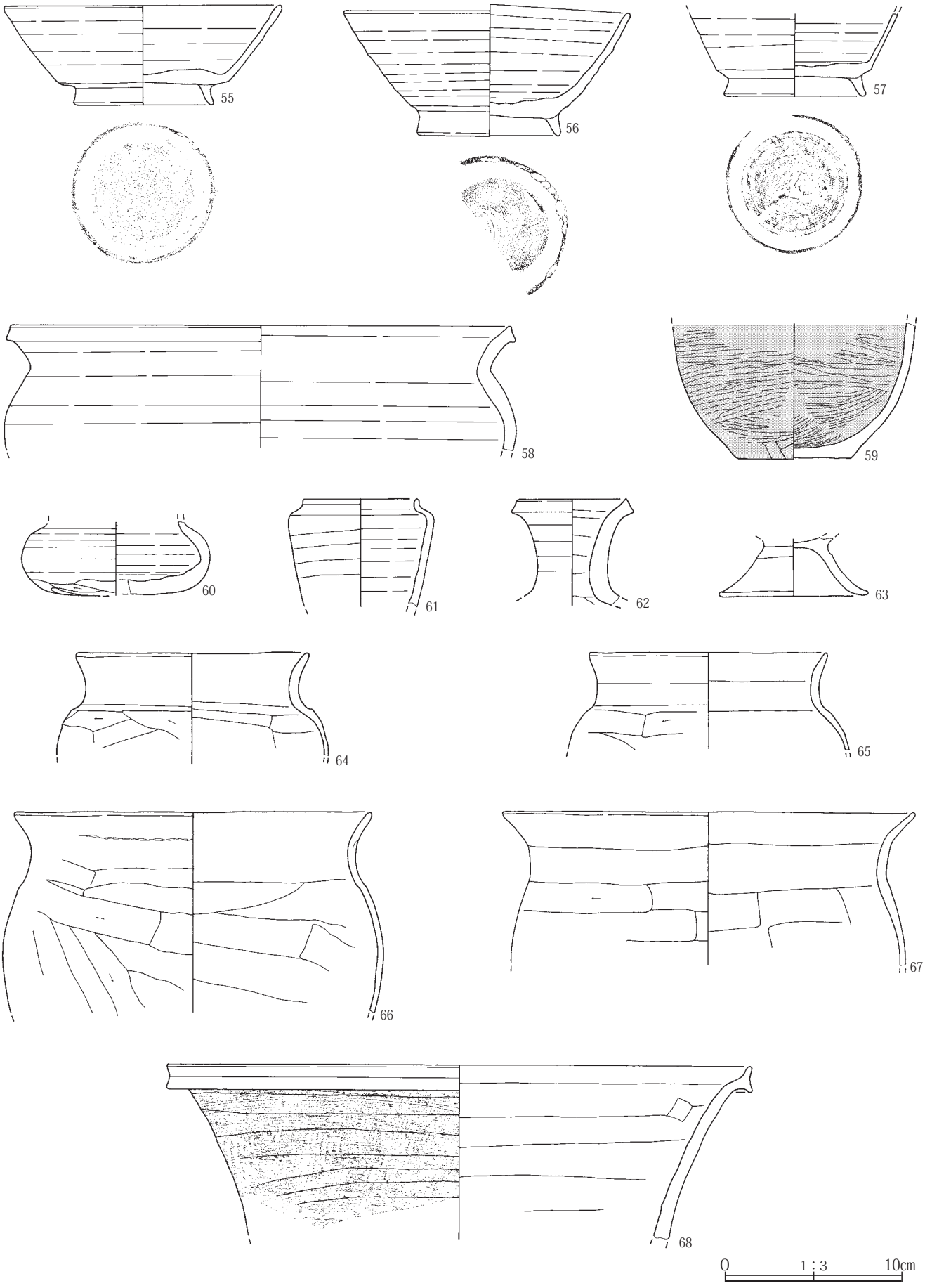
第289図　319号竪穴建物出土遺物（１）



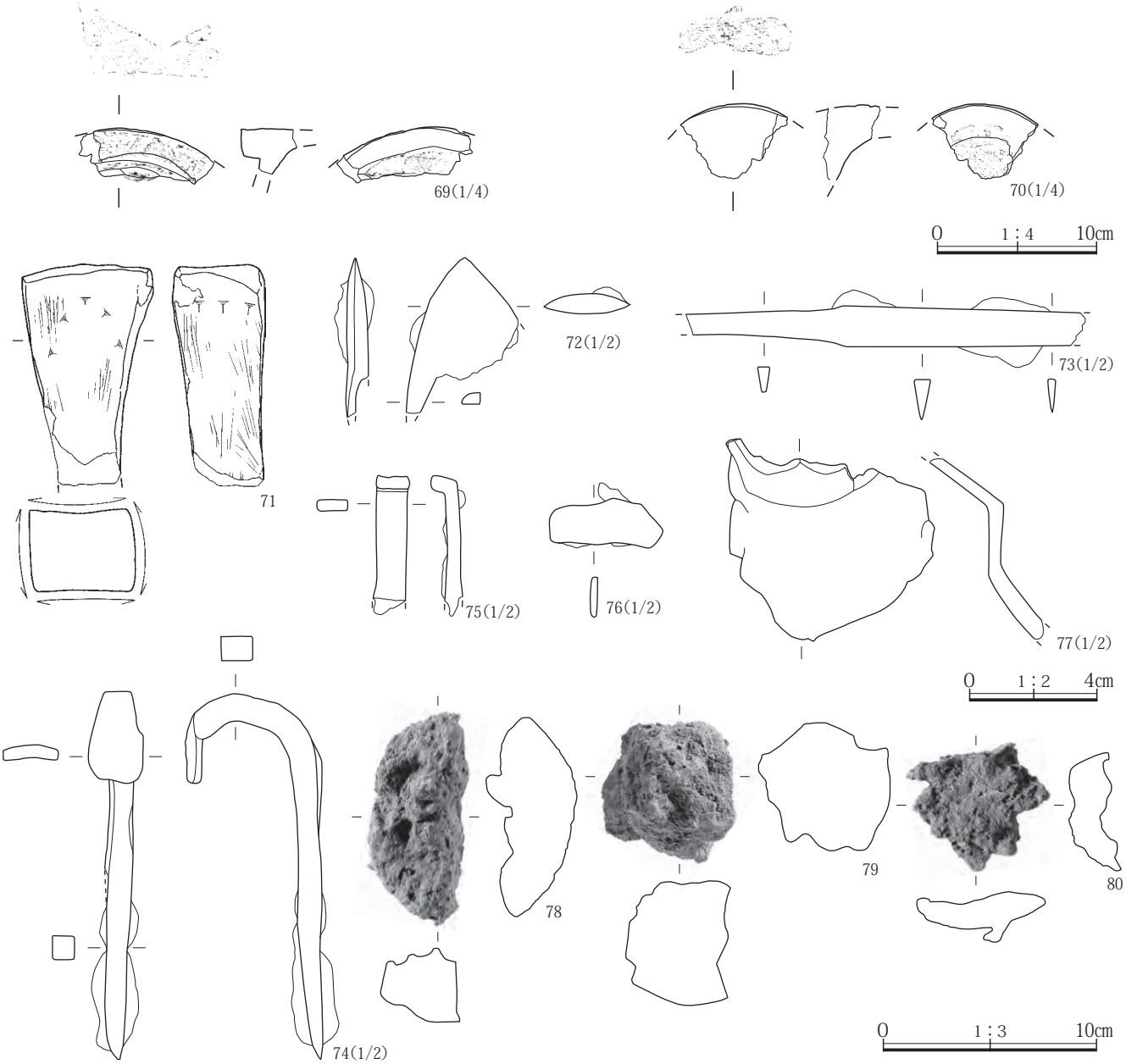
第290図　319号竪穴建物出土遺物（２）



第291図　319号竪穴建物出土遺物（３）



第292図　319号竪穴建物出土遺物（４）



第293図　319号竪穴建物出土遺物（５）

絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦である。中央やや南寄りの床面には、概ね0.64m×0.46mの範囲に灰が薄く堆積する状況が認められた。

掘方　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、詳細は不明である。

床下土坑　調査工程上の都合により、カマドを除く掘方調査を行っていないことから、床下土坑の有無については不明である。ただし、全景写真を見ると、北壁際に少なくとも１基の床下土坑の存在が確認できる。

出土遺物　「服」と書かれた土師器杯（６）や「閃」と書かれた土師器杯（７）が出土したことが特筆される。また、鉄鏃(72)、刀子(73)などの鉄製品とともに、鉄滓(78～80)が出土していることも本竪穴建物の特徴である。本竪穴建物からは須恵器蓋(11～21)や須恵器杯(22～53)など多量の遺物が出土しているが、これらの遺物の多くは出土位置や層位が不明である。ただし、土師器甕のうち66はカマド前から、67はカマド内から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片339点(2,390ｇ)、甕・壺類破片637点(4,990ｇ)、須恵器の杯・椀類破片624点(8,415ｇ)、甕・

壺類破片67点(2,530ｇ)、瓦片７点、削器１点(33.0ｇ)、凹石１点(429.0ｇ)、磨石１点(1,229.3ｇ)、剝片５点(169.4ｇ)が出土している。このうち磨石(81)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(前期末葉)の胴部破片、同(加曽利Ｅ４式)の口縁部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から９世紀第２四半期の竪穴建物であると考えられる。

320号竪穴建物(第294～296図、PL.120・121・336)

位置　Ｘ＝40,959～40,963、Ｙ＝－80,694～－80,697(Ｂ区西)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(3.65m)、短軸(2.73m)

面積　(2.923㎡)

残存壁高　0.22m

方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　47号溝、562号・580号・583号・587号土坑、323号・335号ピットと重複し、いずれも320号竪穴建物が古い。

埋没土　後世の削平により調査時には床面がほぼ露出した状態であった。また、重複する遺構や撹乱の影響などにより不明である。

カマド　貯蔵穴との位置関係から、東壁の中央やや南寄りに位置すると推測できる。残存長は(0.65m)、燃焼部幅は0.69mで、壁外に(0.50m)燃焼部が伸びる。ただし、残存している袖石の位置から判断して、燃焼部幅は0.50m前後ではないかと推測できる。向かって右側の袖石はほぼ原位置を保っていた。この袖石は、長さ0.36m、幅0.21m、厚さ0.17mである。また、支脚はやや東側に向かってやや傾いていたものの、抜き取られずに残存していた。この支脚は、長さ0.33m、幅0.22m、厚さ0.14mである。

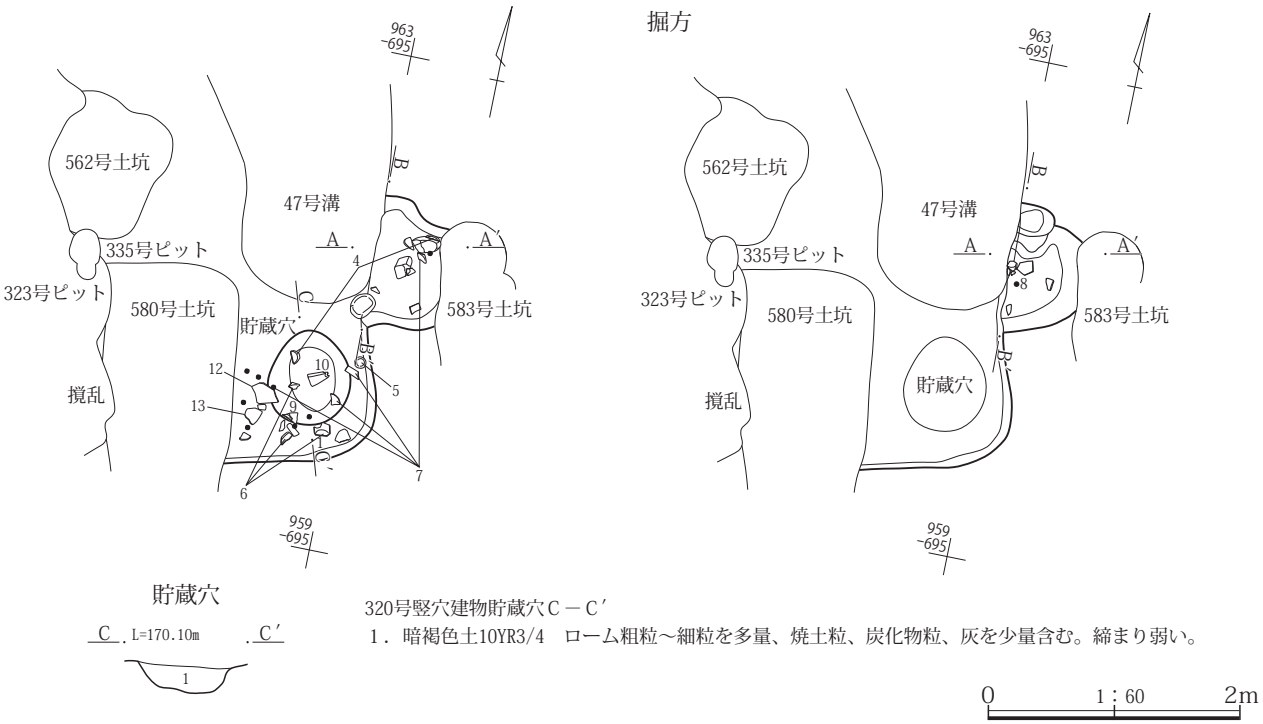
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長軸0.75m、短軸0.65m、深さ0.25m、形状は楕円形である。多量のローム粗粒～細粒、少量の焼土粒、炭化物粒、灰を含む暗褐色土で埋没していた。竪穴建物の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる。

壁際溝　検出されなかった。

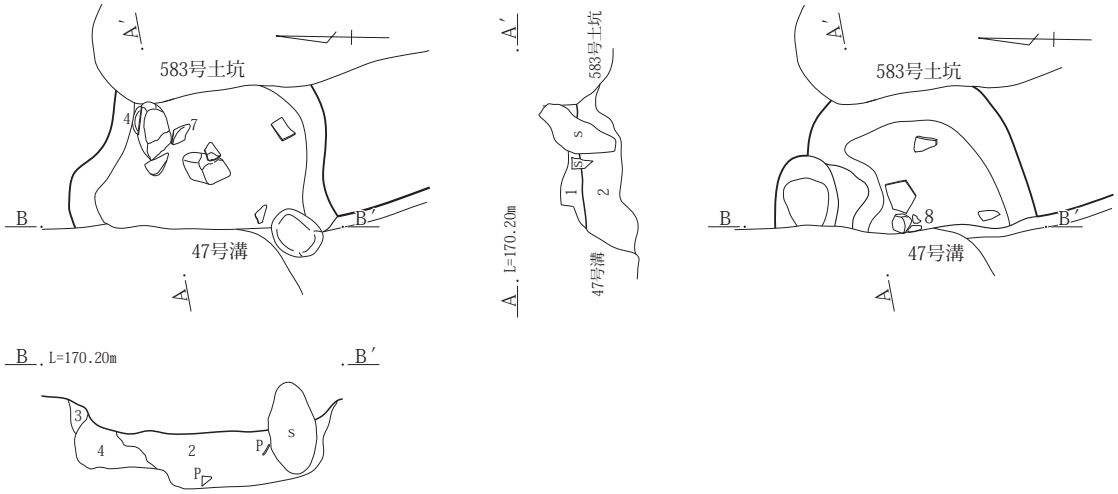
床面　重複する遺構や撹乱の影響により詳細は不明である。しかし、全景写真を見るとわずかに残った床面は、ローム塊を主体とする土で貼床されているように見える。

掘方　重複する遺構や撹乱の影響により詳細は不明である。



第294図　320号竪穴建物

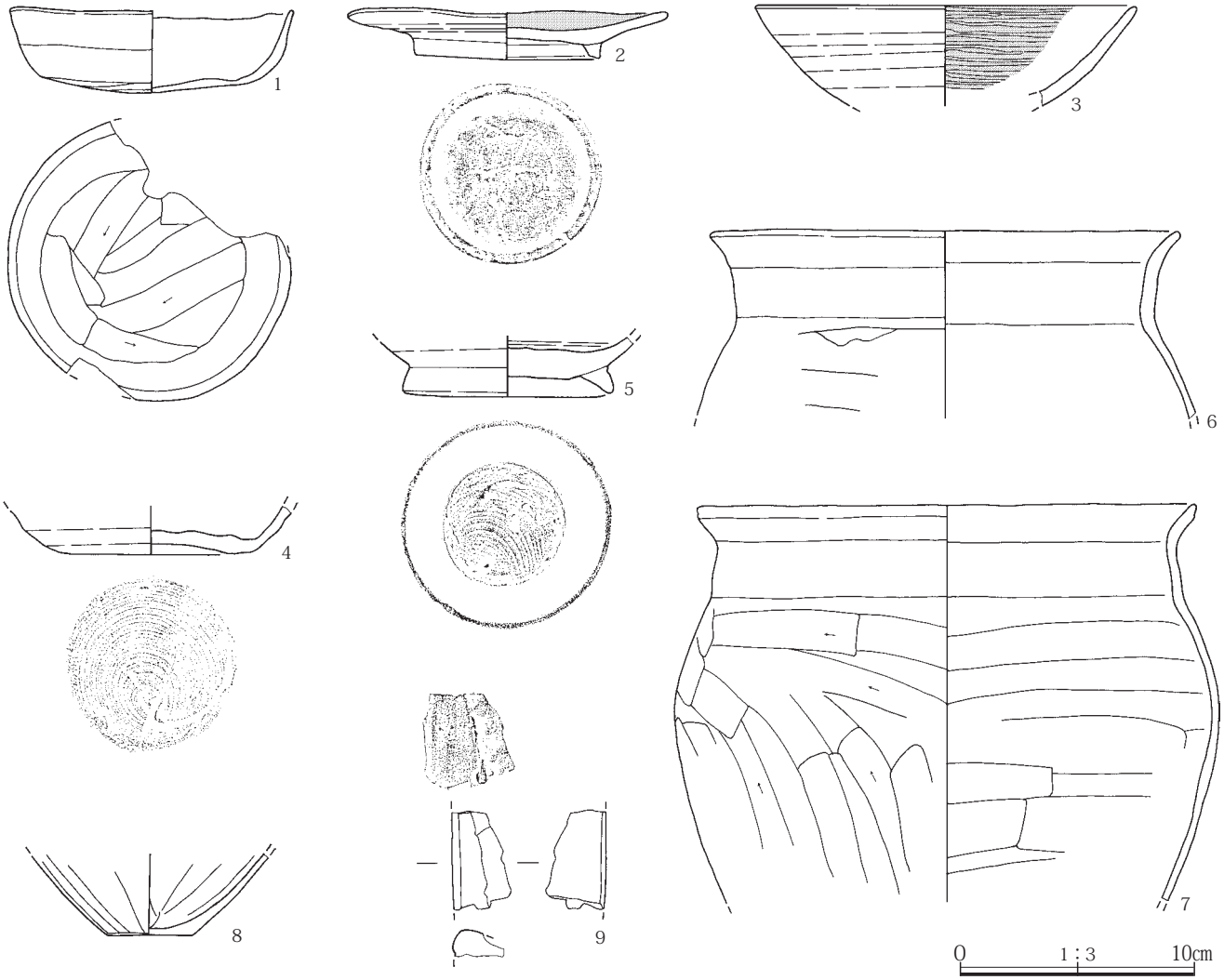
カマド掘方



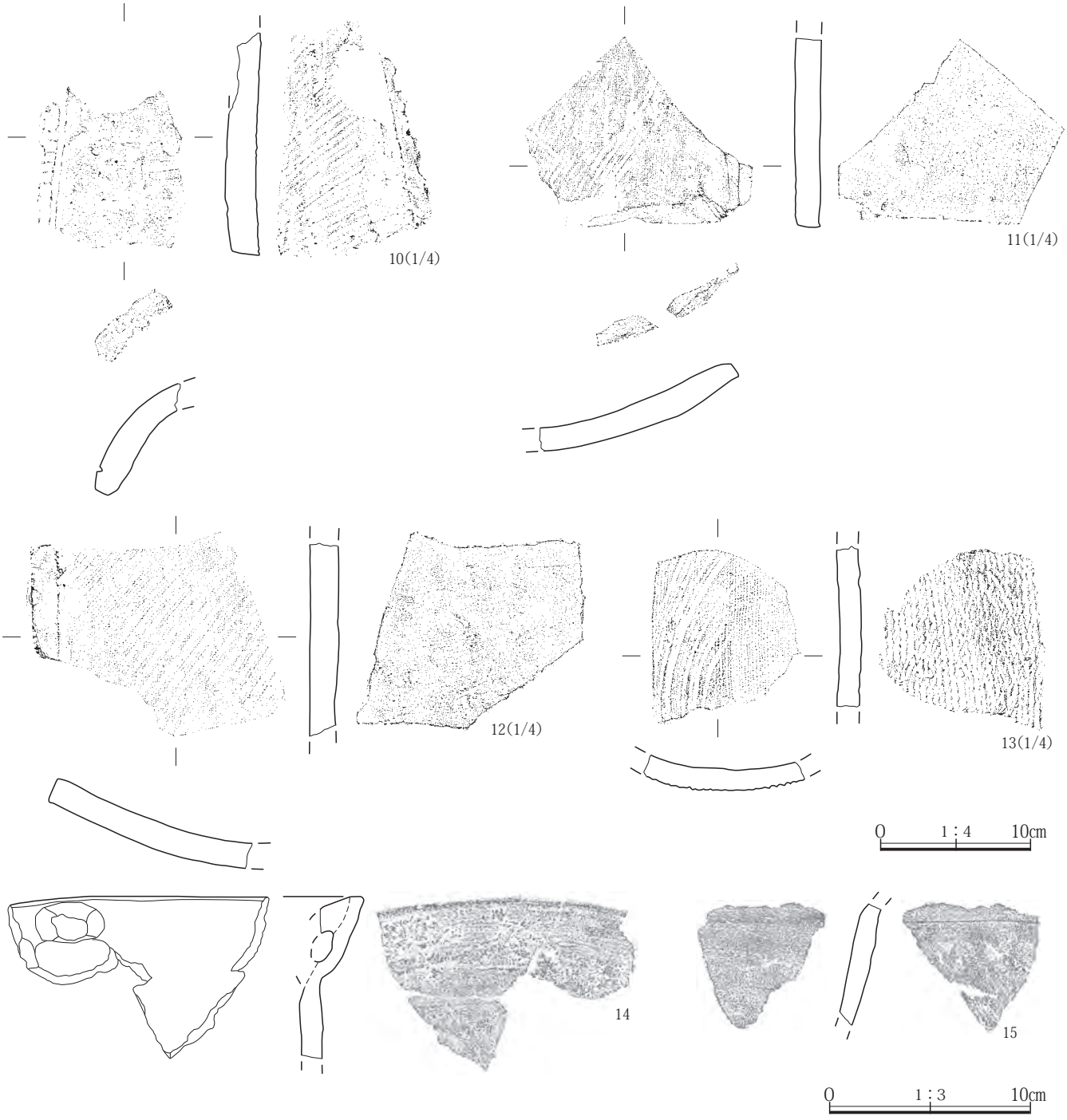
320号竪穴建物カマドＡ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′

１．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒、焼土粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/4　As-C、焼土粒を少量、ローム小塊～粒を多量含む。
３．暗褐色土10YR3/3　ローム塊を含む。
４．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム粒をやや多量含む。

0　1：30　1m



第295図　320号竪穴建物カマドと出土遺物（１）



第296図　320号竪穴建物出土遺物（２）

床下土坑　検出されなかった。

出土遺物　小破片ではあるが、カマド内から瓦塔が１点（９）出土したことが特筆される。この瓦塔は、本竪穴建物よりも古い８世紀代のものであると考えられる。土師器甕は少なくとも２個体（６・７）が確認されており、いずれもカマド内やその周辺から出土したものである。カマド周辺からは10～13をはじめとする瓦も出土したが、これらはいずれもカマドの構築材として使用されていたものであると考えられる。在地系の内耳鍋（14・15）については、どちらも中世の遺物であり混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片13点（36ｇ）、甕・壺類破片270点（1,050ｇ）、須恵器の杯・椀類破片43点（274ｇ）、甕・壺類破片12点（52ｇ）、瓦片６点、剝片１点（8.9ｇ）が出土している。

所見　出土遺物から９世紀第３四半期の竪穴建物であると考えられる。

２．寺院関連の建物

１号建物（第297～303図、PL.121・122・336～338）

位置　X＝40,864～40,870、Y＝－80,726～－80,730（C・D区）

建物の形態　桁行２間・梁行２間(3.28～3.37m×2.62m)の総柱建物である。南北棟。ただし、東側を６号溝に壊されていたことから、桁行が３間の東西棟である可能性も考えられる。柱間は桁行が1.62～1.74m、梁行が1.25～1.37mである。

掘込地業の規模　長軸4.98m、短軸(4.26m)、残存深度0.43m

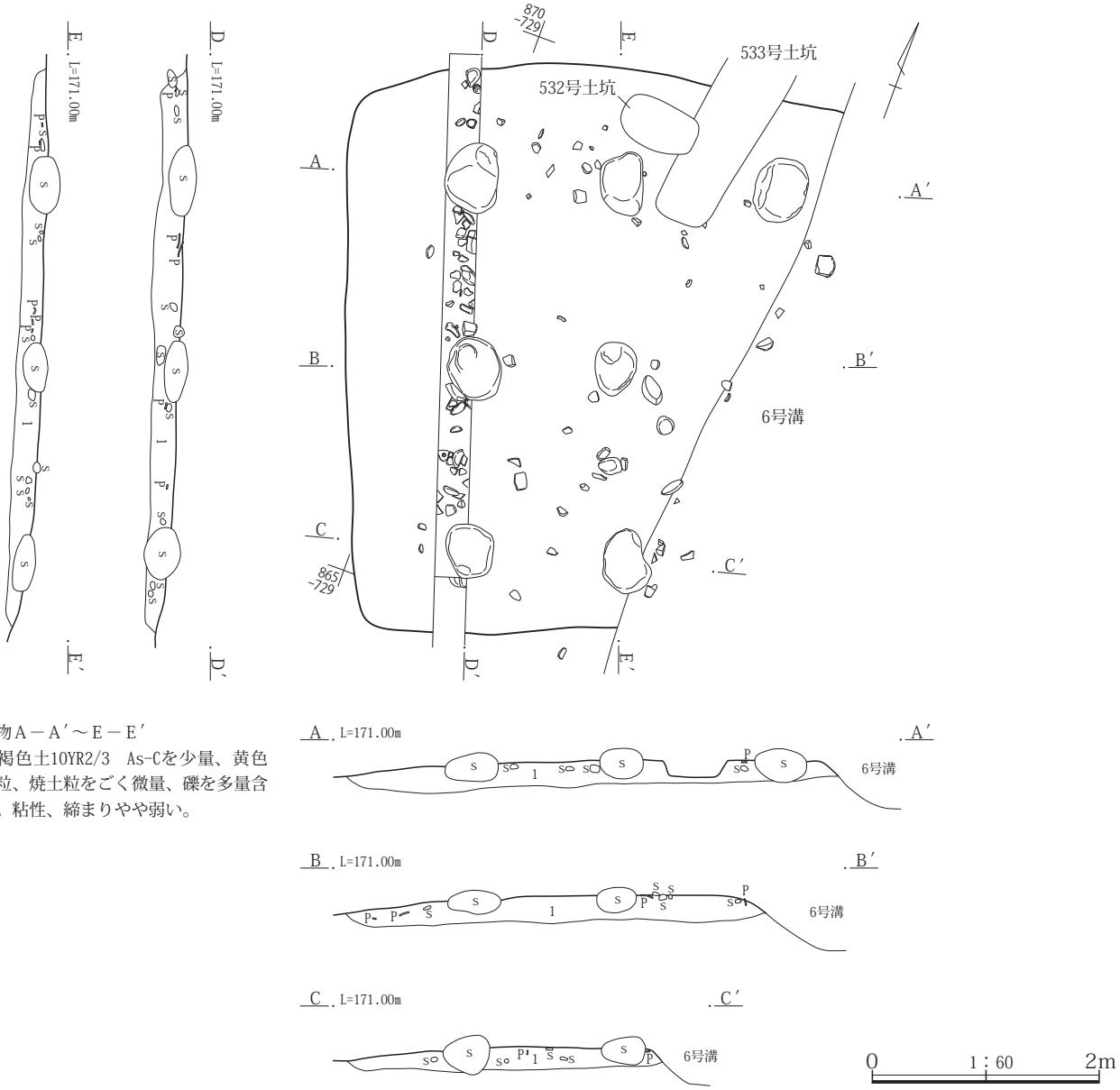
掘込地業の面積　(16.752㎡)

建物の主軸方位　N－19°－W

重複　６号溝、532号・533号土坑と重複し、いずれも１号建物が古い。

掘込地業の埋没土　少量のAs-C、ごく微量の黄色細粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中には多量の礫、瓦片などを含むが、これらは地盤改良を目的として人為的に敷き詰められたものであると考えられる。

出土遺物　掘込地業の埋没土中からは、多量の礫とともに８世紀前半を主体とする土器片、瓦片、銅製丸鞆(58)や釘などの金属製品、鉄滓などが出土している。ただし、この中にはわずかではあるが８世紀末～９世紀初頭の単弁五葉蓮華文軒丸瓦(23)、９世紀代の瓦塔(21)、10世紀



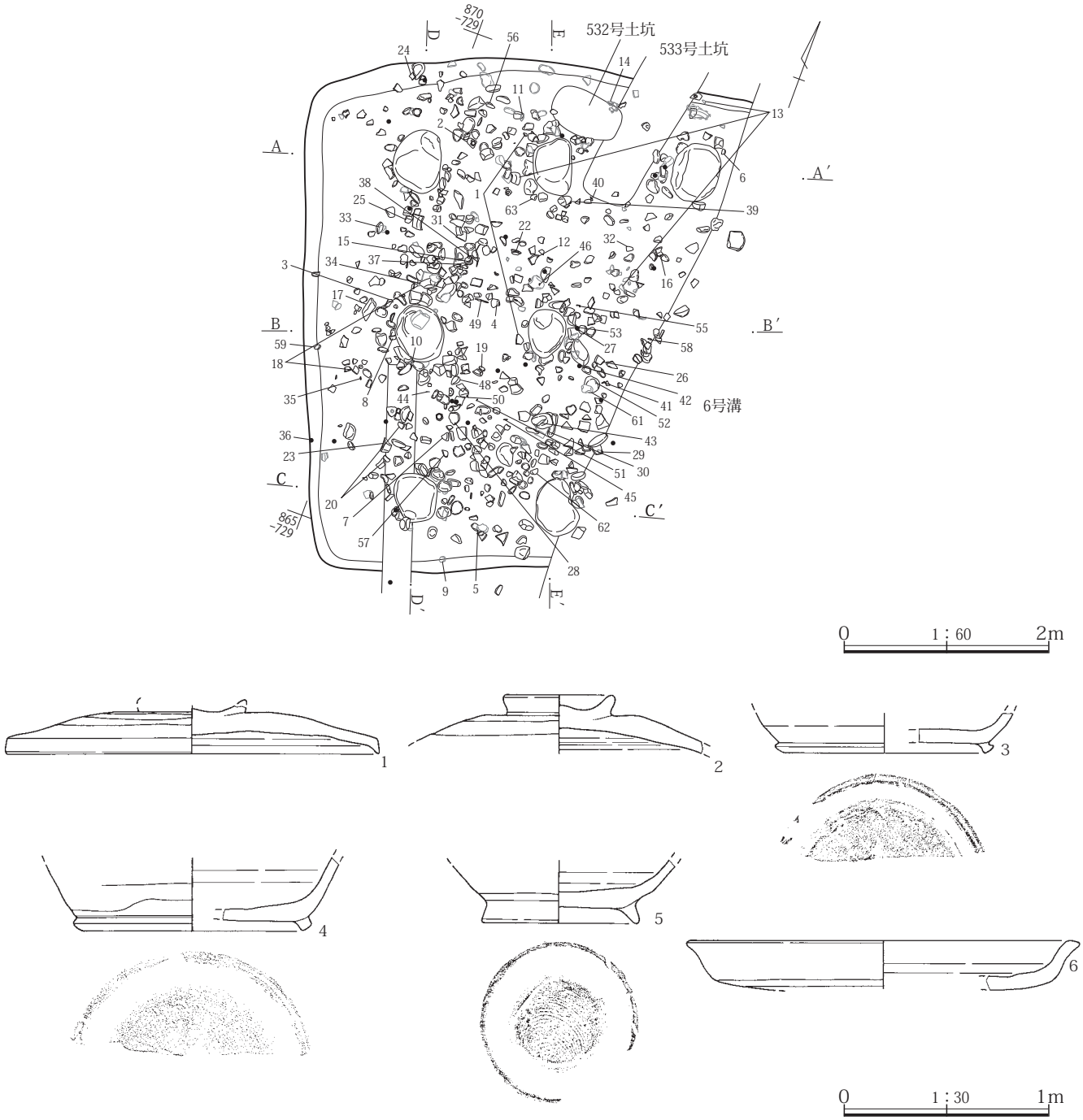
１号建物Ａ－Ａ′～Ｅ－Ｅ′

１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、黄色細粒、焼土粒をごく微量、礫を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

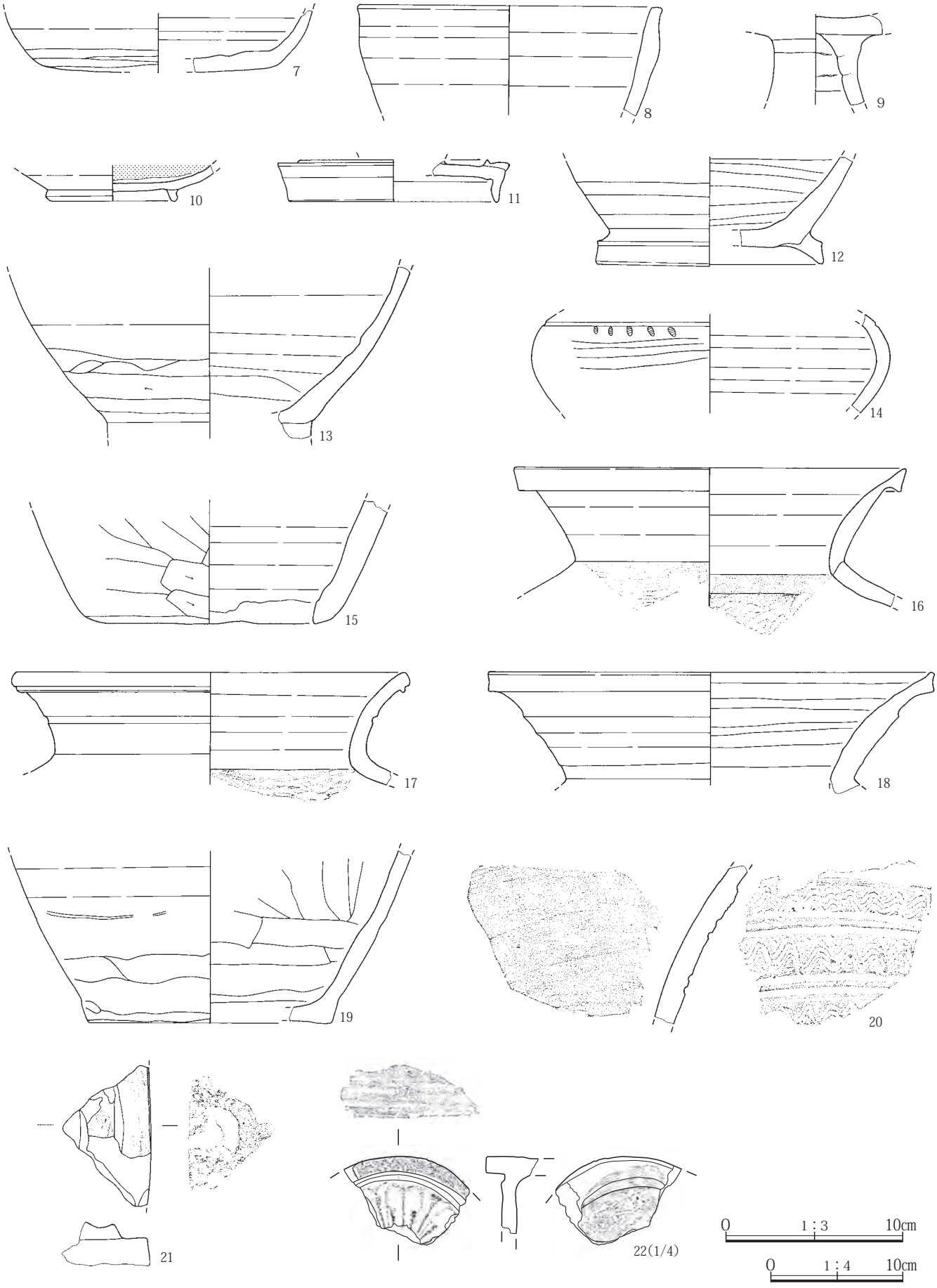
第297図　１号建物

前半の灰釉陶器椀(10)など、新しい時期の遺物が含まれていた。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片171点(408ｇ)、甕・壺類破片890点(2,530ｇ)、須恵器の杯・椀類破片426点(4,540ｇ)、甕・壺類破片266点(11,730ｇ)、瓦片86点、二次加工ある剝片１点(5.2ｇ)、石核１点(473.3ｇ)、凹石５点(1,966.3ｇ)、磨石４点(1,482.3ｇ)、敲石１点(241.6ｇ)、礫片１点(4.2ｇ)、剝片１点(14.8ｇ)が出土している。このうち磨石(63)については、写真のみを掲載した。また、凹石２点については、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

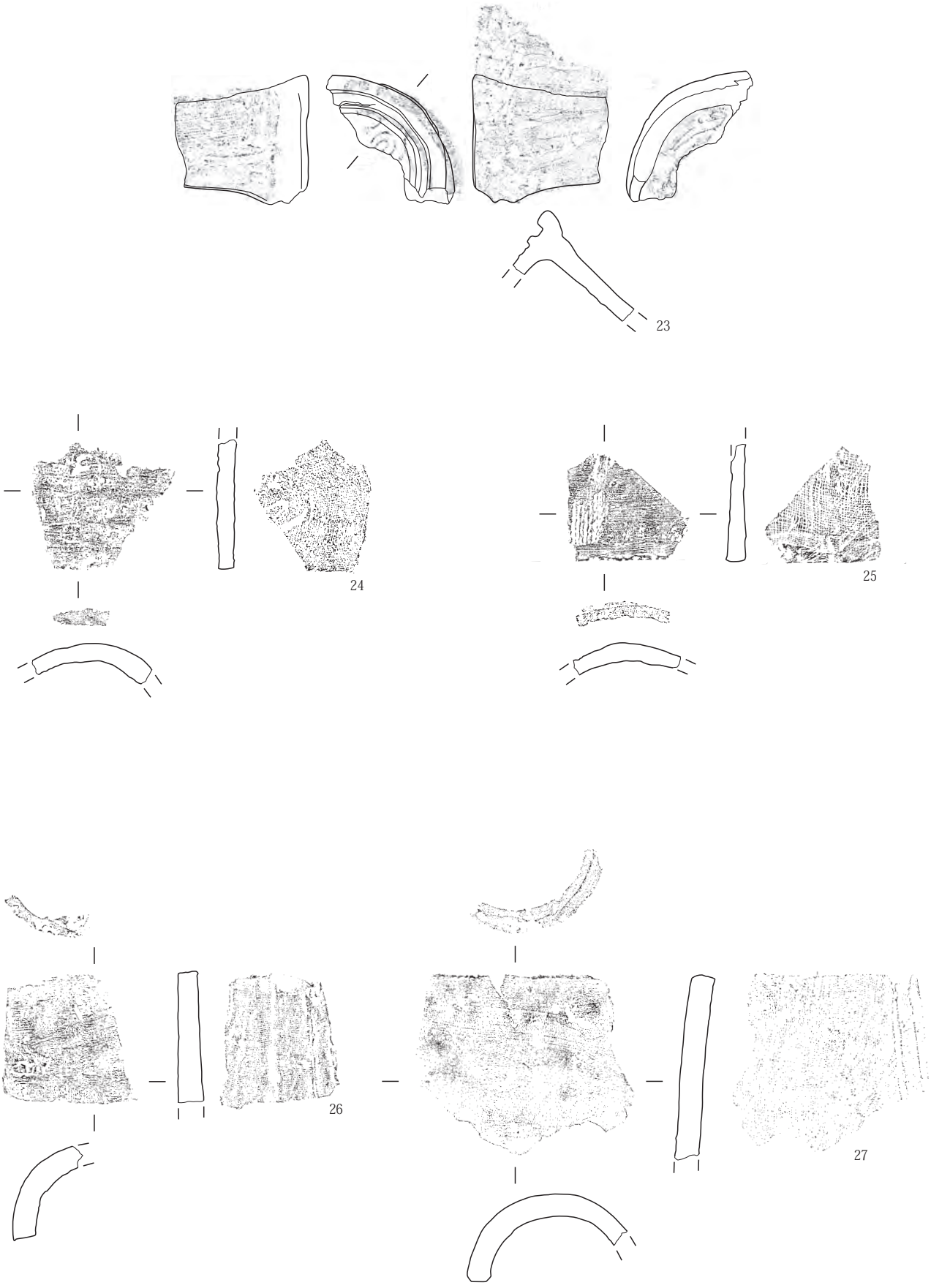
所見　出土遺物から８世紀前半以降の礎石建物(２間×２間または３間×２間の総柱)であると考えられる。規模が小さく総柱であることから、経堂など寺院に付随する倉庫のような施設であった可能性が考えられる。なお、本建物はAs-Bに被覆された状態で検出されたことから、天仁元(1108)年には建物は失われ、周辺は畑地になっていたと推測できる。



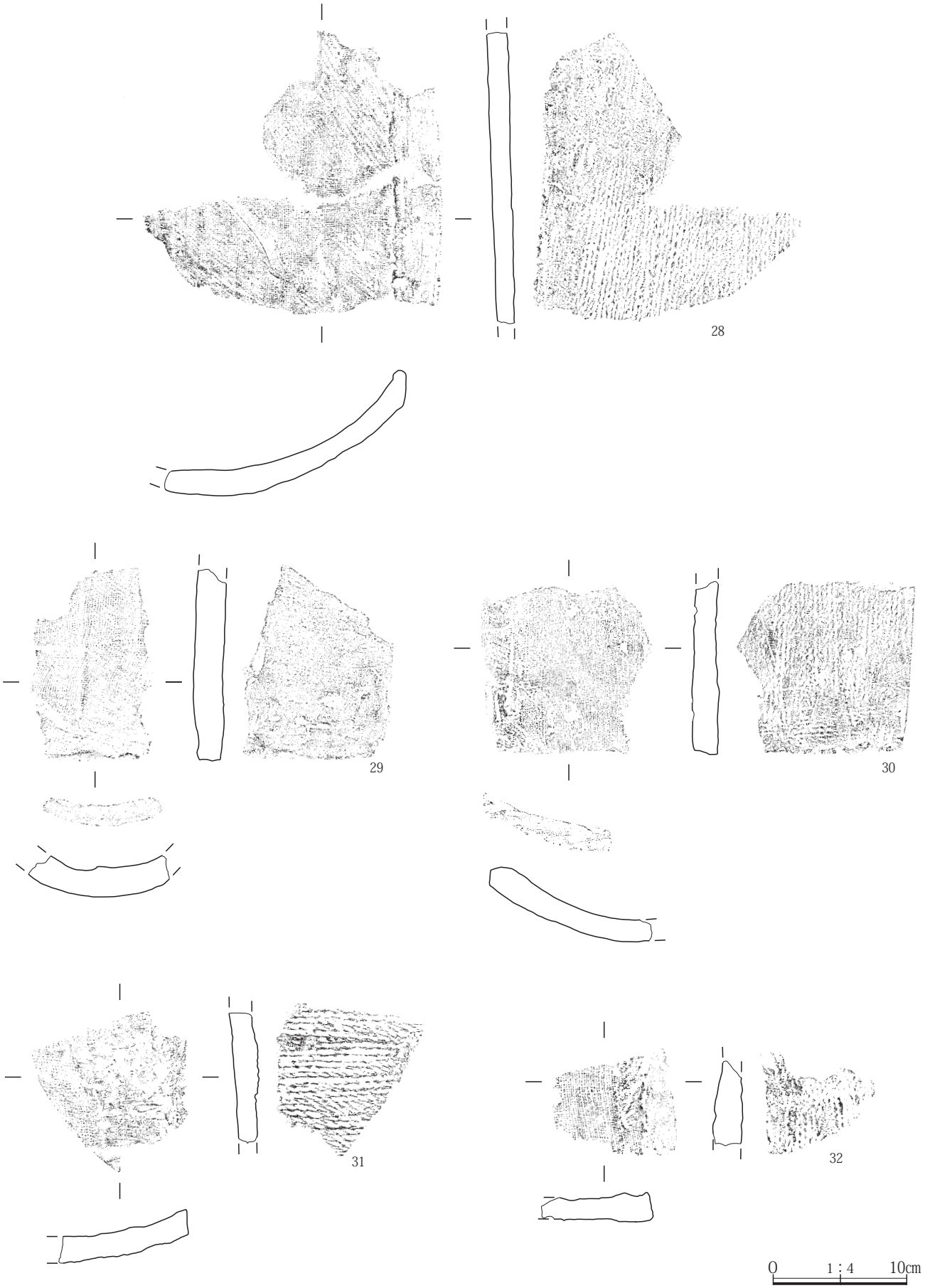
第298図　１号建物と出土遺物(１)



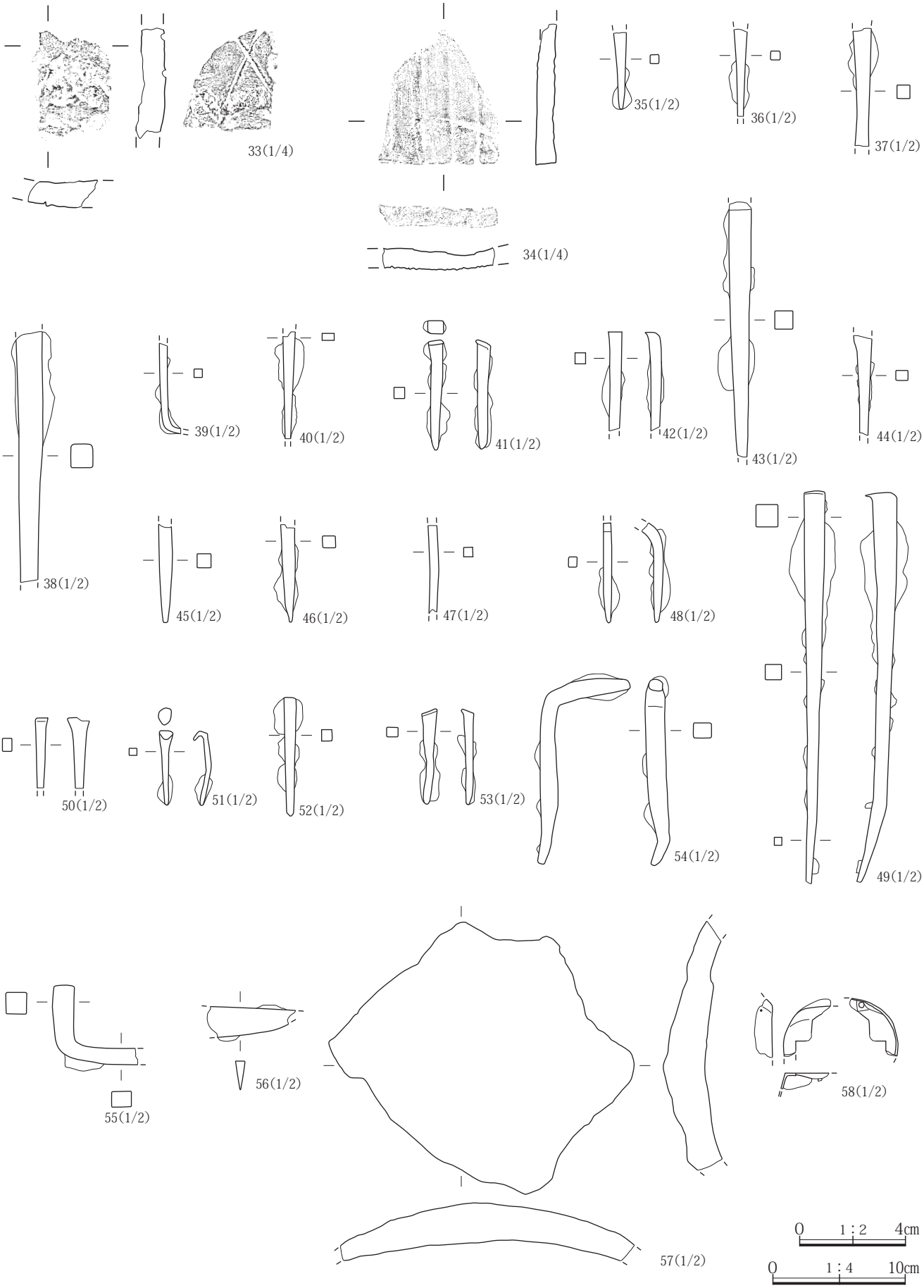
第299図　１号建物出土遺物（２）



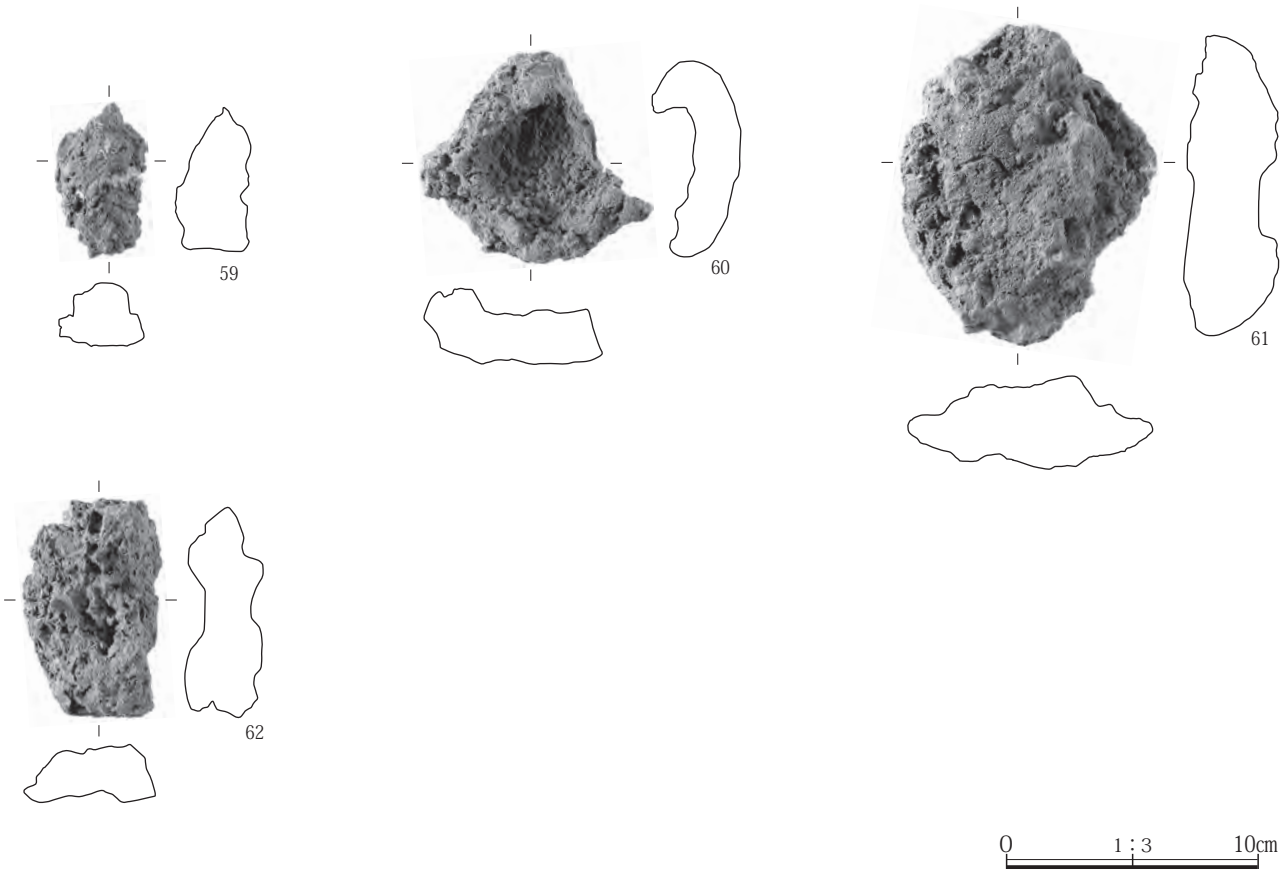
第300図　１号建物出土遺物（３）



第301図　１号建物出土遺物（４）



第302図　１号建物出土遺物（５）



第303図　１号建物出土遺物（６）

２号建物（第304・305図、PL.123・338）

位置　Ｘ＝40,880～40,885、Ｙ＝－80,714～－80,720（Ｃ・Ｄ区）

掘込地業の規模　長軸（5.76m）、短軸4.88m、残存深度0.13m

掘込地業の面積　26.464㎡

掘込地業の主軸方位　Ｎ－３°－Ｅ

重複　６号溝、528号・529号・531号土坑と重複し、いずれも２号建物が古い。

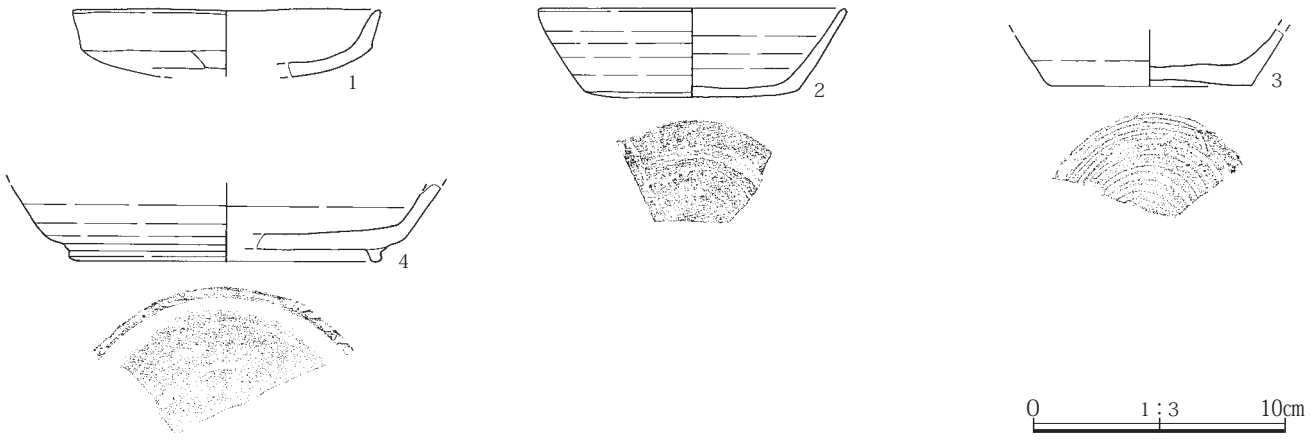
掘込地業の埋没土　上層は微量のAs-C、焼土粒、細砂を含む暗褐色土、下層は微量のAs-C、細砂を含む黒褐色土で埋没していた。いずれも礫、瓦片などを含むが、これらは１号建物と同様に地盤改良を目的として人為的に敷き詰められたものである可能性が考えられる。

出土遺物　掘込地業の埋没土中からは、礫とともに８世紀前半を主体とする土器片、瓦片などが出土している。ただし、この中には８世紀末～９世紀前半の須恵器杯（３）など、新しい時期の遺物が含まれていた。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片197点（506ｇ）、甕・壺類破片905点（2,080ｇ）、須恵器の杯・椀類破片306点（1,790ｇ）、甕・壺類破片285点（2,960ｇ）、瓦片13点、打製石斧１点（207.0ｇ）、二次加工ある剥片３点（199.5ｇ）、磨石２点（1,677.8ｇ）、礫片１点（5.0ｇ）、剥片７点（144.4ｇ）が出土している。このうち打製石斧、磨石２点については、遺構外出土遺物として写真のみを掲載した。

所見　建物の存在を示す明瞭な痕跡は確認できなかった。しかし、竪穴状の掘り込みの覆土中から礫や瓦が出土していることや、隣接する６号溝の埋没土中から礎石と思われる礫が複数出土していることなどから、８世紀前半以降の総地業の痕跡である可能性が考えられる。

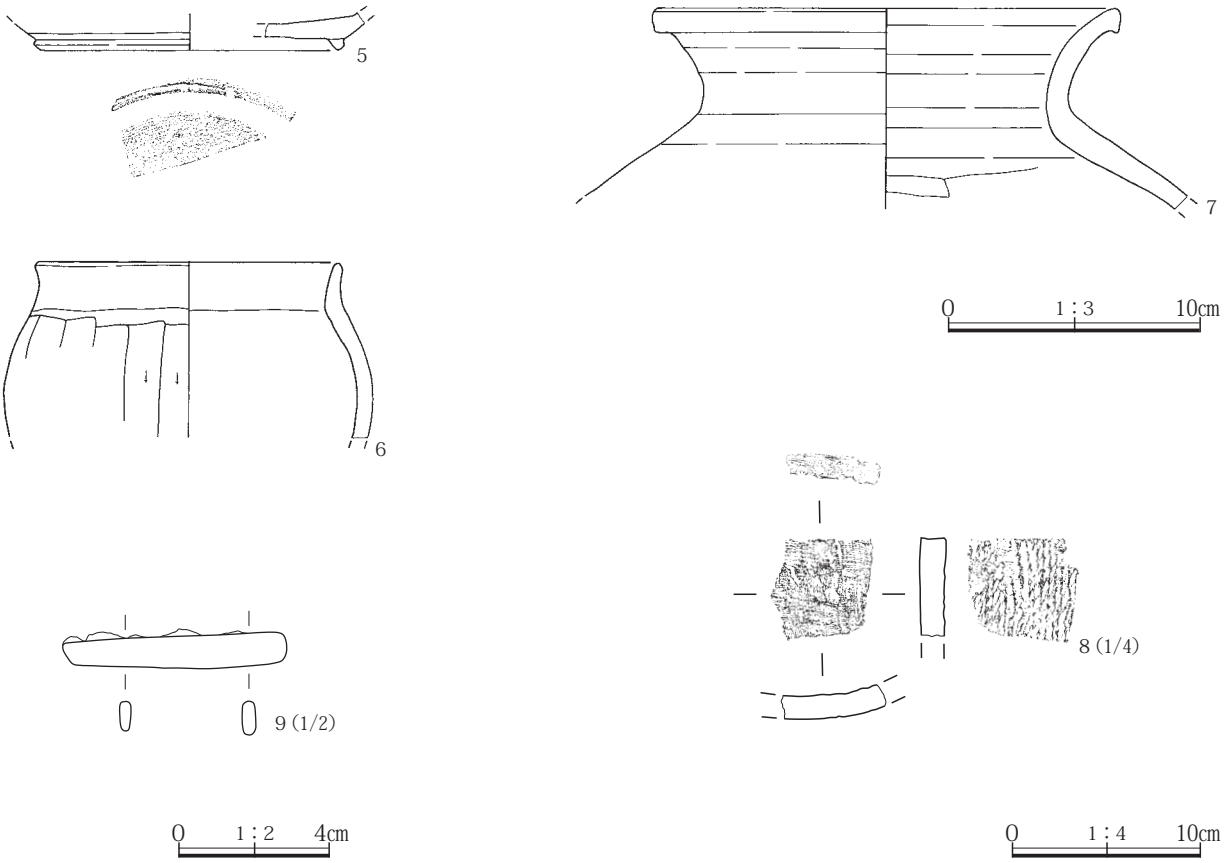
２号建物Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-C、焼土粒、細砂を微量、礫をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　As-C、細砂を微量、礫を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：60　2m



0　1：3　10cm

第304図　２号建物と出土遺物（１）



第305図　２号建物出土遺物（２）

３号建物（第306～323図、PL.123～134・338～345）

位置　X＝40,892～40,910、Y＝－80,708～－80,721（C・D区）

掘立柱建物の形態　桁行２間・梁行２間(3.62～3.68m×3.40～3.62m)の側柱建物である。南北棟。柱間は南北辺が1.60～2.34m、東西辺が1.61～1.90mである。

掘立柱建物の主軸方位　N－13°－W

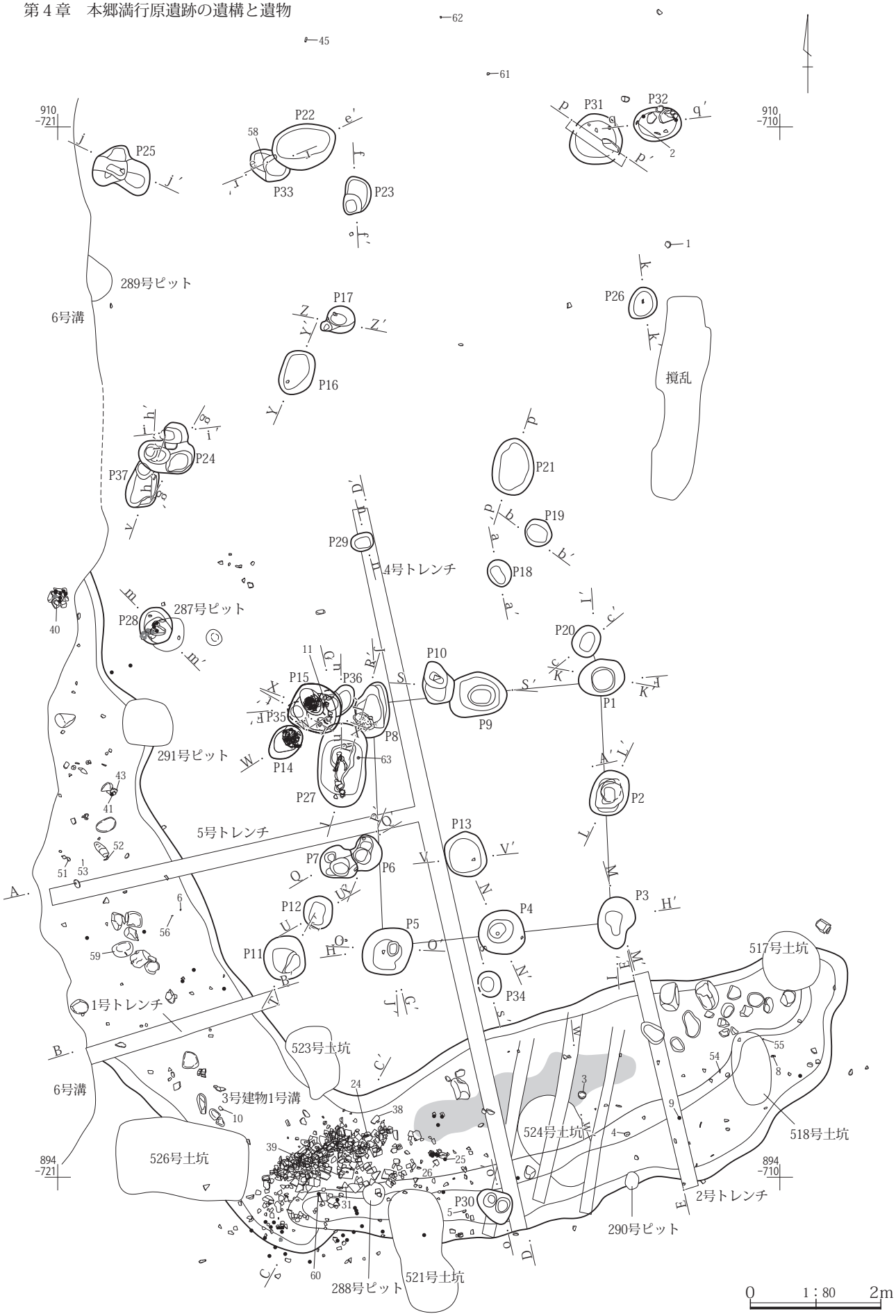
１号溝の規模　調査長(19.30m)、上幅2.26～3.12m、残存深度0.10～0.48m

１号溝の主軸方位　N－34°－W、N－68°－E

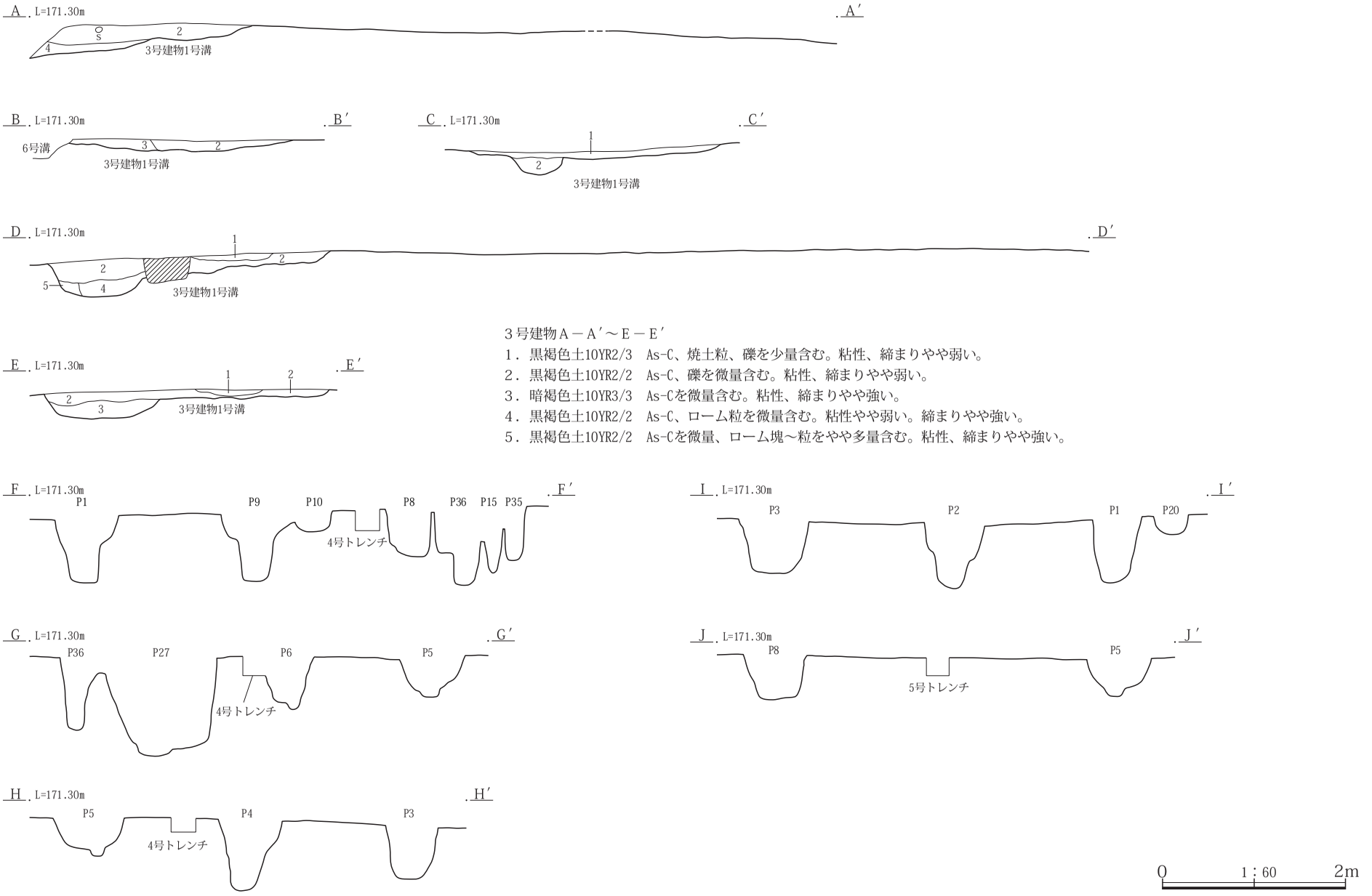
重複　１号溝が、６号溝、517号・518号・521号・523号・524号・526号土坑、288号・290号・291号ピットと重複し、いずれも１号溝が古い。また、P28が287号ピットと重複し、P28が古い。

１号溝の埋没土　上層は少量のAs-C、焼土粒、礫を含む黒褐色土、または微量のAs-C、礫を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-Cを含む暗褐色土、微量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土、または微量のAs-C、やや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

柱穴　１号溝の内側から、37基のピットを検出した。このうちＰ１～Ｐ５・Ｐ９・P36が、掘立柱建物の柱穴であると考えられる。それぞれのピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.70×0.55×0.74m、Ｐ２が0.70×0.56×0.73m、Ｐ３が0.77×0.56×0.86m、Ｐ４が0.70×0.68×0.78m、Ｐ５が0.75×0.70×0.43m、Ｐ６が(0.55)×0.44×0.59m、Ｐ７が0.55×0.53×0.51m、Ｐ８が0.85×0.56×0.56m、Ｐ９が0.86×0.65×0.77m、P10が0.65×0.46×0.46m、P11が0.69×0.67×0.53m、P12が0.48×0.47×0.26m、P13が0.69×0.60×0.22m、P14が0.57×0.43×0.54m、P15が0.78×0.72×0.73m、P16が0.69×0.50×0.14m、P17が0.54×0.42×0.46m、P18が0.42×0.36×0.32m、P19が0.42×0.41×0.21m、P20が0.46×0.41×0.30m、P21が0.84×0.67×0.21m、P22が0.97×0.68×0.27m、P23が0.55×0.40×0.58m、P24が0.83×0.78×1.01m、P25が0.90×0.70×0.66m、P26が0.45×0.42×0.19m、P27が1.27×0.73×1.12m、P28が0.55×0.50×0.70m、P29が0.34×0.27×0.29m、P30が0.56×0.47×0.70m、P31が0.78×0.78×0.10m、


910
-721
910
-710
894
-721
894
-710
P22
P25
P33
P23
P31
P32
289号ピット
6号溝
P17
P16
P26
攪乱
P24
P37
P21
P19
P18
P29
4号トレンチ
287号ピット
P28
P20
P10
P15
P36
P35
P9
P1
P8
291号ピット
P14
P27
P2
5号トレンチ
P13
P7
P6
P12
P5
P4
P3
P11
P34
517号土坑
1号トレンチ
523号土坑
6号溝
3号建物1号溝
524号土坑
518号土坑
526号土坑
2号トレンチ
P30
290号ピット
521号土坑
288号ピット
0　1：80　2m

第306図　３号建物

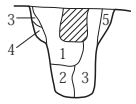


3号建物A－A′～E－E′

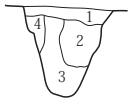
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、焼土粒、礫を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、礫を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

第307図　３号建物土層断面図（１）

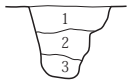
P1
K．L=171.30m　．K′



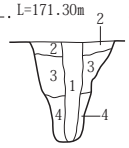
P2
L．L=171.30m　．L′



P3
M．L=171.30m　．M′



P4
N．L=171.30m　．N′



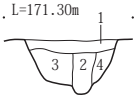
３号建物Ｐ１Ｋ－Ｋ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
5．暗褐色土10YR3/4　ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ２Ｌ－Ｌ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
4．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、黒褐色土塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

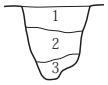
３号建物Ｐ３Ｍ－Ｍ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ４Ｎ－Ｎ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まり弱い。柱痕。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム塊を少量含む。粘性、締まりやや強い。

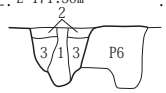
P5
O．L=171.30m　．O′



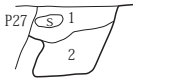
P6
P．L=171.30m　．P′



P7
Q．L=171.30m　．Q′



P8
R．L=171.30m　．R′



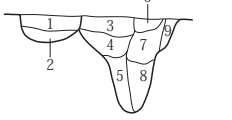
３号建物Ｐ５Ｏ－Ｏ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ６Ｐ－Ｐ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cをごく微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

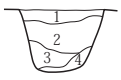
３号建物Ｐ７Ｑ－Ｑ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　夾雑物を含まない。粘性、締まりやや強い。

３号建物Ｐ８Ｒ－Ｒ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、炭化材を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

P10　P9
S．L=171.30m　．S′

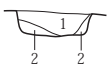


P11
T．L=171.30m　．T′



P12
U．L=171.30m　．U′

P13
V．L=171.30m　．V′



３号建物Ｐ９・10Ｓ－Ｓ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性弱い。締まり強い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
4．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。
6．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊を多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
7．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
8．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
9．暗褐色土10YR3/3　ローム粒を微量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

３号建物Ｐ11Ｔ－Ｔ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　ローム塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。

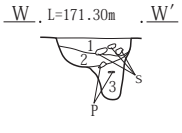
３号建物Ｐ12Ｕ－Ｕ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-Cをごく微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ13Ｖ－Ｖ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。

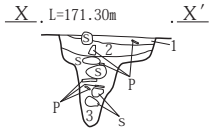
0　1：60　2m

第308図　３号建物土層断面図（２）

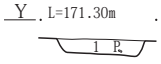
P14



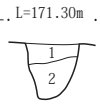
P15



P16



P17



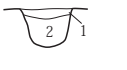
３号建物Ｐ14Ｗ－Ｗ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

３号建物Ｐ15Ｘ－Ｘ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム塊、炭化物粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ16Ｙ－Ｙ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-C､焼土粒を少量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

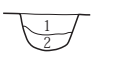
３号建物Ｐ17Ｚ－Ｚ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/2　As-Cをごく微量含む。粘性、締まり弱い。

P18

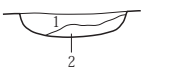


P19

P20



P21



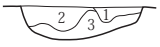
３号建物Ｐ18ａ－ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ19ｂ－ｂ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

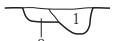
３号建物Ｐ20ｃ－ｃ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや強い。

３号建物Ｐ21ｄ－ｄ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　ローム小塊、黒褐色土塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

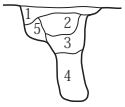
P22



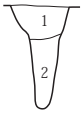
P23



P24



P24



P24

３号建物Ｐ22ｅ－ｅ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C､ローム小塊を少量含む。粘性､締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量、ローム塊を多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

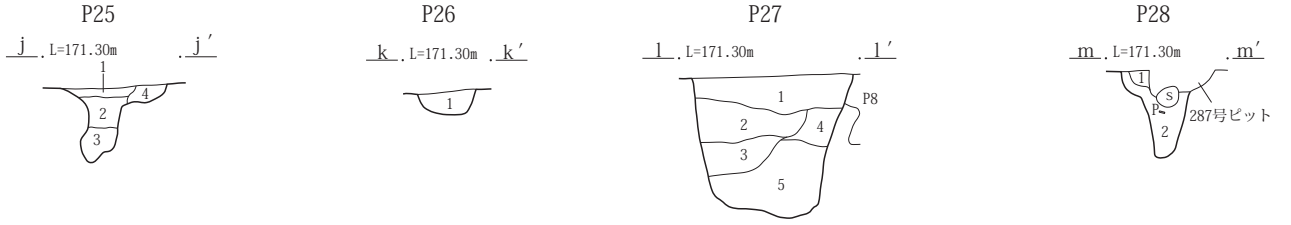
３号建物Ｐ23ｆ－ｆ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム小塊を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-C､焼土細粒を微量含む。粘性､締まりやや強い。

３号建物Ｐ24ｇ－ｇ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/4　As-Cを少量、As-YP、ローム塊～小塊を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/3　ローム粒をごく微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
4．黒褐色土10YR2/2　As-YPをごく微量含む。粘性、締まり弱い。
5．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム塊を主体とし、As-YPを微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ24ｈ－ｈ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、As-YPを少量含む。粘性、締まり弱い。

３号建物Ｐ24ｉ－ｉ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒をやや多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量、ローム粒を少量含む。粘性、締まり弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粒を少量含む。粘性、締まり弱い。

第309図　３号建物土層断面図（３）

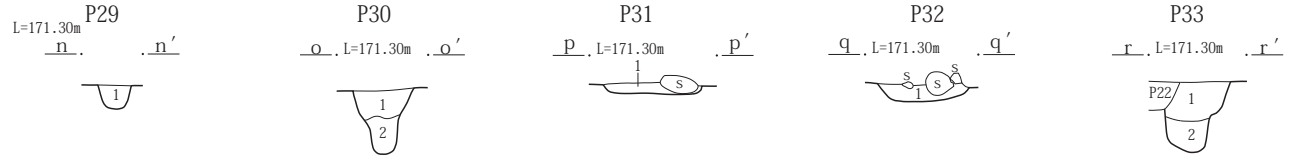


３号建物Ｐ25ｊ－ｊ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Cを少量、焼土粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/3　As-YP、ローム粒を少量含む。粘性、締まり弱い。
4．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム塊～小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ26ｋ－ｋ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊、焼土塊～粒を少量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ27ｌ－ｌ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム小塊、ローム粒、炭化材をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性、締まり弱い。
4．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。
5．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ28ｍ－ｍ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、暗褐色土塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒、砂を少量含む。粘性、締まりやや弱い。



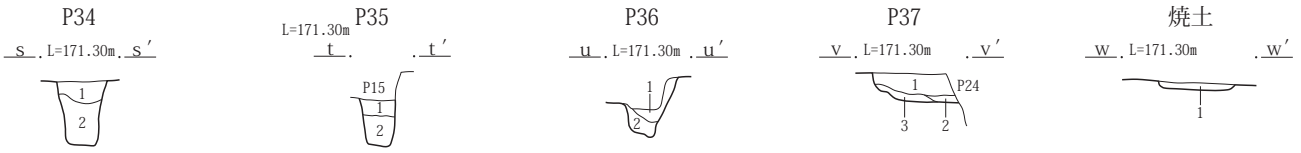
３号建物Ｐ29ｎ－ｎ′
1．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊を多量含む。粘性、締まりやや強い。

３号建物Ｐ30ｏ－ｏ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

３号建物Ｐ31ｐ－ｐ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ32ｑ－ｑ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

３号建物Ｐ33ｒ－ｒ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。



３号建物Ｐ34ｓ－ｓ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム小塊、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ35ｔ－ｔ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

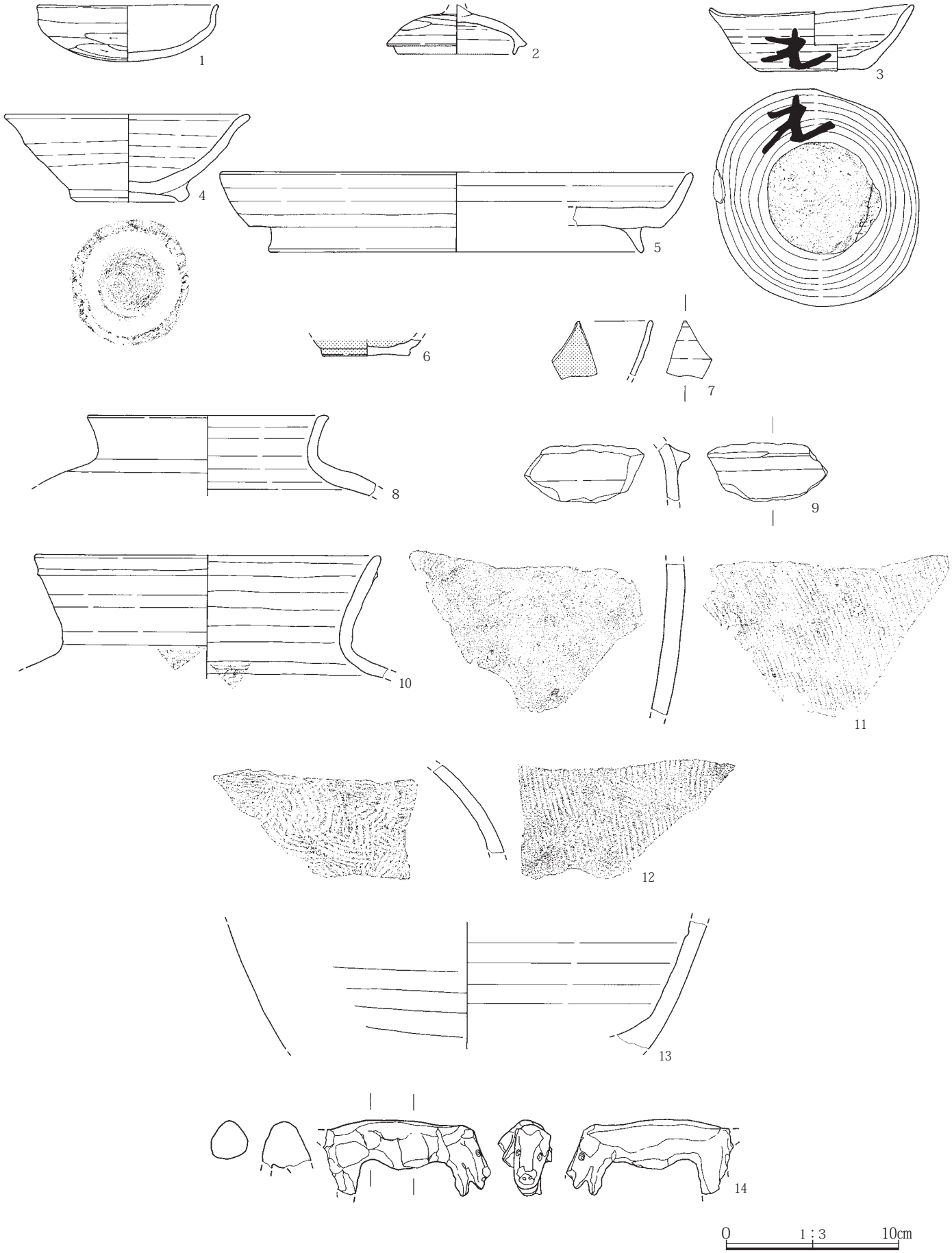
３号建物Ｐ36ｕ－ｕ′
1．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粗塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。

３号建物Ｐ37ｖ－ｖ′
1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
3．暗褐色土10YR3/4　ローム小塊を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

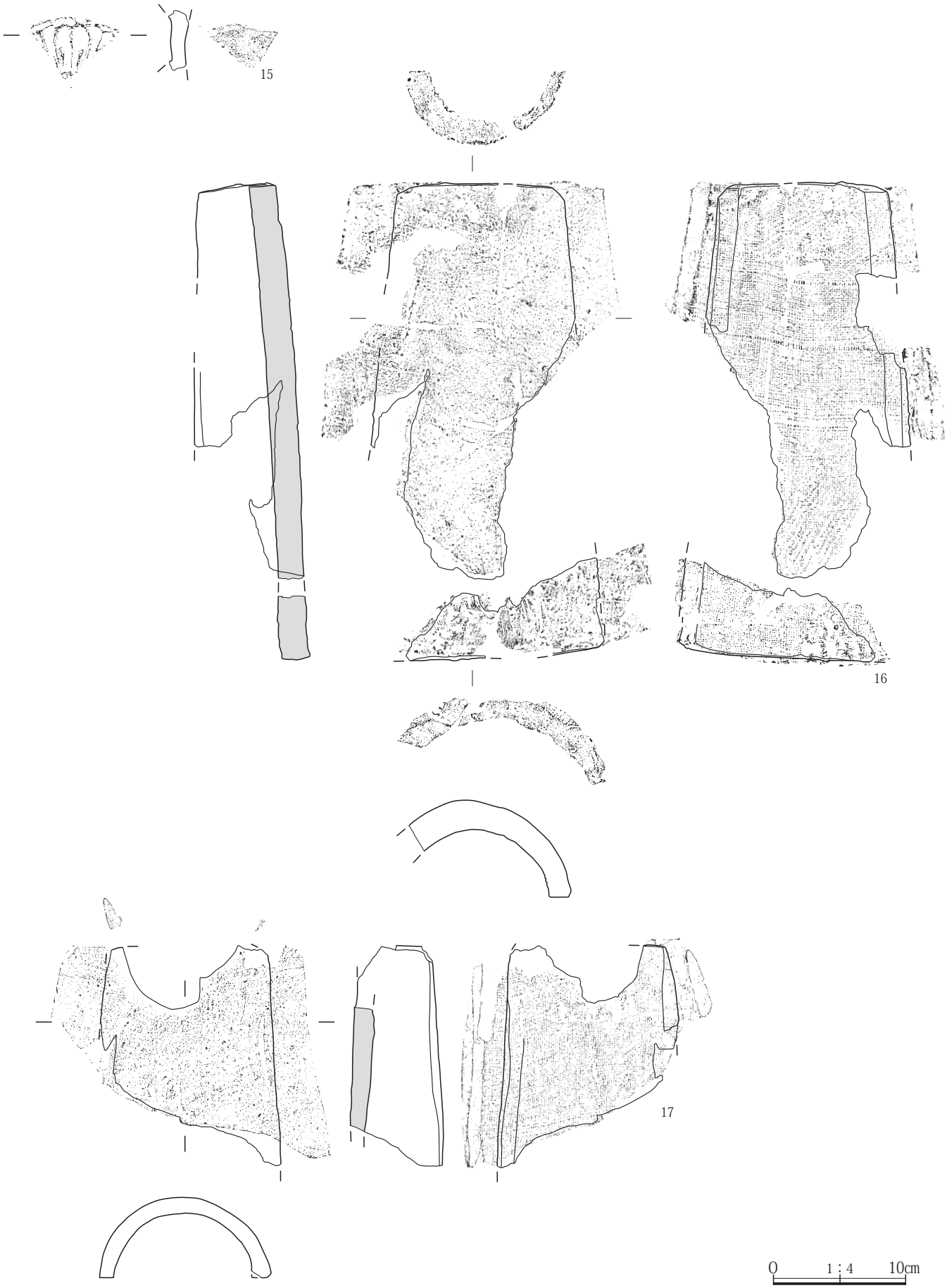
３号建物焼土ｗ－ｗ′
1．暗褐色土10YR3/3　焼土粗塊を多量、焼土粒を少量含む。粘性弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

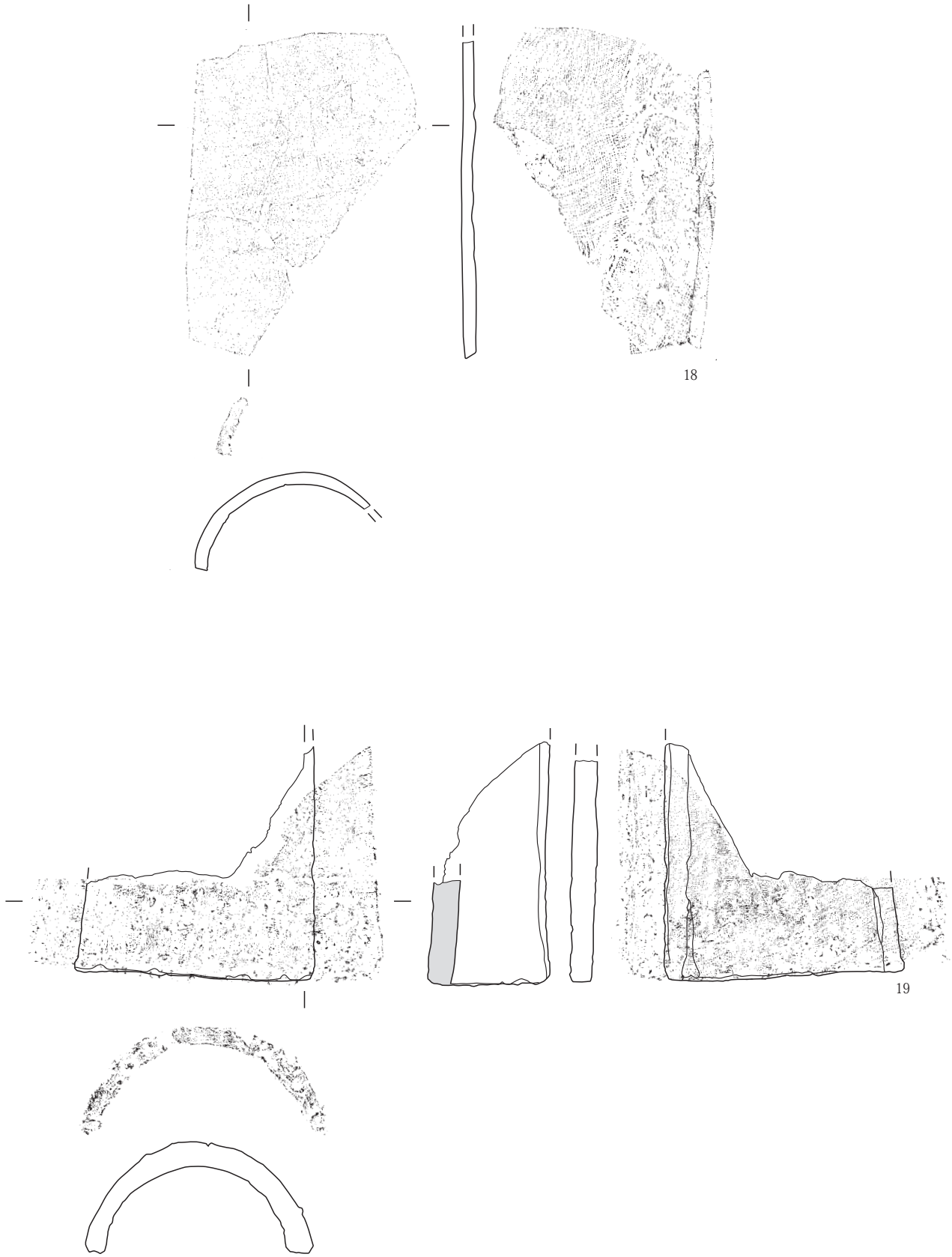
第310図　３号建物土層断面図（４）



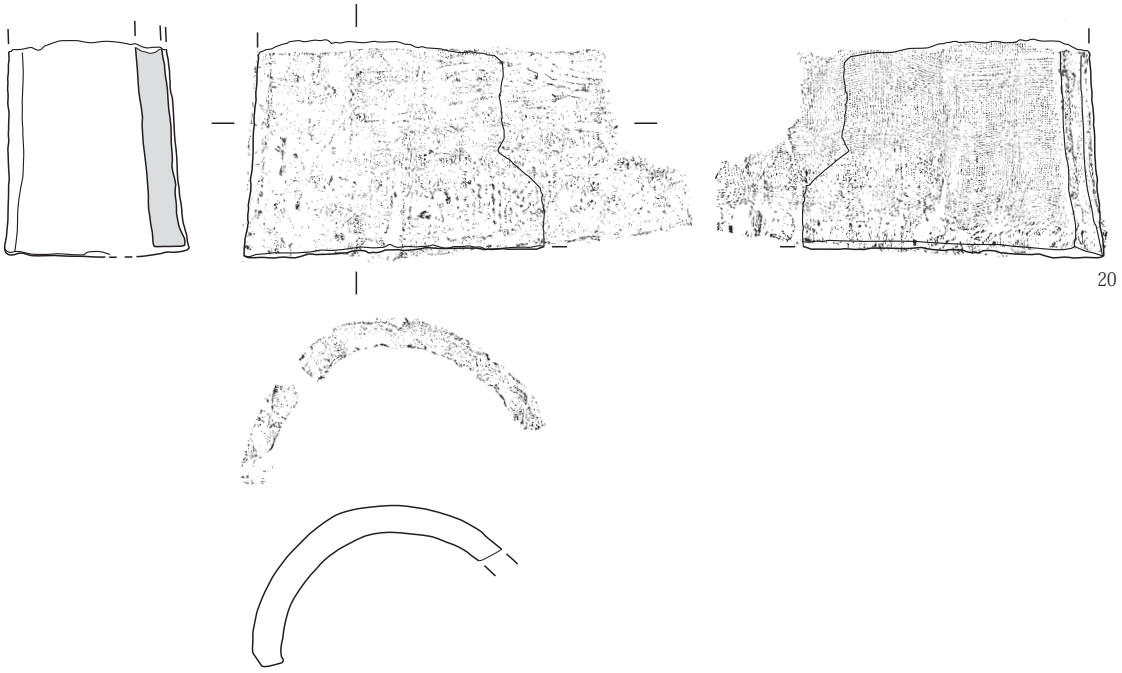
第311図　３号建物出土遺物（１）



第312図　３号建物出土遺物（２）

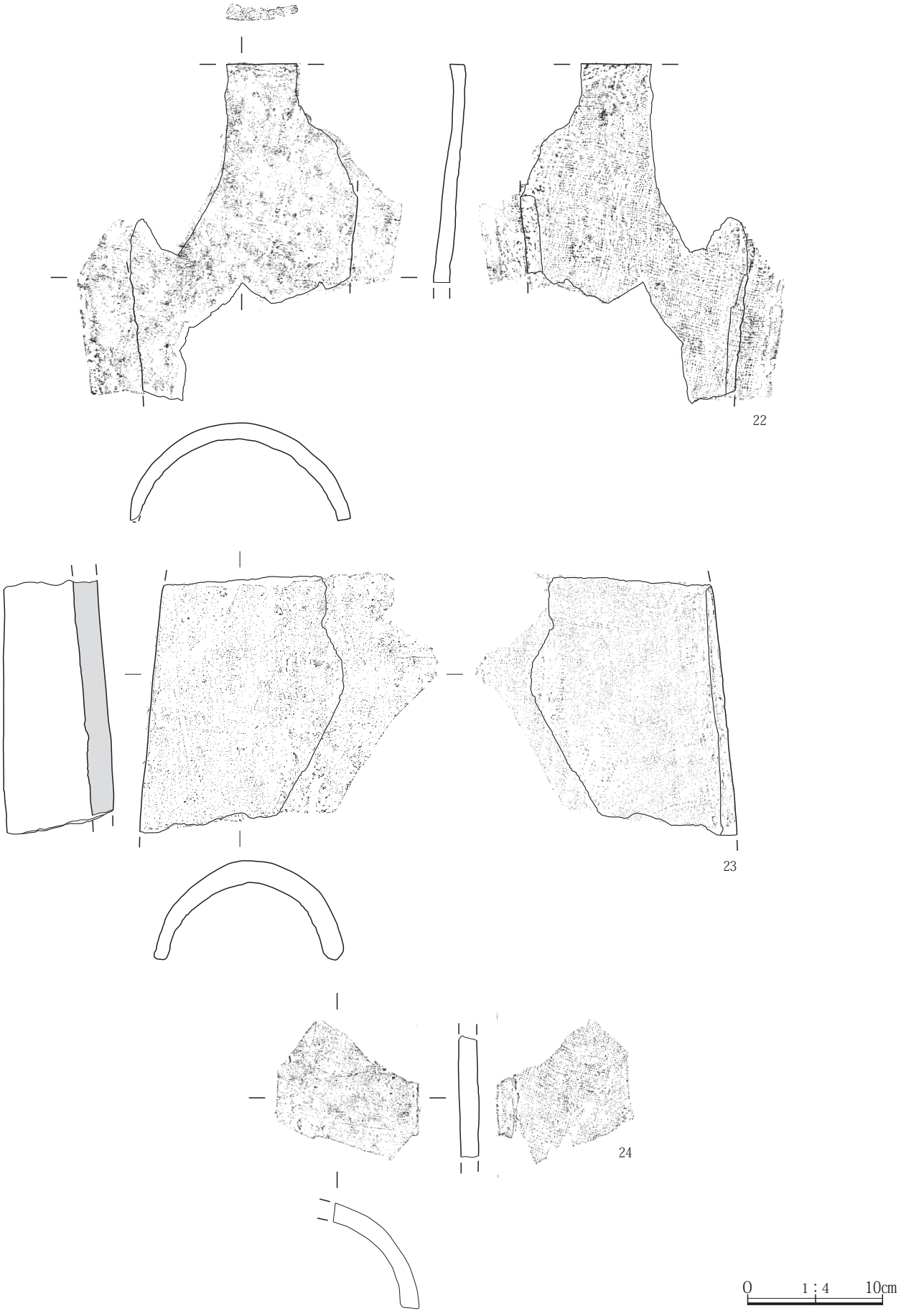


第313図　３号建物出土遺物（３）

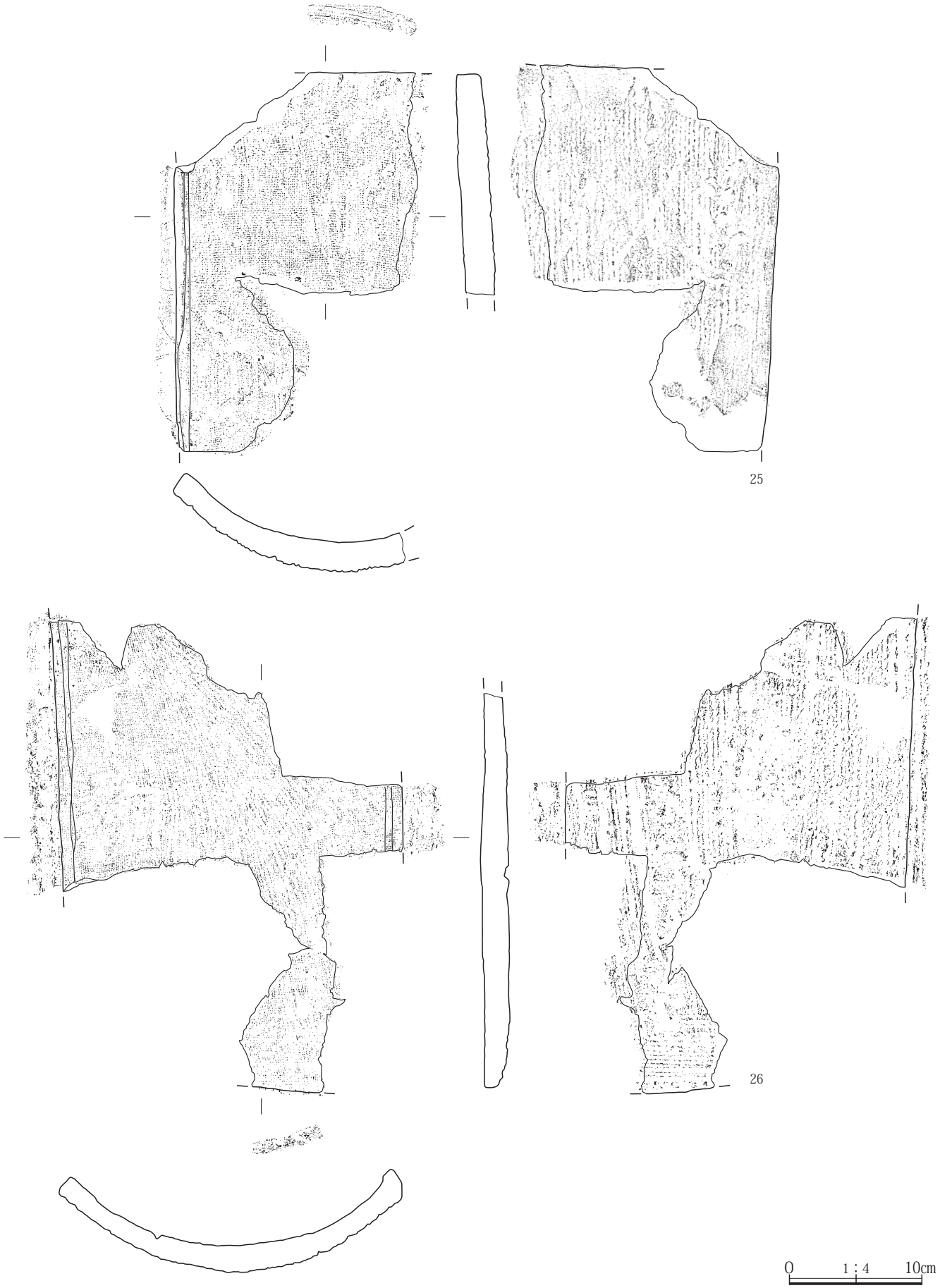


0　1：4　10cm

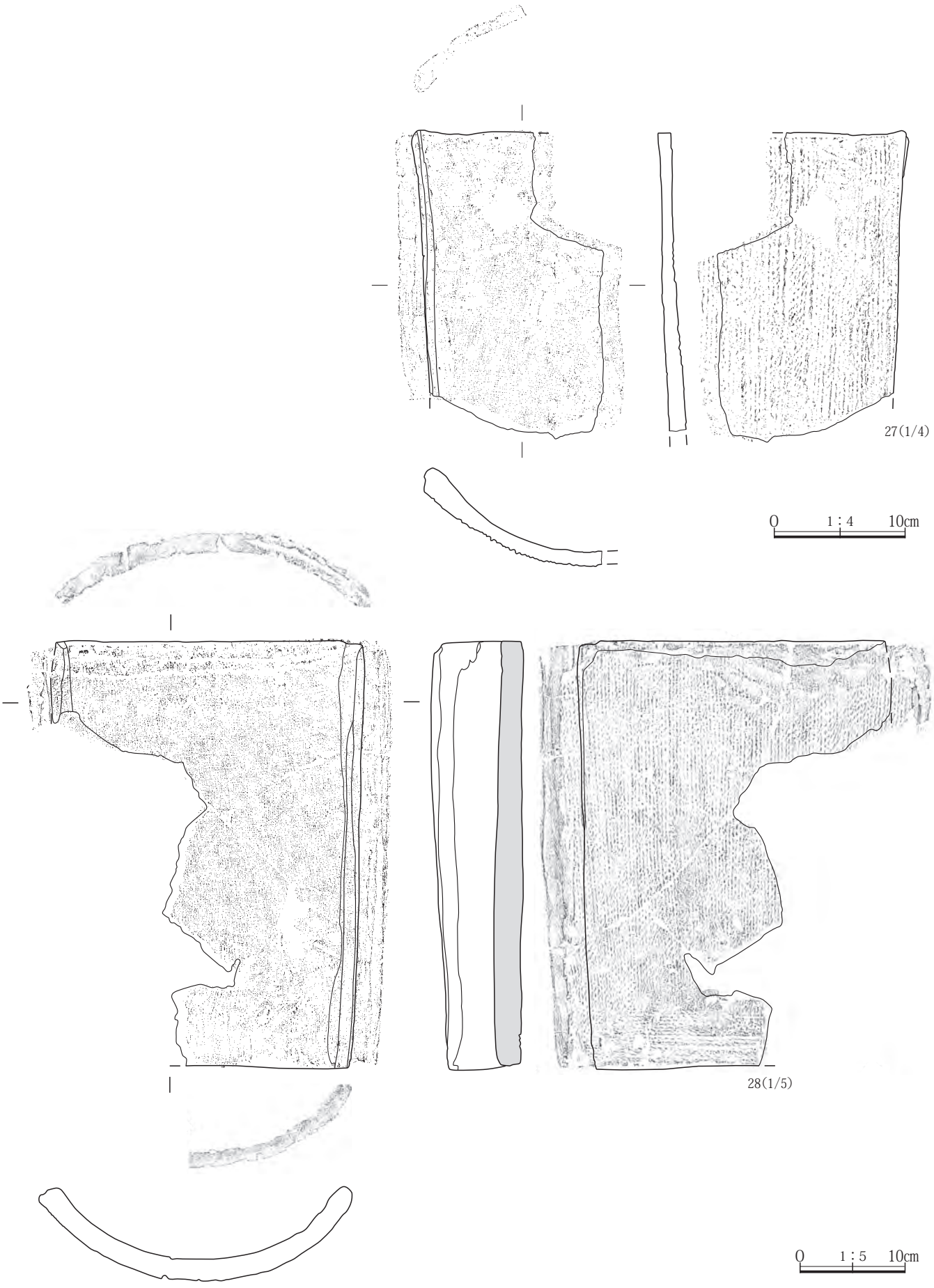
第314図　３号建物出土遺物（４）



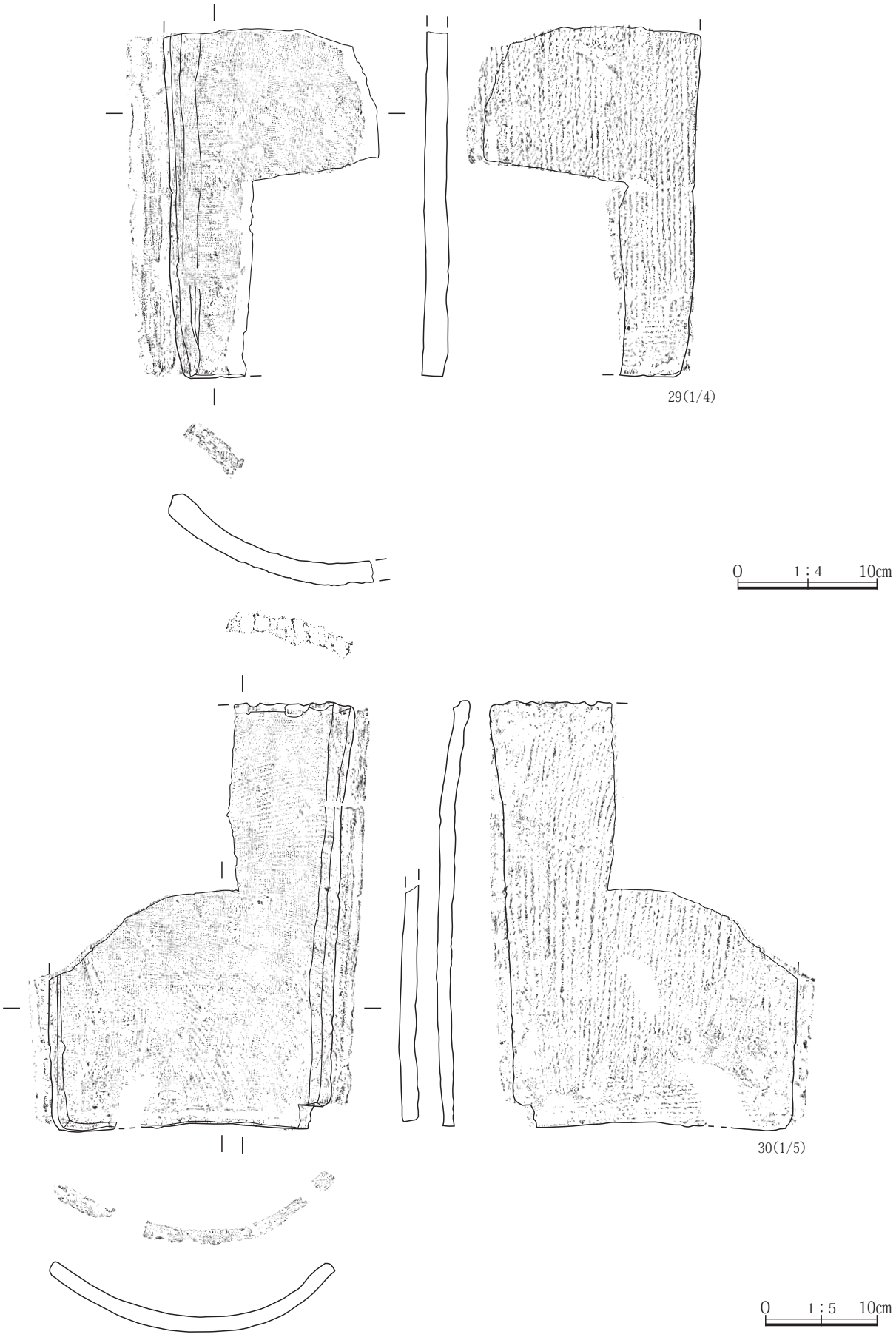
第315図　３号建物出土遺物（５）



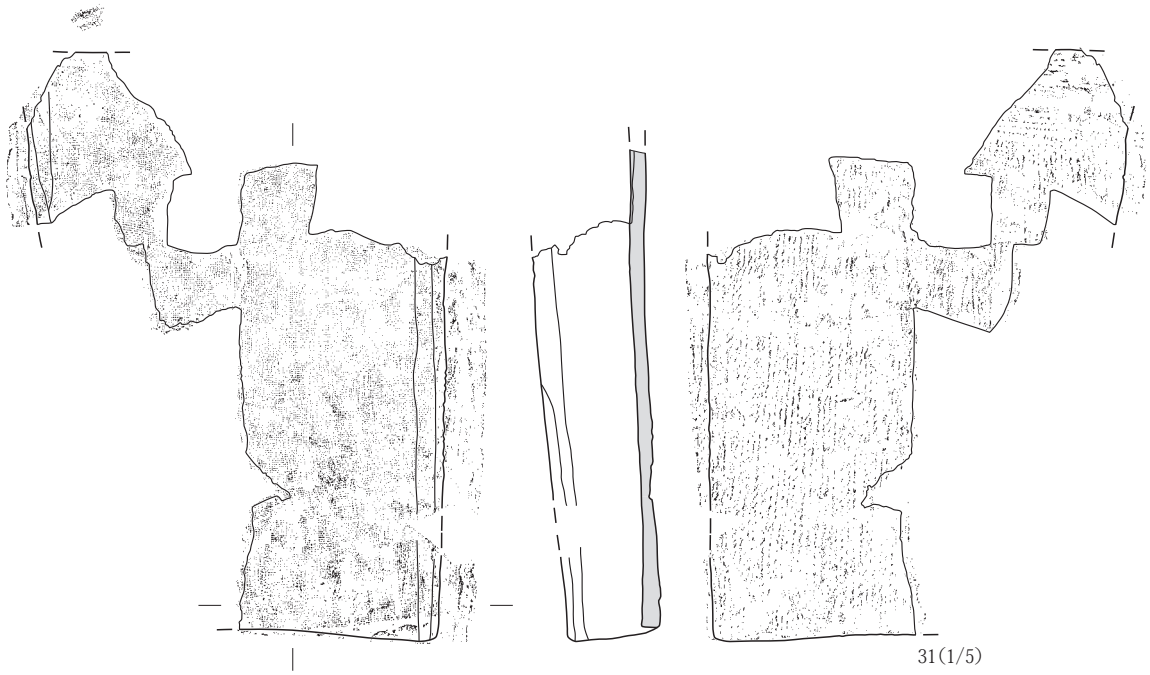
第316図　３号建物出土遺物（６）

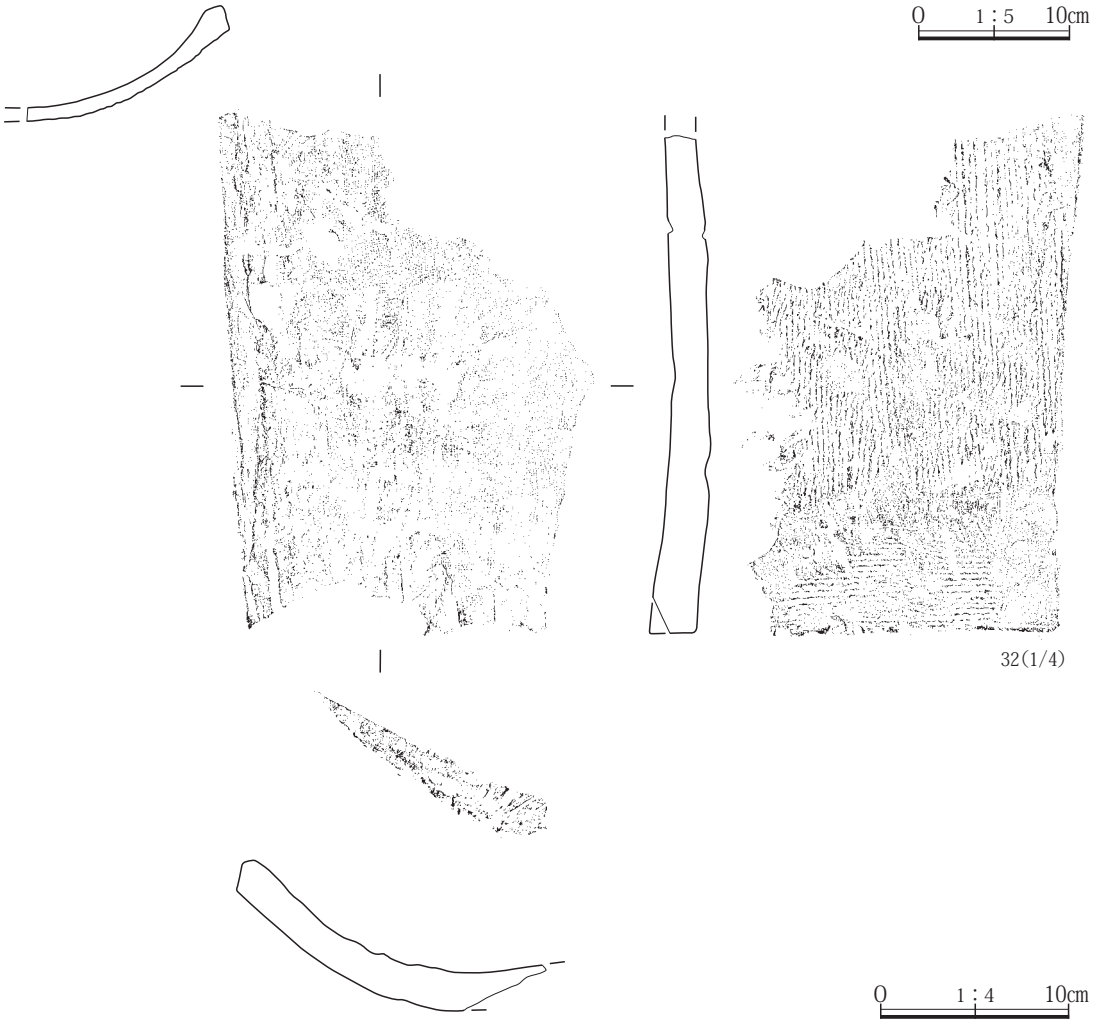


第317図　３号建物出土遺物（７）



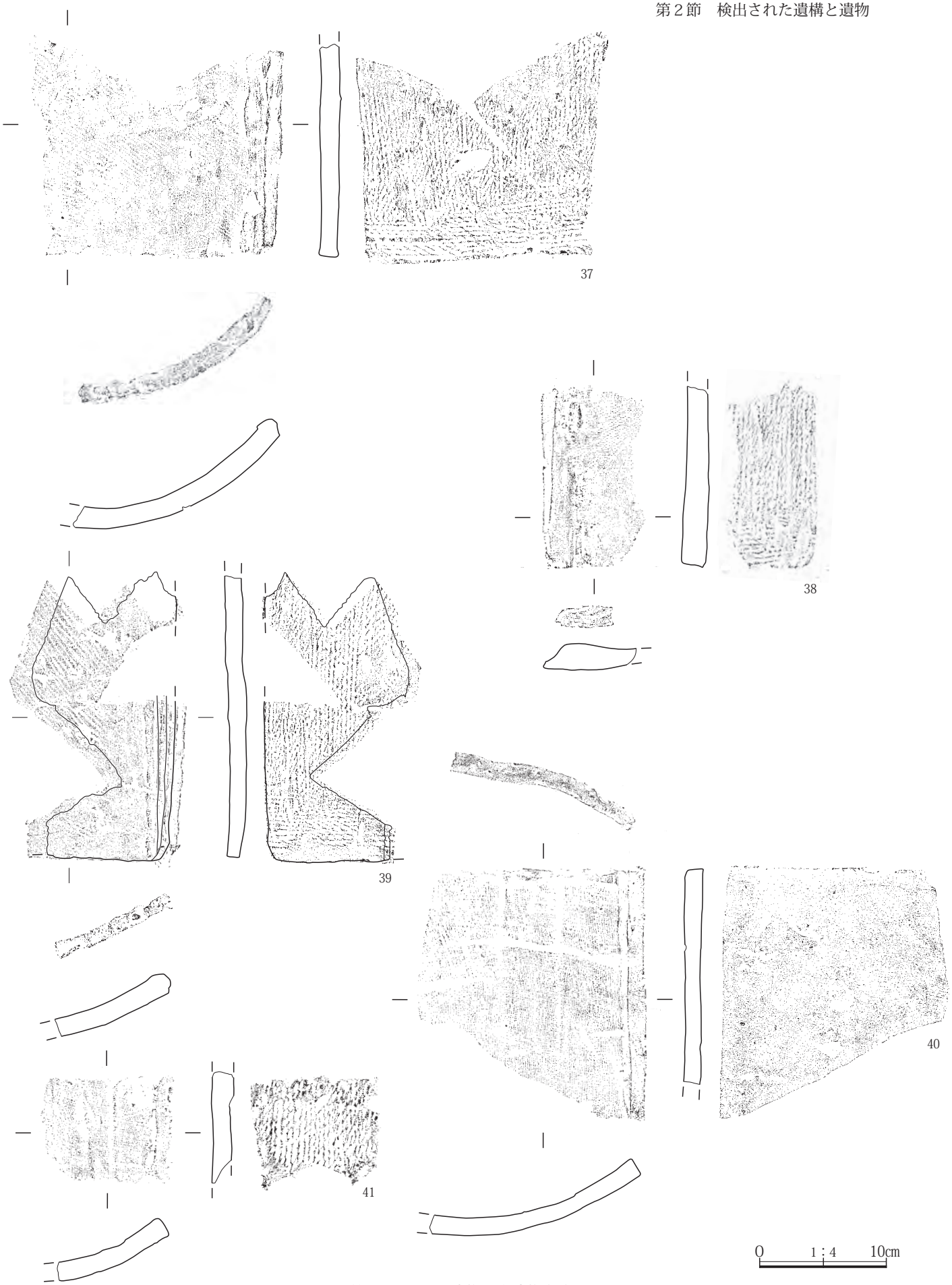
第318図　３号建物出土遺物（８）



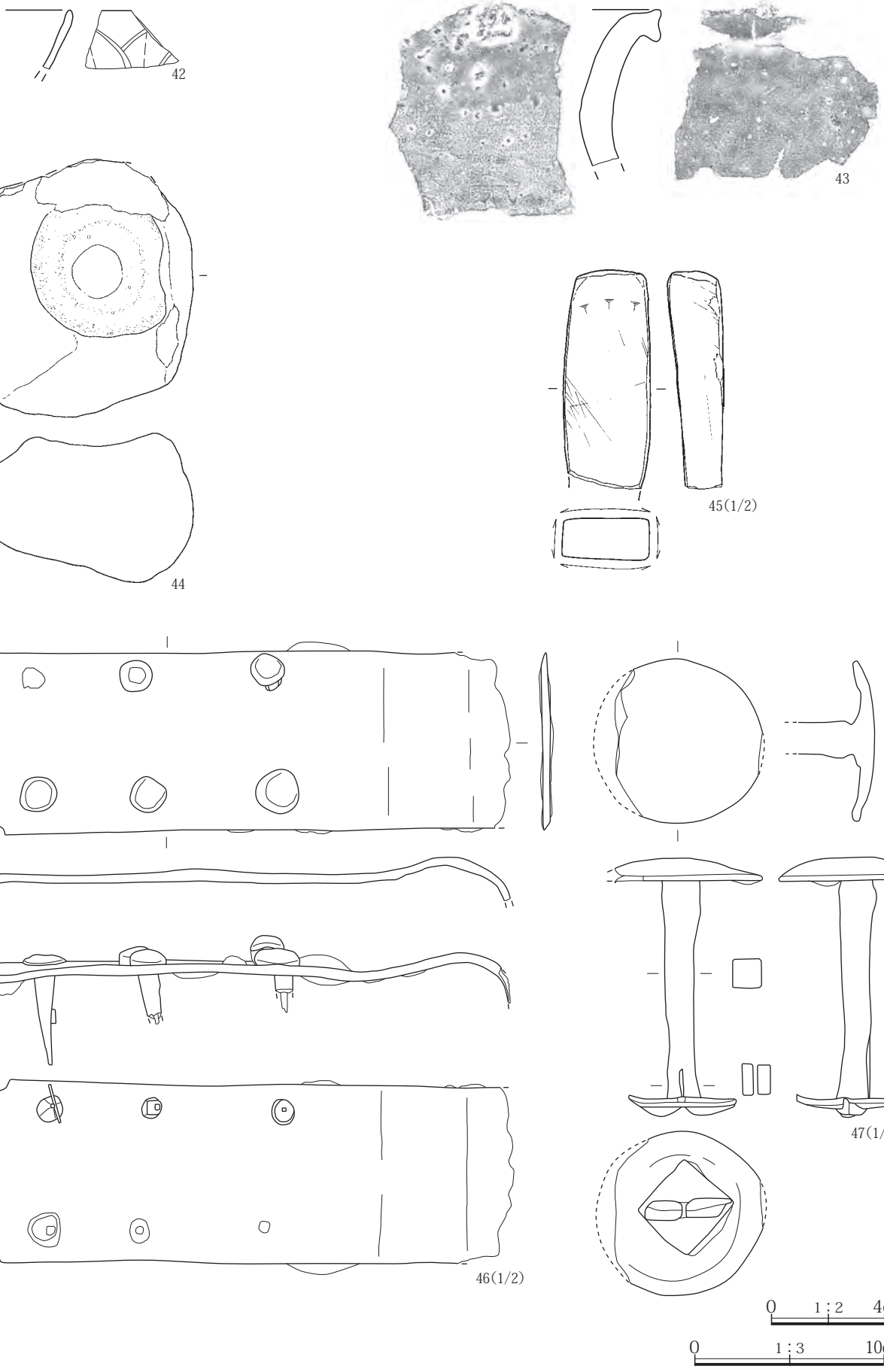


第319図　３号建物出土遺物（９）

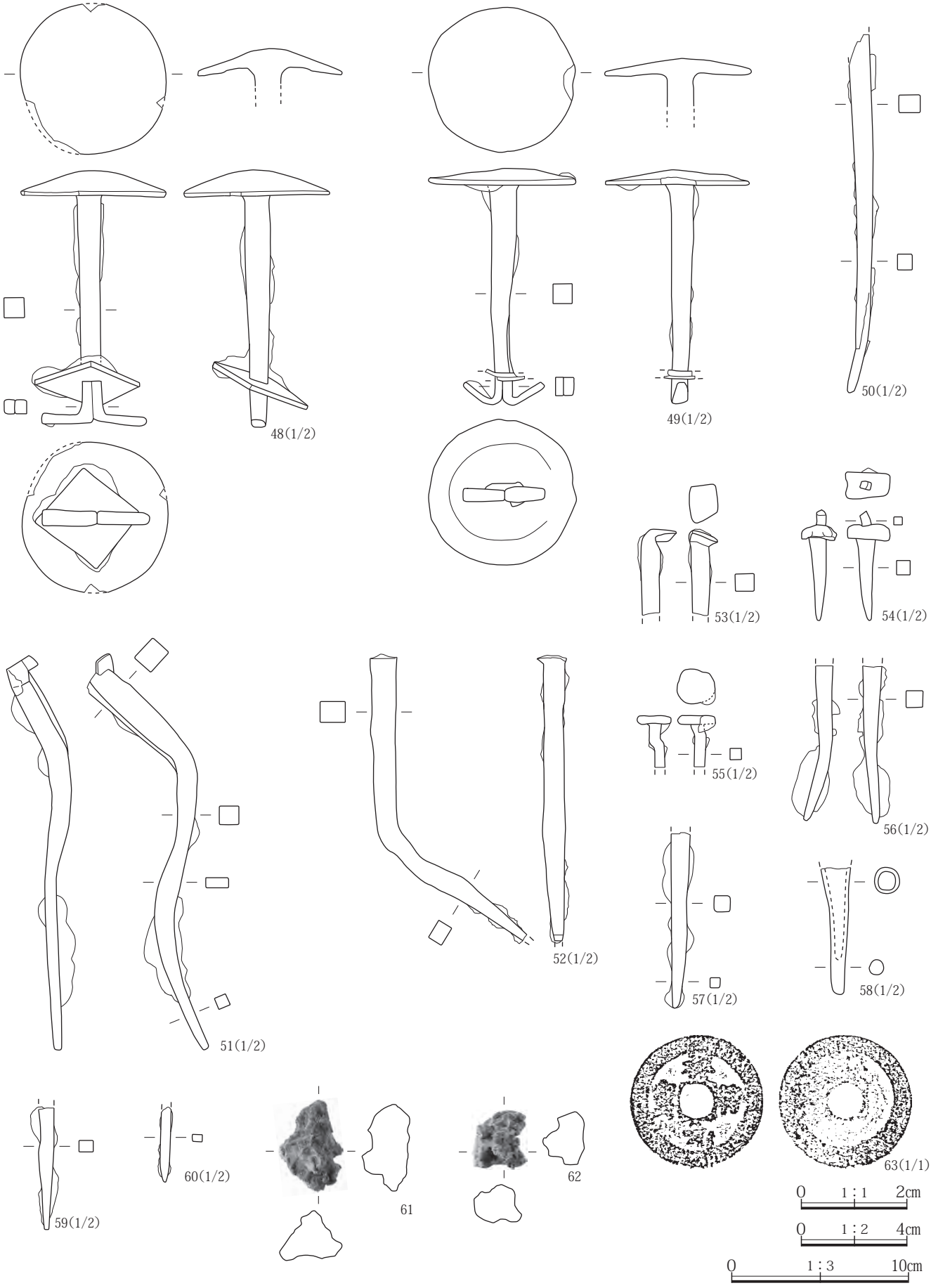
第320図　３号建物出土遺物(10)



第321図　３号建物出土遺物(11)



第322図　３号建物出土遺物(12)



第323図　３号建物出土遺物(13)

Ｐ32が0.71×0.51×0.15m、Ｐ33が0.63×0.45×0.61m、Ｐ34が0.39×0.35×0.52m、Ｐ35が0.32×0.28×0.59m、Ｐ36が(0.45)×0.32×0.48m、Ｐ37が(0.63)×0.47×0.48mである。

出土遺物　１号溝の埋没土中から「凡」と書かれた須恵器杯(３)や土馬(14)、同溝の上層から多量の瓦(15～41)とともに建物の扉に使用されていたと思われる金具(46～49)が出土したことが特筆される。龍泉窯系の青磁碗(42)と常滑陶器の壺(43)については、どちらも13世紀の遺物であり混入であると考えられる。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器２点、土師器の杯・椀類破片252点(831ｇ)、甕・壺類破片913点(2,900ｇ)、須恵器の杯・椀類破片410点(2,648ｇ)、甕・壺類破片132点(1,699ｇ)、瓦片646点、打製石斧２点(134.4ｇ)、二次加工ある剝片２点(3.4ｇ)、凹石２点(1,173.3ｇ)、磨石３点(4,110.3ｇ)、敲石１点(270.3ｇ)、礫・礫片３点(228.9ｇ)、剝片10点(63.5ｇ)、板碑片１点(40.4ｇ)が出土している。このうち磨石１点(64)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(諸磯ａ式)の胴部破片２点、凹石２点、敲石については、遺構外出土遺物として(凹石、敲石は写真のみ)掲載した。

所見　ピット群の南辺と西辺を区画するように、Ｌ字に曲がる溝が廻る。この１号溝の埋没土中からは多数の礫が出土したが、これらは建物を構成していた材の一部である可能性が考えられる。なお、建物の北側と東側を区画する溝については、重複する遺構や後世の削平などにより存在を確認することはできなかった。検出された37基のピットのうちＰ１～Ｐ５・Ｐ８(またはＰ36)・Ｐ９が掘立柱建物の柱穴であると考えられる。その他のピットについては、建て替えの痕跡などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。なお、Ｐ27からは人骨とともに祥符元寶(63)が出土しており、中世の墓壙であると考えられる。隣接する６号溝の埋没土中からは、礎石と思われる礫も出土している。このような状況から、もともと３号建物は２間×２間の側柱の掘立柱建物であったが、その後、礎石建物に建て替えられ、屋根に瓦が葺かれた可能性が考えられる。ただし、３号建物では地業の痕跡は確認されていない。また、出土遺物が６世紀から10世紀までと広範にわたることから、時期については特定することができなかった。

３．竪穴状遺構

２号竪穴状遺構(第324～330図、PL.134・346～349)

位置　Ｘ＝40,941～40,946、Ｙ＝－80,695～－80,699(Ｂ区南)

形状　不整形

規模　長軸5.25m、短軸3.54m

面積　13.069㎡

残存壁高　0.73m

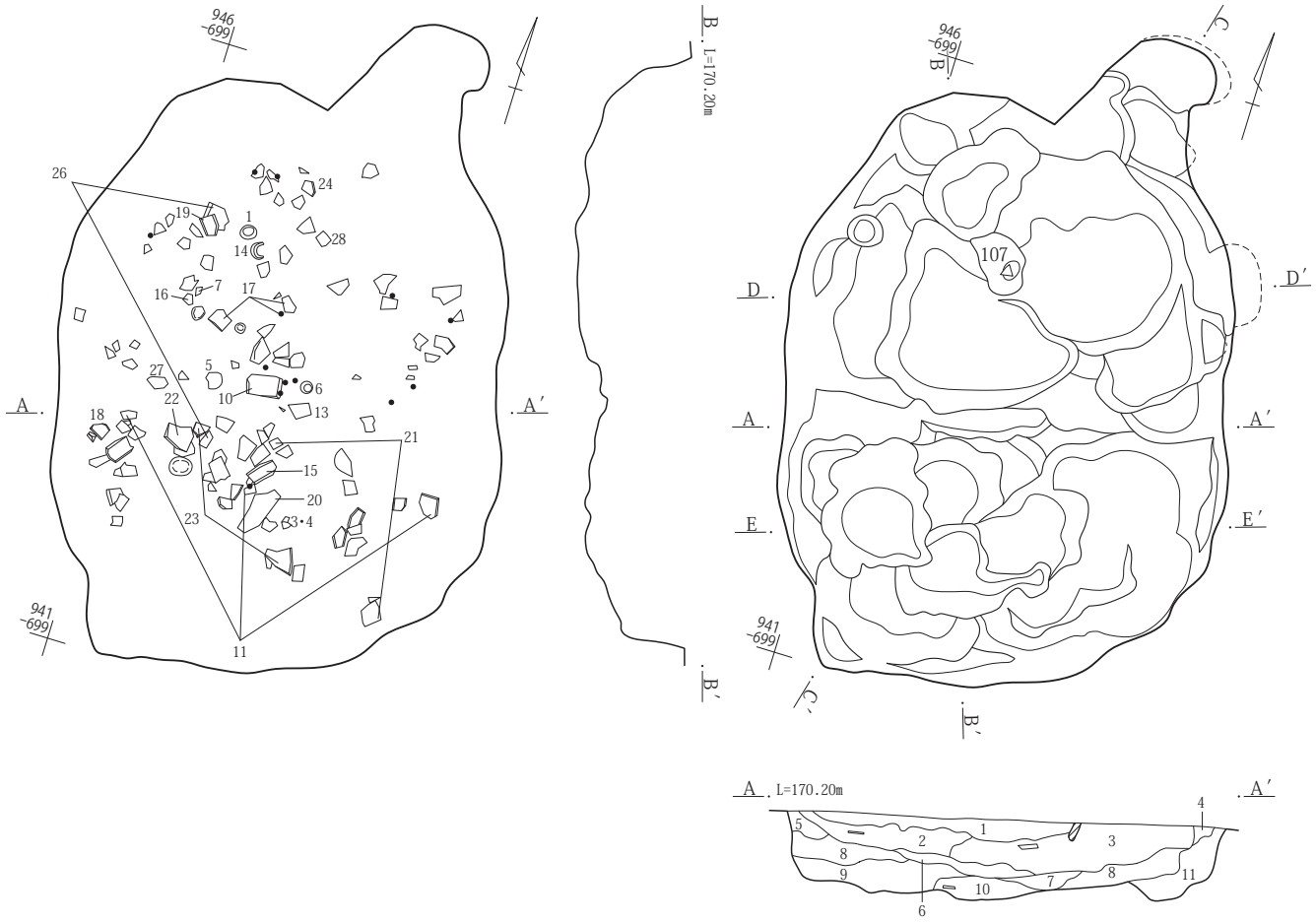
方位　Ｎ－18°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、黒色土塊を含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、As-YP、炭化物粒を含む黒褐色土、または多量のAs-YP、ローム粗塊～小塊を含む黒褐色土で埋没していた。下層はごく微量のAs-C、少量のAs-YP、ローム小塊を含む黒褐色土や、ローム塊を主体とする土などで埋没していた。ローム粗塊～小塊を含む中層以下は、人為的な埋没と考えられる。

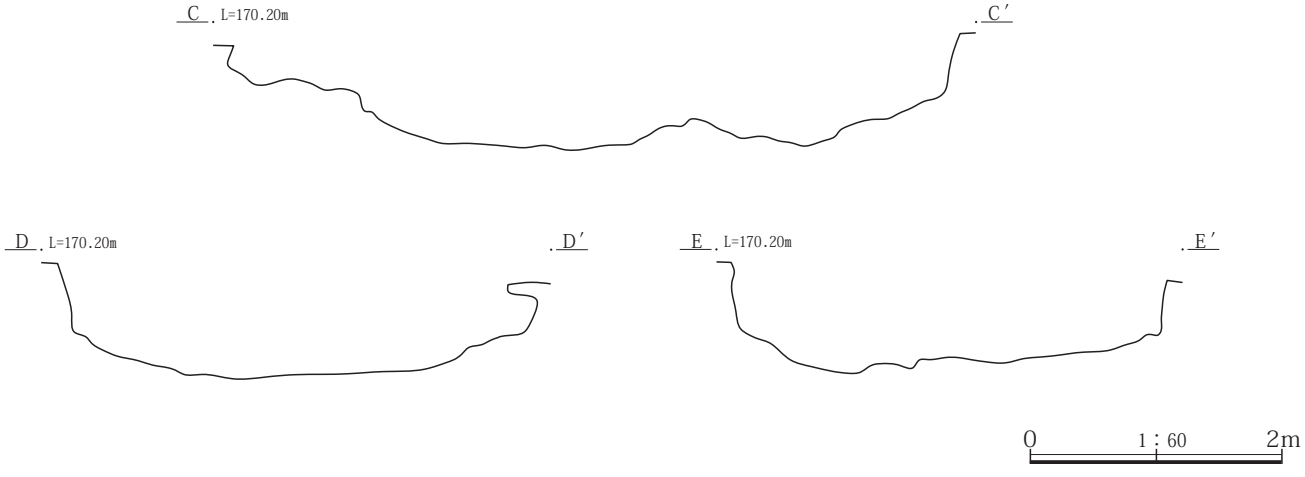
出土遺物　「得」あるいは「狛」と書かれた土師器杯(１)や多量の瓦(10～28)が出土したことが特筆される。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片20点(110ｇ)、甕・壺類破片10点(144ｇ)、須恵器の杯・椀類破片12点(147ｇ)、甕・壺類破片３点(174ｇ)、瓦片181点が出土している。

所見　平面形状が不整形で底部の凹凸が激しく、埋没土中からは多量の瓦が出土した。このことから、２号竪穴状遺構は定型化された施設ではなく、粘土採取を行ったあと、耕作などの邪魔になる瓦を集めて捨てた痕跡であると考えられる。時期については、出土遺物から８世紀末頃の可能性が高いと考えられる。

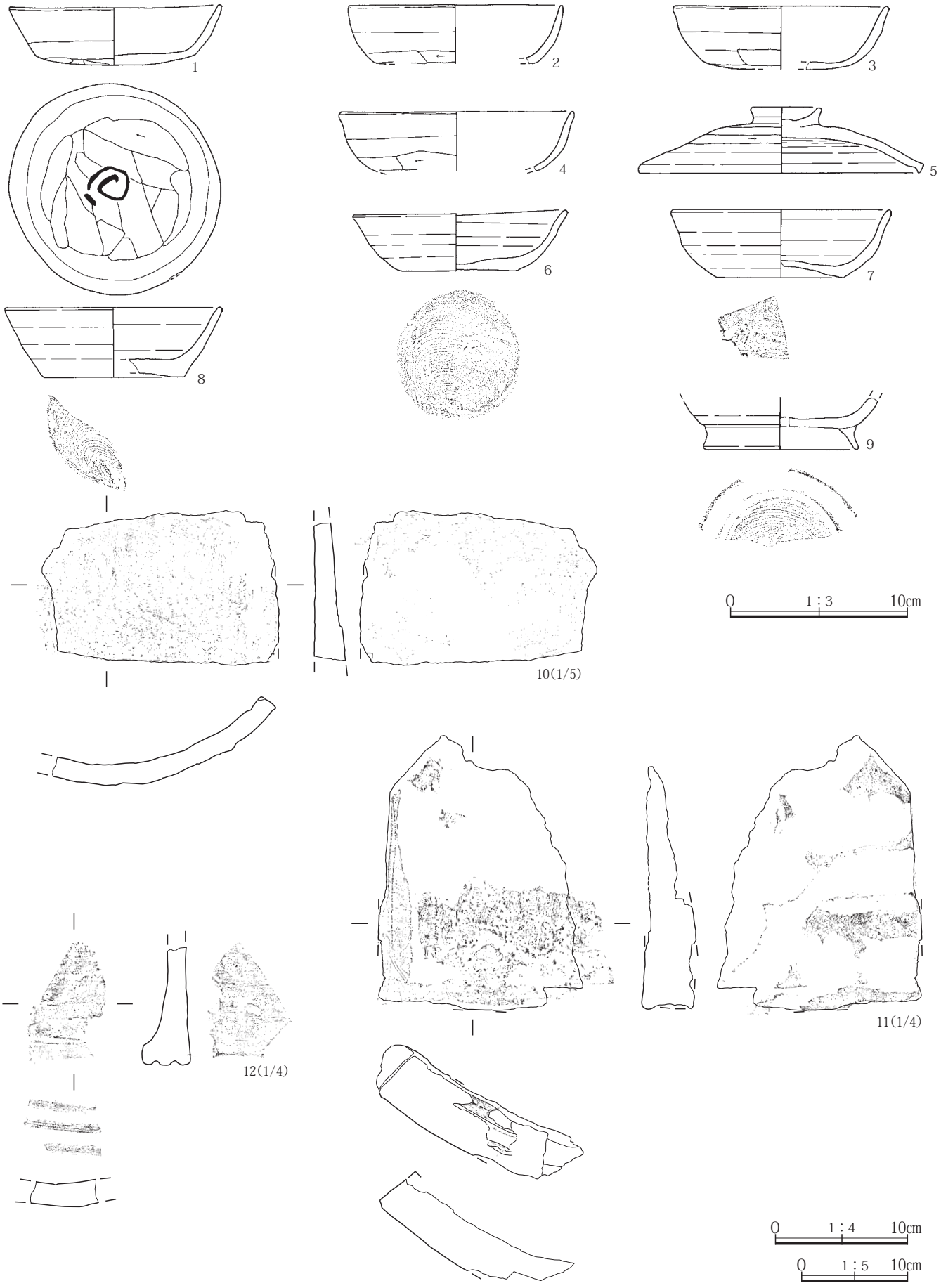


２号竪穴状遺構Ａ－Ａ′

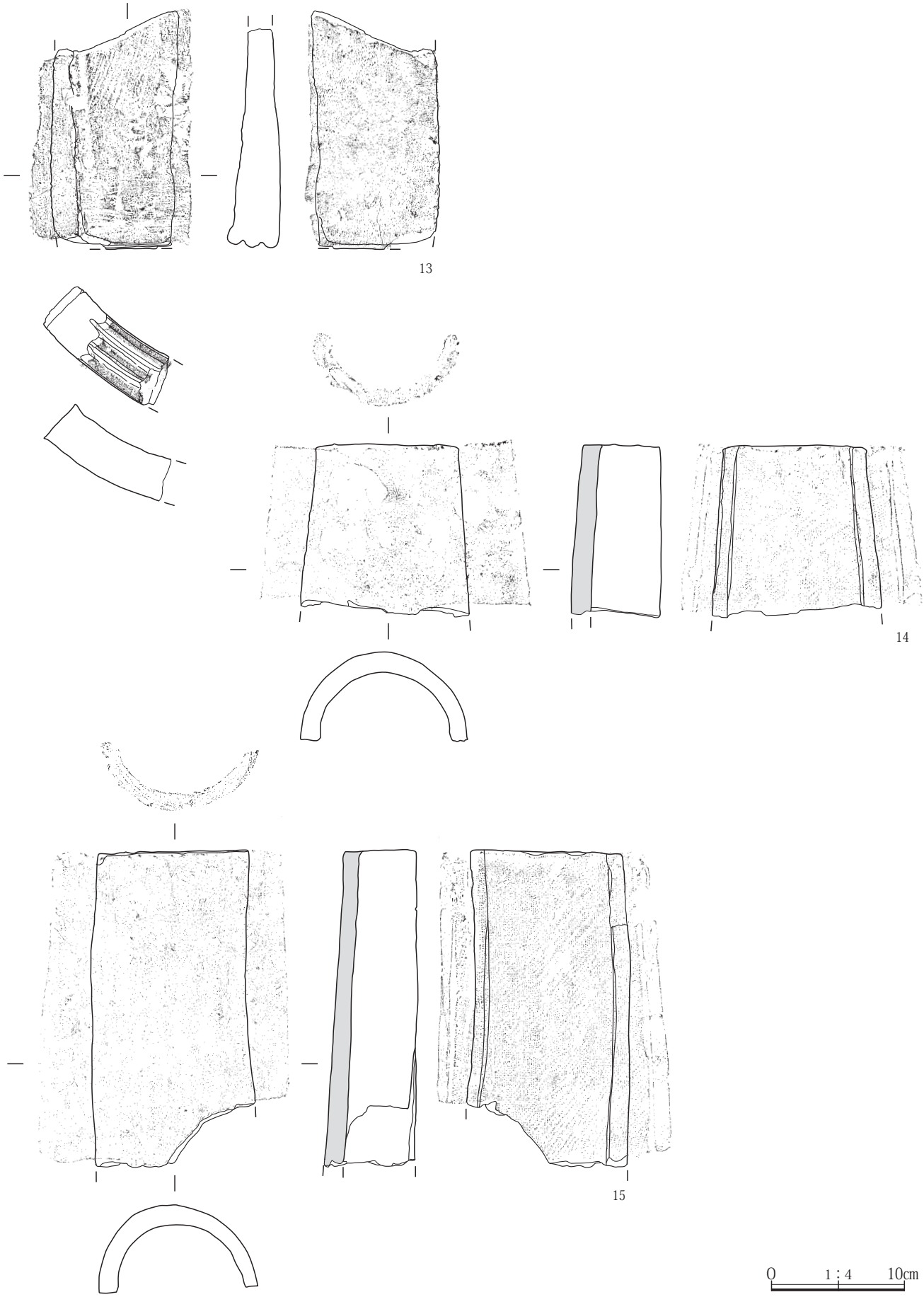
１．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、黒色土塊を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、炭化物粒を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　As-YP、ローム粗塊～小塊を多量含む。
４．暗褐色土10YR3/3　As-YP、黒褐色土塊、ローム粗塊～小塊を多量含む。
５．ローム塊を主体とし、As-YPを多量、黒褐色土塊を少量含む。
６．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量、黒褐色土塊をやや多量含む。
７．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊～小塊を少量、As-YPをやや多量含む。
８．ローム塊を主体とし、As-YPをやや多量含む。
９．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YP、ローム小塊を少量含む。
10．黒色土10YR2/1　As-YP、暗褐色土塊を少量含む。
11．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。



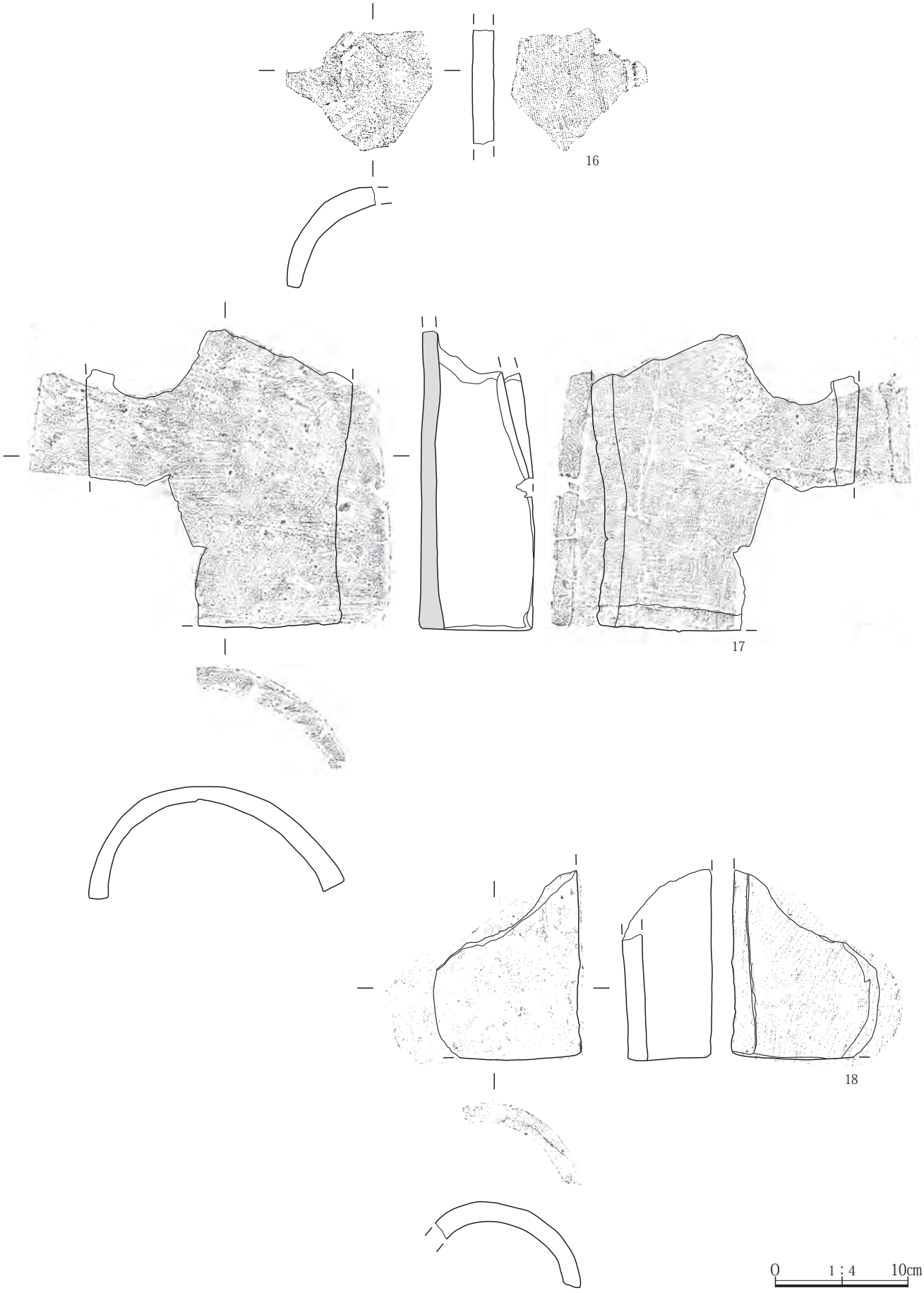
第324図　２号竪穴状遺構



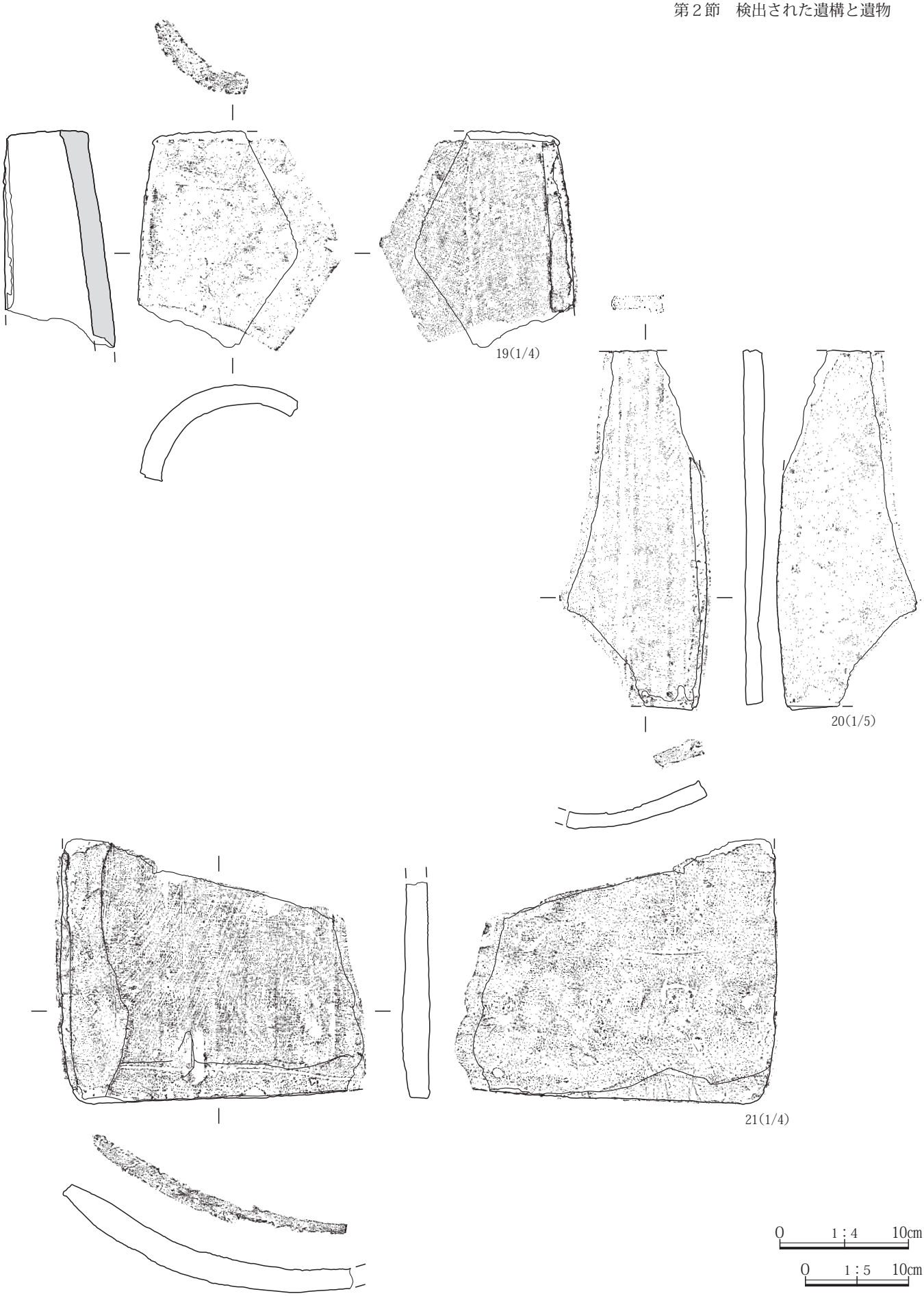
第325図　２号竪穴状遺構出土遺物（１）



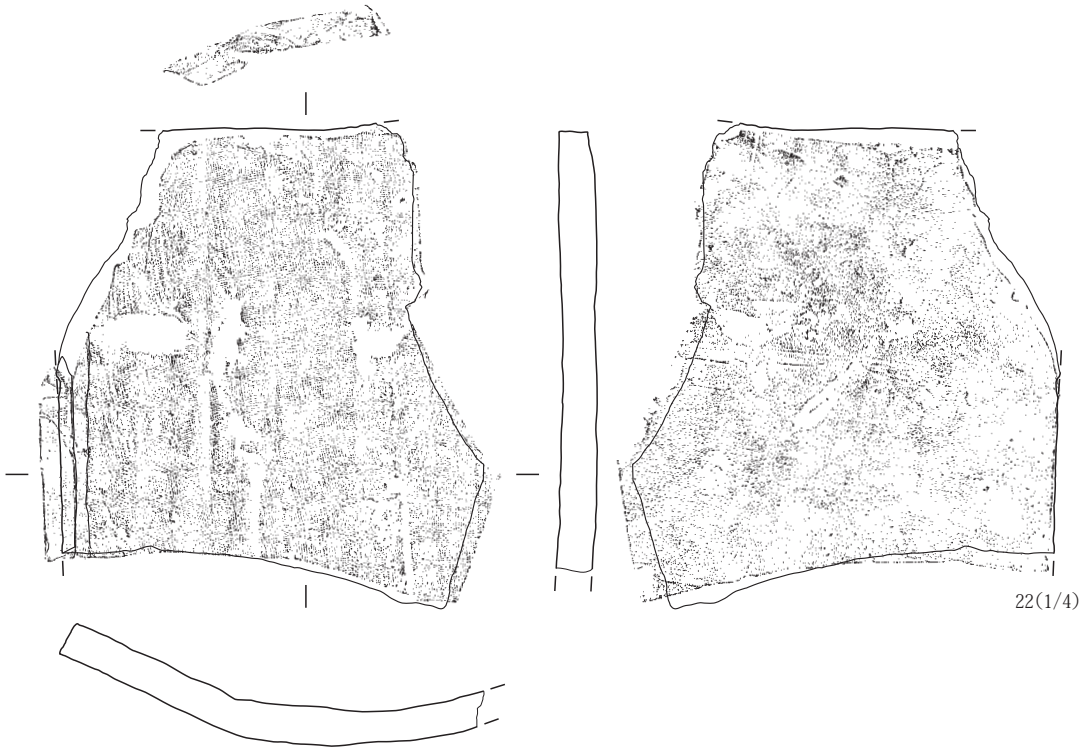
第326図　２号竪穴状遺構出土遺物（２）



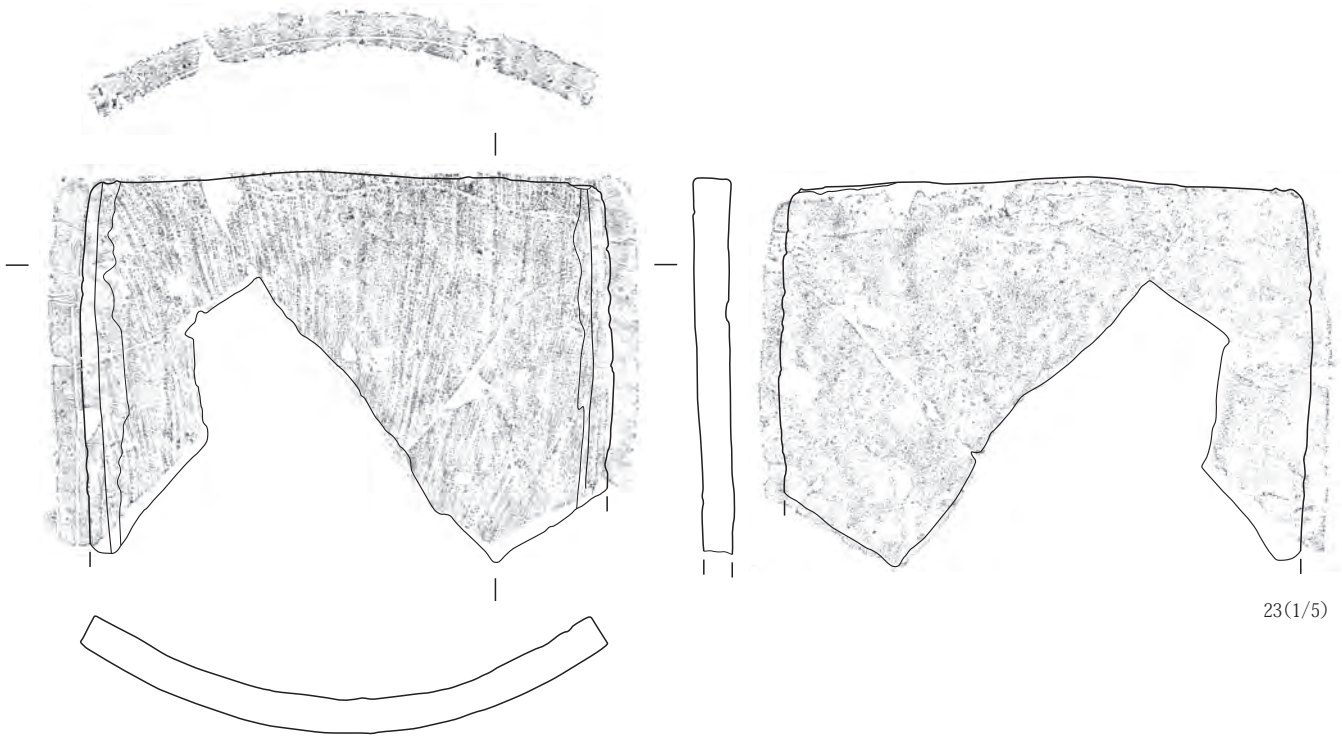
第327図　２号竪穴状遺構出土遺物（３）



第328図　２号竪穴状遺構出土遺物（４）



0　1：4　10cm



0　1：5　10cm

第329図　２号竪穴状遺構出土遺物（５）

第330図　２号竪穴状遺構出土遺物（６）

３号竪穴状遺構(第331図、PL.135)

位置　X＝40,850～40,854、Y＝－80,755～－80,759（C・D区）

形状　正方形

規模　長軸3.32m、短軸2.88m

面積　7.013㎡

残存壁高　0.34m

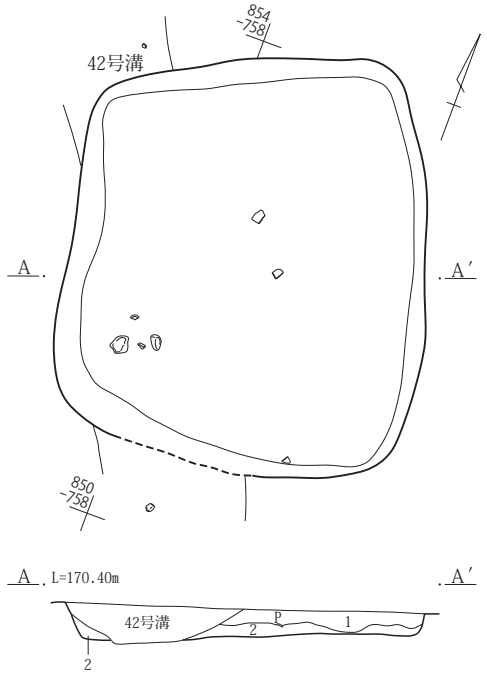
方位　N－22°－W

重複　42号溝と重複し、３号竪穴状遺構が古い

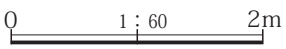
埋没土　上層は微量のAs-Cを含む黒色土で埋没していた。下層は少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。埋没土中にローム小塊を含む下層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片１点(57ｇ)、須恵器の甕・壺類破片３点(163ｇ)が出土している。

所見　ほぼ正方形の浅い掘り込みで、カマドがなかったことから竪穴状遺構としたが、どのような施設であったのかは不明である。42号溝との重複関係から、７世紀第４四半期以前の遺構である可能性が考えられる。



３号竪穴状遺構Ａ－Ａ′
1．黒色土10YR2/1　As-Cを微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。



第331図　３号竪穴状遺構

４．円形有段遺構(第332～334図、PL.135・349・350)

１号竪穴状遺構

位置　X＝40,923～40,927、Y＝－80,690～－80,694（C・D区）

形状　不整形(逆円錐形状の円形有段遺構)

規模　長軸3.85m、短軸3.73m

面積　8.948㎡

残存壁高　2.75m

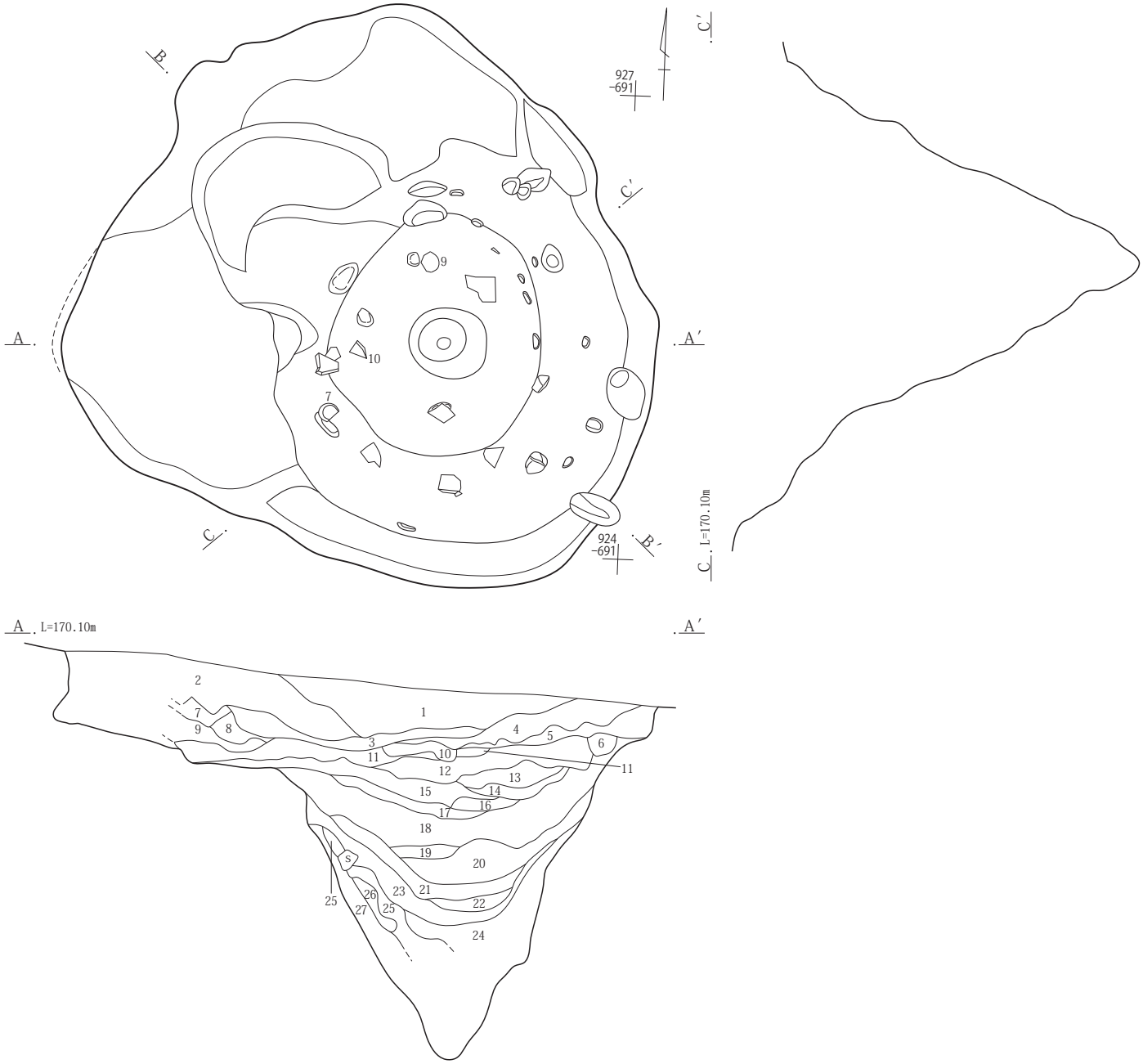
方位　N－88°－E

重複　なし

埋没土　上層はごく微量のAs-C、微量のAs-YPを含む黒褐色土などで埋没していた。中層は少量のAs-C、やや多量のAs-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。下層は少量のAs-YP、黒褐色土塊を含むローム塊を主体とする土などで埋没していた。埋没土中にローム塊～小塊を含む中・下層は人為的な埋没と考えられる。ただし、中位に砂層(19層)を挟むことから、中・下層の堆積には時間差があったと推測できる。

出土遺物　多量の瓦(９～12)とともに、羽口(13)や鉄滓(14・15)が出土したことが特筆される。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片42点(128ｇ)、甕・壺類破片60点(267ｇ)、須恵器の杯・椀類破片58点(907ｇ)、甕・壺類破片57点(1,300ｇ)、瓦片70点、打製石斧１点(64.0ｇ)、凹石１点(326.3ｇ)、磨石１点(315.4ｇ)、敲石２点(2,354.9ｇ)が出土している。

所見　調査時には１号井戸や１号氷室などの名称が使用されたが、整理の段階で１号竪穴状遺構に統一した。基底部に穿たれた小穴の規模は、長軸0.49m、短軸0.45m、深さ0.35mである。出土遺物から９世紀後半頃の氷室である可能性が考えられる。

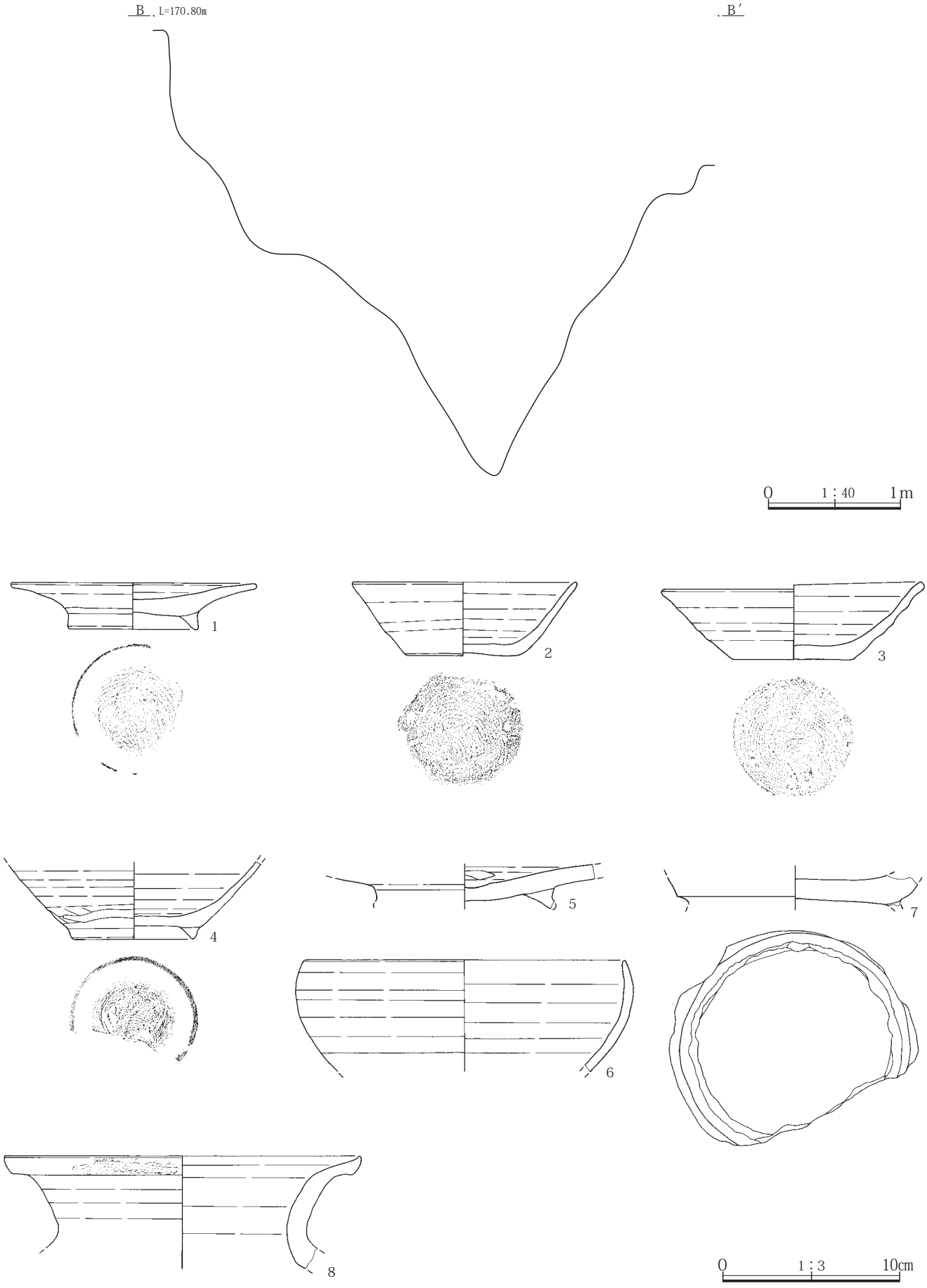


１号竪穴状遺構Ａ－Ａ′

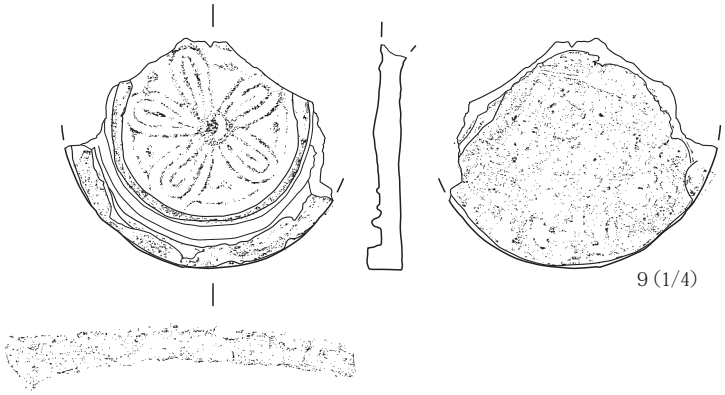
1．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量、As-YPを微量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　As-Cをやや多量、As-YP、暗褐色土塊を少量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム塊をやや多量、As-YPを少量含む。
7．黒褐色土10YR3/1　黒色土塊をやや多量、ローム粒を少量含む。
8．ローム塊を主体とする。
9．黒褐色土10YR3/1　ローム塊をやや多量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YP、ローム微粒をやや多量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
12．ローム粒を主体とし、As-YPをやや多量、黒褐色土塊を少量含む。
13．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを多量含む。
14．ローム粗塊を主体とし、黒褐色土塊を多量含む。
15．黒褐色土10YR3/1　As-YPを少量、ローム粒を多量含む。
16．黒褐色土10YR3/1　夾雑物を含まない。
17．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。
18．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。
19．砂層。As-YPを少量含む。
20．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを多量、ローム細粒をやや多量含む。
21．ローム塊を主体とし、As-YPを多量含む。
22．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量含む。
23．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YP、ローム塊を少量含む。
24．ローム塊を主体とし、As-YPを少量、黒褐色土塊を微量含む。
25．黒褐色土10YR3/1　ローム小塊を少量含む。
26．ローム塊を主体とする。
27．ローム塊を主体とし、As-YP、黒褐色土塊を少量含む。

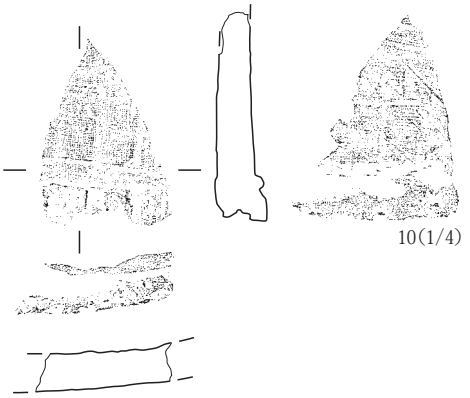
0　1：40　1m

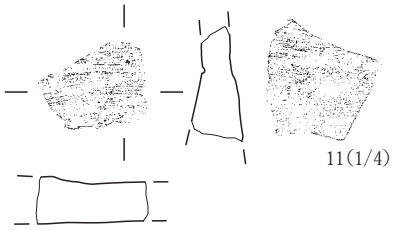
第332図　１号竪穴状遺構

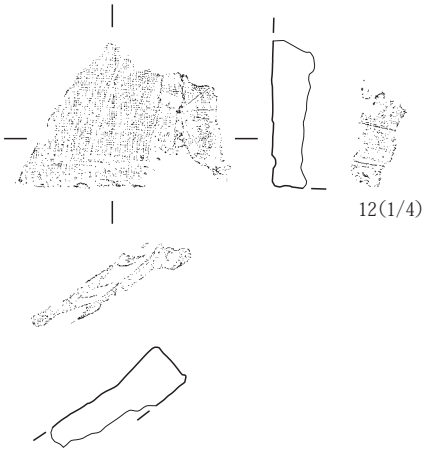


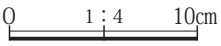
第333図　１号竪穴状遺構エレベーション図と出土遺物（１）

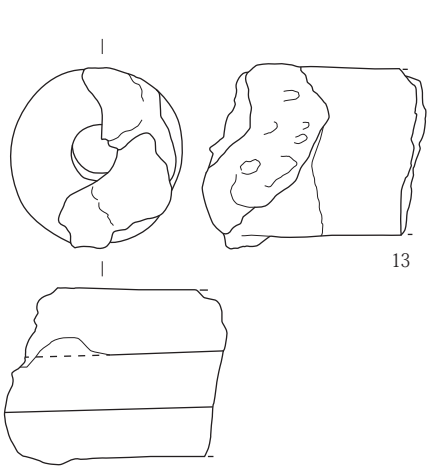


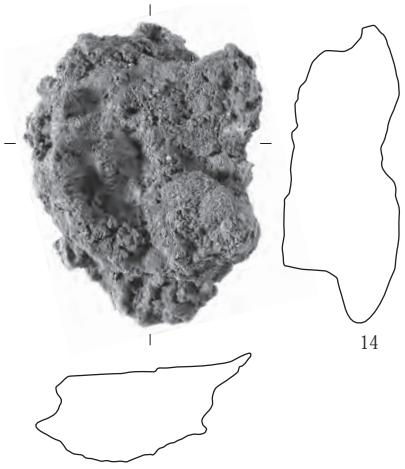


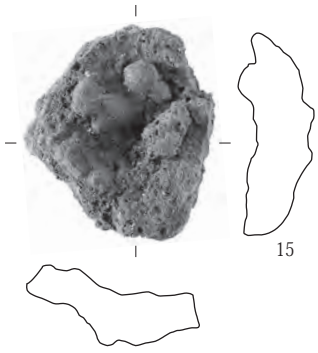


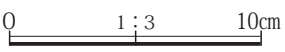












第334図　１号竪穴状遺構出土遺物（２）

556号土坑(第335～338図、PL.135・136・350・351)

位置　X＝40,945～40,948、Y＝－80,677～－80,679（B区東）

形状　楕円形(逆円錐形状の円形有段遺構)

規模　長軸2.55m、短軸2.50m

面積　5.056㎡

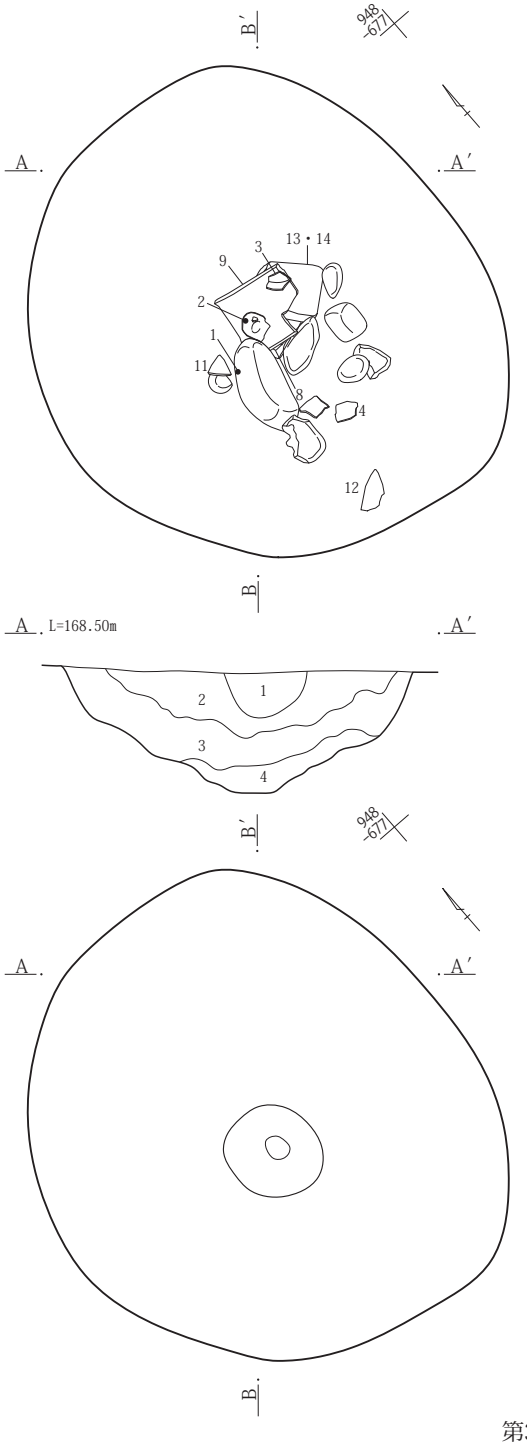
残存深度　2.18m

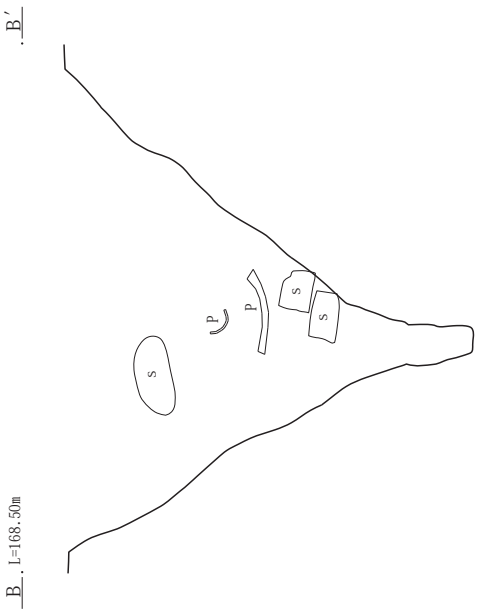
主軸方位　N－41°－E

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒、黒褐色土塊を含む暗褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、ローム塊～粒、黒色土塊を含む黒褐色土、または多量のローム粗粒～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層の土層堆積状況は不明である。ローム塊～粒を含む中層は、人為的な埋没の可能性が考えられる。

出土遺物　多量の瓦(８～12)とともに、螺旋状暗文のある土師器鉢(２)や瓦塔(６・７)が出土したことが特筆される。このうち７については、９世紀前葉のものであり



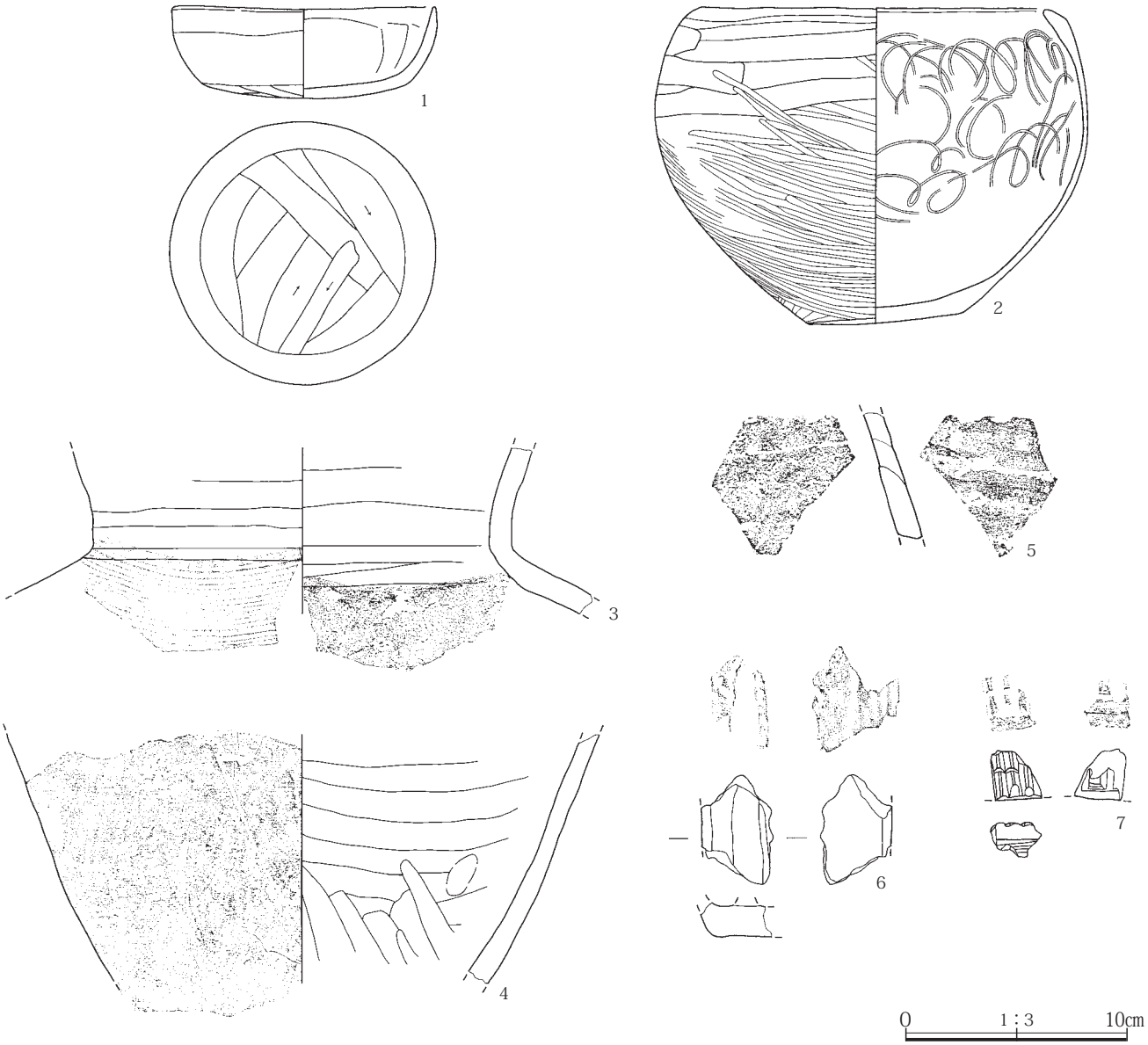


556号土坑Ａ－Ａ′

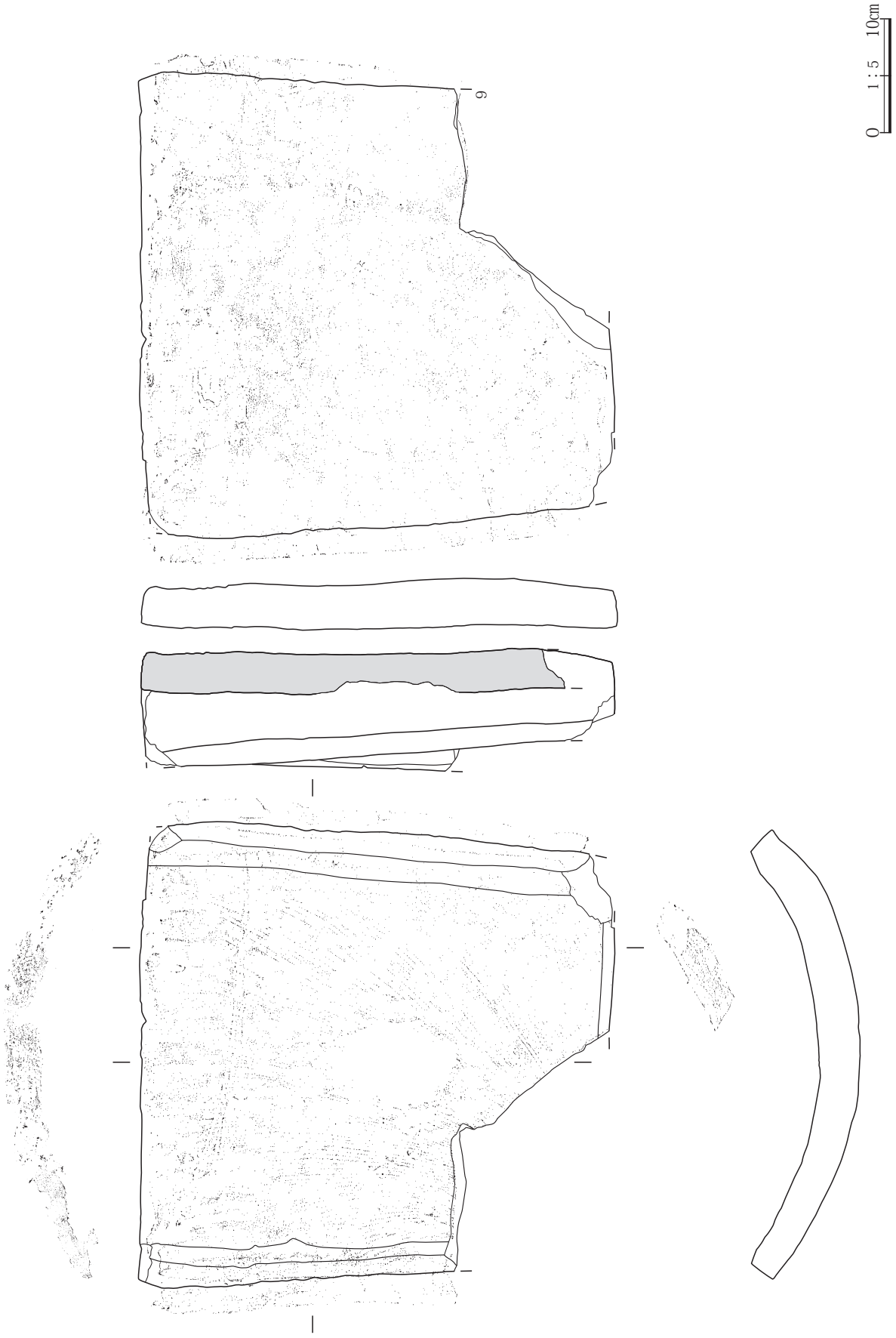
１．暗褐色土10YR3/3　As-Aを含む。現代の耕作痕か。
２．暗褐色土10YR3/4　As-C、ローム粒、黒褐色土塊を少量含む。
３．黒褐色土10YR3/2　As-C、ローム塊～粒、黒色土塊を少量含む。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム粗粒～細粒を多量含む。

0　1：40　1m

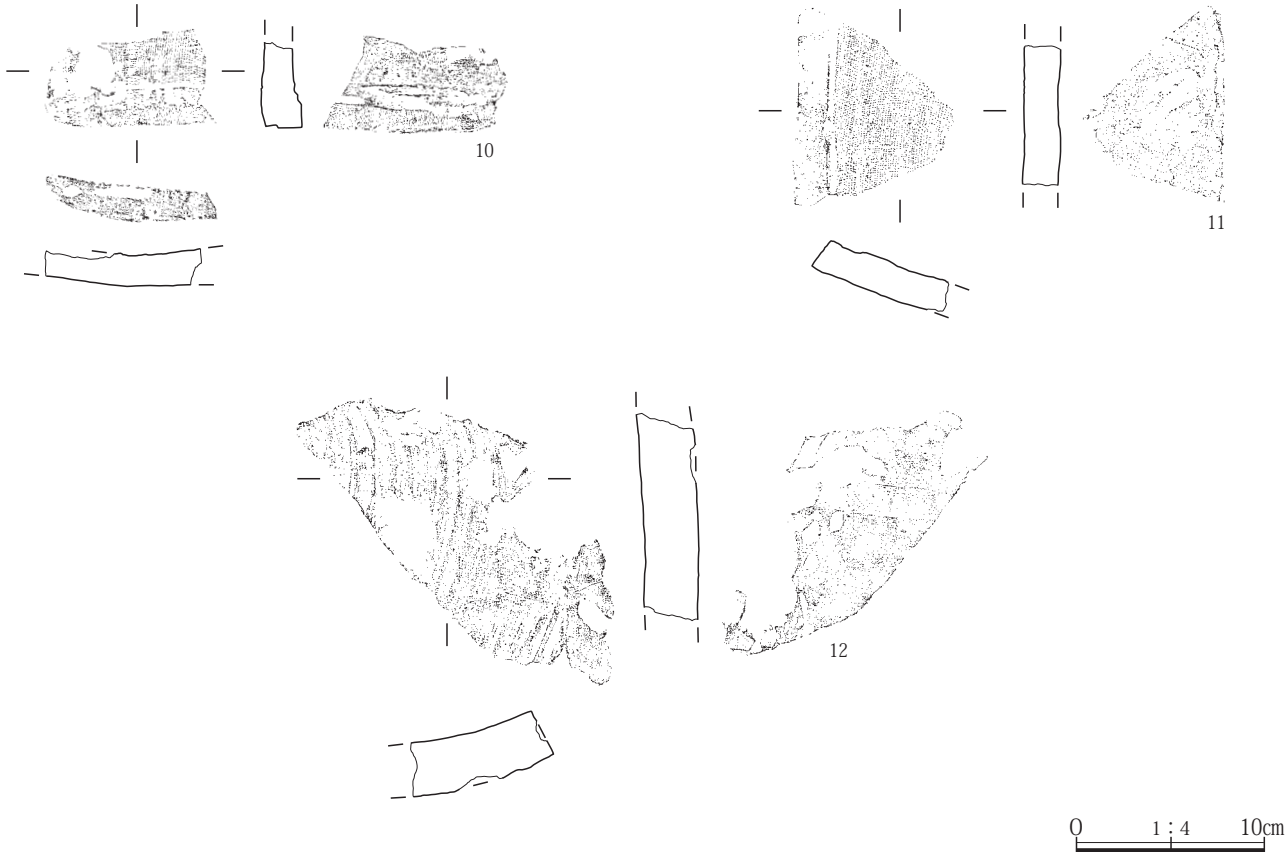
第335図　556号土坑



第336図　556号土坑出土遺物（１）



第337図　556号土坑出土遺物（２）



第338図　556号土坑出土遺物（３）

混入の可能性が考えられる。また、基底部付近を中心に人頭大の礫が多数出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片１点（８ｇ）、甕・壺類破片18点(96ｇ)、須恵器の杯・椀類破片17点(145ｇ)、甕・壺類破片10点(279ｇ)、瓦片56点、二次加工ある剝片１点(215.1ｇ)、凹石３点(1,246.4ｇ)、敲石１点(1,290.2ｇ)、石製品２点(19,200.0ｇ)、礫１点(3,201.6ｇ)、剝片１点(40.6ｇ)が出土している。このうち石製品２点(13・14)については、写真のみを掲載した。また、縄文土器(諸磯ｂ式)の胴部破片、凹石３点、敲石については、遺構外出土遺物として(凹石、敲石は写真のみ)掲載した。

所見　基底部に穿たれた小穴の規模は、長軸0.53m、短軸0.48m、深さ0.69mである。出土遺物から８世紀前半頃の氷室である可能性が考えられる。

558号土坑(第339図、PL.136・351)

位置　Ｘ＝40,950～40,952、Ｙ＝－80,682～－80,684（Ｂ区東）

形状　楕円形(逆円錐形状の円形有段遺構)

規模　長軸2.03m、短軸2.00m

面積　3.275㎡

残存深度　1.37m

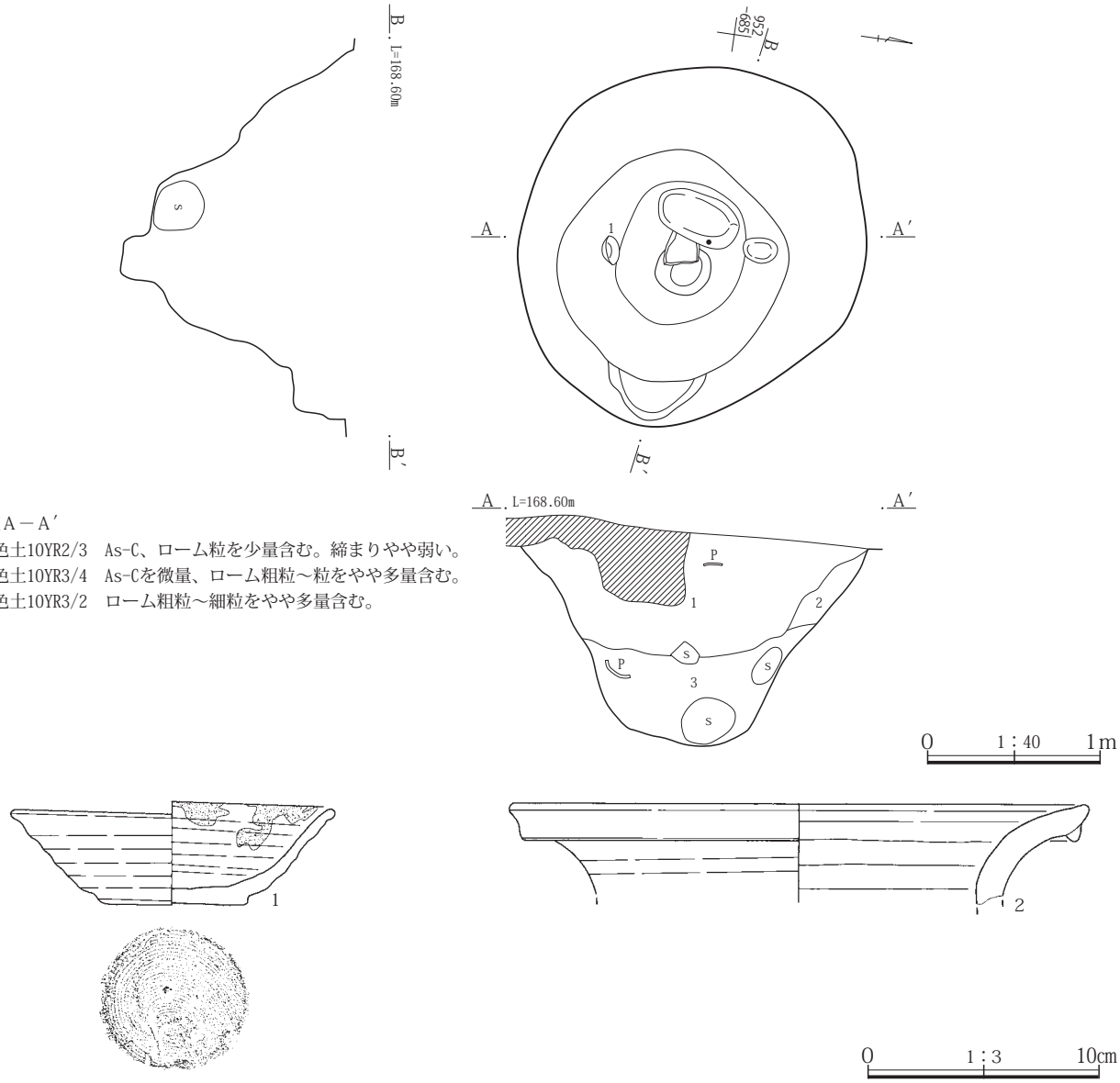
主軸方位　Ｎ－81°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のローム粗粒～粒を含む黒褐色で埋没していた。埋没土中にローム粗粒～粒を含む下層は人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　内面に漆が付着した須恵器杯(１)が出土したことが特筆される。また、基底部付近から人頭大の礫が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片６点(19ｇ)、甕・壺類破片９点(46ｇ)、須恵器の杯・椀類破片10点(67ｇ)、甕・壺類破片２点(41ｇ)、瓦片26点、剝片１点(31.8ｇ)が出土している。

所見　基底部に穿たれた小穴の規模は、長軸0.31m、短軸0.30m、深さ0.17mである。出土遺物から９世紀後半頃の氷室である可能性が考えられる。



558号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/4　As-Cを微量、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/2　ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

第339図　558号土坑と出土遺物

５．遺物集中

１号遺物集中（第340・341図、PL.143・352）

位置　Ｘ＝40,861～40,864、Ｙ＝－80,735～－80,738（Ｃ・Ｄ区）

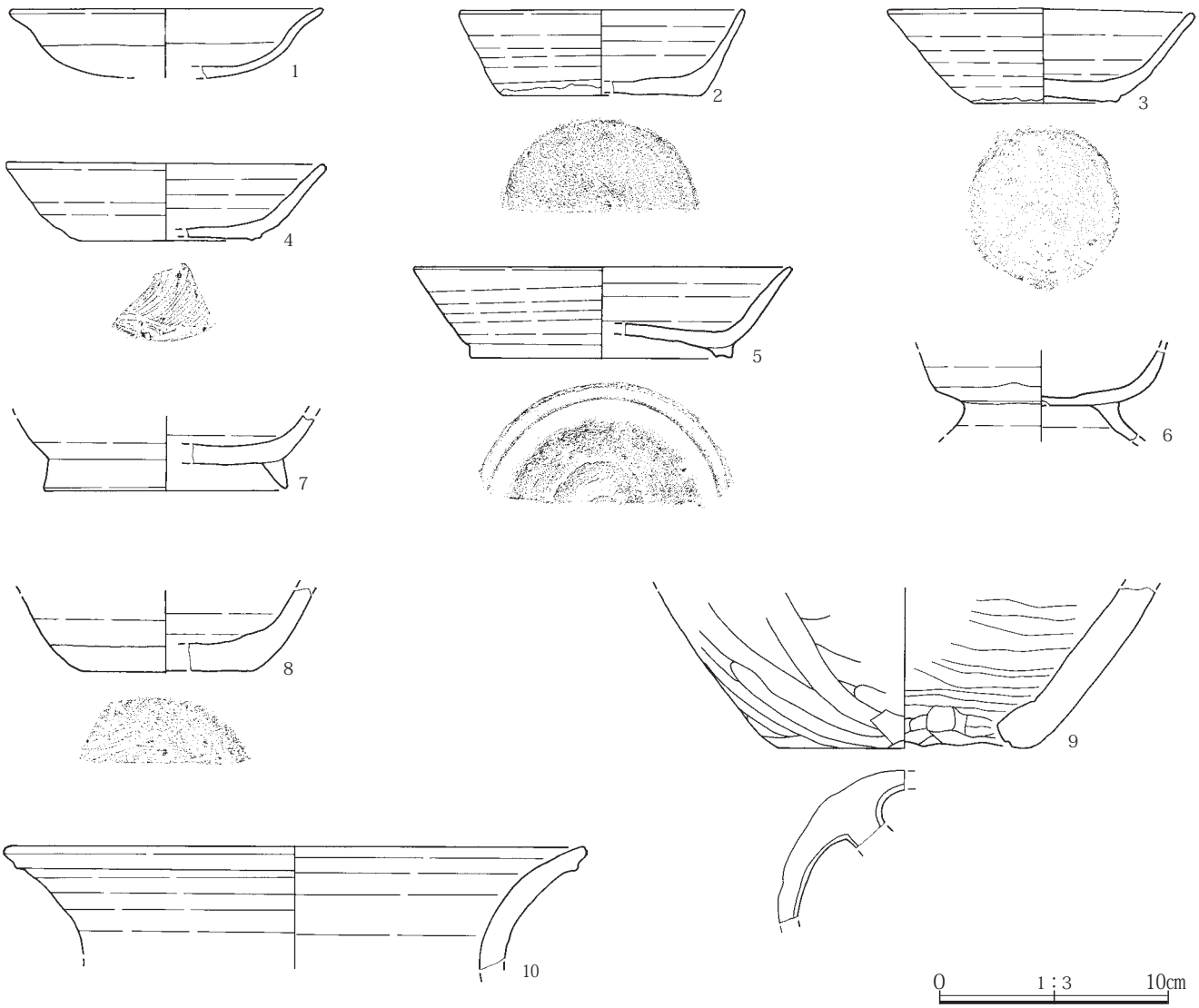
規模　遺物がまとまって出土したのは、南北2.70m×東西3.10mの範囲であったが、そのうち北東寄りの南北2.30m×東西1.50mの範囲に特に集中する傾向が認められた。また、いずれの遺物もほぼ同一の層位から出土している。

重複　なし

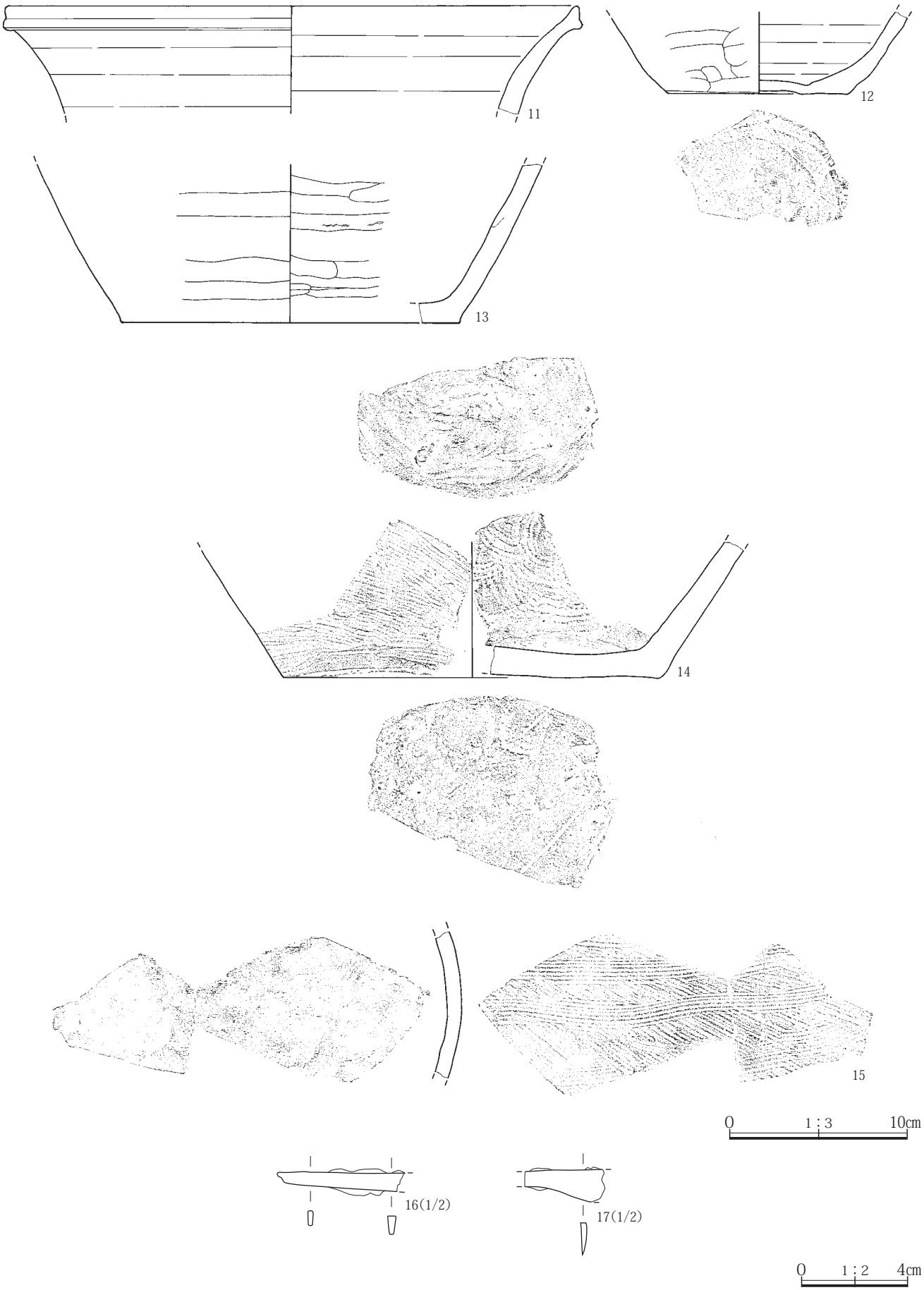
埋没土　As-Cを含む黒色土中から遺物が集中的に出土した。

出土遺物　土器については、８世紀前半から９世紀後半のものまでが混在している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片４点(32ｇ)、甕・壺類破片15点(91ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(45ｇ)、甕・壺類破片19点(1,340ｇ)、瓦片１点、打製石斧１点(91.5ｇ)、礫１点(79.1ｇ)が出土している。このうち縄文土器(加曽利Ｅ４式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　下位に竪穴建物などの存在が想定されたが、その後の調査でも床面を確認することはできなかった。そのため、本遺構の詳細については不明であるが、平地建物など痕跡が残りにくい遺構が存在した可能性も考えられる。



第340図　１号遺物集中と出土遺物（１）



第341図　１号遺物集中出土遺物（２）

６．溝

11号溝（第342・343図、PL.136・352）

位置　X＝40,935～40,945、Y＝－80,650～－80,657（A区）

規模　調査長11.85m、上幅0.60～1.30m

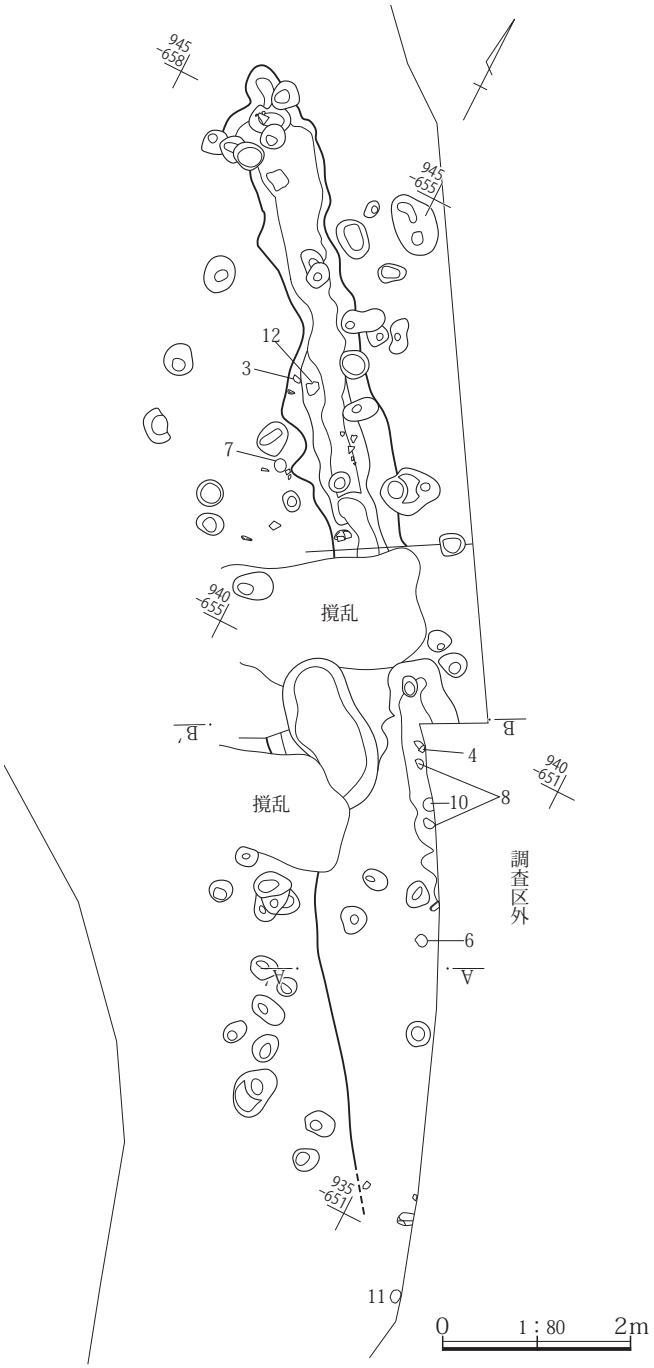
残存深度　0.05～0.68m

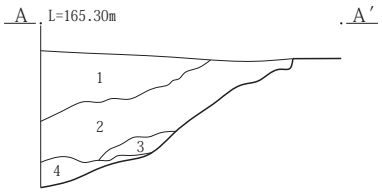
走向　N－37°－W

重複　なし

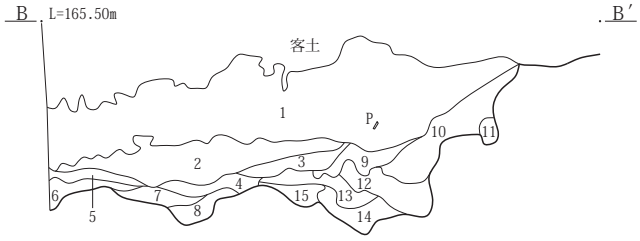
埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土などで埋没していたが、部分的にローム塊を含むなど複雑な堆積状況であった。ローム塊を含む下層は人為的な埋没と考えられるが、底部に堆積していた灰黄褐色シルト質土と黄灰色砂質土は、流水による自然埋没と考えられる。

出土遺物　８世紀前半から９世紀前半を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片214点（1,130ｇ）、甕・壺類破片1,440点（6,380ｇ）、須恵器の杯・椀類破片757点（6,444ｇ）、甕・壺類破片446点（9,060ｇ）、瓦片７点、二次加工ある剥片１点（48.0ｇ）、が出土している。



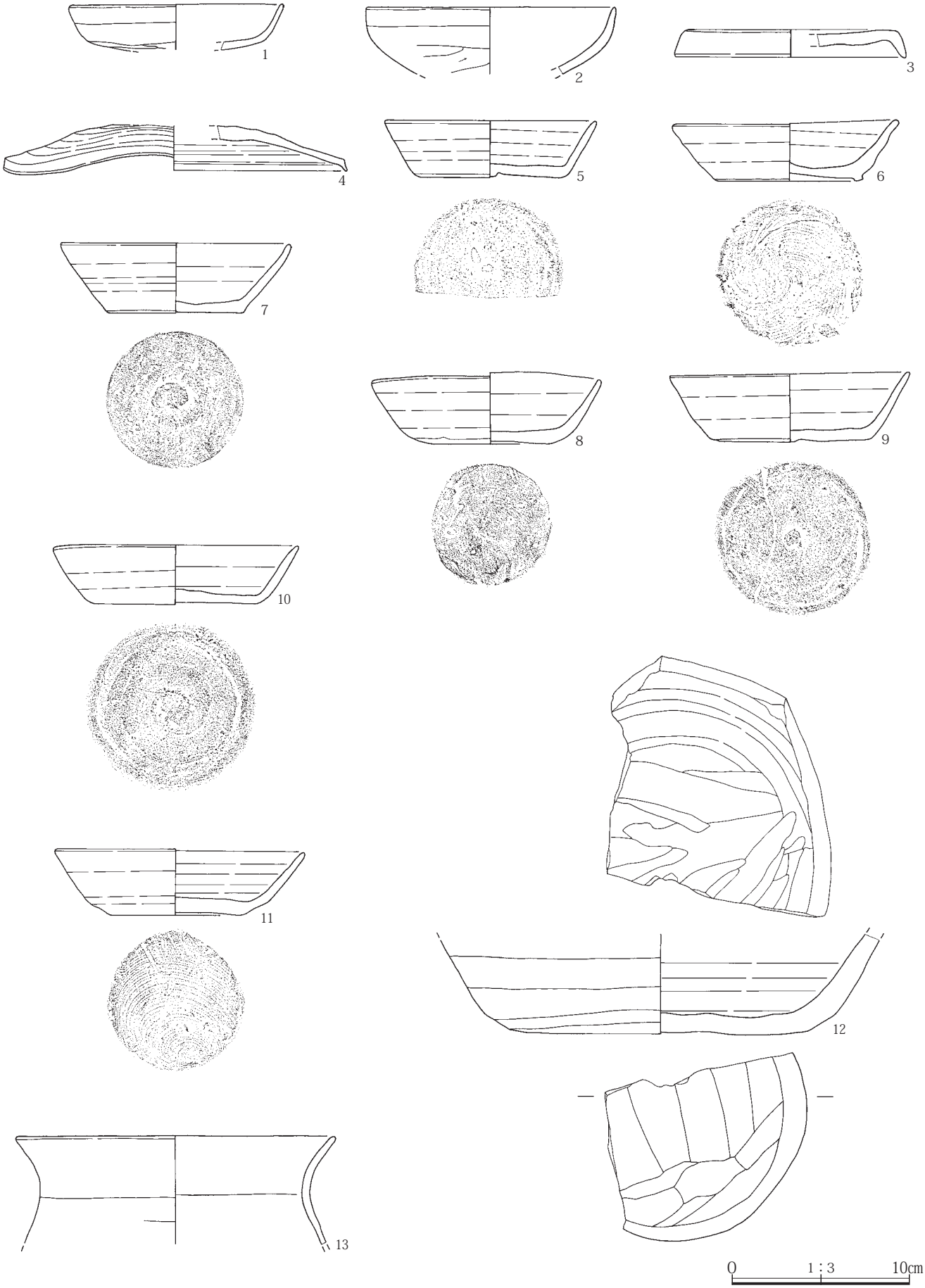


11号溝Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　ローム粗粒を微量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。



11号溝Ｂ－Ｂ′
1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-C、炭化物粗粒を微量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cをごく微量含む。
4．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量、ローム塊を少量含む。
5．ローム塊を主体とする。
6．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
7．灰黄褐色土10YR6/2　シルト質。
8．黄灰色土2.5Y5/1　砂質。
9．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを微量含む。
10．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量含む。
11．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量含む。
12．黒褐色土10YR3/1　As-YPを非常に多量含む。
13．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量含む。
14．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
15．黒褐色土10YR3/1　As-YPを多量含む。

第342図　11号溝



第343図　11号溝出土遺物

所見　台地が谷地に向かって急激に落ち込む地形の変換点に沿うように延びていることから、集落の境界を示す区画溝のような意味をもっていたのではないかと推測できる。この溝の周辺には小ピットが集中していたが、これらは溝に付随する何らかの施設の痕跡である可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含まないことから、天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

12号溝(第344・345図、PL.136・352)

位置　X＝40,886～40,690、Y＝－80,691～－80,705（C・D区）

規模　調査長14.94m、上幅1.00～1.85m

残存深度　0.10～0.25m

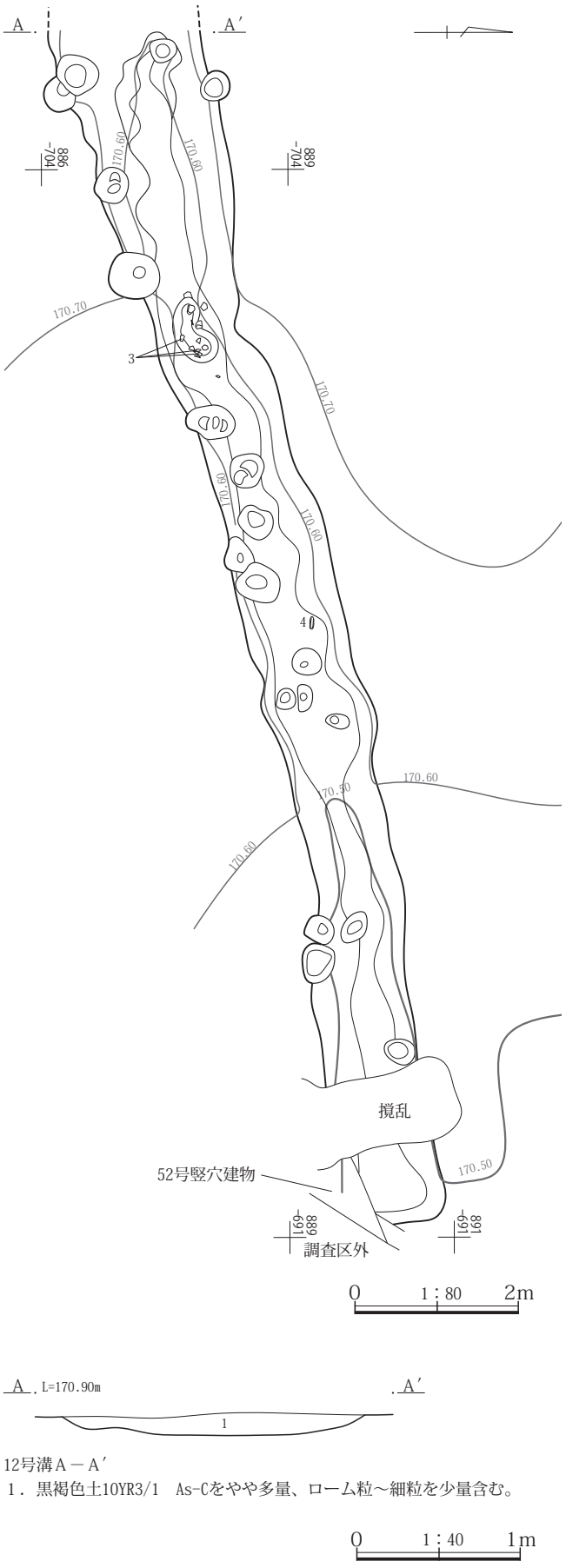
走向　N－80°－E

重複　52号竪穴建物と重複し、12号溝が古い。

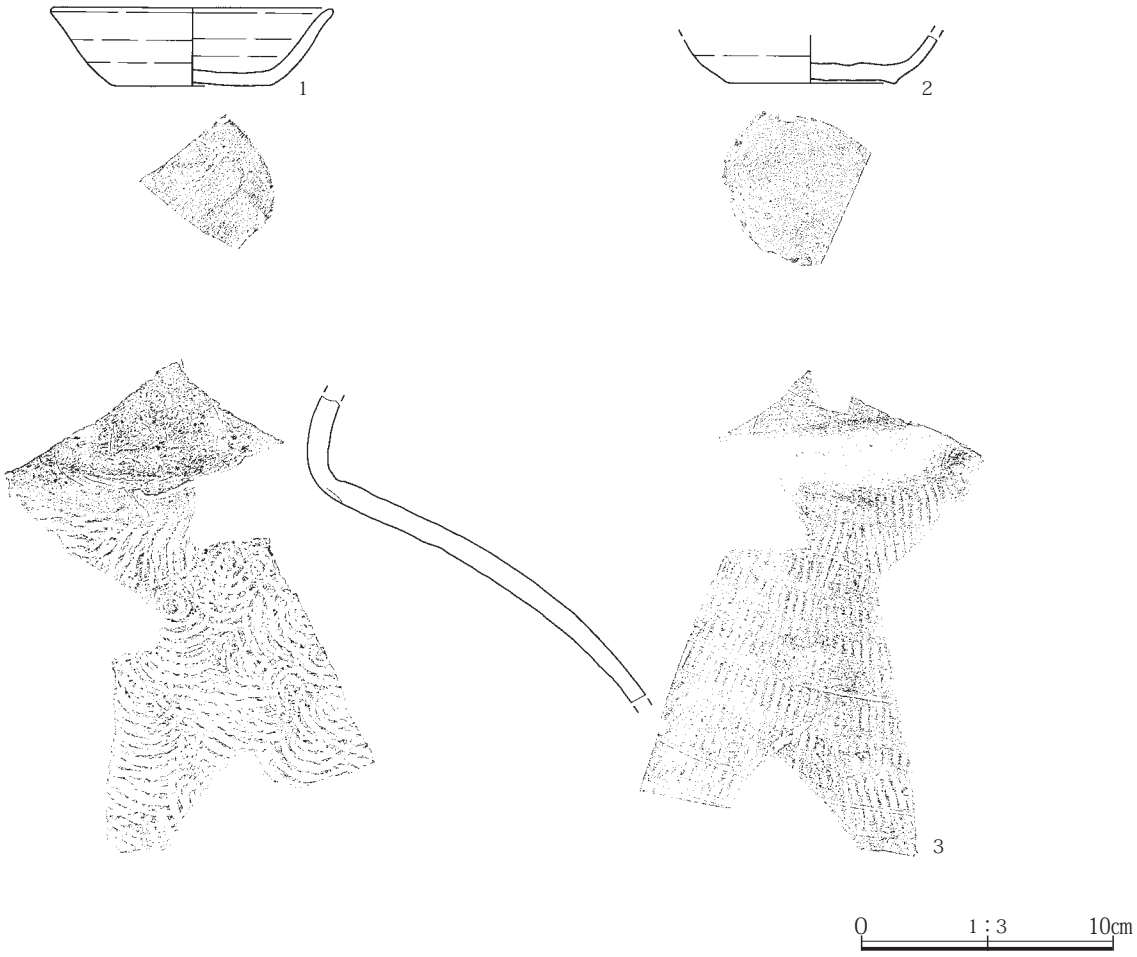
埋没土　やや多量のAs-C、少量のローム粒～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　８世紀後半から９世紀前半を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片２点(16ｇ)、甕・壺類破片３点(27ｇ)、須恵器の甕・壺類破片12点(480ｇ)、凹石１点(432.0ｇ)、敲石２点(1,842.7ｇ)が出土している。このうち敲石(４)については、写真のみを掲載した。

所見　等高線にほぼ直行し、流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。東端は調査区壁付近で立ち上がることから、この位置で南に折れていた可能性が考えられる。また、本溝の西の延長線上には、走向がほぼ一致する43号溝があり、同一の区画溝である可能性が考えられる。溝に重複して複数のピットが検出されたが、これらは溝に付随する何らかの施設の痕跡である可能性が考えられる。重複する竪穴建物との新旧関係から、８世紀前半以前の遺構であると考えられる。ただし、出土遺物から想定される時期とは整合しない。



第344図　12号溝



第345図　12号溝出土遺物

40号溝（第346・347図、PL.136・137・352）

位置　X＝40,822～40,869、Y＝－80,757～－80,782（C・D区）

規模　調査長62.25m、上幅0.56～1.50m

残存深度　0.09～0.39m

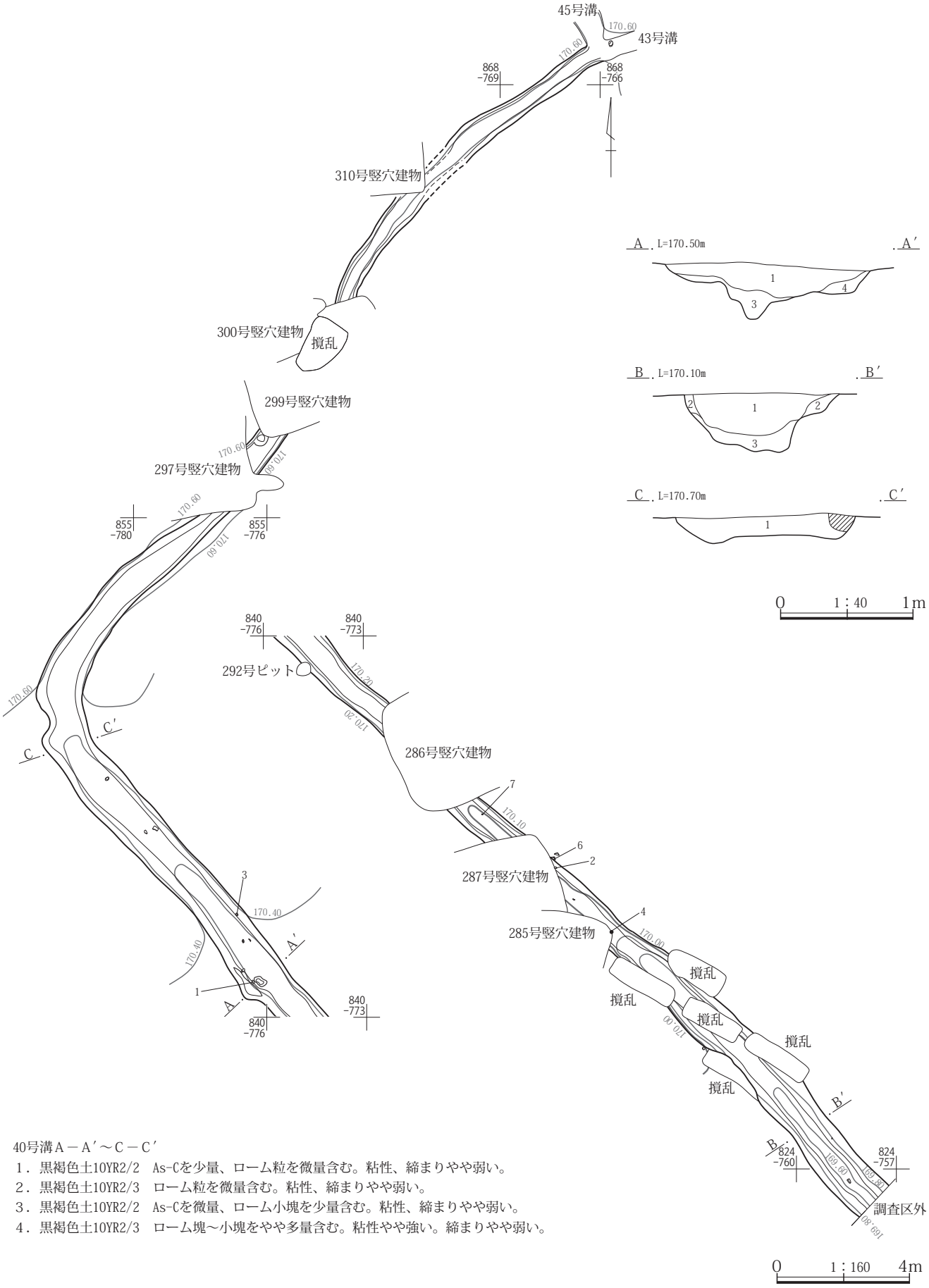
走向　N－35°－E、N－46°－W

重複　285号～287号・297号・299号・300号・310号竪穴建物と重複し、いずれも40号溝が古い。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、少量のローム小塊を含む黒褐色土などで埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　７世紀前半から10世紀前半にかけての土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片16点（78ｇ）、甕・壺類破片90点（420ｇ）、須恵器の杯・椀類破片54点（400ｇ）、甕・壺類破片23点（1,510ｇ）が出土している。

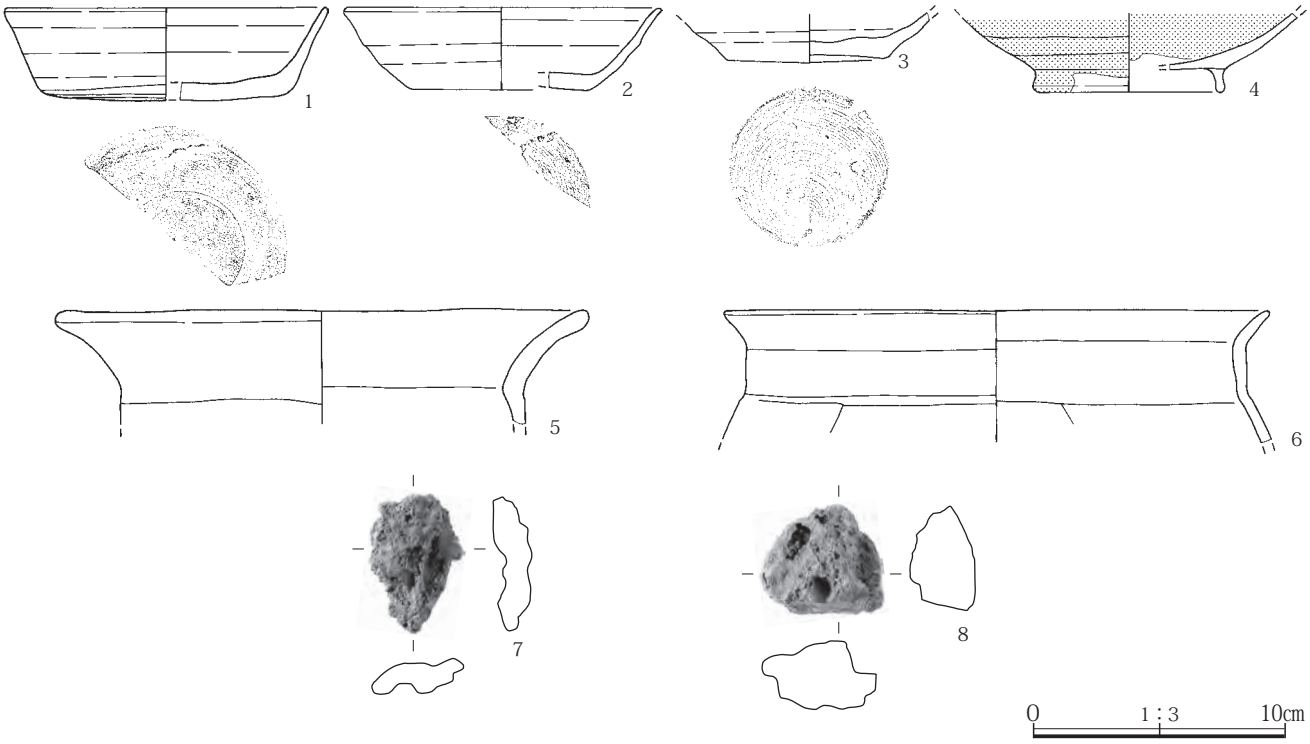
所見　中央付近でほぼ直角に曲がり、流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。調査時には45号溝との交点で名称を分けたが、幅や深さなどが共通することから、43号溝とは連続する区画溝であると考えられる。重複する竪穴建物との新旧関係から、８世紀後半以前の遺構であると考えられる。ただし、出土遺物から想定される時期とは整合しない。



40号溝Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
３．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量、ローム小塊を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
４．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

第346図　40号溝



第347図　40号溝出土遺物

41号溝（第348図、PL.137）

位置　X＝40,907～40,910、Y＝－80,723～－80,724（C・D区）

規模　調査長3.58m、上幅0.12～0.49m

残存深度　0.06～0.13m

走向　N－13°－W

重複　527号土坑と重複し、41号溝が古い。

埋没土　微量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片22点（43ｇ）、須恵器の杯・椀類破片１点（２ｇ）、甕・壺類破片５点（85ｇ）、瓦片１点が出土している。

所見　人が歩くことによって地表面が沈み、溝状になった道であると考えられる。溝に沿って硬化面が続くことから、何らかの事情により道が移動したと考えられる。本溝の南の延長線上には、走向がほぼ一致する46号溝があり、底面が同じように硬化していたことから、同一の道である可能性が考えられる。

42号溝（第348・349図、PL.137・352）

位置　X＝40,832～40,859、Y＝－80,748～－80,761（C・D区）

規模　調査長29.30m、上幅0.40～1.20m

残存深度　0.04～0.25m

走向　N－26°－W

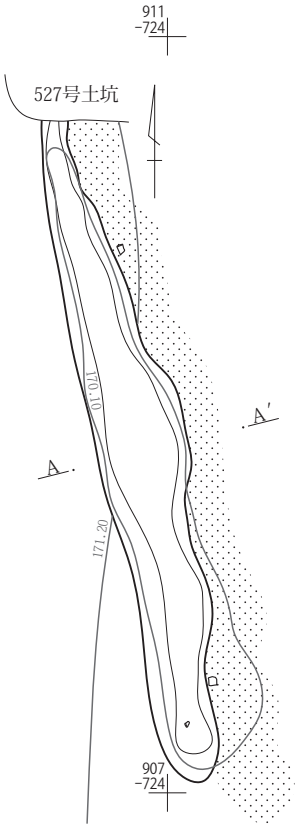
重複　274号竪穴建物と重複し、42号溝が古い。また、３号竪穴状遺構と重複し、42号溝が新しい。

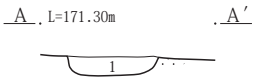
埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量の暗褐色土小塊を含む黒褐色土などで埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　９世紀を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片21点（65ｇ）、甕・壺類破片110点（830ｇ）、須恵器の杯・椀類破片96点（870ｇ）、甕・壺類破片40点（1,440ｇ）、瓦片２点が出土している。

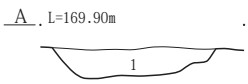
所見　流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。本溝の北の延長線上には、走向がほぼ一致する45号溝があり、同一の区画溝である可能性が考えられる。また、本遺構の東に位置する44号溝とは、約20mの間隔を空けて走向が一致することから、

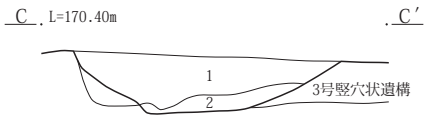
41号溝





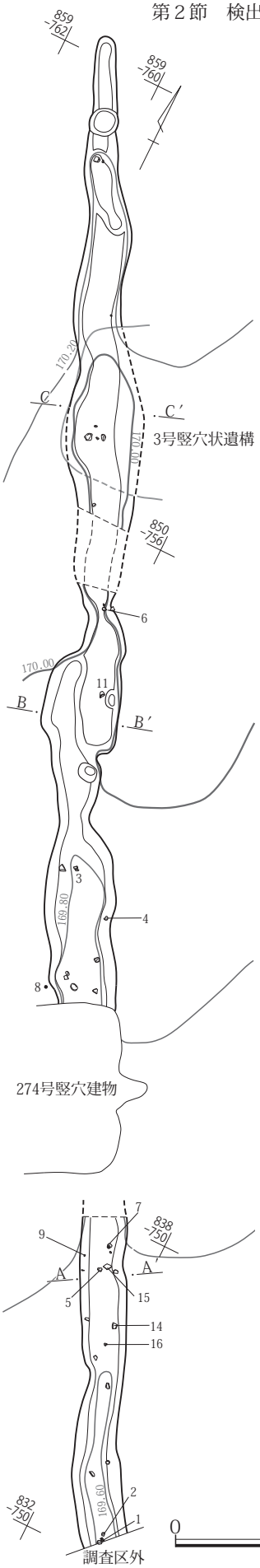
41号溝Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。





42号溝Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　暗褐色土小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/2　As-Cを微量含む。粘性、締まりやや弱い。

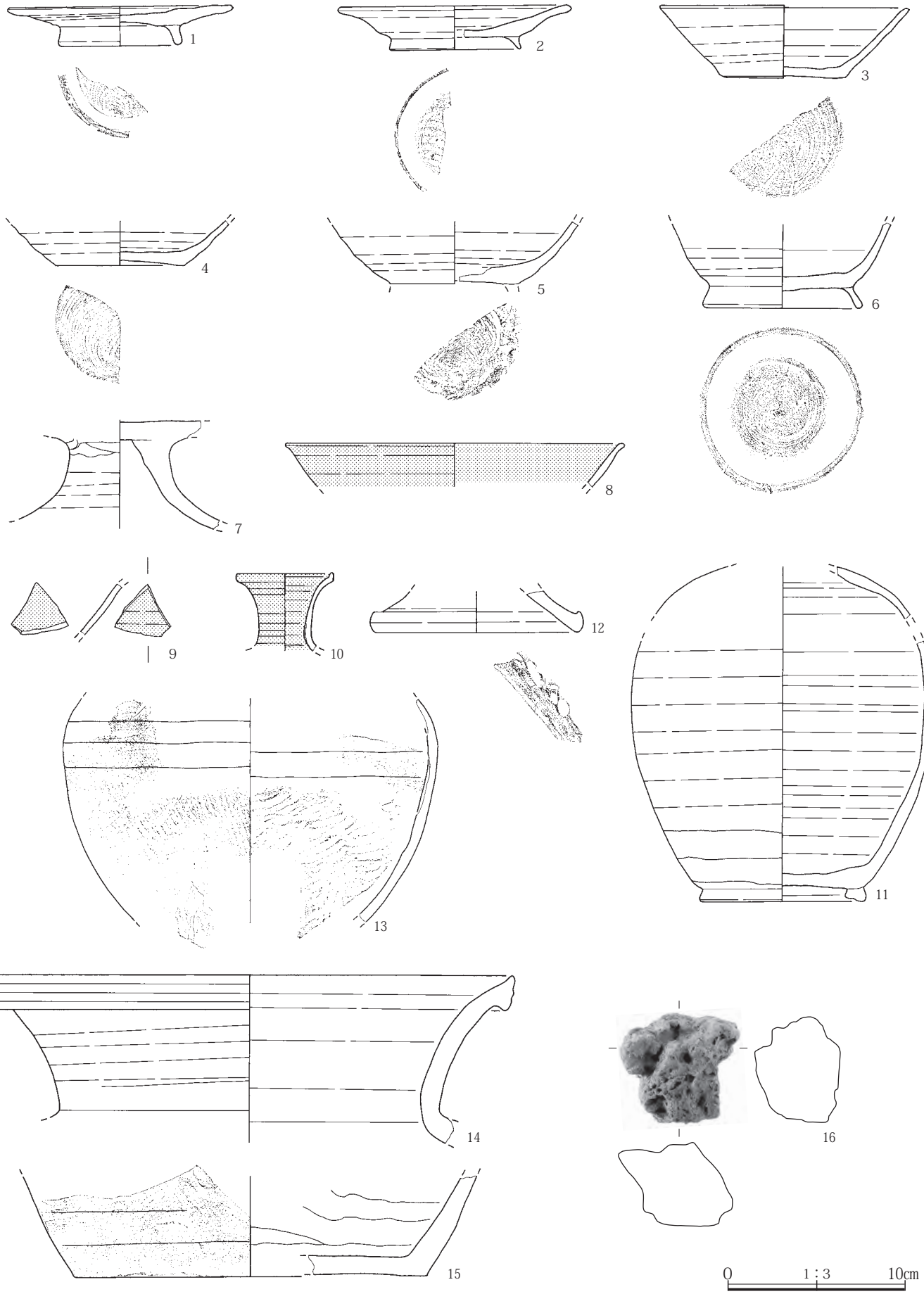
42号溝



0　1：40　1m

0　1：120　5m

第348図　41号・42号溝



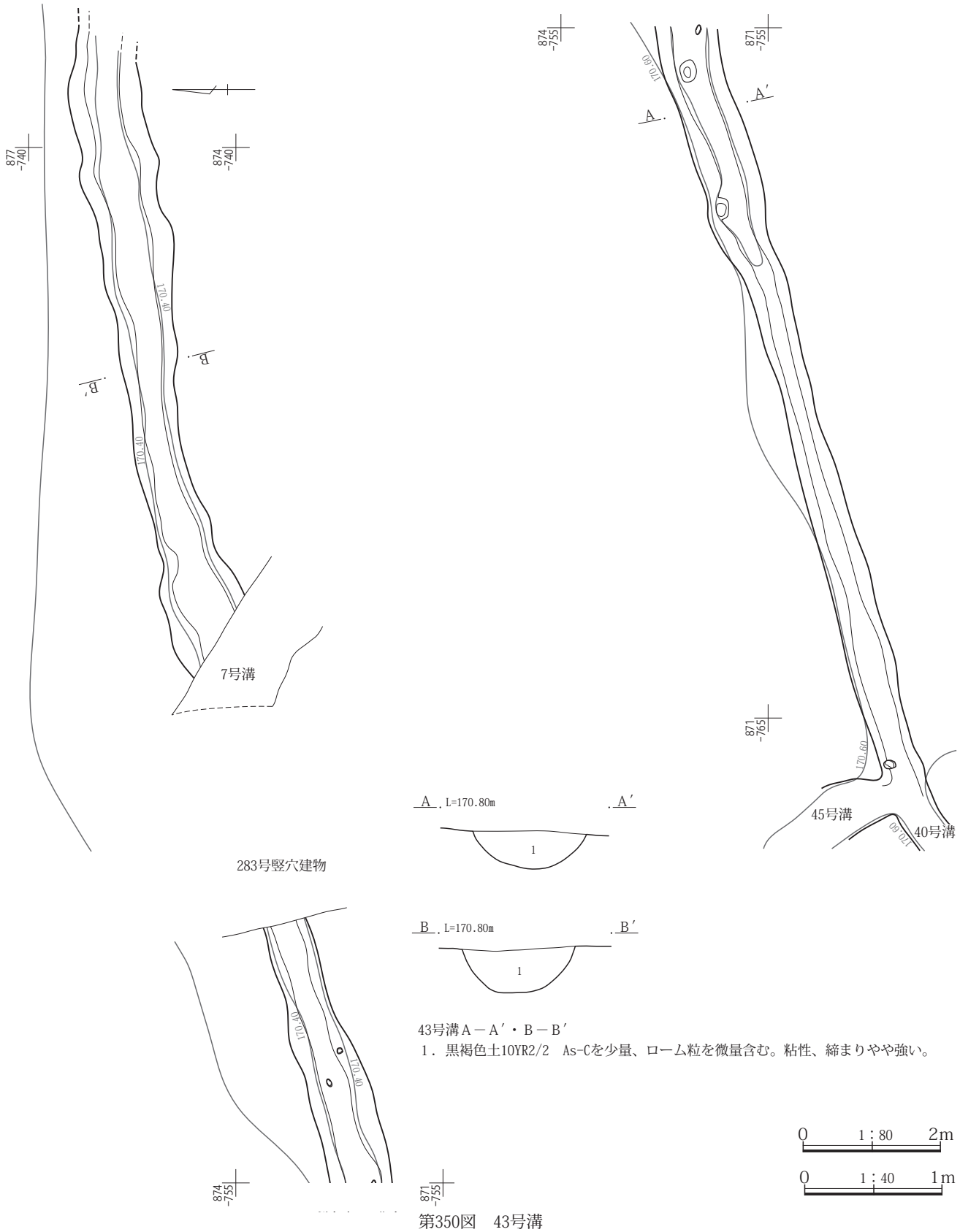
第349図　42号溝出土遺物

両遺構は一連の区画溝である可能性が考えられる。重複する竪穴建物との新旧関係から、７世紀第４四半期以前の遺構であると考えられる。ただし、出土遺物から想定される時期とは整合しない。

43号溝（第350図、PL.138）

位置　X＝40,868～40,876、Y＝－80,738～－80,755（C・D区）

規模　調査長28.70m、上幅0.43～1.18m



43号溝Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：80　2m

0　1：40　1m

第350図　43号溝

残存深度　0.10～0.33m

走向　N－75°－E

重複　283号竪穴建物、７号溝と重複し、43号溝が古い。

埋没土　少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点（５ｇ）、甕・壺類破片７点(63ｇ)が出土している。

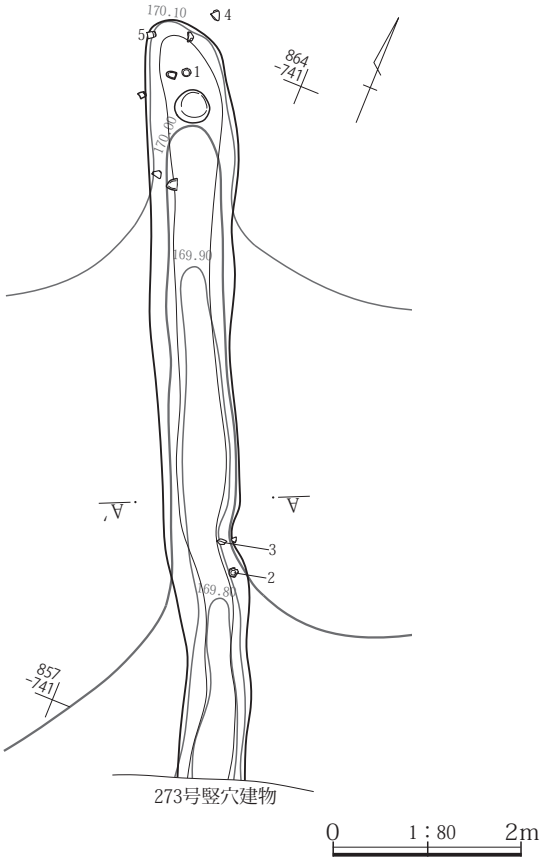
所見　流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。調査時には45号溝との交点で名称を分けたが、幅や深さなどが共通することから、40号溝とは連続する区画溝であると考えられる。また、本溝の東の延長線上には、走向がほぼ一致する12号溝があり、同一の区画溝である可能性が考えられる。重複する竪穴建物との新旧関係から、９世紀第３四半期以前の遺構であると考えられる。

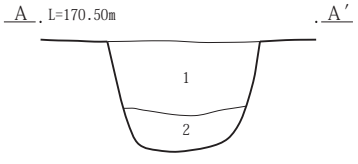
44号溝(第351図、PL.138)

位置　X＝40,856～40,864、Y＝－80,738～－80,742（C・D区）

規模　調査長8.02m、上幅0.60～0.97m

残存深度　残存深度0.08～0.23m



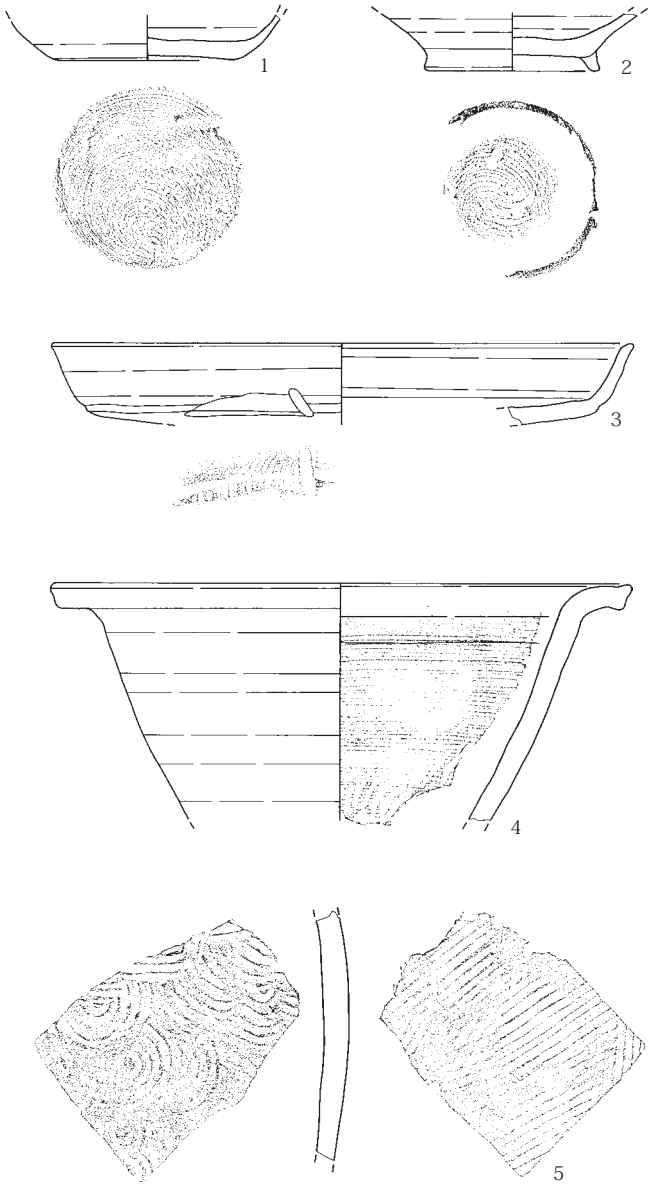


44号溝Ａ－Ａ′

１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：40　1m



第351図　44号溝と出土遺物

走向　Ｎ－25°－Ｗ

重複　273号竪穴建物と重複し、44号溝が古い。

埋没土　上層は少量のAs-C、微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　９世紀を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の甕・壺類破片19点(75ｇ)、須恵器の杯・椀類破片９点(117ｇ)、甕・壺類破片３点(260ｇ)、剝片１点(20.2ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ｂ式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。本遺構の西に位置する42号溝とは、約20ｍの間隔を空けて走向が一致することから、両遺構は一連の区画溝である可能性が考えられる。重複する竪穴建物との新旧関係から、８世紀中葉以前の遺構であると考えられる。ただし、出土遺物から想定される時期とは整合しない。

45号溝Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

第352図　45号溝

45号溝(第352図、PL.138)

位置　Ｘ＝40,869～40,873、Ｙ＝－80,765～－80,769(Ｃ・Ｄ区)

規模　調査長4.83m、上幅0.52～1.12m

残存深度　0.12～0.15m

走向　Ｎ－40°－Ｗ

重複　551号土坑と重複し、45号溝が古い。

埋没土　微量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　土師器の杯・椀類破片５点(12ｇ)、甕・壺類破片11点(41ｇ)、須恵器の杯･椀類破片９点(72ｇ)、甕･壺類破片５点(103ｇ)が出土している。

所見　流水の痕跡や硬化面が認められないことから、区画溝であると考えられる。本溝の北の延長線上には、走向がほぼ一致する45号溝があり、同一の区画溝である可能性が考えられる。また、40号溝や43号溝と一連の溝として、北側に隣接する範囲を区画していた可能性も考えられるが、調査範囲が限られていたことから詳細については不明である。重複する土坑との新旧関係から、８世紀前半以前の遺構であると考えられる。

46号溝(第353図、PL.138・353)

位置　Ｘ＝40,894～40,899、Ｙ＝－80,719～－80,721(Ｃ・Ｄ区)

規模　調査長5.12m、上幅0.40～0.65m

残存深度　0.08～0.13m

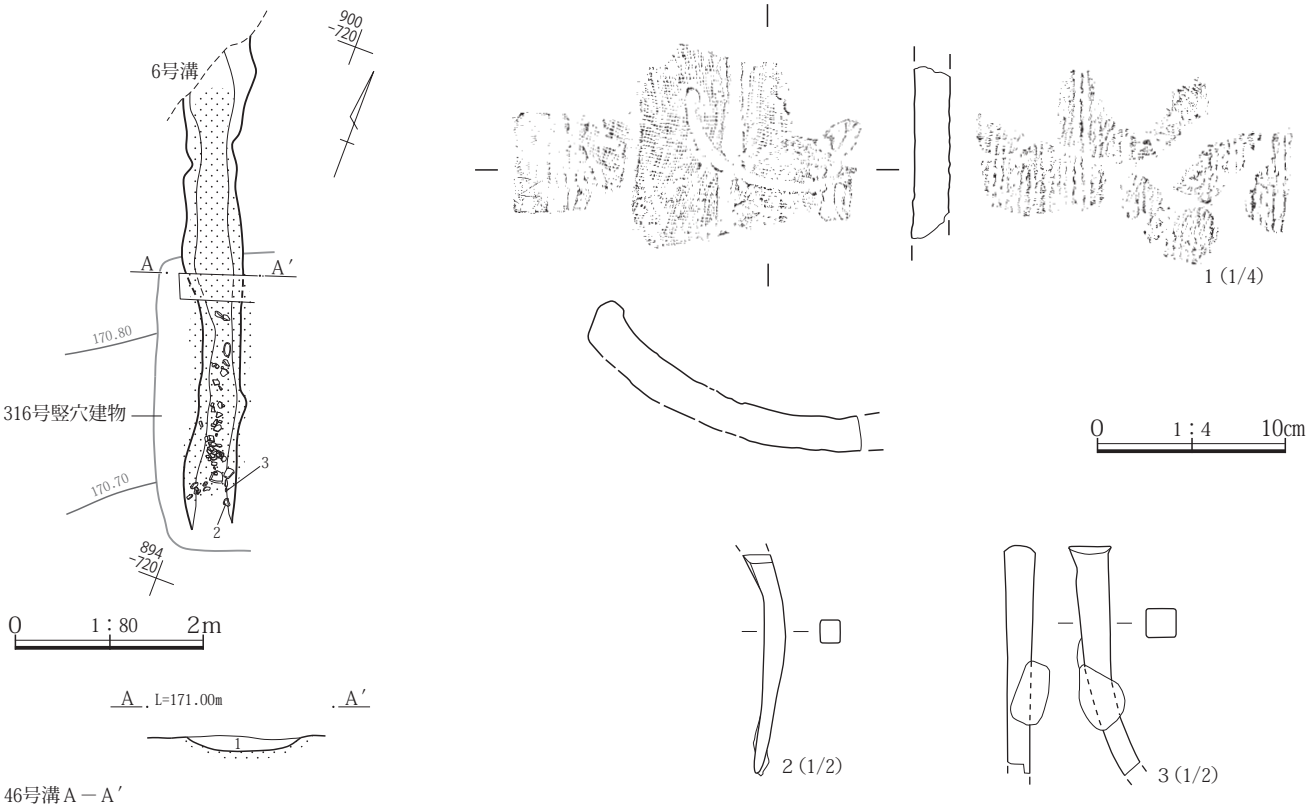
走向　Ｎ－22°－Ｗ

重複　316号竪穴建物と重複し、46号溝が新しい。また、６号溝と重複し、46号溝が古い。

埋没土　少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物　瓦片(１)や釘(２)などが出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の甕・壺類破片５点(28ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(６ｇ)、瓦片24点が出土している。

所見　底面が硬化していることから、人が歩くことによって地表面が沈み、溝状になった道であると考えられる。本溝の北の延長線上には、走向がほぼ一致する41号溝があり、同じように硬化面が続いていたことから、同



第353図　46号溝と出土遺物

一の道である可能性が考えられる。重複する土坑との新旧関係から、７世紀第４四半期以降の遺構であると考えられる。

７．土坑

51号土坑(第354図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,927、Ｙ＝－80,665（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸0.43m、短軸(0.37m)

残存深度　0.18m

主軸方位　Ｎ－20°－Ｗ

重複　なし

埋没土　埋没土は不明である。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

52号土坑(第354図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,926～40,927、Ｙ＝－80,666（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.60m、短軸0.43m

残存深度　0.33m

主軸方位　Ｎ－83°－Ｗ

重複　なし

埋没土　埋没土は不明である。

出土遺物　なし

所見　中央付近が深く、北端が0.19m、南端が0.11m高くテラス状になっていることから、３基の土坑が重複している可能性が考えられる。しかし、土層断面の記録がないことから、詳細は不明である。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

54号土坑(第354図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,926～40,927、Ｙ＝－80,667～－80,668

（C・D区）
形状　円形
規模　長軸0.39m、短軸0.39m
残存深度　0.19m
主軸方位　N－0°
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

55号土坑(第354図、PL.139)
位置　X＝40,927～40,928、Y＝－80,668～－80,669（C・D区）
形状　円形
規模　長軸0.40m、短軸0.40m
残存深度　0.24m
主軸方位　N－0°
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、瓦片２点が出土している。
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

56号土坑(第354図、PL.139)
位置　X＝40,916～40,918、Y＝－80,672～－80,673（C・D区）
形状　楕円形
規模　長軸1.35m、短軸1.15m
残存深度　0.39m
主軸方位　N－13°－W
重複　なし
埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-C、ローム粒、やや多量のAs-YPを含む黒褐色土で埋没していた。
出土遺物　なし
所見　土層断面の記録では、埋没土中にAs-Cを含むとされているが、規模・形状から縄文時代の袋状土坑である可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

57号土坑(第354図、PL.139)
位置　X＝40,927、Y＝－80,665～－80,666（C・D区）
形状　円形
規模　長軸0.22m、短軸0.20m
残存深度　0.11m
主軸方位　N－37°－W
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

58号土坑(第354図、PL.139)
位置　X＝40,926、Y＝－80,666（C・D区）
形状　円形
規模　長軸0.38m、短軸0.35m
残存深度　0.41m
主軸方位　N－13°－E
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

59号土坑(第354図、PL.139)
位置　X＝40,926、Y＝－80,667（C・D区）
形状　楕円形
規模　長軸0.50m、短軸0.42m
残存深度　0.86m
主軸方位　N－23°－E

重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

60号土坑(第354図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,927、Ｙ＝－80,667（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.58m、短軸0.46m
残存深度　0.80m
主軸方位　Ｎ－87°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

62号土坑(第354図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,928～40,929、Ｙ＝－80,667（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸0.34m、短軸0.32m
残存深度　0.17m
主軸方位　Ｎ－47°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

63号土坑(第354図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,928、Ｙ＝－80,667（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.40m、短軸0.33m
残存深度　0.46m
主軸方位　Ｎ－35°－Ｅ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

64号土坑(第354図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,928～40,929、Ｙ＝－80,668～－80,669（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸0.40m、短軸0.39m
残存深度　0.23m
主軸方位　Ｎ－67°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

65号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,929、Ｙ＝－80,669（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸0.35m、短軸0.33m
残存深度　0.71m
主軸方位　Ｎ－85°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが、建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

66号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,928、Ｙ＝－80,669（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸0.34m、短軸0.33m
残存深度　0.68m
主軸方位　Ｎ－25°－Ｅ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが､建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

67号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,927、Ｙ＝－80,668（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.26m、短軸0.21m
残存深度　0.61m
主軸方位　Ｎ－85°－Ｅ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが､建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

68号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,926～40,927、Ｙ＝－80,668～－80,669（Ｃ・Ｄ区）
形状　円形
規模　長軸0.36m、短軸0.34m
残存深度　0.78m
主軸方位　Ｎ－14°－Ｅ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが､建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

69号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,924、Ｙ＝－80,670（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.22m、短軸0.19m
残存深度　0.17m
主軸方位　Ｎ－68°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが､建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

70号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,923、Ｙ＝－80,669（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.32m、短軸0.31m
残存深度　0.53m
主軸方位　Ｎ－４°－Ｗ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　なし
所見　調査区東端に集中するピット群のうちの１基であるが､建物を構成するようなものとは認識できなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

71号土坑(第355図、PL.139)
位置　Ｘ＝40,947～40,949、Ｙ＝－80,692～－80,693（Ｂ区南）
形状　長方形
規模　長軸1.37m、短軸0.83m
残存深度　0.44m
主軸方位　Ｎ－15°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層はやや多量のAs-YP、ローム粗塊～粗粒を

含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のAs-YP、ローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(33ｇ)、須恵器の杯･椀類破片４点(58ｇ)、甕・壺類破片１点(３ｇ)が出土している。

所見　平面形状が長方形であることから、作物を貯蔵するために耕作地の隅に掘られた「イモ穴」であると推測できる。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

72号土坑(第355図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,902～40,903、Ｙ＝－80,693（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸0.50m、短軸(0.30m)

残存深度　0.43m

主軸方位　Ｎ－47°－Ｗ

重複　32号竪穴建物と重複し、72号土坑が古い。

埋没土　少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　重複する竪穴建物との新旧関係から、８世紀第３四半期以前の遺構であると考えられる。

79号土坑(第355図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,911、Ｙ＝－80,695～－80,696（Ｃ･Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.67m、短軸0.61m

残存深度　0.38m

主軸方位　Ｎ－18°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粗粒～粒を含む暗褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、As-YP、ローム粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層はやや多量のAs-C、ローム塊～細粒、多量のAs-YPを含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、須恵器の杯・椀類破片４点(33ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

81号土坑(第355図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,911、Ｙ＝－80,693～－80,694（Ｃ･Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(0.55m)、短軸(0.44m)

残存深度　0.17m

主軸方位　Ｎ－73°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-C、やや多量のローム粗粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

84号土坑(第355図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,921～40,922、Ｙ＝－80,693～－80,694（Ｃ・Ｄ区）

形状　円形

規模　長軸0.45m、短軸0.42m

残存深度　0.43m

主軸方位　Ｎ－16°－Ｗ

重複　28号竪穴建物と重複し、84号土坑が古い。

埋没土　やや多量のAs-C、多量のローム塊～粒、少量の炭化物粒を含む暗褐色土などで埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　重複する竪穴建物との新旧関係から、７世紀以前の遺構であると考えられる。

89号土坑(第356図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,943～40,944、Ｙ＝－80,656～－80,658（Ａ区）

形状　不整形

規模　長軸1.60m、短軸0.59m

残存深度　0.29m

主軸方位　Ｎ－44°－Ｗ

重複　90号土坑と重複し、89号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量のAs-C、As-YP、ローム粒を含む黒

褐色土で埋没していた。下層は多量のローム塊、暗褐色土塊を含む黒褐色土などで埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　複雑な形状であるが、３基の土坑が重複している可能性が考えられる。北西の窪みは、長軸0.76m、短軸0.65m、深さ0.25m、南東の窪みは、長軸0.90m、短軸0.60m、深さ0.29mである。また、その中間はやや浅く、深さ0.16mである。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

90号土坑(第356図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,942～40,943、Ｙ＝－80,657～－80,658（Ａ区）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸(1.24m)、短軸(0.85m)

残存深度　0.58m

主軸方位　Ｎ－73°－Ｅ

重複　89号土坑と重複し、90号土坑が古い。

埋没土　上層は多量のローム粗塊～微粒を含む黒褐色土などで埋没していた。中層は多量のローム塊を含む黒褐色土などで埋没していた。下層はローム塊を主体とし、やや多量のAs-YP、少量の黒褐色土塊を含む土などで埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　調査工程上の都合により北西半の調査を行っていないことから、全体の形状については不明であるが、南端付近では粘土層を横に掘り進めているようにも見えることから、粘土採掘坑である可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

525号土坑(第356図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,891～40,892、Ｙ＝－80,719～－80,720（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.03m、短軸0.87m

残存深度　0.44m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒、微量の焼土粒を含む暗褐色土などで埋没していた。中層は微量のAs-C、やや多量のローム小塊～粒、少量の焼土粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はごく微量のAs-C、ローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(１ｇ)、甕・壺類破片24点(89ｇ)、須恵器の杯・椀類破片６点(26ｇ)が出土している。

所見　西半は深さ0.12mのテラス状になっているのに対し、東半は最大で0.44mまで掘り込まれていた。土層断面の観察から、西半には古い土坑が重複している可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

526号土坑(第356・359図、PL.139・353)

位置　Ｘ＝40,893～40,894、Ｙ＝－80,718～－80,720（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸2.03m、短軸1.16m

残存深度　1.16m

主軸方位　Ｎ－84°－Ｗ

重複　３号建物１号溝と重複し、526号土坑が新しい。

埋没土　上層はやや多量のAs-C、多量のローム塊～小塊を含む暗褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-C、やや多量のローム塊～小塊を含む黒褐色土などで埋没していた。下層は非常に多量のローム小塊～粒を含むにぶい黄褐色土などで埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　多量の瓦(526土-１～６)が出土したことが特筆される。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の杯・椀類破片７点(58ｇ)、甕・壺類破片72点(205ｇ)、須恵器の杯・椀類破片39点(182ｇ)、甕・壺類破片12点(115ｇ)、瓦片105点、石匙１点(1.4ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ａ式)の胴部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

534号土坑(第356図、PL.139)

位置　Ｘ＝40,834～40,835、Ｙ＝－80,767～－80,768（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.03m、短軸0.96m

残存深度　0.15m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　微量のAs-C、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片13点(38ｇ)、須恵器の杯・椀類破片７点(29ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

535号土坑(第356図、PL.140)

位置　Ｘ＝40,910～40,911、Ｙ＝－80,725～－80,726（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.04m、短軸0.68m

残存深度　0.18m

主軸方位　Ｎ－３°－Ｗ

重複　なし

埋没土　少量のAs-C、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(５ｇ)、甕・壺類破片３点(８ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(３ｇ)、甕・壺類破片２点(62ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

536号土坑(第357図、PL.140)

位置　Ｘ＝40,910～40,911、Ｙ＝－80,726～－80,727（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.08m、短軸0.84m

残存深度　0.60m

主軸方位　Ｎ－84°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。中層はやや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のAs-YP、ローム塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片７点(34ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(７ｇ)が出土している。

所見　西半が東半に比べ0.20mほど低くなっていることから、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。しかし、土層断面の観察から、それを確認することはできなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

537号土坑(第357図、PL.140)

位置　Ｘ＝40,911～40,912、Ｙ＝－80,724～－80,727（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸2.78m、短軸0.70m

残存深度　0.33m

主軸方位　Ｎ－86°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-C、ローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は多量のローム粗塊～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片１点(５ｇ)、甕・壺類破片13点(79ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(12ｇ)、甕・壺類破片３点(35ｇ)、瓦片１点が出土している。

所見　西端部にはやや深く掘り込まれた箇所があり、ピットの重複などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

538号土坑(第357図、PL.140)

位置　Ｘ＝40,913～40,914、Ｙ＝－80,727～－80,728（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.55m、短軸0.42m

残存深度　0.78m
主軸方位　Ｎ－90°
重複　なし
埋没土　上層は多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はごく微量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、縄文土器１点、土師器の甕・壺類破片１点（３ｇ）、須恵器の甕・壺類破片１点(58ｇ)が出土している。このうち縄文土器(諸磯ａ式)の口縁部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。
所見　東半の深さが0.18mであるのに対して、西半は深さ0.78mまで掘り込まれていた。このことから、西半にはピットが重複していた可能性が考えられるが、土層断面の観察から、それを確認することはできなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

539号土坑(第357図、PL.140)
位置　Ｘ＝40,915、Ｙ＝－80,726（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.65m、短軸0.52m
残存深度　0.65m
主軸方位　Ｎ－75°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層は少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(10ｇ)が出土している。
所見　東端部には、長軸0.31m、短軸0.28m、深さ0.61mのピットが重複していた。土層断面の観察から、本土坑より古いピットである可能性が考えられる。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

541号土坑(第357図、PL.140)
位置　Ｘ＝40,919、Ｙ＝－80,717～－80,718
（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.66m、短軸0.62m
残存深度　0.31m
主軸方位　Ｎ－20°－Ｗ
重複　なし
埋没土　やや多量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　なし
所見　南半には、長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.31mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

544号土坑(第357図、PL.140)
位置　Ｘ＝40,911～40,912、Ｙ＝－80,728（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸0.92m、短軸0.75m
残存深度　0.56m
主軸方位　Ｎ－70°－Ｅ
重複　なし
埋没土　埋没土は不明である。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(12ｇ)、瓦片１点が出土している。
所見　東半が西半に比べ最大で0.34m高くテラス状になっていることから、２基の土坑が重複している可能性が考えられる。しかし、土層断面の記録がないことから、詳細は不明である。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

547号土坑(第357・359図、PL.140・353)
位置　Ｘ＝40,864～40,866、Ｙ＝－80,742～－80,744
（Ｃ・Ｄ区）
形状　楕円形
規模　長軸2.08m、短軸1.13m
残存深度　0.51m
主軸方位　Ｎ－23°－Ｗ
重複　なし
埋没土　上層はやや多量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。中層は少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。下層はごく微量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　８世紀前半を主体とする土器とともに三重弧文軒平瓦(547土-５)が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片14点(42ｇ)、甕・壺類破片37点(230ｇ)、須恵器の杯・椀類破片11点(60ｇ)、甕・壺類破片４点(91ｇ)が出土している。

所見　中層には、土器片とともに多数の礫が投棄されていた。そのうち最大のものは、長さ0.37m、幅0.36m、厚さ0.12mであった。出土遺物から８世紀前半の遺構であると考えられる。

548号土坑(第358図、PL.141)

位置　Ｘ＝40,860～40,861、Ｙ＝－80,860(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.93m、短軸0.75m

残存深度　0.26m

主軸方位　Ｎ－17°－Ｗ

重複　なし

埋没土　少量のAs-Cを含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の甕・壺類破片２点(８ｇ)、須恵器の甕・壺類破片１点(100ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

549号土坑(第358・360図、PL.141)

位置　Ｘ＝40,860～40,861、Ｙ＝－80,764～－80,765(Ｃ・Ｄ区)

形状　楕円形

規模　長軸0.87m、短軸0.59m

残存深度　0.23m

主軸方位　Ｎ－80°－Ｅ

重複　なし

埋没土　やや多量のAs-C、少量の炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　８世紀前半を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、縄文土器１点、土師器の甕・壺類破片１点(８ｇ)、須恵器の甕・壺類破片８点(440ｇ)が出土している。このうち縄文土器(黒浜式)の口縁部破片については、遺構外出土遺物として掲載した。

所見　出土遺物から８世紀前半の遺構であると考えられる。

551号土坑(第358・360図、PL.141)

位置　Ｘ＝40,872～40,873、Ｙ＝－80,768～－80,767(Ｃ・Ｄ区)

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸1.05m、短軸(0.95m)

残存深度　0.33m

主軸方位　Ｎ－21°－Ｅ

重複　45号溝と重複し、551号土坑が新しい。

埋没土　少量のAs-C、微量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　須恵器杯(551土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片６点(24ｇ)、甕・壺類破片11点(51ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(６ｇ)、甕・壺類破片２点(120ｇ)が出土している。

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

576号土坑(第358図、PL.141)

位置　Ｘ＝40,958、Ｙ＝－80,696～－80,697（Ｂ区西）

形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸0.65m、短軸(0.40m)

残存深度　0.13m

主軸方位　Ｎ－18°－Ｗ

重複　575号土坑と重複し、576号土坑が古い。

埋没土　やや多量の白色軽石、ローム粗粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　なし

所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

577号土坑(第358・360図、PL.141)

位置　Ｘ＝40,957～40,958、Ｙ＝－80,698～－80,699(Ｂ区西)

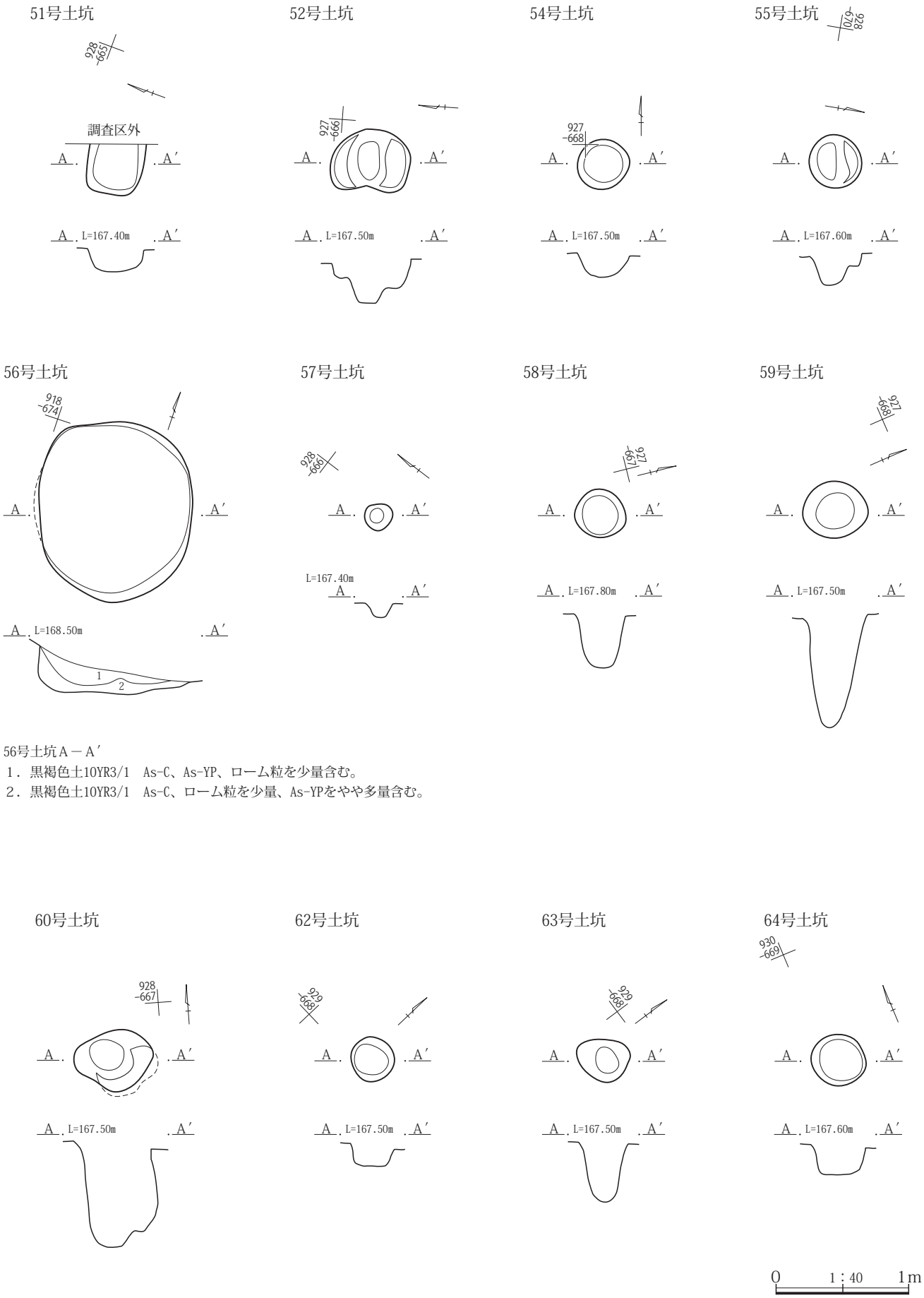
形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。

規模　長軸1.13m、短軸(0.77m)
残存深度　0.23m
主軸方位　Ｎ－67°－Ｅ
重複　579号土坑と重複し、577号土坑が古い。
埋没土　上層は少量の白色軽石、多量のローム小塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム粗粒～粒を含む黒褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　須恵器杯(577土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片１点(６ｇ)、甕・壺類破片７点(38ｇ)、須恵器の杯・椀類破片１点(２ｇ)、瓦片３点が出土している。
所見　埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

584号土坑(第358・360図、PL.141・353)
位置　Ｘ＝40,956～40,957、Ｙ＝－80,696(Ｂ区西)
形状　調査範囲が限定的であることから、形状は不明である。
規模　長軸0.50m、短軸(0.28m)
残存深度　0.17m
主軸方位　Ｎ－０°
重複　578号土坑と重複し、584号土坑が古い。
埋没土　ローム粒を主体とし、やや多量の焼土粒を含む黄褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　丸瓦(584土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の甕・壺類破片２点(７ｇ)が出土している。
所見　形状や埋没土の特徴から、本土坑は竪穴建物のカマドであり、出土した瓦片はカマドの構築材の一部である可能性が考えられる。しかし、竪穴建物の主体部と想定される範囲には、568号・577号～579号・582号の各土坑、及び撹乱が重複しており、竪穴建物の存在を確認することはできなかった。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

585号土坑(第358図、PL.141)
位置　Ｘ＝40,957～40,958、Ｙ＝－80,699～－80,700(Ｂ区西)
形状　楕円形
規模　長軸0.64m、短軸0.58m
残存深度　0.28m
主軸方位　Ｎ－74°－Ｅ
重複　なし
埋没土　上層は非常に多量のローム粗粒～細粒、やや多量の焼土粒を含む褐色土で埋没していた。下層はやや多量のローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、土師器の杯・椀類破片５点(12ｇ)、甕・壺類破片７点(29ｇ)が出土している。
所見　南東端には、長軸0.25m、短軸0.18m、深さ0.16mのピットが重複していたが、本土坑との関係は不明である。埋没土中にAs-Bを含まないことから天仁元(1108)年以前の遺構であると考えられる。

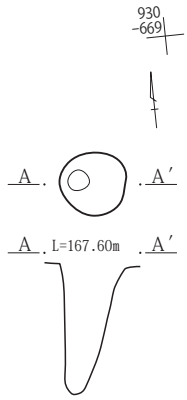
586号土坑(第358・360図、PL.141・354)
位置　Ｘ＝40,955～40,956、Ｙ＝－80,697(Ｂ区西)
形状　楕円形
規模　長軸1.03m、短軸0.87m
残存深度　0.41m
主軸方位　Ｎ－40°－Ｗ
重複　333号ピットと重複し、586号土坑が新しい。
埋没土　上層は少量の白色軽石、やや多量のローム塊～細粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層はやや多量のローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。この３層については、重複する別遺構のものである可能性が考えられる。いずれも人為的な埋没と考えられる。
出土遺物　９世紀後半を主体とする土器が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、土師器の杯・椀類破片４点(28ｇ)、甕・壺類破片19点(181ｇ)、瓦片５点が出土している。
所見　584号土坑が竪穴建物のカマドであるとすると、本土坑は同じ竪穴建物の貯蔵穴である可能性が考えられる。中央やや南寄りには、長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.41mのピットが重複していた。土層断面の観察から、本土坑より古いピットである可能性が考えられる。出土遺物から９世紀後半の遺構であると考えられる。



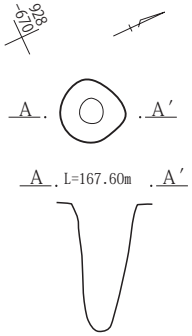
56号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
２．黒褐色土10YR3/1　As-C、ローム粒を少量、As-YPをやや多量含む。

第354図　51号・52号・54号～60号・62号～64号土坑

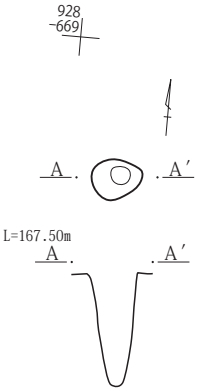
65号土坑



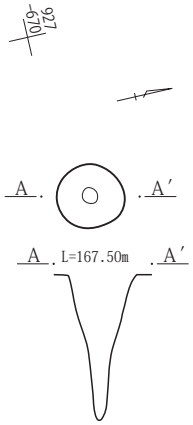
66号土坑



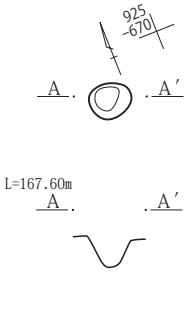
67号土坑



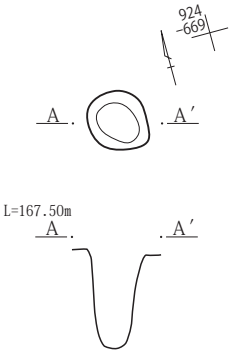
68号土坑



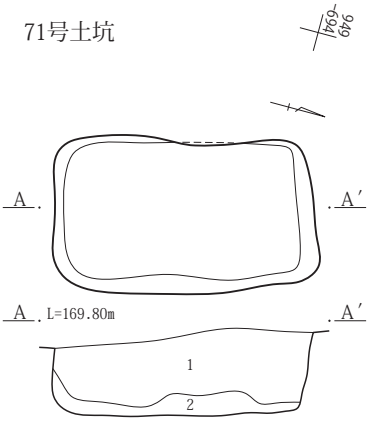
69号土坑



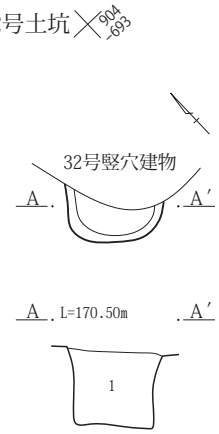
70号土坑



71号土坑



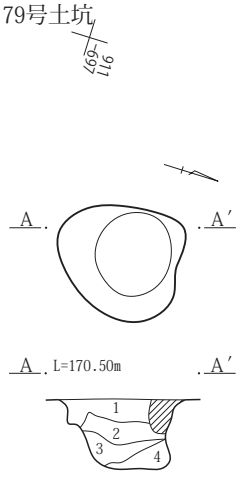
72号土坑



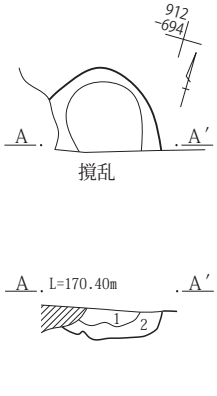
71号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土7.5YR3/1　As-YP、ローム粗塊～粗粒をやや多量含む。
２．黒褐色土7.5YR3/1　As-YP、ローム塊～細粒を少量含む。

72号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量含む。

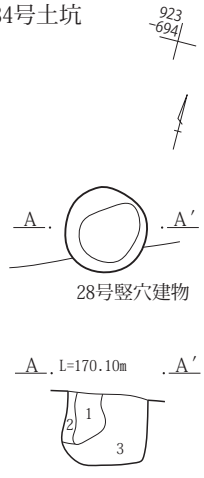
79号土坑



81号土坑



84号土坑



79号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粗粒～粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-C、As-YPをやや多量、ローム塊～細粒を少量含む。
３．暗褐色土10YR3/3　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
４．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム塊～細粒をやや多量、As-YPを多量含む。

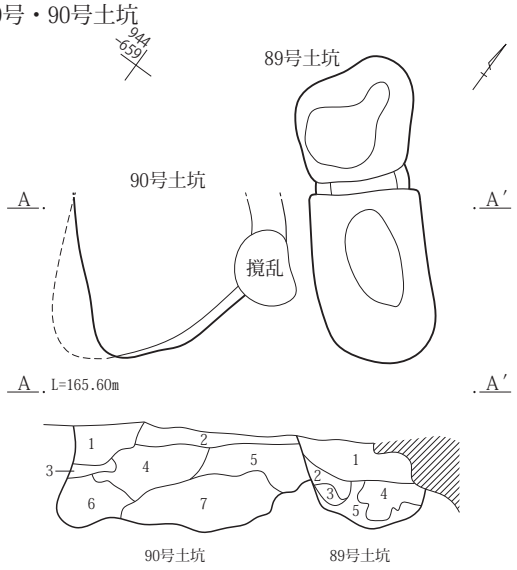
84号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒を少量、As-YPをやや多量含む。
３．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量、ローム塊～粒を多量、炭化物粒を少量含む。

81号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム塊～粒を少量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量、ローム粗粒をやや多量含む。

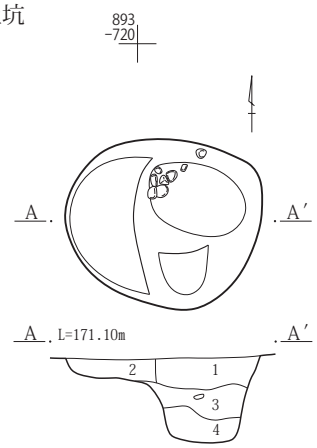
0　1：40　1m

第355図　65号～72号・79号・81号・84号土坑

89号・90号土坑



525号土坑

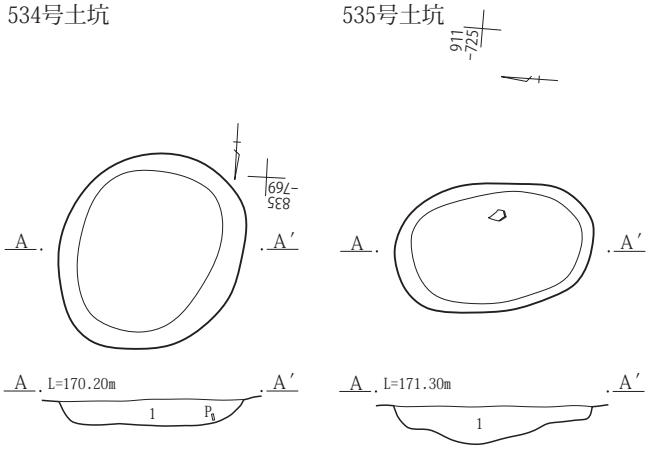


525号土坑Ａ－Ａ′

1．暗褐色土10YR3/4　As-C、ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量、ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや強い。
3．暗褐色土10YR3/3　As-Cを微量、ローム小塊～粒をやや多量、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
4．暗褐色土10YR3/3　As-C、ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。

534号土坑

535号土坑



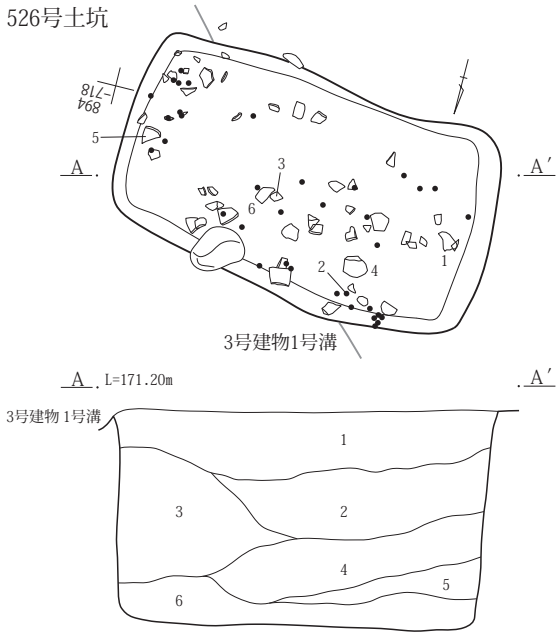
89号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YP、ローム粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPを少量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　As-Cを微量、As-YPをやや多量、ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　ローム塊、暗褐色土塊を多量含む。
5．ローム塊を主体とする。

90号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　As-Cを少量、ローム微粒、焼土粒をやや多量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　ローム粗塊～微粒を多量含む。
3．ローム塊を主体とし、黒褐色土塊をやや多量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　As-C、As-YPを少量、ローム粗塊～細粒をやや多量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　ローム塊を多量含む。
6．黒褐色土10YR3/1　As-YPを少量、ローム塊を多量含む。
7．ローム塊を主体とし、As-YPをやや多量、黒褐色土塊を少量含む。

526号土坑



526号土坑Ａ－Ａ′

1．暗褐色土10YR3/3　As-Cをやや多量、ローム塊～小塊を多量含む。粘性弱い。締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム塊～小塊をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-C、ローム小塊を微量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量、ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
5．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
6．にぶい黄褐色土10YR4/3　ローム小塊～粒を非常に多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

534号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

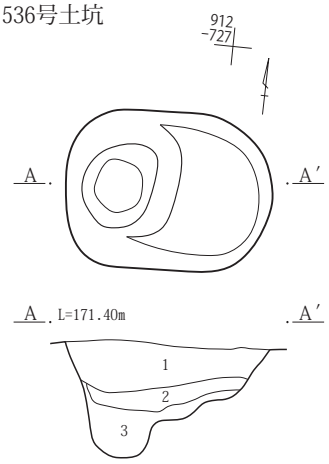
535号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-C、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。

0　1：40　1m

第356図　89号・90号・525号・526号・534号・535号土坑

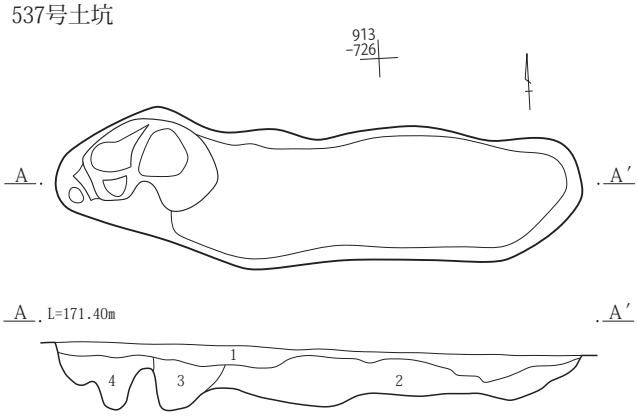
536号土坑



536号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。

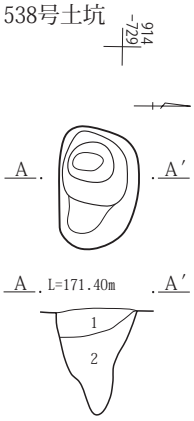
537号土坑



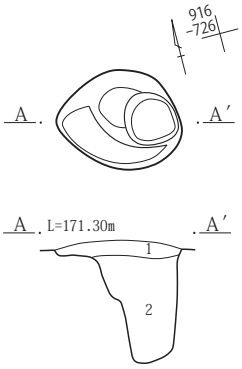
537号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム粗塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
4．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性やや強い。
　締まり弱い。

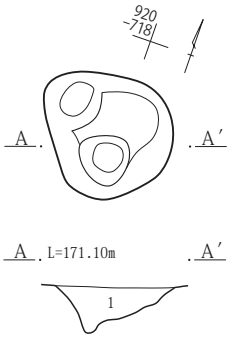
538号土坑



539号土坑



541号土坑



538号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を多量含む。粘性、締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。

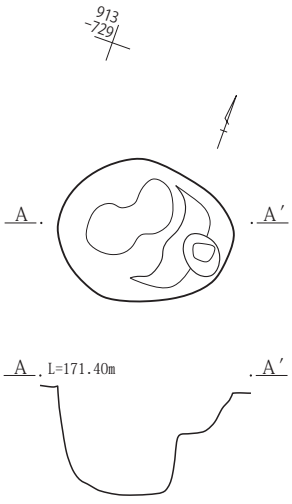
539号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を少量含む。粘性、締まりやや強い。
2．黒褐色土10YR2/3　ローム塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。

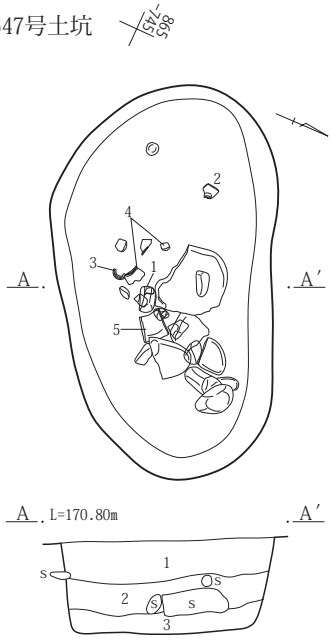
541号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒をやや多量含む。
　粘性、締まりやや弱い。

544号土坑



547号土坑



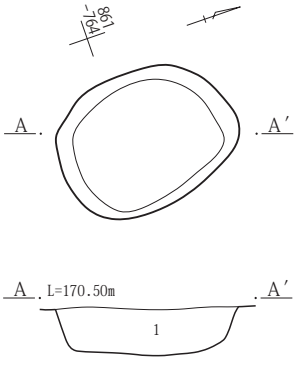
547号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/2　As-Cをやや多量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
2．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。
3．黒褐色土10YR2/2　As-Cをごく微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

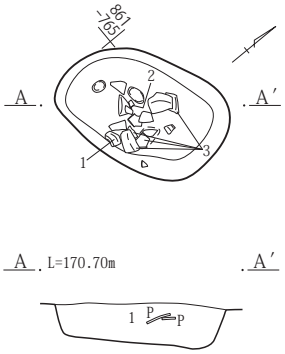
0　1：40　1m

第357図　536号～539号・541号・544号・547号土坑

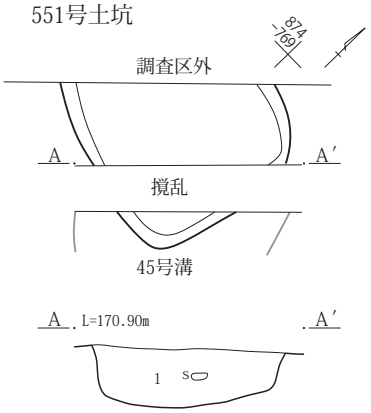
548号土坑



549号土坑



551号土坑

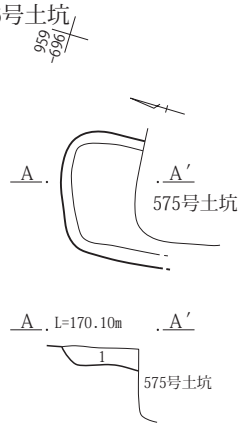


548号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量含む。粘性、締まりやや弱い。

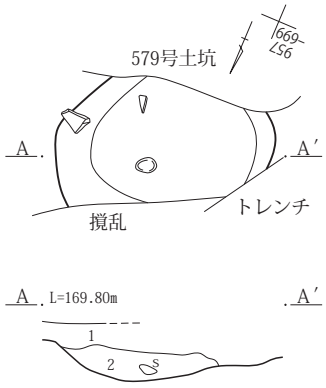
549号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cをやや多量、炭化物粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

551号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒、焼土粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

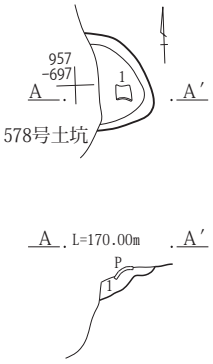
576号土坑



577号土坑



584号土坑

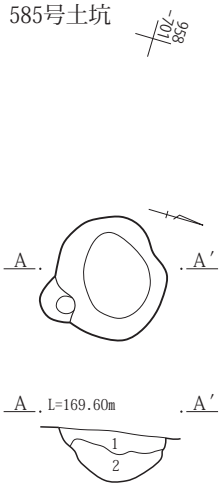


576号土坑Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/2　白色軽石、ローム粗粒をやや多量含む。

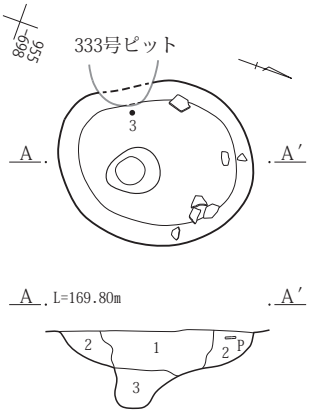
577号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/4　白色軽石を少量、ローム小塊～細粒を多量含む。
２．黒褐色土10YR3/2　ローム粗粒～粒ををやや多量含む。

584号土坑Ａ－Ａ′
１．黄褐色土10YR5/6　ローム粒を主体とし、焼土粒をやや多量含む。

585号土坑



586号土坑

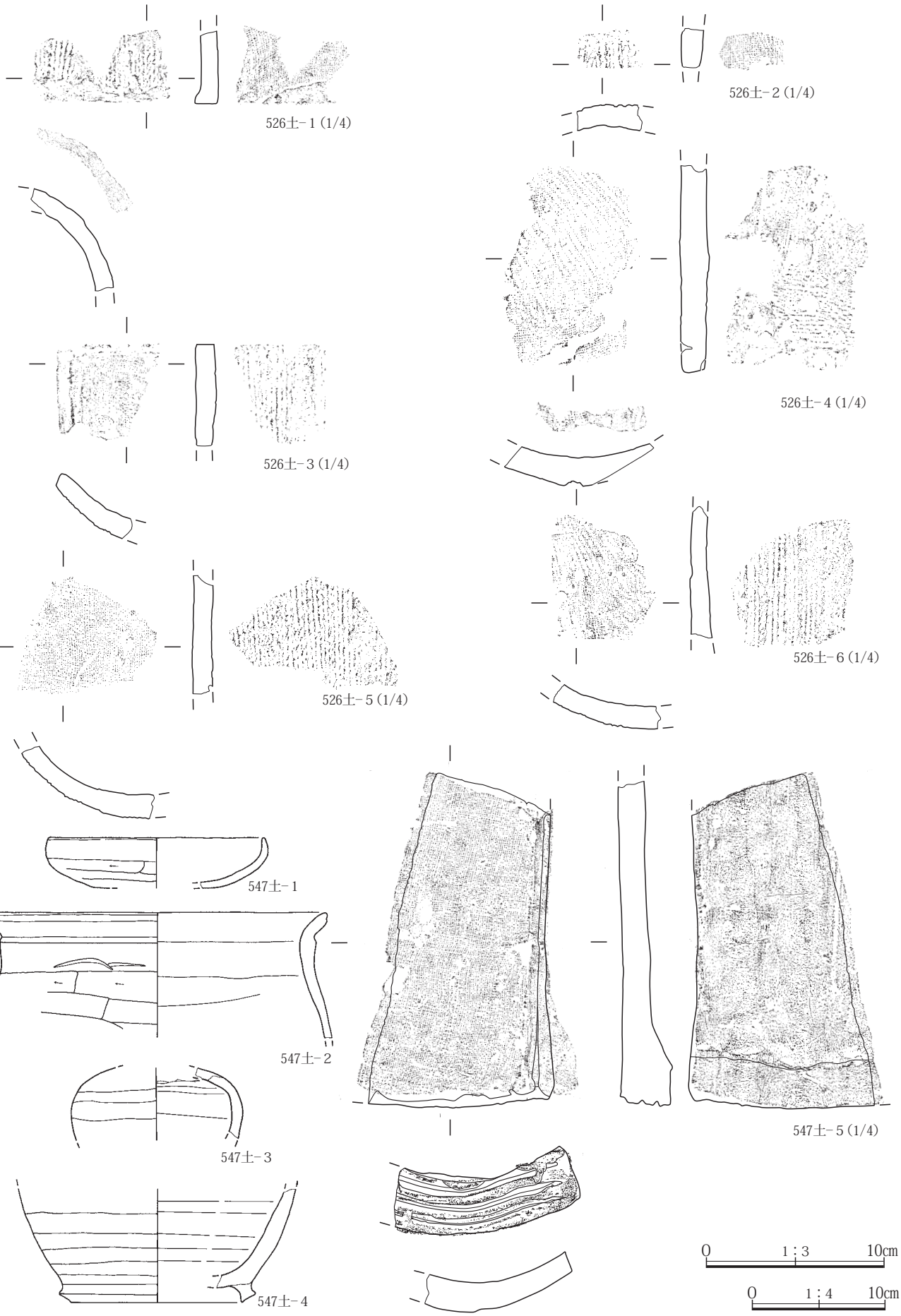


585号土坑Ａ－Ａ′
１．褐色土10YR4/4　ローム粗粒～細粒を非常に多量、焼土粒をやや多量含む。締まりやや弱い。
２．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～細粒をやや多量含む。

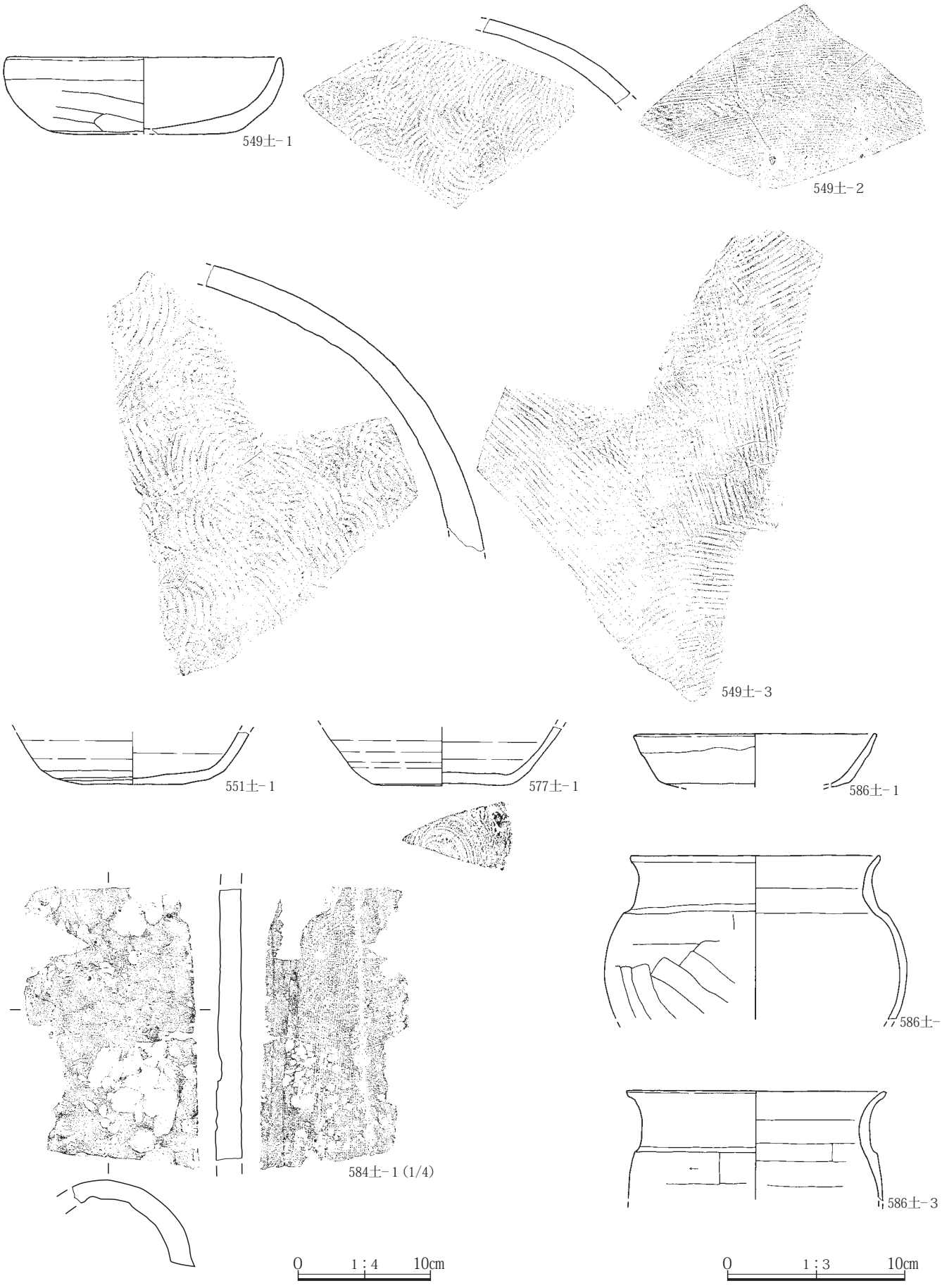
586号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　白色軽石を少量、ローム塊～細粒をやや多量含む。
２．褐色土10YR4/4　ローム小塊～細粒を非常に多量、焼土粒を少量含む。締まりやや弱い。
３．暗褐色土10YR3/4　ローム粒をやや多量含む。締まりやや弱い。

0　1：40　1m

第358図　548号・549号・551号・576号・577号・584号～586号土坑



第359図　526号・547号土坑出土遺物



第360図　549号・551号・577号・584号・586号土坑出土遺物

587号土坑（第361～364図、PL.142・354・355）

位置　X＝40,961～40,962、Y＝－80,693～－80,694（B区西）

形状　一部を583号土坑によって壊されているが、楕円形であると考えられる。

規模　長軸(0.40m)、短軸0.38m

残存深度　0.18m

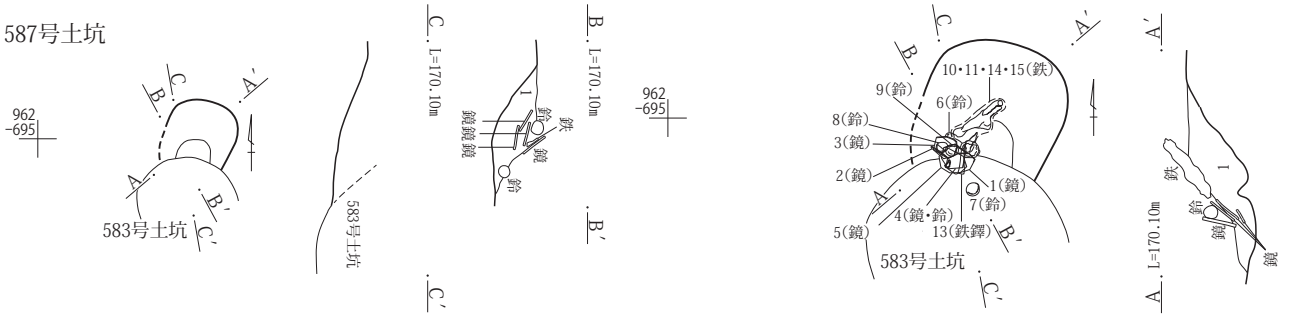
主軸方位　N－50°－E

重複　583号土坑と重複し、587号土坑が古い。

埋没土　少量の白色軽石、やや多量のローム粗粒～細粒を含む暗褐色土で埋没していた。人為的な埋没と考えられる。

出土遺物　八稜鏡５面、銅鈴５点、鉄鐸２点などがまとまって出土したことが特筆される。鏡のうち１点（５）には、アサの靭皮繊維を撚った紐が残存していた。また、最も下位から出土した銅鈴（４）には繊維が付着していた。このことから、これらの遺物は布状のものによって包まれていたと推測できる。

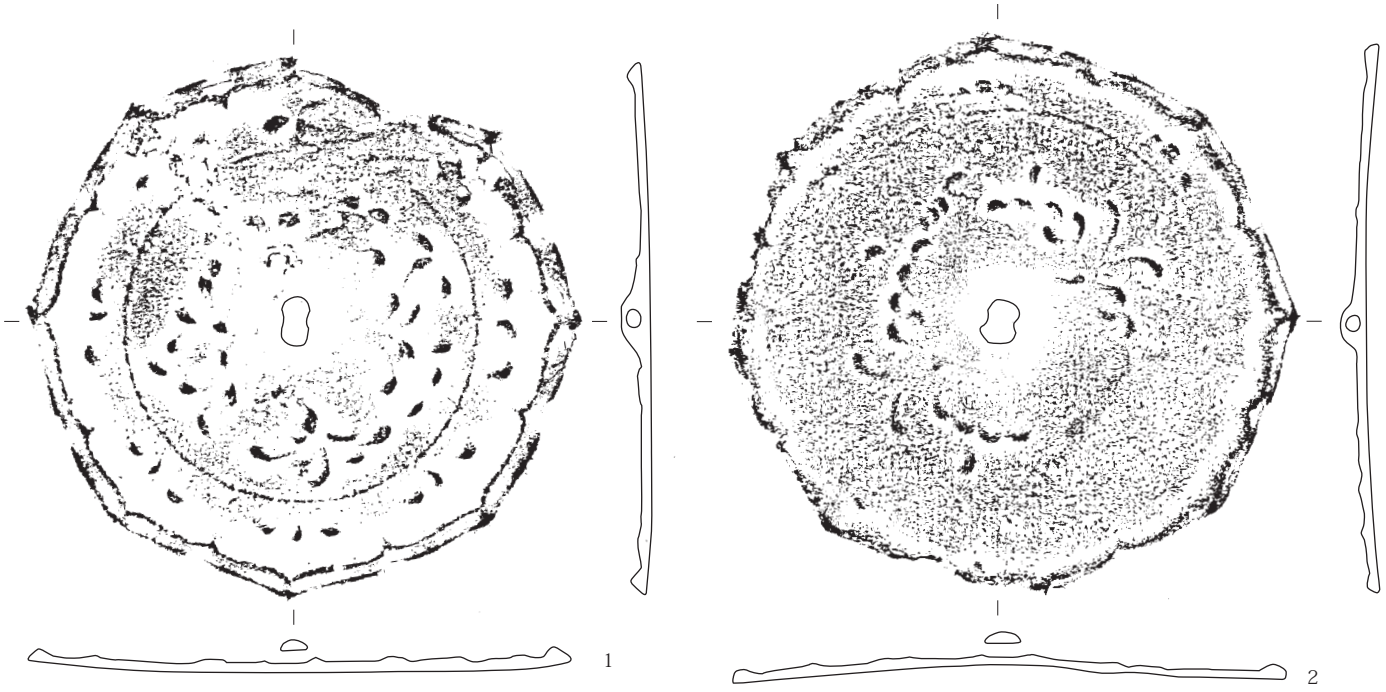
所見　出土遺物から平安時代中期以降の埋納遺構であると考えられる。



587号土坑Ａ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/3　白色軽石を少量、ローム粗粒～細粒をやや多量含む。

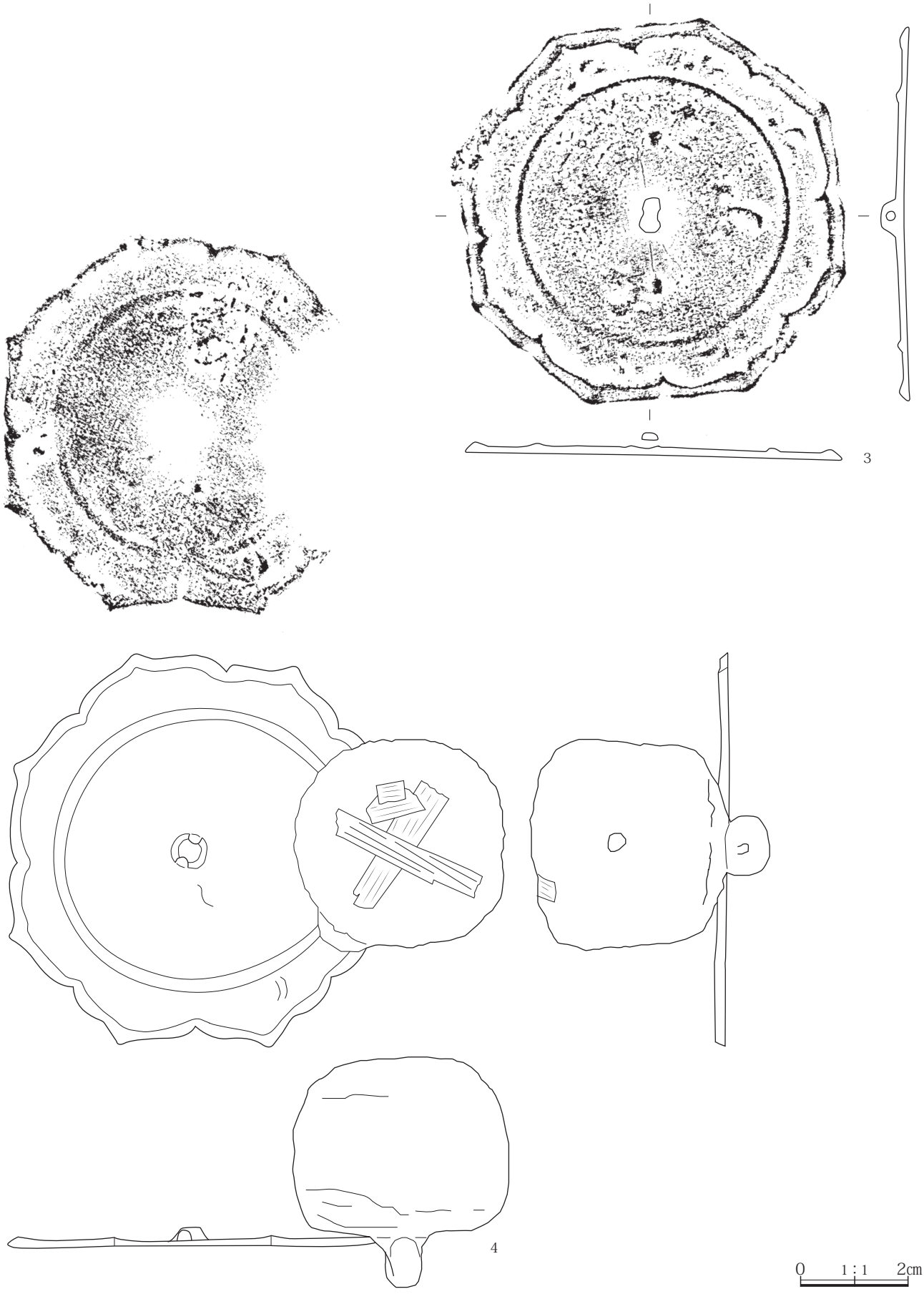
0　1：40　1m

0　1：20　50cm

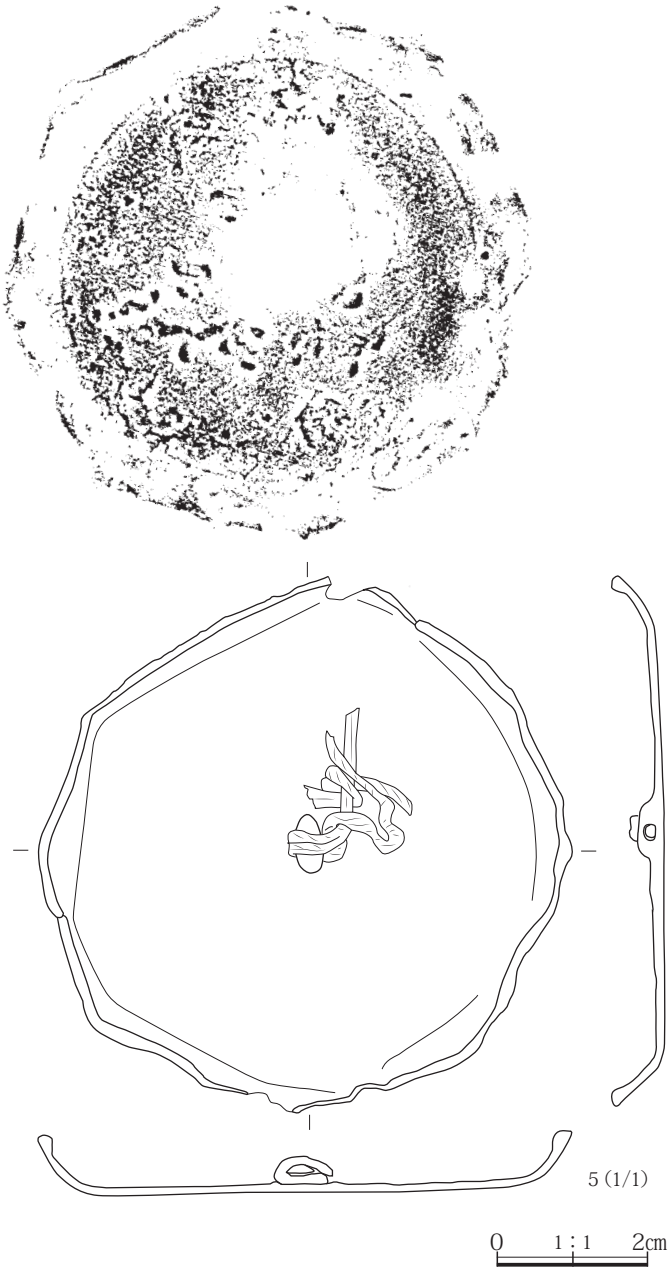


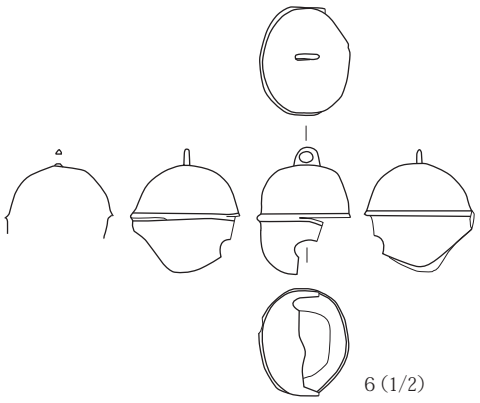
0　1：1　2cm

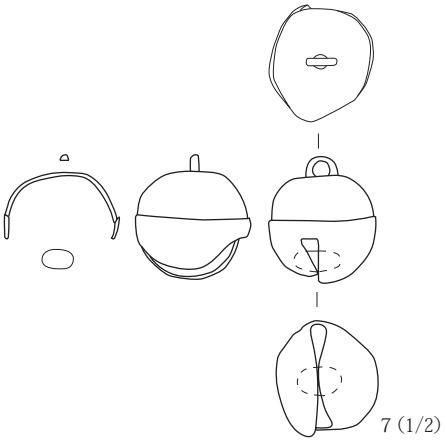
第361図　587号土坑と出土遺物（１）

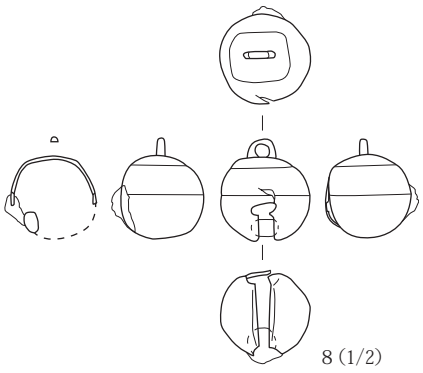


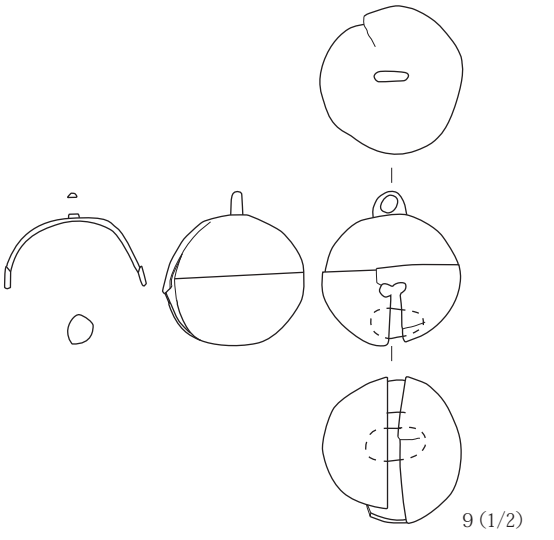
第362図　587号土坑出土遺物（２）



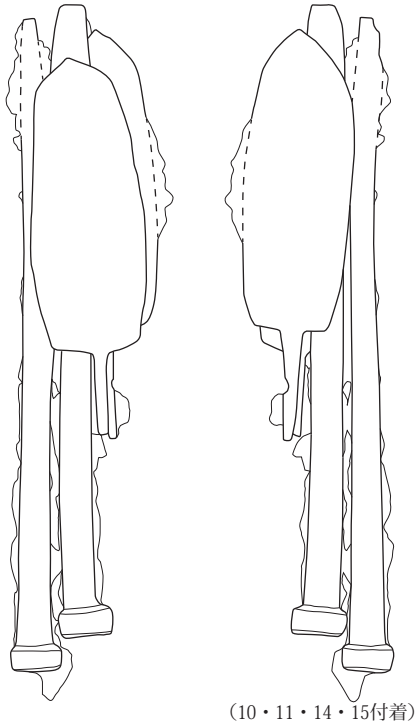




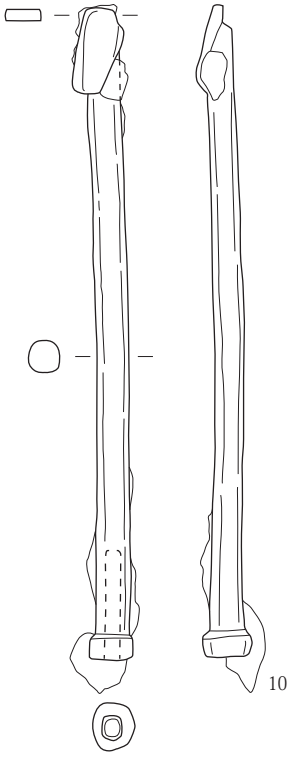




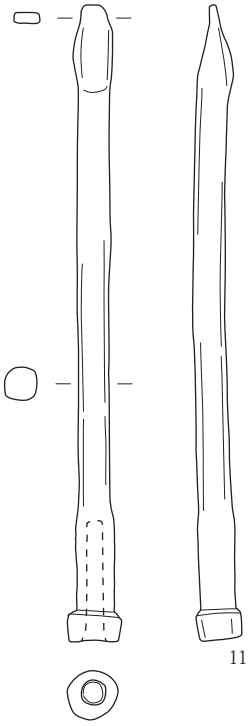
第363図　587号土坑出土遺物（３）



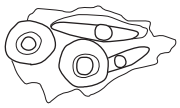
（10・11・14・15付着）

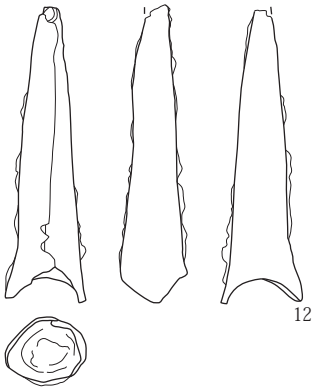


10

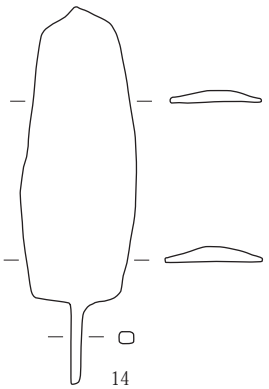


11

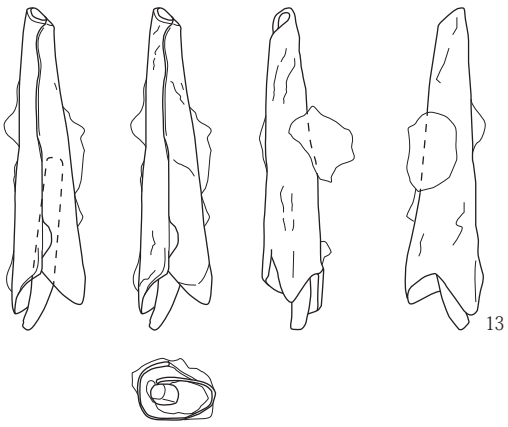




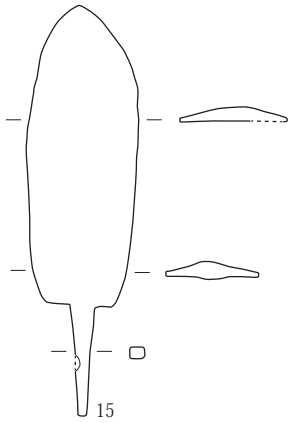
12



14



13



15

0　1：2　4cm

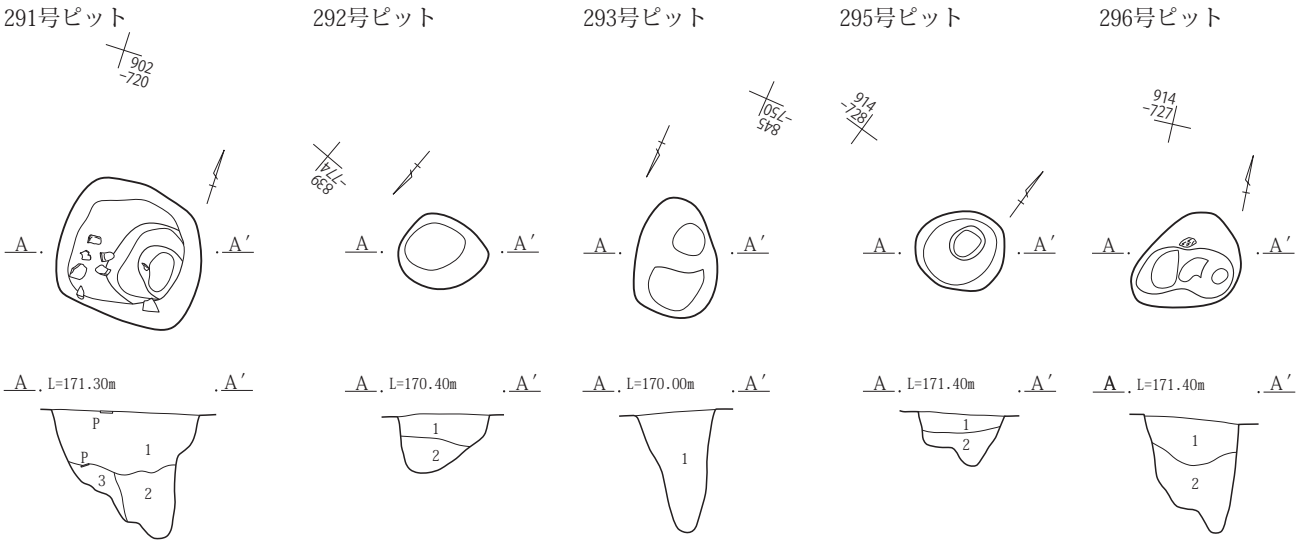
第364図　587号土坑出土遺物（４）

８．ピット(第365・366図、PL.142・143・335)

３面の調査では15基のピットを検出したが、そのうちの５基がＢ区西、10基がＣ・Ｄ区からの検出であった。Ｂ区西のピットの多くは、ローム塊～細粒を含む暗褐色土で埋没しており、Ｃ・Ｄ区のピットの多くは、As-Cやローム塊～細粒を含む黒褐色土で埋没していた。形状は楕円形や不整形が多く、円形のものはわずかであった。これらのピットは、いずれも建物を構成するようなものとは認識できなかった。

これらのピットのうち、Ｂ区西の333号ピットと334号ピットは、埋没土中に焼土粒、炭化物粒、灰を含んでおり、584号土坑と同様に竪穴建物のカマドの一部である可能性が考えられる。Ｂ区西の調査区全景写真を見ると、334号ピット付近から西の範囲では遺構確認面が一段下がっているように見える。また、566号土坑付近の土層堆積状況を見ると、基本土層Ⅲ層(As-B混土層)直下の土層が、人為的に撹拌されているのが確認できる。このような状況から、333号ピットや334号ピットをカマドとする竪穴建物が存在したが、壁面や床面は後世の撹乱により破壊されてしまった可能性が考えられるのである。

なお、ここに掲載した遺物以外に、287号ピットから瓦片１点、288号ピットから瓦片１点、291号ピットから土師器の杯・椀類破片５点(35ｇ)、甕・壺類破片９点(51ｇ)、須恵器の杯・椀類破片３点(52ｇ)、甕・壺類破片４点(173ｇ)、瓦片１点、292号ピットから土師器の甕・壺類破片２点(11ｇ)、須恵器の杯･椀類破片１点(３ｇ)、295号ピットから土師器の甕・壺類破片１点(２ｇ)、296号ピットから土師器の杯・椀類破片１点(１ｇ)、307号ピットから瓦片１点、314号ピットから瓦片１点、321号ピットから土師器の甕･壺類破片２点(２ｇ)、323号ピットから瓦片１点、333号ピットから瓦片１点が出土している。



291号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
３．黒褐色土10YR2/3　ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まり弱い。

292号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。

293号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-C､ローム粒を微量含む。粘性､締まりやや弱い。

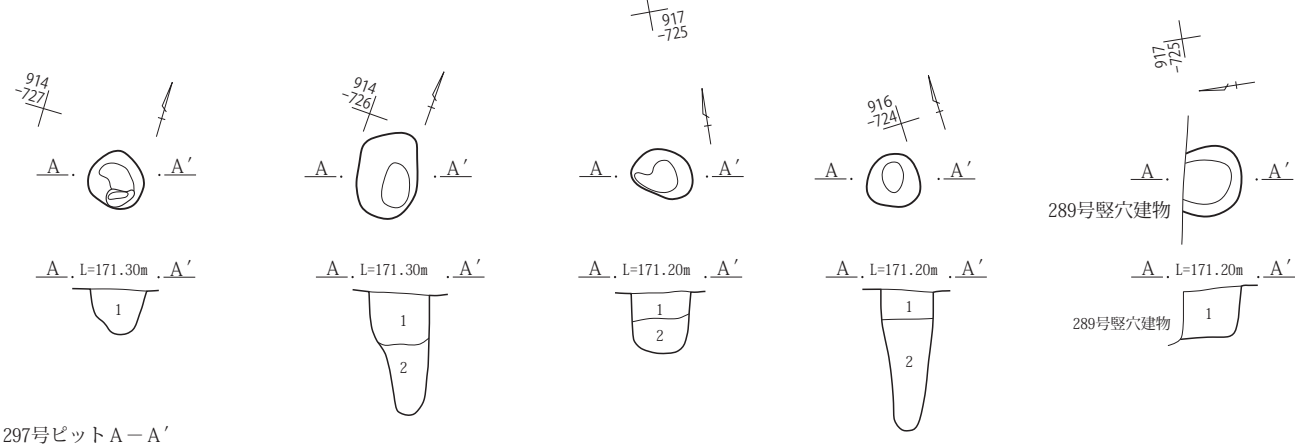
295号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/2　As-Cを少量、ローム粒を微量含む。粘性やや強い。締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まりやや弱い。

296号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり弱い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。

0　1：40　1m

第365図　291号～293号・295号・296号ピット

297号ピット　298号ピット　299号ピット　300号ピット　301号ピット



297号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを少量含む。粘性弱い。締まりやや弱い。

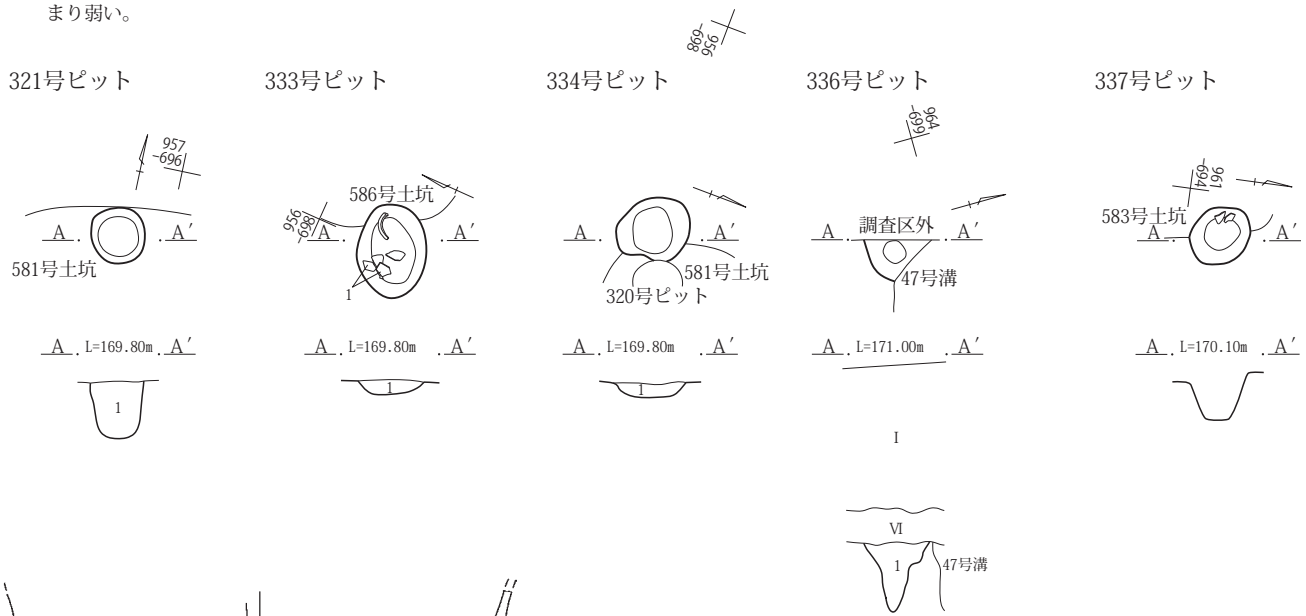
298号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。
２．黒褐色土10YR2/3　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。

299号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-C、ローム塊を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．暗褐色土10YR3/4　As-YP、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まり弱い。

300号ピットＡ－Ａ′
１．黒褐色土10YR2/3　As-Cを微量、ローム粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　ローム粒をごく微量含む。粘性、締まり弱い。

301号ピットＡ－Ａ′
１．黒色土10YR2/1　As-C、ローム粒を微量含む。粘性、締まりやや弱い。

321号ピット　333号ピット　334号ピット　336号ピット　337号ピット

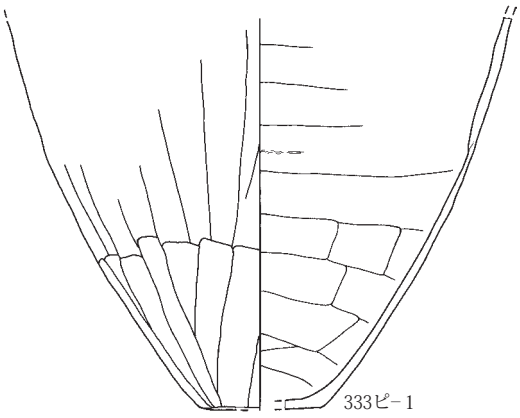


321号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土10YR3/4　ローム粗粒～細粒をやや多量含む。締まりやや弱い。

333号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土7.5YR3/4　ローム粗粒～細粒、焼土粒をやや多量、炭化物粒、灰を少量含む。

334号ピットＡ－Ａ′
１．暗褐色土7.5YR3/4　ローム小塊～細粒、焼土粒、炭化物粒をやや多量、灰を少量含む。締まりやや弱い。

336号ピットＡ－Ａ′
Ⅰ．暗褐色土10YR3/3　現代の耕作土。
Ⅵ．暗褐色土10YR3/3　漸移層。
１．暗褐色土10YR3/3　ローム塊～細粒をやや多量含む。



0　1：3　10cm

0　1：40　1m

第366図　297号～301号・321号・333号・334号・336号・337号ピットと333号ピット出土遺物

第４項　縄文時代の遺構と遺物

１．竪穴建物

25号竪穴建物（第367・368図、PL.144・355・356）

位置　Ｘ＝40,926～40,931、Ｙ＝－80,676～－80,681（Ｃ・Ｄ区）

形状　調査範囲が限定的であることから不明である。

規模　長軸(6.64m)、短軸(2.90m)

面積　(17.161㎡)

残存壁高　0.26m

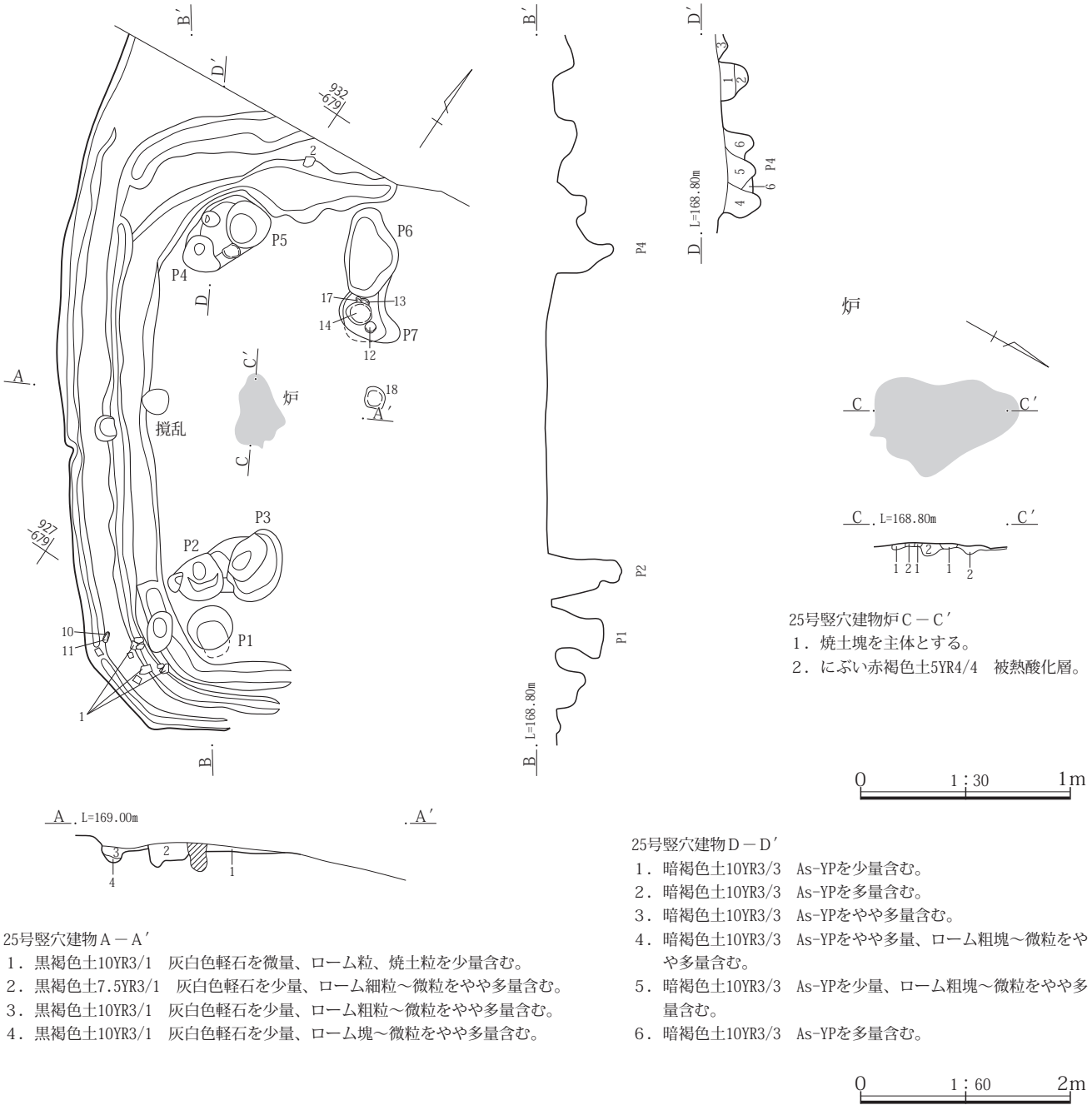
方位　Ｎ－29°－Ｗ

重複　なし

埋没土　微量の灰白色軽石、少量のローム粒、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

炉　西壁寄りの床面が焼土化しており、ここが地床炉であったと考えられる。ただし、一部が削平されているため詳細は不明である。

柱穴　７基のピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１

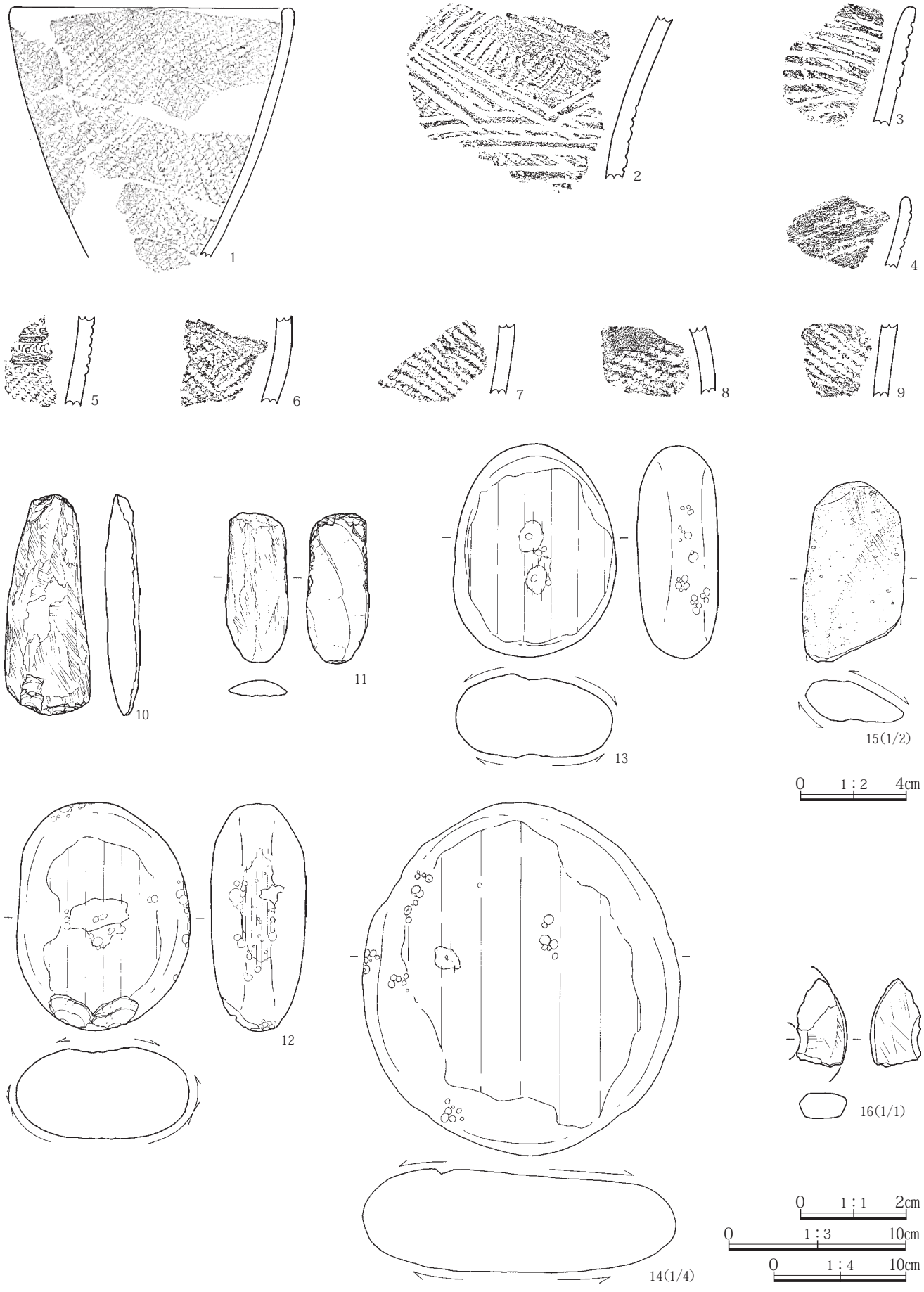


25号竪穴建物炉Ｃ－Ｃ′
１．焼土塊を主体とする。
２．にぶい赤褐色土5YR4/4　被熱酸化層。

25号竪穴建物Ａ－Ａ′
１．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石を微量、ローム粒、焼土粒を少量含む。
２．黒褐色土7.5YR3/1　灰白色軽石を少量、ローム細粒～微粒をやや多量含む。
３．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石を少量、ローム粗粒～微粒をやや多量含む。
４．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石を少量、ローム塊～微粒をやや多量含む。

25号竪穴建物Ｄ－Ｄ′
１．暗褐色土10YR3/3　As-YPを少量含む。
２．暗褐色土10YR3/3　As-YPを多量含む。
３．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量含む。
４．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量、ローム粗塊～微粒をやや多量含む。
５．暗褐色土10YR3/3　As-YPを少量、ローム粗塊～微粒をやや多量含む。
６．暗褐色土10YR3/3　As-YPを多量含む。

第367図　25号竪穴建物・炉



第368図　25号竪穴建物出土遺物

が0.44×0.40×0.48m、Ｐ２が0.51×0.45×0.70m、Ｐ３が0.70×0.50×0.53m、Ｐ４が0.37×0.32×0.56m、Ｐ５が0.42×0.42×0.32m、Ｐ６が0.85×0.51×0.35m、Ｐ７が(0.63)×0.63×0.33m、形状は楕円形、または不整形である。壁際溝が３条確認されたことから、柱穴に関しても複数回の差し替えが想定される。

壁際溝　西壁を中心に３条の壁際溝を検出した。それぞれの規模は、外側の溝が、幅0.10～0.24m、深さ0.10～0.26m、中央の溝が、幅0.09～0.40m、深さ0.08～0.18m、内側の溝が、幅0.15～0.30m、深さ0.12～0.30mである。外側の溝は、少量の灰白色軽石、やや多量のローム塊～微粒を含む黒褐色土で埋没していた。中央の溝と内側の溝は、分層することが難しく、どちらも少量の灰白色軽石、やや多量のローム細粒～微粒を含む黒褐色土で埋没していた。わずかに残った土層断面の観察から、外側の壁際溝が最も古い可能性が考えられる。

床面　西壁際付近を残し、ほぼ削平されていたことから詳細は不明である。

出土遺物　南隅の床面付近から、黒浜式ないし有尾式の深鉢(１)、打製石斧(10)、磨製石斧(11)が出土している。凹石(12・13)と台石(14)は、いずれもＰ７の上層から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片45点、諸磯a式の土器破片４点、楔形石器１点(3.9ｇ)、二次加工ある剝片１点(38.9ｇ)、敲石１点(420.7ｇ)、台石１点(4,579.6ｇ)、礫１点(72.2ｇ)、剝片１点(59.1ｇ)が出土している。このうち敲石(17)、台石(18)については、写真のみを掲載した。

所見　３条の壁際溝の関係から、本竪穴建物は少なくとも２度の建て替えにより、規模を縮小した可能性が考えられる。出土遺物から黒浜・有尾式期の竪穴建物であると考えられる。

26号竪穴建物(第369図、PL.144・356)

位置　Ｘ＝40,927～40,933、Ｙ＝－80,681～－80,688(Ｃ・Ｄ区)

形状　調査範囲が限定的であることから不明である。

規模　長軸7.66m、短軸3.36m

面積　(19.280㎡)

残存壁高　0.14m

方位　(19.280㎡)

重複　なし

埋没土　やや多量の灰白色軽石、少量のローム粒～細粒を含む黒褐色土などで埋没していた。

炉　検出されなかった。

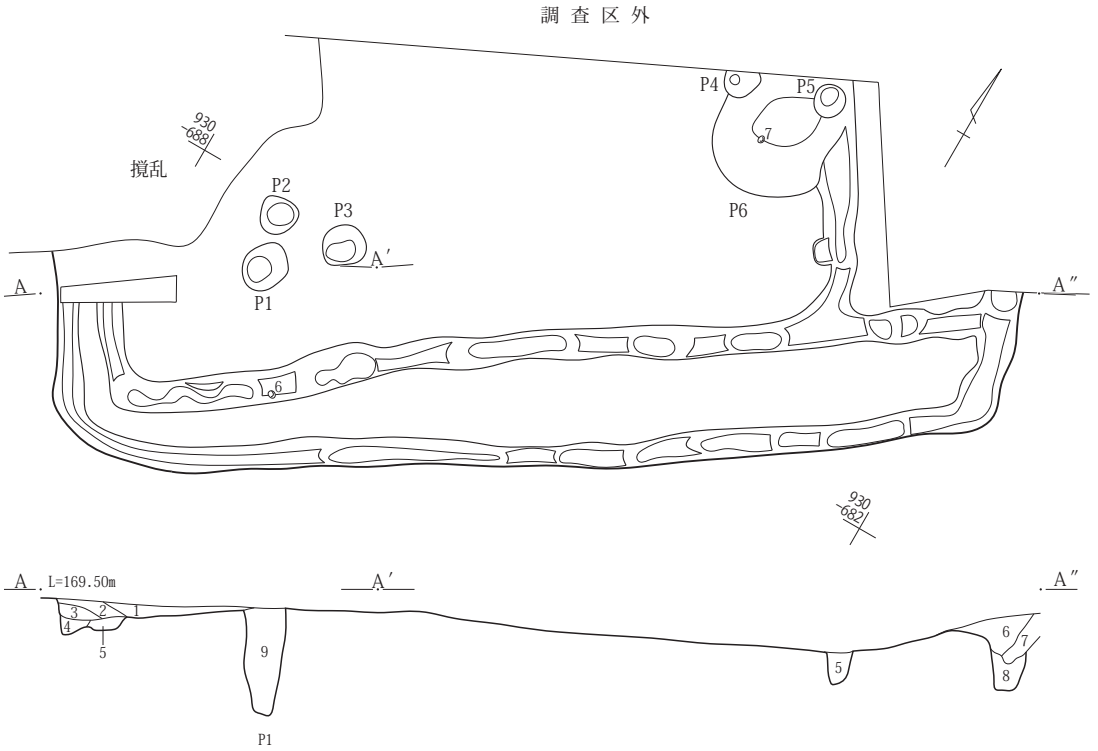
柱穴　６基のピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.41×0.34×0.89m、Ｐ２が0.30×0.28×0.50m、Ｐ３が0.36×0.31×0.47m、Ｐ４が0.29×(0.20)×0.56m、Ｐ５が0.26×0.25×0.48m、Ｐ６が1.10×(0.95)×0.50m、形状は楕円形、または不整形である。壁際溝が２条確認されたことから、柱穴に関しても複数回の差し替えが想定される。

壁際溝　南壁を中心に２条の壁際溝を検出した。それぞれの規模は、外側の溝が、幅0.15～0.32m、深さ0.07～0.32m、内側の溝が、幅0.16～0.32m、深さ0.09～0.53mである。外側の溝は、微量の灰白色軽石、ローム粒を含む黒褐色土などで埋没していた。内側の溝は、微量の灰白色軽石、やや多量のローム粒～微粒を含む黒褐色土で埋没していた。わずかに残った土層断面の観察から、外側の壁際溝が新しい可能性が考えられる。

床面　南西隅付近を残し、ほぼ削平されていたことから詳細は不明である。

出土遺物　壁際溝内から凹石(６)が、Ｐ６上層から磨石(７)が出土している。土器破片はいずれも埋没土中から出土したものである。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片40点が出土している。

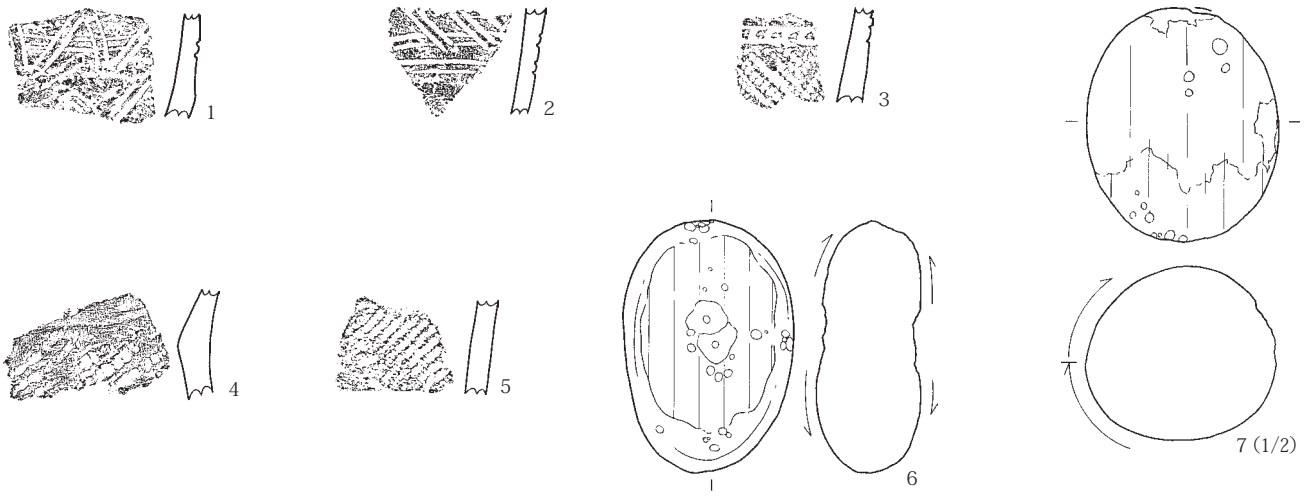
所見　２条の壁際溝の関係から、本竪穴建物は少なくとも１度の建て替えにより、規模を拡大した可能性が考えられる。出土遺物から黒浜・有尾式期の竪穴建物であると考えられる。



26号竪穴建物Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石をやや多量、ローム粒～細粒を少量含む。
2．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石を少量、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
3．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石、ローム粒を少量含む。
4．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石、ローム粒を微量含む。
5．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石を微量、ローム粒～微粒をやや多量含む。
6．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、焼土粒を少量含む。
7．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粗粒～粒をやや多量含む。
8．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YPをやや多量、ローム粒を少量含む。
9．黒褐色土10YR3/1　灰白色軽石をやや多量、ローム粗粒～粒を少量含む。

0　1：60　2m



0　1：2　4cm

0　1：3　10cm

第369図　26号竪穴建物出土遺物

317号竪穴建物（第370～372図、PL.144・145・357・358）

位置　Ｘ＝40,880～40,886、Ｙ＝－80,721～－80,726（Ｃ・Ｄ区）

形状　長方形

規模　長軸5.02m、短軸4.13m

面積　15.792㎡

残存壁高　0.34m

方位　Ｎ－44°－Ｅ

重複　318号竪穴建物と重複しているが、新旧関係は不明である。また、554号・555号土坑と重複し、317号竪穴建物が古い。

埋没土　少量の灰白色軽石、焼土粒を含む黒褐色土で埋没していた。

炉　検出されなかった。

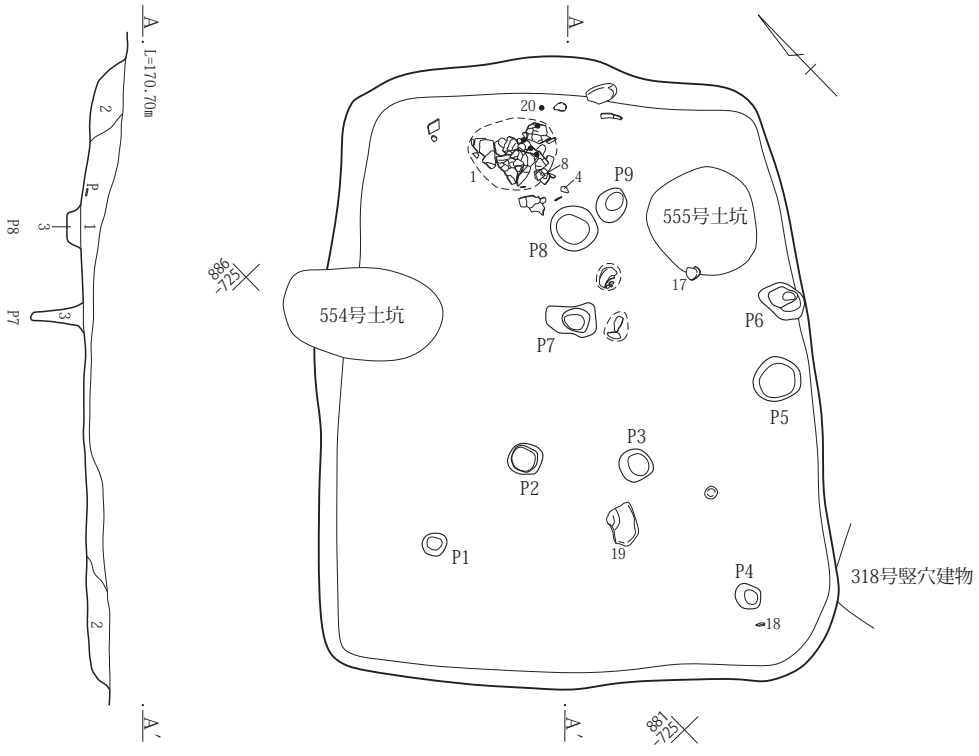
柱穴　９基のピットの規模（長軸×短軸×深さ）は、Ｐ１が0.18×0.18×0.10m、Ｐ２が0.26×0.24×0.37m、Ｐ３が0.26×0.25×0.53m、Ｐ４が0.23×0.20×0.13m、Ｐ５が0.38×0.35×0.20m、Ｐ６が0.35×0.25×0.50m、Ｐ７が0.40×0.26×0.42m、Ｐ８が0.36×0.35×0.13m、Ｐ９が0.25×0.23×0.37m、形状は楕円形、または不整形である。

壁際溝　検出されなかった。

床面　床面はほぼ平坦であった。

出土遺物　有尾式の深鉢（１）は、北東壁際の床面付近からまとまって出土したものである。南隅の床面からは削器（18）が、中央やや南寄りの床面からは石皿（19）が出土している。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片59点、削器１点（98.5ｇ）、二次加工ある剝片１点（12.7ｇ）、剝片４点（81.7ｇ）が出土している。このうち削器（20）については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から黒浜・有尾式期の竪穴建物であると考えられる。



317号竪穴建物Ａ－Ａ′

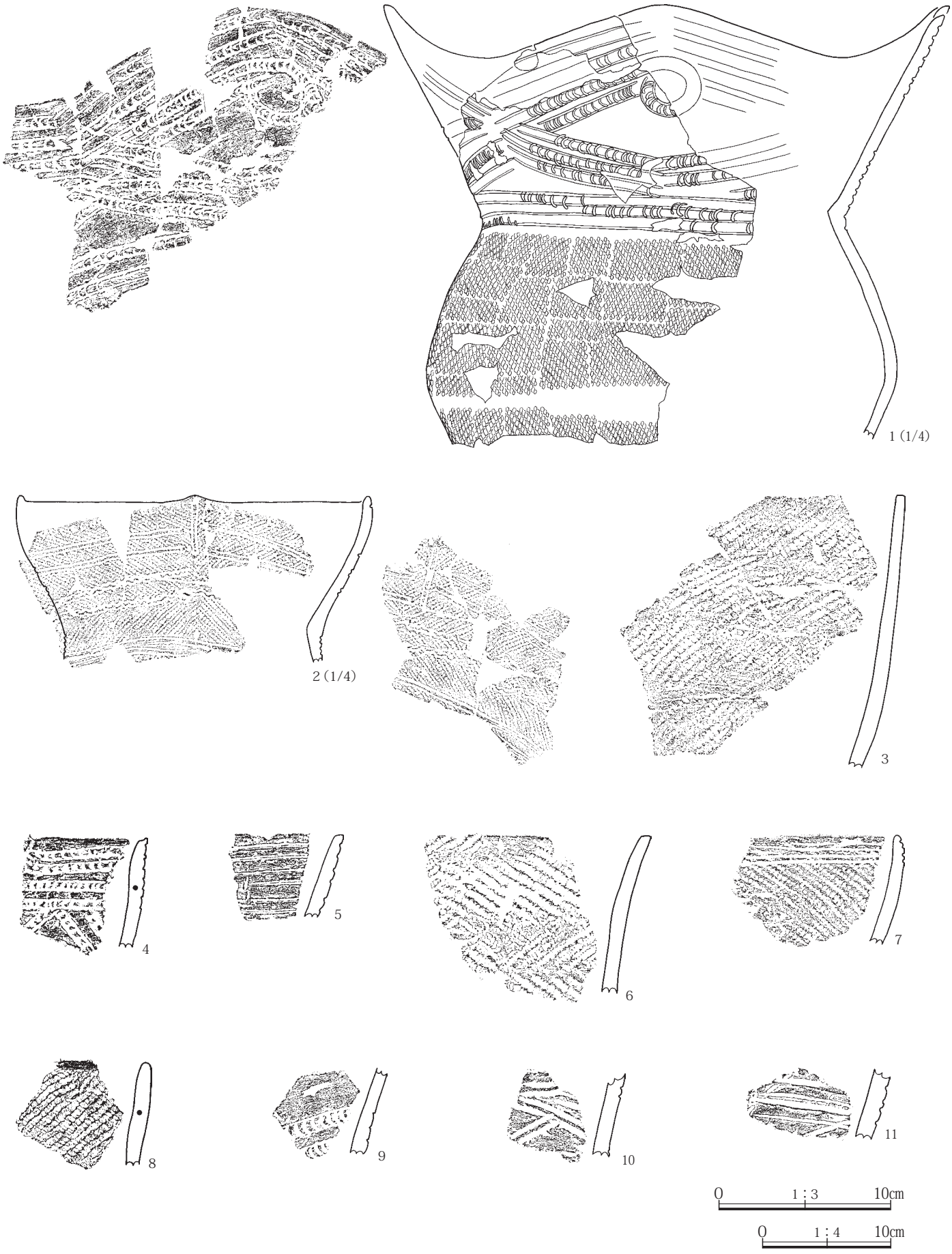
１．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、焼土粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

２．黒褐色土10YR3/2　ローム小塊～粒を微量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

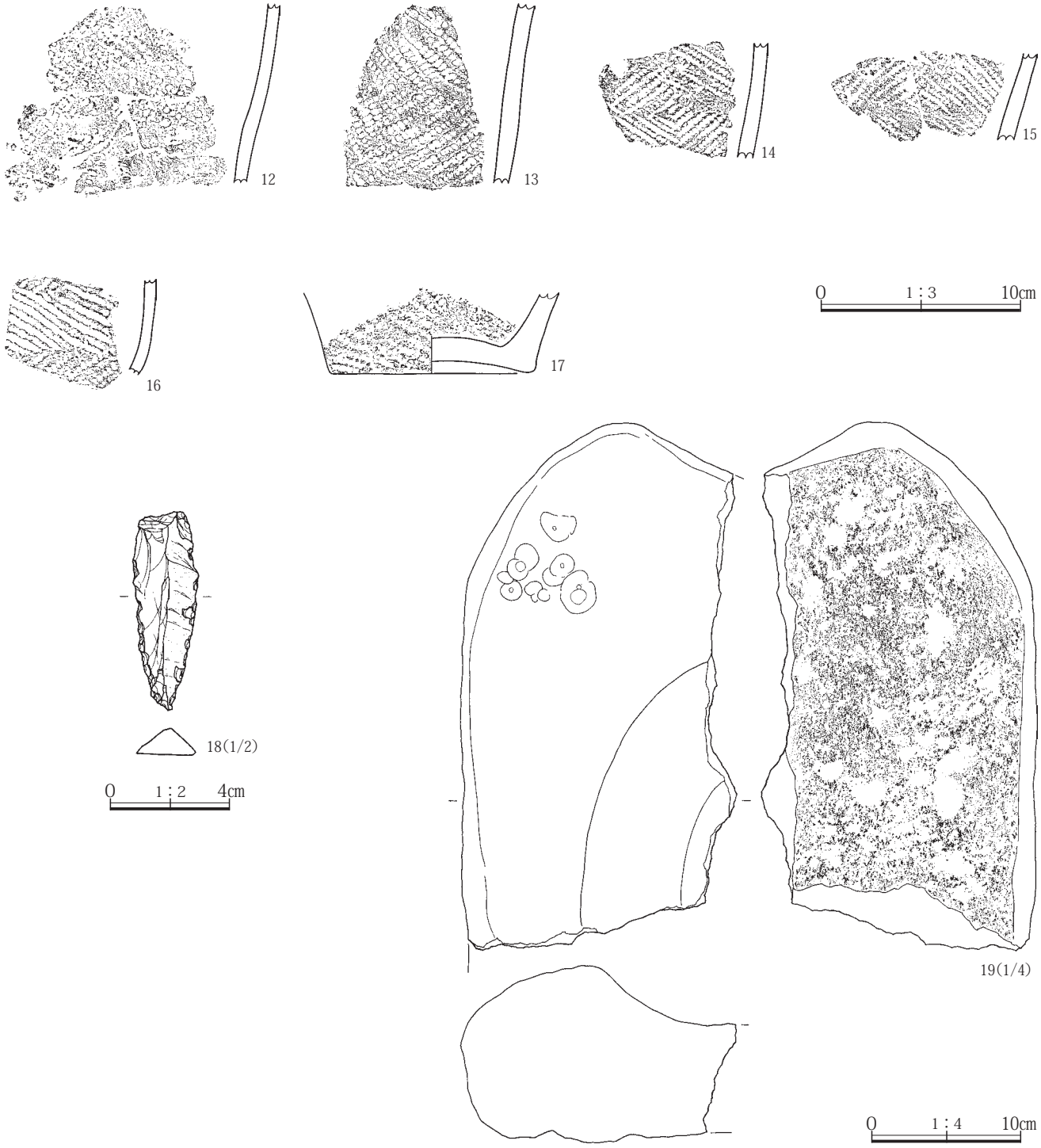
３．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、ローム塊～小塊を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。

0　1：60　2m

第370図　317号竪穴建物



第371図　317号竪穴建物と出土遺物（１）



第372図　317号竪穴建物出土遺物（２）

318号竪穴建物（第373～382図、PL.145・146・358～367）

位置　X＝40,875～40,882、Y＝－80,716～－80,723（C・D区）

形状　長方形

規模　長軸7.00m、短軸5.30m

面積　34.584㎡

残存壁高　0.89m

方位　N－12°－W

重複　317号竪穴建物と重複しているが、新旧関係は不明である。

埋没土　上層はやや多量の灰白色軽石、ローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層はやや多量の灰白色

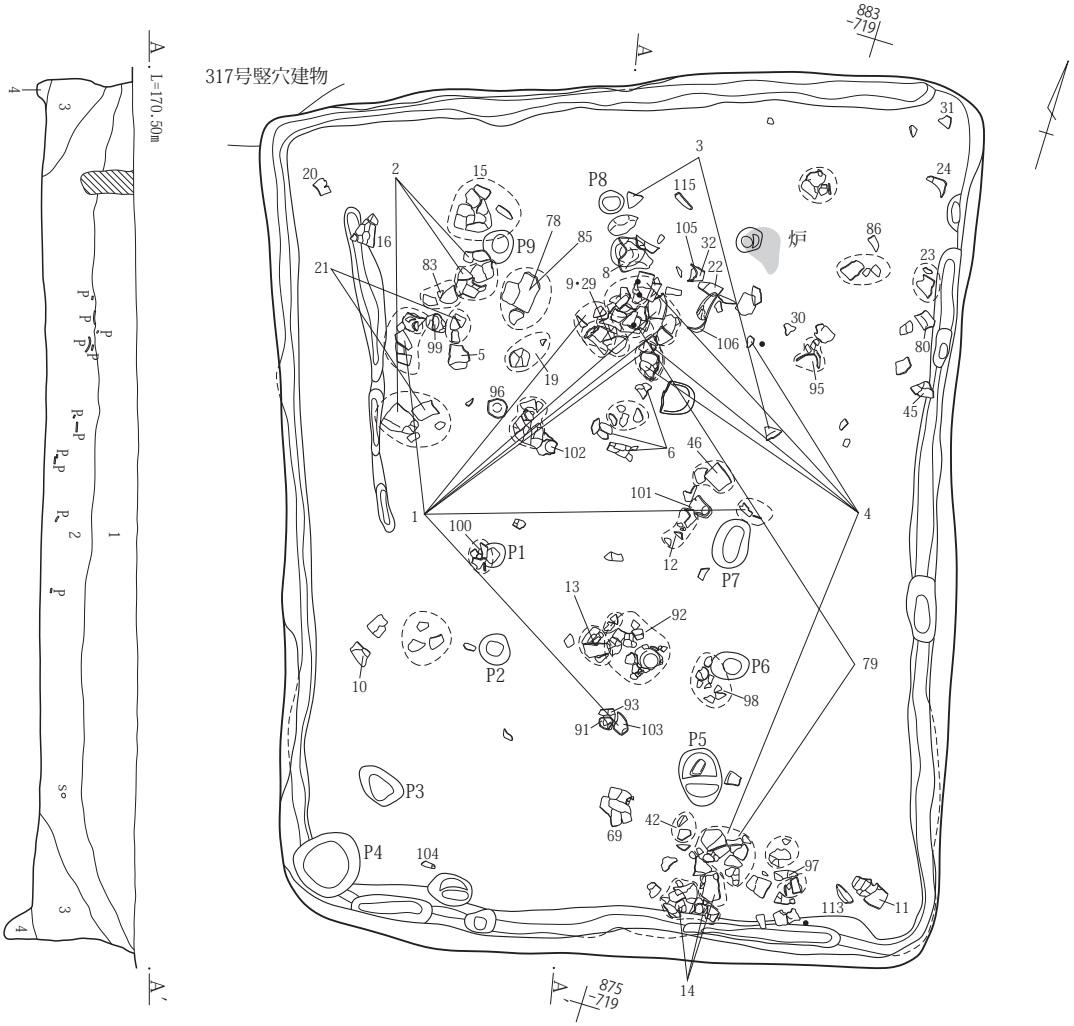
軽石、少量のローム粒を含む黒褐色土で埋没していた。やや多量のローム塊～粒を含む上層は、人為的な埋没と考えられる。

炉　北東隅寄りの床面が焼土化しており、ここが地床炉であったと考えられる。

柱穴　９基のピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、Ｐ１が0.19×0.19×0.25m、Ｐ２が0.25×0.24×0.14m、Ｐ３が0.37×0.24×0.25m、Ｐ４が0.52×0.50×0.23m、Ｐ５が0.46×0.32×0.49m、Ｐ６が0.30×0.21×0.60m、Ｐ７が0.40×0.28×0.17m、Ｐ８が0.20×0.18×0.32m、Ｐ９が0.25×0.23×0.18m、形状はいずれも楕円形である。

壁際溝　幅0.16～0.46m、深さ0.04～0.49mのほぼ全周する壁際溝を検出した。少量の灰白色軽石、やや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

床面　床面はほぼ平坦であるが、北から南に向かって緩やかに下っており、北壁際と南壁際の高低差は最大で0.12mであった。

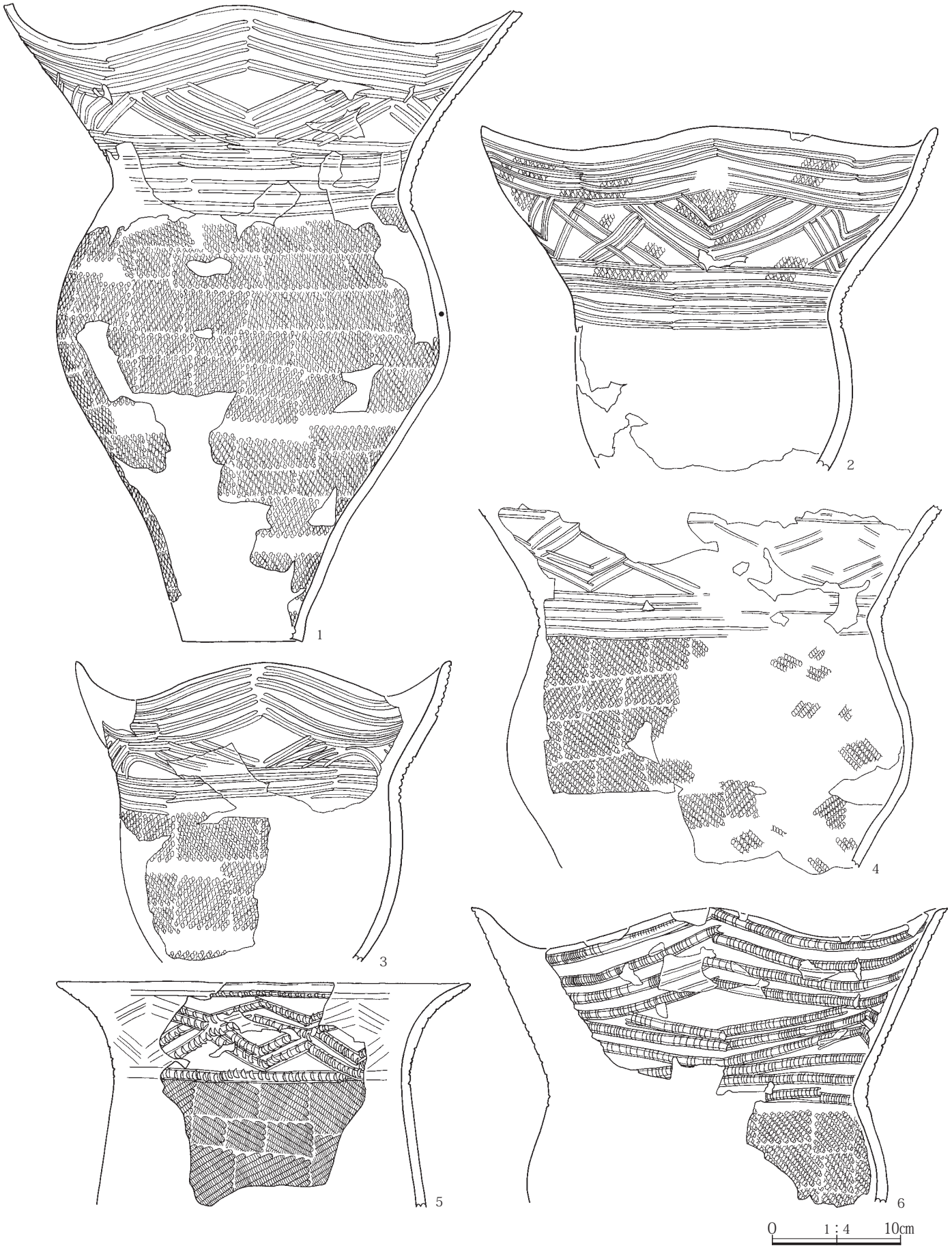


318号竪穴建物Ａ－Ａ′

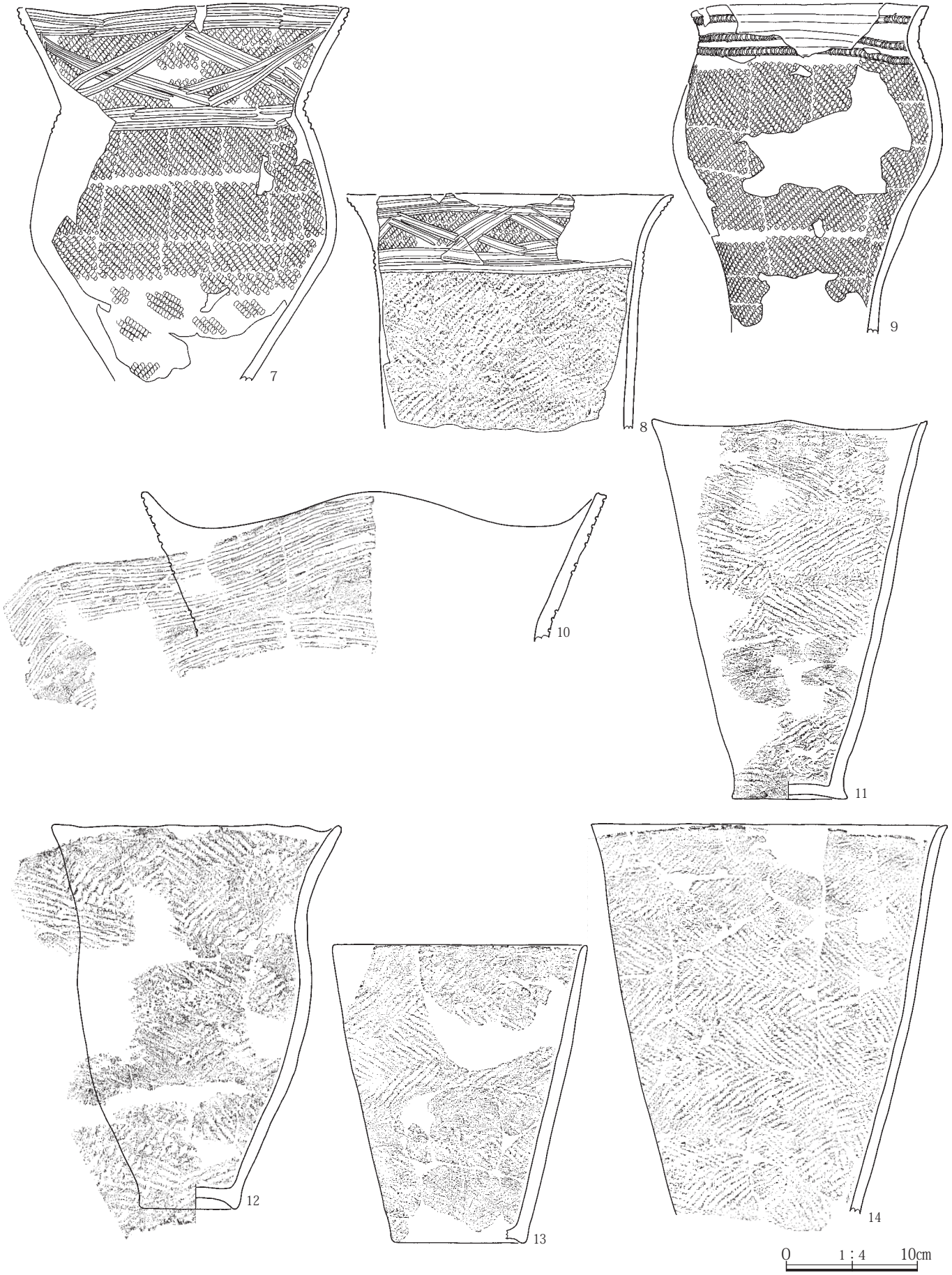
１．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
２．黒褐色土10YR2/2　灰白色軽石をやや多量、ローム粒を少量含む。粘性やや弱い。締まりやや強い。
３．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、ローム粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。
４．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石を少量、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

0　1：60　2m

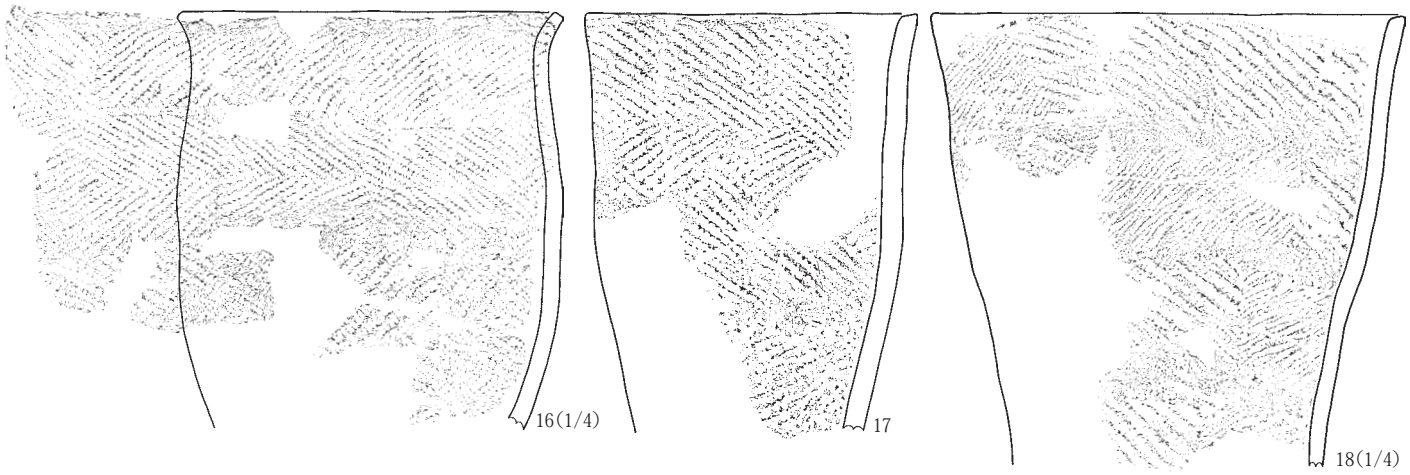
第373図　318号竪穴建物

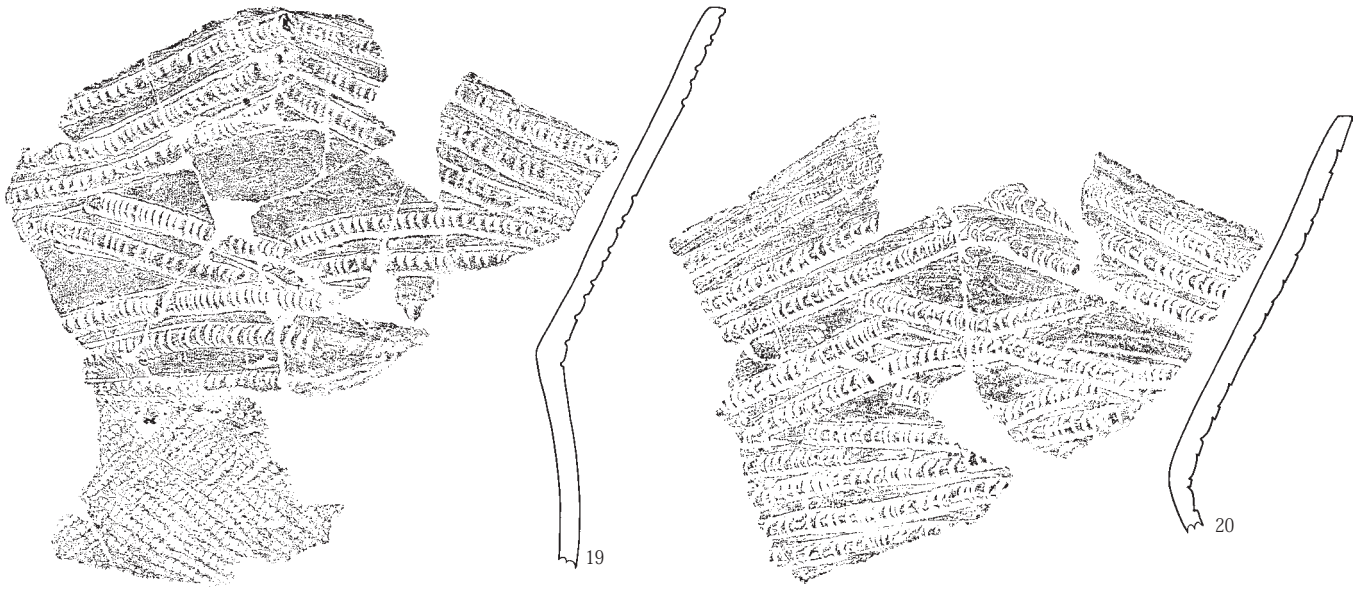


第374図　318号竪穴建物出土遺物（１）

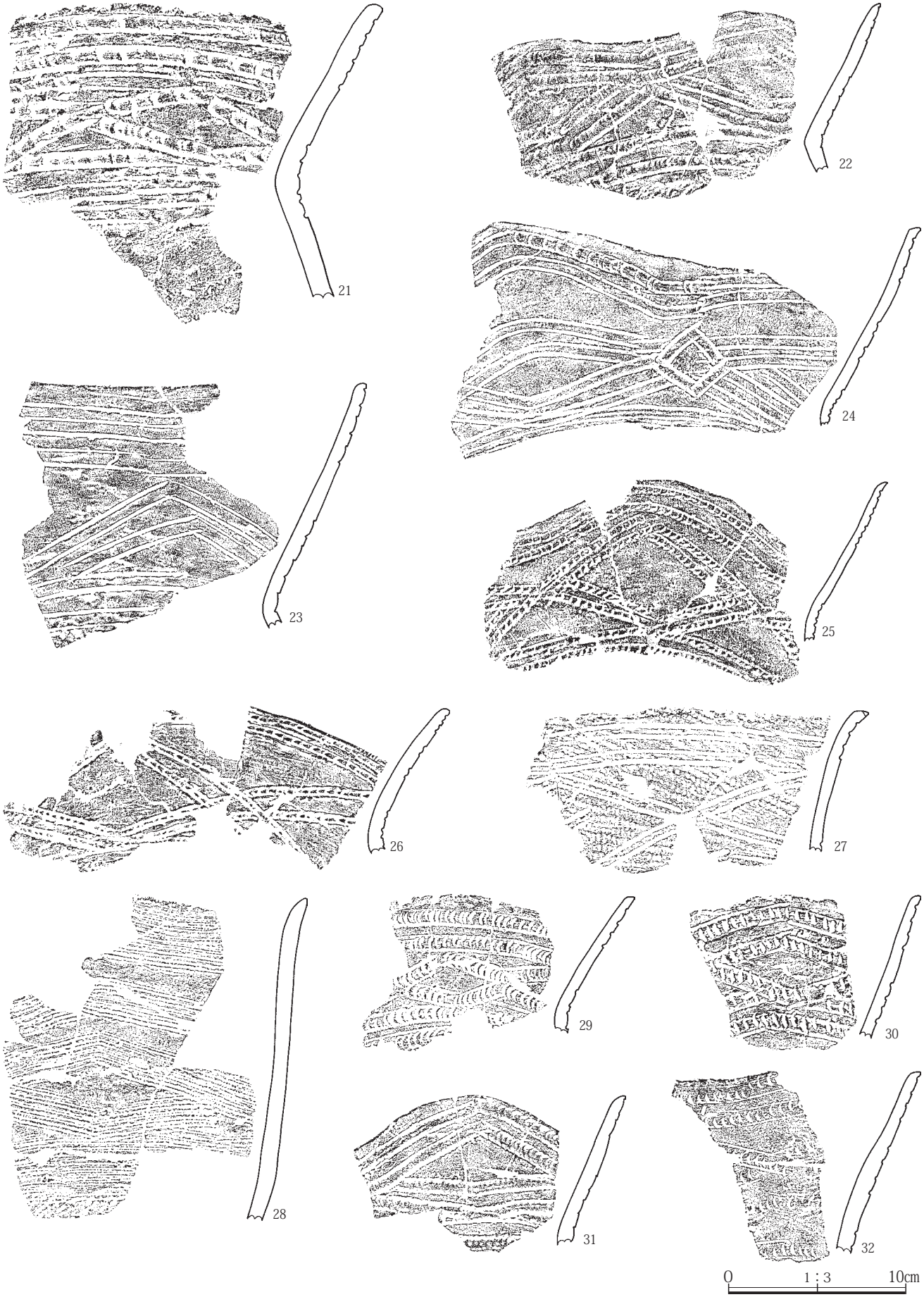


第375図　318号竪穴建物出土遺物（２）

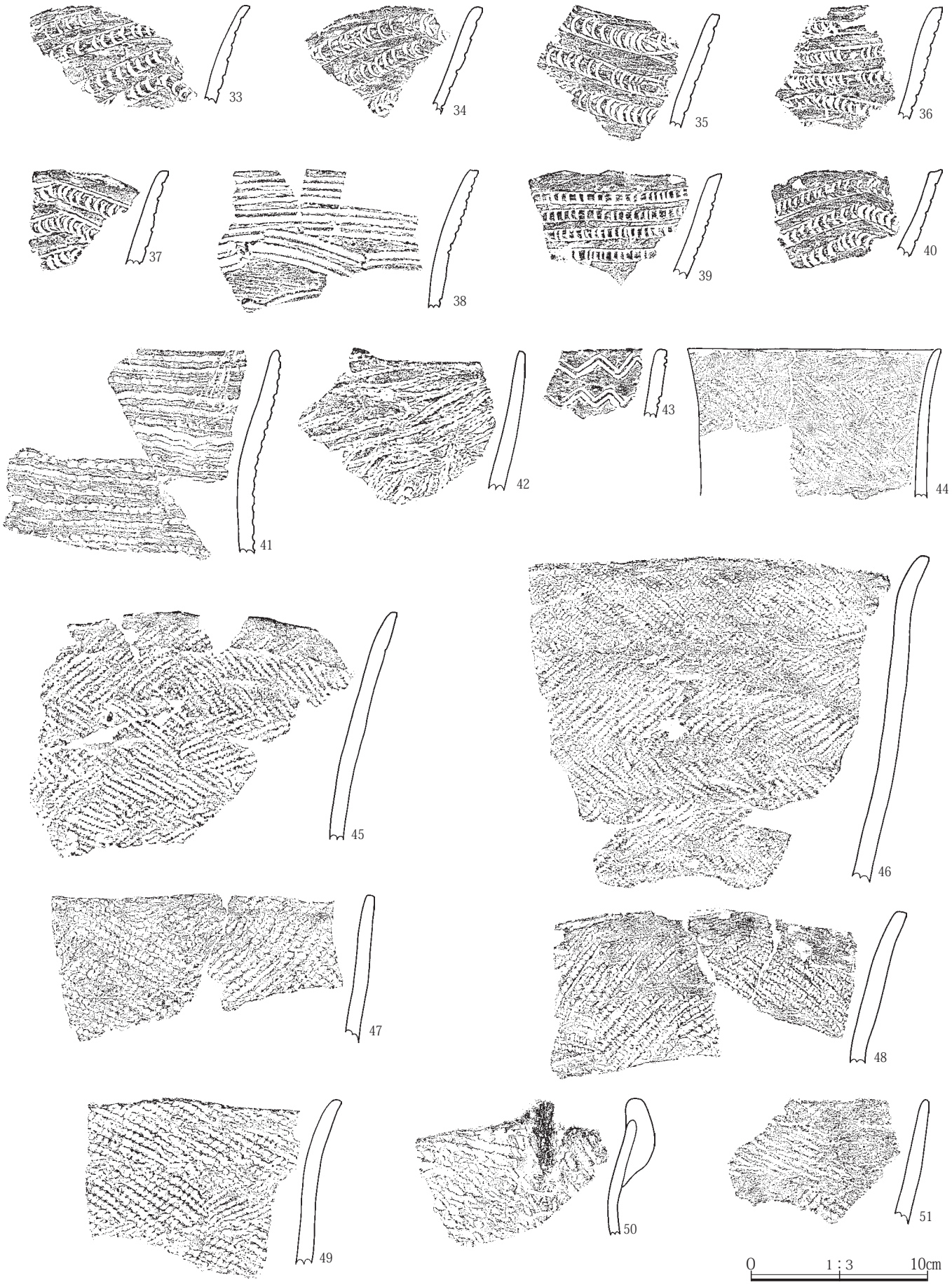




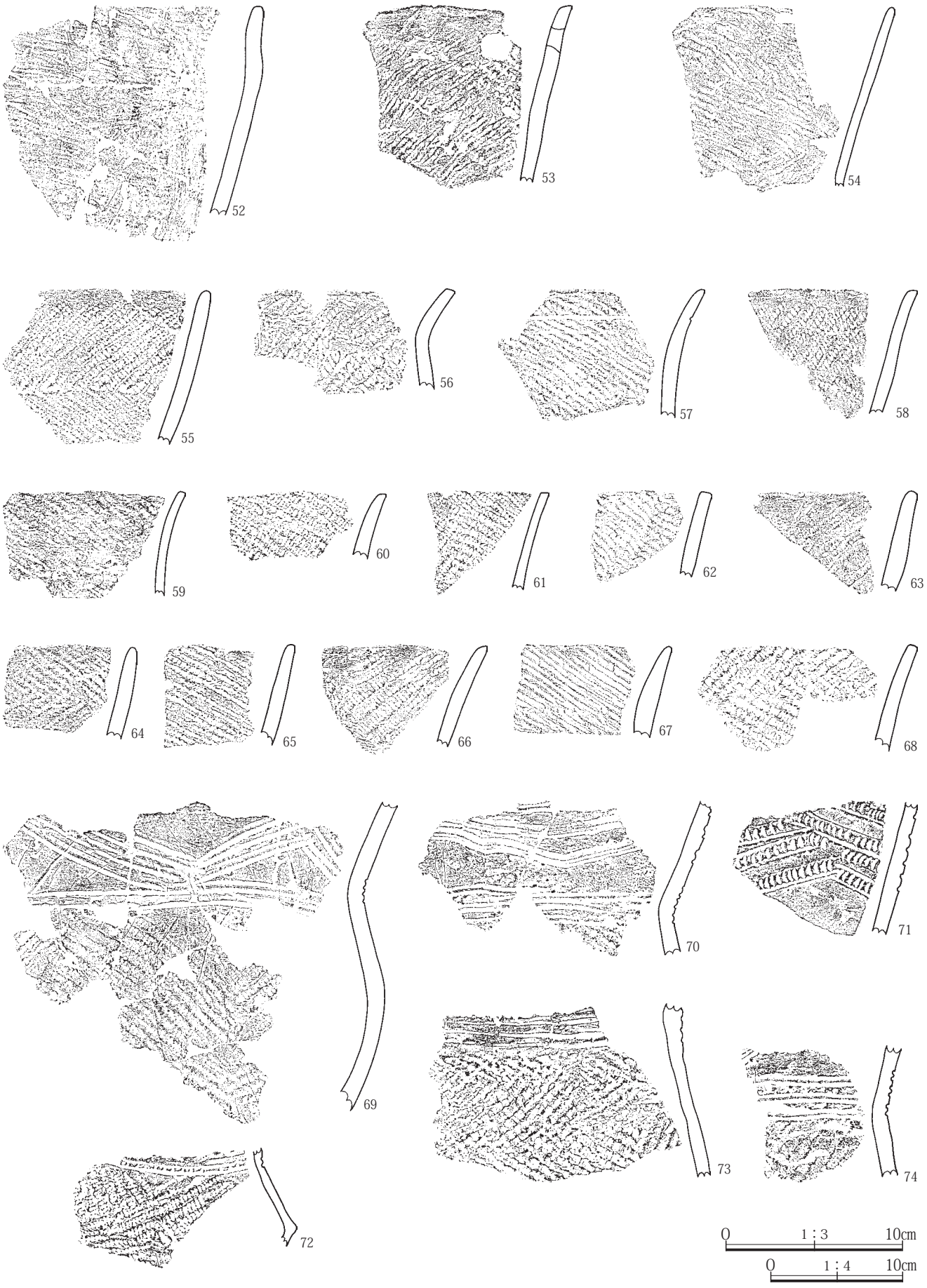
第376図　318号竪穴建物出土遺物（３）



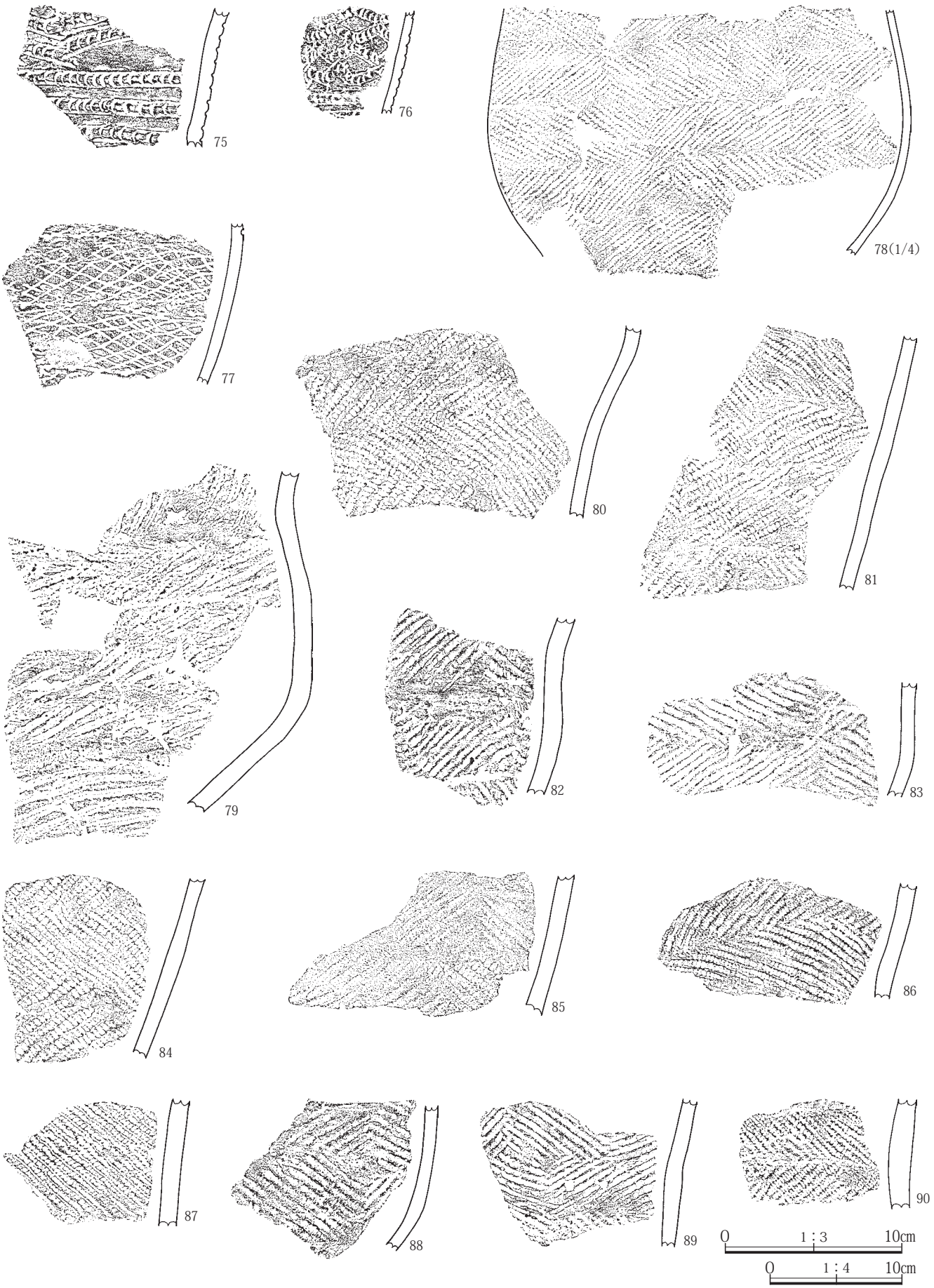
第377図　318号竪穴建物出土遺物（４）



第378図　318号竪穴建物出土遺物（５）

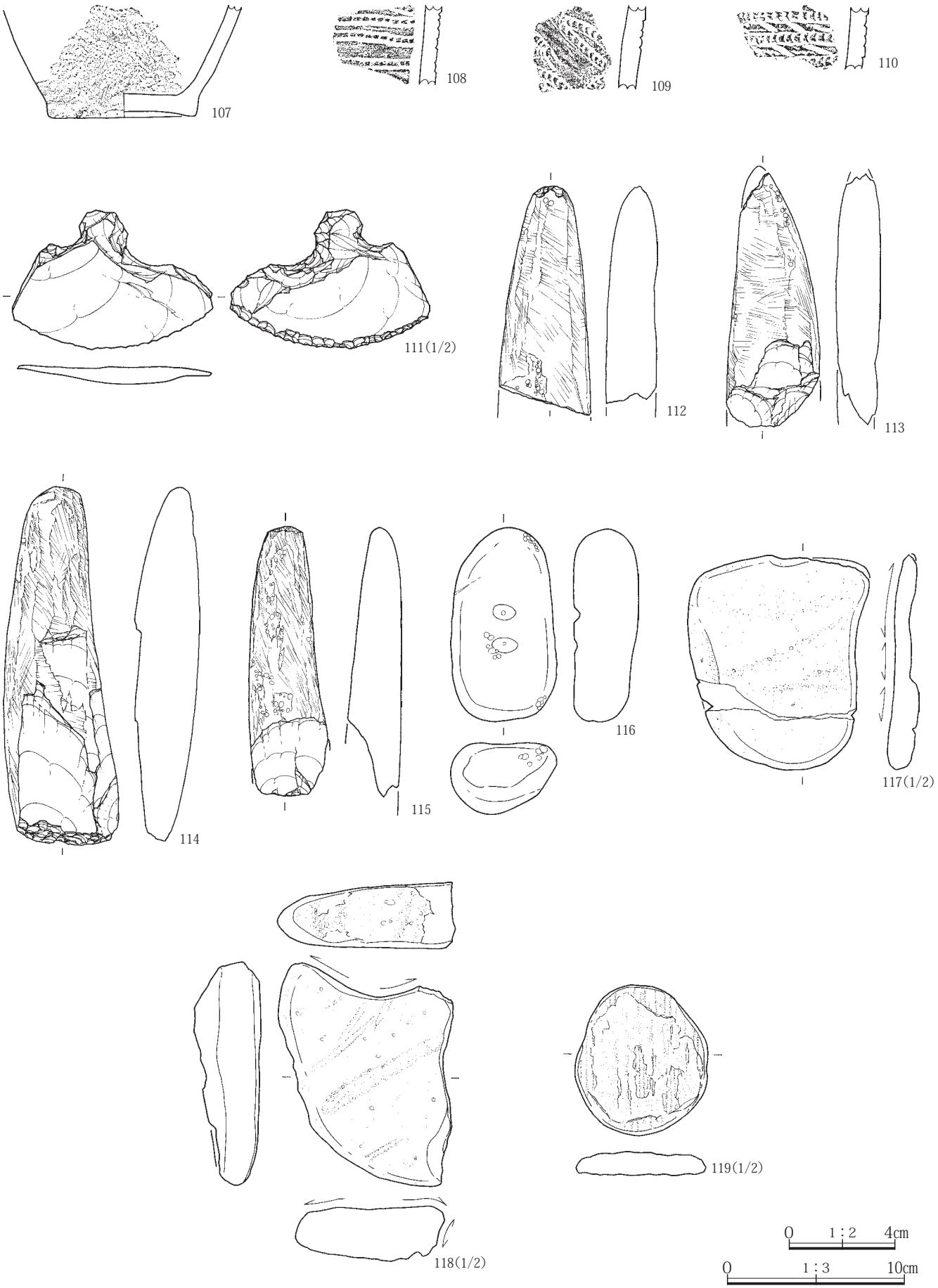


第379図　318号竪穴建物出土遺物（６）



第380図　318号竪穴建物出土遺物（７）

第381図　318号竪穴建物出土遺物（８）



第382図　318号竪穴建物出土遺物（９）

出土遺物　本竪穴建物の埋没土中からは2,300点を超える土器破片が出土したが、その多くは床上0.10～0.50mの高さから出土したものである。これらの土器破片の中には62点の底部破片が含まれており、少なくとも62個体以上の土器が本竪穴建物の廃絶後にまとめて投棄されたと考えられる。また、石器についても出土位置が記録されているものは、いずれも床上0.39～0.73mの高さから出土したものである。なお､ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片2,328点、諸磯ａ式の土器破片５点、削器８点(363.1ｇ)、磨製石斧３点(408.2ｇ)、石核２点(319.9ｇ)、二次加工ある剝片14点(683.5ｇ)、凹石１点(100.7ｇ)、剝片４点(81.7ｇ)が出土している。このうち削器(120)、磨製石斧(121～123)については、写真のみを掲載した。

所見　出土遺物から黒浜・有尾式期の竪穴建物であると考えられる。

２．土坑

74号土坑(第383・386図、PL.147・367・368)

位置　Ｘ＝40,915～40,916、Ｙ＝－80,692～－80,693（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.96m、短軸0.79m

残存深度　0.65m

主軸方位　Ｎ－16°－Ｗ

重複　28号竪穴建物と重複し、74号土坑が古い。

埋没土　上層は多量の灰白色軽石､やや多量のローム粒、炭化物粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層はやや多量の炭化物粒、少量のローム粒、焼土粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(74土-１～11)、打製石斧(74土-12)、敲石(74土-13)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片58点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

76号土坑(第383・386図、PL.147・368)

位置　Ｘ＝40,912～40,913、Ｙ＝－80,698～－80,699（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.96m、短軸0.83m

残存深度　0.63m

主軸方位　Ｎ－83°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、ローム粒、微量の炭化物粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量の灰白色軽石、As-YP、ローム粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(76土-１～３)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片８点、剝片１点(30.4ｇ)が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

77号土坑(第383図、PL.147)

位置　Ｘ＝40,914～40,915、Ｙ＝－80,698（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.64m、短軸0.51m

残存深度　0.36m

主軸方位　Ｎ－90°

重複　なし

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、ローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、As-YP、ローム粒、微量の炭化物粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが､形状や埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の貯蔵穴である可能性が考えられる。

78号土坑(第383・387図、PL.147・368)

位置　Ｘ＝40,914～40,915、Ｙ＝－80,698～－80,699（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.82m、短軸0.80m

残存深度　0.55m

主軸方位　Ｎ－51°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、ローム塊、やや多量のローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は少量

の灰白色軽石、ローム粒、炭化物粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(78土-１～６)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片24点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

80号土坑(第383・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,912～40,913、Ｙ＝－80,693～－80,694（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.78m、短軸0.73m

残存深度　0.49m

主軸方位　Ｎ－６°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量の灰白色軽石、少量のローム細粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、ローム粒、少量のAs-YPを含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(80土-１・２)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片３点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

82号土坑(第383・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,924～40,925、Ｙ＝－80,679～－80,680（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸1.17m、短軸(0.60m)

残存深度　0.44m

主軸方位　Ｎ－65°－Ｅ

重複　23号竪穴建物と重複し、82号土坑が古い。

埋没土　上層はやや多量の灰白色軽石、ローム塊～粒を含む暗褐色土などで埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、As-YP、少量のローム粒～細粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(82土-１～３)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片10点、諸磯ａ式の土器破片１点、磨石１点(21.1ｇ)が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

83号土坑(第384・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,914～40,915、Ｙ＝－80,692～－80,693（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.00m、短軸0.90m

残存深度　0.45m

主軸方位　Ｎ－81°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、ローム粒、炭化物細粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、As-YP、少量のローム塊～粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(83土-１・２)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片９点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

85号土坑(第384・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,922～40,923、Ｙ＝－80,697（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸0.93m、短軸(0.44m)

残存深度　0.26m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　なし

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、As-YP、ローム粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、ローム粒、少量のAs-YPを含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(85土-１・２)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片３点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

86号土坑(第384図、PL.147)

位置　Ｘ＝40,914、Ｙ＝－80,692（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.73m、短軸0.71m

残存深度　0.28m

主軸方位　Ｎ－75°－Ｅ

重複　なし

埋没土　上層はやや多量の灰白色軽石、少量のAs-YP、炭化物粒を含む暗褐色土で埋没していた。下層は多量の灰白色軽石、やや多量のAs-YP、ローム粒～細粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　ここに掲載した遺物はないが、黒浜・有尾式の土器破片７点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

87号土坑(第384・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,919～40,920、Ｙ＝－80,705～－80,706（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.91m、短軸0.54m

残存深度　0.23m

主軸方位　Ｎ－20°－Ｗ

重複　なし

埋没土　やや多量のAs-YPを含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(87土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片３点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の墓壙である可能性が考えられる。

88号土坑(第384・387図、PL.147・369)

位置　Ｘ＝40,906～40,907、Ｙ＝－80,693～－80,694（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.87m、短軸0.84m

残存深度　0.59m

主軸方位　Ｎ－21°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は夾雑物を含まない暗褐色土で埋没していた。下層はやや多量の灰白色軽石、多量のローム塊～粒を含む暗褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(88土-１～３)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片11点が出土している。

所見　形状や出土遺物から黒浜・有尾式期の貯蔵穴であると考えられる。

542号土坑(第384図、PL.147)

位置　Ｘ＝40,919～40,920、Ｙ＝－80,716～－80,717（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.95m、短軸0.85m

残存深度　0.31m

主軸方位　Ｎ－33°－Ｗ

重複　なし

埋没土　上層は少量のAs-YP、多量のローム粗塊～粒を含む褐色土で埋没していた。下層は微量のAs-YP、やや多量のローム小塊～粒を含む褐色土などで埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の土坑であると考えられる。

543号土坑(第384・387図、PL.147・148・369)

位置　Ｘ＝40,920～40,921、Ｙ＝－80,716～－80,717（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸1.08m、短軸0.87m

残存深度　0.34m

主軸方位　Ｎ－27°－Ｗ

重複　なし

埋没土　やや多量のAs-YP、多量のローム塊～粒を含む褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(543土-１)を掲載した。なお、ここに掲載した以外に、出土遺物はない。

所見　出土遺物から黒浜・有尾式期の土坑であると考えられる。

545号土坑(第384図、PL.148)

位置　Ｘ＝40,845～40,847、Ｙ＝－80,760～－80,761（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸(1.10m)、短軸0.78m

残存深度　0.34m

主軸方位　Ｎ－16°－Ｗ

重複　275号竪穴建物と重複し、545号土坑が古い。

埋没土　やや多量の灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、形状や埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の貯蔵穴である可能性が考えられる。

546号土坑(第385図、PL.148)

位置　Ｘ＝40,845～40,846、Ｙ＝－80,757～－80,758（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸1.30m、短軸1.20m

残存深度　0.26m

主軸方位　Ｎ－63°－Ｗ

重複　なし

埋没土　やや多量の灰白色軽石、As-YP、少量のローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、形状や埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の貯蔵穴である可能性が考えられる。

550号土坑(第385図、PL.148)

位置　Ｘ＝40,880～40,881、Ｙ＝－80,737～－80,738（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.86m、短軸0.85m

残存深度　0.45m

主軸方位　Ｎ－０°

重複　292号竪穴建物と重複し、550号土坑が古い。

埋没土　やや多量の灰白色軽石、As-YP、少量のローム塊～粒、微量の炭化物粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、形状や埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の貯蔵穴である可能性が考えられる。

552号土坑(第385図、PL.148)

位置　Ｘ＝40,898～40,899、Ｙ＝－80,724～－80,725（Ｃ・Ｄ区）

形状　不整形

規模　長軸1.16m、短軸1.10m

残存深度　0.52m

主軸方位　Ｎ－８°－Ｅ

重複　54号竪穴建物と重複し、552号土坑が古い。

埋没土　やや多量のAs-YP、ローム小塊～粒を含む暗褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の土坑であると考えられる。

553号土坑(第385・388図、PL.148・369)

位置　Ｘ＝40,866～40,867、Ｙ＝－80,771～－80,772（Ｃ・Ｄ区）

形状　楕円形

規模　長軸0.98m、短軸0.97m

残存深度　0.56m

主軸方位　Ｎ－42°－Ｅ

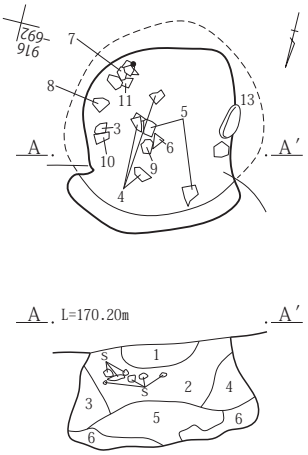
重複　310号竪穴建物と重複し、553号土坑が古い。

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量の灰白色軽石、As-YP、やや多量のローム粒を含む黒褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(553土-１・２・10・11)、諸磯ａ式の土器破片(553土-３～９)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片１点、諸磯ａ式の土器破片８点、剝片１点(62.8ｇ)が出土している。

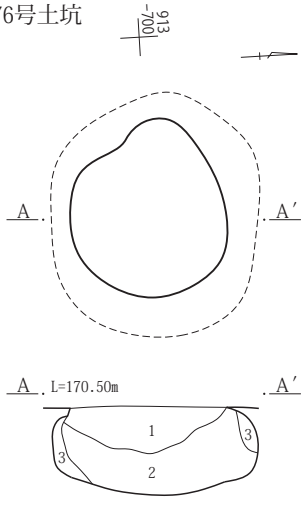
所見　形状や出土遺物から諸磯ａ式期の貯蔵穴であると考えられる。

74号土坑



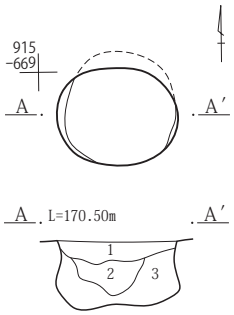
74号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、ローム粒を多量、炭化物粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を多量､ローム粒､炭化物粒をやや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、炭化物粒をやや多量、ローム粒を少量含む。
4．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量、ローム粒を少量含む。
5．暗褐色土10YR3/3　炭化物粒をやや多量、ローム粒、焼土塊を少量含む。
6．暗褐色土10YR3/3　ローム塊、炭化物粒を少量を含む。

76号土坑



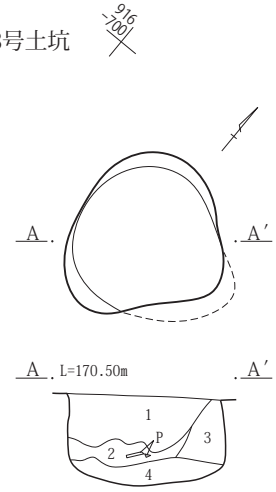
76号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、ローム粒を少量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、ローム塊～粒を多量、炭化物粒を少量含む。

77号土坑



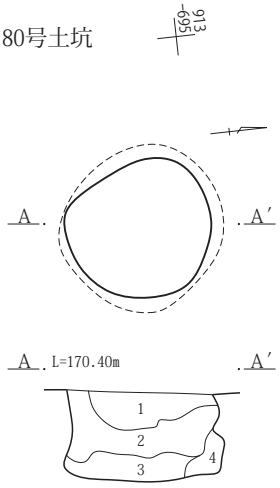
77号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム小塊～粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、ローム粗粒～粒、炭化物粒を少量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、ローム粒をやや多量、炭化物粒を微量含む。

78号土坑



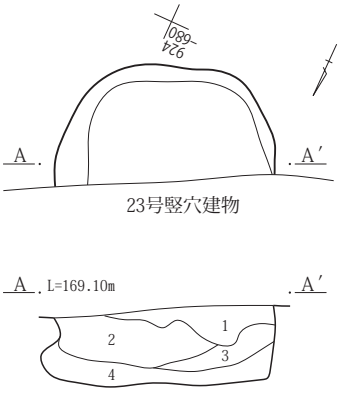
78号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム塊を少量、ローム粒をやや多量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム塊を微量、ローム細粒を少量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒を少量、As-YPをやや多量含む。
4．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒、炭化物粒を少量含む。

80号土坑



80号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、ローム細粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を多量、ローム塊～細粒をやや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒をやや多量、As-YPを少量含む。
4．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を少量、As-YP、ローム粒をやや多量含む。

82号土坑

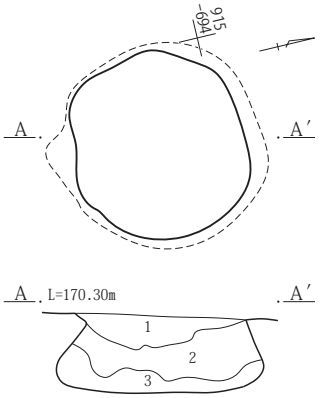


82号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム塊～粒をやや多量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を多量、As-YP、ローム塊～粒をやや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YPを少量、ローム粒をやや多量含む。
4．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YPをやや多量、ローム粒～細粒を少量含む。

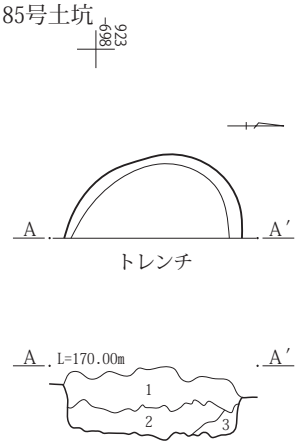
0　1：40　1m

第383図　74号・76号～ 78号・80号・82号土坑

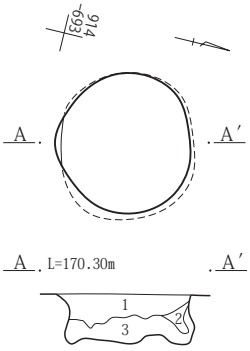
83号土坑



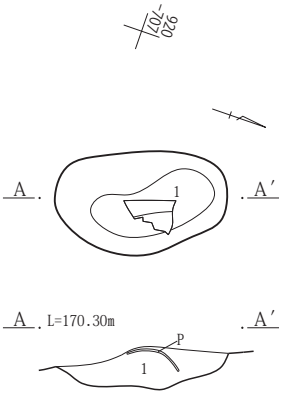
85号土坑



86号土坑



87号土坑



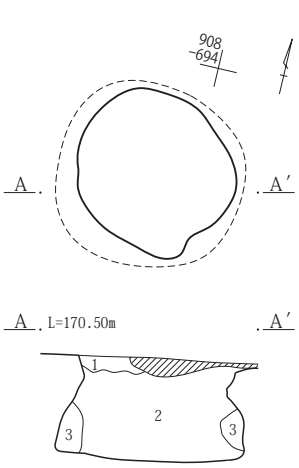
83号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒、炭化物細粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム塊～粒やや多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YPをやや多量、ローム塊～粒を少量含む。

85号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、ローム粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム粒をやや多量、As-YPを少量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、As-YP、ローム塊をやや多量含む。

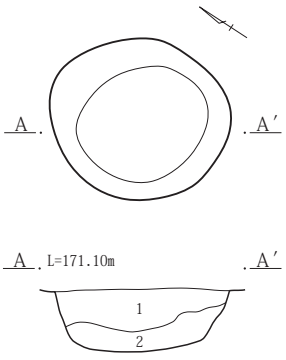
86号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、As-YP、炭化物粒を少量含む。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石、ローム細粒を少量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を多量、As-YP、ローム粒～細粒をやや多量含む。

87号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　As-YPをやや多量含む。

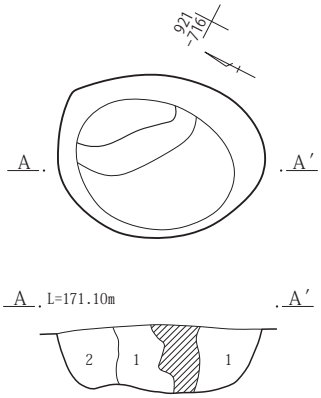
88号土坑



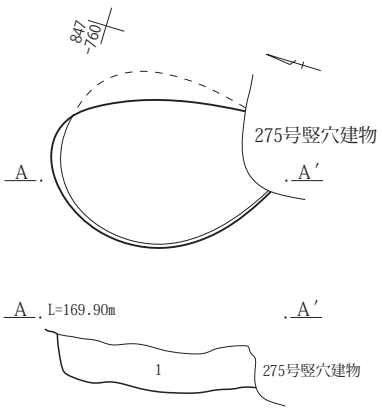
542号土坑



543号土坑



545号土坑



88号土坑Ａ－Ａ′
1．暗褐色土10YR3/3　夾雑物を含まない。
2．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石をやや多量、ローム塊～粒を多量含む。
3．暗褐色土10YR3/3　灰白色軽石を少量、As-YPをやや多量含む。

542号土坑Ａ－Ａ′
1．褐色土10YR4/4　As-YPを少量、ローム粗塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
2．褐色土10YR4/4　As-YPを微量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

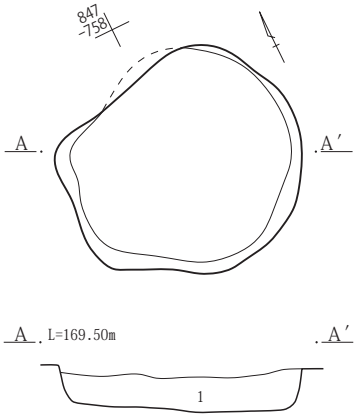
543号土坑Ａ－Ａ′
1．褐色土10YR4/6　As-YPをやや多量、ローム塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
2．褐色土10YR4/4　As-YPを少量、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

545号土坑Ａ－Ａ′
1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

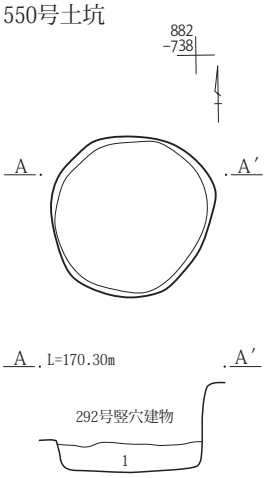
0　1：40　1m

第384図　83号・85号～ 88号・542号・543号・545号土坑

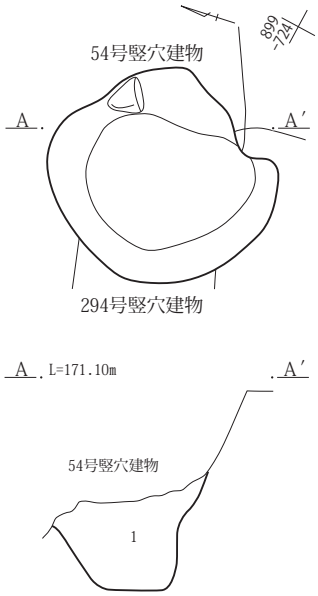
546号土坑



550号土坑



552号土坑



546号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YPをやや多量、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

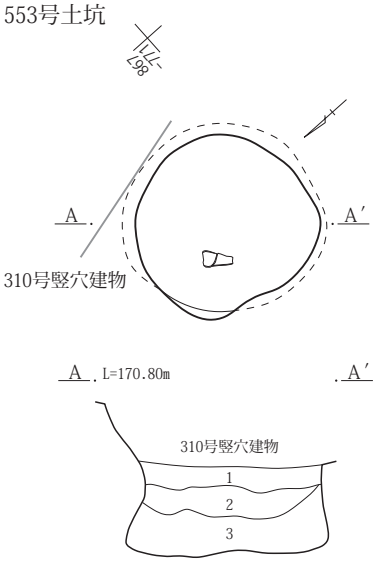
550号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YPをやや多量、ローム塊～粒を少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

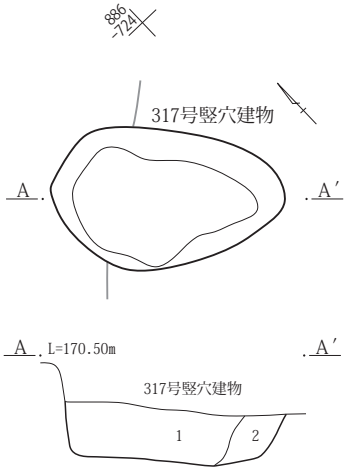
552号土坑Ａ－Ａ′

1．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性、締まりやや強い。

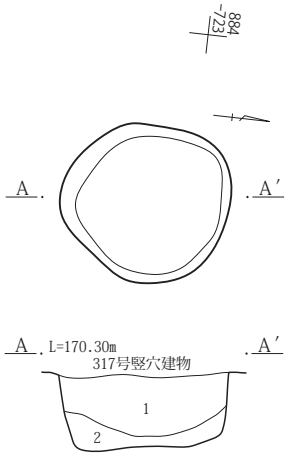
553号土坑



554号土坑



555号土坑



553号土坑Ａ－Ａ′

1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや強い。締まり強い。
2．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
3．黒褐色土10YR3/2　灰白色軽石、As-YPを少量、ローム粒をやや多量含む。粘性やや強い。締まり強い。

554号土坑Ａ－Ａ′

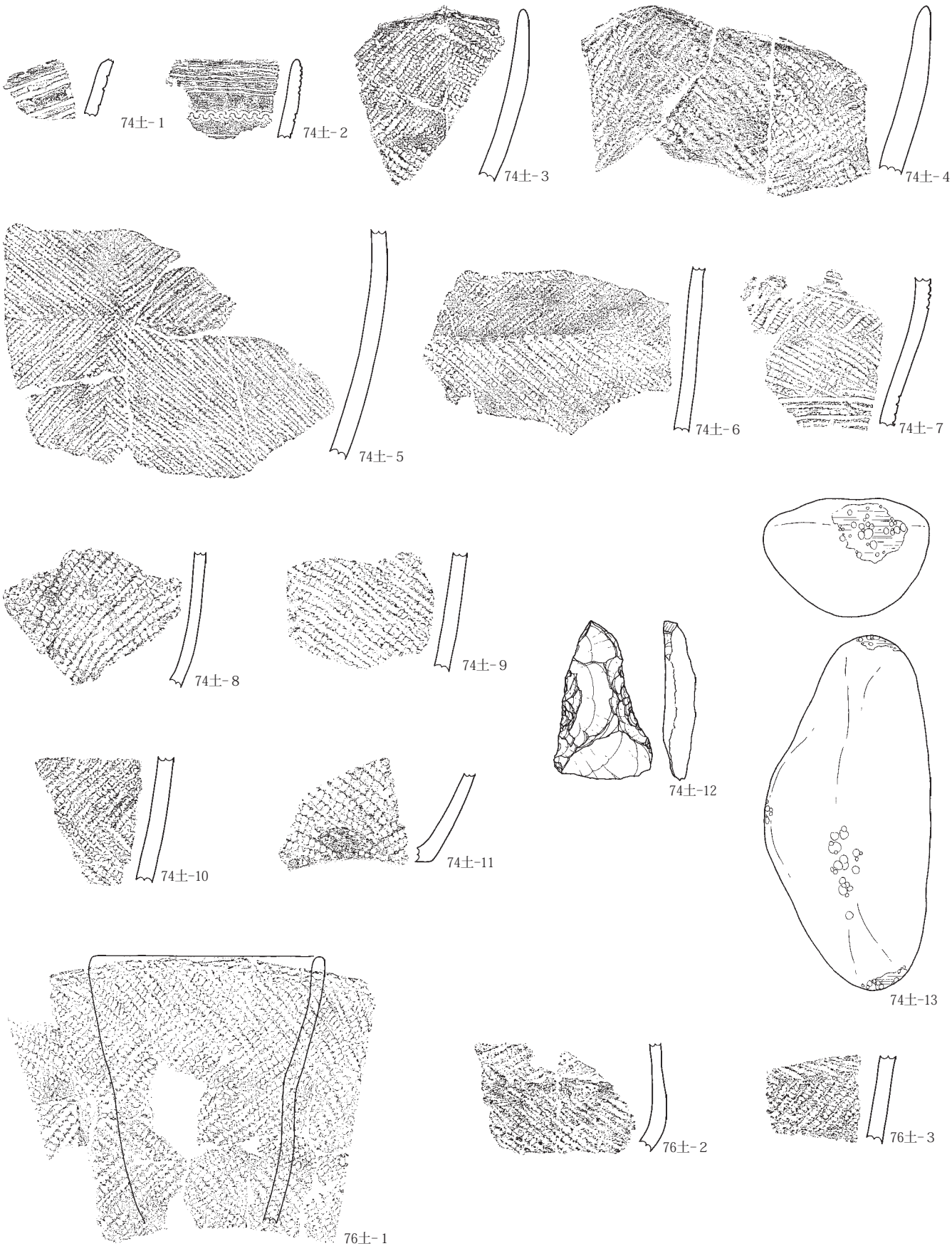
1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
2．暗褐色土10YR3/3　As-YP、ローム小塊～粒を多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

555号土坑Ａ－Ａ′

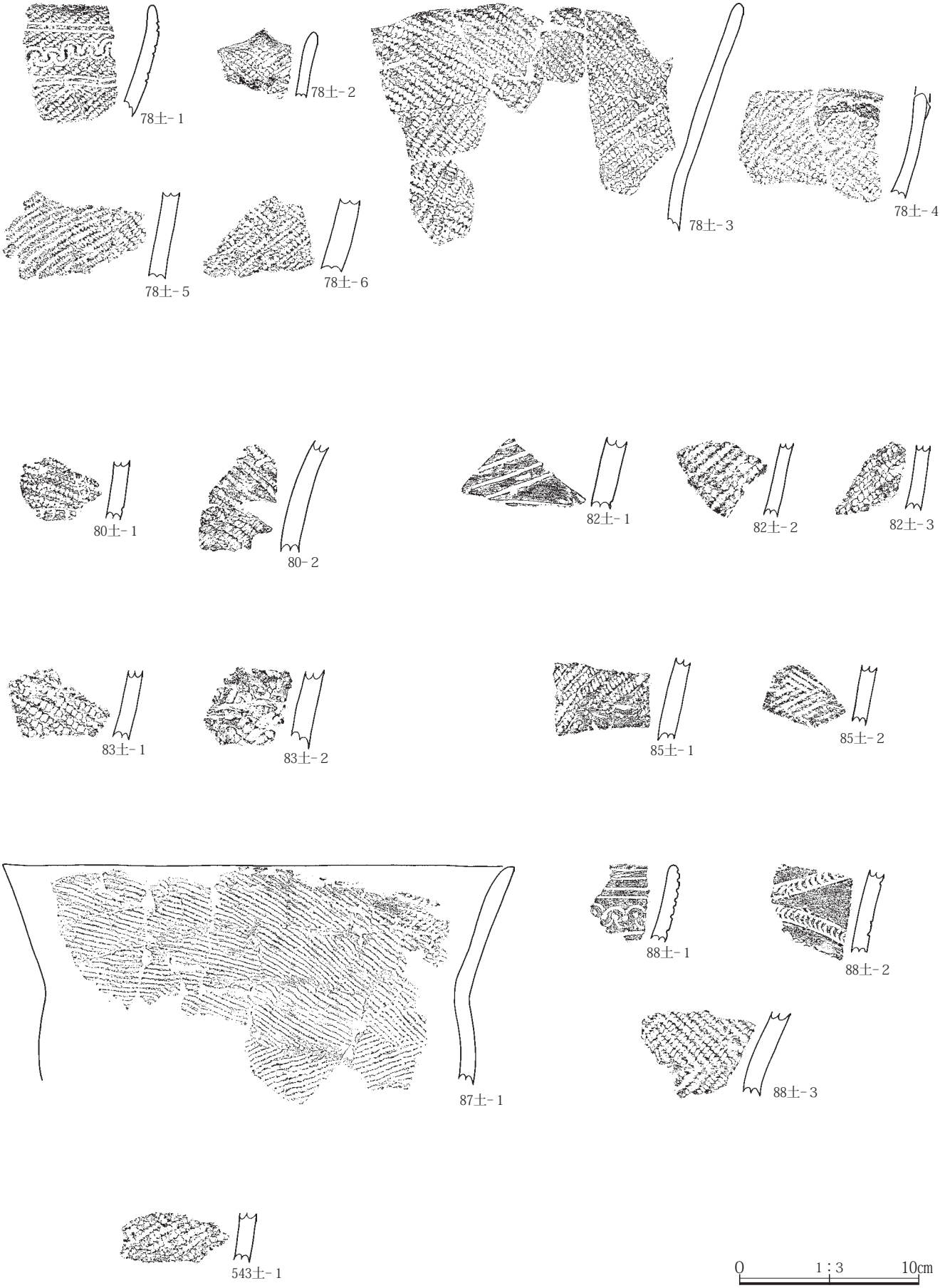
1．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を少量含む。粘性やや弱い。締まり強い。
2．黒褐色土10YR2/3　灰白色軽石、As-YPを少量、ローム塊～粒をやや多量含む。粘性やや弱い。締まり強い。

0　1：40　1m

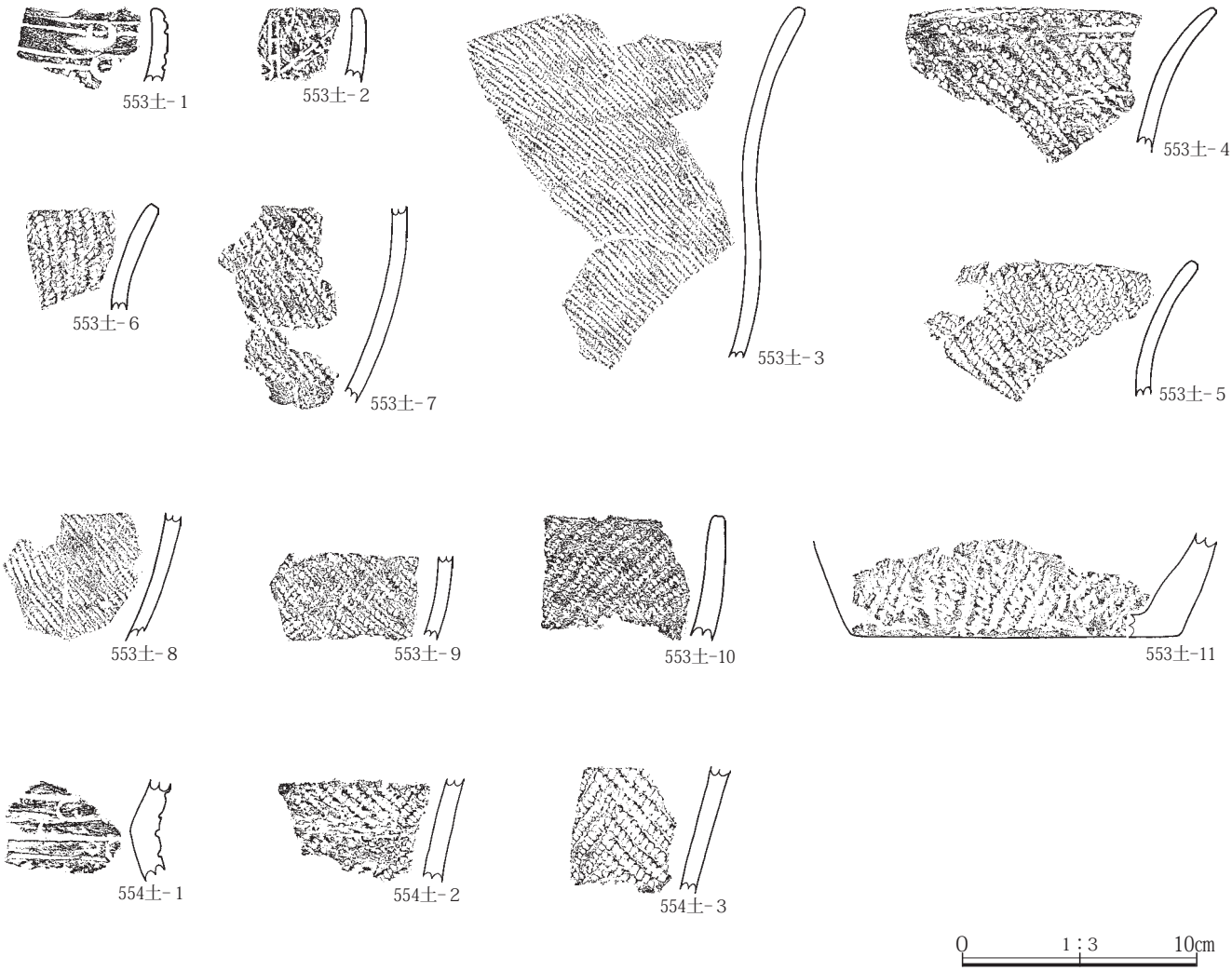
第385図　546号・550号・552号～ 555号土坑



第386図　74号・76号土坑出土遺物



第387図　78号・80号・82号・83号・85号・87号・88号・543号土坑出土遺物



第388図　553号・554号土坑出土遺物

554号土坑(第385・388図、PL.148・369)

位置　X＝40,884～40,885、Y＝－80,724～－80,725（C・D区）

形状　楕円形

規模　長軸1.23m、短軸0.76m

残存深度　0.33m

主軸方位　N－46°－W

重複　317号竪穴建物と重複し、554号土坑が新しい。

埋没土　少量の灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土などで埋没していた。

出土遺物　黒浜・有尾式の土器破片(554土-１～３)を掲載した。なお、ここに掲載した遺物以外に、黒浜・有尾式の土器破片３点、剥片１点(7.4ｇ)が出土している。

所見　出土遺物から黒浜・有尾式期の土坑であると考えられる。

555号土坑(第385図、PL.148)

位置　X＝40,883～40,884、Y＝－80,721～－80,722（C・D区）

形状　楕円形

規模　長軸0.90m、短軸0.85m

残存深度　0.40m

主軸方位　N－７°－W

重複　317号竪穴建物と重複し、555号土坑が新しい。

埋没土　上層は少量の灰白色軽石、As-YP、ローム小塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。下層は少量の灰白色軽石、As-YP、やや多量のローム塊～粒を含む黒褐色土で埋没していた。

出土遺物　なし

所見　出土遺物はないが、埋没土の特徴から黒浜・有尾式期の土坑であると考えられる。

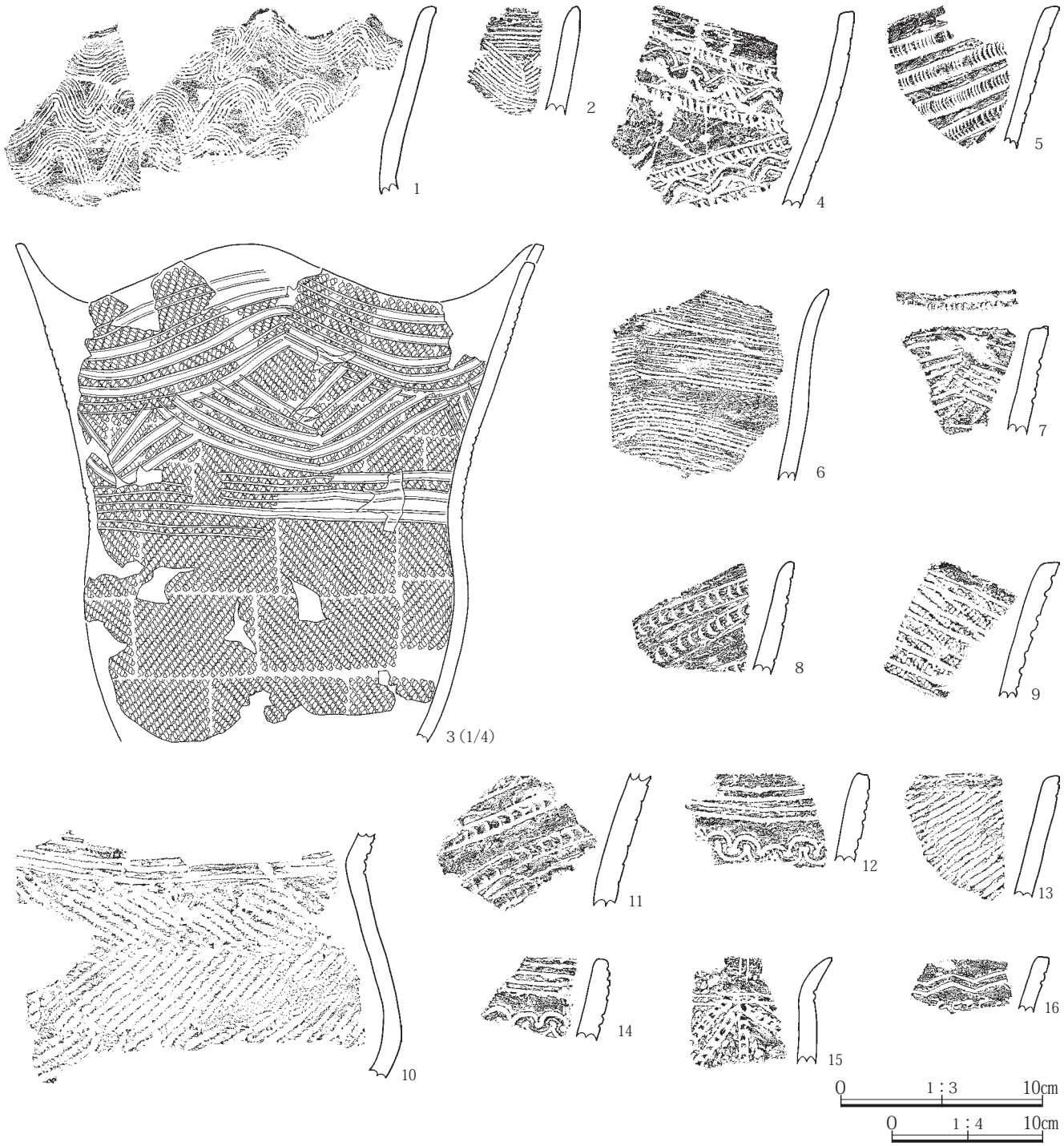
第５項　遺構外出土遺物

（第389～410図、PL.370～388）

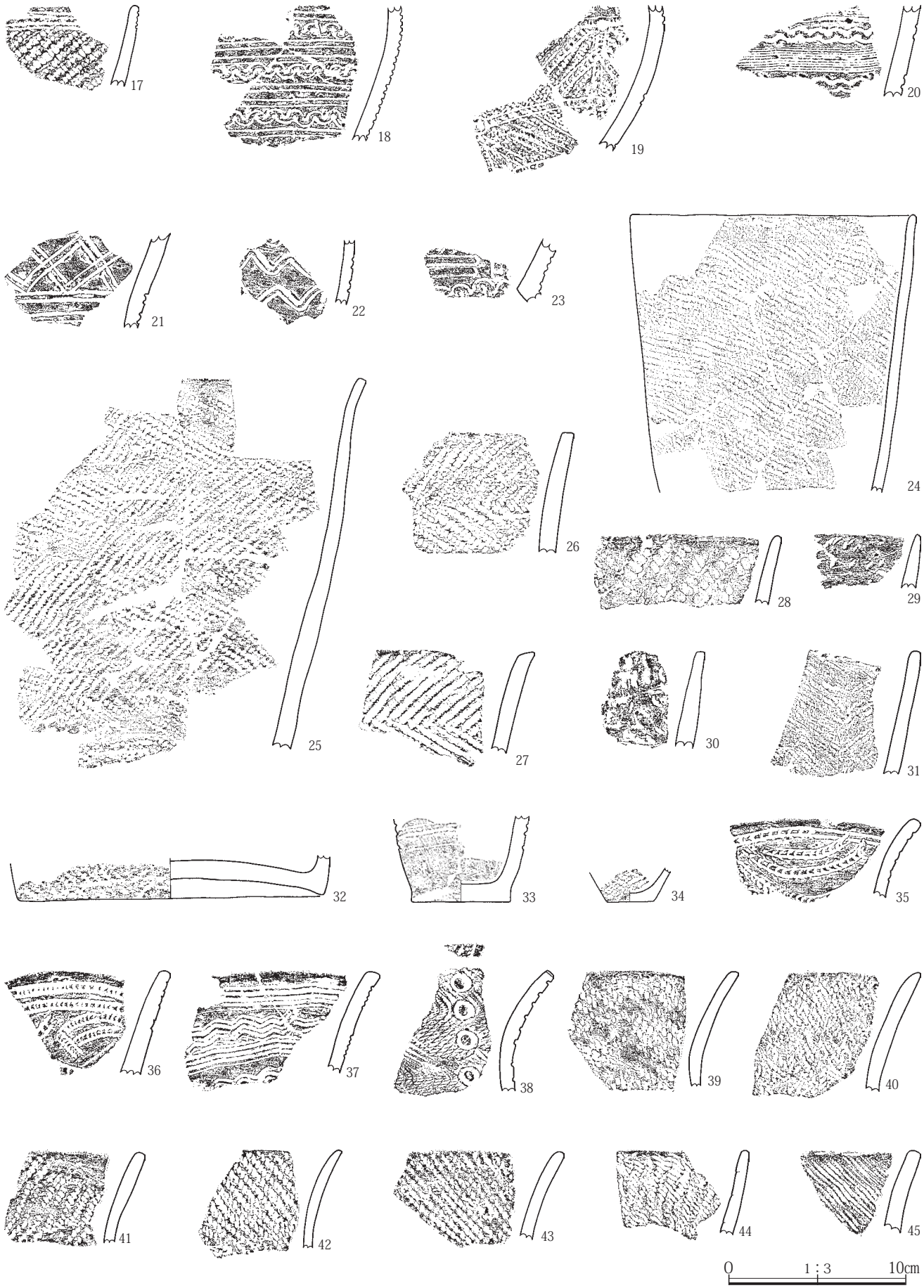
本郷満行原遺跡では、遺構確認作業時に遺構外から多くの遺物が出土した。これらの遺物は、一括して遺構外出土遺物として扱った。また、古代の竪穴建物から出土した縄文土器のように、遺構に伴わないと判断した遺物についても遺構外出土遺物として扱った。

ここに掲載した遺物は、縄文土器141点（１～141）、土師器・須恵器（土製品を含む）103点（141～244）、瓦43点（245～287）、陶磁器類21点（288～308）、石器・石製品13点（309～321）、金属製品・鉄滓・羽口32点（322～353）である。

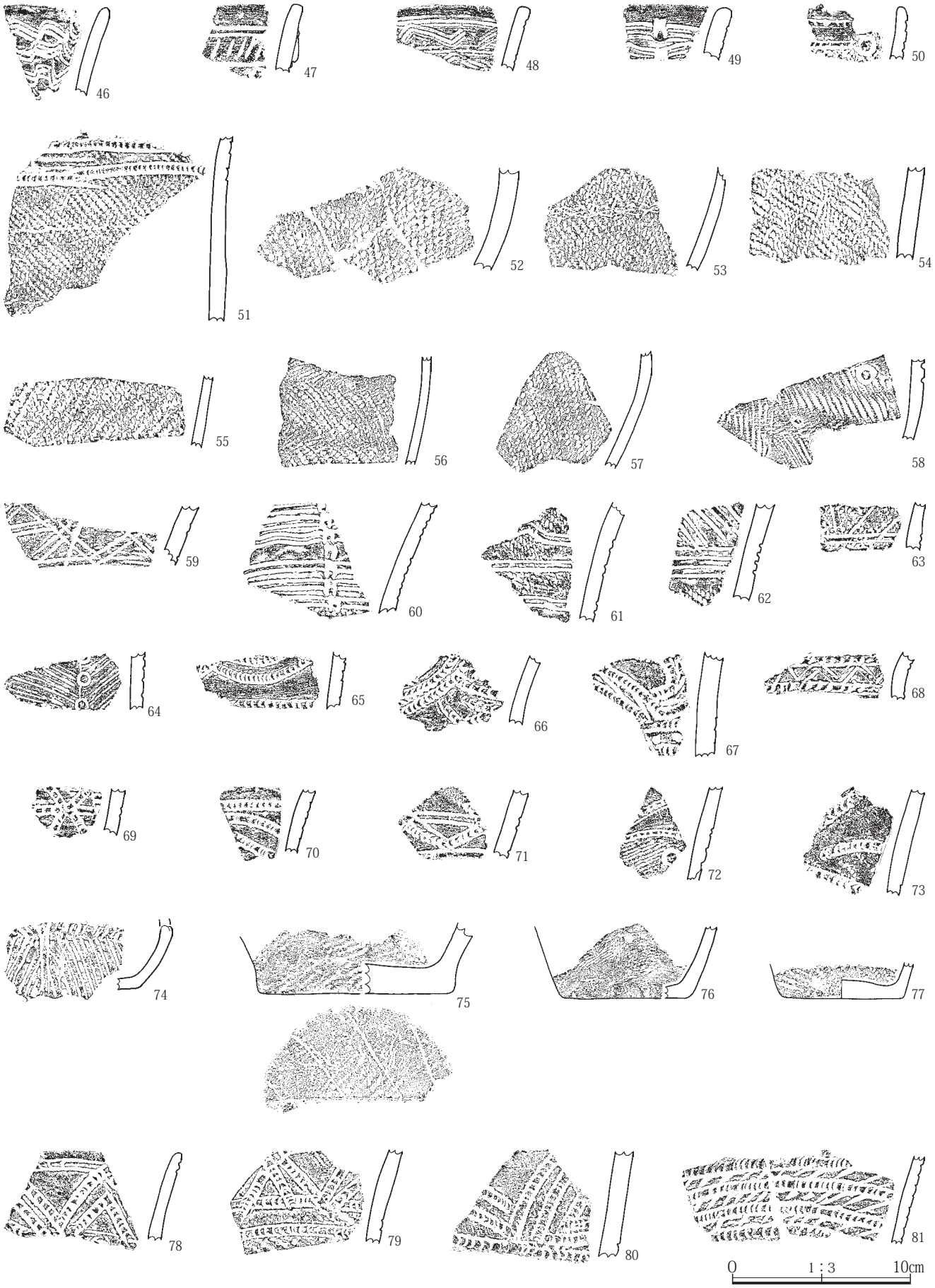
縄文土器は、前期中葉の黒浜・有尾式（３～34）を主体



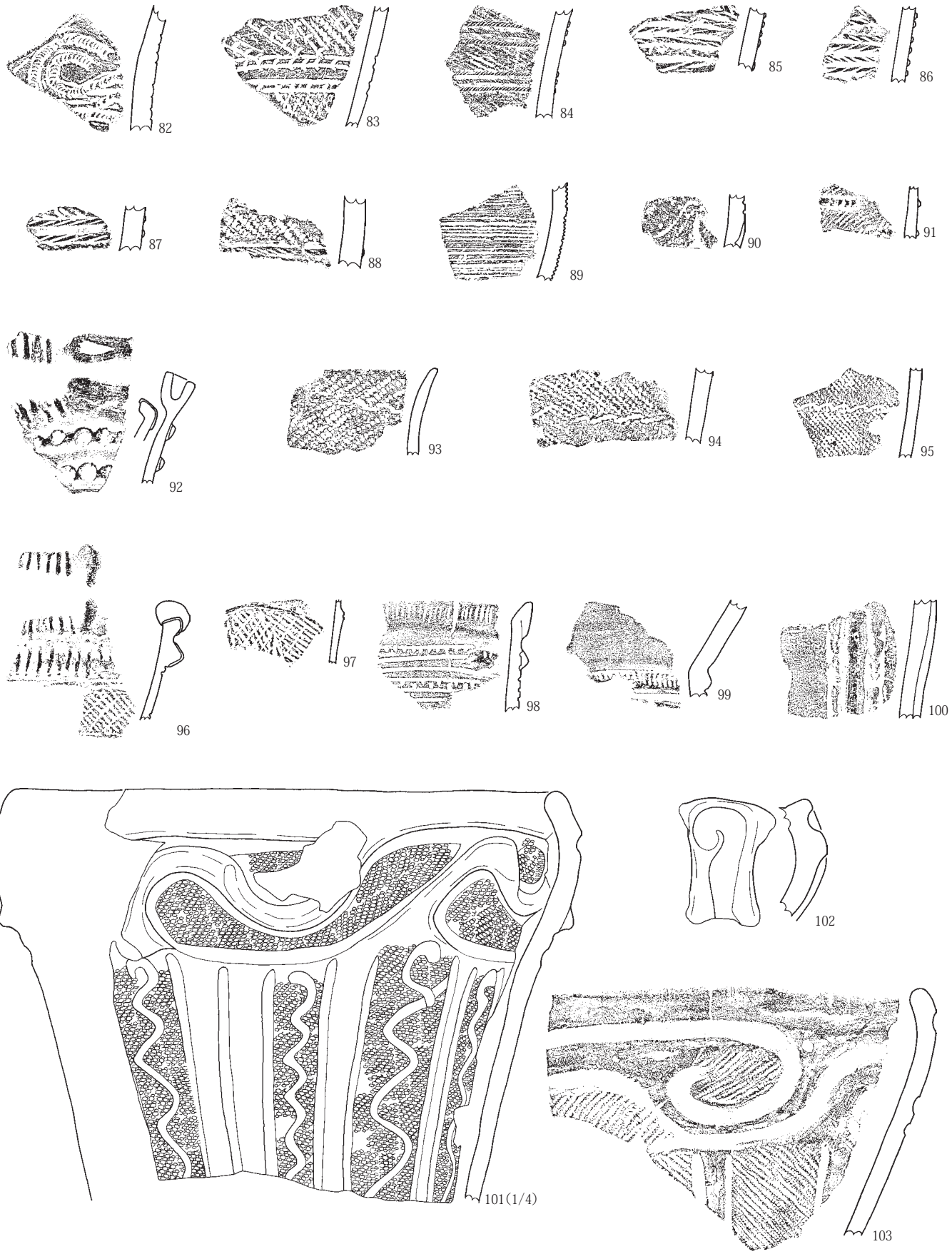
第389図　遺構外出土遺物（１）



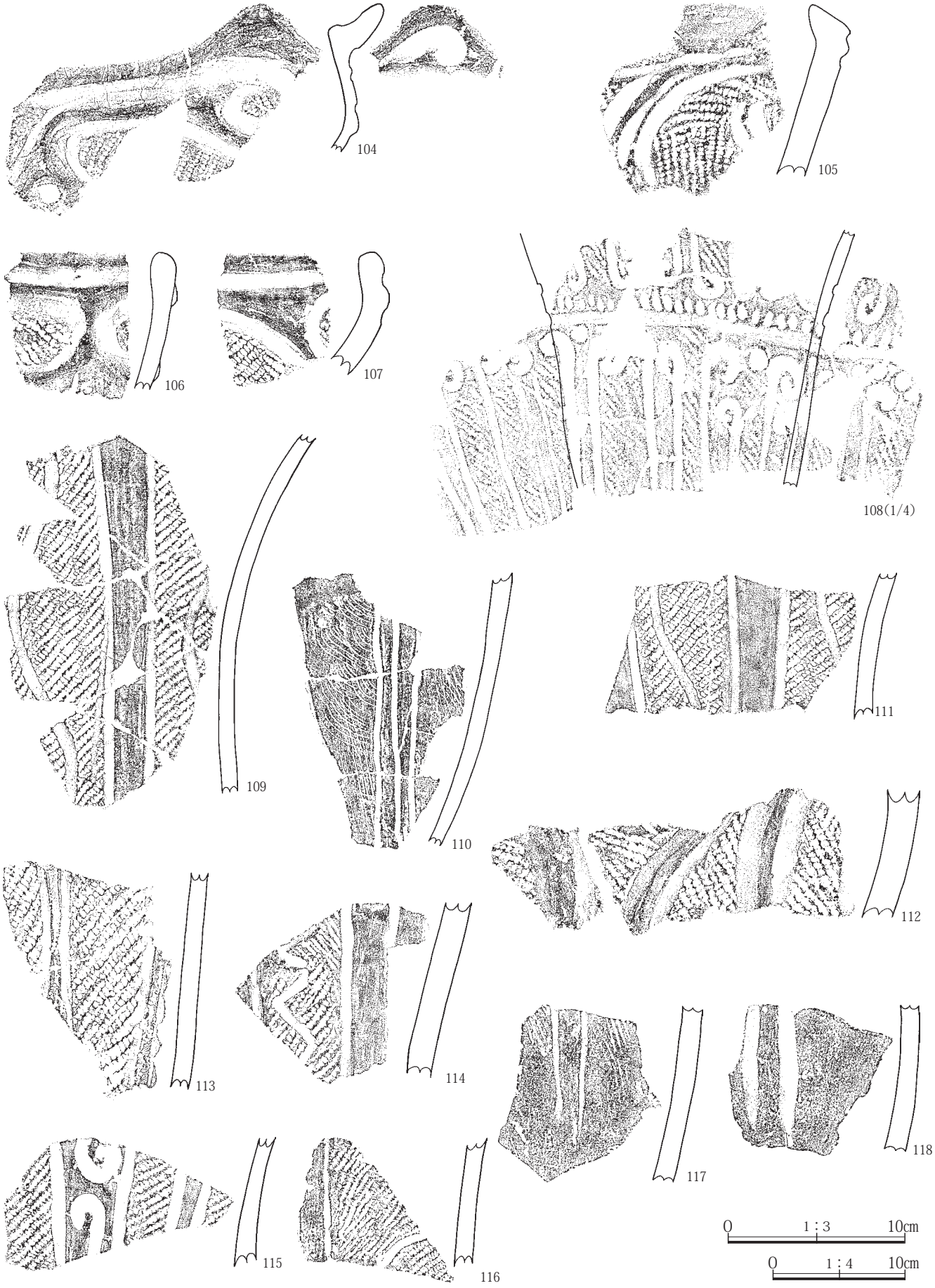
第390図　遺構外出土遺物（２）



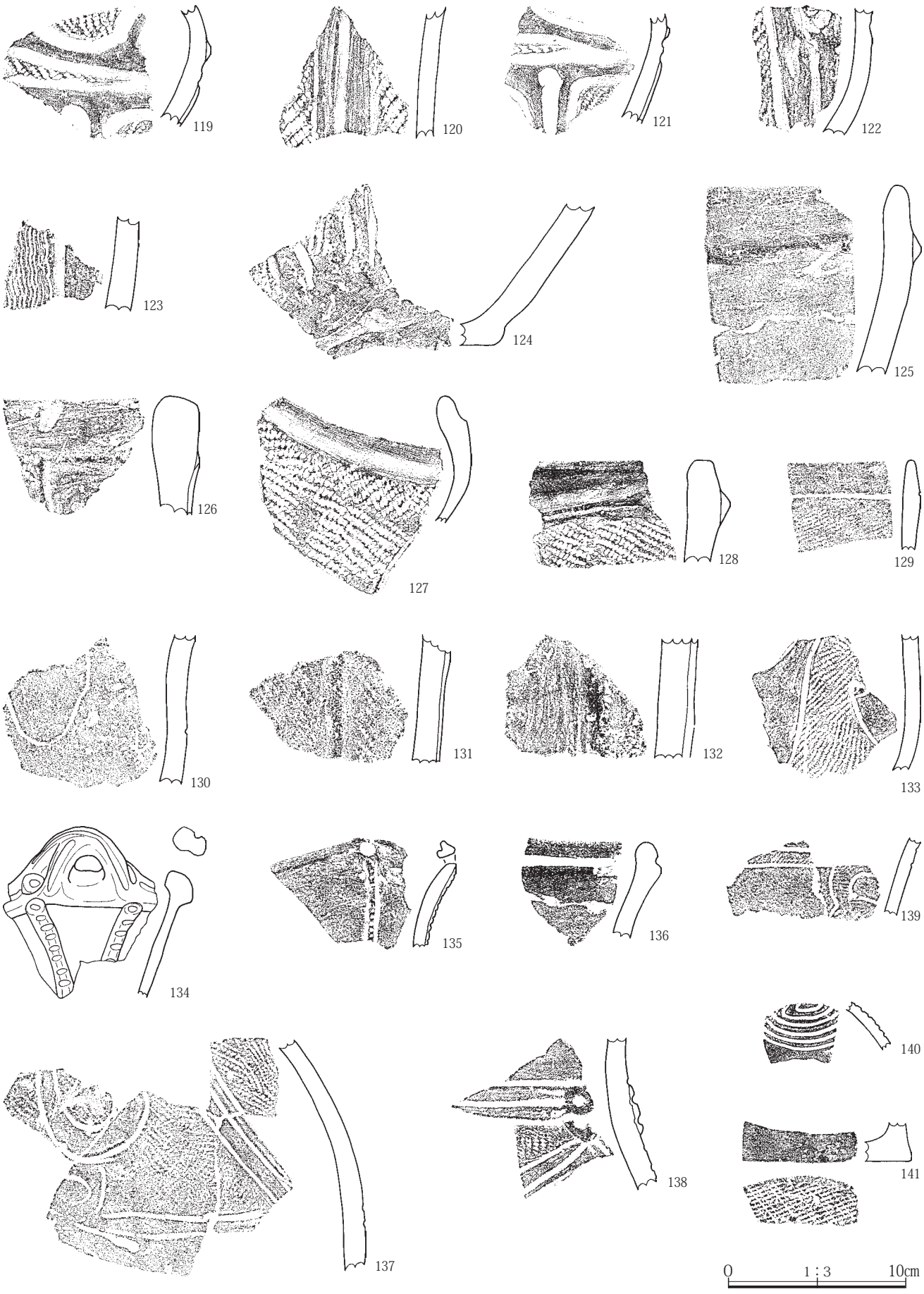
第391図　遺構外出土遺物（３）



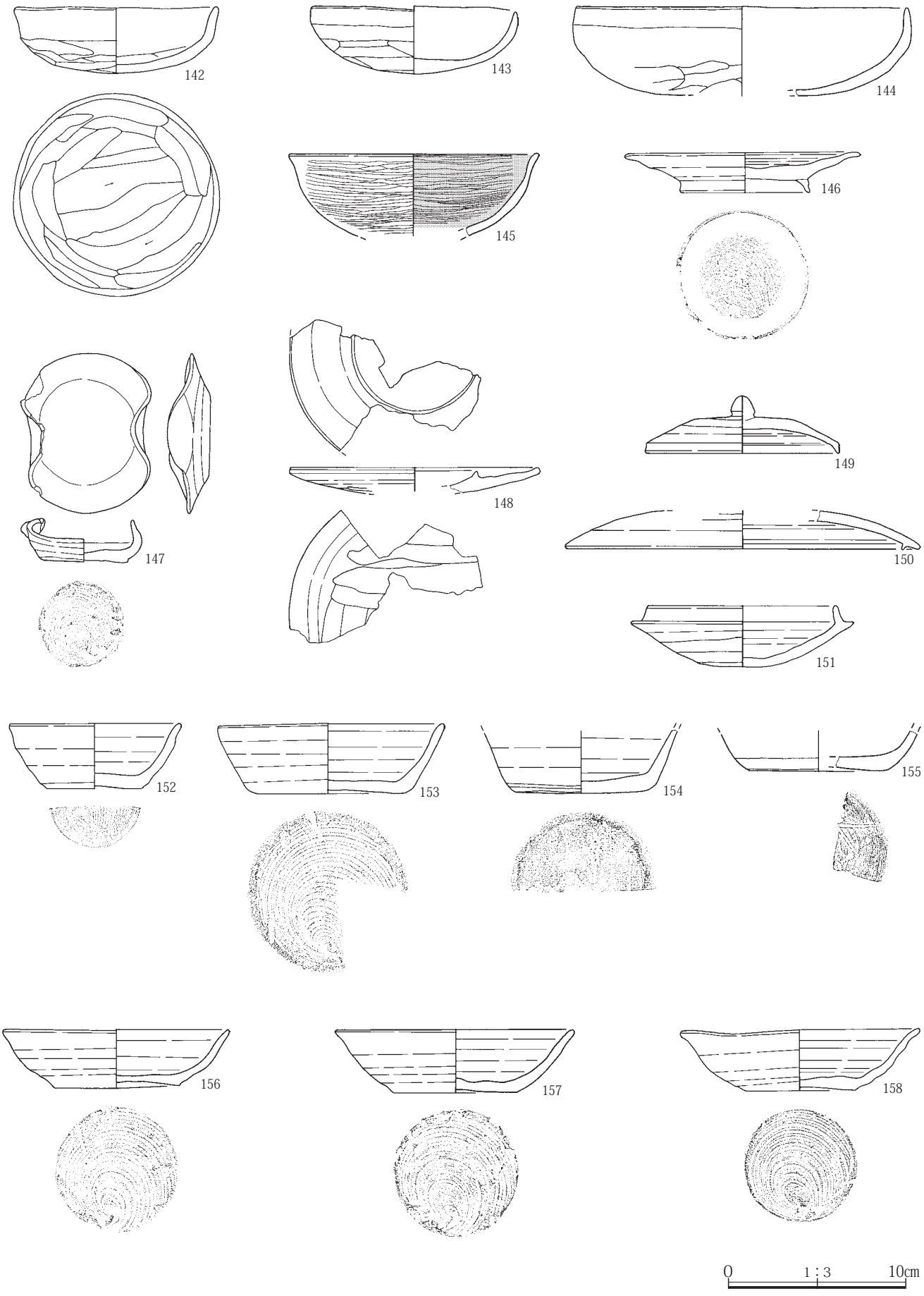
第392図　遺構外出土遺物（４）



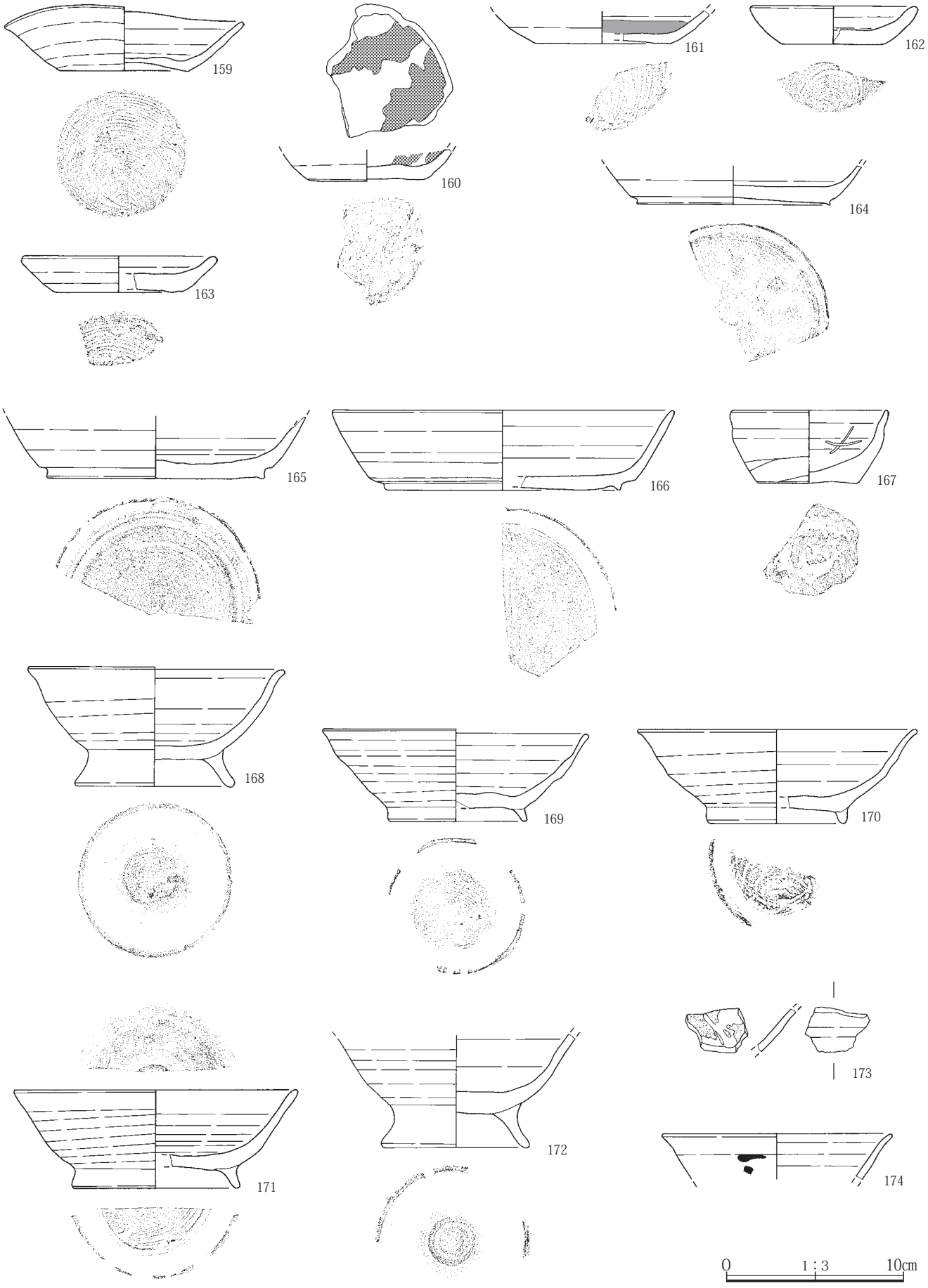
第393図　遺構外出土遺物（５）



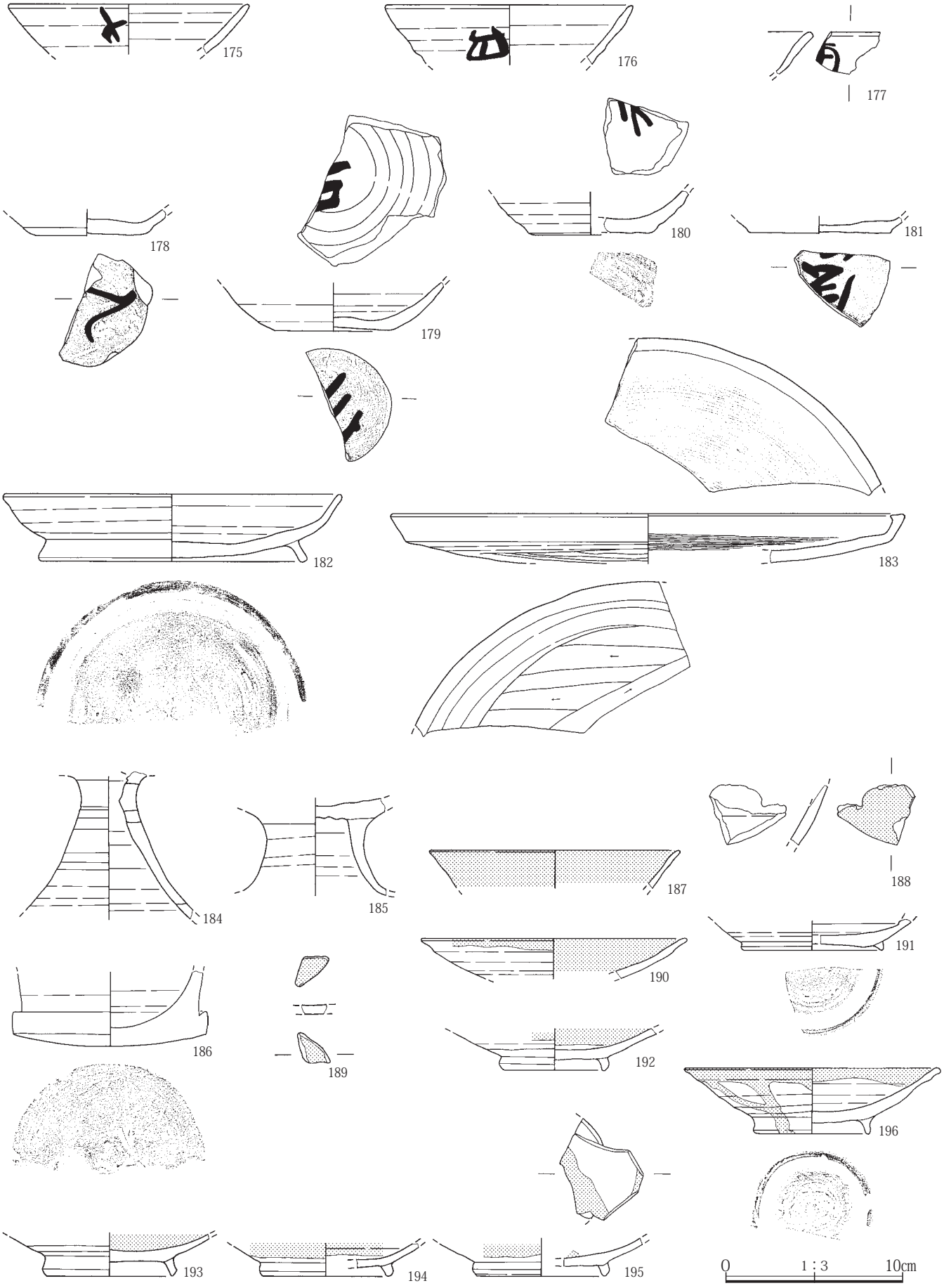
第394図　遺構外出土遺物（６）



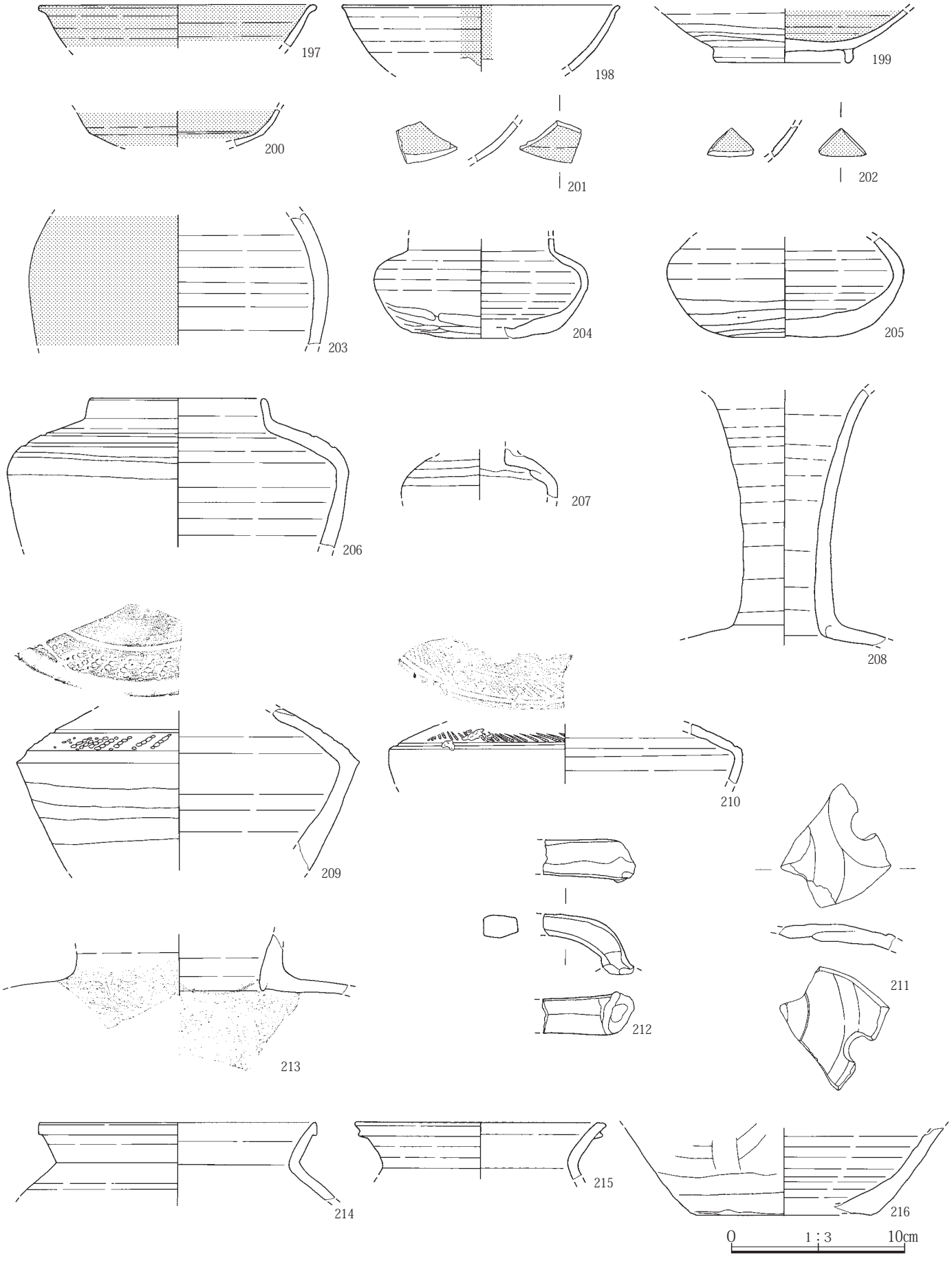
第395図　遺構外出土遺物（７）



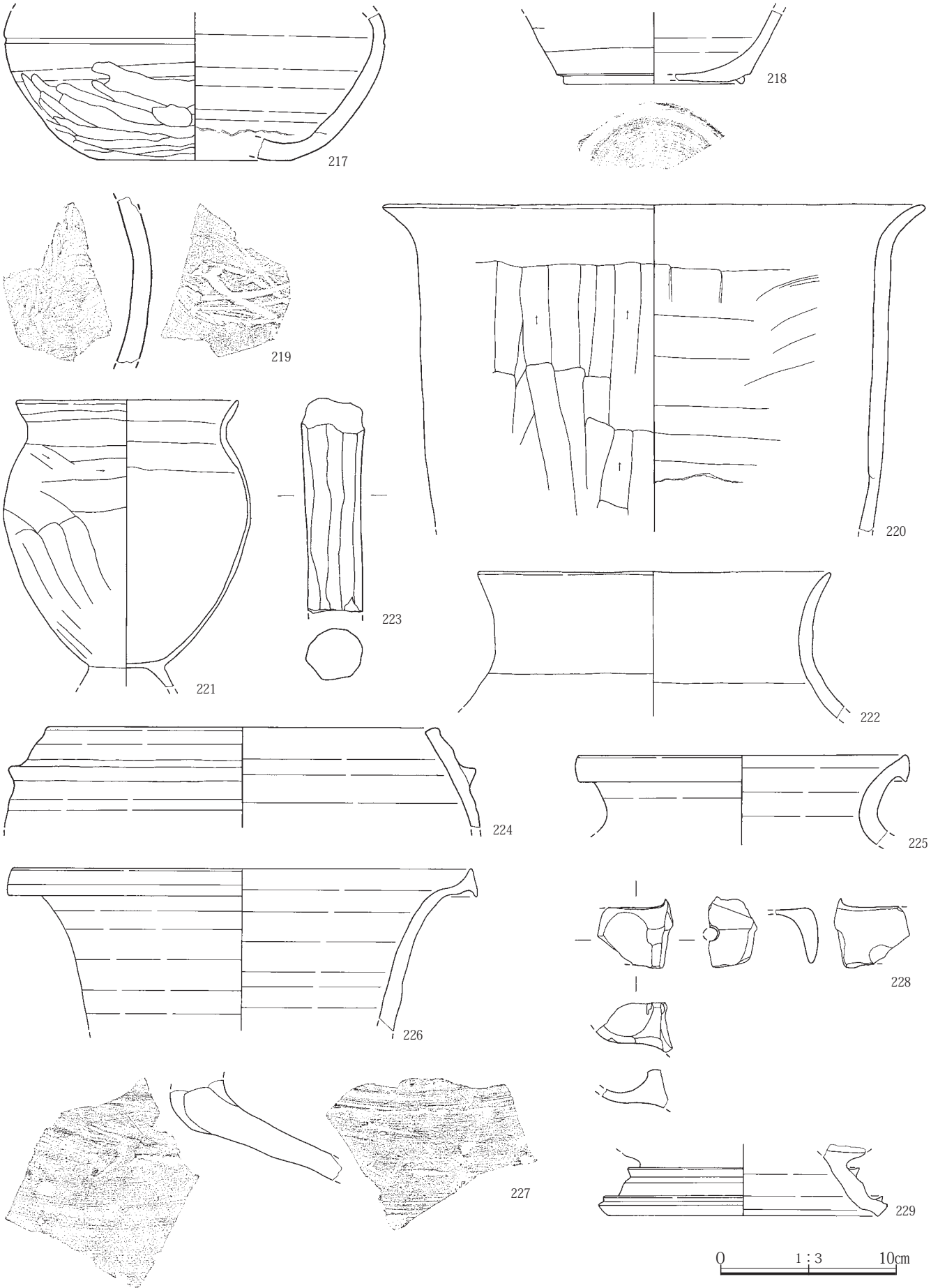
第396図　遺構外出土遺物（８）



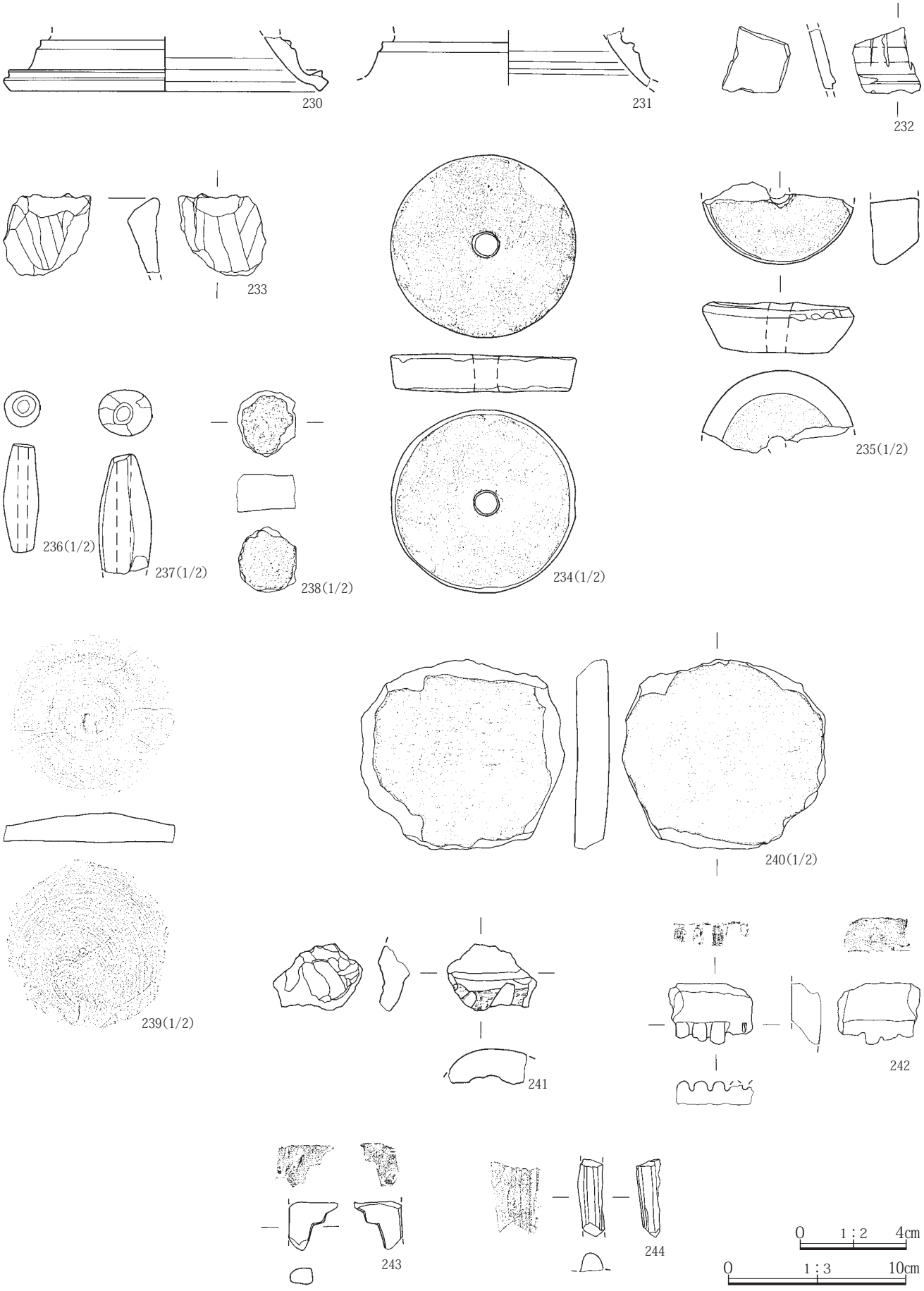
第397図　遺構外出土遺物（９）



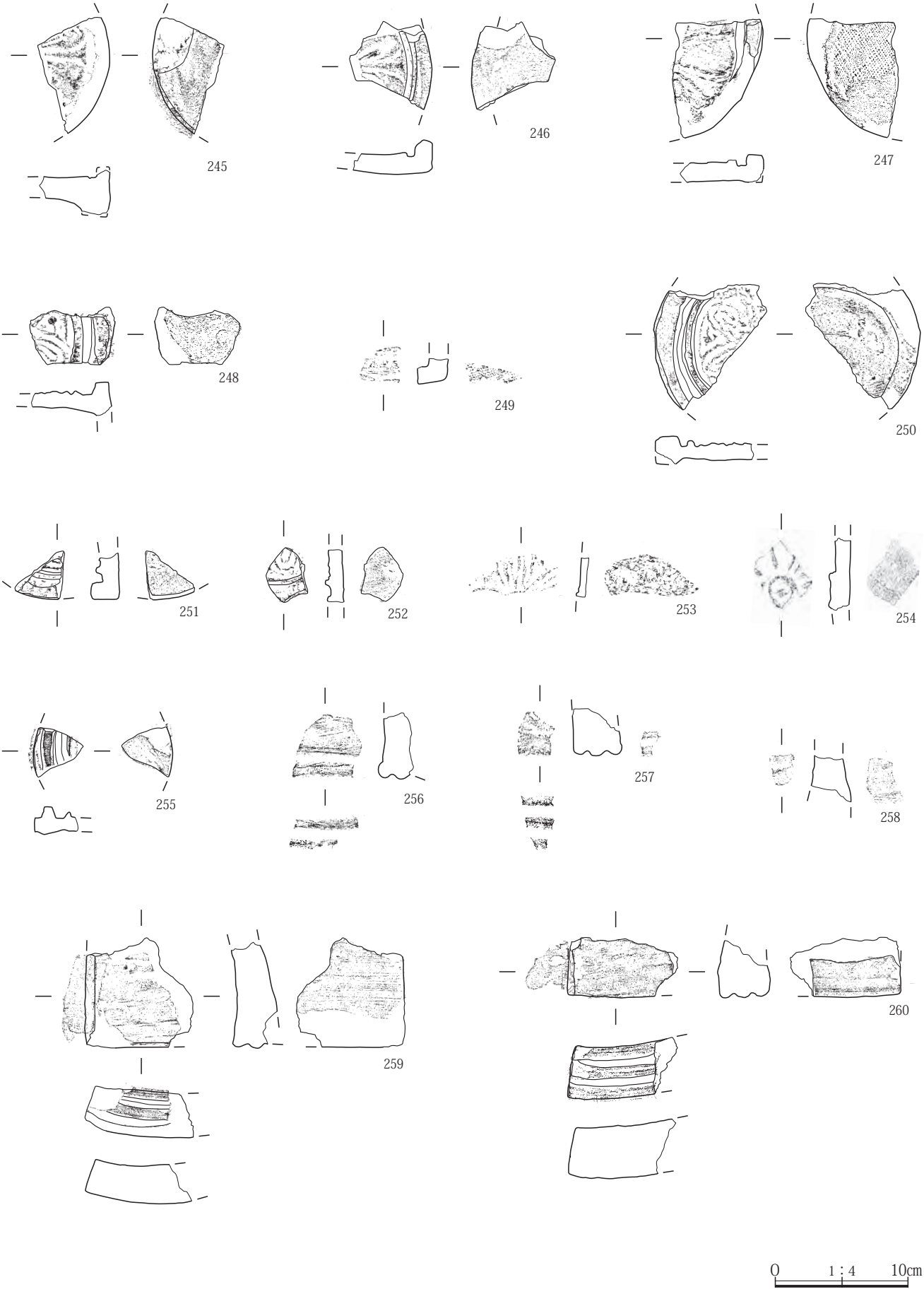
第398図　遺構外出土遺物(10)



第399図　遺構外出土遺物(11)

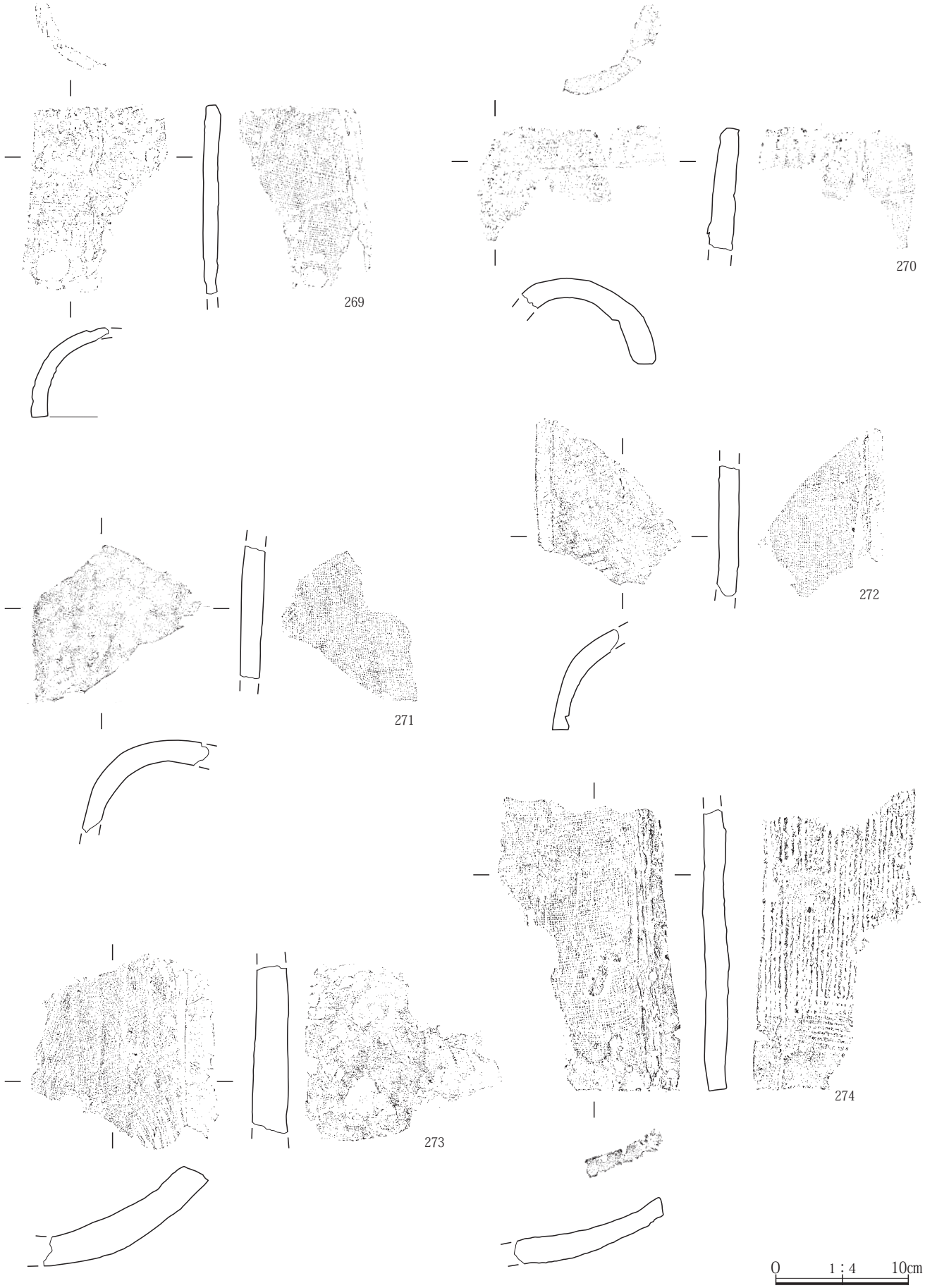


第400図　遺構外出土遺物(12)

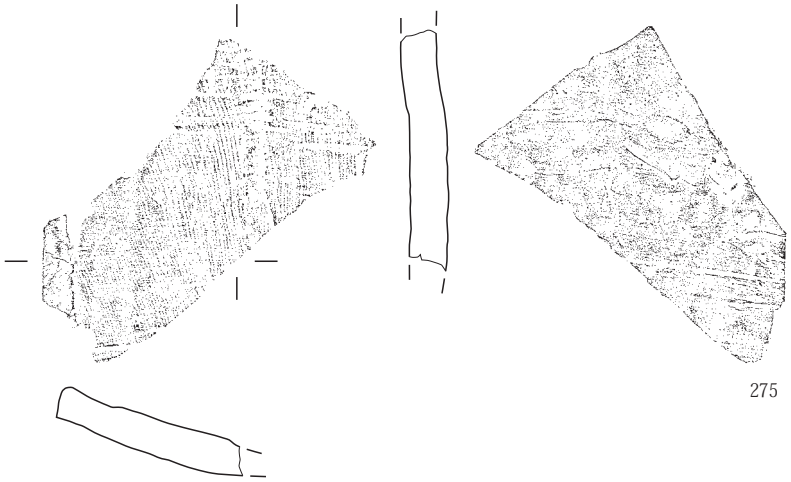


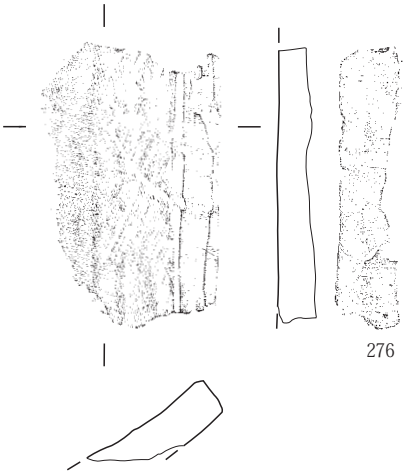
第401図　遺構外出土遺物(13)

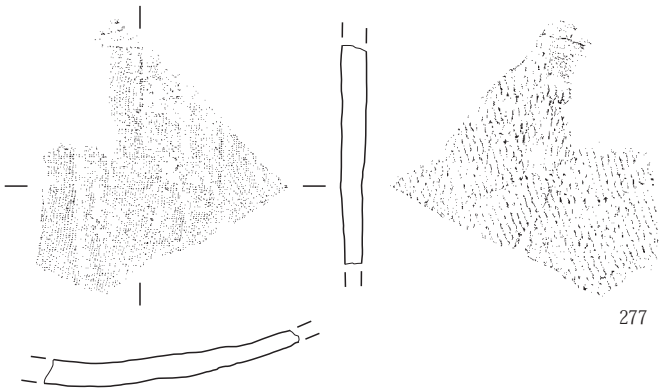
第402図　遺構外出土遺物(14)

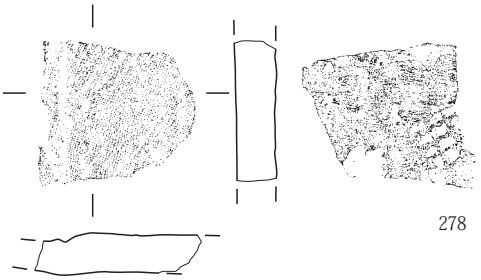


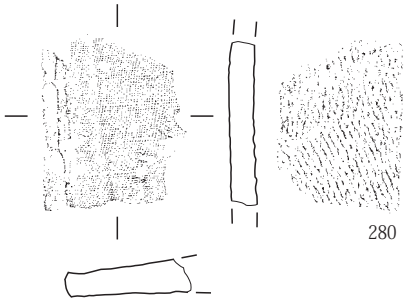
第403図　遺構外出土遺物(15)

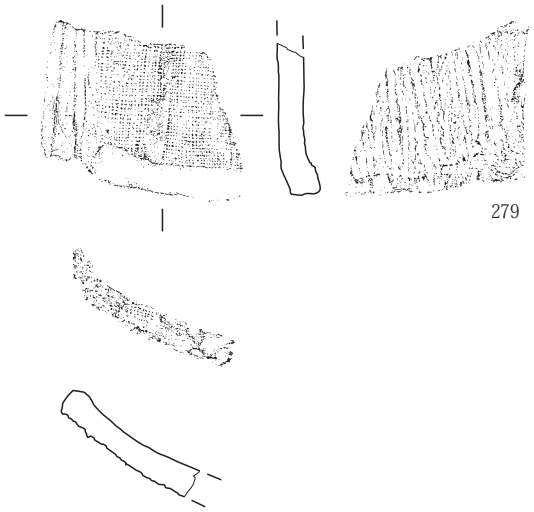


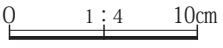




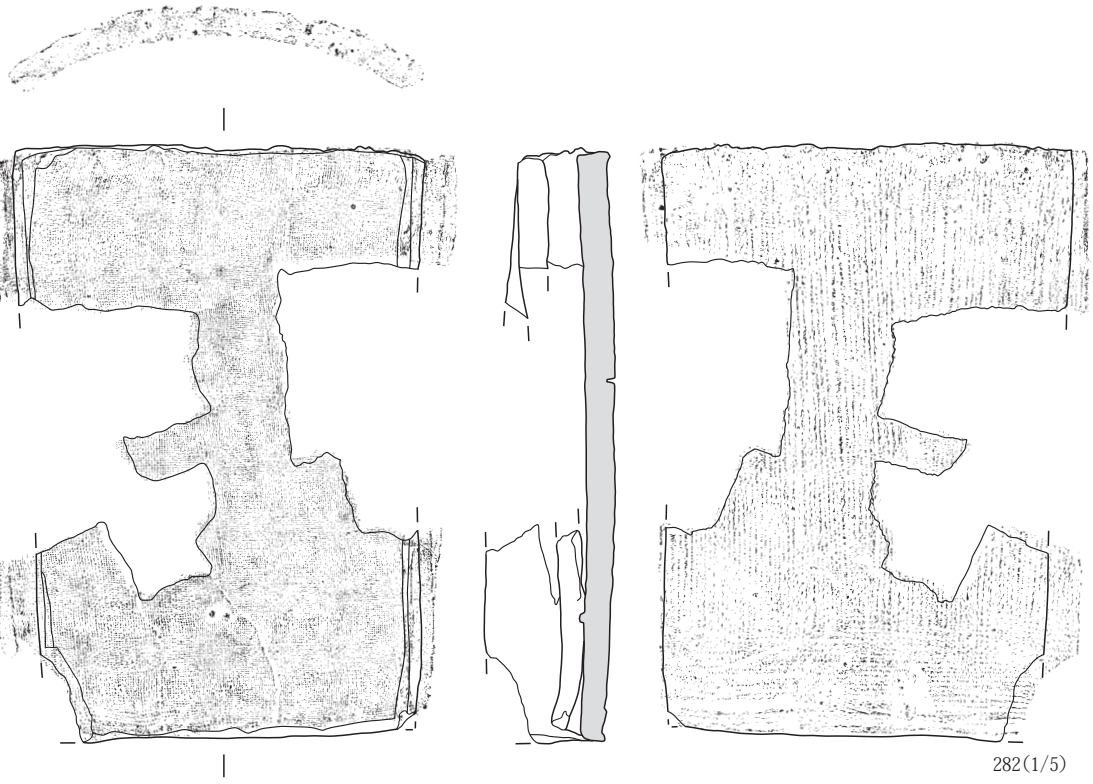


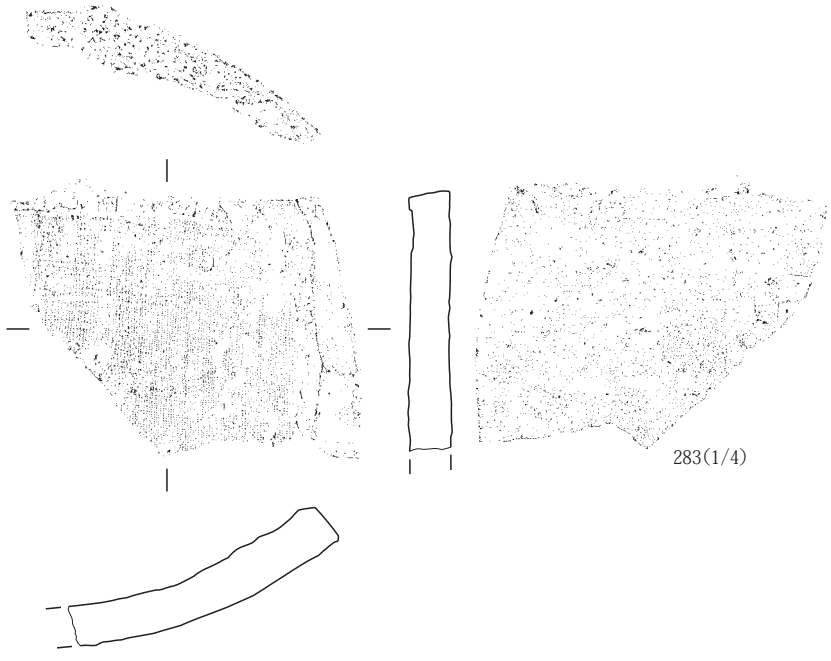


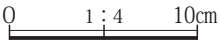




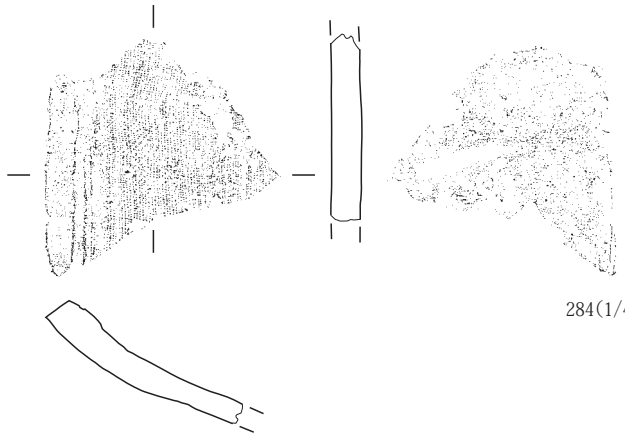
第404図　遺構外出土遺物(16)

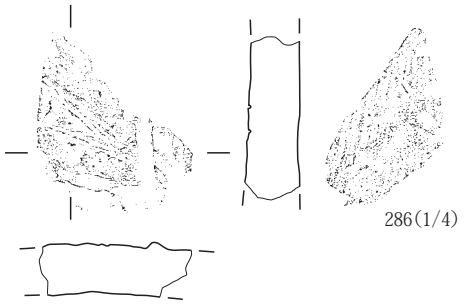


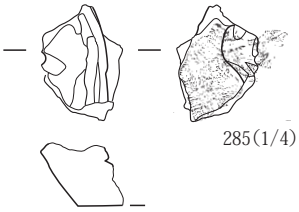


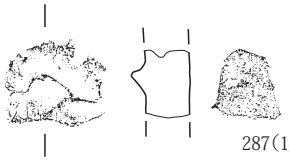


第405図　遺構外出土遺物(17)

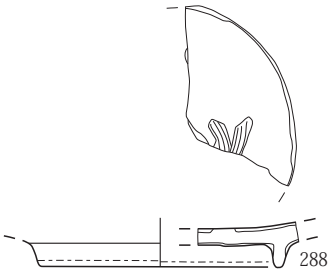

284(1/4)

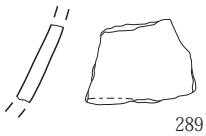

286(1/4)

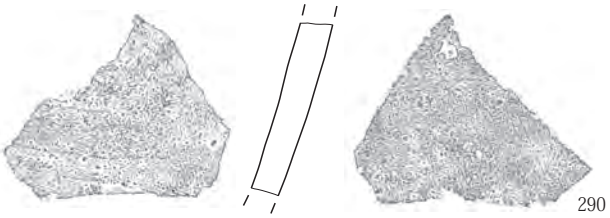

285(1/4)

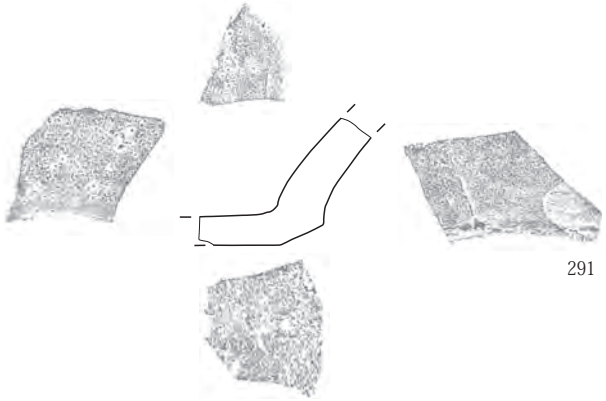

287(1/4)

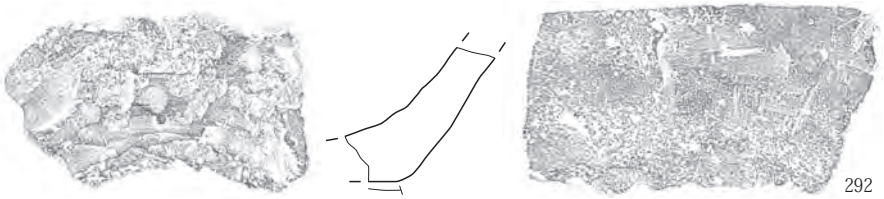
0　1：4　10cm


288


289

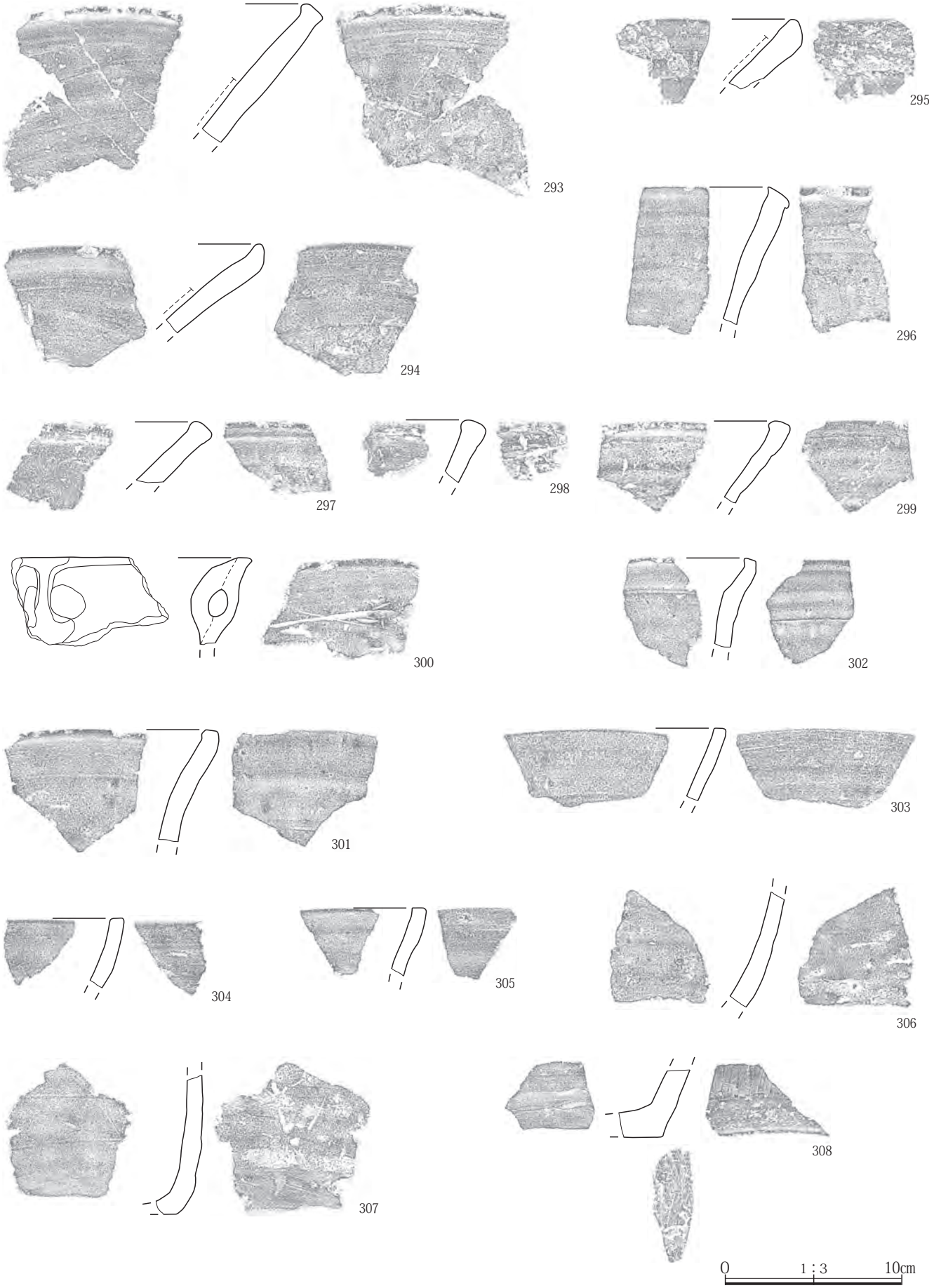

290


291

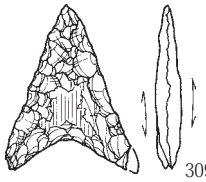

292

0　1：3　10cm

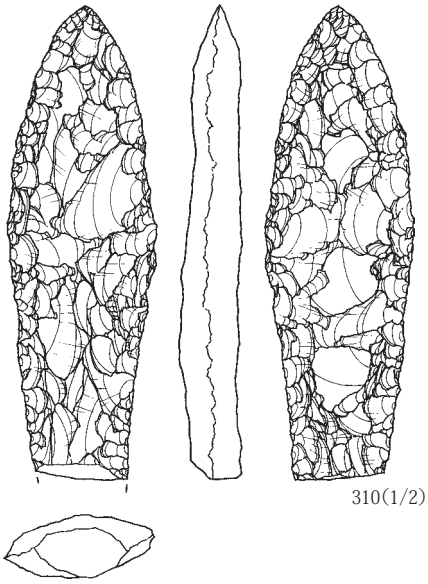
第406図　遺構外出土遺物(18)

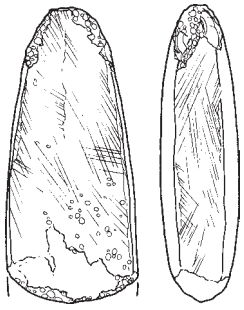


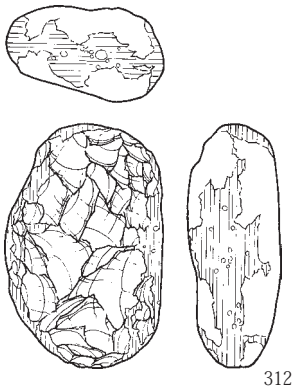
第407図　遺構外出土遺物(19)

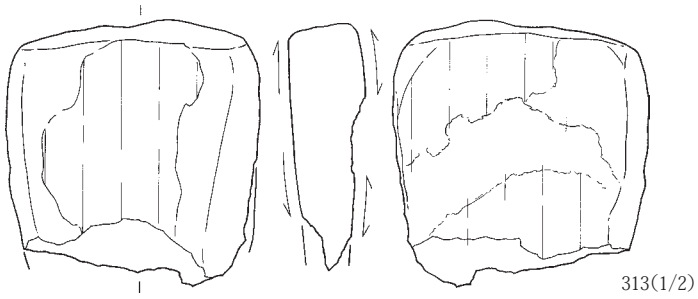

309(1/1)

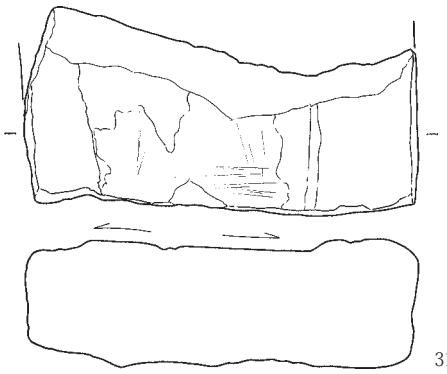
0　1：1　2cm

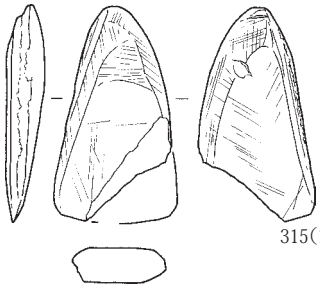

310(1/2)

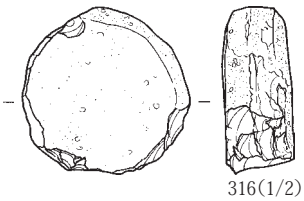

311

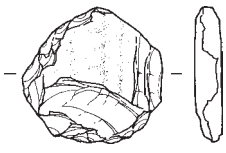

312(1/2)

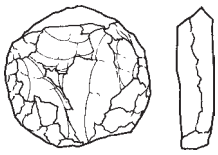

313(1/2)

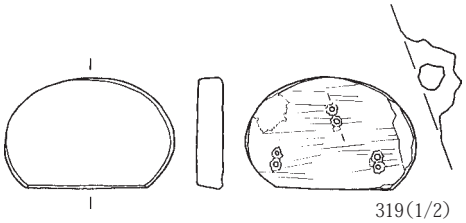

314


315(1/2)


316(1/2)


317(1/2)

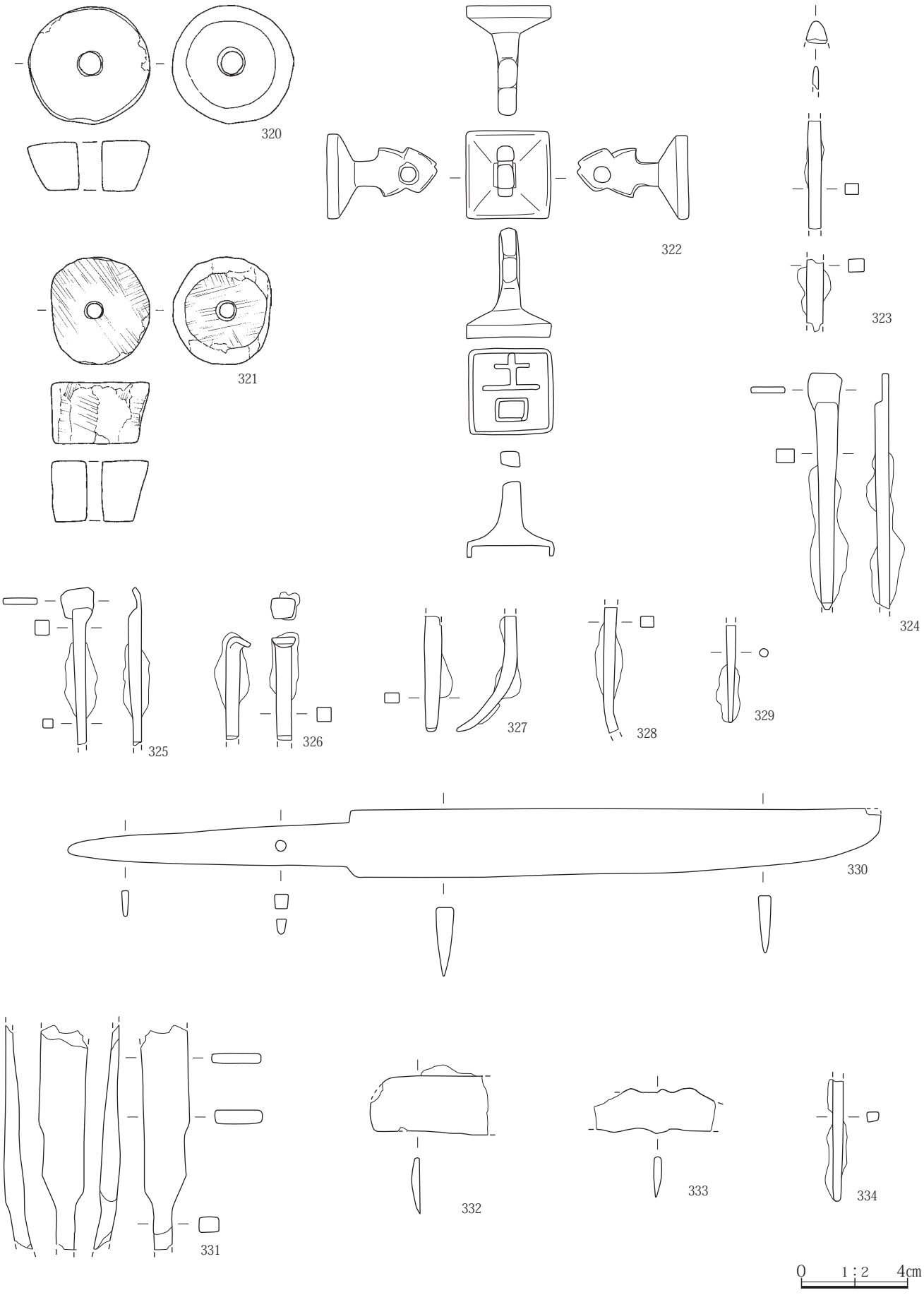

318(1/2)


319(1/2)

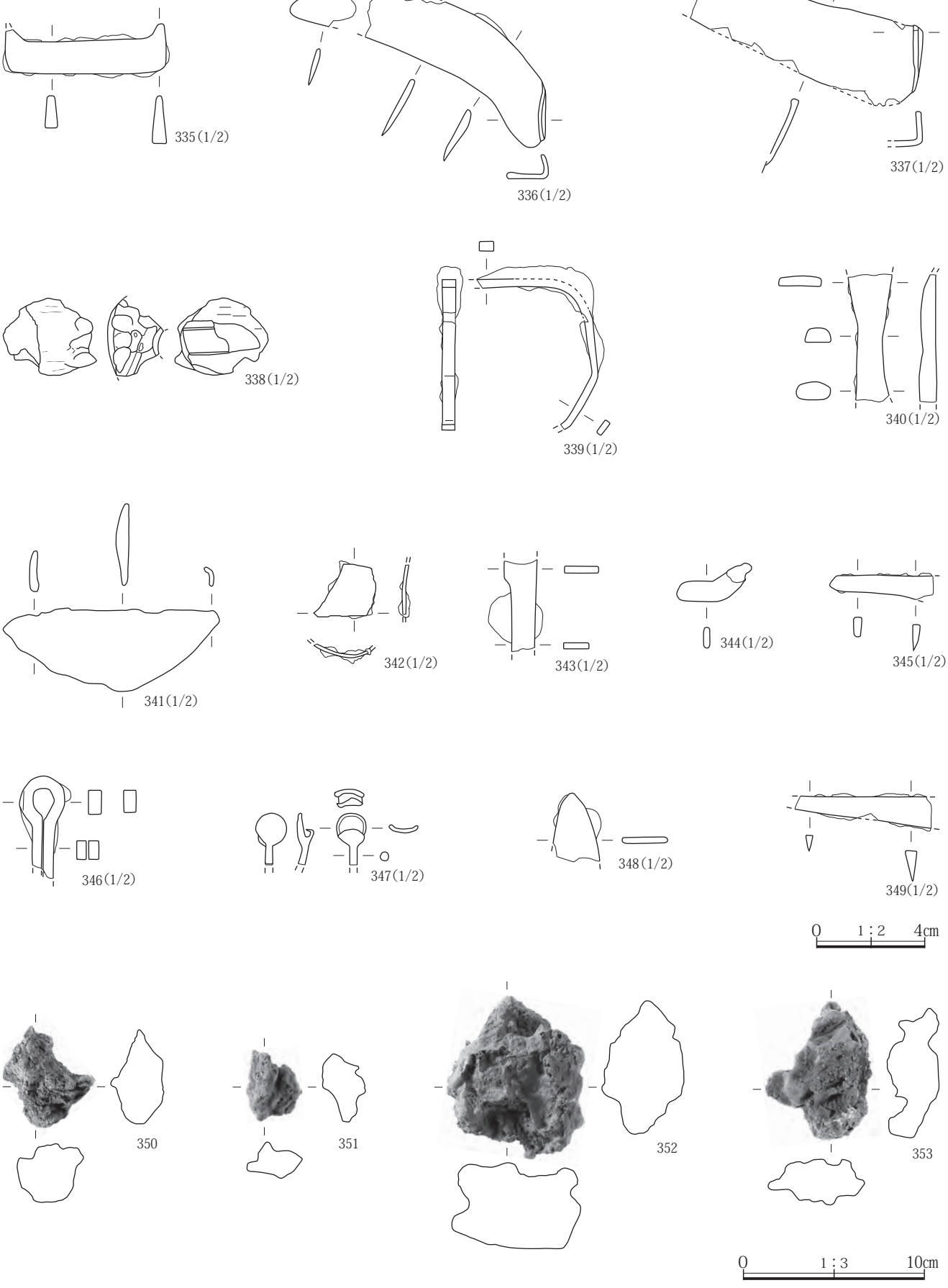
0　1：2　4cm

0　1：3　10cm

第408図　遺構外出土遺物(20)



第409図　遺構外出土遺物(21)



第410図　遺構外出土遺物(22)

に、前期後半の諸磯ａ・ｂ式(35～89)、中期後半の加曽利Ｅ３・４式(101～132)、後期前半の堀之内１・２式(134～141)を含むという構成である。このうち黒浜・有尾式期の竪穴建物は、本遺跡において４棟が検出されている。また、加曽利Ｅ３・４式期の竪穴建物は、本郷鶴楽遺跡において11棟が検出されている。本郷遺跡群が立地する本郷台地では、これまで諸磯ａ・ｂ式期や堀之内１・２式期の調査事例はいないが、本遺跡群の近接地に集落の存在が想定される。また、わずかではあるが前期前半の関山式(１・２)、前期末の十三菩提式(90・91)、中期初頭の五領ヶ台式(98・99)、中期前半の阿玉台式(100)、後期前半の称名寺Ⅰ式(133)の小破片が出土している。

古代の遺物としては、墨書土器(174～181)、瓦塔(242～244)、複弁七葉蓮華文軒丸瓦(245・246)、素弁四葉蓮華文軒丸瓦(247)、単弁五葉蓮華文軒丸瓦(248・250～255)、三重弧文軒平瓦(256・257・259～266)、印面「吉」の銅印(322)などが出土したことが特筆される。このうち墨書土器については、小破片が多く文字の判読が困難なものが多いが、「法師」と読めるもの(181)もあり、遺構内から出土した「真」、「寺」、「閃」などとともに古代寺院との関連を窺わせるものである。瓦塔については、８世紀後葉から９世紀中葉を中心に、複数の個体が存在することが確認できた。素弁四葉蓮華文軒丸瓦は、本遺跡の北に隣接する本郷奥原遺跡から出土した完形の軒丸瓦と同范であると考えられる。これら古代寺院に関連した遺物の出土範囲から、古代寺院の存在が想定される範囲は、本遺跡の北およそ100mに位置する榛名木戸神社周辺から本遺跡周辺までであると考えられる。印面「吉」の銅印は、８世紀第１四半期の290号竪穴建物の壁外から出土したものであるが、形態的な特徴から平安時代の私印であると考えられる。これは群馬県内から出土した古代の私印として14例目になる。また、本遺跡から南東約900mに位置する蔵屋敷遺跡からも古代の私印とみられる銅印が１点出土しており、近接した場所からの出土例として関連性が注目される。

なお、報告書に掲載できなかった遺構外出土遺物の内訳は、縄文土器が遺物収納箱(内法0.60×0.37×0.15m)９箱分、土師器の杯・椀類破片が6,738点(25,817ｇ)、甕・壺類破片が29,893点(119,724ｇ)、須恵器の杯・椀類破片が16,253点(135,766ｇ)、甕・壺類破片が6,288点(136,211ｇ)、瓦片2,585点、陶磁器類486点(5,859ｇ)、石鏃５点(6.6ｇ)、局部磨製石鏃１点(0.8ｇ)、石匙５点(133.4ｇ)、削器６点(248.5ｇ)、打製石斧20点(1,438.9ｇ)、磨製石斧８点(1,019.6ｇ)、石核５点(816.8ｇ)、二次加工ある剝片29点(2,271.4ｇ)、凹石15点(6,675.0ｇ)、磨石15点(4,977.1ｇ)、敲石20点(7,899.5ｇ)、石皿２点(528.2ｇ)、台石４点(11,537.4ｇ)、砥石３点(905.3ｇ)、石製品２点(46.7ｇ)、礫・礫片34点(2,237.1ｇ)、剝片306点(6,089.1ｇ)である。これら遺構外から出土した遺物と、古代や中世の遺構内から出土した縄文時代の遺物のうち、火舎(354)、石鏃(355～359)、石匙(360～365)、削器(366・367)、打製石斧(368～380)、磨製石斧(381～386)、凹石(387～413)、磨石(414～419)、敲石(420～428)、石皿(429)、台石(430～432)、多孔石(433)、原石(434)、紡輪(435)、砥石(436)、敲石(437)、石製品(438・439)、礫片(440・441)については、写真のみを掲載した。

縄文土器の内訳は、黒浜・有尾式が大部分を占めるが、それ以外では諸磯ａ式が1,039点、諸磯ｂ式が29点、五領ヶ台式が２点、阿玉台式が４点、加曽利Ｅ３式が526点、加曽利Ｅ４式が19点、称名寺Ⅰ式が５点、堀之内１式が４点、堀之内２式が７点である。

陶磁器類の内訳は、中世が45点(968ｇ)、近世が256点(1,750ｇ)、近現代が160点(2,716ｇ)、時期不詳の土器類が25点(425ｇ)である。

ところで、本遺跡からは中世の陶磁器類が数多く出土しているが、かわらけはまったく確認されていない。これは中世の陶磁器類全体の出土量に対して極めて不自然である。このような状況となった理由としては、かわらけがいずれも小破片であったことから土師器との分離が困難であったなどの要因が考えられる。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第722集

本郷上ノ台遺跡・本郷満行原遺跡・本郷広神遺跡・本郷西谷津遺跡・本郷大カサ遺跡・本郷鶴窪遺跡・本郷萱原遺跡・本郷鴫上遺跡

－　第１分冊・本文編１　－

西毛広域幹線道路（高崎西工区）社会資本総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和５（2023）年３月３日　印刷
令和５（2023）年３月17日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話（0279）52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／朝日印刷工業株式会社